現代日本文學全集

XLVIII

杉浦非水装幀

廣津和郎集

葛西善藏集

宇野浩二集

改造社版

ない状態だから、菊江
立ちさうにない。
してゐる始末だ。
續いてゐるので、また
事が出来さうでなし、閉口のほかない
ここから、餘りむづかし
續けるほかないが
つたか。何か見込
までもブラブラしてゐる訳
何か勤め口があるといゝが。
にも行、
右まで
五月六日
善藏

廣津和郎(上右)宇野浩二(上左)兩氏の近影

昭和三年二月の葛西善藏氏(下)と、同じ年三宿にて郷里の夫人に送りし手柬の一部

「廣津・葛西・宇野集」目次

廣津和郎集

葛西善藏集

宇野浩二集

廣津和郎集

作家は自惚が強い方がいい。
長い間自惚を持続けられたら、
それだけでも大仕事だ。

広津和郎

やもり

一

二年前の事であつた。その頃私は、彼女と結婚したがほんたうだらうか、それとも別れたがほんたうだらうかと、毎日その事ばかりを思ひめぐらして、不決斷の憂鬱な日を送つてゐた。今から考へて見ると、實際その當時の私の生活には、何の統一も、何の光明も、何の目標もなかつた。

「兎に角、卑怯な事は決してしたくない。中間に人を入れて、それで以て世間並の解決をつけてしまふやうな、そんな方法は取りたくない。自分のした事は飽くまで自分で處理したい……」

そんな風に、絶えず自分に向つて叫びかけてゐたが、併し後になつて思へば、それは純粹の意味での道德的の責任感と云ふよりも、寧ろ自分自身に對して張つた意地と云つた方が、適切であるやうに思はれる。――正直に云ふと、私の本心は、彼女と結婚しようとする解決とは、全然反對の方へ走つてゐたのである。餘りに明瞭に、彼女と別れたいと云ふ一念に燃えてゐたのである。そしてそれが餘りに明瞭であり過ぎたがために、私はその本心を眞正面から見つめる事を回避した。その本心の思つてゐるがままに行動するのは、何ぼ何でも餘りに勝手氣儘に過ぎるやうに思はれた。そこで、私は自分に向つて意地を張つて、その本心の通りに振舞ひたがる自分を、一生懸命に抑へつけてゐたのである。

私は自分に向つてよくこんな事を云つた。

「若し自分が彼女を愛してゐたならば、目下の自分の境遇を彼女によく打明けて、そして彼女に別れて貰ふ事も、出來るかも知れない。何故かと云ふと、若し彼女と別れても、彼女をほんたうに愛してゐたといふ事のために、二人の間に不快な記憶が殘らないで濟むからだ。併し自分は彼女を眞に愛してはゐなかつた。眞に愛せずして罪を犯したのだ。それだから、自分は彼女と別れるわけには行かない。何故かといふと、若し此まま別れたならば、二人の間に、一生不快な記憶が殘るからだ。――自分のしなければならない事はたつた一つしかない。つまり、今から改めて彼女を愛さうと心掛ける事だ！」

そこで、私の心は此不自然な努力を、出來得る限りやつて見なければならない事になつた。「意志だ！　意志の力だ！　意志の力によつて、何處までも何處までもやつて見なければならない！」と叫びつづけに叫んだ。だが、今になつて見れば、それは自然と逆行する事に外ならなかつた。無限の坂道を、自分のからだより重いものを背負つて、昇らうとする事に外ならなかつた。――實際さうである。感情には豫定がつけられない。そのつけられない筈の豫定を、私は無理につけようと思つてゐたのである。そしてそれが、自分の人間としての責任だと思つてゐたのである。――さうして、愛情を意志で生み出さうとする努力の結果、私は自分が幸福とは反對の方向へ向つて進みつつあるのを知つてゐる。自分ばかりではなく、彼女をも亦、一層の不幸に陷れて行きつつあるのを知つてゐる。……

いや、併し、今、私は私達夫婦のさういふ淋しい現在の生活を詳しく述べるために、此處

に筆を執つてゐるのではない。私の語らうとする事は他にあるのである。

その頃――丁度彼女と私との間に生れた進一が、七月の投げ坐りをし始めた頃の事であつた。子供に對する父親の本能が、進一が日に月に成長して行くのを見るにつけ、次第々々に强く私の心に眼覺めて來た。けれども、それは純粹の愛――明るい喜びの愛とは云へなかつた。自分の心が進一に傾いて行く事は、やがて彼の母親から遠ざかる道を益々ふさがれて行く事に外ならなかつた。それを思ふと、私は喜びを感ずるよりも、暗い、とらはれの憂鬱の中に、投げ込まれて行く自分を感じないではゐられなかつた。

未來を考へると、明るい豫想は何もなかつた。何も彼もが面白くなく、憂鬱で、何の慰めをも、私の心に與へて吳れなかつた。

私は奧の離れの二階にゐた。隣りの部屋には、髮の毛の薄い、耳の遠い、長身のちんちくりんな、もう三十二三になつてゐるのに、三年つづけて受けても、未だに齒科醫學校の入學試驗を通過しない男がゐた。その癖、その男は非常に勉强家で、朝から晚まで、まるで小學校の生徒が讀本のおさらひでもするやうな風に、大きな聲をはり上げて、少し節をつけて、早口に何かじきりに讀んでゐるのであつた。それが堪らなく煩かつた。――私は心持のいらいらしてゐる時などは、もう少し低い聲で讀んで吳れといふことを、壁越しに賴んだこともあつた。ところが、その男は耳が遠いために、私の言葉が聞えないと見えて、相も變らず高い聲で讀み上げてゐるのであつた。そこで、今度は私はその部屋に行つて、よく聞えるやうに再び賴んだ。――その一日はその男の聲は低かつた。が、その翌日は又いつものやうに聲高になつてしまつた。けれども、それきり私はもう何の抗議も申し込まなかつた。私は云ひ爭つてまでも、さう云ふ客に對して自分の言葉を主張するのを、遠慮しなければならない身であるやうな氣が、かなりしてゐたのである。

母屋と離れとの間には、七八坪ばかりの小さな中庭が挾まれてゐた。私の部屋に坐つてゐると、母屋の二階が、庭の直ぐ向うに見える。それは一體が下宿屋建の粗雜な建物である上に、もう建ててから何十年か經つたと見えて、あばら家のやうに古びた家であつた。何處から何處までが薄暗く煤んで、陰氣な感じを與へた。その母屋の二階の一番手前の、丁度私の部屋に向ひ合つたところに、木戶が一つついてゐて、そこから屋根の上に、物干場が作つてあつた。天氣のいい日には、そこに洗濯物が幾つもぶら下げられた。その洗濯物の中にまじつて、進一の小さなおしめも、一本の細引に幾つも通されて、ぶら下げられるのであつた。それに初夏の日がチカチカと照りつけてゐるのを見ると、私は云ひやうのない變挺な、擽つたい、淺猿しい、胸のうづく氣持を感じないではゐられなかつた。まだ動もするとほんたうとは信じられないやうな心持のするのを、無理やりに、

『お前が父なのだぞ。俺達はお前の子供のために役をつとめてゐるのだぞ!』と微風にひらひらする度に、日光をチカチカと照り返すその白い布の列が、私に向つておつかぶせるやうに叫んでゐるやうに思はれた。そしてそれは又、

『幾ら逃げようたつて、もう逃げられるものか。貴樣が如何に此事實のために苦しまうとも、一片の惡夢に過ぎなかつたとして拭ひ去らうと試みようとも、事實は事實なのだ。もう今更どうともする事の出來ない事實なのだ!』から意地惡く私を威嚇してゐるやうにも思はれた。

殊にそのおしめになつてゐる布を見ると、い

ろいろな物の古くなつたのを使つてゐるが、その中には、嘗て私のものだつた見覺えの確にあるのもあるのであつた。私が中學の四五年時分に、兩親に買つて貰つて、近頃では寢間着の下に著る事にしてゐた古浴衣が、いつの間にか私に無斷で、彼女が解いてしまつたと見えて、それが進一のおしめになつて、今眼前にぶら下つてゐるのであつた。それは井桁の模樣であつた。私は日光の反射に眼がしばしばして來る程、長い間その見覺えのあるおしめを見つめてゐた。私の胸の中には、その小さな一枚の布きれから、いろいろな思ひが、それからそれと限りなく浮んで來た。——明るくて自由で、無邪氣であつた過去を、現在の我身と對立させて見せられる事は、胸に恐ろしい苦しさを與へられる事には違ひなかつたが、併しそれは又、知らぬ異境で、突然昔去つた故郷を偲ばせる古馴染のものに出會つた時のやうな、一味のなつかしい感情を湧かせないではゐなかつた。その浴衣の初めて出來た夏、私は鎌倉に行つてゐた。誰と云つて、ひとりの特定の人を心に描いてゐたわけではなかつたが、それでも、濱で會ふ總ての少女になつかしさを覺える時分であつた。……その時分の思ひ出が、私の胸に溢れて來た。實際、何から何まで、その時分には、すべてのものが明るくて、美しかつたやうに思はれる。

二

學校生活を終つて三年目ではあつたが、私はまだ世の中といふものをよくは知らなかつた。學校を出た年の秋から、翌年の春、丁度私が初めて此下宿に來るやうになつた頃まで、半年ほどの間、或新聞社につとめた經驗はあつたが、併し自分の弱い心を亂されまいために、周圍の人々に親しむよりも、自分ばかりを見守つて孤立を選んでゐた私には、それがため此世の中に對する知識が、學生時代よりも、一向に進歩したとは思はれなかつた。——私は漠然と、今に小説を書かうと思つてはゐたが、併しさうして小説を書くことによつて、果して生活が支へて行かれるやうになるものなのであるかどうか、それについての自信は少しもなかつた。

兎に角、併しさうしてゐる間にも、生活は始終私を脅してゐた。私はその頃、英國の或小説家の長篇小説を飜譯してゐた。その前にも、或佛蘭西作家の小説を英譯から飜譯した事はあつたが、併し純粹の英國作家の文章は、私の英語の力には、かなりの重荷であつた。一日に僅か四五枚しか譯す事が出來なかつた。そしてその翻譯料が、僅に一枚四十錢だつたのである。

さうして得た僅な收入の中から、東京から百里ほど隔つた或海岸で病を養つてゐる兩親の方を、負擔しなければならなかつた。たつた一人の兄は、その頃職を失つて、時々私の部屋に轉がり込んで來てゐた。

夜、人々が寢しづまつてから、私は机に向ふ事にしてゐたが、いろいろな事を考へると、息も出來ないやうな暗い壓迫を胸に受けた。何處を向いても、暗い壁が自分を取卷いてゐるやうな氣がした。

眠ると乾度いやな夢を見た。安眠といふ事が私には得られなかつた。——彼女を捨てて何處かに逃げ出してから幾年か經つて、公園で彼女と進一とが遊んでゐる姿を見かけて、後悔と進一に對する愛とに堪へかねて、その側に驅け寄らうとする刹那眼が覺めた事があつた。眼が覺めてから、何だかそれと同じ話を前にも一度聞いた事があるやうな氣がして、考へて見ると、それは嘗て讀んだモオパッサンの「父」の最後の場面であつた。……眼が覺めてゐる時は、自分で自分の心を蔽うてゐるが、さうした夢などを

見ると、如何に自分が彼女から逃げる事を望んでゐるか、その心の底をまざまざと眼前に見せられるやうな氣がした。そして餘りにまざまざと見せられるので、却つてそれに對して一種の反抗を感じて來るのであつた。

朝眼が覺めるのは、十時か十一時頃であつたが、眼が覺めてから、尚一時間ぐらゐ、私は寢床をはなれる事が出來なかつた。仰向けになつて、薄暗い天井を見つめながら、ぼんやりいろいろな事を考へてゐるのであつた。障子の四角い硝子を透けて、中庭の柿の枝が、青空にいゆつと突き出てゐるのが、大變近く、そしてさかさまに見えた。その枝には、小さな實がこびりついたやうにしてついてゐた。

やがて母屋の廊下を、此方に向つて、小刻みに、だが妙に重い音を立てながら、近づいて來る足音が聞える。私はこの足音によつて、彼女が進一を抱いてゐるかゐないかを、聞き分ける事が出來るのであつた。

『來たな』と思ふと、毎日の事ではあるが、私の胸には一種の氣まづい氣分が溢れて來るのである。

私の部屋の直ぐ右手が梯子になつてゐる。その梯子を彼女は、『エンヤラサ、進ちゃんは重いのね、ほら、エンヤラサ、ドッコイ』などと、如何にも母親らしい機嫌のいい聲を出して上つて來る。そして障子の硝子ごしに、

『ほら、進ちゃん、お父さんだよ、お父さんに「ばあ」をおしなさい』と云つて、屈んで、進一の顏を突き出すやうにする。そしてそれから、

「あなた、もう十二時ですよ。お起きになつたらどうです?』と子供に對してゐる時とは少し違つた、何處かに警戒を含んだ外々しい聲を出すのであつた。

『ああ、起きよう』と私は勢よく飛び起きた。すると彼女は部屋に入つて來た。

『ほんたうに此兒の重いつたら。全く、から云ふのが石つころ重いつて云ふんですわね』

彼女はそんな事を云ひながら、まるまると肥つた進一のからだを上に差し上げるやうにした。それは私に子供を抱いてやつて下さいと云ふ意味なのである。

『進坊、だつこ、だつこ、そら』私はさう云つて、憂鬱な、複雜な心を、彼女に見拔かれまいために、笑顏を作りながら、手を差し出した。進一はよく笑ふ赤兒であつた。にこにこ顏を崩しながら笑つて、母の手から躍るやうな恰好をして、私の手に移つて來た。

『さあ、進坊、ちんちんどんどんをして御覽、さあ、ちんちん、どんどん』私はさう云つて、左の手だけで子供のからだをささへながら、右の手の掌をくるりくるりとまはして見せると、進一もその小さな手を、くるりくるりとまはし始めた。

『おお、お上手、お上手、進ちゃんはお上手ね』と彼女は云つて、おちよぼ口をして、進一の頰にそれを持つて行つた。彼女は私と並んで立つと、その丈がやつと私の肩ぐらゐまでしかなかつた。私は彼女が身だしなみを少しもしないで、着物をぐずぐずに著て、短い髪を無造作にちよこんと束ねてゐる恰好を見ながら、もう少しどうかしたらよささうなものだと、そんな事にも輕い嫌惡の情を呼び起されてゐた。

『御飯を階下にいらしつて召食りませんか?』

『いやだ、此處で食べる』私は彼女の母親の、始終私の一擧一動を睨んでゐるやうな眼附を思ひ出しながら答へた。

『さう』と云つて、彼女は進一を受取つて、食事の支度をしに降りて行つた。

なるたけ家人に顏を合はせたくないのが、その頃の私の望であつた。私は朝飯とも晝飯ともつかない食事を濟ますと、毎日外へ飛び出

してしまふのであつた。

『またお出かけ？』と彼女は訊いた。

『ああ』と私は不愛想に答へた。

『阿母さんがよくさう云つてゐてよ、あなたはまるで子供のある人のやうぢやないつて』と彼女は少し不服らしい口附をしながら云つた。

『お前の阿母さんなんかに何が解るものか！』

私は腹立たしげにさう答へたが、併し、『なるほど、自分にはまだ人の親たる覺悟が出來てゐない！』と云ふ反省を、胸に起されずにはゐなかつた。——そして、何よりさう云ふ風な對話を續ける事が厭だつたので、帽子を取つて、どんどん部屋を出てしまふのであつた。

『何時頃歸つてらしつて、又遲いんでせう？』

『解らない！』

離れの廊下から、母屋の廊下を通つて、玄關に出て行くまで、十二三間の間ではあるが、その間を通つて行く時は、まるで忍んで敵地を通つて行く時のやうな、緊張した警戒の氣分になつてゐた。そして都合よく家人のひとりにも出會はなくて濟んだ時には、殊に彼女の母親のあの監視してゐるやうな眼附に出會はなくて濟んだ時には、往來に出てから、ほつとした氣持になるのであつた。

けれども、外に出ても、私には別に何處に行くと云ふ當がなかつた。友人の尠い私は、四五の友人の家を毎日順々におとづれては時を過した。友人達の多くは、彼女と私との事件を、大概察してゐる樣子ではあつたが、併し私がその事を打明けなかつたので、彼等から口を切る事は遠慮してゐた。彼等は心配の眼附をして、時々私の顏を見るばかりであつた。私は彼等の厚意を感謝しながらも、併し自分がいづれかに片附ける決心のつくまでは、沈默を守つてゐようと思つてゐた。唯最初から此事件を知つてゐる二人の友人があつたが、彼等も亦、最初こそそれの解決についての忠告を私に與へはしたが、『いづれ自分で最もよく解決するつもりだから』と云つた私の言葉と氣持とを尊重して、その頃は、もうその問題に少しも觸れて來なかつた。——私は當のない、陰氣な、息苦しいその日その日を送つてはゐたが、それでも、友人達が總て厚意の眼をもつて見てゐて呉れる事と、みだりに私の心に立入つて干渉しようとしないデリカシイを持つてゐて呉れる事とによつて、かなりの慰めを得てゐた。

あの彼女の家の憂鬱な自分の部屋に歸つて行かなければならないと云ふ事が、時間が經つに從つて、私をいらつかせ始めるのであつた。暗くなると、東京の町々を當てもなくほつき歩いた。銀座通を何度も往復した。活動寫眞などに入つて時間を消さうとしたが、それは何等の興味をも私に起させなかつた。唯ひとつ、私に取つて時間をつぶすのに都合の好かつたものは、義太夫席に入る事であつた。しんみりした、その底に浮世のままにならぬと云つたやうな、悲しい厭世的な味の漂つてゐるあの情調が、何の反感も起させずに、私の胸をつつんで呉れた。芝、麹町、兩國、本郷、殆んど東京ぢうの義太夫席から義太夫席を、私は毎夜のやうに歩きまはつた。——ある月などは、一ケ月に二十三晩も義太夫を聞いたのを、後から指を折つてかぞへて見て、我ながら餘りの事に驚いた事もあつた。

家人のすつかり寢しづまる時刻までは、義太夫席を出てから、まだ一二時間町々を歩きまはらなければならなかつた。人通りが尠くなつて、町の店々の戸が閉され、やがて赤電車が通つてしまふと、ひと頻り自動車が、あの變挺な、人を脅すやうな警笛を夜の濕つた空氣の中に打ち投げながら、縱横に疾走する。そして間もなく、それさへもまばらになる。すると、青みかか

つた靜かな夏の都會の夜が更けて來る。
『もう今から歸つて行けば、みんなが寝てゐる。誰とも顏を合はせないで濟む』さう思ふと、私は初めて、幾分ゆつたりした氣分になつて來た。
私は日比谷公園の角から、三宅坂の方へ向つて、電車線路の敷石の上を、こつりこつりと、かなりゆつたりした氣分で、歩いて行くのであつた。朝からいらついてゐた心を、その時になつて、初めておちつけて、下腹にうんと力を入れながら歩いて行くのであつた。けれども、心がおちついて來ると、それにつれて、又自分を省みる心持は却つて一層強くなつて來た。濠の水が眞黑でありながら、何處かに一味の光澤を帯びてゐて、堤の上の松の木の列が、幾分青みがかつた空に、怪しげな輪廓を物々しく描いてゐた。さういふ景色を見てゐると、私は謙遜な氣持になつて來た。彼女を憐む念がしきりと胸に込み上げて來た。
『憐むと云ふ事が直ちに愛になつたら……』そんな思ひが萌して來た。
殊に彼女が子供を愛する有様は、何と云つても、私の心に深く刻みつけられずにはゐなかつた。私の進一に對する愛は、彼女ゆゑに亂されてゐるけれども、彼女の進一に對する愛は、私ゆゑに亂されてゐるとは思へない。彼女は心から進一を愛してゐる。純粹に愛してゐる。
『此子にさへ離れなければ、あたしはあなたなんかに別れたつて構はなくつてよ』こんな事を口癖のやうによく彼女は云つた。そして、さう云ふ事を云ふ時、彼女は態と私に見せつけるために、子供に頬ずりして、妙に意地の惡い笑顏をするのであつた。私はさういふ彼女のデリカシイを缺いだ態度に面と向ふ時には、いつでも腹を立てずにゐられなかつた。
『莫迦だな、お前は。そんな下等な事は苟にも口にするものぢやないぞ』さう云つて、きつとなつて彼女をたしなめた。――けれども、たとひそれが私に對する彼女の反抗から出たものであつたとは云へ、さう云ふ事を云ふ時、彼女が實際に心から「此子とさへ離れなければ……」と思つてゐる事は、否定出來なかつた。
全く、すべての中で、いつも私の頭にこだはつて來る一番重大な問題は、それなのであつた。彼女が子供を心から愛してゐると云ふ事その事なのであつた。――若しそれさへなければ、私は少しも苦しみはしない。
彼女と子供とを離す事は出來ない。私も子供を放したくない。さうなると、その結果は結婚と云ふ事になるより仕方がない。――ところが、彼女と結婚した後の生活に、私は何の光明の豫想がつかない。……そこで、問題は同じ事の繰返しになる。
『若し別れるとすれば』と私はよく考へた事があつた。『一層思ひ切つて、自分が進一を手放すとするか。彼女が自分より尠く子供を愛してゐるといふ事は、如何に不公平に見ても斷言出來ない。そればかりでなく、子供を手放すと云ふ事が雙方に取つて苦痛であるならば、その苦痛は、當然自分が受けなければならない。それを彼女に負はせるのは殘酷過ぎる』
併し、自分に果して子供が手放せるだらうか？……若し今は一種の昂奮からさうする事が出來たとしても、いつかは、それが苦しい記憶となつて、私の心を絞めつけはしないであらうか？　或は生涯の終りに於いて、それが私を脅しはしないであらうか？　いつかの晩に見た夢が、彼女と成長した進一とが公園であそんでゐるあの夢が、私の心の底を搔き亂して來る。
『やつぱり彼女を愛さうと努力するより外仕方がない』かうして、とどのつまりは此處に戻つて來る。――『さうだ、明日からは、又新たに努

力をしよう、意志のただ、意志の力だ！」
私の歸りが毎晩遲いときまつてゐるので、入口にはいつも錠がかけてなかつた。建てつけの惡い古戸は、なるたけ靜かに開ける努力をしても、ごつり、がたんと云ふやうな音を立てた。私はそれを開けて、内に入つて、そしてそれに錠を下して、それから上り口の隅に、毎夜しよんぼりと一つだけ取殘されてゐるスリッパを穿いて、さて廊下の板の間を通つて行くと、その一歩毎に、今外で考へたすべての決心をくつがへしてしまふやうな堪らない憂鬱が、心に迫つて來るのであつた。すべての理窟、また總ての反省を絶して、唯たまらなく厭だと云ふ感じが、込み上げて來るのであつた。——まるで何か毒瓦斯のいつぱい漲つてゐる場所にでも入つて行くやうな、息もつけない苦しさを感じて來るのであつた。
「こんな事では到底駄目だ、また滅茶苦茶だ！」
私はさう呟きながら、苦しさのつまつてゐる頭をやけに振つた。
離れはもと母屋と全然別な家だつたのをくつつけたので、その間を通じてゐる廊下は、此粗雜な家の中でも、殊に一番粗雜に出來てゐた。そこは如何にしづかに歩かうとしても、ネダがづしん、づしんと云ふ重い響を發し、天井までが、何か蟲でも啼くやうな、尾を引いた細いキュッ、キュッと云ふ音を立てた。それがすつかり寢しづまつてゐる家の中では、妙に陰氣にきこえた。
その廊下を通ると、直ぐそこが突きあたりになつて、そこから私の部屋に通ずる梯子がかかつてゐる。そしてその梯子の下には、白壁があつて、古い障子が、まるで物置ででもあるやうに、幾枚もその白壁に立てかけてある。そしてそこを通る便利のために、笠の上に埃の厚ぼつたくたまつてゐる陰氣な五燭の電燈が、ひとつ天井からぶら下つてゐる。
そこまで來ると、私の眼はきまつて、その障子の立てかけてある白壁の面に行くのであつた。するとあのいつもの奴が、私の足音を聞きつけて、ちよろちよろと尻尾を振りながら、その障子の蔭に身を隱すのであつた。——相變らずゐるな、さう思ふと、何となく親しみの微笑が、頬に浮んで來るのを禁じ得なかつた。
それは始終夜になると、そこの壁の上に現れて、小さな蟲を探してゐる二匹のやもりであつた。いづれが牝であるかいづれが牡であるかは解らなかつたが、恐らくそれは夫婦であつたに違ひない。——私が毎夜あてのないそぞろ歩きから歸つて來ると、それはいつでも二匹で竝んで、その壁にぴつたり密着いてゐる。そして私の足音にちよろちよろと、そんな風に一寸の間、障子の蔭に身を隱す。けれども、私が梯子を上つて、自分の部屋に戻つて、飜譯しかけた原稿用紙が亂雜に積つてゐる机の前に坐ると、間もなく、それは又その障子の蔭からちよいと頭だけを出し始める。そして稍暫く警戒するやうな風に、ぢつと四邊を窺つてゐるが、軈てもう安心だと云ふやうに、のそりのそりと再びからだ全體を壁の上に這ひ出して來る。…………
その二匹のやもりは、昨年の夏、まだ進一が彼女の肚の中にゐた時分にも、やはりさうしてそこの壁に現れてゐた。——その時分には、尤も私は今のやうに、此不恰好な、人好きのしない蟲に、興味も厚意も抱いてはゐなかつた。私は蟲と云ふ蟲の中でも、此やもりが一番嫌ひであつた。蛇よりも嫌ひであつた。子供の時分に、此やもりが甕の中に入つてゐたのを食べて、一家の者がみんな死んだと云ふ話が新聞に出てゐたのを讀んだ事があつた。その時から、此蟲が惡魔のやうに毒氣を含んで、私の眼

に映じた。私は便所の壁などについてゐる此蟲を見ると、直ぐに棒で叩き殺さずには置かなかつた。

　ところが、今は私は、此白壁の上に毎夜しづかについてゐる彼等二匹の蟲に、一種何とも云はれない興味を見出してゐるのであつた。――夜、飜譯の筆の進まない時には、いろいろな暗い思ひが私の心に入り亂れて來る。退屈と憂鬱と不快とが私の全身を壓して來る。此家が――殊に此自分の部屋が、牢獄の監房であるかの如く思はれて來る。私は此檻の中から逃れる道を一つも知らない。私はいらいらしながら狹い此部屋の中を歩きまはる。――だが、そんな時、私の眼はふと、梯子の下の白壁の上のその小さな動物に吸はれる事がある。――私は自分の部屋の敷居から身體を乘り出しながら、何時間も何時間も、ある時などは殆んど終夜、彼等の行動を見守る事があつた。壁に似た灰色の、妙に薄氣味惡い形をしたその動物の顏附が、丁度鼠の子のやうな可憐な表情を持つてゐる事に氣がついたのも、近頃であつた。彼等がさうして壁にぴたりと密著いてゐる形は、見るから何もする事のない、退屈なものであるやうに思はれるが、併しそれが、我々の想像するよりもずつと忙しい生活を持つてゐるものである事に氣がついたのも、やはり近頃であつた。七八尺はなれた私の部屋からではよくは見えないが、併しその我々の眼に見えないくらゐの小蟲が、絶えず彼等の周圍の壁に飛んで行くものと見える。やもりは敏速に頭を動かして、べろりと舌を出す。その度に、眼に見えない生きた蟲が、彼等の腹の中に葬られてゆくのである。又或時には小さな夜の蛾が、小羽をぶるぶる顫はしながら、止るでもなく、飛ぶでもなく、その壁の上を下から上へ向つて、のろのろと動いてゐる事がある。そんな時のやもりの活動は、敏捷を極めてゐた。今まで身動きもせずに壁にくつついてゐた身體が、にゆるりと動き出す。猫が鼠をねらふ時のやうに、その足は壁の上を、屹度何の音も立てずに輕く歩いてゐるに違ひない。そして十分獲物の側まで近づくと、頭がぴよいと壁から離れるやうに動く。かと思ふと、その小さな可愛らしい顏の殆んど半分以上の長さに裂けてゐる口の兩側に、今まで動いてゐた蛾の黄ろい羽が、ちよいとはみ出る。やがて、その羽も見えなくなる。腹が少し膨らんだやもりは、まるで何事もなかつたやうに、そのまま壁にくつついたまま、次の餌食の近づいて來るのを、ぢつと待つてゐる。……

　暁方が近づいて來ると、その白壁の上に出來てゐる小さな小窓の硝子の向うが、仄明るくなつて來る。電燈の光が妙に薄ぼけたやうに力がなくなつて來る。その頃になると、その二匹のやもりは、ちよろちよろと例の尻尾を振りながら、立てかけてある下の障子の方へではなく、上の天井の方へ昇つて行つて、何處にとも知れず姿を隱してしまふ。……つまり彼等の休息する時なのである。

　私は近所の家々の雨戸を開ける音を聞きながら、自分も押入から蒲團を出して、その中に藻繰り込むのであつた。

　間もなく、此家で一番最初に起きる彼女の母親が、母屋の臺所で水道の水を出してゐる音が聞え始める。――「ああ、又あてのない一日が來た」と云ふ感じが、昨日も今日も明日も何の變化も光明もない私の胸に、わけもなく溢れて來た。私は天井を見つめながら、ふうつと溜息を吐くのであつた。

三

　七月が來ると、毎日不眠がつづいた。隣近所の屋根瓦の反射が、私の部屋を息苦しくし

た。都會の喧噪が、一時も私の心に平安を與へなかつた。私は内にゐる時も、外に出てゐる時も、逐はれてゐる人のやうに、始終せかせかしてゐた。晴天がつづいて、何も彼もが味がなく白茶けてしまつた地上に照りつける夏の太陽、殊に往來の石ころの上に、何の容赦もなく叩きつけるやうにその強烈な光を浴びせかけてゐる夏の日を見ると、くらくらとめまひがして來た。僅な道を歩いても、心臓が直ぐに疲れて、動悸を打つて、息切れがした。

近視眼でもないのに、原稿用紙の上に書いた自分の文字が、まるで泳いでもゐるやうに、その輪郭がふはふはと動くのを見た時、『ああ、これは神經衰弱だな！』と自分に向つて云つた。

空腹を少しも感じなかつた。三度の食事を二度に減らしても、その都度茶碗一杯の飯を食べるのが、私にはかなりの努力であつた。仕事も讀書も一切出來なかつた。そこに持つて來て、生活は日一日と迫つて來た。豫定通りに飜譯が進まないので、兩親の方へ送るのも遲れ勝になつた。

『轉地をしよう。若しこのままの生活をつづけて行つたならば、頭がどんな風になつて行くか解らない』

そこで、小さな籠の中に原稿用紙とペンとを入れて、或朝、まだ薄暗いうちに、私は靈岸島の船著場に出かけて行つた。その春以來、二三人の友人が下浦に引籠つてゐるのを思ひ出して、彼等の近所にしづかな部屋を探して、そこで心身を休めながら、仕事をしようと思ひついたのである。

私は海沿ひの小さな宿屋の、海に面した二階の一室に荷物を下した。濱にはいしこが乾してある時分で、むしむしする夕風の空氣の中に、胸の惡くなるその臭氣が淀んでゐた。それが先づ第一に私にはいけなかつた。食慾は少しも進まないどころか、時によると、青い膚の魚の鹽燒を食膳の上に見ただけで、胸のむかむかして來る事さへがあつた。――友人達は私の宿から約十五六町も隔つたところに、小さな家を借りて自炊生活をしてゐた。私はそこによく出かけて行つた。けれども、彼等との話も、別段私の心に新しい興味を與へては呉れなかつた。夕方になると、私は淋しい心を抱きながら、とぼとぼと濱づたひに、自分の宿の方へ歸つて來た。

ある日の午後、丁度下浦に來てから三日目であつた。私は少しも仕事をする氣になれないので、窓にもたれながら海を眺めてゐた。非常にしづかな日で、水面は油のやうに凪いで、それが薄い赤味を帶びた飴色に光つてゐた。差し渡し七里と云はれてゐる對岸の房州の鋸山のヒダが、まるで一二里しか隔つてゐないかのやうに、くつきり見えた。時々黒煙を吐きながら、大きな汽船が、東京灣の入口の方から、又入口の方へ向つて、しづかに駛つて行つた。――その時であつた。丁度宿から濱まで行く間にある小さな空地の上を、ぎんと云ふ一匹の蜻蛉が、向うに行つたり此方に來たりしながら、ついついと飛んでゐるのが見えた。風が少しもない、もう間もなく夕方にならうと云ふ潤味を持つた空氣の中に、その蜻蛉がついついと、如何にも輕げに飛んでゐるのが、私の心に妙に淋しい静けさを誘つた。私はそれをぼんやり眺めながら、東京の事を考へてゐた。進一はどうしてゐるだらう？……そんな氣が起つて來た。彼女の手の中で、『ちんちんどんどん』をやつてゐる、小さな子供の手附と笑顔とが浮んで來た。

私は何か愚圖々々してはゐられないと云つたやうな氣になつて來た。東京に自分のしなければならない事が待つてゐるとでも云つたやう

な、さう云つた氣持が起つて來た。今度東京に歸つて行つたら、何かが自分を待つてゐる。自分の今まで思ひもかけなかつたところに、自分の今の苦しみを救つて呉れる新しい解決の仕方が待つてゐる。何も彼もがうまく行く。そして彼女も進一も私自身も、今の不幸から完全に救はれる。……

「今夜東京に歸らう！」私はさう思つた。

私が急に發つと云ひ出したので、宿では吃驚してゐた。――午後九時頃、私は夜の汽船に乘つた。

けれども、翌朝未明に、靈岸島に著くと、私のその氣持はもうまるで違つてゐた。東京の土を踏むと同時に、不快と壓迫とが私を襲つて來た。期待も希望も根も葉もないものである事が解つた。そして下浦のあの不便な、まだ都會の色に染まない、靜かな土地が、再び不思議なほどなつかしく思はれて來た。――その翌日の朝、私は又三崎行きの船に乘つてゐた。

私はその七月いつぱいを、二日か三日隔きくらゐに、東京と下浦との間を往つたり來たりして過してしまつた事を覺えてゐる。實際その頃が、私の心身の衰弱の極點であつた。何處にゐても、私の心は少しもおちつかなかつた。――私は自分ながら少し狂氣染みてゐるのを意識しながらも、併しその焦躁の發作に身をまかせて、都會と田舍との間を往復してゐるより外仕方がなかつた。

ほんたうに、少しの誇張でもなく、その時分の私に少しでもおちつきを與へて呉れたのは、その往復に乘る汽船の中だけであつた。今度東京に歸つたら、屹度好い事があるだらう、又は今度下浦に行つたら、屹度好い事があるだらう、さう云ふ豫想を抱いてゐられるだけでも、船の中が一番幸福であつた。

七月の末に、もう今度は全然東京に引上げてしまふ決心をして、夜航の船に乘つた時は、風があつて、海がかなりに荒れてゐた。船室には船に自信のあるらしい客が、僅に五六名ゐただけであつた。毛布に身體を包んで、天井の低い船室に横たはりながら、入口から夜の闇を見てゐると、どどうツと音を立てて、甲板の上まで上つて來る波のしぶきが、暗い中に時々白く見えた。前後左右にかなりの程度に搖れる船の動搖に身を委せながら、私は眠れないままに、相變らず進一及び彼女の事を考へてゐた。人間の一度　した罪は、何處迄まつはつて來るのかと思ふと、いゝおもりのやうに心にこびりついてゐる「罪の暗さ」が、やりきれない程恐ろしかつた。

ついその二年前、今遠い海岸に行つてゐる兩親と一緒に、麻布の本村町に住んでゐた頃の事が思ひ出されて來た。僅それから二年後に、私の心がこのやうに暗く濁らうとは、その時分は思ひも寄らなかつた。一體何處から此間違ひが來たのであらう？――私は眼をねむつて、二年前からの自分を考へ出した。父が病氣になつて、N――市にその頃ゐた兄の方へ行つた。それから母もつづいてその方へ行つた。そこで東京にたつた一人殘つた私は、今の下宿――彼女の家に止宿する事になつたのであつた。

その頃までまだ新聞社につとめてゐた私は、午前八時に起きなければならなかつた。彼女が毎朝私を起しに來た。彼女は他の者にまかせずに、三度三度の食膳を自分ではこんで來た。併したとひ彼女が私よりも年上であつたとは云へ、誘惑したのが彼女であるとは決して云へなかつた。私は彼女によつて初めて女を知つたのではなかつた。

彼女の何處が私の心を惹いたのであらう？彼女の何處が私の心を捉へたのであらう？解らない。他の止宿人ハ幾人かが、彼女に對して

ある厚意を見せてゐた事が、私の頭に彼女に對する好奇心を起させるよすがとなつたのだらうか？——何處から考へて行つても、私が卑しいむら氣のとりことなつた事には、辯解が出來なかつた。恥づべき『浮氣』のままに心をまかせた事は、否定出來なかつた。

『失敗つた！』私は直ぐから叫んで、後悔に心を苛まれた事を覺えてゐる。——間もなく、或夜私は不思議な夢を見た。顏はよくは解らないが、白衣を着た老人が、おごそかに枕許に立つて、『早く此家を立退け』と叫んだのである。私はその不思議な夢を見て、心にただならぬ懼えを感じはしたが、それでも、昔からよくある夢のお告げと云ふものに餘りにそつくりなので、それが餘りにそつくりであると云ふ事が、何となく却つてそれを輕んずるやうな氣分を、私に起させた事は確であつた。——私は子供の時から、自分ではそれを本氣には信じまいとするのに、妙に物事の豫想のあたる事が度々あつた。一度プランセットをやつて見て、その時現れた二人の友の運命の豫想が餘りによく適中したので、それ以來氣味が惡くて、もうそれに手を觸れない。それから丁度青島の陷落の時も、新聞社の編輯局で、その前にその陷落の日を豫想し合つた事があつた。その時もその日を云ひ當てたのは私ひとりであつた。その他にそんな風な事が折々あつた。——そこで、その夢の知らせを、私は半信半疑で、輕く見ながら、又一方では恐ろしく感じてゐたのであつた。

兎に角、一刻も早く昔のやうな自由な生活と心とを取返したいと思つた。そこで私はその夢の知らせがあつてから、一ケ月後に、新聞社を辭職して旅に出かけた。——併しその時はもう總てが遲かつた。進一は彼女の肚に宿つてゐたのである。……

マストにあたるのか、煙突にあたるのか、それとも船全體にあたつてさう云ふ響を立てるのか、まるで烈しい笛の音のやうに、ヒュウヒュウと鳴る風の音と、荒くれ立つて甲板の上まで襲つて來るすさまじい波の音とを聞きながら、私はその不思議な夢の事を考へてゐた。——闇と波と風との四邊の光景が、一種迷信的な物怯ぢた氣分に私を誘ふに適應しかつた。

宿命と云ふ事などが考へられて來た。厄年と云ふものが、それ程あてにならないものではないと云ふ氣にまでなつて來た。一昨年、丁度父が病氣になつたのが、私の二十四、つまり私の前厄であつた。その年には、私は檢査官の間違ひから、兵營に入つて、そして病氣でもないのに、衛戍病院に入れられてゐた。その病院に入院中、父が病氣になり始めたのであつた。——實際その二十四を境として、急に人生のいろいろな複雜な面が、私に向つて一時に向けられ始めたやうな氣がする。二十四の暮に私は彼女の家に移轉した。そして翌年、つまり本厄の二十五の三月の初めに、私はその白衣の老人を夢に見たのである。——二十五の十二月には、進一が此世の空氣を呼吸し始めた。

それから又、星まはりと云ふ事なども、急に私の頭に浮んで來た。

「君は一白水星の卯か。用心しないと苦勞するぞ。一白水星の卯と云ふ奴は、恐ろしく浮氣者で、おまけに恐ろしく人情家と來てゐる。浮氣者で薄情な奴なら、何の苦勞もなくて一番樂だが、浮氣者で人情家と云ふ奴は、此世の中で一番下らない無益な苦勞の種を蒔いては、自分で自分を苦しめる役廻りを演ずるやうに出來てゐるんだからな」こんな事を或男が嘗て笑ひながら私に云つた事のあるのを思ひ出した。一白水星の卯——浮氣者の人情家……今の自分を考へて見ると、その星まはりと云ふやうなものも、一概に輕蔑し去る事は出來ないやうな氣も

して來た。
羽田沖に來た時には、船の動搖は一層はげしくなつた。波の飛沫が船室の中にまで入つて來るので、私は入口の戸を締めた。横になつてゐる身體が、ともすると、ごろりごろりと轉がりさうになつた。……さうしたむら氣や浮氣から生れた進一の宿命と云ふ事が、私の暗い心を一層暗くしてゐた。……

四

八月の半頃に進一が少し風邪を引いた。百日咳にでもなつたらばと云ふ心配があつたが、別にそれ程の事もなくて濟んだ。九月になると、もう彼は此世に生れて十ケ月も經つのであつた。近邊の同じ年頃の赤兒の中でも、智慧が早いと云はれてゐた彼は、『母ちやんと云つて御覽』と云ふと『ああちやん』と不分明な音を發し始めてゐた。

私があの憂鬱な自分の部屋に、何もする事なしに横たはつてゐる時、母屋の茶の間で、一家の者が、進一を中心として、わつと笑ひ崩れてゐるのなどが聞える事があつた。私に對して不快な監視の眼附を投げる事を怠らない彼女の母親も、進一に對しては、優しい祖母であつた事を認めない譯に行かなかつた。

『まあ、進ちやんが立つた立つた、まあえらい！……』さう云ふ彼女の妹の聲がして、それにつれて一家の者の笑聲が又どつと起つた。私の頭には、此二三日前から、進一が物に攫まつて立ち始めた光景が描かれて來た。――だが、さう云ふ一家の、進一を中心として起る笑聲を聞く度に、私は進一の可憐な無邪氣な恰好を、明るい心ばかりでは想像出來ない氣持がするのであつた。――自分の愛するものが、敵國の手に捉へられてしまつて、そして、それが敵の中でちやほやされてゐるのを聞くやうな、淋しい腹立たしさと苛立とを感じて來るのであつた。

健康は多少恢復して來た。秋風が立ち始めると共に、食慾は多少出て來た。けれども、心の憂苦は、少しも變りがなかつた。相變らず正午近くに眼をさましても、さて起きて何をしようかと云ふその一日の めあては頭になかつた。障子の四角い硝子の外の、さかさまに見える柿の枝にこびりついてゐたあの小さい實は、いつの間にかもう大きくなつてゐた。そしてあの生々しい青さが、やがて赤く成熟しようと云ふ前の、あの感じのいい黄色に變つてゐた。

私は相變らず東京の町々をほつき歩いては、時間を空費すべき場所、事、物を探してゐた。――そして夜が更けて、電車が通らなくなるのを待つて、例のやうに線路の敷石の上をぽつりぽつりと歩いて來た。時々刻々の時を空費すべきめあてのないために、毎日々々時の經つのの遲いのを喞ちながらも、さて又、いつか初秋らしい氣分が、濠にも堤にも、深く深く澄み切つて星のいつぱい輝いてゐる空にも、一帶に漲り始めたのを見ると、それとは全然反對に、「ああ、いつか時が經つてしまつた！』と云ふ驚愕の念に打たれるのであつた。一ケ月、二ケ月、三ケ月とつい夢のやうに過してしまつても、私の心は依然として、少しも變化がなかつた。一ケ月前に考へてゐた事も、三ケ月前に考へてゐた事も、二ケ月前に考へてゐた事も、今考へてゐる事と、實際少しの相違もないのであつた。――それだのに、いつか時が過ぎて行きつつあるのである。進一が生れるずつと前から、私の頭を支配してゐる問題は、最早一年半以上の年月を經過しながらも、未だに何等の解決の光を見ないのであつた。

私があの牢獄の監房のやうな自分の部屋で、憂鬱と良心の苛責と此人生の味氣なさとに惱

みながら、人々の寢しづまつた夜を、ひとりぼつねんと起きてゐる時、あの二匹のやもりは、相變らず私の部屋の梯子の下の白壁に、やがて近づいて來る冬眠の準備にと、小蟲の餌食を探してゐた。――彼等は六月頃に較べると、一層その身體が肥えてゐるやうに見えた。何か充ち足りたと云つたやうな、一種の滿足氣な氣分が、その醜く肥つたからだから、發散してゐるやうに思はれた。けれども、それが決して小憎らしくはなかつた。私が下浦と東京との間を、幾回も幾回も往復して、やるせない苛立たしさに惱んでゐた間にも、此二匹の蟲は、毎夜々々此僅一間四方にも足りないやうな彼等の小さな領分――白壁の上に、倦みも疲れもせずに、現れてゐたに違ひないのである。

『彼等は彼等の分を守つて』さもから云つた風に。やもりはやもり並に――私はそんな事を考へた。彼等の焦躁の少しもなささうな、充ち足りたやうに見える生活、それが『やもりはやもり並に』さうした彼等の謙遜から來てゐるやうに思はれた。――頭が憂鬱のために一種センチメンタルになつて來る時には、實際、私は彼等醜い小さな蟲の、少しの動搖もない生活が、自分のおちつきのない、苛立たしい生活と引較べて、考へられさへして來るのであつた。

二三日つづけて小雨が降つた。小止みなく、びしよびしよと、陰氣に降る初秋の雨であつた。私はその日は外に出ても、うろつくところがないので、終日内に引籠つてゐた。隣りの部屋の三十二三の齒科醫學校の受驗志願者は、朝から飽きもしないで、何やら讀書の聲を揚げてゐた。耳の遠い彼は、その聲が高いばかりではなく、總ての立居振舞が荒々しかつた。彼が便所にでも行く時、廊下を通ると、粗雜な此家のネダは、人を不安にさせる程ギイギイ鳴つた。柿の木の上の方の梢には、蟲がついたのか、他の實とはまるで比較の取れない程眞赤になつた實が、幾つかなつてゐた。それに何處からともなく四五羽の烏が來て、あの不快な鳴聲を立ててゐた。

私はこんな日には寢て暮さうと考へて、枕と薄い搔卷とを取出して、仰向けになりながら、近頃まるで讀書をしないので、新しい本など一冊もない本箱の中から、古雜誌を取出して、ペエジをはぐつてゐた。

『おや、寢てらつしやるの？』から云つて、進一を連れた彼女が上つて來た。

「ああ」と私は氣のない返事をしただけで、彼女の方を振向きもしなかつた。

『あたしが入つて來ると、厭な顏をなさるのね、あなたは？』彼女はいつもする少し意地の惡い笑顏を浮べて、私の枕許にぺたりと坐りながら、『坊や、お前の父ちやんはほんたうに氣むづかしやさんだよ』

その時私は、何かやたらに、がむしやらに憤しさが胸に込み上げて來た。

『俺達の生活は到底うまく行きつこないね』

私はから吐き出すやうに口に出してしまつた。私はその時までは、此言葉を彼女に向つて、一言も吐いた事がなかつたのであつた。それは、自分の心の中では餘りに明瞭に、以前から解り過ぎてゐた事であつたがために、私は却つてそれを口にする事を恐れてゐたのかも知れなかつた。けれども、ひと度さう云つてしまふと、急に今まで壓しつけてゐた彼女に對する嫌惡の感情が、初めて出口を得たと云つたやうに、むらむらと私の頭に込み上げて來た。――もうお前と氣が合ふか合はないかを、隨分長い間見て來たが、結局合ひさうもないと云ふ事が今はつきりした。――とてもうまく行く筈がない――

『それなら、どうなさるの？』と彼女は進一に乳

房を含ませながら云つた。

『別れて貰はう』

『進一はどうなさるの？』

『進一……』私は眼をねむりながら母の乳房をくはへてゐる子供の寢顏を見ると、頭ががあんと鳴るやうな氣がした。私は眼を逸らしながら云つた。『進一はやつぱり俺に吳れ……』

『厭ですよ』とまるで彼女は、私が彼を手を出して取らうとしたとでも云ふやうに、袖で子供の身體を蔽ふやうにしながら、『あたしどんな事があつたつて、進一を放しはしなくつてよ。死んだつて放すものか。……內の阿母さんもさう云つてゐてよ。內には男の子がゐないから、進ちやんを內で育ててもいいつて』

私はそれ以上何も云へなかつた。默つて眼をつぶりながら、仰向いてゐた。

『あなたも隨分ひどい人よ。……今更そんな事被仰るくらゐなら、何故もつと早く話をつけて下さらなかつたのです？ 進ちやんが生れたばかりの時に、直ぐどうかして下さらなかつたのです？ 今になつては益々可愛くなつて行くばかりで、もう手放せやしないぢやありませんか？』

さう云ふ彼女の言葉を聞いてゐる中に、彼女の云ふ事は至極尤もだと云ふ氣が私はして來た。――私は一時の憤が鎭まると共に、自分を反省する氣になつてゐた。

『それは結果から見ると實際惡かつた。けれどもどうか誤解して吳れるな』と私は聲を優しくして、彼女をなだめるやうに云つた。『俺は物事を惡くしようと思つて、今までこんなに長びかしてゐたのではない。最もいいやうに解決しようとして、その解決を得るために、今日まで延びて來たのだ。――俺は始終お前に向つて氣むづかしい顏をばかり見せてはゐるが、その間にも、俺はどうかしてお前が愛せるやうになつたらと、そればかり心に祈つてゐたのだ』

『それは解つてるわ』と私のその言葉に怒るかと思つてゐた彼女は、反對にやさしい調子で答へた。『あたしは默つてゐましたけれど、あなたの氣持はちやんと解つててよ。――あなたは責任をのがれて、逃げ出さうといふ事など出來ない人なのよ』

その彼女の言葉は、併し一層私の心を抑へつけてしまふ事に役立つた。『逃げ出さうといふ事など出來ない人』――さう云つた彼女の腹の中には、何等かの不安に對する、豫防的な意識が働いてゐたに違ひない。『逃げ出す事など出來ない人』――實際それが私の急所なのであつた。その急所を指さされて、それをおつぽづして、その反對の感情を心の中に平氣で育てて行ける强さは、私にはない。――「浮氣者の人情家」と云ふ例の言葉が、私の重い頭の奧で呟かれてゐた。

その翌日は雨が霽れた。そして雨前よりも、頓に秋らしくなつた靑空が頭の上に擴がつた。――私は起きると直ぐ錢湯に行つた。そして錢湯の入口を出ると、進一をつれて買物に行つたらしい彼女が歸つて來るのと、ぱつたり出會つた。

『ほら、お父さんがお湯から出てらしつたよ。そら、ばあをしてやつて下さい、お父さん、坊やはおとなですから』と彼女は私の直ぐ側に並んで步きながら、から云つた。

私は「ばあ」と子供に向つて云つたが、その瞬間、お湯から出て來た二人づれの若い女が、少し吃驚したやうな顏をしながら、私達を見返つたのが眼についた。何とも知れぬ不快が私の心を壓して來た。

『あの下宿屋の娘の男はあの人なのよ』さうその女づれの眼が云つてゐるやうに思はれたのであつた。

『あんまりお父さん、お父さんなんて往來で云ふのは止めろよ。――俺の決心のほんたうにつくまでは、俺はなるたけ人にから云ふ事を知られたくない』さう云ひながら、私は自分の心が淺猿しくて、妙な自己嫌惡を感じてゐた。

『それぢや、進ちやんは一體誰の子ですの？』彼女は意地悪い微笑を浮べて直ぐから云つた。その理窟は彼女に云はれないまでも、よく私には知れ切つてゐるのだ。

『解つてゐる、解つてゐる』私はさう追窮して來るな、と云つたやうに弱々しく云つた。

けれども彼女は止めなかつた。

『ねえ、あなた、あたしはあなたのお氣持をよく知つてゐますから、なるたけ人に知らさないやうにしてはゐますけれど、それでも人に知らせない父親の子を抱いてゐる女の身の辛さも考へて下さい』

その言葉は私の胸の奥を刺し通すやうに思はれた。私は彼女の顏をちらりと見ると、そこにはあの意地の悪い微笑は少しも浮んでゐなかつた。そればかりでなく、如何にも今まで人知れぬ心の苦しさを包んでゐたと云つたやうな、頼りない女性の淋しい哀しげな表情が浮んでゐた。彼女は涙ぐんでさへもゐた。

私は自分の部屋に戻ると、打つ倒れるやうに疊の上に轉がりながら、今の彼女の言葉を考へた。何と云つても自分の方が悪いと云ふやうな氣がして來た。――自分のして來た事が、すべて男性のイゴティズム以外に出てゐないやうな氣がして來た。

その翌日は又天候が悪くなつた。そして晝の間から、かなり烈しい雨が降つてゐた。それが夕方から、風さへも加はつて來た。そして午後の九時頃になると、もう純然たる暴風雨となつた。柿の實が雨戸に當る音が、終夜ガタガタ鳴つてゐた。――私は眠れない寢床の中で、何も彼女の言葉を考へては、自分の胸を責めてゐた。――併し、兎に角、もう此處まで來たら、あの遠い海岸に行つてゐる父に、此事を打明けるのがほんたうだと思つた。父は私の心を屹度よく理解して呉れるに違ひない。子供の時から、私の事を何も彼も解つてゐて呉れた父だ。父は屹度私に好い忠告を與へて呉れるに違ひない。

何かにぶつかると、よく『父だけだ』と子供の時から思つた事があつた。父の側に行けば、此苦しみを父が分擔して呉れるだけでも、此現在の焦躁は癒やされるに違ひない。――私はさう思つた。

翌日は、嵐の後の靜かな、平和な晴天が來た。その晩の夜行で父を訪れるために出發しようと決心した私は、その晝間旅費の事で、或出版社をおとづれた。その歸りに、神田の通りを歩いて來ると、澄み切つた日光の下に、昨夜の暴風雨の名殘を止めてゐる亂雜な町が横たはつてゐるのが、いつにない親しみを胸に與へて呉れた。兎に角父に打明けようと云ふ一つの傾向が、今まで混沌としてゐた胸の中に出來たので、それで心が浮立つてゐるのであつた。――私は神田のパウリスタで珈琲を飲んで　それから旅に必要な買物を二つ三つして、西洋紙に包んで赤い絲で結ばれたその荷物を手にぶら下げながら、青山行の電車に乗つた。窓の外に見える青空と日光とが、電車に乗つてゐる間も、私の旅の豫想に明るみを與へて呉れた。五番町と半藏門との間の、あの兩側に豊かに植わつてゐる處には、一二本倒れた櫻が、傷しく嵐の名殘を止めてゐた。そしてその櫻の木立の間から洩れる光が地面に眞黄色な條をすうすうつと描いてゐるのが、私の眼を娯ませた。――こんな景色に眼のとまるのも、久振りの事であつた。

五

「兎も角父さまに相談して來る。まだどうするとも、僕ははつきりした決心はしてゐない。けれど、いづれにしても、僕は責任を迴避しはしない」彼女には唯かう云つただけではあつたが、併しさう云ふ私の口吻から、彼女は私の心の底にひそんでゐる或物柔かさを感じてゐたには違ひなかつた。

彼女はいそいそとして、甲斐々々しく私の旅の支度に手傳つてゐた。――汽車は十一時發の下の關行を選ぶつもりであつた。九時頃に支度の出來上つた私は、まだ一時間半ほどの時間を費すべき何事かを考へなければならなかつた。

「あなたもあたしも進一が手放せない。――子供つてどうしてこんなに可愛らしいものなのでせう」彼女は荷物の側にぺたりと坐つて、こんな事を云つてゐた。彼女のさう云ふ言葉が、意識的に私の心に何等かの物を與へるために、語られてゐるのではないとしても、併しさう云つた言葉から、妙なセンチメリタリズムに誘はれる事を私は好まなかつた。――私は彼女の相手にならずに、父の病氣が大變に快方に向つたと云ふいつぞやの父の手紙を思ひ出して、父に會ふ光景を想像してゐた。嘗て一度行つた事のあるそこの海岸の景色も、私の心には好い記憶をのこしてゐた。

時計が十時二十分になると、私は立上つて、荷物を持つて、梯子を降りた。その時不圖見ると、例の白壁の上の動物は、唯一匹しかゐなかつた。「おや」と私は思つた。何となく胸が騷いだ。その一匹のやもりが、梯子をきしませる私の足音に、ちよろちよろと尻尾を振りながら、障子の蔭に逃込んだ。それが妙に淋しく見えた。

電車に乘つて、東京驛に行く間に、私は今のやもりの事を考へた。見えなかつたもう一匹はどうしたらうと思つた。――つい一昨夜までは、たしかに二匹ゐたのを覺えてゐる。はつきりと記憶に殘つてはゐないが、昨夜も宵のうちは、二匹ゐたやうな氣がする。尠くとも、嵐がはげしくならなかつた間は、たしかに二匹ゐたやうな氣がする。嵐がはげしくなつてからは、私は注意を拂はなかつたが、兎も角二匹とも難を避けるために、あの白壁の面からは、姿を消したに違ひない。そして難を避けるのに、天井の方へは行かないで、例の障子の蔭に隱れたかも知れない。若しさうだとすると、或はあの嵐の眞最中に障子が倒れでもして、――私は氣がつきはしなかつたが、或は實際に障子が倒れたかも知れない。――その蔭にゐた一匹が壓しつぶされたと云ふやうな事も、ないとは限らない。そんな想像が浮んで來た。それから又やもりの病氣といふやうな事も考へられた。或はそんな壓しつぶされたとか病氣とかいふ事は少しもなく、唯偶然に、私があの梯子を降りた瞬間、一匹が何處かに入つてゐて、姿を見せなかつたに過ぎないのかも知れない。そんな風にも思はれた。――だが、いづれにしても、かなりそれが氣にかかつた。私は自分の生活を、長い間ぢつと見守つて、何も彼も承知してゐながら、何も云はずに默つてゐて吳れた親しい友の一人の安否を氣遣ふやうな、さう云つた懸念を感じながら、東京驛の前で電車を降りた。

東京驛の中央の大時計は、丁度十一時二十分前を指してゐた。

（大正七年十二月）

波の上

一

――兄。

僕は今これから伊豆の西海岸をまはつて見たいと思つてゐる。別段何處に行つて、滯在しようと云ふあてがあるわけではないが、唯漫然と歩きまはつて見たいと考へてゐる。

昨夜東京を十一時の最終列車で發つて來た。逃げるやうに。……實際ヮ字通りに逃げるやうにだ。三時半のまだ眞暗な時分に、沼津驛に著いて、そこから直ちに俥で、狩野川の伊豆行の汽船發著場に來た。汽船の出るのが、普通午前五時半であるが、今日は何かの故障で、八時過ぎでなければ出ないと云ふ。八時までにはまだ四時間から間がある。そこで、夜汽車の中で眠られなかつた頭を少し休めたいと思つて、僕は今その汽船發著場の側の小さな宿屋の二階に上つて、寢床など敷いて貰つたが、どうしたものか、頭がすつかり昂奮してしまつて、なかなか寐つかれさうでない。――僕はどうせ眠れないものなら、君に向つて手紙を書かうと思ふ。君に向つて、今の僕の心持を、すつかり書き送らうと思ふ。君の事が非常に考へられる。君の平生から僕に持つて呉れる厚意に對して、餘りに甘え過ぎる傾がないでもないが、併し、君にはやはり打明けたいと思ふ。何から何までを、すつかり、曝け出して、語つてしまひたいと思ふ。

君はまた僕の事を屹度案じて呉れるだらう。それが僕には何とも云はれない慰めとなる。僕は君によつて、解決の光を與へられる事は豫期しない。それは君を信用しないからではない。解決はいつか自分でしたいと思ふからだ。

から云ふ事を打明ける事によつて、君の頭を惱ます事は、それは好い事でないかも知れないと思ふ。ほんたうに君は君自身の事であるかのやうに、心から心配して呉れるから。けれども、どうか僕のイゴイズムを許して呉れ給へ。僕は君が僕のために案じて呉れると云ふ事が、嬉しいのだ。唯君が僕の事を考へ、心配して呉れると云ふだけの事で、それが僕には非常な慰めとなるのだ。

君が云つたやうに、僕は實際、いつまで經つても、なかなかをさまりのつかない人間だ。實際不思議だと思ふ。自分ながら、自分の氣持が少しも支配出來ない。

……いや、併し僕は、今さうした自分の一般的性質について、自分で自分を批評しようとするのではない。

昨日の朝、僕はたうとう作を一つ書き上げた。實際、身を切られるよりも辛かつた。嫌で嫌で堪らなかつた。嫌なのに何故書くか、と云ふ問を君は發して呉れないから、ほんたうに有りがたい。必要だからだ。みんな『必要』のためだからだ。

併し君が、『兎に角、約束した以上は書きたまへ、書かなければ悪いよ。雜誌社に對しても、約束した以上は、それだけの義務と責任とがあるのだから』さう云つて心配して呉れた事だけは、やつと果したのだ。

その三日前から、僕は毎夜、徹夜した。そして、それを書き上げた時は、昨日の曉け方だつた。ペンを置くと、僕は餘りの息苦しさに直ぐ雨戸を開けた。まだ太陽の光は見えない時分だつ

た。唯何處となく仄々と空が白みかけてゐた時分だつた。
　僕はその短い原稿を讀み返したが、眼ばかり文字の上を輕く走つてしまつて、自分で書いたものの内容が、ちつとも自分の頭には入つて來なかつた。唯『堪らない惡作だ』さういふ感じがしたばかりだつた。――ほんたうに、こんな作ばかり書いてゐては仕方がない、と自分で思つた。併し、ほんたうに佳い作が書けるやうになるためには、僕の現在の生活が、一變して來なければ駄目なのだ。けれども、どうして生活を變へたらいいだらう?――僕は頭が滅茶苦茶だつた。
　それで、兎も角それを封筒に入れて、外に出て行つた。新聞配達の鈴の音と、牛乳配達の車の音としか、往來には聞えなかつた。まだ五時半位だつた。だが、電車はもうあるから、僕はそれに乘つて、雜誌社まで持つて行つてやらうと思つた。締切日から四日間も猶豫して呉れたその雜誌社の厚意に對しても、それだけの事はしなければならないと思つた。それで僕の宿から××見附上の停留場に出る、あのかなり急なへへ坂を昇りかけたが、少し行くと、僕はふらふらと眩暈を感じて、何となく吐きたいやうな氣持がして來たのだ。胃も兎に角かなり惡くなつてゐるに違ひない。
　仕方がなしに、僕はもよりのポストにそれを投げ込んで、宿に歸つて來た。宿の雨戸はまだすつかり閉て切つてあつた。朝の外の空氣を吸つて來てから、その閉め切つた家の中に入つて行くと、何とも云はれない、いきれた臭氣が鼻を打つた。それが又僕には惡かつたのだ。
　君も知つてゐるあの同宿のSと云ふ畫家、あの畫家が、カンヴスを持つて、二階から降りて來たのに、僕は入口で出會つた。
「大變お早いですね」と彼はにこにこして僕に挨拶した。
『徹夜したものですから』僕はさう答へたが、如何にも不快な、ぶきつらぼうな自分の言葉の響に、自分ながら吃驚した。何となくSに對して氣の毒な氣がした。そこで、
「お寫生ですか?」から聲の調子を改めて云はうと思つたが、何となく不自然を感じて、口に出なかつた。僕は立止りかけたが、その言葉がうまい工合に出ないものだから、そのまま一寸腰を屈めて、彼の側を擦り抜けるやうにして、自分の部屋に歸つて行つてしまつた。
　そしてそこに宵から敷きつぱなしにしてある寢床の中に藻繰り込んだ。眠つてゐるんだか覺めてゐるんだか解らないやうなまどろみの裡に、へんな夢ばかりをつづけて見た。
『あなた、あなた』と妻が僕をゆり起した。僕は眼をさますと、妻が僕の枕許に半坐りになりながら、
『あなた、どうも今日らしいんですよ。あたしお腹がしくりしくり痛んで來ましたから』から云つて、『あたし、むからの家に行つてますよ。あなたも少ししたら來て下さい』
『よし』と僕は答へて、机の上の眼覺し時計に一寸眼をやると、八時少し前だつた。
　妻が部屋から出て行つてしまふと、『たうとう來た』と僕は思つた。僕の恐れてゐた事がたうとうやつて來たのだ、さう思つた。妻はもう臨月で、二三日前から、今日か明日かと産婆に注意を受けてゐたのだ。
「ああ、また厭な事にぶつからなければならない。たうとう來た。たうとうその時が來た……」と僕は頭の中で呟いてゐた。『厭だなあ、厭だなあ!』
　そしてさう云つて呟いてゐる中に、僕は胸が重いやうな感じをそのまま感じながら、また眠つてしまつたのだ。

それから、どの位時間が經つたか解らなかつた。妻の妹のいし子が、

『兄さん、兄さん、生れましたよ、赤ん坊が生れましたよ』から云つて僕をゆり起した。

『なに、生れた？』さう聞くと、僕も今度ははね起きた。兎に角、行つて見なければならない。避けるわけには、どうしても行かない、さう思つた。僕はかなり頭が混亂してゐた。

男か女か？』それでもそんな事を急き込んで訊いたのを覺えてゐる。

『女の子よ、それは綺麗な女の子よ。髮の毛が艶々してるのよ』妹はさう云ふと、部屋からばたばた駈け出して行つてしまつた。

僕はそれから、直ぐに著物を著て、廊下を帶を締めながら、玄關の方へ駈け出して行つた。そして急いで下駄を突つかけて、向うの家に行つた。

向うの家――妻がお産をする時の用意にと、二町ばかり離れたところに、小さな家が借りてあつたのだ。君は勿論それをも知つてゐた筈だ。――併し何故僕が、かうして妻の實家、他に止宿人のゐる妻の實家に來てゐたか、そして自分の家と云ふものを持たずにゐたかと云ふ事については、一度も說明した事がなかつたね。

僕は物の順序として、此處でそれを一通り說明して置かう。

進一が生れてから、僕は長い間、妻と結婚しようかどうしようかと思案に暮れてゐた。普通ならば、當然結婚しなければならないとは思つてゐたが、併し僕が彼女と結婚しても、今後の生活に、幸福の豫想が少しもつかなかつたのだ。それは、君も知つてゐる通り、僕が彼女を愛してゐなかつたからだ。

けれども、進一が生れて、殆んど一年間が過ぎてしまつてから、僕はたうとう結婚する事に決心した。――最大原因は、云ふまでもなく、進一が可愛かつたからだ。自分がどうしても、進一を手放したくないと思つたからだ。自分が進一を愛してゐる、それがために進一を手放せない、と云ふ事は、彼女に取つてもやはりその通りに違ひないと云ふ事を、僕に想像させたからだ。僕が手放し得ない進一は彼女にも同じく手放せないに違ひない。――尤も、その考は、結婚する前になつて、初めて僕に解つて來たのではなく、ずつと前から、殆んど一番最初から始終僕の頭にあつた。僕は彼女と別れたいと云ふ事を一方に熱望しながら、その考のために、始終それが出來なかつた。彼女と別れたいと云ふ考と、自分も彼女も共に進一を愛してゐると云ふ考と、此二つの考が始終僕の心の中で、爭つてゐたのだ。それが一年の間、兩方が同じ程度の勢を以て、僕の心の中で戰つてゐて、勝敗がつかなかつた。そして最後に、たうとう自分も彼女も共に進一を愛してゐると云ふ考の方が、勝利を占めてしまつたのだ。

併し、彼女と別れたいと云ふ考が、それがためにすつかり壓伏し去られたわけでは決してなかつた。……から云ふ事を書いてゐる間に、僕は自分の不聰明さが堪らなく感ぜられて來る。……僕は彼女と家を持つにしても、それを東京に持ちたくなかつた。僕は彼女を如何に愛さうと努力しても、到底愛し得ないに違ひないと云ふ事を、その時すつかり覺つてゐたのだ。結婚すると云ふ決心はしたが、併しそこに幸福な生活が生れようとは、到底豫想出來なかつた。彼女と僕とが、これからどんなに不幸になつて行くか、そればかりが僕に豫想出來た。併し二人が不幸になつて行くのは、二人の罪なのだから、仕方がないと思つた。一生二人はさう云ふ運命に甘んじて行かなければならないのだと思つた。總ては二人の互の不聰明から來た罰なのだから、二人はそれからのがれる道はないのだ

と思つた。……僕は根本に於いてこんな考だつた。勿論、何とかして、少しでも愉快な生活をと望んではゐたが、併し心の奥底には、拂つても拂つても拂ひ切れないから云ふ考がこびりついてゐたのだ。

そこで、僕はかう思つた。僕等二人は、これから不愉快な生活をつゞけて行かなければならないが、さう云ふ不愉快な生活を、なるたけ人には示したくない、と。さうだ、こんな生活を、めつたな人に見られる事は、堪らない恥辱だ、さう思つたのだ。東京で家を持てば、人がたづねて來る。友達がたづねて來る。その他の訪問客が來る。僕のやつてゐる方面がやつてゐる方面だから、雜誌や新聞の人々もたづねて來る。さう云ふ人達に、僕の家庭に流れてゐる不愉快な感じを、感じさせたくない。それは感じさせられる人々の不愉快は勿論だが、人々がさう感ずるだらうと思ふ僕の不愉快は尙堪らないのだ。僕等の陷つてゐる不幸が、どう云ふ點から來てゐるかと云ふ事を、根本から深く考へて呉れる人々の前には、僕は自分のかうした恥辱を曝け出して見せたつて悔いはしない。僕等の此人生に於ける醜い失敗からでも、或考深い人々は、そこに人間と云ふものの持つてゐる或物の片鱗を感得出來るに違ひないと思ふからだ。——實際、さう云ふ聰明な人々からは、たとひ如何に非難されようとも、そこに何或慰めが感ぜられる。

けれども、無理解な冷笑嘲罵は、僕には堪へられない。僕が餘りに神經質になつてゐると云ふ事を、君は責めて呉れ給ふな。併し實際、無理解な冷笑嘲罵は、傷に鹽をつけられるやうなものだ。——僕は少しでも、その傷の痛みを忘れたいのだ。

さうして、東京に家を持つ事を嫌つた僕が、彼女と結婚すると云ふ決心をしたと同時に、相模の海岸に移轉して行つた事を、君は知つてゐるだらう。それは一昨年の十一月三日だつた。汽車の中で、僕は妻と進一との顏を眺めながら、『平和な、しづかな生活……若しこれが得られるなら！』さう心に祈つてゐた。涙ぐましいやうな氣さへしてゐたのだ。

あの江の島の側の片瀨、あすこの生活は、ほんたうに靜かだつた。僕は妻とはなればなれの心を感じながらも、併し表面に何事も波瀾が起らなければ、それでいいと思つた。それ以上の希望は、分に過ぎてゐると思つた。——僕は淋しい孤獨な心持でもかまはない、唯平和であつて呉れれば、靜かであつて呉れればいいと思つた。さうすれば、此二年ばかりの、波打つてゐた自分の生活が、平靜に歸する。隨分下らない、いまはり道をしてゐた生活を、眞直ぐに直すことさへ出來れば、僕にも、此人生に向つて、何事かの仕事をする氣が出て來ると思つた。——實際仕事がしたかつた。そして出來るならば、その中に沒頭してしまひたいと、つくづく思つた。

そこに、もう一つ僕に、その頃の生活に希望を湧かせたのは、知多半島の海岸に行つて病を養つてゐた父と母とを、此片瀨に呼び迎へる事であつた。

『父と一緒に生活出來れば』それがあした渦のやうに亂れてゐた生活の間にも、僕が始終心に繰返してゐた希望だつたのだ。『父とさへ一緒に住めれば……』

父は何も彼も理解して呉れる、何も彼も。そして僕の苦しみをも喜びをも、そのままに分擔して呉れる。さう云ふ考が、絶えず心の中に動いてゐた。それだから『父が來て呉れれば……』と僕は總ての希望を此一點に集めた。

父が來たのは、もう十二月の初めだつた。電報を受取ると、僕は夜、片瀨から電車に乘つ

て、藤澤まで迎へに行つた。それは寒い夜であつた。停車場の中は寂れてゐて、驛夫が寒さのために身體を海老のやうに折り曲げて、靴の踵でこつこつ小刻みに音を立てながら、プラットフォオムの上を、走るやうにして歩いてゐた。――九時何分かに著いた列車の中から、父と母とは降りて來た。

僕は父を實際抱擁したいやうな氣持がした。兎も角、無事に、……さう思ふだけで、涙が流れて來た。丁度父が東京から、名古屋にゐた兄の方へ、發つて行つたのは、一昨年の九月だつた。それから知多半島の海岸に……兄があの通りに、會社を辭めてしまつて、それから求職のためとか云つて、關西の方へ行つたまま、消息が解らなかつたし、僕は僕でかうして、彼女――今の妻――とのいきさつのために惱んでゐたし、父の心はその間どんなだつたらうと思ふ。

その頃父は、病氣もかなり恢復してゐたが、それでも『もう東京に歸られないのかも解らん』こんな事を母に向つて云つたとかで、それを母が涙ぐましい調子で、僕のところに手紙に書いて來た事があつた。――その父の心事は、母の手紙によつて、ひしひしと僕の胸にひびいて來た。實際、父は何處に行つても、安らかにしてゐられる家がなかつたのだ。兄も僕も家と云ふものを持つてゐない。父は母と一緒に知多半島の病院に入つてゐる。――一家がみんなちりぢりばらばらになつて、互に一緒にゐない。若し父が、その海岸を引き拂つた時に、何處に行つたらいいだらう？――さう云ふ父の心事が僕にはよく解つてゐた。

けれども、たうとう父は又僕達と一緒に暮すために、僕達のところに歸つて來たのである。その歸つて來る費用を作るためには、父はあの位筆を持つのを厭がつてゐたのに、たうとう筆を執つて、そして通俗的なものを書いて呉れさへしたのだ。

僕は母が赤帽に荷物の事を賴んでゐる間に、父と一緒に肩を並べて、プラットフォオムを歩きながら、いろいろな事を喋つた。

『たうとう又此方に歸つていらつしやる事が出來ましたね』こんな事を云つたのだ。

父はにこにこ笑ひながら、

『妙なものだね、自分があゝして引込んでゐた間にも、世の中はやつぱり世の中で、始終動いてゐたのだ、と云つたやうな事が、何彼を見るにつけ、吃驚するやうに、不思議に感ぜられるよ』こんな事を云つてゐた。

――兄――

僕が此父の歸著によつて、どんなに生活の改新を豫期してゐたかを、君は想像して呉れるだらう。

ところが、やはり總てがうまく行かなくなつて來た。僕の妻と兩親との間がうまく行かなかつたのだ。いや、これは勿論兩親の罪ではないと思ふ。又僕の妻の罪でもないと思ふ。何よりもいけなかつたのは、やつぱり僕だ。

僕が妻を愛してゐないと云ふ事がいけなかつたのだ。僕の妻はかなり不精者だ。禮儀作法を心得てゐない。野育ちと云つたやうなところもある。けれども、性質が惡いとは決して云はれない。――君はいつだつたか、かう云つた事があるね。『女性は何と云つても女性なのだから、男性の心掛ひとつに依つて、教育出來ない事はない』と。僕もさう思つてゐた。そしてさう努力しても見た。併し、僕の妻は僕より年上だ。もう三十近い。……君、君は又僕の言葉を信じまいとするだらうが、併し長い間獨身だつた女の持つてゐる心の硬化――それは、一寸どうする事も出來ないところがある。僕より若い女だつたならば、僕は屹度僕にも敎育が出來

ると思ふ。けれども、彼女の心には、もう何か石灰質のやうな塊がある。感情の柔軟性が失くなつてゐる。もうたらが立つてゐる。——
勿論そればかりではない。前にも云つた通り、僕の彼女に對する愛がないのが何いけない。だが、僕の愛情の不足と、彼女の心に立つてゐるたうと、それはどうする事も出來ないものだつた。
僕の豫期してゐた心の平靜が得られなくなつて、却つてその反對のものが僕を擾き亂し始めると、それは直ぐ彼女にも傳はつて行つた。ふてぶてしい態度を、何かにつけて彼女は見せたりした。
それが又僕の兩親には氣に入る筈がなかつたのだ。
片瀨が寒くて、父の健康に適さなかつたので、十二月の三十一日の日に、僕等は鎌倉に移轉して行つた。それは西と北とに山を受けて、南と東とは海に面した、日當りの好い、暖い家だつた。僕は眞青に澄み切つた海を、二階の書齋から見下してゐると、多少心の恢復して來るのを覺えた。一月の末になると、時には海にあたつた日光が、もう春らしい色を見せる事がある。葉山や逗子あたりの海つづきが、その日光のしぶきの中に、ぼうつと煙つて見えたりする。その頃僕は再び『平和な生活』と云ふ事についての豫想を抱き始めさへもした。
けれども、やはり、それは自分の希望が描いて見せた一個の幻覺に過ぎなかつた。
進一は僕の父に取つても、母に取つても、妻に取つても、また僕に取つても、たつた一つのペットだつた。進一を抱きながら、濱などを歩いてゐると、『何も彼も此子のために』と云ふ氣もした。けれども、此子の母が、妻——あの彼女であると云ふ事は、やはり僕の喜びではなかつた。いや、それは苦痛だつた。進一に對する愛情が募るにつけ、益々それが僕に苦痛だつた。
ふとした事があると、妻はよく、
『あたし進ちやんを連れて歸ります』こんな事を云ふやうになつた。その聲を聞くと、僕はもう頭の支配を失つた。
『莫迦、莫迦！』かう云つて、外にも聞えるやうな大聲で、僕は彼女に怒鳴つたのだ。
けれども、一週間に一遍、三日に一遍と云ふやうに、
『あたし進ちやんを連れて歸ります』と云ふ妻の言葉が、次第に頻繁になつて來た。
ある日だつた。僕はかなり穩かな氣持でゐた。庭には梅の花が滿開だつた。僕は二階の欄干にもたれて、外の景色をぢつと眺めてゐた。伊豆の大島が、眞青な海の上にくつきりと見えた。隣りの部屋から父も廊下に出て來て、そして機嫌よく話などをしてゐた。その時、僕は散歩がしたくなつたので、ひとりで二階から降りて、茶の間に行つた。僕は著物を妻に出して呉れと云つた。すると、妻は返事をしないで、知らない顏をしてゐた。
少しむつとしたので、
『おい、聞えないのか？』と僕は云つた。
『あの著物はほころびが切れてゐます』
『それぢや縫つて呉れたらいいぢやないか』
『今縫へません』
丁度その時、妻は進一の著物を縫つてゐた。
『俺は散歩に行くのだから縫つて呉れ』
『今縫へません』さう云つて、妻はふてぶてしい顏をして横を向いた。
『そんな態度を取つては、みつさんよくない』
側で見てゐた母が、かう彼女に向つて云つた。
妻はそれに返事をしなかつた。
『お前は何と云ふ顏をしてゐるのだ？　母さんに返事をしないか！』さう云ふと同時に、僕は

『莫迦つ！……』と怒鳴つた。

「あたし進坊をつれて歸ります」彼女はいつものあの言葉を云ひ出した。僕はもう我慢がならないと思つた。と、同時に、僕の右の手が妻の頰に飛んだのだ。

――兄。

その時の有様は思ひ出しても堪らない。妻の顏が、何か動物的な意地の惡さを表した。いや、さう云ふ僕の顏そのものも、動物的な怒と憎しみとの表情に溢れてゐたに違ひない。――物音を聞きつけて、父が二階から降りて來た。それを僕ははつきり知つてゐる。父の前で、恥しい、さう思つた。けれどももう僕は心の支配が出來なかつた。

僕はいろいろな事を怒鳴つたのだ。如何に俺が我慢してゐるか、俺がどんなに苦しんでゐるか、貴樣には解るまい、こんな事を怒鳴つたのだ。そして部屋の中をどしんどしんと歩きまはつたのだ。僕はさうして、怒鳴つて歩きまはつて、それから、彼女の側に近よつては、その頰を撲つたのだ。

「芳次、貴樣は何と云ふ莫迦だ。――莫迦だな、お前は。撲るのは止せ。――話せば解る事だ」父がおちついた聲で僕に云つた。

すると、彼女が不意に立上つた。そしてその時、隣りの八疊の間で、玩具を持つて遊んでゐた進一を抱へ上げて、そして背中におぶはうとした。

『何處へ行く？』と僕は怒鳴つた。

『東京のうちに歸ります』と彼女は皮肉な顏をして答へた。

『何だ、家に歸る？……よし、歸れ、併し進一は貴樣に與る事は出來ない……』僕はさう叫ぶなり、彼女の方へ進み寄つて、その背中から、進一を抱き取つた。

『いやです、いやです、進坊は誰が放すもんか……』さう云つて、彼女は、齒を剝き出して、力いつぱいに進一の身體を引つぱつた。僕はそれを振放つて、彼女を突きとばして、そして進一を兩手に抱へたまま、二階に駈け上つた。彼女は突き飛ばされたまま、そこに泣き倒れたと見えて、僕の後を追つては來なかつた。

自分の書齋に入ると、淺猿しいと云ふ感情が一時に込み上げて來た。僕は進一を疊の上におろすと、そこに突つ伏してしまつた。『何と云ふ醜さであらう……』と思つた。もう自分の生活が、何の辯解もつかないやうな氣がした。堪らなく恥しくなつて來た。僕は涙が込み上げて來るのを一生懸命堪へたが、たうとう我慢がならなくなつて、泣き出した。泣き出すと、何一層涙が込み上げて來た。絞り出るやうな聲までが口から出て來た。

父が二階に上つて來て、僕の背中をぽんぽんと輕く叩いた。

「何を泣いてゐるんだ、莫迦だな。進坊がひとり……向うの部屋まで步いて行つてしまつたぢやないか……」さう云つた父の聲には、併し僕をいたはるやうな愛情が充ち溢れてゐた。僕はもうまるで、子供のやうな氣持になつて、父の膝元に突つ伏したまま、おいおい聲を出して泣いた。

「父さま、ほんたうに申譯ありません。僕は駄目なんです、なつてゐないんです……ほんたうに恥しいんです……」

「まあ、よい、よい」父はさう云つて、隣室に行つて、その邊をよちよち步いてゐた進一を抱いて來た。何も知らない、小さな子供は、祖父の手に抱かれると、にこにこ笑つて、「ちんちん、どんどん」と云ふあの手の振り方を、その小さな手でやつてゐた。

――兄。

僕は此淺猿しい、丁度一年前の光景を書い

てゐる中に、涙が眼に傳はつて來た。もつとおちついて書きたいと思ふ。あんまり慌しい感じを君に與へるに違ひない。――併し、それがなかなか出來ないのだ。

もう夜はいつの間にか明け放たれてゐる。女中が來て、雨戸を開けて呉れた。朝の空氣が少し寒くはあるが、爽かに流れ込んで來た。狩野川の水は、かなりたつぷりと、洋々として流れてゐる。對岸には蘆がいつぱい生えてゐる。それが朝風にそよいでゐるのが、此二階からも見える。……

僕が鎌倉の家から、ひとりで妻の實家に出て來てしまつたのは、それから一ケ月ばかり經つての事だつた。

何故妻の實家に出て來たかと云へば、それはそこが下宿屋であるからだ。そして僕はいろいろ考へたのだ。僕が東京に出て來てしまへば、いづれ、早晩また妻が東京に出て來るに相違ない。けれども、僕は妻と一緒に東京で家を持つ事は到底出來ない。して見ると、何處か下宿見たやうなところにゐなければならない。併し、他の下宿に妻と一緒に行く事は、家を持つより以上、尙堪らない。……結局妻の實家にゐるより外ないと思つたのだ。僕はそこで一室を借り受ける。妻は家の者と一緒にゐるだらう。彼女の親や姉妹と一緒にゐるだらう。さうすれば・僕の部屋に始終來てゐるわけではない。――それが僕にはせめてもの逃げ道なのだ。――何故そんな事までするなら、離縁しなかつたかと君は云ふかも知れない。併しそこが僕の心の不思議な病氣なのだ。妻を愛してゐないと云ふ事が、どうしても自分の罪と思はれてならないからだ。勿論進一の事もある。――けれども、愛してゐなくて妻と罪を犯したと云ふ事が、どんな苦痛が生じても、やつぱりそれを受けてゐなければならないと云ふ氣を、僕に起させるのだ。――いや、もつと打ちまけて云へば、彼女に對して僕の心内に溢れてゐるイゴイズム、それが僕に恐ろしいのだ。その恐ろしいイゴイズムを正視する事が堪へられないために、却つてそれと反對なものを持つて來て、無理やりに自分の上に、おつ被せようとしてゐるのだ。人間は隨分始末の悪い意地を持つてゐるものだとほんたうに思ふ。若し心がイゴイスティックならば、寧ろその心の通りを行に表すのが却つて自然で、そしてほんたうなのかも知れないと思ふ。――心の弱いイゴイスト、それが僕の缺點なのだ。そして心の弱いイゴイストと云ふものが、此人生で、最もたつてゐない、つまらない、苦しい役割を演ずるのかも知れないと思ふ。……ああ、かう書いてゐる中に、僕は堪らない自己嫌悪に襲はれて來る。僕は今頭の中がじいんと響くやうな氣がする。昨日から引きつづいてゐる吐きたいやうな氣持が、胸にうづいて來る。……何しろ、おちつく事が肝要だと思ふ。昂奮のままに心をさせて置いたら、飛んでもない事になると思ふ。

……僕の豫想はその通りだつた。やがて妻は進一を連れて、僕の後を追つて東京に出て來た。そして、やがて二度目の姙娠をしたのだ。――これが僕が一番に恐れてゐた事だつたのだ。けれども、併し……

その點で僕は自分を責めてゐたらきりがない。何と云ふ變てこなものに人間の生活が出來てゐるのかと思ふ。姙娠と知つた時から、僕は尙一層の苦しさと、自己嫌悪と、それから彼女に對する憎しみとに、胸をかきむしられた。

動けば足がもぐつて行くあの泥沼が想像される。もがけばもがくほど、足から腰から、身體全體がその中にもぐつて行く。そこから逃げる道が解らない。動かずにぢつとしてゐて見る。動くよりももぐり方が多少遲いが、やつぱり少

しづつもぐつて行く。

僕は實際絶望的になつてしまつた。もう僕は苛立たしくて、一時もぢつとしてはゐられなかつた。

妻の胎内に、何も知らない、罪のない子が、又もや育ち始めてゐるのだ。もうどうする事も今更出來ない。どんな子が生れるか、それを待たなければならない。その外に仕方がない。

僕の此氣持が多少妻にも傳はつて行つたには違ひない。けれども、僕の妻は僕よりも割合に暢氣だつた。僕ほどそれについて案じてゐなかつた。それに女だ。自分の胎の子、それに對して、既に一種の愛情が湧き始めたと見える。……僕は強ひて、笑顏を作つて、彼女に對さうとした。そして實際、さうしてゐる間に、彼女に安心させるやうな笑顏を作る道を、いつの間にか、修練によつて獲得してゐた、――『男の子だつたら、又進坊のやうに丈夫だといいんですがね。』――『でも女の子もひとり位あつてもいいわ。』彼女は、そんな事を、僕に向つて、にこにこ笑ひながら話したりした。

子供が生れると屹度それが可愛くなる。――愛情の負擔、さう云つた豫想が、僕を心のどん底から惱ました。

『又、愛しもしない女との間に、子供がひとり此世に生れ出る！』――もう一番最初の道が間違つた生活には、何か事があれば、それは益々その道の間違ひをひどくするだけの事だ。僕は幸福な生活をしてゐる人々の心持が、想像出來ない事はない。その人々に取つて、子供の生れると云ふ事が、どんなに愉快な、樂しい事であるかを想像出來ない事はない。そしてそれが大變自然であると云ふ事が、よく解る。――けれども、一番最初の道を踏み誤つた生活にあつては、自然な生活に於いて幸福であるべき事、愉快であるべき事が、却つて、不幸と不愉快とを増させる種となつて行くのだ。――そして生れた子が可愛くなる。それは極り切つてゐる。だが、素直な、暗い蔭の少しもない愛ではない。蔭がある愛なのだ。暗い愛なのだ。深くなれば深くなる程、よろこびよりも、却つて苦しみを與へる愛なのだ。

彼女の臨月が近づくに從つて、僕の顏付がどんな風になつて行つたか、恐らく君は知つてゐるだらう。僕が精神の支配を如何に失つて、どんなに苛々した、苦しさうな陰氣な顏をしてゐたかを。――さうだつた、君にはそのために、始終心配をかけたつけ。君は僕の健康を氣にして呉れたりした。君の知つてゐる或呼吸器科の專門醫に、僕を紹介しようと云つて呉れたりした。僕は君の厚意に對しては、實際感謝の辭がない。

けれども、今僕は君に向つて告白する。さう云ふ僕の苛々した、苦しい陰氣な表情は、みんな妻の妊娠と云ふ點から來てゐたのだ。

ある日、君から僕はトルストイの『クロイツェル・ソナタ』を借りて來た。君が是非讀めと云つて、僕に勸めたのだつた。君は僕の生活を知つてゐて、あの恐ろしい作物を僕に讀ませようとしたのでない事は、僕にもよく解つてゐる。トルストイの崇拜者である君は、あの作の價値と云ふ點から、一讀する事を僕に勸めたのだと云ふ事がよく解つてゐる。けれども、その結果から云へば、實際僕には堪らなかつた。恐らく、屹度、僕ぐらゐあの作によつて、恐ろしい打撃を受けた人間は、そんなに澤山はゐなからうと思ふ。

それだのに、君にも話したのを覺えてゐるだらう、僕はあの作に厚意が少しも持てなかつた。非常な反抗心が、むらむらと起つて來た。あんな解釋の仕方はないと思つた。――ああ云ふ渦卷の中に陷つてしまつてゐる者に對しては、

トルストイのあの作は何の解決の光も與へない。――唯傷に觸だ。メレジコウスキイの云つたやうに、傷に觸だ。――痛むばかりだ。しみるばかりだ。そしてそれつきりだ。

トルストイの教訓話のひとつだと云ふ事だけはよく解る。そつちに行くと、溝に落ちるぞ、から云つて、此人生の危險區域の入口に立札をしてゐるのだと云ふ事だけはよく解る。併し危險區域に陷つてゐる者に對しては、救ひにも何にもならない。危險區域に入り込んでしまつたものに對して、どう云ふ處置を取り、どう云ふ同情を表し、どう云ふ愛を示さうと云ふやうな考は、あの作を書いた時のトルストイの頭には少しもない。唯陷つてゐるものに向つては、彼等の陷つてゐるところが、如何に恐ろしいかと云ふ事を、詳細に、根氣よく示して見せただけの事だ。偉大な精力を以て、それを明瞭に描いて見せただけの事だ。何の愛もありはしない。

僕があの作を、『不愉快な、いやな作だ』と云つたら、君は吃驚して眼を瞠つたつけね。それも無理はないと思ふ。危險區域の中に踏み込まない君に、『此處より內入るべからず、危險なればなり』と云ふ立札は、非常に必要だからだ。非常にありがたいからだ。――けれども、僕には、その危險區域の埋目に立つて、大きな、筋のはり切つた手で、どしんどしんとその立札を地上に打ち立てようとしてゐる彼の姿が、恐ろしく冷淡に見えた。――僕等の方へ向つて、彼が背中を向けてゐるやうに見えた。――

併し、僕は今此處で『クロイツェル。ソナタ』論をやつてゐるつもりはないのだ。僕の頭は餘つ程、トンチンカンになつてゐる。……

簡單に書くつもりと最初に斷りながら、僕はいつまでもキリのない事を書いてゐる。僕が妻の實家に鎌倉から逃げて來た理由は、疾うに君に解つてゐる筈なのだ。

妻をそこで產をさせるわけには行かなかつた。他の止宿人の手前、生れ立ての赤ん坊の泣聲を立てさせる事は、遠慮しなければならなかつたからだ。――そこで、妻の云つたあの『むかうの家』なるものを、妻の產所として、一ケ月ほど前から、借りて置いたのだ。

……此處まで書いて、時計を見たところが、もう八時近くなつてゐる。宿の女中が上つて來て、

『もう直き船が出ますから、御用意を願ひます』

と云ふ。

僕は昨日から、實際ほとんど何も食べてゐない。パウリスタとウウロンとで飲んだ珈琲と紅茶との外何も飲んでゐない。今も食慾は少しもない。胸もまだ惡い。けれども、いづれにしてもこんなに物を食べなくては、惡いと思ふ。それだから、僕は朝飯を命じた。强ひてでも、何かを腹の中に入れようと思つてゐる。

それで書きかけた手紙も、一寸此處でペンを置く。そして今までの分だけを兎に角、君に向つて郵送する。此つづきは、もつと後で、何處かの溫泉場にでも著いてから書く事にする。その時は、こんなに苛々して、あわただしくばかりではなく、もう少しおちついて書けるだらうと思ふ。――大概今日は土肥に行くつもりだが、まだよくは解らない。――(以上、沼津の宿にて)

二

――兄。

汽船の出帆したのは、丁度八時半であつた。妙なところで筆を擱いたので、あれを讀んだ君は、變な氣がしてゐるだらうと思ふ。今日は至つて海がしづかだ。三月頃にはこんな事はめつたにないと、同船した爺さんが、ひとり語のやうに僕の耳許で呟いてゐた。

海に出ると、何となく晴々した氣持がして來る。今日は空がすつかり青く、と云ふよりも暖い碧色に澄んでゐる。もう實際此邊は春の最中だ。東風がそよそよと吹いてゐるが、海の上でも少しも寒いと云ふ感じがしない。駿河の山々が、かなり遠い山まで、そのヒダがくつきりと見える。今出て來た沼津の方を振り返ると、町の後に、例の愛鷹山は、あの不恰好な大きな姿をして、傲然とそびえてゐる。實際愛鷹山と云ふ山は、不恰好な山だと思ふ。その蔭に、富士は隱されてしまつて、その頭を一寸――丁度愛鷹山の頂上の眞上に、かたばかり出してゐるに過ぎない。

僕は船が進むにつれて、その富士の頭が、だんだん高く出て來るのを、今ながめてゐる。――何となくそれが面白くさへ感じられる。心持にかなりの餘裕が生じて來たに違ひない。『人間の頭を突つ込んだやうな生活に對して、自然のまあ何たる悠久さ』さう云つたやうな自然嘆美と云ふ程の感じではないが、併しやはり自然は好いと云つたやうな感じが、かなり胸に湧いて來る。けれども又、こんな考も湧いて來る。『あゝして、少しも動かずに、何百年何千年もゐるとは、山なんて、ほんたうにどんなに退屈なものだらう！』――こんな子供らしい考が浮んで來るだけ、それだけ、僕のむすぼれた心がほぐれつつあるのかも知れない。

船は殆んどと云つてもいい位動搖しない。これなら、物が書けない事はない。僕は丁度多少おちついて來た此氣持を利用して、鉛筆で、さつきの續きを書きつづけようと思ふ。……

そこで、僕は急いで向うの家――妻の産所に出かけて行つた。

僕はその家に行く事は初めてであつたが、小さな、古びた、唐紙などがぎすぎすする、不愉快な感じの家だつた。入つて行くと、石炭酸の香がぷうんと鼻に來た。妻が仰向けに寢てゐると、産婆がその裾の方に坐つて、何やら跡始末らしい事をしてゐた。藥が沁みると見えて、妻は顏をしかめてゐたが、僕が入つて行つたのでぢつと僕の眼を見つめた。その眼はたしかに愛情を欲してゐる眼だつた、僕の心を求めてゐる眼だつた。僕もぢつと妻の眼を見つめたが、彼女に對して、氣の毒だと思ひながらも、心が自分でも苦しかつた程著しく冷たかつた。

『御安産でお目出度うございます。美しいお孃さまで』と産婆は、夜具の裾のところから、立上つて來て、僕に挨拶した。

「どうもいろいろお世話でした」と僕は機械的に産婆に云ひながら、妻の裾の方に敷いてある小さな夜具の中を見た。なる程、妻の妹の云つたやうに、艶々した髮の毛が、生れたてにしては、かなり長く生えてゐる赤ん坊だつた。ガアゼを小さく丸めたものを口に入れられて、それをちうちうと靜かに吸つてゐた。

僕はその側に行つて、屈みながら、その顏をぢつと見た。割合に綺麗な子だと思つた。少し黒ずんだ眞赤な顏をしてゐた。かなり鼻が高かつた。僕はその時、自分の氣持が大變不純であるのが、堪らなかつた。正直な話、僕はその時、その赤ん坊が可愛らしいとは思はなかつた。赤ん坊の可愛い可愛くないと云ふ事よりも、まるで違つた事を考へてゐた。――その場にゐるのが、どんなに苦しいかと云ふ事を考へて居たのだ。――これを何と説明したらいいだらう？――

産婆が、汚れ物を持つて、臺所の方へ行つた間に、

「可愛い子でせう」と妻は、顏は動かさずに、眼だけを僕の方へ向けて云つた。さつきから僕の心から彼女が求めてゐた氣持を、彼女はやつと口に出して云つたのだ。彼女もやつぱり今赤ん

坊の事を考へてゐるのではなかつたのだ。赤ん坊の事を口にしながら、併しその意味は別な事を指してゐたのだ。
「安産でよかつたね』と僕は口を開いた。それも同樣にその時の僕の心持とは別な言葉なのだ。が、それ以上は口に出なかつた。妻を可哀さうだと思ふ氣持が、妻に對する愛情とは別に、僕の胸を衝いて來た。哀れな女だ、と思つた。さうしたら、妻の悲しみがそつくり解つて來た。僕は妻に對する愛情とは別に、妙に涙ぐましくなつて來た。
僕は妻の眼をぢつと見つめてゐた。妻はぼろりとその眼から涙をこぼした。それを見ると、僕の眼からも、涙が出て來た。
「あなた』と彼女は云つた。僕の手を求めようとしてゐるのだ。僕は彼女に右の手を與へながら、
『よし、解つてゐる』と云つた。妻の眼からは、もうぽたりぽたりとではなく、止度がないと云ふやうに、涙が流れて、それが枕にかぶせてある手拭に滲んで行つた。
僕は自分がそれに釣り込まれて、泣くのは堪らなく厭だつた。僕はそれ以上の事は口に出して云ふわけに行かなかつた。それ以上若し云へば、僞を云はなければならないからだ。——
併し、妻を安心させて置かなければならないとは思つた。僕の氣持の底が、そのまま妻に見えたら、かう云ふ場合だから、妻は感情が昂つて、どんな危險な事にならないとも限らない。併しそれだからと云つて、僕は心にない事を口に出しては云へない。さう云ふ場合になつても、僕の心は片意地だつたのだ。「同情が直ちに愛になつたら、どんなに好いだらう』そんな事を僕は心の中で呟いてゐたのだ。
そこに、産婆の來るけはひがしたので、
『おい、産婆のお禮はどういふやうにしたら？』と小聲で云つて、さう云ふ方面に話を持つて行つてしまつた。
妻は指で以て、その禮の金高を示した。涙で口が利けなかつたに違ひない。
「その外、いろいろの事で、どの位要るの？』と僕はつづけて、小聲で云つた。妻はそれをも亦指で示した。
入つて來た産婆はにこにこして、
「奧樣はほんたうにお輕いんでございますよ。ほんの二時間……いえ、二時間かからなかつたんでございますからね。……あのお向うの石橋さん御存じですか、あすこの奧さんなんかは、ほんたうに難産のお質で、いつでも病院にいらつしやるんですが、殆んど丸一日かかるんでございますからね」こんな事を云ひ出した。
僕はそれをきつかけに立上つた。
『それぢや行つて來るから』それはその費用の算段に行くのだつた。それを前から知つてゐた妻は、眼で一寸挨拶した。
僕は往來に出て行くと、イヤに日光がぎらぎらと眼に來たのを感じた。
山の手にある或雜誌社に先づ出かけて行つた。そこで五十圓ほどの金を借りた。それから、その朝原稿を送つて置いた下町の方の雜誌社に行つて、三十圓ほどの原稿料を貰つて來た。——電車の中で、僕はいろいろな事を考へた。窒息するやうな氣持がして來た。
再び妻に會ふのが苦痛だつた。赤ん坊の顏を見るのも苦痛だつた。此氣持をどうしたらいいだらうと思つた。——そのくせ妻を可哀さうに思ふ氣持は、唯募るばかりだつた。そして可哀さうと云ふ事が、僕の固い氣持を軟かにする事とは、やはり全然別に働いてゐた。
進一の生れる時にも、彼女はどんなに賴りなく、どんなに心細かつたか知れない。世間の人に知られたくないと云ふ事のために、あの時、

僕は彼女を東京の郊外の或百姓屋にうつして置いた。そこで、彼女はひとりで――たつた産婆とたけで――進一を生んだのだ。あの頃は、彼女はその身の行く先がどうなるかといろいろ案じてゐたには違ひない。さう云ふ意味で、外見上では、今よりも尚不幸だつたと云へもしようが、併しそれと同時に又、僕との間が、若しかしたらうまく行くかも知れないと云ふ豫想を抱いてゐたに違ひない。そこに希望があつたに違ひない。希望があるといふ事は、併し何と云つても幸福な事なのだ。

けれども、今は彼女は僕と結婚してゐる。そしてそれが行きどまりなのだ。結婚生活にその先がないのだ。希望の餘地がないのだ。――そしてそれを感じながら、彼女は又しても子供を生んだのだ。

僕は半藏門で電車を降りてしまつて、それから後は態と歩いて來た。電車の中が堪らなくなつて來たからだ。多少蕾のふくらみかかつてゐる櫻の並木の下を歩きながら、何とかして心持を轉換する法はないかといろいろ考へたが、遙かに好い考がひよつこり浮んで來る筈もなかつた。

その時だつた。

「旅に出よう」かう云ふ考が不意に浮んで來たのは。「一週間ばかり、何處かを歩いて來よう」別段何處にと云ふアテはなかつたが、併しさう思つた。

「妻の出産のその日に！」と思ふと、苦しかつた。けれども仕方がないと思つた。――幸ひ、妻の出産その他に必要な金を妻に渡しても、何かなりの金が僕のふところに殘る計算だつた。

――兄。

こんな考へ方が、惡いと云つて、責める事はどうか暫く許して貰ひたい。ほんたうに僕はその外に仕方がなかつたのだ。心持のやり場がなかつたのだ。――妻は可哀さうだ。けれども、僕も不幸だつたのだ。

僕は妻の産所に行く前に、宿の自分の部屋に行つて、原稿用紙と二三の書物と、その他旅行に必要なものを、手提鞄の中に入れた。そしてすつかり支度をしてしまつてから、妻の所に出かけて行つた。

妻の枕許には、丁度彼女の二人の妹が、進一を連れて來てゐた。進一は赤ん坊の枕許に坐つて、恐々その顏をのぞいては、首をちぢめて笑つてゐた。

「何處かにお出かけ？」かう妻は僕の袴を穿いて、手提鞄を手にしてゐる姿を見ると、眼を瞪つて云つた。

「ああ、僕は旅行をして來る」と彼女の眼を見つめながら、僕は云つた。堪忍して呉れ、僕はさういふ心持を眼で云つた。

彼女は僕の眼をぢつと見返して、暫く何も云はなかつた。けれども、やがて、「ええ」とうなづくと、眼からさつきのやうにぽろりと涙を流した。仕方がないわ、さう云つた氣持で彼女はその涙の流れる眼で云つた。

悲しさと淋しさとが、こんがらがつてゐるやうな氣持だつた。――不幸な夫婦だ！と云ふ感じが、胸に込み上げて來た。彼女もそんな風に思つてゐるらしかつた。その理解は、互に胸にしつくり來たのを感じた。

「あきらめてゐます」こんな風に彼女が云つてゐるやうに見えた。

私は彼女のさつき要求した金高に、十圓だけ餘計に渡すと、彼女は、

「こんなに……構はなくつてよ」と優しい聲で云つた。「旅にいらつしやると、何かの場合にお入用の事がありますよ」

「いや、僕のところには十分ある。お前の方こそ、こんな場合だから、どんな入用が出來るか

も解らないから』

『さう』彼女は素直にさう云つた。僕を見て、一寸淋しく頰笑みさへした。が、又淚が出て來たものだから、それを誤魔化すために、進一の方を向きながら、

『父ちやんは、旅行をしていらつしやるから、坊やは母ちやんと赤ちやんと一緒に、おとなしく待つてゐるんだよ』と云つた。

『兄さん、旅行してらつしやるの？』と上の妹が、非難するやうな眼附で僕を見た。

『ああ、僕は頭が惡くて仕方がないから。それに、方々に書く約束の原稿が溜つてゐるんだよ。僕は始終それが書けないで、いろいろの雜誌に氣の毒してゐるから、頭を休めに行つて來ようと思ふのだ』

それは決して口から出委せではなかつた。實際、二三の雜誌の五月號に書く約束がしてあつたのであつた。

『あのね、一寸』と妻が僕の出て行く後から呼び止めた。『赤ん坊の名を何とつけませうか知ら、あなた、どうせ鎌倉にお寄りになるでせう。鎌倉にお寄りになつたら、お父さんに御相談なすつて下さい』

『ああ、相談して來る』と僕は答へた。

僕はその足で、直ぐに電車に乘つて新橋に行つた。けれども、何處に行くと云ふアテもないので、發車の時刻表を暫く見つめてゐたが、なかなか決定しなかつた。それにその時は、何となく旅に行くのがつまらないやうな氣までがして來た。そこで、兎に角、もう少しいろいろな事を考へて見ようと思ひながら、鞄を一時預けて、それから停車場の構外に出て、銀座の方へ歩いて行つた。

併しこれにも亦アテがなかつた。

僕はパウリスタに行つて、一時間ほど腰をかけてゐた。何も食べたくないので、珈琲を二杯飮んだが、二杯目は、牛乳の味が妙に舌に來て飮み乾せなかつた。當世風の洋服や和服を着た快活な人々が、どのテエブルにも溢れてゐた。僕はそれ等の人々の樣子をぼんやり眺めたり、それからいつもは煩いと思ふあの自動樂器の音にぼんやり聞き惚れたりしながら、二時間ばかり、窓に寄つた方の椅子に腰をかけてゐた。

そこを出ると、もう暗かつた。それから僕は再び銀座の通をぶらぶら歩いて、それに疲れたので、ウウロンに紅茶を飮みに行つた。そこに又一時間ほど腰をかけてゐた。——全く心がいつろになつたやうな氣がした。いろいろ考へなければならないと思ひながら、僕は物を考へる氣力がなくなつてしまつたやうな氣がしてゐた。

妻の今日の總ての態度を考へて見た。妻があんな柔順な態度を見せた事は、嘗てなかつた。——お產の後で、妻の感情がすつかり弱くなつてゐるのかも知れないと思つた。

『一層うちに歸らうか』と云ふやうな氣もした。けれども、かうしてぼつかりした氣がして來たのも、うちをこれだけでも離れてゐるからだ、と云ふやうにも思はれた。ぼつかりしてゐれば、ぼつかりしてゐるだけ、それだけ心が樂なのだ。あの妻の實家の自分の部屋、あすこに歸るのは堪らない。それかと云つて、妻の部屋に歸るのは尙堪らない。

ウウロンを出た時は、もう九時半だつた。僕は再び新橋の停車場に引つ返して行つた。——すると、それは又不思議な感情だつた。さつきの昂奮してゐた時に、時刻表を見ながら、急に旅に行くのが氣が進まなくなつたに引更へて、今度は、ぼやけた頭でその同じ時刻表を見てゐる中に、急にやつぱり出かけようと云ふ氣になつて來たのだつた。

人々が何となく忙しげに停車場の構內を往來

してゐる。僕は沼津までの切符を買ふと、一二等の待合室に行つてそこの腰掛に腰をかけながら、さうして忙しさうに歩いてゐる人々を眺めてゐると、晝間のやうな陰鬱な苛立たしさを又感じて來た。――兎に角、東京にはゐたくない、さう思つた。そして殆んど一時間以上も間のある下の關行の最終列車の發車時刻まで、眼をねむつて見たり、立上つてそこらをぶらついて見たりしながら、かなり待遠しい心持でそはそはして待つてゐた。……

――兄。

僕が君に書かうと思つた事は、大體以上の通りだ。併し、今僕は此船の上にゐると、さつき宿屋の二階にゐた時とは、大變ちがつた感じがしてゐる。僕は、此廣い廣い海の上を走つて行く船の感じに、かなり心を惹かれてゐる。いつまでも此上に乘つてゐたい氣がする。何處までも何處までも、このまま行きたいやうな氣がしてゐる。

『愛鷹丸が沈んだのは此沖ですよ』こんな事をさつき『今日のやうに靜かな事はめつたにない』と云つたあの爺さんが、船の右の方を指さしながら云つた。『あすこが、此靜岡灣の中で、一番深いところでね』

なるほど、そこは深さうな感じがした。今船の通つてゐるところも、非常に深さうだ。てすりに凭れてのぞいて見ると、透明な水の底が、青いと云ふよりも、紺色の、凄い色に見える。何かえたいの知れない底深い、胸の空くやうな感じがする。

『あれ、いるかだ！』と誰やらが、僕のゐる方と反對のてすりの方で叫んだ。僕は坐つてゐた身體をのび上るやうにして、その方を見て見た。船から四五町はなれたところに、赤黒い色をした動物が、十匹ばかり、ぽつりぽつりと點を打つたやうに、頭を出して泳ぎまはつてゐるのが見える。寫眞で見た外國の水車がまはつたらこんなかと思はれるやうな恰好に、くるりくるりと水の中で、でんぐり返しでも打つてゐるやうに見える。頭ばかりではなく、尻尾をも出すらしい。くるりくるりと、頭を出して、それからでんぐり返しを打つて、今度は尻尾を出して、又でんぐり返しを打つて、頭を出して……そんな風に繰返してゐるやうに見える。それが如何にも樂しさうで、のどかに見える。そして廣い海の面は疊の目のやうな漣をひらりひらりと見せてゐるだけで、何の動搖もしない。僕は何處までも、此ままはしつて行きたいやうな氣がする。

『土肥にお降りの方は切符を買ひます』と十二三の、眞黑に日に焼けた、不愛想な顏をしたボオイが、乘客の間をこんな事を云つて歩き始めた。僕は土肥までの切符しか持つてゐないが、まだ乘つてゐたい氣がするから、ボオイが側まで來たらその事を云はうと思つてゐる。

兎に角、此船で下田までは行ける筈だ。僕は下田に行かうと思ふ。もつと行けるなら、もつと行きたい氣がする。少しでも長く海を眺めてゐたい。陸に上ると、屹度こんな氣持は消えてしまつて、そしてあの不愉快な考への數々が、頭に群がつて來るに違ひない。――實際そんな考は、浮んで來るよりも、浮んで來ない時間が少しでも多いだけそれだけいいのだ。――それでは又下田に行つたら、こんな不愉快な手紙ではない、もつと快活な手紙を書かう。さやうなら。――（汽船中にて）

（大正八年三月）

死兒を抱いて

家庭教師のよし子は、無口で、細面の青白い顔に、ヒステリイ性とも云ふべき陰鬱な表情を持つてゐて、子供達の相手をしない暇の時には、自分に當てがはれた部屋の中に閉籠つて、何か深い考に耽つてゐるもののやうに、殆んど物音ひとつ立てずに、ぢつと机の前に坐つてゐた。けれども、子供達に對する彼女の態度は、心から深切であつた。だから、子供達も彼女に心からよく馴ついてゐた。石川家の主人夫婦は、彼女の暗つぽい陰氣な樣子に、何となく心がかりを感じながらも、併し此子供達に對する彼女の誠實を、何よりも喜ばしい事に思つてゐた。

『何か祕密を持つてゐるやうなところもありますがね、それでもあの人のお蔭で、みつ子も清一も近頃はほんたうに面白さうに勉强をするやうになりましたよ』細君は良人に向つてよくこんな事を云つた。實際、尋常五年に通つてゐるみつ子も、尋常三年に通つてゐる清一も、よし子が來てから、その成績が際立つて好くなつてゐたのであつた。

ところが、或日よし子が外出してゐる間に、下女のおていが、彼女の部屋に入つて行つて、そこの戸棚を開けた。それはどう云ふつもりで開けたのか、何の用事があつて開けたのか、たうとう詳かにされずにしまつたが、或は無智な女性の好奇心から、よし子がどんな着物を持つてゐるかと云ふやうな事を、彼女の留守の間に覗いて見ようと云ふやうな氣になつたのかも知れない。

その戸棚の隅に、おていは茶色の毛布でくるくると卷いてあるものを目つけた。おていはそれを取出して、地がべとべとにへばついてゐる古びた毛布を恐々解して、その中に包まれてゐるものを見た。

『あれえッ！』と彼女はけたたましい驚きの聲を揚げて、恐ろしさにわなわなと身體を震はせた。毛布の中から、かちかちに干乾びて、みいいらのやうになつてゐる、生れてまだ間もない赤兒の死體が現はれて來たからである。

おていの叫聲を聞きつけて、一家の人々はその部屋に駈けつけて來た。そしてその不氣味な赤兒の死體を見た。石川家は瞬く間に、上を下への大騷ぎとなつた。

『これは飛んだ事になつた』と細君は思つた。『何か祕密があるに違ひないとは、前から思つてゐたが。――併しいづれにしても、こんな噂が世間に洩れてはよくない。どうせ一度は警察に届けなければならないにしても、今によし子が歸つて來るだらうから、歸つて來たら一應自分が問ひ質して見よう。そして良人とも相談して、出來るだけよし子の身に善いやうに取計はなければならない』

よし子に對して、かねがねから厚意と同情を持つてゐた細君は、かう決心して、一家の者達を呼び寄せ、固く口止をして、それからその赤兒の死體は、元通りに毛布に包ませて、戸棚の隅の元の位置に置かせた。

そしてよし子の歸りを待つてゐた。

けれども、その日たうとうよし子は歸つて來なかつた。細君はその夜外から歸つて來た良人にその話をした。その翌日もよし子は歸つて來なかつた。そのまた翌日も歸つて來なかつた。良人は細君の反對にも拘らず、兎に角餘り長引

かせてはいけないから、警察に一應屆けなければならないと云ひ出した。

四日目の朝、丁度その事について夫婦が云ひ爭つてゐるところに、よし子から細君に宛てた一通の手紙と、中判の西洋紙にインキで細かく、書いた「死兒を抱いて」と云ふ長い文章とがとどいた。

手紙にはかう書いてあつた。——

『奥様、私は奥様の私にお示し下さいました御深切に對しては、かねがね何とも御禮の申し上げやうもない程感謝いたして居ります。飛んだ事で、奥様はじめ皆々様に御心配をかけまして、まことに何とも申譯はございません。私の深く祕して居りましたものが、皆様のお眼に觸れましたことを、最早私は存じて居るのでございます。あの日、私がお宅に歸つてまゐりますと、蟲が知らせると申しますか、何となくおうちの中がざわざわして居るやうな氣が致しましたので、若しやと存じ、いつもの内玄關から上りませず、お庭の木戸を開けまして、そつと中庭の戸袋の蔭から、御様子を窺ひました。私の部屋の前で、皆様が騒いでいらつしやるのを見ますと、私はもう總ての事を覺りました。たうとう『その』時が來たと存じました。どんなに隱して居りましても、いつか一度は人に知れる時が無くては濟まされぬと、かねがね覺悟を極めて居りましたので、私の心は割合におちついて居りました。私はその場で直ちに奥様にお眼にかかつて、總ての事をお打明けいたさうかと存じましたが、いやいや、それよりもう一度自分でよく考へて見なければならないと、咄嗟の間に思ひ直しました。——幸ひ私の姿は何方のお眼にも觸れませんでしたので、そのまま忍び足に、御門の外に出てしまひました。それから三日間もお便りいたしませんのですから、奥様には嘸かし御心配遊ばしていらつしやる事と存じます。それを思ひますと、全く申譯がございません。ですけれど、その三日の間に、私はいろいろと自分の身の上を考へました。そしてやつぱり自首して出る事に決心いたしました。明日（それはつまり石川家の主人夫婦が此手紙を受取つた日である。）の午前中に、××署に自首しようと存じて居ります。

何卒旦那様に宜しく申上げて下さいまし。今後どんな身の上になりますか解りませんけれども、旦那様奥様の御恩は決して決して生涯忘れは致しません。お孃さまにもお坊つちやまにも、今一度お眼にかかりたいと存じます。ほんたうにお二方とも私によく馴ついて下さいました。勿體ない申しやうではございますが、自分の親身のきやうだいのやうに存じて居りました。どうか御丈夫に御成人遊ばすやう、蔭ながらお祈りいたして居ります。申し上げたき事はまだ數々ございますけれども、今は取急ぎますゆゑ、申し上げません。——くれぐれも皆様御身御大切に。

それから別封にて御送りいたしました拙き文を、奥様に一度讀んで頂きたいと存じます。これをお讀み下さいませば、何も彼もお解りになる事と存じますから、此處では何も申し上げません。此文はいつか何方かに見て頂く機が屹度あると存じましたので、一昨年書きましたも

のでございます。それから二年間、肌身はなさず持つて居りました。私の秘密が世に知られる時がまゐりましても、心ある方にそれを讀んで頂きましたら、その方は私が此世で受けました苦しみを理解して下さるに違ひないと存じたからでございます。御なさけ深き奥様に讀んで頂きませば、これ程幸福な事はございません。奥様は屹度私の不幸を御理解下さる事と存じます。――私はすつかり決心いたしました今は、これからどんな事が私にまゐりましても、恐ろしくはないと存じます。その點についてはどうか御心配下さいますな。私の爲てまゐりました事が、法律上ではどんな風に解釋されますものか、私は少しも存じません。けれども、たとひそれがどんな風に解釋され、どんな風な罰を身に受けましても、恐ろしいとは少しも思ひません。――私は自分の過去を恥ぢては居りますが、こんな風になりました事については、疚しいと思つて居りません。どうか御安心遊ばして下さいませ。――それではこれで失禮いたします」

それから二伸として、荷物の處分をどうかして貰ひたいと云ふやうな事が、かなり用意周到に、こまごまと書いてあつた。そしてあの荷物――死兒は、御迷惑でも、警察から調べに行くまで、今暫く預つて置いて下さいと書いてある邊は、冷靜な、おちついたよし子の手紙の文章も、文字も、流石に心の亂れを示してゐた。

手紙を讀終つた主人夫婦は、次にその「死兒を抱いて」と云ふ長い文を讀み始めた。

それは次のやうなものであつた。

一

……その人に初めて會ひましたのは、私の十七の時でした。十七と云ふ年は、私に一生忘れられないいろいろな變動が、起つた年でした。それまで少しも知らなかつた此世の悲しみが、一時につづいて身に襲つて來たのでした。二月の初めに、父が死にました。父は平生から丈夫な方で、病氣などした事はめつたになかつたのですけれども、それが急性の腸加答兒で、僅に一週間ばかり臥せつただけで、死んでしまひました。私達はそれを悲しんでゐる暇のない中に、早くも第二の不幸に見まはれたのです。父の死にましてから一ヶ月半ほどして、さうです。三月の十三日の、折角春が來たのに又冬に舞戻つたと思はれるやうな、薄曇りした風の寒い日でした。かねがね腹膜の惡かつた母は、突然病があらたまつて、父の後を追うて行きました。……父の死がすつかり母の氣力を弱めてしまつたに違ひありません。

兄の耕吉は、その前の年に中學を卒業したばかりで、高等學校の入學試驗を受ける準備をしてゐました。けれども、兩親の死後、財産整理をすつかりして見ますと、意外にも、兄にもうそれ以上の高等の學校に通はせるだけの餘裕は殘つてゐなかつたのでした。兄にはそれが殘念でならなかつたに違ひありません。けれども、無口の割合に心のしつかりしてゐた兄は、此突然の境遇の變化に對して、あんまり不平らしい事は申しませんでした。その當時、毎日々々泣いてばかりゐました私に向つて、却つて笑ひながらこんな事をよく云ひました。

『お父さんは流石に司法官だつたんだね。お父さん位の地位になれば、他の省の人だつたら、多少の財産が殘つてゐなければならない筈なのだが、少しも殘つてゐない。併し僕は貧乏なんか何とも思やしないよ。それよりも、お父さんが淸廉潔白を何處までも立て通していらつしや

つた事を嬉しいと思ふよ。お前は子供だつたから、よくは知らないだらうけれども、××事件の時などは、お父さんの同僚の人達は隨分固いと云はれてゐる人でも、『買收されたんだぜ。』——けれども、お父さんは頑として賄賂をはねつけなすつたんだ。お父さんは生きてさへいらつしやれば、屹度出世なすつたに違ひないよ。司法官はあれでなけりやいけないんだからね』

父が近い中に××局長になるだらうと云ふ噂のあつた事は、私も母から聞いて知つて居りました。父はおとなしい、無口な人でしたが、何處か恐い感じがして、私には母のやうには親しめませんでしたけれども、それでも何となく心強いと云つたやうな尊敬の念を、私の心に始終起させてゐました。

私の一家には、親戚が至つて尠かつたのです。それにこれはやはり兄に聞いたのですが、兄の云つた言葉を藉りて云へば、父は『水清ければ魚棲まず』で、餘りに正直一徹な人だつたものですから、却つて同僚や部下の者に、人望がなかつたさうです。そんな風なので、親戚に代つて、父の遺族——兄や私の——面倒を見て呉れようとする友達も、父にはありませんでした。

『よし、僕は獨立獨行でやつて見せる。なに、大學など卒業しなくつたつて、心掛け一つでは、どんなにでも勉強して行けると思ふよ。……お前も後二年で女學校を卒業が出來るのだけれど、氣の毒だが、退學して貰はなければならないよ』兄はかう云つて『五年だ。五年經てば僕も屹度、一人前の男になつて見せる。五年の辛抱だ。五年の辛抱だ。——さうなれば、お前にも相當な事はしてやれると思ふ』

利かない氣の兄は、父の昔の同僚などに賴まないで、履歴書を自分で持つては、方々求職のために歩きまはりました。高等女學校の三年だつた私は、その三月が進級試驗でしたが、丁度母の不幸のために、それを受ける事が出來ませんでしたので、四月になつて追加試驗を受けまして、三年を及第すると共に、退學してしまひました。——友だち達に別れるのが、どんなに辛かつたでせう。一番親しかつたみよ子さんは、私の境遇の變化を知ると、手を取つて一緒に泣いて呉れました。けれども、私の悲しみよりも、兄の悲しみの方が、尚一層ひどいだらうと思ひますと、自分ばかりが贅澤な不服を云つてゐては、濟まないと云ふ氣がしました。

今まで下女を二人つかつてゐた廣い大きな家から、二人は麻布の市兵衛町の、とある路次の小さな家に移りました。裏長屋と云ふ程ではありませんでしたが、三軒つゞきの長屋の眞ん中の家で、左隣りには小學校の教員、右隣りには芝浦製作所の職工が住んでゐました。——口數の多いそのかみさんは、『うちは職工長で、それは大勢の者を監督しなければなりませんから、ひと通りやふた通りの骨折りぢやないんですよ』といつもその亭主の事を賞めてゐました。いやしい女で、隨分いやらしい事を平氣で口にするので、なるたけ避けるやうにしてゐましたけれども、それでも父親は正直者らしく、私の事を『お孃さん、お孃さん』と云つて呼びました。

私は父や母の事を考へては泣き、考へては泣きしてゐましたが、それでも今から思ひますと、ほんたうにその時分は、悲しいとは云つても、心が單純で、素直で、無邪氣でしたので、どんなにか幸福だつたらうと思ひます。悲しい中にも、どんなにか清い樂しさを味つてゐたらうと思ひます。——下女など使へなくなつてゐたのは、勿論の事でした。私は馴れぬ手で、急にひとりで炊事やら掃除やらをし始めましたが、そんな事は辛くも何ともありませんでした。兄が求職に奔走して、夕方戻つてまゐりますのを、

兄の好きなものを拵へて置いて迎へますのが、どんなに喜ばしかつたでせう。――あの頃に今一度なつて見たいとつくづく思ひます。

『おや、よしちやんの手は、可哀さうに、大分おさんどん見たやうに赤く膨れたぢやないか』兄は食事の時、私の手を見て、こんな事をよく優しく云ひましたつけ。――ある時、私は庖丁を使つてゐる中に、誤つて、左の手の小指の先をかなり深く切りました。私はそれをきれで縛つて置きましたけれども、夕方歸つて來た兄に、どうかして目つからないで濟ましたいと思ひました。私は御飯の時、態とハンケチでそれを隱さうとしましたが、やはりたうとう目つかつてしまひました。

「どう、お見せ。」――可哀さうだなあ。そんなに汚いきれで卷いて置いては駄目だよ」心配さうに、かう云ふ兄の顏を見てゐると、何故と云ふ事もなく、涙が止度なく出て來ました。――その時の事を、私は今でも特別によく覺えてゐます。

兄はどう云ふものか、それまで交際つてゐたお友達とも交際はなくなつてしまひました。お友達たちの幸福さうな、何の苦勞もなささうな顏が、だんだん兄の心にそぐはないものとなつて行つたものに相違ありません。それで、私達の淋しい一家に、訪ねて來る人と云つては、ただ牛込の叔母一人だけでした。

牛込の叔母と云ふのは、亡くなつた母の妹で、まだ三十五でしたが、その良人にはもう六年前に死別れてしまつて、その後ずつと後家を通して、僅ばかりの良人の遺產と、裁縫の收入とによつて、小さな下女をひとり置いて、つつましやかに暮してゐました。親戚の尠い私達には、此叔母が、東京でのたつたひとりの親戚なのでした。

『耕さんとよしちやんとで、かうして暮してゐるところは、まるでお雛樣のまま事見たやうだよ』快活な叔母は、よくかう云つて笑つては、來るたびに、煮物などをして持つて來て呉れました。『此海苔卷は靜岡の人から貰つた海苔でこしらへたんだよ。……割合にうまく出來てよ。……おほほ、自分で持つて來て賞めてりや世話はないわね。だけれど、外國ぢや何んなだつてね、これは不味いけれどもお食んなさいと云ふのは失禮で、美味いからお食んなさいと云ふのが禮儀なんだつてね』こんなやうにはきはきした物の云ひ方をする人でした。

二十の兄と十七の妹とで家を持つてゐるのは、あんまり痛々しくて見てゐられないから、自分の家の方へ一緒にならないかと、始終叔母は云ひましたけれども、兄はたうとう承知しませんでした。すべて負嫌ひな兄は、叔母に負擔をかけたくないと思つてもゐたのでせうし、又私に一度洩らした口吻に依ると、叔母のところに近邊の娘達が、裁縫を習ひに來るのが、煩くて堪らないだらうと思つてもゐたのでしたらう。

「淋しいけれど、當分兄妹たつた二人で暮さうね。その中には何とかなるから……』こんな事をよく云ひました。

けれども、その「何とかなるから……」もなかなかうまくは行きませんでした。その頃は世の中に、さうざらには職業の落ちてゐない時分でした。大學を卒業した人々でも就職難に苦しんでゐた時分でしたから、まして中學を出たばかりの、殊に、本氣な世間知らずのお坊つちやん氣質の兄には、さう云ふ中から適當な仕事を目つけて來る事が出來ませんでした。

『畜生、四五ケ月給仕代りをして我慢してゐれば、その中に拔擢すると云ひやがつた！』こんな事を云つて憤慨しながら、歸つて來た事もありました。私は紺飛白に小倉袴を穿いてゐる

兄の樣子を見ると、せめて銘仙の羽織とセルの袴だけでもお拵へなすつたら如何ですと勸めましたけれども、『なあに、いいいい、なりふりなんか構ふものか』と兄は一言の下にはねつけました。——銘仙の羽織とセルの袴位は、拵へようと思へば、どうにかならない事はなかつたのでしたのに——

もう夏が來てからでした。兄が中學時分に教へて頂いてゐたS——先生から、『どうだ、名古屋に出かけて見る氣はないか？』かう云ふお話が突然ありました。それは或保險會社の社員の口で、割合に待遇もいいのでした。兄は三日間ばかり一生懸命に考へてゐました。なるたけなら、此東京で探したいと思つてゐたらしいですけれども、さうさうは、もう待つてゐられないやうな狀態にも、なつてゐたのでした。

『どうだい、よしちやんは一緒に名古屋に行くかい？』そんな事を私に云ふかと思ふと、『名古屋なんてどうせ不景氣な田舍だらうから、お前だけは東京で育てたいな』と云ふやうな事も云ひました。兄は私とはなれたくないと思ふと同時に、又自分ひとりなら足手纏ひがないから、思ひ切つて活動が出來ると思つてもゐるらしかつたのです。——私は兄の云ふ通り、どつちでも不服はないと思ひました。牛込の叔母さんは、大變私を可愛がつて呉れましたし、何は兎も角、叔母さんから裁縫を習つて置きたいとも思ひましたので。

『五年だ。五年の辛抱だ！ これから暫くの間、僕は隨分奮鬪しなければならないから、それではよしちやんは當分叔母さんに預かつて頂かうか』そんな事をたうとう兄は云ひ出しました。土地不案内なところに行つて、兄妹ふたりが、兄の貰ふ月給で暮して行けるかどうか、それも兄の心には不安だつたに違ひありません。

叔母さんは、喜んで私を引受けて呉れました。

『大きな娘が急に出來て、あたしはこんなに嬉しい事はない。……これからは毎日お乳を飲ませて上げますよ』叔母は例の調子で、こんな冗談などを云ひました。

兩親の亡くなつた當座に、ひとつは必要から、ひとつは邪魔になりますところから、家財道具のめぼしいものを大概賣つてしまひましたが、それでもまだ多少は殘つてゐましたので、それを賣拂ひ、それに前から殘つてゐましたお金を合はせると、ざつと四百圓ほどのお金が出來ました。これが私達兄妹の全財産だつたのですもの、若し兄の職業がなかなか見つからなかつたとしましたら、近い中に、私たちはほんたうに路頭に迷はなければならない狀態になつてゐたのでした。出發の前の日、兄はその貴重なお金の中から、百五十圓を取出して、私が幾度も幾度も辭退しても承知しないで、それを無理やりに私の手に握らせました。

『いや、そんな事は云つても、どんな場合に要るかも知れないから、持つておいで。僕は初めの中こそ、洋服などを拵へるので、多少要るけれども、併し何と云つたつて男だもの、裸一貫だつて心細くはないからね。——そこに行くと、女はいざと云ふ場合に、金でもなければ、ほんたうに仕樣がないからね』

それは全く兄の云つた通りでした。その後になつて、若しその時のお金がなかつたら、私は全く、どうしていいか途方に暮れたらうと思はれるやうな場合に、出會つたのでした。——その話は、後になつて追々述べますが、私は兄に對する感謝の念に涙ぐみながら、そのお金を背負揚の中に納ひました。

プラットフォオムで、兄の乘つた汽車が動き出しました時には、流石に堪らなく悲しいと思ひましたけれども、それでも、全體として——、その

時の私の悲しみ方が、あまりに不足で、あまりに飽氣なさ過ぎたと云ふ氣が、今思ふとします。名古屋と東京との間だから、急行で行けば僅八時間で行ける、かう兄が申しますので、そんな事も多少は私の心持を暢氣にしてゐたのでせうし、それに叔母さんが大變好い人で、私を可愛がつて呉れますのと、その叔母さんから裁縫を習ふと云ふ事が、何となく樂しみに思はれてなりませんでしたのとが、（私はほんたうに何よりも裁縫が好きでした。）悲しい中にも一種の明るい希望を、私の胸に湧かせてゐたのでせうけれども、併しその時別れた後、私は兄にたつた一度しか會はないのです。それも會社の急用で、兄は一寸東京に出て來た序でに寄りましたので、ほんの三十分も話してゐる暇はありませんでした。――兄はほんたうに好い兄でした。私は今誰よりも兄に會ひたいと思ひます。たつたひと目でも會ひたいと思ひます。けれども、今更おめおめと兄に合はせる顏のない身の上となつてしまひました。あの兄の事ですから、總ての事を打明ければ、屹度心から私の不幸を憐んで、何處までも何處までも私を庇つて呉れるに違ひありません。ですけれども、さう思へば思ふ程、益々兄に合はせる顏がないと云ふ氣持がして來ます。――さうでした。その後一度、私の方から兄を訪ねようとして、わざわざ名古屋まで出かけながら、たうとう會ひもせず、訪ねもせずに、歸つて來てしまつた事がありました。その理由は、これを讀んで頂く中に、自然にお解りになります。その時、これからお話しようとする私の不幸は、もう殆んど頂上に昇りかけてゐたのでした。……

今から思へば、兄が名古屋に行つて、私が東京に殘りましたと云ふところに、既に私の不幸の萌しがあつたのでした。――私はあの時、何故兄に從つて、自分も名古屋に行つてしまはなかつたのでせう。若し名古屋に行つて、兄の側にゐましたなら、總ての不幸が起らなかつたでせうのに。――それを思ふにつけ、私は最初の別れの當時、何故もつともつとずつと悲しまなかつたらうかと悔まれて來ます。ほんたうに、いくら悲しんでも悲しんでも悲しみ足りない筈だつたのでした。

二

父母を失つた事、兄と別れた事、折角途中まで行きながら、退學してしまつた學校の事、さう云ふいろいろな悲しみのために、暗く沈んでゐた心が、次第々々に又昔の明るさを恢復して來ると、もうやがて秋が近づいてゐました。叔母との生活は、確に私に取つて愉快でした。叔母は私が行つてから、今まで雇つてゐた小女に暇を出しました。全く叔母と私と女二人のつつましやかな生活なのですから、小女などの必要はなかつたのです。

その時分、私は自分の身體がめきめきと大きくなつて、何ですか、今まで知らなかつたやうな熱い血が、身内を迸るやうに流れる氣がして、何を見ても、妙に嬉しくて、躍りたいやうな心持になりました。過ぎ去つた悲しい事は、まだ悲しみの色を心に投げながらも、併しそれとは別に、又はそれを押しのけて、さうした變化が肉體的にも精神的にも起つてゐたのでした。何か知ら樂しい事が自分を待つてゐる、そんな氣が絶えずしてゐました。毎日私を見てゐる叔母さんまでが、時々特に私の顏をぢつと見つめて、

「まあ、よしちやんはほんたうに綺麗な娘さんになつたね」と吃驚したやうに云ひました。そんな事を云はれると、恥しさに顏ぢうが火照りながらも、併し自分でも、毎日鏡を見るのが、何とも云はれない樂しみだつた事を、隱すことは出來ません。

叔母の家は西五軒町の、或大通から他の大通へと通り拔ける小路の中にありました。五軒つづきの、長屋と云つてもかなり綺麗な二階建の中の一つで、往來から小綺麗な格子戸までの間に、二段の石段がついてゐました。室數は二階が四疊半二間、階下が八疊と三疊とでした。この室取は此五軒の長屋のいづれにも共通なので、叔母の話によりますと、家族は階下に住み、二階は他人に又貸しすると云つたやうな人の爲めに、建てられたものに違ひないと云ふ事です。そして實際に又、どの家もどの家も、その室貸をしてゐるのでした。殊に此邊は W――大學や N――齒科醫學校などが近いので、主に學生がさう云ふ二階の室を借りてゐました。

九月の初旬の或日でした。叔母と私とは、いつものやうに、おはりをしてゐましたが、裁板でへらを使つて屈んでゐた叔母が、突然頭を上げて、

『よしちやん、うちでも二階を貸さうかね？』と云ひ出しました。『お隣りの奥さんに、さつき大變勸められたんだけれどね、よしちやんはどう思つて？……あんなにして唯明けといたつて、勿體ない、お貸しなさいよ、つてお隣りの奥さんは、それや熱心に勸めるんだよ。近頃の學生はおとなしいやうだし、どうせかうしてゐても、忙しい事はないんだしするから、ひとつうちでも貸す事にするかね？ それに女ばかりで無人だから、二階に男の人がゐて呉れたら、安心にもなるし……』

『あたしは何方でも構ひませんわ。叔母さんのお考へのやうに……』私はさう答へながら、何故か妙に胸のふるへる感じがしました。

貸間をするならば、丁度九月の新學期の始まる時で、暑中休暇の間故郷に歸つてゐた學生達が、續々上京して來るから、今が一番いいと云ふお隣りの奥さんの注意によつて、その翌日二階の戸袋の外側に、「貸間あり」と云ふ紙を、斜めに貼りつけました。……叔母と私とは、その出來榮を見るために、態々外に出て、その戸袋を見上げて見た程、何となく此新しい企に、子供らしい好奇心を動かされてゐました。

その日の中に三人訊きに來ました。あの人は丁度その三人目なのでした。私は恥しいので引つ込んでゐましたが、二階に案内して行つた叔母は、戻つて來ますと、

『直ぐ越して來るからつて、手附を三圓置いて行つたよ。色の青い陰氣な顏をした人だけれども、おとなしい事は確におとなしさうなんだよ。……折角張つたばかりで、惜しいけれど、「貸間あり」は早速除らなければならないね』こんな事を云つて笑ひました。

あの人が引つ越して來たのは、それから三時間ばかり後でした。荷物の持ちはこびには車屋が手傳つて、私はやつぱり引つ込んでゐましたけれども、併しお茶を持つて行くときは、叔母の命令で、私が行かなければなりませんでした。——私が二階に上つて行くと、丁度あの人は本箱に本を入れてゐましたが、一寸此方を振向きました。私はひと目見ただけで、直ぐ俯向いて、お茶を置くと、逃げるやうに梯子を下りて來てしまひましたが、それでも、叔母の云ふ通り、大變色の青いと云ふ事と、陰氣くさいと云ふ事とは、頭に殘りました。

それは午後の三時頃でした。三十分ばかり、二階では、荷物を片付けるらしい物音がきこえてゐましたが、やがてそれが片付くと、それきりことりと云ふ音もしなくなつてしまひました。まるで人がゐるのかゐないのか解らない位に、寂然としてゐます。叔母は讀書でもしてゐるのだらう、と云ひました。けれども、二時間ばかりして、私が夕御飯のお膳をはこんで行つた時、あの人は椅子に此方向きに腰かけて、片

手で頰杖を突きながら、ぢつと疊の上を見つめてゐました。それが何か深く考へ込んでゐるやうにも見えましたし、唯ぼんやりしてゐるやうにも見えました。あの人の顏は、決して輪郭の整つた、立派な顏ではありませんでしたが、それでゐて何となく特色のある、人に或際立つた强い印象を與へる顏でした。額が大變廣くて、鼻が高く、美しい恰好をしてゐて、眼が神經質な鋭い光を持ちながら、それでゐて、何か憧れてでもゐるやうな女らしい優しみを持つてゐました。その時は勿論氣がつきませんでしたが、次第に馴れて來るにつれて、その眼の表情が始終變化するのが解りました。晴々としてゐるかと思ふと、急に雲がかかつたやうにどんよりして來て、妙に陰鬱な感じになります。自分にもそれが分ると見えて、『僕の眼は今變に暗くなつて來たでせう。これは僕の頭に霧がかかつたからです』こんな事を、後になつて、私に云つた事がありました。――『頭に霧がかかる』さう云はれても、頭の中がどんな風になるものか、私には想像もつきませんでしたけれども、あの人は何かを話す場合に、さう云つた言葉の使ひ方をよくしました。『これが僕には堪らない氣持なんですよ。急に濛々と霧がかかつて來るのです。すると、大變危險な心の狀態になつて來ます。もう生きてゐるのも厭だ、さう云つた心持が込み上げて來るのです』こんな事を云つた事もありました。

口が至つて小さくて、心持上唇が出てゐましたが、それはそれ自身としては、何となく愛らしい形を持ちながら、あの人の顏の全體の輪郭から云ふと、妙に不調和でした。若し口が今少し大きくて、强さを持つてゐましたら、あの人の顏は締りのある立派なものとなり得たに相違ありません。やはり後になつて、その口についても、『僕の口、これが僕の心の缺點をよく表してゐるんですよ。――何かにきつぱりした決斷心がないのがこれによく表れてゐるんです』さう微笑しながら、私に云つた事がありました。……

『學生さんぢやないんだつてね。もとW――大學の文科に一寸ゐた事はあるが、今は止めて行かないんだつて「さう云つてよ』と翌朝、寄留屆の事で二階に話しに行つた叔母は、降りて來ると云ひました。『それでも學生さんぢやないのに、あんなに本を持つてゐて、勉强が好きらしい人ね。今も横文字の本を熱心に讀んでゐたすつたよ』

二三日經つと、『變人ね、水沼さんは』叔母はから極めてしまひました。けれども、變人でも、おとなしくて、しづかで、始終本を讀んでゐる勉强家と云ふ點で、確に此止宿人は、叔母の氣に入つたやうでした。

『ああ云ふ内氣な人は、少しぐらゐの事はなるたけ口を利かずに默つてゐるものだから、始終此方から氣をつけて世話をして上げなければいけない』そんな事も叔母は云ひました。

あの人は大概始終部屋に引つ込んでゐました。そして前にも云つた通り、そこに引つ込んでゐる間、人がゐるのかゐないのか、解らないほど、ことりと云ふ音も立てません。梯子などを降りて來る時も、まるで女のやうにしづかに足を踏んでゐました。――夕方から毎日一度づつ外に出て行きましたが、八時頃には大概歸つて來ました。それが暫くの間は何をしに出かけて行くのか、少しも解りませんでしたが、後になつて、或商店の店員たちに英語を教へに行くのだと云ふ事が解りました。それによつて受ける報酬が、あの人の生活費の大部分なのでした。秋田が故郷で、そこに父がひとりでゐるのですが、その父からも、時々五圓、十圓の小爲替を送つて來る樣子でした。

それから又四五日經つた夕方、それは日曜か何かで、あの人は英語を敎へに行かない日だつたと見えますが、私が勝手仕事をしながら、何かの歌——たしか『ロオレライ』だつたと思ひます——を小聲で歌つてゐると、二階からそれに節を合はせた口笛が聞えて來ました。おや、あの人が口笛を吹いてゐる、さう思ふと、いかにも思ひがけない事だつたので、私は吃驚してしまひましたが、それと共に、さうして口笛で節を合はされたのが恥しくもあつたので、歌ふのを止めてしまひました。けれども、あの人は暫くの間、そのまま口笛を續けてゐました。いろいろな歌の節をやりましたが、讃美歌が多いやうでした。

私が夕御飯を持つて行くと、あの人は江戸川から小石川の臺の方を見渡される北向きの窓に立つて、暮れかかつた町の方を見下してゐましたが、急にくるりとこつちを振向いて、

『今階下で歌つていらつしやつたのは、あなたですか?』と訊きました。

『ええ、駄目ですの』と私は眞赤になつて答へました。

『いや、そんな事はない』さう云つて、あの人は窓からはなれて、座蒲團の上に戻りながら、今は何處にも學校には行つてらつしやらないのですか? と云ふやうな事を訊きました。

『此三月まで行つてゐましたが、途中で止めました』と私は答へながら、餘りいろいろな事を訊かれたくない氣がして、困つてゐますと、もうそれきり深く訊きただしても來ませんでした。

そこで、私は直ぐ階下に降りてしまひましたが、その時のあの人の顏附は、大變晴々として、やさしく見えました。その時の澄んだ、微笑を含んだあの人のまなざしは、今でも私の眼に殘つてゐます。

いいえ、でもその時分は、私はまだあの人の事を何とも思つてはゐませんでした。後にあの人を愛するやうにならうなどとは、思ひも寄りませんでした。それよりも、却つて何となく寄りつき難い、氣むづかしい人と思はれてゐました。恐ろしいやうな感じも混つてゐました。叔母の云ふやうに、『變人』と思つてゐました。けれども、それにも拘らず、何となく尊敬の念が湧いてゐた事は確でした。

快活な叔母は、それでも、何くれとなく、いろいろ注意をしては、世話をしてゐました。叔母はあの人の事を、『世間知らずのお坊つちやんだよ』とも云ひました。私などはああ云ふ氣質の人に向つては、なかなか云へないやうな事を、叔母は平氣でどんどん云ひました。

『水沼さん、あなたもう少しなりにお構ひなさいよ。殿方はなりふりに構はなくつてもいいと云つたのは、あれは昔の事ですよ。——今度お金をお取りになつたら、私に預けて御覽なさい。二ケ月か三ケ月で、あなたが何處に出ても見つともなくない風を、私が工夫して上げますから』などとも云ひました。

さう云ふ時、あの人は默つてにやにや笑つてゐました。ほんたうに、叔母の云ふ通り、あの人はなりに少しも構はない人でした。十月になつて、袷を著るやうになつた時見ると、羽織も著物も紡績の絣で、それもいつ頃洗ひ張したものか解らない程、垢がついて、襟がよれよれになつてゐました。

『水沼さん、あなたはそんなに學問ばかりなさつて、どうなさるんですの? 英語など敎へに行くばかりでなく、晝間ちやんとした會社か何かにお勤めなすつたら如何です? 折角なすつた學問が惜しいぢやありませんか?』さういふ事も、叔母はよく云つてゐました。

『僕はそんな處に勤めるのを好まないのです』あの人は眞顏になつてから答へて、また何か說

明でもしさうに、口をもぐもぐさせてゐましたが、叔母が相手の言葉を理解しようともしないで、何も同じ事を繰返したものですから、それきり默つて、唯頬笑むだけでした。

『今の世の中といふものは、どうも僕には向きません。僕は人中に出ると、直ぐ頭の支配を失ひかけて來ます。――例の霧がかかつて來るのです』後にさう云つて、自分が職業を探さない理由を私に話した事がありました。あの人は腦が大變弱いと自分でも云つてゐましたが、世の中に出て行くのを嫌ふのは、それぱかりの理由からではないやうでした。

『僕には醜いもの、汚いものが、餘りに強く心に感じられて來ます。例へば、往來で、車夫のやうなものが喧嘩してゐるとしますね。そんな事からも、僕は妙に胸に痛みを覺えさせられるのです。――兎に角、いろいろな事に平氣でゐられません』こんな事を云ふ時のあの人の眼附には、妙に世の中を輕蔑して、自分ばかりが穢れない誇を持してゐると云つたやうな、傲慢なところと、又一種憂ひ憤るやうな熱情とが見えました。けれども、それを傲慢などと私が思ふのは、やつと近頃の事で、その頃の私は、さうした時のあの人の言葉を聞くと、全く世の中と云ふものが、大變穢れてゐるもののやうに思はれて、あの人がその世の中に比べて、非常に高尚に、氣高く見えたものでした。――併し實際あの人は、その言葉通りに、高尚な、氣高いところのある人でした。唯私の心を惹かうと思ふために、言葉を飾り立てるやうな人では、決してありませんでした。けれども、その高尚な、その氣高いものと一緒に、あの人の何處かには、又濁つたところがあつたのは確でした。――その濁りが、理性の勝つた、綺麗な心を持つたあの人を、ややもすると、妙に暗いものにしてしまふのでした。

『これは生理的なんです』からあの人はそれについて私に云ひました。『腦が惡い、と云ふよりも、僕は鼻が惡いのです。――蓄膿症が、額に來て居るので、醫者にも手の施しやうがないと云ふのです。これがために、頭が變になり出すと、もう手が附けられなくなります。一體弱い意志の力で、一生懸命に押へつけてはゐますが、それで押へつけられない場合には、自分でも後で恐ろしくなるほど、頭の調子が變つてしまふんですよ。――ずゐ分不道德な事も頭に浮んで來てね』さう云ひながら、眼をそらして、一種變挺な苦笑を浮べました。『だから、いろいろ世の中の醜さを平生は攻擊してゐても、ああ云ふやうに頭がなつてゐる時には、僕だつて、何をするか解らないと云ふ氣も實際しますよ』

そんなやうな事を私にあの人が話すやうになつたのは、かなり後の事ですが、あの人と私とが親しく口を利くやうになり始めたのは、或日叔母に向つて、あの人が、『よし子さんに英語でも敎へて上げてもいい』と云つた事からです。學校を途中で退學したと云ふ事が、何と云つても、私には殘念でならなかつたので、そんな口吻を時々洩らしてゐたものですから、それを叔母がひよつとした事から、あの人に話したのださうです。さうしたら、あの人が、『それでは自分が敎へて上げませう』から云ふ風に云ひ出したのださうです。

そこで、その翌日から、晝間は裁縫やその他の用事で忙しいものですから、夜分、あの人が商店から戻つて來ると、一時間ほど私は英語を習ひ始めました。

三

習ふのは『チョイス・リイダア』の四でした。あの人はその中から、あの人の趣味に從つて、多少文學的の味のあるものばかりを選んで、熱心

に講義して呉れました。ベトオフェンの『月光曲』の出來上つた夜の事を書いた美しい物語は、殊にあの人の趣味に適してゐたので、一層熱心に講義して呉れました。あの物語は、ほんたうに心の底まで沁み通るやうな美しさと涙とに充ちてゐますので、私も非常に好きでした。あのベトオフ ンが町を歩いてゐるところから、とある陋屋で自分の作曲を演奏してゐるピアノの音を聞いて立止るあたり、その陋屋の中にきこえる不幸な親子の會話を聞くあたり、そして殊にベトオフェンが即興的に、あの『月光曲』を奏き始めるあの條、それが、今でも尙私の心になつかしく殘つてゐます。あの人が熱心に、夢みるやうな眼附をして、それを講義したその顏附が、今でも尙ありありと私の眼に殘つてゐます。……思ひ出すと、その時、そしてその時分が、一番私には喜ばしかつたのです。兩親の死や兄に別れた事やによつて、此世の悲しみを知りかけてゐた私の心にも、まだ此世の濁りと云ふものは入つて來ませんでした。ほんたうに胸の中で感じ易く躍る血汐も、少しも穢れない處女の美しい血汐でした。私は悲しみは知つても、どうする事も出來ない暗い濁りは、まだ少しも知りませんでした。悲しみにはまだ何處か透明な、心を慰める何ものかがありましたけれども、その後に私が受けました、又今でも受けてゐます苦しみには、さうした透明なものや、心を慰めて呉れるやうなものは、一つもありません。唯どうする事も出來ない濁りと、渦巻くやうな暗さとがあるばかりです。……けれども、その時分は、まだそんな不幸な心持は、私には全然解らなかつたのでした。

講義が終ると、後三十分ほど、あの人は私にいろいろな話をして聞かせました。それが主として文學の話で、外國の面白い小說などの梗概を、あの人は私に解るやうに、巧みに話して聞かせました。——私にはさう云ふ難しい議論はよく解りませんでしたけれども、あの人に云はせると、藝術に人間のする事の中で、最も高尙な、最も正しいものでした。けれども、今の日本の小說家は、一二の人を除くほかは、大變輕蔑してゐました。始終原稿用紙を擴げて、何か書かうとしてゐましたが、一つも出來上つたものはないやうでした。『頭が惡い、頭が惡い！』さう云つては、書きそこなひの原稿用紙を、くしやくしやにもみ丸めて、陰氣な苛々した短氣な顏附をしました。……でも、若しあの人が今でも尙生きてゐましたら、屹度いつかは何かを書くだらうと云ふ氣がします。

私が若しもつとさう云ふ方面についての素養を持つてゐましたら、あの人の言葉をよく理解して、もつと詳しくあの人の思想を、此處に記して置く事が出來るのですけれども、悲しい事には、さう云ふ素養が私にはありませんでした。けれども今でも覺えてゐます一つ二つを此處に擧げれば、『今の日本では理想主義と云ふものが、妙に輕蔑されてゐるが、併し僕は純然たる理想主義者です』とよくあの人は云ひました。あの人の口癖になつてゐたのは、『此世の不完全と醜惡とから、一歩々々人類を救ふ、そこに今後の藝術の使命があるのです』と云ふ言葉でした。その他まだそれについてのいろいろ細かな說明を聞きましたけれども、今は私は覺えてはゐません。併しさうした事を述べる時のあの人は、ほんたうに熱情的で、いたく壓倒してゐました。何となく人を壓しつけるやうな力がありました。

あの人に對する尊敬の念が、次第々々に、一種のなつかしさに變化して行つたその變化の仕方は、大變自然で、順調でしたので、いつからそんな氣持が起つて來たかを、私は今はつきりと云ふ事は出來ません。英語が濟んで、更に例の

やうに二三十分話をして居る間に、何となく座を立つのが名殘惜しい氣が濃くなつて來るのを感じ始めたのは、やはり十月になつてからだつたと思ひます。さうです、或日突然うすら寒い日が來たので、叔母が、
『水沼さんに火鉢を上げなければいけないね。煙草盆だけでは、もう寒いから』そんな事を云ひながら、棚から火鉢をおろして、自分でそれを二階にはこんで行きました。その晩、英語を習ふ時間に、私は自分とあの人との間に、火鉢が横たはつてゐるのを、妙になつかしく思つて、その上に自分の手をかざすと、それと向き合つて、あの人の手がかざされてゐるので、心ひそかに、二人の手を見較べた事を覺えてゐます。あの人の手は細くて、皮膚が滑かで、うす青い血管が、氣味の悪い程太くふくれて表れてゐました。
『こんな風に血管が、ふつくりふくれるのは心臟が弱い證據なんです』さうあの人は云つた事がありました。あの人は炭を熾すのが非常に下手でした。それで始終氣をつけてゐないと、直ぐに消してしまひました。そのくせ妙に火箸をいぢるのが好きと見えて、私がいくら折角うまく熾るやうにして置いても、直ぐに消してしまふのでした。――けれども、それは幾度となくあの人の部屋に行く口實を與へるので、私に取つては便利でした。
『水沼さん、火が熾つてゐますか？』私はさう云ひながら、二階に上つて行くのです。食膳を持つて行く時と、夜英語を習ふ時との外は、あの人の部屋に上つて行くのが、何となく後めたいやうな氣がしてゐたからなのです。たとひ私が度々あの人の部屋に上つて行つたところで、叔母はあの人をも信じ、私をも亦信じてゐますので、決してそんな事を怪しむ筈がないといふ事が、私にはよく解つてゐたのですけれども、それでも私は何か口實がなければ、何とは知れず氣がとがめるやうな氣がしてなりませんでした。――その時分から、私のあの人に對する心持は、もうかなり強く進んでゐたのでした。
　それからもう一つ、私の心にその頃から初めて感ぜられて來た或氣持がありました。と云ふのは、私は殆んど知らず識らずの間に、叔母の前ばかりではなく、あの人の前でも、殊更に無邪氣に見せようと努めるやうになつてゐた事でした。――叔母には勿論、あの人にも、自分の心の底を見拔かれるのが恐ろしかつたのです。：：これが私の心に生じた一番最初の濁りであつたと云つても差支へないと思ひます。屹度かうした心の動き方は、人間と云ふものに取つて、必然なものなのだと今は思へますが、その時分には、半意識的に動いてゐるさういふ心持が、はつきり意識の面に浮んでは來なくとも、やはり半意識的に私を苦しめてゐたのでした。何故かと云ひますと、あの人の部屋から階下に降りて來た時とか、又はあの人の話が叔母との間に出た時とかは、私は平靜ではゐられませんでしたので、それを隱すために、心にもない小さな謊を云つたり、話題を轉じさせるために、今の自分には何の興味もないやうな事を喋り出したりしなければなりませんでしたから。
　水沼さんは好い人ですけれど、でも陰氣なところは厭ですわ』とか、『叔母さん、それはさうと、今日あたしの針をお使ひになつて？』とか。
　何も知らない叔母は、『いくら陰氣でも、何よりも深切でおとなしいのがいい』と云つて、あの人のために辯解したり、『いや、使はないよ。失くなつたんぢやないかい？　そこらに落ちてゐると針はほんたうにあぶないからね』さう云つて、落ちてゐない針を探すために、疊の上をすかして見ながら、手さぐりなどをしたりしました。

さう云ふ時、私は顔が火照つて、自分の心持が何とも云はれず苦しく恥しいものに感ぜられました。

ある晩、やはり英語の済んだ後で、話をしてゐる中に、あの人は急に眞顔になつて、多少羞ひを含みながら、

『よし子さんはまだ無邪氣ですから、戀といふものをほんたうに考へた事はないでせうね?』

と云ひ出しました。

私は全身の血が全部頭に上つてしまつたやうな氣がして、氣が遠くなるほど胸が波打ちました。けれども、あの人は私が吃驚したのとは、全然違つた事を話さうとしてゐたのでした。

『一般の人が持つてゐるやうな不眞面目な概念からはなれて、さう云ふものを眞面目に考へる事が、あなたには出來さうです』からあの人は云ひながら、机の抽斗から、一册のノオトを取出しました。「これは僕の昨年の日記なんですよ。その頃僕はある婦人を戀してゐました。今は別れてしまつた、と云ふよりも、その婦人の方で僕を捨てて、他の男へ走つてしまひましたが、併し僕はその人に今でも或好意を持つてゐます。昔のやうな熱情ではなく、それと全然違つた或好意なのです。……僕はあの人の事を考へる度に、今でも幸福であれかしと祈らずにはゐられません』

それが如何にも穏かな、おちついた、淀みない滑かな聲でしたので、私はあの人の眼をぢつと見つめたほど、その言葉に惹きつけられました。

あの人は『少し讀んでもよござんすか?』と私に斷つて、その日記のところどころを讀んだり、又その日記から思ひ出したやうに、その頃の話をぽつりぽつりしたりしました。日記の文句そのままには、今は記憶してゐませんが、それは大變美しい文でした。そして大變熱情的でしたが、併し相手の女の變心して行く經路を書いてあるところでも、女に對する恨は一言も述べてありませんでした。憤つてゐるやうなところもありませんでした。女が他の男に走る前、あの人の前で、他の男を愛してゐるといふ事を告白するところでも、「彼女の氣持は私にはよく理解出來る」そんな言葉をさへあの人は使つてゐます。けれども憤と恨との言葉が一言もない代りに、そこには何とも云はれぬ淋しみと悲しみとがありました。そしてその淋しみ悲しみを、ぢつと噛みしめて味つてゐるやうな一種のおちつきの熱情を持つてゐました。

その女と云ふのは、やはり文學に志を持つてゐる人で、あの人の日記の中では、そんな風には書かれてゐませんでしたけれども、後になつて他の人から聞いた話によると、かなり心の變り易い女だつたらしいのです。それを話して呉れた人は、水沼の友人で、やはり文學志望の青年でしたが、『あれはコクェトです』こんな事を云ひました。『コクェティッシュなところが、又あの水沼を惹きつける所以となつたのでせう。水沼は妙に自分の性格とは反對の女に惹きつけられる男ですからね——』その最後の言葉は、或はさうかも知れないと云ふ事を、後になつて私に思ひ當らせた時がありましたが、今はそれを話す時ではありません。……

小娘のセンチメンタリズムが手傳つてゐた事は、今から思へば爭へませんが、私はあの人がその日記を讀んでゐるのを聞いてゐる中に、涙が眼から溢れて來ました。私はしくりしくり啜り上げました。——あの人は讀むのを止めて、私を見てゐたやうでしたが、別段何も云ひませんでした。そしてそれきりもう讀みつづけませんでした。

その時あの人が何のためにそれを私に讀んで聞かせたものか、はつきりした處は未だに私

に解りませんが、併し私は、あの人が或成心があつてさう云ふ事をしたとは、決して解釋したくありません。さう云ふものを讀む事によつて、小娘の私の心を惹きつけようとするやうな、さう云ふ種類の不眞面目な事は斷じてあの人に限つてないと思ひます。あの人は何と云つても大變弱い人でした。そして弱い人であるために、淋しさに堪へられずに、私のやうなものにまで、さうした昔の思ひ出を話す事によつて、何等かの慰めをみづから感じたいと思つたに違ひありません。――私はさう云ふ風に解釋したいと思ひます。

けれども、その話が、その時の私の心に與へた影響は、かなり強いものでした。私は寢床に入つてからも、それについて考へました。私はあの人の過去のさうした事件に對して、嫉妬らしいものは少しも感じませんでした。唯あの人が氣の毒になりました。あんな優しい、あんな深切な人を、どうして捨てたかと思ふと、相手の女の氣持が解らなくなつて、その女が憎らしくさへも感ぜられました。その頃眠られないやうな事のなかつた私が、その晩は時計が一時を打つまで、眼を覺ましてゐました。いろいろな事が頭の中に浮んで來ました。嘗て考へなかつたやうな事まで浮んで來ました。私は何度となく涙を浮べて、枕を濡らしましたが、併しそれはあの人の過去の不幸に對する同情のためばかりではありませんでした。私はそれに關聯して自分の事について考へました。悲しみからではない、唯妙な昂奮から胸が迫つて、涙が止度なく流れました。

その後もあの人はよくその女の事を口にしました。『久野さんは多少ヒステリイはありましたが、併し人間としては正直な人でした』と云ふやうに、その女の人を名で呼ばずに、姓で呼んで、そしてそれに敬稱の『さん』をつけてゐました。――これはあの人の趣味であつたに違ひありません。後に至つて私の場合にも、よし子と云ふ名を呼び慣れてゐるために、改めて私の姓を呼びはしませんでしたけれども、敬稱の『さん』だけはいつになつてもつけてゐました。私が『よし子』と呼び捨てにして下さいと賴んでも、承知して吳れませんでした。それと同じに『お前』とは云はずに、『あなた』と云ひました。言葉も最後まで、初めと同樣に『あります』言葉を使ひました。……

『そんなに思つていらつしやるのに、何故あなたは久野さんとお別れになつたのです？』とある時私が訊きますと、

『併し久野さんが心から他の人を思つた場合には、仕方がありますまい。いくらどうしようとしても人間のほんたうの感情は變へる事は出來ませんからね』とあの人は淋しく頰笑みました。

『それにしても、それでは餘りぢやあございませんか。向うの男の人も男の人ですわ――』

『併し僕はそれでいいのです。さうなつた以上は、もう爭つたり談判したりする事が僕は嫌ひなのです。……總て荒々しい事とか醜い事とか、さう云ふものに入つて行く事は、僕の性格がゆるしませんからね』

併し何かにつけて、あの人がその『久野さん』と云ふ女の事を口にするのが、いつか私には平氣でゐられなくなつて來ました。さうです、たしかに嫉妬でした。私は嫉妬を感じ始めたのでした。そしてその嫉妬から來る苦しみが強くなつて來た時、私はもうほんたうにあの人に戀してしまつてゐたのでした。

あの人を捨てた『久野さん』、浮氣な殘酷な『久野さん』――私はその女に代つて、あの人を何處までも慰めようと決心しました。いえ、それは餘りに小娘らしい云ひ方です。その時分に、そ

んな風に考へる事を私自身好んでゐたので、自分の身を犠牲にして、あの人を慰めてやる、と云つたやうなところに、非常に美しい詩を空想してゐたのでした。けれども、ほんたうは、あの人を此方から慰めて上げると云ふよりも、私があの人から慰められたいと思ふ心の方が強かつたのでした。あの人に對して抱いてゐる自分の感情に向つて、あの人からも同じ感情の酬いを得たいと思つてゐたのでした。

今の基督教の教會のやり方には贊成が出來ないが、併しあの讃美歌が聞かれるために、時々日曜日に教會に出かけて行くと云つてゐたあの人は、ほんたうに唱歌が好きでした。あの人は多少喉にいりつく神經的なところはありますが、それでも如何にも細い、い、かんの好い聲を持つてゐました。叔母や私と馴染むにつけ、あの人は遠慮がなくなつたと見えて、よく大きな聲で讃美歌を歌ひました。『よし子さん、歌を歌ひませんか?』そんな事を云つて、あの人は私にいろいろな讃美歌を教へて、そして一緒に歌ひました。――若い娘と一緒に讃美歌を歌ふ、それが唯それだけの意味で、あの人には美しくも愉快にも思はれたらしいのです。『洗禮を受けるのは厭ですが、僕に日曜學校の先生をさせたら、それやうまく子供達を喜ばせてやりますがね』さう云つた事がありましたが、それは全くさうだらうと思ひます。あの人の趣味は確にそれに適當してゐました。あの人は貴族的――物質的に贅澤をすると云ふ意味ではない意味の――でした。凡庸、通俗、それがあの人の趣味に一番背いたものでした。

クリスマスの晩は、大變寒いけれども、よく霽れた晩でした。あの人は自分の知人がB――といふ東京でかなり有名な教會にゐるから、その人を訪ねて、B――教會のクリスマスを見せて貰はうと私を誘ひました。私達二人は初めて一緒に外に出ました。あの人と肩を並べて歩いた事が、電車内で一緒に並んで腰かけた事が、私はどんなに嬉しかつたでせう。けれども、悪い事には、あの人の訪ねたその知人が、その夜は風邪を引いたとかで、その教會に來てゐませんでした。髪の毛を綺麗に分けた、紺の背廣の胸に花を插した男の人が、代りに出て來て、『何の御用ですか?』と訊きました。けれども、若しクリスマスを見せて下さいと云つたならば、その人は屹度直ぐ承知して呉れたに違ひないにも拘らず、あの人はその人に向つてさう云ふ事を頼みませんでした。さう云ふのがあの人の性質だつたのです。私達二人はB――教會の門を出て、それから銀座に行きました。クリスマスと歳末とで銀座は随分賑つてゐました。あるカッフェで珈琲を飲んで、それから歸つて來ました。

その時でした。築土八幡前で電車を降りて、それからうちの方へ歸つて行く途中は、かなり淋しい町でした。クリスマスは見られないでも、それでも一緒に銀座を歩いた事が嬉しかつたので、私はかなり快活に昂奮してゐました。すると築土八幡の裏手の一寸坂を上つてそれから直ぐ右手に東五軒町の方へ降りるあの暗い細い路です――普通ならば、廣い明るい通の方を通つて歸るべきが當然ですのに、その時はどうしたものか、別段申し合せたわけでもないのに、二人の足が自然とその暗い細い路の方へ向つてゐたのでした。――そこまで來ると、妙に『その時が來た』と云ふやうな豫覺が、私の胸に感ぜられました。

二人は默つて歩いてゐましたが、急にあの人が、

『よし子さんは、ほんたうに素直で可愛いのね。僕は妹のやうな氣がしますよ』と云ひました。それは何氣ないと云ふ風でした。が、私の耳に

はさうは聞えませんでした。後であの人が私に取つた態度から考へると、ほんたうにあの人には、それがその時何氣なく口から出たのかも知れませんけれど。

何と云ふ大膽な力が私にあつたものでせう。後から何ものかに押し進まされでもするやうに、私は殆んど自分でも無意識のうちにあの人の手に取り縋つたのです。『妹ぢや厭』と私は小聲で云つたのです。私は嬉しいと云ふよりも、何だか自分があの人の手でやつと自分を支へてゐる、小つぽけな、みじめな、か弱いものに思はれました。私は泣きました。泣きながら自分の身體の震へてゐるのを覺えました。……

その時、私は夢中でしたので、あの人の樣子を一々注意して見る餘裕はありませんでしたけれども、それでもあの人がその時私の感情に向つて、滿足を與へる答へ方と態度とを取つて呉れました事だけはしつかりと覺えてゐます。――それをあの人は、後になつて、自分は魔がさしたのだ、と云ひました。私にはそれがよく解りません。あの人は自分の頭にいつものあの霧がかかつたのだと云ひました。自分の頭の支配を失つたのだと云ひました。けれども、私には解りません。あの人の性格の底にある或弱いところは、私にはよく解ります。けれども、その性格の弱さばかりから、あの人がその時のあたしを拒ねつける事が出來なかつたのだ、と云ふ風に解釋する事は、私に取つてあまりに殘酷です。……私には解りません。

その證據には、私は二人の戀にそれ以上を望みもしませんでしたし、望む氣さへもありませんでしたのに、それをあの人が望み始めたではありませんか。私は自分はあの人を愛してゐる、あの人も亦自分を愛して呉れてゐる、さう思ふだけで、すつかり滿足してしまつてゐるのに、あの人はそれでは滿足しなかつたではありませんか。――それをみんなあの人は、後になつて私に、『それはみんな僕の頭にかかつて來たあの霧のためなのです。僕の良心がその霧のために隱されてしまつたのです。――何と云つてあなたにお詫びしていいか解りません』かう云つたのです。

あの人が私の滿足してゐるだけの事では滿足しないで、それ以上の恐ろしい事――ほんたうに、ほんたうに恐ろしい事ですわ――を望んだ時、私はどんなに許しを乞うたでせう。するとあの人は大變不機嫌な陰氣な顏をしました。私はあの人を怒らせたのかと思つて、どうしたらいいかとほんたうにはらはらしました。あの人の眼はすつかり濁つて、妙に動物的に光つてゐました。――私は二日二晩考へました。そしてあの人の滿足と思ふところのものを知るより外ないと決心しました。――私はその時泣いたのです。

それがみんなあの人の頭の『霧』のためだと云ふのです。――私にはそれがよく解りません。さういふ事が、あり得るものかどうか、それが私には解りません。……

四

それは兎も角、その翌年の正月、二月と、私は夢のやうに暮しました。何と云つても初めての經驗ではありましたし、私は唯あの人の事ばかりを考へて、毎日々々を過してゐました。あの人は前よりも一層機嫌の惡い、陰氣な顏をしたり、妙に腹立たしさうに苛々したりしてゐる事が多くなりました。……でも、機嫌の惡さ、陰氣さ、腹立たしい苛々しさが、どういふところから來るのかと云ふ事については、その頃の私には深く考へられませんでした。あの人の頭の加減だらう、と唯さう思つてゐました。あの人の頭の『加減』――それを私はどんなに悲し

み、どんなに心配したでせう。あの人と話してゐる時、急にあの人は右の手の指で、眉間のところを、さも苦しくて堪らなさうに押します。あの人が眉をひそめると、私も、それがまるで自分自身が苦しいやうに感ぜられて、やつぱり眉をひそめるのでした。

「手術の出來ない蓄膿症」と云ふ言葉が、私の頭をも絶えず痛めました。――私はあの人を出來るだけ慰めて上げようと思つて、『頭をもみませうか?』と心配して云ふと、『いえ、それには及びません』とあの人は答へるのでした。

さう云ふ氣分の惡い時のあの人には、なるたけ氣に觸るやうな事はしないやうにと、私はそればかりを注意してゐました。

……けれども、その時分のあの人のその不機嫌さは、後から思へば、さう云ふ生理的の病患からばかり來たのではなかつたのでした。……

そこに突然、私に取つて、恐ろしい出來事が起つたのでした。と云ふのは、三月になつて、空が何處か春らしく青みを帶びて、梅の花がぽつりぽつり綻び初めた時分、私は自分の身體に變化が初まつたのを氣がついたのです。……私はその時までは、そんな事は夢にも思つて見た事はありませんでした。そんな結果について、少しの危惧を抱いた事さへありませんでした。ほんたうに、私は子供らしかつたのでした。

ですから、私は吃驚してしまひました。どうしたらいいだらう、と思つて、ひとりで苦しんでゐました。その月だけ身體がどうかしてゐるのかも知れない、强ひてさう思つて、心持をおちつけてゐると、四月になつても、やつぱりもと通りになりませんでした。あの人に打明けようと云ふ心持は、なかなか起つて來ませんでした。私はさう云ふ事の書いてある本を、恥しい思をしながら、縁日でひとりで買つて來ました。よくそんな風にして買へる大膽さが出たものだと思ひますが、何しろその時は一生懸命だつたものですから、自分を顧みてゐる遑はなかつたのでした。……讀めば讀むほどその本は恐ろしい本でした。そしてその中に書いてある恐ろしいいろいろな兆候と、自分の身體の工合とを照らし合はせて考へて見ると、そつくりそのまま當てはまるところと、又さうではないと思はれるところとがありました。私はもう到底駄目だと思つたり、又或はさうでないのかも知れないと强ひて自分に説いたりするやうな半信半疑の氣持に、毎日苦しめられてゐました。

ところが、或朝、起きると胸がむかむかとして、今まで一度も覺えた事がないやうな、何とも云はれない心持の惡さを覺えました。私は堪らなくなつて、はばかりに駈け込むと、ゲエッと云つて嘔しました。

かうなつては、もう疑ふ餘地は少しもありませんでした。私は煩悶しました。もう今更どうする事も出來ないと思ふと、悲しさ苦しさが、一時に胸に込み上げて來ました。何よりもさしづめ、叔母さんに知られるのを恐ろしいと思ひました。まだ子供を産んだ事のない叔母は、比較的から云ふ事に敏感ではありませんでしたが、それでもやがて近い中に知られずには濟みますまい。そして名古屋の兄――あの名古屋の兄に知れたら、ほんたうにどうしたらいいでせう?――世間に知れたら、どんなに笑はれて見つともないでせう? 學校時分のお友達の顏なども眼の前に浮んで來ました。若い娘が子供を産んで、それからいろいろな惡い事をしたと云ふのを、嘗て新聞で讀んだ事がありましたが、それも浮んで來ました。自分が今さう云ふ身の上になつたのかと思ふと、まるで夢のやうな淺ましい氣がしました。――私は往來で、晴々として、何の曇りもない、自由さうな他所の若い女の歩いてゐるのを見ると、ほんたうに悲しくなりまし

た。自分にはもうああ云ふやうな無邪氣に歸れないのかと思ふと、不思議なやうな悲しい悲しい氣がして・・・いえ、悲しいのだか苦しいのだか、世の中が暗くなつたやうな氣がして、苦い苦い涙がぼろぼろと眼から溢れて來ました。

さうなつても、その事をあの人に打明ける事がなかなか出來ませんでした。話さう話さうと思ひながらも、あの人の顏を見ると、ついそんな事が云へなくなつてしまふのでした。――けれども、心の底では、私はかう信じてゐました。若しその事を打明ければ、あの人は屹度何とかして呉れるに違ひない、と。あの人は學問もありますし、高尙な心持を持つてゐて、おちついてゐますし、それに私よりも年が六つも上――あの人は二十四でした――なのですから、前以てかうなる事はちやんと覺悟してゐるに違ひありません。ですから、私が打明けさへすれば、あの人は私がひとりでくよくよ大袈裟に心配してゐたのを笑つて、『何もそんなに心配する事はありません、みんな僕が知つてゐます』かう云つて呉れるに違ひない、と。――かう思ふのは、いかにも小娘らしい考ですけれども、併し私は全くあの人ばかりが頼りだつたのですから、かう信じないでは堪らなかつたのでした。

そこで、或晩、あの人の割合に機嫌のいい時を選んで、たうとう思ひ切つて、その事を打明けました。私は自分が悲しい顏をしてゐて、あの人に笑はれるのは厭だつたものですから、態と笑顏を粧つて、何でもない事のやうに、

『あの・・・私・・・』かう云ふやうに始めました。

ところが、私が思つてゐたとは反對に、あの人は『えッ』と云つて、眼を瞠りました。そして私がぢつと見つめると、あの人は眼をそらしてしまひました。失望と苦痛との色が見る見る中に、その瞳に表れて來ました。絶望と云ふよりも、何となく狂氣じみたほどの暗い暗い色でした。私はそれを見ると、あの人の機嫌を直さうと思つて、『御免なさい』と云つたら、その自分の聲の餘りの心細さに、堪らなくなつて、聲が出さうになるのを、叔母に聞えてはいけないと思つて耐へながら、そこに泣伏してしまひました。

『それはいつからです？』とあの人は苦しさうな聲で訊きました。

『先月からですの』

『たしかですね。間違ひぢやありませんね？』

『ええ、どうもさうだと思ひますわ』私はさう答へて、泣きながら、總ての兆候を殘らず話しました。

机の上に肘をつきながら、あの人は暫く默つてゐましたが、『ああ、困つたな』と呟いて溜息しました。そして眼をつむりました。瞼がピクリピクリと動くのを見て、あの人の心がどんなに苦しんでゐるかを想像すると、私は自分の事よりも、あの人が氣の毒で堪らないやうな氣にもなつて來ました。

『どうしたらいいでせうね？』と私がいくら訊いても返事をしませんでした。私はあの人の態度ひとつで、どうにでもなるのだと思つて、はらはらしながら、その答を待つてゐると、あの人はそれに直接には答へないで、

『やつぱり僕が弱かつたのだ』とひとり語のやうに、口の中で呟きました。

『あなたが弱かつたつて、何がですの？』私がその意味が解りませんでしたので、かう訊き返すと、

『いや、併しそれは云ふ必要はありません。あなたにはほんたうにお氣の毒な事をしました』と如何にも私を憐むやうな、悲しげな、優しい眼附をして、云ひました。

『だつて、それはお互ですもの。あたしに氣の

毒だなんてそんな……』と云ひかけると、あの人は又眼をそらして、そのまま默つてしまひました。そして暫くしてから、

『よく考へて見ます。よし子さんは安心していらつしやい』と云ひました。私はあの人の手をしつかり握つて、いろいろ云ひたい事を云はないで、泣きました。

『どんな事でも僕の云ふ事は諾いて呉れますか？』

『ええ、どんな事でも』

『それでは僕も考へてる事があります。明後日まで待つて下さい』あの人は最後にきつぱりかう云ひました。私は幾分輕くなつたやうな氣持で梯子を降りました。

約束のその翌々日は、あの人は例の商店に英語を敎へに行く出がけに、

『今晩九時頃、六曲の側まで來て下さい』と私に云ひました。

私は云はれた時間に、約束の場所に行つて見ますと、あの人はもうそこに來てゐて、橋の向う側──小石川の側──の電車道の側に、しよんぼり立つてゐました。あの人はそれ程身長が高くはないのですけれど、大變痩せてゐるので、すらりと云ふよりも、ひよろひよろに見えました。鳥打帽子をかぶつて、薄暗い電燈の光の下に、俯向きながら佇んでゐる姿を見ると、妙に不吉な感じに見えました。まるで自殺でもしさうな人、そんな感じがしてぞつとしました。

私達は電車の通らない側の江戸川緣に沿うて歩き出しました。まだ八重櫻が二三分は殘つてゐる時分なので、賑かといふ程ではありませんでしたが、かなり人出があつたので、細い横町を目つけて、裏通の方へ入つて行きました。

『どんな事でも僕の云ふ事を諾いて呉れますね』と先夜も云つた言葉を、念を押すやうにあの人は云ひました。私は『ええ』とはつきり答へました。

あの人はそれから暫く歩いて行つてから、

『それでは』と云つて、袂の中から藥の包を取出して、それを私に渡しながら、『これを飮んで下さい』

私はそれを開いて見ると、中に焦茶色をした小さな丸藥が、五六粒入つてゐました。私はその藥を見て、それからあの人の顏を見ると、默つて、身體を固くして、ぶるぶる震へながら、俯向いてゐました。

『あつ』と私は思はず聲を出しました。その藥が何かと云ふ事が、電のやうに私の頭に閃いたのでした。──私はその時の事を今でも忘れられません。そんな恐ろしい事は考へても見なかつたのでした。あの人が、優しい、おとなしい、何も彼も知つてゐるあの人が、そんな恐ろしい事を云ひ出さうなんて、夢にも思ひ及びませんでした。……それでは一昨日の晩、あの人が『僕も考へてる事があります』と云つたのは、それでは此事だつたのか！

私は、

『そんな事は厭です、私には出來ません！』と身を悶えて、往來なのも忘れて、狂氣のやうに泣叫びました。私はあの人が憎らしくなりました。こんな恐ろしい事をよくも考へついたものだと思ひました。もう何を云つても聞きませんでした。『厭だ、厭だ！』と首を振つて泣きつゞけました。

あの人はどぎまぎして、聯絡の取れない言葉を震へ聲で云つてゐました。『僕の云ふ事を一應聞いて下さい』とか、『僕は二人を一層の不幸に導くよりもその方が……と思つたんです』とか、『それについては、あなたに向つて、今僕は告白しなければならない』とか、そんなやうな事を取留めもなく云つてゐました。──若しその時、私の心に今少し餘裕があつて、あの人の書

葉をよくおちついて聞く事が出來たならば、後になつて知つたあの人の心持を、その時既に知る事が出來たのですけれども、そしてその時知れば、私に何か他の考へ方があつたのでせうけれども、私はもうまるで夢中でした。

『あなたは卑怯な方ですわ、あなたは卑怯な方ですわ！』と私は口惜しまぎれに叫びつづけました。そしてあの人が、さう叫ぶ私を押へようとして、手を取つた時、私はそれを振拂つて、そして往來を一生懸命に駈け出しました。

私は往來を駈けながら、もう二度とあの人に會ふまい、もうその云ふ言葉を聞くまいと思ひました。『死んでしまはう、死んでしまはう！』と心の中で叫びました。駈けて行く中に、涙がだらだらと頰を傳はつて來て、口の中に流れ込んで、鹽つぽい味がしました。道行く人がこんな風に駈けて行くのを見たら、嘲笑ふだらうと思ひましたが、見つともない位の事は何でもないと思ひました。

私は裏通を通つて、石切橋に出て、そこから又裏通の賑かな通を通つて、そして久世山に上らうとした時、心臟が餘りにはげしく波打つて苦しくなつたので、駈けるのを止めました。子供の時に、何かが口惜しくて、やつぱりこんな風に夜の町を泣きながら駈け出した事が一度あつたやうな氣がしましたが、それがどんな事柄のためだつたかは思ひ出せませんでした。

あの人が後から追つて來ました。そして私がまだ丘の頂上まで登らないうちに、私に追ひつきました。振拂はうとするのを、獅嚙みつくやうに私の手を取つて、自分が惡かつた、自分の考が足りなかつた、併し自分は非常に苦しんでゐるのだ、どうか許して呉れ、かう云つて懇願しました。

『實際僕らしくないやり方でした。すべての責任を僕が引受けますから堪忍して下さい！』と殆んど涙聲で云ひました。

そこで、結局私はあの人をゆるしてしまつたのです。何故かと云ふと、あの人が氣の毒に思へてならなかつたからです。……何と云つても、私はあの人をやつぱり心から愛してゐたのですもの。……

五

それから五日して、私は置手紙をして、あの人と一緒に無斷で家を出て、代々木に小さな家を一軒借りました。總ての事を叔母に打明けるのは、私には到底堪らない事でしたし、それにあの人も、頭が少しおちつきを恢復して來るまでは、出來得る限り身を隱してゐたいと云ふ考を持つてゐたからでした。それでも、何處をどう探したものか、一週間ほどすると、叔母が私達の住居に訪ねて來ました。『さう云ふ事だつたなら、何故私に打明けて呉れなかつたのです？』と叔母はあの人に向つて、こんな風に詰りました。あの人は言葉少なに、唯その無禮を叔母に謝してゐました。歸りに叔母は私を外に呼び出して、自分のところにお歸りと云ひました。平生あの人を氣に入つてゐた叔母も、今はもうあの人の事をよくは云ひませんでした。何處で聞いたものか、

『前にも女があつたのださうぢやないか』などと『久野さん』の事を云ひました。『それに屹度肺病の筋だよ。あの顏色つてはないもの』こんな事も云ひました。あの人の事を惡く云はれるのは好い氣持がしませんでしたけれども、叔母の私を思つて呉れる情は、ほんたうに優しいものでした。けれども私は、

『叔母さんにはまことに申譯ありませんでしたけれども、此事ばかりはどうか私の我儘を通させて下さい！』と涙を流して、飽くまで強情を張り通しました。

「――それではお前の勝手におし。どんな事があつてもう私は知らないから」と叔母は、たうとう云ひ殘して、歸つて行きました。私は終にあの深切な叔母を怒らせてしまつたのでした。……その後私は一度も叔母に會ひません。……

叔母が知らせたと見えて、兄から手紙が來た時には、私は泣きました。兄は優しい調子で不心得を責めて來ました。もとより私が懷姙してゐると云ふ事などは知らないのですから、「後一年經てば自分の方へ引取るやうにするから、それまで叔母さんの方へ歸つておいで」と書いてありました。私はその手紙を抱いて、殆んど終日泣いてゐました。けれども、その兄の手紙に、たうとう私は返事を出しませんでした。出さうとするにも何と書いていいか、解りませんでした。その後又兄は同じやうな手紙を寄越しました。私はあの人が大變好い人である事、自分をよく愛して呉れる事、ですからどうか自分の我儘を通させて下さいと云ふ事、そんな事を兄に書いてやりました。……それきり兄も亦手紙を寄越さなくなつてしまひました。手の附けられない墮落娘――そんな事を叔母さんが兄に云つてやつたのではないかと思ひます。

でも、私達は決して幸福ではなかつたのでした。あの人は毎日々々、益々陰氣になり、益々打沈んで行くばかりでした。それを心配して、「御氣分がお惡いのですか？」と私が訊きますと、

『いや、何でもありません、どうか捨てといて下さい』とあの人は、さも煩ささうに横を向いて眉をひそめました。

あの人の趣味と云ふやうな事を私はいろいろ考へて、私は庭――粗い竹垣根で取卷かれた三坪ほどの庭――に草花を植ゑました。あの人が喜んで手傳ふだらうと思つてゐましたのに、手傳ふどころか、笑顏ひとつ見せて呉れませんでした。もうあの人は讃美歌も歌ひませんでした。私の考へてゐた事はみんな違ひました。代々木の郊外の晩春の景色を見ながら、あの人は散歩にひとつ私を連れて行かうとしないのです。

私はひとりでよく泣きました。すると、あの人は、

『どうか陰氣な顏はしないやうにして下さい』と自分の陰氣は棚に上げて、こんな叱言を云ひました。それだから私は今度は機嫌を取るやうににこにこ笑つて、慰めようとしますと、『あなたは人間の苦しみと云ふ事について考へた事がありますか、よくそんなにげらげら笑つてゐられますね？』そんな事を云つて、不機嫌な顏をしますの。どうしていいか私には解りませんでした。

そればかりでなく、その頃になつて、あの人は眼に立つて身體が惡くなつて來るやうでした。氣がいらいらして、一寸した事にも直ぐ癇癪を起しました。あの人は粗暴な言葉を吐く事などは、めつたになかつた人でしたが、それが、近頃は隨分荒い調子で物を云ひました。それでも例の英語を教へに行く商店にだけは、毎夜行つてゐました。けれども歸つて來ると、さも疲れたやうな凹んだ、暗つぽい眼附をして、そのままぐつたり疊の上に仰向けになりながら、

「ああ、厭だ」と深い溜息などをしました。夜も眠れない事が多いやうでした。

『よし子さん、僕はこんなに痩せました』そんな事を云つて、腕を出して、たるんでゐる皮膚を抓み上げながら、淋しく頬笑む事がありました。全くその皮膚は若い人のものとは思はれない程彈力がありませんでした。――併し私は益々あの人を愛する氣持が強くなつて來ましたので、何とかして慰めて上げなければならない

と、それぱかりを始終考へてゐました。
或日、私は私達の生活が、どうして幸福に行かないのでせう、とあの人に向つて云つた事がありました。
『どうかして幸福に行くやうに出來ないものでせうか？』から云ひました。
するとあの人は默つて眼をねむつてゐましたが、非常に冷笑的な、と云ふよりも寧ろ意地の惡い微笑を浮べて、
『恐らく、それは駄目でせう！』と云ひました。
何と云ふ恐ろしいものの云ひ方でせう？　私はさう聞くと、もう直ぐ涙ぐまれて來ました。
『何故、駄目ですの、何故駄目ですの？』
あの人は再び眼をつぶつて、瞼をぴくりぴくりさせてゐましたが、やがて又眼を開いた時には、前のやうな冷笑的な意地の惡い色はすつかり消えて、その代りに、妙に改まつた、何處か恥しげな、そして非常に苦しげな色が浮んでゐました。
『よし子さん、僕はあなたに告白しなければならない事があるのです』と昂奮した聲で云ひ始めました。『僕はあなたにあやまらなければならない事があるんです。僕をゆるして呉れますか？』
『それは何の事ですの？……急にそんな事被仰つて……』と私は吃驚してさう云ふと、あの人は悲しげな眼附で、ぢつと私を見つめました。が、やがて、眼を伏せて、瞬きをしました。あの人は泣きさうになつてゐるのでした。
『僕は此事は云ふまいと思つてゐました。云はないで濟むやうになると思つてゐました。けれども、僕はいくら努力しても、自分の心が自分の自由にならないのです。此まゝあなたを欺いてゐるのはあんまり苦しいものですから、やつぱり云つてしまつて、あなたの許しを乞はなければならないと思ひます。……僕はそのために毎日々々苦しんでゐるのです。あなたが姙娠されたと聞いてからは、一層その苦しみが強くなつて來たのです。――僕がいつぞやあなたに恐ろしい事を勸めた氣持もそこから來てゐるのです』
『まあ、どうなさいましたの、そんなに……』と私はおろおろして訊きました。
『僕は……』とあの人は云ひかけて、暫く云ひ難さうに澁つてゐましたが、『それではここを讀んで見て下さい』と決心したやうに、机の抽斗からノオトを出して、その中を開いて、私に見せました。――それはあの人の日記で、開かれたところは、あのクリスマスの晩のところでした。
『自分はY（これは云ふまでもなく、私の名の頭文字を取つたのでした。を嫌ひではない。Yは可憐な少女である。彼女によつて、自分は隨分淋しさを慰められてゐる。自分は彼女を好きである。けれども、自分は嘗て彼女に戀愛的の感情を感じた事は一度もない。――それだのに、自分はどうしてあゝ云ふ事をしたか。どう考へても、自分にはそれの辯解がつかない。K（これは例の『久野さん』の頭文字を取つたのでした。）が殘して行つた自分の傷跡の痛みのためか。自分はまだKを愛してゐる。そして自分の忌み嫌ふ人々のやるやうに自分もやつぱりあれでなければこれと云つた風に、Kに去られたために、直ぐその不足をYによつて充たさうとする氣持が、暗默の間に心の底に動いてゐたのであらうか。――今日は自分は頭も惡い。意志の力の衰退をしきりに感ずる。――自分は今どうしていいか解らない。嘗てない自己嫌惡を感ずる。こんな道理に合はない事の中に、自分を投げ込んだ事は今までに覺えがない。自分の

平生から摑んでゐたものは、瓦礫にもひとしい薄弱なものだつた事をまざまざと見せつけられたのだ。――併し何よりも絶望に身をまかせてはいけない。自分はまだ意志の力を信じてゐる。――』

あの人は默つて、その二ペエジ後を指さしました。それはそれから四五日後の日記でした。

『自分はまるで自分を失つてしまつたやうだ。自分の心の中は何と云ふみじめな亂れ方だ。Yに對して愛的感情の湧かない自分が、却つて、あべこべに不思議な恐ろしい力によつて、益々Yを追窮しなければゐられないやうな心にさせられる。――抵抗出來ない或暴力のやうな強い力だ。――今日も頭が惡い。めまひを度々感ずる。意志の力がまるでなくなつてしまつたやうだ。こんな狀態がつづいては危險だ。どんな事になるか解らぬ……』

そしてその次の日には、

『Yは可憐な少女だ。自分の此二三日の態度に、彼女は實に苦しんでゐる。――彼女は心から自分を愛してゐる。一本氣な美しい處女の愛だ。――それに反して、自分の心は何と云ふ穢れ方だらう。自分はあの可憐なYをどうしようとするのだらう。自分は自分で自分を責め拔いてゐながら、Yが近づいて來ると、もう到底抵抗出來ないものが、全身から湧き起るのを感ずるのだ。――そのくせKの事が始終やつぱり頭にある。――自分のYに對して犯してゐる罪は恐ろしい……』

その翌日のところには、

『自分はたうとう惡魔になつた。清きものを自分の犧牲にしたのだ。……總ての事を明瞭に解つてゐながら、それでゐてそれが同じ結果を惹起すとは何と云ふ事だ。――からなつた上は、自分の努力は唯ひとつしかない。どうかしてYを愛さうとする事だ。Yに較べると、Kは較べ物にならない程輕薄で、眞實と云ふものを持つてゐない。それだのに、Kの事が忘れられない。――唯Yを愛さう、Yを愛さう。――その外に自分を救ふ道はない。――』

それを讀んでゐる中に、私の胸は、何ものかにめちやくちやに搔きむしられるやうに苦しくなつて來ました。初めはそこに書かれてゐる事が、餘りに意外で、餘りに殘酷でしたので、信じられない氣がしました。けれども、さう云はれれば、なるほど、あの人の態度には、今から考へて、思ひ當る節がいくらもありました。……けれども、今になつて、こんな事を知らせようとは！……

『どうか許して下さい』とあの人は、讀みかけたままそこに泣伏してしまつた私の肩に手をかけながら云ひました。『僕が惡かつたのです。總て僕が惡かつたのです。何から何まで僕の責任です。……併し、僕があなたをどんなに愛さうと努力したか、今でも努力してゐるかと云ふ事だけは信じて下さい！』

そして自分が如何に弱かつたかと云ふ事や、その頃の自分が始終頭の發作に惱まされてゐて、道德的の觀念の薄らいでゐた事や、さう云ふ事を取り亂した、聯絡のない言葉で語つては、一言每に私の許しを乞ひました。

『姙娠と聞いた時には、たうとう罰が來たと思ひました。けれども僕は尙一層の不幸に陷るよりは、まだしも……さう思つて、ああ云ふ恐ろしいたくらみをしたのでした』と大曲の晩の事をもあの人は辯解しました。……

私の心はあの人の言葉を聞いてゐる中に、自分でも不思議に思はれた程、一種のおちつきを覺えて來ました。――私は顏を上げて、涙を拭

いて、少し意地悪い氣持にさへなつて、
『それでは、あなたは何故かうして私と同棲してゐるのです？』と訊きました。
『自分の犯した間違ひに對する責任感から、どうしてもあなたと別れる譯には行かないと考へたのです。あなたを捨てるのはほんたうの人間のすべき道でないと考へたのです。――僕はさう思つてあなたと同棲したのです。――僕は又かう思ひました。今からでもあなたに對してほんたうの愛が起れば、僕は救はれる、と。ほんたうに僕は毎日々々それを努力してゐるんです。今でも努力してゐるんです』
『それでは、あなたは御自分を救ふために私と同棲なすつていらつしやるんですね？』私は自分でも自分の言葉が皮肉に過ぎたと思へた調子で云ひました。
『どうか堪忍して下さい！』さう云つた時のあの人の伏眼になつた、弱々しい顔は今でも私の眼に殘つてゐます。『さう云はれると、實際僕は苦しくて堪りません。――でも、僕はあなたを心からお氣の毒に思つてゐます。心からあなたに同情してゐます。あなたを愛さうと思つてゐます。けれども、どうしても愛が起らないんです、愛が…』
あの人が聲をはり上げて泣出したのを私は聞きました。すると、私はあの人の心持が自分にも理解出來るやうな氣がして來ました。私は腹は立ちました。あの人の勝手を憎みもしました。けれども、それにも拘らず、私はあの人に對して、同情しないではゐられませんでした。さう云ふやうな事に立到つた氣持が、自分にも解ると云ふやうな氣がしないではゐられませんでした。

兎に角、そんな場合になつても、あの人の態度は、たとひそれが手前勝手であるとしても、正直でした。眞實でした。譃はありませんでした。それが私の胸に強く感ぜられたのです。

けれども、私は悲しかつたのです。私はどうしていいか解りませんでした。ほんたうに私達のやうな不幸な者はないと思ひました。でも私はこれ以上あの人を苦しめないためには、自分がどうかなつてしまへばいいと思ひました。（かう思つた心の底には、又不思議な事には、あの人に對する復讐の氣持も混じてゐたのでした。）いつだつたか思つたやうに、自分は死んでしまはうと思ひました。で、私は袂で顔を隱して、立上りかけますと、あの人は私のそぶりを直ぐに覺つて、
『ああ、僕はそんなつもりで云つたのではありません。あなたと別れようなどと云つたのではありません。どうか誤解しないで下さい。今あなたと別れたつて、決して自分の苦痛が消えるものではないのです。――僕はいつまでもあなたに隱して置くのが惡いと思つたものですから、それで打明けたんです。併し僕はあなたが僕に捧げて呉れる愛に對しては、感謝してゐます。僕は決してあなたを嫌つてゐるんではありません。…僕はあなたを愛さう愛さうと努力してゐるんですよ。今でも、今後も、僕はどうかしてあなたを愛さうと努力しようと思つてゐるんですよ』
私はあの人の胸に顔を埋めて、默つて泣きました。あの人もそれきり默つてしまつて、啜り泣いてゐました。

六

その後私達は、兄妹のやうに、文字通りに兄妹のやうに生活しました。そしてそれが今までのやうな暗い疑惑に苦しめられないだけ、それだけ却つて私には晴々とした氣持を與へました。あの人の苦しんでゐた原因が解つたと云ふ事は、私には堪らない苦痛ではあつても、併し

し今までのやうにあてのつかない苦痛ではありませんでした。知らないよりも、いくら苦しくとも、やつぱり知つた方が心がおちつきます。――私はどうかしてあの人が自分を愛して呉れるやうになるやうに心に祈りました。自分の眞心で以て、あの人の心を屹度動かして見せる、さう思ひました。

　あの人はそれからは、努めて私に優しくして呉れました。暗い顔を見せまい見せまいと努力してゐるのがよく解りました。……けれども、やはり快活になつて呉れませんでした。そればかりでなく、幾ら外に示すまいとしても、あの人の心が、日に日に益々陰氣になつて行くのが、解りました。

　或晩、それはもう夏でした。夜の涼しい風が快かつたので、私は濡縁に出て涼みながら、あの人が出教授から歸つて來るのを待つてゐました。空は多少の濕氣を帶びながらも霽れてゐたので、星が輝いてゐました。星の光を見てゐると、いろいろの事が思ひ出されて、私は感傷的な氣持になりました。――私はあの人の日記を取出して、開いて見る氣になつたのです。私はそれまでは決して、あの人に默つてさう云ふ事をした事はなかつたのですけれども、それでもその時は、それが惡い事のやうに思はれませんでした。

　近頃のところを開いて眼を通しますと、こんな事が書いてありました。

『Yは自分をよく理解して呉れてゐる。Yの自分に持つて呉れる愛に對しては、自分は感謝の言葉がない。――併し自分の心も近頃は或程度までおちついた。自分はまだYに對して愛情が起つたとは云へない。併し愛情は起らなくとも、自分が自分の氣持の中に、彼女を包むだけのおちついた抱擁性を見出せるやうになれば、それでも自分のこはれかけた生活が、再び一つの統一されたものとならないとは限らない。Yはほんたうに哀れな女だ。そして自分よりも弱いものだ。戀愛でなくとも哀憐でいい。哀憐が彼女に對する自分の氣持を統一して呉れればいい。――さうだ、マリア・リルケが此氣持をよく知つてゐる。――此氣持は此人生で經驗しても、決して損にはならない氣持だと自分は思ふ。――何よりもおちつくのが肝要だ。そこから屹度或光が射して來るに違ひない。――併し頭はやはりよくない。その中に前額のは除れなくとも、上顎の痛だけでも除去しなければならない――』

『戀愛よりも哀憐――愛よりも憐み！』私は此言葉を口の中で呟き呟き、堪へられない心細さと淋しさとを感じて、ひとりでしくりしくり泣いてゐました。

　そこにあの人が歸つて來ました。私は涙を拭いて、玄關に出迎へると、あの人は、

『よし子さん、僕は寒くつて堪らない。まるで背中に氷でもついてゐるやうな氣がする――』

さう云ひながら、身體を縮めるやうにして上つて來ました。

『まあ、お寒いんですの？……どうなすつたんです、こんなに暑いのに？』さう云ひながら、あの人の手を取つて見ると、私は吃驚しました。手はまるで火のやうに熱があるのです。

　その時、私はどんなに悲しかつたでせう。あの人は、

なあに、風邪でせうから、寝てゐれば直ぐ癒ります』と云つて、途中で買つて來たアンチピリンを飲むと、そのまま直ぐ床に入りましたが、併し私には不吉な事ばかり考へられてなりませんでした。あの人が玄關から上つて寒い寒いと云つた時の恰好が、いつぞやの晩、大曲の電車通

に立つてゐた時のあの自殺でもしさうに思はれた恰好のやうに、何となく影が薄くしよんぼりと見えました。その他いろいろ不吉な事ばかりが頭に浮んで來ました。……そしてさうした私の不吉な豫感は、根のないものではありませんでした。あの人はその時寢たきり、たうとう起上る事が出來なかつたのですから……

　あの人と同郷で、中學時代に先輩だつたと云ふ若いS——醫學士が、診に來て吳れました。「右肺尖加答兒だ」と醫者は患者の前では云ひました。が、歸りに玄關のところで、私の耳にそつと口を寄せて『どうもかなり結核が進んでゐるやうです、昨日や今日起つたものではありません』と云ひました。叔母さんがあの人の事を肺病の筋だと云つたのも、滿更譃ではなかつたのでした。——私にはよくは解りませんが、檢痰をした結果、黴菌のゐた割合は、何でも大變多かつたと云ふ事でした。

『隱して吳れるのが一番いけません。さうならさうとちやんと打明けて貰はないと、却つて覺悟がきまらなくていけませんから』私があの人の病氣を隱さうとしても、あの人は直ぐ見拔いてしまつて、こんな風に問ひつめました。

『僕はまだ生きてゐたいと思ふ。今死ぬのは、何よりも一番厭です。自分のこはれた生活を取返したいと思ひます。——まだまだ僕には此世の中にする事があるやうな氣がする。こんな事を突然云ひ出して、非常に苛々するかと思ひますと、又、「いや、併し死ぬものなら仕方がない。厭だけれど、仕方がないから、あきらめなければなりません」と云つて眼をつぶつて、しづかに何か考へてゐる事もあります。

　熱を一日の中に何度もはかつて、それを枕許の紙に鉛筆でしるしては、「今日は昨日よりも少し高い」だの、「五分朝より低い、午後が朝より低いのは、却つて變調なんぢやないか知ら』だの、ひとり語のやうに呟いてゐました。——咳は割合に出ない方でしたが、聲の調子が非常に變つて、一體が咽にいりいりする聲でしたのが、一層いりいりして、耳の底に沁み入るやうな感じを與へました。

　私の額をぢつと見つめて、

『よし子さんには、ほんたうにお氣の毒でなりません。……あなたが今後どうなさるかと思ふと、それが……』そんな事を何度となく云ひました。そしてさういふ事を云ふのにも、その樣子が日によつて違ひ、又時によつて違ひました。或時には、眼に涙を浮べて、深い自責に充ちた聲で云ふかと思ふと、或時には又、妙に投げ出したやうに、『併し人は各々苦痛を背負つてゐるのです』かう附加へて、『單に自分ばかりではなく、他の何ものか——何か人力以上のものにも責任があるのだ』と云つた表情をしました。——

　併しさうして何も彼もが解らなくなつてしまふと、あの人は頭と心との混亂を包み切れずに顏に出しながらも、あわててそれを防止するやうに、「けれども、僕は人生を否定しようとは思はない。人生そのものが醜いとは決して思はない。さう思ふ事はあまりに僭越だ。間違つたのは、やつぱり僕自身であつて、人生そのものではないのです。人生は美しいのです。光つてゐるのです。僕はその階級を踏み外したのです——』こんな事を昂奮して云つて、そしてその昂奮が強くなつて來ると、掛蒲團の襟に顏を埋めながら、啜り泣き始めるのでした。

　感情をたかぶらせないやうにと、私はそればかりを注意してゐました。——私は全く自分の身の今後の成行きを考へると、心細さと淋しさと頼りなさとで、心がいつぱいでしたが、それでも、後の事は後の事として今は考へない事として、何よりも專心にあの人の看護をしようと決心してゐました。あの人が病氣になつて

から、私は却つて一層あの人に對する愛が強くなつたやうな氣がしました。

それから又秋田の田舍にゐられる父上の事をも、あの人は時々口にして、自分の病氣をどんなに心配してゐるだらうと云ひました。

『僕の親父は平凡な田舍の爺さんに過ぎないが、氣の毒な人です。あんまり善人なのでね、相當にあつた田地も、大概人手に渡してしまつたんですよ。――尤もこれは、僕がかなり長い間、學費を送らせた事も、與つて力があつたわけなのですが』こんな事を云ふ時は、あの人はさも父を哀れだと云ふ顏附をしましたが、それでもそんなに昂奮はしないで、冷淡と云つては語弊がありますが、割合に熱した氣色がなく、かすかな頰笑をさへ浮べるのでした。

さうでした。その父上からは、あの人の病氣以來、五十圓づつ二度送金がありました。隨分苦しい中を――あの人はさう云つて、流石に感動した眼を輝かせました。

けれども、言葉に出しては云ひませんでしたけれども、あの『久野さん』の事は、やはりあの人の頭からはなれないやうでした。夜私が寢てしまつてから、あの人はそつと病床から起き出して行つて、昔の日記の書いてあるノオトを探し出して來ては、それを讀んでゐる事が度々ありました。そして又時によると、そのノオトの端に、檢溫表を書くに使ふあの鉛筆で、仰向けの姿勢のまま、何か書いてゐました。――何よりも私にはそれが一番苦痛でした。晝間あの人の眠つてゐる時を見計つて、私はそのノオトを開いて、鉛筆で書かれた斷片的なものを讀んで見た事がありました。『Yに感謝す』さう書いてありました。かと思ふと『Kは今何處にゐるだらう？』とも書いてありました。『爭ひ、奪ひ合ひ、さう云ふものを趣味の上から好かないと思つた私は、實はそれが趣味からではなく、自分の弱さのあらはれだつた事に氣がつかなかつたのだ』――かう書いてある中には、恐らく私に見られた時の用意にでせうが、態とKと云ふ文字などは使つてありませんでしたが、それでも私には、その意味が明瞭でした。

『久野さん』の後を何處までも追はうとしなかつた事に對する悔に違ひありません。『自分は弱い。すべてがそれから來てゐるのだ。何も彼も……』さうも書いてありました。何も彼も……私にはその意味も亦よく解りました。

――私はそれを見ながら、いろいろな事を考へてゐると、やはり淚が流れずにはゐませんでした。これ程までに盡しても、それでも私はその會つた事もない『久野さん』に敗北してゐるのです。あの人の心を敵から奪ふ事が出來ないのです。――私はその『久野さん』をつくづく憎いと思ひました。時によると、あの人をも恨めしいと思ふことさへありました。

けれども、あの人自身もそれには苦しんでゐたのでした。『かたくなな心……自分はどんなにこれを持て餘してゐるだらう。Yに感謝す』――『感謝』！　何と云ふ厭な、何と云ふ親しみのない、何と云ふつめたい響を持つた言葉でせう。私はその字の形にまで今以て嫌惡を感じてゐます。

『感謝』でなくて『愛』、それが私の望なのでした。いえ、その外に何ものもなかつたのでした。

『感謝』だの『厚意』だのと、そんな生ぬるい言葉は、もう私には我慢がなりませんでした。私は泣いた揚句は、いつでも再び勇氣をふるひ起して、『今に乾度、あの敵からあの人を奪つて見せる！』かう決心するのでした。

八月の暑い盛りに、あの人はかなり多量の喀血をしました。私の氣にした程、あの人はそ

れを見ても驚きませんでした。けれども、その事あつて以來、あの人は全く別人のやうでした。何も彼もあきらめか悟りかしてしまつたやうに、しづかな、穏かな顔をして、眼なども妙に青く澄んでゐました。
『どうかよく消毒をして下さい。あなたに感染でもしたら大變だから』――痰壺の中にクレゾオル〱鹼液の入れ方が足りないと云つて、よく私に注意しました。
　本箱からいろいろな本を取つて呉れと私に命じました。あの人は仰向きになつて讀んでゐると、手に力がなくなつた事がよく解ると云ひました。それでも、『近頃は割合に頭はいい』こんな事を云つてゐました。
　心配だつた熱のきびしい頃が過ぎて、やがて秋らしくなりかけようと云ふ時分になつて、病勢が急に加はつて來ました。私はどうかして、少しでも長くあの人を生かして置きたいと思つて、一生懸命に看護しましたが、併しそれは無駄でした。――九月の十一日からあの人の病氣はあらたまりました。
　それでも電報に驚いて、十三日の晩に急いで父親が上京して來た時には、あの人はまだ氣力が確でした。なかなか意識がはつきりしてゐました。――尤も、意識は死ぬ時まではつきりしてゐましたけれど――
　父親は如何にも質朴な田舍のお爺さんでした。あの人が私の事を話すと、私がきまりが惡くなつた程馬鹿丁寧にお辭儀をしました。
　いろいろ私の事について、あの人は父親に頼みました。
『この人は大變氣の毒な頼りない人なのです。大變正直な素直な人なのです。そして僕の子供をお腹に持つてゐるのです』さういふ風におちついて話るあの人の言葉の一語々々に、父親はうなづきながら、涙が眼から流れて、鼻の頭に傳はつて來るのを、四角に疊んだ手拭で拭いてゐました。けれども、涙は父親よりも私の方が餘計に流してゐたのでした。
『僕の子供をお腹に……』と聞いた時には、もう堪へられなくなつて、私はあの人の枕許に泣倒れてしまひました。
　あの人の死がすぐ目前に迫つてゐるのを知ると、私は一種押へ切れない焦躁を覺えて來ました。かうしてはゐられないと云ふ氣がして來ました。――それは自分の今後の事だの、お腹の中の子供の事だのと云ふやうな、そんな事ではありませんでした。そんな事は今はどうでもいいのでした。いえ、今はもうあの人が直ぐ死ぬと云ふ事その事さへも、その時の私の焦躁の原因となつてゐるものに較べれば、そんなに重大ではないのでした。
　私は男の死ぬ前に、たつた一言、ほんのたつた一言でも、『愛する』と唯それだけが云つて貰ひたかつたのです。――『愛する』その一言が、他の何事にも代へがたい私の一番大切な望だつたのです。――私の總ての努力も、他の何事をも投げ打つた獻身も、唯その一言を聞きたいばかりにつづけられて來たのでした。
　その夜は久しぶりで父親に會つたためでせう、あの人も病勢が少し見直したかと思はれる程元氣でしたので、父親も、私も、かなり夜が更けるまで、あの人の枕許に坐つて話をしてゐました。――日夜の看護に疲れてゐるだらうからと父親が云つて呉れますので、一時頃私は寢につきまして、それから三時間ばかりして、父親と交替しました。その時あの人はすやすやと割合に安らかに眠つてゐました。脈搏も呼吸も、そんなに變ではないやうに思はれました。――やがて、隣りの室から、今寢たばかりの父親の鼾の聲がきこえ始めました。昨日までの一人での看護ではなく、今はあの人の父親が居ると思ふ

と、私の耳にはその時の聲までが、何となく氣づよく感ぜられました。

それでかなり安らかな氣持になつて、私は或雜誌を開いて、讀むでもなくペエジに眼を通してゐました。三十分ばかり經つた時でした。あの人が急に眼をさまして、

『足が寒くていけないから懷爐を下さい』と云ひました。私は懷爐の代りに湯たんぽを入れてやりました。それでも寒い寒いと云つて顏をしかめました。手で觸つて見ると、足が冷たくなつてゐました。

『よし子さん、お父つあんは?』

『今し方お寢みになりました』

『何だか非常に淋しい心細い氣がして來たから、お父つあんを呼んで來て下さい』

たうとう時が來たのだと云ふ事を私は覺りました。すると私は一時に胸がいつぱいになつて來て、父親を呼びに行く前に、あの人の手を取つて、

『お願ひです、どうか私を愛してゐると一言云つて下さい』と云ひました。こんな場合にあの人を昂奮させてはいけないと云ふ事は、私は百も承知でしたが、今が過ぎ去れば、もう取返せないのだと思ふと、終に我慢が出來なくなつたのでした。言葉と共に涙が出て、眼が霞んで來ましたが、私はそれを振拂つて、握つた手に力を入れながら、あの人の眼を見つめました。すると、どうでせう、ぱちぱち眼叩をして、あの人の視線が私を避けたのです。そしてそれは何とも云はれない、如何にも私を憐んでゐるやうな、又自分自身の心を責めてゐるやうな、複雜した表情を浮べました。

『たつた一言、たつた一言……』と私は夢中になつて迫りました。

あの人はやつと口を開いて、

『あなたには全く感謝してゐます……』と云ひかけましたが、私はそれを皆までは云はせませんでした。

『感謝なんて厭です、どうか愛すると云つて下さい、一言、たつた一言、たつた一言愛すると……』

あの人は默つて眼をつむつて、何とも答へませんでした。瞼がピクリピクリと動いて、涙の小さな玉が睫毛のところに滲み出て來ました。

『たつた一言……』と云つて私は狂氣のやうに泣き叫びました。ああ、あなたはやつぱりあの方の事を思つてらつしやるんでせう、久野さんの事を。……あんまりです、あんまりです!……

云ひやうのない苦惱の色が、あの人の顏に浮んで來ましたが、やはり何とも答へませんでした。唯あの人は私の手を握らうとしました。それは恐らく私に向つて、すべてを許して呉れと云ふ意味を傳へるつもりだつたのでせうが、もうそれには力がありませんでした。私の泣聲に驚いて、父親が眼をさまして來た時には、あの人はもう息を引取つてゐました。

たうとう私の望は達せられませんでした。

私は泣きながら、その部屋から驅け出して、夢中で臺所の戸を開けて外に出ました。どうするつもりだつたか覺えてゐません。夜が明けかかつて、東の空の眞黑な雲と雲との切目が、薄い赤褐色の條を描いてゐるのが、陰鬱な感じに見えました。此家に越して來た當時、私が植ゑたコスモスが、薄暗い中に、弱々しく風に動いてゐました。

七

もうその時分は、お腹の子供の動くのがよく解りました。あの人の父親が、頻に自分の田舍に來るやうにと云つて、熱心に勸めてくれましたが、私は氣が進みませんでした。と云つて、今更叔母の家に歸つて行くわけにも行きま

せん。あの叔母さんの事ですから、私が歸つて行つたら、屹度私をゆるして、いろいろ相談相手にもなつて呉れたに違ひありませんけれども、併し男に死なれて、みもちになつた身を、叔母の家に歸つて行く事は、叔母に對してばかりではなく、叔母の家の近所の人に對しても、餘りに恥しい事でした。

そこで私の頭に一番強く浮んだ事は、名古屋の兄をたづねて、兄に相談して見ようと云ふ事でした。兄もああ云ふ怒つた手紙を寄越したままにはなつてゐますが、それでも屹度何處までも私を心配して庇つて呉れるに違ひありません。それに名古屋ならば、他に知つてゐる人がありませんから、さう云ふ世間の氣兼も多少尠いわけです。

遺骨を携へて、秋田の田舎に歸つて行くあの人の父親を、上野の停車場に送つた翌朝、私は東京驛から六時二十五分發の列車に乘りました。私は長距離の汽車に乘るのは初めてでした。それに女のひとり旅ですし、況してお腹の子はもう八ヶ月にもなつてゐるのですから、その心細さつたらありませんでした。――私はその約半年ばかりの間に、大變苦勞したので、自分では相當に年を取つたつもりでゐましたが、それでも何と云つてもまだ十八なのですから、そんな年でこんな大きなお腹を抱へてゐる事を考へると、今更に顏が火照る氣がしました。でも私の隣りに腰をかけた京都まで歸ると云ふお婆さんが、大變に深切にして呉れましたので、割合に途中は安心でした。

汽車の進むに從つて、どんな風にして兄に會つたらと云ふ考が頭を苦しめて來ました。その前の年に亡くなつた兩親の事まで考へられて來ました。あの時から思ふと、僅一年半ばかりの間に、何と云ふ身の變化でせう！ 兄が海軍の水兵服を著てゐた時分ですから、隨分子供の時分でしたが、その時分に兄と私とが母につれられて、大社に行くので汽車に乘つた時の事が浮んで來たりしました。……箱根を越えると、空がすつかり曇つてしまつて、靜岡を過ぎた頃から雨が降り出しました。それがさうした悲しい氣持を一層强めました。濱名湖か濱松か、何でもあの近邊ですが、赤土の小さな丘陵の間を汽車が通つて行くと、小さな小さな松が、その赤土の上によきによきと行儀よくつつましげに並んでゐるところがあります。その赤土が雨に濕つて、飽くまで赤い上に、鮮かな綠の小松の並んでゐるのが、へんに私の淋しい心を誘ひました。それをどんどん走つて行く汽車の窓から眺めてゐると、涙が眼に滲んで來るのを覺えました。

名古屋に著いた時には、雨はどしやぶりでした。停車場の出口に佇んで外を眺めると、どしや降りの雨の中に白つぽく煙つて見える夕暮の町には、灯がぽつりぽつりとぼかしをかぶつて光つてゐました。堪らない不安が胸を襲つて來ました。兄の住んでゐる筒井町までは、電車に乘つてその大部分を行けるやうに聞いてゐたので、私は俥に乘らずに電車に乘りました。後で考へると、それが惡かつたのです。電車の中の人々は、どれもこれも親しめない顏をしてゐました。車掌に敎はつた停留場で電車を降りますと、筒井町までは、細い橫町を通つて、それからまだ殆んど十町近くあるかなければならないと云ふのです。その時になつて急に俥と思ひましたけれども、その近邊には見當りません。――私は低下駄に、傘も白い夏の洋傘でしたので、爪先立つて、裾を端折つて歩いても、頭から足の先まで、まるでぐしよ濡れでした。足袋がすつかり泥だらけになつて、ぴしやりぴしやりと、端折つた裾にまではねが上りました。みじめと云ふ感じがつくづくしました。私は泣出したいやうな氣持で歩いて行きました。自分

ほど不幸なものはないと云ふ情なさが、背中まで沁み通つて來る雨の不快な感じにつれて、心ぢう、と云ふよりも、身體ぢういつぱいに擴がつて來ました。

その晩、たうとう私は兄をたづねないでしまつたのでした。今から考へると、何故たづねるのを止めるやうな氣持になつたものか自分でもよくは解りません。何よりも兄に此醜いみじめな有樣を見られたくないと云ふ氣持がして來たのでした。唯自分の身體の變化ばかりでなく、著物から足袋から下駄からぐしよぐしよになつたと云ふ事までが、急にさう云ふ氣持に私を誘つたのでした。それは何と云つても、通常の考へ方からは考へられません。けれども、屹度一種のヒステリイ的な氣持が突發したのではなかつたかと今考へると思ひます。――物の本末が私には解らなくなつてしまつたのです。何がほんたうに大切な事で、何がそれ程大切な事でないか、その區別がつかなくなつてしまつたのです、足袋だとか著物だとか、そんな事がへんに私を押へつけてしまつたのです。

その癖、再び停車場に引つ返して、上り列車に席を占めた時には、急に今度は又兄をたづねなかつた事が口惜しくなるほど殘念に思はれて、それを思ひ出し思ひ出し、たうとう東京まで泣き通してしまひましたのに……

三日後の夕方、私は東京の南の郊外の或海に近い淋しい村に、一軒の産婆の家を目つけました。此處なら人目にも觸れないでいいと思ひました。北に小さい丘を背負ひ、南は開けて、ずつと田と畑とを見渡し、割合に氣持のいい位置でした。それに日當りのいい二階家でした。二度三度その前を行きつ戻りつした擧句、たうとう思ひ切つて、その格子戸を開けて案内を乞ひました。

出て來たのはもう五十に近い、如何にも産婆らしい人馴れのした婆さんでした。一寸恐い氣がしましたが、笑顏を見ると、それ程空々しいところがなく、割合に質實な、人の好ささうな人でした。

お宅にお産をして身體の恢復するまで置いて頂きたいと云ふ旨を述べると、兎に角と云つて二階の六疊の間に案内しました。旦那樣は、と訊かれて、私ははつとしましたが、今朝鮮の方へ行つてゐると云ひ抜けました。すると續いて、それでは何方か東京に身許を引受けるやうな、お身内の方でもおありですか、と訊きました。それにも困りましたが、私はあの叔母さんの事を云ひました。私がたつた一人で行つたと云ふ事が、不安を與へたに違ひありません。――産婆は私のみなりなどをそれとなく注意して見てゐましたが、宜しうございます、唯今は丁度部屋も開いて居りますから、と云ひました。

『隨分御無理をなさいましたね。……でも、一體が御丈夫ですから、別段異狀もございませんが』と産婆は私の身體を見ながら云ひました。私はその時になるまで、まだ何處の産婆にも見せなかつたのでした。そして岩田帶さへもまだしめてはゐなかつたのでした。

いろいろな事を私から訊き質した末、指など折つて數へてゐましたが、

『少しは御早産かも知れませんよ』と云ひました。

私はそこで、兎に角お産までの身がきまりがついたと思ふと、少しく安心したおちつきを感じましたが、安心したとなると、今度は今まで昂奮のためにおちついて考へる暇のなかつた事が、しみじみと考へられて來ました。たうとう強情に沈默を守り切つて死んでしまつたあの人、恨めしくも憎らしくもその時は思へたあの人、併し私は今はあの人の心持についても、

しづかな氣持で理解する事が出來ました。あの人は一體何と云ふ正直者だつたでせう。譃と云ふものが、あの人にはこれつぱかりも吐けないのでした。あの臨終の時にあの人が、どんなに苦しんでゐたか……その氣持がしみじみと感ぜられました。

……けれども、もう私はいつまでもあの人にばかりかまけてゐる場合ではありませんでした。あの人は永久に過ぎ去つた人なのです。過ぎ去つた人としてしまはなければならないのです。何故かと云ふと、もう過ぎ去つたものにばかり心を向けてゐる時ではない程、私には現在の問題が、そして將來の問題が、そこに壓倒して來てゐるからです。

お腹の中に動く子に、次第々々に愛情が湧いて來るのは、悲しい中にも、決して不愉快な事ではありませんでした。男の子か女の子か、產婆は男の子だと云ひますから、男の子なら、今に自分の賴りになつて、どんなにいいだらうと思ひました。けれども亦、女の子であつて欲しいやうな氣も少しはしました。可愛い可愛い女の子、それに手を引かれて步く自分を考へると、堪らなく優しい氣分になりました。……併し、今後自分の身の振り方をどうしようと思ひました。

何も知らない若い女の身で、世の中と云ふものに出て行つて、何が出來るだらう、と思ふと、これは又頭から振拂はうとしても振拂はうとしても振拂へない心細さを感じました。一體自分に何が出來るでせう……せめて女學校でも卒業してゐたら、さう思ふと死んだ兩親の事が又思はれて來ます。若し又あの叔母にもう少し裁縫が習つて置けたら。……そんな事を思つてゐると、世界が眞暗になつて行くやうな氣がしました。　すると、考は又これから生れる子供の事に戻つて行つて、自分は併しどんな事があつても、その子だけは手放すまいと思ひました。どんな事があつてもその子だけは、どんな苦勞をしても、たとひ死んでも……かうなると、妙に感激して來て、センチメンタルになつて來て、ひとりでに淚ぐまれて來るのです。

『誰が放すものか！』私は相手もゐないのに、口に出してから叫んだ事もありました。

私のゐる二階の欄干からは、大森から蒲田にかけた廣々とした田圃が見渡されます。田圃の先には人家があつて、人家の先には東京灣の海が、細い帶ぐらゐの細さに橫にはつてゐます。霽れ渡つた日には、その先に上總あたりの山々が、かなりくつきり見えます。――私はそれをぢつと見つめてゐると、眞靑に澄んだ空に、赤とんぼがさも輕げに飛んで行きます。すると、そのかすかな蔭が、私の直ぐ足許の出つぱつた板屋根の上を、すいすいと走るのです。もういつか十月でした。

ある日、產婆は、

『あの、お子さんは何處かにお遣しになるおつもりでも、それとも里子にでもお出しになるお考でもおありですか？』と診察の時に何げない風に訊きました。產婆はもうすべてを感付いてゐるのです。――朝鮮にゐる良人、身許を引受けてゐる叔母、さう云ふものがゐないと云ふ事を、すつかり知つてゐるのです。かう云ふ事に馴れ切つてゐる人の用意周到さから、無暗に口に出しては云ひませんが、併し私のやうにして來る若い女が、どんな狀態にゐるかは、直ぐ知つてゐるのです。

『いいえ、そんな事は少しも……』私はどぎまぎして顏を赤くしながら答へました。

『いいえ、若しそんな風に、お遣しになつたり、里子にお出しになつたりなさるやうですと、なかなか急と云ふわけにはまゐりませんから、今のうちから探さなければならない、とさう存じまして……』

「そんなつもりは少しもございません」さう答へた時には、もう恥しいと云ふよりも、何んだか堪らない不愉快をさへ覺えました。

前の田圃の稻が次第に色づいて、その穗が垂れ下つて來るやうになると、滑稽な、けれども淋しい形をした案山子がそこここに立てられ、からからと妙に底淋しい音を立てる鳴子の綱が、縱橫に張られました。澤山の雀が群をなして、そこに降りて來ます。かと思ふと、百姓に追はれて、まるで青空に粉を振蒔いたやうに、ぱつと飛び立つて行きます……

十一月に入つて、ところどころ刈り取られた稻の跡が、田圃の中に眞四角に凹んで見える時分になると、お腹の痛みが、時々はげしく感ぜられるやうになりました。そしてその痛みと痛みとの間が、だんだん接近して來ると、もう產期の近づいた事が自分にも感ぜられました。

そして或朝午前十時頃、それは十一月十日の事でしたが、私はたうとうお產をしました。割合に輕く濟みました。生れた赤ん坊は女の子でした。――眼のあたりがあの人そつくりでしたが、併しそれ程綺麗な子でもありませんでした。それでも產婆は、『まあ、玉のやうなお孃さまで』と單なるお世辭ではないらしく云ひました。――その生れた子供が、どんなに可愛らしかつたか、そんな事は今此處では述べてゐる暇はありません。――秋生れたのですけれども、私はなるたけ陽氣な名をつけたいと思つて、はなと名付けました。

一週間ほどすると、產褥にゐる私の枕許に來て、產婆がこんな風な調子で云ひました。

『あの、赤さんのお籍はどうなさいますか。まだよろしうございますが、二週間以內にお屆けにならなければいけない事になつて居りますから。御承知ではございませうけれど……』

それは勿論、私も知らない事ではなかつたのでした。けれどもその時は、子供の生れた事を朝鮮に居ると云つた良人にも、身許を引受けてゐると云つた叔母にも、別段電報を打たなかつた事によつて、露骨に產婆に不安を與へてしまつてゐるのだ、と思ふ事の方が、尙一層心に苦しかつたのでした。それでも、その他に一寸云ふ事が頭に浮んで來なかつたものですから、譃だと云ふ事を相手が明らかに知つてゐるのを知りながらも、

『あの、朝鮮の方から、今月の上旬に歸る事になつてゐますから、二三日中には此處にたづねて來ると思ひますから……』こんな風に吃りながら云ひました。

人の好い產婆は、私の顏を眞面には見ないで、私を憐むやうな表情を浮べながら、それ以上は追窮もせずに、階下に行つてしまひました。

でも、四日程して、產婆は又同じ事を云ひに來ました。

『幸ひお孃さまも今までは御丈夫ですから宜しうございますが、併し、もしもの事でもございますと……』

私は明ら樣な譃はもう口に出ませんでした。產婆にさう云はれて見ると、恐ろしい不安とがひしひしと胸にこたへて來ます。もしもの事があつたら、全くどうしていいか解りませんでした。私が殆んど泣きさうな顏をして、默つてゐるのを見ると、產婆は、

『それで、私も及ばずながら御心配いたして居るのでございますが、何ならば何處かにお遣しになりますとか、若し又お遣しになるのがどうしてもお厭でございましたら、何處かに賴んで籍だけでも入れて置いて貰ふやうになさいましたら……そして、ようくお考へになりましてから御返事を願ひます』さう附加へて、階下に降りて行きました。

此可愛いはなを人に與るなんて、考へて見て

も厭でした。それから又、折角の自分の子を、たとひ後で自分の養子と云ふ事にするにしても、人の子として屆けるなんて、それも親としては堪らない事でした。産婆の云つて吳れる深切はよく解りますが、けれども、養子にするのも、籍だけ人に借りるのも、共に私には出來ません。……それならば、自分の子として屆けるか？若し自分の子として屆けると、私生兒としなければなりません。――『私生兒』それは又餘りに可哀さうでした。はなが大きくなつてから、『私生兒』と云ふ事のために、どんなに恥しい思をしなければならないかを思ふと、それも私には出來ませんでした。

と云つて、他に仕方のないのは解つてゐました。あの人の秋田のお父さんに相談したらと云ふ心も湧きましたが、さうしたら、此子をゆくゆくは秋田の方へ引取られてしまふに相違ありません。……いえ、どんな事があつても、手放す事は私は斷じてしません。……淚が枕の上にしつとりと濕つて行きました。ちうちうと乳を飲んでゐるはなを見ると、此まま二人で一緒に死んでしまはう、などと云ふ氣もしました。

産後の肥立が好かつたので、間もなく起きて、部屋の中をはなを抱きたがら、小聲で歌を歌つて歩きまはりました。私の寢てゐた間に、前の田圃の稻はすつかり刈り取られてしまつて、黃ろいいなむらが、廣い田圃のそこここに出來てゐました。眼に見えるものが、もうすつかり晩秋――と云ふよりも初冬の悲しさを語つてゐます。小春らしい晴天はつづいてゐましたが、もう赤とんぼは飛んでゐませんでした。

或日、それはもう産婆が心配した二週間目の次の日でした。産婆はいつもよりも强い調子で、赤子の籍の事を云ひ出しました。

『籍だけどうかなさいませんと……實は、近所の車屋のかみさんにも話して見たのですが、籍だけ入れて上げるなら差支へないと申しました。如何でございませう、さうなさいましては？……それは車屋なんかしてゐても、大變好い人なのです。長い間此附近に住んでゐますが、正直者だと誰でも云つてゐる位なのですから……若しもの事がありますと、あなたばかりお困りではなく、此私でもかう云ふ看板を掲げて、あなたをお預りしてゐる以上は、やはり責任があるのですから……』

それにもたうとう私は確答を與へる事が出來ませんでした。……車屋の子、そんな事は今から思へば何でもない事でしたが、私はその時は、頭が混亂して、妙に淚ばかり流れて、決斷心と云ふものが心の何處にもなくなつてゐました。

そこで、たうとう産婆はかう云ひました。

『若しそれでもあなたが赤さんを今のままにしてお置きになりますなら、甚だ申しにくくはありますが、私共でもいつまでもお世話いたして居りますわけにはまゐりません』

そこで、私はもう産婆のところにもゐられなくなつて、その翌日の夕方、荷物だけを後で取りに來る事にして、はなを抱いて、外に出ました。私には何處にも行くあてはありませんでした。

産婆のところの拂ひを濟ませた後には、昨年兄が名古屋に行く前に殘して行つて吳れたお金が、まだ半分ばかり殘つてゐました。……私は赤ん坊を抱いたまま、院線の電車に乘り、それから又市內電車に乘り換へて、麻布の方へ行きました。私は何處か深切な家に間借をして、そして何とか生活の道を考へようと思つてゐたのでした。まだ衣類も少しは殘つてゐましたから、そんなものもどうかすれば、半年位は、質素にすれば生活が出來ます。その間には何とか後の工夫もつくだらうと思ひました。

ところが、女ひとり赤兒を抱へてゐる姿を

不審さうに見つめて、なかなか宝を貸して呉れるところがありませんでした。私は小さな宿屋に二日泊りました。……そして三日目の朝、はなが咳をし始めました。もう十一月も末で、吐く息が、朝の空氣の中に白く見えました。……私は赤兒を抱いて、麻布から芝の白金の方へ三の橋を渡つて行きました。手の中で赤兒の身體が火のやうに熱く感ぜられました。あやしてもあやしても妙な泣聲を立てました。

けれども、それは死ぬなんて、そんなにひどいとは思つてゐませんでした。私は肩掛にくるんで、なるたけ風のあたらないやうにして行きました。……が、その晩、私が又前夜泊つた宿屋に歸つて行かうとする途中で、赤ん坊は死んでしまつたのです。……手足をぶるぶると痙攣させて、眼が上づつて來たかと思ふと、それきり動かなくなつてしまひました。あんまり思ひ掛けなく、あんまり簡單でしたので、私は暫くは呆然として涙が出なかつた程でした……

籍の屆けてない赤兒の死をどう屆けていいか解らない、生れて二週日を過ぎ去つたのにまだ屆けてなかつた、そしてそれが死んだ、さう云ふ時には、その母親は罪になると云ふ事に、產婆の口からもよく聞いてゐましたが、併しその時、私はさう云ふ罪が恐ろしくてばかり、それを隱藏しようと思つたのではありませんでした。……あまりに思ひ掛けなく、あまりに簡單に死んだので、呆然としましたが、やがて我に返ると、私は悲しさと可愛さとに、前よりも一層強く死んだ赤ん坊を抱きしめながら、涙をぼろぼろ流して往來を歩いて行きました。もう前の宿屋に歸るわけに行かなくなりました。私は麻布を通り拔けて、青山の通に行つて、そこで粗末な毛布を買ひました。私はその毛布で、丁度荷物に見えるやうに、赤子の身體をすつかり包んでしまひました。……私はその晩から、毎晩その毛布にくるんだ死んだ赤兒を抱いて寢ました。そして日を經るに從つて、益々私はその死んだ赤兒が可愛くなつて行くばかりです……

それからもう二年になります。幸ひ赤兒は腐らずに、みいらのやうに固まりました。一生私は此赤兒を抱いて寢ようと思つてゐます……

* * * *

よし子の裁判の時には、石川の細君はすすんで證人として出廷した。そしてよし子のために辯じた。――赤兒が腐敗せずにみいらのやうにかちかちになつたと云ふ事について、檢事とそのみいらのやうになつた赤兒の死體を檢視した醫師との間に、かなり込み入つた意見の交換があつたが、それは裁判には關係がなかつた。赤兒は參考品としてそのまま保存される事になつた。

裁判長は結局無罪と云ふ判決を與へた。

けれども、それから六日して、よし子は或海岸から投身して死んでしまつた。その時石川の細君に宛てて郵送した書置には、こんな事が書いてあつた。

『私はもう堪へられません。悲しみの重荷が何處までも私について參ります。何處まで行つても追ひかけて來ます。それを慰めて呉れてゐた唯一のもの――はなの死體はたうとう私の手から奪はれてしまひました。もう私には生きるめあてはございません。無罪と云ふ判決は、私には何の喜びも與へません。――これから、若し長い間生きてゐるとしましたなら、悲しみの記憶の重荷が、その間始終私を苦しめてゐなければなりません。――私はさうして生きてゐるよりも、寧ろ死を撰ばうと決心いたしました』

崖

昨年の事だつた。父が知多半島の師崎の病院に入つてゐたので、私は九月の初めから一ケ月ばかり、或翻譯の仕事を持つて、同地に出かけて行つた。その病院と云ふのは、二三ケ月前に開いたばかりで、まだ設備など整うてはゐなかつたが、併し如何にも自由で暢氣なのが好かつた。病氣の恢復したもの達は、間代だけ拂つて、藥など飮まないでも、平氣でそこにゐる事が出來た。私の父はもう殆んど全快してゐた。醫者も藥を飮む必要はないと云つてゐた。だから、父は入院してゐるといふよりも、母と一緒にそこの一室を借りて、自炊してゐると云ふに過ぎなかつた。

私はその病院から三町ばかり隔つたところに靜かな部屋を借りて、食事だけ父母のところに食べに行つた。この町は名古屋附近の人々が避暑したり避寒したりする保養地となつてはゐたが、それでも東京近邊の海岸のやうに惡い、ずれたところは少しもなく、質樸で平和なのが私の氣に入つた。

私はその頃かなり健康を害してゐた。別段何處と云つて惡いところはなかつたが、身體が大變衰弱して頭が惡かつた。病院の患者たちはみんな汐風に吹かれて色が黒かつた。だからどの患者よりも、私の方が顏色が蒼いので、寧ろ病人のやうに見えたさうである。

私は仕事の根氣がつづかないので、よく一人で海岸を歩きまはつた。この町は知多半島の一番突つ鼻にあつて、前には遠く渥美半島の蜒々として長く横たはつてゐるのが見え、島の多い湖水のやうに靜かな渥美灣の風光はかなりに佳かつた。この町の海岸線だけを見ても、その屈曲の樣がなかなか複雜した趣きを持つてゐて、私の眼を娯ませて呉れた。私はたつた一人で、ステッキを持つて、四邊の景色に眼を配りながら散歩してゐると、かなり靜かな幸福な心持を感じた。もう父の病氣も全快した。昨年の父の容態から見ると、父の恢復は思ひ掛けない程早かつた。それが私には限りなく喜ばしかつた。今はその外には別段心にかかる雲もなかつた。私は久しぶりで自然の景色に向つて、少しの蟠りない、晴々とした氣持で對する事が出來た。

海岸の右端には、小さな丘陵が岬を形造りながら海中に突出てゐて、その丘陵の上に何とかいふ神社があつた。土地の者達は此神社の附近――つまりその丘陵全體を神聖なものと見做してゐて、そこに生える草や木の花は、何人と雖もこれを摘まなかつた。私は始終その丘陵に昇つて行つては、海の景色をながめた。その岬は師崎の港を形造る墻壁となつてゐるばかりでなく、また渥美灣と伊勢灣との丁度中間に位してゐた。左を向けば渥美灣に沿うた低い山々がかすかに見え、右を向けば又伊勢灣の彼方に高い山々が重なり合つて聳えてゐるのが見えた。私は丘陵の一番末端に立つては、よく北海と山との廣々とした大きな光景を眺めた。私は胸がからつと開けて來るのを感じた。私は腹の底から力一ぱいの大きな聲を出して、「おうッ」と長く引つぱつた叫聲を揚げた。私は歡喜に似た感情を經驗した。と、同時に、自分の聲の響の中に、長い間いろいろの事のために胸の中にいつの間にか積み重つてゐた憂鬱が、一時に爆發したとでも云つたやうな、或

重苦しさの爆裂を聞いた。
　或午後、私はその岬の上から、長い間ぢつと師崎の町を見下してゐた。小さな港の中には漁船が群がつてゐた。空はすつかり霽れて、明るい碧色に光つて、初秋の太陽を照り返してゐた。私は汀線の屈曲と海の色と、それから汀線に沿うた小さな家々と、その家々の後に迫つてゐる緑色の丘陵と、それ等總ての上に降りそそいでゐる日光と、さうしたものの間に、何とも云はれない或調和を認めた。私は長い間描いた事のない繪を描いて見たいやうな氣持になつて、心の中に圖取りを考へてゐた。
　五六町隔つた病院の縁側から一人の人が海岸の砂の上に下りたのを私は見た。それは私の父であつた。父は岸に立つて、手を額にかざして、眩しい日光の眼に當るのを避けながら、此方を眺めてゐた。私は子供らしい喜びを感じて、父の行動を見てゐた。父は暫く立つてゐたが、手を振つた。それが何の合圖か私には解らなかつた。けれども私はそれに對して手を振つた。
　父が再び病院の中に姿を隠してしまふと、私はまたその丘陵を下つて、岸に沿うて歸りかけた。

　私はふと崖崩れのために落ちたかなり大きな石の塊が、道端に轉がつてゐるのを認めて、足を停めた。それは見たところ淡青色で、表面がすべすべしてゐて、固さうであつた。私はステッキでその石を叩いて見た。と、固さうに見えた石は、そのステッキの一撃によつて、澤山の龜裂を生じた。私は興味を起して、そこに蹲んで、その石を何度もステッキの先で叩いた。石はポロリポロリと、「廢方解石が缺けるやうな工合に、氣持よく缺けた。私はその缺けた一破片を手に取つて、指で以て折つて見た。と、それは指でも缺けた。私は一種の愉快を感じた。そしてよく調べて見ると、その缺けた面は、赤い錆色をしてゐた。私はそれが何と云ふ石かは知らないが、その錆色を見た時、その部分は乾度雨の水か何かがにじんで、自然にそこに眼に見えない龜裂を生じてゐたに違ひないなどと、そんな事を考へてゐた。
　すると、突然私の後から父が聲をかけた。私は立上つて、手の砂を拂ひながら振り向くと、父が急ぎ足で私の側に近づいて來た。
「おい、どうかしたんぢやないか？」と父が心配さうに云つた。
「いいえ」と私は父の問に吃驚して眼を瞠つた。

「それならよかつた。私は最前から心配してゐたんだよ。お前があの岬の上に立つてゐた時、もし眩暈でもしてよろけたら大變だと思つて……お前はよく眩暈のする人だから」
　私は父のその言葉を聞いた時、それでは最前父が病院の前の岸から私に手を振つて合圖をしたのは、そのためだつたのかと思つた。で、私は笑ひながら、
「大丈夫ですよ。僕は崖から一間ぐらゐ離れたところに立つてゐたんですから」と云つた。
「さうか、病院から見てゐると、お前が崖の直ぐ緣に立つてゐるやうに見えたもんだから……その中お前があすこから降りて來たと思ふと、直ぐ此處に蹲んでしまつたらう。私はてつきりお前が眩暈がしてゐるのだと思つてしまつた」
　父と私とは互に笑つて、そして一緒に病院の方へ歸つて行つた。
　その翌々日の朝、私が朝飯を食べに病院に行くと、父が寢てゐた。私は意外だつたので不安を感じた。
「どうかなさつたんですか？」と私は訊いた。
「ああ、今朝から血が出るんだ」父が低い聲で云つた。どう云ふ譯か私には少しも解らない

んだがね。もうこんな事のある筈はないと思つてゐたんだが……』

私は非常に驚いた。私は父の枕許の瀬戸物の痰壺の蓋を除つて見ると、黒ずんだ血がかなり多量に出てゐた。父は猶も咳をした。その都度猶も少量の血が痰に混つて出て來た。

やがて院長が診察に來た。私は父の病氣がまたすつかり元に歸つてしまつたのではないかと、院長の顏から眼を放さなかつた。それは大學を出たての若い醫學士で、おちついた、感じのいい人であつた。

『胸部には別段何の異常もありません。ラッセル音なども少しも聞えません。多少呼氣の延長は聞かれるが、併しこの位の延長は普通の人にでもあります』さう云ひながら、院長は痰壺の中を調べ始めた。『はゝあ』と彼は云つた。『色の黑い所を見ると、此血は古いですな。今出血したのではなく、前に出血したのが何處かに溜つてゐて、それが出て來たものと思はれます』

『成程』と父は云つた。が、何だか見當のつかない顏をしてゐた。私もどう云ふ事かよくは解らなかつた。

『近頃何かひどい運動でもなさつた事はありませんか？』

『さあ』と父は考へてゐた。『別段ありませんが。二週間ほど前にMさん（病院附の醫者の名）と一緒に山に登つた事がありましたが……』

『いや、そんなに前ではありません』と院長は云つて、『併し、兎に角そんなに御心配になる事はありません。今日と明日と靜かに安臥なさつていらつしやれば、直き快くなります』そして院長は歸つて行つた。

父も母も私も稍々安心した。父は院長の云ひつけを守つて、二日間靜かに安臥してゐた。そして三日目にはすつかり元氣を恢復して、元通りに起上つて、再び外を散歩するやうになつた。やがて、その時の出血はその儘原因が解らない中に、いつか忘れられてしまつた。

父は今鎌倉に私達と一緒に住んでゐる。父の健康はもうすつかり恢復して、病氣前よりも肥えて、體重なども若い時にさへなかつた程の重さに達してゐる。

私は一年程經つた此頃になつて、ふと、その時の父の喀血が、私があの岬の崖の上に立つてゐた時に、餘りに父が心配して胸を痛めたためではなかつたかと云ふ事を考へ出した。院長は何か過激の運動のためだと云つたが、併し過激の運動でなくとも餘りに烈しい心配などから、同じ結果を惹起す事は確にあり得るに違ひない。殊に私の父のやうな極度に鋭い神經を持つた人には、さう云ふ事はあり勝に違ひない。

けれども、そんな事を考へ出すと、今更ながら或胸苦しさを覺えて、『あつ、あぶないつ』と云つたやうな不安を感じて來る。私はそれを初めて考へついた時、自分の身のまはりが、今更ながら急に顧られるやうな氣がした。

（大正六年八月）

線路

圓覺寺の境内にゐる犬は、大概びつこである、それは汽車に轢かれるためだ、と云ふ事を、私はその居士になつてゐた或友人から聞いた。さう聞いて見ると、なるほど、圓覺寺の近邊では、一本足のない犬に出會ふ事が時々ある。私が鎌倉に散歩に行つて、夜おそくなど歸つて來ると、暗い往來ばたに、ひゆつひゆつと鼻の音をさせながら、黒いびつこの犬がよく現れて來る。人通りが尠いために、人が戀しいのでもあらうか、默つて歩いて來ると、後からひよつこひよつこと氣の毒な、不細工な足どりで蹤いて來る。どうかすると、私の家の前まで蹤いて來て、私が格子戸を開けながら振返つて見ると、名殘惜しさうに往來に突つ立つて、ぢつと此方を見てゐる事もある……

誰でも知つてゐる通り、圓覺寺の境内には汽車の線路が通つてゐる。けれども、犬のやうな敏捷な動物が、どうして轢かれるのだらう、と考へると、私は一寸それが解らないやうな氣がする。めつたに人間が轢かれたと云ふ話は聞かない。犬の方が人間よりも頭が惡いから轢かれるのだと云ふと、一寸そんな氣もするが、併しかう云ふ事には、犬の方が人間よりも本能的に動くから、轢かれる事が尠いだらう、と考へると、又その方が尚一層ほんたうのやうな氣もする。殊に、時々變になる自分の頭を考へると、餘計に人間の方が危險であるやうな氣がして來る。頭が變になると、直ぐ側まで汽車が來てゐても、そのすさまじい音が、私の耳に入らない事がある。何か考へ事をしてゐたりすると、よくそんな事がある。犬にはそんなやうな事はないだらうと思ふ。

私は、必ず毎日散歩に出るが、圓覺寺の境内から普通の街道を通らずに、汽車の線路を傳はつて來ると、すぐ私の家の裏に出られるので、いつでもその線路を通つて來る。それに線路の方が、田圃や畑の青々とした間を通るので氣持もいい。丁度レエルの下の枕木が、一歩々々踏んで行くのに適した距離に取つて置いてあるので、子供がするやうに、下を向きながら、その上をこつりこつりと下駄で踏みながら通る……

そこを通りながら、私はよく此處は危險だと考へる。殊に近頃は、もうちよこちよこ駈け出して歩けるやうになつてゐる私の子供が、汽車道に行きませう、と彼の母にせがんでゐるのを聞く事がある。そんな事を考へると、餘計に此汽車道が危險であるやうに思ふ。私の家の裏木戸を出て、二三十歩田圃の中を通れば、そこが直ぐ線路の堤なのであるから、うつかりすると、子供が知らない間に、ひとりで線路に行かないとも限らないやうな氣がして來る。……犬が轢かれるとなると、人間の子供は尚あぶないやうな氣がして來る。時によると、そんな不安が胸中いつぱいになる事がある。妙にゐても立つてもゐられない位心配になつて來る事がある。そんな時には、頭が惡いためだとは思ふ。併し早くこんなに危險に近い場所からは、移轉するのが當然だとよく考へる。

或日の午後であつた。私はいつもの通り散歩に出かけて、圓覺寺前の腰掛茶屋に一寸腰をかけて、そこの婆さんと世間話をしてから、線路に沿うて、自分の家の方へ歸つて來た。線路と堤の下り勾配との間には、一尺ばかりの路がつ

いてゐる。線路に沿うて歩く人々の足のために跡のついてゐる路なのである。その路の上に、堤の方から、草の葉がかぶさるやうに延びてゐる。乾き切つた白い路の上を歩いて行くと、足の甲がその草の葉をさらさらとはじいて行くやうになる。その日はどう云ふわけか、私は線路の中の枕木の上を通つて行かなかつた。そしてその狹い路を草をはじきはじき歩きながら、かう云ふ處には蛇がゐるから氣をつけなければいけないと考へて、ステッキで歩いて行く路の二三尺先の草の上を、ぼんぼん叩いて行つた。鎌倉の山の内は蛇が澤山ゐるので評判である。

私は普通の蛇はそんなに恐ろしくはないが、此邊にはよく蝮がゐると云ふので、それにはかなりの不安を感じてゐた。蝮を私は見た事はないが、併し二三歩前から、ステッキで警戒して行けば、大概向うから逃げるものだと云ふ事を聞いてゐた。そこで、さうしてステッキでぼんぼん草の上を叩いて行くのであつた。

圓覺寺の蓮池から、約二三十間ほど來た時であつた。草の中に、にゆるにゆると動き出したものがあつた。「ゐたな」と私は思つた。いつゐるか解らないと覺悟はしてゐるものの、にゆるにゆると草の中に動くのを見た時には、やはり一寸ぎよつとした。けれども、それは蝮ではなく、大きな縞蛇であつた。白茶けた畑の上に、黑い縞がはつきりと綺麗についてゐる。それが綠色の草の間をによろりによろりと動いて行く。私はステッキでその蛇の後の草の上を、音のするやうにぼんぼんと二つ叩いた。蛇は緩慢に逃げ始めた。縞蛇はそれ程恐ろしい蛇ではない。あんまり追ひまはすと、却つてあべこべに向つて來るやうな事もあるが、併し咬まれたところで、それ程毒のある蛇ではない。

私はぼんぼんと草の上を叩いては、蛇が逃げて行くのを待ち、又暫くすると、ぼんぼんと叩いては、又蛇の逃げて行くのを待ちして、二三歩行つては立止り、二三歩行つては立止りしてゐた。——殺さうと云ふ考は毛頭うかんで來なかつた。子供の時には、蛇を見ると、片つ端から叩き殺したものであつたが、近頃は私にはさう云ふ事があんまり無慘で出來なくなつてゐる。

私は蛇が堤の勾配を下つて、草の茂みの中に逃げて行く事を豫期してゐた。ところが、彼は、それとは反對に、あの底氣味の惡い小さな頭をもたげて、するする、するすると線路の中に這つて行き出した。線路を越えた向う側の堤の草の茂みに逃げて行くつもりらしい。頭の方から尻尾の方へかけて、鱗がさらさら、さらさらと動くと云ふよりも、その模樣の工合で、流れるやうに見える。その度に少しづつ、その長い不氣味な身體が、調子を取つて進んで行く。その上から太陽が照つてゐるので、その鱗がへんに鮮かに綺麗に見える。　私は立止つて、のろりのろりと、かなり悠然として、線路の上を通つて行く此長い蟲の運動をながめてゐた。

それよりも大分前から、下り列車の近づいて來る音がきこえてゐた。それがかなり近づいて來て、音が轟々と響いて來ても、蛇は相變らず悠々と動いてゐた。

汽車が直ぐ側を通ると、妙に渦を卷くやうな風が起る。私にはあれがいけない。くらくらと眩暈を感じて、身體がへんてこにその中に卷き込まれるやうな氣持がする。それが堪らなく不快だ。そこで私は汽車が直ぐ近くに來ると、片足を堤の方へ下ろして、ステッキでしつかり身體を支へて、眩暈の來ない用心をした。けれども、その時になつても尙、例の縞蛇が、相變らずのろりのろりと動いてゐるのに、私は一種の興味と心配とを感じた。一體どうするつもりだらうと思つた。こんなに汽車が近づいて來ても、それが解らないのだらうかと思つた。——そこ

で、確もその方を見てゐた。

汽車が二三間に近づいて來た時であつた。その時になつて、初めて蛇はそれを感じたらしい樣子を表し始めた。大きな砂利が敷いてあるので、歩きにくいためであらうが、長細い身體を、左右にのたりのたりと非常に波打たせながら急ぎ始めた。それが、何となく砂の上に置かれたいゝあなごがするやうな運動に見えた。――その中に彼は急に向きを變へた。今まで線路を横切らうとしてゐた方向を、ぐるりと轉じて、その小さな頭の先から、ぺろりぺろりと黒い舌を出しながら、線路と線路との間を、汽車の進んで行く方向へ向つて走り出した。一瞬間大きな汽車が、此小さな蟲を追つかけてゐるやうな恰好に見えた。――私は蛇のその方向轉換を、初めは成程と思つた。もう汽車が餘りに近づいて來たから、横切つてゐては、瞬く間に切斷されてしまふ。それを思つて、汽車の進む通りに進み出したのだと思つた。さうすれば、汽車が蛇の頭の上を唯通過して行つてしまふからである。

さう思つてゐる中に、汽車は私の直ぐ前を、蛇の頭の上を通過した。そのあふりの不快な風を避けるために、私は思はず顏をそむけた。そしてそれが通過し切ると、私は早速線路の上に眼をやつた。

蛇の頭は内側の線路の上で、くちやりと平たくつぶされてゐた。そして割合に肥つた丸い身體が、白つぽい腹の方を少し見せながら、砂利の上にだらりと横たはつてゐた。やつぱり彼は轢き殺されたのであつた。

私は大變むごたらしいものを見たやうに、妙に胸が暗い感じに充たされた。歩き出したがら、どうして轢かれたものであるかを考へた。あのまま汽車の下になつて、線路と線路との間を動いてさへゐれば、確に轢かれる事はなかつた筈である。併し、やつぱり慌てたらしい。幾臺かの客車が通つてゐる中に、その車と車との間から、どうかして外に逃げ出さうと云ふ氣になつたらしい。これは我々でも一寸さう云ふ立場に置かれたら、慌ててそんな風な事をするかも知れないと思つた。線路を横切らうとして間に合はなくなつたので、汽車と同じ方向へ進み出して、頭の上を通過させてしまはうと考へたところまでは、(或は偶然にさうなつたのかも知れないが、併しその位の思考力は蛇にあると見なしても差支へないと思ふ。)おちついてゐるが、肝心なところに行つて、やつぱり慌て始めたものと見える――こんな風に考へた。

間髪等の[illegible]の丈が、ぎつこになつてゐるといふのも、やつぱりこんな[illegible]から來るのかも知れない、などと考へた。

何でも同じやうなものだと考へた。へんな處で、おちつきを失つて、みんなひどい目に會ふのだと考へた。――そして蛇は聲を立てないから默つて、轢き殺されてゐるけれども、頭をちよこんと線路の上に出すまでには、隨分烈しい恐怖を感じたのだらうなどとも思つた。

三四日經つた日であつた。私は又線路を通つて見たら、その縞蛇の死體に蟻がいつぱいたかつてゐた。大きな身體を引きずつて行くわけには行かないものだから、その蛇の横たはつてゐる下の地面を掘つて、砂利の間の土をもぐらもちの道のやうにもたげて、それで蛇の身體を下から包まうとしてゐた。けれども、それが線路なのだからさうやつて一體どうするつもりなのか、蟻の仕事が私には妙に感ぜられた。

そしてあんまり日光の直射がはげしいので、蛇は腐らずに、みいらのやうに、かちかちに乾上りさうになつてゐた。

（大正七年九月）

水溜

何故思ひ出すと云ふわけもないが、時々私はその時の事を思ひ出す。

今からもう二十年位も前の事だ。私が十歳前後の時分、私の兄は大變亂暴な小學生徒だつた。牛込のA小學校に私が行つてゐる時分、二つ年上の兄は、私が八つで小學校に入つたのに引更へ、彼は七つで入つたので、私よりも三年も級が上だつた。

高等二年（今の尋常六年）の頃に、兄はもう學校中での餓鬼大將のひとりだつた。高等三年四年の生徒でも、兄の命にははいはいと云つて從つてゐた。その頃の小學校の生徒は今より亂暴だつた。丁度日清戰爭の後で、人心一般に殺伐な風があつたためかも知れない。――「決闘」と云ふ言葉がよくはやつた。毎日々々生徒の間に喧嘩があつて、それが大概學校の隣りの神社の裏手、よく私達が奥山と呼んでゐたところで行はれるのであつた。今日は誰と誰とが喧嘩するなどと聞くと、私達はその頃はやつた肩からかける皮の鞄をぶら下げて、それをばくばく音をさせながら駈け出して、奥山に見に行つたものである。――さういふ場合、私の兄はいつでも喧嘩の審判官と云つた格で、喧嘩する二人の人間の直ぐ横に突つ立つて、眼を光らせながら、二人の樣子をぢつと見つめてゐた。正々堂々と云ふのが、その頃の合言葉で、ちよつとでも卑怯な態度があると、「おい、卑怯だぞ」と私の兄が側から怒鳴つた。さうすると、喧嘩してゐる二人は、喧嘩のそれぞれの相手よりも、兄の方が餘計に恐いと見えて、もうそんなに喧嘩に氣が乘らなくなつてゐるのに、兄の手前、止すわけに行かないと云ふやうに、厭々ながら、强ひて元氣をふり起しては、「さあ來い、さあ來い」と、から元氣の大聲を出して、互に顏を撲り合つてゐた。……私はそれを、澤山の見物してゐる生徒の後から、よく窺いた事を覺えてゐる。

牛込にはA小學校と、もう一つそれに匹敵した位に大きいA・J小學校と云ふのがあつた。A小學校とそこの小學校とが、大變仲が惡かつた。その小學校にはNと云ふ區會議員の息子である餓鬼大將がゐて、それが率ゐるA・J小學の一隊と、兄の率ゐるA小學の一隊とが、戶山の原まで行つて、よく喧嘩をしたものだつた。三十人、四十人、時によると五十人位の生徒を、兄は率ゐて行つた。そしてみんなが、小さな木刀を、ふところの中から袴の下にかけて、隱してゐた。

兄はさう云ふ亂暴者だつた。――私は兄の庇護の下に、學校ではばの利く子供のひとりだつたが、それを得意に思ふよりも、心が萎むやうな場合の方が多かつた。

――私が十一の時に、一家が早稻田の鶴巻町に越した。その頃の鶴巻町は、今のやうなあんな賑かな町ではなく、その大部分が廣い田圃だつた。「早稻田田圃の眞ん中で……」と云ふ歌があつた位廣い田圃だつた。殊に私の內は家つづきの一番はづれにあつて、門の直ぐ前から、からつとした田圃が展けてゐた。

私はそこに引つ越してからは、學校から歸つて來ると、毎日、その田圃の中を駈けまはつて暮した。ザルを持つて行つて、田圃の中の小川で鮒を掬つたり、もち竿で蜻蛉を捕つたり、蝗を捕つたり、秋から冬にかけて、ヒルテン網で

雀を捕つたりした。――まるで田舎の子供の生活であつた。

季節は忘れたが、何でも、霽れるかと思ふと、直ぐざつと雨が來、雨が來たかと思ふと、直ぐ又雲が切れて、青空がのぞくと云つたやうな時分だつたから、六月の梅雨期か、秋雨の頃だつたやうに思ふ。門の前に立つて見てゐると、雲の蔭が田圃の上を、一方から一方へ向つて地圖のやうな塊で走つて行つたり、又、突然ざつと降り出した雨が、見る見る遠くの方から灰色の煙となつて此方に近づいて來たりするのが見えた。

或午後、その時分始終私のところに遊びに來た吉田と云ふ級友と、私はその田圃の中を天神町の方へ抜けてゐる小徑の上で遊んでゐた。もち竿を持つて蜻蛉を捕つてゐたやうな氣もするし、又蝗か何かを捕つて歩いてゐたやうな氣もする。すると、突然、

『やい』と私達に向つて呼びかけたものがあつた。見ると、私達よりも三つばかりも上かと思はれる、酒屋の小僧らしい子供が後に立つてゐた。胸の上で十字に手を組んで、その指先を、袢纏の中に一寸突つ込みながら、にやにや意地の悪い笑を浮べてゐた。

私も吉田もどつちかと云ふと臆病者だつたので、相手の様子に脅かされて、二人とも顔を見合はせたまま、默つてゐた。

『やい、手前達は生意氣だな。……ぶん撲るぞ、こん畜生！』とその小僧が云つた。

私と吉田とは何も顔を見合はせてゐたが、別段撲られる理由はないと思ひながらも、併し子供の喧嘩と云ふものは、大概そんな風にして、理由も何もなく始まるので、私達は恐ろしくなつて來た。――二人は急に家の方へ向つて逃げ出した。

『こん畜生、こん畜生』と云つて、小僧は少し追つかけて來たが、そのまま立止つて、後から小石を拾つて投げかけた。ころころと小石が私達を追ひ抜けて、地面の上を轉がつて行つた。

私達が家の門の前まで來た時、私の兄が門から丁度出て來た。私達は直ぐ兄にその事を訴へた。

『よし』と兄は云ふと、直ぐつかつかとその小僧の方へ早足で寄つて行つた。小僧は一町ばかり先の田圃の側にしやがんで、懐中から卷煙草を出して、火を點けてゐた。――十三四の小僧が、さうして煙草を喫むところがふてぶてしく見えた。

私達は兄の後から、今度はいそいそとして蹤いて行つた。『生意氣だ、煙草なんか喫んでゐやがる』と兄は呟いた。

『おい、お前一寸此方に來い』と兄は小僧の前に行つて云つた。

『なにを！』と小僧は云つて立上つた。がその様子には多少ひるんでゐるところが見えた。

――『こいつ等が、俺の事を小僧粉にして團子にしよつてからかやがつたからだ』

『そんな事を云ふものかい』と私と吉田とは口を揃へて云つた。

『まあ、いいから此方に來い』と私の兄はおつついて歩き出した。小僧は默つて蹤いて來かけたが、徐々元氣がなくなつて、それでも口だけは、ヘッ、ヘッと冷笑するやうな音を出してゐた。

私は兄が小僧を何處につれて行くのかと思つて、兄や小僧の後から、蹤いて行つた。少し行くと茗荷畑があつた。そこから小徑が二本に別れて、一本の細い方には、兩側に細いくぬぎの並木が立つてゐる。兄はそこまで來ると、細い方の徑に曲つた。そして五六間行くと、田圃の中の小川から引いた灌漑用の水溜があつた。そこで兄は立止つて、振向きながら、

『やい、こつちを向け』と云つた。

「なにを」と云ひながら、小僧は兄と面と向つて突つ立つた。「何が何でい……」

小僧の身長と兄の身長とは、殆んど同じ位の高さであつた。併し兄の方がずつと瘠せてゐた。

いきなり兄の手が小僧の肩にかゝつたかと思ふと、小僧の肥つたからだの姿勢がぐらぐらと崩れて、頭から側の水溜の中に轉がり落ちた。

「馬鹿野郎」兄がかう叫んだ時には、小僧の身體全部が、水溜の中に完全に藻繰つてゐた。

『さあ、行から』と兄は笑ひながら云つて歩き出した。併し私はその光景に半分快感を覺えながら半分吃驚してゐたので、兄と一緒に引つ返しかけても、後を振返りつづけてゐた。

その灌漑用の水溜は、それ程深くはなかつたが、併しその底が柔かなので、泥深かつた。私達が四五間行き過ぎた頃、小僧はやつとその中から、這ひ出したが、その着物も頭も顔も手足も、泥で眞黑になつて、何だか溝泥を浴びた坊主のやうに見えた。——小僧は兩手をへんにぴよいぴよいと振つた。多分手の泥を拂ひ落すためだらう。それから兩手で顔を撫でるやうにしてゐたが、

『やい、やい』と泣聲のやうな聲で怒鳴つた。そして私達の後から、『お前んところに云ひつけに行くぞ。やい、やい』と喚きつづけてゐた。

『構ふもんか。捨てとけ、捨てとけ』と私の兄は云つた。私は内に云ひつけに來られたら、兄も私も困るだらうと思つたが、兄がおちつき切つてゐるので、やや安心しながら、内の方へ歩いて行つた。——可哀さうだと云ふ氣もかなりして來た。

「やい、やい」と罵りながら、小僧は五六間間隔を置いて、後からついて來た。

兄は内の門まで來ると、

「おい、お前達、門の内に入つてゐろ、來やがつたらどやしてやるから」さう私達に云つて、そこに立止つて、そろそろと近づいて來る小僧の方を向いて、『來るなら來て見ろ。さあ、もう一度ぶち込んでやるから」と云つた。

小僧はぴたりとそこに立止つてしまつて、薄暗く汚れた顔から、白い齒を出して、何か云ひかけたが、兄の見幕に恐れてか、そのまくるりと向うを向いて、歩き出したかと思ふと、急に「わあつ」と云つて泣き始めた。そして天神町の方へ行く例の小徑を、聲をはり上げて泣きながら歩いて行つた。

私達は顔を見合はせて、初めくすりと笑ひ合つたが、何故か妙に薄氣味悪くなつて來た。私はへんに恐くなつたので、門から玄關の方へ逃げ出した。吉田も一緒に逃げて來た。すると、兄もたうとう門をぴたりと締めて、私達の後から逃げ込んで來た。門から玄關までは、三四十間の距離があつたから、此出來事を、内の者は誰も知らなかつた。私達は玄關から上らずに、裏にまはつて、兄と私との居間に定められてゐた六疊の部屋の縁側から、そつと障子を開けて、部屋の内に忍び込むやうに上り込むと、そのまま目白押しに身體をくつつけるやうにして坐つて、長い間、互に何も云はずに、息をころしてゐた。

（大正九年一月）

或夜

或夜、家人が寢鎭まつてから、私がひとりで机に向つて起きてゐると、何ものかが疊の上をカサコソと這ふ小さな音がした。私は讀んでゐた雜誌から眼をその音の方へ移すと、そこには足の邊りに氣味の惡い赤味を帶びた大きなげぢげぢが一疋歩いてゐた。誰でも此の醜い蟲を好きな人間はあるまいが、私もこれを非常に嫌ひである。私は嘗ては此の蟲が眼に觸れると、どんな場合でも叩き殺して、火箸で挾んで庭に捨てたものであつたが、近頃はどういふものか餘りに殘酷なやうな氣がしてそれが出來なくなつてゐる。そこで私はげぢげぢが這つて來る方向の二三寸先の疊の上を、机の上にあつた雜誌で輕く叩いた。するとげぢげぢは急に驚いたやうに、その澤山の細かい足を敏速に動かしながら、くるりと方向を轉じて、もと來た方へ引つ返して行つた。私はそれが簞笥の後に逃げ込んだのを見ると、再び雜誌を前の位置に置いて讀み始めた。

それから三十分ばかりも經つた頃であつた。私は再びカサコソと云ふ音が、右手の障子にきこえるのに氣がついた。げぢげぢは今度は疊の上を歩かずに障子を這ひ上りつつあるのであつた。私は再び雜誌を取つてそれを追はうとしたが、ふとそれを靜かに觀察する氣になつた。

げぢげぢは靜かに障子を這ひ上つて行つた。極めて靜かに、極めてのろりのろりとである。三四寸這ひ上るかと思ふと、立止つては、何事か考へてでもゐるやうに、ぢつと身體をすくめてゐる。が、やがて鴨居に達した。白い壁と鴨居との間を今度は横へ向つて這ひ始めた。その姿が鴨居の木の上を通るので時々見えなくなつたり現はれたりした。

その中に、今度は壁の中を突き拔けてゐる縱の柱の平らな面の上を渡らなければならなくなつた。その柱の面と鴨居の木とは少しの高低もなく眞平らでつらつらしてゐた。

そこまで行つたげぢげぢは又も立止つて、何だか躊躇でもしてゐるやうな、考へてでもゐるやうな風に見えた。そして、一寸その柱の面の上に身體の半分ばかりも這ひかけると、急いで引つ返して、そして又ぢつと躊躇してゐるのである。げぢげぢはその努力を幾度も繰返して、柱の幅の三分の一位も這つたかと思ふと、きまつて屹度引つ返してしまつた。それが何だかさも恐々してゐるやうに見えた。丁度我々が丸木橋でも渡りかけては、恐ろしくて引つ返して來る時のやうな樣子に見えた。――私はかなりの興味を惹き起された。げぢげぢがあんなに澤山の細かい足を持つてゐながら、何故あの柱が横切れないのだらうと思つた。あのやうな足を持つてゐても滑るのだらうかと思つた。私は結局どうするだらうと思つて熱心に見つめてゐた。

と、凡そ十二三度もさう云ふ努力を繰返してから、彼はあきらめでもしたやうに、又もと來た方へ引つ返しかけた。が、急に思ひ直したやうに、今度は壁を上へ向つて這ひ上り始めた。彼は天井に達した。そして天井と壁との境にある横木に沿うて、易々と縱の柱の上を越した。（丁度その横木の下から縱の柱の頭が始まるやうになつてゐた。）――私はかなり驚きを感じた。縱の柱は木目が縱なので滑るけれど

も、横木は木目が横なので滑らなかつたのである。

私は此の小さな蟲にそれだけの思考力があるのに一種氣味の惡さを感じた。殊に、壁の上で一遍引つ返しかけながら、急に思ひ直したやうに壁を這ひ上つて、横木の上を通ると云つたやうなデリケエトな思考力があるのかと思ふと、何となく恐ろしさを覺えた。

かうして辛く柱の難關を通過した蟲は、又しづかにのろりのろりと壁と鴨居との間を這つて進んで行つたが、やがて障子の二三寸開いてゐるところまで來ると、その隙間から部屋の外へ出て行つてしまつた。

私はそこまで見終つて、再び雜誌に眼を移したが、暫くの間心持が今のげぢげぢの行動を考へる方へ走つて行つて、ペエジの上には集中しなかつた。

翌朝私が眼をさまして、顏を洗ふために二階から下りて行きかけると、梯子段の右手の壁にそのげぢげぢがぴつたりと縮こまつて密著したまゝ死んでゐるのが眼についた。私はその時初めて、昨夜柱の縱の木目の上を横切れないで苦しい努力をしてゐた此の蟲が、もう死ぬ間際であつたために、力がなかつたのであつた事を了解した。

世は事もなし

彼はアルコホルを飲んだといふ事が、自分で苦笑されるやうな氣になつた。大體彼は酒類のちつとも飲めない男であるのに、若し人が見たら自棄酒とでも思はれるやうな形で、うまくもない酒をぐいぐい飲んだといふ事が苦笑された。いや、そればかりではない。彼は丁度人間が非常な絶望に陷つた時にする形式をすつかり追はうとしてゐたのだつた。そんなに自分は絶望してゐるのだらうか？

彼はさう考へると、をかしくさへなつて來た。自分はちつとも絶望などしてはゐないではないか。實際、腹の底の方では何の打撃も受けてはゐないではないか。

『それ程お好きではないんでせう？』銚子を持つて酌をしながら、女は心配さうに云つた。

『ああ、大體好きではない方だね。初めの五六杯かな』全然飲めないといふ事も業腹な氣がして、彼はそんな風に云つたが、併し實際は、一口目から彼は苦い藥のやうな氣がしてゐた。

『さうなんですつてね。どなたでも。――うまいのは最初の五六杯で、後は唯惰性とかで召上つていらつしやるんですつてね』

『ああ、さうだよ。實際惰性だよ。莫迦なもんだね』

『でも、殿方はさうやつて、ぱつと何も彼もお忘れになれるんで結構ですわ』

『ははは、君達には何か忘れられない事がそんなにあるのかい？』

『それはありますとも。女がかうして三十面下げて、こんなところに奉公して居りますのには、それ相應の苦勞がございますとも』

『さうでもなささうに見えるがな』

『おほほ、そんなに暢氣に見て頂ければ、それだけでも暢氣さうで結構ですわ』

『さうかなあ。さういふものかなあ』と云ひながら、彼は急にこの女に、今日の出來事を一寸喋つて見たくなつた。全體を云はなくとも、一寸その輪郭だけでも、匂はせて見たくなつた。『俺が今日からして酒を飲んでゐるのは、これでなかなか自棄酒なんだぜ』

『おほほほ、好かつたわね。これでなかなか自棄酒なんだぜ、は。――暢氣な自棄酒があるもんですわね』

『茶化しちや駄目だよ。折角、俺がかうして眞面目に話さうと思つてゐるのに、茶化しちや駄目だよ。――實際自棄酒なんだよ。俺は實際すつかり失望してゐるわけなんだ』

『まあ、何に失望していらつしやいますの？』

『俺は今日不義を見つけたんだよ』

『不義を？』

『ああ、而も女房の不義なんだ。女房と云つては云ひ過ぎるかな。兎に角、俺の同棲してゐる女が、他の男と不義をしてゐるところを見つけたんだよ』

『まあ』と女は呆氣に取られたやうに眼を瞠つたが、急に笑ひ出して、『まあ、冗談も好い加減になさいましよ。そんな事は、冗談にも被仰るもんぢやありませんよ』

『冗談ぢやないんだよ。ほんたうなんだよ。人の云ふ事を、頭から信じないのは癪だな』躍起になつて、彼は實際眞顏になつてさう云つたが、女が笑つてゐて取り合はないので、彼も笑ひ出した。そしてそんな事を喋るのが、一遍に

莫迦らしくなつて來た。
彼は『ああ』と云つて、仰向きに轉がると、莫迦にをかしくなつて來て、わつはは笑ひ出した。洋服の腹のあたりがボタンで引つぱられる氣がしたが、その腹のあたりを撫でながら、彼は止度なく笑つてゐた。飲みつけない酒のために、頰の筋肉が締りがなくなつたのか、彼の笑にも締りがなかつた。天井を向いて、笑ひながら、彼は今夜は何處に行からかと考へてゐた。もう十二時近かつた。實際、彼は歸つて行く家のない事を、改めてはつきり考へた。
『面白い方ですこと』三十女はさう云ひながら、座蒲團を二つに折つて、彼の頭の下に當てがつた。彼はされるままになりながら、下から女の顏を見上げてゐたが、この女は二十代の時には、相當に美人だつたらうと考へた。そんな事を考へながら、彼はさつきからとまらない笑顏で、女の眼をぢつと見た。
『君は美人だね』突拍子もない調子で彼は云つた。
『まあ、何を云つていらつしやるの。こんなお婆さんを掴まへて』
『いや、美人だよ、確に美人だよ』おつかぶせるやうにさう云ひながら、彼は急に身體を持上げて、『君は此處に泊つてゐるの、それとも通ひ?』
『通ひですの』
『ぢや俺と一緒に歸つてくれよ。俺は家がないんだ。——實際なんだ。俺の女房……いや、俺と同棲してゐた女が不義した家などに歸つちや行かれないんだよ』
『ほんたうですの、そのお話は?』
『ああ、ほんたうなんだよ。だからさつきから茶化さずに聞いてくれと云つてゐるぢやないか』
『まあ』女はいたましいと云つたやうに、眉をひそめながら彼の顏をぢつと見てゐたが、子供でもあやすやうに、彼の頭を輕く撫でた。突發的な同情が彼女の眼に動いた。と同時に、彼女の顏は一種の好奇心——三十女の好奇心に燃えて來た。彼女は他の部屋々々に氣をくばるやうな顏をして、それから小聲で彼の耳に囁いた。『一緒に歸つてはまづございますから、△△橋のところで……』
『よし、△△橋のところで』
女は勘定書を取りに階段を下りて行つた。
彼は鳥屋を出て、人通りのなくなつた電車道を歩いて行つた。大分醉つてゐるつもりで、足がふらふらするつもりでゐたところが、そんなでもなかつた。あたり前に歩けた。兩側の店はみんな締つてゐた。電車が時々急速力で走つて行つた。豚のポンチ繪のやうな形をしたフォードのぼろ車の朦朧タクシイが、時々彼の前を通る度に、速力をゆるめて彼に聲をかけたが、彼が返事をしないので、そのまま走り去つて行つた。
三日程前に大雨が降つて、それからめつきりと涼しくなつた、さうしたしつとりとした九月の夜だつた。
彼は一二町歩く間、何も考へてゐなかつた。考へなければならない事があるのに、そんな事とは別な事が浮んで來る、と云つたやうな心持だつた。——何も彼も偶然だ、偶然の連續だ、彼は抽象的にそんな事を呟いてゐた。それでいいんだ。考へる事も、苦しむ事もありはしない。偶然の連續、それでいいんだ。そのままに押し流して行けばそれでいいんだ……
その夕方、彼はいつものやうに彼の家に、社から歸つて行つた。それは省線電車で東京驛から四十分も乘らなければならないやうな郊外だつた。彼はそこに小さな家を持つてゐた。とい

ふのは、一年程前に、故郷での父の死が、彼に豫期しない遺産の分配をもたらした。それは大した金ではなかつたが、併し若い新聞記者の彼には、纏まつた金だつた。彼は人の勸めで、その郊外に、四間ほどの小さな家を建てたのだつた。

門と云つても扉のない、二本の丸太が立つてゐるだけの門だつた。その門を入るまで、彼は何も考へてゐなかつた。が、それを入つて、玄關まで二三間あるが、それを二三歩あるいた時、彼は不圖へんな氣がしたのである。それがどういふわけだか、彼自身には解らなかつた。けれども、彼はその家の中にゐるのが、お富ばかりではない、といふ氣が不圖したのである。そんなやうな神經を割に持つてゐない彼は、自分にも經驗のないさういふ一種の豫覺にどぎまぎした。それで、彼は殆んど無意識に足を忍ばせて、玄關に行かずに、庭の方へまはつて行つた。緣側にすりへつた男下駄が脱ぎ捨ててあつた。彼はその下駄が直ぐ隣家に下宿してゐる或私立大學の學生の下駄である事を知つてゐた。

『いけません、いけません』

お富がそんな事を云つてゐた。が、それは抵抗力を持たない、囁くやうな聲だつた。そしてその一言きりで、後は妙に緊張した沈默に落ちて行つた。

偶然、而もさうした際に、丁度行き合はせたといふ事は偶然中の偶然と云つて好かつた。が、彼は何か總てが豫期通りだ、と云ふやうな氣が、へんにした。――かういふ事はいつか一度は經驗すべき事なんだ、といふやうな事を、前に考へた事があるやうな氣がした。

彼は身内の熱して來るのを感じた。が、不思議な事に、少しも驚いてはゐなかつた。

彼は足音を忍ばせて、再び門の外に出た。多少膝頭の顫へてゐるのを自分でも感じたが、心持は平靜であつた。彼は門から低い要垣である彼の庭の垣根のはづれまで引つ返した。彼はその土地の坪をはかるために、歩數で門から庭のはづれまでの距離を前にはかつた事があつた。その時の事を思ひ出して、十二歩半と歩數を腹の中で數へてゐた。それで、この邊でもういいだらうと考へて、それから靴の音を高くして、再び門の方へ引つ返した。門についてゐる郵便箱を、カチカチと音をさせて探つた。それから、玄關の格子戸を音高く開けて、内に入つた。

それ程の困亂は家の内にはなかつた。かすかに緣側の障子の開く音がしたのを、彼は聞きのがしてはゐなかつたが、併しその外は、彼の豫想通りに靜かだつた。小走りにぱたぱたと足音をさせながら、お富が出て來て、玄關の障子を開けて、そこに手をついた。

『お歸んなさいまし』と小聲で云つたが、一體が小聲でしか物を云はない彼女としては、いつもとさう違つてはゐなかつた。

彼は彼女の顏を見なかつた。そして靴を脱ぐと、彼は家の中に入つて行つた。彼の鼻はそこに人いきれのにほひでも嗅がうとするやうに、ひくひく緊張してゐた。

彼が上衣を脱ぐのを、彼女は手傳ひかけたが、その手が少し顫へてゐた。彼は突然ぐるりと彼女の方を振向いた。

『おい、今來てゐたのは誰だい?』

『……』ぎよつとしたやうに、彼女は彼の顏を見上げたが、そのまま俯向いて默つてゐた。

丸顏の彼女は鼻も高くなく、眼もどんよりしてゐたが、色が白くつて、キメがこまかで、何處か水蜜桃のやうな肌ざはりがあつた。――その水つぽいやうな艶々しさが、へんに食慾をそそるところがあつた。

『隣りの箕田だらう？』

『……』彼女はうなづいた。

彼は上衣を脱いだままで、そこの長火鉢の前に腰を下ろした。彼は怒らうかどうしようかと考へてゐた。怒り始めれば一遍に腹が立つて來さうな氣がしたが、怒らずに濟ませれば、濟ませるやうな氣もしてゐた。

けれども、箕田の事を考へると、むらむらと不愉快になつて來た。二十二三なのに、ひと廉この世の中が解つてゐるといふやうな顏をした、へんに大人びた青年だつた。

『俺は知つてゐるんだよ、何も彼も』彼は云つた。

『……』お富は默つてゐた。

『俺はもう少し前、一遍歸つて來たんだ。そして俺は庭まで來て、それから引つ返したんだ』

『……』お富は極端に脅えた、寧ろ無表情な眼で、彼の顏を再びちらりと見たが、又直ぐうつむいてしまつた。彼女の耳や襟元には血が上つてゐるのに、頬つぺたは寧ろ血の氣が失せて、蒼白かつた。彼女は全身が顫へてゐた。

怒らうか、と再び彼は考へたが、何かこの女に向つて怒るのは、張合がない氣がされた。

『お前は無抵抗の女だからな』

『……』

『抵抗出來ない女なんだからな』

『……』

『俺はさう云ふ點で、お前を信用出來ないやうな氣は前からしてゐた』

お富は息を殺して啜り泣き出した。

彼はずばりずばりと、口に上つて來る言葉を三言や四言吐き出すやうに云つた。口の中にある蟲けらでも吐き出すやうな調子だつた。

彼がこの家を建てる少し前の事だつた。彼は或デパアトメントストアで彼女を見つけた。彼女は洋品部の賣り子をしてゐた。彼が彼女に言ひ寄るきつかけは、ネクタイを二度買ひに行くだけの簡單な手數しかかからなかつた。彼は殆んど命令的に彼女を待合せる時間と場所とを彼女に云つた。彼は戀愛の道程を彼女との間に取らなかつた。彼の云つた通りの時間に、云つた通りの場所に姿を現はした彼女は、そのままその晩彼の下宿につれて行かれた。彼は精神的なものをそこに少しも感じなかつた。けれども、木になつたまま熟れかけてゐる果物の新鮮な味は、青い中にむしつて無理に熟れさせたやうな、時々獨身の彼のやるせなさを捨てに行くプロスティチュートの干乾びた味とは、とても比較にならないものがあつた。彼は彼女を妻にしようといふ氣など少しもなかつた。そんな風な精神的なものは少しも感じられなかつた。それだのに、彼は彼女に對して、或忘れられない味覺を覺えさせられた。

彼は家が建つと彼の家に彼女をつれて來た。彼女は彼を愛してゐるかどうか解らなかつた。大體さう云つたやうなはつきりした感情の動きを、彼は彼女に要求してゐなかつた。さはれば落ちる果物のやうなみづみづしい肌ざはり——それ以外に、彼女が何等かの意思を持つてゐるかどうかは、一年の同棲の間に、彼には解らなかつた。といふよりも、彼には問題にならなかつた。

彼は啜り泣いてゐるお富の襟足の後れ毛——上氣した皮膚に動いてゐる黑い後れ毛を見てゐると、へんに衝動的な心持を感じた。突發的な情熱で彼女を[illegible]きしめたいやうな氣がした。その肉體に對するいとほしさが、哀感と云つた感じで、彼の身體に來た。が、彼はそれをおさへた。おさへながら、隣家の大學生が、彼女に對して衝動的になるのが、解らない事はないやうな氣も一寸した。それは錯綜したへんな心理狀態だつた。彼はデパアトメントストアの洋

品部の賣り場にもたれてゐる彼女に對して感じた時の自分の心持が、戀愛とは全然離れながら、而も彼女を手に入れたいといふ衝動を、一時も捨てる事が出來ない程烈しいものであつた事を思ひ出した。彼女の薄ぼんやりした、無意思を表はしてゐるやうな肉體は、それ自體が男を誘つてゐる誘惑だつた。

輕くして彼の考へた事は、この結末をどうつけようかといふ事だつた。この女を許さうか――それは六ケ敷い事ではなささうに思はれた。いや、彼はその點で女を責める氣はもう消えかけてゐた。けれども、この成熟した彼女の肉體が、蠅のたかつた果物のやうな氣が、一遍にして來てゐた。その蠅のたかつたといふ記憶なしに、彼女の脣に觸れる事は到底不可能のやうな氣がした。――その點が彼には忌々しくもあり、何か堪らなく殘念な事に思はれた。彼女を許したとしても、さういふ記憶までも、消えたものとして、自分を振舞はせるわけには行かない。……

△△橋まではさう遠くはなかつた。彼はそこの橋の上まで來ると、欄干にもたれて、黑々として流れて行く川を見てゐた。先日の大雨の名殘りで、水量はまだ多少増してゐた。空は曇つて低かつた。月は見えなかつたが、黑雲の後に、其在所だけは、ほの明るく示してゐた。彼はそんな空や水を見てゐると、『閑寂』と云ふやうな言葉を吐きたいやうな暢氣な氣持になつてゐた。もう少しお富の始末について考へて置かなければならないやうな氣がしてゐながら、それがどうしてもしつくり來なかつた。彼が突然立上つて、何も云はずにあのまま家を出て來てしまつた後、お富はどうしてゐるだらう。あのまま默つて泣いてゐるだらうか。いや、泣きもしないで、ぼんやりしてゐるだらうか。ぼんやりしながら、彼女には何の考も纏まつて來ないに違ひない。彼が出て來てしまつた後、心配に堪へかねて、隣家の箕田をそつと呼び出しにでも行くか――それだけの智恵――いや、決斷心――も彼女には湧かないに違ひない。

何か人事ながら齒痒いといふやうな氣が、へんに彼にはされて來た。

だが、若しかすると、彼の出て行つた氣配を知ると、再び箕田が來てゐはしないか。彼の二十二三の頃とは違つて、ませて狡猾な眼付をしてゐる大學生の大膽さが、むしずが走るやうに彼の胸に來た。――心が何か解らず朦朧とした不安と心配とに驅られながらも、結局再び大學生に自由にされるお富の無抵抗な肉體が、彼の眼の前に浮んで來た。それを貪り食つてゐる狐の眼付、そんな風に箕田の顏が彼の頭に描かれて來た。

『たかれ、たかれ、蠅よ』彼はそんなことを呟いたら、をかしさと苛々しさとが一緒に浮んで來た。『もう俺には惜しくない果物だ。たかれ、たかれ、蠅よ』

彼はもう歸るまいと考へた。それにしてもお富の當座の生活費はどうかしてやらなければならないが。――だが、そんな事は後で考へよう。

彼はそれよりも今し方偶然に知つたあの三十女が、一刻も早く現はれるのを待つてゐた。彼の肉體がそれを待つ――そんなやうな氣持になつてゐた。

『タクシイを止めるから』

『何處にいらつしやるの？』と女は小聲で訊いた。

『何處つて、俺の行くところについて來てもいいんだらう？』

『……』女はそれに答へずに、一寸默つて

ゐたが、「それよりもあたしの家へいらつしやらない？』
『君の家に？』
『ええ、あたし部屋を借りてゐますのよ。近くに』
『だつて變ぢやない？』
「ちつとも。きかれたら國から旦那が來たつて云ふわ』
女は笑ひ聲を立てた。
薄暗い横町をいくつか曲つて、とある格子戸の玄關を女は開けた。戸は一枚だけ締つて、一枚は女の歸りを待つために開けてあつた。
『唯今』奥に向つて女は聲をかけた。
『お歸んなさい』皺嗄れた老婆の聲が寢ぼけたやうに、電燈の消えた暗い奥から漂つて來た。
戸締りをした女は、
『さあ、構ひません。此處から梯子をお上んなさい。待つていらつしやい。あたし上に行つて電燈をつけますからね』
彼は女の後に從つて梯子をのぼつた。ぎしぎし軋む梯子だつた。じめじめした濕つぽい匂ひと、油蟲の匂ひとがした。
『ここがあたしの部屋ですの。汚い部屋でせう』さつき鳥屋で見た時よりも、若やいだ笑顏で彼女は笑つた。
比較的大きな鏡臺、箪笥、長火鉢、それから二枚揃つた銘仙の座蒲團……兎に角、部屋に似合はず、總てのものがきちんと片づいてゐた。
彼は好奇心をもつて、其室内を見まはしながら、長火鉢の側にあぐらをかいた。
火鉢を挾んで女は坐つて、何といふ事なく、彼の顏を見て頰笑んだ。
『君は此處にひとりでゐるの？』
『さうよ』
「旦那さんは？』
「そんな事聞きつこなしよ。何も身の上なんか話し合はなくつたつていいぢやないの』
「それもさうだ」彼は云つて笑ひ出した。
明け方、彼は眼がさめた。飲めない酒をのんだのが祟つたのか、右側が偏頭痛してゐた。彼は女が置いてくれた枕もとの水差から水を飲んだ。女は彼の側に口を開いて眠つてゐた。青い蔽ひを通した電燈のほのかな光で、疲れ切つた三十女の皮膚は、かさかさして、何の艷氣もなく見えた。
彼は昨夜來の事を、不思議さうに考へ出してゐた。何も彼も淺猿しいと云へば、一遍に淺猿しいやうな氣もした。けれども、この世の中の何かわけの解らない偶然の重り見たやうなものを感じて考へると、これも亦面白い成行きだといふやうな氣もした。
彼はカサカサした艷氣のない三十女が、突然に、昨夜初めて會つた彼にぶつかけて來た情熱を思ひ出した。――長い間男から離れてゐた女の貪焚、さう云つたものを、彼はまざまざと見た。偶然に初めて會つた男に、迸らせる情熱――そんな心持は、男にもあるが、女にもやつぱりあるといふ事を、彼ははつきり知らされた氣がした、何處の誰とも解らない男を、いきなり部屋に引つぱつて來て、彼女は平氣で眠つてゐる。何の不安もないやうな顏をして眠つてゐる。
彼は人間が腹の底に持つてゐる樂天主義をそこに見る氣がして、頰笑まれて來た。
もう一度眠らうと思つたが、飲みつけない酒のみには、醉がさめると却つて眠れなかつた。彼女の起きるまで、このえたいの知れない場所の、えたいの知れない二階に横たはつてゐるのも閉口だと考へた。
彼は今日こそ片づけなければならない問題があるといふ氣がした。兎に角一度歸つてお富の始末をつけなければならない。彼は女との同棲

を打切つて、又昔のひとり身になる事の愉快さも考へられた。彼はお富に對しては、實際何の腹も立つてゐなかつた。彼がむさぼり食はうといふだけの意味で、木からもいで來た果實は、彼は既に食べつくしたといふ事も云へない事はない。それの後味に多少の心を惹かれない事もないが、併しそれだとても新鮮といふやうなものは、彼には失はれてゐる。――いや、若しかすると、その新鮮味を味へるのは、彼よりも寧ろ、あの狐かも知れない。――彼は不圖何か滑稽な事のやうな氣がして來て頰笑んだ。新鮮も新鮮でないも、求める氣持の强弱によるのかも知れない。若しかすると、案外この自分の横に横たはつてゐる三十女が、或は自分から『新鮮』などを味ひ出したのかも知れない。

彼は苦笑した。が、總ての事は別段不愉快でもなかつた。

『それではお富を箕田に吳れてやらうか』彼はそんな事を考へた。箕田に會つて、箕田の心持でも聞いて見ようか。――でも、その芝居がかつた會見は、豫想するだけで彼の心を擽つたくした。それよりも、成行きにまかせればいい。彼はお富と別れればいいのだ。その後はお富の自由にまかせればいいのだ。彼は箕田と一緒になる彼女を想像したが、その事が今は別段不愉快でもなかつた。それよりもお富に退屈した場合、箕田がどんな殘酷な事でもしかねないやうな氣がして來ると、いらいらした。

彼女はそれよりも、やつぱりデパアトメントあたりの賣り子が似合ひさうだ。と云つて、再び同じ店の同じ洋品部の賣り場にもたれてゐる彼女を想像する事は、彼には苦笑されるが。

『兎に角、當座の生活費だけはどうかしてやらう』と昨夜考へかけた事を、彼は本氣で考へ始めた。――父からうけついだ遺產のわけまへは、彼の手にはもう殆んど殘つてゐなかつた。それで結局、彼は郊外のあの家を賣る事を考へた。僅か四間の小さな家だから、幾らにもなりはしないが、お富と別れた後、ひとりであの淋しい郊外に住んでゐる氣もなかつた。彼は昔の下宿生活に逆戻りするつもりでゐたが、下宿して、あの家を人に貸して、家賃など取り立てるのも、滑稽な事に思はれた。それよりも賣つてしまつた方がいい。そしてその賣上げ高の半分をお富にやらう。半分は自分の小遣にしてもいい。が、半分やれば、女の事だから、當座の身の振りかたはついて行くだらう。

彼はその計算をもつとはつきりしたくなつて來た。それで寢床から這ひ出して、彼は紙切を探し始めた。彼のポケットに萬年筆はあつたが、丁度紙片は何もなかつた。彼は長火鉢の抽斗を開けた。わけの解らない書付だの受取だのが入つてゐた。彼はそれ等のものを掻き分けてゐる中に、一枚の子供の手で書いたはがきが眼に觸れた。彼は何の氣なしにその文面を見た。『母上樣』といふ文字が眼についた。彼は昨夜一夜を一緒に過した女について、今まで氣がつかなかつたものを急に氣がついた氣がした。彼はショックに似たものを胸に受けた。彼はそのはがきを讀んで見た。

『母上樣、新ガツキガハジマリマス、僕ボウシガホシイノデス、コノマエノボウシハヤブケマシタ、
母上サマハイツオカエリニナリマスカ、夏ニオカエリニナルトヲバサマガイヒマシタガ、ヲバサマウソヲツキマシタ、
一度カヘツテキテクダサイ』

彼は女の方を振向いた。女は寢くたれたやうに、枕をはづして、口を半ば開き加減にして、すやすや眠つてゐた。

彼は何がなし大きく吐息した。

彼は音のしないやうに洋服を著た。そしてボ

ケットから十圓札を二枚出して、それを火鉢の抽斗に入れた。そして紙片に『これでお子供さんに何か買つて上げて下さい』と書いた。

昨夜通つた記憶を辿つて、じめじめした横町を幾つか抜けて、彼は△△橋の側に出た。まだ夜が明け切つてゐなかつた。電車も無論まだ通つてはゐなかつた。新聞配達が横町に駈け込んで行つた外は、往來には、犬が四五匹歩いてゐるだけだつた。

『波に漂うてゐる女』彼はふとそんな事を呟いた。それは三十女の事を彼はそんな風に呟いたのだが、考へて見ると、お富だつてさうだつた。いや、さういふ彼自身だつて、波のまにまに漂うてゐる人間の一人に過ぎなかつた。

淺猿しいといふ氣になつて考へれば、昨日以來の總ての事が淺猿しかつた。併し偶然のままに漂うてゐて、それで漂ひ切れれば、それでも惡くはないと云ふ氣がした。

彼は不愉快な事は何もないと考へた。これでもちつとも惡くはないのだと考へた。子供を愛してゐる母親の一夜の氣紛れ、それは子供とは何の關係もない事だ、人間の生きてゐる心の動きだと云ふ氣がした。寧ろいとほしいものだといふ氣がした。成熟した肉體を持つて意思を持たないお富、彼女の無抵抗も憎むべき事でも何でもない、何か自然の作つた愚直な愛らしいものの一つだ、そんな氣もした。

彼は不愉快な事は何もない、と心に呟きながら、薄墨色にほの明るくなつて行く、濕つた街を歩いて行つた。

（大正十五年九月）

哀れな女

とみ子は得意で、大變滿足だつた。彼女はひつきりなしに、はしやいで、ひとりで喋つてゐた。

『あなたは清水さん御存じ？　やつぱり畫家の。それ、御存じぢやありませんかね、あなたのお友達の板橋さんなんかとお友達なんですがね』

『會つた事はありませんが、噂は聞いてゐます』

『さうですかね、御存じぢやありませんかね。あたし多分御存じのことと思つて居りましたが……』

『それでその清水君がどうしたんです？』

その清水と云ふ人物が、小西の知合でなかつたといふ事が、とみ子には輕い失望だつた。けれども、それだけ又ざつくばらんに云ひ易いやうな氣もした。

『いえ、それは面白い人なんですよ、あの方。あたし可笑しくつて』彼女は思ひ出すだに可笑しいと云つたやうに、聲に出して笑つて、『あの方と來たら、何と云つたらいいんでせう、まるで狼のやうな眼をなさるんですよ。ぢつと人の顏を見つめて、スキがあつたら跳りかからうと云ふやうな樣子をなさるんですよ』

『ほう、さうですかね』小西はさう答へたが、別段面白くもなささうだつた。

『恐いつて云つたら、あの人なんかが一番恐うござんしたわ。ほんたうに何をなさるか解らない御樣子をなさるんですもの。それだもんですから、こつちでも虛勢を張つて、すつかりヷンパイヤ振つた樣子をして、どんどん高飛車に出てやりますの』

『ほう、さうですかね、なかなか婦人にもいろんな武器が要るもんですね』

『それは要るもんですわ。ずゐぶんいろんな方があるんですもの。――ほら、あなたはナニを知つていらつしやるでせう、大橋さん？――繪もお描きになれば、音樂もおやりになれば、近頃は又フランスの小說の飜譯をなさつたり、評論なども書いていらつしやる……』

『ええ、大橋二郎でせう、知つてますよ。あの男もやつぱりあなたに何だつたんですか？』

『おほほほ』彼女は彼の問には直接答へないで、一寸宙を仰いで、輕快に笑つた。彼女の步いて行く足取りにも、彼女のほつそりした撫で肩にも、彼女が彼女の今喋つてゐる事に大變滿足し、彼女自身の魅力にひとりで誇らしさを感じてゐる樣子を示してゐた。

『ほう、さうですかね、あの大橋がね、ほう』小西は唸るやうに云つた。

『ええ、でも默つていらつしやつてね。こんな事あたしがあなたにお話ししたなんていふ事が知れたら、あの方可哀さうですからね』

彼女は小西に寄添ふやうにして、彼の顏を窺き込みながら、薄物の肩掛の襟を右の手でつまんで、ダンスでもする時のやうに身體をくねらせる姿態――彼女の癖になつてゐる姿態を作つて見せた。『それは根氣の好い方ですの。あたしがまだ××座に出て居りました時分、毎日毎日樂屋に見えたんですよ。今日は一寸向島まで用があつたから寄つたんだ、直ぐ歸る、直ぐ歸る、そんな事ばかり云つてゐるんですの。人の顏を見れば、通りがかりに一寸寄つただけなんだといふ顏をなさるんですの。――一年の間、

毎日それだけの事を云ひに、樂屋にいらつしやつたやうなものなんですよ』

『それでたうとうそれ以上の事は云ひ出さなかつたわけなんですね？』

とみ子は肩をぐつとそびやかした。

『そんなスキはあたしが見せなかつたんですもの。――あたしはさういふ女なんですよ。乘ぜられさうになれば、いつだつて、きつとなる事が出來るんですよ』

『……』

小西はそれには答へずに、苦笑してゐた。

『それから宮川さん……今日會にいらしつていらしつた宮川さん……あたしあなたには何でもお話ししたい氣がしますの。あの宮川さんもやつぱりさうなんですよ』

『あの小説家の宮川友之助？』

『ええ、あの方ですの。あの方も根氣よく手紙を下さつたんですよ。あの方はあの通りの文章のうまい方ですもの、お手紙を讀んでゐますとそれは引きずられるんですよ。でもあたし……』

『ほう、そんな事があるんですかね。あの宮川もやつぱりあなたに失敗したんですかね。あの男は流行作家ではあるし、それに御婦人連中にはなかなか人氣男なんですが、あれでもあなたには氣に入りませんかね？』

『ええ、あたしあんな風に始終手紙を頂くと、何だか却つてイヤになつてしまひますの。何だか自分の手紙の文章にかかつたら、どんな女でも、抵抗が出來ないと云ふやうな顏をしていらつしやるやうな氣がして。……おほほ、あたしさういふ女なんですの。そんなに安つぽくどうでもなる女だなんて思はれると、ぐつと腹が立つて來ますの』

『……』

小西は再び苦笑しながら、ちらりと彼女の顏を見たが、その眼には一種異樣な光があつた。が、彼女はそれに氣がつかなかつた。

二人は薄暗い廣い往來を歩いてゐた。そこは自動車が時々往復するだけで、人通りは殆んどなかつた。左手には濠があつて、その濠の向う側には、木立の中に兵營の屋根が尖端だけ見えてゐた。十月半ばの風のない夜だつた。暑くなく寒くなく、秋蟲の音が澄んだ空氣に聞えてゐた。

その晩は、△△會の毎月の例會が或レストランで開かれた。それは文學者、畫家、音樂家と云つたやうな連中が集まる肩の凝らない會で、とみ子はそこの定連だつた。

彼女は今夜その會で最初から得意で大變滿足だつた。何故かといふと、彼女はその會での人氣者だつたからである。尠くともさう云ふ自信が、彼女自身で持てたからである。――音樂家のSは食卓の隅から彼女をぬすみ見てゐた。最近二科會で評判になつたNは、始終彼女に頰笑みかけてゐた。それから小説家のK、さつき小西との話に出た宮川、等、等……

九時頃、會が終つて、人々はそのレストランを出た。レストランを出ると、直ぐそこは電車通になつてゐた。人々は毎月その會の歸りには四五人づつ寄りかたまつた形を作つて、その電車通を七八町散歩のやうに歩いて行くのが例だつた。そしてそれから尚一軒ぐらゐ喫茶店などに寄り、そこで再び談笑して、めいめいの家路に就くことになつてゐた。

その晩もそんな風にして、四五人づつかたまつて歩いて行つたが、偶然彼女は一番殿りのかたまりの中に入つてゐた。その殿りのかたまりの中には、或年老いた日本畫家と、或美術雜誌のおとなしい編輯者と、それから小西とがゐた。それに彼女と、かう四人で、默々として歩いて行つたが、彼女には年老いた畫家は眼中になかつ

た。それからおとなしい編輯者は莫迦に氣が利かなく見えた。それだから小西一人がその中ではずば拔けてすつきり彼女に感ぜられた。

小西はその會には割合に近頃入會した新進畫家だつた。誰だかが彼女に彼を紹介した時、彼はぶつきら棒に頭を下げた。頭を下げた拍子に長い髪の毛が、だらりと額にぶら下つた。そのぶら下つた髪の毛を右の手で煩さうに掻き上げながら、彼は少しのけぞるやうな恰好をして頭を振つた。彼は少し眉をひそめてゐた。――とみ子は彼のその樣子を頬笑みながら見た。目鼻立の整つた彼は、聰明な、憂鬱な眼をしてゐた。

『まあ、この人は好い顏をしてゐるわ、なかなか可愛らしい――』

彼女は自分の支配下にある青年と云つたやうな心持で、ひとり呟いた。

ところが、今かうしてこの小西と並びながら歩いて行く中に、彼女の心に一つの遊戲が浮んで來た。といふよりも、そんな遊戲が浮んで來る程、彼女は滿足で、得意だつたのである。唯さうして平凡に默々と歩いて行くのがやり切れなくなつて來た。何か奇拔な事がして見たくてならなくなつて來た。流行作家の宮川もＫも、音樂家のＳも、畫家のＮも、みんな彼女の前の幾つかのかたまりの中に混つて、歩いてゐる。やがて何處かの喫茶店に入つて、大勢でいくつかのテエブルを占領する時になると、それ等の人々はみんな彼女とテエブルを一つにする事を暗默の間に競ふ連中である。彼女はその人々に何と云ふ事なく鼻を明かしてやりたいと云つたやうな氣がして來た。人々がみんな自分を待つてゐるのをすつぽかして、このままこの邊でみんなに知れないやうに姿を晦ましてやつたら、どんなに面白いだらう。

『とみ子さんは何處に行つたらう？』

喫茶店で人々が、ゐない彼女をそんな風に捜す光景が、彼女には眼に見えるやうな心持がする。

とみ子はその思ひ付が愉快だつた。それで彼女の左側を歩いてゐた小西の耳に素早く口を寄せて、かう囁いた。

『この邊で、みんなを撒く好さがなくつて？』

『えツ？』

小西はその意味が解らないと云つたやうに、まともに彼女の方へ振向いた。

『そんな大きな聲をしては駄目よ』

彼女は一寸彼を睨む眞似して頬笑みながら、右手に歩いて行く老日本畫家と、おとなしい美術雜誌記者とに氣を配つたが、二人が相變らず默々として、何の氣もつかないやうに歩いてゐたので、再び小西の耳に口を寄せた。

『あの連中を撒いてしまふ好さがなくつて？』

『えツ？――』

『あら、駄目ね お解りにならない？』

『ああ、さう、さうですね。――それも惡くありませんね』

『ほほほ、やつとお解りになつて。まあ、さとりの惡い方ね』

さう云つたかと思ふと、彼女は如何にも買物があると云つたやうに、丁度彼等がその前を歩いてゐた一軒の藥屋の中に、輕い足付で飛び込んで行つた。小西は老日本畫家と美術雜誌記者と三人で、七八間歩いて行つたが、彼はしきりに袂を探る眞似をし始めた。それから一寸小首を傾げて、『さうだ』とでも云つたやうに、頭を一つ振つて、一軒の煙草店の中に入つて行つた。

二人がおのおの店から出て來た時、人々の姿は三十間も四十間も先に遠ざかつてゐた。

『うまくやつたわね、うまく』

多分化粧品の包でもあらう、小さな紙包

の紐でからげたのを振りながら、彼女ははしやいで云つた。

『ええ、さう……』

『さあ、何處に行きませうね。みんなは知らないで、退屈な珈琲なんか飲んでゐるのよ。おつほほ』

凱歌を奏するとでも云つたやうに、柳の街路樹の蔭に身を寄せて、彼女はのび上つて、人々の去つて行く方を見ながら、嬉しさうに笑つた。

そこで二人は人々とは反對の方へ歩き始めたのである……

『それからね、箕島さんね、ほれ、一昨年フランスから歸つていらつしやつた方よ。あの方のは、それは露骨なんですよ』

とみ子は倚も喋りたくつて、喋りたくつて堪らなかつた。

『あたしあんな露骨な方は見た事はありませんわ。あれが外國仕込なんでせうね。何とも彼とも云はれませんの。下品で、野卑で、人を莫迦にしてゐて。まるでモデル女か何かと人を間違へてゐるんですよ』

『……』

『それから、田村さんもさうよ。あの人のは露骨などと云ふんぢやないけれども、しつこいの。それはしつこいと云つたらないの。――あたし男の方で、あんなに泣く人見た事はありませんわ。「妻も離縁します、あなたのために妻も離縁します」かう云つて、人の手を握つて泣くんですの。それは氣味が惡いくらゐですよ。そんなに泣いたつて、泣落しなんかにかかるもんですか……』

『……』

『それからね、河野さん……』

とみ子の話はいつになつても盡きなかつた。彼女は自分の聲に聞き惚れながら、彼女の誇らしい記憶の倉庫を、一時にそこに打ちまけてゐた。如何に澤山の男が彼女に云ひ寄つたか、如何に澤山の男が彼女の前に泳ぐ眞似をしたか……

『ほう、いろいろ流儀があるもんですね』

とそれに一々返事をしないで、しまひには唯默つて何か考へるやうな顏付をしてゐた小西が、突然さう云つて口を挾んだ。彼は笑ひながらさう云つたが、何だか何處か腹を立ててゐるやうでもあつた。

「流儀……おほほ、さうよ。流儀ですわ。それは幾つも流儀がありますのよ。おほほ』

彼女は流儀といふ言葉が氣に入つたやうに、大きな聲を出して笑つた。

『だが、とみ子さん、もうそんな話は止さうぢやありませんか』

『ええ？』

『それよりも、僕等はかうしていつまで歩いてゐるんです？』

『いつまでつて？』

すると、突然小西が立止つた。身長のひよろ高い青年は、上から彼女を見下ろすやうにした。――とみ子はその時、彼の眼に初めて氣がついた。彼の眼はぎろりと光つてゐた。そこには何か燃えるやうなものがあつた。彼女に對する敵意――そんな風にも彼女には感ぜられた。多くの男を飜弄した彼女に對する男としての敵意――それと同時に、そこには又彼女の言葉によつて、いやが上にも挑發された好奇心が光つてゐた。貪婪な慾望、そんなものが光つてゐた。彼女は何といふ事なくぞつとした。

『とみ子さん、僕はさう思ふんですがね』と小西の顏は彼女の顏に近づきながら、壓しつけるやうに云つた。『お互に、まはり道をしましたねなんて、後で苦笑ひをするやうな眞似は好い加減に止さうぢやありませんか』

『えッ？』
『お互に手數をかけるなんていふのは、今ははやりませんよ。——さあ、僕はあなたを欲してゐるのです』
『生意氣だわ』と彼女は考へた。
　こんな生若い青年が、こんな風に出て來るなんて。——だが、それと同時に、彼女はそれに對して、ひるまない虚勢を見せなければならないやうな氣がした。
『ハイカラね、あなたは。——とてもハイカラだわ。とても奇拔だわ』
　ほつそりした撫で肩の彼女の身體は、突然强い把握力で抱きかかへられた。彼女は何かそれをはねのけるのは野暮……そんな風に思はないではゐられないやうな、何かスキのなさを青年の中に感じた。
『とてもハイカラだわ。——お互にまはり道をしましたね、なんて云はないやうにつて——とてもハイカラだわ、あなたはとてもハイカラだわ』
『さあ、僕の行くところまでついていらつしやい』
　命令するやうな青年の言葉に對して、彼女は、『えゝ、いいわ』さう答へないではゐられなかつた。さう答へなければ、彼女が彼に較べてとても野暮になる——そんなやうに考へないではゐられないやうなものが、青年の言葉に感ぜられた。……
　二時間後に、二人は今の道を逆に歩いてゐた。
『誰も知らないのよ。こんな事』と彼女は相變らずはしやいで喋つてゐた。『痛快だわ。みんなの事を考へると痛快だわ。誰も知らないなんて痛快だわ。……あたしがこんな事にならうなんて、誰も思ひも寄らないのよ。あなたは偉いわ。……おほほ、あたし自身だつて、こんなにならうなんて、今の今まで思ひも寄らなかつたのよ』
　けれども、小西はそれには答へずに、默々として歩いてゐた。彼にはもう好奇心も、敵意もなかつた。彼のさつきの豫想に反して、この女のつまらなさが、今彼の頭にはつきりしてゐた。彼女が一遍に無價値に、小つぽけになつてしまつたやうに思はれた。——洗練されない彼女の愛の囁きに、彼女が田舍娘のやうに唯小面倒臭い退屈なものに思はれてゐた。
「ねえ、でもこんなのがいいのよ。こんなのがハイカラよ。ほんたうに、あなたはえらいわ。意表に出るわ」
　青年が何を考へてゐるか氣のつかないとみ子は、尙もひとりではしやぎつづけてゐた。

（昭和二年九月）

邂逅

新本で、發行してから二三ヶ月位なのに、夜店に並べられてゐるといふやうなものの中に、時々讀みたいものがある。——正吉は銀座の夜店で、さう云つたものを物色してゐた。

彼は京橋の方から尾張町の方へ向つて、左側の鋪道の上を、本屋がある度にその前に立止り立止りして歩いて來たが、尾張町近くなつて、ふと彼の前、五六歩のところを歩いて行く女の後姿に眼が留つた。最初はその近代風な耳隱しに結つた、撫で肩の、ほつそりした後姿が、その邊を歩いてゐる他の女達よりも立勝つて眼についただけだつたが、直ぐ彼は『雪子ぢやないか』さう思つた。さう思つて見ると、確にさうに違ひなかつた。

最初に來たのは、身を隱したいと云つた感じだつた。若しか何かの場合に、彼女が一寸振向きでもしたら、彼は直ぐ彼女の眼の中に入る。——正吉は一軒の本屋の夜店とその隣りの道具屋の夜店との間の、細い隙間を、身體を横にして、するりと電車道に出た。そして彼は鋪道から見ると、薄暗い電車通を、小走りに、彼女を通り越し、尾張町の交叉點を通り越して、半町ほど行つた。

そこまで行つてから、彼はやつぱり會はうかなと考へた。考へて見れば、彼女の眼から姿を隱さなければならない理由はひとつもなかつたのだつた。彼女と別れたのは、地震前で、もう三年程になつてゐた。その間に彼は彼女と二度ほど往來で會つてゐた。彼女と彼とは別れた男女が互に持つてゐる相互の非難や憎しみは少しも持つてゐなかつた。友情——さう云つたものを、十分互に持合つてゐた。けれども、その後彼は、彼女から二度ほど手紙を受取つてゐた。彼と別れて、その後、相當に生活になど困らない、或外國歸りの溫厚な紳士のところに嫁いだ彼女の手紙には、その生活が平穩で平和である事が報ぜられてあつた。がさうした事が報ぜられてあつた第一のその手紙の終りの方には、彼女の家の附近にある料理屋で、一遍彼に會ひたいといふやうな事が書いてあつた。

正吉はそれに返事を出してなかつた。

第二の手紙は或海岸からだつた。その海岸は正吉が昔からよく行つた事がある海岸で、その靜けさ、その附近の住民の質樸さを、正吉は文章に書いて雜誌に發表もし、それからぢかに彼女に語つたりもしてゐた。彼女は肺尖を冒されて、醫者に轉地を勸められると、正吉がかねがねそこの好さを說いてゐたその海岸をその保養地として選んだわけだつた。——『あなたの御本をお友達として、此處の海岸に來てゐます。あなたのお書きになつたこの海邊の景色をよみ、なつかしい、おちついた氣持で、此處で暮してゐます。わたくしにも、この濱が氣に入りました』そんなことが書いてあつた末に、『若しわたくしが今から二十年も生きて、お互に年を取りましたら、ほんとにお友達として往復させて頂けませうか』かう書いてあつた。

そしてそれには又一篇の詩が同封してあつた。前から詩や和歌を時々作つてゐた彼女のその詩は、手紙の言葉から見ると、もつと熱烈だつた。それは正吉に對して、忘れる事の出來ない熱情を歌つたものだつた。

正吉はそれを讀んで大變感動した。

けれども、彼はそれにも返事を出さなかつた。

彼は實際、何と返事してよいか解らないのでもあつた。若し正吉の書く返事に、少しでも彼女の熱情に對する應へがあつたならば、總ての事が昔に引戻されるであらう。

戀愛生活に於ける彼女は、彼女自身の心を彼女自身で支配する事の出來ない苦行者だつた。彼女は相手の心と彼女の心とを始終はかりにかけて、その重さをはかつてゐなければならない懷疑の餌食だつた。――彼女は彼の心持の隅々を始終檢査し、そこに彼の思ひも寄らないやうな嫉妬、彼をしてあきれ返らしめるところの驚くべき微細な疑惑を、作り出さずにはゐられない質の女だつた。

さういふ生活は、彼女に取つても、續けて行き得るものでない。二人はそれをよく知つてゐた。彼女自身彼女の性質を知つてゐた。

二人の別離は、だから二人とも何の惡意をも後に殘さないやうな別れ方だつた。二人は好意を持ち合ひ、そして二人結合してゐれば生じなければならない苦痛から、互に互を解放したのである。

それ故、若し彼女の手紙の情熱に應へる情熱が、彼の返事に少しでもあつたならば、事態は逆戻りしなければならないだらう。そして逆戻りすれば、同じ苦痛の繰返しであるだらう。

そこで、彼の返事は、彼に取つては、この上もなく六ケ敷い返事に違ひなかつた。些のうつかりさ、考へなさを、ゆるさないところのものだつた。

彼は一日々々と返事を書く事をのばしてゐる中に、今日まで、たうとうそれを書かずにしまつたわけなのであつた。

その返事を出さなかつたといふ事の重さ、それがその時、いきなり彼に姿を隱させようとした原因だつた。

けれども、考へて見れば、彼は姿を隱す理由がひとつもなかつた。と同時に、彼はあべこべに彼女に會ひたいといふ殆んど衝動的な思ひを、感じ始めて來た。

彼は再び夜店と夜店との隙間から、身體を横にして鋪道に入り、その鋪道の上を逆行し始めた。彼は彼女と正面にぶつかる瞬間を想像した。

ところが、彼女の姿は、彼がいくら歩いても見えなかつた。尾張町の丁度角あたりで、少くとも會はなければならない豫想だつたが、そこまで來て立止つて見ても、彼女の姿は見えなかつた。

電車に乘つたのではないか、とふと思つたが、電車に乘らうとするにしても、まだ停留場あたりにぶらついてゐなければならない時分だつた。――その時、彼は初めて、彼女につれがあつたらしいことに氣がついた。彼女が若い男と一緒に歩いてゐたやうな氣がした。

そこで若しやと思つて、彼はその角のカッフェの中を覗いて見た。硝子戶の入口近く、人工的な木を植ゑてあるカッフェの中は、その葉蔭でよく見えなかつたが、併し奥の方のテエブルに、たしかに、彼女が向う向きに腰をかけてゐたのがやつと見えたので、彼はドアを押して、内に入つた。

彼は入口近くのテエブルに、彼女の方に向いて席を占めて、珈琲を命じた。

彼女はやつぱり二人の若い青年とつれ立つてゐた。彼女は此方に背中を向けてゐるが、彼女の右と左とに、その青年達は、各々横顔を正吉の方へ見せてゐた。近代的な感じの彼女には、つり合はないやうに田舍びた青年達だつた。

三人はビイルを飲んでゐた。澤山の男達が入つてゐるカッフェの中で、平然としてビイ

ルを飲む——正吉自身がアルコホルを飲まないので、彼と一緒の時、彼女は酒を飲んだ事がなかつたが、併し彼女が酒を好きな事は、彼も知つてゐた。そしてかうした主として男達が集まるやうな店の中でも、平氣でビイルを飲んで見せるといふやうな事は、彼女の性質にはありさうな事だつた。それはあばずれといふやうな意味からでは少しもなく、彼女はさういふ事に男に遠慮することは少しもないやうな主張を持つてゐる女だつたからである。

けれども、向う向きになつたまま、彼女は少しも振向かうとしなかつた。正吉は隨分長い間、一杯の珈琲を前にして、彼女と顏を見合せる機會を待たなければならなかつた。

が、その機會はやがて來た。それはその二人づれが立上つたからである。二人の青年が先に立ち、正吉の腰かけてゐる前を通り過ぎて、入口のドアのところに行つて立止つても、彼女は勘定するために、テエブルのところで暫く暇取つてゐた。

彼女はその青年達に追ひつくために、正吉のテエブルの前を通りかけた。正吉がそこにゐるといふ事には全然氣がつかないらしかつた。

『雪さん』

通り過ぎようとした後から、正吉は頰笑みながら聲をかけた。

『まあ』

振向いた彼女は、吃驚して、さう叫ぶやうに云つたが、直ぐ彼のテエブルに近づいて來た。——肺尖加答兒といふ事だつたが、別段やつれた氣色も見えなかつた。輪郭の整つた、美人形の彼女の顏はビイルのせゐもあるだらうが、つやつやして、生々してゐた。

『その後は暫く』

『その後は……』

テエブルのところに來て、彼女は改めて頭を輕く下げて、明るい笑顏をした。

『僕往來で後姿を見つけたのよ、あんたの』

正吉は『君の』と云はうか『あなたの』と云はうかと一寸迷つた末『あんたの』と云つた、『それから後を追つて、このカッフェに入つて、先刻から待つてゐたの』

『まあ、さうでしたの。少しも氣がつきませんで……』

『ビイルを飲んでゐたのね』

『ええ』

彼女はぱちぱちと眼叩きをして、輕くおほほと笑つた。——正吉はその顏を見つめてゐた。と彼女の眼が彼の眼にぶつかつた。二人は何といふ事なく、眼と眼で笑つた。

『手紙ね、あの……海岸からの……』

『ええ』

雪子は又ぱちぱちと眼叩きをした。『いいんですよ、その話は……』と云つたやうな眼付だつた。

『僕返事を出さなかつたけれど……』

『ええ、解つてゐますわ、よく……』

『でもね、僕出したかつたけれども、でも考へて見ると、仕方がなかつたもんだからね』

『解つてますわ、よく……』

一寸間を置いて、

『それで病氣は？』

『病氣は大した事もありませんの』

『僕も今あんたの顏を見て、少しもやつれたところがないので、安心したけれど……それで海岸からは大分前に引揚げたの』

『ええ、二ケ月程前ですの』

『それで、今はやつぱりO？』

『ええ、いいえ』彼女は再びぱちぱちと眼叩きをして、そのまま伏眼になつたが、やがて又眼を上げて、彼の顏を見た。明るい笑顏が急に淋しい笑顏に變つて行つた。『今はNにゐますの』

『Nに？』

『ええ、Nの近くの村ですの…あたし離縁になりましたの』

『離縁に？』

正吉は眼を瞠つた。

『ええ、今それで媒酌してくれた人のところに居りますのよ。…まだその問題が片がつかないものですから』

いたましい――そんな感じが正吉の胸にいつぱいになつて來た。

『どうして？』

『やつぱり病氣が原因ですの』雪子は併し言葉とは別に、再び明るい笑顔をして見せた。『醫者があたしの病氣は前からあつたのだつて云ふんですの。もう五六年前から冒されてゐたんですつて。――それで結婚後に罹つたなら兎に角、結婚前から持つて來たのでは、といふので、そんな問題が持上りましたの』

『それにしても、それは…』

『でも、子供がある家なんでせう。今子供達は米國にゐますけれども、近い中に歸つて來ますの…それに傳染するやうですと、といふのが、親戚達の意見なんですの』

『それでも…』

正吉は彼女の良人の事を云はうと思つた。彼女の良人は、彼女を何處かで見かけて、そして態々媒酌人を頼んで彼女に求婚して來たのだといふ事を聞いてゐた。そして彼女の第一の手紙にあつたやうに、彼女は良人から愛され、平和で幸福に暮してゐるのだといふ事を信じてゐた。――その良人が、その親戚達の意見に對して何か云ひさうなものではないか。肺尖加答兒ぐらゐ世の中にざらにある。都會に住んでゐる大部分の人間は、多少とも呼吸器に申分を持つてゐる。若し彼女を愛してゐるならば、その位の事は、彼女の良人が引受けるべきではないか。

『それにしても、何とか…肺尖ぐらゐ僕だつて、昔冒された事がある…』

『ええ、でも、かうなるのも仕方がないんでせう』彼女は何か辯解でもするやうにさう云つた。

『割にあたしは何とも思つてゐませんの』

『でも…』

『……』

答へずに、輕く笑つてゐる彼女の顏を見ながら、正吉は『或は…』と不圖考へた。さう思ふと、何かぞつとする氣がした。或はやつぱりあのためなのかも知れない。

彼は彼女から眼をそらさずにゐられなかつた。この[illegible]の眼にもつ、美貌の持主は、その美貌の魅力に比例すべき肉體の魅力を持つてゐなかつた。――といふよりも、彼女には缺と云つてもいいやうなものがあつた。

いたましい――といふ感じが、心ばかりではなく、正吉には肉體的にも擴がつて行つた。薄日もささない霜枯れのやうな薄ら寒さ――彼女のはつきりした、派手な顏つきや身體つきの中に、正吉の遠い記憶は、さういふ佗しさを描き出した。

『何故隱さなかつたの、それを？』正吉は心の中で何かを詰るやうに呟いた。彼は無言のまま、彼自身が彼女と別れた時彼女に向つて、冗談に紛らせながら、それとなく云ひ殘した言葉を思ひ出した。

『若し今後結婚するやうな事があつたら、お前の武器は欺瞞だよ。感覺的欺瞞、[illegible]の欺瞞…ねえ、立入つた事のやうだけれども…』

『おほほほ』

彼女は笑ひ聲だけ立てたが、その時直ぐ眼をそらした。――彼は人間生活の底をほじくるやうな、そしてほじくつたその底に、えたいの知

れない空虛を見つけ出したやうな氣がして、何とも口にする事の出來ない哀憐の情で、彼女を見つめてゐた。

その時の光景が、彼の眼の前に浮んで來た。

彼は併しそんな事を今口にすべきではない。

『それで今後は？』

『今後？』雪子の黑味勝の眼は、當惑したやうな色――今後の事に當惑してゐるといふのではなく、さういふ咄嗟の質問に當惑した、と云ふやうな色を浮べて、『まだ解りませんわ。――考へてゐませんの』

二人は又默つた。

戸口の青年達が咳拂ひをした。

正吉はその方を見た。二人の青年は待ちくたびれて、その四つの眼を、じれつたさうに此方にそそいでゐた。――うさん臭い、そんなやうな感じも現れてゐた。

『今行きますよ』彼女は青年達の方へさう云つて、それから正吉の顏を見て、『弟ですの。徵兵檢査で、九州から戻つて來ましたの。…では、いづれ又、お住居はやつぱり…』

『本鄕…』

『では』

彼女はもう一度眼をぱちぱちとして、それから微笑して、そして青年達の方へ出て行つた。

『そして生活費は、現在の？』

彼女の著てゐた羽織が、昔彼が見馴れてゐたのと同じ羽織だつた事に、その出て行く後姿を見て氣がついた正吉は、今まで胸の底に抑へられてゐた感傷が一遍に勃發して來た。――彼は彼女を追つて行つて、それを訊かうと思つた。

けれども、彼は立上らなかつた。――故鄕の母親のところ、八年前に別れた妻のところ、彼が預けてある子供のところ、それから雪子と別れた後、彼に出來た愛人のところ、それから彼自身……月々生活費をそんな風に分けてゐなければならない彼及び彼の周圍の生活は、何處も彼處も貧しかつた。彼にはそれ以上の餘裕もなかつた。

が、そればかりではない。――彼は人々の埋まる墓の事をも考へて置かなければならなかつた。別々の墓地を三つも四つも…そんな事が出來得るものではない。

彼は彼を立上らせようとする感傷の波が過ぎ去るのを、それと力較べでもするやうに、ぢつとテエブルに獅嚙みついてこらへてゐた。

（大正十五年五月）

指

夕方店をしまつて、東京驛から電車に乘る前に、彼は夕刊を買ふ癖があつた。

『三枚五錢』

さう云ひながら、驛の入口で、澤山の子供の夕刊賣達が、彼のまはりを取りかこんで來る。彼はそこでいつも買ふ事にしてゐた。

その中に、或夕方、彼がいつものやうに、自分の前に一番先に夕刊をさし出したものから買つてゐると、

『ちえッ、俺から買つてくんないかなあ、氣の利かねえ小父さんだなあ。俺のは同じ夕刊でも、特別上等の別誂へなんだ！』そんな事を側で云つてゐる子供があつた。

彼はそつちを振向いて見ると、十一二の顏の赤い、明るい、快活な顏をした子供が、にこにこ笑ひながら、彼の顏を見て立つてゐた。また冗談を云つた時に子供がよくする、一寸首を縮めるあの恰好をしながら、それでも人見知りをしないのびのびした樣子で、にこにこ笑ひながら立つてゐた。

彼は思はずその子供の顏を見て頰笑んだ。

『よしよし、明日からお前のを買つてやるよ』

『ああ、買つてお吳れよ。屹度だよ。小父さん』

子供は人なつこさうに彼の微笑に應じて頰笑みながら、念を押すやうに云つた。

彼はそのまま別に氣にも止めずにゐたが、その翌日、彼が店から歸りがけに、東京驛前に來ると、その子供は他の子供達を追ひ拔けて、最初に彼の前に驅けて來た。

『小父さん、今日は約束だよ』

『よしよし』彼はかう答へて、その子供の手から夕刊を買つた。

その時から彼は、その子供から夕刊を買ふ習慣になつた。

それは見れば見る程、怜悧な、明るい、快活な子供だつた。顏付も、目鼻立が整ひ、敏捷な、併し人なつこい眼をしてゐて、何處かに品もある。他の子供達を追ひ拔けて、逸早く通行人の側に走りよつて、新聞をさし出す時の機敏さには、頭の好い子供を見る時に感ずる愉快を感じさせられる。

その時分、彼の店はかなりの難關に陷つてゐた。それは彼と彼の知人の二人がやつてゐる小さな合名會社で、Kビルディングの中にその店があつた。雜貨の輸入が本來の商賣であつたが、ふとしたきつかけで、滿洲の方から或國の軍隊が使つてゐた荷物自動車を三十臺程引受けた。それはかなり立派な好い機械だつた。新しく註文すれば一臺七千五百圓も取られる位のものだつた。それが一臺三千圓で手に入つたので、捨賣りにしても四千圓には賣れる、そんな計算で全部引取つてしまつたものだつた。ところが、小さい荷物自動車ならば、買手がいくらもあるが、それが二噸半だつたので、此東京のやうな道路には不向きな事が直ぐ解つた。買手が少しもなかつた。そこで思はくがすつかり外れて、彼の店はかなりの苦境に陷つてしまつたのだつた。何しろ倉敷料ばかりでも、月に千圓近くも取られると云ふ形だつたので。

そんな事が彼の頭にいつぱいだつた。もともと彼の發意で引取つたのではなく、彼と合名會社をやつてゐる今一人の男の發意で引取つたものであるだけに、彼は一層殘念な事をしたやう

な氣がした。もつとも、よく調べもしないで、賛成してしまつた彼も、十分迂濶であつたし、その迂濶の責任は負はなければならなかつたけれども。——そんな風で彼は考へたり、いらいらしてゐる事が多かつた。

そんな時、

『小父さん、今日はどうしたんだい？ 素敵に考へ事をしてゐるぢやないか』と例の子供の夕刊賣の聲に、ふと我に歸らされて、知らない間に、自分が東京驛の方へ店から歸りかけてゐたのだと云ふことに、氣がつく事などがあつた。

『夕刊買つてお呉れよう、先刻から新聞をさしつけてゐるのに、小父さん、今日は知らん顏してゐるのだもの』

『さうかい、それは悪かつたね。よし、買つてやらう』彼は急に元氣な聲を出して、かう云つてポケットから金を出した。

『ありがたうよ』子供はいつものやうににこにこ笑ひながら、新聞を彼の手に渡すと、『小父さん、悲觀しちや駄目だぜ』

さうませた口の利き方をして、そして身體の三分の一位ある新聞籠を小腕に抱へながら、すたすたと他の通行人の方へ駈け出して行つてしまつた。

彼は自然と頬笑まずにゐられなかつた。

『なるほど、悲觀しちや駄目だ』不思議な程明るい氣持になつて、彼は獨語した。『あの子供の云ふ通りだ。悲觀しちや駄目だ』

彼は自分の表情が、それ程屈託してゐるやうに見えたのか知らん、と今更のやうに反省させられる氣がした。

彼はその子供が、そんな事があつてから一層好きになつた。どんなに忙しい場合でも、頭の中が店のいろいろの事でいつぱいになつてゐる場合でも、その子供の顏を見ると、彼は自然に微笑を浮べて見せずにゐられなくなつた。

『あの子供は不思議に自分の心持を轉換させて呉れる——可愛らしい慰安者だ』彼はこんな風に思つたりした。

その中に、月日がだんだん經つて行つた。その子供の顏を見覺えるやうになつてから、三四ケ月經つた。そこに例の九月一日の地震——大正十二年九月一日のあの大地震が來たのである。

その地震の時、彼は丁度Kビルディングの店にゐた。轟々と云ふ音響と、壁土の崩壞から起る濛々たる煙の中に、彼は椅子や卓子と一緒に、三十分ばかり轉げまはつた。震動が一時おちついた時に、人々が泣き叫びながら我先に外へ出ようとする廊下や階段を押しつ押されつしながら、彼は東京驛前の廣場に出た。Lビルディングの物凄い倒壞、MビルディングやYビルディングやそれから彼の店のあるKビルディングや、さう云ふ丸の内の大ビルディングの外郭が、大破損してゐる光景を、彼は人々と同じやうに夢心地でながめた。

彼は中野の自分の家まで歩いて行つた。家も家族もみんな無事だつた。結婚してまだ間もない彼の妻は、近所の人々と一緒に、畑の中に避難してゐたが、彼の顏を見ると、『まあ御無事で』さう云つて、人前も憚らず、嬉し泣きに泣き崩れたりした。

だが、それから引續いての三日三晩の東京中の大火事、大都會の慘憺たる破滅——彼はその煙の中に急ごしらへした小屋の中に、近所の人々と一緒に暮しながら、無我夢中だつた。一體何がどうなるかが、他の人と同じやうに解らなかつた。彼は例の荷物自動車の事を考へた。それは三ケ月の間に二臺賣れた。そして三臺は或新聞社に貸してあつた。それだから二十五臺は、深川の或るところにまだそのまま置いてあ

つたのだが、地震から一週間して、それがみんな燒けてしまつた事が解つて來た。

彼は或日中野から、半ズボンにシャツに足袋はだしと云ふ、あの震災當時のいでたちで、その自動車の預けてあつた深川の倉庫まで見に行つた。人々の黒焦になつた死體がぽつぽつと横たはつてゐる燒けた町々を通つて、何處が何處やら總ての目印がなくなつてしまつたものだから、一つところを右へ行つたり左へ行つたりして、やつとの事でその倉庫のあつたところに辿りついて見ると、二十五臺の荷物自動車は、鐵が半ば以上どろどろに溶けながら、焦土の中に、まるで馬の脊骨が並んでゐるやうな恰好に並んでゐた。

それを見ながら、彼は暫くぼんやりしてゐた。

――併し荷物自動車なんかが何だ！　今はそんな問題ではない』

彼は確かに昻奮してゐた。震災當時の一般の人々と同じやうに、人間の命以外の總ての事は、みんな些末だと云つた、あの感じが胸に强かつた。損害と云へば無論損害だが、併しその三十臺の荷物自動車は、まだ全部の金を先方に渡してはない。損害と云つても嚴密に云へば拂つただけの金だけである。それが今かうして品物が燒けてしまつた以上は、先方だつてもう殘の金を請求しやうがあるまい。

併しまたそれだけの損害でも、小さな合名會社には隨分の傷手だつた。荷物自動車問題が起つてから、無理に無理をし拔いてゐた。苦しい負債が八方ふさがつてゐた。

『だが、地震前の借金は』と一般の人々が當時さう思つたやうに、彼も輕く思つてしまへるものだと思つてゐた。

そこに持つて來て、例の支拂停止令。――彼はこれが長く續く事をどんなに望んだか知れなかつた。

彼の協同者は彼よりももつと若い青年だつたが、その青年が彼をたづねて來たのは、九月の二十日に近かつた。

二人は顏を見合はせて、わつははと笑ひ合つた。

その青年は下町の方に住んでゐたので、小さな妹を一人地震で失つた。母と三人暮しだつたその青年は、母を仙臺の方の親戚に預けるために歸郷して、そして再び出京して來たのである。

『これで僕は足手纏ひなく働ける！』そんな事を云ひながら、まだ子供氣の拔けない顏の白い顏を崩して無理に笑つた。

店の復興と云ふ事について、併し二人は何の成算もなかつた。

『兎に角、お互にやらうぢやないか。此處を一つふん張つて、しつかりやらうぢやないか』

そんな事を、氣がつまつた沈默が二人の間に來ると、どちらかが、思ひ出したやうに附元氣に云つた。

結局二人は何とかして金をこしらへなければならなかつた。そのために各自が最善の努力をする事になつた。

經濟界の復活の曙光は意外に早く見えて來た。恐らく今年いつぱいは續くであらうと思はれた支拂停止令も、一ケ月で撤廢される事になつた。――もう愚圖々々してはゐられなかつた。

十月の二日に、彼は故郷に歸つて行つた。到底駄目だと思つてゐた金策が、七八分通り意外にも實現された。彼は直ぐそれを持つて東京に戻つて來た。

東海道線が通じないので、清水から横濱行の船に乘つたが、その中で彼は向島の方の車屋と乘合はせた。

それが彼の幸運だつた。現金を欲しがつてゐた革屋は、坪二十二錢も地震前にしたセーター革を、坪十二錢で手放す約束を彼にしてしまつた。

『これで何かがやれる！』彼はその革をどうしようと云ふ豫想のつかない前から、妙に直覺的にそれに依つて儲けられると云ふ氣が胸に強く來た。

東京に歸ると、彼は手袋工場を駈けまはつた。手内職の廣告を新聞に出した……

彼と彼の協同者の青年とはそれから一所懸命働いた。

そしてその仕事はめきめきと成功して行つた。製品の捌け口は、震災地ばかりではなかつた。東北地方、北海道、そんな方面からの註文も毎日のやうに、彼の店に來た。

『何が幸福になるか解らない』とんとん拍子にうまく仕事の行くのを眺めながら、彼は幾度も心の中で呟いた。つい一ケ月前まで、全然見當のつかなかつた混沌の中から、どうして自分がかうも早く乘り出せたか、思へば總てが偶然の幸福だつたやうな氣がした。

總てが現金取引の震災後の事なので、品物が出來上れば、直ぐそれは金だつた。而も七割位の利益のついた金だつた。

彼と協同者とは、その幸運を語り合つては感激した。

大晦日の晩に、此二人の協同者がKビルディングの店を出たのは、もう十一時近かつた。

恐れてゐた大晦日と云ふ難關も、非常に易々と通り越せた。朝から晩まで、いろいろの事に眼がまはる忙しさを經ながら、二人は少しも疲れてゐなかつた。

『どうだい、少し散歩しようぢやないか。僕は今晩ほど嬉しい晩はないんだ。今年の最後の祝盃――我が△△會社の復興を兼ねた祝盃を、何處かで擧げようぢやないか』

若い協同者は、とてもぢつとしてはゐられないと云つたやうな調子で云つた。

『ああ、さうしよう。今晩は夜通し飲んだつて構はないよ。――そして歸りには僕のところに來給へ。君は獨身者だから何處に行つたつて差支へないぢやないか。明日は僕のところで一緒に正月をしよう』

二人は鍛冶橋から第一相互ビルの前に出て、そこから銀座通の方へ歩いて行つた。

銀座の復活は眼覺ましかつた。十二月の初旬に銀座を見た人は無論の事、たとひ十二月の二十五日に銀座を通つた人でも、大晦日にこのやうに銀座が復活してゐようとは思ひも寄らなかつたらうと思はれる程の完全な復活だつた。バラックはすつかり立揃ひ、何處に地震があつたかと思はれるやうに總ての裝ひが出來上つて、夜店の並んだ人道には、身動きも出來ないやうに人々が歩いてゐる。そして何處とも知れず人の心を湧き立たせるやうな活氣が溢れてゐる。

京橋の橋の上から、空をぽつと薄赤く染めてゐる程の銀座のまばゆい電燈と雜閙とを見た時、

『おお！』

『おお！』二人は思はずこんな風に叫んだ程だつた。

『愉快だね』

『ああ、愉快だね。九月のあの廢墟のやうな姿を思ひ出すと、實際感慨無量だね』

『ああ、僕は涙が出て來るよ』と若い協同者は實際に涙が出かかつてゐさうな感激した聲で云つた。『僕はよくさう思ふんだよ。あすこに立つてゐる交番の巡査ね、あの巡査にその感想を語らせたら、隨分それこそ感慨無量だらうと思ふんだよ。あの九月以來、毎日々々こんな風

な銀座が出來上るまで、ぢつと見守つてゐた巡査に語らせたら……』

京橋の橋の畔の交番の前には、眞黒な外套を著た巡査が、ぽつねんと一人、銀座通の方を向きながら立つてゐた。寒いと見えて、時々靴をこつこつと踏み鳴らしてゐた。

『なるほどね』彼もそれを見ると、友の言葉に、思はず頬笑まずにゐられなかつた。

尾張町の角のLカッフェに二人は入つて行つた。二階建の、バラックと云はれない位に立派なそのLカッフェの建物が建つたのも、極く最近の事だつた。かなりの廣さのある土間に置かれた卓子は、何處も彼處も客でいつぱいだつた。

一隅にひかへた音樂隊が、酒や珈琲を飲んでゐる人々の心持を、わくわくする程浮立たせてゐた。

二人は自分達の席を見つけるまで、暫く佇んでゐなければならなかつた。

『僕は強い方がいいな。うんと醉つて見たいからな』若い協同者は、やつとの事で一つの卓子が空くと、それに腰かけながら、から云つて笑つた。『ウヰスキイがいい。君だつて今晩は飲んでもいいだらう』

『ああ、飲むとも』と酒の飲めない彼も、快く云つた。『マンハッタン・カクテエル位ならつき合へさうだよ』

『ほんたうを云ふと、先づ三鞭酒が拔きたいところだがね。餘り嬉しがるのも少々恥しいからね、近邊の人達に……』

二人はめいめいコップが來ると、かちりとそれをかち合はせて、顔を見合はせながら頬笑み合つた。

二人の話はいつもする以外に出なかつた。地震以後、何も彼もが譯が解らなかつた時分の事、もう二人の合名會社は到底立直る望がなささうに思はれた事、それがどうしてこんなに早く立直つたかと云ふ事、而も心配し切つてゐた歳末の難關が、如何に樂に、易々と過せたかと云ふ事……から云ふ度々繰返された話ばかりが何度でも懲りずに二人の唇に上つた。そして繰返される度にその話は新しく、繰返される度に二人は生々として行つた。

『來年は素敵だぞ。來年は！』

マンハッタン。カクテエルを三杯立て續けに飲んだ彼は、もうすつかり醉つてゐた。日本のセーター革では碌なものは出來ないが、亞米利加に註文した革が入つて來れば、どんなに上等なものが出來るかと云ふ事を、彼は年少の友達に向つて、熱心に說いてゐた。彼の計畫ではそれで春著のオオバアを作るつもりだつた。レエンコオト兼用の春著はオオバアと、

『愉快、愉快！』と若い協同者はコップでこつこつと卓子を叩きながら、大聲に叫んだ。『そして三越、白木屋から註文が來たら、三越特製、白木屋特製と云ふマアクだけつけてやりや何つ事はない！　愉快々々！』

この飽く事を知らない話を、杯を重ねる度に、二人は益々熱心になつて、喋り合つて、感激し合つて、昂奮し合つてゐた。

近邊の卓子の人達もみんな醉つてゐた。

『愉快々々！』とこつちで云ふと、

『さうだ、愉快だ、愉快だ！』何處かでこんな風にそれに應じて叫んでゐる男があつた。

『こんな愉快な大晦日はない。地震後の大晦日、生き殘つたものの大晦日！』と遠方の方でから叫んだ男もあつた。

『さうだ、生き殘つたものの大晦日、違えねえ！』二人の側にたつた一人で腰かけて、さつきからチビリチビリと飲んでゐた五十位の請負師風の男は、突然叫んで、あつははと一人で大きな聲を出して笑つた。

それに釣られて、近邊の者達も、はつははと大きな聲で笑つた。

酒場の上の時計が十二時を指すと、いきなり外國人の一團が、彼等からずつと離れたところで立上つて、何やら歌ひながら踊り出した。その中の一人が酒場の臺の上に飛び上つて、その踊の音頭を取り出した。その踊は譯の解らない踊だつたが、快活で元氣があつて、とても愉快な踊だつた。ステッキを持つて、歌に合はせながらぴよいぴよいと空中に飛び上つて、そして最後にヒッヒッと云ひながら、そのステッキを三四度振る……そんな踊だつた。

踊が終るとその外國人達は、方々の卓子にゐる日本人達に握手をしてまはつた。『ハッピイ、ニュウ、イヤア、おめでたう』『ハッピイ、ニュウ、イヤア、おめでたう』こんな風に云ひながら、順々に握手をしてまはつた。その有様にカッフェ中が拍手した。

それが一層人々を浮き立たせた。

『ハッピイ、ニュウ、イヤア、おめでたう』

『ハッピイ、ニュウ、イヤア、おめでたう』

しまひには日本人も外國人もなかつた。知つてゐる人も知らない人もなかつた。向う此方で握手し合つては、『おめでたう、おめでたう』を連發してゐた。

二人の協同者がそこを出た時には、もう二時も過ぎてゐた。ウヰスキイをめちやくちやに飲んだ若者は、もうすつかり正體を失つて、足がひよろひよろしてゐた。『おつとあぶない、おつとあぶない！』彼は兩手を擴げて、それをかばふやうにしながら、絶えず口でかう呟いて、友の後からついて行つた。さういふ彼自身も十分醉つてゐた。

時々若者は立止つて、いきなり兩手を擧げて萬歳と叫んだ。さうすると彼も萬歳と叫んだ。

銀座通は、さすがに少し人通りが減つてゐた。それでもまだ十分賑かだつたが。

『數寄屋橋まで行かう、數寄屋橋まで行かう。數寄屋橋からタクシイに乘らう！』と彼は友達の後から押して歩きながら叫んだ。そして二人ともよろよろしながら、尾張町の角から一二間數寄屋橋の方へ歩きかけた。

『小父さん、莫迦に好い機嫌ぢやないか！』突然かう呼びかけたものがあつた。彼は聞いた事のある聲だと云ふ氣がした。そこで振向いて見た。

道端に薄暗い蠟燭をともして、一人の子供が蜜柑を賣つてゐた。澤山の蜜柑を並べる臺もないと見えて、五つ六つの箱を並べて、その中から掴み出して賣つてゐるやうな貧しい夜店だつた。その子供の側には、その母親らしい四十五六の眼のしよぼしよぼした女が、行火をかかへてぽつねんと坐つてゐた。

『小父さん、あたいだよ』

子供はにこにこ笑ひながら、快活に云つた。

彼はその顏を見た。それは東京驛の前で始終夕刊を買つたあの新聞賣の子供だつた。

『ああ、お前か！』と彼は突然の邂逅にびつくりして叫んだ。『どうしたい、その後は？』

彼は地震以後、すつかり此子供の事を忘れてゐた。さう云へば、あの後東京驛の入口で此子供が彼を呼ばなかつた。そんな事さへ、不思議にも何とも思はなかつた程、彼は自分の忙しさに紛れて、此子供の事を忘れてゐた。

『小父さん、蜜柑買つてお呉れよう、殘つちや困るんだよ』と子供が云つた。いつも夕刊を賣る時のあの調子だつた。『負けとくぜ』

『よしよし、買つてやるとも』さう云ひながら、彼はポケットに手を突つ込んで、札を掴み出して、それを子供の前に投げ出した。『さあ。だけど、蜜柑は持つて行くのか大變だから預けて置

から……』

彼は前を見ると、彼の友が五六間先の電信柱に頭をもたせて、睡してでもゐるやうに見えたので、それが氣が氣でならないので、そのまま歩き出した。

『それぢや、好い年をお取り、又來年會はうよ』振返りながら、彼はかう云つた。

二三間行きかけると、

『小父さん！』と云ひながら、その子供が追つかけて來た。『小父さん、こんなに貰つちや濟まないよ。間違ひぢやないのかい。阿母さんが濟まないからお返ししておいでと云ふんだよ』

『いや、構はないんだ。構はないんだ！』彼はいくらの金を與へたのだつたか、見ないで與へたので知らなかつた。

『だけど、餘り多いんだもの。貰つちや濟まないよ』子供は彼の前にまはつて、彼の眼の前に金をさし上げるやうにした。それは十圓札だつた。

『いいんだよ、いいんだよ』と彼はその十圓札を見ながら云ひかけたが、その時その十圓札をつまんでゐる子供の手に氣がついた。ぎよつとした。――子供の手は小指と藥指とが無かつた。

『どうしたんだい、お前、指は？』と彼は急き込んで訊いた。夕刊を買つた時分には、確にこんな手はしてゐなかつたと思つた。

『地震だよ、地震でやられたんだよ』

『えッ、地震で？　お前の家は何處だつたんだい？』

『深川だつたんだよ』と子供は相變らずにこにこした快活な調子で答へた。

『それぢや、下敷になつたのかい？』

『ああ、すつかり下敷になつちやつたよ。だけど助けて貰つたんだよ。阿母さんに……』

三ケ月前の地震が、彼はまざまざと眼の前に浮んで來る氣がした。彼の知らない間に、この子供はこんな目に會つてゐたのだ。彼は急にこの子供がいとほしくなつた。無論酒の力もあつた。が彼は子供を抱へ上げて頬ずりをしないではゐられなかつた。

『さうかい、それは氣の毒だつたね。そして阿父つあんは？』

『死んぢやつたよ。出られない中に火が來たんだよ』

『えッ、死んぢやつた？　その時に？……』彼は一層感激して、力限り子供を抱きしめた。

『苦しいよ、小父さん』と子供は足搔きながら云つた。『だけれど、阿父つあんが死んで、暢々したよ。――飲んだくれで、のらくら者で仕方がなかつたんだもの』

『だつてお前……』

『ううん、近所の人もさう云つてゐるよ。阿父つあんが生きてゐた間は、阿母さんが可哀さうだつたつて。だつて毎日々々朝から阿母さんは撲られ通しだつたんだもの……苦しいよ、小父さん、もうお放しよ』

彼は子供の身體を放した。

『それぢや、お前があやつて阿母さんを養つてゐるんだね？』

『うん、さうだよ』と子供はそんなつまらない事を訊くなよ、とでも云つたやうな調子で云つた。

『それぢや、小父さん、これ貰つて置くよ。ありがたうよ』

そしていそいそとしながら、小走りに母親の側に走つて行つた。彼はそれをぢつと見送つてゐた。子供が何か話すと、母親がこつちを見て、低く頭を下げるのが、蠟燭の火にぼんやり見えた。

『何と云ふ勇氣のある事だ！』彼は踵をめぐらして歩き出しながら考へた。胸が感動にいつ

ぱいだつた。何とも云はれない涙ぐましい喜が、心の底でふるへてゐた。人間と云ふものの悄げない力強さ、さう云つたものをはつきりと眼の前に見た氣がした。『どんな事があつても、子供が厭世家にならないのは素敵だ！』彼は胸の中の感動を、口に出してこんな風に呟きながら、電信柱にもたれてゐる友の方へ歩いて行つた。

（大正十三年一月）

車掌の復讎

何で怒つてゐるのか知れないが、一人の老婆に向つて、車掌はがみがみ云つてゐた。眼脂の溜つたやうな眼をしてゐる老婆は、無表情な、あつけらかんとした顏をして默つてゐた。——そして叱言を云つた末に、車掌は乘換切符を、ステップから片足地面の上に下りかけた老婆の後から突きつけた。

『さあ』

吐き捨てるやうな物の云ひ方だつた。

彼は老婆が下りると、直ぐ電車に乘つた。理由が解らないのに、妙に車掌の態度に腹が立つて來てゐた。それだから、乘りながら車掌の顏を睨みつけた。四十位の痩せた、色の惡い、眼が無愛想で、いらいらして、顎に汚らしい鬚がボツボツ出て、その鬚の毛穴が、軍雞の膚のやうに粗く立つてゐる顏だつた。

『日本人の缺點ばかりを一つに集めた顏』彼はそんな氣がした。

滿員といふ程ではないが、八分通り混んでゐた。彼は併し幸ひに、次の停留場で、一番隅の客が立上つたので、そこに腰をかける事が出來た。彼は腰を下ろすと、自分の直ぐ右側の硝子を通して、車掌の方を見てゐた。まだその車掌が憎らしかつた。

五つ六つ停留場を越えても、車掌は切符を切りに車內に入つて來なかつた。むつとした顏をして、下りる客から切符を受取つてゐた。——その中に、彼はその車掌が、下りる客から受取つた切符を、切符を入れるあの小箱の中に入れるやうな振りをして、巧に掌の下に隱してしまふのを發見した。何喰はぬ、而も無愛想な顏をして、小箱の上に手を一寸持つて行つては、小箱を輕くぽんと叩いて、そして拇指で掌の下に素早く切符を隱してしまふ。餘程馴れたものだつた。一寸見たのでは解らない位巧なものだつた。

『よし』彼は硝子戸越しにそれを見ながら、その車掌の不埒を見つけた事が、へんに痛快な氣がした。それで尙も見守つてゐた。

すると、一つの乘換場——それは神保町だつたが、——に來た時、更にもう一つの事實を發見した。といふのは、小箱に入れないで掌に隱した切符を、車掌は左の手に持つてゐる新しい切符の束の後に隱して、下りる客が金を拂つた時、往復を切取つて復だけを渡すやうな振りをしながら、その古い切符を切符の束の後から拔いて渡すのである。

客は氣がつかずに默つてそれを受取つて行く。——彼は神保町で三人の客が、さうして古い切符を受取つたのを見た。

『よし』彼はその車掌の不埒を益々確實に摑んだ事が痛快だつた。

下りる客が下りてしまひ、乘る客が乘つてしまふと、車掌は身體を少し仰けぞるやうな恰好にして、ベルの綱を引いた。電車がゴトンと云つて動き出した。その瞬間、車掌の眼が、ちらと彼の眼と打つかつた。硝子戸越しにぢつと車掌を觀察してゐた眼があつた事を、その時車掌は初めて氣がついたものと見える。——車掌は臆病な眼付をした。この硝子戸の中の眼は、先刻から自分を見守つてゐたのか、それとも今偶然に自分の眼と打つかり合つたのか、それを知りたいと云つたやうな焦躁が、その瞳の中で一瞬間足搔いた。

『いやがらせをやつてやれ』そんな氣が彼の心に動いて來た。彼はにやにや笑つて見せた。――何も彼も知つてゐるぞ――さう眼で呟いた。

車掌の眼はぱちぱちと瞬いた。かと思ふと、急いで横を向いて、『ふん』と云ふ表情をした。捨鉢、と云つたやうな虚勢だつた。軍鷄の肌のやうな毛穴の見える口の邊が、一種の笑に引きつつたやうに崩れた。

『もつといやがらせをやつてやれ』

がみがみと車掌に怒鳴られてゐた老婆の分も、一緒に仕返しをしてやれ、と云つたやうな氣が彼はして來た。――彼は懐中から手帳を出した。そして首を大袈裟に前につき出して、ドアの上にかかつてゐる車掌の名前を見上げながら、鉛筆でその名を手帳の中に書き込むやうな形をして見せた。――無論書き込みはしなかつた。が、しきりに鉛筆を動かす形をした。

そしてその手帳をぱちつと閉ぢて、ゆつくりと懐中にしまつて、それから硝子戸越しに車掌の方を見た。車掌は彼の動作をぢつと見てゐたに違ひなかつた。彼がそつちを向いた時、車掌の眼は逃げ遅れて、急いでそらしながら、ぱちぱちと續けさまに瞬きをした。そして『ふん』といふあの表情を今度は口の邊や眼にばかりではなく、少し反身にした胸の邊にも漂はせてゐた。――捨鉢、といふよりは、反抗的だつた。

小川町に來た。彼は青年會館に音樂を聞きに行くところだつた。そこで立上つた。彼は穴の穿いてゐない『復』の切符を、車掌の前に突き出した。車掌はそれを受取ると、ピチンとそれに鋏を入れた。そしてそれを傍の小箱の中に、指先で押込んだ。――顔は横を向いてゐた。

彼は頬笑みながら、ゆつくりステップを下りた。彼が最後に下りた客だつた。彼が下りると、車掌はチンチンと捨鉢のやうにベルの紐を引いた。

そして電車が二三間行き過ぎた時、車掌は彼の方を見ずに、車掌臺から車内の方へ首を突つ込むやうにして、何か云つてゐるらしかつた。すると乘つてゐる人々が一齊に彼の方を見た。ステップに立つてゐる客も、車内の客も一齊に。――車内の人は首をのばしたり、立上つたりして此方を見てゐるのが、硝子戸越しに見えた。

一寸それが何のためだか解らなかつた。が、一二歩歩きかけた時、忽然として彼の頭に閃いて來た。――車掌は復讐をしたのだ、と彼は思つた。恐らく『今下りたのはスリです』かう電車の内に向つて、車掌は叫んだに違ひない。

嚇と彼の頭は上氣して來た。してやられた、と云つたやうな氣がして來た。彼は電車を追つかけて行つてやらうかと云ふやうな氣がした。が、電車はもう十二三間も先にびゆうと響を立てて走つてゐた。――そこで、思ひ止つて、忌々しさうに青年會館の方へ歩き出した。

（大正十四年四月）

U君とエス

君は今までに度々犬の話を書いた事があるね。僕も犬が好きなので、いつでもそれを面白く讀んでゐる。實際犬ぐらゐ可愛らしい動物はないからね。――から云つて、U君が次のやうな話をして呉れた。

近頃は僕はあんまり出かけないが、五六年前には、大變獵が好きだつた。秋の半ばから翌年の春の半ばにかけては、暇さへあると、僕は鐵砲を持つて、犬をつれて、獵場々々をあさり歩いてゐたものだ。僕は相當に銃には自信がある。最も熱心だつた時代には、東京の銃獵者仲間でも、割合に腕利きとして知られてゐたものだ。

それにその頃僕の持つてゐたエスと云ふ犬が、さういふ仲間では評判だつた。雉子や山鳥を嗅ぎ出す事では殆んど類がないと云つても誇張ではないやうな名犬だつた。英吉利ポインタアの純種の牝で、尾をピンと後に――胴と平行に張つて、獲物の所在をポイントする恰好は未だに忘れられない。

ある冬の事だつたが、僕は一寸した事から親父と意見の衝突をした。それで何だか東京にゐるのが厭になつて來た。暫く何處か安氣に旅行でもして、氣分の轉換をはかりたいと思つた。それに、東京近邊の獵場は、もう殆んど荒されつくしてゐると云つても好い位なので、どうもそれほど面白くない。いつか機會があつたら、東京からずうつと離れたところ――北の方へ出かけて見たいと日頃から考へてゐた。それには、丁度今度の機會が好い、さう思つたので、僕はエスを伴れて、たつた一人で、青森の方の或日本海に向つた海岸地方へ出かけて行つた。

そこに行くのには鐵道の便が殆んどない。それで酒田まで出て、そこから汽船に乘る事にした。君はあの邊の海は知るまいが、秋になると、隨分波風が荒い。――二百噸ばかりの汽船だが、目的地まで著くのには、十三時間かかる。何でも酒田を前の晩に出て、向うに朝の八時か九時に著く豫定だつた。僕は船室の中で、犬と一緒に、同じ毛布にくるまつて眠る事にした

ところが、その夜中になると、汐風が愈々荒くなつて來た。暴風雨と云ふ程ではなかつたらうが、かなりのしけだ。甲板の上にはざあざあと白い波がかぶつてゐた。

犬はぴつたり僕の側に寄添ひながら、心細さうに時々僕の顏を見上げたり、僕の手をペロリペロリと舐めたりしてゐて、どうもおちついて眠れないらしい。僕は割合に船には平氣な質なので、その位の荒れには閉口しないが、でも向うこつちでゲエゲエと、合客の嘔す聲などが聞えると、流石に好い心持はしない。時々眠りかけると、ペロリと犬が手をなめる。一寸腹立たしくなつて、眼が覺めるが、さて僕の顏を毛布の中からぢつと見つめてゐる不安さうなその眼を見ると、怒るどころか、堪らなく可憐らしくなつて來る。――エスにとつては、こんな經驗は實際初めてに違ひないのだ。利口な犬だから、相當に頭を働かして、船と云ふものや、これに乘つて主人が自分をつれて何處かへ行かうとしてゐると云ふ事などを、理解してゐるだらうが、併し不安には違ひないだらう。

『大丈夫だ、安心しておいでよ』さう云つて頭を撫でてやると、眼を細めて、安心したやうに、

眠らうとするらしい。けれども、僕が眠ると、直ぐに又心細くなると見えて、僕の手を舐める。……

そんな風にしてゐる中に、たうとうエスは醉つてしまつたのだ。僕はいきなりエスが毛布の中から這ひ出したので、眼を開けて見た。すると、よろよろとしながら、床の上を二三歩歩いたかと思ふと、ゲエと聲を立てて何やら嘔き出した。

『エス、おお、どうした?』僕は驚いて、毛布の中から飛び起きた。叱られたと思つたエスは恐縮し切つて、尻尾を後脚の間に卷き込んで、耳を垂れて、しをしをして、さもそさうを詫びると云つたやうな眼付をしながら、おつかなびつくり僕の顏を見上げてゐる。

『よし、よし』僕はさう慰めるやうに云つた。そしてその汚物を拭ひ取るやうなぼろ布はないかと思つて、二三間向うに置いてある鞄の側まで行つて、その中を探して見た。やつと汚れたハンケチを見付け出したので、それで拭はうと思つてぐるりと振返つて見ると、その時、どうだらう、エスは今嘔いた自分の汚物を一生懸命に食べてゐるのだ。――U君はその時の光景を思ひ出したやうに、感激したやうな眼をして、一寸言葉を切つた。――僕はそれを見ると、堪らなく可哀さうになつて來た。自分のそさうを心から濟まないと思つて、恥かしさうに、併し食べたくもないのに、無理やりに食べてゐるのだ。犬と云ふ動物は、自分の吐いたものを自分で食べるやうな事が決してない事はない。僕はそれをよく知つてはゐる。が、その場合には、僕のひいき目でなく、公平に考へて見ても、確に、嘔いたものを唯食べたと云ふのではなく、恐縮して、食べたくないのに、食べてしまはなければならないやうな氣がして、自分の汚物を自分で始末しようとしたのだと思ふ。その恐縮し切つた表情、悄氣切つた身振り、厭々さうな口の動き方を見ると、どうしてもさう思はないわけに行かなかつた。

『エス、そんな事をしなくつても好いんだ。今拭いてやるのに!』さう云つても、エスは後脚の間の尾をぴよいぴよいと情なささうに振りながら、たうとうすつかり食べてしまつた。

その旅は割合に成功だつた。K――と云ふその海岸には、夜になると雁や鴨が澤山來る。又少し陸の方へ入つて行くと、雉子や山鳥が澤山ゐる。――實際遠いのと交通の便が惡いのとで、東京の獵人達は少しも來ない。獵師は少しゐるがアマチュアは一人もゐない。土地の質朴なのと――その土地がいかに質朴だかと云ふ事は、僕の泊つてゐた宿屋、と云つても、頗る小さな、汚らしい百姓屋と違ひないやうな家だが、その宿屋の泊り賃が、一日三四十錢にしかつかなかつたと云ふだけでも、想像がつくだらう。――鳥の多いのとが何よりも僕の氣に入つた。それから、土地の朴訥な獵師達も、態々東京から來たアマチュアだと云ふので、頗る僕を歡迎して呉れた。殆んど二ケ月近くそこにゐたが、僕はその間のそこの生活を考へると、生涯で隨分愉快な時の一つだつたと云ふやうな氣さへする。

エスは僕の唯一の家來であり、親友であり、そして少し誇張的な言葉を使へば、何か親身なものとでも云ひたいやうな親しい道伴れだつた。その感じはそつくりそのまま又エスの心持でもあつたに違ひない。――さう云ふ氣持は、實際にかう云ふ深い關係をその獵犬との間に持つ獵人の外には理解出來ないと思ふ。――ほんたうに互に慰め合ひ、頼り合ひ、互の喜びを互に喜び合ひ、互の悲しみを互に悲しみ

合ふ。——それが單純な、純粹な、正直な感情を持つてゐる動物であるだけ、それだけ常に變らない眞心、と云つたやうなものを感ずる。人間よりも更に裏切らない眞心と云つたやうなものを。

僕が部屋の中に眠ると、エスは僕の部屋の直ぐ前の土間の、藁を敷いた上に眠つた。が、夜中にふと氣がつくと、障子の下の方の紙を破つて、エスの鼻がにゆつと突き出てゐたりする。——可愛らしい此犬は、時々、自分の眠つてゐる間に主人が何處かに行つてしまひはしないかと云つたやうな不安を感ずるらしい。そんな時、廊下に上つて來て、僕の部屋の障子の外から、僕の匂ひを嗅がうとするのだ。そして障子の紙に鼻を押しつけて嗅いでゐる中に、鼻の潤みで紙が濡れていつの間にかそこだけ破れてしまつて、鼻がにゆつと突き出て來るわけなのだ。

「エス、よしよし、安心してお眠りよ」僕がさう聲をかけてやると、ほんたうに安心するらしく、そのまま鼻がつつと引つ込んで、廊下から土間にぽんと飛び下りる足音が聞える。——そんな事が殆んど毎晩だつた。

僕は晝は陸の方で雉子や山鳥を撃ち、夜は濱で鴨や雁の渡つて來るのを待つた。そして始終かなりの獲物を持つては、エスと共に喜び勇みながら、宿に歸つて來た。——ある晩などは白鳥さへも撃つた。その白鳥は確に手耐へがあつたと思つたのに、そのまま落ちずに飛んで行つてしまつたので、不思議にも思ひ、彈が弱過ぎたのか知らなどとも思つてゐる中に、その海岸から一里近く離れたS——と云ふ村の附近に落ちてゐたのを、僕の顏馴染の獵師が翌日拾つて持つて來て呉れた。そんなやうな愉快な事や、又遭遇したいろいろな冒險などを語つてゐたら、全く一册の書物が出來上るだらうと思ふ。……

或午後、僕はいつものやうに、エスを連れて、陸の方へ出かけて行つた。どんよりした變な日だつた。その邊には秋とは云つても、もう二度ほど雪が降つたりしたので、その名殘が黒い土の上に、ところどころ斑點を描いてゐたが、それがどんよりした天候のために、白いと云ふよりも、變に鼠色に見えた。

いつものやうに、畑からだんだん枯れた雜木林のそこここにある山の方へと小徑を辿つて行つた。——もう暫くの間そこに滯在してゐるので、僕はその土地の鳥の集まる場所々々を、大分詳しく知るやうになつてゐた。ところが、その午後はどうしたものか、一向雉子も山鳥も姿を見せない。此邊にゐなければ彼處、彼處にゐなければ、又何處と云つたやうに、目印をつけてある場所々々をだんだんに歩きまはつて見たが、何處に行つてもその影さへ見えない。

こんな日がどうかすると妙にあるものだ。こんな日は實際獵人に取つては、堪らなく苛立たしい。僕は殆んど二時間ほど歩きまはつたが、まだ獲物一つに出會はないので、妙に惰氣切つて、そのくせ腹の中には癇癪がぶつぶついぶつてゐるやうな、苛々した心持になりながら、とぼりとぼりと歩いてゐた。エスはと見ると、此奴も元氣がない。惰氣切つて、つまらなさうに、尻尾を垂れて歩いてゐる。

そんな風で又暫く歩いて行つた。と、或林の角まで來た時、一間ほど前に歩いて行つたエスが、急に耳をもたげて、立止つた。尻尾をピンと張つて、急に元氣ついて來た。その樣子で僕は直ぐ側に獲物がゐると云ふ事を知らされた。——僕の胸は躍つて來た。肩から鐵砲を下ろして、身構へた。

エスは僕の身構へを見ると、直ぐ林の中に、そこには熊笹がいつぱいに生えてゐたが、その間をかさかさと分けて入つて行つた。そして間

もなく、あのぱたぱたと云ふ強い羽叩きが聞えたのだ。一度雉子獵の味を覺えた人の誰でも忘れられないあの羽叩きだ。――鳥の飛び立つたのは、實際直ぐ側だつた。僕の立つてゐるところから、四間とは離れてゐなかつたらう。僕はその姿を見ると、直ぐ引金を引いた。が、殘念な事には撃ち損じたのだ。――實際撃ち損じなどすべき距離ではない。けれども、先刻からの不獵に氣が腐つてゐたと云ふのが、最大原因だつたに違ひない。

「殘念」と思ふよりはむらむらと腹が立つて來るやうな氣持だつた。『ちえッ！』と大きく舌打をしながら、僕はその鳥の遠く消えて行く姿を、ぢつと見つめてゐた。

僕にも増して、一層悄氣返つたのは、エスだつた。折角逐ひ出したものを、主人が損じた時ぐらゐ、獵犬が失望する事はない。これは獵をした人の誰でも經驗する事だ。恨めしさうに主人の顏を見て、それは露骨につまらないと云ふ表情をする。――おまけに、先刻からの不獵と來てゐる。やつと一羽だけ見つけて、それを逐ひ出してやつたのに、腑甲斐なくも主人が撃ち損じた。――さう云つた非難の色まで顏に浮べてゐる。

僕とエスとは又とぼとぼと歩いて行つた。こんな時は、犬の機嫌を取るやうにしてやるのが、獵人として當然なのだ。ところが、その日は、何か僕の感情が曲つてゐた。僕はただ無暗と腹立たしくて堪らなかつたのだ。僕は尻尾を垂れて默つて歩いて行く犬の樣子さへ、何だか腹立たしいものに思はれて來た。犬の活氣のなさ、まるでその日の天候のやうな無情さ……それが何だか、急に僕に對する不信任を示してゐる、變な言葉だが、と云つたやうな、妙にこぢれた氣持がして來た。實際又、獵犬といふ奴は、折角逐ひ出した獲物を、主人が始終撃ち損じようものなら、主人に對する露骨な輕蔑を示して來るものだ。僕は無論、それほど始終撃ち損じるわけではないから、エスに輕蔑されるやうな事はないのだが、それでもその時は、神經の調子で、エスの悄氣てとぼとぼと歩いて行く姿の中に、僕に對する輕蔑の色があるやうな氣がしたのだ。

『エス』と僕は呼んだ。エスは振返つたが、僕の呼び聲の荒々しさに、妙に臆病な眼付をした。それが又僕の腹立たしさを一層募らした。

『おい、エス』と云ひながら、僕は犬の首輪に手をかけて、エスの身體を引き寄せながら、その首根つこをいきなりぐつと締めつけたのだ。――エスは不思議さうな顏をして、此理解出來ない主人の振舞を見てゐたが、苦しかつたと見えて身を振りもぎつたかと思ふと、急に側の林の中へ駈け込んで行つてしまつた。

僕は何だかまだいらいらしてゐた。靴で地面をこつこつと踏み鳴らしたりして、譯の解らない餘憤を洩らしてゐた。

僕はそのまま又とぼとぼと歩いて行つた。エスは屹度遠くの方から、自分に蹤いて來るのだらう、そんな事を思つて、何處へ行つたか氣にも留めないで歩いて行つた。が、暫く經つて振返つて見ても、エスの姿は見えない。僕はへんに不安になつて來た。どうしたのだらうと思つた。――主人の亂暴な振舞に吃驚して逃げ出して行つたとしても、犬と云ふ動物は、とうしても主人から離れられるものではない。して見ると、あの時、何處かに駈け出して行つたまま、道に迷つてしまひでもしたのだらうか。

併しその中、又何處からか僕の足跡を嗅ぎ出して現はれて來るだらう、と思つたので、又二十分ばかり歩いて行つた。けれどもやはりエスは現はれて來ない。

僕はたうとう不安で堪らなくなつて來た。ほ

んたうに道に迷つたなら、このまゝにはして置けないと思つた。若しこのまゝエスがゐなくなりでもしたら、どんなに悲しく、淋しく、堪へられないだらう。――僕は今來た道の方へ引つ返して行つた。大きな聲でその名を呼んだり、口笛を吹いたりした。丁度エスが駈け込んで行つたあの林まで來て見た。やつぱりそこにもエスはゐなかつた。それから僕はその日歩いただけの道を、逆に順々に歩いて行つた。口笛を吹いたり、大きな聲で名を呼んだりするので、唇や咽喉が痛くなつて來た。それでもエスはやはり見つからなかつた。

その中に日が暮れかかつて來た。僕は氣が氣ではなかつた。何だか此世で一番親しいものに分れたやうなセンチメンタルな悲しみまで浮んで來た。――併し日が暮れかかつて來ては、もうどうもならない。こんな風にしてゐる中に、自分も山の中で道を踏み迷つてしまつたら、どんな事になるか解らない。寒さもかなり嚴しくなつて來た。今日は一先づ歸つて明日、村の獵師たちに頼んで、改めて探して貰はうと思つた。

僕は暗い悲しい氣持になりながら、たうとう村の方へ歸り始めた。丁度山を下つて、畑道のところまで來ると、向うにK――村の灯がぽつりぽつりと見える。空はまだ暮れ切つてはゐないので、薄ぼんやりした光の中に、畑の中の一本道がほの白く浮んで見える。――その道を三分の一程行つた。僕はすつかり沈み込んでしまつて、俯首れながら歩いてゐた。その中に、ふと顔を上げて見ると、何か黒いものが、村の方からその道を一散に、こつちへ向つて走つて來るのだ。實に素敵な速力で飛ぶやうに走つて來るのだ。

何だらうと一寸思つた。が、それと同時に、『ああ、エスだな』と云ふ考が頭に閃いて來た。――そして近づいて來るとほんたうにそれはエスだつたのだ。

『これ、エス、エス、歸つてゐたのか』と僕は喜びの勃發に全身を震はしながら叫んだ。エスは僕に近づくと、くんくんと喜びが極まつたやうに鼻を鳴らしながら、僕の身體に飛びついて來た。僕はエスの身體を抱きかかへてやつた。エスは僕の顔をべろべろ舐めをはした。僕は舐められるままに委せて置いた。

實際その時の事を考へると、僕は今でもセンチメンタルになつて來る。――とU君は眼を少し潤ませながら、昂奮して云つた。　エスは僕のあの理由のない[illegible]――わけの解らない理不盡な振舞にすつかり憤慨して、默つてどんどんひとりで宿に歸つてしまつてゐたのだ。この事は後で宿の者に聞いて解つたが。――けれども、僕の歸りが餘り遲いので、今度は非常に心配になつて來たのだ。――宿の者は、エスが始終おちつかない樣子をして、家の外に立つて、畑の道の方を見てゐたと云ふ話をした。――その中に日が暮れかかつて來た。すると、益々僕の身の上が不安になつて來て、終に我慢が出來ずに、僕を迎へにそこまでやつて來たところだ。――あの飛ぶやうな速さで、一目散に走つて來た樣子を考へると、僕は涙ぐましくなつて來る。

それから、エスは晝間山の中を歩きまはつた時のやうな悄氣切つた樣子ではなく、尻尾を振り振り、いそいそとして、僕の先に立つて、村の方へ歸りかけた。そしてまるで僕を見失ふまいとしてでもゐるやうに、絶えず後を振向いては、僕の顔を一寸見て、そして安心したやうに歩いて行つた。

（大正十一年三月）

狗が疲れてゐる

一

『あの……ギンカウの事でお出でになりました』

　まだ物馴れない、來たばかりの女中が、かう取次いで來た。

『ギンカウの事で？』

　自分は首を傾げた。銀行の事とは何だらう。若しかすると不渡りでも出てゐるのではないかと直ぐ考へたが、併し不渡りでも出てゐるのであれば、A社の會計のSから、何とか自分のところに電話か何かで前以て話がある筈だ。

『どんな人？』

『洋服をお召しになつていらつしやる方で。――一寸玄關口までお出で下さいといふ事でした』

　自分は立つて玄關に行つて見た。すると、K雜誌社のK君が立つてゐた。

『ああ、K君だつたのですか。さうですか。

――原稿を頂きに上つたのですが、まだお出來にならないでせうか？』

『原稿を？』と自分はぐつと詰つて、もじもじしたが、腹の中では、女中が『ギンカウ』と『原稿』とを間違へた事がへんに可笑しかつた。そしてその可笑しさが、自分の返答につまつた氣持を、少し輕くさせてゐてくれたが、併しK君の顏に當惑の色が見えると、自分は心がはらはらして來た。『まだ實はその……題材はきまつてゐるんですが、どうも』

『一枚もお出來にならないんですか？』

『實はよく眠れないんでね。こなひだから每晚每晚眠れないんです。併し昨夜はよく眠れたのです。ですから、今日は書けます。乾度書けます』

『あの……實は全部が印刷所に行つてゐるのですが、あなたのがお出來にならないので締切れないんで……』

　溫厚なK君は自身の靴の爪先を、ステッキで無意識に輕く突きながら、俯向き勝に呟くやうにかう云つて、一寸自分の顏を見上げ、それから直ぐ俯向いた。彼自身の當惑さうな色と共に、恐縮してゐる自分に同情するやうな色を、同時にその眼に浮べてゐた。

『今晚中には書きます』

『どうぞ。――Sさんが一昨日になつて書けないとお投げ出しになつたので、若しあなたまでがお出來にならないやうですと、途方にくれる次第なのです』

『乾度書きます、乾度』

　自分はさう答へながら、一昨日此處にやつて來て、藝妓を呼んで騷いで歸つたSの事を思ひ出した。

『どうしてもK雜誌の小說が書けないので、投げ出して東京に出て來たんだ』とSは急に鎌倉から東京へ出て來た氣持を、こんな風に說明してゐた。『書けないのぢやあなくて、要するに書く事が何もないのでね』

『書く事が何もない！』自分はSの言葉を鸚鵡返しに繰返した。『それや實際ほんたうだ。自分だつて書く事が何もない』

　自分は何となくをかしくなつて、笑ひ出した。――ほんたうに書く事が何もない。頭の中があつけらかんとしてゐる……

『どうぞよろしく。あてにしてゐますから』K

君はさう云つて、しをしをとしながら歸つて行つた。

自分は二階に上つて、机の前に坐つたが、おいそれと直ぐに好い考が浮んで來るわけのものではない。それで『ギンカウ』と『原稿』との今の話を又思ひ出して、原稿用紙の上に、『ギンカウ』といふ字と『原稿』といふ字とを、いくつもいくつも徒ら書してゐた。

自分の今ゐる此家は、新橋驛附近の或待合で、自分はもう約四十日ほど前から、此家に來てゐる。別段藝妓遊びをするためではない。原稿を書くためである。かう云ふ商賣を開いたばかりのまだ馴れない此家のおかみさん――自分及び自分の友人達は、この人をおかみさんと呼ばずに、奧さんと呼び慣らしてゐる――は、自分に藝妓を呼ぶ事を勸めもしないし、自分も亦別段藝妓を呼んで見たい氣もしないので、四十日の間にまだ一度も女を呼んで見ない。――丁度そのおかみさんが馴れない女中に手傳つて、自分の晩飯をはこんで來てくれた。

『ほんたうにお氣の毒ですね。お書けになれないところを、ああ云ふやうに催促されて』

『いや、催促する方が尙氣の毒ですよ』と自分は云つたが、陰氣な、困つた顔を見せるのがイヤだつたので、自分は女中に向つて、

「原稿とギンカウとの違ひは面白かつたね」と云つて、笑つてしまつた。

「御免下さいまし。――ギンカウの事と被仰つたやうに聞えたものですから」

『いや、君が惡いのでは少しもないよ。唯ギンカウと原稿との違ひが、僕には面白かつたんだよ――尤も僕だけの面白さなんだがね』

自分はAと云ふ出版社を小說を書く傍らやつてゐたが、それが地震前からずつと失敗つづきで、地震後は殊にその經濟狀態がひどかつたものだから、始終銀行の交換に苦しめられた。殊に昨年の後半期はそれが烈しかつた。手形の交換を間に合はせるために、泥棒をとらへてから繩をなふと云ふあの諺のやうに、手形が銀行にまはつてから、その金をこしらへるために小說を書いてゐると云つたやうな事が始終だつた。二日置き、三日置きにその交換がある。そのために、始終原稿を書いてゐなければならない。自分は意志的な人間ではないが、衝動的な元氣を少し持合はせてゐるので「泣言を云はずに、やつつけろ』と云つたやうに自分で自分の心持を引立てては、一所懸命働いてゐたが、併し、内心、決して平氣でゐたわけではなかつた。「銀行」と聞くと、又かと思つて、ぞつとしないでは居られなかつた。――それで今も、「ギンカウ」と聞いて胸に不安を覺えた所以なのである。ところが『ギンカウ』でなくて「原稿」の聞違ひだつたので、自分にはそれがとても可笑しく感ぜられたのだが、そんな可笑しみが何も知らない他人に通ずる筈はない。それだものだから、自分が「ギンカウ」と「原稿」とでひとりで笑つてゐるのを、おかみさんと女中とは不思議さうに見てゐた。

二

晩飯を濟ませてから、自分は又机に向つたが、やつぱり書けさうな材料が浮んで來なかつた。原稿用紙とぢつと睨みつこらをしてゐると、自分の頭が芯の芯まで疲れ切つてゐるといふ事だけがはつきりしてゐて、その他の事は何も浮んで來ない。かと思ふと、何か一心に題材を考へてゐるつもりで氣を無理にはりつめてゐる中に、ふと疲れた頭の中に、今朝方都新聞で讀んだ讀者から記者へ相談する欄の一つの記事が浮んで來た。それは五十三になる老婆が、今まで十數年ひとり息子を育て上げるのに一心になつ

て働いて來たが、近頃その息子に嫁を貰つた。さうしたら、急に淋しくなつて來た。息子と嫁とは二人とも自分を大切にして、孝養をつくしてくれる。それだのに自分は淋しい。一體自分はどうしたらいいだらう。――かう云つて記者に相談してゐるのである。ところがそれに對して記者はかう云ふやうに答へてゐる。――それはあなたがお息子を育て上げるために今まで緊張してゐられたのが、今になつて急に安心されて氣持がゆるんだためです。あなたに『仕事』がなくなつたためです。併しあなただとて五十三ならまだ働ける年ですから、お嫁さんに手傳つて家事の事をなさい。そして休息の時だと思つて心は休息なさい。その中、來年にでもなればお孫さんが生れます。さうしたら、あなたには今までと違つた、新しい一つの仕事が出來て來ます。それまでのところは保養と思つて休息していらつしやるがいい。親戚知己を御訪問になるもよろしからう。物見遊山をなさつたり、名所舊蹟をおまはりになつたりするのもよろしからう。……と。

自分はそれを思ひ出すと、この記者の答がへんに氣に入つた。さういふ淋しみを五十三の老婆が訴へるといふのは、昔には稀らしい。そんな風な淋しみは老人になると、昔から人間は感ずるものなんだらうが、大概はそんな事は口に出して云はないものである。それを云ふところが、而も新聞に相談してやつたりするところが、この老婆が少し新しいのかも知れない。そしてこんな事を相談して來る老婆には、この記者の答では滿足出來ないのかも知れない。それだのに、自分にはその老婆をいたはるやうに、噛んでふくめるやうに、今にお孫さんが生れるから、それまで休息していらつしやいと云つてゐるところが氣に入つた。――實際こんな風にしか答へやうもないだらうけれども。殊に『親戚知己を御訪問になるもよろしからう。物見遊山をなさつたり、名所舊蹟をおまはりになつたりするのもよろしからう』といふのが氣に入つた。『面白い』と自分は後腦に兩手をかつて呟いた。『面白い。人間の生活といふものは、何處かに可愛さがある。とても悲しい可愛さがある』

自分はさう呟きながら、仰向けにごろりと疊の上に臥そべつた。『面白い、面白い』と臥そべりながら又呟いた。が、頭はじいんと底鳴りをしてゐるやうに疲れてゐる。自分は疲れてゐるなと考へた。さうしたら、急に今度は氣が重くなつて來た。『何が面白いものか』と突然に忌々しくなつて來た。――そんな老婆の淋しみも面白くなければ、記者の答だつて面白くも何ともない。

『それより原稿を書かなければならないぢやないか』

苛々して來た。

こんなに變な事に面白がつたり、かと思ふと、その反動見たやうに、急に苛々したりして來るのは、どうしても頭の衰弱だ。――近頃は確に腦神經が衰弱してゐる。

『ままよ、散歩にでも出かけてやれ。K君には氣の毒だが、散歩でもして、氣を紛らして來てやれ。今晩中に書き上げると云つたつて、夜中に印刷所があるわけではない。今晩中だつて、明日の朝だつて同じ事だ。明日の朝までに半分でも出來て、それを印刷所にまはさせて置けば、後の半分は正午までで大丈夫だ。朝間に合ふものなら、正午まで待つても間に合ふに違ひない。正午まで待つて間に合ふなら、午後二時だつて間に合ふに違ひない。午後二時まで間に合ふなら、午後三時だつて間に合ふに違ひない。午後三時なら午後四時、午後四時なら午後五時……午後五時になれば、印刷所は間もなく閉ぢる。

印刷所が閉ぢてしまへば、翌日の朝にならなければ印刷所は開かない。だから翌日の朝でも間に合ふ。朝で間に合へば、正午でも間に合ふ。それから午後二時、三時、四時、五時、その又翌日の朝、正午、午後二時……等、等、等』

から考へて來ると、間に合ふと間に合はないの、正確なけぢめは一體何處にあるのだらう。朝と正午とか、正午と二時とかのやうに、時間の合間があると、間に合ふ間に合はないのけぢめが多少つきさうに思へるが、一體時間といふ奴は、一秒、一秒の連續だ。それだから、この一秒に間に合つたものは、次の一秒にだつて間に合ひさうだ。從つてその次の一秒にだつて間に合ひさうだ。……こんな事を、自分は時々食ひ過ぎと胃病とについても考へる。飯の食ひ過ぎでも、例へば一杯の茶碗の飯粒が幾粒あるかは知らないが、若干粒あるとする。普通三杯ですむ飯を四杯食べたら食ひ過ぎになる事は解るが、三杯の飯にもう一粒食つたつて、さう胃の腑には影響がなささうだ。三杯と一粒で影響がなければ、それにもう一粒食つても影響がなささうだ。更にもう一粒食つても影響がなささうだ。更にもう一粒食つても、更に更に又一粒食つても……かうして考へて行くと、食ひ過ぎと食ひ過ぎでないとのけぢめは一體どこの一粒にあるのであらう？ それを一粒食へば食ひ過ぎで、その前までは食ひ過ぎでないと云つたやうな一粒がどこかにあるに相違ない。……

だが、一體こんな考が何になるのだ。俺の頭は絶えず餘計な事を考へすぎてゐる。こんな考のために、俺の頭は疲れて、ゆるんで、へとへとになつてゐる。朝起きると晩まで、こんな益にもならない連絡のない事ばかり考へてゐる。――『氣を附け！』から自分に向つて怒鳴りつけなければなるまい。『しつかりしろ。阿呆！』と。

自分の右の手はこめかみのところで、ネヂをひねるやうな形をした。時計のやうに頭にかけるネヂがあつたら、と自分はよくさう思ふ。さう思ふ心持が、いつか手に傳はつて、自分の右の手は、コメカミのところで、ぎい、ぎい、とネヂを卷く手附をするのである。

『散歩だ、散歩だ。散歩の外に仕方がない。藝妓とお喋りする興味が少しでもあれば、こんな時は藝妓をよんで酒でものむといいのだが、藝妓とお喋りしたい慾望もないし、自分には酒が少しものめない。だから、散歩の外仕方があるまい』

自分は帽子を手にして立上つた。

三

散歩といへば銀座だ、東京ではさしづめ銀座の外仕方がない。それに新橋のわきからだと、銀座までは譯はない。自分はアッシのステッキを持つて、ぶらぶら銀座の方へ歩いて行つた。梅雨期らしいじめじめした肌ざはりではあるが、そして空が一面曇つてはゐるが、併し雲はかなり高くて、そして薄い。降りさうもなささうなのが心丈夫だつた。新橋の方から尾張町の方へ歩いて行つたが、丁度初夏の夜の銀座は人の出盛りで、夜店のある右側のペエヴメントは、明るい灯の間に、人の姿がうようよしてゐる。自分はそれで左側のペエヴメントの上を歩いて行つた。何の興味も湧いては來なかつた。

E――といふ喫茶店に腰をかけた。そこは男ボオイの、電燈が非常に明るい店で、割合にアイスクリイムがうまい。自分はアイスクリイムを註文して、それを一匙々々ゆつくり食べた。

と突然、

『J・O・A・K、こちらは東京放送局であります』が始まつた。何とかいふ醫學博士が子供

の衛生といふ事について講演を始めた。が、語尾の「であります」だけが、はつきりしてゐて、他の言葉は、よほど耳を澄ましてゐなければ聞き取れない。——で、自分は耳をすまして、最初の方を一寸熱心に聞いたが、「子供は第二の國民であります。だから子供の健康は、日本の未來に關係します。」と云ふ言葉と、それから、解り切つた寢冷えの話とか、どうして腹を丈夫にすべきかとか、そんなやうな話だつたので、聞く事を止めた。——大體醫者の話と云ふものはいつでもさうだが、彼等ほど、一般の人間が、自分達の身體の事を少しも知つてゐないやうに思ひ込んでゐるものはない。熱があつたらば、發汗劑をのめとか、腸が停滞したら、下劑をかけろとか、灌腸をしなければならないとか、その又下劑はヒマシ油が一番好いとか、そんな事までも、一般の人間が少しも知らないとでも極め込んでゐるやうな物の云ひ方をする。いや、不衛生よりも衛生の方が、人間の健康のためになる、といふ事さへも、一般の人々が知らないものと思ひ込んでゐるのではないかと思はれるやうな顔付で語る。

　自分は喫茶店を出て、又とぼとぼ歩いて行つた。取留めない、益にもならない考が、何もつづいて行つた。三四人の洋裝の娘達が、つやつやした頬をして、にこにこ笑つてお喋りしながら歩いて行つた。

　日本の娘達は
　大根のやうな足をして、
　眼をなくなして笑つてゐる。

　こんな文句が自分の脣に上つて來た。洋裝をした日本の娘達を見て、外國人がどんな印象を受けるだらう、と云つたやうな、益にもならない考が、自分の頭を又襲つて來た。

「やあ、」突然聲をかけた人間があつたので、吃驚して自分は立止つた。見ると、身長の高い木戸が自分の前に立つてゐた。

『やあ。』

　自分は此處で木戸に逢つたのが嬉しかつた。所在ない自分の頭を持扱つてゐたので、今此處でこの親しい友達に出會つた事がうれしかつたばかりではない。自分は彼にもう三ケ月も會はなかつた。だから彼に會ひたい氣が丁度してゐたところだつた。

『兎に角、お茶でも飲まうか。』

『うん、實は今アイスクリイムを飲んだばかりなんだが、併しウウロン茶位なら飲んでもいいな』と丁度ウウロンが直ぐ近かつたので、自分は云つた。

　二人はウウロンに入つて行つた。非常に空いてゐた。隅のテエブルに腰をかけて、ゆつくり話すのに丁度よかつた。

『時に何は？』

『うん、あれか』と木戸はうなづいて、『實に弱つてゐるよ。實際どうしていいか解らないでゐるよ。兎に角、家を持たせてゐるが、併し極端なヒステリイでね。近頃は益々ヒステリイが高じて來てね。——夜なんか外に飛び出すんだよ。死ぬと云つてさ。ヒステリイだから、ほんたうに死なないとは限らない氣がして、捨てて置くわけに行かないものだからね。僕が後を追つかけて行くんだよ。往來の人は振向くし、實際恥しいよ。でも仕方がないから追つかけて行くと、君、井戸に片足など入れかけてゐたりするんだよ』

『かなはないな』

『かなはないよ』木戸は暗い顔をして、一寸俯眼になつて、考へてゐたが、『僕はそれで方方の井戸をかぞへて見たんだがね、その家の附近、——つまりN町附近は、どうも井戸が多過

ぎるよ』

『ははは』と自分は、重苦しい話の間に、際どいところで一寸ユウモラスな觀察を挾む木戸のいつもの癖に、或快感を感じた。『さういふ間に、井戸の數などをかぞへてゐるところは、君らしくつていいね。併し東京にまだそんなに古井戸があるもんかなあ』

『君もさう思ふだらう。僕だつて平生は古井戸なんかに氣がつきはしなかつたんだがね。ところがさういふヒステリイに苦しめられると、氣のつかないでいい事に氣がつかなければならなくなるんだよ。そんな風に止むを得なくなつて、氣がつき始めたんだが、算へて見ると、割にあるもんだよ。殊にあのN町附近は、昔の屋敷町なので、餘計にあるんだね。——併し實際弱つたよ。僕は精根つきたといふ感じがあるよ。一層自分が肺病にでもなつてしまへばいいと思ふよ。肺病にでもなつたら、もう自分に負擔する力がないと云へば、それで何とか片がつきさうな氣がするからね』

『……』

『それでなければ、洋行してしまはうかとも思ふんだ。一年なり二年なり外國にでも行つてゐれば、何とか自然片がつくやうになるだらうと思ふんだ。——そして洋行するなら、從兄の奴が、金を出してもいいと云つてゐるんだよ』

『……』

自分は木戸の顏を見た。木戸はこの一年ほど前からその女との關係が出來てから、すつかり痩せてしまつてゐた。顏色も惡く、色艶がなくなり、髯の剃り跡などが、へんに病的に青黑くくすんでゐた。そしてこの前會つた時から今日までの三ケ月の間に、尙又げつそり痩せてゐた。——品行方正といふよりも、學校なども優等生で、何事にも平均の取れた、圓滿な常識の持主で、如何なる人生のワナにも陷らない事を誇とし、又誰から見ても、この男だけは安全にこの人生を航海して行くだらうと思はれてゐるやうな男だつたのに——おお、たとひどんなに平凡にでもいいから、波瀾なく、その一生を過すといふだけの事が、何といふむづかしい一つの仕事なのであらう！ といふ事を、自分は彼の生涯に突如として起つた今度の出來事を見ると、つくづく考へる。——彼は昨年から、一人の女と知合つた。すると彼の常識と彼の修養とに拘らず、彼はぐんぐん深みへ陷り込んで行つてしまつたのである。若くして結婚し、今まで兎に角、それ程の波瀾のない家庭の主人公として暮して來たのが、今度の女の事件が出來てからは、がらりと變つてしまつたのである。いや、がらりと變つたといふ事は、適當でないかも知れない。だが、尠くとも彼は今までの一切の平靜な生活を顧みる餘裕を失つてしまつたのである。自身の家庭も、世間體も……

『そして君の細君は？』

『うん、それが張合がないんだよ。僕は一切の事を祕密にしてはゐられない質だからね。僕は女房の前に告白したんだよ。ところが、彼女は何も云はないんだ。唯默つてゐるだけで、何ひとつ云はないんだ』と木戸は茶を一口啜つた、『石のやうに沈默してゐるんだよ。何か意見を述べさうなもんだと思つても、全然無表情な顏をしてゐるんだよ』

木戸が茶をのんだのを見て、自分も、女給が持つて來たのを、そのまま忘れてゐた茶碗を取上げた。茶は生溫くなつてゐた。

『併しこのまま此生活が續けられて行き得るものかどうか解らない。僕には神經が痛むだけでもやり切れない。——その女が三角關係はイヤだと云つてヒステリイを起す。と云つて、僕は女房を離縁するわけには行かない。僕の女

房がどこかで幸福に暮せる見込が立てば、僕は女房と別れてもいいと思ふ。併し到底幸福にくらせる質の女ではない。さう思ふと、やつぱり僕があぁして置かなければならない。それにそのヒステリイの女だとて、僕が結婚して幸福になれるやうな女ではないんだ。――僕はどうしていいか解らない。僕は寅年なんだが、やつぱり年まはりなどといふものはあるもんだと思ふね。僕の一まはり前の寅が、有島武郎氏なんだ。輕井澤の心中事件などを考へると、人事ではない氣がする」

「おい、冗談ぢやないぜ。そんな下らない事は考へるなよ」と自分は態と笑ひ聲を出して、おどけたやうにかう云つたが、心は木戸の性格を考へて、それを彼の今の言葉と對照して見ながら、暗くなつてゐた。

木戸の話は世間にない話ではない。ざらにあり過ぎる程ある話だ。人間は開闢以來、さういふ事件を繰返してゐるのだ。それだから、その出來事だつて、木戸の心の持ちやう一つによつて、どんな風にでも解決出來ると云へない事はない。――いや、木戸の心の持ちやうによつて、その二人の女の調和も取れて行かないものではない。そんな事は人によるとやつてゐる。又妻と別れて、片一方の女と同棲してしまへないものでもない。或は又その女と別れて、再び妻のところに歸つて行けないものでもない。調和をさせて行くか、或は一方につき他方を捨てるかする外に解決のしやうはない。そんな解決は、かういふ場合に立至つた人間は、みんなやつてゐるのだ。事件は簡單なのだ。――けれども、木戸に取つてはそれが簡單でなくなるといふ事も自分にはよく解る。自分は學生時分から、彼と親しくつき合つてゐるが、その時分から、この人生に少しもすれてゐない彼は、今でもやつぱり少しもすれてゐない。彼にはいづれの女をも捨てる事が、その女を不幸にするものとしか思へないのだ。人間にはそれ自身の生活力、生命力があつて、木と同じに、他に植ゑられたら一時は衰弱するが、いつの間にか生命を取返して、やつぱり呼吸し、生活して行くといふ事が考へられないのだ。――自分は彼のさういふ考へ方、感じ方について、十分敬意を持ち、同感を持つと共に、彼のさういふ事のため心を消耗させて行くのを見るのは、又痛ましいやうな氣がする。併し成行きにまかせるより仕方があるまい。やつぱり見まもつてゐるより仕方があるまい。實際又、こんな事といふものは、はたの氣持でどう出來るわけのものではない。

「併し經濟的方面もなかなか大變だね』と自分は、彼の感情の苦痛の訴へから、話題を轉換させるために云つた。二軒の家を持つのは、なかなか大變だらう」

「ああ、隨分大變だよ。毎月よくやつて行けるものだと自分で思ふよ」

「さうだらうね。併しこいつはお互にさうなんだから、仕方がないよ。併し金のないといふ事が東京では恥辱にならないから、割に樂だね』

『それはさうだ、ほんたうにさうだ。東京といふところは、それは好いね』と木戸は一寸笑つて、『併し僕などよりも、君は尙大變だらう』

『ああ、大變でない事もないね』

『君は負擔が多いからね』

「ああ、併しそんな事は仕方がないからね。誰だつて、自業自得なんだもの』

自分は前にも一寸書いたやうなA出版社の失敗のために、自分としてはかなり重荷な負債を背負つてゐた。一寸小說の原稿料では、返して行く事が出來さうもない程度のものだつた。その外に、自分も世帶を幾つかに分けてゐるや

うな職業になつてゐる。——併しその態度の負擔のある人間が、世間にはざらにある事を考へると、泣言など云ふ氣にはなれない。

「それに困つた時には、困つた事が次々に起つてね。僕の妹がどうしても良人と別れると云つて歸つて來てしまつたんだよ。最初その良人のところに行くといふ時は、僕等が反對したのも構はず行つたくせにね。——その良人はとても善人なんだ。とても善人で、おどおどして、正直者なんだが、そこが最初妹を引きつけて、やがて妹を飽きさせた點かも知れないがね。——とても頼りにならなさうな感じはあるんだが」と木戸はいろいろな負擔が、一時に心を壓して來るのを、一寸訴へるやうな眼付をして、「僕は今親父が生きてゐてくれたら、どんなに好いかと思ふね。もつとも、僕の親父も善人であつたばかりで、現實的にどういふ力も持つてはゐないが、併し親父が生きてゐたら、僕は親父にかう云つて訴へたいんだよ。「お父さん。ほんたうにいろいろ困ります」つて。さう云つたら、親父は「まあよし、まあよし」と云つてくれるだらうと思ふんだ。「まあよし、まあよし」とね。僕は唯さう云つて貰ひたいんだ。實際親父の外にはないからね。僕が怒つたやうな顔をして、「いろいろ困ります」と云つても、「まあよし、まあよし」となだめてくれるのはね」

『はははは』と自分は笑ひ出した。この舊友の話は、自分に涙を流させるか、笑はせるかどつちかだ。自分は今涙ぐみたくはない。そんな事はあまりに困る話だ。だから笑つてしまつたのだ。

『君の話は、俺には苦手だね。君の話は俺に里心をつけさせるからね。俺は後を見ずに、故郷を見ずに、前へ、前へと歩いて行かうとしてゐる放浪者なんだ。それを君の話は、俺の後髪を引くからね』

自分は再び笑ひ出した。木戸も笑ひ出した。けれども、笑つてゐる間に、彼も自分もセンチメンタルになつて來た。十五年前の、彼の端麗な學生服の秀才姿が、笑つてゐる間自分の眼先にちらついた。自分は、この十五年の間に、互に隨分いろんな事があつたものだねえ、と云はうと思つた。が、今の場合さういふ言葉は、自分の心には益々苦手だ。

そこで、

「紅茶を」と女給に云つた。

お茶が來た。自分はてれ隱しにそれをひと息に飲みほした。飲みたくもないのに飲んだので、腹ががばがばした。

笑つた後で、木戸はしばらく默つてゐたが、ふと思ひ出したやうに、

『あのCね。彼はたうとうほんたうに發狂したさうだよ』

「さうかね。やつぱりほんものになつたかね」

このCといふのも我々の學校時代の友人の一人だつた。Cは或政治家のひとり息子で、その政治家が死んだ後、母の手で育てられた。佛教信者の母は、ある寺を買つて、剃髪して、子供の成長を待つた。子供がえらくなりますやうにと、毎朝佛樣に祈つてゐた。——その子供に對する女らしい、狹い愛情と野心とが、始終Cを突ついてゐたに違ひない。毎朝狂氣のやうに、えらくなりますやうにと子供の事を佛樣に祈つてゐる母を、若し我々が自分の母に持つたら、こんなやり切れない事はないだらう。「えらい」とはどういふ意味のえらさかは知らないが、子供がえらくなるやうにと狂氣のやうに母から祈られたら、我々だつてへんになつて來る。

「やつぱり母親が悪いんだね」と木戸は云つた。

「ああ、やつぱり母親が悪いんだよ」と自分も云

つた。けれども、「えらさ」がどういふつもりであるか、彼女自身の剃髪も、そのわけのわからない子供の立身榮達を佛様に祈るためであるか、所謂『尼になつても』と云ふ奴なのか、そんな事はよく解らないが、併しその母親の野心がどんな種類のものであつても、それだけ熱心に望みをかけてゐた子供に、たうとう發狂された彼女の身の上は、同情しないではゐられなかつた。

「それからね、Oね、あれはたうとう肺が惡くて立てなくなつたよ。子供や細君が氣の毒でね」

『……』

『それからね』

『もう止さうよ、そんな話は。もつと違つた話をしようぢやないか。もつと明るい話をしようぢやないか』

『うん、さうだね』

木戸も自分の氣持に氣がついたらしく輕く笑つて、そしてもうそれ以上いろいろな事を語らなかつた。

二人は往來に出た。ペエヴメントの上には、洋裝した日本の娘たちが、三々伍々打ちつれて、笑ひ興じながら、幾組も幾組も通つて行く。

『こんなのはどうだい』と自分は笑ひながら、さつき木戸に會ふ丁度前の瞬間に口吟んでゐた文句を又口吟んで見た。

日本の娘達は、
大根のやうな足をして、
眼をなくなして笑つてゐる。

「どうだい、こんなのは詩にはならないかね」

『そんなのは詩にならないよ。君の頭では詩が出來ないよ』

「さうかな、出來ないかなあ」

省線に乘る木戸と、自分は新橋驛で別れた。

四

自分はまだ歸つて机に向ふ氣が出ないので、新橋と土橋の間の橋の側にあるつり堀に行つて鯉を釣つた。つり堀と云つても、四つ針で引つかける引つかけ釣である。魚の口に針を引つかけて、魚があふあふ苦しがつてゐるのを見るのは、決して好い氣持のものではない。併し最初は可哀さうでも、釣り始めて見ると、どうかしてつり上げてやらうと云ふ氣になつて來て、一寸の間可哀さうなのを忘れてしまふ。自分は一番大きな鯉に引つかけた。四百匁位あらうといふ奴である。自分は實はこの引つかけ釣はそれが初めてではなかつた。自分は先日から、散歩の序でに度々このつり堀にやつて來て、この殘酷な遊びを試みてゐたのである。そしてこんな事は自慢にはならないが、自分はかういふ種類の遊びにかけては、妙に上達が早い。自分は此處ではもう先方から商賣にならないと云つて、斷られる種類の名人格になつてゐた。いや、恐らく自分がそこに來る客の中で一番この遊戲が上手だつたかも知れない。——自分は釣つた魚を持つて歸らない約束の下に、そこで釣る事をゆるされてゐた。——で自分は四百匁ばかりの鯉に引つかけながら、かなり得意でその鯉の荒れるままに、絲をゆるめたり張らしたりしてゐた。大きな鯉は絲を切らうとして、池中を荒れまはつた。自分はそれを次第々々に弱らせて、たうとう動かなくなつたところを、引揚げにかかると、その時、引つぱられた魚の口が引つつれてのびて行くのを見た一人の男が、自分の後から、

「ああ、鯉もやり切れないな」と云つた。

「そんな事を云つてはいけない。そんな事を云つてはいけない」自分はいきなり竿を水の中に

投げ込んでしまつて、後を振向きながら云つた。「可哀さうな事はよく解つてゐるんですよ。それを我慢して釣つてゐるんだから、さういはれると、一遍にもう釣れなくなつてしまふ」

自分はさう云ひながら、そこに立つてゐる洋服姿の五十位の紳士の顏を見て苦笑した。鯉の唇の引つぱられてのびた感じが、一遍に自分の身内に傳はつた。自分はぶるぶるつと身震ひした。

「いや、どうか私などにはお構ひなく釣つて下さい」

「いや、釣らない方がほんたうなんです。釣らない方がほんたうなんです」

自分はてれ隱しに、にやにやと笑つて見せた。そして金をその店のかみさんに渡すと、逃げるやうにそこを立去つた。自分の釣るのを好奇的な眼付で見てゐた澤山の人々が、物足らなさうな顏をして、この突然の釣竿の放棄者の顏を、不思議さうに見てゐた。

自分はそこから新橋の停車場の前を通つて、烏森の方へ行きかけると、そこの小さい神社の縁日だと見えて、夜店や見世物小舍が並んでゐた。その中に小さな小舍で、犬の藝當を見せてゐる小舍があつた。

まだ歸つて机の前に坐る氣のしない自分は、その小舍の中に入つて見た。自分は子供の時分に、かうした見世物をよく見た事がある。自分は二十數年前に見たかうした種類の見世物が、今も猶、何處に棲息してゐるものか、かうしてかういふところに現れるのを、何となくなつかしいやうに思つた。

犬は五匹しかゐなかつた。それは支那種の犬らしい、毛のぼやぼやと長い、短い耳の一寸垂れた、小さな、白黑の斑犬で、どこか狆に近い種類のものだつた。犬といふよりも、狗といふ方が適當だつた。色の黑い一人の男が、一本の棒を持つて、その犬共を指揮してゐた。

それは地面から三尺ばかりのところに、竹の輪がぶら下つてゐて、その輪を犬共は、順々に、飛んで拔けると云つたやうな藝當だつた。

『太郎、次郎、三郎、五郎、そうら、みんな順々に整列した。整列した』と指揮の男は大きな聲で怒鳴ると、犬共は身體の大きさの順に、空地の端に一列に並んだ。「此處に御覽に入れまする藝當は、空中は何とかの筒拔け…」と大きな聲で云つたが、それが餘り早口なので、何の筒拔けと云つたのか、よく聞きとれなかつた。それから犬に向つて、『さあ、太郎さんから、順々に始めたり、始めたり！」

すると、犬は順々に、ちよこちよこ、ちよこちよこと駈けて行つて、身輕に、ぽんと飛び上つて、その輪の中を拔けては、又前のところに歸つて來て、一列に整列する。それは無邪氣で可愛らしい藝當だつた。すると、最後の一番小さい一匹、つまり五郎と呼ばれてゐる犬が、自分の番が來ても、駈け出して行かないで、そつぽを向いて、ぽかんと突つ立つてゐた。

「さあ、五郎さん、又お怠けが始まつたか。皆さん、この犬は犬の不勉強家でして、時々からして駄々をこねます。――そら、五郎さん、五郎、こら、五郎！」

指揮者の聲がだんだん荒々しくなつて來ると、「五郎」は指揮者の顏を、上眼使ひにちらりと見た。そして哀願するやうに、耳を下げ、尻尾を下さがりに、氣のなささうに一寸振つた。

その樣子に見物人がどつと笑つた。

「五郎、こら、早う、早う」少しあわて氣味の指揮者は、お國訛りを出して、怒つたやうに怒鳴つた。そして手にしてゐた指揮棒を心持振り上げ加減にして見せたので、「五郎」は指揮者の顏から指揮棒に、ちらりと眼をくれて、それか

ら厭々さうにちよこちよこと駈け出した。けれどもその駈け方が餘りのろのろしてゐるので、輪の下まで行つても、ぴよんと飛び上る勁勢がついてゐないのか、上を見ただけで、輪を飛び拔けずに、そのまま戻つて來てしまつた。

そこで見物人が又どつと笑つた。

『五郎、お前はなんといふなまけ者だい。こら、ちやんと飛んだり、ちやんと飛んだり……』

指揮者は再び棒をふり上げた。そこで『五郎』は再びちよこちよこと駈け出したが、どうしても飛び上る氣がしないのか、又輪を見ただけで、そのまま戻つて來てしまつた。

『五郎、ふざけるな。畜生！　どうしても飛ばない氣なら、かうしてくれるから』

指揮者は一二歩『五郎』の方へ進みよつて、今度はほんたうに打ちさうな氣配で、棒を高く振り上げた。『五郎』はそれを見ると、もう絶體絶命といふやうな顏をして、ちよこちよこと今度は少し元氣を出して駈け出し、ぴよいと輕く輪の中を飛び拔けた。

見物人はわつと笑ひながら拍手した。

『あの犬は疲れてゐるんだ』と自分はそれを見ながら考へた。『多分夕方から、ああして飛んでゐるのだらう。厭なのも無理はない。厭なのも無理はない！』

自分は飛ばうと思へば飛べない事はないのに、イヤでイヤで莫迦らしくてならないので、その力を出し惜しみしてゐる、この藝當についてハリのない犬の氣持を考へると、をかしくもあり、いぢらしくもあり、又頰笑まれもして來た。――その身體つき、顏つき、眼つきに、それが如何にもはつきりと、デリケエトに出てゐる。今はもう午後十時だ。五時頃からこの小舍がかかつたとして、五時間もあんな事をやつてゐては、疲れもし、莫迦らしくもなるのは無理がない。

自分はその小舍を出て、自分の宿である待合の方へ歸つて行きながら、『狗が疲れてゐる』と呟いた。

自分の今の氣持と丁度同じやうに、あの犬の氣持は疲れてゐるに違ひない。どうしてものつぴきならないドタン場まで行かないと、あの空中の竹の輪を飛び拔けようとしない。――けれども結局飛び拔けたから愉快だ。自分も一つこれから歸つて、竹の輪を飛び拔けようか。もう最後のドタン場だ。どうしてもかうしても、最後の空中飛躍を試みなければならない。

自分は疲れた犬と疲れた自分とを、冗談めかしく並べて考へながら、宿の方へ歸つて行つたが、机の上の原稿用紙を考へると、だんだん冗談にしてはゐられない氣持になつて行つた。

（大正十四年七月）

神經病時代

一

若い新聞記者の鈴木定吉は近頃憂鬱に苦しめられ始めた。その憂鬱が彼にはいろいろの方面から一時に押し寄せて來るやうに思はれた。彼には周圍の何も彼もがつまらなくて、淋しくて、味氣なくて、苦しかつた。第一には彼の家庭である。彼は今から半年ほど前に一人の若い女と同棲した。同棲前に彼と彼女との間には既に一人の男の子が生れてゐた。二人の生活はうまく行かなかつた。……けれども、これはもつと後で說く事にしよう。

今は何よりも先に彼が新聞社でしてゐる仕事を例に取つて見よう。彼はＳ――新聞社の社會部の編輯見習で、月給三十圓を貰つてゐる。彼は朝九時に出社したければならない。Ｓ――新聞は東京中の新聞といふ新聞の中で、最も忙がしい新聞だと云はれてゐる。一體は夕刊新聞なのであるが、近頃は正午版までも出し始めた。だから九時に出社して、十時半にはもう直ぐに正午版の締切と云ふ事になる。いろいろの通信が電話で來る。外交記者や通信社が原稿を書いて寄越してゐては、時間が間に合はなくなるからである。

定吉は此の電話を聞かなければならないのが、第一に厭であつた。大概の人間は一ケ月も經つと直ぐに耳が馴れるさうだけれども、定吉はもう入社してから三ケ月にもなるのに、未だにそれに馴れなかつた。締切時間の間際になつて、氣が急きながら卓上の受話器に耳を當てると、彼の聽神經は妙に昂奮して、耳の中がガアンと鳴つてゐる。

「淺草區――町二番地△吉長男□吉（六つ）は本日午前七時三十分頃同家前の往來にて遊戲中通りかかりたる同區××町四番地○○商會の自動車に轢殺さる、運轉手夏野三造を象潟署に拘引目下取調中「麻布區廣尾町△△番地鳶職……」

電線を傳はつて來るか細い聲が、定吉の耳の中のガアンといふ響きと入れ雜つて、鳶職と云ふ音が、どうしてもはつきりは聞き取れなかつた。

「何ですつて？……モシモシ、廣尾町△△番地……それから何職ですつて？」

「トビ職ですよ」

「タビ職？……ああ、モシモシ、電話が大變遠いやうです」定吉は自分の張り上げた聲が、何だか泣聲のやうに甲高く調子が外れて來るのを感じた。

「これでも解らないかな……鳶職ですと云ふのに……烏や鳶のあのトビですよ」

「鈴木君、その電話の事件は何だね？ 何か大事件ですか？」と社會部長の齋藤が彼に聲をかけた。

「子供が自動車に轢かれたのが一つと、それから今一つあるのですが……」定吉は齋藤の方へから答へて置いて、再び受話器に向つた。「モシモシ、解りました、その鳶職が……なるほど、鳶職内山市スケ……スケは介ですか助ですか……な、なるほど……その母のりつ……たるほど……年齡六十八歲……なる……」そして彼の右の手に握られた鉛筆は、机の上の原稿用紙の上をやけくそに早く走つた。

その通信はその内山市介なる鳶職の母親の六

十八歳になる老婆が、浮世を悲觀して、半月ほど前から二度縊死を企てたが、その都度家人に發見されて成功しなかつたのを、本日午前四時頃家人の寢すましたる隙を窺ひ、同家臺所の梁に細引を吊して三度目の縊死を企て、終に自殺を遂げたといふのであつた。原因は不明だが、同家は別段貧困と云ふ程ではないから、恐らく生活難のためではあるまいといふことであつた。

定吉はその通信を別の原稿用紙に淸書してゐるうちに、その老婆のみじめな死樣が眼の前に浮ぶやうな心地がして來た。彼は子供の時分に近所の老婆が縊死したのを、女中の背中におぶはれながら見に行つた事があつた。その時の光景をそつくりそのまま思ひ出したのである。白髮をふり亂して、からだ全體がだらりと力なく梁からぶらドつて、そして鼻からは氣味の惡い黑い汁を二すぢ垂らして……

『生活難でないとすれば、如何なる原因だらう？』と定吉は筆を動かしながら考へた。よくある奴だが、市井の女房が腹黑い女でもあつて、老婆を虐待したのだらうか？　彼はふとメチェニコフの『人生論』の中に、生に對する本能は老年になつて肉體が衰弱するに從ひ、卻つて益々募つて來る。だから若い青年は血氣にはやつて厭世や悲觀の爲に自殺するが、老人にはさういふ事は殆んどない、若し老人が自殺する事があれば、其場合には殆んど其全部が生活難の爲である。其他の原因では極めて稀であると云つても差支へない、と云ふ意味の事が書いてあつたのを記憶に思ひ浮べた。「して見ると、若し此の老婆が生活難で自殺したのではないとすれば、これには何か非常に悲慘な原因がその底に橫たはつてゐるに違ひない」

さう思ふと、定吉は胸を締めつけられるやうな苦しさを感じて來た。彼にはこれが此の上ない大事件のやうに思はれて來た。議會の論戰の報告よりも、U――首相が議會でとつちめられて、顏を眞赤にしながらも返答が出來なかつたといふ報告よりも。そこで彼は淸書した原稿を社會部長の机の上にさし出した。

「何か大事件ですか？」社會部長の齋藤は一わたりざつとその原稿に眼を通しながら、『自動車の轢殺と老婆の縊死か』と退屈さうに云つた。

『老婆の縊死の原因は生活難ではないさうです』定吉は『生活難ではない』に特別な意味と力とを籠めて云つた。それが社會部長の心に或る感動を與へるに違ひないと確信してゐるもののやうに。

ところが、社會部長の顏色は少しも動かなかつた。彼は、

『牛島君』と彼の次席に坐つてゐる金緣眼鏡をかけた色の生白い男の方へ向いて、『君の書き取つた通信の中にも、自動車の事故があつたやうでしたね。あれとこれとを一纏めにして、「人殺車の橫暴」と云ふみだしを二號で附けといて吳れ給へ。全部で十二三行ぐらゐに。――かう自動車の事故が毎日々々出來しては、實際一個の立派な社會問題となるからね』さう云つて今度は定吉に向ひ、『此の老婆の縊死は二行にして吳れ給へ。「市井の塵」の中に入れるから』

定吉は呆氣に取られて、ぼんやりしたやうな、悲しいやうな氣がした。彼は八行ばかりに書いた老婆の記事を二行に縮めようと苦心したが、なかなか出來なかつた。何處も彼處も必要のやうな氣がした。そして死人を棺につめる時、棺の外にはみ出る手足をぼきぼき折つてしまふあの葬儀屋の男と同じやうな殘虐を、自分が働いてゐるやうな氣がした。

『どうしても五行より縮まりませんが』

一どれどれ、貸して見給へ』社會部長は半分笑ひながら、半分たしなめるやうな顔をしながら、定吉の原稿の文字をまるで器械仕掛のやうに素早く赤インキで消して行つた。『それ見給へ。こんなに縮まるぢやないか』

定吉は自分の前に投げ返された原稿を、一生懸命に眼に力を入れて熟視した。その記事は次のやうになつてゐた——

『麻布廣尾町内山りつ(六八)は今朝四時自宅臺所にて縊死す』

時計が十時半を報つ。『締切!』と社會部長が叫ぶと、給仕がそれを鸚鵡返しに『締切!』と叫びながら、柱のベルのボタンを押す。それが階上の植字工場の方へ行つて、チリンチリンとけたたましく鳴つてゐるのが、定吉の耳にも傳はつて來る。

『ああ、半日濟んだ!』と定吉は腹の中で溜息した。

牛島が大組をやりに階上の工場に上つて行く。定吉はそれを見習ふために後から蹤いて行かなければならない。それが濟んだ。そして十一時三十分には最下層の印刷工場から輪轉機がグワラグワラと大きな聲で唸り始める。給仕が刷り立ての新聞紙を持つてとんとん梯子を駈け上つて來て、編輯局の片隅からそれを配つて歩く。定吉は自動車の記事が三面の中段に二段活字で麗々しく出てゐるのを見た。そして隅つこの方の『市井の塵』の中に、老婆の縊死が萬引と詐欺との間に挾まつて小さく出てゐるのを悲しさうな顔をして見た。

正午頃の編輯局は雜閙の頂上に在つた。外交記者達がぞろぞろ歸つて來る。煙草の煙がもやもやと天井に棚引く。埃が舞ひ上る。その中でみんなが辨當を食べながらガヤガヤ雜談する。その雜談は先づ食物から始まつて、次に女の話に移り、それから金や貧乏の事になつて行くのであつた。この順序には毎日々々少しの變化もなかつた。女の話は金縁眼鏡をかけた牛島の獨占であつた。

『さうですよ、女と云ふ奴は物にするのはわけはないが、六ケ敷いのはその別れ際ですよ。上手に別れるやうになれば、もう一人前ですからな』

貧乏の話はまた主として外交部長の吉田の口から語られた。彼は某私立大學の政治科を十年も前に出たのに、未だに新聞記者としての好い位置を贏ち得られない自分の不遇や、子供の五人ある事や、もう長男はやがて中學にやらなければならなくなるだらうと云ふやうな事を、くよくよ語つては、自分より五つも年の若い社會部長の齋藤に向つて、『あなたは實際、羨しい』かう云ふのが常であつた。(外交部長は社會部長の部下なのであつた。)

そして吉田はまた始終此の正午の短い休みの間を利用しては、外交記者達に叱言を云ふのであつた。定吉は此の社の總ての事がみんな自分には適さない、憂鬱を誘ふ種でないものはないと感じてゐたが、中でも一番此の吉田の外交記者達に叱言を云ふ時の聲を聞くのが厭であつた。——吉田は色の黑い、鼻の下に髭のチョボチョボと生えた、出つ齒の、額の狹い、下等な顔をした男であつた。

『幾ら云つても君には解らないのか。君は文章さへも碌すつぽ書けないぢやないか』かう若い外交記者に向つて、編輯局中に聞えるやうな大聲で怒鳴つてゐる吉田の樣子を見ると、定吉はいつでも心の畏縮するのを覺えた。

食後は夕刊の原稿が來る。外交記者が出て行く。定吉は電話を聞く。それは又午前と同じ繰返しなのである。二時になると『締切!』と齋藤が叫ぶ。けたたましく植字工場の方でベルが鳴る。大組に行く牛島の後から定吉は見習ひ

について行く。

時計が三時を報つ。すると、もうみんなが退社する時間なのである。けれども定吉にはまだ仕事があつた。それは社會部長が白っぽい鼠色のサンマアコオトを引つかけながら、から命令して行くからである。

『鈴木君、甚だお氣の毒だが、明日のおひこみを三段ばかり工場に廻しといて呉れ給へ』

そこで定吉はひとり後に殘つて、豫備の原稿を抽斗から出して、片つ端から讀み始める。

時計が四時を報つ。すると、それは給仕達が退社する時間なのである。彼等は急いで机や椅子を片付け始める。亂暴に床を掃くものだから、埃が天井までも舞ひ上る。定吉は眉をひそめながら、袂からハンケチを出して口と鼻とに當てる。彼は自分の母が肺結核で死んだのを思ひ出して、出來るだけ埃を吸ふまいとするのである。けれども彼は『もう一寸靜かに掃け』とか、『そんなにガタガタ騒がしい音を立てるな』とか、給仕に命令する事は出來ない。物を命令すると云ふやうな力は、生來彼に缺けてゐるものの如く見える。……

かうして定吉がおひこみを工場にまはして社を出て行く時は、いつも四時半を過ぎてゐた。

二

秋の初めの或る夜であつた。定吉は右の手にステッキを持ち、左の手はふところに入れながら、銀座通を歩いてゐた。彼は子供の時分に始終女中の背中におぶはれつけたので、それがためかなり足が内側に彎曲してゐた。それがセルの袴と羽織との上からさへも少し注意して見ると、直ぐ眼についた。若しそれさへなければ、彼は日本人としては隨分身長が高い方なので、スラリとして立派なのであつた。彼は眼鼻立もよく整つてゐた。眼には優しみと愛嬌とがあつた。けれども眉と眉との間が少し距離があり過ぎたり、口が小さくて脣が薄かつたりする邊りに、何處か或る力の――意思の力の缺けてゐる事を表はしてゐるやうな處があつた。

尾張町の停留場に來て彼は佇んだ。そのまま電車に乘つて家に歸る氣にはなれなかつた。と云つて彼は別段何處にも行くめあてはなかつた。彼はカッフエ。ライオンの壁に凭れながら、幾臺も幾臺もの電車をやり過した。彼の眼は前方を見つめてゐた。が、別段何をも見てゐるのではなかつた。たゞ都會のいろいろの灯が混り合つて、ぼうつと一つの塊になりながら、彼の眼に映つてゐるに過ぎなかつた。――彼はぼんやり社の事だの家庭の事だのを考へてゐた。が、さういふものがみんな自分には親しみのない、適さないもののやうに思はれて來た。

『さうだ、俺見たやうな人間はこんな風な生活をしてゐる事は間違つてゐるんだ』と彼はいつもよく考へる事を考へ始めた。が、彼はその考が彼の心の深いものに觸れる事は避けてゐた。で、途中からその方向を轉じさせて、から腹の中で呟いた。『あゝ、田舍に行きたいな。何處か靜かな田舍に。そして本を讀まう。トルストイを讀まう。自分はやつぱり一番トルストイから教へられる……』そして彼はトルストイの『主人と下男』のニキタの美しい心などを思ひ出した。彼は都會の此の刺戟の多い煩雜な生活が、堪らなく厭になつて來た。

彼は東京で生れて東京で育つた。實際のところ、彼は田舍には三日か四日しか行つた事はなかつた。だから、彼の云ふ田舍がどこに行つたらあるのか見當はつかなかつた。けれども、彼の想像した田舍は美しかつた……そこには小川が流れてゐた。彼はそこで釣絲を垂れる事が出來た。そこには森があつた。彼はそこで小鳥を擊つ事が出來た。そこには廣い畑があつた。彼

はそこを散歩することが出來た。そして人情が醇朴で、みんなが彼を尊敬した。さうだ、彼はいつの間にかそこで小學校の敎師になつてゐるのであつた。彼は子供たちにトルストイのお伽話をはなして聞かせるのである。すると子供たちは、みんな嬉々として彼になづく。子供達の祖父や祖母である爺さん婆さんが、大根だの胡瓜だのを、彼の家の縁側に持つて來ては載せて行つて呉れる。……定吉は夢のやうな氣持になつて來た……が、彼は急にそんな事を話したら、妻がどんなに怒るだらう、と云ふ事を思つた。

「あんな女とは別れてしまふのだ。……が、どうして別れる、子供をどうする？」

彼はもう考へるのが厭になつて來たので、さういふ思想を打拂ふために、頭を左右に振つた。

『おい』といきなり定吉の肩を叩いたものがあつた。『ぼんやりしてゐるぢやないか』

見ると相川が立つてゐた。定吉はこゝで友達に會つたのが嬉しかつた。

「やあ」と彼も云つた。

『社の歸りか？ それにしては隨分遲いね』と相川は云つて、『どうだい、その邊を少し散歩しないか？」

「ああ、してもいい」

そこで二人は歩き出した。

『珈琲でも飲みに行かないか？』と相川が云つた。「僕は今小説を書き出したんだがね。どうしてもうまく行かなくて困つてしまつたんだ。もう一昨日から一つの峠にかゝつて、筆が少しも進まないんだよ。――その峠さへ越してしまへば、もう後はわけはないんだが』

『長いものか？』と定吉は訊いた。

『いや、短篇なんだ』と相川が云つた時、二人はとある横町のカッフェの前に來てゐた。二人はそこに入つて行つた。

『うまく行くか行かないか解らないが、一つの新しい試みをやらうと思つて書き始めたんだがね……』と相川が言葉を續けようとした時、左手の隅の方から、突然「よう！」と云ふ聲が聞えた。そこには一つの卓子に向つて二人の青年が腰をかけてゐた。遠山と河野とであつた。

「やあ、此處に來い！」と云つた遠山の聲はもう醉つ拂つてゐた。『いゝ處で連中が集まつたものだね。俺は今日は非常に愉快で堪らないんだ。まあ、聞けよ。俺も今日から愈々社會人になつたんだよ。おい、社會人に。君たちは俺が社會などに出ると、一たまりもなくつぶれてしまふと豫測してゐたらう。ところが、それは大違ひ、働かうと思へば俺は何でも出來る男なんだ。俺が今まで働かなかつたのは、俺のたましひが大切だつたからだ。だが、俺は今は働くぞ。俺は一人の女房と二人の子供とのために今日からうんと働くぞ。そして彼等に安心させてやるぞ。さうだ、うんと働く』遠山はかう叫びながら、『さあ一杯』と定吉に盃をさした。

『僕は飲めないよ』と定吉は云つた。彼は酒が少しも飲めなかつた。けれどもかう云ふ場合でも彼は盃を押し返す事は出來なかつた。彼はそれを受けた。そしてそつと脣に當てたが、酒の香にむかむかとした。

『そして何處に出て働くことになつたんだ？』と相川が靜かに訊いた。

『××雜誌の訪問記者になつたんだ。月給十九圓、十九圓とは變挺な勘定ぢやないか。一體なら二十圓さし上げるべきところ、目下社が不振だからと云ふので、一圓けづるんだつてさ。一圓、たつた一圓……』遠山はおどけた手附をして叫んだ。彼の指は兩手の十本ともその尖端に行つて妙に丸くぷくりと膨れてゐた。彼に云は

せるとそれは子供の時分畑に出て働いた勞働の印だと云ふことであつたが、彼が醉つ拂つてその指をうんと擴げながら、おどけた調子で手を振る時には、何だかそれ等の指先のふくらみが、雨蛙の吸盤を思はせた。

『ボオイ君、僕にウヰスキイを一杯』相川はさう註文した。『君は何にする？』と定吉の方を向いて、『珈琲か？ よし……ボオイ君、それから珈琲を一杯』そして遠山の方へ云ひかけた。『だが、十九圓ぢや食へなからう』

『併し、今までの一文なしよりは食へるさ』と遠山は答へた。『俺の故鄕の家もたうとう破産してしまつたさうだ。何しろ三年つづいて林檎に蟲がついた上に、今年も亦あの邊は大嵐があつて、とても望みがないんださうだからな。併し總てが仕方がないんだ。かう云ふやうになるやうに出來てゐたんだ。先日親父から來た手紙に、もう愈々これから無心を云つて來ても一文も送る事が出來ないから、そのつもりでゐて呉れと書いてあつた。親父は山の中に小さな二室か三室の家を建ててその方に移つて、今までの屋敷も地面もみんな人手に渡してしまつたんださうだ。俺はそれを讀んだ時涙がこぼれたよ。ほんとに俺の親父はいい親父なんだぜ。親父は俺の十九の時から去年まで丁度十一ケ年間毎月々々俺に金を送つて呉れてゐたのだ。俺がいつか出世するだらうとそれを待つてゐるのだ。ところが、俺は酒ばかり飲んでゐた。俺は學校さへも卒業しなかつた。俺はなまけ者だつた。そして俺はもう女房に二人も子供を生ませてしまつた。俺はよく考へて見ると、ワイフや子供にまだ自分の手からは著物一枚買つてやつた事もない。いや、それどころか、俺は女房の著物をみんな質に叩き込んで、酒を飲んでしまつた。俺は女房の鏡臺までも飲んでしまつた……』

『ボオイ君、ウヰスキイを僕にもう一杯』と相川が云つた。『おいおい、君はそんな事を云つて一體喜んでゐるのか悲しんでゐるのか？ 君のさういふ行爲を君は是認してゐるのか？』

『是認？ いや、是認しやしないさ。無論喜んでなどゐやしないさ。俺は悲しんでゐるんだ……俺は……』

『それにしちや、餘り調子が喜ばしさうだぜ』と相川は冷かに云つた。

『だが、俺は眞實心の底から妻や子供を愛してゐるのだ。妻も俺を愛してゐる。子供だつて僕になづいてゐる。それは君には到底解らない程の高い程度でだ。俺がかうして酒を飲む。そして醉つ拂ふ。さうすると、妻や子供の事が思はれて來る。俺は彼等を可愛いと思ふ。俺はよく信じてゐる。俺と妻との愛は著物や金が間に挾まつた愛ぢやないんだ。眞つ裸かの愛なのだ。皮膚と皮膚との間に何ものも介在しない愛なのだ。著物や金が全部なくなつて、二人が眞つ裸かになつた時、尙一層俺たちの愛は純粹になるのだ！ ほんとだ、俺の藝術もやつぱりそこに在る。俺は十二年の間何も書いた事がない。だが、俺の藝術は次第に形成されつつあるのだ。俺はすべてのものをみんな捨てて行く、そして最後に俺の藝術がひかへてゐるのだ……』

『一寸待つて呉れ』と相川が微笑を浮べながら云つた。『どうも理論が變挺になつて來たぞ。まあ、君の藝術はどうでもいいとして、君の細君がそんなにまでなつてもまだ君に愛を捧げてゐるのに對しては、僕は敬意を拂ふよ。併しそれだからと云つて、君がさういふ論法を用ひる事は、僕にはどうも合點が行かない』

定吉と河野とは默つてゐた。定吉はかういふ場合いつでも議論に加はつた事がなかつた。彼は物事に對して意見と云ふものを持つてゐなかつた。彼はただ個々の物事を雜然とその弱いハ

アトに感じはする。併し彼はそれを統一したり綜合したり、それを一個の纏まつた彼自身の意見としたりするには全く力が缺けてゐる。そこで彼はアルコオル中毒のために雨蛙の吸盤のやうな指端をぶるぶる震かしながら昂奮して大聲を上げてゐる遠山の顏と、唇に微笑を浮べながら對手の急所を衝くやうなキパリキパリした物の云ひ方をする相川の顏とを見較べてゐた。彼の頭には遠山の細君の事が浮んで來た。彼女は實際柔順な女であつた。まるで裏長屋のやうなところに入つて、三人の子供を抱へて、極端に窮迫した生活をしてゐながらも、嘗て不平らしい表情を顏に浮べてゐたのを、定吉は見た事がなかつた。いつでも夫に對して素直にかしづいてゐた。その子供をやさしく育ててゐた。その立居振舞に、いつでも禮儀作法を忘れなかつた。「あれや全くクヰインのやうに寛濶な心を持つてゐる」とよく遠山が彼女の事を評する言葉を思ひ出した。

『何故遠山はあの柔順な細君にあんなみじめな生活をさせて置くのだらう？　もつと何とかなりさうなものだ』と定吉は考へた。が、彼には解らなかつた。――彼は遠山がそんな苦しい生活をしながらも、平然として毎日々々唯酒を飲んでは大聲に人生を論じてゐる有樣を考へた。彼には遠山のその極端な生活態度を見ると、何となくそこに自分には解らない或る物があるのではないかといふ氣がした。乾度何處かに自分などとは違つた、人生に對して怯えない或る力か、或る強さがあるやうな氣がした。――定吉には何でも極端な事の出來る人間はみんな強く見えたのだ。――そして彼は遠山が出鱈目な生活をしてゐながら、フランクな、正直な男である事に好意を持つてゐた。

　定吉は眼を上げた。すると、その途端に河野の若々しい顏が眼についた。河野は友人仲間で一番年が若かつた。彼はまだ學校に通つてゐた。彼の顏は彫刻的に整つてゐて、色が白くて眼鼻立が女のやうに美しかつた。彼が二人の議論には耳を傾けずに、卷煙草をくはへながら、ぢつと憧れるやうな眼付で空間に眺め入つてゐるのを見ると、定吉は河野が今或る一人の少女に戀をしてゐるのを思ひ出した。定吉は河野がまだ童貞であるのを思つた。――無茶な生活をやり得る遠山を見て、或る力の自分に不足してゐる事を意識する定吉は、河野の純潔を見ても、やはり或る物の自分に缺けてゐるのを意識した。それは殆んど一つの反射運動とも云ふべきものであつた。彼は總ての事に對して對手の優點を直ぐ感じた。そして小さな反省が始終彼を惱ました。

「俺も三年前には……」から定吉はぼんやり考へ始めた。「だが、何だつてあんな女に俺はラヴしたんだらう？　あんな女の何處に價値があつたのだらう？」定吉は三年前には自分の妻がまだ娘々してゐて、快活であつた事を思ひ出した。けれども……さうだ、さう云へばあの時分からあの女の眼には何處かに險があつた。あの險がいけなかつたのだ。――定吉は最初他の少女に戀してゐたのであつた。だが、彼は對手にそれを打明ける勇氣がなくて、躊躇し悶々としてゐた。そこに彼の妻が現はれて來た。彼の妻は彼女の方から彼に誘ひかけて來た。彼が躊躇してゐる間に、彼女はどんどん事をはこんで行つた。すべてが定吉は受身であつた。定吉はいろいろの事を思ひ出した。彼女が如何に大膽であつたか、自分が如何に男らしくなくびくびくしたか、そして自分が如何に自分自身の意思によつて行動しなかつたかを。……それを思ふと、いつでも定吉は顏の火照るのを覺えた。彼はその時まで持つてゐたものを彼女によつて初めて失ひ汚してしまつた時、取返しのつかな

い事をしたといふ憂苦に襲はれたのを思ひ出した。彼は勝誇つたやうに嬉々としてゐる彼女に向つて、爆發の力を持たない弱い憂鬱な憎しみを覺えた事を思ひ出した。

『ああ』と定吉は思つた。『自分は意氣地がない。俺はあの時何故拒絕しなかつたらう。斷然と、さうだ、斷然とだ！』彼は悲しくなつて來た。併し、それ以上考へるのは彼には堪らなく恐ろしかつた。彼はいつもするやうに頭を左右に振つた、そしてその考の方向轉換を試みた。

遠山の大きな昂奮した聲が定吉を我に歸らせた。

『いや、君には解らないんだ』遠山は椅子から立上つて、手を振りながら叫んでゐた。『俺は生活を恐れてはゐない。俺は生活なんていふものを輕蔑してゐる。俺は唯ひとつの物をしか求めてはゐない。この生活上のいろいろなものはみんな消えてしまつたつて、俺には恐ろしくも何ともないんだ。「我等が求むるものは唯一つのみ」――その通りだ、俺たちにほんとに必要なものは唯ひとつのみだ』

『そしてそれが君には酒なんだ！』と相川が叫んだ。

『何だと？ 貴樣は俺を輕蔑してゐるな。貴樣に一體何が解る？ いいか。貴樣には人間の表面しか解らない。俺が少し酒を飲む。と直ぐ人類の秩序が亂れると拔し居る。貴樣のやうな小僧つ子の案出した秩序によつて此の人生を一つの型の中に極めつけられて堪るものか。が、待てよ、さうだ、ドストイエフスキイだ。ドストイエフスキイはもつと人生を見てゐるぞ。「罪と罰」の中に出て來る老官吏――ああ、何といふ名だつけかな？ 畜生、俺は頭がどうかしてゐるぞ。何と云つたつけかた、あの老官吏の名は？』

『君の云ふのはマルメラドフだらう』と相川が云つた。

『ああ、さうだ、マルメラスキイだ、ドストイエフスキイがそのマルメラスキイを描寫した……』

『マルメラスキイぢやない、マルメラドフだよ』

『何方だつて同じだ。露西亞人の名は大概似たやうなものだ。……ドストイエフスキイがマルメラスキイを描寫した態度を考へて見ろ。ほんとにドストイエフスキイはよくあの男の心を理解してゐるぞ。あの老官吏が女房のものでも何でもみんな酒にして飲んでしまつて、而も心から妻子を愛してゐる氣持をドストイエフキイはよく理解してゐるぞ。そこが彼の偉大な所以なんだ』

『馬鹿を云へ。マルメラドフはドストイエフスキイぢやない。彼奴はドストイエフスキイによつて取扱はれた一個の性格破產者だ。若しドストイエフスキイがマルメラドフなら、僕はドストイエフスキイを輕蔑するよ』

『默れ、小僧つ子のくせに貴樣に何が解る？』

『いや、默らん、僕は斷じて默らん……』

そして二人はまるで鍛冶屋のやうに、交互に卓子を叩き合つた。そして遠山は熱して昂奮して、相川は冷かな態度で人を小馬鹿にしたやうな微笑を浮べて、論じ合つた。コップや皿が卓子の上でガチャガチャ躍つた。

『こいつは面白くなつて來たぞ』と相川が叫ぶやうに云つた。『それならば聞き給へ。人生には秩序が……いいか、君がそんなに解らないなら、僕がよく合點の行くやうに說明してやる……ボオイ君、僕にウヰスキイをもう一杯』

だがその途端に、向うの隅の卓子に向つてゐる洋服を著た男が此方を見て笑つてゐるのに氣がついたので、相川は急に立上つた。

『出ようぢやないか。ボオイ君、今のウヰスキイは中止だ。そして勘定を』

その時定吉は自分の口から、

『勘定は僕が拂はう』と云ふ言葉が突然出たので、自分ながら吃驚した。何のつもりでそんな事を云つたらう?——彼は咄嗟の間に、びくびくしながら、懐中の中を腹のうちで計算して見なければならなかつた。——が、何か知らが彼を驅つて、ボオイが勘定書を持つて來て相川に渡さうとした時、素早く横からそれを引奪らした。——彼は微笑をさへ作りながら。

往來に出ると、河野が定吉の側に寄つて來て、

『僕はねえ、君』と優しい聲で云ひ始めた。彼はその容貌と同じやうに、その聲までが女のやうに優しかつた。『僕はいつかつから君に賴みたいと思つてゐたんだよ。もう僕ひとりでは何とも仕方がなくなつて來た。僕は何とか解決をつけなければ、もう苦しくて苦しくて堪らないんだ』

『それぢや、まだあのままなのかい?』と定吉は訊いた。

『ああ、あのままさ。始終會ふんだよ。今日も學校の行きに電車の中で向ひ合つて腰を掛けちまつたので、全く困つたよ。苦しくなつて來たので途中で飛び下りようと思つたが、さういふわけにも行かずね……それでね、君』と河野は躊躇しながら、『僕お願ひだから君からあの女に僕の事を打明けて呉れないか。お願ひだ、僕はもう苦しくて堪らないんだ』

『そんな事は僕には出來ないよ』と定吉はどぎまぎしながら答へた。

『ああ、困つたな。お願ひだ、君が云つて呉れなけれや僕はどうする事も出來ない。僕は苦しくつて堪らないんだよ。ほんとに。……それぢや、ねえ、君』河野は泣きさうな聲を出した。『僕と一緒に來て呉れ給へな。僕の應援にさ。さうしたら、僕思ひ切つてあの女に話をするから。僕ひとりでは到底駄目なんだ。それだけは是非承知して呉れ給へ』

定吉は默つてうつむいて歩いてゐた。彼はそんな事は到底自分の任ではない事を考へてゐた。が、河野が昂奮して、悲しさうな聲を出して、幾度も幾度も哀願するのを聞いてゐると、彼は河野が非常に氣の毒になつて來た。で、彼はたうとう、『それでは、行かう』と答へないわけには行かなくなつて來た。

『ああ、承知して呉れたね。有難う』河野は感激した聲を出して、定吉の手を握り締めた。『それぢやね、失敬だけれど、水曜日の朝七時頃、氷川神社の横手の原ね、あすこに來て呉れ給へな。水曜日には七時半にあの女はあの原を通つて澁谷の終點に行くんだよ。いいかい、水曜日の午前七時までに』

そして優しい喜びに充ちた聲を出して、更にかう附加へた。

『僕はあの女と擦れ違ふ時、何とも云はれない電氣のやうなものを感ずるんだよ。僕はその氣持をあの女も僕と同じやうに感じてゐるに違ひないと信じてゐるよ。メエテルリンクが云つたよ、或る一人の男に取つて、それの配偶者となるべき女は生れながらにしてちやんと決まつてゐるんだつて。運命がさう決めて置くんだつて。そして僕に取つてはあの女こそ、乾度僕のために定められた女なんだよ……』

定吉は『運命の決めて置いた女』と腹の中で呟いて、憂鬱な溜息をした。

三

定吉は朝早く眼をさました。彼は夜つぴて不健康な夢に襲はれてゐたので、眼がさめても眠つた後のやうな氣はしなかつた。頭が重かつた。彼は煙草を喫まうと思つて、煙管を取らう

と身體を擡げかけると、自分の著物が畳まれもしないで、皺くちやになつて、夜具の裾に丸まつてゐるのを見た。『ああ、これだ、著物を疊んでも吳れない』と彼は吐き出すやうに呟いた。と、急に彼の頭に一時に不快が押し寄せて來た。

……昨夜も亦例のやうに、彼の妻の不機嫌が始まつたのであつた。

それはいつでも何といふはつきりした原因があるのではなかつた。後で考へて見ると、何であつたか思ひ出せない程些細な事からいつも始まるのであつた。よし子は先づ最初に何といふ事もなくその不機嫌の氣分に襲はれて來るのである。するとその眼の險が一層はげしくなつて、頰の邊りに筋肉が硬ばつたやうな不愛想な表情が浮んで來る。眉と眉との間がピクリピクリと痙攣する。脣が少し尖がつて來る。そして眼だけ何處か部屋の一方をぢつと瞬きもせず見つめながら、そのくせ顏は眞正面から彼の顏に向けられる。それが彼にはまるで何か壓して來る板のやうに感ぜられるのである……

此の兆候が現はれ始めると、定吉の心はいつでも怯えて來るのであつた。彼は嵐の爆發を未然に防ぐ方法をいろいろ思案した。彼は机に向つて書物のペエジをはぐり始めた。此の方法は實は一番まづいのであつた。それを彼は知つてゐた。だが彼にはかうするより仕方がなかつた。

『あなた』よし子はかう呼びかけた。定吉の心はぞつと震へた。彼は返事をしていいか、して悪いか解らないのである。

『あなた』と妻は再び繰返して、『あなたはあたしが呼んでも返事もなさらないのね』

『いいや、今返事しようと思つてゐたんだよ』と定吉は云つた。『お前のやうに、そんなに……』

『あたしがどうしましたつて？』

『いや、お前のやうにそんな性急に云はないでもと云つたんだよ。僕は今讀書しようと思つてゐるのだからさ』

『だから？……だからどうしたんです？』

『ああ、困るな、何と云つたらいいだらう？ 僕は……』

定吉は情なくなつて來た。『ああ、淺ましい、これが生活か？』と彼は腹の中で呟きながら、ぢつと眼を閉ぢた。

『あなた位何を云つても張合のない人はありませんね。あなたのお顏を御覧なさい、まあ意氣地のない顏をして、年百年中、ちつとも表情に變化がなくて、ただ弱々しくニタニタ笑つてゐて……』よし子の聲には次第に怒氣が募つて來た。『一體あなたはあたしや坊をどう思つてらつしやるの？』

『ああ、何故そんな事を訊くんだね？ 無論、それや可愛いと思つてゐるよ』

『噓仰い。可愛いと思つてらつしやるなら、もう少しはきはきした處か、はつきりした處があなたに見えなけれやなりませんわ。あなたは坊をあやした事がありますか？ あなたはあたしを見ると直ぐ横をお向きになるぢやありませんか……』

『もう止めて吳れ、お願ひだ』と定吉は哀願の眼付をした。『ああ、一體どうすればいいんだらう？……これが僕の性質なんだから、ね、どうか、これが僕の性質なんだから、許して吳れ。……俺は靜かな事が好きなのだ……ね、どうか靜かにしてゐて吳れ！』

よし子は何か怒鳴る口實を目つけようとするためだらう、暫く彼の顏を見つめてゐた。だが、それが目つからなかつたと見えて、脣を痙攣的に震はしただけで、何も云はなかつた。定吉は彼女の視線が自分の顏を眞面に凝視してゐるのを意識した。彼には二人の間の沈默が苦しか

つた。そして何か云はうとした。が、言葉が口に出て來なかつた。で、彼は伏眼のまま、彼女の方をチラリチラリと見ようとした。……さうだ、彼はかうした彼女の發作がいつでも何によつて鳧がつくかをよく知つてゐるのである。それを思ふと、彼は淺猿しかつた。が、かうした場面が早く終らんがために、彼自身も淺猿しくとも早くその鳧のつく事を望み始める……

彼は顔を眞赤にした。そして恥しさうに眼をチラと上げて、彼女の眼を讀まうとした。彼女の眼は怒氣を含んで昂奮して光つてゐた。が、彼はその怒氣の底に、もう或る longing が萌しかけ來てゐるのを認めた。その萌しは素早い勢で彼女の眼の表情全體に擴がつて來た。彼女の顔も急に眞赤になつて來た。

「あなた」と彼女は囁いた。彼女の聲は急にやさしくなつて、かすかな震へを帶びてゐた。と、突然眼前の物全體が自分の上に崩れ落ちて來たやうな心持が定吉にした。定吉の頭は渦を卷いた。

定吉はぼんやりして天井を見つめて、寢床の中に横たはりながら、その光景を思ひ出した。彼は吐きつぽいやうな嫌惡を感じた。そして不快な考が浮んだ時にいつでもする例の癖をした、即ち頭を左右に振つて、その考を振り落さうとした。が出來なかつた。枕の中のモミガラが後腦の下でザクリと云ふ鈍いギゴチない音を立てて崩れた。

「ああ、これが生活か！」と定吉は心の中で呟いた。彼の頭に「クロイツェル・ソナタ」が浮んで來た。「さうだ、あの女はトルストイの云ふヒステリイ患者なんだ。過度の病的な不節制から來るヒステリイ患者なんだ！」

『だが、此の自分は？』と彼はまた考へた。『彼女がヒステリイでそして俺は？　この俺は何だ？』——定吉は何が何だかまるで解らない氣がした。頭が混亂して、ただ淺猿しくて、ただ不愉快だつた。彼は續け樣に頭を振つた。と、今度はかういふ考がチラと浮んで來た。『クロイツェル・ソナタ』を書いたトルストイだつて、屹度その夫人から自分と同じやうな不快を經驗したに違ひない。……だが、それは尙一層變挺な淺猿しい憂鬱に彼を導いた。彼は急いでその考を打消さうと試みた。『トルストイは俺ぢやない、俺のやうな弱蟲ぢやない！』と腹の中で云つて見たが、もう間に合はなかつた。彼は狼狽した。そして何ものをか跣足で追つかけでもするやうに、『トルストイは偉大なんだ。偉大な宗教家なんだ！』と、たうとう自分の耳にきこえるやうに、聲に出して云つた。……

が、疊の上をとんとんと輕く小刻みに歩く足音が、此の憐愍の出來ない苦しい氣持から定吉を救つた。生れて一年と七ヶ月になる彼の男の子が彼の枕許にやつて來たのである。

「父ちやん、うんうん」と子供は呟いて、小さな兩手で下から煽るやうな手附をした。それは「お起きなさい」と云ふ意味の手附なのであつた。

「よしよし、今起きるよ」と定吉は答へた。

「父ちやん、まんま」

「よしよし、今行くよ」

定吉が起き上りかけると、子供は夜具の裾の方に行つて、丸まつてゐる彼の著物の端を摑んで、うんうん云ひながら力一ぱいに引つぱつた。著物は端の方が少し動いたが、引つぱられては來なかつた。

『ありがたう、よしよし』定吉は起き上つて、その著物を引つかけた。

「父ちやん、たあた」子供は今度は唐紙のそばに投げ出されてあつた足袋を持つて來た。

「父ちやん」……「父ちやん、……」子供はよろよろした歩きつきで、父のために帶だの楊枝

だの、その他いろいろのものを持つて來た。その度に定吉は『ありがたう、よしよし』と呟いた。

　彼がすつかり著物を著終ると、子供は彼の手を取つて先に立つて、隣りの茶の間に連れて行つた。『まあ、坊やはお父ちやんをお迎へに行つて來たの、さう、好い子ねえ』よし子は鏡臺に向つて白粉をつけてゐた。そして鏡の中に映つた子供の顏に向つて、『ばあ!』と云つた。

　それは彼女の機嫌のいい朝なのであつた。昨夜のやうな發作のあつた翌朝は、彼女は機嫌がよくて、にこにこしてゐた。さう云ふ時に限つて、彼女は朝から化粧をした。彼女は白粉をこつてり塗つた。彼女は黛を引いた。

『一寸、あなた、あたしにこれ似合つて?』彼女は首を斜めにして、今結つたばかりの眞中から二つに分けた女優髷を鏡にうつして見ながら云つた。

『ああ、似合ふよ』と定吉は答へた。

『一寸、あなた、此處に來て見て頂戴よ』

　定吉は彼女の後に突つ立つた。

『一寸、あなた、此處が變ぢやなくつて?……あたしの毛は癖があつてね、どうもいつも此處がふくれていけないのよ』

『變ぢやないよ』と定吉は答へた。

『お隣りの奧さんのお髮はそれやいいのよ。あたしもあんなだといいんですけれど、それにあの方は、好い櫛をさしていらつしやつたわ。あなた今月月給を貰つたら、買つて來て頂戴な、銀座の何處とかにあるんですつて』

『ああ買つて來よう』

『淺猿しい!』と定吉は頭の中が縮まるやうな氣がした。『これが生活か!』

『あなた、早く顏を洗つてらつしやい』彼女はいそいそと立上つて、膳の支度を始めた。

　顏を洗ふ間も、朝飯を食べる間も、定吉の頭は重かつた。それに引更へて、彼の妻は嬉々としてゐた。

『ねえ、あなた、家の坊やはほんとに物覺えのいい子ですね。こんな小さなくせに、もういろいろな事を覺えてるんですよ。昨日もお隣りの奧さんとお湯に一緒に行きましたら、著物をよく知つてゐてね。「をばちやん、をばちやん」て云つて、いろんなものを取つて上げるのよ。それであたしが、「坊や、阿母さんにお吳れ」と云ふと、いけないいけないをするんですの。何が誰のものだと云ふ事をそれやよく知つてゐてよ』

『ねえ、あなた』と彼女はまた云つた。『あたしが昨日叱言を云つたら、ぷつとふくれてあなたのお部屋に行つてしまつて、何て云つてももう歸つて來ないんですよ。だから、「勝手におし」つてさう云つて、此方に來てしまふと、どうでせう、暫くしてから、「母ちやん、母ちやん」て出て來るのよ。そしてあたしの前に立つてあたしの顏色を窺づてゐますの。あたしがまだ怒つてやしないか見るんですわね。それで、餘り可笑しいものだからあたしがつい笑ひ出すと、急に坊やもニコニコして、いきなりあたしの胸に來て、「母ちやん、おつぱい」だつて! その樣子つたら、ねえあなた、こんな子でもどうして妥協しようかと考へるんですわね。あなた、ほんとに可笑しいぢやありませんか』

『をかしいね』と定吉は答へた。彼は妻に對して笑つてやらなければならないと思つて努力した。が、頰の皮膚が糊でもついてゐるやうに、こはばつて、ひきつるやうな氣がした。で、彼はこんな事を考へた。『此の子はまだ生れて一年と七ケ月だ。それだのにもうこんなにいろいろの事を覺えてゐる。さうだ、俺はその一年と七ケ月の間一體何をしてゐたらう?』

　定吉の頭には此の子供が生れた時分の事が浮

んで來た。彼がそれがために如何に苦しめられたか、その時、いやその前から、よし子の妊娠を知つた時から、彼は彼女から如何に逃げようと思案したか……彼はまだ學校生活を終つたばかりの時であつた。彼は恥しい思ひをして里子の口を搜して歩いた。彼は赤坂の或る桂庵の暖簾を潜つた時の事を覺えてゐる。强慾さうな、肥つた、だがベラベラとお世辭をいふ其家の女房が、『いえ、もうどう致しまして、さういふ事は世間にはよくございます事で。一層他家にお與りになつたら如何でございます？　丁度好い口がございますが』と顏を赤くして俯向いてゐる定吉を眺めながら早口にまくし立てた。……定吉はその氣になつて歸つて來た。が、それを聞いたよし子が如何に立腹したか、それを定吉は覺えてゐる。けれども定吉はよし子と同棲する事を好まなかつた。彼は一年以上もいろいろ口實を求めてそれを避けた。彼は到底彼女と一緒に幸福な家庭を形作る事の出來ないのを豫覺してゐたのであつた。

だが、たうとう彼は彼女を捨てる事は出來なかつた。——定吉はその時の事を思ひ出した。彼は彼女と同棲しなければならなくなつた時、『これがほんとの責任なのだ！』と自分で自分に云ひ聞かせたのであつた。そしてその次の瞬間には、『責任、責任！』と云ふ言葉が彼の頭の隅から隅まで鳴り渡つた。そして更にその次の瞬間には、『俺は責任を知つてゐる男なのだ！』といふ事を得意になつた。彼は女を捨てる男が世の中に澤山あるのに對して憤慨と一種の自己の優秀感とを感じた。彼は勇んだ。何でも引受けてやるぞ、と云つたやうな氣持になつた。

そしてそれから……

此處まで考へた定吉は恥しくなつて來た。『ああ、一體何が責任だ？』と彼は妻の女優髷と顏の白粉とを見ながら考へた。『俺には一體何の目的があるのだらう？　俺たちの家庭生活には何の理想があるのだらう？　そして子供だ！』定吉はさういふ間に子供が成長して行くといふ事實が恐ろしくなつて來た。彼は何か譯の解らない空洞を眼の前に見たやうな氣がした。……

時計が六時半になると彼は立上つた。それは水曜日の朝であつた。氷川神社の横手の原で河野と待ち合はせる約束の朝であつた。

『父ちゃん、ぼうち』彼の先に立つて子供は玄關によちよち歩いて行つて、壁にかかつてゐる彼の帽子を指さした。『父ちゃん、はいちゃい』

四

曇るのか霽れるのか解らないやうな霧が原の上に垂れてゐた。定吉が原に行つた時、河野は學校の制服姿で、その霧の中を彼の方へ驅け寄つて來た。

『よく來て吳れたね。君、あすこの林の中に行つてゐようよ。こんな處に突つ立つてるわけには行かないから』

その林は原の中に突き出てゐる或る寺の境内の末端になつてゐた。そこはその寺の墓場なのだが、原との境の竹垣根はところどころにその名殘を僅かに止めてゐるに過ぎないほど破損してしまつてゐて、外から自由に出入することが出來た。何人の墓とも解らない小さな古びた墓石がごろごろと幾つも竝んでゐて、中には横倒しになつてゐるのもあれば、半分ほど缺けてゐるのもあつた。そしてその上には一様に苔が蒸し、その周圍には雜草が生ひ茂つてゐた。河野と定吉とが横倒しになつた二つの墓石の上に腰を下した時、濕つぽい土の香が鼻を打つた。河野は異常に昂奮してゐて、その顏色が蒼白かつた。胸がどきんどきんと烈しく鼓動してゐるのがそのおどおどした樣子で知れた。

「僕はさう信じてゐるよ、屹度對手でも僕の事を感じてゐるに違ひない、と彼は自信を得るために、自分の心に説きでもするやうに幾度も幾度もさう云つては、定吉の確かめを要求した。

定吉は妙な位置に置かれた自分を考へた。自分と云ふものの生活、あの家庭、昨夜の不快、今朝のあの方向も當もない悔恨……而も、さうした總てにも拘らず、彼は友が若い娘に戀を打明けようとするのを助けるために、朝早くからかうしてこんな林の中に坐つてゐるのだ。

『何のために、何のために？』彼の心の何處かでから呟くものがあつた。が、彼はそれには答へようとしなかつた。彼の眼には原の上に漂つてゐる霧がうつつた。彼の足には雜草に宿つてゐる露が冷たく觸れた。彼の肌には靜かな秋の朝の空氣がひやひや沁みた。彼の耳には氷川神社の森で啼く百舌鳥の鋭い啼聲がきこえた。そして彼の鼻には新鮮な濕つぽい土の香が鋭くにほつた。――それ等は寧ろ彼の心を輕快に導く事に役立つた。

で、彼の頭には空想が、無氣力な心の狀態になつてゐる人が現在を忘れて、と云ふよりも寧ろ現在を考へる力のないために、ぼんやり思ひ耽るやうになるあの弱々しい空想が浮んで來た。彼は子供の時分山の手で育つた。そして十一二の時分、秋から冬になると、よく父に連れられて、まだ夜の明けない中から、目黑の雜木林に小鳥を捕りに行つた事を思ひ出した。その時ヒルテン網を低い林と林の間に張つて、彼と父とは十間か二十間ばかり隔つた薄の蔭に隱れながら、渡り鳥の渡り始めるのを待つのであつた。彼は渡り鳥がチチと啼きながら、夜明けの空に群をなして飛んで來る有様や、それが囮の高音を聞くと、まるで鞠でも落ちて來るやうに、すつと林に向つて下りて來る光景や、そして獲物が網にかかる度に、網の兩端の細い竿がぶるぶると震へる樣子などを思ひ出した。

「丁度こんな風に腰を下ろして待つてゐたのだ！」と定吉は頭の上に覆ひかぶさつてゐる木の枝を仰いで見ながら考へた。

「君、來たよ」と河野が低聲で囁いた。定吉は急に心が緊張して來るのを覺えた。

原の中央を南北に通ずる一本路の南の端れに、彼女の姿が現はれて來た。定吉は眼を瞠つた。彼女は袴を穿いて、スケッチ箱を肩にして、手にパラソルを持つてゐた。彼女はJ――美術學校の生徒であつた。定吉は河野の戀の對手として、しとやかな、ほつそりとした、ハイカラな虎の門風のお孃さんを想像してゐた。ところが、彼女は遠方から見ても身長が低くて、どことなくゴツゴツした女であつた。まるで小學校の女教師のやうになりふり構はずに、ぱつぱつと大跨に、快活に歩いてゐた。

「君、あの原の眞ん中の一本木ね」と河野が震へる聲で云つた。「あすこまで來たら、いいかい、僕が此處から出て行くから、君も後から直ぐ蹤いて來て呉れ給へな」

彼女は間もなくその一本木のところまで來た。

『さあ』と河野は立上つた。が、定吉は立たなかつた。

「僕は此處で待つてゐよう。その方がいいだらう、二人一緒に出て行くよりは」と彼は呟いた。

「いや、君、是非君も一緒に出て呉れ給へ。僕は困るよ。僕はひとりぢや到底どうすることも出來ないよ」

それでも定吉は立たなかつた。

「君、早くさ、ああ、もうあんなに來てしまつた。今だよ、君、今出て行かなければ駄目だよ」さう云つて、河野は定吉の手を引つぱつたが、

それでも尚定吉は立たなかつた。彼は河野に對して氣の毒で、自分の意氣地なさが恥しかつた。が、二人連れ立つて突然林の中からどうして飛び出す事が出來よう。そして女の前にどうして突つ立つ事が出來よう。「ああ、來なければよかつた。何だつてこんな馬鹿げた役割を承知したらう」彼は何處かに逃げ出したいと思つた。

『ああ、君』河野の聲には歎願と涙とが響いた。『ほら、もうあんな處まで……』けれども定吉が動かないものだから、決然とした態度で定吉の手を放して、林から出て行つた。『あつ!』と定吉は思つた。彼の心はきゆと萎縮した。彼の眼には女の無骨な活潑な姿と、河野の華奢な優しい姿とが同時に映つた。今こんな場合に、あんな昂奮のしかたをして河野が出て行つても、到底失敗に終るにきまつてゐるやうに定吉には思はれた。彼は河野を呼び止めて、今日は思ひ止まらせようかと思つたが、もう聲をかける機會を失つてしまつた。そこで、彼は前よりも一層身體を縮めて木の蔭に隱れながら、眼を蔽ひたいやうな氣持で、眼前の成行きを見てゐた。

が、それは頗る變挺な光景であつた。河野が隱れ場所から出た時には、女はもうその丁度隱れ場所の眞ん前の路を通つてゐた。彼はチラリと河野の方に眼を呉れたが、そのまま又正面を向いて、どんどん活潑に、大跨に歩いて行つた。河野が草の上を横切つて路に出た時には、その位置が丁度女の後から蹤いて行かなければならないやうな事になつた。それは河野に取つて頗る勝手が惡かつたに違ひない。何故なら、女の後から聲をかけて呼び止めるのには、非常な大膽さが必要だからである。……河野と彼女との間の距離は七八間ぐらゐあるやうに定吉には見えた。河野はうつむいて、一心に地面を見つめてゐると云つたやうな恰好で、歩いてゐた。足を早めて女に追ひつかうとする樣子もなければ、聲をかけようとする樣子もなかつた。唯一度頭を上げて、呼びかけでもするやうに足を早めかけた時には、『ああ! いけないいけない』と定吉は林の中ではらはらしながら呟いた。けれども河野が再び足をゆるめて、頭を垂れたので、そこで定吉はやつと胸を撫で下ろした。『事勿れ事勿れ!』彼の心はひたすらそればかりを祈つてゐた。

けれども、女が原を出て、氷川神社の鳥居前の方へ下るだらだら坂を下つて行つてしまつたのを見た時、そして河野が原の端れに佇んで女の後姿をぢつと見つめてゐるのを見た時、定吉は急に羞恥の念が心に、といふよりも全身の隅から隅まで漲つて來るのを感じた。彼は恥しさに手の先までが震へた。頭を下げてしよんぼり歸つて來る河野の姿を、彼は正面に見てはゐられなかつた。——だが、彼は河野の事が恥しいのか、自分の事が恥しいのか、はつきりと意識はしなかつた。恐らくは河野の事も自分の事も共に恥しかつたに違ひない。彼は雜草の上に仰向けに寢ころんで、手で顏を蔽うた。彼の胸には悲しい頼りない淺猿しさが、ふくふくと込み上げて來た。

『ああ、君、駄目だ、どうしても駄目だ!』と河野が定吉の側に靜かに歩み寄つて悲しさうに云つた。『何と云ふ意氣地なさだらう。僕はまるで足がすくんでしまふやうな氣がしたよ。折角の此の好機會をまた逃がしてしまつた。ねえ、君、何ていふぶまさ加減だらう』

そして彼はその邊を暫くぶらぶら歩きまはりながら、暫く無言でゐたが、また云つた。

『君にも失敬したね、鈴木君。併し僕は此の次には乾度云ふよ。乾度云ふよ、今日は僕の出て行くのが遲かつたのだ。後からついて行く

やうになつては、とても聲がかけられるものぢやないよ。今度は僕は前から歩いて行つて、擦れ違ふ時に聲をかけよう。さうすれば屹度云へる……』さう云つて、更にから附加へた。『僕はたしかに信じてゐるんだ、あの女も僕の氣持を感じてゐて呉れるに違ひない、と。僕がこんなに思つてゐるのに、それが對手に通じてゐない法があるものか。ねえ、君、さうぢやないか。僕には人間の靈魂がそんな無力なものだとは考へられないよ』

けれどもやがて二人が歩き出した時には、河野はもう何も云ふ勇氣がなくなつてしまつたと見えて、默つてうなだれてゐた。二人は澁谷の電車の終點まで行く間に、一言も言葉を交はさなかつた。ばかりでなく、羞恥と互ひに氣の毒に思ひ合ふ心とのために、額を見合はす事さへも避けてゐた。

五

十一月が來た。けれども定吉の生活には何の變化もなかつた。社の仕事は益々忙しくなつて行くばかりであつた。△△大臣の祕密が暴露したのをきつかけとして、上下兩院では內閣に對する攻撃が猛烈を極めた。各新聞ではそれを書き立てた。S——紙も最初の間は攻撃の間に加はつてゐた。社會部も政治部と力を協せて、その紙面の大部分を內閣攻撃のために割いた。定吉は相變らず電話を聞いたが、政治家や代議士の名をまるで知らなかつたので、R——黨の代議士をM——黨の代議士と書き誤つたり、N——會の代議士をT——會の代議士と書き誤つたりした。そしてそれを社會部長から注意される度に憂鬱の度が益々募つて行つた。

ところが或る日、社の幹部の者たちが朝から一室に集まつて、何やら協議してゐる樣子であつたが、午後になると、內閣に對するS——紙の態度を一變すると云ふ事を、社會部長及び政治部長から各々その部下の記者たちに報告し且つ命令した。

『買收されたな。ふん、十萬圓も貰つたんだらう、あの强突張の社長奴が……』と金緣眼鏡の牛島が、肩をすくめて呟いた。『ひとりで巧くやつてやがるな。我々の方にも少し位分けて呉れたつて好ささうなものだ！』

『十萬圓ぢやききますまいよ』と外交部長の吉田はから云ふ消息はみんな自分が知つてゐると云つたやうな顏をして、口を挾れた。『尠くとも十五萬圓は確かでせう。M——社でも十二萬圓貰つたさうですからな。今日K——社の記者に會つたら、あの社も買收されさうになつたんですつて。ところが、あすこでは百萬圓以下の金なら、貰つたつて貰はなくつたつて大した相違はないと云つて、一言の下に拒ねつけてしまつたさうですよ。流石はK——新聞だ。百萬以下の金なら……とは素晴しいものぢやありませんか』

定吉は雜閙を極めた編輯局の一隅に腰を下ろして、總ての光景をぼんやり見てゐた。總てが彼には意外であつた。彼は吃驚した。……彼の頭には社長の相撲取のやうに肥えた身體が浮んだ。社長はいろいろの善からぬ噂を持つた男であつた。脅嚇のために訴へられた事も一度や二度ではなく、女事務員に少し綺麗なのが來ると、片つ端からそれを手馴づけた。社の經費を出來るだけ縮小して、社員の月給を減らしたり、外交記者の手當を廢したりしながら、自分は株でしこたま腹を肥して、贅澤三昧に日を送つてゐた。三度代議士の候補に立つて三度失敗した。その他定吉の耳に傳はつてゐるだけでも、此の社長の不義不德は數限りがなかつた。——これは不義不德の例にはならないが、

社長は二十圓とかする薩摩下駄を穿いてゐた。それがために別仕立の桐の下駄箱が社に用意してあつて、腰の曲つた頭の禿げた小使の爺さんが、その下駄をその下駄箱に出し入れする時、まるで何か寶物でも取扱ふやうな、粗末にしてはならないと云つたやうな敬虔な表情をして、恭々しく兩手でそれを捧げるのを、定吉はよく見た。

『さて諸君』とそこに社會部長の齋藤が會議室から忙しげに出て來て、『此の度社の方針を一變するについては、國民の反感を買はない用意として、漸次に目立たぬやうに記事の調子を變へて行くのが最良の策だと思ふ。明日は攻撃の記事と辯護の記事とを半々に載せ、明後日は更に辯護の記事を增して行くと云つたやうに……吉田君、君もその方針で外交記者を指揮して呉れ給へ』

『承知しました』外交部長の吉田は丁寧に頭を下げた。

『それから鈴木君』と社會部長は定吉の方を向いて、『君に一つ受持つて貰ひたいものがあるが、今度現內閣辯護の位置に立つについては、反對のR――黨に對する攻撃を每日紙上に載せて行きたいと思ふ。で、それに就いての記事は一切君の取捨選擇に任せたいと思ふから一生懸命にやつて呉れ給へ』

『承知しました』と定吉は低聲で答へた。

『R――黨は多數黨でその機關新聞も多いから、それに負けないやうに確り賴むよ』

『承知しました』

定吉の机の上には每日R――黨攻撃の原稿が山のやうに積まれた。彼はそれを一々讀んで行かなければならなかつた。B――黨が如何なる陰謀を企てたとか、R――黨の首領のH――は百五十萬圓以上の身代を持つてゐるが、彼が無一物から如何なる方法を以てその大財產を贏ち得たかを思へば、その裏面には暗い祕密の橫たはつてゐるのを推測し得られようとか、兵庫縣選出のR――黨の代議士某は有名な色魔で、彼が旅をすると、到るところにその毒牙の犧牲となる無垢の婦女子が數知れず生ずるとか、さう云つたやうな事ばかりが最も野卑な、最も下等な、嘔吐を催すやうな文章で書き立ててあつた。定吉はそれを讀んで行くと、頭が痛くなつて、胸が淺猿しさに一ぱいになつて、云ひやうのない憂鬱と苦しさとを覺えた。彼は自分とは何の關係もない代議士達を、何故自分が攻擊しなければならないかを考へた。

『何のために、何のために?』時々ペンを投げ出して、溜息しながら腹の中でから呟いたが、その答は問ふまでもなく彼の心に明瞭であつた。が、彼はそれを直視する事を避けて、此の現代の世の中に生きて行かなければならない弱い人間の口實として叫ばれるあの『生活のため』を、彼も自分の口實にする事を自分の心に說き聞かせるより外仕方がなかつた。が、それは勿論成功しなかつた。そこで彼は時間によつての麻痺を待つた。が、麻痺はいつまで經つても來なかつた……

午後四時半になると彼は社を出たが、眞直ぐに自分の家には歸らなかつた。いつものやうにステッキを右の手に持ち、左の手はふところに入れて、不快な考を一掃するために時々頭を左右に振りながら、銀座通を當もなくぶらぶら歩くのであつた。尾張町から京橋までの右手の人道に竝んでゐる夜店を一軒々々のぞきながら、成るたけのろのろ歩く事に努力するのであるが、それでも直きに京橋まで來てしまふ。そこで今度は京橋から尾張町までのショウウヰンドウを一軒々々覗きながら、又同じ人道を引つ返して來るのである。ショウウヰンドウの中は每日大した變化がなかつた。けれども彼に

取つては、それを一々覗いて歩くといふ事が、一日中での最も氣の樂な時なのであつた。鞄屋の前に來ると彼は贅澤な旅行を空想した。自分が少壯紳士と云つた恰好で、赤帽に鰐革の鞄を渡しながら、東京驛の一等の改札口を輕快に、ハッピイに通つて行く光景を思ひ浮べた。帽子屋の前では彼は好きな帽子を腹の中で選擇した。それから時計屋、それから感じのいい電氣燭臺の並んでゐる電氣屋。ただ、洋服屋の前だけには立止らなかつた。何故かと云ふと、足の内側に彎曲してゐる彼は、學生時分から洋服が自分に似合はない事をよく自覺してゐたからである。

そして再び尾張町の角に立たなければならない。カッフェ・ライオンの壁に凭れて佇むと、都會のいろいろな灯がぼうつとした一塊となつて、彼の眼に映る。そしてそれがいつもの通りの空想を、何處か靜かな田舍に引つ込んでトルストイを讀むといふあのファミリアアな空想を、彼の頭の中に描かせる……

それが毎日々々判に捺したやうに同じであつた。

時によると彼は相川や遠山や河野に出會ふ事があつた。

『僕は今小說を書きかけてゐるんだが、どうも峠が越せないで弱つてゐるんだ』と相川はきまつてさう云つた。

『長いものか？』と定吉は訊いた。

『いや、短篇なんだ……さうさう、いつだつけか君に話した事があつたね。それがまだ出來上らないんだよ』

それから相川は現代が如何に混沌としてゐるかと云ふ事や、此の混沌とした狀態を整つた、秩序ある狀態にする責任は、一に我々青年の雙肩にかかつて存するといふ事を、きぱりきぱりした自信のある口調で語り始めるのであつた。

定吉はそれを聞いてゐると、又いつものあの對手の優勢を感ずる神經的な反射運動に驅られて、自分にない或る力を相川が持つてゐるやうな氣がして來るのであつた。そして相川が今書きかけてゐると云ふその小說が出來上つたならば、恐らくそれは今までの日本に未だ曾て類のない或る確固とした思想を傳へてゐるに違ひないと思ふのであつた。

近頃遠山は形の古い、柄の惡い、古洋服を著てゐた。彼は撫肩で、膝が延びなかつた。で、雨手を振つて、腹を少し前に突き出すやうにして歩いて行く樣子は、亞米利加の活動寫眞の喜劇役者の何とかいふのに似てゐた。酒を飲まない時の彼は善良で快活であつた。

『俺は洋服が似合ふだらう。これで訪問記事を取りに行けば、奴等に對して敢て失禮には當るまい』彼は定吉の顏を見ると直ぐ例の調子でこんな事を云つた。『昨日O――伯を訪問したんだよ。あの爺さんは實に元氣でよく物を知つてゐるなあ。俺は感心してしまつた。一室に訪問客が二十人ばかりずらりと並んでゐるんだよ。そこに爺さんが出て來て片つ端から訪問の要件を訊いては卽座にそれに答へて行くんだ。伊勢の眞珠商人とかいふのが來てゐて、眞珠の事を喋つてゐたが、あの爺さんの方が餘つ程世界の眞珠の相場に精通してゐるものだから、流石の商賣人も舌を卷いてゐたつけ』

かと思ふと又こんな事も云つた。

『だが、どうもかういふ職業は俺には適かないやうだ。門前拂ひを喰ふと、俺は喰はせた方に同情してしまつて、喰はせられるのが當然だと云ふ氣になつて來るんだからね……さあ、精々一ケ月も勤まるかな』

けれども、河野に會ふと、定吉は何となく恥しさと氣の毒さとを同時に感じて、淚ぐましいやうな氣がした。

「今日も會つたよ」と河野は細い優しい聲で云ひ始めるのであつた。「電車の中で僕の方をじろじろ見てゐたよ。僕は顔を上げる事も出來なかつた。併し僕は、對手でも僕を思つてゐるといふ意識を十分に得たよ、ねえ、君、思つてゐるからこそあんなに見るに極まつてゐるぢやないか。君、さうだらう？」

「あゝ、さうだ」と定吉は答へた。が、自分の聲が滅入るやうに賴りなく聞えた。

「今度こそ僕は屹度云つてやるんだ。僕の直覺は決して間違ひはない。對手も僕から云ひかけるのを屹度待つてゐるに違ひない」

そして定吉が自分の家に歸つて行くのは大概夜の九時か十時頃であつた。家庭に於いても彼の生活は相變らず何の變化もなかつた。子供の知識は驚くばかり毎日進んで行つた。二日か三日に一度、或は毎日、彼の妻はあの肉慾的ヒステリイの發作を起した。そして定吉は「淺猿しい、淺猿しい！」と心の中で叫びながら、そのヒステリイの息をつける事に身をまかせた。そして翌朝になると、あの方向も目的もないいたづらな悔恨……

さうしてゐる中に、定吉に取つて恐ろしい事が引續いて起り始めた。

六

その一番最初はかうであつた。

定吉は友人達と一ケ月に一度づつ神田の或る小さなカッフェに寄り合ふ事になつてゐた。此の會合はその最初の目的はよく今の青年にあるやうに、互ひに思想を語り合つたり、藝術の話をしたり、研究を發表し合つたりするに在つたのであるが、今ではもう各自勝手に酒や珈琲を飲んで、唯わけもなく笑つたり騷いだりするだけのものとなつてしまつた。――それでも定吉は會合が好きであつた。彼は毎月此の會合の日を指折り數へて待つてゐた。それもその筈である、彼は毎晩々々を、いや、刻々の「時」をさへも、如何にして過すべきかと云ふ術を知らない程、所在なさに苦しめられてゐたのだから。

此の會合でもやはり遠山と相川とがいつでも話の中心であつた。殊に此處に述べようとするその晩には、此の遠山と相川と定吉との三人しか出席しないのであつた。

遠山は例の訪問記者の職業はもう止めてしまつてゐた。彼の生活は再び切迫し始めてゐた。けれども、彼にはそんな事はてんで問題にも苦痛にもならないらしかつた。

「君が何も……、いや、いかん、いや、よく聞け」から彼は例のアルコオル中毒性の顫へる手と、混濁した舌の縺れとを以て、大聲に、といふよりもまるで喚き立てるやうに、相川に突つかかつて行つた。「俺が俺の弟に屢々金を無心すると云つたところで、それが君のその小つぽけな秩序と何の關係があるんだ？ さうだ、俺はまた職業を抛つてしまつた。そこで生活に窮した。だから俺は弟に……」

「それで、君はそんな風な事をいつまで續けてゐようといふのだ？」相川は熱すれば熱する程增して來る例の意地の惡い程の冷靜を以て反駁した。「君の弟、君は實際忠實な人だよ。僕は君の弟、君に敬意を拂ふよ。實際君のファアザアと云ひ、君の細君と云ひ、君の弟、君と云ひ、君の一家の人々はみんな忠實な人達だ。だが、當然責任のある長男の君に代つて、田舍で破産した一家を整理してゐられる忠實な君の弟、君に向つて、君が尙もいろいろな心配を持ちかけるといふ事は、何と云つても賛成出來ない。非常に宜しくない事だ」

「例へばキリストだ」と遠山が叫んだ。「キリストは唯ひとつのものを求めてゐた。「我等が求

むるものは唯ひとつのみ――キリストはほんとに偉い。若し俺達がキリストと同じ覺悟を以て立てば、此の物質的社會の下らない規約などは、すつかり輕蔑してしまつてもいいのだ。俺達は物乞ひして歩いて食つたつても些つとも恥ではないのだ。たとひ三十圓や五十圓の金を弟から無心したところで、それが俺の一生の價値をどれだけ低下するものぞ！』

『キリストはキリストで君ではない。キリストは天だ。君は地面だ。地面が天のつもりになつて物を云ふから、此の世の中が混沌となるのだ。君が持ち出すキリストやドストイエフスキイは、君の出鱈目の飲んだくれの辯護のダシに過ぎない……おい、ボオイ君、僕にウキスキイを一杯』

　かうして遠山は日本酒を飲み、相川はウキスキイを飲んで、何時間も何時間も論じ合つて行くのであつた。定吉は此の無際限の議論を初めは興味を以て聞いてゐたが、終ひには退屈を感じた。けれども、それでも彼は此の場にゐるのが愉快なのであつた。此の場を立ち去れば、勢ひあの自分の家庭に歸つて行かなければならない。彼はそれを思ふと、如何に自分に語るべき意見がなくとも、如何に二人の議論が始終繰返される同じ事であつても、それでも彼は家に歸るよりはそれを聞いてゐる方がまだしもましなのであつた。

　三人はやがてそこを出た。彼等は此の會合の歸りに極つてするやうに、電車線路に沿うて二停留場か三停留場ぐらゐ散歩するのであつた。遠山が大きな聲で歌を歌ひながら、よろよろした歩きつきで先に立つて行くと、相川と定吉とはその後から蹤いて行くのであつた。が、相川は遠山の大聲で歌を歌ふ樣子が厭だと云つて、突然そこに通りかかつた電車に飛び乘つてしまつた。そこで定吉は唯一人遠山の後から蹤いて行つた。彼は家に歸る時刻の近づいて來るのが何よりも厭で、又憂鬱に襲はれ始めた。いつまでもいつまでもかうして歩いて行きたかつた。

　すると、いきなり遠山が後を振向いた。

『おや、相川はどうした？　逃げやがつたな、あの小僧つ子は。だが、彼奴はいい奴だ。彼奴は小つぽけだがほんとの事を考へてゐる。唯少々近視眼だ。……併し待てよ。おい、鈴木、貴樣は金を持つてるか？』

　定吉は遠山の眼に一種何とも云はれない氣味の惡さを見た。遠山はにやにや笑つてゐた。が、定吉にはその笑ひが何となく恐ろしかつた。

『少し位ならあるが、澤山はない』

『一圓五十錢あるか？』

『あゝ、その位はあるよ。併し、どうしたんだい、急に？』定吉は遠山がそれを貸して呉れとでも云ふのかと思つてさう答へた。遠山は愉快さうに笑つた。

『うん、よしよし、そいつは素敵だ。俺も一圓五十錢持つてゐる。それではこれから出かけようぢやないか、lowest paradise に！』――(ロオウェスト、パラダイスと云ふのは遠山のよく使ふ言葉で、それは最下等の遊廓を意味するのだつた。)

　定吉は吃驚した。彼はまだ遊廓に行つた事が一度もなかつたのであつた……彼は彼女、彼の妻のよし子の外にはひとりも女を知らない男なのであつた……

『厭か？』と遠山は定吉の吃驚した樣子を見て云つた。『貴樣は一體何だ？　あの腐つたやうな女にいつも虐げられてゐやがつて。意氣地のない奴だな。さあ、行かう、おい、行かう！』

『僕は止さう』と定吉はおどおどしながら答へた。

『なに、貴樣は何が恐ろしくて始終此の人生に

背かされてゐやがるんだ？　貴樣はそれで萬人のつもりでゐやがるんだらう？　煮え切らないで愚圖々々してゐる人間は神樣だつてお喜びにならないぞ。我等の親玉のキリストもちやんとその事を云つてゐる。……やい、貴樣は元來意思と云ふものを持たない。貴樣は自分の考によつて動く事の出來ない男だ。貴樣のやうな人間こそ救はれる時はないのだ。貴樣は一番不道徳な男だ！』

『僕は止さう』と定吉はたじたじと後に退りながら答へた。

『よし。俺が貴樣のやうな人間は懲らしめてやる！』と叫んだかと思ふと、遠山は急に定吉の持つてゐたステッキを引つ奪つて、それを振り上げた。

それは餘りに唐突で餘りに意外であつた。定吉は『あれ！』と心の中で叫んだ。彼は遠山の眼を見た。と、彼の心臟がぎゆつと急激に萎縮した。遠山の眼に何か惡魔的な恐ろしいものがギロリと光つてゐるやうに思はれたのである。嘗て感じた事のない突然の恐怖が定吉の全身を捉へた。

定吉の頭は何が何だか解らない程混亂した。彼はその混亂の中で、「あつ、人通りが多いから見つともないな！」と云ふ考へがチラッと浮んだのを一瞬間意識した。彼が氣がついた時には、彼の足が四五間も地面の上を飛ぶやうに駈け出してから後であつた。彼は、一目散に（それでも咄嗟の間に、下駄を脱いで、それを手に下げるだけの事を忘れなかつた。）逃げ出した……や、「自分は逃げ出したな」と彼は思つた。と逃げる自分の足の進みにつれて、不思議な變挺な恐怖は加速度を以て増して來た。彼は遠山が後から追つかけて來るやうな氣がして、後をも振り向かずに逃げ出したのである。

何故逃げ出したか？　それは彼にはよく解らなかつた。彼は逃げ出す必要のない事を駈けながら半意識的に意識した。が、彼はこんなに恐ろしい事は初めて遭遇したと思はれた程恐ろしかつたのである。それは唯この事ばかりから來た恐怖ではないやうに思はれた。いろいろなのが、恐らくは此の半年ほど前から、彼が妻と同棲してから、彼がS——社に入社してから、ずつと此の方接したいろいろなものが、この恐怖を潛在的に彼の心に準備させて置いたやうに思はれた。妻も、社長も、締切のベルの音も、電話も……そこに偶然にもあの遠山が、その積り積つた憂鬱な定吉の心に一つの刺戟を與へたのに違ひない。——小さな刺戟をひとつでも受ければ、直ぐにそれが胸中一ぱいに擴がつて高鳴りするやうに……

定吉は九段坂を夢中で駈け上つた。彼は息苦しさを覺えた。が、坂上の交番の前を通る時には、巡査に怪しまれまいとするために、足をゆるめて、平靜を裝はうとする心を忘れなかつた。彼は大村銅像の側まで行つて、そこに横たへてある戰利品の砲身の腰掛の上に腰を下ろした。彼は幾度も幾度も振り返つては、遠山の姿が後から見えはしないかと氣遣つた。

やがて、彼は九段坂上の停留場まで引つ返して行つて、暫くそこに又立止つた。彼は電車に乗る事が出來なかつた。彼の理性はそんな事が決してあり得ないと云ふ事を承知してゐるのに、ひよつこり乗ると、その中に遠山が乗つてゐさうな氣がしたのである。……尠くとも彼は十臺位はさうして電車を待つてゐただらう。と、そこに僅かに四五人しか乗客のない一臺が來たので、彼は要慎深く一度車内を覗き込んでから、やつと胸を撫で下ろしてそれに乗り込んだ。

それから……それだけではまだ盡きなかつた……彼はいつも降りる停留場では降りなかつ

た。彼はその一つ先の停留場で降りた。それも、遠山が彼の降りる處を待伏せしてゐるやうな氣がしたからである。そして更にまた、彼は自分の家の方へ曲る路次の角に來て、長い間躊躇しなければならなかつた。その路次には一本の大きな銀杏の木、それは十年ほど以前の落雷のために、頂邊から幹が眞つ二つに裂けてゐたゞが黑い夜の空に怪物のやうに突つ立つてゐた。彼はその銀杏の木の側を通る時には、息を殺して、爪先立つて歩いた。…その幹の蔭から『わつ』と云つて遠山が躍り出して來はすまいかと、彼は實際にさう思つて、それが恐ろしかつたのである…

七

『一體どうしたと云ふのだらう？』定吉は寢床の中に入つてからも、不安な氣持を捨てる事が出來なかつた。彼は遠山に對して氣を惡くはしなかつた。彼はそれが遠山の泥醉の結果の一時の發作に過ぎない事をよく知つてゐたからである。「遠山は二三日中に屹度にこにこして、何事もなかつたやうな顏をしてやつて來るに違ひない」から彼は腹の中で思つた。

けれども、遠山の事はただそれだけであつても、遠山のその小さな行爲が、定吉の神經に與へた打擊の結果は恐ろしかつた。彼の神經にはまるで一つの方向が與へられたかのやうに、一寸した刺戟を受けると、直ぐにもその方向に向つて、彼の理性はそれを否定するのに、それだのにどうしてもさうならずにゐられない苦しい方向に向つて、進み始めるのであつた。定吉はその翌晩ひとりの醉漢が亂暴を働いて、或る交番の前で二人の巡査のために地面に組伏せられてゐるのを見た。彼は群集が大勢立つてゐるので、何の氣なしにひよつと覗いたのであつた。足搔いたり喚いたりしてゐる醉漢の額は、小砂利で擦り剝いた傷口から眞赤な血を噴き出してゐた。彼はその血が地面にポタポタ黑く落ちてゐるのを見ると、「あつ！」と思つた。ただ『あつ！』と。彼の心臟はきゆつと痛んだ。そして急激に萎縮したので、胸がドキドキと烈しく波打つた。それはほんとに或る不思議な、一種の肋間神經痛に似た痙攣的な痛みであつた。それは醉漢を氣の毒と思つたり、或は人間と云ふものがかうした醜い有樣――その醉漢をも、二人の巡査をも、笑ひながら立つて見物してゐる群集をも含めて――を演ずると云ふ事に對する羞恥を感じたりするやうな、さうした明確な意識から來る感情では決してない事が明瞭であつた。それは一つの發作…さうだ、一種の反射的の神經の痙攣であつた…何と云つたらいいか、今の醫學上では何とこれを命名してゐるか？が、それは統一された一つの人格から來る『愛』でもなければ『同情』でもない。寧ろ人格の破綻から來る一つの神經の顫動であつた。『あつ！』と思ふ。胸がきゆつと萎縮して痛む。が、次の瞬間に彼は自分のなすべき事をまるで知らない。彼は急いでその光景の見えないところまでその場を通り拔けて、そしてその神經性の苦痛を振り捨てようと努力して、頭を左右に打ち振るより外何も知らない…

定吉はその醉漢と巡査との格鬪を見た刹那、まるで何ものにか狩り立てられでもするやうに、たうとう駈け出さずにゐられなかつた。――何處に、そして何のために？

定吉はかうした方向を彼の神經の上に與へられてからといふものは、彼に取つて此の人生がひとつの絕間ない地獄の呵責となつた。彼のハアトは日每に何度痛むか知れなかつた。よちよち歩いてゐる彼の子供がひよつと柱に頭を打つけさうにする。と、彼は『あつ！』と思ふ。そして心臟がつぶれさうになる。妻が、氣紛れな彼

の妻か、自分の機嫌の好い時には子供にやさしくし、少し氣分の惡い時には生れてまだやつと一年半餘にしかならない小さな存在に向つて手荒な事をする妻か、子供を泣かせる。すると彼は『あつ！』と思ふ。そしてハアトが潰れさうに痛む。――その他いろいろなものに接する度に、言葉よりも、觀察よりも、或は心配よりも、何よりも眞先に、先づ此の潰れさうなハアトの痛みが定吉を襲つて來るのであつた。

遠山のステッキの下から彼が逃げ出した晩の翌々日であつた。

その日は社會部長の齋藤も次席の牛島も共に社を休んだので、社會部の編輯を定吉ひとりでしなければならなかつた。

午前中は大變暇であつた。何も大事件がないために、新聞の方から見ると、紙面を飾る事の出來ない困つた日であつた。第一紙面を埋めるだけの原稿が集まるかどうか、それさへも心配な位であつた。定吉は外交部長の吉田に向つて、外交記者達が何か持つて來るかどうかを再三訊ねた。

『さあ、警視廳に行つてるT――から、一段位の埋草は知らして寄越すでせうがね』と吉田は、新米の定吉が狼狽してゐる顏を、かなり皮肉な微笑を浮べて見ながら云つた。

『何か大事件が勃發するといいんですがね』

『五人殺しといふやうなものでもあるといいがな』と吉田は笑ひながら云つた。

此の紙面を埋めなければならないと云ふ心配が定吉を驅つて、いつの間にか、吉田の云つたその言葉をそつくりそのまま心ひそかに期待するやうにさせた。『さうだ、五人殺しでもあるといい』と定吉はひよつとさう獨語ちた。さう獨語ちて、そして彼は自分の獨語の意味に氣がつくと、狼狽てて顏を赧らめた。――『人殺しを喜ぶやうになるとは、何といふ恐ろしい心理作用だらう！』――

けれどもその時通信部長のMから、急に定吉の机の上に一束の電報が投げられた。彼は急いでそれを取り上げると、それはB――岬の特派員から來た電報であつた。

『超弩級艦C――は去る――日――時――分頃△△任務のためB――岬沖を航行中、淺瀨に坐礁す、A――港より巡洋艦五隻直ちに出動して乘組員全部を救助し、C――艦も亦滿潮を待つて離洲したるが、損害意外に大なる見込なり……』

定吉はそれを讀むと夢中になつて昂奮し始めた。彼はその日の各朝刊新聞を調べて見たが、その記事は載つてゐなかつた。そこで直ちに正午版の冒頭に初號活字三段拔きの大きな標題をつけて掲載した。彼は自分が何か大きな手柄でもしたと云つたやうな、得意の感をさへ以て、正午版の刷り上るのを待つてゐた。やがて正午版は出來た。彼はそれを見ると、紙面が生々として、活字が立つて動いてゐるやうな氣がした、そして自分のつけた標題が案外上手だつたのを喜んでゐた。

そこに給仕が突然やつて來て、

『鈴本さん、社長さんがお呼びです』と云つた。

定吉は急いで社長室に入つて行つた。

『今日の三面の編輯は君がしたのか？』彼を見ると社長は、怒氣を含んだ眼をして身體を震はしながら、『實にこんな無考な事をして吳れては困るぢやないか。君は何ていふ馬鹿なのだ。君は今どんな工合に國民が騒いでるか知つてるだらう。今の政府が、殊に海軍省がどんな非難で國民から攻撃されてゐるかを知つてゐるだらう。C――艦は今の政府になつてから造つた軍艦で、而も此の軍艦を造つた時にその裏面に秘密があつたと云つて國民は騒いでゐるのだ。その矢先に持つて行つて、C――艦が坐礁したな

どと云へば、どんな騷ぎになるかも知れんぢやないか……』

社長は肥つた割合に聲の細い男であつた。彼の體格からかうした女のやうな細い聲が出ようなどとは、誰だつて豫期しないであらう。定吉は此の體格と此の聲との不調和からだけでも、此の社長に對して心からの嫌惡を感じてゐた。――けれども彼は、社長がその細い聲をはり上げていろいろの事を怒鳴つてゐる間に、額を眞赤にしながら、幾度となくペコペコ叩頭をしてゐた。

『もう四ケ月も新聞記者をしてゐて、この位の事が氣がつかないか！』……『一體齋藤が怪しからん、新米の記者に任せて社を休むからこんな不始末を仕出かすのだ！』……さう云ふ言葉を、社長は投げつけるやうに暫く立て續けに叫び立ててゐたが、やがて、

『俺はそれがためにこれから海軍省に行つて來なけれやならん。――いいか、解つたか、夕刊にはあの記事を載せてはならんぞ』かう云つて立上つた。定吉は又もやペコンと叩頭をして、社長の後から入口まで送つて行つた。

桐の下駄箱から頭の禿げた小使の爺さんが大切さうに取り出した下駄を、社長がそそくさと突つかけて出て行つた後から、定吉は再び叩頭をした。

定吉が憂鬱に心を閉されて、頭を左右に振りながら編輯室に歸つて來ると、吉田までがこんな事を云つた。

『鈴木君、日本には超弩級の軍艦はまだないんですぜ。C――艦は弩級艦ですよ。少し氣をつけ給へ。こんな間違ひをすると、方々の社から此の社が馬鹿にされますぜ！』

此の出來事のために、定吉の頭の中がどんなに渦を卷いたか、定吉のハアトがどんなに痛んだか……彼は辨當を食べる氣にもなれなかつた。彼は默つて下を向いたまま、暫くは身動きもしなかつた。

『C――艦が坐礁した。その記事を載せた。何故載せてならない法がある？』と定吉は腹の中で呟いたが、いつだつけかの牛島の言葉を思ひ出した。『それがみんなあの肥つた社長の懷中を暖めるためなのだ！――俺に何の關係がある？』

定吉の心にはいつになく怒りが萌して來た。彼は住心地の惡い此の社會のいろいろな事を思ひ出した。鐵面皮と僞と詐欺とで出來上つてゐるいろいろな事を思ひ出した。彼は机を間に挾んで坐つてゐる吉田の顏に、腹のどん底からの嫌惡の視線を投げかけた。

併し彼はその心持を一生懸命に抑へて、午後の編輯に取りかかつた。

午後は非常に多忙であつた。或る博士の娘が江戸川の緣に死體となつて流れついたのと、赤坂の某待合の女中が赤坂見附上で情夫のために短刀で突き殺され、男もその場で直ちに自殺を遂げたのと、此の二つの事件が同時に勃發したのである。――これは今の新聞社會では大喜びの事件であつた。各社はかうした事件にぶつかると、まるで旱魃に雨を得た百姓のやうな喜びを以て、勇んで活動し始めるのである。博士の娘が投身する前に、男に會つたらうとか、會はなかつたらうとか、どんな着物を着てゐたとか、家庭に何か不平があつたのではないかとか、さういふ事を唯の一行でも他の社より詳しく書かうと云ふだけの理由から、まるで狂氣のやうに驅けまはるのである。

博士夫人を訪ねて歸つて來た若い外交記者が、かういふ報告をもたらした。

『ほんとに氣の毒でした。博士は先日から精神に異常を呈して入院してゐるのださうですが、若し今度の娘の事件が知れたら何一層病氣が

載るかも知れないと云つて、博士夫人が僕の袂を摑んで、『どうか新聞に載せて呉れるなと涙を流して頼むんですよ。ああ、僕はあんなに困つた事はありません』
『そいつは面白い！』と吉田が手を拍つた。『それをそつくりそのまま書くといい材料だがな。「不幸なる博士夫人の涙」つて云つた風なものに。そして博士の入院してゐるのは何處の病院なんだね？』
『それは訊きませんでした』
『何故訊かなかつたんだ？　それが非常に重要な點ぢやないか』
『でも、僕は餘り氣の毒でそんな事を訊く氣になれなかつたのです！』と若い外交記者は悲しさうに答へた。
　すると吉田はその外交記者を摑まへて、いつもの說教を編輯局の隅まで聞えるやうな大聲で開始した。「いやしくも新聞記者ともあらうものが」とか「君は頭がない」とか「君は職務に不忠實だ」とか……
　その時定吉はまた例のハアトの痛みに襲はれてゐた。『あつ！』と思ふと彼の心臟はきゆつと萎縮した。彼はその記事を全部捨てて掲載を見合はせようかと思つた。博士夫人の歎きがそつくりそのまま彼の心臟に波打つて來るやうな感じがした。が『若し此の新聞が掲載を中止しても、他の新聞が載せるだらう。そして博士夫人の歎願が何の效果をも奏さないだらう』定吉はさう思ふと、自分の立場が、自分の職業が、呪はしくなつて來た。
　彼は自分の前に置かれた原稿の、博士の娘の不身持を記した何行かを、赤インキでさつと消した。『それも亦自分が消しても他の新聞が書き立てるだらう』と彼は考へた。
　けれども彼はせめて娘の不身持と云ふ點を消す事によつて、博士夫人に、また自分自身の良心に辯解をしようと思つたのであつた。
　かうした事のある間にも、定吉は一瞬間も筆を置く暇がなかつた。彼は朱を加れた原稿を『給仕！　給仕！』と呼んでは、片つ端から工場の方へ廻させた。彼は大聲に命令的に『給仕』と呼んだのは此の日が初めてであつた。
『給仕！　給仕！』と呼ぶ自分の聲が、熱し切つた耳には、調子が外れて行つて、襟元に惡寒を感じさせるやうな金切聲となつて響いた。
　締切時間が近づくに從つて彼の頭は益々混亂して來た。丁度その時であつた。彼が『給仕！』と呼んだのに返事がなかつた。『給仕！』と再び呼びながら給仕席の方を振向くと、その途端に、中で一番年上の十七になる生意氣盛りの給仕が、彼に向つて唇を尖らかして揶揄ふやうに眼を剝き出してゐたのが、急に彼の振向いたのを見たので、狼狽てて首を縮めて、取繕つた澄した顏をよそはうとした。それを見た定吉はいきなり立上つた。今まで堪へてゐた憤怒が急に爆發したのである。『給仕までが人を馬鹿にしてゐやがる！』彼は腹の中でかう叫んだ。そしてづかづかその給仕の側に進み寄つて、『呼んだのが貴樣には聞えないのか！』と怒鳴つた。それは自分ながら吃驚する程大きな聲であつた。そして震へてゐた。が不思議であつた。彼が、自分は今までにこんな大きな聲を出した事があるだらうか、と云ふ考を一瞬間チラリと頭の中に浮べたと思ふと、同時に、彼の右の手がむづむづ動き出したのを意識した。そして、彼はそんな事は少しも望みもしなければ豫期もしなかつたのに、はつと氣のついた時には、彼の掌がその給仕の横面を力委せに一つ撲つてゐた。
『あつ！　給仕を撲つた！』定吉は心の中で叫んだ。と、彼の憤怒は瞬く間に羞恥と自己嫌惡との感情に變つて行つた。彼は自分自身が頭

から何ものにかどやしつけられたやうな情なさと意氣銷沈とを覺えた。頭を垂れずにはゐられない氣がして來た。彼はその給仕が頬を膨らまして、何か云ひたいのに何も云へないと云つたやうな表情をして、恨めしさと驚愕とを同時に浮べたやうな眼で彼を見上げて、そして直ぐ下を向いたのを覺えてゐた。が、自分がどうして自分の席に歸つたか、どうして筆を取り上げたかは覺えてゐなかつた。

『給仕を撲つた、給仕を！』かう云ふ言葉が單に頭の中で叫ばれてゐるばかりでなく、定吉の手でも足でも身體全體が、そして又彼の身體以外の周圍が、それを叫んでゐるやうな氣がした。『給仕を撲つた、給仕を！　あゝ、俺は何といふ人間だらう。恥しい、恥しい！』

定吉は机に向ひながらも、心はゐても立つてもゐられない氣がしてゐた。――自分は今までに人を撲つた事があつたらうか。彼は物心地のついて以來喧嘩といふものをした覺えはなかつた。心が命じもしないのに自分の手がどうして給仕の横顔に飛んで行つたか、そして飛んで行く事を知つてゐたか？――定吉は思案した。が、解らなかつた。それは殆んど人間に生れながらに備はつてゐる本能なのかも知れない、動物が怒つて嚙みつくやうに、人間が怒ると對手を撲る事は、撲るために手が動く事は、敎はつてから知るのではない一種の本能なのかも知れない――定吉は今まで自分の身内にこんな狂暴力がひそんでゐようとは夢にも思はなかつた。彼は人がさうした事をしても怯える男であつた。さうだ、彼は遠山にステッキを振り上げられてあの通り逃げ出したのだ。それだのに：：自分が人を撲らうとは。而も給仕を撲らうとは。

『何故給仕を撲つた？』と云ふ言葉がおちついた反省となつて彼の心に囁かれたのは、暫く後であつた。『何故給仕を撲つた？　給仕がたとひ自分にからかふやうな態度を取つたとしても、その心の底は無邪氣なのだ。あの年頃にはよくあんな事をしたがるものなのだ。併し、あの社長、あの吉田：：どうせ撲るなら何故ああした人間に向はなかつたか？』

定吉は探るやうに机の向うの吉田を見た。吉田は笑つてゐた。その眼は何か面白いものでも見たと云つたやうに、『君もなかなか元氣があるね。たまにはやり給へ。あの給仕は近頃ほんとに生意氣なのだから』こんな事を云つてゐた。

『何故給仕を撲つた？』と今一度考へた時、定吉にはもう自分の氣持の誤魔化しがつかなくなつて來た。丁度時計が二時を報つたので、彼は『締切』のベルを自分で鳴らして、（もう『給仕』と呼ぶ元氣がなかつたのである）部屋の隅に小さくなつて俯向いてゐるその給仕の側に再び行つて、『一寸此方にお出で』と誰もゐない應接室に連れて行つた。彼はその給仕を慰めようと思つたのであつた。

『お前は一番働ける好い給仕なのだ！』何と云つたらいいかと暫く思案した末に、定吉はかう口を切つた。『それだのにそのお前からそんなに怠けては困るぢやないか』

すると、その給仕の額の眉と眼との間が一瞬間ずつと延び始めた。と、思ふとまた縮んで、そしてしくりしくりと泣き始めた。定吉は益々どうしたらいいか解らなくなつた。『僕は少しも怒つてはしない』かう云つたが、そんな事では駄目であつた。『撲つたのは僕が惡かつた。ね、堪忍して吳れ』と重ねて云つたが、それでも駄目であつた。

そこで定吉はかう考へた、さうだ、此の給仕に小遣をやらう、と。彼は蟇口を取り出してその中から二十錢銀貨を摑み出した。

『もう機嫌を直して呉れ。これでもつて歸りに珈琲でも飲んで行つてお呉れ。さあ、もう仲直りをしよう』

だが、その時まで默つてしくりしくり泣いてゐた給仕は、『要りません！』と云つて定吉の手を拂ひ退けた。定吉は金を無理に給仕の袂に入れようとすると、給仕は再び『要りません！』と叫んで、急に應接室から逃げ出した。定吉が二三歩追ひかけた時には、もうその姿がドアの彼方に消えてゐた。定吉は自分の手に殘つた金を見た。と、急に非常な屈辱を受けたやうな、もう取返しのつかない事をしてしまつたと云つたやうな感情が頭に込み上げて來た。彼は前よりも一層誤魔化しのつかない、頭からどやしつけられたやうな羞恥と胸苦しさとを覺えた。

彼は編輯局を通るのが恥しかつたので、別のドアからこそこそと、忍ぶやうに、大組をしに工場に上つて行つた。

八

定吉が大組を濟まして、二階から降りて來た時、遠山が應接室で彼を待つてゐた。遠山は定吉の豫想通りに訪ねて來た。而も何事もなかつたと云ふやうにニコニコして。

『先夜は失敬したね』と遠山は氣輕に快活に云つた。彼は酒氣を帶びてはゐなかつた。『僕はどうも酒を飲むと結果が惡くつていけないよ。何だか君に向つて亂暴な事を云つたらしかつたな。併しまあ堪忍して呉れ給へ』

『いや、僕は何とも思つてゐやしないよ』と定吉は答へた。

『時に、僕は今日は君にお願ひがあつて來たんだがね。君のところに十圓ばかり餘分な金がないかね？』

『さあ』

『實はねえ君、又非常に切迫して來たもんだからね、ワイフを實家に相談にやらうと思つてゐるんだ。その旅費が欲しいんだよ。もう十一月も大分押しつまつたし、來月はもう十二月だからな』

『さあ』と定吉は同じ答を繰返した。彼は十圓の金を持つてはゐなかつた。けれども、かう云ふ場合に、その事をきつぱりと云つて拒絶する事が出來ないで、いつまでも躊躇してゐるのが彼には例であつた。遠山は定吉が默つて考へ込んでゐる間に、まるで他人事でも話すやうに、おどけた調子で、こんな事を話してゐた。

『何しろ毎日食ふ米がない始末なんだからね。實は弟の處から二ヶ月前、二俵汽車便で送つて貰つたんだが、先日古道具屋に賣つてしまつたんだよ……さうさ、何か知ら賣る道具がある積りで古道具屋を呼んで來た處が、家中探しても何もないんだらう。折角呼んでただ歸すのも氣の毒だと思つたから、米を買はないかつて云つたら、喜んで買つて行つたよ。ワイフに聞くと一般の相場と大した違ひがない値段だつたさうだ。面白い爺だつたよ』

又こんな事も話した。

『家主が今月中に金を拂はないと立退いて貰はなければならんと云ふんだよ。立退かなかつたら疊を上げて持つてつてしまふさうだ……併し先日は滑稽だつた。電車の歸りに雨に濡れて困つてゐると、汚い洋服を着た男が傘に一緒に入つて行けと云ふんだよ。その男がいきなり「あなたの處では家賃が幾ら溜つてゐますか？」つて訊くから、「六ヶ月溜つてゐる」つて答へたら、「私の處ぢや五ケ月溜つてゐるんですよ」つて云ふのさ。世の中には同じやうな人間が澤山ゐると思つて感心してゐると、それが僕の隣家の男だつたのさ……俺も迂濶だね。格子戸が並んでゐる同じ長屋の人間の顏をその時まで知ら

なかつたんだからな。――その男は何でも保險會社の外交員の口を探してゐるんだが、なかなかないんださうだ』

　が、世の中にはかうした事を平然として大つぴらに喋つてゐながら、決して人に下等な感じや反感や憎惡を覺えさせない人間がある。遠山も亦さういふ種類の男であつた。

『僕はないが、併し』定吉はかう云はずにゐられなかつた。『誰かが持つてゐないだらうか。相川はどうだらう?』

『うむ、だがあの男は貸すまい。あの男は俺に對して始終警戒してゐるからな』

　かう云ふ場合に定吉は、『それなら僕から頼んで見よう』と云はずにゐられない性向を持つてゐた。彼はそれが決して好い性質でない事を知つてゐた。そこで、ついさう答へさせようとするやうに彼を強ひる心の誘惑と暫くの間戰つた。が、結局それに打克てなかつた。

『それぢや、僕から頼んで見よう』かう云つてしまつた時、定吉は自分の力にない事を云ひ出した自分を直ぐに責めた。若し相川が拒絶すれば、定吉は屹度それがために自分で苦しまなければならない、どんな事でもして無理にも自分でそれを都合しようとするに違ひない、彼はさうなる事を心の底でよく知つてゐたのであつた。

　定吉は社の歸りに相川を訪ねた。相川は机に向つてペンを握つてゐた。彼の短篇小說はまだ完成されてゐなかつた、けれども、例のやうにはきはきした、自信に充ちた言葉で、相川は自分の計畫を繰返し繰返し語つた。

　定吉はそれを聞いてゐる間も、始終如何に切り出したものかと考へてゐた。そして相川の言葉が途切れた時、

『君、失敬だが、僕に十圓ばかり貸して呉れないか?』と躊躇しいしい云つた。

『ああ、その位の金はあるだらう』相川は机の抽斗を開けかけたが、定吉の顏付を見ると不審さうな眼をして、『君が要るのかい?』と訊いた。

　けれども此の位の小さな事でも、定吉には終に譃が吐けなかつた。彼はたじたじとしながら、『ああ僕が要るんだ』と答へたが、直ぐその後から、顏を眞赤にして、『實は遠山が……』とその顚末をすつかり白狀してしまはなければならなかつた。――そして續いて彼は反射的の反省作用に苦しめられ始めた。自分が要るのだと何故云ひ切れないのだらう。ほんとの事を云つたら相川が拒絕する事が解り切つてゐるのに。……『お前は正直なのだ!』と心の何處かで彼を慰めようとするものがあつた。が、その慰めるものに對して、彼は恥しさを以て反抗した。斷じて斷じて、さういふ感情を避けなければならない、こんな風に彼は自分に向つて云つた。が、又何が斷じてだ?』とそれに對して更に反抗し返すものがあつた。そしてそれは『再び何故自分が要ると云はなかつたらう?』といふ第一の反省に歸つて行つた……彼の頭は渦を巻いて、胸が苦しくて痛かつた。

『遠山に貸すなら僕は御免だよ』と相川はきつぱり云ひ切つた。『僅かな金だけれども僕はあの男に貸す事は御免だ。彼奴はまるで責任といふ事を知らない。それが僕には第一に厭な點だ。彼奴はいつ如何なる方法によつて返さうかなどと云ふ事を考へた事はないのだ。さうさ、あの男にはたくらみはない。あの男は割合に正直者である。決して惡いたくらみに導かれて人に金を借りようなどとはしない。それは僕も知つてゐるよ。だが、性來の怠惰のために、あの男はいつだつて次の瞬間の事を考へた事がないのだ。困るからワイフを實家に相談にやらうと思ふ。相談にやるには汽車賃が要るか

ら、それを友達に借りようとする。併し結局それだけなのだ。それに就いて自分はどうしようかと云ふ點になると、もう彼の怠惰は彼の考へる力をごちやまかしてしまふのだ……」

「だが、僕はあの男は善人だと思ふよ。そして興味がなくて、酒を飲むと亂暴もするが」かう云つた時、定吉は先夜の事を思ひ出して、恥しさに顏が火照つて來た、「併し一體は淡白で無邪氣だと思ふよ」

「それや淡白で無邪氣さ」と相川は冷かに答へた。「併し淡白で無邪氣だからと云つて、物の秩序を亂す不聰明を許す事は出來ないよ。そこが現在の我々が考へなければならない一番重要な點なのだよ。無邪氣だけで終れば人間の生活は餘りに情なさ過ぎる。第二に、彼奴に旅費を與へると、それがやがて彼の弟の苦痛を增させる種になるのだ。あの忠實な弟は兄貴のワイフが實家に金の相談に行つたと聞いたら、どんなに苦しむか知れないからね。だから、僕はそんな金を彼に貸す事は絶對に御免蒙る」

『併し……』

『いや、絶對に御免蒙る。第一遠山が君にさういふ相談を持ちかけるといふのが、根本の誤りなのだ。さういふ相談を受けた君の方はその通り、一生懸命に苦しんでゐる。ところが、相談を持ちかけた遠山の方は平氣の平左で、苦痛も何も感じやしないんだ！」

「併し」と定吉は再び口では云つたが、心の中では相川の言葉を成程、さうかも知れないと思はずにゐられなかつた。そこでそれ以上相川に賴む事は出來なくなつてしまつた。と、又例の反省が、「何だつてこんな安請合をしたらう」と彼の心を突つつき始めた。

定吉は相川の家から遠山の家に行く途々いろいろな事を考へた。彼の頭には今日の社の出來事が思ひ返されて來て、重苦しい憂鬱が充滿した。——すると、突然彼の心は遠山に對して變化し始めた。と云ふのは、相川の言葉が思ひ出されて來たからである。

「實際その通りだ！」定吉は腹の中で呟いた。「遠山が平氣の平左なのに、俺はこんなに苦しんでゐるのだ。いや、俺ばかりではない、遠山が平氣の平左なのに、彼の細君や子供や故鄕の親爺や弟達がみんな苦しんでゐるのだ。さうだ、あの男ひとりのためにみんなが苦しんでゐるのだ。……例へば、汽車賃を俺か相川が貸してやつたとする。若し彼がそれを返したとしても、實際はそれは彼が拂ふのではないのだ」定吉はから捻出して行つた。『それは彼の弟か、細君の實家で拂ふ事になるのだ。結局彼の打擊にはならないのだ、さうだ、結局一今だつて彼は損をしないで、いつでも暢氣な顏をしてゐるのだ。彼奴を取圍む周圍のものがみんな彼奴のために損害を蒙つてゐるのだ……』

定吉の胸には遠山に對する憤りがむくむくと湧き起つて來た。

『さうだ、あの男は無邪氣で正直ではある』

彼は相川の言葉をそつくりそのままに自分の考として考へつづけて行つた。『だが、無邪氣で、何のたくらみがないと云ふだけの事で、人間を是認する事は出來ない』

そして遠山の家の格子先に立つた時、「俺はその事をきつぱり云つてやらう。それがほんたうなのだ。遠山に金を貸す事は彼奴の怠惰を增長させる事だ。それは一個の不德だ。俺は不德に加擔する事は出來ない！」から昂奮しながら實際に決心したのであつた。

だが、その決心がどうなつたらう？……定吉は格子戸に手をかけた瞬間から、そして遠山の細君が手をついて彼を迎へた瞬間から、もうその決心が鈍りかけて來た。

「やあ、有難う。それでどうだつたね？」と遠山

山が云つた時、定吉の眼は遠山の眼に會つた。そしてそれと同時に細君の眼に會つた。遠山の眼は例によつてそれ程心配さうな表情もしてゐなかつたけれども、細君の眼は不安と期待とに光つてゐた。――この細君はいつでもキチンとした身だしなみをしてゐた。著物は粗末なものであつても、如何にも女らしい柔順な品が、その身體の全體、態度、動作に表はれてゐた。夫に對しても禮儀と尊敬とを示す事を忘れなかつた。

その家は小さな家であつた。玄關の障子を開けた處が直ぐ六疊で、それが遠山の書齋であり、客間であり、茶の間であり、そして又寢室でもあつた。疊は緣が切れて焦茶色に變つてゐた。その六疊と勝手との間にもう一室二疊の部屋があつた。そしてその家全體に五燭の電燈が一つ――六疊の方についてゐる――しかないので、二疊の部屋は薄暗かつた。定吉はその薄暗い二疊に遠山の三人の子供が、丁度眼白の雛のやうに肩と肩とを密著け合つて並んでゐるのを見た。一番上は男の子でもう小學校に通つてゐた。下の二人は女の子であつた。それがみんなキチンと膝を崩さずに、囁き合ひもしないで、溫和しく坐つて、此方を見てゐるのであつた。

その光景の全部を定吉は一瞬の間に、遠山に『どうだつたね？』と訊かれて、それに答へるまでの間に見て取つたのであつた。すると彼は一種の威嚇に似た感じ――それは彼の感情がその光景を見て急に變動し始めたために生じた一種の壓迫感であつた――を受けた。彼は優しい柔順な細君と溫和しい子供達とに、夫とし父として尊敬されてゐる遠山の或る人間的な好いものを目の當りに見た。彼は自分の妻や自分の家庭を思ひ出した。彼は遠山に對する憤りが瞬く間に消えてしまつたのを意識した。

『君、駄目だつたよ』と定吉はがつかりして云ひ難さうに云つた。が直ぐから附加へずにゐられなかつた。『併し、まだ失望し給ふな。何とか僕が考へて見るから』

けれども勿論何の當もあるわけではなかつた。――定吉はその晩方々を歩きまはつた末、たうとう或る質屋に入つて行つた。

九

その翌朝は急に冬の來た事を思はせる寒い朝であつた。路次の銀杏の葉はすつかり落ちつくして、澄み切つた冷たい青空に、その小枝が網の目を描いてゐた。そして霜に固まつた地面の上を、その黃ろい落葉がカサコソと淋しい音を立てながら、走りまはつては、そこここに掃き寄せられたやうなかたまりを作つてゐた。

『ああ！ 俺は何といふ事をしたらう！』定吉は自分の家から飛び出して來て、まるで逃げるやうに小走りに此の銀杏の木の下まで來た時、かう思つた。彼の手はまだわなわな顫へてゐた。彼の頭の中には憤りと憎惡と淺ましさと自己哀憐とがごつちやになつて出來上つた重苦しい瓦斯のやうなものが、ふくふくと泡立つてゐた。――彼はその朝初めて妻のよし子を撲つたのであつた。

それはまた例によつて、何等大した原因があつたのでもなかつた。定吉は昨夜遠山のために時計を融通してやつた事を、びくびくしながら妻に隱してゐた。それを今朝彼女に知られただけの事なのであつた。――が、一度定吉の神經に與へられた波動は、何處までも何處までも、進んで行くより外、彼の力でどうする事も出來なかつた。彼の心はいつぞやの晩遠山によつて與へられた刺戟の上に、昨日の社の出來事――社長や吉田に對して抱いた憎しみ、そして更に給仕に對して自分がやつた暴行――によつて更に鋭く、更に感じ易く、まるで露出した齲齒の神經

のやうに敏感になつてゐたのであつた。
『あなた、時計をどうなすつて？』定吉が社に出かけようとして著物を著更へてゐた時、よし子がかう訊いた。――それは確かに普通の訊き方であつた、何の變つたところもなかつたのであつた、定吉はそれをよく知つてゐた。
『うう』と定吉は返事をしようとして、急に言葉が脣に引つかかつた。と、それが彼の頭をイライラさせた。それは變挺な氣持であつた。『ああ！　たうとう目つかつた！　此の女がまた何とか文句を云ひ出すだらう！』と彼はチラリと心に思つた。すると、彼女の云つた言葉そのものに對してよりも、彼女が云ひ出すに違ひないと豫想される文句に對しての答を、定吉は口にしなければならない氣がし始めたのである。
　そこで、かう云つた。
『併し、あの男は氣の毒なんだからね』
『あの男つて誰です？』
『遠山だ。遠山に貸してやつたんだ』
『まあ、あの方は相變らずなのね。で、いつ返して下さるの？』
『そんな事は知らないさ。僕たちの間では友達同志互ひに助け合ふ事になつてゐるんだからね。それが友人として當然な義務なんだ！』と定吉は何だか挑戰でもするやうな調子で語尾に力を入れて云つた。
　するとその時よし子は初めて彼の調子の變なのに氣がついて來たので、彼の顏をぢつと睨んだ。
『まあ、あなたはどうかしていらつしやるわね。まるで妾に喧嘩でも吹つかけるやうね』そこまで云ふとよし子の心にも或る變挺なものが萌して來た。『あたしがいつ當然でないと云つて？』
　――成程、この女は當然でないなどと云ひはしない。これや俺の方がヒステリイだぞ――定吉はかう思つた。が、もう遲かつた。一度變挺になると、もうその氣持の進みをどうしても制する事は出來なかつた。
『お前は何と云ふと直ぐ俺にいろいろな干渉をするがそれは好くない』
『干渉なんかしないぢやありませんか。何です、あなたはむやみに人に突つかかつて來て』
『今日の事を云つてゐるんぢやないんだ。いつもの事を云つてるんだ！』と定吉は叫んだ。
　すると彼の頭に妻のヒステリイや、肉慾や、強情や、其他總ての不快な點がごつちやになつて、渦卷く潮の樣に一時に押寄せて來た。――彼はがむしやらに癪にさはつて來た。彼は素朴な遠山の細君を思ひ出した。そしてよし子に對する憎しみがむらむらと込上げて來た。
『あなたこそ』とよし子はよし子で云つた。『あなたこそ意氣地なしのくせにして。何です、人に向つて、人が何も云ひもしないのに、いきなり怒鳴りつけて……』
『馬鹿！』と定吉が怒鳴つた。
『馬鹿！』とよし子が云ひ返した。
　二人は互ひに憎々しいと云ふ眼をして、茶の間の眞中に突つ立つて、睨み合つて、そして無茶苦茶な罵詈雜言を浴びせかけ合つた。――定吉は自分がどんな事を云つたか、彼女がどんな事を云つたかはよく覺えてゐなかつた。が、その一語々々に燃ゆるやうな憎惡が籠つてゐただけは覺えてゐた。――
『ああ、坊やさへなきや、あなた見たやうな意氣地なしなんかとは、別れてしまふんだ！』と彼女が叫んだ時、定吉は急に右の腕がむづむづして來るのを覺えた。が、此の時は給仕を撲つた時のやうに無意識ではなく、『俺は今此の女を撲らうとしてゐるな』と云ふ事をはつきり意識してゐた。で、彼は撲りさうに腕が震へるのを一生懸命に抑へながら、

『よし、貴樣は出て行け、俺は貴樣なんかを愛した事は一度だつてないんだ！』と叫んだ。
『出て行くとも！』妻は叫ぶなり、いきなり隣りの部屋に駈け込んで行つた。そこには子供がしづかに眠つてゐた。彼女は子供を抱き上げた。子供は泣き出した。子供が泣き出すと、定吉もその部屋に飛び込んで行つた。總てがぐるぐる旋回した。定吉は彼女の手から子供を奪つた。彼女がそれを奪ひ返した。
『やい、子供は貴樣にやりやしないぞ！』と定吉は叫んだ自分の聲の大きさに、ぎよつとした。が、その時、彼は『よし、撲りつけてやる』からはつきり思つて、そして彼女の額を拳骨で、力一ぱいに撲りつけたのである。それはぐわついと云ふやうな音を立てた。彼女は抵抗しさうにした。が、力なくたじたじとした。彼は或る痛快を感じた。『よし、もう一つ撲つてやらう』さう思つて更にまた力を入れて撲りつけた。彼女は泣きわめく子供を抱きながら、部屋の一隅にぺたりと坐つてしまつた。定吉は部屋の中を歩きまはつた。彼は膝がガクガク顫へるのを覺えた。そして幾度となく彼女の側に進み寄つては、その度に、子供をかざして額を隱してゐる彼女の頭を、子供に當らないやうに注意しながら撲りつけた。
『もつと撲つてやるぞ、もつと撲つてやるぞ！』と絶えず心の中で叫びつづけてゐた。
　隣家の細君が臺所から駈け上つて來た。急いでよし子の腕から子供を取り上げて、『よしよし、好い兒だから泣くんぢやないのよ』さう云ひながら彼と彼女との間に割つて入つた。『どうなすつたのです、一體…』と云ふやうな事を云つた。よし子がいきなり立上つて、『ヒイ』と狂氣のやうな泣聲を發して、隣家の細君の後から、彼に獅嚙みつかうとした。『手向ふと命がないぞ』と彼は叫んで、又よし子の額を撲りつけた。
『まあ、あなたは、まあ、あなたは…』と眞中で隣家の細君はおろおろした。『坊ちやんがまあ、坊ちやんがお可哀さうですから…』
　その時定吉はチラリと我子の額を見たのである。子供はわあわあ泣きながら、彼の額を見てゐた。『ああ、此の子にはもう何も彼も解るかも知れない』と彼は思つた。すると、何か熱湯のやうな熱いものが胸の中に込み上げて來るやうな氣がした。定吉は『情ない！』と腹の中で叫んだ。『何といふ樣だ！　何といふ樣だ！』そして彼は妻の方を見た。妻の右の頰が膨れ上つて、右の眼は赤味を帶びた紫色を呈してゐた。――『あつ！』彼はギクリと心臟が止まつたやうな痛みを覺えた…そしていきなり玄關に出て來て、帽子とステッキとを手にすると、そのままどんどん外に駈け出したのであつた…
『ああ！　俺は何といふ事をしたらう？』定吉は頭を垂れながら歩き出した。銀杏の葉が下駄にあたつて輕くカサカサ鳴つた。『そして何のためにああ云ふ事をしたのだらう？』
　定吉には幾ら考へて見てもその原因が解らなかつた。――遠山のために時計を融通した。そしてそれがために自分が妻を撲つた。――そんな馬鹿な事が考へられようか？
　定吉は妻の頰が膨れてゐるのと、眼が紫色に變つてゐるのとを思ひ出した時には、これから直ぐに引つ返して行つて、妻に謝罪しなければならないやうに思つた。そして實際立止りさへもしたのである。だが、今引つ返したら、隣家の細君と顏を合はせなければならないのを思ふと彼にはそれが恥しかつた。――それは某歩兵聯隊附の陸軍中尉の細君で、夫の留守の間は始終鏡に向つて化粧ばかりして時間を潰してゐるやうな女であつた。
　定吉は電車通りの方へは出ずに、それとは反

對の澁谷の方へ向つて歩き出した。何處も彼處も景色がいつの間にかもうすつかり霜枯を思はせるやうになつてゐた。西の空には雜木林の上に、富士や秩父の山々がくつきりとその輪郭を際立たせてゐた。

『もうすつかり冬になつた！』と彼は思つた。何とも云はれない淋しい頼りなさが彼の心を捉へた。そして昂奮の後の空漠とした靜けさが彼の頭を充した。

古川端から氷川神社の前を通つて、神社の横手の原に來た時、彼はいつか河野と女を待ち合はせた時隱れたあの林の中に行つて、墓の上に腰を下ろして少し休まうと思つた。そして草の上を踏みしめて行つた。

と、驚いた事には、彼はその林の中に河野が學校の制服姿で、腰を下ろして、何かぢつと思案に耽つてゐるのを見出した。定吉の足音にも河野は顏を上げなかつた。

『河野君』定吉はその側に近づきながら靜かに云つた。

河野はびつくりしたやうに顏を上げた。その顏は青ざめて、眼が悲しさうに光つてゐた。『あゝ、君か』さう低い聲で云つたかと思ふと、何か急に衝動を感じでもしたやうに、ぶるつと身体を震はしながら立上つた。

『ねえ、君』と彼は泣きさうな聲を出した。『僕はたうとう今朝あの女に打明けたんだよ。だけれどね、ああ、何ていふ馬鹿げた事だらう、ねえ、君、聞いて呉れ給へ……僕はねえ、君、僕はあの女を罵倒しちやつたんだ。だつて君、あんまり解らない事を云ふんだもの。彼女は愚劣な女だ。取るに足らない女だ……』

『どうしたんだい、一體？』と定吉は驚いて訊いた。

『僕は思ひ切つて打明けたんだよ。七年前から僕が思つてゐたつて。ところが、君、ああ實に忌々しい女だ！ 自分は藝術のために一生獨身を立て通す決心だから、さういふお申込は拒絕いたしますと拔しやがる。何が藝術のためだ、スケッチ箱一つ肩にかけただけのくせをして？ 僕は藝術が解らない男ぢやないつもりだ、だから僕と結婚する事はあなたの藝術を高めるものでこそあれ、決してあなたの藝術の害にはならないと云つたんだよ。僕は一人の男に取つて、運命が定めた女は一人しかない、それがあなたなのだ、と云つたんだよ。……ところが、君、彼女は笑ひやがつたよ。そしてからいふんだ。さういふ事はお若い中はよく被仰る事だつて……何だ、彼女は自分の年は幾つだと思つてゐるんだ！』

河野は昂奮して、靴の先を自棄氣味に墓石に打つ突けながら語つた。定吉はそれを聞いてゐると、何とも云ひやうのない悲しさが込み上げて來た。

『それだけならまだしもいいんだ』と河野は語りつづけた。『あの女はかういふぢやないか。今までもいろいろな方からさういふお申込を受けましたが、藝術に一身を捧げたもんですからみんなお斷りして來ましたつて。……それを聞くと僕はむらむらと腹が立つて來たよ。だから僕は云つてやつた、他の男は他の男で僕は僕だ、他の男の事を僕に向つて今の場合吹聽するのは、あなたが虛榮家なんだつて。そしたら、あの女は、あたしを侮辱なさるつもりですかと拔しやがつた。何が侮辱だ。ねえ、君』河野は墓石の間を歩き始めた。

『僕はそれから罵倒を始めたんだ。そんな虛榮家の女に藝術なんか解るものか。藝術の神に一生を捧げるために獨身を立て通すなんて云ふのは、時代遲れの夢で、藝術と結婚とは一致して初めて完成されるんだ。……僕はさう云つて罵倒してゐる中に胸が淸々して來たんだ。痛

快になつて來たんだ。……だが、あの女が、あたし失禮しますと云つて去つてしまつたら、また急に淋しくなつて來たよ。ああ、もう七年の戀もこれで終りかと思つたら僕は淋しくつて淋しくつて堪らなくなつて來たんだ』

『河野君』と定吉は急に云はずにゐられない樣な氣持を感じて來た。『僕は今朝ワイフを撲つたんだよ』

『えつ！』と河野は眼を瞠つた。

『僕はね、今朝ワイフを撲つたんだ。君、僕のワイフの頰つ邊は膨れてしまつて、眼が紫色になつたよ……そして子供が泣いたんだよ、わあい、わあつて……ああ、みんな僕が惡いんだよ。僕の頭はどうかしてゐるんだよ。併し……君、何が何だか僕には物事が一切譯が解らない……』

突然定吉は河野が自分の手をぎゆつと握り締めたのを感じた。

『僕等は不幸なんだね』と河野が云つた。『どうしてこんなに僕等は悲しいだらう？……』

定吉の腹の中で突然きゆつと鳴つたものがあつた。それは子供の玩具の護謨人形、腹のボタンを捺すときゆつと鳴るあの護謨人形の出す音に似てゐた。それは直ぐに、殆んど電流のやうに河野の腹に傳はつて行つて、そこでも亦きゆつと鳴つたらしかつた。定吉は河野の手を強く握りながら、急にわつと泣き出した。と、河野もつづいて泣き出した。

十

十二月が來た。世間の內閣攻擊は益々火の手を高めて行つた。その日は日比谷公園に國民大會が開催されるといふ日であつた。S――社の編輯局は恐慌と狼狽とを極めてゐた。編輯局の窓際に水道栓が二つ据ゑつけられた。それは國民大會の餘波が此の社を襲つて來る時の事を豫想して、それの防禦に備へられたのであつた。

社長が記者全體を一室に招いた。

『さて』から彼は改まつた口調で語り出した。『諸君も御承知の通り、今日は國民大會が開催されるのであるが、此の社は今や國民の無法な反感の的になつてゐるから、或は如何なる暴民達が襲つて來ないとも限らない。それについて、此處に社長は諸君に一つのお願ひがあるのです。諸君の中誰でも志あるものは、今晚社に殘つてそして此の社を守つて貰ひたい。家に年老いた兩親のある人とか、重大な責任を身に背負つてゐられる人とか、さう云ふ人には勿論お賴みはしない。なるたけ獨身の方は全部殘つて頂きたいと思ひます』

みんなは嚴肅な緊張した顏をして、中には腕を拱いてゐるものなどもあつて、社長の言葉を一句々々聞いてゐた。するといきなり立上つてかう叫んだ者があつた。

『今や我社の危急の時に當つて、誰かそれを見捨てて顧みないものがありませうぞ！』

それは芝居がかつた悲憤の色を帶びた光景であつた。定吉はさう叫んだ男が、『社長の奴十萬圓も貰やがつたんだらう！』といつぞや云つたあの牛島だつたので、餘りの意外に吃驚して眼を瞠つた。

『同感々々』と吉田が叫んだ。これも亦一生懸命のやうな嚴肅な顏をしてゐた。それにつづいて、『同感々々』の聲が方々で叫ばれた。そしてみんながまるで決死隊にでも行くやうな昂奮した色を浮べてゐた。

定吉はぢつと眼をねむつて考へた。『これは一體何事だらう？ 何だつてみんなは此の社を守るのだらう？ 而も平生あんなに此の社の惡口を云つてゐる記者達が……』彼にはよく解らなかつた。『一體此の連中は政府に味方してゐるのだらうか、それとも國民に味方してゐるの

だらうか？』けれども定吉の眼には、さういふことを明確に考へてゐるらしい記者はひとりも映らなかつた。彼等は唯夢中に、唯わけもたく昂奮してゐるに過ぎないとしか思はれなかつた。

『例へばあの水道栓だ！』と定吉はこれ等の記者の中誰かが、襲つて來た民衆に向つて水口を向ける光景を想像した。『誰かがあれで以て群集に水をぶつかけるのだらう。そのくせその男は群集に對して恨も何もないのだ。それだのに不思議な敵愾心などを起して、自分が何か正義に味方し、正義のために戰つてゐる勇士のやうな昂奮に驅られるに違ひない』

定吉は相川の言葉を思ひ出した。『さうだ、秩序がないのだ。人間がみんな明確な意見を持つてゐないのだ！』から腹の中で呟いて、彼は憂鬱な溜息をした。

みんなが編輯局に歸つて來た時、社會部長の齋藤が定吉に聲をかけた。

『鈴木君、君は今晩は社に殘らないで、日比谷の方に行つて群集の狀況を觀察して吳れ給へ。——その方がいいよ』そして小聲になつて、『社に殘らうと云ふ有象無象は他に澤山ゐるから遠慮し給ふな』

午後五時頃、定吉は社を出ようとすると、梯子段の側の暗い隅に、外交記者達が四五人塊つてゐた。

『鈴本さん、お歸りですか？』その中の一人がから聲をかけた。

『僕は群集の方の觀察を命じられたんです』

『それや結構ですな。あなたは若い奥さんもお子さんもお有りなんだから、命が大切でさあね』そしてみんながどつと笑つた。

『鈴本さん』と云つてその中から一人走り寄つて來た男があつた。それはいつぞや博士夫人の話を聞きに行つたあの若い外交記者であつた。定吉は此の外交記者が若々しく正直なので、比較的親しくしてゐたのであつた。

『僕はもう今日きりであなたにお眼にかかれません』から外交記者は昂奮の色を眼に帶びながら云つた。『もう我慢がなりませんから、今夜の此のどさくさ紛れにあの吉田の奴を思ひ切り一つ擲りつけてやらうと思つてゐるんです。人を人とも思はないで始終失敬な事ばかり云ひやがるから。そしてこんな社は早速辭職です』

定吉の心臟はそれを聞くときゆつと萎縮した。そして烈しく痛んだ。彼は若い外交記者の暴擧を押し止めたいと思つた。けれども口が利けなかつた。

『それでは御大切に。さやうなら』外交記者はから云つて梯子を驅け上つて行つてしまつた。

『さやうなら』と定吉は口の中で呟いた。

定吉の憂欝は日比谷公園に行くと、更に一層加はつて來た。そこで彼は——社に於けると同じ譯の解らない昂奮を見た。同じ譯の解らない悲憤慷慨を見た。同じ正義呼ばはりを見た。

彼の眼前には人間共の頭が數限りなく並んでゐて、それがみんな口々に『ヒヤヒヤ』とか『イエスイエス』とか喚き立てては、遠くの方の一段高い臺の上に立つてゐる長髮の羽織袴の男が手を振る度に拍手喝采した。それは何やら演説してゐるのであつたが、定吉の耳には聞えなかつた。

『何のために何のために？』と定吉は腹の中で考へた。『みんながみんな、意見を持つてゐないのだ。巡査も、あの馬で以て群集の中を動きまはつてゐる騎馬巡査も、それからあの演壇に立つてゐる男も、——それは賣名のために貴族院議員の位置を擲つて、首相を攻撃してゐる男であつた——何がほんとに正しくて、何が正しくないかを實際は少しも知りはしないのだ』

定吉は自分の隣りにゐた書生體の男が、側を通つた巡査に罵倒を浴びせかけたので、巡査が又怒つてその男を摑まへようとすると、附近に見てゐた群集が書生に加擔し、又その附近にゐた巡査達がその巡査の應援に馳せつけて、そこに一場の格闘が持上つた時、もう我慢がならなくなつて、一刻も早く此の群集の渦卷の中から逃れたくなつて來た。彼は濠端に出た。濠の水は眞黑で、澄み切つて、キラキラと空の星を映してゐた。

すると定吉の頭に急に鋭い自己反省がキリキリと痛い程襲つて來た。「だが俺は、此の俺は……」と彼は考へた。「俺は一體それなら何の意見を持つてゐるのだ？　俺は一體どんな生活をしてゐるのだ？」それは彼がいつも感じてゐる事ではあるけれども、此の時位鋭く感じた事はなかつた。彼は兩手で頭を押へた。頭が割れるやうに痛くて、眼がくらくらとした。――その反省は彼のハアトには餘りに強過ぎた。彼は何か支木が欲しかつた。彼は相川を思ひ出した。そして相川を訪ねて行つた。

「僕は君に打明けたいと思つて來たんだ」と定吉は弱々しい聲で云つた。「僕は大變不幸なんだよ。君」

「さうだ、君の狀態はかなり悲慘だ」相川は机の上にペンを置いて振向いた。「僕は隨分前からさう思つてゐたんだ」

「それでねえ、君」定吉は何も彼も云つてしまひたいと心があせりながらも、何から云ひ出していいか解らなかつた。「僕は今の生活を根柢から改革したいと思ふ。僕はもう窒息しさうなんだ。僕は田舍に引つ込みたいと思ふ。僕は靜かにして頭を恢復させたい。……ねえ、君、僕はワイフと別れたいんだ！」

「そりや別れてもいいだらう」と相川は暫く定吉の顏を見つめてゐた後で云つた。

「だが」と定吉はおどおどした眼付をした。「僕はどうかして生活費だけは支給してやりたい。何とかして僕はその金を拵へたいと思つてゐる。これがやつぱりほんとの道だと思つてゐるんだが、今の僕には力が足りない」

「いや、そんな事を考へてゐて愚圖々々してゐる必要はないよ」と相川は云つた。「君は今のままでは亡びるんだ。だから君は先づ亡びる事を拒絶しなければならない。これがもう何よりも最大の理由だよ。君の細君も世間にざらにある人さ、惡い人間ぢやないさ。併し君と細君と一緒になつて目的のない生活をしてゐたら、いつまで經つても互ひに救はれる事はない。それだけでもう別れる理由は立派にある」

「けれども、さうしたら妻はどうなるだらう？」

「どうなるかは解らんさ……併し君と一緒にゐたところでどうなるだらう？　こいつだつて第一解るまい。……今君は生活費云々と云つたが、そんな事はもつと強い人間のする事だよ。強い人間がすればそれは正當な行爲ともなるが、君のやうな人間には不正當だ。自分の沈みさうな人間が他人を背負つて浮ばれる筈があるものか。……そんなセンチメンタリズムは君を滅ぼすばかりだよ」

「さうだ、今の處は一時心を固くして、何としても此の場だけは切り拔けてしまはなければならない」と定吉は相川の家を出てから途々考へた。「兎に角、今夜直ぐその話を持出してやらう。そして斷然別れてしまはう」

定吉の頭には別れた後の事が空想に描かれて來た。彼は何處か田舍に行かうと思つた。田舍、田舍、彼は又漠然と田舍を心に描き始めた。……そこには獵をする林がある。そこには釣絲を垂れる小川がある。そこには散歩の出來る野原がある。そして自分はトルストイを讀む。爺さんや婆さんが大根を持つて來て緣側に載せて行つ

て呉れる……

定吉の心は明るくなつて來た。彼は靜かな靜かな生活を思ふと、涙が出るほど懐しくなつた。

「けれども子供は？」子供と云ふ事がふと定吉の頭に浮んで來た。子供は彼女に與らうか？　定吉はこれまでこんなにまで自分が子供を愛してゐるようとは思ひも及ばなかつた。子供の事を思ふと定吉の眼には止度もなく涙が溢れて來た。彼は暗い往來で、立止つて、兩手で顏を蔽はずにゐられなかつた。

「ああ、可哀さうだ！」と彼は聲に出して叫んだ。

「だが、俺と彼女と何方が子供を愛してゐるだらう！　あの女は氣紛れで、子供にまでもよく癇癪を起してゐるが、併し愛してゐる事は確からしい。だが俺も愛してゐる」と定吉は考へた。「併し男と女と一體どつちが餘計に子供を愛するものだらう？」定吉は何かの本で讀んだ事を思ひ出した。「それや、やつぱり女の方が餘計に愛するに違ひない。さうすると、子供は彼女の方につけてやらなければなるまい」

「さうだ」と定吉は更に考へた。「彼女はまだ籍が入つてゐない。子供は彼女の離緣の者の子供といふ事になつてゐる。彼女に取つては幸運なわけだ。だが、一つ彼女の籍を入れてそして子供の籍も此方に貰つて、その上で彼女を離緣しようか。さうすれば子供はどうしても俺のものだ。……いや、併しこんなたくらみをしていいものだらうか？」

「いけないいけない」と定吉は頭を振つた。「それは卑怯だ。俺はやつぱり子供は彼女にやらう。俺は男だ。俺は我慢が出來る。だが女に取つては子供に別れる事は致命傷に違ひない……」

定吉はモオパッサンの「父」の主人公が、公園の中で、自分の振り捨てた女が、自分との間に出來た子供を遊ばせてゐるのを見て苦しむ光景を思ひ出した。「俺もあんな風になりはしないだらうか？」彼は再び頭を左右に振つた。「いや、併しそこが氣持の修養なのだ。俺はそこを修養しなければならない」

自分の家のある路次まで來ると、定吉は亂れた心を整へるために立止つた。彼はどんな風に妻に向つて別れ話を持出さうかと思案した。そして下腹にうんと力を入れて、足を一歩々々踏み締めながら歩いた。

彼が格子戸を開けた時、いつになくよし子はいそいそとして玄關に馳けて來た。

「坊や、お父さまのお歸りだよ」と彼女は子供を抱きながら、子供の身體ごと一緒に頭を下げた。

「とうちやん、とうちやん」と子供は云つた。

定吉は默つて、苦り切つた顏をして、自分の部屋に通つた。するとよし子は後からついて來て、

「ねえ、あなた、さつき遠山さんお光來しやいましたよ」と云ひ出した。「お可哀想ですわね、あの方は。お子さんを二人連れていらしつたんですよ。何でもねえ、あなた、たうとうお家を立退かなければならなくなつたんですつて」

「えつ、立退いたつて？」と定吉はぎよつとした。

「ええ、さうですつて。先日奥さんがお故鄕にいらしつたままだ歸つてらつしやらないんですつて。多分、實家で歸して寄越さないんだらうつて云つてらつしやいましたよ。一番下のお子さんは奥さんが連れていらしつたけれども、後に殘つてゐる二人がほんとに可哀さうで堪らないつて、さう遠山さんは云つてらつしやいましたよ。遠山さんはあれでなかなかお子さんを

お可愛がりになるんですね。妾にはそれが眼に見えてよ。こんな場合になつても、暢氣な調子で物を云つてらつしやいますが、お心の中ぢやほんとに可愛いと思つてらつしやるやうよ』

『それで歸つて行つたのか？』と定吉は訊いた。

『ええ』とよし子は更に膝を進めた。『兎に角急で弱つてゐるから、一晩だけ泊めて貰ひたいつて被仰るから、妾も承知したんですよ。ところがねえ、まあお可哀さうに、坊ちやんの方は默つてお父さんの云ふなりになつてらつしやるんですが、お孃さんがお聞きにならないんですよ。六つですつてね、あのお孃さんは。もう何か一寸々々お解りになるんでせうね。妾が『小母さんと一緒に寢ますから泊つていらつしやい』と云つても、厭だ厭だつて頭をお振りになるのよ。そして遠山さんの手に縋つて、『お父さん、歸りませう歸りませう』と云つて、たうとう泣き出しておしまひになりましたの』さう云つてよし子は涙を浮べた。『あたし貰ひ泣きしましたよ、ほんとに。――するとね、遠山さんは悄然となすつて、子供がこんなに云ひますから、兎に角失禮しませうと被仰つて、妾が幾らお止めしても、たうとう歸つて行つておしまひになりましたよ。鈴本君にどうか宜しくつて』

『何處に行つたらう』と定吉は云つた。

『何でも、何處か安い宿屋に行くと被仰つてらつしやいましたよ』

定吉の頭は又急激に變化し始めた。彼は途々考へた事をすつかり忘れてしまつた。そして遠山の事を考へた。――彼は何が何だか解らないものに再び突き當つた。――彼の心臟は又もやきゆつと痛んだ。彼はゐても立つてもゐられない氣がして、何處かに遠山を探しに行つて、自分の家に再び引つ張つて來ようと思つたが、てんでその見當がつかなかつた。彼は眼を閉ぢた。そして腕を組んで考へた。

『ねえ、あなた、子供つて云ふものはどうしてかう可愛いものなんでせうね、誰にでも』とよし子が抱いてゐる子供に頰ずりしながら云つた。

『うん』と定吉は云つた。定吉の心は何ものか優しい、弱い感じに一杯になつてゐた。

『ねえ、あなた』と妻は再び云つた。その聲は思はず定吉が彼女の方を振向いて見ずにゐられなかつた程の優しみと媚とに溢れてゐた。子供に頰ずりをしつづけてゐる彼女の眼は伏目になつて、その頰には羞しさが漂つてゐた。『あたしね』と彼女は躊躇しながら云ひ始めた。『あたしね、何ですか又出來たやうなんですよ』

その言葉は定吉の頭には何ものかが落ちて來たやうにグヮンと響いた。

『何つ？』と彼は眼を瞠つた。

『どうもさうらしいんですの。先月と今月と試して見たんですけれど。それに今日なんかは、何となく胸が惡かつたりする樣子が、どうしてもさうとしきや思はれないんですの』

『あつ！』と定吉は叫んで、頭を兩手で抱へながら、仰向けに疊の上に轉つた。彼の頭の中は恐ろしい程の速かさで旋回し始めた……恐ろしい絶望があつた。何とも云はれない苦しさがあつた。が、それと同時に彼は、妻のために下女を雇つてやらなければならない事を考へた……

（大正六年十月）

年譜

明治二十四年（一歳）
十二月五日、牛込區矢來町三番地に生る。父は直人（柳浪）、母は壽美。區役所の戸籍係の書違ひのためか、戸籍面の生日十二月三十一日となれるを後に知る。

明治三十一年（八歳）
四月、赤城小學校に入る。七月、母を喪ふ。

明治三十三年（十歳）
矢來町より辨天町に轉居す。これより轉居餘りに頻繁なりしため、「家」といふ觀念薄れ行きしにあらずやと、成人後思ひ當る節あり。

明治三十五年（十二歳）
二月、第二の母潔子を迎ふ。その頃早稲田鶴巻町に住す。間もなく市ケ谷甲良町に轉じ、更に麻布區櫻田町に移る。赤坂小學校に轉校。新入生として輕蔑され、登校するを厭ふ。依つて更に南山小學校に轉校。此處では生徒温和にして、大いに歡迎さる。氣強くなりて、餓鬼大將の一人となる。成績も亦良好。

明治三十七年（十四歳）
日露戰爭始まる。四月、麻布中學に入る。戰勝祝賀の提灯行列に加はり、和田倉門にて、群集に揉まれ、死ぬ思ひをなしたるをよく記憶す。麻布霞町に轉じ、更に笄町に轉ず。

明治三十八年（十五歳）
再び麻布霞町に轉ず。匿名にて「ハガキ文學」にコマ繪を投書す。又「時事新報」の時事漫畫を投書し、賞金を貰ふ。又二三の雜誌に文章を投じ、時々賞金を貰ふ。父に叱らるるを恐れ、總て匿名。

明治四十年（十七歳）
初めて「萬朝」懸賞小説に應募し、賞金を貰ふ。匿名なりしも父に知れ、叱らる。併しその時より二三年間、いろいろに名を變へて、「萬朝」に投書す。十回入賞す。

明治四十二年（十九歳）
麻布中學卒業。前途の志望決せず。父に問はれ、美術學校なら入りたき希望を洩す。父「繪の才ありや」と問ふ。「無し」と答ふ。父「それなら文科に入りたら如何」と云ふ。別段異存なしと答ふ。即ち早稲田大學文科豫科に入る。谷崎精二、峰岸幸作と親交を結ぶ。同級に國枝史郎あり。文才群を抜く。それに比して自分の文才なきを悲觀す。政治科に移らんかなどと思ふ。この頃よりチェエホフの短篇をぼつぼつ飜譯し始む。

明治四十三年（二十歳）
大學部英文科に入る。島村抱月に教を受く。

大正元年（二十二歳）
舟木重雄、峰岸幸作、光用穆、葛西善藏、相馬泰三等と同人雜誌「奇蹟」を創刊。後谷崎精二同人に加はる。

大正二年（二十三歳）
四月、早稲田大學英文科卒業。「奇蹟」廢刊。本村町に移轉す。一年志願の費用を得るためモオパスサンの「女の一生」を飜譯す。植竹書院より出版。併し徴兵檢査の結果は第一乙なり。

大正三年（二十四歳）
四月、補充兵教育召集のため三ヶ月間野砲兵第一聯隊に入營。そのうち二ヶ月間を衛戍病院に送る。入營中父病氣になる。除隊後

毎夕新聞社に入る。九月、父保養のため名古屋の兄（父の長男）の許に行く。十一月、母も亦名古屋に行く。これより下宿生活始まる。この年宇野浩二と知る。

大正四年 （二十五歳）
入社後約半年にして毎夕新聞退社。專ら飜譯によりて生計を立つ。愉快ならざる結婚生活に入る。最も心暗き時代始まる。（「やもり」「波の上」等はこの時代を書きたるものなり）十二月、長男賢樹生る。

大正五年 （二十六歳）
茅原華山主宰の「洪水以後」に文藝評論を書く。これより文藝評論家と稱せらるるに至る。十一月、愛知縣師崎町の病院に保養しゐたる兩親を迎へ、片瀨に家を持つ。十二月、鎌倉に移る。

大正六年 （二十七歳）
「トルストイ研究」に『怒れるトルストイ』を發表。トルストイズムの風靡したる時代なり。トルストイの宗教的自覺を難ず。「早稻田文學」に『アルツイバアセフ論』を書く。十月、「中央公論」に『神經病時代』を發表。文壇的處女作なり。毀譽褒貶區々なれども、世の注目を惹く。續いて『本村町の家』（「文章世界」）を發表。

大正七年 （二十八歳）
『師崎行』『轉落する石』『悔』他十數の短篇を書く。『師崎行』は作者の心に殘る短篇なり。

大正八年 （二十九歳）
『やもり』『二人の不幸者』『線路』他十數篇を發表。それぞれ世評あり。長女桃子生る。家庭生活益々圓滿を缺き、家を外にして放浪生活を送る。

大正九年 （三十歳）
『波の上』『死兒を抱いて』他數篇の小說、及び評論『志賀直哉論』を書く。數年間惱みたる結婚生活を破壞す。

大正十年 （三十一歳）
創作に興味を失ひ、間に合せの作のみを書く。『隱れ家』『ひとりの部屋』やや見るに足る。

大正十一年 （三十二歳）
殆んど創作せず。モオパスサンの「美貌の友」の飜譯を天佑社より出版。

大正十二年 （三十三歳）
藝術社を起し、『武者小路實篤全集』の出版を企て成績不良。爲に武者小路氏に迷惑をかけ、自身も窮乏のどん底に落つ。九月、大震災に遭ふ。松澤はまと知る。

大正十三年 （三十四歳）
前年よりの窮乏のために再び奮起して創作を書く。『二重生活者の手帖』『三年』他二十數篇の短篇あり。『三年』やや好評。

大正十四年 （三十五歳）
『狗が疲れてゐる』『秋の一夜』他數篇。

大正十五年 （三十六歳）
短篇『彼』（『世は事もなし』と改題）『邂逅』、脚本『勝者敗者』外數篇。松澤はまと家庭生活に入る。久しぶりに放浪生活を止め、馬込に家を持つ。

昭和二年 （三十七歳）
戲曲『生きて行く』短篇『哀れな女』他數篇。

昭和三年 （三十八歳）
長篇『薄暮の都會』を「主婦之友」に連載。短篇『別離』『入院』『梅雨近き頃』を書く。十月十五日、父柳浪を喪ふ。この世で最も親しき人を失ひ、悲しみ極まりなし。

昭和四年 （三十九歳）
『薄暮の都會』完結。長男賢樹麻布中學に入る。――四十歳を前にして、今更のやうに思想混亂に陥り、今日に至る。

葛西善藏集

序

（葛西善藏・人及び藝術）

　ミケランジェロの藝術の特徴を評して「苛烈」と呼んだ批評家がある。わが葛西善藏の藝術の特徴も同じやうに「苛烈」であつた。彼ほど苛烈な作品を書いた作家は、近代の日本文壇で其の比を見ないだらう。彼の作品に描かれた友人は皆其の生活から彼によつて苛烈味だけを摘出されて、一種畸形な諷、諧的存在に化せられた。葛西は此の人生で苛烈味のほか何物も求めようとしなかつたと云つてよい。彼の生活を宙にぶら下つた重い石に譬へた友人があつたが、實際此の人生の何物も、其のあらゆる美しさも、愛らしさも、尊さも、竟に彼の心を妥協的な安易さに引入れる事が出來なかつた。冷徹氷の如き觀照の眼を、如何なる場合にも彼は決して曇らせた事が無かつた。

　詩人と云ふ言葉はいろ／＼の意味に解釋されるが、若し人生を通じて自然の永遠の相を求むる者が詩人であるとすれば、彼は正しく其の意味での詩人だつた。彼が好んで求めた苛烈味も、畢竟此の醜い、苦悶多き人生の中で見出される一個の「詩」だつた。多くの讀者に面を反けしめる程、餘りに非通俗的、非人情的な詩だつた。

　『一つの作を書いて、更に氣持が深まらなければ、どうしても僕は次の作を書く氣にならない。』

　彼は屢々さう云つて居たし、又其の言葉通りを實行した勇者だつた。あれ程の作家的才能と名聲とを持ちながら、彼の生活が常に貧困に脅かされて居たのも、全く其の爲めである。葛西の寡作は單に文章や結構の爲めの苦心から筆が遲れる作家たちの其れとは全く類を異にして居る。作品よりも寧ろ人間的精進の爲めに、彼、葛西善藏は實に骨を削り、肉を殺ぐの苦心を續けた、藝術の殉教者だつた。

　作品を產む爲めに何の下調や道具立を要しなかつた人――さう云ふ意味でも彼の存在は日本の小説壇で際立つて居る。二つの椅子と人物とを與へれば其れだけでドラマを書いてみせるとストリンドベルヒは云つたさうだが、小説作家としての葛西善藏の立場が其れである。薄汚ない下宿の四疊半で、窓の下の五月の日光に搖ぐ椎の若葉を眺めただけで、彼には立派な作品が書けた。

　作家としての彼の態度で、何よりも驚嘆すべきは其の強い自信と、不屈の精進だつた。

　『信じて殪るゝ者に悔無し。』彼はよくかう云つた。實際彼の一生は信じて戰ひ、信じて殪れた、聊かも悔無かりし立派な生涯だつた。

　僕は彼の作品よりも、寧ろ其の生活態度の上でいろ／＼感化を受けた。勿論僕の生活と彼の生活とは、內容も、方向も異つて居るので、彼の通りの生活態度を執る事は不可能だが、彼の特異な、悲愴な生活から、無言の內に反省や激勵を與へられたことは少くない。其の意味で僕にとつて得難い友人であつた。そして今にして顧ると、彼の醉態も、病苦も、死も、彼の如き生活觀を持つた者にとつては必至的の運命であつた氣がする。

昭和四年十月

谷崎精二

哀しき父

一

彼はまたいつとなくだん／＼と場末へ追ひ込まれてゐた。

四月の末であつた。空にはもや／＼と靄のやうな雲がつまつて、日光がチカ／＼櫻の青葉に降りそゝいで、雀の子がチュク／＼啼きくさつてゐた。どこかで朝から晩まで地形ならしのヤートコセが始まつてゐた……

彼は疲れて、青い顏をして、眼色は病んだ獸のやうに鈍く光つてゐる。不眠の夜が續く。ぢつとしてゐても動悸がひどく感じられて、鎭めようとすると、尙ほ襲はれたやうに激しくなつて行くのであつた。

今度の下宿は、小官吏の後家さんでもあらうと思はれる四十五六の上さんが、ゐなか者の女中相手につましくやつてゐるのであつた。樹木の多い場末の、軒の低い平家建の薄暗くじめじめした小さな家であつた。彼の所有物と云つては、夜具と、机と、何にもはひつてない桐の小簞笥だけである。桐の小簞笥だけが、彼の永い貧乏な生活の間に賣殘された、たつたひとつの哀しい思ひ出の物なのであつた。

彼は剝げた一閑張の小机を、竹垣ごしに狹い通りに向いた窓際に据ゑた。その低い、朽つて白く黴の生えた窓庇とすれ／＼に、育ちのわるい梧桐がひよろ／＼と植つてゐる。そして黑い毛蟲がひとつ、每日その幹をはひ下りたり、まだ延び切らない葉裏を步いたりしてゐるのであつたが、孤獨な引込み勝な彼はいつかその毛蟲に注意させられるやうになつてゐた。そして常にこまかい物事に對しても、ある宿命的な暗示をおもふことに慣らされて居る彼には、その毛蟲の動靜で自然と天候の變化が豫想されるやうにも思はれて行くのであつた。

孤獨な彼の生活はどこへ行つても變りなく、淋しく、なやましくあつた。そしてまた彼はひとりの哀しき父なのであつた。哀しき父――彼は斯う自分を呼んでゐた。

彼にはこれから入梅へかけての間が、一年中での一番堪へ難い季節になつてゐた。彼は此頃の氣候の壓迫を輕くしよう爲めに、例年のやうに、午後からそこらを出步くことにしようと思つた。けれども、それを續ける事はつらいことでもある。カーキ色の兵隊を載せた板橋火藥庫の汚ない自動車が、ガタ／＼と亂暴な音を立てて續いて來るのに會ふこともあつた、吊臺の中の病人の延びた頭髮が眼に入ることもあつた。欅の若葉をそよがす軟かい風、輝く空氣の波、ほしいまゝな小鳥の啼聲……しかし彼は、それらのものに慄へあがり、めまひを感じ、身うちをうづかせられる苦しさよりも、尙堪へ難く思はれることは町で金魚を見ねばならぬことであつた。

金魚と子供とは、いつか彼には離して考へることの出來ないものになつてゐた。

二

彼はまだ若いのであつた。けれども彼の子供は四つになつてゐるのである。そして遠い彼の鄕里に、彼の年よつたひとりの母に護られて成長してゐるのであつた。

彼等は――彼と、子と、子の母との三人で――

昨年の夏前までは郊外に小さな家を持つていつしよに棲んでゐたのである。世の中からまつたく隱遁したやうな、貧しい、しかし靜かな生活であつた。子供は丁度ラシヤの靴をはいてチヨコ〳〵と駈け歩くやうになつてゐたが、孤獨な詩人のためには唯一の友であり兄弟であつた。

　彼等は緣日で買つて來た粗末な胡弓をひいたり、鉛筆で繪を描いたり、鬼ごつこなぞして遊んだ。棄てられた小犬と、數匹の金魚と龜の子も飼つてゐた。そして彼等の樂しい日課のひとつとして、晴れた日の午後には子供の手をひいて、小犬をつれて、そこらの田圃の溝に餌をとりに行くことになつてゐた。けれども丁度彼等のさうした生活も、迫りに迫つて來てゐたのであつた。從順な細君の溜息がだん〳〵と力無く、深くなつて行つた。ながく掃除を怠つてゐた庭には草が延び放題に延びてゐた。

　金魚は龜の子といつしよに、白い洗面器に入れられて緣側に出されてあつた。彼等の運命は一日々々と迫つて來てゐるのであつたが、子供の爲めの日課はやはり續けられてゐた。それが偶ま訪ねて來たいたづらな酒飲みの友達が、彼等の知らぬ間に龜の子を庭の草なかに放してなくなしてしまつた。彼は云ひやうのない憂鬱な溜息を感じた。

「はア、カメない、カメノコない……」子供も幾日もそれを忘れなかつた。それからして彼等の日課も自然と廢せられることになり、間もなく、彼等の哀しき離散の日が來てゐたのであつた――

三

　彼は氣の進まない自分を強ひて、午後の散歩を續けてゐる。そしていつか、彼は彼の散歩する範圍内では、どこのランプ屋では金魚を置いてる、置いてないかが大概わかるやうになつてゐた。彼は都會から、生活から、朋友から、あらゆる色彩、あらゆる音樂、その種のすべてから執拗に自己を封じて、ぢつと自分の小さな世界に默想してるやうな冷たい暗い詩人なのであつた。それが、金魚を見ることは、彼の小さな世界へ燒鏝をさし入れるものであらねばならない。彼は金魚を見ることを恐れた。そして彼はなるべく金魚の見えない通りを〳〵と避けて歩くのであつたが、うつかりして、立止つて、ガラスの箱なんかにしな〳〵と泳いでゐるのに見入つてゐることがあつた。そして氣がついて、日のカン〳〵照つた午後の往來を、泪を呑んで歩いてゐるのであつた。けれども、彼もだんだんとそれに慣れては行つた。が、彼は今年になつてはじめて、どこかの場末の町の木蔭に荷を下ろして休んでゐた金魚賣を見た時の、その最初の感情を忘れることが出來ない……

四

　いつか、梅雨前のじめ〳〵した、そして窒息させるやうに氣紛れに照りつけるやうな、日が來てゐた。

　彼は此頃午後からきまつたやうに出る不快な熱の爲めに、終日閉ぢこもつて、堪へ難い氣分の腐蝕と不安になやまされてゐる。寢たり起きたりして、喘ぐやうな一日々々を送つてゐるのであつた。

　陰氣な、晝も夜も笑ひ聲ひとつ聞えないやうな家である。が、濕つぽい匂ひの沁みこんだ同じやうに汚ならしい六つ七つの室は、みんなふさがつてゐた。おとなしい貧乏な學生達と、彼の隣室には、若い夫婦者と、むかひ合つた室には無職の豫備士官がはひつてゐた。そしていつも執拗に子供のことや、暗い瞑想に耽つてぐづぐづと日を送つてゐる彼には、最初この家の陰

氣で靜かなのが却つて氣安く感じられたのであつたが、それもだん／＼と暗い、なやましい壓迫に變つてゐるのであつた。

豫備士官は三十二三の、北國から出て來たばかりの人であつた。終日まつたく日のさゝない暗い室にとぢこもつてゐて、何をしてるのとも想像がつかなかつた。大きな不恰好な髮の薄い頭をして、訛音のひどい言葉でブツ／＼と女中に何か云つてることもあつた。時々汚ない服裝の、ひとのおかみさんとも見える若い女が訪ねて來ることがあつたが、それが近所の安淫賣だつたと云ふことが、後になつて無口の女中から漏らされてゐた。

それがつい――まだ幾日も經つてゐないのである。ある朝女中が聲をひそめて「腸がねぢれたんださうですよ……」と軍人の三四日床に就き切りであることを話してゐた。それから一兩日も經つた夕方、吊臺が玄關前につけられて、そして病院にかつぎこまれて、手術をして、丁度八日目に死んだのである。腸の轉撚と、惡性の梅毒に脊髓をもおかされてゐたのであつた。

また隣室の若い細君は、力無く見ひらいた眼の美しい、透き通るやうな青白い額をして、彼がこの家へ來てから殆んど起きてゐた日がないやうであつた。細君孝行な若い勤め人の夫は、朝早く出て晩遲く歸るのであつたが、朝晩に何かといたはつてゐるのが手に取るやうに聞えるのであつた。細君の輕い咳音もまじつて、コソコソと一晩中語りあかしてゐるやうなこともあつた。

彼は此頃の自分の健康と思ひ合はして、拂ひ退けやうのない不吉な不安なかんがへになやまされてゐる。病人の絕えない家のやうにも思はれるのであつた。裏は低い崖になつて、その上が墓地の藪になつてゐるが、この家の地所もやはり寺の所有なのであつた。ワクの朽つた赤土の崖下の蓋のない掘井戸から、ガタ／＼とポンプで汲み揚げられるやうになつてゐて、その上が寺の湯殿になつてゐた。若い女の笑ひ聲なども漏れてゐることがあつた。そして崖上の暗い藪におつかぶされてゐるこの家では、もう、いやに目まぐるしく手足を動かして襲つて來る斑らの黑い大きな藪蚊が、朝夕にふえて行くのであつた。

彼は飮みつけない強い酒を呷つて、それでやうやう不定な睡眠をとることにしてゐる。そして病的に過敏になつた彼の神經は、そこらを嗅ぎ廻るやうに聞き働いて、女中を通して、自分のこの室にも病人がゐて、それが彼のはひる少し前に不治の身體になつて歸鄉したのだと云ふことや、こゝの主人も丁度昨年の今頃亡くなつたのだと云ふことなど、斷片的にきゝ出し得たのであつた。

彼は每晚、いやな重苦しい夢になやまされた。

……彼の子供は裸體になつてゐた。ムク／＼と堅く肥え太つて、腹部が健康さうにゆるやかな線に波打つてゐる。そして彼にはいつか二三人の弟妹が出來てゐるのであつた。室は廣くあけ放してあつて、青々とした疊は涼しさうに見える。そこには子供の祖父も、祖母も弟妹もゐるのだが、みんなはゴロ／＼寢ころんでゐる。唯彼ひとりが、ムク／＼と堅く肥え太つて、ゆるやかに張つたお腹を突出して、非常に威張つた姿勢をして、手を振つて大股に室の中を步いてゐるのであつた。

ふと、ペラ／＼な黑紋附を着た若い男がはひつて來て、坐つて何か云つてるやうであつた。すると子供は步くのを止めて、ちよつと突立つて、

「さうか。それではお前はおれの抱へ醫者にな

るか――一斯う、萬事を呑込んでゐるやうな鷹揚な態度で云ふのであつた。それを傍から見てゐた父は、わが子のその態度やものの云ひぶりに、覺えず微笑させられたのであつた。

それが夢なのである。彼には幾日かその夢の場の印象がはつきりと思ひ浮べられてゐた。それは非常に大きなユーモアのやうにも考へられるのである。また子供と云ふものの如何にさかんなる矜りに生きて居るかと云ふことを思はしめるのである。それからまた、辛うじて醫藥によつて支へられてゐた彼の父の三十幾年と云ふ短い生涯から彼自身の健康狀態からかんがへて、子供の未來に、暗い運命の陰影を豫想しないわけに行かないのであつた。

五

久しぶりで郷里の母から手紙があつた。母は彼女の孫をつれて、ひと月餘り山の溫泉に行つて、歸つて來たばかりのところなのである。

彼女は彼女の一粒の子と、一粒の孫とを保護する爲めにこの世に生れて來、活きてゐるやうな女であつた。そして月に幾度となく彼女の不幸な孫の消息について、こまごまと書き送りもし、またわが子の我まゝな手紙を讀むことに、慰藉を感じてゐた。

彼等の行つてゐた溫泉は、汽車から下りて、谷あひの川に沿うて五六里も馬車に搖られて山にはひるのであつた。溫泉の近くには、彼女の信仰してゐる古い山寺があつて、そこの蓴菜の生える池の渚に端錢をうかべて、その沈み工合によつて今年の作柄や運勢が占はれると云ふことが、その地方では一般に信じられてゐた。彼女もまた何十年となく、毎年今頃に參詣することにしてゐて、その占ひを信じてゐるのであつた。

母の手紙では今年の占ひが思はしくないので氣がかりだと云ふこと、互ひに氣をつけるやうにせねばならぬと云ふこと、孫のたいへん元氣であること、そして都合がついたら孫の洋服をひとつ送るやうにと云ふのであつた。孫は洋服を着たいと云つてきかない、そしてお父さんはいやだ、何にも送つてくれないからいやだと云ふのであつた。彼女はそんなことは云ふものでないと孫を叱つてゐる。そして靴と靴下だけは買つてやつたが、洋服は都合して送るやうにと云ふのであつた。

それは朝からのひどい雨の日であつた。彼は寢衣の乾かしやうのないのに困つて、ぼんやりと窓外を眺めて居た。梧桐の毛蟲はもう餘程大きくなつてゐるのだが、こんな日にはどこかに隱れてゐて姿を見せない。彼は早くこの不吉な家を出て海岸へでも行つて靜養しようと、金の工面をかんがへてゐたのであつた。

疲れた彼の胸には、母の手紙は重い響であつた。彼は兎に角小箪笥を賣つて、洋服を送つてやることにした。そして、

「……どうか、そんなことを云はさないやうにして下さい。私はあれをたいへんえらい人間にしようと思つて居るのです。私はいろいろだめなのです……。どうか卑しいことは云はさないやうにして下さい。卑しい心を起させないやうにして下さい。身體さへ丈夫であれば、今のうちは何もいらないのです……」

彼は子供がいつの間にそんなことを云ふまでになつたかを信じられないやうな、また怖ろしいやうな氣持で母への返事を書いた。そして彼がこの正月に苦しい間から書物など賣拂つて送つてやつた、毛絲の足袋や、マントや、玩具の自動車や、繪本や、霜やけの藥などを子供はどんなに悅んで「これもお父さんから、これもお父さんから」と云つて近所の人達に並べて見

せたと云ふことや、彼の手紙をお父さんからの手紙と云つて持ち歩くと云ふことなどを思ひ合はして、別れてわづか一年足らずに過ぎない子供の現在を想像することの困難を感ずるのであつた。

霧のやうな小雨が都會をかなしく降りこめて居る。彼は夜遲くなつて、疲れて、草の衾にも安息をおもふ旅人のやる瀨ない氣持になつて、電車を下りて暗い場末の下宿へ歸るのであつた。

彼は海岸行の金をつくる爲めに、圖書館通ひを始めてゐる……

彼の胸にも霧のやうな冷たい悲哀が滿ち溢れてゐる。執着と云ふことの際限もないと云ふこと、世の中にはいかに氣に入らぬことの多いかと云ふこと、暗い宿命の影のやうに何處まで避けてもつき纏うて來る生活と云ふこと、また大きな黴菌のやうに彼の心に喰入らうとし、もう喰入つてゐる子供と云ふこと、さう云ふことどもが、流れる霧のやうに、冷たい悲哀を彼の疲れた胸に吹きこむのであつた。彼は幾度か子供の許に歸らうと、心が動いた。彼は最も高い貴族の心を持つて、最も元始の生活を送つて、眞實なる子供の友となり、兄弟となり、教育者となりたいとも思ふのであつた。

けれども偉大なる子は、決して直接の父を要しないであらう。彼は寧ろどこまでも自分の道を求めて、追うて、やがて斃るべきである。そしてまた彼の子供もやがては彼の年代に達するであらう、さうして父の死から澤山の眞實を學び得るであらう――

六

苦しい圖書館通ひが四五日も續いた、その朝であつた。彼はいつものやうに、曉方過ぎからうと／＼と重苦しい眠りにはひつて、十時少し前に氣色のわるい寢床を出たのであつた。

日が、燻べられたやうな色の雨戸の隙間から流れ入つて、室の中はむん／＼してゐた。彼は雨戸を開けて、ビショ／＼の寢衣を窓庇の釘に下げて、それから洗面器を出さうとして押入の唐紙を開けた。見なれた洗面器の中のうがひのコップや、石鹸箱や、齒磨の袋が目に入つた。

と、彼は輕く咳入つた、フラ／＼となつた、しまつた！　斯う思つた時には、もうそれが彼の咽喉まで押し寄せてゐた――

熱は三十七八度の邊を昇降してゐる。堪へ難いことではない。彼の精神は却つて安靜を感じてゐる。

―自分もこれでライフの洗禮も濟んだ、これからはすこしおとなになるだらう……―

孤獨な彼は、氣まゝに寢たり起きたりしてゐる。そしていつか、育ちのわるい梧桐の葉も延び切つて、黑い毛蟲も見えなくなつてゐる。彼の使つた氷嚢はカラ／＼になつて壁にかゝつてゐる。窓際の小机の上には、數匹の金魚がガラスの鉢にしな／＼泳いでゐる。

彼は靜かに詩作を續けようとしてゐる。

（大正元年八月十七日）

惡魔

みんなは生甲斐のありさうな顔をしてゐる。あんなに澤山うぢや／＼してゐる男や女やが、みんながみんなあんな顔をして動き廻つてゐる。殊に自分等の仲間達と來ては――と、良吉には、それがどうしても解らないのである。

良吉にはつまらなくて、醜くて、憂鬱で仕方がないのである。電車の窓から、何をくよ／＼の濠端の柳を見て通り給へだ。その柳の黄色く干乾びた葉が、此頃のうそ寒い風に、何の風情もなく、つまらなく、吹かれて、散つて行く。

そんな風に人間と云ふものが、活物と云ふものが、彼の疲れたまなこに映るであらう。彼は彼の仲間達と、ある儲からない雜誌をやつて居る。その校正で毎月末には一日か二日、下町の印刷所へ出かけて行く。ところがその印刷所のヘンな汚い二階が、ヘンに彼に氣に入つて、どうやらその日が心待ちに待たれるやうになつてゐたのである。

窓には鷄部屋のやうに金網が張られてある。ガラスは糊でも塗つたやうに埃りで汚れて、曇つて居る。彼はその窓から濁つた夕暮が、無性氣に、ものうげに、押寄せて來る往來を見下ろして居る。板仕切り一重の隣室ではガタンバタンと絶え間なく、機械の音が埃りを震はして居る。そこの赤い電燈の下では、少年の活字ひろひが、調子おもしろう永久の徒勞を、今日も、昨日も、明日も繰返し／＼うたひ續けて居ることであらう。

ふと、さうした或る夕暮、

――こゝへ來て、からして居ると、俺もちつとは生甲斐がありさうかな――と良吉はかんがへたのである。いろ／＼なものが、否いろいろな人間が往來を通るのである。年寄も若い者も子供もだよ――そのうちには一種の綽々たる玄妙な力？　が、腰附歩き振りをおそろしく餘裕づけて見せてゐる成熟し切つた盛裝の女も、干乾びた立ん坊も、僧侶も、不具者も、酒を飲んで赤い顔した奴も、貧相に鼻水を垂れこぼして行く奴も混つて居る。それを、さうした窓上からぼかアんと見下ろして居ると云ふと、良吉のたましひは何時かだん／＼と鬱いで來て、つまらなくなつて來て、此の世の中が果敢なまれて來て、彼が惡魔の舌――と稱して居る一種の氣持が、言ひ知れぬ乾きに呻き行くのであつた。

良吉はつい斯んな空想に耽り勝になる。――それは、そこには山のやうな大濤が、捲いて、崩れて、黒い雲がつぶてのやうに吹き飛んで居る。そんな大洋の上でも好い。また、まつたく人煙なんと云ふもののない廣い／＼原野でもよし、人間の足跡を印したことのない沙漠でもよい。無論俺は、人間と云ふものをテンデ見たこともなければ想像することも出來なかつた、この宇宙間にたつた一人の最初の生存者であつたと假定するんだよ。ところが俺が、ふいと、今云つたやうな場所で、この窓下の往來を歩いて居る一人のどいつかに會つたとする。と、俺は屹度おどかされはしないかな？　何んでもかんでも彼奴の云ふことを信じはしないだらうかな？　彼奴は眞面目臭つて、お前は人間と云ふものだ、人間には死と云ふものがある、だからお前も死なにやならん。それも今夜、星が三つ顔を出した時刻を合圖に、お前と云ふものは死んで、俺のやうな姿になるんだぞ。俺の形相を見い！

こはくはないか？　斯うおどかされたとしたら、俺はまアどんな態度に出たであらう……が何は兎まれ――まア何たるつまらなさ、何たる醜怪さであらう！　どうしてまた此の窓下を歩いて居る一人々々が、互ひ〳〵にぶつかり合つて、砕けて、粉になつて、吹き飛んでしまはないのであらう――

浮世がまゝになるものだつたら……と良吉は輕く口笛を吹くであらう。彼の胸は、憂鬱で、張り裂けるばかり膨れて居るであらう。それは何と限つたことはないのである。曾て見た山や川や海や動物や、またそれとなく耳に殘つたさまざまの音や、知識や、無論いろ〳〵な關係から見知り合ひちかづき合つた人間や、空間も距離も、いろんな存在――そんなものやが悉く融け合つて、醱酵して、憂鬱な有毒な瓦斯のやうに彼の胸につまつて來るのである。彼はそれを、どうすることが得出來たであらう――

頽廢の發作は惡夢のやうに、意地わるく、襲ひつかまへる。惡魔の舌は、ひとりでに、乾きを覺えて來る。

彼はさうして、幾日幾晩かをほつき歩いてゐなければならない。どろ〳〵な酒、苦い酒。安賣りな過分なしこあの情けは、鰐の肝臟のやうにしつこく舌に殘つてゐる。けれども彼の惡魔の舌は潤されはしなかつた。彼は小僧のくせに、いやに取澄した、生甲斐のありさうな顏をしてゐる仲間達の幾人とも飲み歩いた。靈魂と云ふものを乾燥させると豚の膀胱のやうに、氷嚢の代用が出來るとでも信じて居りさうな人間も居る。また、ラヴとか靈魂とか云ふものが全く相合して渾一のものになる、と云ふことは考へられない、だからさう云ふ問題に對しては永久に不離不即の平行を續けてゐたい、斯う云つて、ながい、さびしい聖者のやうな生活を續けて居る人間も居る。また自分と云ふものを燒いた海月殼かなぞのやうに、ポロ〳〵な、脆いものだとして無意識にいたはりかばつて居る人間も居る。また堅固な殼に籠つてゐて、時々ペロリペロリと赤い舌を出して營養物を攝取するやうに出來て居る人間も居る。また徳川時代の首斬役人が、多年の手練で罪人の着物に血のつかないやうに首を打落し、その着物を剝いで、その晩のうちに女郎買ひに行くその手廻しの好さ加減、と云つたやうなことに無上の藝術味と生甲斐を感じて居るやうな人間も居る。がまア、そんなことはどうあつても好い。唯に何に彼は苦しうて堪らないのである。憂鬱で憂鬱で仕方がないのである。

ところがそれがだん〳〵とさうなつて、さうした秋の一日であつた。その日の良吉は日中に見る活動寫眞の絵看板のやうに、い、しらふで、コケで、乾いた感どさで、ほつたらかされた氣持であつた。彼は朝からK――と仲間の二階で校正をやつてゐたが、この日は少しも生甲斐のない氣持の日であつた。終日窓から見下ろさうと云ふ氣にもなれずに萎れてしまつた。何かしらいら〳〵と脅迫されて居るのである。つゝかれて居るのである。何者が俺を虐げてゐるんだらう……？　あの煉瓦の建物かな？　アスファルトの道路かな？　電車かな？　自動車かな？　着飾つた生甲斐のありさうな顏をした人間どもかな？　が抑も全體生活と云ふものかな？

何にしても俺は虐げられて居るに違ひない。俺はあの建物や道路を見ると、慟哭したくなる。おゝ大地なる母よ！……俺は地べたに顏をうづめて慟哭したくなる。俺はたゞ〳〵母がなつかしい、それがまた悲しい……

彼は遠い〳〵、遠いむかしに、自分と母なる大地とが存在して、睦み合つてゐた有様を、夢のやうになつかしく想像することが出來る。その時分には彼こそは一切の王様であり、唯一人の寵兒であり、勇氣と慈悲の權化であつた——

「けれどもが…」と、彼は朱を入れた校正刷を卓子の上にたゝきつけて歎息するであらう。そしてK——のいつも、酒精中毒者のやうにワナワナ震へてゐる蜘蛛のやうに毛むしやらの、長い、黑い、細い手首に見入るであらう。この兎のやうに臆病な弱い感情と、交尾期に入つた牡鹿のやうな單直な矜りと、陶器のやうなあぶなかしい肉體とを持つた、愛すべき、好い子の、この男も何者かに虐げられて居るに違ひない。あのブル〳〵震へる蜘蛛のやうな細い腕で、必死になつて、溢れ來る洪水を堰き止めようと、夢中になつて堤防を塗りたくなつて居るのである。良吉はK——と話して居ると、譯もなく涙ぐまれて來る。正直になる。そんなことは、この世の中での相互の不幸であらねばならない。

「君も學校にはもう六七年から居るんだね……」

ふいと話が、平生餘りしない話題に移つてゐた。良吉はかんがへたくない厭な思ひと、センチメンタルな氣持になりかけるのに抵抗しようとして、「あの時分」と云ふことが言ひ出された時に、ちよつと斯う相手に厭がらせを云つて見たのであつたが、

「しかし君はどうしても學校を出るやうにし給へ。好い子にならなければいけないよ。俺達のみんながみんな、ドン・キホーテになつても困る。尤も僕はあの時分から駄目だつたんだ。あの時分から僕の病氣はだん〳〵ひどくなりかけてゐたのだ。僕は教室の後ろの隅つこに小さくなつて、ごちや〳〵と竝んだみんなの頭ばかり見てゐたのだ。そしていろ〳〵な圓い、角い、尖んがつた、壓しへされた、旋毛のグイと後ろに喰附いたそんなやうないろんな頭を觀てゐると、俺は譯もなくつく〳〵と憂鬱になつて來て、此の世の中が果敢なまれて來て苦しくつて堪らなかつたのだ。けれどもその時分はまだ〳〵詩人だつた。詩が幾つも〳〵も出來た時分だ。俺のノートには講義と云ふものは一行も書いてなかつた。そんないろんな恰好の頭を後ろから眺めて居ると、詩が造作もなく産れて來て、僕のノートはそれでうづまつて行つた。そしてその時分僕は生物學とか進化論とか云つたものに興味を持つて、人間を犬や猫や山羊や鳥類などにたとへることが好きで、それでそんなやうな題の詩ばつかり作つてゐた。僕は何にも學問をしずに退つてしまつた。少しばかり覺えたのもみんな忘れてゐる。たつた、O! breaking heart will not break. このテニソンの句だけが殘つてゐる。あの眞白な白髮頭の先生が——おゝ破るべく、破り難き胸よ——斯う譯をつけて呉れた。それが僕の全體の學問であつた、おゝ破るべく破り難き胸よ……さうしてあの憂鬱な騷々しい動物園から放たれてまア幸福だ、と思つたのが間違ひ! そこにはアスファルトの道路と、煉瓦の建物と、生活と、人間とが溢れてゐた。それが悉く自分には適しない物ばかりなのだ。O! breaking heart, will not break. これが今でも僕の全體である。俺もさて、と考へ廻して見たところでどうすることが出來よう——」

良吉は煙脂で染つた牙のやうな齒をむいて、しやべり立ててゐたが、やがてがつかりして了つた。……

「オイ、K——少し飲まうか。最も謙遜に濟まさうぢやないか。

二人は印刷所を出て、何かしら物足らぬ氣な顏をして歩いてゐたが、良吉から斯ういつもの調子で切出した。

「いや、僕は止さう。君だけやるならやり給へ。斯う云ふとまた君の反感を買ふだらうが、僕はもうこれからは君とは飲むまいと思つてゐるんだ、それは藝術的氣分の上から――。君と飲むと苦しくなつて堪らない。どこまでも〳〵まつはりついて來るんで僕までが變な氣になつてしまふ。屹度あと二三日は憂鬱に閉される。僕はまア止さう」

K――は如何にも言ひにくさうに、途切れ途切れに云ひ切つたが、彼の表情は如何にも賴りなげで、「まア君、誘惑して吳れるなよ」とでも嘆願するやうに見える――

「まアいゝよ〳〵。謙遜に濟ませアいゝよ」

良吉は無表情に口を噤んで、前にたつて步いた。

冷え〴〵した薄暗はもう押寄せてゐた。瓦斯の光りは、透明な霧のやうにあたりを隈取つてゐる。電燈の球は堅い蕾のやうに、未熟な少女のやうに、果實のやうに、光澤なく點つてゐる。文明の怪物や過剩の人間は、ブウーッブウーッ吠えたり、ガン〳〵鳴つたり、軋つたり、衣ずれの音をさせたりして通つてゐる。そしてそれがまた悉く無用氣で、無價値で、親しみがなかつた。

二人はアスファルトの一等道路から、細い正確な溝のやうな路次へ折れて、とある日本酒のホールのドアを開けて入つた。

「空模樣を見ずに入つちやつた……」

と、良吉はそんなことを思ひついて、最初の盃に口をつけた。

それから二人は飲んで、感激し合つて、また飲んで、また感激し合つて、さうして〳〵續けて行つた。無論二人は醉つて來た。

そこにはK――の牡鹿のやうにゼントルな、そしてあらい睫毛の眼、クラシカルな、しかし男らしい顏の輪郭、彫刻品のやうに整つた鼻、短く刈込んだ鼻下の薄髭、それらとは不似合に因循氣に、ルーズに、多情的に締りなげの脣、すべてが酒と感激とに燃えて、美しく輝いて居る。が良吉の顏色は反對に、だん〳〵と蒼醒めて沈鬱になつて、眼ばかりが異樣な、殺氣立つた氣味惡い光りに、赤く燃えてゐた。彼は黑く染つた牙のやうな齒をむき出して、唾を飛ばして、むちやくちやに喋舌り立てむちやくちやに仰飲つてゐる。……

「オイK――、K――君、僕はいつなん時でも君を泣かすことを知つて居る。ちやあんと僕は信じて居る。それには何の面倒なことはないのだ。斯うだ――俺はえらくならなければならない、如くに君もえらくならなければいけない　そしてそれを僕は眞實から祈つて居る。と云ふだけのことで僕はいつ何時でも君を泣かすことが出來るんだ。いゝか……

「ま、よし、よし。居士、わかつたよ。そんな話は今夜は止さう、大いに愉快にやらうぢやないか。O wine! wine!……」

オヽワイン！　ワイン！　と、K――は突然頓狂な聲で、サロメのヘロッド王氣取りで、蜘蛛のやうな腕を張り肩を怒らして叫んだので、良吉もニヤリと笑ひ出した。が同時に、この牡鹿を產んだあの河馬が、「さうぢやつたかの、アハヽヽ、さうぢやつたかの、アハヽヽ、」とビール看板のやうに太りこけた圖體を搖がして、自動車に乘りかけてゐたいつかの幻がフラフラと眼前にちらついて來た。で、「さう〳〵、その元氣のこと〳〵。だがね、それがまた君はどうして俺が刃物を磨ぐことが巧い、といふやうなことに就いてまで危惧を感じるんだ？　俺がそんなに危險に見えるかね？」

良吉はわざとらしく調子を落して、ぢつと意地悪な斜視を浴びせてゐたが、急にまたのしかゝるやうな調子になつて、

「オイ！ 見ろ、俺達の連中を見ろ、みんな駄目だぞ。彼等は永久に救はれる期がないのだ。だが君は、第一に、君の口癖の突貫の血祭り的に、あの相場と因業で膨れたビール腹へ突つかけなければいけない。元來貴樣は正直であつて牙と云ふものを持たない。唯角きりしけや持たない。がそれでも構はない、兎に角勇敢に突貫を試みなければいけない。それには第一に手近から、それから社會……それから世界となつて來なければいけない。それが順序だ。貴樣は幾つになつても好い子にならうと思つてゐるからいけないのだ。俺達は自分自身を食ひ盡して、初めて眞劍に他に鋒を向ける權利と强味が出來るのだ。滅びよ！ 新しく生きんだ。俺達は決して生活なんと云ふことを苦にしてはいけない。俺達がいよ〳〵食へなくなる、と、そこにより以上の生活の道がちやアんと開かれて待つて居るんだ。それが事實と云ふものだ、わかり切つた事なのだ。俺達はどん底に落込んで初めて最貴最高の生命を呼吸することが出來るのだ。それは決して空想と云ふものではない。眞理だ。信じて甦るゝ者には悔なし――聖書にも立派に言つてある。南無、信仰なくては叶ふまじ、俺達は一切を否定し一切を破壞してこそ初めて眞の絕對境に到達することが出來るのだ。そしてそこには夜と云ふもののない、太陽が雲母の如く降り濺いで居る、無邊無際涯の廣い廣い河原なんだ。そこには一本の草も一本の木も、一物の不純なものも生息して居らない。唯無量無數の燒爛れた石塊ばかりなんだ。そして選ばれたる俺達は、賽の河原の子供の如く、指を爛らし爪を剝がして、たゞ〳〵再生の一念にその石塊を積み重ね〳〵不斷の精進を續けなければならないのだ。が、待てよ……貴樣は泣いとるな？ 泣くな！ 泣くな！ 貴樣は無論靈魂を信じて居る人間なんだ。泣くことはいらない。さうだ、俺達の生活は斯くの如く無慘で、無味で、虐げられて居る。俺達は靈魂と藝術とを持つて居る種類の人間なんだ。俺達はその絕對を信じないではどうして一日だつて斯の生を續けて居られよう。弱き者よ、泣くな！ 泣くな！ 唯々禱れ！ 起て！ 起たなくてはいけない。君はもう暗示にかゝつて居るのだ。起て！ 起て！ 而して禱れ――おゝ主よ！ 神よ！ 元始の母よ！ 弱きわれ等を鞭韃し給へ！ 愚昧なる彼等を聰明ならしめ給へ！ 而して願はくはこの地上一切の滅びの美を見せしめ給へ！ ―

二人は聲を揚げて號泣した。そしていつまでもいつまでもすゝりあげて禱つた。

「しかしK――や、もういゝ。泣くな。僻れば それでいゝのだ。得難きわが道作れ、運命づけられたる友よ。運命はいつも悲しい。靈魂はいつも淋しい。そこに我等の藝術がある。俺は靈魂の平行を信じない。俺の靈魂は常に衝突し、交叉して、そして一層の深い永遠の孤獨に墜ちて行く。永遠の孤獨……それで結構々々、俺は忍路高島を唄はう。忍路高島は俺の少年の夢だ。俺は少年の夢を抱いて忍路高島を放浪したのだ。俺の胸は火であつた。けれども俺は凍え死なうとした。がもし俺があの當時に死んでゐて吳れたら……あゝ少年の夢よ！ 俺にも今では忍路高島も唄へない。俺には全く醜い歌しか唄へない……」

二百十日や、疫病神
鬼の子孫の、高利貸
暗アい、暗アい、腹へつた
行燈なめたら、舌やいた

良吉は指でテーブルをたゝいて、おどけた調

子で唄ひ出した。しやがれた、しかし落附いた聲であつた。眼には涙も乾いてゐた。

それから二人はそこのチビの女中達に近所のお汁粉を振舞つて、十二時過ぎて出たのであつた。が、それから後の事は二人ともはつきり覺えて居らなかつた。

K――は翌朝夜が明け放れてから、額にひどい傷をこしらへて、泥だらけになつて家へ歸つた。そして以來は嚴しく監禁を命ぜられて居る。

一いやK――!は屹度報いられるだらう、彼は救はれるに違ひない一斯んな事を云ひ續けて、餓死に瀕した野獸のやうにしやちこ張つて、ヘトヘトになつた良吉は、間もなく仲間達の醵金で遠い郷里の山の中へ歸されることになつた。仲間の連中達は、惡魔もあれで、永久にソロモン壺中のものかれ、と云つた噂をしてゐる。良吉から時々たよりが來る。

――俺の郷里を、そつくりこのまゝ、そつちへ持つて行きたい。氣の變になる奴がどんなに澤山出來るか見てやりたい。此間一度雪が降つた。がまだ、山も地べたも裸かで寒がつて居る。俺の山の葡萄は、支へ木にしがみついて、赤い枯葉を

K――のやうにブルブル震はして居る。雪よ降れ降れ、今に五尺も六尺も積るだろ。芝居の紙の雪ではないんだ、眞物なんだ。雪は俺達の遠い昔からの親友なんだ。山も地べたも、林檎も、葡萄も犬コロも俺達もそればつかし待つて居る。俺達は早く早く、一日も早くあの底に埋まりたい。永久に春がかへらなくも好い。かへつて來ても好い、がなんにしても一日も早く、ぢつと埋まつて息を殺して居られる身分になりたい。俺のからだは疲れたばかしぢや。だんだん元氣になつて來て居る。俺はたゞK――に會ひたい。誰にも會ひたくない。いづれまた……

山の小屋にて　良吉より

(大正元年十月)

姉

一

雷門の近くの店で、久一はボール紙の筒へ入つた煎餅と海苔を三帖程買つて、千住行きの電車に乗替へた。そしてある停留場で下りて、その會社の方角を訊き〳〵電車通りから右へ泥溝について細い通りを入つて行つたが、直きに町裏の空地へと出た、塵芥や石炭殻で埋立てた、そちこちにまだ以前の田圃や蘆の生えた水溜りなど殘つて居る、亂雜な殺風景な廣い空地であつた、その間に壓潰されたやうな細民長屋の一郭、建造中の赤く塗つた大きな瓦斯タンク——その上でカン〳〵鐵槌を揮つて鐵の欄を取附けてゐる音が、遠くまで響いてゐた。

とまた、その鐵槌の響くタンクの上の空に、幾羽かの鴉が群れ飛んでカア〳〵鳴いてゐるのが眺められた。それを越えてかなり遠くの北の空に、彼の訪ねる紡績會社の大きな高い煙筒が、黒い煙をもく〳〵と吐いてゐるのであつた。

「あの煙筒の下で、俺の姉も働かされてゐるのかな……」

彼は斯う思ひながら、石炭殻を敷いた細い路を下駄でサク〳〵と踏んで、外套のない身體を寒い北風に向けて歩いて行つたが、さう思つて見てると、そのもく〳〵と吹きあがつて來て、何かしら活きた物かのやうに風に逆つて吹き散らされてゐる煙までが、何となく恐ろしいものにも想ひやられて、眺められるのであつた。

そして彼は、タンクの周圍を圍んだ鐵線を張つた柵に添うたり、七リンへ——いづれ千住のステーションの構内からでも拾つて來たものらしい石炭やコークスを、ぶす〳〵燃やしてゐる細民長屋の軒下を通つたりして行つた。

會社の前の掘割にかゝつた長い、特別に狭く出來てるやうな氣持のされる橋——それが逃亡の警戒を示してでも居るやうな木橋を、彼は昂奮した氣持で渡つて行つた。橋向うには嚴重な鐵の門が聳え立つてゐた。その蔭に門衞の詰所があつた。

「七號室の杉田はつと云ふ女工に面會したいのですが……」

久一はその前に立つて、おど〳〵した辱しめられた氣持で云つた。

二人ゐた中の、一人の制服を着た胡麻鹽頭の男は、女工への面會と聞いて、久一の風體をじろ〳〵覗いては、住所姓名職業年齢まで一々訊いては書き留めた。最後に女工との關係を問うた。

「……姉です」と、久一は一寸の躊躇の後、相手の疑り深い眼に視入りながら云つた。

「何ですと？」

「私の實の姉なんですがね……」

「あさう、では宜しい。七號室は夜勤に當つてるから丁度休んで居る、多分寢てるだらうが……」

門衞は斯う云つて、面會許可證と云つた木札を渡しながら、横柄な態度で女工の寄宿舍の方角ををしへた。

機械の音のする木造の大きな建物と、高い煉瓦塀との間の砂利路をかなり奥まで來た處に、また門番の詰所があつた。彼はそこの番人に許可證を渡して、また姉の名を云つて、詰所とは板で仕切られた田舎のステーションの待合室

めいた小さな室で、姉の出て來るのを待つてゐた。

二

ほかに面會人のゐない、火の氣のない火鉢一つ置いたそこの腰掛に坐つて、彼はそは〳〵した落附かない氣持を、煙草に紛らしてゐた。

それが實に、思ひがけなく、いつまた會へることもあるまいと思つてゐた姉に、十年振りで會へるのだと云ふ懷しさの思ひや、またこゝまで零落した姉を見るに堪へない氣の毒な思ひや、また何となく芝居めいた光景の客觀される、間の惡いやうな氣持でもあつたのだ。

面會室と寄宿舍とは、三四間しか離れてなかつた。彼は窓ガラス越しに、そこから出て來る姉の慘めな姿がいろ〳〵と想像されて、寄宿舍の玄關から廊下へと、制し切れない焦躁の眼を斷えずひかれてゐた。

ふと、玄關上の露臺へ、田舍の娘々した服裝の顏が三つ四つ現れて、久一の方を見下ろして何か云つてるのか、彼の眼に映つて來た。いづれも十五六から二十までの若い娘達で、田舍臭い黒い手織縞の着物の下に、赤い半襟や袖口やを覗かせてゐた。そしてまたその顏なども、都會の工場で虐げられて居る女工と云つた風ではなく、またそれ程の年數も經つてゐないのか、まだいづれも田舍の野良で働いてゐる娘達のやうな、赤く肥えた頬をしてゐた。

やがて娘達の方でも、久一がぢつと彼女等の方へ注視を向けてゐることに氣がつくと、態とらしく淺草の空の方を指さしたりして、笑つたり巫山戯たりし始めた。

「皆な鄕里の方の娘達だな……」と、彼は思つた。彼もこの何年か鄕里の娘達に接する機會はなかつたのだが、その特徴は、彼にも親しい氣持で看取することが出來たのであつた。

「併し皆なあんなに面白さうに、無邪氣な樣子をして居るぞ。あれでは勞働と云つても、夜業と云つても田舍で野良仕事に出ると較べて、そんなに辛いと思ふことなんかあるまいな。何と云つても若い娘達のことだから……」

彼は、——杉田はつの面會人と云つてどんな男か知ら、——弟だと云ふが言葉の一つも投げてやらうかと云つたやうな娘達の巫山戯た眼と、ちよい〳〵視線を交へながら、若い女工の寄宿舍生活と云ふものをいろ〳〵と想像してゐた。

——がそれにしても姉は幾つになるのかな？ 自分とは八つか九つ違ふ筈だから、三十四五——三十四五と云へばもう婆さんなんだ、それがあゝした若い娘達と一緒になつて、笑つたり巫山戯たりして居られるのかな、何人かの子供等とも離れて——

ふとそれが如何にも皮肉な不快な對照のやうに考へられて來て、暗い氣持になつた。そして彼がまだ十二三の少年だつた時分、今の亭主の杉田に誘惑されて突走つた姉を、如何にも愚かな淫らな女だと思ひ詰めたその時分の氣持などが、新しく想ひ出されたりした。

——やつぱしあの通りの女で居るのかな。人間の性質と云ふものはそんなに變るもんでは無ささうだから、やつぱし今でも、いゝ年輩をして、ふは〳〵と、若い娘達と笑ひ巫山戯たり、惡智慧を附けたりして居るんでは無いかな……

で、姉はやつぱしさうした女だつた、と云ふ氣がされて來て、彼は今日訪れて來たことを悔いたいやうな氣持にもなりかけた。

やがて黒つぽい袴を穿いた、太つた、庇髮の女工監督に送られて、玄關の踏石に麻裏草履を直してゐる、縞目も分らぬやうな袷に同じやうな袖無しを重ねた小柄な女が、櫛卷の髮を亂した窶れた青い顏に、卑下したやうな微笑を浮

べて、ちよこ〳〵と小走りに歩いて來た。——姉であつた。彼はその瞬間に、打挫かれた、熱いものが胸に込み上げて來るのを感じて、眼を反らして、火の消えた卷煙草を無意識のやうにすぱすぱと吸ひ續けた。

「まア〳〵好く……」

斯う云つて入つて來た姉の眼にも、淚がにじんでゐた。

二人は暫く言葉も無く、互ひに視線を交はすのも極りの惡いやうな思ひをしながら、並んで坐つて居たが、姉の窶れた、慘めに變つた姿を見ては、久一も今まで姉に向けてゐた厭惡の慘酷だつたことが、恥ぢられた。

「あなたには本當に會はせる顏が無い。それでもあんたが斯う出世してゐて吳れたので、私もどんなに嬉しいか知れやしない」

寢起きの後の腫れぼつたい眼尻、筋力の緩んだやうな口尻に悲しさうな微笑を見せて、姉は云つた。

「いや、そんなことはありませんとも」と、久一は打消すやうに云つた。

「それでも學校の方はもう卒業したんでせう？……お父樣もどんなに悅んでゐなさるか」

「いや、學校の方も一昨年途中で廢めて了ひましたよ……」と、久一も極りの惡さうな微笑を浮べたが、「煙草は？」と袂から敷島の袋を出してすゝめた。

「いや煙草なら持つてる……」と云つて、姉は懷ろから新聞紙で折つた煙草入れを出して、粉になつた煙草を短い煙管に詰めて、うまさうに吸ひ始めた。

彼女は斯うした生活を、一年半程も續けて來たのであつた。最初は山北の紡績會社へ三年契約の前借で行つたのだが、この二ヶ月程前この會社へ移されたのであつた。その僅かばかしの前借の金は夫の手を遁れる爲め、離籍の條件で夫の手へ渡されたのであつた。土木技手である夫は、三四年前職を廢められて臺灣から歸鄕して以來は、酒ばかし飮んではぶら〳〵と遊び暮してゐるのであつた。

「ほんとに子供達ばかしは可哀想に、どうして暮して居るかと思はない日は無いけど……」

姉は太息と共に眼頭をにじまして云つた。

「二三日前にも虎雄から斯んな手紙が來てるんだが、可哀想だと思ふけど返事は出さない。皆な杉田が指圖して書かして寄越すんですからね」

久一はその總領息子が書いたと云ふ、——金を送れとか、着物を送れとか、借金なんか踏み倒して早く逃げて來いとか云つたやうな手紙を手に取つて讀んで見たが、この可憐な甥の蔭に隱れて、いろ〳〵なことを云つて寄越しては、まだこの慘めな姉——女の本能の弱點に附け込んでおびき寄せようと云ふ、あの酒喰ひの口髭なぞ生やした下司張つた四十男の杉田の顏が、まざ〳〵と描かれる氣がして、不快な氣持から默つてその手紙を姉に渡した。

「それであなたは、やはり仙臺へ歸るつもりなんですか。私の考へでは、お父樣の方からもそれとなく云つて來てるんだし、やはりお父樣の處へ歸ることにして、これから先きお父樣の世話をして暮す氣になつてはどうかと思ふんですがね。併しそれも餘り氣が進まんやうでしたら、どうでせう、私と一緒に間借りをするか町端れへ借家でもして當分暮すことにしては。……私はやつぱし杉田とは別れて了つた方が好いと思ひますがね。であなたがその決心さへ附けば、私も何か身を入れて働くことにして、あなたには不自由させないつもりですが……」

久一にも姉の決心は危まれたが、暫らく考へた後で斯う云つて見た。

「いゝえ〳〵、私も仙臺へなぞ歸る氣はありま

せんとも―

姉はきつぱりした調子で云つた。

三

彼は姉と別れて、掘割に添うた土堤の芝生の上を、ステーションの方へと歸つて來た。掘割の中には、石炭の小塊や綿屑などの散らばつてゐる荷舟が三四艘、寄りかたまつて繋つてゐた。そして瀬戸引きの藥罐のかゝつた七リンの炭火が、ぱち／＼と風に煽られてゐるのなど、見おろされた。

會社の高い煉瓦塀の裏手には、廣々した田圃がつゞいてゐた。そこには彼の故郷の雪空を想はせるやうな、夕暮の濕けた冷たい風が吹いてゐた。煉瓦塀の中からは、小歇みない機械の働く小忙しげな騒音が、かなり遠くまで聞えてゐた。どこか遠くの町中の工場の汽笛が、ボーと長く引いて鳴つてゐた。

「こゝの汽笛は、その六時とか云つた交替時間が來ないと鳴らないのかな。その六時から朝の六時まで、姉はあの人間の神經を痲痺錯亂させるやうな騒音の中で、ぐる／＼と眼にも止まらぬ速度で廻つてゐる機械の傍に立詰めで、何かしら手先きを働かして、この寒い夜を明かすのかな……―

彼は姉が暢氣の氣味だと云つたことを想ひ出して、傷々しく思つた。そして何千萬錘とか何萬錘とか云ふが、その錘數と云つても何で計算してるのかも彼には解らないことだつたが、兎に角に紡績事業にしても、またすべての機械のやつてることには、驚くべきものがあると思つた。そしてまた雜誌などで讀み噛つた産業の革命とか革進とか云ふやうな言葉まで想ひ出されて、結局ある時代が來れば、すべて知力に活きることの出來る以外の人間の悉くは、機械の爲めに使役せられることになる、現になりつゝあるのだと、彼は平生慣らされてゐる取止めもない空想を押擴げて考へて行つた。そして、

一兎に角に、姉をあの騒々しい機械と不健康な生活から救ひ出さなければならない、同時にまたあの杉田の手からも……―と、自分の胸に押附けるやうに思つた。

電車の中では、彼は杉田のことを考へてゐた。

一それにしても、杉田のやうな人間の心持は、俺にはよく解らない。彼奴は臺灣にゐた時分も、よく俺の處へなんかまで無心を云つて來たものだが、そしていつも今に成功の曉には今に成功の曉にはと云つたやうなことを並べては、俺の乏しい學資を強請つたものだが、それが一文だつて返された例はない。けれども、彼奴だつて惡人と云ふ程のそれ程の人間でもないのだから、無論返す氣ではあつたのだらうが、それと同じ筆法で、彼は彼の細君にも、今に幸福な目に遭はせるから今に幸福な目に遭はせるからと云つて、永年の勞苦を忍ばせて來た擧句、たうとう女工にまで賣り飛ばすやうなこともしたのであらうが、その今に／＼と云ふ考へ方が間違ひではないんかな？　常に未來と云ふものに欺かれて、そしてそれが習慣性となつて、われと怠惰と不道德を是認して、そしていつかこの大事な人生を空費して了ふことになるのだらう。……」

けれどもこの大事な人生を空費してると云ふ意味では、彼と杉田との間にどれ程の差別があるだらうかと云ふことも、久一は考へて見ねばならなかつた。

四

彼は一日置き位に、姉を訪ねて行つた。食べ物は朋輩達に分けて遣つて了ふことになるか

らと姉に云はれても、その度に福神漬とか海苔の佃煮とか菓子などを持つて行つては、姉を悦ばした。また主人を強請つては二圓三圓と持つて行つて、姉の財布の殖えるのを悦んでゐた。

　ある日には、姉は從業中だと云ふので、何時間か面會室で待たされて、十分かそこらの休憩時間に、短い會談をして滿足して歸ることもあつた。また面會時間の四時を過ぎて居ると云ふので拒絶されたこともあつたが、さうした場合にも、「大事な急な用で來たのだから、一寸でも會はすことが出來ないと云ふのなら、重役に面會したいから取次いで呉れ」斯う云つて門衞を威嚇かしては、時間過ぎに會つて來たりした。そしてそれも餘り頻繁になつて、門衞にも氣がひけて、淺草で飲めぬ口にウヰスキーなど呷つて、赤い顏して行つたりすることもあつた。

　そして夕暮時分、掘割の土堤路を、彼は歩いて歸るのだつた。枯れ芝生、鈍色の水面、細民窟あたりからの豆腐屋のラッパ、薄赤く濁つた街の空――そこからは都會生活の重苦しいどよめきが、物悲しい暗い壓迫を彼の胸に傳へて來た。そして彼は、ある時には、あの會社の高い煉瓦塀を姉と二人で越えて來て、この冷めたさうな掘割の水へ入つて二人で死ぬ――と云つたやうな想像に耽つたりした。それがせめてもの彼等姉弟が、何物かに對する反抗であり、また彼自身に取つては、それが現在での求め得る限りの甘い、美しい悲哀であるやうな氣がされるのであつた。

　姉も瓦斯物ながら新しい綿入れなど出來て、顏色も最初とは幾らか見直したやうに、例の卑下した微笑を見せては、いつも出て來た。

「綿入れを拵へたので、お金が少し減つたが、それでもまだ十二三圓ある。これに一寸した羽織一枚出來るとほかに欲しいやうなものも無し、それにね、近頃は監督さんの方でもたいへん好くして呉れるんですよ。寄宿舍が厭なら外から通はせるやうにしてもいゝつてね。それに一月からは給金も三錢增して呉れるさうだから、あなたも餘り氣を急かなくつてもね、もう少しお金の溜つた處で出ることにしても好いからね」

「……その後仙臺の方からは手紙が來ない？」

「二三日前にも一本來とつたけれど、もう返事は出さないつもりなんだから……」

「やつぱしその方がいゝでせう」

　ある日も二人は、窓ガラス越しに暖かい日の射込んでゐる面會室の腰掛に坐つて、斯うした會話に耽つてゐたが、するとまたいつの間にか露臺の上へ三四人の娘達が現れて、物好きな人懷こい眼附で二人の方を眺め下ろして、訛りの强い田舍言葉で喋舌り合つてゐた。

「ほう……またあの娘達が……」と、久一も微笑を浮べてその方を視遣つた。

「さう？」と云つて、姉は稍得意げなうなづきやうをして、眩しさうにガラス越しに娘達と顏を見合はして莞爾々々した。

「あの娘達ね、あれでほんとに面白いんですよ。あんたが來るとね、まるで自分達の處へでも來た氣で何だ彼だ云つて騷いでるんですよ。皆な鄕里の方の娘達ばかしでね、昨年のあの凶作騷ぎで、皆なまア賣られて來たやうなもんですね。だもんだから些とも面會人なんて無いでせう、であんたがよく來て呉れるんでね、皆なして私を羨しがつて居るんですの。いつも隙さへあると鄕里の方の話ばかりして暮してるんだからね……」

「さうでせうねえ」と、久一は何氣ない調子で云つたが、姉の鄕里へ歸りたがつて居る心持は、感じない譯に行かなかつた。

五

午後からの霙まじりの雨が、夜中から、年暮前には珍らしい雪になつてゐた。が久一が九時過ぎに起きて見ると、空は好く霽れてゐて、雪融けの雨滴れの音が、せゝこましい路次内に入亂れて聞えてゐた。雨浸みや、切張りや破れ穴の見える窓障子の外の狹い出しかけには、葵や蘭やの小鉢が、暖かい日を浴びて、久しぶりで濕つた黑い土を見せてゐた。

彼はざつと室の中を掃除して置いて、下へ火種を貰ひに行つたが、いつもは小うるさく話しかけたがる主人の細君も、今朝は長火鉢に頰杖をついたまゝ、例の氣になる鼻翼の大きな黑い疣をこちらへ向けて、暗い顏して默り込んでゐた。彼はそゝくさと顏を洗つて、流元の棚に載つてゐた辨當と、自分で洗つた茶器など二階へ持ちあがつて、机の前の火鉢に當りながら、冷めたく塊まつた飯を、茶を啜り〳〵、昨夜の主人との會話を想ひ出しながら食べてゐた。これまではいつも二圓三圓と細かく小遣ひを强請ることはあつても、精算を迫るやうなことはしなかつたので、主人の方では、彼が取るものさへ取つて了へばこゝを出るつもりなんだらうと思つたことと考へられて、彼は昨夜の自分の云ひ過ぎが心苦しく想ひ出された。

「……併し大晦日と云つても後四五日の處なんだから、姉は待つてる。と云つて俺には此際主人を强請るほかには、他に方法も無いのだからな」

彼は斯う思ひながら、机の前に坐つて、姉のことや主人のことやを、暗い氣持で考へてゐた。

ふと、前の指物屋の物干しで、竿竹の當る音が聞えたので、彼は誘はれたやうに、机を隔てて障子の破れ穴から、首を傾げて覗き込んだ。例の侏儒の娘が、先きの叉になつた棒で竿竹をはづしては、バケツに一杯の襁褓を一枚々々かけ並べてゐるのであつた。

娘は、年は十八だとか云ふが、脊丈は十一か十二の子供のやうに低くて、また瘦せてゐた。髮だけはいつも綺麗に結つてゐて、長目な青白い顏の、かなり整つた鼻を持つてゐた。そして物怖ぢしたやうな、黑眼の滲んだやうなしよぼしよぼした眼と、少し歪んだ脣には、臆病氣な、四邊に氣を兼ねた、卑下したやうな微笑を浮べてゐた。

それが、彼が、この夏、山の手の下宿から蒲團包一つ持つてこゝの二階へ轉げ込んでからは、毎日のやうにこの娘と顏を合はせて來たのであつた。初めの中は、娘は例の微笑を浮べながら、いつこくに視線を交はすことを避けてゐたが、いつか馴れて來て、輕い辭儀をする位の親しさを見せて來た。彼はある時には「あれでもポシビリティーがあるだらうか？」と云つたやうな空想に耽つて自分を樂しましたりしてゐたが、「併し結局俺だつて、精神上の侏儒に過ぎないのだ。俺に何物かを作り得るポシビリティーがあるだらうかと云ふ方が、より以上の疑問なのか知れないから」と云ふやうにも考へられて來て、彼は屢々自分に苦笑が感じられたのであつた。

やがて娘は、空のバケツをさげて、赤切れのきれた素足を爪立てて、窓から下りて行つた。

「今日は俺の方へは氣が附かなかつたらしいな……」

彼は何となくホッとしたやうな、また物足りないやうな氣持で、娘の後姿を見送つた。そしてふと、この娘のいつも浮べてゐる微笑と、彼が最初姉と會つた時から氣附いてゐる、何とも云ひ樣のないやうな氣持をそゝられる姉の卑下した微笑との間に、何かしら共通なものの

あることが感じられたのだ。

「やつぱし姉も、この娘と同じやうな氣持で生きて居るのかも知れない、俺にしても同じことだが……」

彼は斯う思つて考へて見ると、姉とこの娘との顏容までが、何處やらひどく似通つてゐるやうに思はれて來て、暗い氣持に滅入つて行つた。そして到底想像にすら及ばない――神は光りなり少しの暗き處なし、と云つた文句を頭に浮べたりして、疲れた氣持で障子の破れ穴から青い空を眺めたりして、漫然とした日を暮した。

日　方になつて主人は外から歸つて來たが、いつになく威勢好く外套のまゝ階段を駈けあがつて來た。金貸の會社から金を借りることになつて居ると云ふので、二人立てなければならない證人のことで、主人は此間中狂奔してゐたのであつた。

「君今夜こそ大丈夫だぜ。昨夜は君にもえらく苛められたが、その代り今夜は僕の方で威張つてやるさ。併し此間中の僕の氣苦勞つてそれは無かつたんですぜ　君はまア毎日さうして引込んでゐられるんだが、今朝も君……又どつさり鼻血が出ると云ふ始末なんだからね。君は僕を漫歩家だとか何とか云つて嘲笑ふがね、それが君たゞの漫歩で無いんで、ことなんさ。併し助かつたよ。……淺草の方で牛乳店を出してる奴だがね、相當の資産も持つてる奴だから、大丈夫なもんさ。それだけに君判を押さすまでには骨が折れた……」

主人は机の抽斗から、サックに入つた素通しの鍍金縁の眼鏡を出して、綠青の吹き出てるのを氣にして紙片で擦りながら、機嫌の好い顏をして云つた。

「そりや好ござんしたね」と、久一も主人の顏色を見て、ホッとして云つた。

「では君、金は出來たんだから一月號は少し遲れても、十五日頃にはどうしても發行するつもりだからね、原稿の方は纏めて置いて呉れ給へ。僕も全速力で明日からでも廣告にかゝるつもりだから」

「え原稿の方ならいつでも……」

主人は綠青銹を氣にしながらも、「少し氣取つて行かんと君……」と云つて、クリ／＼した凹んだ眼にかけながら、そゝくさと出て行つた。

その後で久一は流元から辨當を持つて來て、机の前に坐りながら、

「では今夜金が出來るとすると、明日それを持つて行つて、やはり鄕里へ歸してやるか――その方が姉も悅ぶだらうから」斯う思ひながらこそこそ食べてゐたが、そこへ細君がみし／＼階段をあがつて來て、「どなたか田舍の女のやうな人が二人訪ねて來た」と取次いだので、彼は食ひかけの辨當箱を机の下へ押しやつて、あたふたと下りて行つた。

六

玄關の暗い格子外に、姉ともう一人十六七位の娘とが、しよんぼりと竝んで立つてゐた。久一は不意を喰つてあわてた赤い顏して二人を二階へあげたが、

「一體まアどうしたんですの？」と、二人の方へ火鉢を押しやりながら、眉根に皺を寄せて云つたが、二人のもぢ／＼と口も利けないで小さくなつてゐる樣子を見て、

「ではやつはし逃げ出して來たんですね。……それも好かつたですよ

「あなたには屹度もう怒られるか知らんと思つたけどね……」

姉は斯う云つて言葉を切つたが、まはりに肉の落ちた、黑い隈の目立つて見える眼は、悄えた色を見せながらも、これまで弟に見せなか

つた、ある思ひ切つた心持を語つてゐるやうに見えた。姉の後ろに小さくなつて俯向いてゐる娘は、丸い赤い頰をして、少し縮れ毛らしいのを銀杏返しに結つて、手織縞ながら小ざつぱりした、肩上げした脇の明いた筒袖を着てゐた。

―……さうとは思つたんだけどね、實は今日は日曜で外の朋輩さんとこへ外出が許されたもんだからね、荷物は前からそこへ預つて貰つてあつたんで、その人達もさう云つてすゝめて呉れるしね、後で會社から詮議になつても、あなたの處へ行つたと云へば大したことにならずに濟むと云ふもんですから、――あなたが雜誌の記者だと云ふんで會社の方でも怖がつてゐるんですとさ。それにね……この咲ちやんも私と同じことになつてるんですの。山北からこつちへ來る時は拾五圓しか借りて來なかつたんですからね、積立金と差引くとそれは幾らでもないんですから、ねえ咲ちやん……」

―いや私だつて別に、逃げて來たのなんか些とも氣にしちやゐませんよ。あんな會社へ些とばかり損をかけたつて大したことぢや無いですからね―

久一は姉の眼を避けるやうにして、沈んだ調子で云つた。彼は姉の出拔けに逃げて來た心持を考へてゐた。――つまり姉は、彼に金を持つて迎へに行かれた際、やはり私は杉田の許へ歸りたいのだと云ひ切れないことを、怖れてゐたのに違ひなかつた。がそれはそれとして、この娘まで引張つて來たと云ふのはどうした譯か知ら、單純な親切からか知ら、それとも彼に辯解の場合何かの役に立つだらうと云ふやうな考へから、そゝのかして伴れて來たのか知ら?

―で、杉田のやうな人間に永年の訓練を受けて來た女だからと、彼は姉の心持を疑ひたい氣になつたが、努めて自分を落附けて行つた。そして、

「いや、却つて逃げて來て、それも好かつたですよ。それにね、實は今夜主人の方で金が出來ることになつてゐたので、明日でも迎へに行かうと思つてた處なんですよ。それにね、どうせ私と一緒になつたとしても、あなただつていつまでも東京に居ると云ふ譯には行かないんだから、やつぱし郷里へ歸つて貰はうと思つてた處なんですよ」

「まアさう！ いろ/\どうも心配をかけてね……」

姉はそれで安心したと云ふ風に、ほつとした顏をして云つた。

やがて、下の細君に行つて貰つた蕎麥など久一が二階へ運んで來て、極り惡がつてゐる娘に姉がすゝめて食べさせたりする頃には、姉も久一の心持も、打解けて來てゐた。姉は今日の途中の、久一もよく通つたタンクの下の石炭殼の路を二人が荷物を持つて夢中で驅けたことや、電車ではひどくまごついたことなど、笑ひながら話した。

―私はまたね、經濟タイムス社と云ふもんだから、多分新聞社のやうな建物なんでせうと思つてね、丁度この路次の前まで來ては、まさかこの路次の中にそんな建物なんかありさうもないと思つてね、やつぱし引返しちやその邊をぐるぐるしてゐたんですよ。がやつぱし二十三番地と云ふとこの路次の中だと云ふもんだからね、そこの酒屋さんで、それでは經濟タイムス社はと訊くとね、……それでやう/\分つたんですの―

姉は久一を憚つた眼附しながらも、五燭の電燈一つ點いた、主人と彼との机のほかには何一つ無い六疊の室の中をそつと見廻したりした。そして斯うした處から土産物など提げて繁げ繁げと訪ねて來た弟の心持を索りたいとでも云

ふ風に、久一の顏を視入つたりした。

七

八時近くなつて主人が歸つて來て、茶の間で細君との話聲が聞えてゐたが、暫らくして細君が階下で呼立てたので、

「ぢやア好かつたんだな。……では姉さん、今夜は土産物だけはどつさり買へますぜ。あなたはどうせ子供達のものでせうが、この娘へは何が好いでせう。兎に角あなた達が會社を倒して來た金高だけ土産物を買ふとしようぢやありませんか」久一は斯う笑ひながら云つて、出て行つた。

主人は二疊の茶の間の長火鉢に坐つて、昂奮した場合の癖の、掌や指先きやを無上に擦り合しては、黑い垢をぼろ〳〵より出して、屈託顏してゐたので、久一は一寸不安に打たれたが、

「どうでした……うまく行きましたかね？」と、さり氣なく坐つて云つた。

主人は神經的な苦しさうな笑顏をつくつた。

「……さアそれが君……ひでえ奴、君、駄目さ！　フヽヽ」

「え？　まるきり？」

「さうだよ。それが君お話にも何にもなつたもんぢやないんだよ。まるで人を馬鹿にしてやがるんだからね、あんなに人に大骨を折らしやがつて。それが君、……貳百圓と云ふ申込みに對して君、たつた拾五圓しか出せないと云ふんぢやないか……」

「家全體へ對して？」

久一も呆氣に取られてまじ〳〵と主人の顏を視てゐたが、併し家財道具と云つても何一つ金目の物は無いのだし、また主人の平生吹聽する程に斯うした雜誌の株なんかと云ふものに價値を置いて考へてもゐなかつたので、さう云はれて見ると、成程と主人へ合槌を打つ張合もなく、默り込んだ。

主人はやはり顳顬のあたりをピリ〳〵させて、誰と指して云ふことの出來ない金貸會社の踏み附けた態度を罵り續けてゐたが、

「それでね、そんな譯でね、君の方の精算もね……」

「さア……僕の方でも少し……」

久一は溜息しながら、當惑らしく眉を寄せて云ひかけたが、ふと、主人の綠青錆の吹き出た眼鏡の蔭に、怪しげにキラリと光つた涙らしいものを認めたので、彼はハッとして主人の顏から眼を反らした。そして鈍痛を伴つた重苦しい氣持に、頭がおのづと垂れて行くのを感じた。

彼はもぢ〳〵と、姉のことを簡單に話した。

「そんな譯で、一晩や二晩泊めて置いてもいゝやうなもんですがね、僕もいつまでも愚圖々々と斯うした氣持に引張られてゐるのも厭ですからね……」

「そりやさうだらうとも。だが何しろ困つたねえ。君もまたそんなことになつたのなら、それならさうと早く云つて呉れると好かつたに」

「まアさうなんですの。あの方があなたのほんとの姉さんなんですの。ほんとにまア何と云ふお氣の毒な……」

傍で聞いてゐた細君も、同情したやうな、感に堪へたやうな聲をして云つた。

で久一は二階へ戾つて姉と相談したが、姉も落膽した顏しながらも、汽車賃だけは自分の財布にあるので二人が間に合ふから、やはり今夜發ちたいと云つた。それではと云ふので、主人の外套と久一の一枚看板のセルの袴など質入れして拾圓ばかしの金を拵へて、姉は細君から後齒の下駄など貰つて、十一時上野發の汽車に間に合ふやうに、彼は二人の女を伴れて、家を

出た。
晴い暖かい晩であつた。路次内には、どこかららか紛れ込んだらしい小犬が、キャン〳〵鳴いてゐた。三人は二三町離れた小傳馬町の停車場へと歩いて行つた。
姉は綿入れの上へ、古ぼけた膝懸けのやうなものを引かけて、田舍風の黒メリンスの頭巾を被つて、革で締めるやうに出來たズックの古鞄をさげてゐた。
「家から持つて來たんですね？」
「……あ、ずつと古いもんだ、臺灣へ行く前に買つたものだからね」
人形町の方から來る電車の空いたのを待つて、一二臺やり過した。そして久一は、斯うした古鞄や膝懸けまでにも、やはり杉田と云ふ人間がついて廻つてゐるのだと、これから先きの姉の運命も想ひやられる氣がしたが、
「でもまア好かつたですよ。達者で歸れるんで何よりだ。杉田へもどうぞ宜しくと云つて下さい。……それからこれ〳〵——咲ちやんか、お前さんもよく逃げて來て好かつたね。もう二三年も置かれちや敵はんからね。……お前さんもよくあの玄關の上へ出て來て私達の方を視て笑つてゐたつけがな。が今度こそ二度と女工になんか來ないんだね。よく肺病なんか出るさうだから、ほんとに大變だよ……」
白金巾の風呂敷包を持つて、姉の傍に小さくなつて寄り添つてゐる娘を、彼は傷々しい氣持で顧みた。
「ほんたうにあなたのお蔭で、私達は助かりましたよ。でもあなたはお金が出ないので、當分また不自由するんでせうね」
「いや私は構ひませんさ。どうせあの通りの生活なんだから、あそこでごろ〳〵してさへ居ればそれで好いんですからね」
彼は斯うさり氣なく云つたが、あの緑青の涙とでも云ひたいやうな主人の賴り無げな涙や、侏儒の娘や、會社の煉瓦塀や、警官の姿や、故鄕の雪空と云つたやうなものやが、チンチンとベルを鳴らして馳せて來る電車の照燈を見迎へてゐる彼の眼に、悲しい、また空しいものに、ちら〳〵浮んだり消えたりしてゐた。

（大正六年）

子をつれて

一

掃除をしたり、お菜を煮たり、糠味噌を出したりして、子供等に晩飯を濟まさせ、彼はやうやく西日の引いた緣側近くへお膳を据ゑて、淋しい氣持で晩酌の盃を嘗めてゐた。すると御免とも云はずに表の格子戸をそうつと開けて、例の立退き請求の三百が、玄關の開いてた障子の間から、ぬうつと顏を突出した。

「まあお入りなさい」彼は少し酒の氣の廻つてゐた處なので、坐つたなり元氣好く聲をかけた。

「否もうこゝで結構です。一寸そこまで散歩に來たものですからな。……それで何ですかな、家が定まりましたでせうな？ もう定まつたでせうな？」

「……さあ、實は何です、それについて少しお話したいこともあるもんですから、一寸まあおあがり下さい」

彼は起つて行つて、賴むやうに云つた。

「別にお話を聽く必要も無いが……」と三百はプンとした顏して呟きながら、澁々に入つて來た。四十二三の色白の小肥りの男で、紳士らしい服裝してゐる。併し斯うした商賣の人間に特有——かのやうな、陰險な、他人の顏を正面に視れないやうな變にしよぼ〳〵した眼附してゐた。

「……で甚だ恐縮な譯ですが、妻も留守のことで、それも三四日中には屹度歸ることになつて居るのですから、どうかこの十五日まで御猶豫願ひたいものですが、……」

「出來ませんな、斷じて出來るこつちやありません！」

斯う呶鳴るやうに云つた三百の、例のしよぼしよぼした眼は、急に紅い焰でも發しやしないかと思はれた程であつた。で彼はあわてて、

「さうですか。わかりました。好ござんす、それでは十日には屹度越すことにしますから」と、謝まるやうに云つた。

「私もそりや、最初から貴方を車夫馬丁同樣の人物と考へたんだと、そりやどんな強い手段も用ゐたのです。がまさかさうとは考へなかつたもんだから、相當の人格を有して居られる方だらうと信じて、これだけ緩慢に貴方の云ひなりになつて延期もして來たやうな譯ですからな、この上は一歩も假借する段ではありません。如何なる處分を受けても苦しくないと云ふ貴方の證書通り、私の方では直ぐにも實行しますから」

何一つ道具らしい道具の無い殺風景な室の中をじろ〳〵氣味惡く視廻しながら、三百は斯う呶鳴り續けた。彼は、「まあ〳〵、それでは十日の晩には屹度引拂ふことにしますから」と、相手の呶鳴るのを抑へる爲め手を振つて繰返すほかなかつた。

「……實に變な奴だねえ、さうぢや無い？」

やう〳〵三百の歸つた後で、彼は傍で聽いてゐた長男と顏を見交はして、苦笑しながら云つた。

「……さう、變な奴」

子供も同じやうに悲しさうな苦笑を浮べて云つた。……

狹い庭の隣りが墓地になつてゐた。そこの今

にも倒れさうになつてゐる古籬に蔓を纏つて、朝顔がからましてあつた。それがまた非常な勢ひで蔓が延びて、先きを摘んでも〳〵わきからわきからと太いのが出て來た。そしてまたその葉が馬鹿に大きくて、毎日見て毎日大きくなつてゐる。そのくせもう八月に入つてるといふのに、一向花が咲かなかつた。

いよ〳〵敷金切れ、滯納四ヶ月といふ處から家主との關係が斷絶して、三百がやつて來るやうになつてからも、もう一月程も經つてゐた。彼はこの種を蒔いたり植ゑ替へたり繩を張つたり油粕までやつて世話した甲斐もなく、一向に時が來ても葉や蔓ばかし馬鹿延びに延びて花の咲かない朝顔を、餘程皮肉な馬鹿者のやうにも、またこれほど手入れしたその花の一つも見れずに追ひ立てられて行く自分の方が一層の慘めな癡呆者であるやうな氣もされた。そして最初に訪ねて來た時分の三百の煮え切らない、變に廻り冗く持ちかけて來る話を、幾らか馬鹿にした氣持で、塀いつぱいに匍ひのぼつた朝顔を見い見い聽いてゐたのであつた。所がそのうち、二度三度と來るうちに、三百の口調態度がすつかり變つて來てゐた。そして彼は三百の云ふなりになつて、八月十日限りといふいろ〳〵な條件附きの證書をも書かされたのであつた。そして無理算段をしては、細君を遠い郷里の實家へ金策に發たしてやつたのであつた。

「なんだつてあの人はあゝ怒つたの？」……

「やつぱし僕達に引越せつて譯さ。なあにね、明日あたり屹度母さんから金が來るからね、直ぐ引越すよ。あんな奴幾ら怒つたつて平氣さ―」

膳の前に坐つてゐる子供等相手に、斯うした話をしながら、彼はやはり淋しい氣持で盃を嘗め續けた。

無事に着いた、屹度十日までに間に合せて金を持つて歸るから――といふ手紙一本あつたきりで其後消息の無い細君のこと、細君のつれて行つた二女のこと、また常陸の磯原へ避暑に行つてるKのこと、――Kからは今朝も、二ッ島といふ小松の茂つたそこの磯近くの巖に、白い波の碎けてゐる風景の繪葉書が來たのだ。それには、「勿來關に近いこゝらはもう秋だ」といふやうなことが書いてあつた。それがこの三年以來の暑氣だといふ東京の埃りの中で、藻掻き苦しんでゐる彼には、好い皮肉であらねばならなかつた。

「いや、Kは暑を避けたんぢやあるまい。恐らくは小田を勿來關に避けたといふ譯さ」

斯う彼等の友達の一人が、Kが東京を發つた後で云つてゐた。それほど彼はこの三四ヶ月來Kにはいろ〳〵厄介をかけて來てゐたのであつた。

この三四ヶ月程の間に、彼は三四の友人から、五圓程宛金を借り散らして、それが返せなかつたので、すべてさういふ友人の方面からは小田といふ人間は封じられて了つて、最後にKひとりが殘された彼の友人であつた。で「小田は十錢持つと、澁谷へばかし行つてゐるさうぢやないか」友人達は斯う云つて蔭で笑つてゐた。晩の米が無いから、明日の朝食べる物が無いから――と云つては、その度に五十錢一圓と強請つて來た。Kは小言を並べながらも、金の無い時には古本や古着古靴などまで持たして寄越した。彼は歸つて來て、「そうらお土産……」と、赤い顏する細君の前へ押遣るのであつた。

（何處からか、救ひのお使者がありさうなものだ。自分は大して贅澤な生活を望んで居るのではない、大した慾望を抱いて居るのではない。月に三十五圓もあれば自分等家族五人が饑ゑずに暮して行けるのである。たつたこれだけの金を器用に儲けれないといふ自分の低能も度し難いものだが、併したつたこれだけの金だから何

處からかひとりでに出て來てもよささうな氣がする）彼にはよくこんなことが空想されたが、併しこの何ケ月は、それが何處からも出ては來なかつた。何處も彼處も封じられて了つた。一日一日と困つて行つた。蒲團が無くなり、火鉢が無くなり、机が無くなつた。自滅だ――終ひには斯う彼も絶望して自分に云つた。

電車屋、新聞屋、そばや、洋食屋、町内のつきあひ――いろんなものがやつて來る。室の中に落着いて坐つてることが出來ない。夜も晩酌が無くては眠れない。頭が痛んでふら／＼する。胸はいつでもどきん／＼してゐる。……

と云つて彼は何處へも訪ねて行くことが出來ないので、やはり十錢持つと、Kの澁谷の下宿へ押かけて行くほかなかつた。Kは午前中は地方の新聞の長篇小說を書いて居る。午後は午睡や散歩や、友達を訪ねたり訪ねられたりする時間にあててゐる。彼は電車の中で、今にも昏倒しさうな不安な氣持を感じながら、どうか誰も來てゐないで吳れ……と祈るやうに思ふ。先客があつたり、後から誰か來合せたりすると、彼は往きにもまして一層滅入つた、一層壓倒された慘めな氣持にされて歸らねばならぬのだ――

彼は齒のすつかりすり減つた日和を履いて、終點で電車を下りて、午下りの暑い盛りをだらだら汗を流しながら、Kの下宿の前庭の高い松の樹を見あげるやうにして、砂利を敷いた坂路を、ひよろ高い屈つた身體してテク／＼のぼつて行くのであつた。松の樹にはいつでも蟬がギンギン鳴いてゐた。また玄關前のタヽキの上には、下宿の大きな土佐犬が手脚を伸して寢そべつてゐた。彼は玄關へ入るなり、まづ敷臺の隅の洋傘やステッキの澤山差してある瀨戸物の筒に眼をつける――Kの握り太の籐のステッキが見える――と彼は案内を乞ふのも氣が引けるので、こそ／＼と二階のKの室へあがつて行く。……

「……K君――」

「どうぞ……」

Kは毛布を敷いて、空氣枕の上に執筆に疲れた頭をやすめてゐるか、でないとひとりでトランプを切つて占ひごとをしてゐる。

「この暑いのに……」

Kは斯う警戒する風もなく、笑顏を見せて迎へて吳れると、彼は初めてほつとした安心した氣持になつて、ぐたりと坐るのであつた。それから二人の間には、大抵次ぎのやうな會話が交はされるのであつた。

「……そりやね、今日の處は一圓差上げることは差上げますがね、併しこの一圓金あつた處で、明日一日凌げば無くなる。……後をどうするかね？ 僕だつて金持といふ譯ではないんだからね、さうは續かないしね。一體君はどうご自分の生活といふものを考へて居るのか、僕にはさつぱり見當が附かない」

「僕にも解らない……」

「君にも解らないんぢや、仕樣が無いね。で、一體君は、さうしてゐて、些とも怖いと思ふことはないかね？」

「そりや怖いよ。何も彼も怖いよ。そして頭が痛くなる。漠然とした恐怖――そしてどうしていゝのか、どう自分の生活といふものを考へていゝのか、どう自分の心持を取直せばいゝのか、さつぱり見當が附かないのだよ」

「フン、どうして君はさうかな。些とも漠然とした恐怖なんかぢやないんだよ。明瞭な恐怖なんぢやないか。恐ろしい事實なんだよ。最も明瞭にして恐ろしい事實なんだよ。それが君に解らないといふのは、僕にはどうも不思議でならん」

Kは斯う云つて、口を噤んで了ふ。彼もこれ

以上Kに追求されては、ほんたうに泣き出すほかないと云つたやうな顔附になる。彼にはまだ本當に、Kのいふその恐ろしいものの本體といふものが解らないのだ。がその本體の前にじりじり引摺り込まれて行く、泥沼に脚を取られたやうに刻々と陷沒しつゝある――そのことだけは解つてゐる。けれどもすつかり陷沒し切るまでには、案外時がかゝるものかも知れないし、またその間にどんな思ひがけない救ひの手が出て來るかも知れないのだし、また福運といふ程ではなくも、どうかして自分等家族五人が餓ゑずに活きて行けるやうな新しい道が見出せないとも限らないではないか？――無氣力な彼の考へ方としては、結局またこんな處へ落ちて來るといふことは、寧ろ自然なことであらねばならなかつた。

（魔法使ひの婆さんがあつて、婆さんは方々からいろ／＼な種類の惡魔を生捕つて來ては、魔法で以て惡魔の通力を奪つて了ふ。そして自分の家來にする。そして滅茶苦茶にコキ使ふ。厭なことばかしさせる。終ひにはさすがの惡魔も堪へ難くなつて、婆さんの處を逃げ出す。そして大きな石の下なぞに息を殺して隱れて居る。すると婆さんが捜しに來る。そして大きな石をあげて見る、――いやはや惡魔共が居るわ／＼、塊り合つてわな／＼ぶる／＼慄へてゐる。それをまた婆さんが引摑んで行つて、一層ひどくコキ使ふ。それでもどうしても云ふことを聽かない奴は、懲らしめの爲め何千年とか何萬年とかいふ間、何にも食はせずに壁の中や巖の中へ魔法で封じ込めて置く――）

これがKの、西藏のお伽噺――恐らくはKの創作であらう――といふものであつた。話し上手のKから聽かされては、この噺は幾度聽かされても彼にはおもしろかつた。

「何と云つて君はヂタバタしたつて、所詮君といふ人はこの魔法使ひの婆さん見たいなものに見込まれて了つてるんだからね、幾ら逃げ廻つたつて、そりや駄目なことさ。それよりも穩なしく婆さんの手下になつて働くんだね。それに通力を拔かれて了つた惡魔なんて、ほんとに仕樣が無いもんだらうからね。それも君ひとりだつたら、そりや壁の中でも巖の中でも封じ込まれてもいゝだらうがね、細君や子供達まで卷添へにしたんでは、そりや可哀想だよ」

「そんなもんかも知れんがな。併しその婆さんなんていふ奴、そりや厭な奴だからね」

「厭だつて仕方が無いよ。僕等は食はずにゃ居られんからな。それに厭だつて云ひ出す段になつたら、そりや君の方の婆さんばかしとは限らないよ」

夕方近くになつて、彼は晩の米を買ふ金を一圓、五十錢と貰つては、歸つて來る。（本當に、この都會といふ處には、Kのいふその魔法使ひの婆さん見たいな人間ばかしだ！）と、彼は歸りの電車の中でつく／＼と考へる。――いや、彼を使つてやらうといふやうな人間がそんなのばかしなのかも知れないが。で彼は、彼等の酷使に堪へかねては、逃げ廻る。食はず飲まずでもいゝからと思つて、石の下――なぞに隱れて見るが、また引摑まへられて行く。……既に子供達といふものがあつて見れば！　運命だ！　が、やつぱし辛抱が出來なくなる。そして、逃げ廻る。……

處で彼は、今度こそはと、必死になつて三四ヶ月も石の下に隱れて見たのだ。がその結果は、やつぱし壁や巖の中へ封じ込められようといふことになつたのだ。……

Kへは氣の毒である。けれども彼には何處と云つて訪ねる處が無い。でやつぱし、十錢持つと、澁谷へ通つた。

處が最近になつて、彼はKの處からも、封じ

られることになつた。それは、Kの友人達が、小田のやうな人間を補助するといふことはKの不道德だと云つて、Kを非難し始めたのであつた。「小田のやうなのは、つまり惡疾患者見たいなもので、それもある篤志な醫師などに取つては多少の興味ある活物であるかも知れないが、吾々健全な一般人に取つては、寧ろ有害無益の人間なのだ。そんな人間の存在を助けてゐるといふことは、社會生活といふ上から見て、正しく不道德な行爲であらねばならぬ」斯ういふのが彼等の一致した意見なのであつた。

「一體貧乏といふことは、決して不道德なものではない。好い意味の貧乏といふものは、却つて他人に謙遜な好い感じを與へるものだが、併し小田のはあれは全く無茶といふものだ。貧乏以上の狀態だ。憎むべき生活だ。あの博大なドストエフスキーでさへ、貧乏といふことはいいことだが、貧乏以上の生活といふものは呪ふべきものだと云つてる。それは神の偉大を以てしても救ふことが出來ないから……」斯うまた、彼等のうちの一人の、露西亞文學通が云つた。

また、つい半月程前のことであつた。彼等の一人なるYから、亡父の四十九日といふので、彼の處へも香奠返しのお茶を小包で送つて來た。彼には無論一圓といふ香奠を贈る程の力は無かつたが、それもKが出して置いて吳れたのであつた。Yの父が死んだ時、友人同志が各自に一圓位づつの香奠を送るといふのも面倒だから、連名にして送らうではないかといふ相談になつて、(彼はその席には居合せなかつたが、その時Kが「小田も入れといてやらうぢやないか、斯ういふ場合なんだからね、小田も可哀想だよ」斯う云つて、彼の名をも書き加へて、Kが彼の分をも負擔したのであつた。

それから四十九日が濟んだといふ翌くる日の夕方前、――丁度また例の三百が來てゐて、それがまだ二三度目かだつたので、例の廻り冗い不得要領な空恍けた調子で、並べ立ててゐた處へ、丁度その小包が着いたのであつた。「いや私も近頃は少し腦の加減を惡くして居りましてな」とか、「えゝその、居は心を移すとか云ひますがな、それは本當のことですな。何でも斯ういふ際は多少の不便を忍んでもすぱりと越して了ふんですな。第一處が變れば周圍の空氣からして變るといふもんで、自然人間の思想も健全になるといふやうな譯で……」斯う云つたやうなことを一時間餘りもそれからそれと並べ立てられて、彼はすつかり參つてゐた處なので、もう解つたから早く歸つて吳れと云はぬばかしの顏してゐた處なので、そこへ丁度好くそのお茶の小包が着いたので、それが氣になつて堪らぬと云つた風をしては、座側に置いた小包に横目をやつてゐた。また實際一圓の香奠も友人に出して貰はねばならぬやうな身分の彼としては、一斤といふお茶は貴重なものに違ひなかつた。で三百の歸つた後で、彼は早速小包の緖を切るのももどかしい思ひで、包裝を剝ぎ、そしてそろ〳〵と紙箱の蓋を開けたのだ。――新しいブリキ鑵の快い光り！ 山本山と銘打つた紅いレッテルの美しさ！ 彼はその刹那に、非常な珍寶にでも接した時のやうに、輕い眩暈すら感じたのであつた。

彼は手を附けたらば、手の汗でその快い光りが曇り、すぐにも銹が附きやしないかと恐るるかのやうに、そうつと注意深く鑵を引出して、見惚れたやうに眺め廻した。……と彼は、ハッとした態で、あぶなく鑵を取落しさうにした。そして忽ち今までの嬉しげだつた顏が、急に悄げ垂れた、苦いやうな悲しげな顏になつて、絕望的な太息を漏らしたのであつた。

それは、その如何にも新しい快い光輝を

入つてゐる山本山正味百二十匁入りのブリキの罐に、レッテルの貼られた後ろの方に、大きな凹みが二ヶ所といふもの、出來てゐたのであつた。何物かへ強く打つけたか、何物かで強く打つたかとしか思はれない、ひどい凹みであつた。やがて、當然、彼の頭の中に、これを送つた處のYといふ人間が浮んで來た。あの明確な頭腦の、旺盛な精力の、如何なる運命をも肯定して驀地に未來の目標に向つて突進しようといふ勇敢な人道主義者、——常に異常な注意力と打算力とを以て自己の周圍を視廻し、そして自己に不利益と見えたものは天上の星と雖も除き去らずには措かぬといふ強猛な感情家のY、——併し彼は如何に猜疑心を逞うして考へて見ても、まさかYが故意に、彼を辱しめる爲めに送つて寄越したのだとは、彼にも考へることが出來なかつた。……それは餘りに理由ないことであつた。

「何しろ身分が身分なんだから、それは大したものに違ひなからうからな、一々開けて檢べて見るなんて出來た譯のものではなからう。つまり偶然に、斯うした傷物が俺に當つたといふ譯だ……」

　それが當然の考へ方に違ひなかつた。併し彼は何となく自分の身が恥ぢられ、また悲しく思はれた。偶然とは云へ、斯うした物に紛れ當るといふことは、餘程呪はれた者の運命に違ひないといふ氣が強くされて——！

　彼は、子供等が庭へ出て居り、また丁度細君も使ひに行つてて留守だつたのを幸ひ、臺所へ行つて擂木で出來るだけその凹みを直し、妻に見つかつて詰問されるのを避ける準備をして置かねばならなかつた。

　それから二三日經つて、彼はKに會つた。Kは彼の顏を見るなり、鋭い眼に皮肉な微笑を浮べて、

「君の處へも山本山が行つたらうね？」と訊いた。

「あ貰つたよ。さう〳〵、君へお禮を云はにやならんのだつけな」

「お禮はいゝが、それで別段異狀はなかつたかね？」

「異狀？……」彼にもKの云ふ意味が一寸わからなかつた。

「……だと別に何でもないがね、僕はまた何處か異狀がありやしなかつたかと思つてね。……そんな話を一寸聞いたもんだから」

　斯う云はれて、彼の顏色が變つた。——罐の凹みのことであつたのだ。

　それは、全く、彼にも想像にも及ばなかつた程、恐ろしい意外のことであつた。罐の凹みは、Yが特に、毎朝振り慣れた鐵啞鈴で以て、いゝ、いゝ、左ぎつちよの逞しい腕に力をこめて、Kの口調で云ふと、「えゝ憎き奴め！」とばかり、毆りつけて寄越したのださうであつた。

「……K君そりや本當の話かね？　何でまたそれ程にする必要があつたんかね？　變な話ぢやないか。俺はYにも御馳走にはなつたことはあるが、金は一文だつて借りちやゐないんだからな……」

　斯う云つた彼の顏付は、今にも泣き出しさうであつた。

「だからね、そんな、君の考へてるやうなもんではないつてんだよ、世の中といふものはね。もつと〳〵君の考へてる以上に怖ろしいものなんだよ、現代の生活マンの心理といふものはね。……つまり、他に理由はないんさ、要するに貧乏な友達なんか要らないといふ譯なんだよ。他に君にどんな好い長所や美點があらうと、唯君が貧乏だといふだけの理由から、彼等は好かないといふんだからね、仕樣がないぢやないか。

殊にYなんかといふあゝ云つた所謂道徳家から見ては、單に惡病患者視してるに堪へないんだね。機會さへあればさう云つた目障りなものを除き去らう撲滅しようとかゝつてるんだからね。それで今度のことでは、Yは僕のこともひどく憤慨してるさうだよ。……小田のやうな貧乏人から、香奠なんか貰ふことになつたのも、皆なKのせゐだといふんでね。かと云つて、まさか僕に鐵亞鈴を喰はせる譯にも行かなかつたらうからね。何しろ今の娑婆といふものは、そりや怖ろしいことになつて居るんだからね」

「併し俺には解らない、どうしてそんなYのやうな馬鹿々々しいことが出來るのか、僕には解らない」

「そこだよ、君に何處か知ら脱けてる――と云つては失敬だがね、それは君は、自分に得意を感じて居る人間が、慘めな相手の一寸したことに對しても持ちたがる憤怒や暴慢といふものがどんな程度のものだかといふことを了解してゐないからなんだよ。それに一體君は、魔法使ひの婆さん見たいな人間は、君に仕事をさせて呉れるやうな方面にばかし居るんだと思つてるのが、根本の間違ひだと思ふがな。吾々の周圍――文壇人なんてもつとひどいものかも知れないからね。君のいふ魔法使ひの婆さんとは違つた、風流な愛とか人道とか慈しむとか云つてるから悉く慈悲忍辱の士君子かなんぞと考へたら、飛んだ大間違ひといふもんだよ。このことだけは君もよく〱腹に入れてかゝらないと、本當に君といふ人は吾々の周圍から、……生存出來ないことになるぜ！ 世間には僕のやうな風來々坊ばかし居ないからね」

今にも泣き出しさうに瞬いてゐる彼の眼を覗き込んで、Kは最後の宣告でも下すやうに、斯う云つた。

二

……

眼を醒まして見ると、彼は昨夜のまゝのお膳の前に、肌襦袢一枚で肱枕して寢てゐたのであつた。身體中そちこち蚊に食はれてゐる。膳の上にも盃の中にも蚊が落ちてゐる。嘔吐を催させるやうな酒の臭ひ――彼はまだ醉の殘つてゐるふら〱した身體を起して、雨戸を開け放した。次ぎの室で子供等が二人、蚊帳も敷蒲團もなく、ボロ毛布の上へ着たなりで眠つてゐた。

朝飯を濟まして、書留だつたらこれを出せと云つて子供に認印を預けて置いて、貸家搜しに出かけようとしてる處へ、三百が、格子外から聲かけた。

「家も定まつたでせうな？ 今日は十日ですぜ。……御承知でせうな？」

「これから搜さうといふんですがな、併し晩までに引越したらそれでいゝ譯なんでせう」

「そりや晩までで差支へありませんがね、併し餘計なことを申しあげるやうですが、引越しはなるべく涼しいうちの方が好かありませんかね？」

「併し兎に角晩までには間違ひなく引越しますよ」

「でまた餘計なことを云ふやうですがな、その爲めに私の方では如何なる御處分を受けても差支へないといふ證書も取つてあるのですからな、今度間違ふと、直ぐにも處分しますから」

三百は念を押して歸つて去つた。彼は晝頃までそちこち歩き廻つて歸つて來たが、やはり爲替が來てなかつた。

で彼はお晝からまた、日のカン〱照りつける中を、出て行つた。額から胸から汗がぼたぼた流れ落ちた。クラ〱と今にも打倒れさうな疲れた頼りない氣持であつた。齒のすり減つた

下駄のやうになつた日和を履いて、手の脂でべとべとに汚れた扇を持つて、彼はひよろ高い屈つた身體してテク〳〵と歩いて行つた。それは細いだら〳〵の坂路の兩側とも、石やコンクリートの塀を廻したお邸宅ばかし並んでゐるやうな閑靜な通りであつた。無論その邊には彼に恰好な七圓止まりといふやうな貸家のあらう筈はないのだが、彼はそこを拔けて電車通りに出て、電車通りの向ふの谷のやうになつた低地の所謂細民窟附近を搜して見ようと思つて、通りかゝつたのであつた。兩側の塀の中からは蟬やあぶらやみんみんやおうしの聲が、これでもまだ太陽の照りつけ方が足りないとでも云ふやうに、ギン〳〵溢れてゐた。そしてどこの門の中も、人氣が無いかのやうにひつそり閑としてゐて、敷きつめた小砂利の上に、太陽がチカチカ光つてゐた。で「斯んな廣いお邸宅の靜かな室で、午睡でもしてゐたいものだ」と彼はだらだら流れ出る胸の汗を拭き〳〵、斯んなことを思ひながら、息を切らして歩いて行つた。左側に彼が曾て雜誌の訪問記者として二三度お邪魔したことのある、實業家で、金持で、代議士の邸宅があつた。「やはり先生避暑にでも行つてるのだらうが、何と云つても彼奴等はいゝ生活をしてゐるな」彼は羨ましいやうな、また憎くもあるやうな、結局藝術とか思想とか云つても自分の生活なんて實に慘めで下らんもんだといふやうな氣がされて、彼は歩みを緩めて、コンクリートの塀の上にガラスの破片を突立てた廣い門の中をジロ〳〵横目に見遣りながら、歩いて行つたのであつた。が丁度その時、坂の向うから、大きな體格の白服の巡査が、劍をガチンガチン鳴らしながらのそり〳〵やつて來た。顏も體格に相應した大きな角張つた顏で、髭が頰骨の外へ出てる程長く跳ねて、頰鬚の無い鍾馗そのまゝの嚴めしい顏をしてゐた。處が彼が瞥と何氣なしに其巡査の顏を見ると、巡査が眞直ぐに彼の顏に鋭い視線を向けて、眼に横柄なのそり〳〵した歩き振りでやつて來てるので、彼は何といふことなしに身内の汗の冷めたくなるのを感じた。彼は別に法律に觸れるやうなことをしてる身に憶えないが、さりとて問ひ詰められては間誤つくやうなこともあるだらうし、またどんな嫌疑で——彼の見すぼらしい服裝だけでもそれに値ひしないとは云へないのだから——「オイ〳〵！ 貴樣は？ 無暗に邸内をジロジロ覗き歩いて居るが、一體貴樣は何者か？ 職業は？ 住所は？」

で彼は何氣ない風を裝ふつもりで、扇をバチバチ云はせ、息の詰まる思ひしながら、細い通りの眞中を大手を振つてやつて來る見あげるやうな大男の側を、急ぎ脚に行過ぎようとした。

「オイ〳〵！」

……果して來た！ 彼の耳がガアンと鳴つた。

「オイ〳〵！……」

警官は斯う繰返してものゝ一分程もぢつと彼の顏を視つめてゐたが、

「……忘れたか？ 僕だよ……忘れたかね？ ウ、……」

警官は斯う云つて、初めて相好を崩し始めた。

「あ君か！ 僕はまた何事かと思つて吃驚しちやつたよ。それにしてもよく僕だつてことがわかつたね」

彼は初めて相手の顏を見あげるやうにして、ほつとした氣持になつて云つた。

「そりや君、警察眼ぢやないか。警察眼の威力といふものは、そりや君恐ろしいものさ」

警官は斯う得意さうに笑つて云つた。

午下りの暑い盛りなので、そこらには人通りは稀であつた。二人はその電柱の下につくばつて話した。

警官――横井と彼とは十年程前神田の受驗準備の學校で知り合つたのであつた。横井はその時分醫學専門の入學準備をしてゐたのだが、その時分下宿へ怪しげな女なぞ引張り込んだりしてゐたが、それから間もなく警察へ入つたのらしかつた。

横井はやはり警官振つた口調で、彼の現在の職業とか收入とかいろ〳〵なことを訊いた。

「君はやはり巡査かい？」

彼はさうした自分のことを細かく訊かれるのを避けるつもりで、先刻から氣にしてゐたことを口に出した。

「馬鹿云へ……」横井は斯う云つて、つくばつたまゝ腰へ手を廻して劍の柄を引寄せて見せ、「見給へ、巡査のとは違ふぢやないか。帽子の徽章にしたつて僕等のは金モールになつてるからね……ハヽヽこの劍を見よ！と云ひたい處さ」横井は斯う云つて、再び得意さうに廣い肩をゆすぶつて笑つた。

「さうか、警部か。それはえらいね。僕はまたね、巡査としては少し變なやうでもあるし、何かと思つたよ」

「白服だからね、一寸わからないさ」

二人は斯んなことを話し合ひながら、しばらく肩を並べてぶら〳〵歩いた。で彼は「此際いい味方が出來たものだ」斯う心の中に思ひながら、彼が日下家を追ひ立てられてゐるといふこと、今晩中に引越さないと三百が亂暴なことをするだらうが、どうかならぬものだらうかと云ふやうなことを、相手の同情をひくやうな調子で話した。

「さあ……」と横井は小首を傾げて急に眞面目な調子になり、「併し、そりや君、つまらんぢやないか。そんな處に長居するもんぢやないよ。氣持を惡くするばかしで、結局君の不利益ぢやないか。そりや先方の云ふ通り、今日中に引拂つたらいゝだらうね」

「出來れば無論今日中に越すつもりだがね、何しろこれから家を搜さにやならんのだからね」

「併しそんな處に長居するもんぢやないね。結局君の不利益だよ」

彼の期待は外れて、横井は警官の說諭めいた調子で斯う繰返した。

「さうかなあ……」

「そりやさうとも。……では大抵署に居るからね、遊びに來給へ」

「さうか。ではいづれ引越したらお知らせする」

斯う云つて、彼は張合ひ拔けのした氣持で警官と別れて、それから細民窟附近を二三時間も歩き廻つた。そしてやう〳〵恰好な家を見つけて、僅かばかしの手附金を置いて、晩に引越して來るといふことにして歸つて來た。がやつぱし細君からの爲替が來てなかつた。昨日の朝出した電報の返事すら來てなかつた。

三

その翌日の午後、彼は思案に餘つて、横井を署へ訪ねて行つた。明け放した受付の室とは別室になつた奧から、横井は大きな體軀をのそりのそり運んで來て、「やあ君か、まああがれ」斯う云つて、彼を二階の廣い風通しの好い室へ案内した。廣間の周圍には材料室とか監督官室とかいふ札をかけた幾つかの小間があつた。梯子段をのぼつた處に白服の巡査が一人テーブルに坐つてゐた。二人は中央の大テーブルに向ひ合つて椅子に腰かけた。

「どうかね、引越しが出來たかね？」

「出來ない。家はやう〳〵見附かつたが、今日は越せさうもない。金の都合が出來んもんだから」

「そいつあ不可んよ君。……」

横井は彼の訪ねて來た腹の底を看透かしたかのやうに、むつかしい顏をして、その角張つた廣い額から外へと刎ねた長い髮をぐい／＼と引張つて、飛び出た大きな眼を彼の顏に据ゑた。彼は話題を他へ持つて行くほかなかつた。

「でも近頃は節季近くと違つて、幾らか閑散なんだらうね。それに一體にこの區内では餘り大した事件が無いやうだが、さうでもないかね？」

「いや、いつだつて同じことさ。ちよい／＼これでいろんな事件があるんだよ」

「でも一體に大事件の無い處だらう？」

「がその代り、注意人物が澤山居る。第一君なんか初めとしてね……」

「馬鹿云つちや困るよ。僕なんかそりや健全なもんさ。唯貧乏してるといふだけだよ。尤も君なんかの所謂警察眼なるものから見たら、何でもさう見えるんか知らんがね、これでも君、幾らかでも國家社會の爲めに貢献したいと思つて、貧乏してやつてるんだからね。單に食ふ食はぬの問題だつたら、田舍へ歸つて百姓するよ」

彼は斯う顏をあげて、調子を强めて云つた。

「相變らず大きなことばかし云つてるな。併し貧乏は昔から君の附物ぢやなかつた？」

「……さうだ」

二人は一時間餘りも斯うした取止めのない雜談をしてゐた。その間に横井は、彼が十年來續けてるといふ彼獨特の靜坐法の實驗をして見せたりした。横井は椅子に腰かけたまゝでその姿勢を執つて、眼をつぶると、半分とも經たないうちに彼の上半身が奇怪な形に動き出し、額にはどろ／＼汗が流れ出す。横井はそれを「精神統一」と呼んだ。

「……でな、斯う云つちや失敬だがね、僕の觀察した所ではだ、君の生活狀態または精神狀態――それはどつちにしても同じやうなもんだがね、餘程不統一を來して居るやうだがね、それは君、統一せんと不可んぞ……。精神統一を練習し給へ。練習が少し積んで來ると、それはいろいろな利益があるがね、先づ僕達の職掌から云ふと、非常に看破力が出來て來る。……此奴口では斯んなことを云つてるが腹の中は斯うだな、といふことが、この精神統一の狀態で觀ると直ぐ看破出來るんだからね、そりや恐ろしいもんだよ。で僕もこれまでいろ／＼な犯人を摑まへたがね、それが大抵晝間だつたよ。……此奴怪しいな、斯う思つた刹那にひとりでに精神統一に入るんだね。そこで、……スイコ／＼で引張つて來るんだがね、それがもうほとんど百發百中だつた」

「……フム、さうかな。でそんな場合、直ぐ往來で繩をかけるといふ譯かね？」

「……なあんで、繩なぞかけやせんさ。そりやもう鐵の鎖で縛つたよりも確かなもんぢや。……貴樣は遁れることならんぞ！ 貴樣は俺について來るんだぞ！ と云ふことをちやアんと暗示して了ふんだからね、つまり相手の精神に繩を打つてあるんだからな、これ程確かなことはない」

「フム、そんなものかねえ」

彼は感心したやうに首肯いて警部の話を聞いてゐたが、だん／＼と、この男がやはり、自分のことをもその鐵の鎖で縛つた氣で居るのではないか知らといふ氣がされて來て、彼は言ひやうのない厭惡と不安な氣持になつて起ちあがらうとしたが、また腰をおろして、

「それでね、實は、君に一寸相談して貰ひたいと思つて來たんだがね、どんなもんだらう、どうしても今夜の七時限り引拂はないと建具を引揚げて家を釘附けにするといふんだがね、何とか二三日延期させる方法が無いもんだらうか。

僕一人だとまた何でもないんだが、二人の子供をつれて居るんでね……」
　しばらくもぢ〳〵した後で、彼は斯う口を切つた。
「そりや君不可んよ。都合して越して了ひ給へ。結局君の不利益ぢやないか。先方かつて、まさか、そんな亂暴たことしやしないだらうがね、それは元々の契約といふものは、君が萬一家賃を拂へたい場合には造作を取上げるとか家を釘附けにするとかいふことになつて居るんではないのだからね、相當の手續を要することなんで、そんな無法なことは出來る譯のものではないがね、併し君、君もそんなことをしとつてもつまらんぢやないか。君達はどう考へて居るか知らんがね、今日の時勢といふものは、それは恐ろしいことになつてるんだからね。いづれの方面で立つとしても、ある點だけは眞面目にやつとらんと、一寸のことで飛んでもないことになるぜ。僕も職掌柄いろ〳〵な實例も見て來てるがね、君もうつかりしとると、そんなことでは君、生存が出來なくなるぜ！」
　警部の鈍栗眼が、喰入るやうに彼の顔に正面に向けられた。彼はたじろいだ。
「……いや君、併し、僕だつて君、それほどの大變なことになつてるんでもないよ。何しろ運わるく、妻が郷里に病人が出來て歸つて居る、……そんなこんなでね、餘り閉口してるもんだからね。……」
「……さう、それが、君の方では、それ程大したことではないと思つてるか知らんがね、何にしてもそれは無理をしても先方の要求通り越しちまふんだな。これは僕が友人として忠告するんだがね、そんな處に長居をするもんぢやないよ。それも君が今度が初めてだといふからまだ好いんだがね、それが幾度もそんなことが重なると、終ひにはひどい目に會はにやならんぜ。つまり一種の詐欺だからね。家賃を支拂ふ意志なくして他人の家屋に入つたものと認められても仕方が無いことになるからね。そんなことで打込まれた人間も、隨分無いこともないんだから、君も注意せんと不可んよ。人間は何をしたつてそれは各自の自由だがね、併し正を踏んで倒れると云ふ覺悟を忘れては、結局この社會に生存が出來なくなる……」

……

　空行李、空葛籠、米櫃、釜、其他目ぼしい臺所道具の一切を道具屋に賣拂つて、三百に押しかけられないうちにと思つて、家を締切つて八時近くに彼等は家を出た。彼は書きかけの原稿やペンやインキなど入れた木通の籠を持ち、尋常二年生の彼の長男は書籍や學校道具を入れた鞄を肩へかけて、袴を穿いてゐた。幾日も放つたらかしてあつた七つになる長女の髪をいゝ加減に束ねてやつて、彼は手をひいて、三人は夜の賑かな人通りの繁しい街の方へと歩いて行つた。彼はひどく疲勞を感じてゐた。そしてまだ晩飯を濟ましてなかつたので、三人ともひどく空腹であつた。
　で彼等は、電車の停留場近くのバーへ入つた。子供等には壽司をあてがひ、彼は酒を飲んだ、酒のほかには、今の彼に元氣を附けて呉れる何物もないやうな氣がされた。彼は貪るやうに、また非常に尊いものかのやうに、一杯々々味ひながら飲んだ。前の大きな鏡に映る蒼黑い、頬のこけた、眼の落凹んだ自分の顔を、他人のものかのやうに放心した氣持で見遣りながら、彼は延びた頭髪を左の手に撫であげ〳〵、右の手に盃を動かしてゐた。そして何を考へることも、何を怖れるといふやうなことも、出來ない程疲れて居る氣持から、無意味な深い溜息ばかしが出て來るやうな氣がされてゐた。

「お父さん、僕エビフライ食べようかな」
壽司を平らげてしまつた長男は、自分で讀んでは、斯う並んでゐる彼に云つた。
「よし〳〵、エビフライ二――」
彼は給仕女の方に向いて、斯う機械的に叫んだ。
「お父さん、僕エダマメを食べようかな」
しばらくすると、長男はまた云つた。
「よし〳〵、エダマメ二――それからお銚子……」
彼はやはり同じ調子で叫んだ。
やがて食ひ足つた子供等は外へ出て、鬼ごつこをし始めた。長女は時々扉のガラスに顏をつけて父の樣子を視に來た。そして彼の飲んでるのを見て安心して、また笑ひながら兄と遊んでゐた。
賤らしく化粧した踊り子がカチ〳〵と拍子木を敲いて、その後から十六七位の女がガチャガチャ三味線を鳴らし唄をうたひながら入つて來た。一人の醉拂ひが金を遣つた。手を振り腰を振りして、尖つた狐のやうな顏を白く塗り立てたその踊り子は、時々變な斜視のやうな眼附を見せて、扉と飲臺との狹い間で踊つた。
幾本目かの銚子を空にして、尚頻りに盃を動かしてゐた彼は、時々無感興な眼附を、踊り子の方へと向けてゐたが、「さうだ！ 俺には全く、悉くが無感興、無感激の、狀態なんだな……」斯う自分に呟いた。
幾年か前、彼がまだ獨りでゐて、斯うした場所を飲み廻りほつき歩いてゐた時分の生活とても、それは決して今の生活と較べて自由とか幸福とか云ふ程のものではなかつたけれど、併しその時分口にしてゐた悲痛とか悲慘とか云ふ言葉――それ等は要するに感興といふゴム鞠のやうな彈力から彈き出された言葉だつたに過ぎなかつたのだ。併し今日ではそのゴム鞠に穴があいて、凹めば凹んだなりの、賴りも張合ひもない狀態になつてゐる。好感興惡感興――これはをかしな言葉に違ひないが、併し人間は好い感興に活きることが出來ないとすれば、惡い感興にでも活きなければならぬ、追求しなければならぬ。さうにでもしなければこの人生といふ處は實に堪へ難い處だ！ 併し食はなければならぬといふ事が、人間から好い感興性を奪ひ去ると同時に惡い感興性の彈力をも奪ひ取つて了ふのだ。そして穴のあいたゴム鞠にして了ふのだ――
「さうだ、感興性を失つた藝術家の生活なんて、それは百姓よりも車夫よりもまたもつと惡い人間の生活よりも、惡い生活だ。……それは實に惡生活だ！ ――」
ボカンと眼を開けて無意味に踊り子の賤らしい踊りに見恍れてゐた彼は、彼等の出て行く後姿を見遣りながら、斯うまた自分に呟いたのだ。そして、「自分の子供等も結局あの踊り子のやうな運命になるのではないか知らん？」と思ふと、彼の頭にもさうした幻影が悲しいものに描かれて、彼は小さな二女ひとり伴れて歸つたきり音沙汰の無い彼の妻を、憎い女だと思はずにゐられなかつた。
「併し、要するに、皆な自分の腑甲斐ない處から來たのだ。彼女は女だ。そしてまた、自分が嬶や子供の爲めに自分を殺す氣になれないと同じやうに、彼女だつてまた亭主や子供の爲めに乾干になると云ふことは出來ないのだ」彼はまた斯うも思ひ返した。……
「お父さんもう行きませうよ」
「もう飽きた？」
「飽きちやつた……」
幾度か子供等に催促されて、彼はやう〳〵腰をおこして、好い加減に醉つて、バーを出て電車に乘つた。

「何處へ行くの？」
「僕の知つてる下宿へ」
「下宿？　さう：：：」
子供等は不安さうに、電車の中で幾度か訊いた。

澁谷の終點で電車を下りて、例の砂利を敷いた坂路を、三人はＫの下宿へと歩いて行つた。そこの主人も主婦さんも彼の顏は知つてゐた。

彼は帳場に上り込んで、「實は妻が田舍に病人が出來て歸つてるもんだから、二三日置いて貰ひたい」と頼んだ。が、主人は、彼等の樣子の尋常で無さゝうなのを看て取つて、暑中休暇で室も明いてるだらうのに、空間が無いと云つてきつぱりと斷つた。併しもう時間は十時を過ぎてゐた。で彼は今夜一晩だけもと云つて頼んでゐると、それを先刻から傍に坐つて聽いてゐた彼の長女が、急に顏へ手を當ててシク／＼泣き出し始めた。それには年老つた主人夫婦も當惑して、「それでは今晩一晩だけだつたら都合しませう」と云ふことに定まつたが、併し彼の長女は泣きやまない。

「ね、いゝでせう？　それでは今晩だけこゝに居りますからね。明日別の處へ行きますからね、いゝでせう？　泣くんぢやありません：：：」

併し彼女は、ます／＼しやくりあげた。

「それではどうしても出たいの？　他所へ行くの？　もう遲いんですよ：：：」

斯う云ふと、長女は初めて納得したやうにうなづいた。

で三人はまた、彼等の住んでゐた街の方へと引返すべく、十一時近くなつて、電車に乘つたのであつた。その邊の附近の安宿に行くほか、何處と云つて指して行く知合の家もないのであつた。子供等は腰掛へ坐るなり互ひの肩を凭せ合つて、疲れた鼾を搔き始めた。

濕つぽい夜更けの風の氣持好く吹いて來る暗い濠端を、客の少い電車が、はやい速力で駛つた。生存が出來なくなるぞ！　斯う云つたＫの顏、警部の顏――併し實際それがそれ程大したことなんだらうか？

「：：が、子供等までも自分の卷添へにするといふことは？」

、さうだ！　それは確かに怖ろしいことに違ひない！

が今は唯、彼の頭も身體も、彼の子供と同じやうに、休息を欲した。：：：

（大正六年八月）

馬糞石

三造さんのうちの馬が寶物をうんださうな、と云ふ大した村中の評判であつた。「虎は死して皮を殘すとか云ふが、さすがに三造さんとこの馬だけあつて、えらい物をひり出したもんぢやないか」などと、ヘンに脣をひん歪めて言ふものもあつた。――三造は村中切つてのしたゝか者である。三造はそんな話が耳に入るにつけ、業が煮えてならなかつた。

半月ほど前のことであつた。三造は役場で村の元老株三四人と寄り合つて、酒を飲んでゐた。そこへ家から使ひが來て「馬が病氣をおこしたからすぐ來て呉れ」と云つた。で、三造は、あの馬鹿野郎が馬に霍亂でもさせたんだらう」とふだんから馬鹿者扱ひにしてゐる倅のことを罵りながら、飛ぶやうにして歸つて來た。馬は厩の中にぐたりと倒れて、目をつぶつて、汗をかいて、肛門から血を出してゐた。三造の顏色が變つてしまつた。彼は倅はじめ家の者たちを罵りわめきながら、本家の三男で今年畜産學校を出た若い獸醫を呼びにやつた。獸醫が來てさかんに灌腸などしたが、ます／＼出血するばかしで、それから一時間も經たず息が絶えてしまつた。

「手前、誰かに毒でも食はされたんだらう。薄ぼんやりだからだ！」と、三造は倅を罵りつゞけた。

「そんなことはない」と倅は抗辯したが、二言目にはおやぢの拳固が飛んで來た。

その日も倅は村の製材所から鋸屑の詰つた俵を積んで、一里ほど離れた隣り村の林檎の倉庫へ、晝前に一度行つて來た。馬の樣子がヘンであつた。ちつとも秣をたべなかつた。豆腐のカラをやつてもたべない。汗をかいて、口から泡を吐いて、歩く勢もない樣子であつた。でひどい炎天の日だつたので、やつぱし霍亂にかかつたのだらうと思つて、車からはづして家の裏でどん／＼水を浴びせかけて、厩へ入れて置いたのであつた。

「あした廣さんに解剖して貰へば何の病だつたかわかるだらうが、俺らのせゐぢやない……」と倅は暗い顏して呟いた。

「何が俺らのせゐぢやないとがあるか！ 手前の使ひかたがわるいから斯んたら病氣なぞかかつたんぢやないか！ 今更死んでしまつたものを解剖なぞして見たつて何になる！ この途方拔けが！ この節、二百や三百の端た金で馬一疋買へるかよ！」とおやぢは身體中をふるはして云つた。

翌日死骸が炎天の川原へ擔ぎ出されて、やつぱし解剖されることになつた。直腸がやぶけてゐて、そこから直徑二寸五分ほどのまん圓い石ころのやうなものが出て來た。それが出た時、若い獸醫はちよつと驚喜の叫び聲をあげたが、

「これ僕に呉れ給へね？」といつた。

「いゝとも……」と倅はこたへた。

獸醫は川の砂でごし／＼と洗つた。まつたく、暗灰色をした、たしかに石ころに違ひなかつた。獸醫はそれを手にすると、倅にもまたそこらに集つてゐた子供等にも碌すつぽ見せず、さつさと引きあげて行つた。三造は倅からその話を聞いたが、阿呆らしい石ころなど出たと云ふので、一層侮辱された氣がして、苦い顏をした。ほんとに緣起でもない……

三造も近年は不幸つゞきの方である。この十年の間に二度も燒け出されたのは別として、彼のたつたひとりの弟で北海道で敎師をしてゐたのが、氣ちがひになつて、細君に逃げられて、三人の子供を連れて、二三年前に歸つて來た。そして昨年の暮に二階の薄暗い物置で、碌な手當も受けずに狂死した。村ではいゝ評判を立てなかつた。また彼の死んだ姉の息子の山師者に引かゝつて、ひどい損をかけられた上に、裁判事件にまでなつたが、やう〳〵このひと月ほど前に示談が調つて、それもかなりの額の金を原告へ提供せねばならぬことになつた。

「あの三造さんともあらうものが、どうしてまたあんな山師者なんかに引かゝつたのか。……やつぱり慾得づくだんべ？」

「何でもあの人の姉さんの死ぬ時に、息子の嫁を娶る時の金だと云ふので、えらい大金を預つたのださうぢや。それを三造さんが横領したちふ話もあるがな、或はそんなことかも知れんてな。でもないと如何に甥つこが可愛い云うたつて、あの三造さんがあれだけの馬鹿はせんぢやろ。……やつぱし祟りちふこともあるからなー」

村の人達は斯んなやうな噂まで立てた。

「何だこの途方拔け共が！ まだ〳〵な、これしきのことではな、三造のかまどにひゞは寄らんぞ！」

三造は斯うその五尺にも足らぬ小さなからだに反りを打たせて元氣を裝つてはゐたが、併しかなりの打擊には違ひなかつた。

馬のゐない厩の中は淋しかつた。怠け者の倅はいゝことにして、野良へも出ずにぶら〳〵遊び廻つてゐる。三造はこの頃自分の女房の弟が村長の候補に立つてゐて、自分は村會議員の元老株でもあり、旁々參謀長と云ふ格でその方に忙しいのだが、出歩く元氣も無くなつて、毎日引込んでは朝から酒を飲んでは家の者に當り散らしてゐた。

ところがぶら〳〵と毎日遊び歩いてゐた倅が、白い長い鬚を生やした村の物識りから、それは馬糞石と云ふもので、非常に貴重な寶物だと云ふことを聞いて來た。

「だから貴樣等はどいつもこいつも大馬鹿者だと云ふんぢや。何と云ふ聾たはけ者が揃つてゐるこつちやな。アハヽヽ。廣さんこそ大金儲けをした。それと云ふのも貴樣等の無學のせゐで、今更ほざいたつて仕方が無いと云ふものぢやよ。廣さんが學校の參考品に送るなんて、それは譃さ。今頃は大方東京の成金にでも賣込む分別中だらうよ。何しろ何十萬と云ふ値の附けやうのないと云ふ寶物ぢやからな、お蔭で倒產者の廣さんうちもこれで盛りかへしだ。虎は死して皮を殘すと云ふが、貴樣んとこの馬もそれだけの寶物を殘して死んだんだに、聾たはけ者だから、それだけの寶物をむざ〳〵と他人に呉れて阿呆面をしてゐるが、死んで行つた馬に對しても恥かしいと思はんかい？ アハハヽヽ。それと云ふのもみんなふだん强慾たかれの罰と云ふもんぢや。何でも二三年前だつたかな、西郡の方でも二錢銅貨位の圓さの物が出て、縣廳の技師に鑑定を賴んでやつたところ、技師も馬鹿者で鐵槌で眞二つに割つたやつさ。あとでその持主が他から話を聞いて、早速取寄せてセメントで接いださうだがな、それでも何でも二三千圓には賣れたと云ふことが、青森の新聞に出てゐたぞ。貴樣等は慾たかれで、ふだん新聞も讀まんけに、斯んたら馬鹿な目に會ふのぢや。おやぢに歸つてさう云へ——屁までやぶいて死んだ馬に對して申譯があるめえ！ アハヽヽ」

村の物識りは白い鬚をしごきながら、好き放題なことを吐いては、七十近い老人の腹から

は出さうにも無いやうな元氣な笑ひ聲を響かせて、膝をだいた身體を前後にゆすぶつた。

　おやぢとは違つて、身體も大きく、物に動じないやうなうつそりした氣性の倅も、さすがに度膽を拔かれて、顏色を變へて、あたふたと歸つて來た。

　おやぢは臺所の大圍爐裡に褌一つで胡坐かいて、爐の隅へ七リンを置いて、川雜魚と豆腐の鍋をつゝきながらいつもの長い晩酌にかゝつてゐたが、倅の鈍臭い話しぶりに終ひまで我慢出來ず、

「何だと？　この阿呆！　糞垂れ！　もう一度云つて見ろ！」

　と歪めた下脣をつん出して、ぎら〳〵した眼光を倅に向けたが、いきなり手にしてゐた大猪口を、相手の額を覘つて發矢とばかり投げつけた。が額へは當らず、障子の棧をかすめて土間へ飛んで碎ける音がした。

「この途方拔けが！　手めえが阿呆だからな、あのゴホンケ者にまで阿呆あしらひされて、何だと――馬糞石…？　まあ〳〵この途方拔けがまあ、寶物…どの面こいて――そのしやつ面が見たくもねえ！　あのゴホンケにまでかつがれて、のめ〳〵した面こいてやがる…この業晒しが！　寢言ならな、寢床の中へ入つてこくものだ！　薄馬鹿が！」

　三造は酒もそつちのけにして、罵りわめいた。

「だつて、父さんのやうにさう闇雲に怒つてしまつたんでは話も出來せんがね。併しいかになんぼあのゴホンケかつて、滿更根も葉もない嘘はこかん人でごいす。たしかに青森の新聞にまで出たちふことだから、話半分に聽いても、併し兎に角なんぼ程か値のあるものかも知れないと思ふがな。さう云へば…」と倅は云ひ出すのを躊躇したが、

「さう云へば、あの時の廣さんの樣子に腑に落ちねえところがあつたつけ。あの珠が出るとな、いきなり庖丁をおつぽり投げて、川の砂でごし〳〵洗つてやがつたが、呉れと云ふからわしあ生返辭してる間に、とつとと駈けて行つてしまつたでごいす。廣さんめ――して見るとあいつ學校で知つてたんだな、そんげえらい寶物だちふことちやあんと知つとつて、それで奴のぼせあがつて…うぬ！　どうするか覺えてやがれ。わしが承知せんぞ！」

　倅は横目でおやぢを警戒しながら、離れた爐ばたへ坐つて、煙草を吹かしながら、覺悟の體で口を尖らして云つた。

「何をわし面があるかい！　阿呆が。うぬが承知で呉れてやつて、…なあ、四百も五百もする馬を殺して、その馬から出て來た物だ、して見ればよしそれがたゞの石ころであつたにせよ、こらまあ、斯んな物が出て來たんだがと、一應うちへ持ち歸つて皆なに見せると云ふのが、當然の話と云ふもんぢや。三つ兒だつてそれ位の才覺は働くものぢや。それを何だ、あの廣坊などにうま〳〵とかたり取られやがつて、今更ほえ面こいてゐやがる。野郎それほどうぬが最初から氣が附いてゐたと云ふんなら、たつた今のうちに取り返して持つて來て見せろ。それほどの性魂がうぬにも出來てゐると云ふなら、たつた今のうちに持つて來て見せろ。…それが出來めえがな。明日になれば、また父さんお前行つて來て呉れだろが？　俺らどの面さげてのめ〳〵と出かけて行かれるか！　この鼻たらしが！」

「うゝん、なんでおれにだつて出來ねえことがあるか！　わしも呉れてやるとはつきりとは云はなかつただ。わしは裁判問題にしたつて屹度取り返して見せる。よし！　わしはこれからすぐ出かけて行つて、喧嘩してもふんだくつて來

てやる。本家の兄さんが出たつて誰が出たつて構ふことあねえ、自分の物を自分が取り返しに行くのだ、何もこはいことはねえだ、よし！」

倅は樺細工の筒をポンと鳴らして煙管をさめて、のつそりと腰をおこしかけた。

「フム、うぬにそれが取り返して來られるやうだつたら、世の中に阿呆ちふものが無い勘定だに」とおやぢは鼻のさきに冷笑を浮べたが、顏色も急に青ざめたほどの眞劍さを現はしてゐた。

「本家のやつら、おいそれと云つてすぐには渡すまいて。本家のやつらもなか〳〵惡黨の腹が出來てるでな、うちの阿呆なんかの手にやおへめえて。だがこのおれが承知するもんぢやねえ。おれは本家へ暴れ込んで行つても、とつ返さずにや置かねえ。あいつらのすることはまるで詐欺だ！」

三造は倅の出て行つたあと、冷めたくなつたのをぐびり〳〵飲みながら、むつかしい顏して斯う女房に云つた。……

が、やつぱしおやぢの鑑定通り、その晩倅は空手で歸つて來た。それから二三度も足を運んだが、若い獸醫——と云つても學校を出たばかしで、それに狹い村のことで開業も出來ないので役場へ出てゐる彼は「だつて君は吳れると云つたぢやないか。だもんだから僕はすぐ學校へ送つてしまつたんで、今更取返すと云ふ譯には僕としては行かんよ。それに君はあのゴホンケの話をほんとにしてるやうだが、それはたしかに珍らしい物には違ひないけれど、そんなあのゴホンケの云ふやうに金になんかなるもんぢやないんだよ。君達はあのゴホンケにすつかりかつがれてゐるんだよ。昨日も役場へ見えて、わざわざ君の父さんも聽きに行つたさうだがね、大いに煽てて置いたから屹度今に僕のうちへ君の父さんがあばれ込むだらうつて、あのゴホンケ馬鹿口たゝいて笑つとつたが、ほんたうはそんなものなんだよ。それはたしかに馬糞石と云ふと珍らしいものには違ひないが、普通のうちに飾つて置いたつて仕方が無いもので、それよりも學校へ寄附して置くと、君のうちの名も永久に殘るし、馬の名譽にもなると云ふ譯さ」とにやにや笑ひながら本氣で取りあげなかつた。

「それはさうでもあらうが、或はそれほどの大金にはならんまでも、何しろわしんとこでも四百兩五百兩と云ふ馬を一頭殺してゐる際だで、おやぢの考へとしては幾らかでもその補ひをつけたいちふ考へでね、……それは屹度あんたへはこの間の解剖賃はあげます、屹度相當の解剖賃は拂ふで……」

倅はどこまでも相手を疑つてかゝつて、併しふだんから學問者の本家の兄弟には何目も置いてることで、どこまでも下手には出たが、斯う同じやうなことをしつこく繰り返した。

「ほんとに君等にも困るねえ。ほんとにそんな金になんかなるもんぢやないんだよ。ほんとに君達はどうかしてる……」

「ほんとに、まあさう云はないで、……ほんとだ、廣さんこの通り賴む！　この通りわしが賴むでどうか取り寄せて下せえ。ほんとに幾らかにでも賣れれば屹度相當のお禮はします。どんなにおやぢを說きつけてでもお禮だけは屹度させやす。わしだつて一旦約束したことを反古にするやうな男でねえでな、……廣さんだつてわしの氣性も知つてゐなさるべ、……ほんとな、な、ほんとにこの通り賴むでな。わしもほんとにおやぢに責められるのが辛いだでな……」斯う終ひには倅は泣くやうにして賴んだ。

「それでは兎に角學校へ手紙を出して取寄せよう」と相手も云はない譯には行かなくなつた。

「有難い！　あゝこれでやう〳〵安心した。ほんとに廣さん賴んだ……」と倅は大袈裟に胸を撫でおろして歸つて行つた。

斯んな風で、三造の馬が五萬十萬と値の知れないほどの寶物をひり出したと云ふ評判が、近村にまでひろがつたのであつた。例の、葬祭などの村の年中行事は勿論、天文地理一切の顧問格を以て任じてゐるゴホンケ（駄ぼら吹きといふほどの意味）は、例の調子でおのれの博聞をほこり歩いた。が話のあとでは「あの三造の慾たかれ、すつかりのぼせてしめえやがつた、アハヽヽ、慾馬鹿とはよく云つたものだ「アハヽヽ」と例の白い鬚をしごき、薄黒い舌をのぞかせては間抜けの笑ひ聲をひゞかせてゐた。

寶物拜見と出かける村の閑人や、他から來た馬喰うなどが、三造を訪ねて來た。三造はこの頃はさつぱり義弟の村長候補の運動にも出かけず、苛ら／＼とうちの者どもに當り散らしては、大方朝つぱらから酒ばかし飲んでゐた。倅もおやぢに責め呶鳴られるのを恐れて、この頃は神妙におやぢの寝てるうちに林檎畑へ出かけて行つた。

「お前さまはどこからわしのうちに馬糞石があるちふ話聞いて來たか知れんが、わしのうちには馬糞石はございせんでがす。馬糞石なら本家へ行つて見せて貰ひなせえ。わしのうちにはそんなものはごいせんでがす」

三造は斯う、まるで訪ねて來た人へ喰つてかかるやうな調子であつた。彼も初めのうちは、この馬糞石と云ふ言葉を口にするのが、何やら侮辱されたやうな氣がしたが、この頃では幾度それが口にされることだか！

「ほんとにわしのうちには無えでごいす。わしのうちにあるものなら、この主人のわしがひと目もその馬糞石を見ねえちふ筈がねえでがすがな、わしは見て居らん。わしがなんぼほどお前さまに見せたい思うても、無えものは見せる譯に行きませんでな。……併しでがす、お前さまはこれから本家へ廻んなさつても、多分見せては貰えますめえて。何でもそれがな、評判を立てさせるちうて青森の新聞社に送つたとか、東京の大金持のところへもう送つてしまつたとか云ふ話でがすがな、大方そんなこんでせうて。本家の兄貴の野郎あんな殿様見たいな顏してますがな、なか／＼腹黒い質の男で、煮ても燒いても喰へない男だで。……あゝほんとにこのわしも、娑婆が厭になりましたわい。四百も五百もする馬を亡くした擧句、その腹の中から出た物まで横領されるなんて、何と云ふ因果な話だ！　併しわしは、なんて云はれたつてこのままでほつては置かん……」

三造はさうと信じてしまつたのだ。本家の今の若い主人は所謂學問中毒と政治道樂の爲め、近年すつかり財産を耗つてしまつた。それを挽回しようと云ふので鑛山などへ手を出して悶掻いてゐる。で馬糞石を畜産學校へ送つたなんと云ふことは眞赤な譃で、東京の三井とか大倉とか云ふ富豪へ交渉中か、それとも青森の新聞社へでも送つて先づ大々的に評判を立てさせてそれから賣り込まうと云ふ計畫か、どちらかに違ひないときめてしまつたのだ。

「十萬圓――いや一萬圓と見たところが大したものだ。いや千兩と見たところが、馬の代りも買へるし、あの忌め／＼しい示談金の埋め合せも出來ると云ふものだ……」

斯う考へて來ると、酒びたりになつてゐる三造の頭はぐら／＼と煮え立たずにゐなかつた。

「いや、それともまたほんとにあのゴホンケの云ふやうに、十萬二十萬と値の知れねえ程の寶物かも知れんてな。若しさうだとすると……？」

近頃本家の主人達の仲間が、近くの坊主山に亜炭の大礦脈を發見したと云つて騒ぎ廻つてゐるが、そしてこのおれを仲間はづれにしてゐ

るが、併しそんなことは最早屁の皮でもないと云ふ氣がした。そしてふだん馬鹿者あつかひにしてゐるあのゴホンケまでが、何となくえらいところのある人間のやうな氣さへした。

三造は、本家の主人が亜炭の用件にかこつけて上京でもするやうな形跡がないかと、うちの者たちにも氣をつけさせた。

獸醫が學校へ手紙を出すと約束した時から四五日も經つたが、やつぱし本家からは沙汰無しである。倅は度々催促に行つたが、獸醫は「いや、ほんとに手紙を出したんだがなあ、どうしたんだらう……」と云つた調子で、要領を得なかつた。

朝酒で顔を眞赤にして、禿頭を炎天に曝して、小さな體軀に反りを打たして、往來の凸凹石にチビ下駄を響かせながら、三造は上の方へ歩いて行つた。まだ晝前のことで、ポプラやヒバなどの植込みを持つたちよつと小ざつぱりした建物の役場では、窓ガラス戸を開け放して、四五人の村吏たちがテーブルに向つてゐた。

「皆さんお暑うございます」と云つて、三造は入つて行つた。

「これは築館さんかお久しう……。この頃はさつぱり役場をお見限りでしたが、相變らずこの方でお忙しいとんで？……」と、受附のテーブルを占めてゐる巡査部長あがりの年輩の助役は、盃を持つ手眞似をしては、笑顔で迎へた。

「いや、そんなことでもございせんが……」と三造は無愛想にこたへて置いて、こちらに顔を向けずに、突俯したやうになつて筆を持つてゐる獸醫のテーブルの方へ、つか／＼と歩いて行つた。

「廣さん、今日はお前さまに少し訊いて見たいことがあつて來たんでごわすがな、併しお前さまの係りだちふ戸籍のことについてではごわせん……」三造は酒臭い息を吹きかけながら、自分を抑へつけた皮肉な調子で出た。

獸醫は鐵縁の眼鏡のかげの細い眼が、おびえたまたゝきにパチ／＼した。

「一體その……馬糞石のことについておめえさまが三本木の學校へ手紙を出して呉れてから、もう幾日頃になりますべ？」

「もう四五日も前で……」

「一體その三本木とこゝとで郵便の往復するには幾日かゝることでごわすかな？　へい、わしはまた三本木とこゝとでは三日もあればもう、餘つて返る頃だと思ふんでごすがな、……へい、してまだ何とも返事がごわせん？　へい……ふふん……？」

三造は斯うねつこい調子で云つて、鋭く眉を立てて下唇をやけにひん歪めたが、

「……でな、廣さん、わしもおめえさまとは他人の中ぢやねえ、切つても切れねえ親類同士だでな、……それに、こゝにはこの通り大勢さまの實證の聽き人も居ることだで、わしもその馬糞石が何萬兩に賣れようと、わしもその決して、自分の懷ろばかり肥すやうなそんな見つともねえ眞似はしねえだ。それでな、廣さんて、兎に角にな、一應は、その馬糞石はわしの方へ返して貰はにやならん理窟になるでごわせう？　わしの耳にもな、世間の噂はいろ／＼入つてねえこともねえでごすがな、併しそんな詮索はしたくはごいせん、親類同士で血で血を洗ふやうな眞似はしたくねえでな。……まあおめえさまがた確かに學校へ送つたと云ふからには、それに違えごわせんべ。……このことについては、全くうちの馬鹿野郎にも落度がねえとは云はねえ、……つまりそのおめえさまがそれを參考に研究するから貸して呉れえと云ひなさつた時に、いや一寸でもわしにも見せてえ、嬶にも見せてと云ふ位の分別は途方抜けでねえかぎり

乾度出るにちけえねえだが、そこが途方拔け野郎のことでごいす、――へい、よろしうごいす、お貸し申しやせう――一寸斯う口をすべらしたばかしで、こんな面倒なことになつたんでごわすが、併し元々が本家分家のことで、わしもおめえさまの兄さんへ對して強い口はたゝきたくはごわせんだでな、それでな、おめえさまもうちへ歸つてよく兄さんに云つて下せえ、……分家の三造が斯う申してゐやしたとな。賴みますぞ。それで今日が今日すぐと云つても何でごわせうから、あと三日の期限と云ふことにして、間違ひのねえところで、返して貰ひてえだ。でな、わしは決して哭れて下せえといつてるのではごわせん、立派に返して下せえとこの通り云つてるでごわすぞ。……この通り大勢の實證の聽き人ちふものも居ることだて」

室内の人たちの物ずきな耳目は、三造の入つて來た時からの恐ろしく勿體ぶつた態度や、目じろきもせずじり〳〵詰め寄るやうな調子の一言一句に、ひきつけられずにゐなかつた。――三造さんいよ〳〵どうかしてるな……？ 誰もがさう思つた。少年の小使などは三造の顏にすりつけるやうに覗き込んで、少年らしい物ずきな目を輝かしてゐる。

まだまるで子供らしい顏した二十一二の若い獸醫も、最初のおびやかされた氣持をいつか無くしてゐて、ぷか〳〵敷島を吹かしながら、操つたいやうな無邪氣な顏を打俯せて、聽いてゐたが、

「をぢさん、併しそれは……それは無論取り寄せますがね、併し……」と微笑を浮べて、もぢもぢ云ひ出した。

「何？ 何が、併しでごいすだ？」と三造は身體をひとゆすりして云つた。

「いや、併し、をぢさん、それは乾度間違ひなく取寄せますがね、……多分今日あたり着く頃だと思ふんですがね、併し……」

「ほう？ それではわしが一寸おめえさまとこへ廻つて見てもいゝがな……」

「えゝそれはもうどんなに遲れても二三日中には乾度來ますがね、併しをぢさん、あれはですね、あれは確かに馬糞石と云つて珍らしいものには違ひないですがね、併しをぢさんの考へてるやうなそんな金になる――ハヽ、僕はどうもをぢさんとこの運造さんが、あの寺田の爺さんにかつがれた……」

「何だと！ この聾たはけめが！ もう一遍云つて見ろ！」

三造は齒をがた〳〵させながら云つた。

「うゝん……阿呆もな、伜め〳〵吐くもんだぞ。おれがあのゴホンケにかつがれてる……？ この鼻垂れが、生意氣こくとはり飛ばすぞ。俺もな、まだ〳〵あのゴホンケにかつがれるほど耄碌はしてゐやせんて。人を薄馬鹿たと思つてやがるかよ、この青二歳めが！ 餘り識つたかぶりするもんぢやねえぞ。てめえもな、そんなこんでは碌な人間にはなれせんぞ。どいつもこいつも騙りめが揃つてやがつて、ざまあねえや！……よし！ おれはてめえの兄貴に云ひ分がある……見てやがれ！」

三造は恐ろしい權幕で出て行つた。……

その今にこの貧乏村にも成金を澤山出すに違ひないと云ふ取沙汰のやかましい噂の大礦脈だつて、較べものにはなるまいと云ふ、十萬二十萬と値の知れないほどの稀代の寶物の馬糞石は、三造が本家へ呶鳴り込んで行つてから二三日して、學校から送つた小包のまゝで、本家から屆けられた。三造はうや〳〵しく劇物の御眞像のかゝつた床の間へ、間に合せに紫メリンスの風呂敷をたゝんで、その上に飾つた。

そして誰彼の差別なく、座敷へあげこんで、酒を出して、手は觸れさせないが、拜見は許した。夜は箪笥の底深くしまひ込んだ。

「いや、斯うして拜見を許すのもやはし評判を立てさせるひとつの術だつてなあ。婆さんよ！　酒などけち〳〵することねえだ。おめえなぞにはわかるめえがな、新聞社などへ送つて評判を立てさせれば、それは一番早いこんだがな、それでは騙り取られる心配があるだよ。あいつらと來ては、どいつもこいつも娑婆の惡黨だでなあ。……今度だつて、もうちつとのとこで騙り取られるとこだつたでねえかよ。」

斯うしたものの賣買ごとには慣れつこの本家の主人と喧嘩してしまつたことは、今更に三造にも心細い氣がされたが、併し斯うして訪ねて來る多くの人たちに拜見させて評判を立てさせてゐるうちには、屹度明日にも東京の三井とか大倉とか云ふ大金持から人が出張して來るに違ひないと云ふ氣がされて、三造は朝からの酒の飲み場を臺所の大圍爐裡のわきから、座敷の床の間の前へと移した。

「さうに違えねえだとも！　あの多吉んところの畑から出たアイヌのこさへたちふ壁人形でせえ、東京の博士から百兩出してもちうて所望して來たさうでねえかよ。わしんところの馬糞石はそんたら壁人形などとは値段が違ふぞ。……けち〳〵するな」と、酒にけち〳〵する女房を、三造は叱りつけずにゐられなかつた。

（大正八年六月）

不能者

一

參吉はいよ／＼今日こそ、豫ての計畫を實行しようと思ひ立つた。で晝飯の時に特にビールを一本飲んで元氣をつけて、自分で電話口に立つて金彌を呼び出した。

「これから光樂寺に行かうと思ふんだが、行かない？…行かうよ。ね、ゆうべそんな約束だつたぢやないの…」

「さう、では行きますわ」

「ぢやあね、これからすぐ出てね、あの邊で待つてて吳れないかな。僕もすぐ出かけるからね」

から云つて電話を切つた。それから鏡に向つて頭髮を撫でつけ、羽織を引かけて、わざと帽子をかぶらずに、梅雨霽れの蒸暑い外へ出た。――いよ／＼以て今日こそは、罪障深きかの女等に因果應報のおそろしさ、色即是空の悟りを――殊に戀敵の成瀨をも並べて置いて說き聽かしてやるのだと思ふと、臆病者の參吉の胸も、躍り立たずにゐなかつた。彼のひよわさうな青白い顏にも、恍とした色が浮んでゐた。

光樂寺の坂道の途中で、金彌と栞子とが、派手な色の洋傘に日を避けて、こちらを見おろしてゐた。參吉はせか／＼と登つて行つたが、かの女等を見つけると、すぐまた胸に動悸をおぼえて、意氣地無く顏をあからめた。こんなことを企んだ自分の方が、一層罪深きものであると氣が咎められるやうな氣もした。

「だいぶ待ちましたか？」と、參吉はいつものやうに顏をあからめて、やさしい調子で云つた。

「いゝえ、私たちも今來たばかしよ」

三人は並んで靜かに步いて行つた。

「あなたゆうべは隨分醉拂つたわね。そして成瀨さんに隨分怒つてよ。私たちが折角送つて行つてあげたのに、あなたは成瀨さんに歸れ／＼つてね、それは怒つたのよ」金彌は傷々しげに參吉を顧みて、云つた。

「さう、…僕はちつとも知らなかつた。…それはあなたへは失敬しましたね」と參吉は詫びるやうな調子で云つた。

が、ゆうべは、泉屋を出てからのことは參吉にはまるでわからなくなつてゐるが、泉屋で飲んでゐた間のことは、よくわかつてゐた。そしてまた成瀨に對する勃然とした憤りを、あたらしく喚びおこされた。金彌は彼に取つては、酒の相手としての美しい偶像なのである。それを、たつた二度目で會つた成瀨が、金と云ふもので、他に相手も無いではないのに、單に奪略の興味から、金彌の肉體を得ようと、參吉の前で露骨な態度を見せたのである。藝術家ではないか！　何と云ふ淺ましい奴だ！　美と禮讓に對する感情の麻痺した奴は厭だ！　萬事は金で片附くものと思つてゐるやうな藝術家ほど厭なものはない――と臆病な彼も、醉つてゐたので、怒つたのである。そしてまた、直覺的に、結局この金彌もまた、この猛者の爲めに蹂躪せらるゝに違ひないと云ふ氣がされて、彼はひどく悲しくなつたのである。彼は額へ兩手をあてて「ほれて通へばなにこはからう、戀の闇路にたゞひとり…」と金彌に彈かして、悲しい聲してうたつた。この女ともこれきりだ――かう思ふと、彼は胸のうちに泣かずにはゐられなかつた。

成瀨は都會で他の細君を戀して、離婚騷ぎまでひきおこして、その傷手を負うて、このS州へ遁れ來つたのであつた。そしてこの土地へ來る前ある溫泉場では土地の藝者を片つぱしから咽喉首を掻切つてやつたことを、誇りとしてゐた。

「戀愛ですなあ。戀愛のほかには、この人生の單調を破る何ものも無いですよ。でなければ冒險――僕はこの夏は日本アルプスを踏破しようと思つてゐます」と、金に困らない彼は、眉をあげて、度々かう云つた。

參吉に取つてもまた、この人生が退屈であり、單調であるには違ひなかつた。しかし、この頃の彼には、金でかうした種類の女を漁り歩くと云ふことが、ひどく恥かしいものに感じられてゐた。身が汚れると云ふ感じを、酒の勢ひで以てしても、斥けることが出來なかつた。それに彼はひどく貧乏でもあつた。彼は出來ることなら、自分が、「貧しき人々」のマカールであり、金彌がヷルヷーラであるやうなことを願つた。そして每日々々、親愛なる私の何々さん――貴女の卑き召使ひの參吉より――と云つたやうな手紙を書くことすら、彼は空想した。

「これは驚いた。君はほんとにそんな風に考へてるのですか。こんな人たちにそんなこと云つたつて、てんで分りやせんですよ。すべてが金のことですよ。こんな種類の女たちばかしではなく、すべて女は金にはまゐりますよ」と成瀨はゆうべも、女たちを前にして、憫笑した眼附を見せて參吉に云つた。

結局この男は、ほんたうに他の愛を所有したことも、所有された經驗も無い人間に違ひないと、參吉はしまひに斷定的にさう思つた。神經性な焦躁、肉體への突擊、略奪的傾向――すべてがそれを證據立ててゐるやうに思はれた。

「兎に角自分だけは離れて了はう。こんなことで氣分をこはされてゐてはいけない」と、參吉は思つた。

今日の光樂寺行で以て、彼はすつかり遠退いて了はうと思つた。事實、彼はこの二三日、東京の雜誌社から電報で原稿を責め立てられてゐた。

二

女たちを石段の下に待たして置いて、參吉ひとりが成瀨の借りてゐる書院へはひつて行つた。文晁の八方睨みの虎の大幅のかゝつた床の間には、成瀨の繪具箱や描きかけのカンバスなど亂雜に置かれてある。成瀨は蒲團をかぶつて[illegible]寢してゐた。

「僕あの女たち二人を伴れて來ましたよ。石段の下に待たしてます。それで、あなたから和尚さんに、あの地獄巡りの繪の話をして吳れるやうに賴んで見て吳れませんか。僕もこの前和尚さんにさう云つて賴んではあるんですが……」

參吉はおづ／＼しながらも、眞面目な改まつた調子で云つた。

「そりや君、如何になんでも、ひどいですなあ……」と、成瀨は苦笑した。

「いや、決してその、そんな皮肉な意味ではないですがね、あなたの來る前から僕はあの女たちに約束してあつたんですよ。僕たちやあの女たちのやうな罪深い人間には、多少思ひ當ることでもあるだらうと思ひましてね」

「しかし、如何になんでも……」

「いや、それはね、和尚さんもこの前話してやると云つてゐたんですよ。女たちもひどく聽きたがつてますしね。それで和尚さんが話して吳れるやうだと女たちもやつて來ると云ふんですが、でないとあなたも一緒に散步しようと云ふんで、待つてるんですよ。兎に角折角來たんだ

から、あなたから和尚さんにさう云つて見て呉れませんか」
　成瀨は仕方無しにたつて行つたが、「和尚さんやるさうだから」と云つて歸つて來た。で參吉は走つて行つて、石段の上から女たちを手まねぎした。そして急に躊躇し出した金彌を引張りあげるやうにして、本堂の佛壇の前にかけられた「孝子の地獄極樂巡り」の繪の大懸軸の前に、參吉がさきになつてかしこまつて坐つた。女たちも成瀨も並んで坐らない譯に行かなかつた。
　七十近い、耳の遠い和尚さんは、高い聲で、しかし慣れた調子で一つ〳〵說明して行つた。飲酒戒のところでは、鬼どもが寄つてたかつて、口から水をつぎ込み、それが尻から脫け出てゐる圖であつた。邪淫戒では、首から上だけが人間で、からだは獸になつてゐた。修羅道――そこでは裸形の人間どもが互ひに棒切れを持つて、唯滅茶苦茶に毆り合つてゐた。何の理由があつてと云ふでもなく、唯滅茶苦茶に毆り合つてゐるのである。劍葉林――そこでは上の方に美しい女がゐて、それに近づかうとして裸形の男どもが、泳ぐやうな恰好をして、われ先きにと劍の林の中を驅け廻つてゐる圖である。
「あゝこれだ！」と參吉は思はず聲をあげた。「ご覽よ金彌さん……實際にも男はよくこんな恰好をするぢやないか。あなたなんかこの女の方だ、……よくご覽、實によく出來てるぢやないか。だからあなたなんか罪が深いと云ふんだよ」と參吉はしつこく繰返した。
「いやこれはみんな婆婆のことを寫したもんで、ほんたうによう出來てます」と、和尚さんは得意げにうなづいた。
「では今日はこれ位にして置いていたゞきませうか。私たちには地獄巡りの方だけで澤山です、みんな極樂の方には緣遠い人間ばかしが揃つてるんですから」
　成瀨はもう我慢が出來ないと云つた顏して、和尚さんの耳に口を寄せて云つた。
「さよか？」と、和尚さんは拍子拔けの、しかしにこ〳〵した顏して、默つた。
　成瀨の室で紅茶を飲みながら、晩に浪花節芝居をみんなで見に行かうかと云ふ話が出た。
「實は僕非常に芝居嫌ひなんでね、それに僕今夜あたり書き出さうと思つてゐるもんだから、……なんだつたら遲くなつてから一寸行きませう」
　もぢ〳〵落着かずに默つてそんな話を聞いてゐた參吉は、斯う云つてふいと起つた。
「まあいゝぢやありませんか。わたしたちも一緒に歸ることよ」金彌は緣先きまで出て來た。
「いやいゝんだよ。君たちは殘んなさいな。僕一寸用事もあるもんだから……」
「まあいゝぢやありませんの。ね？　ね？　田口さん、ね、いゝでせう？」
　わかつて？――ひたと參吉の顏に向けられた、悧巧さうな金彌の眼は、斯う云つてゐるやうに見えた。しかし參吉にはそれをどう信じていゝか、わからなかつた。彼はたゞ泣き出したいやうな發作を感じた。で彼はくるりとうしろ向くと、そのまゝ默つてすた〳〵步き出した。
　鹽田平のほとんど全面を見おろした寺の石段の上から、彼は珍らしく淺間山の噴煙が、他の雲とは際立つて白く流れてゐるのを望むことが出來た。彼はそれを眺めながら、自分の心持を鎭めようとするかのやうに、高い石段を一段々々とゆつくりおりて來た。
　夕方、彼が淋しい晩酌の盃を嘗めてゐると、宿の息子の亘がはひつて來て、
「――今金彌に會つて來ましたがね、芝居の方はかの客に玉を附けさせたから、待つてるから是非早く來て呉れつてましたよ」と云つた。

「ほかの客に？　ぢやあ何ですか、ほかの客と一緒に行つてるのを、僕等は離れて見てると云ふ譯ですか？」
「いやそんなぢやないでせう。多分藝者たちのおごりになるんでせう。だから折角のなんだから一寸でも行つてやつたらいゝでせう。……切符代なら僕持つてますよ」と云つて、亘は一圓札の上に載せた。
　ずつと年下の亘の眼にも、この頃の參吉の樣子はいくらかをかしげにも、またほんとに同情せずにゐられないやうなところがあつた。「かうした職業の人に似合はない何と云ふ初心な、單純な、……まるで田舍藝者なんてどんなものとも、理解が無いらしい。てんで遊びと云ふことを知らん人らしい。しかしほんたうに正直な、氣の毒な人だ」亘はかう思つてゐた。で宿料の方もかなり溜つてゐるのだが、親父との間にはひつて、嚴しい催促がましいことは云はさないやうにしてゐた。
　四時に役場を退けて來る亘は、門の外からまづ第一に、參吉の二階の室を見あげずにゐられなかつた。額にかぶさるほど髮を長く延ばした、青白い神經質な顏して、兩膝をだきかゝへて、ぢつと濁つた空を眺めてゐる參吉を見ることは、亘にも傷ましい氣がした。參吉はちよいちよい持病の喘息をおこした。さうした晩には、遲くまで枕許に坐つて濡手拭で額を冷してやつた。
「ね亘さん、今度はひとつ僕に應援して下さい。僕はいゝ作さへ書ければ、何にもいらないのですからね、金のことは屹度僕拂ひますからね、僕がどうか書けるまで僕を助けて下さい。僕も人から受けた厚意を忘れるやうな人間でもありませんからね。金彌のことにしても、ほんたうは僕そんなぢやないですよ、僕最初からあの女をどうしようなんて考へたこともないんですからね。唯僕は、成瀨君の趣味の下等なのに腹が立つのですよ、金彌は僕のことを、いゝ人間だけれど嫉妬深いと云つたさうですが、そんなぢやありません、僕も最初から成瀨君のことを田夫野人だと思つてゐたのなら、決して腹なんか立てなかつたらうと思ふですがね。併し彼だつて藝術家ぢやありませんか！　何と云ふ惡趣味です！　あなたにもわかるでせうが、多分金彌は蹂躙されるに違ひないと思ひますがね、それかつて僕は金彌を嫌惡する氣はありません、……かの女は商賣人だから。しかし僕は藝術家のあゝ云つた趣味はほんたうに好まない。しかし兎に角僕はあの人たちから離れて了ふつもりですから、亘さんも僕のことは心配しないで下さい。僕にもほかに屈託しなければならない問題がどつさりあるんですからね……」
「えゝわかつてます。僕にもわかつてますよ。だから金のことなぞ心配しないで、ほんとにひとついゝものを書いて下さい」
　亘は素直に同情して云つた。そして、
「では僕ひと足さきに行つてますからね、あなたもご飯をめしあがつたら一寸でもいらつしやいな」と云つて、出て行つた。

三

　參吉の芝居へ行つたのは、十時過ぎであつた。泉屋の藝者が全部四人、――それから子供等まで。成瀨は棧敷のうしろの方に、メリンスの大座蒲團に坐つて、金彌と身體をすり着けてゐた。亘はほかの女たちの間に挾つて、舞臺に眼を遣つてゐた。
「隨分ね、……待ちましたわ」
　金彌は斯う云つて、怨じるやうな眼附を見せて、棧敷の前の方に彼の席をつくつた。
「どうも濟みませんでした。僕どうも酒を飮まんとご飯をたべられないもんだから、これでも

「大急ぎで濟まして來たのです」

參吉は拗ねてでもゐるやうに思はれさうな疚しさを云ひわけしながら、金彌の身體には觸れないやうに用心して、窮屈に坐つた。子供はビールをどん／＼運んで來た。みんなかの女等のおごりである。旦那然と納つてゐた成瀨は、明かに參吉の來たのを悅ばないやうな色を見せた。二人はお互ひに一寸口を利き合ふやうな氣分にはなれなかつた。

「ほんとにお待ちしてゐたことよ。……いらつしやらないんですもの」

金彌は斯う繰返して、しきりにビールをついだ。參吉にも、金彌のかう云ふ言葉の裏に僞りがあらうとは思はれなかつた。これまでお互ひに厭な思ひをせずに、つき合つて來た間柄である。昨今の成瀨をおごつて、彼を彈くと云ふ筈がないのだ。若しさうだとせば、成瀨を唯金持だからと見込んだ爲めに違ひない。しかし參吉は、金彌を全然そんな性質の女とは考へてゐなかつた。

舞臺の上では何か知ら譯のわからぬことをやつてゐた。舞臺のわきの高い臺の上から、時々締めつけられるやうな聲して浪花節がうなり出されると、今までしやべつたり動いたりしてゐた役者どもが、ひたと鳴をしづめて、立ちあがつてゐたものは立ちあがつたなり、控へてゐたものは控へたなりに、その一節が語り終るまで、下手な人形になつて了ふのである。奧山の花屋敷の人形ならば參吉にも美しいと思はれるが、これはまたいづれも、餘りに不細工な人形であつた。それに元來眼性のよくない參吉は、舞臺の上に見惚れる氣もなく、案外綺麗な建物の中など褒めたりして、ビールを飮んでゐた。

成瀨はひどく浮かない顏しながらも、つき合ひのつもりか神妙に舞臺の方を見てゐて、時々通人らしい口調でうまいとかまづいとか云つてゐた。が參吉には、彼がはひつて來てから特にさうとしか思はれない成瀨の浮かない、焦躁をおし隱した顏を見てるのが、ひどくつらく思はれた。參吉は時々コップを差しながらも、なるべく成瀨の顏は見ないやうにつとめてゐた。

がふと氣がつくと、成瀨の胡坐の膝が、抑つけがましく金彌のしんなりした膝の上に載つてゐた。金彌の華奢な白い右の手が、洋畫家らしく日に燒けた勞働者のやうな兩手の中に、しつかりと握りしめられてゐた。そしていかさま嚔でも堪へてゐるやうな、をかしげなほど昂奮した表情をしてゐた。參吉はつい昨日のこと、成瀨が、自分は性慾を感じると嚔が出ると云つたことを思ひ出して、をかしくなつたが、しかしその不作法には耐へられない氣がした。「そんなことをしなければ女と遊ぶことが出來ないとは、何と云ふ惡い趣味だ！」と、またしても彼は思はずにゐられなかつた。

「よさして吳れよ……」と、參吉は哀願的な眼を金彌に向けた。

「よし給へよ。僕は君とは最初から張り合ふ氣がないのだから、女は君の自由だが、しかしそんなにヤキモキして不作法なことをして吳れるな」と、參吉はまた成瀨にかうした非難の眼を向けずにゐられなかつた。

「ほんたうだわよ……」と、金彌の眼がこたへた。

參吉はまた、氣が鬱いで來た。所詮美しい終りを見ると云ふことは、最早望みないことである。成瀨は所詮往く處まで往かずには已まないのだ。參吉はたゞ金彌を美しい友達と思つて、つきあつて行きたかつたのである。が斯うなつては何もかも駄目だと彼は思つた。また金彌に對してこれ以上の理解を望むことは無論出來ないことだし、またかの女の境遇としては餘儀ないことでもある。しかし兎に角に彼は離れて

了はなければならないと思つた。「哀れなる藝術家よ！ 大いに成金の向うを張るがいゝ。そして、鼬のやうに、ほんたうから愛しもしない女の咽喉首を掻切ることの本能を滿足せしめよ！」
　ぼんやりと舞臺に遣つてゐた彼の眼は、斯うした悲憤めいた、また哀憐の氣持から、ぼうつと曇つて來るやうに感じられた。
　かすかな、遠慮勝な觸感が、彼の股のあたりにそうつと忍び寄つて來た。彼はそうつと避けた。また寄つて來た。また逃げた。――ビールを飲むふりをして、桃子に煙草に火をつけさせるふりをして、彼は逃げた。五六回繰返された。女郎蜘蛛との戀愛が直ちに男性の悲劇に終ると云ふ、その微妙な、用心した觸鬚の挑み合ひかのやうに、短い時間のあひだに彼等は追かけたり逃げたりした。しかし恐らくかの女の方は、餘りに深入りし過ぎたであらう。參吉はかなり棧敷の欄に窮屈に押つけられたやうだから。
「許して吳れよ。プライドを傷つけられたと思ふか知らんが、決してそんな譯ではない、そんな譯ではない……」と、彼は眞實から心のうちに詫びた。

がかの女はすつと起つた。成瀨と參吉との間を離れて、別の桝に席をうつした。彼はかの女の眼をまともに見ることが出來なかつた。
　云ひやうのないやうな悲哀と孤獨を感じながら、彼はひとりで出て、暗い觀音の境內を拔けながら宿に歸つて來た。床の中にはひると、絕えて久しぶりな、胸の中から湧いて來るやうな淚が湧いて來た。金彌のこと、彼自身のこと、また斯うしたことで日を送つてゐる申譯無さから――

四

　暗いうちに眼が醒めた。十七八年前に亡くなつた母のことを、久しぶりで夢に見た。それがほとんど凌辱にもひとしいやうな行爲を母に働きかけてゐた彼だつたので、參吉は眼がさめて、ぐつしより冷汗を掻いてゐたが、空恐ろしさから、戰慄した。ふだんから、母が夢に現はれた時には、警戒しなければならんと信じてゐる彼は、床の中で心から許しを乞うた。母は、ラヴとか戀愛とか云つてうつゝを拔かしてゐる此頃の自分を、警めたのに違ひないと彼は信ぜずにゐられなかつた。
　がまた、かう暗いうちに眼がさめるやうな時は、屹度彼の持病の喘息の發作の催しかけてゐる時であつた。彼は用意のモルヒネの頓服を一服飮んだ。一時間ばかし經つてまた一服飮んだ。
　朝も晝も、ご飯を食べずに寢てゐた。空は今日もまた鬱陶しく灰色に濁つてゐた。枕許の洗面器で、宿の若い娘が手拭を絞つて吳れた。彼のどんよりと濁つた眼には、見慣れた對うの松山の翠も、雀や燕の飛び交ふのも、やはり下らなく退屈な思ひを誘つた。軒向うの宿屋では、今日もまたいちんち、下手なオルガンがブウブウ鳴つてゐた。「何枚でも出來ただけ送れ」と云ふ東京の雜誌社から嚴しい原稿催促の電報が來た。今日は十八日である。彼はかうした齒がゆい自分の胸を、ほんとに掻きむしつて了ひたいと思はずにゐられなかつた。
　參吉が東京を出たのは、まだ三月の上旬であつた。彼は遙々と備後の尾道まで、友達を訪ねて行つた。彼等は四五年ぶりで會ふのであつた。彼はそこに二ケ月程も厄介になつてゐた。この二年ほどの間に父、母、兄、妹、と悉くに死別れた友達は、まだ來て三四ケ月にしかならない十五六も年齡の違ふ若い細君と、大きな家に二人きりで住んでゐた。嫂の實家と遺產

問題で裁判沙汰になつてゐて、なか／＼事が捗取らないので、友達は氣を腐らしてゐた。
「あゝ面倒臭い。俺はもう田も屋敷もいらないから、叔父の保管してる株劵の二千圓だけでもよこせば、それでもう綺麗に片附けて了ふ。こんなことでは、ほんとにおれはたまらない……」と、友達は毎日のやうに暗い顏して嘆息した。
おゝ、あの忠實な、コマ鼠のやうによく廻る、活潑な、無邪氣な若い細君よ！
參吉は床の中から、濁つた空を眺めて、頓服でおさへた後の割れるやうに痛む頭を兩手でおさへて、から浮びかけるやうに、友達夫婦のことを想ひ出さずにゐられなかつた。――彼等は既に郷里を出發したと云ふ途中から出した葉書の通知が、きのふ參吉のところへ着いた。やつぱしあのまだ苦勞を知らない、無邪氣な若い細君をつれて、あの修羅の巷へ、やつぱし出て來たのか！　と參吉は傷ましい氣持で考へない譯に行かなかつた。
友達夫婦と參吉とは、毎日のやうに揃つて山へ登つたり、船で島巡りしたりして、日を暮した。食ふに困らず、また問題の片附き次第一切の始末をつけて上京する決心の彼等は、やはり所在無い日を送つてゐるのだつた。參吉もやはりそこでも電報催促の責苦に會つてゐたのだが、氣持に緊りが無く、やはり毎日のやうに彼等のお伴をしては、うらゝかな瀬戸海の春に醉うてゐた。
「どうかなあ、やつぱしそんな氣持になれないのかなあ、……銀行か會社へでも出て安穩に暮す――魚がうまいし、酒がうまいし、それで今に子供でも出來たら、文句がないと思ふがなあ。これからまたあの文壇の修羅道へはひつて行く――それも君ひとりだつたらなんだが、若い細君が可哀想だぜ」
「いや、僕もね、これまで幾度かそんな氣になつて見て、銀行や市役所なんかへも勤めて見たんだがね、やつぱし駄目だよ。勤まるもんぢやないよ。それに、僕も兎に角葬るものはそれぞれ葬つて了つたし、これを機會に生活を根本から改めて見たいと思つてゐる。……ほんたうに故郷と云ふところほど厭なところはない」
二人は毎晩の長い／＼晩酌をやりながら、こんなやうな話をし合つた。
あの朝、十時頃二人は近所の湯屋へ行つた。四五人しかはひつてゐなかつた。近所の料理屋待合の主人と云つたやうな人達が多かつた。が彼等があがつて見ると、棚に入れてあつた參吉の着物から帶からすつかり無くなつてゐた。――これから市場へ廻つて、晩のチリの鯛でも仕入れて來ようと思つて持つて來た五六圓はひつた蟇口も。近所の交番から若い氣の好ささうな巡査も來たが、無論幾日しても品物は出て來なかつた。
「おれの着物を盗るなんて、よつぽどの茶人だね」と、參吉等は笑つた。
參吉は友達の引ずるやうな長い、しかしずつと上等な着物を着込んで、ステッキを持つて、二人はやはり毎日そちこち散步した。例の若い巡査が交番に出てゐると、退屈な彼等は、
「どうでせう、まだ手がかりがありませんかね？」と、笑ひながら訊き／＼した。
「さあ……」と巡査も笑ひながら、當惑した顏した。
「僕さきに歸つてよう……」と、ある晩だいぶ酒の浸みた時分、突然のやうに參吉は云ひ出した。
「東京でお目にかゝります。いろ／＼お世話になりました。……ちつとも怖がることなんかありません。東京の方は却つて淋しいゝですよ。……さよなら」
十一時の夜汽車で、參吉は友達夫婦に送られ

て、から云つて若い細君の手を握つて振つた。涙のにじみ出さうな氣持で――

が都會で彼等を待ち受ける筈だつた參吉は、やつぱし都會に堪へられないで、間もなくこのS州の山の中の溫泉場へ逃げ込んで來た。

「やつぱし出て來たか。……どうか善良なる彼等の爲めに幸あらしめ給へ」

參吉はぢつと憐ましげな眼つきを灰色の空に向けて、祈るやうに心の中に呟いた。

五

夕方氣持の直つたところで、參吉は机に向つた。今夜は酒をやめて、徹夜でもしなければならないと思つた。――「彼等はアルプスへ」と、原稿紙へ小說の題を書いた。

「僕あの女を日本アルプスへ引張つて行きたいと思ひます。そして人間未踏の地で奔放な戀を語りたいと思ひます」と、いつか成瀨が云つたことを思ひ出したのだ。

「僕あなたの短篇集を讀んで見ましたがね、非常に奔放な點が缺けてると思ひますね。生活と云ふことは非常に人間の感情を萎縮させますからね、あなたの創作に奔放性が無いと云ふことは、ひとつはあなたが生活に非常に苦勞したと云ふからかも知れませんね。奔放性の無い藝術は、氣の拔けたビール見たいなものですからね。それに一體にあなたの態度は非常に消極的だと思ひますよ。あなたの小說の中で、あなたが友人から五十錢一圓と米代を貰つて來るやうな生活をしてゐたことが書いてありますが、僕だつたらあんな生活は迚も我慢がなりませんね。僕があんな場合になつたらどん〳〵進んで俥でも何でも曳きますね」と、やはり成瀨は彼の創作や態度を批評して云つたことがある。

參吉はさう云はれると、今更のやうにその時分の悲慘だつた生活が思ひ出されて、悲しくなつて口を噤んだが、

「しかし僕も、それは、働く氣ではあつたのですよ。僕これで、ちよつと政治經濟の訪問原稿が得意だつたんですよ。創作の方には自信がありませんが、その方には自信があつたのです。僕一ケ月二十圓か二十五圓の月給で、毎月六十頁位書かされたものです。それでも僕は神妙に勤めたものです。それでも一枚二十五錢かそこいらの創作を書くよりは割がいゝですからなあ。創作を始めると氣が立つて來ますからね、酒なぞも澤山飮むです、迚も一枚二十五錢や五十錢に賣れたんでは、晩酌代にもなりません、書けば書くほど損と云ふことになりますからね、ほんたうは創作は僕には禁物だつたのです。僕元來は遲筆家の方ですがね、しかし書けば書くほど損と云ふんでね、一層遲筆家になつて了つて、しまひには一日に二行三行と云ふことになりました。そしてなるべく自分を昂奮させない方が、それだけ酒代の方で得と云ふことになりますからね。訪問原稿の方だつたら、單なる勞働ですからね、一ケ月二十圓か二十五圓で六十頁も書かされても、そんなに頭に來ませんからね、そんなに酒代に影響しません。それで僕は大いに勤勉な方だつたんですが、困つたことには僕病氣を持つてゐるんです、それがまた意地わるく、丁度あと三四日で締切り、もう一人か二人訪問すれば濟むと云ふ場合になつて、發作が出て寢込むものですからね、あいつずるいと云ふことになつて、結局どこへ出ても、たうとう參拾圓級の記者になれずにしまひました。それで創作の方はそんな譯で、書けば書くほど損と云ふんでね、どうも仕方が無い、五十錢一圓と友人からでも貰ひ集めるほか仕樣がなかつたのです。しかし僕のものも、この頃はどうやら賣れるやうになりましたからね、書けば晩酌位は飮めさうですからね、これから

は大いに奮發して書くつもりです。それもなるべく長めに〳〵と、――つまり馬面のやうな小說を書かうと思つてゐます。馬面だつて、別に不具と云ふ譯ではありませんからね、目鼻だつて揃つてるのですからな、唯あまり見よいものでないと云ふだけで、世間だつてそれで通るですからな、僕も大いに差支へないだらうと思つてゐます。それでないと迚も僕等貧乏人はやりきれないですよ。そこへ行くとあなたなんか實に幸福ですよ」と、參吉は一歩々々墮落して行く自分の姿を虛空に描くやうな氣持で、その時から云つた。

　彼等は觀音堂の高い境內から、暮れ行く淺間の山脈を眺めてゐたのであつた。おまゐりに來た金彌と桃子は、遠くから參吉に目禮した。成瀨はその時まだ金彌たちを知らなかつた。

「ちよつと樣子のいゝ女ですね。田舍の藝者としては珍らしい方ですよ。顏がいゝから若く見えるやうだが、もう二十六七か知ら？……」と、成瀨は注意深く見て云つた。

「そんなものでせうね。なか〳〵悧巧な女です、僕あの女を一番好いてゐます。手紙なんかも實にうまいものです。僕この間も一寸した文句で泣かされましたよ。僕なんかの生活も心細いものだが、あゝ云つた女の生活なんかも實に氣の毒なものでせうからね。兎に角こゝでは一番の姐さん株でなか〳〵威張つてますがね、借金なんか千圓も背負つてるらしいですよ。それもこゝへ來る前にゐた土地で、ちよつとした義理合ひから深くなつた若い男が、禁治產者見たいなことになつたんで、その男へやつた金らしいですね。なか〳〵いゝ女です」と參吉は女をほめた。

「さうですか。あなたはなか〳〵懇意なんですね、それでは。あなたはちよつと苦勞人らしいところがあるから、女には好かれる質でせう」

「いやそんなことはありません。僕等はたゞ友達と云ふことになつてゐます。それに僕の氣持としては、あゝ云ふ女と關係すると云ふことが、相手を汚すやうな氣がしましてね、また自分も汚されるやうな氣がしますから、他の男が汚すのをどうすることも出來ませんが、僕は關係したくありません。それに僕は泉屋へだいぶ借金も出來てますから、さう會はないです。あの女は時々手紙を呉れます。昨日もどつさり櫻んぼを屆けて呉れたんで、氣の毒に思つてます。僕等の程度はそれ位のものなんです」

「ほうさうですか。そりやお安くありませんね。あなたもなか〳〵隅に置けませんね。ほうさうですか」と、成瀨は感心したやうに大袈裟に繰返した。

「ご案內しませうか？」と、參吉は云つた。

「えどうぞ……」と、成瀨は昂奮した調子で云つた。

　二人はすつかり暗くなつた境內から高い石段をおりて、そこの泉屋へはひつて行つた。

　その晩は金彌は明かに、成瀨へ樣子を差向けようとつとめてゐた。が成瀨の奪略的傾向と破壞性とが、直ちに焦躁に働きかけた。そして一方には「これで君どうかし給へ」と云つた調子で、金彌の前に蟇口を投げ出して、參吉に對して旦那の態度を執つた。參吉の臆病な胸の中はたゞブル〳〵慄へてゐた。いつの間にか、成瀨は床柱の前からにじり寄つて來て、長い毛脛の足を金彌の膝に載せたり、頰鬚の多い顏をすりつけたりしてゐた。參吉は餘りの不作法さに顏を顰めながらも、まだ明かな非難の態度は見せなかつた。「なあんだ、こんなやり方か……」

　これまで幾度か他人の細君や處女や商賣女に戀愛をしかけて來たと云ふからには、殊に美術家でもあるとして見れば、多少他人へも美感を與へるやうなやり方ですることかと思つてゐた

參吉には、全然の期待はづれに、いくらか呆氣に取られた氣持で、キョト〲と落着かない氣持の眼を見張つてゐた。成瀬は酒に醉つたのか、兎に角ひどくそは〲し出して、隣りの室へ行つて寢轉んで見たり、金彌のうしろから抱きついたりして、ぢつと坐つてゐることが出來ない樣子であつた。

　時間過ぎになつて、成瀬は泊つて行くと云ひ出した。

「あなたも泊つていらつしやいな」と、金彌は參吉に云つた。

　表二階の暗い座敷へ、座蒲團が二枚づつ敷き並べられた。二人は並んで横になつたが、金彌は掛蒲團を持つて來ようと云つて出て行つた時、參吉は突然「僕歸らう」と云つてたちあがつた。自分の氣持のうちにやはりある卑しい影がさした氣がしたので、かなり醉つてはゐたが、彼は歸らうと云ふ氣になれたのだ。すると「ぢや僕も歸らう」と成瀬も云ひ出して、むつくとおきあがつたが、いきなり表通りの障子を開けて、

「僕はこゝからおりる」と、云ひ出した。

「あぶない、あぶない……」と云つて、參吉は引止めにかゝつたが、成瀬は欄を跨いだと思ふと、するりと身輕に、觀音前の通りの石だたみの上におりて立つてゐた。

「僕のぼつて見せるよ」と、下から叫んだと思ふと、今度も猿のやうにするりとのぼつた。二三度もその藝當が繰返された。

　參吉はその晩のことを考へると、ほんとに成瀬と云ふ人間は怖い人間だと思はずにゐられなかつた。

　泉屋を出たすぐ前に、鐵板で出來た太鼓橋がある。極度の昂奮狀態におちいつた成瀬がその響きを立てる橋の上にかゝると、オー〲と二三度大きな聲で叫んで跳躍したと思ふと、「田口君も踊れ!」と云つて參吉の手を引張つて、この間光樂寺に長野から講中の團體が來て盆踊りををどつた時おぼえた囃しの何チョー、何チョーを連呼しながら、深夜に恐ろしい鐵板の響きを立てて、踊り狂つたのだ。それから片つぱしから料理屋をたゝきおこし始めた。往來へ出て四つ角の軒下に馬車が置いてあると、

「おれはこれを往來へぶつ倒してやる! 見てろ!」と、かぢ棒に手をかけて、ひき出し始めた。

「君止し給へ! 止し給へつて! そればかしは止し給へ! 分署も近いし、それに馬車屋なんてどんな人間が出て來るかも知れないから」

　參吉は斯う叫んで、死力を出しておさへにかゝつた。脊丈の高い力の强さうな成瀬の身體と、痩せこけた參吉の身體とがしばらく往來でもつれ合つた。成瀬の腕にしがみ附いて參吉は往來に倒れて膝頭をひどく擦りむいた。

「よし〲、それでは馬車は許してやる。馬車屋の奴! 貴樣の馬車は許してやるぞ!」

　今度は成瀬は、參吉の長い髮の毛を引張つて、ぐん〲觀音堂の方へ引返して來た。そして境内の黒板傳道と云ふ、立派な欅で出來た揭示板の柱に向つて、わつしよ! と掛聲して兩手でむかつて行つた。參吉はこゝでも哀訴嘆願しておさへなければならなかつた。五百圓からの寄附金で出來たものだとも云つた。

「なんだ、五百圓ばかしのはした金が何だ! 一體こゝの堂守が生意氣だよ! 黒板傳道? 洒落臭い! 今日出て居つた蛙禱? 何の意味かい! あんなことでこの活きた人間に傳道が出來ると思つてゐるとは奴よつぽどの僭越な奴ぢやよ。よし! おれがみんな消してやる! 生意氣だ!」

　成瀬はかう云つて、脊丈の高い身體の手をのばして、片つぱしから白墨で書いた蛙禱――の

文句を消してしまつた。

　むかし愚かな蛙どもが清水寺におまゐりに行つて、佛さまに、どうか自分等も立つて歩けるやうにして呉れと無理な願がけをしたが、佛さまはよし〳〵と云つて聽きとゞけて呉れた。ところが、歸る場合になつて、大得意で歩き出したが、眼玉がうしろになつてしまつたので、どうしても自分等の池へ歸ることが出來ない。だから無理なことを禱つたりするものぢやないと、蛙の繪などかなり雅致のある筆で書いた蛙禱の文句を、成瀨は片つぱしから消しはじめた。

「からなつて來ると、何か知ら一つ破壞性を滿足させないと、納まりがつかないだらう。しかし何と云ふ變つた男だらう。或は多少色情狂的傾向を帶びてるのかも知れない……」と、今度は參吉も默つて、鬱ぎ込んだ氣持で成瀨のすることを見てゐた。

六

　――彼等はアルプスへ、と題を書いて、濁つた空を眺めて、成瀨たちが人跡未踏の深山で所謂奔放熱烈な戀をさゝやく光景を空想してゐると、またせか〳〵と中庭をはひつて來る成瀨の足音が聞えたので、參吉ははつとして、空想の絲を斷たれた。成瀨は入つて來るなり、例のいらいらした調子で、

「僕金を持つて來ました。僕誰からでもおごられたりすることが實に嫌ひな性分でしてね、殊にあんな女たちからおごられたりすることは厭ですから、今夜はこつちで返してやらうと思ひますから、あなたもつき合つて下さい」と閾際に坐つて云つた。

「さあ……」と、參吉は氣乘りのしない返辭をした。

「あなたはあの女にふられたんで、すつかり離れてしまひましたね。一體あなたがわるいんです。この前女たちとこゝへ送つて來た晩、あなたが僕をおこつて歸れ〳〵つて呶鳴つたでせう。あの晩からあの女がぐつと僕の方へ來てしまつたんですよ。つまりあなたがふられたんですね。ハヽヽハ。一體あの女が僕のどこに惚れたんだか、僕にもまだよくわからないですよ。僕は自分の浮氣だつてことは自分からも云つてあることだしね」

　成瀨は眼鏡越しの眼尻ににや〳〵皺を寄せて、から云つて參吉の顏色を探るやうに見るので、參吉は眼のやり場に困つた。

「さらです。僕はほんとにあの女からふられましたね。僕は實際悲しんでますよ。併しまた、ふられて歸る果報者つてことも云ひますから、僕はさう思つて諦めるほかありません」と、參吉はほんとに悲しさうな顏をして云つた。

　參吉は成瀨に歸れ〳〵と云つておこつたと云ふのは、あの光樂寺に地獄巡りの話をきゝに行つた前の晩のことである。しかしその晩參吉が成瀨をおこつたので、それでその晩から女の心が參吉を離れて、ぐつと成瀨に傾いて行つたとは、參吉にはかんがへられなかつた。參吉はその晩から不作法な相手に女を引渡して、――何しろ相手がわるいや、から思つて自分は離れてしまはうと思つたのは事實であるが、しかし女の心持が彼を離れたのは、ゆうべ芝居でかの女の挑みを斥けた時からであらねばならないと、參吉は思つてゐた。歡愛主義者なんて云つてゐても、案外神經が粗雜なものだと、その點では參吉は寧ろ成瀨を憫笑したかつた。が金彌のことを考へると、參吉の心は痛んだ。かの女は屹度、ゆうべのことに腹を立てて、一足飛びに成瀨の手の中に飛び込んで行くに違ひない。さうした性質の勝つた女ではある。しかし何と云ふ、簡單な、あゝ云つた種類の女たちの常習的な心理か！　もつと美しくて、複雜な、

不離不卽な戀愛の彩と云つたやうなものを見せることが出來ないものだらうか？　金彌はいくらかそんな道に長けた女と思つてゐたが、やつぱし駄目か！「何しろ相手がわるいや」と、參吉は、まだ肉を得ない焦躁さを露骨に現はしてゐる成瀨の顏に、臆病な視線を投げた。

「兎に角行きませうよ。あなたにさう悄げられると、僕も少し困つたことになりますがね、しかしあの女にあゝ熱烈に出て來られて見ると、行きがかり上僕もどうも仕樣がありませんからね。その代り今夜は僕大いにおごりますよ」

「いや、それは、僕も行つてもいゝですがね、しかしあなた方からばかりおごられても濟みませんからね、金がはひると、僕は今夜の分前は出しますよ。それでは行きませう……」

亘もはひつて來た。「僕は今往來で呼びかけられて、弱つて了ひましたよ」と云つて、色白の優顏に嬉しげな笑ひを浮べた。亘は月が代ると一本で出る十七の若い妓と惚れ合つてゐてその日の來るのを指折り數へて待つてゐるのであつた。

「あゝほんとに別所には色男が多いなあ。僕ばかしがつまらないなあ。金彌にはふられるし……」と、參吉は二人の顏を見くらべて、嘆聲をもらした。

「ほんとに田口君には失敬しましたね。ハヽヽハ」と、成瀨は膝を抱いて大きく笑つた。

「ほんとにさうですよ。成瀨さんは人がわるいですよ」と、亘は參吉に同情した眼附を見せて云つた。

「ほんとに田口さんは氣の毒なんですよ。うちの母や妹なんかも、大いに田口さんには同情してますね。あんなに金彌々々つて云つてたんですからね、あの櫻んぼを貰つた時なんかの悅び方つてありませんでしたよ。そしてちよいちよい手紙の往復でせう、そのお使ひ番はいつも私なんで、ちよつとテレましたね。そのくせきまりがわるがつて、私がいくら藝者部屋へつれて行かうと云つても、いつも駄目なんですよ。それで、金彌がゆうべ癪でもおこしたなんて聞かうものなら、さあ大變です、仕事なんかもうそつち退けです、手紙を書くとか菓子を屆けるとか、いやはや騷ぎなんでしてね、まつたく驚いてしまひましたよ。しかしほんたうのところ、私たちには田口さんの心持がよくわかりませんね。そんなにしてゐて、それで金彌をどうかして了はうなんて心持が、更に無いらしいですからな。そのくせ金彌も云つてるやうに田口さんもやはり嫉妬心は持つてるやうですね……」

「隨分持つてますね」と參吉も云つた。

「しかし、嫉妬と云つても、僕のは少し違ふ氣がするんですがね、しかし金彌がさう云ふ風にとつたなら、それも仕方が無いです。僕はたゞ、あゝ云つた賴りの無い女たちを、僅かばかしの金で以て蹂躪しようと云ふやうな、男の心がけに、反感を持つのです。かの女等にたましひなんか無いときめてゐるやうな失敬な人間を、僕は好かないのです。――成金たちでもやるがいゝ！　あゝ云つた賴りない存在に溫かい同情を持つことの出來ないやうな藝術家だつたら、それは藝術家でも何でも無い、娑婆の惡黨です！　僕はそんな人間の藝術を決して信じない」參吉はいつになく靑い瘦せこけた頰をヒリヒリさせて、挑戰的な眼附を成瀨に向けて行つた。

「そんなことがあるもんですか。あんな女たちにたましひも靈魂もありやせんですよ。僕はこれまで隨分あんな女たちには接して來てますが、みんな簡單に金で始末がついてますよ。女はすべて、くろうともしろうとも、打算のほかには何もありませんよ。金にはどんな女だつて、動きますからね。僕は自分の妻の場合だつ

て、さういふ風に見てますがね。あなたはこれまでの境遇上あまり遊びをせんやうだから、實際の女ちふものを知らないからそんな風にかんがへるのでせうが、今度の場合だつて、あの女が急に途中から僕の方へ傾いて來たと云ふのも、やはり金の問題、打算の問題に過ぎないと、僕はかんがへてますよ。あなたにはやつぱしあの『雪をんな』と云つたやうな夢幻的な女と云ふものしかわからないやうだが、小說家としては大いに修行する必要があると思ひますね。しかし今度のことはあなたにはいゝ經驗だつたでせう？……」と、成瀨は勝誇つた態度で云つた。

「まあさうでしたなあ」と、參吉は悲しさうな顏して云つて、口を噤んだ。

二人は泉屋へ行つて、よそへ出てゐる金彌をビールを飲みながら默り込んで待つてゐたが、

「今晚は、……まあ嬉しいわ」

斯う云つてはひつて來た金彌の憎惡と自棄に燃え立つたやうな眼が、ピリ、と參吉の眼に映つた。「お前もいつしよだつたの？　お前なんかにはもう用が無いんだよ」金彌の美しい怒りの眼が、から云つてるやうに見えた。參吉は「決してそんな譯だつたんぢやないんだよ……」と心のうちに辯解しながらも、餘りに豫期通りだつたには、今更のやうに悲しい空虛を覺えない譯に行かなかつた。

芝居へ行つてからも、參吉だけが別の桝にひとり淋しく坐つてゐた。前の晚と同じやうに、彼は舞臺の上を眺める興味どころではなく、醉つた我儘な耳には、浪花節のうなり聲や惡ふざけした臺詞やが、堪へられないものに響いた。彼はそれを紛らす爲めに、不遠慮な聲して、隣りの桝で熱心に舞臺に見恍れてゐる桃子にうるさく話しかけた。

「うるさいぢやありませんの。ちつとも云つてることが聞えやしない」と、成瀨とぴつたり喰附いて坐つてゐた金彌が、から云つた。――ほざき居るな、と參吉もむつと思つた。

「やつぱし田舍藝者だつたなあ……」

參吉もから浴せて、すた〳〵と出て來た。成瀨は參吉の立つたのに氣がつかないかのやうな顏して、やはり舞臺の上に眼をやつてゐた。

七

參吉は無理にも心を仕事の方に向けなければならなかつた。彼はこの頃の梅雨時の氣候にたたられてゐるのか、或はまた彼の弱過ぎる呼吸器にはこの邊の高原地の荒い空氣が適しないのか、こゝへ來てからは斷えず喘息の兆候に惱まされてゐた。彼は每朝一度は、喘煙草をかがなければならなかつた。その爲めにふだんから良くない頭が、一層不快に濁つた。鬱陶しく濁つた灰色の空を眺めてゐると、彼の胸はひとりでに喘ぎ出した。「いつ晴れるだらう？」と、彼は嘆息した。また空でもからりと霽れ渡つたら、この頃の厭な氣分も一掃されて、仕事の方に心が集注されさうな氣がした。――彼等はアルプスへ、參吉はその彼等の奔放壯快な戀愛でも空想することに依つて、いくらかでも心の結ぼれを散じたいと思つたが、しかしやつぱし一行も書き出せなかつた。

「彼等はアルプスへ、……やりましたね、今度は僕大いに惡者に書かれる譯でせうが、あなたは案外辛辣な筆を持つてゐるやうだから、ひどく槍玉にあげられることでせうが、しかし構ひませんよ、今度は僕がわるいんだから、あなたの大事な金彌さんを僕が橫領したと云ふ譯ですからな、ハヽヽハ」

朝夕にせか〳〵とやつて來ては、成瀨はひどくいら〳〵した表情しながらも、參吉の机の上をのぞき込んで、から豪傑笑ひを響かせた。

參吉は成瀨がはひつて來た時の表情をひと目見

ると、まだ金彌の肉を得ないことが、直覺された。成瀬が最早金彌をすつかり占領して了つたやうなことをほのめかせばほのめかすほど、云ふことが空虚に聞えて、參吉の心持は彼等から離れて行つた。

「いやそんな譯でもないですがね、僕のこれまでのものは餘りに色彩がないから、さうした奔放な戀愛でも書いたらちつとは張合もあらうかと、たゞ空想に耽つてるだけなんですよ。ほんとに僕は何を書いても張合が無くて、退屈で仕方が無いですよ。それで僕も實は大いに金彌に戀しようと思つたんでしたが、やつぱし僕は駄目ですね。僕はすつかり諦めて了ひましたよ。さうかつて借金があるので自由に飛び出すと云ふ譯には行かず、この先きどうしてこの山の中で退屈な日を送らうかと思ふと、ほんとに厭になりますよ。そこへ行くとあなたなんかアルプスへでも金彌をつれて行けるし、ほんとに自由で幸福ですよ」

參吉は題を書いた原稿紙を屑籠にはふり込みながら、暗い顏して云つた。

「さう悄げなさんなよ、あなたにさう悄げられてしまつたんでは、僕もほんとに氣の毒になりますよ。金のことなんか、さうくよ〳〵思はんがいゝですよ。僕月末金が來れば、いくらか提供しますよ。僕それ位のこと負擔する義務はあると思つてますからね。ハヽヽ。金のことだつたら、僕すけますよ」と、成瀬はまた憫むやうな顏して云つた。

參吉は鬱ぎ込んでしまつた。金々々――どうしてこの男はさう云ふか？金と云ふもので直ちに相手にスタンプを押してしまふことが、習慣性になつてゐて、謙讓な神經が麻痺して了つてるのだらうと、參吉はまたも考へさされたのだ。成瀬はその藝術家らしからぬ優越權を、いかなる場合にも、露骨に使用した。いつしよに飲みに行つた場合にも、またさうでない會話の場合にも。――彼はいつの場合でもいきなり床の間を背負つて、參吉をお供あしらひにして、女たちにその優越を見せびらかした。金があつて、利かん氣の後家の手に育つたと云ふ成瀬の境遇を觀察させるやうな性癖を、成瀬は餘りに多く持過ぎてゐると、參吉は苦々しく思はない譯に行かなかつた。

「いや金のことで僕は悄げてるんぢやありませんよ。僕はもつと〳〵ひどい貧乏ばかしして來てますから、この頃なんかまあいゝ方ですよ。それに僕は、金で心の自由が縛られるなんてことを、餘り恐れない方ですからね。たゞ僕には、からして一日々々と、すこしも美しい感情の動くやうなことがなく日が經つて行くと云ふことが、淋しいのですよ」

「さう云ふ感情の動くやうなものを求めたらいいでせう？」

「何に求めますか？」

「やつぱし戀愛ですよ。それもあんな商賣女では駄目ですね。どうしても相手はよその奧さんで無ければなりません。處女は駄目ですよ。それも年齡なら二十五六と云ふところですね。それ位の女になるとひと通りの話は私たちとも出來ますしね、それに性慾にも飢ゑてゐませんからね、ほんとに純な戀愛が出來る譯ですよ」

成瀬はまた都會へ殘して來た經驗談を、昂奮した口調で語つてきかした。

「そんなに離婚騷ぎまでしでかすやうな事をして、それであなたは良心が咎めませんか？」

「いや僕は戀愛は自由だと思つてますから、……夫だとか妻だとか云ふ古い道德感情に縛られて、自由な戀愛に活きないと云ふことは、人間の卑屈だと思ひますから、墮落だと思ひますから」

―それは無論愛の無い夫婦生活は破壊すべきでせうが、しかし普通の夫婦生活の間へあなたのやうな熱烈な自由主義者が飛び込んで行つて、兎に角に自分よりは教養に於ても年齢に於ても低い女性に向つて、誘惑を試みようと云ふその心持――さう云つた男性の心持と云ふものこそ僕には却つて醜くて、情けない、ほこりの低い、どうもこの間の地獄めぐりの劍葉林が想ひ出されるやうな氣がされますね。それにあなたは、よしそれが不完全なものであつたとしても兎に角に他の所有に歸してるものを、わきから出て行つて奪はうと云ふ興味心がだいぶお強いやうに思はれますが、それはどうしたものでせう？」

―いや、そんなことは無いですよ。戀愛は一方のものでありません、相對的なものです。たとへば、今度の金彌の場合にしたつて、あの女は僕以上の熱度で以て、あなたから離れて僕へ飛び込んで來たんぢやありませんか。あなたから奪ひ取つたなぞと思はれては、僕いさゝか迷惑しますよ。あなたにはあんな商賣女の心持なんかわからんやうですが、あんな女に眞面目な戀を求めようなんかと思つたのが、そも／＼の間違ひだつたんで、あの女はあなたの所謂「雪をんな」ぢやありません、現實の、金で賣買の出來る醜業婦ですよ。ハヽヽハ」

「しかし相手が醜業婦だからつて、こちらから眞面目な戀をしかけられないと云ふ理由は無いと思ひますがね。こちらが肉の觀念を離れてかゝれば、相手がどんな種類の女であつても、美しい戀が出來さうな氣がしますがね。かの女等こそ虐げられた、犧牲にされた、哀れな女たちぢやありませんか。それをもてあそぶ心持を離れて、つき合つて行けないと云ふことは、却つてこちらの恥辱のやうな氣がされてなりません、またあなたが既に金で以てあの女を犯してしまつたとしても、あなたの習慣性の動機は兎に角として、その結果をどこまで純化出來る出來ないかと云ふことこそ、あなたの責任だと思ふから、僕は注意してゐます。僕はその他のあなたは純情で正直な人だと信じますから、お友達になれさうな氣がしますが、しかし金さへ出せばどんなことしてもいゝと云ふやうな考へ方には同情出來ないですよ。その點で、折角おつきあひしたが、ほんたうのお友達になれさうもないので、僕は悲しく思ひます」

「僕も悲しく思ひます。しかし僕は僕の流儀でこれまで通して來たのですから、金彌の場合にしても、仕方が無かつたのですよ」

「そんならば、なぜあなたは、ほかの女を買つて呉れませんでした？　あの女の心持は兎に角として、僕があの女をほんとから好いてゐると云ふことを、あなたも承知なんぢやありませんか……」

―いや實際のところを白状すると、僕はすこしあなた方に挑發されたんですよ。どうか許して下さい、あなたへ對しては濟まなかつた―ハハヽハ」

成瀨はかう云つて、長い膝をゆすぶつて、話を打切るやうに哄笑した。しかし幸吉にも、成瀨がやはり彼に對して多少良心を動かしてゐることは、感じられた。身體を求めてゐる焦躁と、離れようとする心との爭ひは、感じられた。幸吉はむしろ、成瀨が早く身體を得て了つて、その焦躁から放たれて呉れればいゝと思つた。

「僕この頃がん／＼耳が鳴つて仕樣が無いですよ。夜なんかちつとも眠れないですよ。かう生活がだらけて了つては、僕何にも出來ません。僕この半月ほどはまるで繪筆を持ちません。こんなんでは迚もやり切れないから、どこかもつと山の中で、酒も女も無いやうなところへ逃げ

込まうか知ら。僕酒と女に近づくと、いつでもこれです、ぢき生活が崩れて了ひます」

成瀬はかう云つて嘆息をもらすこともあつた。

「さうです、はやくスタンプを押すなら押してしまつて、引あげた方がいゝかも知れない……」

成瀬の暗いいら〳〵した顏を見て、參吉もさう思つたが、口へは出さなかつた。

八

「やつぱし、彼等はアルプスへ——ですか。だいぶその題に執着するぢやありませんか」

やつぱし成瀬は同じやうな樣子してやつて來ては、机の上をのぞき込んでかう云つた。それで參吉も弱つて、原稿を白くしてしまつた。非常な猛者だと自稱してゐるにかゝはらず、この頃の成瀬の焦躁ぶりには、參吉にも心から同情された。で一日も早く成瀬がその妄執を晴らして呉れて、お互ひにかうした雰圍氣から遁れ出ようではないか——參吉はかう願はずにゐられなかつた。成瀬は每晩のやうに金彌に會つて居るらしいのだが、金彌がまだ許してないと云ふことは、成瀬の樣子で察しられた。

「僕もあの女をやつぱし最初は二十六七と見ましたがね、案外その方が荒んでゐないやうだから、あいつの云ふやうに、酉年の二十三と云ふのがほんたうかも知れませんね」

成瀬はこの頃憔悴の目立つた顏ににや〳〵得意げな笑ひを見せて、その荒んでないと云ふ言葉に特別な意味を匂はせて、云つたりした。いつかあの芝居で喧嘩して歸つた翌晩、金彌から參吉にお詫びの電話がかゝつて來た。亘が出て、「田口さんはちつともおこつてやしないが、僕はおこつてる」かう金彌に云つた。その晩も成瀬は丁度來合せてゐたが、そんなことを聞くとぢつと坐つて話してることが出來ず、すぐせかせかと泉屋へ走つた。

「成瀬君あれではほんとに氣の毒です。たまらないでせう。僕あんな人ぢやないと思つた。……でね、亘さん、あなた金彌に會つたらさう云つて呉れませんか、僕のことはちつとも氣の毒でもないし、またおこつてもゐない、それよりも仕事が大事だ。だから成瀬君とどんなことがあつたかつて、僕やはり金ちやんを好いてるんだから、ちつとも構はないつて……」

參吉は亘に傳へさせた。

「金彌のやつどうしたんかひどくプリ〳〵しておこつてましたよ。……田口さんは人がわるいからもう厭だつて。そして、みんなが寄つてたかつてさうあたしを馬鹿にするんだつたら覺悟があるからいゝつて云ひましたよ。ほんとにあなたは氣が弱いから、たしかに成瀬さんに取られたやうですね、そしてあいつ、僕のことを、あなたも獨探だから厭だつて云ひましたよ」と、亘は歸つて來て苦笑して云つた。

「そんなこと云ひましたか」と參吉も苦笑した。

三人はまた參吉の室に落合つた。參吉は手入れを怠つた蓬々と延びた髮をして、頤鬚などきたならしく生えて、一層貧相になつて見えた。成瀬もさうである。亘だけはこの頃特にポマードだとか顏の脂を拭き取る紙だとか云つたものを買ひ集めて念入りに磨いてゐる、テカ〳〵した顏してゐた。

「あなた一つどうです？」と、參吉は晩酌の盃を成瀬にさした。

「いや、今夜は僕よします。僕ちつとでも飮むと、すぐ女のところに走りたくなるから、身體がたまらない……」成瀬はかう云つて盃をしりぞけた。

參吉はいたましい眼附に成瀬を見やつて、獨酌の盃をなめながら、陰氣な顏して二人の女話に耳を傾けてゐた。

遠鳴りにゴロ〳〵やつてゐた雷鳴りが、ピカリピカリと光つて、近寄つて來た。

「やあ、たうとう來た、來た！　これで入梅があける。嬉しいなあ！」

　これで何もかも一掃される！　參吉はかう思つて、ざあ〳〵降つてゐる暗い外を眺めて、雷鳴りを迎へるやうに眼を輝かしながら、盃の手を休めて云つた。長い〳〵間鬱積して來た不快な氣分を劈くやうに閃いて來るいなびかり、樹木の乏しい四方の高い岩山への壯快な反響――三人は多少意味が違つてゐても、それぞれに快い昂奮を感じて、聽き入つた。

　顏を寄せてゐた成瀨と互の眼の面に、ピカリと鋭い閃光が傳はつた。二人はハッとして呼吸を呑んだ。グヮラグヮラッと、たしかに近くの山に落ちたと思はれるやうな、激しい音がした。

「雷獸！」

　參吉はかう心の中で叫んで、成瀨の顏を見直した。

　雨がやんだ。成瀨も珍らしく眞面目な昂奮を現はした顏して、歸つて行つた。

「今夜も泉屋へ寄るでせうか？」

「いや、今夜は寄りますまい……？」

「さうでせうね、……今夜は寄りますまい」と、互も成瀨の表情からさう解した。

　が、翌晩になると、成瀨はまたせか〳〵した樣子してやつて來た。二人は最早金彌のことについて口をきゝ合ふやうな氣分でなくなつてゐた。

「やあ、これは驚いた。今度はまた雷獸――ですかね。一層猛烈に出ましたなあ」と、成瀨は目早く見つけて、苦笑した。

「いや、さう云ふ譯ではないですがね、僕どうしても今度は書けないで、弱つてしまつたです。この通り毎日の電報なんですがね、どうしても書けないので、しかし兎に角今度はどんな十枚のものでも書いて責めをふさがなければならぬことになつて居るので、どうか許して下さい」と、參吉は云つて心から詫びた。

「やつぱしこんな生活をしてゐたんでは仕事なんか駄目ですね。僕も、もうあの女から逃げ出したくなりましたよ」

　成瀨は眞面目な調子で云つたが、參吉の膳の上の瓶詰の海丹や鰹の鹽辛や青竹の籠にはひつた鰺の干物など眼に入ると、

「……それ、東京から送つて來たんですか？」と、異樣に眼をかゞやかして云つた。

「さうです……」と、參吉はきまりわるげに顏を赤らめて云つた。

「いつ？」

「今朝……」と、參吉は同じ調子でこたへた。

　實は今朝、着く早々、まだ金彌の寢てるところへ、同じこれだけのものを、屆けてやつた。櫻んぼを貰つた時に約束したのである。參吉は貧乏な弟のところへ手紙をやつて、うそを云つて、世話になつた人へ贈るのだからと云つて、送らしたのである。――先夜は失禮。ご機嫌いかゞ。僕は仕事が出來なくて閉口してゐます。お約束でしたから、つまらないんですが、お屆けします。いづれまた。金彌さま。田口。――斯う云つた手紙を附けて屆けてやつたのである。するとすぐまた金彌からも使ひが來て、「これを姐さんから」と云つて、貝の干物を屆けてよこした。

　成瀨は參吉の恥かしげな、申譯の無さゝうな表情から、不確かながらも、事實を感知した。成瀨の顏にはある決心の色が、はつきりと浮んだ。そしてひどく昂奮した樣子して出て行つた。參吉にも今夜の結果が、はつきりと感知された。參吉等の贈答の事實が確かめられた時の、成瀨の態度も想像するにむづかしいことで

はなかつた。しかし參吉は最早成瀨の蹂躙主義を非難するやうな氣分ではなかつた。成瀨が氣の毒だつた。成瀨の焦躁が滿されることを、參吉は心から願つた。

參吉はまた、まだ最初のうちのことだつたが、成瀨と二人でかの女等をよんだある晩の時のことを思ひ出した。桃子と二人でやつて來たが、金彌は枝のまゝの茱萸を持つて來た。

「ひとつあなた召しあがれ」斯う云つて金彌は成瀨へ突きつけるやうにした。

「姐さんおよしなさいよ。澁くてたべられやしないぢやないの」と桃子は袖をひいたが、

「いゝわよ。たべられますわよ、……それ御覽なさい」

「あッ澁い！　こいつあ澁い！」

成瀨は一つ口に入れたが、かう叫んで顏中を顰めた。金彌の媚を含んだ美しい眼が、意味ありげに二人の男の顏の上に投げかけられた。成瀨はテレた。傷つけられたやうな顏して、ぐつと盃を飲みほした。

「この酒は實際あまいね」と、テレ隱しのやうに云つた。

「さうぢやないのよ。お酒があまいんぢやないわよ。お口が澁いのよ」金彌は斯う云つて、例の金屬性なよく響く笑ひ聲を立てた。

參吉はその時、なるほど、かうした種類の女が、男の心を捉へて行く術と云ふものの片鱗を目のあたり見た氣がして、感心した。

その時分からである。成瀨の金彌に對する心持がグッと强められて行つた。成瀨は明かに櫻んぼを貰つた參吉を壓倒しようと云ふ氣込みを示しはじめたのだ。

「おゝ罪深き櫻んぼよ、そして鹽辛よ！」

しかし考へて見れば、櫻んぼにも鹽辛にも罪があり得よう筈がない。しかしまた考へて見れば、すべて戀愛と云ふものは櫻んぼに始つて鹽辛に終ると云つたやうなものかも知れないな――と、戀愛に經驗の乏しい參吉は、暗い空を眺めて、獨酌の盃をなめて、斯う悟り顏して呟いたが、また成瀨の澁い茱萸に始つた戀が、あべこべに甘い蜂蜜のやうな幸福をもたらすやうにと、悲しく諦めた氣持で、祈るやうに思はずにゐられなかつた。

九

參吉は翌晩、村の髮結の娘で、自前で出てゐる二十二になる鞠子と云ふ女を宿に呼んで、酒を飲んでゐるところへ、また成瀨がやつて來た。參吉の豫期通りに、思ひを遂げた、焦躁の除かれた顏してやつて來た。參吉にはその場所が、果して光樂寺の書院であつたか、それとも例の泉屋の座蒲團の寢床であつたかが、多少の興味をそゝられたに過ぎなかつた。成瀨の得意げな顏に、參吉はたゞ、單なる性慾の汚ならしさを聯想させられた。

「いかゞでしたか？」と、參吉は興味のない調子で訊いた。

「いや別に、……やつぱしあの女、二十三位かも知れませんね。……案外荒んでゐませんものね」と、にや〳〵した顏して云つて、

「今度は君鞠子ですかね？」と、異樣に眼をかゞやかして云つた。

參吉は不快な色を浮べた。

「え、僕どうも酒を飲むと淋しくていかんもんだから、これから晝は大いに勉强して、夜は女でもよんで酒を飲むつもりです。夜は退屈で仕方が無いのですもの。今度は鞠子が僕のお酌になるつもりです。この人案外無邪氣でいゝですよ」

「さうですか。しかしあなた大いに用心せんといけませんよ。僕どうも一人の女に長く關係して居れん性質ですから。……ねえ鞠子、厭か？

君は大いに浮氣者だつて評判だぜ……」成瀬は斯う云つて、例の調子で鞠子の手を握つた。

「結構ですわ。しかしあたし、誰かさんのやうには浮氣ぢやないことよ、かう見えても。守るところはちやあんと守つてますからね、ハヽヽヽ」鞠子は無邪氣な笑ひ聲を立てた。

「誰かさんとは一體誰のこと？　金彌のことかい？」

「知りませんわよ。」

「……君大いに田口さんに惚れてるな。田口さんは案外色男だからなあ」

「そんなぢやありませんわねえ？　こちらはそんなこと嫌ひだつて云つてますわ」

「わかるもんですか。今度は田口さん大いに金彌にふられたんで、そんな悟つたやうなことを云つてるんだか、わかるもんですか」

「随分ね。あたしこちらへ同情しますわ」

「それ見ろ。大いに惚れてるぢやないか」

「いゝわよう！　惚れてたつていゝことよ。ねえ……」

「よし〳〵、今におれがまたどうかしてやるから……」

成瀬は満更の冗談でもないやうな調子で云つて、出て行つた。参吉は苦々しげに黙り込んでゐた。

彼等はアルプスへ——も、雷鳥——も一周してしまつて、参吉は大急ぎで別の短いものを書いて、雜誌社へ送つた。そして金に迫られ、日限に追はれてすぐまた書き出さねばならぬ仕事のことを考へながら、いくらか緊張し出した氣持で彼は二三日ひとりで野山を散歩し廻つた。書は遮二無二仕事にかゝり、夜は酒にでも没頭して、倦怠やつまらなさを感じるすきの無いやうに生活をするほか、心の持方が無い氣がした。成瀬もその報告に來た晩以來、ピタリと遠ざかつてしまつた。

ある日も参吉は、長い髪して、延びた鬚して、籐の短いステッキを振りながら、宿の貸浴衣を着て、夕方の散歩から歸つて來た。向うから金彌が、ホテルからの歸りらしく、村の軒並に流れてゐる川に沿うて、軒下を傳ふやうにして歩いて來た。五六軒離れたところで、二人の久しぶりの顔が見合つた。「まあ……」金彌は思はずかうした笑顔をして笑ひかけようとしたが、すぐと顔をうつむけて、スタ〳〵と空氣草履の足を小刻みに急いだ。……丁度すれちがふ時に、そこの川縁に生えた桐の葉蔭に顔を避けようと距離を計つて急いだかのやうに。参吉は云ひやうのない憎惡を感じて、顔をそむけた。そして成瀬に對して新しく憤怒をそゝられずにゐられなかつた。商賣婦とは何だ！　参吉は心の中に涙を持つて、かう云つて成瀬を罵つた。

参吉が金彌にふられたと云ふ噂が、狭い村の女たちの間に傳はつた。

「金彌さんもひどいわねえ。一體あなたの方が先きだつたのに、あとから來た、しかもあなたのお友達になんするなんて、随分だと思ふわ。……金彌さんはもうあなたのお座敷へは出ないとか云つてるさうですよ」と鞠子はかう云つて参吉に同情した。

「仕方がないやね、この道ばかりは又別物だらうからなあ。僕は今だつて金彌さんを好いてるさ。些とも腹なんか立ててゐやしない。唯僕は、苟も成瀬さんともあらうものが、そんな失敬な態度で、なんしてることに、腹を立ててるだけなんだよ」参吉は淋しさうな顔して云つた。

参吉は仕事に精を出した。そして、夜はもう十二時過ぎまでも飲んだ。毎晩のやうに鞠子がよばれて、酔倒れた参吉を寝床の中に寝かして歸つた。ある晩は、参吉が寝つくまで床の中にはひつて行つたりした。参吉は無邪氣な可愛い女だと思つた。

ゆうべは鞠子も寝て行つたやうですね」と、亘はにこ／＼した、しかし探るやうな眼附して訊いた。

「え、寝て行きました。しかし、……露は尾花と寝たと云ふ、尾花は露と寝ぬと云ふ、さう云つた程度なんですよ。……あの子、僕ある點で不能なんで、僕のことを厭だと云つてますよ。鞠子に會つたら訊いて御覧なさい……」

「さうですか。不能なんですか。僕どうも少し腑に落ちないところがあると思つたら、あなたは不能なんでしたか、これは驚きました……」

参吉の不能者だと云ふことが、女たちの間にをかしく取沙汰された。参吉は苦笑しながらも、それを是認しなければならなかつた。

「たうとうゆうべ成功しました。熱烈なものですなあ。僕あまり向うが眞劍なんで、良心が咎めるですよ。處女の戀は、あゝ云つた種類の女の場合にしても、やはり違ひますね。どんなことはあつても、他に浮氣はしないと、女は泣いて誓ひましたよ。それだけに僕が大いに責任を感じてゐます。僕はどこまでも眞實を以て愛して行かうと思つてます。僕はこれで成瀬さん主義ではありませんからね」

ある日亘は、その優しげな眼を一層細めて、かれ等の相思の情が遂げられたことを、参吉に報告して聞かした。

「それは結構でした。あなた方のやうな戀だと、はたで見てゐても、美しい感じを與へますね。はたで見てゐて、醜く見えたり、反感をおこさせたりするやうな戀だと、僕はほんとの戀で無いやうな氣がしますね。あなた方の場合はたいへん上出來でした。そこへ行くと成瀬君も、資格は眞打なんでせうけど、藝は前座藝見たいな氣がしますね。あなたの方は藝がよつぽどうは手のやうだ」参吉はかう云つて賞めそやした。

四五日して、亘は彼の戀人の小蝶を参吉に紹介しようと云ふので、三島屋へつれて行つた。下ぶくれの、うるんだ眼した、東京の山の手のお屋敷奉公をしたことがあると云ふので「さう遊ばせ」なんて云つた調子をまじへる、小柄な可愛い子である。鞠子が來られなかつた。座敷がさびしいと云ふので、金彌がよばれた。あとから鞠子も來た。

「久しぶりでしたね。それでは成瀬君を呼びにやりませう」と参吉は云つた。

「いゝことよ。あたしたち丈けで騒ぎませうよ」

金彌はかう云つたが、結局使ひがやられた。が寺ではみんな寝しづまつてゐて駄目だと云つて歸つて來た。

「ぢやあ、あたしたちで行つて來ますわ。鞠ちやんもどうぞね……」

金彌はかう云つて、鞠子をつれて出て行つて、もう睡つてゐた成瀬をおこしてつれて來た。成瀬が來ると、金彌の態度がガラリと變つてしまつた。そして例に依つて床柱に寄かゝつた成瀬が寒いと云ひ出すと、金彌は自分の絽縮緬の羽織を脱いで、着せてやつた。そして色男然とをさまつた顔して、赤い顔して眩しさうにまたゝいてゐる参吉を、ひどく見くだしたやうな眼附で視た。参吉は屈辱と厭惡に胸をドギつかせて、鬱ぎ込んで了つた。そして成瀬は二三杯もビールを飲むと、羽織を着たなりで、金彌の手を引いて、「あしたの晩でもゆつくり飲み直しませう」と云つて、出て行つた。

十

――僕はこれまで、數知れない女と關係して來た。さうして、僕は、さう云ふ商賣の女と關係することが、自分の靈魂をけ

がす事ではあつても、相手の女の靈魂を蹂躙する事だとは氣附いてゐなかつた。氣附いてはゐても、その罪惡を痛感しては居なかつた。

ところが、今度の金彌の場合は、少し勝手がちがふやうです。僕は、最初あの女を、たゞ金で操を賣る普通の藝者だ、と思つてゐた。僕は、そのつもりで、あの女と關係した。

すると、何うでせう。僕は、昨夜、あの女から、頭をどかんと擲られたやうな心地がしたのです。同時に、自分が飛んだ罪惡を犯しつゝある事に氣附いたのです。

僕はもうあの女を弄べなくなつた。

兄が僕を責めたのも、やはりこの事だらう、と思ふ。僕は、今、心から兄に感謝します。

無論、僕の心はさう單純でない。僕を現在の僕にするまでには種々の事情があつた。その徑路については、いづれゆつくりとお話して、聽いて頂きたいと思つてゐます。

僕は兄から立派な人間に見られよう、と思つて、この手紙を書いたのぢやない。しかし何だか、云はずには居られないやうな心地がしたので書いたのです。

僕の前には、たゞ一つの道がある。それは、放縱な藝術生活をやめて、民衆の爲めに働くことです。酒と女とに接近すると、僕はすぐ、これまでの放縱な習慣に負けてしまふ。僕は、だから、何か、隙の無い一生懸命の仕事に自分の全力を捧げたい。

これからも、お氣附きの事があつたら、御忠告を願ひます、どうぞ、正面から云つて下さい。

七月十一日　成瀬道夫

田口參吉兄

かう云つた手紙を光樂寺の小僧が持つて來た。參吉は西日の射す暑い室で、肌脫ぎになつて、ほんとに額に脂汗を流して、机に向つて、進みの遲いペンを動かしてゐた時であつた。參吉もこの手紙を讀んで、頭をどかんと擲られたやうな氣がした。美しい感謝の念から、彼は心の中に涙を感じた。又成瀬の心をそこ迄に到らしめた金彌を、讃美せずにゐられなかつた。

――

御手紙を感謝します。さうあなたから云はれると、ほんとに僕は恐縮せずにゐられません。しかし正直を云ふと、やはり僕はさう信じてゐます。さうならねばならないと、僕は人間として、また藝術家として、どこまでも信じて行きたいのです。さう云ふ意味から、僕を癡愚だと云はれても、僕は恥辱だと思ひたくありません。

僕に取つては、あの女たちは、すべて、美しい夢の中の女たちです。やはり「雪をんな」なのです。しかしたとひ「雪をんな」にしてもが、僕はその基調を、やはりほんとの人間、ほんとの靈魂の上に置きたいと、かんがへて居るのです。ましてや、僕に取つては、妻、母、姉妹、娘、それらはどうして直接の生命そのもので無い筈がありませう。僕はいつの時だつて、かの女等を涙無しには想ひ浮べることが出來ません！　かの女等に幸福あれよ！　娑婆の惡黨を避けよ！　神の愛を信ぜよ！　私はどうしてさう祈らずに居られるでせうか？　だもんだから、今

までのあなたのやうな戀愛態度は、絕對の罪惡だと信じて居るのです。呪はれてあれよ！　私はから、あなたの人間そのものではなく、あなたのその態度を、ほんとに幾度心の中に繰返したことでせうか。私はあなたを、純情な、正直な人だと、信じてゐます。だから、私はその態度さへあなたが改めて吳れれば、私はほんたうに心からお友達として握手出來ると思つてゐます。どうかこれまでの私の生意氣な態度を許して下さい。そしてお友達になつて下さい。男でも、女でも、またあゝ云つた種類の女に對しても、心の友達として求めようとして、求め得られない時の淋しさと云ふものを、鈍感なあなたが、これまでの生涯に經驗なさらなかつたとは、私には信じられないことです。どうか哀れな金彌を慰めてやつて下さい。かの女等こそ、ほんとに泣いてるぢやありませんか！　それがあなたにお解りにならない筈がないと思ひます。それがもしわからないやうな藝術家だつたら、私はそんな人間の藝術を、決して信じようとは思ひません。私は繰返して云ひます、そんなものは藝術家でも何でもない、娑婆の惡黨です！　成金どもの尻でもしやぶるがいゝ！

どうか金彌へもよろしく云つて下さい。僕は今、厭な仕事でまゐつてゐるところです。夕方お訪ねしたいと思ひます。

田口參吉

成瀨道夫樣

十一

その夕方、參吉は成瀨につれられて、金彌たちの部屋を訪ねた。金彌は昨晩癪をおこしたと云つて、青い顏をして額を冷やさせながら寢てゐた。

「それはいけませんね。實は今夜は久しぶりで成瀨さんと、大いに氣持よく飮まうと思つてやつて來たんだが、それでは座敷へは出られないでせう」と、參吉は氣の毒さうに金彌のやつれた顏を見て云つた。

「いゝえ、なんでもないのよ。いつものことなんですもの、ねえ喜いちやん……」

金彌はから云つて、小さな子に菓子やらお茶やら運ばせて、二人をもてなした。

「僕しかしね、田口さんを賴んでやつて來たんぢやないよ……」

成瀨は妙にテレたやうな顏して、寢そべりながら、云ひわけがましく、から繰返した。金彌はそれにはこたへなかつたが、參吉は二人の間に昨晩何事かがあつたのに違ひないと思つて、二人の顏を見較べた。そして先刻の成瀨の手紙に、違つた意味の興味をおこさない譯に行かなかつた。

座敷へは鞠子もよばれた。

「金ちやん、僕この頃はね、鞠子をお酌に賴んでるんだがね、お座敷でなぞいぢめちやいけませんよ。そんなことでもあると、僕成瀨さんに云ひつけて、あなたを叱らせますからね」と、參吉は笑ひながら云つた。

「なんでいぢめたりなんかするもんですかね、あたしが。それにどうしまして〱、鞠ちやんと來てはそれこそケレンスキーの方なんですからね、あたしなんか迚も敵ひやしないんですよ。……あたしみんな聞きましたわ、隨分お安くないんですつてね、結構ですわ。ほんとに鞠ちやんのゝろけ方と來ては、ほんとに明けつぱなしなんで、恐れ入つちまひますわ」

「厭よう！　姐さんひやかしちや。……ほんとにこちらは人がおわるいんだから、御自分から

出來ないとか不能だとか云ひふらして了ふんですからね、ほんとに世話無しだわ。……へ、ゝンだ、姐さんの方こそ……」鞠子はかう云つて、金彌の膝をつねる眞似をした。

成瀬は最初のうちは悄げてゐたが、酒が廻つて來ると、例の調子が出て來て、昨晩のいきさつのことが、だん／＼參吉にも分つて來た。

「田口さん、金彌は大いにあなたに惚れてますよ。ゆうべは先生すつかりおこつちまやがつて、どうせあたしなんか醜業婦だから、惚れてるあたへ乘替へて見せるつて云ひましたよ。男ぶりだつて僕とは段違ひだなんて云やがつたですよ。アハゝゝハ」成瀬はかう云つて、坐つてる參吉の尻をピシャ／＼叩いた。

「いや、それはあなたが、醜業婦だなんて云つたからでせう。僕に惚れるなんて、そんなこと譃ですよ。……金ちゃんもいけませんねえ、そんなこと云つて成瀬さんを いぢめては！」と參吉は、金彌にちよつと非難の眼を向けた。

ゆうべは、泉屋へ、金彌と前から關係のある若い男が來てゐた。その男は近在の百姓の息子で、金彌の色男なぞにはなれさうにもないやうな男なんだが、金彌が金に困つた時に、五拾とか百とか云ふ纏つた金を無條件で呉れたと云ふので、その氣前に動かされて關係が出來たのだと云ふやうな話を、參吉は耳に聞いてゐた。その男と成瀬がカチ合つたのだ。そんな譯で、成瀬がおこつて、金彌がとめるのを振り切つて、十一時頃に歸つたと云ふのである。

「しかし兎に角、今夜は僕大いに嬉しいですよ。あなたのお手紙には僕ほんとに感謝してます。僕はあなたがそれさへなんだと、僕はほんとに友達になりたいです。……握手しませう！」

「しませう！」

二人はかう云つて、堅く手を握り合つた。

更に若いのが二人よばれて、踊らしたり彈かしたりして、大騷ぎをやつた。成瀬も參吉に遠慮して、餘りひどいふざけ方はしなかつた。

その晩一時過ぎ頃に、心配して迎ひに出た亘が、暗い往來の中で、成瀬が非常な權幕で、「俺はもうお前見たいな女は厭だ！　もう厭だつたら！　田口さんとこへ行け！　田口さんとこへ行け！」斯う叫んで、金彌を叩きつけてやるやうにして、參吉へ押つけてゐる三人に出會つた、參吉はどうしていゝかわからないと云つた悲しさうな顏して、しよんぼり突立つてゐた。

「厭だ！　厭だ！　俺はもう厭だ！」

成瀬はかう叫び續けて、往來の上へ仰向けにぶつ倒れて、足をばた／＼させた。……

一週間ほど過ぎた。その晩から、參吉の心持はぐつと成瀬の方に加はつて行つた。同性としての同情と云つた氣持である。參吉はいつか、金彌に向つて「成瀬さんをいつまでも引止めて置きたいと思ふなら、ちつとは僕にも色目ぐらゐ見せた方がいゝですぜ。でもないと、あの人は自分でも獨占主義だと云つてるくらゐだから、すぐ離れて行つちまふよ。僕にそんな素振りでも見せると、あんなやうな人だから、決してよう離れはしない、あべこべに飛び込んで行くよ」斯う冗談に云つたことがある。そんな態度を金彌はほのめかし始めてゐるやうである、參吉は成瀬の手紙を別な意味からも考へて見ねばならなかつた。

「さうだ、彼が金彌を求べなくなつたと云つた。それは無論眞實の感情からに違ひないだらう。がそればかしからだらうか？　或はまた、その喧嘩のあつた晩、ほんとに金彌がおこつて、絶交を申込んだのではないだらうか。それをあんな負惜みの強い性格の人だから、手紙であんな風に云つて來たのではないだらうか？　今ま

で彼の接して來た女と較べて、金彌の方はちつとばかし骨が硬い――と云つた程度に解釋するのが正しいんではあるまいか？」

斯う云つた氣持である。しかし兎に角、かの女等の所謂商賣氣七分、眞實三分と云つたやうな手練手管の網に捲き込まれて行く同性の、劒葉林中の同性を、參吉はいたましい氣持で考へない譯に行かなかつた。

ある晩も參吉は鞠子をよんで酒を飲んでゐると、懇意にしてる軍醫あがりの若い醫者が遊びに來て、そんな話に花が咲いた。

「一體あなたはいつ頃から禁慾生活をしてるんですか？」と醫者は參吉に訊いた。

「一年ばかしになります」

「よくあなたのやうなお酒飲みが、間違ひをおこさずに濟みますね、からした別嬪さんをしよつちう引つけて置いてですね。細君への貞操ですか、それとも何か心願でもあつてですか？」

醫者は眞面目な調子で訊いた。

「いやそんな譯でも無いですが……」と、參吉は顏を赤らめて口ごもつた。

「いゝえ、先生、こちらは駄目なんですのよ、不能なんですとさ。だもんだから、今に先生に注射して貰つてから〳〵と云つてるんですのよ。そりや憎らしいんですのよ」鞠子はから例のはきはきした調子で云つた。

「ハヽハ、さうですか。それならばほんとに治療も出來ますよ」

深切な醫者は、どこにこれだけの酒量を持つてゐるかと云つたやうな參吉の青白い瘠せこけた顏をのぞいて、治療をすゝめた。

「いや、今のところその必要も感じませんがね、しかし實際に不能であるかないかは、僕にもわからないのですよ。實は、僕、變な話ですが、一年ほど前に、ある漁師町で、大酒を飲んで、六十近い非常な婆さんと一寸間違ひをしたことがあるです。僕は今でもそのことを想ひ出すと、性慾と云ふことの淺ましさ、汚ならしさに、ほんとに冷汗が出ます。それ以來僕は一切女に關係しません。そのことが想ひ出されて、關係することが出來ないのです。そんな氣がすぐ消えてしまひます。そんなことから、或はほんたうに不能になつて居るかも知れないと思ひます」と參吉は眞面目な調子で云つた。

「ほう、そんなことですか？」と、醫者は半信半疑の顏で、首をかしげた。

「あゝ厭だ〳〵。あたしもう厭だわ、田口さんが、あんな顏して、……あゝいや〳〵、あたしもうこれからは田口さんを寢かしつけてなんか行かないわ」と鞠子は悄げた顏して云つた。

「ハヽハ、田口さんすつかり別嬪さんに嫌はれちまひましたね。あんたがいけないんですよ、餘り色氣のない話をしちや、若い別嬪さんが厭がるですよ。ハヽヽハ」と、醫者は太つた身體をゆすつて笑つた。

「あゝあたしもいや〳〵、金ちやんにはふられるし、まあちやんにはふられるし、もう〳〵あたしもいや〳〵」

參吉もから云つて笑つた。がやはり鞠子をよび續けた。

亘の美しい戀にも、罅がはひつた。亘はすつかり悄げてしまつた。まだ二十日と經たないのに、小蝶がほかにも男をこしらへたと云ふ噂が立つて、どうやら事實らしいのである。東京では活動の手引きでもやつてゐたらしく、處女どころではないと云つたやうな事實までも分つて來て、これまで村の藝者なんかには關係しないと云つた、社交界の花形を以て許されてゐた誇りを、滅茶苦茶に傷つけられたのを、亘は口惜しがつた。

「あゝ厭だ〳〵。色戀はもう厭だ。僕ももうほんとにあの女から遠ざかります」

亘は役場から歸つて來ると、かう嘆息しながらも、そは〳〵と出て行つては、そちこちの料理屋で小蝶の肥雛なぞよんで、飲めない口にビールを呷つて、鬱憤を晴らしてゐた。

「それにしても、いかになんでも、餘りに早過ぎますね。そんな性質の女なんでせうよ。しかしまあ〳〵、さう悲觀しなさんなよ。兎に角にあなたは先鞭をつけた譯なんだから、僕なんかのことを考へてご覽なさい……」

參吉は亘に同情した。

十二

參吉は兎に角、日々幸福だと思つた。空はカラリと霽れあがつてしまつた。病氣の發作も出て來ない。青山と白雲とに對して居れば、心おのづから別所に在り——と云つた趣きを感じたりして、晝間は仕事に、夜は鞠子を呼んで酒を飲んだ。夕方亘といつしよにする散歩も、樂みであつた。

二三日鞠子が來なかつた。鞠子の眞味な旦那で、製絲工場の持主が、やはり二ケ月目位に出て來て、村の藝者の貫吉めをやつて、豪遊をきめ込んでゐるのである。參吉がひとりで散歩の歸りに、ホテルの廊下の籐椅子に腰かけた五十恰好の、デツブリと太つた、口髭を生やしたその旦那のそばに、浴衣姿の鞠子が立つてこちらを眺めてゐるのに會つた。參吉は正面を向いて、さつさと足を早めて來たが、だいぶ離れたところで、ブンと音して飛んで來る羽蟲を見つけて、それを叩き落さうと一度高くステツキを振つた。「お樂み……」から云ふ鞠子への挨拶のつもりで——

その晩はどこにも藝者がなく、參吉は淋しく獨酌の盃をなめてゐると、幾日ぶりかで成瀬が來た。亘もはひつて來た。成瀬も、金彌の色男がまだゐておち〳〵會へないらしいので、また以前のやうな焦躁と暗鬱な顏してゐた。

「どうです、そんなんなら、早くアルプスへなり民衆の方へなり、いづれかへ向つて、早くここを引揚げては？」參吉はかう云つた眼を成瀬に向けたが、しかし口へは出せなかつた。

「淋しいですなあ。どつかへ行かうぢやありませんか」參吉は二人を誘つた。

澤田屋へ行つて見ると、三味線拔きで大勢の藝者を集めて飲んでゐる鞠子の組の隣りへ、三人は案內された。

「おい、市ちやん〳〵、お願ひだから鞠子を一時間ばかり借りて來て吳れ。そんなに豪儀な旦那なら、どうかあなたの鞠子さんを一時間ばかし貸して吳れ、……大の男が三人からして賴むんぢやないか、……屹度貸すよ、借りて來て吳れ」參吉はかう云つて若い息子に賴んだが、

「迚も駄目です。迚も今夜は鞠子だつてどれだつて駄目です」市ちやんはかう云つて、テンテコ舞ひして、料理方に忙しがつた。

三人は久しぶりで、女なしで遲くまで飲み合つた。三人ともそれ〴〵に淋しく、哀れであつた。參吉も眞實に成瀬に語ることが出來た。ここを早く引揚げてはと、成瀬に賴まずにゐられなかつた。

「あなたの御忠告を感謝します。決して誤解なぞしやしません。僕はお寺の和尚さんからも忠告されました。僕等はやはりまだ小乘教の方だから、酒色には近寄らん方がいゝつて、云はれました。僕は二三日中に金の來次第、女へも默つて兎に角こゝを引揚げるつもりです」成瀬もかう云つた。

二人はまた眞味な氣持で、堅く手を握り合つた。久しぶりで、參吉の、額へ手をあてて、長い髮の毛をふるはしながら蚊細い聲の「ほれて通へば……」が出た。亘が唄つた。

翌日參吉は短いものを書きあけて、郵便に出

した。――昨晩漸く着いた。都合上妻と一緒に來た。明日から家さがしをやるつもりだが、なかなかありさうも無いやうだ。――尾道の友達が、たうとう出て來て、ひとまづ友達の下宿に落着いたと云ふ葉書が來た。

「たうとう出て來ずにゐられなかつたか、あの修羅の巷へ！　若い細君の上に幸福あれ……」、參吉はかう祈るやうに思つて、返事を書いた。――尾道にゐた時とは違ふよ、僕の色男ぶりを見せたいと思ふよ。だが、これは冗談だが、しかし僕も今は、ほんとに本氣でやり出すつもりで居る。君も是非々々この度は大奮發をして呉れ給へな――かう云つたやうなことを書いた、――都合上妻と一緒、……をかしいぢやないか、あの無邪氣で忠實で苦勞を恐れないやうな細君と一緒だからこそいゝんぢやないか。君ひとりだつたら、やつぱしぐうたらをやるよ。都合上妻と一緒はよかつたなあ――から微笑したいやうな氣持で。

彼はひとりで、田圃の方へ出て行つた。麥は刈られ、田は植附が濟んでゐた。淺間の噴煙が晴れた空にくつきりと白く騰つてゐた。出て來た友達夫婦のこと、成瀬、亘、女たち、自分のことを思ひながら、悲しく微笑したいやうな氣持で、田圃道を口笛を吹きながら歩いて行つた。人間いづこに修羅の巷を避け、劍葉の林を遁るべきか――やはり出來ないことだと、彼は思つた。修羅劍葉――それが娑婆の姿なのだ、唯心の持方一つでそれを避けることが出來るのだと云つた光樂寺の和尚さんの言葉を思ひ出して、あの成瀬が極樂巡りの話をやめさせた時の、「さよか」と云つてにこにこした時の和尚さんの顏を懷しく思ひ出しながら、彼はやはり悲しく微笑したい氣持で、夕暮の迫つて來た田圃道を歩いて行つた。

（大正八年七月）

遊動圓木

私は奈良にT新夫婦を訪ねて、一週間ほど彼等と遊び暮した。五月初旬の奈良の公園は、素敵なものであつた。初めての私には、日本一とも世界一とも感歎したい位であつた。彼等は公園の中の休み茶屋の離れの亭を借りて、ままごとのやうな理想的な新婚の樂みに耽つてゐた。私も別に同じやうな亭を借りて、朝と晝は彼等のところで御馳走になり、晩には茶屋から運んで來るお膳でひとり淋しく酒を飲んだ。Tは酒を飲まなかつた。それに、Tのところで飲むと、その若い美しい新夫人の前で、私はTからいろ／＼な說法を聽かされるのが、少しうるさかつたからでもある。

互ひに戀し合つた間柄だけに、他所目にも羨ましいほどの新婚ぶりであつた。何と云ふ優しいTであらう、――彼は新夫人の前では、一切女に關した話をすることすら避けてゐた。私はある晩大いに彼に叱られたことがある。それは、私がずつと以前に書いたものの中に、決して彼のことを書いたのではないのだがサーニン主義者めいたものを書いたのを、彼は自分から彼のことを書いたもののやうに解して、蔭では怒つてゐたのださうである。

「君のやうに、ある輪郭を描いて置いて、それに當てはめて人のことを書くやうな書き方は、大いに怪しからんよ。失敬な！ 失敬な！」

彼はその晩も、斯う云つて、血相を變へて私に喰つてかゝつた。酒を飲んでゐた私は、この突然な詰問に會つて、大いに狼狽した。

「あれは、決して、君のことを書いたと云ふ譯ではないぢやないか。あんな事實なんか、全然君にありやしないぢやないか。君はKに僕と絕交するとか云つたさうだが、なぜそんなに君が怒つたのか、僕の方で不思議に思つた位だよ。君がサーニン主義者だなんて、誰が思ふもんかね。あれは全く君の邪推と云ふものだよ。君はそんなことの出來るやうな性質の人ではないぢやないの」私は一々事實を擧げて辯解しなければならなかつた。

「そんならいゝが、若し君が少しでもそんな失敬なことを考へてゐるんだと、僕はたつた今からでも絕交するよ。失敬な！ 失敬な！」彼は斯う繰返した。

「いや決してそんなことはないよ。そんな點では、君は寧ろ道德家の方だと、ふだんから考へてる位だよ」

「それならいゝが……」

こんな風で、私は彼の若い新夫人の前で叱られてからは、晩のお膳を彼のところへ運び込むのを止しにした。これに限らず、すべての點で彼が非常に卓越した人間であると云ふことを、氣が弱くてついおべつかを云ふ癖のある私は、酒でも飲むとつい誇張して云つて了つて、あとでは顏を赤くするやうなことがあるので、淋しくても我慢してひとりで飲む氣になるのである。

「浪子さんと云つちやいけないだらうか？」

「いけないよ……」

「なんて云ふの？ 奥さんと云ふのも餘り若いんで、少し變ぢやないか？」

「そんなことないよ。やつぱし奥さんと云つてやつて吳れ給へな」と、彼は云つた。

斯うしたところにも、彼の優しい心づかひが見られて、私はこの年下の友達を愛せずにゐら

れなかつた。しかし私には、美しくて若い彼の戀人を奥さんと呼ぶのは何となくふさはしくないやうな氣がされて、たうとう口にすることは出來なかつた。

私たちは毎日打連れて猿にお米を呉れに行つたり、嫩草山に登つたり、遠い鶯の瀧の方までも散歩したりして日を暮した。鹿どもは毎日雨戸をあけるのを待ちかねては御飯をねだりに揃つてやつて來た。嫩草山で摘んだ蕨や谷間で採つた蕗やが、若い細君の手でおひたしやお汁の實にされて、食事を樂しませた。當もない放浪の旅の身の私には、ほんとに彼等の幸福さうな生活が、羨ましかつた。彼等の美しい戀のロマンスに聽き入つて、私はしば〳〵涙を誘はれた。私はいつまでも〳〵彼等のそばで暮したいと思つた。が私にはさうしてもゐられない事情があつた。

あしたお別れと云ふ晩は、六疊の室に彼等と床を並べて一緒に寢ることにした。その晩は洋畫家のF氏も遊びに來た。酒飲みは私一人であつた。浪子夫人がお酌をして呉れた。私は愉快に醉つた。十一時近くになつて皆で町へお汁粉をたべに行つた。私は彼等のたべるのをたゞ見てゐた。大佛通りの方でF氏と別れて、しめつぽい五月の闇の中を、三人は柔かい芝生を踏みながら歸つて來た。ブランコや遊動圓木などのあるところへ出た。「あたし乘つて見ようか知ら？ 夜だから構やしないことよ‥‥」と浪子夫人が云ひ出した。

「あぶない〳〵。それにお前なんかは乘れやしないよ」Tはとめた。

「でも、あたし乘つて見たいんですもの‥‥」

浪子夫人はすつと空氣草履を穿いたまゝ飛び乘つて、そろり〳〵と搖がし始めた。しんなりした撫肩の、小柄な華奢な身體を斜にひねるやうにして、舞踊か何かででも鍛へあげたやうなキリヽとした恰好して、だん〳〵強く〳〵搖り動かして行つた。おゝ何と云ふ見事さ！ ギイギイと鎖の軋る音してさながら大濤の搖れるやうに搖れてるその上を、彼女は自在に、ツヽ、ツヽ、とすり足して、腰と兩手に調子を取りながら、何のあぶな氣もなく微笑しながら乘り廻してゐる。實際驚異すべき鮮かさである。私には單にそれが女學校などで遊戯として習得した以上に、何か特別に習練を積んだものではないかと思はれたほどに、それほど見事なものであつた。Tもさすがに呆氣に取られたさまで、ぼんやり見やつてゐたが、敗けん氣を出して、浪子夫人のあとから鎖につかまつて乘り出して見たが二足と先きへは進めなかつた。忽ち振り飛ばされるのである。が彼は躍起となつて、その大きな身體を泳ぐやうな恰好して、飛び附いては振り飛ばされ、飛び附いては振り飛ばされながらも、勝ち誇つた態度の浪子夫人に敗けまいと意氣込んだ。

「梅坊主！ 梅坊主！」

私は斯う心の中に繰返して笑ひをこらへてゐたが、ふつと笑へないやうなある感じがはひつて來て、私の心が暗くなつた。

「禪骨！ 禪骨！」

私は今度は斯う口へ出して、ほめそやすやうに冗談らしく彼に聲をかけたが、しかし私の心はやはり明るくならなかつた。私たち見たいな人間に共通したある淋しい姿を見せられた氣がして、――それは戀人にも妻にも理解さすることの出來ないやうな。

浪子夫人はます〳〵揚々とした態度で、大濤のやうに搖れる上を自在に行つたり來たりした。鎖の軋る音が、ギイ〳〵深夜の闇に鳴つた。

（大正八年八月）

千人風呂

「その機械は何て云ふんですの、わたし初めてですわ」
「アッカースチコンさ。亞米利加の新發明の器械なんだがね、これで百間からするんだぜ。さつき宿帳を附けに來た番頭の奴が、僕が幾度アッカースチコン〳〵と敎へてやつてもね、アカシチクン〳〵と云やがるんだよ。俺が汚ない風をしてゐるもんだから、垢七君々々と馬鹿にしやがるんだらうが、隨分失敬な奴ぢやないか。俺はあんな厭な番頭は嫌ひだから、金はやらんさ。俺だつて斯うして旅をしてる以上相當な用意はしてるさ」
「さうでございませうともねえ。ほんとにあの番頭さんたら口がわるいんだからね、なか〳〵の狸ですからね」
「狐見たいな面してやがるぢやないか。……野狐の類だね、ハヽヽ」
「旦那はそれをかけないとちつとも聽えないの。窮屈でせうねえ……」
「聽えないなんてことはないがね、かけるとかけないでは隨分違ふからね、……姐さんも一寸かけてご覽よ」
　薄氣味わるがる女中の耳に受話器を當がひ、音響を受けるやはりセルロイド製の徑三寸程の圓盤に口を寄せて、彼はワッと吹鳴つた。女中もワッと吃驚して叫んで、耳から受話器を放した。
「おッ吃驚しちやつた。成程隨分でかい聲になるんですねえ。まだ耳がガン〳〵云つてるわ」
「さつきの野狐番頭ね、それではあなたは實物廣告でアカシチクンを賣擴めに歩いてゐなさるんかとぬかしやがつたぜ。べらぼうな奴だよ」
「まあそんな事まで云つたんですの。ほんとに仕樣のない番頭さんね。……まあお乾しなさいな」
「君に一杯あげよう。君はなか〳〵話せるね」
「そんなでもないわ。……あなたは二？　わたしはまた六七位になつてるだらうと思つたのよ。老けて見える方ねえ。どうしてまたそんなにお若いのに耳も眼もそんなに惡くなつたんでせう。生れつき？」
「生れ附きと云ふ譯ぢやないんだがねえ、僕はね、八つ位の歳から年上の女にかまはれた方でね、十四五の時分には、自分の方から女を追かけ廻して仕方がなかつたものさ。つまり濫用したんだな。それでひどい神經衰弱に罹つてね、中學だつて出來やしなかつたのさ。皆そのせゐだよ。近眼の方も五度だからね、眼鏡をはづすと人の顏なんかも分りやしないのさ。餘り女の子に惚れられ過ぎた罰さ。……蓬庵雨ヲ免レズさ、漏榻纔カニ身ヲ容ルかね、憐ム莫レ今憔悴スルヲ、愁ヒ多ケレバ定テ人ヲ損ズさ――さうぢやらうがな、アハヽヽハ」
「旦那うまいのねえ。……それ何？　旦那はやつぱし學生さんでせう、慶應？　早稻田？」
「馬鹿云つちやいけないよ。詩吟なんかぢやありやしないよ。君等には解るまいがな、禪の方さ。鎌倉の管長の口調でやつて見たんだがね、……さうぢやらうがな――斯う來なくちやいけないんだよ。俺は今日鎌倉を發つて來たんだがね、俺は鎌倉で一ケ月程參禪して修行したんでね、大いに得るところがあつたよ。禪はいゝなあ。神經衰弱には持つて來いだね。超然とした

氣持になつて來るからね。それで僕なんか斯うして平然として年上の姐さんなんか相手に話が出來るんだよ。今日も途中の汽車の中でも電車の中でも人がじろ〳〵アッカースチコンを視て仕樣が無いんだがね、平氣なものさ、……鉢裏には飯、桶裏には水と云つた譯ぢやからなう。……纔ニ是非アレバ紛然トシテ心ヲ失シさ、階級ニ落チザレバマタ摸索ナシかね。且ラク道へ、放行スルガ即チ是カ、把住スルガ即チ是カーと來るんだがね。ところがね、餘りやり過ぎたもんでね、湯河原で降りるつもりをついうつかりしてこゝまで乘越してしまつたんだよ。しかし海の景色はまた格別だからねえ、波の音もわるくはないから構やしないけど、しかしお梅ちやんに今夜會へなかつたのが殘念だつた。姐さんのやうな年上の女には僕厭いてるからねえ、ちつとも面白いことありやしない」

「これはご挨拶ですね。ほんとに旦那は痛快ね。女泣かせに出來てるんだわよう!」

「さう。ほんとに僕さう。僕女の子にぢきに惚れられちまふんでね、いつも困つちまふんだよ。鎌倉に行く前ね、湯河原に十日程ゐたんだがね、そこの宿屋のお梅ちやんと云ふ十七になる可愛い子に惚れられてね、隨分困つちやつた。僕株券一枚やつちやつた。鎌倉でもね、僕近所の料理屋の娘にね、その娘には僕から惚れたんだがね、その娘にも僕は株券と寫眞を呉れたよ。味噌つ齒の一寸可愛らしい娘だつたよ。ところがね、その娘坊主の妾をしてるつてんでね、さう思つて見ると、もう二十にもなつてゐてまだ肩揚を取らずにゐる樣子や、可愛らしく見えた味噌つ齒かつて坊主との何だと思ふとね、急に厭な氣がし出して、僕は急に鎌倉と云ふ土地まで厭氣が差して、今日急に發つて來たんだよ。やつぱし何だな、坊主にかまはれてゐるやうな娘はどうもパアッとしたところが無くて好かないね」

「さらねえ。……では旦那は株屋さん?」

「さうでもないさ。僕は天下の放浪者だよ」

「結構なお身分ねえ……」

「さうでも無いがね、株はまだしかしどつさり持つてるよ。なんだつたら姐さんにも一枚あげようか。姐さんが惚れて呉れるんだと?……僕の顏猥褻な感じを與へやしない? 僕の友達共がそんなこと云つて仕方が無いんだが、或は僕ね、ひどい神經衰弱なんで、いつも〳〵女の妄想にばかし耽つてゐるんでそれでそんな風に見えるのか、それとも僕は不具者に近い人間なんでね、不具者らしい間拔けた表情がさう見えるのか、自分にはわからないがね、姐さんにはどう見える?……姐さんは惚れちや呉れないい?」

「えゝ惚れてますともね。わたし最初からね、そのアッカースチコンのハイカラぶりに惚れちやつたのよ」

「さう。ではあなたにも一枚あげるよ。屹度あげるよ。新設の二十圓の紡績株なんだがね、非常に確實なもんだから僕が買つてからもう五圓騰つてるんだぜ。僕は二十株から持つてるんで百圓から儲かつてるよ。今にもつと〳〵騰るんだから、姐さんも大事に持つてなさいよ。今に金持になれるよ。僕はこれさへ手放さなかつたら、いつまでも〳〵斯うして放浪の旅を續けてゐられるのだ……」

「お國はお遠いんでせう?」

「遠いとも。雪が一丈も降るやうなところでね、それは寒い厭な國さ。この邊とは比較にならないよ。この邊は實際いゝとこね。僕湯河原へもどこへも行かずに、ずつとこゝにゐようかしら、姐さんは厭がらない?」

「厭がるどころですか。いつまでも〳〵ゐてほしいわよ」

「しかしさつきの番頭の奴厭な奴ね。探偵のやうな厭な眼附してジロ〳〵僕の顔を視るぢやないの。あんな番頭の居る家は嫌ひだ」

「かまふもんですか。あたたのアッカースチコンが珍らしかつたんでせう」

「そしてね、彼奴ね、手前とこには韓がゐないから、入用も無いが、返事の遲いやうな女中が來た時にかけさせる爲め、一臺用意して置かうかなんて云やがつたよ。ひどく口のわるい奴だね」

「氣にかけることあるもんですか。勝手な熱を吹かして置きませうよ。そしてあなたも敗けん氣になつて、禪の方で吹き飛ばしてやんなさいなね」

「それもさうだな。ひとつ吹き飛ばしてやるか。が今夜はひどく悲しくなつちやつた。聞き慣れない波の音のせゐか知らん。家が搖れるやうぢやないの」

「まさか。あなたのお醉ひになつたせゐよ。ビールをもう一本も持つて來ませうか？」

「ビールももう厭になつちやつた。……悲しいなあ。泣きたくなつちやつた」

「およしなさいよう！　しつかりおしなさいよう！　そんなにお梅ちやんに會ひたいの。わたしぢや厭？」

「お梅ちやんにも誰にも會ひたかない。いつそ死んぢまひたいな。……あゝ、しかし飲まうか。さうだ、大いに飲まうよ。……僕これでね、お尋ね者なんだぜ。僕二ケ月以前に親父の金千圓盗み出して家を飛び出したんだぜ。僕田舍で百姓しとつたんだがね、僕本ばかし讀んでて仕事をせんもんだからね、それに僕にはよう出來ないのに親父の奴仕事せい〳〵云うて喧しく云うて仕方が無いものだからね、癪に障つて飛び出しちやつたんだ。なあに構やしない。誰があんな馬鹿親父の傍になんかゐてやるもんか。僕ね、今度こそはこの金で以て滅茶苦茶な馬鹿遊びをやつて一遍に使つてやらうと思つて家を出たんだつたがね、旅へ出て見てフッと氣が變つちやつたね。やつぱし金ほど大事なものはないからね。金が無くなつたら俺見たいな人間は死ぬほか無いからな。それで斯んな株なんか買つたさ。此株さへ手放さなかつたら僕はいつまでもいつまでも斯うした旅を續けてゐられて、その旅先きでちよい〳〵惚れたり惚れられたりしてゐられる譯だからね。その方が樂みが永いよ。豪遊なんかしたつてそれきりの話だからね。……姐さんいつそどう、僕と一緒に大島へでも淺らない？」

「えゝ、あなたとならばどこどこまでもと云ふぢやありませんの。ホヽヽヽ」

「ほんとにどう？」

「……そんな顔なさるもんぢやありませんわよう！」

「どんな？……猥褻な顔に見えて？」

「……泣いてるんぢやない？」

「うゝん、少し悲しくなつたばかしさ。やつぱし波の音のせゐなんだらう。僕田舍の從妹のことを思ひ出したんだよ。十八なんだが顔が醜いんでね、それを親父もおふくろも僕の嫁にしようと云ふんだらう。厭なことさ。あんな醜く、て愚鈍な百姓娘なぞ誰が女房に貰ふ奴があるか。そんなことで僕家にゐたくなくなつてねえ……」

「そりやさうねえ。そりや無理だわ。そんなに厭だつて云ふものをねえ」

「ところがね、ほんとはね、僕その從妹に可哀想なことしてあるの。僕厭だつたんだけどね、從妹の方から求めるものだからね、つい、關係をつけちまつたの。そんなことで僕顔を滅茶苦茶にされちやつたの。しかし從妹は屹度恨んでゐるだらうなあ。……あゝ僕悲しくなつちやつた。

僕田舎のことなど一度も思ひ出したことなかつたんだけど、今夜はどうかしたのか知ら。飲みつけないビールのせゐか知らん……」

「さうねえ。すつかり悄げちやつたのね。またさつきの禪をおやんなさいな、元氣が出るわ」

「うん、さうだな、一つやらうかな。いゝかね――蓬庵雨ヲ免レズさ、漏榻劣カニ身ヲ容ルかね、怪ム莫レ今憔悴スルヲ。愁ヒ多ケレバ定テ人ヲ損ズさ……さうぢやらうがなあ？　アハ、ハ、ハ……」

郷里の家の廣い臺所の大團爐裡に焚火が燃えてゐた。雪の曇り日の午後の感じであつた。焚火の中にまだ生れたてのやうな裸かの赤兒が頭を突きさして、ブス〳〵燃え爛れてゐた。彼等の子のやうにも思へなかつたが、誰か來て投げ込んで行つたもののやうにも思へなかつた。彼と從妹とは爐傍に向き合つて無關心な氣持でそれを眺めてゐた。が彼はその咽せるやうな惡臭に堪へ難くなつて從妹にそれを引出せと云つたが、從妹は、「どうせ燒けてしまつたものだからカラ〳〵になるまで燒いてしまつた方がいい」と云つて、聽かなかつた。そして太い鐵の火箸でその赤むけの肉魂をグイと中の方へ押込んだ。堅太りの頰の赤い鼻の低い從妹の顏が、鬼女のやうに見えた。彼は窒息しさうになつて昏倒しかけた――

フッと夢から醒めた刹那、白い冷めたい亡靈がスゥと襟元を掠めて去つた。廢滅の恐怖が彼の息の根を止めさうにした。彼はパッと蒲團の中へもぐり込んだが、また半ば夢中で飛び出して廊下から梯子段を素足で駈け下りて浴室の戸を開けた。何十坪あるか知れない、海に面したガラス戸張りの廣大な浴室の中は、濛々と湯氣が立罩めて、眼鏡をはづした彼の眼には電燈の在處さへやつとであつた。彼は浴衣を脫ぎ、大理石の階段をすり足して下りて、三四十疊もの廣さの、首だけの深さのある大浴槽の中に、彼の青白く瘦せた小さな身體をザンブと投げ入れた。地響きする波の音に包まれ、數條の高い湯瀧の迸り落ちるダ、ヽと云ふ音に罩められて、彼はさながら大海の底へでも投げ込まれた氣がした。彼は滅茶苦茶に湯を撥ね飛ばして、拔手を切つたり、底へもぐつたりした。そして白煉瓦の浴槽の緣へ膝頭や頭を打つけた。彼は何とか大きな聲で叫びたいと思つたが、聲が出て來なかつた。彼は唯こん畜生！　こん畜生！と低く呻いては、泳ぎ廻りながら拳をあげて湯の面を強く打つた。彼の表情はすつかり友達の所謂猥褻な感じに變つて來て、彼の眼も泣き、耳も泣いてゐた。

（大正九年三月）

埋葬そのほか

前川の忠僕嘉七は、今日の弔詞を、小學校の老校長先生に賴みに行つた。

「村では誰も讀まない？……何、無言の弔詞？あの連中そんなこと云つてゐたか。しかし、誰が讀まなくても俺だけは讀むつもりだ。尤もあの連中たちとしては、見殺しにしといて、今更死んで歸つたからいゝわで、讀まれもしまいて。生きて歸られたら皆困る連中たちばかしだからな。それにしても、嘉七さんもえらく力を落したな今度は……」と、老先生は嘉七を慰めて云つた。

「まつたくどうも。……生きてさへゐて吳れたら、いつかまたどうにかなる、さう思つて待つてゐたんでしたが、あゝ骨になつて歸つて來られたんでは、どうにも仕様がごわせん。わしは滅多に夢なんか見ない質なんですがな、此頃はよく旦那の夢を見るんで、このあひだの晩も、二人で山へ行つた夢を見ましてね、旦那が雉を一羽射落して、わしが腰にさげて歸つて來たんでしたが、あの山神堂の裏まで來ると、雉が二羽だつたと云ひ出しましてね、わしがいくらさう云ひましてもね、どうしても二羽だと云つてわしをひどく叱りつけて、あんな優しい旦那だつたのにそれは腹を立てましてね、しまひにはたうとうその一羽もわしがいくらあやまつても聽かないで、雪の上へ棄てさせたんでしたが、雪の上へ棄てるとその雉の咽喉から眞紅な血がドロ〱流れ出たんでね、わしは眼がさめてからも厭な氣がされましたが、何しろ旦那もこゝの病だつたと云ひますから……」と嘉七は深い溜息をついて言葉を切つた。

「正夢と云ふ奴だつたらうさ」と、老先生も眼をつぶつて云つた。

前村長、前三等郵便局長、前信用組合長、前何々の前川彌吉氏の粗末な葬式の行列が、主家も土藏も取毀されて離れの一棟のだゝ廣い屋敷の前から、十二月半ばの雪路を、村の下手の方へ繰り出された。官林材の拂下げに村の元老株四五人と共謀して一寸した利益を貪つたことが暴露して、この二月に彼一人が責任者として郷里を出奔し、長い漂泊の擧句二三日前東京で骨になつて歸つて來た――形ばかしの小さな輿が、紋服に袴の股立高く取つた、嘉七の日にやけた太い首筋に吊りさげられて、カンカン――チャラリン〱と、婆さん達の和讃念佛の聲に送られて、嘉七の夢の場に現はれた山神堂側のだら〱坂を山麓の共同墓地へと運ばれて行つた。青年團と小學生の養生會からの寄贈――それも老先生の厚意からの晒し白布の二本の旗の淋しい影が、往來で見送つた人々の胸に投げられた。十七の娘を頭に末が六つの四人の子供たちを初め、送葬者の燒香が濟んだところで、詰襟服に足袋履きの老先生は壇の前に出て、ガッシリした身體の腕を張つて、咳一咳と云つた調子で讀みあげた。

君の人格、君の素養を以てしては、これから本當の仕事が出來るべきであつたのに、轗軻不遇不幸にして旅で、まだ四十と云ふ年で、死んで來たと云ふことは、まことに殘念で、哀悼に堪へない次第である――斯う云つた意味のことが、明晰な調子で讀みあげられたが、そこまで來た時に、老先生の調子が一段と張りあげられた。

「……或は、君近時の行動に對し、妄りに漫罵酷評を加ふるものあれど、蓋し、眞の

聲名は棺を蓋うて後初めて定まるべく、君の眞實の人格が今後に於て初めて理解せらるるに到るべきは予の確く信じて疑はざるところ、君また衷心省みて一點の疚しきを覺えざりしならん。幸ひに瞑せよ！……」

老先生の聲も、張られた腕もブル〳〵震へて見えた。村へ來て三十年、未だに獨身生活を續けて居る老先生が、これまで斯うした不幸な不遇な弟子達のために、幾度斯うした弔詞を讀んで來たか！　薄給の中からひそかに見舞ひの金を送りつゞけてゐたのは彼ばかしではなかつたか！……無言の弔詞連中も、さすがに殊勝らしく頭を垂れてゐた。……

遺失

死ぬ二十日程前だつたが、十一月の下旬で、その時は私をある文壇的な祝ひの會へ出席するため鎌倉を出て行つたのであるが、彼を見舞ふと、その時分にはもう彼は階下の便所へ起つのも不自由な程衰弱してゐた。長い漂泊の旅から歸つて來て、五月の初旬私を鎌倉に訪ねて來た時、彼は郷里へ歸るつもりだつた。今彼の看護に當つてゐる彼の從弟の庄治君と、彼が私を訪ねて來た前の晩帝劇へ出かけて、偶然郷里の方の人と會つたが、その人から彼の弟が流行感冒で死んだと云ふ話を聞いて、郷里へ歸る決心になつたのであつた。がそれが後で虚報だつたことがわかつたが、しかし彼の方でもまたやつぱしその時歸る決心を鈍らしてしまつたのであつた。彼はやはり東京へ引かゝつてしまつた。

八月の初旬だつたが、彼はまた郷里へ歸る決心になり、郷里から出てゐたＨ代議士を日比谷附近の旅館に訪ねて行つて御馳走になり、旅費の金を貰つて、九時過ぎ頃日比谷公園を通つて歸つて來た。暗い、蒸すやうな暑さの晩であつた。僕は池の傍のベンチに腰かけて、噴水の音に、自分の生命の放散して行くやうな悲哀の甘さを感じた。復活の望みのない社會的廢人――彼はさう自分のことを思つた。そしてまた、たゞ時の問題である不治の病氣のことを思ふと、彼はやはり郷里へ歸つたつて仕方がないと云ふ氣がされた。彼等は自分の歸郷を悦ばないであらうが、地獄では、自分の友人たちや肉親の人たちやが、どんなにも歡迎して呉れるに違ひない。自分に取つては最早生は執着ではない。死は恐怖ではない。――

二十五歳の時、彼は父への反抗から妻子を棄てて出奔した。大正三年村長時代に公金の流用問題で失脚して滿洲へ逃げた。今度は三回目である。彼は今度の半年近くの漂泊の間絶えず死の恐怖に脅かされて來た。生きては歸れまいと云ふ豫感に脅かされて來た。しかし、どんな未來が自分を待つてゐて呉れる。……？

噴水のしぶく音は、生命の放散の甘さから彼を眠りに誘つた。彼は何十分かさうしてうつらうつらしてゐたが、突然白絣にパナマ帽の男に荒々しく搖り起され、無理無體に引張られて行つた。普選問題で喧ましい時分であつた。彼の鞄の中には發賣禁止になつた雜誌の切拔や、某顯官の名刺など入つてゐた。それに彼は僞名を使はねばならぬ事情に置かれてゐた。彼は穩しく南京蟲と蚊に責められて、朝々の白い光に指を繰つて二十五日間○○署の留置場で送つて來た。

此世の人間と思はれないやうな、歩く力すら失はれたフラ〳〵の姿になつて、彼は神田のある工場に働いてゐる從弟の庄治君を訪ねて來た時は、彼の脚は丸太棒のやうに腫れあがつてゐた。それから十二月の中旬息を引取るまで、彼は庄治君夫婦の借間の四疊半で慘めな病床の人であつた。……

その晩私は庄治君の御馳走になり、酒を飲みながら遲くまで彼の枕許で話した。氣分には變りがなく、言葉の調子も元氣であつた。歸る時私は彼から日記帳と書翰紙に三十枚位書いたものを渡された。それは今度の事件の內容と漂泊中の日記であつた。事件に出て來る人達は私もよく知つてゐた。彼が失踪中に事件の解決をつけて、彼を迎ひに來るべき筈だつたのだが、その解決がまだ附けられてなかつた。私は彼の手記を材料として揶揄的な對話風なものを書くつもりだつた。そこには、憎むにも憎まれないやうな、しかしそれは不正であり虛僞であるに違ひないやうなことが平氣に鈍感に行はれてゐる私の地方の生活相は、私の揶揄性を刺激するものがないでもなかつた。

彼はまづ鄉里から東京——京都、城崎溫泉、山陰線で出雲、松江、東鄕溫泉、倉吉町、鳥取市、——京都、——大阪、——船で門司、小倉、八幡、福岡、二日市溫泉、太宰府、久留米、別府、四國の多度津、琴平、八島、——岡山、大阪、京都、東京、鎌倉、東京——

大體斯んなやうな順序で、彼は三月餘りの遍歷の旅を重ねて來た。その詳しい旅日記であつた。二つともが私自身の爲めにも、また庄治君の豐かでない家計の爲めにも差迫つて役立てなければならない重要なもので、また彼が四十度近い熱の身體から絞り出された執心の產物でもあつた。

「もつと詳しく書くつもりだつたけれど、此頃少し疲れてるやうで、よく書けなかつた。それにあの連中たちのことを書くんだと思ふと、餘りいゝ氣持ぢやないからな」と、彼は淋しく笑つて云つた。

十二時近くなつて、私は早稻田の終點から電車に乘り、飯田橋で下りて神樂坂の友人の下宿へ泊つた。朝、ご飯をたべてしまふ時までも私はそのことに氣がつかずにゐたが、「オヤッ、ゆうべたしか持つて來たやうな氣がするが……」と、私は氣がついて急に狼狽しはじめた。「しかしゆうべは隨分醉つてゐたから、持つて來たつもりで置き忘れて來たのかも知れない」斯うも思つて見たが、氣が氣でなくなつた。私は神樂坂から戶塚まで、胸をドキ〳〵させ、眼も眩みさうな氣持で、膝頭がガタ〳〵するやうな恐慌に壓倒されて、駈けるやうに步いて行つた。駄菓子屋の店先きから案內も乞はずミシ〳〵する梯子段を登つて行つたが、庄治君の細君が留守で、彼一人仰向いて寢てゐた。

「私ゆうべこゝへ風呂敷包みを置いて行かなかつたでせうか？」と、私は障子を開けるなり突立つたまゝで云つた。彼もハッと嚇かされたやうな顏して、

「いや、たしかにこゝを出る時は持つて行つた。あなたの手帳といつしよに風呂敷に包んで持つて行つたが、外套のポケットへ入らないやうなので、隨分醉つてゐたやうだから途中どうか知らとは思つたが、兎に角こゝを出る時は持つて出たですよ」と、喘ぐやうな調子で云つた。

「やつぱしそれでは電車の中だつたかなあ、出て呉れるといゝがなあ、……兎に角車庫へ行つて檢べて見よう」

私はもうすつかり落膽して、煙草も吸はずあたふたと出かけようとすると、

「オヤ、雨が降つて來たやうぢやありませんか。洋傘を持つて行つたらいゝでせう」と、彼に注意されて見ると、窓の外の曇つた空からポツリポツリ落ちはじめてゐた。

彼が旅で持ち馴れた洋傘を出して、サックを拔き取らうとしたが、あわて切つてゐる私にそれが容易に取れない。彼は見かねた態で、一どれどれ僕が取つてやらう」斯う云つて、はじめて床の上に起きあがつて、瘦せ細つた腕に力を込

めてたうとう拔き取つたが、
「しかし、あまり心配せんがいゝですよ。僕氣分がよかつたら、明日からでもまた書いて置くが、しかしあの連中たち、あなたに書かれたくなかつたのかも知れないな……」
彼は斯う云つて、ぢいつと、私の顔に、彼としては私の方を却つて氣の毒――さう云つた意味だつたやうに思はれるが、ぢいつと視入つた彼の深く暗く落込んだ眼――魂の苦惱の暗さ深さを覗かしてゐるやうな眼に、はじめて氣づいて、冷めたい不安な豫感に襲はれた。しまつたことをしたぞ。油斷だつた。恐らく彼自身も死に對して油斷してゐるのだ――
私は早稻田の車庫から丸の內の本社へも廻つて調べて見たが、やつぱし出て來なかつた。私はそれから雨の中を會主催の講演會へも聽講に出かけ晩餐會へも出席した。三百名に近い盛大な晩餐會であつた。眩ゆきばかりの席上、趣向を凝らした餘興――さう云つた間に在りながら、私の心は洞窟のやうに暗く陰氣だつた。

越年

叔父の骨を送つて、二十幾時間汽車に搖られて、私は鄕里に歸つて行つた。そして三晩通夜をした。そしてまた二十幾時間上野まで乘り、鎌倉の室を借りてる寺へ歸つて來た。倅の淸吉は一人でいろ〱な恐怖の妄想に襲はれながら、私の歸りを待ち侘びてゐた。
私は悲嘆と疲勞とでほとんど病氣になつた。それでなくつてさへ、私はいろ〱な生靈とか死靈とか云ふやうなものを信じなければならないほどに不幸な慘めな生活をして來てゐる自分のことだから、歸つて來ると、半月ばかしの間、明け暮れ、彼の死靈と語り合つてゐた。それが感傷的な慰めでもあつた。酒でも飲むと、ポロ〱淚がこぼれた。叔父は都會で窮死同樣な死方をして行つたのであつたが、しかしニコニコの往生だつた。そのニコ〱顔が、私にはかなり強い死の魅力であつた。
大晦日があと二日と迫つた日、私は淸吉をつれて、叔父の死靈に勵まされて、東京へ金策に出かけて行つた。大晦日の日は朝から雪降りであつた。私は降りしきる雪の中を、ほとんど狂氣のやうになつて、一寸ばかし顔を見知つてる位の人のところへも出かけて行つた。乞食だと思はれたら、乞食でもよろしい。詐欺師だと思はれたら、詐欺師でもよろしい――そんな氣持で私は押かけて行つた。しかし私は最後の最後までも失望しなかつた。死靈のニコ〱顔がついて廻つてゐた。私は始終勵まされ慰められてゐた。彼は生前私の唯一の保護者であつた。彼の死靈が決して私を失望に終らせないだらうと云ふことを、私は信じない譯に行かなかつた。
が、悉くが徒勞に終つた。私はすつかり疲れ切つて、空腹と痛い脚を引ずりながら、淸吉ひとりを殘して置いた山の手の宿の方へ歸つて來た。その時途中で、ふとK醫院と云ふ電燈の下の表札を認めて、私は脚をとゞめた。一寸した門構への家で、院長の若い醫學士とは私は叔父のところで二三度會つてゐた。「こゝだつたのか……」斯う思つた刹那に、私は死靈の誘惑にかゝつてゐた。叔父がたうとうこゝまで私を導いて來たと云ふことに、私は深い因緣を感じない譯には行かなかつた。叔父の御禮も申し上げる義務がある――斯う云ふ理由に考へ及んだ時、私は猛然として勇氣づけられた。そして私は院長に面會を求めた。もう十一時近い時刻であつた。
三十を越したばかしの、血色のいゝ、髭の美しい、金緣の蔭に細い柔和な眼した、大島揃ひの院長は、看護婦に案內された明るい診察室に、

一寸ばかし待たせて、入つて來た。彼は微醺を帶びてゐた。家庭の幸福、新年の希望――さう云つた無限に樂しげな氣分のものが、彼と共に入つて來た。私は死靈の影が急に薄くなつたのを感じて、狼狽した。

「此間中はどうもいろ〳〵と御厄介になりまして、お蔭で葬式も濟みまして……」と、私はかつと逆上せた氣持で狼狽した調子で云つた。

「いやどう いたしまして、まことにお氣の毒なことでした。何しろ私の診た時分にはもうすつかり心臟の方がいけなくなつてゐたので、それでないとまた方法もあつたのでせうが、何分にも少し手遲れになつてゐたやうでしたから……」

「何しろ當人があの通り觀念し切つてゐるので、どうにも仕樣がなかつたので、やう〳〵あの時分になつて醫者に診せると云ひ出したやうな譯で、それまでは何と云つても聽き入れなかつたので、當人もまさか死ぬとは思つてゐなかつたでせうから……」

「いや私も最初にあがつた時でしたが、熱が四十度を超えてるのに、今日は少しばかり氣分がわるいやうだと云つてた位でしたからね、あの病氣は最後まで氣分がはつきりしてますからね、うつかりすると素人の方は油斷をしますから」

「まつたくどうも、まさか死ぬ病人だとは思つてゐませんでした。何しろあの通り觀念し切つてゐたので、あれも一寸えらい男だつたのでしたが、ある事情からつい あんな死方をして行つたのでしたが、私は實に殘念で……惜しい人間だつたのですが、私はついもう毎日……」

私はつい斯う云ひかけたが、醫學士の怪訝さうな瞬きに氣がついて、私は言葉を呑んだ。そして何かしら身のまはりが振りかへられた。狼狽と困惑が感じられた。――何う云ふつもりで俺は入つて來たのだつたらう？……傘を借りる？……オヤ〳〵變だぞ――私はすつかり狼狽してしまつて、二つ三つペコ〳〵頭をさげて、こそ〳〵と門の外へ出て來たが、雪の中で叔父の死靈が、生前滅多に見せたことのなかつた、ひどく陰氣な佛頂面を見せて、私のことを「馬鹿！」と呶鳴つた。

獲物

一月以來私は毎日、空氣銃の練習で日を送つて來た。それは、生の忘却――と云つたやうな意味で私には有益なことであつた。酒と睡りと空氣銃――私はそれで、十分に滿足してゐた。贅澤を云つても、それは及ばないことであつた。

四月半ばの日曜日だつたが、私と淸吉とは町の方へ雀を擊ちに出かけて行つた。最初のうち淸吉の方がうまかつたが、學校があるので、それに私の病的な練習ぶりから、此頃では私の方はずつと自信を得てゐた。それで、當然彼の方が私のポインターの役目をすべきであつた。

材木座の別莊にA君が創作をしに來てゐた。そこの庭へ雀が澤山來ると云ふので、私たちは前から訪問を約束してゐた、私は今日こそは自分の技倆を實地に試して、大いにA君を驚かしてやらうと思つた。

八幡前の、石の鳥居のすぐ傍の電線に雀が一羽とまつて、そつぽを向いてチヨン〳〵啼いてゐた。

「淸吉！」と云つて私は彼の擔いでゐた銃を取つて、覘ひを定めてプスッとやると、ピクッともせず陽炎立つた日光の中を羽をひろげて落ちて來た。三角ダマが尻の方の柔かい部分を突拔けて、傷口にちつとばかし血が滲染んでゐた。

「うまいもんですなあ……何をやつてゐたの

かと思つた一葉櫻の間の往來をぞろ〳〵やつて來た遊覧客の一群が傍に寄つて來て私の技倆を賞讃した。

小町の方へ曲つて、往來に向いた茅葺屋根の棟で春の悦びを交換し合つてゐるそのどちらだつたかに覘ひをつけて、プスッとやると、囀り聲がシーンとしたと思ふと、コロッと一羽轉がり出したが、途中で引かゝつてしまつた。私たちはだいぶ屋根上を恨めしく眺めて待つて見たが、諦めて一町ばかし歩いて來ると、後から子供が「今落ちて來たから」と云つて追かけて持つて來て呉れた。私は少年の親切を謝した。今度のは眼玉を完全に射抜かれて血が吹き出てゐたので、少し殘酷な感じであつた。それからＡ君の別莊へ行く途中ではみな射損じてしまつた。

Ａ君のところには近所に住んでゐる友達のＳ君が遊びに來てゐた。Ｓ君は本當の鐵砲を持つてゐた。Ａ君のところへは東京から友人達が遊びに來ると云ふので、十二時幾らの汽車へ迎ひに出て行つた。その間本當の鐵砲を持ち出して來たＳ君と私たちは、裏の山へ登つて鵯の聲を追かけたりして遊んだ。やはり時間を持て餘してゐるＳ君は、昨年の暮に買つたのだが、まだ二三度しか持ち出してないと云ふことだつた。

「やはり一人では、相手がないと億劫だらうから、今によくうちのポインターを馴らして置きますからね、さうしたら日曜に貸しますよ」と、私は清吉をからかつたりした。

「何か獲つて見た？」

「いや、この前たつた一羽鶯見たいな鳥を撃つたがね、脚の方だつたものだからまだ活きてゐてね、口を開けて抵抗する風をしたりしてね、氣味がわるかつた」

「そいつを食べて見た？」

「いや食べなかつたね」

「なぜ食べなかつたかねえ」と、私は惜しい氣がされた。

東京から來たＡ君の若い友人の三人と、年頃の令嬢と、女學校へ入つたばかしの女學生二人と、Ａ君Ｓ君、私たちといふ大勢で、海岸の方へ繰り出して行つた。何と云ふ四月のいゝ天氣、いゝ海、いゝ人達であらう。すべてが輝かしく、爽かであつた。鬱積した、溷濁した、老廢した私の魂にも、新鮮な悦びを感じさせた。Ｓ君が眩しく炎陽立つた空中に向つて、一發パーンと放つた。そして彼等は一齊に滑川の方に向つて駈け出した。彼等には若さがあり、健康があつた。Ａ君の友人のＯ君が、クリーム色のパラソル翳した令嬢と肩を並べて何事かを語り合つて行く姿も、美しい繪のやうに思はれた。

私たちはめい〳〵に鐵砲やステッキを兵隊のやうに擔いで、滑川の海岸のトロッコの線路の橋の上に並んで立つて、持つて來た小型の器械で寫眞を撮つた。鎌倉ドン・キホーテ――Ａ君は私の姿をさう評した。由井ケ濱では團體の宴遊會の幾組かが、各〳〵趣向を凝らした餘興を演じてゐた。

長谷で遅い晝飯を濟まして、電車で藤澤へ廻る一同と別れて、私と清吉とは長谷の通りを自動車や馬車の埃りを浴びながら歸て來た。私はかなり疲勞を覺えたが、しかし愉快な一日であつた。清吉は細紐で頸を結へて、日光と人目を避けるためその上を新聞紙で蔽うた獲物をさげて、やはり疲れた樣子の歩きぶりであつた。彼等と別れて、私たちは何となく哀愁を感じた。それを紛らさうと云ふやうな氣持から、私はまた途々撃つて見たが、最早當りさうもなくなつた。

「もうせめて二羽位ほしいものだな。一羽づつではほんの一寸だらう」と私は云つた。

「いや僕は食べなくてもいゝよ。お父さんだけ食べるといゝ」一體が氣味わるがり屋の彼は、眉を寄せるやうにして云つた。

「いやお前も食べて見るさ。そりやうまいよ。食べて見たことがないだらう？……早く歸つて僕が料理をするからね。A君に聽いたやうに、まづ腹を割いて、それから鋏で兩方の肋骨をパチン〳〵と鋏んでそれを開くと臓物がそつくり出て來るさ、それを醬油をつけて燒いて食べるんだね。そりやうまいだらう……」

料理をすることも面白さうだし、斯んなに簡單に撃てるのだからこれからは毎日お湯へ來たついでに二三羽づつもセシめて行つて、貧しい晩酌のお膳に珍味が添へられることと思ふと、數ケ月練習の效も空しくなかつたと、淸吉の理解ある甲斐もあり、二十五圓と云ふ大金を奮發した甲斐もあり、數ケ月練習の效も空しくなかつたと、淸吉の理解を超えた私には滿足があつた。練習に棄てた何千發と云ふ彈丸が惜しい氣がされた。實地の方だともつと早く上達もしたであらうし、相當の獲物もあつた譯で、酒と眠りには獲物と云ふものがないが、此方は一擧兩得の働きをする結構な物だと云ふことに、新しく氣がつかれた。今夜の晩酌がいかにうまく飮めるだらうかと、私は淸吉の倦怠の色に氣が咎めながら、胸の中に空想して樂んだ。

私たちは行きつけの小町の裏通りのお湯へ入つて、それから師範學校の前を通つて八幡樣の境内へ入り、參詣の鋪石道のあたりまで來た時、

「お父さん、雀が一羽しきやないよ……」と、淸吉は顏色を變へて云ひ出した。

「一羽しきやない？　そんな筈はないぢやないか！　お前が氣をつけないものだから落して來たんだらう。いつだつてお前はさうぢやないか。物事に對しても實に粗略で、不注意だよ……」と私はすつかり不機嫌になつて、殊にさつきからの彼の倦怠ぶりが氣に觸つてゐたところだつたので、私は口を尖らして呶鳴つた。

「さうぢやないんだけど、さつきお湯屋を出る時はたしか二羽あつたと思つたんだけれど……」と彼はすつかり怯えた顏して、引返して搜して來ると云つた。

「ぢやあ、あそこの師範の石橋のところまで行つて見て來い。それで見つからなかつたら歸つて來い！」

私は彼の駈け出して行く後姿を見送つて、言ひやうのない暗鬱な嘆息が感じられた。不幸な慘めた感じであつた。お互ひに慘めで孤獨な私たちの生活の間では滅多に來ないであらう今日の樂しかつた一日の終りに、斯うした蹉跌が待つてゐたのであつた。

私は彼を憫れむと同じやうに自分を憫れまずにゐられなかつた。

「なかつた……」と云つて、彼は悄然として歸つて來た。

「ないものは仕方がないね……」と、私たちは默り合つて歩き出したが、境内と往來の境の小さな橋まで來た時に、

「そいつも棄てつちまへよ……」と云つた。

夕方の迫つて來たこぶくろ坂を、二人はいつまでも暗く默り合つて、歸つて來た。練習だけにとどめて置くべきであつた――いつまでか二人の記憶に今日の雀一羽のことが刻み込まれるであらうと云ふことは、私には遣る瀨ない後悔であつた。

お神籤

「一度は流感で死んだと云ふ噂まで立てられたが、その時も助かつたし、情死では死損ふし、やつぱしまだこの娑婆に緣があつたのですね。まつたくモルヒネの量にも間違ひがなかつたんだから、それでも二人とも助かつてゐる、……

ほんとに醫者も不思議がつてゐましたよ」と、死んだ彌吉氏の弟のT君は、相手の女と二人で撮つた寫眞や、まだ商賣に入らない前の女だけのやら旅鞄から出して、私に見せながら云つた。

「成程、かなりの美人だ。これ位だとやはり一等格の方でせうね。そして、今もやはりいつしよに居るんですね。細君たちとはすつかり離緣になつたさうですね……」

「いや、女はまだ年が明けてないんですよ。いつしよに居るなんてのは世間の噂ですよ。女のおふくろや弟たちとはいつしよにゐるんですが……」

「それにしても離緣とは、細君たち可哀さうぢやありませんか……」

「そんなことあるもんですか！　年の若い自分が云つては變なものだが、死なうとまで思ひ詰めて來るとそりや妻子のこと位何でもないもんですよ。あなたなんか經驗がないからでせうが、そんな點では實に不徹底な氣がしますね。あなたの書くものなんかでも、そんな點では隨分歯痒いところがあると思ひますね」と、彼は冷かな調子で云つた。

彌吉氏の葬式が十二月に村で行はれたのだが、M市の情人の實家に潜伏してゐたT君は、たうとう葬式にも出て來なかつた。が今度幸ひに、縣教育會から補助のある教育活動寫眞の興行權――そんなやうなものを握ることが出來て、その用事で出京したのであつた。

「そりや死んだ者の方がどれほど幸福だか、有りたけの財産を悉く使ひ盡して、何も無くなつたところで旅でこつそり死んで歸る――兄ほど幸福な人間はないぢやありませんか。生き殘りの自分なんかこそ不幸だ、死ぬには死なれず……しかし今度は大いにやるつもりです。さう云ふ方にかけては今度の女は性格的に非常によく出來てますよ……」

「さうだと結構ですね」と、私も云ふほかなかつた。

やはり丁度昨年の五月の初旬頃だつたが、彌吉氏が漂泊の旅から歸つて來て一晩泊つた時、二人で半僧坊のお神籤を引いたが、彌吉氏は吉で、私は五十四番の凶であつた。その時彌吉氏は何と思つたか、私に、「あなたは女難の相があるから注意しないといけない」と云つた。

私はその時のことを思ひ出して、T君にすゝめた。彼はひとりで出かけて行つたが、九十六番の大吉を引當てて「素敵々々・」と云つて歸つて來た。

「これで益々前途有望と云ふ譯かね。大いに貴人の庇護を得ん、と云ふところもすつかり當つてますね。殘り者の果報で、兄は身代りに死んで呉れたんだらうし、さう思ふと、兄の死も有難いことになるかな。兎に角大いにやりますよ。…大吉！　大吉！」彼は恭しく額にいただき、情人の寫眞の間に大事に挾んで、二晩泊つて雨の中を昂然として歸つて行つた。

教育活動――兄の死――情死未遂――お神籤――佛殿の前で彼を見送つた私は、何かしら不安定な暗い苛立たしいやうなものが殘されたやうな氣がして、佛殿の前の地面にむごたらしく崩れて雨にたゝかれてゐる牡丹の花瓣を眺めては、しばらく立つてゐた。そして、神意に占はれた彼の前途を祈りたい氣になつた。

（大正十年七月）

朝詣り

私はまた徹夜をした。しない譯に行かないのだ。Ｘ社のＨ氏が町の旅館に泊つて、明朝の六時の一番で原稿を持つて歸ると云ふのだ。昨夜からの雪が、今朝六七寸も積つてゐた。さうした雪の中を、Ｈ氏は鬢にしづくを垂れ、額に汗を流して朝早くやつて來た。原稿は一枚も出來てゐなかつた。午後四時頃までと云ふ堅い約束でＨ氏は逗子の方へ二軒廻つて來ると云つて行つたが、それからも私はやはり一二枚の書き損じをこしらへただけで、迚も書けさうにはないのだ。三時頃たうとう投げ出して、私は子供の空氣銃を持出し、部屋借りの寺の石段を下りて、建長寺の境內をブラ〳〵やつた。佛殿の近くの餘り高くない松の樹に、アヲジが二羽すばしこく枝から枝をチヽと啼き交はしながら移り歩いてゐるのを見出し、一羽のスキを覗つて引金をひいたが、うまく雪の上に落ちて來た。少しばかりの紅い血が雪を染めた。やはり小說と云ふ惡魔に呪はれた、運の惡い小鳥だつたのだ。私はそれを片手にさげて、今度はまた自分の寺の石段の上の杉の樹立の中に鵯の聲を聽いて登つて行つたが、ふと下の方を見ると、オーバー姿のＨ氏が駈けるやうな歩調でやつて來たので、私はハッとして其場に立ちすくんだ。所詮免れ難い、今の運の惡い小鳥のやうなものだつた。私は今度はどうかして堪忍して貰ひたいと思つたのだが、Ｈ氏の眞劍らしい顏を見ると、迚もそんなことは云ひ出せるどころではなかつた。

「お出來になりましたでせうか？」

「いや、……それで何とも申譯ありませんが、今夜は徹夜をして、明日の朝早く屹度間違ひなく持つて行きますから……」

「いやそれが間違ひございませんのでしたら、私は今夜町の旅館へ泊つて明日の朝の一番列車で頂戴して歸ることに致しますから。……私もこのまゝでは實際社へ歸れんのですから」

「それでは何とも恐縮な譯ですが、さう云ふことにしていたゞきませうか……」と、私としてはほかに何とも云ふことが出來ない義理合だつた。吞氣らしく空氣銃など擔ぎ出してゐた間の惡さも顧みられた。

この一週間ほどは、私は毎日のやうにＸ社から使ひや電報を受けてゐた。今夜は三度目の徹夜だつた。年暮れに東京で引いて來た感冒が脫けてゐないのに、胸背の神經痛が手傳つた。が何よりも、冬と云ふ季節が私にはいけないのだ。頭腦も身體も、まつたく冬眠狀態だつた。下等動物の方に近い人間なんだらうと、私はほんとにそんな氣がする。氣分も神經もまるで働かないのだ。

年暮れも押詰つた二十六日に、年中行事の年末の金策に、何ケ月ぶりかで東京に出て行つた。歲晩の東京は素晴らしい勢ひで活動してゐる。自分は墓場の中から迷ひ出た亡靈のやうなものだつた。大體私は四百圓位搔き集めるつもりだつたのだが、そしてそれがどうやら搔き集められたのだが、搔き集める下からポロ〳〵落こつて、大晦日の終列車で歸つて來た時は私の懷ろには百五十圓しか殘つてゐなかつた。柄にもなく私は都會の活動ぶりにあやかりたい氣持になつて、二十六日から五日の間、晝夜の差別もなく東京市中を縱橫無盡――にタクシーを驅つた。このまゝ地獄の火の車となつたら、そ

れも面白いと云ふ氣がした。クロイロフの梟が盲目の驢馬を乘り廻した勢ひで、そら本郷！そら青山！そら芝！牛込！銀座！淺草！吉原！……私の梟も夜も晝もなかつた。どん詰りの三十一日の午前三時と云ふ時刻に私は吉原に駈けつけて、午後の三時まで大きな建物の三階であひかたの女相手に酒を飮んだ。それからまたタクシーを驅つて洪水のやうな巷を東京驛發終列車の時刻まで西に東に、闇雲に駈け廻つた。後一時間半で、除夜の鐘を聽くと云ふ時刻に、濃い霧の流れの底を若鮎かのやうに無數の自動車、俥、自轉車、電車の間に混つて、多少朦朧めいた感じながら私のタクシーも威勢よく走つてゐた。小石川！日本橋！新橋！……梟の私は絶えず叫び續けた。がタクシーは盲目の驢馬ではなかつた。彼は私の期待を裏切つて、何物にも衝突せず、地獄へまでは引張らうとしなかつた。……

十時、十一時——雨になつた。茅葺屋根の雨だれの音、思ひ出したやうに時々鳴る崖の上の樹木、雪のすべり落ちる音——山寺のガランとした天井の高い部屋の寒さは骨身に沁みて來る。私は炬燵の上に原稿紙を擴げて、さうしたが、どうしても書けない。愚かしい自分の行爲が恥ぢられるばかしだ。さうした阿呆らしい感興まで頼らねばならぬと云ふのなら、むしろ生きながら墓場の人間になりきつたつていゝではないだらうか。私は物が書けなかつたり考へ事をしたりする時の癖で、掌や指を強くこすつて垢をより出すのだが、この數日で掌が眞赤になり、ヒリ〳〵と痛むほどだ。今夜も火鉢の中や炬燵の掻巻の上にだいぶ垢がより出されたのだが、三時四時の時刻が來ても原稿紙の上には一字の記錄の垢も絞り出されなかつた。四時カッキリで私は思ひ切つてペンを棄てた。

一月十六日——私は三十六歳の誕生日であつた。私はマントを着、洋傘をさして、かなり強い降りの暗い外へ出て行つた。雪明りで高い石段を下りて半僧坊道を犬にも吠えられず、寢靜まつた茶店の前を通つて半僧坊の幾層かの曲折した急な石段を登つて行つた。雨と雪解けの水で階段は流れをなしてゐた。最後の一番急な石段を登る時目が眩みさうで、すつかり汗になつた。やう〳〵神殿の前に立つて昂ぶる動悸を押鎭めて禮拜を濟ませたが、そこから眺められる四邊の暗澹とした光景が、やはり私の今年の誕生の朝にはふさはしいものだと云ふ氣がされて、私は雨に裾を吹きまくられながら濛々とした空や谷を前にしてしばらく立つてゐた。

（大正十一年一月）

不良兒

一月末から一ケ月半ほど、私は東京に出てゐた。こんなことは今度が初めてと云ふわけではないので、私はいつものやうにFは學校へは行つてゐることと思つてゐた。ところが半月ほど經つて出したお寺からの手紙に、Fは私が出た後全然學校を休んで、いくらすゝめても私が歸るまでは學校へは行かないと云つてて困るから、私に早く歸るやうにと云つて來てゐた。またその後だつたが、東京の或る友人から、君の子供が鎌倉で憂鬱病にかゝつてゐると云ふことだが、君は知つてゐるのか——と、どこからそんな噂が傳はつたものか、弟のところへ宛てて葉書で私に注意して呉れた。

二月十六日に私は東京を發つて、疲れ切つた陰鬱な氣分をいくらかでも換へたいつもりから、東北地方を汽車で一廻りして來た。郷里の妻を訪ねて、Fが東京の中學へ入學出來たら郊外へでも世帯を持たうと云ふそんな下相談などして、二十三日に歸つて來て、その手紙や葉書を見たので、二十四日に弟の二階に居る文科受驗生の井出君を鎌倉に使ひにやつた。

「仕樣がない奴だ。兎に角Fをつれて來て下さい。云ふことを聽かなかつたらひつぱたいてもいゝから……」と、私は井出君に云ひつけてやつた。

その晩寺に泊つた井出君は、Fは叱られるからどうしても厭だと云ふのを、淺草の活動寫眞を見せると云ふ約束で、東京まで引つ張り出しさへすればどうにかなるだらうと云ふのでつれ出したのだが、結局活動の見せ損で、Fに新橋から歸られ、井出君ひとりでぼんやり歸つて來た。で私はいよ〳〵腹を立てて翌日更に井出君を引返してやつたが、心許なく思はれたので、夕方勤め先きから歸つて來た弟に、「井出君ではやはり駄目らしいから、お前行つてつれて來て呉れないか。剛情で仕樣がない奴だ。何もかも分つてゐて、あゝ横着を極め込んでるんだから、癖になるから……」と、急き立てて出してやつた。間もなくやつぱし井出君ひとりで「どうしても厭だと云つて何と云つても聽かないもんですから……」と云つて歸つて來た。それから日が暮れてFは食事や一切の世話をして呉れてるS屋の娘——と云つても二十三になるおせいといつしよに、怯けた顏してやつて來た。行違ひになつた弟は遲く終列車で歸つて來た。

そんな譯で、Fはかなりひどく叱られねばならなかつた。翌日は雪が降つて、私は熱があつて床の中へ入つてゐたが、「貴樣のやうな人間は小僧にでもなつちまへ！」と云つて、新聞の廣告を見て、井出君に外へつれ出させようとまで思つたが、弟夫婦や昨年の暮から出て來てゐる老父に取做されて思ひ止まつた。尤も小僧と云ふのは言葉だけの威嚇なんだが。

その日の午後Fは井出君といつしよに寺に歸つた。井出君は晝間は自分の勉強をし、晩はFの遲れた學課を見て呉れることになつた。

それからも私は東京に引かゝつてゐて——金の都合が出來なかつたので——三月十四日に、一ケ月半ぶりで、弟のところから老父を誘ひ出して二人で寺に歸つて來た。脚の不自由な老父は、玄關わきの二疊で、暮に生れた弟たちの赤んぼの寢床のわきに、背を丸くして火鉢にあたりながら、終日新聞を讀んだりして所在な

い日を送つてゐた。ひどく億劫がるのを、私は手を引張らんばかしにして、つれ出したのであつた。

老父は私よりも酒が強かつた。閑靜な寺の座敷を悦んで、老父は朝から私相手に飲んで、二晩泊つて十六日の午後、少し時間が遲かつたが醉つた身體を井出君に介抱されながら、初めての江の島に廻つて歸ると云つて、元氣で出て行つた。その日は特にFも學校を休ませて送らした。三人は江の島の棧橋の手前の茶店で榮螺の壺燒や丼などたべて、藤澤に出て、Fだけが大船で別れて乘替へて來たのだが、寺へ歸つたのは十時半頃だつたので、少し時間が遲過ぎると思つたが、格別氣にも止めなかつた。十七日はいつもの時間通り、豫習をやつてゐるので七時頃歸つて來た。十八日の晩は二時過ぎまで私は起きて待つたが、たうとうFは歸つて來なかつた。十六日の晩の時間の遲過ぎたなど考へ合はされて、いろ／＼に氣を廻して見たが、結局私の永い留守の間にFは不良少年に取つかれたのだらうと云ふ疑惑が、私の心を慘めに昏迷さした。小僧と不良少年──斯うした暗示が最後までFに利用されて、私に祟つた。

前の晩だつたが、Fが次ぎの室の寢床に入つて間もなく、彼の睡入らないのを知つて故意に彼に聞えるやうに、私は酒を飲みながら、彼の性質の良くないことをおせいに話して、殊にこの前井出君につれられて東京に出て、淺草で活動を見さしたり御馳走させたりした上、井出君に鼻を明かして自分ひとり新橋から歸つて來た──私はそのことを非難した。Fはそのことだけはまだ私に明かされてゐないことと思つてゐたらしかつた。彼は寢床の中でそれを聽いてゐた。そして心を傷めた。後になつて考へて見ると、その晩のことが事件の動機を作つたやうなものであつた。後に新聞に──學校退出後活動寫眞に入り歸宅の時間遲れし爲め父に叱られるを氣遣ひ云々──などと出たが、それは間違ひだつた。

兎に角Fは私と二人きりになつて、ひどく脅えてゐた處だつた。東京でひどく叱られたと云つても、私と二人きりではなかつた。十六日に老父に歸られ、十七日の晩は──私はいつも面罵一方の方なんだがその晩はどうかしてそんなことだつたし、十八日の朝いつものやうに私の枕許で行つて參りますと挨拶した時、いつものやうに互ひの視線がピッタリ感じが合はなかつた。それがFにも感じられた。でその日も彼は時間通りに歸つて來たのだつたが、すぐ入れずに、雨戸を締めた濡縁の外に立つて、しばらく中の樣子をうかゞつてゐた。そのうちに時間が經つて、私が雨戸を明けて手洗鉢で手を洗つた時、Fの方では私が彼の立つてる姿に氣がついた筈だと思つたが、私は氣がつかなかつたのでそのまゝ雨戸を締めたが、それで彼はやはり私が前の晩のことを怒つてゐるものと思ひ込んで、二時間も外に立つた後そつと物置に忍び込んで、翌朝の五時頃晩飯も朝飯も食はず、そつとまた學校へ出て行つたのだつた。…

十九日は日曜だつた。が豫習生は日曜も休まないことになつてゐるので、若しやと云ふので、お寺の婆さんも心配して下の方丈の電話を借りて學校へかけて呉れたが、受持の教師が出て來て、Fはいつもの通り學校で勉强してゐると云ふ返事だつた。で早速おせいに迎ひに行つて貰つた。ゆうべはどこに泊つて、どこで飯を食つて──さう思ふと、私には唯不良少年の場合のみ慘めに聯想された。由井ケ濱の小學校までは二十町からあつた。私はぢつと部屋の中に坐つてゐるに堪へない氣持で、寺の前の高い石段の上を往つたり來たりした。日曜の天氣で、石段の下の通りは、半僧坊詣りの客で賑かだ

つた。Fを郷里からつれて來て一年半ほどになるが、此頃になつてだん／＼、斯うした父子二人きりの不自然な生活からの神經の傷害――それがお互ひに堪へ難いものに思はれて來た。Fは一昨年の春流行感冒から重い肋膜を患つて危い生命を取止め、引續き夏休みにかゝつて、十月に奧州の山の中からつれ出して來て十一月から由井ケ濱の小學校へ通はせたのだが、さう云ふわけで、學課の方も健康もひどく鈍つてゐた。二冬の海岸の小學校生活――濕氣の強い山の上の寺は、彼には寢るだけの場所だつた――は、彼の身體をかなりしつかりさせた。後れてゐた學課の方もぼつ／＼取返して來たやうに思はれた。が彼の性質はだん／＼陰鬱になり神經質になりいろ／＼な點から注意が必要になつて來てゐた。斯うした生活狀態がいけないのに違ひなかつた。私も氣がついて、幾度か郷里の妻の許に歸さうと思つたのだ。最後は、昨年の十一月だつたが、東京から弟を態々呼んで、Fの行李まで擔ぎ出さしたのだが、丁度獨りの老父が郷里の家を疊んで出て來たのとカチ合つた爲め、その時もお流れになつた。そして卒業式も後幾日と云ふところまで來てゐたのであつた。

私は石段の上で彼等の歸つて來るのを待つてゐた。近所の男の子が石段を駈けあがつて來た。

「小父さん、今ね、せいちやんがね、Fちやんをそこまで伴れて來たんですがね、門の中まで來てFちやんがまた逃げ出したさうですから、せいちやんが小父さんにすぐ來て下さいつて……」

「さうですか、どうも有難う……」と云つたが、私はすぐ駈け出して行く氣になれなかつた。どこまで手古擦らす氣なのだ、罰當り奴！……と云ふ氣がした。

「それではね、おせいちやんにね、いゝから構はないで歸つて呉れつて、さう云つて呉れませんか。ほんとに仕樣がない奴だ……」と、私は男の子に云つて、がつかりした氣持になつて家にはひつた。

おせいは息を切つて歸つて來た。

「どうだつた？」

「いえね、やつぱしゆうべはそこの物置に歸つて來て寢たんですつて。學校の歸りに途中で他所の子と喧嘩して、顏に傷したからお父さんに叱られるから歸らなかつたと云うてね、さうかと思ふと井出さんと活動を見たことを、お父さんが怒つてるから歸らなかつたんだとかね、そんなこと云つてね、途中も歸るのは厭だ／＼と云ふのをやう／＼そこまで引張るやうにして伴れて來たんでしたが、……」と、おせいは申譯なささうに云つた。

「ご飯はどうしたんだらう？」

「ゆうべも今朝も食べてないんですつて。お辨當も空でしたわ」

「ぢやあまた日が暮れたら歸つて來るだらう。いゝ氣になつてあゝしてるんだらうから、ほつて置け。仕樣がない奴だ」

その晩はそつと寢鳥でも抑へる氣持で、時を置いて物置や軒下や、下の建長寺の山門の邊はりなど提灯つけて見廻つたが、夜更けになつても影も見えなかつた。

「それではやつぱし不良少年のところへでも歸つたんだらう。ゆうべ物置へ寢たと云ふのも譃かも知れないな」と、私はすつかり暗い氣持になつた。

「さうですかねえ。そんなものに取つかれたんですかねえ。そんなFちやんでもないやうですがねえ……」

「いやさうかも知れないよ。そんなものがあつて學校を休んでゐたのかも知れないし、さうで

なかつたら、おやぢを送つて行つた晩は時間が合はないやうだからね、あの晩の歸りにでもどうかしたのかも知れないね。兎に角唯事ではなささうだから、弟のところに電話をかけて呉れないか。……Fが見えなくなつたから金を少し支度して明日早く來て呉れつて」斯う云つて、東京の弟の近所の酒屋から弟を呼び出さして、方丈の電話を借りておせいに云はした。

翌朝九時頃やつて來た弟と二人で、兎に角學校へ行つて見ることにした。

「多分この邊の山だらうと思ふが、山のどこか洞穴見たいなところにでも潛んでゐるんだらうと思ふが、何しろ飯を食つてないんだし、夜は冷えますからね、今頃はもうフラ〳〵で動けなくなつてゐるんだと、時が經つてはなんだから、町を一廻りしたら早速僕は半僧坊の山からその邊を搜すことにしませう。町の方ではありませんね……」と、弟は歩きながら云つた。

「それとも、昨日は下の方へさがつたさうだからね、お前のところへでも歩いて行くつもりで、横濱への道はこの一月乘合自動車で往復して知つてるからね、東京まで歩くつもりでフラフラ行つたかも知れないね」

「さうでせうか。そんなだと、兎に角山を搜して見て見つからなかつたら、私は東京まで歩いてもいゝ、途中行倒れにでもなつてるんだと、警察へでも訊くと大抵わかるでせうから……」と、弟は東京までもひとりで歩かうと云ふつもりだつた。

學校で受持の若い先生に會つたが、この頃のFの樣子に別に變つたところも見えないと云ふ話だつた。Fと席を並べてゐる生徒を教室の廊下へ呼び出して、Fがこの頃活動でも見に行つたやうな話をしてゐなかつたかと、訊いて呉れたりしたが、そんな話は聽かなかつたとその生徒は云つた。一昨日も昨日の朝も平生と變つたことがなく、冗談など云つて遊んでゐたと、無邪氣な目をしてその生徒は云つた。先生は成績簿を出して來て見せて呉れた。どうやら七點平均には行つてるやうだつた。操行は甲だつた。

「學校へ來てはよく眞面目に勉强はする方でした。成績も學期毎に少しづつは好くなつて來てゐます。唯これと云つて特に優れた點のないのはお氣の毒ですが……」と、先生は同情を持つて云つて呉れた。

「私はまたもつとわるいのかと思つてゐました。自分でもさう思つて氣がひけてゐたのか、この一二學期は通信簿を私には見せなかつたやうです。東京の中學は迚も受からないと自分でも思ひ込んでゐたやうで、だん〳〵日が迫つて來るし、そんなことからもだいぶ氣を痛めてゐたのかも知れませんが、大體無口な方なもんですから……」

「さう云ふと、どの生徒にも特別に懇意なと云ふ友達の一人や二人はあるものですが、Fさんには特にこれと云つて特に懇意にしてる友達はなかつたやうです」

Fのさうした孤獨な心持には、自分も同感された。滿たされない孤獨な少年の心は、不良た誘惑の手に、小雀のやうに握られてしまつたのに違ひない。入學試驗の脅迫――彼が入學出來ないと、彼の母や妹たちは東京へは出て來られなかつた――さうした責任感？……そして彼自身東京の中學の受からないことを知つてゐた。私はFに對しては寧ろ偏愛的だつた。私は私自身の存在を否定してゐる。自身の壽命に見切りをつけてゐる――それだけに、私が彼にかけてゐる希望は過大なものだつた。妻や娘たちに對する愛情とは別なものだつた。彼女等に對しては、私は嘗て犠牲的な感じを持つたことがない。Fにだけはそれを持つことが出來た。

彼女等は何年來妻の實家の食客だつた。がFだけは私以上のものだ。が斯うした私の氣持の働き方には、多分の不自然なものがあつた。彼に取つては、私と云ふものは、單に苛酷な、容赦のない、怖い父に過ぎなかつたらう。彼の小僧志願の心持は、さうした私への反抗でもあり、同時にまた彼自身の能力否定の糊塗的行爲でもあつた。がその結果は、全然不良少年的な活動ぶりを發揮した。――いつしか不良少年の群に入り次第に惡化し……云々などと或る新聞では書いてゐたが、さう云はれても仕方がないほどの惡ィに長けたところがあつた。

「さう〳〵」と、私たちが歸らうとすると、先生は思ひ出したと云つた風で云つた。

「ついさつきでしたが、逗子の薬屋だと云ふ人が見えて、Fさんが昨日小僧になりたいとか云つて訪ねて行つたさうで、Fさんの成績や性質など話して貰ひたいと云つて寄つてでありましたが、こちらではいゝやうに云つて置きましたが、あなたの方へもお訪ねするやうなことを云つてましたが、會ひませんでしたか。名刺を置いて行つた筈です……」斯う云つて、先生は職員室からその名刺を持つて來て見せた。

「さうでしたか。それでは私たちは行違ひになつたのでせうが、どうもわかりませんね、全然そんな心當りがないのです。それではやつぱし逗子あたりのわるい奴に掴まつたものでせうか。全然ひとりでそんなところを訪ねて行く……逗子へは一度もまだ行つたこともないのですから……」と私は云つたが、その時まではまだ、まさかと思つてゐた不良少年の豫感が、最早動かせない事實のやうに思はれて、私は眼も眩むやうな氣がした。

私たちはその名刺を借りて外へ出た。山を捜さうと云ふ弟の心構へも無になつた。彼もまた、最早私と同じやうな暗い聯想に囚はれない譯に行かなかつた。「困つたことになりましたなあ……」と、彼も嘆息した。

「兎に角逗子へ行かう。その薬屋に居るのかゐないのか、ゐて吳れるといゝが、なんにしても手遅れになつてはいけない」

私たちは斯う話しながら鐵道のガードの下を停車場の方へ歩いて來ると、向うから驅けるやうにしてやつて來るおせいに會つた。おせいは息を切らしてゐた。

「私はね、あなた方が出たあと八幡前の占ひやに見て貰ふつもりでね、占ひやに寄つてそれから一寸床屋さんに寄つたんですの。するとお内儀さんがね、今朝Fちやんが近所の時計屋さんの幼稚園へ行つてる子の手を引いて、床屋の前を通つたのをたしかに見たんですつて。そんなこととは知らないもんだから、Fちやんがどうしたんだらうとへンに思つてゐたんですつてね……」

「ぢやまだ居るんだね？」

「居るんでせう。でもまた私がいきなり突かけて行つて逃げ出されてもたいへんですからね、今床屋のお内儀さんにそつと裏から時計屋へ行つて、貰つて時計屋のお内儀さんに譯を云つて逃げられないやうに賴んで置いて、あなた方を捜しに來たんですの」

「それではお前が行つて、彼奴に逃げられないやうにして床屋さんまで引張つて來て置いて吳れないか。僕は兎に角逗子の方を調べて來よう。どんなことになつてるのかわからないから、それにしてもうつかりしてまた逃げられちやいけないよ。彼奴ひとりの智慧ぢやないんだらうから油斷出來ないよ」

私は斯う弟に云つて彼等と別れて、逗子までの往復切符を買つて汽車に乗つた。その床屋と云ふのはおせいのうちの親戚で、Fを學校へ出す時そこへFの寄留を賴んだので、床屋の人に

たちは私たちのことをよく知つてゐた。それにしても今朝逗子の藥屋がたしかに學校へ來てゐるのだから、床屋のお内儀さんがFを見かけたと云ふのは、間違ひだらうと云ふ氣がされた。その時計屋なら、Fが私の時計の修繕の催促で幾度も使ひに行つたこともあり、私の眼鏡が毀れた時、前から持つてゐた東京の眼科醫の檢査の書附を持たしてやつて、Fに待たして安物の眼鏡を買はしたこともあり、また私たちはいつもその近所のお湯屋へ行くので、その家の前は始終通つてゐた。床屋とは十軒と離れてゐない近所だつた。さうしたところにFが潜伏してゐようとは、一寸かんがへられなかつた。やはり逗子の方がほんたうだらうと思はれた。誘拐した相手が持餘して來たのか、それとももつと惡事を働かせる爲め強ひたのか、それともまたFが、どうしても私のところへは歸らないで小僧になると云つて相手のものに賴んだのか、兎に角に彼ひとりの智慧ではないと思はれた。物置に寢たと云ふのも、みんな譃だと思はれた。その時彼は取返しのつかない侮辱を受けて、私に面目ないところから、斯うしたことになつたのだとすると、彼もまた不憫な奴である。私は彼の年齡時分――彼は十二歲八ケ月だつた――の、私自身の性的な記憶を喚び起されたりした。

汽車が出て間もなく、夏時分のやうな氣紛れな通り雨が、ザアッとやつて來た。私はその頃も、七度二三分位の熱がずつと續いてゐた。身體を動かすことが一番いけないのだつた。熱の出て來た徵候の足の甲や掌などのチク〱と刺すやうな不快な感覺が、腰掛に坐つた私の氣持を一層不安にした。逗子へ着くと雨は止んだ。その藥屋は驛から一町となかつた。度量衡や化粧品など並べた小綺麗な店だつた。番の若いお内儀さんが店先きに坐つてゐた。

「一寸うかゞひますが、十四位の男の子が昨日とかこちらへ見えたさうですが、まだ居りますでせうか。實は鎌倉の小學校からこちらのことをうかゞつて來たのですが……」と、藥屋の名刺を出して、隱されるやうなことがあつてはならないと用心して相手の顏色を見ながら、云ひ出した。

「は、さうでしたか。その子供さんのことでお出でになつたので……はあ、さう云ふ子供さんは昨日見えるには見えましたけど、實は斯う云ふ譯ですぐ鎌倉へ歸りましたですが……」

お内儀さんの話では、學校通ひの支度のまゝのFが、突然訪ねて來て、小僧に置いて呉れと云つたが、主人は、明後日鎌倉に用事があるからその時學校や親の方を訪ねて、その上で置くことにするから一先づ歸れと云つて、鎌倉までの汽車賃を呉れて歸したのだと云ふことで、お内儀さんの話にはすこしも曖昧な點が感じられなかつた。

「鎌倉から歩いて來たと云つて、お父さんと二人で斯う云ふお寺に居るんだが、お父さんは病氣で上の學校へはあげられないから私は小僧になるのだと云つて、お父さんは斯う云ふ商賣だと云ふことも云ひますし、見たところ子柄もわるくないやうだし、實はうちでもたいへん小僧をほしがつてるところなので、それでさう云つて歸しますとね、大へん悄れてゐたやうでしたが、ひどく元氣のない風でフラ〱と停車場の方へ歩いて行くので、宅が後を追つて行つて汽車賃を渡したんださうでして。それで明日のつもりが今日鎌倉へ行くことになりましたので、學校へも寄りましたんでせうが、多分お宅の方へも廻りましたことでせうが、まあさう云ふ譯がございましたのですかねえ……」と、お内儀さんは驚きと好奇の眼を見張つた。

「それでなんでせうか、その時何か伴れ見た

いたものでもその邊に見えなかつたやうでせうか？」

「さあ、そこまで氣がつきませんでしたけど、別にそんなものは見えませんやうでしたが……」

「それではどうしてこちらで小僧さんが入用だと云ふことがわかつたんでせう？」

「さあそれは、そこに小僧入用の札の出てるのを見かけて入つたのか、それとも鎌倉の停車場前に懇意にしてるうちがあつて、そこへも頼んであつたのでそこからでも聞いて來たものでせうかと、こちらではさう思つてゐましたのですが―」

「それにしても彼奴がひとりでなあ……？」と、私は伴れの者がその邊に立つてゐてそつとFの樣子をうかゞひ、Fがうまく藥屋に入れさうなのを見屆けてそのまゝ遁走したか、それともその晩には商品でも持出させるつもりだつたらうかと、曲者が立つてゐたとしたらどこらだつたらうかと、私は店先きの腰掛にかけながら、店屋の並んだ狹い往來を見廻したりした。しかし、それから鎌倉の方へ立廻つたところを見ると、Fが失敗して停車場へ行つた時、そこで其奴が待つてゐたのだらうと思はれた。

奥から婆さんも出て來て、「まあそんなことだつたのかねえ、お父さんが平氣で寢てゐるたんて、どうしてご病人どころぢやないぢやないか」と、私の樣子を見ながら云つたりした。

「この邊の宿屋にでも泊つてゐたんだとすると、心當りのうちもありますから、もしなんでしたら訊かせませうでせうか。もう追つけ宅も歸る時分ですが、……自轉車で參つたもんですから」と、お內儀さんは親切に云つて呉れた。

そこを出て、汽車の時間を待つ間に、驛前の交番へも行つて頼んだ。刑事もゐて、宿屋へは泊つた形跡はないと云つた。

「またこの邊へ立廻るやうだつたら、すぐ抑へませう。こゝで斯うして見張つてる以上は見逃しつこありませんからね。鎌倉にも不良少年が居るさうだが、……十四ですね、それ位の年だと三日目か四日目には屹度出て來ますよ」と刑事は云つた。

時計屋の方が？……と、私は心に念じながら鎌倉へ歸つて來た。改札口の外に、紺の詰襟服にマントを羽被つた、黑の中折れ帽の弟が、暗い顏して立つてゐた。

「Fが時計店にゐた？」と、私は外に出るとすぐ訊いた。

「さあそれが……」と、弟は息を呑んだ。

時計屋の方も、やはり失敗だつたのだ。十一時頃床屋のお內儀さんに行つて貰つた、その二時間ほど前に、Fは時計屋を出てゐた。逗子の藥屋の場合と、同じやり口であつた。昨晩八時頃やはり小僧に置いて呉れと云つて突然訪ねたのを、餅など燒いて食はせたりして、時計屋では泊めて呉れた。東京の弟のところに居るのだと云つて、牛込の弟の住所は明瞭に云つてあつた。私も東京に居ることにしてあつたが、住所はいゝ加減な出鱈目を云つてあつた。Fは東京から小僧の口を搜しに來たやうに云つた。時計屋では何か家庭の事情でもあつて家出したものだらうとは思つたが、Fが、自分は機械などいぢくるのが好きだから時計屋になりたいなぞと云つたりして、云ふことに筋道も立つてゐたので、主人の弟で海軍省とかの技手を勤めてゐる人に、今日役所の歸りに私の弟を訪ねさせて、話をきめる筈にしてゐた。Fは朝飯前に店先きを掃いたり、時計屋の子といつしよに近所の花屋に花を買ひに行つたり——その時に床屋のお內儀さんが見かけた譯だつた。それから間もなく、Fは一度東京に歸つて叔父さんとよく相談して出直して來ると云つて、主人の弟の人の東京から歸るまで待てと云つて引止

めたのを振切つて、そこ〳〵に出かけたのだつた。外から歸つて來た主人は、その時はまだFが時計を持出したのに氣がつかなかつたが、後から自轉車で追かけて行つて極樂寺前で追ついて、Fが極樂寺坂の方へ行かうとするので、東京へ歸るのなら引返して汽車で歸つた方がいゝだらうと云ふと、電車の回數券一枚出して見せて、これがあるから江の島を見て行くのだと云つて、長谷から電車に乘つたと云ふのであつた。……床屋のお内儀さんが時計屋から聽いて來て呉れた話は、大體斯うであつた。

　私たちはまた床屋まで引返して來て、おせいもゐて、お内儀さんからその話を聽き直したのだが、いよ〳〵見當がつかなくなつた。

「やつぱし相手の奴が引張り出しに來たのだらうか。何か持出しやしなかつたかな？……時計屋で別にそんな話はしてゐませんでしたか？」

「え、別にそんなことは云つてゐませんでしたよ……」と、お内儀さんは曇りのない調子で云つた。

「兎に角警察へ頼むほか仕方がないね。どうも仕樣がない奴だなあ……」

　私たちはすつかり途方に暮れて、がつかりして、床屋を出ようとしてゐるところへ、やはりS屋の、おせいの嫂さんが、息を切らして、駈け込むやうに入つて來た。

「――まあ丁度いゝところでした。今ね、山の内の駐在所から建長寺の方へ電話がかゝりましてね、Fさんが腰越で時計屋に時計を賣つてるところとかを巡査に摑まつて、駐在所に留めてあるから引取りに來いと云つて來たんださうですが、あなた方がお留守なので私が代つて出ましたのですが、山の内の巡査のおつしやるには、本署の方へ寄つてそれからすぐ腰越へ行くやうにと云ふことでしたよ。……まあこゝに皆さんがゐて丁度よかつた。町の方だと云ふからこちらへでも寄つて聞いたら樣子がわかるかも知れないと思ひましてね、ほんとに駈けて來ましたのよ……」と、嫂さんは斯う云つて、ホッとした。

「さうでしたか。どうも有難うござんした……」と、私もホッとして云つたが、一昨晩以來S屋一家の人たちにかけた心配だけでも、たいへんなものだと思つた。

　私たちはそゝくさと外へ出て、警察署へと半町程も歩いた時分、またおせいが私たちを呼びかけて追かけて來た。

「……Kさん、あなた時計をお持ちですか？」

と、彼女は急き込んだ調子で訊いた。

「時計？……持つてるよ……持つてるだらう……どうして？」と、私は咄嗟の間ひに面喰つて、それともどうかして忘れて來たかな？と云つた氣もして、あわてた手つきで帶の間から時計を出して見せた。

「さうですか。それだとなんですけど、……Fちやんがまたお父さんの時計だとか云つて賣つてたんださうですから……」おせいは私の顏に注意深い視線を投げたが、斯う云つて口籠つた。

「……あゝさうか」と、私もやう〳〵そこに氣がついたが、「しかし時計屋では盜まれてゐないと云ふんだらう。それだけに何いけないや。どんな奴の時計だかわかつたもんぢやない。まあ兎に角警察へ行つて來る……」私たちは斯う云つて彼女と別れた。

　後になつて考へて見ると、その時のおせいの注意で、兎に角一應時計屋へ引返して調べなかつたと云ふことが、私たちの大きな手ぬかりだつた。私たちが床屋を出たあと、お内儀さんや嫂さんやおせいたちの間に話が出て、何しろゆうべはFが時計屋に泊つたのだから……さうに違ひないだらうとは誰にも考へられることで、

それでおそいに追かけさして注意して吳れたのだが、その時の自分の神經は不良少年と云ふ見えない影に脅かされて錯亂してゐたし、時計屋では盜難の話は出なかつたと云ふことだし、兎に角當人さへ抑へてしまへばさうしたことの處分は後でどうにもつくと云ふ考へだつた。その時引返して、Fが時計屋から持出したことが分つてゐたら、Fを腰越の駐在所で白狀さすことが出來て、Fに不良少年などの虛構の餘地を與へずに濟んで、あゝまでは事件を大袈裟にせずに片附けられたのかも知れないと思ふ。ところがその時のふとした手ぬかりから――當人が摑まつたと云ふので氣がポーッとなつてもゐた――訪ねなかつたのが、たうとう最後まで機會を失つて、私が訪ねた時は、最早私たちは取返しのつかない慘めな立場に投り込まれてゐたのだつた。

時計屋では、現品を刑事が持つて調べに來られるまで持出されたことに氣がつかなかつたのだといふ――私は時計屋の主人の言葉を信じたい。Fが朝店さきを掃いたりしてゐた時はまだ表の戶がしまつてゐて、店の中が薄暗かつた。その時Fが店のガラス箱の上に二三十置いてあつた機械の動かない傷み物の中から、小型のニッケル側と、ニッケルの鎖時計との二つを盜んだのだつた。後でそこの職人の話では、二つで拾圓位の價格のものらしかつた。が兎に角Fは金時計と思つて選び取つた譯であるから、ある新聞に――小說家の倅金時計を盜む――と云ふ見出しで書いてゐたが、心理的に云つても正しい書方である。ところがまた、Fが極樂寺坂の方へ步いて行く途中、長谷の時計屋に寄つて、二つで五拾錢で買つて吳れと云つて斷られてゐた。それから極樂寺前の錺屋にも賣りに入つたらしい――そこから出て來たFを自轉車で追かけて行つた主人が見つけて、そしてFが長谷から電車に乘るのを見送つたのだと云ふことである。自分は親としての愚癡であるが、それまでの途中に、Fが持出したことを主人に發見されなかつたと云ふことは、私は自分の子の罪を庇ひたい卑しい心からではないが、Fのためにはたいへん不幸なことだつた。……

警察では、がつしりした體格の、赭ら顏の老練さうな巡査が、腰越の駐在所へ、さつきの子供の親がこれから引取りに行くところだからと、電話をかけた。私は一昨晩以來のことを話した

「ゆうべはそこの八幡前の時計屋にやはり小僧に置いて吳れと云つて泊つたのださうですが、今も訊いて貰つたのですが時計屋では時計を盜まれてゐないやうな樣子で、さうして見るとその時計がどこから出たのか、腰越の方でも十分調べていたゞくつもりですが、都合でこちらへも彼奴を引張つて來ますから、よく取調べて說諭をしていたゞきたいと思ひますが……」腰越は藤澤署の管轄內だらうと思つてゐたので、腰越で放免されることになつても、さうした不良少年などの場合は、やはり鎌倉署に賴むほかないと思つて、私はさう云つた。

「は、それはその時のご都合で。……それでは兎に角あちらで濟みましたら、歸りに一寸寄つていたゞきますかな――」

「は、承知しました。實はさつき山の內の駐在所の方からこちらへ寄つて行くやうにと云ふことでしたので……」

私は物慣れた巡査の態度にいゝ感じを受けて、入口の外のベンチに腰かけてゐた弟を促して、すぐ近くの停留場から、もうすつかり遊覽季節の客で混み合つてる藤澤行の電車に乘つた。つい五日前にFが老父を送つてこの電車に乘つたのだが、三時間前にはどんな氣持で乘つ

てゐたらうか、そのFを今度はまた自分等兄弟が引取りに乘つた譯であるが、七里ケ濱の眺めどころではなく、お互ひに默り込んでゐた。
「山の中ででも見つかつて吳れた方が、まだよかつたがなあ。……その時計を賣らして、それからどうするつもりだつたらう。旅費を吳れてお前のところへでも放してやるつもりだつたか、それともその金のあるうちこの邊を浮浪し廻るつもりだつたらうか」
「さうですねえ、やつぱしそんなものがついてるんだと、幾らかでも金のあるうちは歩き廻つてることでせうよ。それにしても、そんな時計なんかFちやんに賣らせたりしてるやうな不良少年だと、大したもんぢやないと思ひますがなあ……」
「何しろ今度は僕も少し油斷し過ぎたものな。留守が少し長過ぎた……」
「しかしまあ、死骸であがつたとか、なんとか云ふんぢやないから、まあ諦めるほかないでせうねえ……」と、弟は慰めるやうに云つた。
　龍口寺前で下りると、駐在所はすぐだつた。往來を見下ろすやうに、右側の小高い場所の、小ざつぱりした建物だつた。私たちが來意を告げると、若い細君が出て、只今宮樣のお詣りがございまして、それで出て居りますですが、ぢき歸つて參りますから、どうぞ……」と、愛想よく迎へて吳れた。丸いテーブルと三四脚の粗末な椅子の置かれた狹い應接室だつた。Fは隣りの同じやうな部屋の、ガラス窓の下のベンチに、學校鞄をさげマントを着たまゝ腰かけてゐた。Fは私達を見て泣き出しやしないかと思つたが、そんな風もなく、逆上せたやうな赤い、硬張つた顏してゐて、脅えてる風も見せなかつた。
「時計屋へは、東京へ行くのだがおあしを落したから、お父さんの時計だが買つて吳れと云つて行つたのださうですが、何しろまだ子供さんのことですから、それで時計屋では下の交番まで知らして來たんださうでして……」と、細君は云つた。
「どうもとんだご厄介をかけました。でもお蔭樣で摑まりましたから、十分こちらで取調べていたゞきませう。これまでのところでは盜癖はないやうなんですが、譃は云ふやうですから、──その時計にしても、私のものではありませんから、鎌倉の時計屋で盜んだのでないとすると、どこか他で盜んだか誰かに貰つたか──貰つたと云ふのも變なことで、何か惡い者でもついてるのかも知れないと思ひますが、兎に角譃では通らないものだと云ふことをよく敎へて置きたいと思ひますから……」
「いえもうほんの子供さんの出來心で……」と、細君は如才のない應對ぶりだつた。
「その時計を出して見せろ」とFに云ふと、マントのポケットから金メッキの一つを出した。
「この時計どこから出した？」
「貰つた……」
「貰つた……？……誰に？」
「秋山と云ふ子に……」
「秋山と云ふ子か？　どこの子だそれは？　なんだつて吳れたの？」
「賣つて來いつて……」
「賣つて來いつて？　それではその子も腰越までいつしよに來たのか？」
「ウム……」
「その子はどうした？」
「知らない……」
「知らないつて、一體どこの子だ、家は知つてるだらう？」
「八幡前の裏の方から出て來るが、家は知らない」
「その子一人きりか？」
「もう一人慶ちやんと云ふ子と……」

「それはどこの子だ？」
「妙本寺の方から出て來る子だが、家は知らない」
「二人とも何んだ、學生か？」
「逗子の中學へ行つてる子だ……」
「何んと云つてこの時計を賣つて來いつて云つた？」
「唯この時計を賣つて來いつて。……云ふことを聽かなけあ、ひつぱたくぞと云つた」
「誰が？」
「秋山と云ふ子が……」
「秋山と云ふ子の時計なのか？」
「ウム……」
「逗子の藥屋へつれて行つたのもその二人なのか？」
「ウム……」
「なんだつてつれて行つた？」
「貴樣小僧になれつて……云ふことを聽かないとひつぱたくぞつて……」
「八幡前の時計屋へもか？」
「ウム……」
「そして今朝又呼び出しに來たのか？」
「ウム……」
「一體その二人といつから知つたんだ？」
「お祖父さんを送つて行つた歸りに……」
「どこで？」
「八幡樣の裏のところで……」
「そしてどうした？」
「貴樣俺の乾分になれつて。……云ふことを聽かないとひつぱたくぞつて」
「お前はどう云つた？　そして一つもひつぱたかれたのか？」
「その時はひつぱたかれなかつた。僕は默つて歩いて來た……」
「一昨日の歸らなかつた晩は、ひつぱたかれたのか？　あの晩は蕎麥屋へでもつれ込まれて、蕎麥でも食はされたのか？　お前はおせいちやんにその晩は物置に寢たとか云つたさうだが、それでは嘘なんだね？」
「物置に寢たと云ふのは嘘ぢやない。蕎麥屋なんかへも行きやしない」
「それではあの日學校の歸りに、友達と喧嘩して顏に傷したから、僕に叱られるから歸らなかつたとかおせいちやんに云つたさうだが、それでは嘘で、その秋山とか云ふ奴等にひつぱたかれたんだね？」
「……」
「物置へはお前一人で寢たのか……」
「僕一人で寢た……」
巡査が歸つて來るまでの間に、私とFとはかうした問答を重ねたが、それがどこまでが本當なのか嘘なのか要領を得ない氣がされたが、兎に角彼一人のしたことでないと云ふことは、確められた氣がした。かうして生命に別狀なく、大して窶れてもゐないさうな當人を摑まへた以上、他の大抵のことはどうでもいゝとして、唯暴行を加へられてゐるかゐないか――そのことを考へると、私の氣持は隨分慘めなものだつた。
そのことだけはどこまでもはつきりさせて、相手の奴等に十分制裁を加へてやりたいと思つた。それにしてもいつのまにこゝまで落ち込んでゐたかと思ふと、斯うした場所のベンチに曝されてゐる片意地さうな老けた眼附してゐる彼の姿が、淺ましく醜く、何かしら野生的な小動物めいた感じさへされて、私は自分自身の呪はれた存在を思はない譯に行かなかつた。
「兎に角今に巡査さんが歸つて來たら、何もかもはつきり正直に云ふんだな。嘘を云つたつて、駄目さ。僕なんかの前とは違ふからね、こゝでは嘘は通らない。だから何もかも正直に白狀すると、僕等からなんとでもお願ひして堪忍して貰つてやるが、さうでないと、幾日たつてこ

こに留めて置いて貰はにやならん。その時計の出さきがはつきりしない以上、どうにも仕方がないんだからね。だからね、今に巡査さんが來たら、どんな云ひにくいやうなことでも、みんな正直に云つちまふんだよ。それでないと、取返しのつかないことになつちまふよ。どうしたつて、譃では通らないんだからね。解つた？……」

私と弟とは代る〲斯う云ひ置いて、應接室の椅子に歸つて、煙草を吸つてゐた。

間もなく巡査が歸つて來て、私たちと三人でFの學校鞄や辨當の中なども檢べたが、別に不審なやうなものも出て來なかつた。一昨日持つて出たきりの辨當の中にはこち〲になつた飯粒が喰付いてゐた。

「では一二時間も私たちは外へ出て參りますから。なか〲剛情な奴で、譃も云ふやうですから、幾ら毆つて下さつてもよろしいですから、どうか本當のことを白狀さしていたゞきたいと思ひます。容易なことでは本當のことを云はないかも知れませんから……」

巡査が調べるのを應接室で私たちは聽いてゐたが、「オイ小僧！貴樣この時計をどこで盜んで來た？」などと語調をかへて訊いてゐたが、Fはやはり私たちに云つたと同じことを繰返してゐて、埒が明きさうにないので、私たちは巡査に斷つて、丁度前から降り出した強い雨の中を、下の通りへ出て、近くの蕎麥屋へはひつた。風も出て吹き込むので暖簾をはづして表の戸を締めた薄暗い部屋の茶湯臺に向ひ合つて、晝飯を食つてゐない私たちは蕎麥と酒を頼んだ。

「酒臭い息なんかして行つてわるかないかな？巡査なんて氣の小さなもんだらうからな」

「そんなこともないだらう。ちつと位いゝでせうよ」

「その一緒について來たと云ふ奴はどうしたらう。Fが引張られたのを見て逃げちまつたか、それとも今にFが免されて出て來るかと思つて、時計が惜しくてまだこの邊にうろ〲してるんだらうか」

「いや無論そんな奴等のこつたから、この邊になんか愚圖々々してるもんぢやないでせう」

「兎に角鎌倉の奴等には違ひないんだな。僕の名前位は知つてる奴等かも知れないな」と、十七八の不良中學生の姿が、いろ〲と私には想像された。斯うした三月下旬の春氣分に浮かされて、學校を怠けて漫然とこの邊を浮浪し歩いてゐるやうな、深い企みなんかない奴等の仕業のやうにも考へられた。

「それにしても小僧に押込まうと云ふのはどう云ふ譯だつたらう？」

「さあそれは、Fちやんが歸りにくくなつたんで自分からさう云つたんぢやないでせうか」

「さうか知ら？……」

日が暮れかけて、私たちは駐在所に歸つて行つたが、應接室にはさつきの巡査と部長の二人がゐて、椅子に腰かけて煙草を吸つてゐた。Fは隣りの部屋のベンチにさつきのやうに坐つてゐた。

「どうもご厄介さまでした。如何でしたらう、白狀しましたでせうか？」と私は訊いたが、相手の二人とも疑はしげな冷笑したやうな眼附を見せたが、不得要領な挨拶ぶりだつた。

「いやどうもね、いろ〲訊いて見たのですがなか〲剛情のやうでしてな……」と、さつきの巡査が云つた。

「ではさつきの時計は、あれはどうしたのでせう？」

「さあそれも、どうもはつきりしたことがわからないんですがねえ……」

「さうでせうか。それではもしなんでしたら、それがわかるまで幾日でもこちらの方へ留めて置いていたゞきたいのですが、どうも私たちに

もさつぱり要領得ないものですから……」私はこの邊は藤澤署の管轄だらうと思つてゐたので、藤澤へ廻つてもいゝと思つて斯う云つたのだつたが、やはり鎌倉部内だつたのだ。

「いやもうこゝでは留めて置く場所もありませんし、兎に角本署の方へ、本署でもいづれ調べることでせうから、本署へ行つて……」こちらではもう關係がないんだから早く引取れと云つた、態度だつた。

「何しろ困りましたなあ。どうも仕樣がない奴です。私と二人きりで暮してゐるので、つい注意が行屆かなかつたのでしたが、やつぱし低能なんですな。ずつと早婚の子なもんですから、やつぱし腦味噌が足りないんだと見えて、こんなことになつちまひまして……」と、相手の二人の取付端のない態度に失望と泣笑ひを感じて、私は云つた。

「いやどうして〳〵、低能どころぢやない、しつかりしたもので……なか〳〵どうも、出來たお子さんです……云ふことだつてどうして十四としてはしつかりしたものだ……」

巡査は斯う如何にも感心したと云つた調子で云つて部長と顏を見合せたが、同時にひどく擽つたいやうな笑ひを浮べて、二人は私の顏に這入つた。——何と云ふ親馬鹿……それが、斯う云ふことを意味してゐたのだとは、その時自分には察しられなかつた。

私たちが外へ出てゐた間にか、或はもつと前、Fが捕まると同時に、本署から電話でFのしたことがすべて明瞭になつてゐたのに違ひないのだ。Fがその時に素直に白狀するとよかつたのだ。どこまでも欺き了せるものと思ひ込んだ、ひねくれた剛情な、子供らしい淺はかさがいけなかつた。警察と云ふ特殊な手にかゝつてゐるのだと云ふことが、都會で育つて中學の試驗でも受けようといふ年ならば多少は理解がある筈なんだが、野生的に大部分田舍で育つて來た彼には、そんなことに理解が出來てゐなかつた。警察と親との相違なんか、それほど大したものとは、彼には考へられなかつたかも知れない。尤も、彼としては、必死の場合であつたらうが、自分等でさへ、彼の剛情——傲慢にさへ思はれた彼の態度には、結局同情を持つことが出來なかつたが、何と云ふ親馬鹿!……その時もそこまではFを疑へなかつた。警官の要領を得させない態度が氣にはなつたが、やはり半信半疑のまゝで、Fを引張つてすつかり暗くなつた外へ出た。どうせ最早囊の中の鼠だ、Fの云ふなりになつて、根氣に彼の底を突き止めてやれ——斯うした腹もあつて、兎に角無事で捕まつてよかつたと、警官たちへお禮を云つて、駐在所を出たのだつた。

電車が來ないので、村を出て海岸の上の停留場まで二人は歩いた。雨はやんでゐたが、空は暗く、波の音は高く聞えてゐた。Fとは一昨日の朝から會はないのだが、斯うして並んで歩いてゐると、ひどく久しぶりのやうな氣もされるが、また、平生のFではない——まだ何者かの支配につながれてゐる他所々々しい子で、完全な自分のFではないやうな氣もされて、口を利くのも億劫な氣がされた。

「巡査が何と云つた?」

「小僧、貴樣この時計をどこから盜んで來たつて……」

「お前は何て云つた?」

「秋山と云ふ子に貰つて來いつて……」

「それだけのことか。ほかにも何か訊かれなかつた?」

「何も訊かれなかつた……」

「毆られたか?」

「ウム」

「幾つ?」

「一つ……」
「その秋山とか云ふ子が腰越の時計屋までついて來たとか云つたが、さうか？」
「さうぢやない、七里ケ濱まで一緒に來て、その子はそこで待つてるからつて……」
「その慶ちやんとか云ふ子もそれでは一緒だつたのか？」
「さうぢやない、その子は長谷の停留場の近くで待つてるつて……」
「譃ぢやないのか？ 斯うなつてから譃をついたつて仕様がないよ。男らしく正直に云つちまふんだな。譃ぢやないか？」
「譃ぢやない……」
私と弟とが代る〴〵訊ねたが、Fはどこまでも斯んな風に云ひ張つた。
「ではその秋山と云ふ子も七里ケ濱から長谷へ引返したのか？」
「ウム……」
「どう云つて？」
「貴樣時計を賣つたら長谷へ歸つて來いつて。歸つて來なかつたらひどい目に會はすつて……」
追求すればするほど、私たちは混亂ともどかしさを感じた。兎に角Fの云ふなりになつて、長谷の停留場に着くと、私たちは電車の下り口をFとは別に下りて、Fとは離れて、改札口の外へ出ると、Fとは十間程も後に離れて、Fをその邊をぶら〳〵歩かせた。Fは海岸通りの暗い方へ往つたり、引返して線路を越えて大佛の方へ往つたり、雨あがりの路を日和下駄でチョコチョコと歩いた。袴を穿いて、短いマントの帽子をかぶつて、猫背の恰好して、チョコ〳〵と私たちのさきになつて歩いた。路次めいたところへ入つて行つたり、明るいところへ出て來たり、さうして三十分餘りもそちこち歩いてゐたが、私の氣のせゐか、Fの歩調がだん〳〵速度が加つて行くやうに思はれた。——後で考へると、その時Fの脚がだん〳〵震へて來て、自然にさうした歩調になつたのだらう——がその時にはさうとは考へつかなかつたので、自業自得とは云ひながら、八幡前の時計屋で朝飯を食べたきりで空腹でもあらうし、また相手の奴等にはすつかり脅迫され切つてゐるので、其奴等が摑まつた際の後難を怖れて、氣が氣でないのではないかと思ふと不憫でもあつたが、またさうして私たちのさきになつてマントの帽子を深くかぶつてチョコ〳〵と默つて行つたり來たりしてゐる姿を見ると、何かしら凶兆の小黑い烏めいたものの子——さう云つたものに魅せられた不吉な子であるやうな感じがされた。私たちは歩くのに疲れた。それらしい影にも見當らなかつた。
「この邊で鳥打帽をかぶつて飛白の着物を着た十八九位の學生風の男が二人、ぶら〳〵やつてゐたのに氣がつきませんでしたでせうか？」と、私は停留場のそばの踏切番だか轉轍手だかの小屋の前に立つて、二三人ゐた若い男の人たちに訊いた。
「さあ……氣がつかなかつたが、それは何時頃のことですか？」
「何時頃つてはつきりしたことはわからないんだが、この邊で待つてることになつてゐたんで……」
「どうも氣がつきませんでしたね……」さつきから幾度もその邊をぶら〳〵やつてゐたので、舊式な鳥打帽をかぶつた私を刑事とでも思つたかのやうな顏して、彼等の一人は云つた。
私たち三人はそこからまた電車に乗り、驛前で下りて、警察署のすぐ前の蕎麥屋にはひつて、私と弟とはビールを飲み、Fには天丼をあてがひながら、また同じことを繰返してFに訊いた。がどこまで押して見ても、Fの答へは同じ

だつた。

「ほんとに譃ぢやないのか。警察へ行つてからでは、どうにもならなくなるんだよ。お前がいくら强情を張つたつて、刑事も居るし、お前の譃なんか通りつこないんだからね。それがはつきりしないうちは幾日だつて留められるよ。今のうちお前がはつきり云ふと、僕等がどんなにも謝つて許して貰つてやる事も出來るけれど、警察へ出てまで譃をついたとなると、ほんとにたゞごとでは濟まないことになる、お父さんだつて隨分迷惑をせにやならんことになるんだから、今のうちにほんとのことを云つて吳れ……」

と、私たちは氣が氣でなく、賴むやうにしつこく云つたが、

「譃ぢやない……」と、Fは云ひ張つた。

「どうもそれでは仕方がないなあ」と、私たちは諦めるほかなかつた。單に時計だけのことだとまた考へやうもあるとしても、不良少年との關係は、私たちには手に負へないことだつた。

帳場に坐つてゐた主人に、「この近所に秋山とか慶ちやんとか云ふ名の中學生がゐないでせうか？」と訊いて見たりしたが、知らないと云つた。私たちは蕎麥屋を出て、往來を突切つてすぐ向ふの警察署のドアを開けてはいつて、三人は警部補の前に立つた。土間の巡査のほかに六七人の巡査がテーブルに向つてゐた。私はそこでもFの一切のこと――今度の經過について警部補に詳しく話さねばならなかつた。警部補はまだ若い、髭の無い豐頰の、警官らしく冷靜な態度の人だつた。

「……そんな譯でして、この時計はどこまでも其奴等に賣つて來いつて云はれたんだと云ひますし、ゆうべ泊つた時計屋では盜まれてゐないと云ふことですし、どうも此奴の云ふことが私たちには譯がわからないんで、何しろ今度は私が永く留守にして、その間學校を休んでゐたさうで、その間にさう云ふ奴等に捲き込まれたのか、此奴の云ふのではほんの此頃だと云ふんですが、何しろさつぱり要領を得ないんで、どうかこちらのなんで調べていたゞきたいと思ひまして、幾日でも留め置いてもよろしいですから……」

「時計屋へ泊つた……それはどこの？」

「すぐ八幡前のSと云ふ時計屋ださうで」

「S……それは怪しからんね、勝手に子供を泊めたりしたんかして、……誰か時計屋の近所の旅館へでも電話をかけて、Sにすぐ來るやうに……」と警部補は云ふと、一人の巡査が電話より私が行つて來ませうと出て行つたが、ぢき歸つて來て、

「Sは逗子へ行つて留守ださうで、歸り次第すぐよこすやうに云つて來ました」

「さうか……」と、警部補はうなづいた。

その金メッキの時計は、私たちが來ると同時に警部補のテーブルの上に出されてあつた。

「さう云ふと、いかにも不良少年でも持つてゐさうな時計のやうな氣もしますが」と、私は云つたりしたのだ。ところが、後になつて時計屋の主人の話では、その時計はその晩時計屋へ使ひに行つた巡査が時計屋へ賣つたものださうで、その巡査がテーブルの上の時計を何氣なく手に取つて見て自分の賣つたものだと氣がつき、それで電話でなしに自身時計屋へ行つたものらしい。して見ると、その時まで時計屋から何の屆けも出てゐなかつたとしても、その時にはもう警察ではFの盜んだことが明瞭になつてゐた譯である。それで、警察では特に、それから二時間ほどの時間の餘裕を與へて、今に時計屋の主人が出て來ると何もかもわかるんだぞ、たから今のうちに素直に白状しろ――斯う云ふつもりだつたかも知れない。が、それを、Fはしなかつ

た。Fとしては、いよ〱主人が出て來ても、まだ不良少年を擔ぎ通すつもりだつたらうが、それがたいへんいけなかつた。そしてまたそこまで行つてまだそこに氣のつかなかつた私の親馬鹿――不良少年と云ふFの暗示にかゝつてすつかり眼が眩んでゐた譯だつた。それにその時になつて、もう一つの時計さへFは出してゐなかつた。それも恐らく腰越で檢べられた時に――それはマントの裾の片隅を破つたか自然に破れたのか、そこに隱してあつたが――それも發見されてゐたのに違ひない。警察では何もかも明瞭になつてゐたのだ。唯不良少年と云ふことに多少の根據でもあらうかと、職掌上ちよつとは疑ひを持つたかも知れないが、當人を引張り出して來て見ると、所謂警察眼で、一目で全然幼稚な虛構であることがわかつたのだ。時計屋からだつてそのことは無論聽き出してあつた譯だ。要するにFの所謂惡化程度、境遇、家庭の事情――それを取調べるだけの必要だつたのだ。そしてそれ等が悉く、警官の同情を買ふべく、餘りに點が少かつたと云ふ譯であらう。

「逗子の開成?……さうぢやないだらう、……すると鎌倉中學の方ぢやないかな……鎌倉中學の方にも不良少年は居ると云ふことだが……」と警部補は冷笑を浮べてFの顏を見ながら、氣をひいて見るやうに、云つて見たりした。

「ふだん金など持たして置くんですか?」

「別に持たして置くと云ふこともないですが……」

一人の巡査が、Fの體格を見たり、下眼瞼を開けて見たり、袴に二ケ所鉤裂きの出來てるのを檢べたりしたが、

「これはどうしたの?」

「物置で寢た時竹で破いた……」

「その時はお前さんほんとに一人だつたんだね?」

「ほんとに一人だつた」

そしてその巡査は、

「いくら不良少年だつて、金を取るとか、……何かするとか、目的なしにどうもするもんぢやありませんよ」と、どちらともつかないやうな調子で笑ひながら云つて、自分の席にかへつた。

「それにしても一昨日の晩物置に寢て、晩飯も朝飯も食はずに學校へ行つたんださうですね、よく何も食はずに居れたもんだな……」と、警部補と席を並べてゐる今朝の巡査が云つた。

「それはほんとのやうです。どうかしてわるくすねると、一日位は食はなくても平氣で居るやうな質ですから……」

「ホウ、それぢやあ……?」と、巡査は首を傾げて意味ありげな視線を私に向けたが、それきり口を噤んだ。

「ふだんあまりやかましくしても駄目ですよ。子供はほんとに今が大事な時ですからな。毎日日が暮れてあそこまで一人で歸るなんて、それからして第一不注意ですよ」と、警部補は私に說諭的な口調で云つた。

「いや別にそんなにやかましくしてゐる譯ではないんですが、何しろ餘り出來ない方なもんですから、それで豫習を少し嚴しくやらしてゐたんでしたが、それを今度は私の留守中學校を休んでゐたと云ふので、それで叱つたんでしたが、ふだんはそんなにもやかましくしてゐる譯でもないんです」と、私は辯解的に云つた。

「しかしいくら出來ないからと云つて、……中學へはひれるとかはひれないとか、そんな問題ぢやないぢやないですか。兎に角餘り刺激するやうなことはよかないですよ……」と、たしなめる調子で、一重瞼の射すやうな眼光を向けて云つた。

十時もだいぶ過ぎたが、時計屋の姿は見えな

かつた。混亂と歸還から、私は喘息の發作でも來さうな氣がした。Fはその間警部補のテーブルの前に立ちつめだつたが、最早問答も杜絶して、Fは片意地さうに顏を俯向けてゐた。

「それではひとつ、小父さんが訊いて見てやるかな、……ちよつとこつちへ來い」

警部補は斯う云つて、何とも得體の知れないやうな微笑を口尻に浮べて起ちあがつて、Fを奧の方へつれて行つた。それではやつぱし不良少年と云ふのは事實なのだらうかと、三十分程の間だつたが、私には永い慘忍な沈默の時間だつた。席にかへつて來た警部補の顏は、すつかり無表情に引緊つてゐた。

「それではやつぱしその、不良少年といふのは事實なんでせうか？」

私が斯う訊いたが、警部補はやはり無表情な一瞥を與へたきりで答へなかつた。そしてちよつとの間額に掌をあてて考へ込む樣子をしてゐたが、心を決したと云つた風で、そばのガラスのペンを執り、紙の上へ持つて行つた。もう私たちの方は振向かうともしない態度だつた。

「それではその秋山と云ふ子は、いつもどんな着物を着てゐるかね？」

「飛白の着物……」

「飛白は木綿かね、絹かね？」

「木綿……」

「模樣はどんな模樣かね？　十の字のやうになつてるのか、それともお前さんの着てるやうな模樣かね、どつちだ？」

「僕の着てるやうなもののもつと小さいの……」

「もつと小さいつてどれ位かね？……こんなもんかね？」

「ウム……」

「羽織の紐はどんな色だつた？」

「茶見たいな……」

「太さはどうだ？」

「餘り太い方ではない……」

「帶は？……木綿か絹か？　どんな色をしてゐた？」

「……」

「木綿か絹か？……お父さん見たいな帶か、それともメリンスか？」と、私は口を出したが、警部補は餘計な――と云つた眼附を見せた。

「メリンス……」

「色は？」

「……」

「あんなやうなのか？」と、警部補は壁の方を指した。

「あんなやうなのもつと黑つぽいの……」

「フーム……そして下駄はどんなのを履いてる？」

「朴齒の日和……」

「緒は何だ、革かね布地かね？」

「布地見たいな……」

「どんな色？」

「黑い……」

「確かに黑い色かね？」

「ウム……」

「しつかり云はなくちやいけないよ。間違へちやいけないよ……」と、私は應援的にFに注意した

「確かに黑い色の布地の緒だね？」

「ビロード見たいな……」

「フーム……ビロード見たいな」警部補は時々符號めいた線を紙の片隅につけながら、訊問をすゝめた。

「それでは帽子はどんな帽子？」

「鳥打帽……」

「いつも鳥打帽かね？」

「ウム……」

「どんな色の？」

「鼠色見たいな……」
「鼠色見たいで、それで格子かなんかあるかね？」
「ある……」
「ある、……それへ徽章をつけてゐるのかね？」
「ウム……」
「どんな徽章？」
「ペンを交へたやうな……」
「ペンを交へたやうな、……足袋はどうだ、いつも穿いてるか穿いてないか……？」
「穿いてない……」
「いつも穿いてないか？」
「いつも穿いてない……」
「髪はどうだ、長くして分けてるか、それとも短く刈り込んでるか？」
「少し長くしてるが、分けてはゐない……」
斯んな風にして顔の造作の一つ／＼、皮膚の色、骨格、身長など明細に調べて行つた。もう一人の慶ちやんと云ふ方も服装などは大體似寄つたものだつたが、體格容貌は異つてゐた。
「それではその秋山と云ふ方は痩せて、長い黒い顔なんだね？ そしてその慶ちやんと云ふ方が肥えて丸い顔してるんだね、そしてその方が色が白いんだね？ さうだつたかね？」
「ウム……」
「年は二人とも十八位で、それで脊丈はどんな方だ、二人とも？」
「脊丈は普通だ……」
「普通つて？……」
「……四尺九寸位」と、Fは思ひ切つたやうに顔を眞赤にして云つた。
「四尺九寸位なんて、お前そんなはつきりしたことが云へるのかい？」と、私はついまた口を出さずに居られなかつた。そして又傍の巡査を顧みて、
「十八位でそれだけの脊丈があるもんでせうか？」と、たまらなくなつて話しかけたが、
「まあそんなものでせうな」と、巡査は無關心に云つた。
「金歯でも入れてなかつたか？」と、警部補は續けた。
「なかつた……」とFは答へたが、また思ひ出したと云つた風で、
「前にはないが、奥の方にあつた」と云ひ直した。
「それはどつちの方だ、秋山と云ふ方か、慶ちやんと云ふ方か？」
「秋山と云ふ方……」
こゝまで來て、私は思はず嘆息するやうに云つた。
「それほどまでにはつきり云へる人間が、どうしてまた不良少年なんと云ふ奴等に威嚇された位で、そんな馬鹿なことをしたのかなあ……」
私は斯う獨り言のやうに云つたが、涙がにじんで來るのを覺えて、警官たちの顔を見廻したが、警官たちの目にもやはり一瞬間意味不明の異様な閃きが傳はつたやうに感じられた。親としての感情には警官とても變りのない譯である。
　Fの訊問は、大體斯んなことで濟んだ。奥へつれ込まれた時どんなことを自狀したのかわからないが、訊問中のFの態度は、かなりわるい感じだつた。警部補に問詰められてウム／＼と返事する――それがひどく傲慢からでもあるやうに聞えるし、また極度の苦痛から歯を食ひしばるため自然に發しられる言葉のやうにも思はれた。顔を眞赤にし、醜く脣を歪め、時々私の顔に横目を向け、總身を震はしながら、そのウムウムを繰返した。私は寧ろ、私自身彼の立場に置かれなかつたことを、呪ひたい氣持だつた。
「やつぱしそれでは、さうした不良少年見たいなものがついてゐたんでせうか？」

「まあ、よく調べて見んと……」

「やはりその何か暴行でも加へられた形跡でも？……」

「兎に角よく調べてから……」と、警部補はどこまでも不得要領な態度で、うるさげな顏して云つた。

「實は入學試驗の都合で、こつちの學校の免狀式が二三日で濟み次第すぐ東京へやるつもりでゐるのですが、大抵幾日位でそれが分るでせうか。免狀式が濟み次第東京へやつて差支へございませんでせうか。こちらのご都合でいつでもまた東京から呼び寄せますから……」

「さあ……」と警部補は一寸考へ込んだ風だつたが、「それでは一週間だけこつちに置いて貰ひませう。そのうちには何とか調べがつくでせうから」

「實はこの二十五日から入學試驗が始まるので、その方へも願書を出してあるものですから……」一週間と聞いて、私は當惑して嘆願するやうに云つた。

「さうですか。……それではと、明日は祭日だと、明後日――それではあと二日」と、警部補は考へ／＼だつたが、きつぱりと確信の籠つた調子で云つた。

「さうですか。どうも有難うございます。それでは私たちの方でも、明日から此奴を引張り歩いて、其奴等を掴まへることにしますから。其奴等の掴まるまではそれでは此奴をこつちに置くことにしますから……」

「ではさうしてご覽なさい」

「この時計は其奴等を掴まへるまでこちらへお預けして置きますから」と云つたが、私には明日にも其奴等を掴まへて見せると云ふ自信があつた。斯う明瞭になつた以上は、警察の力ばかり賴りにはしてゐられないと云ふ腹だつた。

「こつちで預ると云ふ譯にも、……まだそれだけの手續きがついてないことだからな」

「でもさうした不良少年の品物を私たちが家に持つて歸ると云ふのもなんですから、どうか時計はこちらで……」

「では、こつちで預つても仕方がないんだが、まあ……」と、警部補は苦笑しながら時計を片寄せた。

「それではその相手の奴等を引張つて來て、此奴の云つたことに間違ひないやうでしたら、何とか此奴の處分だけは許していたゞけませうか。何しろ免狀式前でもあり、入學にも差支へるやうなことになるんで、何とか處分だけは許していたゞきたいと思ふんですが」と、警部補の顏に覗入りながら哀願の調子で云つたが、

「それはいづれ明日署長と相談の上で、すべて署長の意見にあることですから……」と、彼はやはり冷淡な調子で云つた。

外に出て、私たちはすつかり疲れ切つて驛前から自動車で寺に歸つたが、井出君も東京から來てゐた。

「警察で云つたことは噓ぢやないんだらう？噓だつたらたいへんだぞ、もう本式になつちまつたんだからね。でもまだ今のうちなら、噓なら噓だつたと云ふと、これからでも行つて謝つて來てやるが……」と、やつぱし私には腑に落ちないところがあるので訊いたが、

「噓ぢやない」と、Fは云つた。

「奧で警部さんにどんなことを訊かれた？」

「お母さんがあるのかないのかとか、どうしていつしよにゐないんだとか……」

「そんなことだけか？」

「さうだ」

「それにしても、警部さんの前であれだけの答辯の出來る人間が、不良少年見たいな奴等に威嚇かされた位で、どうしてこんな馬鹿なことをしたのかなあ。氣をつけろ！」と私は叱つた

が、それにしてもＦ一人の惡智慧でなかつたと云ふことが、自分としてはせめてもの慰めであつた。

「そんなものが居るんですかねえ、おつかねえやおつかねえや」と、お寺の婆さんやおせいたちも舌を卷いた。

翌日は春季皇靈祭で、晴れたいゝ天氣であつた。境内の櫻もぼつ〱咲きかけてゐた。私たち三人して、Ｆを囮にして、不良少年を狩り出さうと云ふ譯である。多少興味のあることでもあつた。「逆縁ながらそれではひとつ、敵討に出かけてやるかな」と、私は笑つて云つたりした。「僕が餘り創作が出來ないので、Ｆの奴とんだ創作をやつた」と、云つたりした。Ｆには昨日の通りの服裝をさせた。「鞄は置いて行つてもいゝだらう、マントを着てるからわからないから」と云つたが、鍵裂きのまゝの袴に日和を履かした。私たちは各自にステッキや、井出君は太い竹の棒を持つた。「不良少年なんて生意氣だ！　摑まへたら毆りつけてやらうか！」と、井出君は逞しい腕に力をこめて云つた。「しかしそんな奴等だから、刃物位は持つてるだらうから油斷しちやいけませんよ」と、私は注意した。警察の手に摑まる前に自分等の方で摑まへ、誠意を以て彼等の改悛を求め、場合に依つては自分等もいつしよになつて警察へ謝つてやつてもいゝと思つた。

「それでは出かけて來るからね、晩にはどつさり御馳走をこしらへて置いて呉れ、凱旋祝ひをせにやならんから……」とおせいに云ひつけて、私たち四人は九時過ぎに寺を出た。

弟を先頭に、それから二十間ほど離れてＦ、それからまた二十間程後になつて私と井出君とは並んで、ゆつくりした步調で建長寺前の通りを町の方へ繰出して行つた。うらゝかな春の日の光りとは、そぐはないやうな自分等の氣持だつた。八幡樣の裏の石段を登り、神前に好首尾を祈り、表の高い石段を降り、境内の舞樂殿の附近や石の鳥居前のあたりなどでは、特に目につき易いやうにＦをぶら〱させて、私たちは離れて油斷なく看視した。それから八幡前の通りを、兩側の綻びかけた櫻の間を歩いて停車場に行き、私たちは外のベンチに腰かけて、驛前の廣場をＦにそちこちと步かせた。Ｆは俯向いたなりで、機械的に、私たちの方も周圍の雜沓も目に入らぬかの樣子で、小刻みに往つたり來たりした。

「どうした氣持で歩いてるもんかなあ？」と、私は前の晩の長谷での印象を思ひ浮べながら、云つた。

「どんな氣持つて、そりやいろ〱心配してるもんでせう。相手の奴が怖くもあるだらうし、いよ〱摑まつて對決となつたら、また自分の方にもボロが出るやうなことがあるのかも知れませんからね」と、弟は云つた。

「何しろ祭日なんで都合がわるかつたな。それでないと往きか歸りかをこゝで張り込んでゐると屹度摑まるんだがなあ」

「さうでしたね。それで警察でも、大體當りがついてるんだが、今日は祭日だからもう一日と延ばして云つたのかも知れませんね」

「さうなんだらうな……」

斯う話してる時、私はふと、外からやつて來た、帽子はかぶつてないが大島か何かの揃ひの着物にセルの袴をつけた、反りかへるやうに腕組みをした立派な體格の男に目がとまつた。オヤ？　と思つたが、それが昨日の受附の巡査だつたことに、すぐ氣がついた。顏なぞも剃つて見違へるやうに立派になつてゐた。

「あれがゆうべのあの巡査だよ。堂々たるもんぢやないか。あゝしてゐると一寸巡査とは思はれないね。今日は非番なんだらうが、それで

はやつぱし僕等のことでも歩いてるのかな」と、待合室にはひる後姿を見送つて、私は弟にさゝやいた。

巡査がぢきに出て行つて、私はお辭儀をしそこなつたが、私たちも斯うして歩いてゐると云ふことが、屹度巡査に好い印象を與へたに違ひないと思はれた。警察の誠意が有難く思はれた。

鎌倉不案内の弟に代つて、今度は私が先頭に立つて、一時間もして停車場を出たが、秋山と云ふのはいつも妙本寺の方から來ると云ふのでその邊の店屋で秋山と云ふ姓を訊ねたり、妙本寺の境内にはひつたり、そこに遊んでゐた十七位の逗子の中學の帽子をかぶつた學生に訊いて見たりしたが、さつぱり手がかりがなかつた。「鳥打帽へ徽章を附けたりすることは、絶對に學校では許しませんから」と、その學生は云つた。それから大町の通りをFの學校の方に出て――どうかすると其奴等は日曜などにボールを投げに見えることもあると云ふFの話なので、その邊で、しばらく網を張つたが、それらしい影も見えなかつた。でその近くの停留場からFひとり長谷まで電車に乘せ、私たちは一臺遲れて乘ることにした。ところが後の電車がどうかしたかなか／＼やつて來ないので、囮をさらはれやしないかと、私たちは氣を揉んだ。

「そんな奴等の事だから、隨分敏感なもんだらうからな、當分影を潜めて出て來ないかも知れないな」

「さうかも知れませんね。ちやんとした巣窟でも構へてゐるやうな、案外專門的な奴等かも知れませんからね。逗子横須賀の方まで繩張りにして始終そんなやうなことをしてゐるやうな奴等だと、ちよつと難かしいですね」と、弟も云つた。

「何しろ敵討なんてたいへんなもんだね。昔の人が何年もかゝつて捜し歩いたんだらうが、兎に角敵討なんてたいへんなものなんだね」と、私は弟と顏を見合せて苦笑したが、三人とももうだいぶ倦怠が感じられて來た。そして私自身の暗い記憶が、またしても頭に浮んで來た。

それは少年時代から、永い月日の間何かに觸れては責められて來た最初の汚點の一つなんだが、昨日の腰越以來また新らしく喚びさまされて、絶えず頭の底で苦しくうごめいてゐた。

私が八つの年、沒落した一家が母の村に引越して、一冬母の實家に同居した。尋常二年生だつた私は村の學校に入つて間もなくだつたが、ある日草紙か何か忘れて來て、一旦宅に歸つて來て、またそれを取りに學校へ行つたのだが、上級生たちの授業中で、そこらに誰も見えなかつたので、出る時そこの下駄箱に澤山載つてゐたスケート――と云つても木の臺に簡單な滑り金を打つけたもの――の中から、一等粗末に見えた藁緒の一足を、ついふら／＼と攫ばらふ氣になり、羽織の下に忍ばして持ちかへり、裏の土藏の臺石にスケートの臺を打つけて金だけ放し、臺は屋敷のわきの小川へ一つづつ投り込んだ。

投り込んでしまつてから、ひどくわるい、取返しのつかないことをしたと空怖ろしくなり、子供ながらひどく昏迷を感じたが、放した二本の金は二三日縁の下へ隱して置いた。母に云つたら買つて呉れないこともなかつたのだらうが、何しろ私はまだ八つで、金のついたスケートは履ける年齢ではなかつたし、村の子供たちのやうに練習もなかつたので、父は練習用に竹をつけたのをこしらへて呉れたが、子供心に恥かしく思ひ、往來へは出ずに裏の空地の雪を踏みかためて練習してゐたのだつたが、もう一つの不平は、私たちが村に來る前、私が從兄の中學生に一足分貰つたのを、引越の時紛失したか、

母が村に來て誰かに吳れたかして無くなつてゐたので、私には隨分不平だつたものらしい。母は金が折れたから棄てた——そんな風に云つてゐたやうだが、兎に角私には不平だつた。そんなことも手傳つたものかも知れない。兎に角さうして二三日緣の下に隱して置いたが、そのまま自分の臺に打つけて出歩く大膽さもなかつたか、子供ながらに用心したものか、近所の年上の子供と從兄に貰つたのだと云つてその子供の金と交換して履いて一日もしたかで、偶然に私の盜んだのもつい近所の子供のもので、交換した相手の方からそれが暴露して來た。金の裏に所有主の名が刻まれてあつたので、云ひ逭れよう餘地もなかつた。私は母に學校を休まされて嚴しい糺問を受けたが、私はどこまでも從兄に貰つたのだと云ひ張つた。夜に入つて母は神棚に燈明をあげ、茶碗に水を盛り、それに護摩木と云ふものを浮べて呑ませると云つた。「謊でないと何ともないが、謊だつたら、これを呑むと咽喉から血を吐いてすぐ死ぬ。それでもいゝか。さあお呑みなさい……」と、茶碗をつきつけられて、私はすつかり恐ろしくなり、聲をあげて泣いて、許しを乞うた。私はその時ですつかり懲りてしまつた。がその時から三十年近く經つて、因果がFに報いて來た。自分は二度と泥棒だけは企てなかつたが、さうした血がやはりFに傳はつたものだらうかと、昨日腰越の駐在所でFを見出し、時計を出された時には、空恐ろしい氣がされた。

やがて三人は電車に乘つたが、私にはそんなことなど思ひ出されてだん／＼憂鬱になり、今朝出て來た時の勇んだ氣持が失はれて行つた。警察でも取あげたことであり、Fもあれまでにはつきり云つたのだからよもや謊ではあるまいと思はれたが、やはりどこやら曖昧な、不透明な惱ましい感じを拂ひ退けることが出來なかつた。

「今あそこの路次で、不良少年らしい奴等が五六人寄つて立話をしてゐたが、彼奴等ぢやないかな？」と、井出君が電車が海岸の別莊町を通り過ぎた時に云つたが、長谷から引返すのも億劫な氣がして、兎に角大佛の境內へと、はひつて行つた。

そちこちに置かれた、大佛のわきの石の腰かけに、私たち三人は一人づつ離れて腰かけて、やはりFをぶら／＼させてゐたが、大佛の前に立つて水兵たちが寫眞をとつたり四五人づれの大學生がやつて來たり、入替り立替りやつて來る遊覽客のほかには、それらしい影も見られなかつた。境內の奧の櫻もまだ綻びかけたばかりだつたが、その下で大勢の醉拂ひが唄つたり踊つたりしてゐた。私たちは口をきゝ合ふのも大儀になつて來て、一時間もしてそこを出て來たが、今度は長谷の通りを自動車の埃りを浴びながら私がやはり先頭でやつて來たが、私は身體も氣分も疲れ切つてゐた。停車場の裏手の空地では、女相撲の興行が始つてゐて、假小屋の高い櫓の上では朝からポン／＼太鼓の音が聞えてゐた。小屋の前には挑發的な女相撲の繪看板が何枚か飾られて、しきりに客を呼びこんでゐたが、不良少年なぞには誂へ向きの興行物だと云ふ氣がされて、しばらくその前に佇んでゐたが、さすがに入つて見る勇氣が出なかつた。或は十八日Fが歸らなかつた晩、學校の歸りこの太鼓の音に誘惑され、いくらも廻り道にはならないので、小屋の前を通りかゝつてつい入る氣になつて時間を遲らしたのではないのだらうか——その方が活動へ入つたと云ふよりも根據がありさうな氣がされたが、そんなことを今Fに訊ねたところで、無益だと云ふ氣がされて、訊いて見る氣にもなれなかつた。それから停車場前に出て、逗子の中學の帽子をかぶつて往來

で遊んでゐた四五人の學生にも訊いて見たりしたが、更に手がかりは得られなかつた。

もう三時だつた。私たちは其近所で遅い晝飯をたべながら、私と弟とはビールを飲んで、

「やつぱしそれや、學生なんてもんぢやありませんね。職工かなんかですね」と、弟は云つた。

「どうもさうらしいな。第一そんな鳥打に飛白の着流しで通ふ中學生なんて、今時ある譯がないね。ズックの鞄をさげてると云ふが、辨當箱入だらう。向うへ行くと青服か何かに着替へるんで、逗子へ通ふと云ふのも譃で、田浦か横須賀の職工に違ひないね。そんな奴等に掴まつて、面白半分から貴様小僧になれとか何とか威嚇かされたんだらうが、Fも隨分つまらない奴等に掴まつたもんだねえ！ さうだらう？ 中學生なんて云ふのは譃だらう？」と、私はFの氣をひいて見るつもりから、斯う侮蔑した口調で云つたが、

「いやさうぢやないよ、職工なんかぢやなかつたよ」と、Fは打消したが、ポッと顔を赤らめた。それが、相手が職工と圖星をさゝれて、羞ぢたのだと、私には判斷された。職工なんかだと、暴行は免れてゐるかも知れない――さうも思はれたが、しかしそれも確かめられたことではなかつた。

「そんならその鞄にどんなやうな本がはひつてゐた？」

「どんな本て……」と、Fはちよつと口籠つたが、「やつぱしお父さんなんか讀むやうな……」と、曖昧に云ひ紛らした。

「僕なんか讀むやうな、……譃さ、大方講談本かなんかだらう、職工だつて講談本位は讀むさ」と、私は白々しい氣がして、Fの顔を視て云つた。Fも默つた。

夕方近くなつてそこを出て、弟とFとはすぐ停車場へ、私と井出君とは八幡前をもう一度一廻りしてついでに時計屋へ寄つて様子を聴いて見るつもりで、S時計店の硝子戸を開けてはひつたが、店に私には顔見知りの主人が一人で、懐中時計の修繕をやつてゐた。

「私はゆうべの子供のおやぢですが、實はもつと早くに挨拶にあがる筈でしたが、すつかり調べがついた上でゆつくりお詫びにあがるつもりで、つい失禮してゐましたが……」と、私はFの家出の事情から、朝から斯うして相手の不良少年の狩り出しに歩いてゐることを話した。

「ハヽア左様で……」と、主人はニヤ〱薄笑ひを浮べて狐疑的な眼して私の顔に視入つてゐたが、

「……そんな譯でして、私も家の者どももすつかり信用しちまつたんで、云ふことがちやんと出來てるもんですからな、これは何か家庭の事情でもあつて、お母さんが違ふとか何とかそんなことで、それで東京から小僧の口を捜しに來た――當人がさう云ふもんですからな、それで實は今日弟を役所の歸りに牛込の叔父さんとこに寄さして話をきめようと――當人も叔父さんとこへ行つて呉れと云ふものですからな……何しろすつかり信じちまつたものですからな」と、いくらか辯解めいた調子も見えて、ゆうべからのことを詳しく話した。

「それで私のことはどんな風に？」

「いやあなたのことも、斯う云ふご商賣をしてゐると云ふことも云つてましたが、當人は萬事叔父さんの方へ相談して呉れと云ふので、それで……」

「私の住所はどんなことに云つてましたか」

「やはり東京のどことか云つてましたが、お父さんには相談しても駄目だから、叔父さんの方へ行つて呉れと云ふものですから……」

「さうでしたか……」と云つたが、私にはふと、

こゝでも逗子の藥屋の場合と同じやうに、私のことも本當を打明けて云つたのではないかと、云ふ氣がされた。Fは、こちらは時計店では鎌倉でも繁昌の方だから――などと云ひもしたと、主人も云つたが、東京から突然やつて來た子供にそんなことが一寸云へさうにも思はれないことだし、何しろFの學校の徽章のついた帽子、學校の名入りの名刺をはさんだ鞄、また兎に角一年半の間毎日その邊を往來もしてゐたことだし、私の使ひにも幾度かやらされてゐることでもあり、鎌倉の生徒だ位の判斷は、どこからだつて附きさうなものである。それだけの判斷が附かずに、全然風來のものと思つて、泊めたと云ふことは信じられないことだ。Fは私に虐待されてゐるとか、逗子の藥屋で云つたやうに私が病氣で貧乏だから小僧になるのだ――半ば私への申譯または反抗心から、本當にさう思ひ込んで賴んだのだが、それには私へ直接に交渉したのでは駄目だから、東京の叔父に相談して吳れ――さう云つたやうに賴んだものかも知れない。時計屋ではそれを信じて、それで私の方を後廻しにして、一應東京の弟の方へ當つて見、その上で私の方へ交渉してFを窮境……から救ひ出してやる――そんな風に考へたものかも知れないが、ところがFは主人の弟の人の東京から歸らない前に逃げ出した――歸つて來られて一切が暴露された場合のことが、Fにも考へられたらう――その時掻拂つて出た二つの時計が長谷の時計屋で五十錢に賣れたらば、多分それを汽車賃にして、東京の私の弟のところへ逃げ込んだものだらう。それともその金のあるうち浮浪を續けて、もつと深入りすることになつたか、それはわからない。後から主人が自轉車で追かけて、Fが二度目に賣りに行つた錺屋から出て來た時に、主人とFとの間にどんな會話が交はされたことか私には推測出來ないが、或は、

「時計を持つてるだらう？　それは置いて行け！」斯う主人に云はれたが、

「いやこれは、一つは僕のお父さんのだし、一つは僕のだ、盜んだのではない……」Fは斯う白を切つたのかも知れない。

何しろ往來ではあり、相手は子供だし、殊に私の住所を明かしてあつたのだとすれば、また明かさずに東京から奉公口を搜しに來たものと思つたとしても、私や警察へ無斷で子供を泊めたと云ふことは、何としても落度には違ひない。それやこれやを考へて、主人はその時はFが長谷の停留場から電車に乘るのを見屆け、強硬な態度に出ずに放してやつて、すぐ警察へ屆けて、警察の手で腰越で抑へるやうな手段に出たのかも知れない。それが後の煩ひを避ける一番賢い手段に違ひなかつた。

「何しろ時間も八時を過ぎてしまつたしね、まだ晩飯も食つてないと云ふことで、それから東京へ歸らすのも可哀想だと思つたものですから、奧で餅など燒いて食はせたりしましてな……」主人はやはり狐疑的な眼して云つたが、いつまでしても時計のことは云ひ出さなかつた。

昨日東京の弟の家を訪ねた、主人の弟だと思はれる若い男が外からはひつて來て、店の賣臺の上へドカリと腰かけて、土間の丸い腰かけに坐つて主人と話してゐる私の横顏を見下ろすやうにして默つて聽いてゐたが、私はその方へは顏は向けなかつたが、冷めたい侮蔑的な彼の表情が、絕えず刺すやうに意識された。

「それではやつぱし、その時計はこちら樣のものではないんですね？　その時計では實は非常に困つて居るんですが……」主人も無論今までには警察へ呼び出されて、その時計を見せられたことと思つたので、不安心な氣持で訊いた。

「いやそれが、やつぱし手前とこの物でござんしてな……」と、主人はやはりピカ〳〵と金歯を見せた薄笑ひを浮べて云つた。

「やつぱし彼奴一人で、盗んだもんでせうか？」

「まあさうでせうな。……實は今朝刑事がやつて來ましてな、この時計に見憶えがあるかと云ふから、あると云ふとね、もう少しで胡麻化されるところだつたよ、それでは一つこれへ判を押して呉れと云つて、盗難屆に判を押さして持つて行きましたがね、今日は祭日だからこれで休みだとか云つて出て行きましたがな……」

「さうでしたか……」と云つたが、私には今朝停車場で見うけた和服姿の巡査のことが浮んだ。私たちの爲めに不良少年を搜してゐたのではなく、盗難屆の用事を濟まして、それからぶらりと停車場に姿を現はした――それだつたのかなあ？……と、私は情けなくなつた。頭がカッと燃えあがつた後の、深い絶望的な溜息で、私はふら〳〵と昏倒を感じた。

「彼奴が出かける時、誰かほかに呼び出しにでも來たやうな風がありませんでしたらうか？」

「別段そんな風は見えませんでしたよ」

「この八幡前の裏の方から出て來ると云ふんですが、十七八の中學生だか職工だか、なんでも慶ちやんとか云ふんださうですが、そんな名の子供を知りませんでせうか？」

「知りませんな……」

「その錺屋から出て來た時も、電車に乘る時も、彼奴一人でしたらうか？」

「さうでした」

「その錺屋と云ふのはどの邊でせうか？」

「極樂寺前のKと云ふ活動寫眞のすぐ近所ですがね、實は私もその時にはまだ時計のことには氣がつかなかつたのでしたが、職人の者を追かけさせたのでしたが、どうも何だか要領得ないやうなことを云つて歸つて來たもんですからな、それで私も丁度あの邊へ用事もあつたもんだから、自轉車を飛ばしたやうな譯でしてね……」主人はこれ以上のはつきりしたことは云はなかつた。

外は薄暗くなつてゐた。

「やつぱし彼奴が盗んだのだつた。不良少年なんてみんな譃だ。……何と云ふひどい奴かなあ！」と、外へ出て待つてゐた井出君に云つたが、深い溜息と共に眼頭の熱くなるのを感じた。ドシンと、底知れない闇の底へ蹶落された氣持だ。これと云ふも自分の不注意から起つた、偶然のFの失策として、その責任は自分の擔ふべきものだと考へられるとしても、この最後まで譃でもつて自分等を引ずり廻してゐたFの性根は憎むべく、わが子ながら輕蔑を感じた。さうした感情がまた、私自身にかへつて、私の胸を慘酷に噛み破るものであらねばならない。

「どうしてFさんもそんなことしてましたかねえ！ どこにそんなことする必要がありますかねえ！ と云つた井出君の厚い近眼鏡の蔭に、チラと涙の光るのが見えた。私は心のうちで彼に感謝した。

八幡前の裏通りを停車場へと、井出君と並んで、私は足も地に着かないやうな氣持で歩いて行つたが、ふと薄闇の向うから、建長寺の老師が健かな歩調でやつて來るのに會つた。私は立停つて足を揃へて、いつにも衰へを見せない深い閃きを湛へたやうな老師の眼に視入りながら、お辭儀をした。

「どうもご無沙汰して居りまして……」と、私は毎度ながら獨參を怠けてゐるお詫びを云つた。

「どちらかへお出かけかな？ どちらかへお出かけかな？」と、老師は二三歩あるき出しながら言葉をかけた。

「どうもまづいことがありまして、まづいこと

ばかしありまして……」と、私はいろ〳〵な意味で恐縮を感じながら答へた。

「その錺屋へもちよつと行つて來ませう。そこだつてどんなことになつてるかわからないから。何しろ一筋縄ではいかん奴ですからね、調べるだけ調べてかゝらないと」私は斯う云つて、二人で電車に乘るため警察前の方へ出て來たが、事件以來のことが一時に胸を衝いて來て、

「何と云ふひどい奴かねえ！……井出君にもわかりますか？……親の頸へ縄をつけて引廻してゐたやうなものぢやないですか……何と云ふ馬鹿な奴かなあ！」私は斯う叫ぶやうに云つて、人通りの杜絶えた松の木の下の往來を力任せに打つたが、黒檀まがひの巖丈なステッキが中ほどからぽつきと折れた。私はその折れたまゝのステッキを持つて電車に乘り、長谷で下りてその錺屋を訪ねたが、出て來た主人らしい若い人が胡亂さうな眼附して、そんな子供は見えなかつたと云つて、相手にならなかつた。今度はFに感付かれてまた逃げ出されては大變だと思つて、私一人長谷の通りから俥で駆けつけたが、Fはやはり元氣はないが格別變つた樣子も見せず、待合室の入口で圍の役を勤めてゐた。入口に近い中のベンチに、弟は鬱ぎ込んだ暗い顔して腰かけてゐた。

「やつぱし駄目。不良少年も何もかもみんな譃さ。彼奴一人の仕業だつた。警察ではもう朝のうちに、時計屋から盗難屆まで出さしてある……」弟のそばに腰かけて、私は低い聲で云つた。

「やつぱしそんなことだつたかなあ……」と、弟も脣をゆがめて、苦痛の表情を見せた。

「Fちよつと來い」と呼んで私たちの間に腰かけさせたが、最早怒る元氣もなく、

「お前みんな譃だつたんだね。警察では最初からみんなわかつてゐたんだよ。それを昨晩あんな譃を警部さんの前で云つたのが、あれが一等いけなかつたな。……お前長谷の活動寫眞のそばの錺屋へも賣りに寄つたさうだな？」――Fは默つてうなづいた。

それから井出君の來るのを待つて、私とFと弟との三人は警察へ行つて、私たちの係りの警官ではなかつたが、部長の前に深く陳謝し、係りの警官への傳言を頼んで外へ出たが、寺への歸りの途中も口を利き合ふ元氣もなかつた。今日一日の喜劇にもならない愚かしい行動が、慘めに顧みられた。

その晩二時過ぎまで、Fは更に私から嚴しい叱責を受けた。警察での陳述が全然虚構だつたとしては、少しうますぎる、その裏にまだ多少の事實が潜んでゐやしないかと云ふ疑念もあつたが、また彼自身の自發的な告白からではなかつたとしても、これ以外には何の疚しいことも殘つてゐないのだとすると、子供として半ば以上許されたと云ふ安心と明るい氣分が樣子に見えなければならないのだ。さう云ふ樣子が見られない。弟にせがまれて頭をさげても、不自然な感じだつた。私は涙が出て仕方がないのだが、ふだんは泣き蟲の彼が、泣きもしなかつた。警部補の前で調べられた時と同じやうに、幾らか片ちんばの眼が血走つてぎら〳〵と光り、下脣を醜く突ん出して、身體をぶる〳〵震はしてゐた。それとも、それが私に對しての強い反逆――それが根本の動機であつて、こゝに到つて尚斯うした傲岸な態度を私に見せようと云ふつもりか、私には迷はない譯には行かなかつた。

「このほかには、ほんとにわるいことが何も殘つてないか？　あつたら今のうちに云つちまへ。明日警察へ行けば何もかもわかるのだから、あつたら今のうちに云つた方がいゝ。ほんとに何

もないのか？」

「何もない……」

「何もないつて、それが譃ぢやないのか？　斯うなつたら、何もかも男らしく綺麗に云ふものだよ。どんな人間だつて間違ひと云ふことはあるのだから、一旦斯うなつた以上は卑怯な態度を執るものぢやない。そんな卑怯な人間だつたら、惡黨になつたつて碌な惡黨になれやしないよ。だから何かあつたら、今のうちに男らしく云へ！」

「何もない……」

「ほんとに譃ぢやないのか？」

「譃ぢやないつて！」と彼は激しく總身を震はし、齒を喰ひしばるやうにして云つた。

警察での訊問には時間のことはほとんど簡略――その必要は彼等には最初からなかつたのだ――されてゐた。それで、今度は自分も警部補の眞似をして、一々書き取りながら、十六日老父を送つて行つて來たその晩の時間から段々と問詰めて行つたが、はつきりしてゐるやうでどこかに引かゝりが出來て來る。小僧にならうとした動機を追窮されて、苦し紛れから、小僧になれと威嚇かしたのは中學生でも職工でもなく、扇ケ谷の方の酒屋の小僧だつたなどと出鱈目を云ひ出してまたも迷路へ緣を曳きかけたりしたが、一喝されて、それは素直に默つた。おせいの隙をうかゞつて逃げ出した時、扇ケ谷の方へ出て、それから再び學校へと引返したのだがさすがにはひれずに學校附近の往來でぶらぶらしてゐた時、横須賀歸りの俥車に會つて、ふと小僧にでもなるほか仕方がないと思ひ詰めて、その俥車の後について逗子へ行つたのだつた。そんな譯で扇ケ谷の酒屋の小僧など持出した譯であるが、兎に角すべてを告白してしまつたと云ふ素直さが、いつしよに暮してゐて朝晩に細かい表情にまで注意を拂つてゐる自分には、それが感じられない。まだ何か潛んでゐる！　と云ふ直覺を、自分は酒を飲みながら詰問してゐるのだが、鈍らすことが出來なかつた。嫌疑者を幾晩も睡らさずに訊問を續けて無意識狀態に陷らせて告白させる――さう云つた方法も行はれてゐると云ふことも聞いたことがあるが、自分もしまひにはさう云つた慘忍な氣持すら湧いて來て、自分も同じことを繰返し〳〵順序を替へたりして根掘り葉掘り追窮しては彼の疲勞につけ入らうと企てたりしたが、彼は極度の緊張に堪へかねたかのやうに突然立ちあがつて、

「そんなにどこまでも譃だ〳〵と云ふんなら、僕これから一人で警察へ行つて謝つて來る！」

斯う突かゝるやうに叫んで淚を浮きさうにした。

「馬鹿野郎が！　今何時だと思つてゐるんだ。貴樣一人で行つて謝つて、それで濟むくらゐのことなら、斯うしてみんなして騷いでゐやしない。叔父さんにしても井出君にしても、忙がしい身體なんだぜ。俺の病氣のことだつて知つてるだらう。誰の爲めにみんなが斯うした馬鹿な目に會つて、警察へまで引出されて恥を搔いてゐるのか、ちつたあ考へても見ろ、この罰當り奴が！　そんな人の人情のわからないやうな奴は、碌な人間ぢやないぞ。……この馬鹿者が！」

私も斯う呶鳴つたが、私はがつかりしてしまつた。空恐ろしい氣さへされて、下を床に就かした。

「あんな奴のことだからね、どんなこともしかねない奴だからね、今夜はお前も氣をつけて異れ」と、私は弟に注意した。逃げ出しもしかねないし、自殺もしかねない――さう思ふと、私は怖くなつた。

翌朝十時頃疲れた睡りからさめたが、弟と下の姿が見えないので、來てゐたおせいに下た

ちはどうした？」と訊いたが、おせいの話で、私は思はず「しまつた！」と云つて、蒲團を飛出した。弟はおせいの爺さんと相談して、二人でFをつれて警察へ出かけたと云ふのである。

「もうよつぽど經つの？」

「まだ三十分位のものでせう、出かけたのはほんのさつきでしたから。叔父さんの方ではまた、叔父さんはゆうべは一寸も睡らなかつたさうで、今朝私が來ると、何しろ兄もひどく疲れてゐるやうで氣の毒だから、自分ひとりで行つて來ようかしら、警察へはなるべく早く行つた方がいゝだらうからと、さうおつしやるもんですから、それではうちのお父さんと二人で行つたらどうでせう、役には立ちますまいけど年寄りだから、さう云つて私はうちへ行つてお父さんを呼んで來たんでしたが、それはどうもわるうござんしたねえ……」

「そりや困つたことをして呉れたなあ。今になつて、僕が行かないなんて、警察へ對してだつてわるいし、そんな卑怯なことは出來ない譯なんだからな。どんな病氣だからつて、自分の子のしたことぢやないか、僕が出て行かないと云ふ法がないよ。それに僕が行つてよく賴まないとわからないこともあるし、弟の奴も案外しつかりしてゐるやうで斯うした肝腎の場合に姑息なことをするなんて、やつぱし學問をしてゐないせゐだな。兎に角みんなが警察に居るうちに行かないと、一旦引取つてしまつた以上それきりなんだから、學校や新聞のことなんかもあるんだし、兎に角大急ぎで自動車を呼んで呉れ。何しろ困つたことをして呉れた……」

建長寺の電話を借りて停車場前の自動車屋にかけさせ、井出君も起して私たちは顏を洗つて自動車の來るのを待つたが、なか／＼來ないので、往來まで出て待つことにして二人で出かけたが、往來の門のところで若い巡査が一人立ち番してゐた。何かあるのか知ら？　と思つたが、一昨晩警察で顏を見知つた巡査なので挨拶して、「何しろ不良少年には弱らされましたよ。これからまた警察へ行くところです」などと笑ひながら話してゐると、空の自動車が一臺反對の方からやつて來たが、多分少し下の方で引返して來たものと思ひ、手をあげて停めて、「警察前まで」と云つて乘つたが、少し駛つてから立派な膝かけのあるのに氣がついて、

「君は停車場前の自動車ですか？」

「いやさうぢやありません」

「さうですか。實は停車場前へ電話をかけて、もう來る時分だと待つてゐたところだつたので多分さうだらうと思つて停めたのですが……」

と話してゐたから、多分警察の人だらうと思つて停めたのでしたが、なあによござんす、どうせあちらへ歸るんだから」斯う云つて警察前まで乘せて呉れた。

途中では彼等に會はなかつたので、若しやと望みをかけて警察のドアを開けてはひつて行つたが、例の警部補と昨日の和服姿の巡査との二人が事務を執つてゐるきりで、室内は出拂つて、夜分とは違つた靜かな空氣が漂つてゐた。

私は警部補の前でいろ／＼と陳謝したが、

「もう濟んでしまつたことですから」と、うるさげに、冷淡に云つたきりで、相手にならなかつた。

「それではどうか學校の方へだけでも內聞に、……あと二三日で免狀式といふところなもんですから」と、私は最後にまさか露骨に新聞へだけは書かさないやうにして呉れとも云ひかね、また賴んだところで今更仕樣があるまいと思つたが、相手の心持を推量したくも思ひ、未練らしく斯うも最後に賴んで見たが、何の感じも動かない冷淡な一瞥を報いられたばかりだつた。

外に出て、停車場前から馬車に乘り、がつかりした、何もかもおしまひだと云つた淋しい氣持で、春の日を浴びながら歸つて來たが、小袋坂を登りきつてふと四五間前を見ると、狹い往來の左側を二三人の婦人と四五人の子供づれの一行の後から、見覺えのある署長が劍柄を握りながらついて行くので、門のところに立つてゐた巡査と思ひ合はされ、さては高貴のお方の半僧坊へのお詣りの護衞だなと氣がついたが、署長の方でも馬車の音にふり返つて、ジロリと鋭い凝視を私たちに向けたが、咄嗟のことで下車するだけの心構への出來ないうちに、自分の不良兒のことなども思ひ浮んだりして混亂した氣持のうちに乘り越してしまつたが、建長寺の門はそこから幾間とも離れてゐなかつたので、私たちが降りるとすぐ後から御一行もお着きになつたので、門の巡査はすつかり敬禮の姿勢をとつてゐた。私はひどく恐慌を感じながらも、心の中で、「それではこの署長の意見ですべてが決定した譯だな……」さう思ふと、背に浴びせられてゐる署長の鋭い眼光が意識されて、私は何とも云へないムズ〳〵した感觸が脊筋を傳はつた。警察官と云ふ職務に對して、自分は初めて稍はつきりした感じを抱かされた氣がされた。

「どうだつた？」と、私は歸つてゐた弟に訊いた。

「いや大して難かしいことも云はなかつた。簡單な注意だけで濟んだ」

「Fの方は？」

「奧につれて行かれて、刑事見たいな人に、書いたものを讀んで聽かされて、これに間違ひないかと云ふからないと云ふと、そんならそれに名前を書いて指で判を押せつて……」

「それだけか？」

「お前は中學へはひるんださうだが、中學どころか、二度とこんなことをすると、すぐ監獄へぶちこまれるんだぞつて……」

「さうか」と云つたが、最早何を云ふ張合ひもなかつた。

どうせ日が暮れて立たせる譯だが、Fの行李や夜具の始末にかゝらせようとしてゐるところへ、S時計店の名刺を持つて、そこの職人だと云ふ若い男が訪ねて來た。私と火鉢に向き合つて坐つたが、ほとんど三十分餘りも要領を得ないことを冗々と並べて、低能なんぢやないかしら、何を云ひ出すつもりなんだらうといゝ加減私たちをいら〳〵させたところで、結局、もう一つ時計を持つてる筈だから出してほしいと云ふのだつた。

「實は手前どもでも氣がつきませんでしたので、ゆうべ消防の寄合ひがあつて、長谷の時計屋も同じ消防だものですから、そんな話が出て、その子供なら二つ持つて來た、二つで五十錢でいゝからと云つて來たんだが、それに違ひない、さう云はれて手前どもでも初めて氣がついたやうな譯でして……」と、どうして低能どころではないなか〳〵用心深い調子だつた。

「F、持つてゐるだらう……出せ」と、傍で聞いてゐたFに云つたが、マントの裾からすぐ出した。古いニッケルの腕時計で、やはり動かないものだつた。

「もうほかに何かないの？　あつたらみんな云つちまひなさい。みんな云つちまふと、氣が輕くなるから……」と弟も云つた。

「蓄音機の針……」

「一緒か？」

「半分ばかしはひつてゐたの」

「ほかに何かないか？」

「ほかには何もない」

「馬鹿な奴だなあ。だからゆうべあんなにまで訊いたんぢやないか。どうも何か殘つてる氣が

したんで、あんなに訊いたのに、云はないもんだから、結局こんなことになるさ」と、つい口に出て、

「それで、やつぱし警察へは屆けてあるんですね？」

「いや、それは、手前どもの方でも決してわるくはお取計ひいたしませんから、一應手前どもへお寄り下さるやうにといふ主人の話でございますが……」とやはり不得要領な用心深い調子だつた。

「それではすぐ後から弟をやりますから。何しろ斯う云ふことになつて居るので、警察へ屆けてあるんだと一應警察の手を經ないといけないかも知れませんから……」斯う云つて時計は渡さずに歸したが、屆けてあるともないとも云はずに、職人は歸つて行つた。

「やつぱし屆けたんだけど、警察ではもう事件は濟んだんだから直接にかけあへ、一體お前のところでも無斷で子供を泊めたりするから斯んなことが起るんだ、とか何とか叱られたんでせう、それでもしこつちで時計を出さないやうだと困るとでも思つて、あゝ用心深く出て來たんですね」と云ふ、後で歸つて來ての弟の話だつた。

「どうだ、F、氣をつけろよ。世間と云ふものはみんなそんなもんだよ。向うではお前をどこまでも泥棒するためにはひり込んだ位に思つてもゐるだらうし、泥棒の子の親だから、あんな時計でも隱しやしないかと、思はれるやうなもんだからね、隨分と恥晒しな話さ。あんな時計をまた、東京へ持つて行つて、お祖父さんや叔父さん叔母さんに譃をついて、誰かに貰つたのだとか云つて、腕にかけて歩くつもりだつたのかい？　情けない奴だなあ、お前が中學へはひれたらニッケルの腕時計を買つてやると云つてゐたんぢやないか。そんなにほしければ、僕の時計だつてやりもするし、いくらだつて買つてもやるぢやないか。僕も實に懲りたから、これから生涯時計と云ふものは持たないつもりだから、お前も二度とは斯う云ふことをして呉れるな。どんな人間だつて間違ひといふものはあるんだから、今度のことは許すから、氣をつけて、人の爲めになるやうなえらい人間にならなければいけない。僕は貧乏だけど、一生貧乏で暮すだらうが、お前の學資は、お祖父さんがちやんと用意して呉れてる。ケチな根性を起して呉れるな。……どうだ、今度はちつたあ氣持も直つたらう、そんなら叔父さんへもお辭儀をしろ」と、Fに云つた。Fの表情もやうやく和らげられてゐた。

「その蓄音機の針はどうしたの？」

「七里ケ濱で鳥居なぞこさへて遊んだ」

おせいのうちから古いのを貰つて來ては、木片へ刺して鳥居とかいろ／＼な細工をして遊んでゐることは、自分も知つてゐた。それにしても、あの波の高い七里ケ濱邊で、春の日を浴び、空腹を抱へて、途方に暮れて何時間かさうしたことをして一人で遊んでゐたのだらうが、よくふら／＼と波に捲き込まれて行かなかつたことだと、自分等の運命に感謝した。

別れの晩飯をたべ、行李と夜具を俥屋に運ばせ、三人は八時過ぎに出て行つた。せめて二三日も井出君に殘つて貰はうかとも思つたが、やはり全然一人になる方がいゝと思つて、明日から永い間續くであらう幽閉の日々を、このがらんとした十疊八疊打通しの暗い室で、謹愼して送らねばならないと、覺悟を極めた。

（大正十年七月）

歳晩

また今年も暮れる。建長寺内に來て、丁度まる三年經つた。昨年の夏は義母、この夏には父にも死なれて、私はすつかりポカンとしてしまつた。人生に對し、自分自身に對し、何の用意も出來ないうちに親たちに死なれてしまつた。父の四十九日の供養に東京に出て行つたが、私もそのまゝ弟の家の二階で病氣の床に就いた。肺尖熱がいつまでも引かないし、持病の喘息時期が來てほとんど一ケ月餘り發作が續いたため、すつかり食慾を失ひ、自分もまた父の後を追ひかけるのではないかと云ふ氣がされたりした。三ケ月餘り東京に滯在して、十一月の下旬にやう〳〵寺に歸つて來た。

山の上の部屋借りの寺に歸つて來て、私は稍甦つた氣がした。晩秋の境內の爽かな眺めは、私の眼や心に好い刺激を與へた。靑い空、新鮮な空氣、松の翠、楓樹の紅葉——私は境內の石だたみの上を散步したり、町の方へ出て行つたりして、衰へ切つた健康の恢復に努めた。が依然として筆を執るやうな氣分になれなかつた。私は夏以來一枚も書いてなかつた。父の死が私を喪心さした。そして何の用意も出來てゐない私自身を見せつけられた。心の方向を失つた自分には、疲勞と倦怠のほか何物も見出されなかつた。三月餘りの病床の中で、父が鄕里に僅かばかし殘して行つて呉れた林檎畑の中の小屋でも修繕して、そこに隱遁して、百姓の眞似でもして一生を送らうか——そんなやうな空想に耽つたりしたが、しかしそんなことをして見たところで、それで自分の一生がどうにかなると云ふ譯のものでもなかつた。父に支へられ、勵まされて、この三十六と云ふ年までどうやら步いて來られたのだつた。

新年の雜誌の期限に迫られながら、私は筆を執るやうな氣分が少しも動かなかつた。寺に歸つて四五日もすると、僧堂で臘八接心の講座が始つた。十二月一日から一週間、午後一時から二時まで、吹きさらしの冷たい疊の上に畏まつて、老師の槐安國語の講義を聽いた。雪ハ北嶺ニ寒ク、梅ハ南枝ニ香シ——斯う云つた文句を憶えて來たりしたが、成程自然は手廻しよく、自分の寺の梅も堅いながらに最早蕾を揃へ、枯れ朽ちたとしか見えない牡丹の枝にも瑪瑙の芽のやうな芽を見せて、年を送り春を迎へる用意が出來てゐるが、自分自身を顧みて見ると、北嶺に寒い雪の姿ばかりで、南枝に香しい梅の面影と云つたやうなものは、どこにも望まれなかつた。十二月八日には佛殿に成道忌のお經があつて、本尊樣の前に釋迦出山の畫幅がかゝつてゐたが、自分もこゝへ來てまる三年、年を越すと足かけ五年になる譯だが、いつになつたらこゝを出られることか、またこゝを出てどこに往くところがあるか、自分はわからなくなつて來る。結局、鄕里の林檎畑の小屋で家族を集めて、十年前の家庭生活のやり直し——そんな億劫なことが出來るか知ら？……

十二月十一日午後、嚴しい原稿催促の書留配達の手紙を受取つて、覺悟を決めてゐたところながら、喘息の發作でも來さうな昏迷を感じた。裏の山で鵯がしきりに啼いてゐた。急に空の色が變つて來て、思ひがけない霰が降つて來た。それが緣前の紅い萬兩の實に美しく散りかゝるのを眺めやつて、年々の年越しの苦しい經驗に怯え、都會の活動振りを想像しながら、凍つたやうな自分の氣持に失望した。

（大正十一年十二月）

おせい

「近所では、お腹の始末でもしに行つたんだ位に思つてゐるんでせう。さつきも袷屋のお内儀さんに會つたら、おせいちやんは東京へ行つてたいへん綺麗になつて歸つたと、ヘンなやうな顏して視てましたよ」と、ある晩もお酌をしながら、おせいは私に云つた。

父の四十九日の供養に東京に出て行つて、私もそのまゝ弟の家の二階で病氣の床に就いてしまつた。肺尖の熱が續き、それから喘息季節にかゝつて、三ケ月餘り寢通してしまつた。その間ずつと、いつしよに出て行つたおせいの看病を受けてゐた。四十九日が百ケ日を過ぎても、私は寺へ歸つて來れなかつた。「Kがお供をつれて歩いてる……」東京の友人たちの間にも斯う噂されたりした。

「近所ではそんな風に思つてるのかなあ。何しろこの邊と來てはそんなことの流行るところだからな。……それではどうかね、ひとつ僕等もこさへて見ようか知ら。おせいちやんさへ構はないんだと、僕はちつとも構はないね。僕に落胤があるなんて、男の面目としてもわるい話ぢやないな」と、私も冗談らしく云つたが、しみ／＼と顏を視てゐると、やはり氣の毒な氣がして來る。

山の上の部屋借りの寺へ高い石段を登り降りして三度々々ご飯を運び、晩は晩で十二時近くまで私の永い退屈な晩酌のお酌をさせられる——雨、風、雪——それは並大抵の辛抱ではなかつた。それが丁度まる三年續いた。まる三年前の十二月、彼女の二十歳の年だつたが、それがあと半月で二十四の春を迎へるのだつた。その三年の間、彼女は私の貧乏、病氣、癇癪、怒罵——あらゆるさうしたものを浴びせかけられて來た。私はエゴイストだ。また物質的にも精神的にも少しの餘裕もない生活だつた。私は慘めな自分の力いつぱい仕事に向けるやうにして、喘ぐやうな一日々々を送つて來たのだつた。「少し長いものが一つ出來るまで世話して置いて呉れ。それさへ出來たらお前のとこの借金も返してやるし、おせいちやんにも何でもお禮をする。僕は仕事さへ出來ればいゝんだから、仕事が出來て金さへはひるやうになつたら、お前とこのお父さんにも資本だつて何だつて貸してやるよ」私は斯う子供にでも云ふやうなことを云つたりしては、叱つたり宥めたりして、自分の氣まぐれな氣分通りを振舞つて來たのだつた。おせいの家への借金もかなりの額になつてゐたが、三年經つたが、長篇どころか、この夏貧弱な全收穫の短篇集一冊出せたきりで、その金もおせいの家の借金へは廻らず、自分の父の死んだ後始末などに使つてしまつた。私はチエホフの「犧牲」と云ふ短篇が思ひ出されたりした。醫學生の研究臺となり、性慾機關となり、やがてその醫學生は學校を卒業して女と別れて行く、女はまた別の醫學生に見出されて同棲して同じ生活を繰返される——おせいと自分の場合とは違ふとしても、二十だつた娘がもうぢき二十四になる——この三年間のことを考へただけでも自分は氣の毒にならずにゐられない。何と云ふ忠實ないゝ娘だつたらう。せめて性的にでも慰めてやるべきだつたらうか。が自分は今、春になつて雪でも消えたら、遠く郷里の山の中に引込みたいと思つてゐるのだ。自分はその時のことを考へると淋しくなる。自分

のやうな人間のために多少でも婚期に影響した――そんなこともあり得ないとは、或は云へないかも知れない。

「關係してるんだらう。ないと云ふのはどうも諶らしいな。案外君と云ふ男は何にもしてゐないやうな顏してゐて、何でもやつてるんだからな、わかりやしないよ。さうなんだらう？また君としても、關係してると云つてる方が氣が樂ぢやないか」と、ある友人が私に云つたりした。

「まあさうだな。それではさうと云ふことにして置くさ」と、私も苦笑するほかなかつた。

　夏父を鄉里に葬つて鎌倉に歸つて來ると、私はすつかりポカンとしてしまつて、それを紛らすため何年にもしたことのない海水浴に出かけて行つた。建長寺境內から由井ケ濱まで汗を流しながら每日通つた。海水場の雜沓は驚かれるばかりだつた。砂の上にも水の中にも、露はな海水着姿の男女が、膚と膚と觸れ合はんばかりにして、自由に戲れ遊んでゐる。さうした派手な海水着の若い女たちの縱いまゝな千姿萬態のフヰルムが、夕方寺に歸つておせいのお酌で飲み始めると、何年にも憶えない挑發的な感じで眼先きにちらついて來て、私は頓に健康が恢復された氣になり、チエホフの醫學生の役をも演じかねない危險を感じさせられたりしたが、それも十日とは續かなかつた。無茶な海水通ひからまた昨年來止んでゐた熱が出だして、東京で靜養を强ひられることになつた。昨年も今年も、おせいの看病で私は救はれて來た。

「どうだねおせいちやん、春になつたら僕の方のゐなかへ行かないか。奧州の方も見て置くさ。山の林檎の世話なぞして、半分百姓見たいなことをして暮すつもりだがね、急にはうまく行くまいがね、三年もしたらどうにか百姓並の飯位は食へるやうになるだらうと思ふよ。僕の女房だつておせいちやんが行つて吳れると屹度喜ぶよ。斯うして四五年も別れて暮して來てるんだからね、女房だけでは僕の仕事の方までの世話が出來ないさ。僕の方のゐなかからだつて、いゝお婿さんは見つかるよ……」と、私は此頃も酒を飲みながらおせいに云つた。

「あなたさへつれて行つて下さるなら、私はどこへだつて行くわ。お婿さんなんか私は要らないわ……」と、おせいはいつもの相手を疑はない調子で云つた。

「行かうよ。いつもの通りあの鞄を持つて、魔法壜を肩にさげて……」

　どこへ出かけるにも、おせいは私の藥を飲むための用意の魔法壜を肩にさげさせられた。さうした脊丈の低い彼女の姿を、私は遠い鄉里の山の中へ置いて、頭の中に描いて見た。

（大正十一年十二月）

蠢く者

父は一昨年の夏、六十五で、持病の脚氣で、死んだ。前の年義母に死なれて孤獨の身となり、急に家財を片附けて、年暮れに迫つて前觸れもなく出て來て、牛込の弟夫婦の家に居ることになつたのだ。その時分から父はかなり歩くのが難儀な樣子だつた。杖無しには一二町の道も骨が折れる風であつたが、自分等の眼には、一つは老衰も手傳つてゐるのだらうとも、思はれた。自分も時々鎌倉から出て來て、二三度も一緒に風呂に行つたことがあるが、父はいつもそれを非常に億劫がつた。「脚に力が無いので、身體が浮くやうで氣持がわるい」と、父は子供のやうに浴槽の緣に掴まりながら、賴りなげな表情をした。流し場を歩くのを危がつて、私に腕を支へられながら、引きずられるやうにして、やうやくその萎びた細脛を運ぶことが出來た。

「こんなに瘠せてゐるやうで、これでやつぱし浮腫んでゐるんだよ」と、父は流し場で向脛を指で押して見せたりした。

「やつぱしすこし續けて藥を飮んで見るんですね」

「いや、わしの脚氣は持病だから、藥は效かない。それよりも、これから每日すこしづつそこらを歩いて見ることにしよう。さうして自然に脚を達者にするんだな。そして通じさへついて居れば……」と、父はいつも服藥を退けた。

父、弟夫婦、弟たちのところから小學校に通はせてある私の十四になる倅、父が來て二三日して產れた弟の長男――これだけの家族であつた。牛込の奥の低い谷のやうになつたごみごみした町の狹い通りは、近所に大きな印刷會社があつて、そのため人通りも荷馬車などの往來も、かなり劇しかつた。さうした通りを、午前午後の時刻を計つては、日當りのいい玄關わきの二疊に寢かした赤んぼを根氣よくあやした後で、田舍から着て來た帽子のついた古外套に腰の曲つた身體をつゝみ、竹杖に縋つては、よちよちと軒下を傳ふやうに歩いてゐる父の姿に、偶然鎌倉から出て來た自分が出會ひ、思はず淚を呑むやうな氣持に打たれたことがあつた。自分には、父の氣持が解る氣がした。「父の散歩！」悲しい微笑の氣持で自分は斯う呟いたが、むしろ、それは傷ましい氣持のものだつた。父は孫たちのために生きたく思つてゐる――自分は心の中で父に感謝した。

私と同じやうに父は酒飮みで、どんな病氣の場合でも酒を節するとか、養生に努めたりするとか云ふやうな性質の人ではなかつた。田舍にゐても生來の氣無精と脚の不自由から、滅多に外へは出なかつた父が、この東京のごみごみした劇しい通りの街中を、脚を達者にするため散歩する――さうした父の心持は、生活に對する自分等の心持までも、いくらか明るい方に向けて吳れた。

父は三度ほど、弟や私の倅といつしよに、私の五年越し部屋借りの、建長寺内の山の上の寺に來て、夜遲くまで酒を飮み合つた。

「此頃やはり、每日少しづつでも歩くせゐか、脚の工合がたいへんいゝやうだ」と、最後に見えたのは三月下旬だつたが、父はさう云つて悅んでゐた。

「それは結構ですね。しかし、何しろあの邊はあんたにひどい通りだから、散步も餘程氣を附

けたさらないと。もしなんでしたら、どうです、當分こつちへ來ませんか。この通り部屋は廣いんですし、閑靜ですし、散歩も庭だけで間に合ふんだから……」

「いや、わしが來たところで仕方がないさ。獨り者のお前のところより、やはり子供たちといつしよの方がいゝ。わしには東京の散歩で結構だ」と、父はかぶりを振るやうにして云つた。

がその父の日課の散歩も、それから後いくらも續かなかつた。五月初め頃から父は床に就くやうになり、七月中旬に死んだ。一切の藥餌も受けなくなり、絶食同樣の日が二十日近くも續いて、ほとんど骸骨のやうに痩せてしまつたが、元來が頑丈な體質の、殊に永年の飲酒や持病の喘氣にも左程に弱らされてゐなかつたらしい強い心臟の爲めに、却つて死の苦痛を長引かせることになつた。失敗と不幸の一代を送つて來て、殊に生の執着心を失つてゐたらしく見えた父の、最後に見せて呉れた根强い生への執着は、其後自分にいろ〳〵なことを考へさせた。……

が、こゝまで書いて來て、フツと、自分ながらひどく意氣込んで書いて來たことにテレた氣持になり、ペンを止めて、ついこの四五日前から始めた日課の散歩だと、下宿を出た。六疊の部屋の隅の壁に押附けられたやうに坐つて、何ケ月にも油も附けない蓬々とした櫛卷の髮を見せて、おせいは、此間友人のTの細君から裏地まで添へて貰つて來た木綿縞の袷を、幾日かかゝつて縫つてゐるのを、今日もひろげてゐた。自分は外套を着、鳥打帽をかぶつて、默つて出て來た。

近くの本郷三丁目の交叉點を横切るのさへ、自分にはいつもかなりの思ひだつた。きまりのやうに一二回は吃度交通巡査の合圖を躊躇した後、思ひ切つて不自由な脚してよち〳〵と駈けるやうに線路を越して、初めてほつと息を吐く。そこから左側の歩道を、店屋の飾り窓を覗いたり、本屋の雜誌の表紙を見たり、露店の古本をひやかしたりしては、出來るだけゆつくりと一高前の角のところまで歩き、そこから同じ道を歸つて來る――と云ふだけのほんの短い散歩なのだ。父のやうに竹の杖は持たないが、外套の襟を立て、兩手をポケットとに突込み、背を曲げて、膝の屈折が自由にならないやうな頼りない感じで、一歩々々と氣をつけて歩くのだ。一二ケ月前から[illegible]の感じは消えたのだが、運動筋の神經は容易に恢復しないのらしい。自分はあの空地のごみ〳〵した通りを歩いてゐた父の姿を思ひ出す。そして自分の姿を顧みる。だが散歩と云ふことも、日課とするべく何と云ふ億劫な、面白味のない退屈な仕事だらう。父にもさうだつたに違ひないのだ。だが、父は長生きしたいと思つてそれを續けたのだらうが、俺もやはり、それなんか知ら？　同じ退屈するなら、やはり蒲團の中にもぐり込んでゐるか、地震で柱の歪んだ部屋の黄色い壁――附鴨居の下や天井下の小壁などにひどいひゞを見せた壁に向つて、煙草の煙でも吹いてゐた方が、まだしもましぢやないか知ら？　部屋の隅には おせいが借りられて來た猫のやうに、座蒲團も敷かず火鉢も當がはれず、ぼろ〳〵になつた着物を着て、背を丸くして坐つて、ちよい〳〵臆病らしく眼をあげて俺の不機嫌な顏色をぬすみ見てゐる。俺は氣の附かないやうな風をして「これがまだ二十五と云ふ若い女なのだ。そして俺だつてまだ三十八と云ふ年齡の男なのだ。それがどうしたと云ふのだらうこの老いぼれ方がさ……」と云つたやうなことを、ぼんやり考へてゐる。それが、斯うした生活が、もう半年

から續いてゐる――とふと考へて來ると、自分は譯の分らない呻き聲のやうなものが、腹の底からこみあげて來るやうな衝動を感じて、ついふら〳〵とこの億劫な日課に出かけて來ると云つたやうな氣持でもあつた。

　三月上旬だと云ふに、前の晩小指大の雹が降つたとかで、厭な寒い風の吹く日だつた。一高前から例に依つて引返さうとして、ふとTの休みの日なことを思ひ出し、勇氣を出して駒込まで歩いて行つた。Tは二三日前から風邪を引いて休んでゐると云つて、床に就いてゐた。

「君の方へも何とも云つて來ないかい？　僕の方へもあれつきりなんだがね……」と、Tが私が坐るなり云ひ出した。

「いや、僕の方へは何とも云つて來つこないだらう、あゝして歸したんだから。それにしても君の方へ何とも云つて來ないと云ふのは、をかしいね。また人事相談へでも持込むつもりかな。無茶なことを考へ出されちや、弱るからね」

「人事相談とはしかし考へたもんだね。が二度とはもうあんなことしやしないだらう。だいぶ悄げてゐたやうだつたぢやないか」

「しかし田舍の人たちのやることはわからないからな。どつちみちあれが歸ると一等いゝんだがね。無理に追出すと云ふ譯にも行かず、實際今度は僕も弱つたよ。仕事は手に附かず、下宿の方は溜るし、いつそどこかへ遁走でもしようかと考へてゐる」

「そいつは可哀想だよ。それにしても一體どんな考へでゐるのかね。あの子も。一生君のそばに居りたいと云ふほどの考へでもなささうだし、君の妻子のことも何もかも承知してゐるんだしね。それに毎日あゝして小さくなつてゐて、晩には晩で醉拂つては打たれるだらうしね。それでも歸らうと云はないんだから、一寸あの子の了見にもわからないところがあるね」と、Tは探るやうな眼附を見せた。

「それが僕にもわからないんだよ。それがはつきりわかつてゐると、どうにも僕の氣持をきめることが出來るんだけれど、幾ら問詰めて行つても更にはつきりした手應へがないんでね。そして何かしら野生の動物めいた感じの執拗な眼附をして、あゝしていちんち部屋の隅つこにうづくまつてゐるんだから、つい酒でも飲むと打つたりなんかするやうなことになるんだよ。ゆうべも夜中に隣りの學生君に怒鳴られたよ。解決は明日俺がつけてやるから、今夜は寢つちまへ、毎晩々々勉強の邪魔ぢやないか、もう二時だぞ、人間には誰にだつて神經と云ふものがあるんだからね――ひどく叱られちやつたね」

「神經があるはよかつたな。何しろ下宿でひどく迷惑してゐることだらうから、少し氣をつけるんだね。自分の身から出た錆ぢやないか。それでは兎に角先方から手紙の來次第僕が鎌倉へ行つてどつちかへ話をきめて來るが、その結果で、それでは當分君のところへ預けると云ひ出したら、君にそれだけの責任が持てるか？」

「そりや仕方がないだらう。僕は田舍の女房にもすつかり打明けて、田舍へ引込むやうな場合には伴れて行つてもいゝと云ふことになつてゐるんだがね、唯一つ困つたことは、あれがもう妊娠してゐて、何故かそれを俺に隱してゐるんぢやないかと云ふ氣がされて仕方がないんだがね。それを此間來た叔父さんと云ふのに打明けたか打明けなかつたか、打明けてあるとすると、君が出かけて行つても話が一寸面倒になると思ふんだ。俺は實際永い間あれが女だと云ふことを頭に入れたことがなかつたやうで今度いつしよに居られて見て、初めてあれもやはり女と云ふ恐ろしい難物なんだつたと氣がついて見ると、俺も實はほんとから怖くなり出し

て、此頃では僕の方がだん／＼降參しかけてゐる形なんだ。子供の出來ることは怖くないが、女そのものが俺には怖い……」と自分もつい昂奮して來て、嘆息するやうに云つた。

「それは迂濶だつたねえ！」と、Tも難かしい顏附を見せて云つた。

「たしかに迂濶だつた。僕もあれが來た當座から、そのことを考へなかつたわけでもなかつたのだが、どうも、不自然な防ぎ方をしようと云ふやうな氣にはなれなかつたのだね。あゝ、自然と云ふ奴にはかなはないなあ……」と、自分はまたも嘆息せずに居れなかつた。

「しかしそれが、確かにさうなのか？　さうときまつたとなると、一寸問題だよ」

「それが僕にもはつきりしたことがわからないのだ。あいつが何かしら意地くねわるい氣持から俺にまだ隱してゐるのか、さうらしく見せかけてゐるのか、どうもよくわからない。よし！　今夜こそひとつはつきりと訊いて見てやらう……」

「そんな話は醉はん時優しく訊いて見る方がいいから、今夜は止したまへよ。もし何だつたら、うちの細君に訊かして見るから、何とか云つてうちへよこすことにしたまへ」

Tに忠告されて、すつかり疲れた暗い氣持になつて、電車で歸つて來た。ところがまた、その晩遲く、醉つた擧句に飛んでもない淺ましい活劇を演じてしまつた。

姙娠の詰問から、つい此間の警察の人事相談の方へと脫線したのが始まりだつた。日暮れ時分巡査が差紙を持つて來て、おせいが顏色を變へて行つて見ると、鎌倉から叔父が出て來てゐた。が結局警察でも「もう子供のことではないんだから、無理に引擦るやうにして伴れて行つても、女の方から追かけて來るやうなんだと、また飛び出して來るんだから、そこはよく納得の行くやうに話をして、伴れて歸るがいゝだらう」と、叔父に云ふほかなかつた。おせいには「お前さんは、その人への貸金を取立てて歸ると云つて出て來たんださうだが、今訊くと、うちへは當分歸りたくないからどこか奉公口の見つかるまでその人の下宿に厄介になつて居ると云ふんだが、そんなに永く厄介になつてゐて、もし宿料でも請求されるやうなことにでもなると、折角のお前さんとこの貸金だつて取れないやうなことにならんとも限らんからね。よくその邊のことも考へて見て、叔父さんといつしよに歸ることにしたらいゝだらう。兎に角一應その人の下宿へ行つてよく相談するんだな」と云つた。叔父はその晩私の部屋に泊つたが、結局伴れて歸ることが出來なかつた。

「俺が迷惑だ！　歸れ！　歸れ！」と、自分は例の調子で、眼を据ゑて、大聲で怒鳴つた。「いきなり警察へ持込んだりなんかして、俺だつていい恥さらしぢやないか。惡黨奴！　お前さへ歸つて行けば、雙方に文句がないんぢやないか。一體どんな氣持で、いつまでも斯うしてゐるのか、それをはつきり云つて見たらいゝぢやないか。俺が迷惑だと云ふことが、お前にわからないのか。俺は獨りになりたいんだ。それでないと仕事が出來ないんだ。さう賴むやうに、云つて來てるんぢやないか。斯うして毎日氣を腐らして、仕事は出來ないし、宿料は溜るし、今日も女房から、長男も長女もこの頃入學試驗の準備で夜も十二時近くまで勉強してゐる、せめて毎日玉子の一つ宛でもやりたいと思ふがそれも自由にならない有樣で不憫だと、云つて來てる位なんだ。さうした受驗準備の費用さへ俺には送れないんだ。試驗が受かれば受かつたで、その準備も考へなければならないんだから、そして後一ケ月と間がないんだからね。兎に角明日にも早速歸つて行つて貰はう。俺も隨

分永い間お前の厄介になつた。それは知つてる。がそれは、別の方法で屹度返す。が斯うした下宿での同居生活だけは、これ以上俺には我慢が出來ない。そして田舍の女房子供たちまでも、お前といつしよのことを知つてゐる。そして俺は子供たちに玉子食はす金さへ送れないのだ。歸つて呉れ！ 歸つて呉れ！ 俺は氣が狂つちまふぞ！ 氣が狂つちまふぞ！」と、自分は齒をギリ〳〵噛み合しながら、あたりの學生たちが此頃試驗前の勉強中なのも忘れて、怒鳴り續けた。

今朝妻の手紙を讀んだ時には左程にも強く感じなかつた玉子と云ふ言葉が、斯う怒鳴り續けてゐるうち、醉拂つた頭の中にふと閃くやうに喚びかへされた。自分は一寸眼を瞑つて、拂ひ退けたい氣持から、頭を激しく振つて見た。あの九月一日の地震當時の思ひ出――鬼門々々、あれが一切の破壞者だつたのだ。「だが玉子？ 玉子がどうしたと云ふんだつたつけな？……あ、さうか、俺はその玉子で生命を助かつたと云ふ譯なんだ」と、はつきり考へ浮んだ。

その日も自分は遲く起きて、宿醉の氣分で朝飯を拔いて、机の上に鏡を立て、石鹸の泡を顔いつぱい塗りたくつて、右の揉上げから剃刀をスーッと一當て頬へと下ろしたところへ、丁度ドシンと來た。自分は剃刀の手を止めてあたりを視廻したが、何しろ古いには古いが巖丈に出來た建物のことだから、裏の崖崩れは恐れたが家は滅多に潰れるやうなことはないと、泡を喰つて飛び出すほどの決心は咄嗟には起らなかつたのだが、十疊の入口の杉戸を一枚開けて風通しのいゝところへおせいが朝運んで來て置いて行つたお鉢の上にお膳が載つてゐて、小丼の中にその日一日分の玉子の三つが積まれてあつたが、その一つが疊の上に落ちて流れ出した。

「これはかなり強いぞ。疊を汚してはいけないな……」自分は斯う思つて、まだ一寸無精してゐたい氣持だつたが、剃刀を机の上に置いて、お膳の傍まで二間程の疊の上を歩いて行つた時、グワラ〳〵ッと來て激しく自分の身體が杉戸に打つかつたので、そのまゝ半ば夢中で跣足で玄關から飛び出し、匍ひずるやうにして二間程も外へ出て、ふと後をふり返つた刹那、二階建の茅葺きの棟がペチャンとなつてゐた。玄關わきの茶の間にゐた老僧夫婦と門前通りの男の人で、樒の枝を貰ひに來てお茶を飲んでゐた三人とが、下敷きになつた。幸ひに三人とも怪我もなく半時ほどして出て來たが、崖崩れが續き五寸程の地割れが出來たりして、辛うじて芍藥畑の隅の山茶花の下に戸板を持つて來て老僧夫婦と自分との三人が寄りかたまつて、揺れて來る度に山茶花の幹にしがみ附いてゐた。建長寺内の大建物は山門を殘したほか悉く潰れて、大方丈の裏の大崖はまださかんに凄まじい音を立てて崩れてゐた。二時間ほどしたが自分等の山の上の寺を誰れも訪ねては來ず、自分も老夫婦を殘して下の樣子を見に行くのも氣がかりだつた。自分は高い石段の上から、杉の樹の間を通して建長寺の大本堂、方丈、佛殿などの潰れた屋根を見下ろして、さつきの叫び聲から想像してもかなり人死もあつたことと、云ひやうのない氣持で突立つてゐた。さうした場合、最初に、石段の下から、「Nさん生きてゐるかよう！ みんな生きてゐるかよう！」斯う泣き聲を振り立てて、半ば狂亂の姿の藁草履穿きで、石段が刎ね、上からケシ飛んで行つた井戸の屋根、中程から折れた直徑七八寸程の杉の木、倒れた門の茅屋根――さうした間を、危險も忘れたかのやうに駈け上つて來たのは、おせいだつた。「生きてる！ みんな生きてるぞ！」自分も思はず大きな聲で叫んだ。その時のおせいの顔を、自分は忘れることが出來ない。落ちて疊の上を流れた

玉子と、おせいの眞劍な泣き顏――その印象が、恐らく一等強く自分の頭に燒きつけられてゐるかも知れない。自分はそれまでは毎食に一つは生玉子を飲むことを缺かさなかつたのだが、東京へ出て來て、生玉子を飲むと屹度下痢をするので、以來は絕對に生では用ひないことにして來た。自分の健康があの時以來ひどく損じられ、胃腸の弱つた爲めには違ひないが、同時に自分の弱い神經が極度に傷つけられ、脅え、その爲め斯うした病的な生理作用を來してゐるのではないかとも、考へてゐる。

がその、玉子、おせいの顏、田舍の妻の實家に食客さしてある三人の子供――この三つのものが、この頃の自分の醉拂つた頭の中に何か知らそぐはないばら／＼な感じ――それがふと妻の手紙に口を滑らしてから、醉拂ひの錯亂した神經が、更にクワッと燃え立つて來た。それに、つい三四日前の日のことだが、自分のところに珍らしく三人ほど客がいつしよになつた。そんな場合、下宿から借りてゐる小さな茶器では隨分不自由だつた。何しろ自分は震災後五日目に、汚れた單衣一枚で出て來たのだつた。野天で二晩、おせいの家は潰れなかつたので二晩泊めて貰つたが、食糧の缺乏に脅かされ切つてゐた當時のことで、自分にはそれ以上踏み止つてゐるだけの勇氣が出なかつた。自分には人間の美しさ、誠實なものの代りに、醜さ、淺ましさのみが、その短い數日間に、露骨に味はされた。自分はおせいの家に滯つてゐた食料の借金の證書を書き――自分は草鞋を穿いて出發の用意が出來、そして切手を賣る店も無論潰れてゐる際、額面相當の印紙を貼らせようとおせいの爺さんが大騷ぎをして搜しにやらせたり――そんなことが自分の出發の氣分を一層慘めなものにして、追ひ立てられるやうに、五年越し居馴染んだ建長寺內を出て來たのだ。おせいは門前の通りまで送つて來たが「すぐたよりを下さいね」と、幾度も念を押して云つた。「よし／＼、すぐよこすよ」と云つて、やう／＼引き出した小さなトランクに机の上や抽斗のものなど入れたのを背負つて、竹の杖を突いて步き出したが、心の中では、迚も二度とはこの場所に足を踏み入れる勇氣はないと云ふことは、はつきりと考へられた。そして途中程ケ谷驛の庇下に一晩ごろ寢をして、翌日東神奈川からやう／＼のことで汽車に乘り込み、鎌倉に行く前にゐた今の下宿に轉げ込むやうにしてはひつたのだが、來る早々、二三年前から兆候のあつた脚氣が、ほとんど衝心的な狀態で起つて來た。そんなわけで、使つてゐる机、本箱、ドテラ、茶器の類まで一切下宿からの借物で、着てゐる着物も友人の誰彼から、羽織、綿入と貰ひ集めたものだつた。おせいが十月初旬出て來た時、幾らかの金を支度して、せめて夜具だけでも持つて來いと云つてやつたのだが、爺さんは渡してよこさなかつた。おせいはその日空手で、金の受取さへ持たずにすぐ引返して來た。貧乏な自分ではあるが、五年越し世帶持同樣の獨り暮しを續けて來て、いつとなしこま／＼した物が集つてゐたので、斯うして急に下宿生活をして見ると、何かにつけかなり不自由だつた。金で一度に買ひ揃へれば、いゝぢやないか――さう思ひ諦めても、氣の濟まないやうな品も、無いこともなかつた。額も少かつたが、しかし無理工面の金を持つて行つて、空手で、而も一向不得要領で歸つて來て、いつまでも、ずる／＼と居催促のつもりで居るのか――斯う思ふと自分は腹が立つた。おせいが來た時分は、便所への起ち歩きも、困難な狀態だつた。でしばらく世話をしてゐて呉れ――斯う頼んだのは、自分の一生の失策だつたか知ら？　Tがおせいの叔父にも云つたやうに、おせいの方でも餘りに永く世話をし過ぎ、自

分の方でも餘りに永く厄介をかけ過ぎた――さう云つた譯合ひのものでもあらうが、が自分に取つてはおせいはその永い間、一人前の女だと云ふ感じさへ起させなかつた――三度々々山の下のおせいの家から岡持でご飯を運び、晩にはお酌をして床に寢かしつけて歸る、病氣の時には看病もする、さうした調法と云ふだけのものだつたのだ。それが今では朝自分が眼をさますと、狹い六疊の部屋に、やはり借り蒲團の床を敷き並べて、赭茶けた蓬々とした髮の頭を枕からはづして鼾をかいて眠つてゐる。自分は毎朝幾度か搖り起さなければならない。それだけのことからも自分の寢起きの氣分が滅茶々々にされて、それから晩酌にかゝる時刻まで、終日いらいらした氣持を依怙地に抑へつけては、汚れた黃色い壁に向つて、暗い空想の繰返しを續けてゐなければならないのだ。二人とも幾日にもお湯へも行かなければ、調髮もしない。そしておせいもやはり執念深く默りこくつては、終日部屋の隅つこに坐りつゞけてゐる。自分は年の暮れに迫つて、郷里に妻子を見舞ひ、自分の健康上から、また子供たちの爲め村に小屋でも造つて久しぶりで家族生活を營むべく、その下相談に歸り、妻の實家に一週間ほど滯在して來た。その時おせいは置き去りにでもされることと思つたか、泣いて同行を迫り、やう／＼下宿のお上さんたちの調停で思ひ宥めさしたが、後から自分の俥を追かけかねまじき氣配で、汽車が上野を出て、初めて自分はほつと息を吐いた。自分は妻に彼女のことを打明けて賴むほかなかつた。

「そりや迚もたゞでは歸りますまいね。あなたも飛んだいゝものを摑まへて結構ですわ。あなたが色男だからなんでせう。わたしの方ではちつとも構ひませんから、どうぞ伴れて來て下さい」と、もう鬢に白毛を見せ始めた、過激な臺所仕事ですつかり窶れ切つた妻は、自分の鬚に無數の白いのを見せ、頭の地の薄く透いて見える、室内もよち／＼と步いてゐるやうな自分を前にして、斯うひやかすやうに笑ひながら云つた。

「いや決してさう云ふ譯ではないんだがね、何しろあの女には親父が死ぬ時も隨分世話になつてゐるし、この春弟の細君の病氣の場合も厄介をかけてゐるし、自分だつて病氣のし通しだつた。夏には赤痢めいたものまでやつて、その擧句が今度の脚氣だ。そんないろんな因緣からも、無理に追ひ出すと云ふわけにも行かないんだよ」

――だからわたしの方ではちつとも構やしませんから、今度は伴れていらしつたらいゝでせう。さうなつたら誰にしたつて、おいそれとは素直に出て行きやしないもんでせう」

「借金を綺麗に拂つてやつても、出て行かないか知ら？」

「それはわかりませんね。先方の親たちはどんな風に考へてゐるか、その娘さんだけの考へではないかも知れませんからね」

「そこだて、俺の弱るのは……」

「それは仕方がないでせう、あなたご自分の仕出來したことなんだから。そしてもう身持にでもなつてるんぢやありません？……」

「そんなことはまだない。兎に角それでは賴む。試驗が受かつて二人とも汽車で通ふことになるんだと、朝も隨分早いんだし、僕の仕事と酒の兩方の面倒はお前だけでは見きれまい。頑固な質だが、働くことは幾らでも働く女だから……」

　自分は斯う云つて、妻と別れて來た。が東京に引返して見ると、同じ斯うした日々だつた。自分は明けて十二になつた次女と約束して來た學校鞄さへ、送つてやれなかつた。……

「次女はもう眠つてゐるだらうが、上の二人はそれではまだ勉強かな。まだ十二時前だから

な。女房もまだお相伴に起きてゐるのかな。そして俺は、斯うして醉拂つて、おせい相手に愚痴の管を繰返してゐようと云ふ光景かね。……さうさう、それからその玉子の話か……その玉子一つ食はせられないと云ふ例の女房の愚癡手紙と來たんだな……」三月の上旬ながらまだ雪のどつさり積つてゐる遠い郷里の、當がはれた八疊の部屋に炬燵でもして、薄暗い五燭の電燈の下でまだ勉強してゐるであらう可憐げな子供たちの姿が、醉つた自分の頭にも描き出されて、自分はおせいに向けてゐた眼をふと瞑つて、斯う心の中に呟いた。そして、それらを拂ひ退けるべく、二三度烈しく頭を振つた。が、すぐまた、自分はおせいに向つて叫んだ。

「これを見ろ！ どんなことが書いてあるか手前讀んで見ろ！ 因業爺の娘！ 上書きは男の子が自分の名前で自分で書いてよこしたんだが、中身は女房なんだ。俺は玉子で地震を助かつたが、子供等も玉子でも食はせないと、試驗が通らないんだぞ。なんだあの因業爺奴、まだ此間來た叔父と云ふ男だつてなんだ、金を拂ふから荷物はよこせと云つても、何も云へやしないぢやないか。あの地震早々の場合證書を書かして追出すなんか、一種の脅喝だよ。そして勝手に自分の物をさらつて行つて、内金を持たしてやつても受取一本、ドテラ一枚渡してよこさないぢやないか。立派な横領だぞ。俺の方でこそあべこべに人事相談へなり、何へなり訴へたい位だ。金には代へられない親父の遺品だつてあるんだし、あの掛蒲團の染めた蒲團皮は、あれは死んだおふくろが嫁に來た時のを、大事にして使つてゐるんだぞ。勝手な眞似をしたら、それこそ今に屹度罰が當るから、見てゐやがれ。手前は田舍者だから本郷の振袖火事なんてことも知るまいがな、今に思ひ當るから、見てゐやがれ！ しかし兎に角、もうおとなしく歸つて呉れ。俺はあんな因業爺の娘とこれ以上暮してゐることは、我慢がならないんだよ。身體も神經も、滅茶々々ぢやないか。お前のとこでは、俺に玩具にされたと口惜しがつてゐるか知れないが、自然ぢやないか。あゝして五年もの間放つて置いて、間違ひがなかつたとしたら、却つて不自然なんだ。お前にしたつて、お互ひぢやないか。だから、俺の方でも謝まるから、もう素直に歸つて呉れ。明日の朝俺の眠つてゐるうちに出て行つて呉れ。桂庵とか何とかへ引かゝらずに、眞直ぐにこの間の叔父さんのところまで歸つて呉れ。金はどんな都合してもこしらへるから、兎に角一應引取つて呉れ。もう[illegible]年ぢやないか。そしてその間に、俺は何一つ仕事をしてゐない。俺は親父が俺の子供等へと殘して行つて呉れた杉林や林檎畑まで賣拂つて、どうやら無理をしてこゝまで來たんだが、もうあとには何にも無いんだ。一二冊あつた株も、震災で、販權でも賣りたいにも、それもないんだ。後生だから歸つて呉れ。これから先き、どう出世出來ると云ふ自分でもない――それもわかつてるだらう。俺は仕事が出來ないんだ。氣が狂つちまふ。俺の子供たちのことも不憫だと思つたら、おとなしく出て行つて呉れ。俺は斯うして酒なぞ飲んでゐられる場合ぢやないんだ。この手紙を讀んで見ろ！ 讀んで見ろ！ どんなことが書いてあるか、讀んで見ろ！」自分はおせいの顏に手紙を突きつけるやうにして、斯う大聲で云つた。

「讀まなくたつて、わかつてますよう」と、鼠色に汚れたエプロンの下に兩手を差入れてぢつと聽いてゐたおせいは、斯ういつもの突かゝるやうな調子で云つた。

「讀まなくては、わからない。だが讀みたくないものを讀ませはしないから、それでは明日は歸るか？」

「わたし、歸りません！」
「歸りません、と云つたつて、俺は歸すよ。もう大抵にして、歸つて貰はうぢやないか。下宿へだつて、迷惑ぢやないか。居催促としては執念深過ぎる！」
「……あたい、それでは、いつ居催促だと、云つた！　いつ云つた！」おせいは斯う云つたが、唇を歪めて、今にも泣き出しさうな顏して、男のやうに濃い眉の下の小さな眼をいつぱいに瞠つては、自分の顏を正面に視た。
「いつ云つたつて……さうぢやないか、そのほか理由がないぢやないか。兎に角迷惑だから、出て行つて呉れ。警察でも、お前はさう云つて來たんださうぢやないか。兎に角明日の朝は、俺の寢てゐるうちに、出て行つて呉れ。出て行つて呉れさへすると、文句はないんだから」
「あたい、何と云はれたつて、出て行かない。追出されたつて、出て行かない。家へも歸らないし、どこへも出ても行かない。行くもんか！」
「惡黨！　何と云ふ剛情な奴かねえ！　如何に因業爺の娘だからつて、ほんとにわからないのかなあ。……それでは一體居催促でないとすると、何なんだ？　それをはつきり云つて貰はうぢやないか。また家へ歸つて、茶店の前に立つて、厭らしい聲して、寄つていらつしやい、お歸りなさいまし、お休みなさい、よう――てなことを云ふのも厭だから、それで當分の間何か奉公口でも見つかるまで置いて呉れと云ふのか、それともどこまでも俺のところにゐたいと云ふのか、兎に角それをはつきり云つて貰はうぢやないか。このまゝずる〳〵べつたりでは、俺は迷惑だと云ふんだ。兎に角はつきり云つて、賴むなら賴むで、はつきりして貰はうぢやないか。云つて見たらいゝぢやないか。剛情だなあ……何と云ふ惡黨かねえ。お前と云ふ女は！」
「云はないよ。誰がそんなこと云ふ奴があるか！　手前こそいゝ惡黨ぢやないか。何もかもわかつてるくせに、晝間は晝間で、夜は夜で毎晩鷄の鳴く時分までもそんなことを云ひ出しては人を虐め拔いてやがつて、誰が出て行つてやるもんか！　一生でも取附いてやるからね……惡黨！　薄情野郎奴！　忘れやがつたかよ、この惡黨野郎奴が！」齒を喰ひしばり、眼を血走らせて、蓬々とした髮の中から角でも出さうなやうな形相して、おせいも斯う叫び罵つた。
「ム……この獄道者が！　因業爺は爺として、あのおふくろの心配が、貴樣にはわからないのか。だからなぜ最初おふくろが迎ひに來て呉れた時に、素直について歸らなかつたんだ。永い間あのおふくろが、俺たちのことを庇つてゐて呉れたんぢやないか。その義理としても、俺は一日だつて貴樣を置いてやるわけには行かないんだ。たつた今のうち出て行け！　桂庵へなりどこへなり、勝手に出て行け！」
「誰が出て行くもんか。老ぼれ！　お前さんの方で出て行くがいゝ、あたいは行かないよ。なんだその、眼鏡なぞかけて、鬚なぞ生やかしたつて、ちつとも怖かないんだよ」
「何だと、老ぼれ……もう一遍云つて見ろ……毆られるな！」
「何遍だつて云つてやる。云つてやるとも！」
自分の右の拳固が、おせいの丸く紅い頰桁目がけて、二三度續けざまに飛んだ。が勢ひよくうまく當らなかつたので、今度は起ちあがつてふら〳〵する脚をあげて蹶飛ばさうとしたが、「何、この老ぼれ野郎が、人を蹶飛ばす氣か。……敗けやしないぞ！　敗けやしないぞ！」斯う云つて、彈力の塊りそのもののやうな勢ひで、兩手を突張りながら向つて來て、自分はひとたまりもなくドシンと壁際に打倒された。おせいは胸倉を取つて、上から武者振りついて來た。そして起きあがらうと踠いてゐる自分の

背中の上へ、裂け目の上の附鴨居が壁土といつしよにドシンと落ちて來たので、自分はクワツと夢中になつて、「こん畜生！ こん畜生！」と叫び續けてゐるおせいの顏や頭を處構はず打つたり蹴つたりしてゐたが、ヒーッと云ふ悲鳴を聞いて、手足を止めておせいの顏を視ると、口からタラ〳〵血が出てゐたので、自分もゾッとした。それでまた彼女は氣でも狂つたかのやうにしがみ附いて來た。

「こん畜生！ こん畜生！ お前はあたいのあれを忘れたね。あたいのあの、大事なあのことを、忘れてゐるんだね、お前さんに見せこそしなかつたが、もう形がちやんと出來てゐたんだよ。丁度セルロイドのキユーピーさん見たいに、形がちやんと出來てゐたんだよ。あたいが誰にも氣附かれないやうに、そつと裏の桃の樹の下に埋めて、命日には一度水などやつてゐたんだよ。この十九日で、丁度になるんだよ。それを貴樣は何だ！ 恍け臭つてゐやがるんかよ、忘れてゐやがるんかよ！ この畜生野郎が！ そんな、情者だから、田舍のあんないゝ子供さんたちのことだつて、見てやれないんぢやないか。手前の薄情から、あたいのあれを、呪ひ殺したも同樣ぢやないか。あたいはね、默つて他處へは嫁にも行けない身體なんだよ。白を切つて他處の赤んぼを產むことの出來ない身體なんだよ。だからこそ、手前のやうな老ぼれの傍にもゐたいと、足蹴にまでされても、出て行かないんぢやないか。それが貴樣にわからないのか、わかつてゐても、わからない風をして、今まで虐め通して來たんだね？ さあ、お前の方こそ、はつきり云つてご覽！ それがお前に云へたら！ あたいはこれからだつて、出て行くよ。出て行つてやるとも！ 身投げしたつて、構ふもんか。さあ、はつきりと云つてご覽！ それとも、あたいの口から、こんなことまで云ひ出させたくつて、斯うして來たのか？……エーン、口惜しい！ 口惜しい！」見る間に紫色に腫れあがつた脣から血をタラ〳〵疊の上に滴らし、吊るしあがつた眼から淚を溢れ落して、おせいは子供のやうに泣きじやくつた。

「あーん……」と、自分は打ちのめされた氣持で、彼女の兩手を取つた。

「さうか〳〵、もうよし〳〵、俺がわるかつた。俺はこの通り手をついて謝まるから、もう堪忍して呉れ。俺もほんとは、そこまでは深く考へてゐなかつたのだ、俺は唯卑怯で、そして意氣地無しだつたのだ。どうか許して呉れ。俺はもう追ひ出しもしないし、これからは決して虐めなんかしないから、今夜のところはどうか堪忍して呉れ。そして、俺は明日から屹度仕事にかかる。そして、何もかも、いゝ方に向けるやうに、ほんとに努めるから、これまで通り俺の面倒を見て呉れ。お前の家の方へも、俺からはつきりと交涉することにする。そして身體や頭の健康も直すつもりだから、明日は大儀でもお湯へ行き、髮も結つて呉れ。田舍の子供たちへも金を送ることにして、お前の氣の濟むやうにもするから、どうか賴む。もうよく解つたから、もう泣くのをやめて呉れ……」斯う云つた自分も、知らず〳〵、泣いてゐた。

鴨居の取れた黄色い壁の部屋を出て、午前と午後との二度、父の姿、おせいの所謂キユーピーさんのこと、鄕里の子供たちのことなどを思ひ描きながら、日課の散步を續けた。本鄕通りの銀杏の並木の芽生えはまだ見られなかつたが、空の色はすつかり春だつた。「おせいの家の、その桃と云ふのが、もう咲いてるか知ら。近いうちおせいの問題旁々出かけて行つて、見て來ようかな……」斯んなことを思つたりしては、一日々々と散步區域を擴げることに、努めた。

（大正十三年三月）

椎の若葉

六月半ば、梅雨晴れの午前の光りを浴びてゐる椎の若葉の趣を、ありがたくしみじみと眺めやつた。鎌倉行、賣る、賣り物――三題話見たやうなこの頃の生活ぶりの間に、ふと、下宿の二階の窓から、他家のお屋敷の庭の椎の木なんだが實に美しく生々した感じの、光りを求め、光りを浴び、光りに戯れてゐるやうな若葉のおもむきは、自分の身の、殊にこのごろの弱りかけ間違ひだらけの生き方と較べて何と云ふ相違だらう。人間といふものは、人間の生活といふものは、もつと美しくある道理なんだと自分は信じてゐるし、それには違ひないんだから、今更に、草木の美しさを羨むなんて、餘程自分の生活に、自分の心持に不自然な醜さがあるのだと、此の朝つく〴〵と身に沁みて考へられた。

おせいの親父と義兄さんが見えて、おせいを引張つて歸つて行つたのは、たしか五月の三十日だと思ふ。その時も、大變なんでしたよ。僕にはもと〳〵掠奪の心はないんだ。人情としての不憫さはあるつもりなんだが、おせいを何うして見たところで僕の誇りとなる筈はない。それくらゐのことは、自分も最早四十近い年だ、いくらか世の中の鹽をなめて來てゐるつもりだから、それ程間違つた考へは持つてをらないつもりである。

本能といふものの前には、ひとたまりもないのだと云はれれば、それまでのことなんだが、何うにかなりはしないものだらうか。本能が人間を間違はすものなら、また人間を救つてくれる筈だと思ふ。椎の若葉に光りあれ、我が心にも光りあらしめよ。

十二日に鎌倉へ行つて來ました。十三日は父の命日、來月の十三日は三周忌、鎌倉行のことが新聞に出たのは十三日なのです。十二日の晩たしか九時いくらの汽車で鎌倉驛を發つて來たらしいのですが、鎌倉署の部長さんだと思ふ、名刺には巡査飯田榮安氏とありますが、この方に發車まで見送られ、何うしたか往復の切符の復りをなくし、またお金もなくし、飯田さんに汽車賃を借りて乘つて來たやうな譯なんだが、本郷の下宿へ歸つたのは多分十一時過ぎになつてゐたらうと思ふ。すると、電話が掛つて來た。下宿の女中さんなどは無論寢てゐたんだが、電話に出て、讀賣からだと取次いでくれた。滅多に讀賣新聞社なんかから電話があることはないんだが、何うしたのかと思つて電話に出て見ると、僕が鎌倉のおせいの家で散々亂暴を働き、仲裁に入つた男の睾丸を蹴上げて氣絶さしたとか、云々の通信なんだがそれに間違ひはありませんか、一應お訊ねする次第です――と云つたやうな話を聞き、ひどく狼狽した譯です。斯うなつては辯解したところで仕方がないのだ。何分穩便のお取計ひを願ひたい、斯う云つて電話を切つたやうな譯でしたが、その翌朝の十三日は親父の命日の日だ。兎に角餘程親父には氣に入らないと見えて、とかく親父の日にお灸を据ゑられる。僕は何處までも小説のつもりで話してゐるのだから、いろ〳〵本當の名前を擧げては惡いのだが、僕は自己小説家だから云ひますが、讀賣新聞社が其の晩に電話を掛けてくれて、翌朝の新聞に何行かの僕の釋明を載せてくれたことは非常にありがたく思ふ。何年か前、やはり鎌倉で、僕の總領の失策から、新聞

に書かれたことがあつて弱つたことがあるが、あの時の鎌倉の署長さんは、たしか吉田さんと云つたと思ふが、僕としては精一杯お詫びをした筈であり、子供は尋常六年生だつたが、もうあと半月そこ〳〵で卒業になる場合だから、鎌倉へ置いて惡いと云ふならば、あしたにも郷里へ歸す、何んな責任でも帶びるから、いろ〳〵な書類の手續きだけは勘辨して下さいと、男泣きに泣いて淚を流してお願ひした筈だつたのだが、何うもお役所といふものは、我々の考へてゐるやうなわけにはゆかないものらしく、何もわけの分らない十三歳の男の子に、拇印を押させ――そんな子の拇印なぞが、それ程役所には大事なものか知ら。が、それは餘談だが、それで雜誌「改造」に「不良兒」といふ、それこそは事實の記錄なんですが、それを書き、その上に神奈川縣の警務部長さんか、さう云つた方に對して新聞で公開狀を書き、縣の取締方針に就いてお伺ひしたいと考へたのだつたが、それで何うしても了解を得られないのなら自分等としての立場はない。現代の生活苦ばかしを救つてくれ、またその方針で保護されることは有難くもあり、我々が安んじて君國の人民であり……それと同時に人間の本能として避けがたい親子の情、いろ〳〵な場合の人情苦に對しても、やはり親切な保護者でありたいと思ふのは、我々としての餘りに蟲の好すぎた註文だらうか。その後すぐ、吉田署長さんは、たしか縣の刑事部長か何かに榮轉なされたので、吉田さんに僕が公開狀を書く機會を逸して了つて、今未だに殘念に思つてゐる。僕もその當時は逆上せましたから、吉田署長さんの返事次第では、自分も何とか自分の身を處決したいと思つたくらゐだが、人に恨みがある筈がない。皆、皆我が身の至らぬのに違ひないのだ。

十二日朝七時いくらの汽車で鎌倉行の往復切符を買つて乘込んだ。前の晩實は、全然の責任を負つて吳れて僕とおせいの一族との中に入つてくれてる中村氏を駒込に夜遲く訪ねたのだが、奥さんだけにお目にかゝり、それとなく事情の切迫してゐることを訴へ、その翌朝なんです。お金も八九圓しか無かつたことであり、何うしようかと躊躇はしたんだが、だん〳〵と事情が迫つては來る、一應――三四日しておせいはまた下宿に逃げて來たのだ――で彼女の言ひ分も確めたいと思ひ、震災以來一度も行つたこともないんだから、一通りの樣子を見て來たいと思つて行つた譯なんだが、それが飛んでもないことになつた。小說といふものにするんだとこんな程度のものでは面白くも可笑しくもないんだが、自傳小說の一節としては僕はやはり記錄して置きたい。

名刺を何うかして無くしてしまつたのは殘念だ。着なれない洋服なんか着て行つたので、何處のポケットへ入れて無くしてしまつたのか、そんなことで復りの切符もなくしたんだ。が、たしか新潟縣の方の小學校の先生だつたと思ふ。あちらさんも洋服を着て、いくらか舊式な昔流の鞄をお持ちになつてゐたが、學術視察にお出でになられたんださうで、それで[illegible]見物のことを車中で相談をかけられ、鎌倉驛を下りて、僕は僕の名刺の裏に、八幡宮、大塔宮、引返して驛前から電車で大佛、觀音、それだけで三時間位はかゝるだらうと思ふから、江の島へ廻つては餘程急いでも夕方になるだらうと思ひますから、さういふ順序になつては如何ですかと、簡單な地圖を書き、將軍道の並木の前の所で別れ、それから、おせいの家で震災後[illegible]前に始めた飲食店をそれとなく見たいと思ひ、路次を廻つたところ、悪いことは出來ないもので、建長寺にをつた時分、酒を續けてゐてくれた內田屋の御大に會ひ、では、おせいのお袋さ

んだけに會ひたいと思つたんだ。つまりおせいは、そのバラック飲食店で姉といつしよに、ゴロツキのやうな客相手に酌婦めいたことをするのは厭だと云つて、逃げて來たやうな譯なんだ。それにまた、實は、鎌倉行は單純な鎌倉行ではなかつたんです。辻堂の中村さんをお訪ねして、本の方のことで御相談を得たいと思ひ、鎌倉驛で下りると同時に辻堂行の切符を買つた譯なんである。久し振りで、本當に震災後初めて十ケ月振りで鎌倉の驛を見、あの松、あの將軍道の櫻並木を見て、實に愉快でもあり、やはり都會の空氣とは違つた新しさ、海からの風、六年間居馴染んだ空氣、風情の懷しさに、酒を飲まなくたつて醉つたやうな氣分にならずにはゐられなかつた。何ともしやうがないことぢやないか。僕は喧嘩するつもりはないんだし、また喧嘩を吹かけられる程の弱味のない人間なんだから喧嘩がはじまる譯はないんだ。ところでね、やはりそのおせいのお袋さんや姉さんのおとめさんのやつてるバラック飲食店へ寄ることになつたんだ。仲々よく出來てるバラックだ。僕の思つてゐたより立派なバラック飲食店で、硝子の戸を開けて入ると、カフエーらしく椅子、テーブルの土間もあり、座敷には茶湯臺も備はつてをり、居間といふか茶の間といふか、そちらには長火鉢も置いてあり、淺見と朱で書いた提灯も備はつてゐるやうな譯で、いろ〱よく出來てゐると思つて感心したくらゐなんだから、亂暴なぞ働からなんかの心持はないんだ。お袋さんと話してをるうちに、おせいの家の本家の若旦那の喜平さんが見え、さうしてゐるうちに、向うを代表して中へ入つてゐてくれてゐる小池さん――「蠢くもの」――の中に出て來てゐる人事相談のお方なんだ。僕には大事な人だ。だから、お袋さんと話し、喜平さんと一二杯お酒も飲み合ひ、喜平さんの仙臺二高時代の話なぞもきいた、それからなんだ。一通りの話がすんだもんだから、小池さんに一寸外へ出て貰つて、驛前の葭簾張りの下のベンチで、よくよく懇談をした筈だ。そこですんだもんだから、僕は朝飯も食つてないんだ、前の洋食屋へ入つて御飯を食べたいから、サイダーでも飲んでおつき合ひくださらんかと云つたところ、矢張りおせいのお母さんの家の方がいゝでせうと云はれたんで、それもさうかと思ひ、ものの話がすみ、道理のわけが分りさへすれば曇りかかりのあるお互ひぢやないんだから、そこで僕もいくらか安心が出來たのです。

だが、まだ〱醉拂つてゐる時刻ではないのです。それから驛の一寸顏馴染の車屋さんの俥に乘つて建長寺の方へ出掛けたんだ。久し振りで八幡さまの横を通り、あの小袋坂を登り、越え、下つた時の氣持は僕としては悪い氣持ではなかつた。勘當を受けた男がそれとなく内々で勘當を許され、久し振りで我家の門を入るやうな氣持でもあつたんだ。矢張りあの邊の景色はいゝ。いつも變らぬ杉並木の風情も立派だ。震災で崩れなかつた山門を見たとき、これは崩れる山門ぢやない――そんなやうな氣さへされて、建長興國の思ひにとざされました。

僕が足掛六年もゐた寶珠院、震災時分命からがらで飛出した寶珠院も、本堂一つ殘つたきり、何もかも無くなつてゐる。崖の崩れ、埋れた池――何といふ侘しさかな。本堂、佛殿の前に立つて、禮拜をしたが、腹の底から瞼の熱くなる氣がした。天源院に渡邊さんを訪ねたところ、お互ひにやれ〱と云つた氣持で、自分は寺の妙高院に案内され、千住老僧のお寫眞を拜み、をばさんともお會ひして、何と云ふ嬉しい日だつたでせう、さう云つて渡邊さんのバラック妙高で大變愉快に御馳走になつてゐたところ

へ何う云つた拍子でおせいの親父が入つて來たもんでせう。おせいの親父には借金も殘つてをるし、おせいの姉のおとめさんからも金を借りて、それがみんな證書になつてをる譯なんだが、さりとて、僕としてはそれ程弱く出なければならない理由もないやうに思つてゐるんだ。いろ／＼と兩方に言ひ分もあり、事件といふものはこんがらかつて來ると、結ばれた絲をほぐすやうな根氣と誠實さがなければ駄目なんだ。彼等の言ひ分は重々尤もではあると思ふが、また我輩善藏君としても、震災以來のナンについてはやはり遺憾に思つてゐるんだ。つまりおせい君はその間に挾まつて何う身動きも出來ないやうな狀態なんぢやないかな。僕はおせいを惡い性質のをなごだとは考へてゐない。しかし何分にも周圍が惡いといふやうな氣がされて仕方がない。こんなことを云ふと、向うの一族でも憤慨する人が澤山ありさうには思ふが、僕の感じだから仕方がないんだ。

　おせいの親父さんとそこで何んなことを云ひ合つたのか、一寸僕にははつきりしたことは云へないのだが、渡邊さんが呼びに行つてくれたのかな、そんな筈がないと思ふんだが、それならばおせいのぢいさんが話を聞いて押掛けて來たのだらうと思ふ。僕には愉快な道理はない。その前に朝のうちにおせいの義兄の小池さんといふ人と會つて、一通りのことは話を決めてゐたわけなのですから。大體おせいの親父招壽軒淺見安太郎さんは、渡邊さんの千住老僧があの老年で、あの震災當時をばさんと一緒に潰され、幸にお怪我もなくて出て、僕もさうだつたんだが、どこを頼ることもできず、僕の厄介になつてをる招壽軒だからと思つて、老僧をばさんのことをお願ひしたとき招壽軒主人、またおばあさん――おせいのお母さんなぞも、それだけの義理を盡してくれたとは何うにも考へられない。さういふいろ／＼の心持で招壽軒のぢゝい、寶珠のばあさん、現住謙榮師――いろ／＼な思ひで酒を飲んだのでは面白くない。渡邊さんに對して隨分迷惑したと思つてそんなことまで考へると味氣ない氣がして來る。僕はお金も欲しくはなかつたのだが、そんないろ／＼な氣分から渡邊さんに汽車賃十圓貸してくれと云つて申込んで、たしかに一時自分の財布に入れたと思ふが、そんな法がある可きぢやないんだから矢張りお返ししたやうに思ふ。それからだ。かなり醉拂つて來たんだらうから、歸りにまたそのバラック飲食店に寄りたくなつたのか、寄るといふ馬鹿はないんだ。それ程信用してないものならば、信用しない人間のところへ寄るなんていふことは間違ひのもとであることで褒めた話ではない。そこをのんべといふやつは仕方がないもんでして、醉つたと見えるんですな。僕はどの程度の亂暴をしたか、それは知らないんだが、大體としては私は、手を以て人を打ち、人の器物を破壞し、人の體に怪我をさせるといふことは大變おかない。如何なる場合に於てもそれは好かない。そんなことを云ふと隨分笑ふ人もあるだらうけれど、我輩の手は呪はれた手なんだ。「呪はれた手」といふ小品を書いたこともあるが、我輩の娘、いまは十四になるが、七八年前僕等がもつと貧乏な時代、郷里で親父どもの世話になつてをつた時分だつたものだから義理ある母の手前、不憫ではあつたが、娘の頰ぺたを打つた。打つて親父の家を出て、往來の白日の前に立つて見て、涙を止めることが出來なかつた。打つまじきものを打つた、この手に呪ひあれ、呪はれた手であるといふ心持から「呪はれた手」といふのを書いて二度三度これを繰返してはならない、さう思つて來てゐるわけなのですが、いつも醉拂つては喧嘩ばかししてをるといふことになつてをつて、それもこれ

も皆心の至らぬ故に違ひない。

世間のことはいろ〳〵とむつかしく出來てゐるものらしく、僕達には分らないことが多い。自分を本當に信じてゐてくれるをんな、男なんて、この世間に幾人ゐるんだらうか。せい公もどれくらゐまでに僕を信じてゐてくれて、僕のところに居りたいと云つてをるのか、僕には何うにも分りかねる。をんなといふものの正體が、僕にはかなり分つてゐないらしい。それやこれやとは話がとんちんかんになるやうで、ひどく氣がひけるんだが、いろ〳〵のことから、女房子供の所へ歸つて行くほか道がないやうな狀態になつた。この下宿西城館の厚意といふものは大變なんだけれど、いつまでもその厚意を受けてゐられないほど、わたしの與太は過ぎたらしい。われ〳〵は自分の過失について何の程度までに責任を負つていゝか、人間の過失といふものは、矢張りむつかしい入組んだ事情から釀されて來てをることが多いんぢやないか。妻子緣類のこと、をんなのこと、思ひつめて行くと何うにもならないところにいつでも打突かつて行く。昔ならば坊主になつて、何にも彼にも三十八年間の罪業過失の懺悔をしたいところであるんだが、——此の間演伎座で山車の錨知盛を見たが、辨慶が出て來て知盛の首に珠數を投げかけたところ、知盛憤然として、四姓始まつて以來、討てば討ち、討たるればまた討ち返す、これが源氏平家の家憲であつた。だから坊主になれなぞとは失敬な！　といふやうな意味のことを云つて錨綱を體に卷いて海に入つたやうなところは、やはり僕は日本人の傳習感情として、何うにもしやうがないものらしい。それと僕の心持などは、較べてゐるやうなことは無論思ひはしないんだが、眞面目に考へたところで、何うしたらばいゝんだらう。すべては、人生は、生活は、かう云ふものだと思ひ諦めて、頭のよくなることを考へ、悧巧になることの工夫をし、それで氣がすめば大變いいことだとは思ふが、僕には何うにもまだそこまで悟りが出來てゐない。二三の友人は持つてをるつもりだが、僕にはやはり何よりも女房は親密であり、また女房の方でも僕のことを心配してゐてくれてるやうな氣もするんだが、それもやはり世の中のうつけた考へなのかも知れない。しかし、さう云つては女房は可哀さうだな。おさんは不憫だとかいふやうな文句を大阪の文樂座できいて何うにも淚が出て仕方がなかつたことがあるが——

ぽつねんと机の前に坐り、あれやこれやと考へて、思ひのふさぐ時、自分を慰めてくれ、思ひを引立ててくれるものは、ザラな顏見知合ひの人間よりか、窓の外の樹木——殊にこのごろの椎の木の日を浴び、光りに戲れてゐるやうな若葉ほど、自分の胸に安らかさと力を與へてくれるものはない。鎌倉行、賣る、賣り物、三題話のやうな各々の生活——土地を賣つた以上は郷里の妻子のところに歸るほかない。人間墳墓の地を忘れてはならない。椎の若葉に光りあれ、僕は何處に光りと熱とを求めてさまよふべきなんだらうか。我輩の葉は最早朽ちかけてゐるのだが、親愛なる椎の若葉よ、君の光りの幾部分かを僕に惠め。

（大正十三年六月十五日）

湖畔手記

たうとうこゝまで迯げて來たと云ふ譯だが——それは實際悲鳴を揚げながら——の氣持だつた。がさて、これから一體どうなるだらう、どうするつもりなんだらうと、旅館の二階の椅子から、陰鬱な色の湖面を眺めやつて、毎日幾度となく自問自答の溜息をついた。海を拔くこと五千八十八尺の高處、俗塵を超脱したる幽邃の境、靈泉湧出して云々——と書き出してある日光湯本温泉誌と云ふのを、所在ないまゝに繰りひろげて讀んで見ても、自分の氣持は更にその境に馴染んで來なかつた。よくもこゝまで上つて來たものではある、が今度はどうして下れるか、自分の蟇口は來る途中でもう空になつてゐた。どこに拾圓の金を頼んでやれる宛はないのである。心細さの餘り、自分はおゝ妻よ！と、郷里の妻のことを思ひ浮べ、幾度か胸の中に叫んだ。でこの手記は、大體妻へ宛てて書くつもりだが、が特に何かの理由を考へ出したと云ふ譯では無論ないのだ。昨日——九月九日のある東京新聞の[illegible]欄に、生ける屍の船長夫妻と云ふ見出しで、船舶の衝突で多數の人命を失つた責任感から、夫妻で家出して、鹿沢町の黒川と云ふ川に深夜投身自殺を計つたが、未遂で捜し出されたと云ふ記事を自分は寢床の中で讀んだが、町の人々の間にはそれが狂言自殺だなぞと云ふ非難もあると書かれてゐるが、そんな年配の夫婦が狂言自殺？——そんなことがあり得るだらうか。そしてまた、その生ける屍と云ふ文句が、自分の聯想を更に暗い方に引いて行つた。

「生ける屍か……」と、自分はふと口の中で呟いた。

白根山一帶を蔽うて湧き立つ入道雲の群れは、動くともなく、こちらを壓しるやうに寄せ來つゝある。そして湖面は死のやうに憂鬱だ。自分の胸は弱い。そして痛む。人、境、俱に不一致——なつかしき、遠い郷里の老妻よ！自分は今ほんたうに泣けさうな氣持だ。山も、湖水も、樹木も、白い雲も、薄曇の空も、さうだ、彼等は無關心過ぎる！

今日は東京で、親しい友人の著作集の出版記念會に、自分も是非出席しなければならないのだつた。それも駄目、あれも駄目。仕事の方も駄目、皆駄目なことになるのだ。斯うしてすべての友人からも棄てられ、生活からも棄てられて、結局生ける屍となるか、死せる屍となるか、どちらかなんだらうが、慘めな悲鳴を揚げつゝ迯げ廻る愚か者よ！　自分は自分のその、慘めな姿を凝視するに堪へない。

雲の山が、いつの間にか、群山を壓してしまつてゐる。湖水は暮景の色に變つてゐる。自分は少し散歩して來よう。……

白根山、雲の海原夕燒けて、妻し思へば、
胸いたむなり。

秋ぐみの、紅きを嚙めば、酸く澁く、タネあるもかなし、おせいもかなし。

湯瀧のさき、十五町ほど湖畔の道を、戰場ヶ原を一眸の下に眺められるあたりまで、道々花を摘みながら、ゆつくりと歩いた。原一面薄紫色に煙つてゐた。何と云ふ美しい眺めだらう。十八九年前の思ひ出から、自分は夕闇の迫つて來るのも忘れて、しばらく立つてゐた。湖水の暗い色は、冷たい戰慄を傳へた。

自分のかゝりの女中は、あい子と云つた。二

十だと云ふが、十七八にしか見えない、素直なやさしい娘である。彼女は自分の採つて來た花を帳場に持つて行つて、一つ〳〵紙片に名々書きつけて來て吳れた。——秋グミ、大カメノキ、ツリガネニンジン、コマナ、ニガナ、ハタザヲ、ワレモカウ、ミヤマウド、ヒヨドリバナ、アキノキリンサウ、コウゾリナ、ヤマハハコ——自分の知つてゐるのは秋グミだけだつた。

いつもの晩より遲く、二時頃まで自分は酒を飲んだ。滯在客はほとんどゐないのだ。それで女中たちは代る〴〵遊びに來て吳れた。ナカ子、ハナ子、マス子、ツル子、ハマ子、ユキ子、それとアイ子との六人居るのだが、女中と云ふよりは娘と云つた感じの、十六七から二十までのやさしい氣立てのいゝ娘たちである。早く十一月になつて、日光の町にさがる日を、彼女等はどんなにか樂しみに待つてゐるらしい。そしてまた彼女等は、自分のことを、どんな人間かと疑つて見たこともないかのやうに、無邪氣に振舞つてゐる。それが時々自分を憂鬱にさせる。……

四日の日——さうだつた、Kの喀血したのも、やはり先月の四日だつたが——自分は朝から金策に出歩いてゐた。自分は月末の下宿の拂ひを済ましてなかつた。自分は九月號の雜誌には一つも書けなかつたので、全然の無收入だつた。自分は二三の雜誌社を廻つた。が下宿に差出すべく餘りに少な過ぎる額しか、出來なかつた。それに、前の晩またもおせいと醜い摑み合ひの喧嘩をやつたので、兎に角ひどく厭な氣分の日だつた。牛込にKを訪ねたが、Kはやう〳〵床の上に起きあがれる程度で、まだ談話は遠慮しなければならなかつた。やはり一度喀血したことのある弱い細君の額は痛々しいほどやつれてゐた。自分はそこ〳〵に外へ出て、若松町から電車に乘つたが、すつかり滅入つた氣分だつた。一ケ月前の喀血の時、細君から速達郵便を受けて車で駈けつけたが、喀血がなか〳〵止まらなかつた。咳く度に混つて出た。自分も四五日の間、食がふだんのやうにたべられなかつた。三四年前自分もその經驗では、どれほど脅かされたものだつたらう。

「あの容態では、どうかなあ? よくなれるかしら。何しろたいへんなことだなあ……」と、思はずわがことのやうに、暗い溜息をついた。

神樂坂の鳥屋に遲い晝飯にはひつて、酒を飲んだ。下宿の出がけにポケットに入れて來た、玄關の狀差しにはひつてゐた鄕里の長男からの手紙と、信州の別所溫泉から出したSからの繪葉書とを、盃を舐めながら讀んで見た。長男からの手紙は、九月の新學期に間に合せて、どうして學用品の代を送つて吳れなかつたかと云ふ、詰責の文句だつた。Sは十日程前から、戀人と、信州の溫泉めぐりをやつてゐるのだつた。別所溫泉は自分も六七年前に半年程引かゝり、田舍藝者にふられた小說を書いた思ひ出の土地だつた。高原に立ちて四方の山々を眺め、雲を見る、多少の感慨無き能はず——斯う云つたやうな文句が走り書きに書かれてあつた。斯うした簡單な文句が、自分にはいろ〳〵なことを想はしめた。羨望とも、同感とも、同情とも、云ひやうのない氣持だつた。何と云ふヒタ向きな男だらう! 勇敢な酷烈な戀——自分は、氣持を引緊められるのを拒ぐことが出來なかつた。彼等の直情な戀に較べて、自分とおせいとの關係の、如何に醜く、恥づべきだか。互ひにドブ泥のなすり合ひをしてゐるやうなものなのだ。戀でもなく愛でもなく、そして彼女は姙娠三ケ月?……自分は飲んだ酒がグッとこみあげて來るやうな氣持がした。淺ましくも、呪はれた、自分等二人だ。妻よ、輕蔑と憐れみを

以て、許してほしい。さうだ、自分は今では、おせいにすら輕蔑されてゐるやうな、すつかりヤクザな人間なのだ。

「俺もどこかへ行きたい。どこかへ〳〵、行つちまひたい。そして當分歸つて來まいか知ら。……下宿へ歸つたつて、何が自分を待つてゐるんだ？　書き損ひの原稿と、あの髮を蓬々さした、狐憑きのやうな眼附して、邪な姙婦氣取りのおせいとが待つてゐると云ふ譯かな。ああ、厭だ〳〵。何も彼も厭だなあ。……行つちまへ！　行つちまへ！」と、自分は心の中に繰返して、われと勢ひづけた。

「この停滯、この墮落、自分の全身中がドブ泥見たいなものでいつぱいなんぢやないか知ら？　これが人間の生活だとは、俺自身にも考へられない。一日でも一刻でも、この頃の生活を棄てろ。二人で醸す惡臭から遠退け。でないと、貴樣は今に自分から窒息するのだ……」

　ふと十八年前、二十の年、暑中歸郷の途中、日光見物旁々湯本から金精峠を越え、鬼怒川の上流に出ようとして、途中無理をした爲め戰場ケ原にさしかゝつた時分にはもうすつかり日が暮れ、その上大雨に降られ、初めての道ではあり、原の眞中頃でどうにも歩けなくなつた時、後から牛を曳いて來た十五六の少年に助けられ、二荒山の下の木挽小屋で、一晩泊めて貰つたことのある――その戰場ケ原のことが、ふと頭に浮んで來たのだつた。「さうだ〳〵、あそこがいゝ。あの原を久しぶりで見て來よう。あの憂鬱な湖水もよかつた……」自分は小屋からツーリングを呼んで貰つて、すぐ上野驛へ驅けつけたのだつた。

　その當年の少年も、今では幾人かの父となつて、平和な日を送つてゐるのか知ら？　彼は二十四五の兄と二人で、その小屋で炊事役をし、兄の挽いた板を牛で日光の町へ運び、そしてまた兄の木挽きの弟子でもあつた。丁度その日は彼等の父が日光の町から酒の一升樽をさげてやつて來たのだが、息子が酒を飲まないので、おやぢさん一人で手酌で飲んでゐるところだつた。自分のびしよ濡れの小倉服は土間の焚火のまはりにかけ、息子の褞袍を着せられて、生干の椎茸と川魚を大鍋で煮たのを肴に、空腹に熱燗をしたゝかに御馳走になつた。自分とおやぢさんとは、三枚ほど筵を並べた板敷の上に、蒲團まで着せられて寢かされたが、息子たちは土間の焚火のまはりに横になつて、一夜を明かしたのだつた。それからざつと二十年、忘れ得ぬ懷かしい旅の思ひ出であつた。その一夜を思ふ時、自分の荒み切つた胸にも、人生と云ふ母のふところに溫められた少年の日が、還つて來る氣がする。

　自分は今度もまた、雨の中を、夕方四人の田舍婆さんと乘り合せ、ガタ馬車に搖られながらその原を通つて來たのだ。方角はたしかさうらしいが、ずつと道に近く、二棟ばかりの小屋が立つてゐた。滯在中に一度それとなく、訪ねて見よう。

　十四日。發熱八度三分。左背部肋間の神經痛堪へ難し。アスピリンを飲み終日臥床呻吟。昨夜の無理がたゝつたのだ。

「すべてが、妄想と云ふものの仕業か知らん？　絶望して見たり、希望を描いて見たり、憎惡、愛着、所有感、離脫感――何もかも皆己れと云ふ擴大鏡を透しての妄想と云ふものか知らん？　あの山の樹木、湖の水が自分等に無關心のやうに、自分も社會、人間、周圍に對して無關心な氣持になれないものか知ら。生の溺愛か、離脫か、はつきり出來ないものか知ら。はつきり出來ないところに何か知ら生活の味……？」

が斯んな山の上に來て、蒲團の中で斯んなことを考へたりする自分の阿呆さ加減に氣づいて、ひとりできまりわるくなつた。

近所で材木を挽く鋸の音、庭の筧の音、鶏や家鴨の聲、下山の準備で屋根屋、大工、經師屋などはひつてゐるので屋根上でトタンを打つける音、鑿の音、さま〴〵な音で晝間は山の宿も決して靜かではないのだが、熱のためについうつら〳〵と寂滅の境に落ちてゐた。

昨日は珍らしくカラリと晴れて、そして暖かだつたので、氣分がいくらか好かつた。それで、宿料の心配から、午後から何かしら書きはじめたいと思つた。按摩を呼びにやつた。こゝへ着いた翌日かに一度呼んだことのある、五十近い、口髭なぞ刈込んだ、やはり日光在だと云ふが、中年後に習つたのだと云ふから下手だつたが、この前の時はわりに丁寧に揉んだ。昨日は無茶だつた。「旦那の身體は一度揉んですつかりわかつちめえましたから、こゝのとこさへよく揉んで置くとね」斯んなことを云つては、左の肩胛部のあたりを滅茶苦茶にグリ〳〵やり、强く叩き、頭もほんの形式ばかりに手拭を卷いてゴシ〳〵やりながら「どうですね旦那、片手で斯う云ふ風に緊まるのですぜ」なぞと自慢らしく手拭を右左と片手で引絞つて見せ、それで「どうもお粗末さま」斯う云つてペコンと一つ頭をさげ、いくらかは視えるらしい薄氣味わるい眼の、土氣色した顏を自分に向けた。腰をさすらうとも横になれとも云はなかつた。この前の時もさうだつたが、それでやはり上下分の料金七拾錢を帳場から持つて行くのだつた。さすがに自分も毒氣を拔かれた氣持で「それでは……」と云つて、この前と同じやうに五拾錢銀貨を一つ彼の大きな掌に載せ、呼鈴を押して女中を呼んだ。自分はすつかり脅えた氣持で蒲團の中に横になつたが、亂暴な揉み方や叩き方を意固地に我慢してゐたお蔭で、折角温泉で鎭つてゐたのが、急にチク〳〵痛み出して來た。ホーッと熱が出だした。按摩の殘して行つた惡臭がいつまでも鼻から消えず、手垢で染つてゐた手拭が、眼から去らなかつた。後悔と疲勞で、自分の氣分は滅茶々々だつた。

「水神樣のお祭りで船競漕があるさうですから、いらつしやいませんか」と、晝のお膳の時、あいちやんが誘つて呉れた。

「皆さんが行くの？」

「え、うちからもみんな行きますし、よそでも大抵行きませう。それに福引きや何かもあるんですよ」

「さう。ぢやあ行つて見てもいゝな」と、自分は云つた。

どうかすると、褞袍一枚では散歩に出て肌寒い感じのするやうな天氣の續く此頃としては、申し分のない好日和だつた。二時頃、宿の褞袍に鳥打帽をかぶり、氣樂な浴客らしく手拭をさげ、赤い緒のすがつた宿の下駄を突かけて、ふらりと出かけた。わりに大きな建物ばかしだが旅館としては六軒、店屋が三軒ほど、養魚場の出張所、電燈會社の出張所、馬車屋、駐在所、二三の木挽き小屋、狹い暗い共同浴場の幾棟、温泉の神樣の小さなお宮――これだけで、この山々の行止まりの湖畔に小さな部落を造つてゐるのだつた。自分の宿からも湖畔まで一町となかつた。ドン〳〵と太鼓の音がしきりに聞えて、旅館の女中さん、おかみさん、若奥さん風の女、皆それ〴〵に盛粧を凝らし、いろ〳〵な色のパラソルをかざしなどして、ぞろぞろ湖畔へと繰り出してゐた。その間に背に「ゆ」と赤く染めた印半纏を着た男たちが忙がしげに駈け廻り、すつかりお祭り氣分だつた。湖畔の巖の上に祭壇が造られ、白木の三寶の上に大きな紅白のお供へ、一升ビンの御神酒、長

柄の銚子に三つ組の盃、白幣、御神燈、そして湖水からでも拾ひあげたらしい頃合ひの石に墨で「水神祭」と書かれたのが、立てられてあつた。渚に立てられた栂か樅の荒削りの眞新しい長い丸太に張りわたされた綱には、紙の國旗が長閑な感じに動いてゐた。その下でお宮のらしい大太鼓がドヽン／＼と若い衆の手で鳴らされた。道わきの石垣の上には賞品や福引の袋が積まれ、應援の樂隊として一つのボートに石油罐が二つ積み込まれた。一、櫓競漕。二、竿競漕。三、盲目競漕。四、ボートのリレー。――餘興は斯んな順序で進むのだつた。選手は養魚場の番人、木挽き兼船頭、旅館の主人や番頭、馬車屋――年齢にして十六七から五十六七と云ふ雜多な取組であつた。

「なか／＼始まりませんね」

「第一神主さんがゐないんで祭文の讀み手がないと云ふ騷ぎなんですよ。何しろ今年から始めたんださうだから……」と、山崩れを防ぐための、道わきの低い石垣に並んで腰かけた同じ宿の滯在の客が、自分に教へた。

宿の女中さんたち八人、小さな子守りの娘まで加はつて、皆羽織姿ながら美しい色彩を見せて、自分等のすぐ前の渚の石垣に、石入りの指輪を見せた手に美しい日傘をかざしなどして、ずらりと並んで腰かけた。宿々のさうした幾組かで、祭壇の廻りや狹い道ばたが埋められた。それが滿山の濃綠、湖水の深碧と對照して、時ならぬ一團の花叢を見せたかの感じだつた。そしてそれが更に絃歌臭を聯想せしめず、また山の荒くれた男たちに手折らるべく、美し過ぎる、山の少女たちの感じだつた。それらが、時々ブウ／＼笛を鳴らしながら中禪寺から登つて來るガタ馬車の田舍婆さんや、一晩泊りの女づれの客や、中禪寺から散歩の西洋人夫婦などの眼を見張らせた。

やがて、大工さんでもあらうか――年配の男が何やら讀みあげると、娘たちに福引袋が渡され、先づ世話役や選手たちが御神酒をいたゞいた後、そこに見物に來てゐた男すべてに、その銚子と盃で御神酒が注ぎ廻され、その上に男、女、子供の差別なく一同に二寸大の紅白の餅が配られた。

「どうも行屆いたものですなあ」と、自分等は感心した。

帯上げと香油と束髪の櫛、足袋と白粉と手鏡、帯上げとハイカラな封筒と絲巻き――大抵はさう云つた取合せのものだつた。可哀想に、十三の筒袖着た子守娘は、一番貧しい袋に當つた。

「何がほしいの？ 何かほしいものある？」自分は宿へ歸つて何か買つてやりたいと思つたが、その子は答へなかつた。

斯うして、やう／＼競漕が始められた。白根山續きの外山と云ふ山の麓まで、渚から二町餘りもあるのか知ら――その麓近くに、横に一町程の距離を置いて二つの浮標が置かれ、それを籤引きで分けた八人宛の紅白二組の競漕だつたが、先頭に乘り出した紅組の馬車屋のTさんと云ふ二十二三の屈強の若者の櫓が、浮標まで行かないうちに折れたが、そのまゝ競漕が續けられたので、赭い虎髯の逞しい湖水の番人の必死の働きもその效なく、紅組の慘敗に終つた。斯うしてプログラムの進んで行くのを、自分はかなり無關心な、疲れた氣持で眺めてゐた。太鼓の音、ブリキ罐の響き、歡呼、聲援、拍手――それらが四邊の靜寂をふるはした。竿競漕、新聞紙の袋をかぶつた盲目競漕――これがひどく見物人の腹を抱へさせた。が斯うした物音や笑ひ聲や、選手たちの必死な競漕ぶりを見てゐるうちに、いつとなしに自分の心は晴くうなだれて來た。自分は今更のやうに淺黄色

に晴れた空、山、湖、集つた人々を眺めやつて、さびしい氣持になつた。それでゐて、自分は最後のボートのリレーの終るまで居殘つた。宿の人たちも皆歸り、すつかり暗くなつて、御神燈の中の電燈がともり、そしてまだ舊曆八月十五日夜の月がのぼつてゐなかつた。

「誰か知つた人が來ないか知ら？　どうもそんな氣がするが……」そんな筈のないことを知つてゐながら、自分は中禪寺からの馬車の中の顏を、そこに腰かけた時からのぞいて視ずにゐられない氣持だつた。

酒を飲んで少し元氣づいたところで、自分は女中たちに誘はれて、褞袍を二枚かさね着して、十時過ぎに湖水に乘り出した。船頭は吉さんと云ふ、木挽きが本業の、二十四五のおとなしい若者だつた。一度鱒釣りに出かけて、知つてる仲だつた。彼は船頭としてもかなりの腕だつた。竿競漕では一着を取つた。

あい子、はま子、ます子、なか子と、自分との四人だつた。女中たちは二組に分れて出たのであつた。娘たちは聲を揃へて合唱した。湯瀧の上に船を停めて、吉さんはハモニカを吹き、自分は娘たちの合唱に耳を傾けた。空には中秋の滿月がほの白くかゝつてゐた。――わがふるさとに來て見れば、君やむかしの君ならず――とか、――晝は旅して夜は夜で踊る、末はいづこではつるやら――斯う云つた文句が耳にはひつた。

「成程な、後の唄は、これは生ける屍の中の文句だつたな……」と、自分にもふと思ひ當つた。

晝の選手たちの飲めや唄への騷ぎの音が、死水のやうに靜かにほの白く輝いてゐる湖面をわたつて來る。自分も聲を張りあげて唄ひたいと思つたが、それが出なかつた。

夜靜カニ水寒ウシテ魚喰ハズ、滿船空シク月明ヲ載セテ歸ル――自分は斯うした片言憶えの文句を口吟んだ。

何の意味？……否！　好き山の少女達よ、いつまでも淸く美しくあれよ。そして自分の藝術？……自分は思はず溜息をついた。

ゆうべも遲くまで酒を飲んだ。あい子はキチンと坐つて、厭な顏を見せずに酌をして呉れた。こゝへ來て自分は每晚一升近くの酒を飮んでゐる。それを彼女は、初め來た時と變りのない態度で相手になつてゐる。ほとんど一年ぶりで、自分はちよつとの間ながらおせいとの啀み合ひから、逃れられた譯である。ゆうべ彼女は、自分の机の上の原稿紙に、三四首の卽興歌を書いて見せた。多少文學少女なのかな？　と、自分はちよつとした興味をそゝられた。自分も童謠めいたものを書いた。たしか――白根の山の老いたる熊は、ものうく雪の、穴ごもり――斯う云つたやうなものだつた。

「湯本には昔から泥棒と云ふものは、はひつたことはないんですつて。だからどこのうちでも戶締りはしないんですの。下りる時も、夜具でも道具でもみんなこのまゝにして行くんですよ」

「夏、客の澤山の時でも？」

「さうですよ」

「僕このまゝそうつと逃げだしたら、どうだらう。日光まで行かないうちに掴まつちまふだらうな。裏山へはひつたつて、二日と凌げないからな。どうしたつて日光へ出る外ないだらう。何時間か後氣がついて、番頭さんが中禪寺まで自轉車を飛ばして、電報か……電話を日光へかける、大抵そこらで參つちまふんぢやないかな？　うまく汽車に乘り込めて東京にはひれたとしても、大したことはあるまいね。新米

の泥棒なんかも、大概そんなことだらう。何しろ逃げ出しにくい、要害のいゝところだな。どうだらうあいちやん、僕がほんとに逃げ出したら、うちで追かけさせるか知ら？」自分は柄にない幼稚な活動寫眞的興味から、斯う云つて見た。

「わたしにはわかりませんわ、そんなこと……」幾らか鼻にかゝるフヽとくゝんだやうな笑ひ聲をして、疑ふ樣子もなく、云つた。

「どうしてお仕事をなさらないの？　もう十日からになるんでせう。お仕事をなさりにいらしたんぢやないんですか？」

「そのつもりで來たんだけど、出來ないんだね」

「どうしてでせう」

「まだ土地に慣れないんだね。それに僕熱が出るんだ……」

「熱つてどんな熱なんですの？」

「あい子さんの熱……それは冗談だが、僕神經痛が持病なんだ。それにこゝも……」斯う笑ひながら云つて、褞袍の胸を指さきで叩いて見せた。

「それでは肺の方なんですの？」

「譃だよ」と、自分は打消したが、彼女は顏色を曇らせた。

斯んな樣子で、ゆうべも夜を更かしたのだつた。が今朝は四時、眞暗なうちに眼がさめて、それからはどうしても睡つかれなかつた。枕許の水指しの水を飲み干し、自分でまた洗面所に行つて、山から引いてる氷のやうに冷めたい水を酌んで來た。夜は明け離れたが、霧のやうな細雨で、灰色の空が重く湖水に垂れ、山々は濛々と煙つてゐた。自分は傘をさして、一番奥の、二三町離れた山の麓の孤屋の蓼の湯にと、出かけた。机の上には、ゆうべの歌の紙は、もう見えなかつた。そんなことも思はれて、蘆の一面に生えた沼のわきの細路を歩いて行つたが、褞袍のかさね着で、まだうす寒さを感じた。

浴槽は一坪餘りの、ほんの形ばかしの上の方を板で仕切つたものだつた。まだ誰もはひらないらしく、硫黄が一面に汚ならしく浮いてゐた。自分はしばらくたじろいだ氣持で眺めてゐたが、思ひ切つて褞袍を脫ぎ、流し場にあつた板切れで掻き廻して、少し熱目なのを我慢してはひつたが、さすがに額を洗ふ氣にはなれなかつた。ぢつと身體を動かさないやうにして湯の面を見てゐたが、一尺ほど下に何やらブハ／＼したものが動いてゐるので、二三度すり損じた上で掬ひあげて見ると、二十本ほどもあらうかと思はれる女の髮のもつれた束だつた。それが湯垢やら硫黄やらでヌラ／＼になつてゐた。自分はぞうつとして素早く流し場の溝に棄てたが、その二三本が指の間に卷きついて早速には取れなかつた。自分は左の指さきで一本々々摘まみ取らなければならなかつた。自分はそこそこに身體を拭いて外へ出たが、胸がむかついて來る氣がした。惡女の妄執——そんな氣もされた。

「どうせ若い美しい女なんか、あんな湯に行きやしないだらうから、多分田舍の婆さんかなんかの髮なんだらうが、ひよつとすると、あの婆さんたちの誰かのかも知れないな……」中禪寺から乘り合せて、馬車屋とさかんに猥談を交はして來た四人の田舍婆さんたちの顏の一つ一つまで浮んで來て、そこらに漂ふ硫黄と湯氣の惡臭い匂ひに、息を詰らした。

午後から本降りになり、西北の風が強く吹きつけた。板の雨戸を締め切つたので、部屋の中はすつかり暗くなつた。自分は蒲團の中にもぐり込んだ。何しろ一間幅の廊下が玄關から四十八間とかあると云ふ、その一番奥ではないが、

それに近い部屋だつたので、荒れしぶく風雨の音、庭の筧の音のほかには何一つ聞えて來なかつた。アスピリンを飮み、頭から蒲團をかぶつて、うつら〳〵しかけると、思ひ出したやうにガタ〳〵と來る雨戸の音に脅かされては、睡りを妨げられた。その度に、自分の神經は恐怖から慄へた。妻子のこと、おせいのことが、うつらうつらした、熱つぽい頭腦に浮んだり消えたりした。

「Sたちはどうしたらう。もう東京に歸つたか知ら。それともまだ別所に滯在してゐるのか知ら?」ふと、Sのことが、懷かしく思ひ出されたりした。

斯うした雨の日を、彼等は如何に樂しく語り合つてゐることだらうか！　どうかして自分も別所へ行つて見たい、彼等を訪ねて見たいと、自分は胸を締めつけられるやうな思ひで、彼等のことを想ひ遣つた。

暮るゝを惜むかの如くしづやかに黄昏れそめた鹽田平の全面を見おろし、あの自分にも思ひ出の緣結びに利益のあると云ふ觀音樣の境内の石の玉垣にもたれ合つて、眞直ぐに立ちのぼる淺間山の白い煙を眺めやつて、彼等はどんなことを語り合つたのであらうか？　雨の宵には、三里さきの上田の街の朧ろな灯を遠見に眺め、上り下りの電車自動車の數なぞかぞへて、興じ合つたことでもあらうか？

死よりも强いと云はれる戀、年齡や功利を棄てた戀――そこに生甲斐を見出したSは、幸福だと云つていゝ。自分はさうした戀愛の實例を、幾つか胸の中に數へて見た。そしてこの自分の惠まれない生存、粉々に打碎かれて手入れの仕樣のないやうな自分等の生活の酒壜――それは最早、土塊に過ぎないのだ。

あいちやんがお膳を運んで來た音で、ハッと目をさました。びつしより汗をかいてゐた。鄕里の家に、父がまだ生きてゐて、妻子や大勢の人が集つてゐるやうな夢を見てゐた。また齒ぎしりでもしてゐたのか、下の齒が一二本ポロポロに缺け崩れて行く夢が、はつきりと不氣味に頭に殘つた。

「何だか怖いやうな夢を見てゐた」と、盃をさし出しながら話しかけたが、

「さうですか」と、彼女は取澄した返事をした。そして二本目のお銚子から、なかちやんと云ふやはり二十の娘と代つた。

色白の、頰の豐かな、肉附きのいゝ、眼に愛嬌のある、氣のよささうな娘である。自分が若くて嫁を貰ふんだつたら、多分この娘を選ぶだらう。彼女は、家の百姓仕事が忙しくなるので、みんなよりさきに、近いうちに歸らねばならぬのだと云つて、さびしがつた。

「わたし歸つても、そりやつまらないんですよ。わたしこれで、お百姓仕事はなんでもするんですよ。田へも畑へも、それからなんだつてするのよ。こゝに居るとこんな風をしてますけど、うちへ歸るとまるで乞食見たいな風して、そりやなんだつてやりますわ」と、素朴なアクセントをつけ、しなを造つて、絕えず眼に笑ひを見せながら、彼女は云ふのだ。

「早くお嫁に行つたらいゝでせう」

「お嫁に行つたつて、やつぱしお百姓さんでせう。つまらないわ……」

「それなら、東京へでも出て、どこかいゝとこへでも奉公して見たらどう?」

「奉公したつて、やつぱしつまらないぢやないの。歸つて來ると、やつぱしお百姓さんでせう」

「ちやあ、お百姓さんで結構ぢやないの。お百姓さんは一等いゝですよ……」

自分は斯う云つたが、ふと思ひ當ることがあつた。いつか、彼女に來年もまた來るのかと訊

いた時、彼女と靜ちやんとは、來年はわからないと云つた。やつぱし秋の收穫の濟み次第、所謂お百姓さんのところへ、お嫁に行くことにきまつてゐるのに違ひない。その歡びの期待と、處女期を棄てる惜ましさから、この娘の眼は斯んなにまで美しく燃えてゐるのか——自分は斯う腹の中に思ひながら、盃持つ手を抑へて、彼女の顏を視直した。自分の結婚時代、妻のこと——それからの十五年で、結局自分等は何を報いられたか。そこには苦い生活のカスが殘されたばかしでないか。妻の髮も、かなり白くなりかけて來てゐるのに、未だに自分は一家を成してゐない。さうしては、更に本能の過失を重ねて行く。家庭生活の苦しみも樂しみも知らぬ間に、家庭生活と云ふものに、すつかり幻滅し切つてゐた自分を、自分は今更どうすることも出來ないのだ。妻は、一般の妻としては隨分慘めな妻であるに違ひないが、三人の兒女の母としての生活には相當の滿足と誇りとを持ち得る筈だ。自分には何物も無い。そして心ならずも彼女等から離れて暮してゐると云ふことが、そしてまたそれが不斷の二重三重もの心の負擔となつて、自分の生活の基礎を暗く、悲劇的なものにしてゐる。それにつけても、自分は、おせいとの關係を呪ひたい。自分の過失は過失として、戀愛もなく、啓發もない二人の關係を、これ以上自分は續けたくないのだ。これまで幾度か和解的に別れられる機會があつたのを、彼女は頑強に斥けて自分等の生活に喰ひ入り、そして皮肉にも、姙娠したと云ふ。——だが、おせいよ、自分は今、溢れ流れてゐる宿の浴槽にひとりでつかつて來て、若い娘のお酌で、明るい電燈の下で、寢床の上で、外の風雨の音を聽きながら、あたゝかい酒を飲んでゐるが、お前はあの四疊半の部屋で、今頃ひとりでどうしてゐる？　思へばお前も不憫な女だ。だが、俺に妻子と云ふものがなかつたとしたら、俺も決して、今までのやうに酷薄な態度は執れなかつたと思ふ、無論愛し合へたと思ふ。不用意だつたとしても、俺たちの關係も、動機はそんなに不純であつたとは思へない。お前は仕事の出來ない俺に、俺の不幸續きに、病氣に同情して呉れ、ほとんど獻身的に盡して呉れた。それは、俺も、忘れてはゐない。また、斯うして離れてゐると、お前の苦しい立場も、よく考へられる。親同胞を棄ててまで家出して來た以上、今更俺に妻子があるから歸れと云はれてのめ〲と歸つて行けないお前の氣持を、一概に女の我儘だとけなしつける自分の方が、よつぽど卑怯でもあり、自分勝手かも知れない。だが、俺にはSほどの勇氣が無い。それに俺の心持は今、尖がり過ぎてゐる。俺は何もかも、ほしくないのだ。妻子もほしくなければ、お前も、お前の腹の子も、ほしくないのだ。極端に云へば、俺自身をも、ほしいとは思はない。俺は最早、生活にへコ垂れはじめたらしい。書くものも、一つ〱駄目になる。俺はどこに生の希望と悦びをつなぐのだ？　が今に、だん〱と生活も好くなり、書くものも良くなる：：：？　がその今に、が曲者なんだ。どうして、信じられたものぢやないのだ。その今にに、引きずられて徒勞を重ねて行くべく俺は少し厭いたやうだ。

　だが、おせいよ、氣をゆたかに持て。人間のことは、すべてが悲劇のやうにも、また悲劇でも喜劇でも何でもないやうにも、思へば、思へるのだ。どんな大きな災難でも、不幸でも過ぎて見れば、煙のやうなものぢやないか。まあ、出來てしまつたものは仕方がないとして、腹の子に氣をつけるんだな。

　酒は樽の菊正、食べ物は思つたより豐富だ。俺は兎に角まだ當分居るつもりだ。——十八日

快晴、午前十時何十分かにかなりの強震二回あり。家の中の人みな飛び出す。――

Sは信州へ發つ二三日前の晩、久しぶりで自分の下宿に訪れて來た。ほんとに久しぶりだつた。三四月頃までは、ちよい〱往つたり來たりしてゐたのだが、其後バッタリとSは姿を見せなくなつた。自分はまた、おせいとの問題がだん〱とわるくこんがらかり、恥さらしな事件がつゞき、ほとんど昏迷狀態からして、つい Sのところをも訪ねずにゐた。自分とSとは、彼是十五年近くの親しい友人だが、遊里方面の交際は一切無いので、その方の消息は自分はまるで知らないのだ。殊に今度の――あの謹直堅固なSが、さうした熱烈眞劍な戀を何ケ月か續けて來て此頃では互ひに一切を棄ててもと云ふ切迫した狀態にまで進んでゐるのだとは、まつたく自分には想像にも及ばないことだつた。それもつい十日程前に、他の友だちに聞かされた時には、餘り意想外な話なので、つい吹き出した位だつた。

「そりや此頃のSは、一杯のコーヒー代だつて惜しいだらうよ」と、友だちは云つた。

「何しろ毎晩なんだから、大きいよ。一晩だつて缺かさないんだから、そして女の方でも一切他の座敷へは出ないと云ふんだからね、一晩二十圓づつとしたつて、そりやSだつてたいへんだらうよ。何しろお互ひにひどく惚れ合つたものさ。やつぱし家庭が、どうも面白くないらしいんだね……」と、友だちもやはり微笑を浮べながら、同情した調子で云つた。

「さうかなあ、Sにもそんなことがあるのかねえ！ ちつとも知らなかつた。實は此間ね、H社で偶然久しぶりで落ち合つたが、Sがひどく焦躁な態度で原稿料を請求してゐるのを傍で聞いてゐて、妙だなあ、金のことでは斯んな風な男ぢやないと思つてゐたが、どうかしてゐるのか知らと、僕は彼の態度に寧ろ反感を持つたのだが、さうかなあ、そんなことになつてるとは知らなかつた」と、その時のSの苛々した態度を思ひ浮べ、反感を持つた自分を濟まなく思つた。

「しかし誰しも一度は通る道だからね。そして俺たちはもう何をしたつて、大丈夫だよ。壞れつこないよ。Sだつて大丈夫うまく切り拔けるさ。そして今までのあの堅い殼を打壞せたら、彼の藝術だつてもつと自由な、暢び〱したものになるだらう。さう云ふ點では、今度のことは、彼にはいゝことだよ」

「さうだね、どうせ一度は、遲かれ早かれ誰の上にも來ることなんだらうからな……」

「さうだなあ、遲かれ早かれ……か、兎に角一度は誰の上にも來るんだね。あのSさへたうとう引つかゝつたからなあ……」と、二人は思はず顏を見合はして、ほゝ笑まずにはゐられなかつた。

「それにしてもSは幸福だよ。今が頂上と云ふところかも知れないが、兎に角お互ひに好いて好かれてゐるんだからね、Sとしては滿足な譯だらう。それに較べると、俺なぞの貧乏籤と來ちや話にならないよ」と、自分はついまた、愚癡を洩らした。

「……？」友だちはチラと自分の顏を見たが、それには答へなかつた。……

Sのことを聞いたのは、その時が初めだつたのか。

十年程の家庭生活の間に、Sは三人の子の父として、良人として、社會人としてほとんど破綻らしい影さへ見せずに來てゐた。作家生活と云ふよりも、謹直な知識階級の健實な生活ぶりを續けて來てゐた。物質的にも精神的にも用

心深い、多少感傷的らしくさへ思はれるほどに冒險味に乏しい生活ぶりだつた。彼自身から、獨善主義――と自分のことを云つてゐた位だつた。彼は十年一日の如く忠實な家庭の支持者だつた。それがつい二年程前から、家庭生活の無興味、現在の否定、人生への懷疑――さう云つた虛無的な、否定的な口吻を洩らすのを、自分は時々耳にするやうになつた。彼は滅多に自身の愚痴など云ふ性質の男ではなかつた。それだけに、彼の內に潛在して、悶えてゐるものの影が、自分の胸に強く感じられるやうな場合もあつた。

「しかしSは頑固だからなあ。俺たち友人のどれもこれも、みんな破綻だらけの生活をして來てゐるが、Sだけは大丈夫らしいな……」と、この一二年來めつきり憂鬱になり、神經質になつて來てゐる彼のことを考へながら、心の中でさう思つて來たのだつた。そして、震災前あたりから、友人の誰彼といつしよにSも遊び出したと云ふ話を耳にしても「さうかしら、ほんとか知ら？」と、自分には微笑を催さしめる程度にしか、彼の噂を聞いてゐなかつた。それが、つい四五ケ月會はずにゐた間の出來事だつたのだ。

「Sも此頃は憔悴してるよ。何しろ每晩なんださうだから、そして夜明け頃女に途中まで送られて歸るんださうだが、情死もしかねない雙方の逆上せ方ださうぢやないか。なんにしてもSと云ふ男も變つた男さねえ！」最近のSに逢つた誰もが、斯んなやうなことを云つた。

成程、さう思つて見る氣のせゐばかしでなく、その晩のSの窶れ方に、自分は一寸胸を打たれた。白皙だつた顏の艶も失せ、頰のげつそり側けたのが目立つて見えた。濃い髯の剃り跡の靑々しさにも、何やら悲しい思ひを誘はれた。Sのやうな男でさへ、戀と云ふものの前には斯んなにもなるのか！……自分は思はず腹の中で嘆息した。相手が素人でない金のかゝる女だと云ふだけに、純情一本氣のSの立場が、傷々しい氣もされた。

「此の間の晚、たうとうワイフにも、何もかも一切告白した。どうにもならない相手との苦しい義理合ひから、何もかも一切つゝまず淚を流して告白したんだが、ワイフなんてどうにも仕方がないもんだね、良人の淚を以ての告白にも同感してるのかしてないのか、默つて聽いてゐると云ふだけなんだからね。なんとか云つて吳れるべきなんだ、それをどこまでも默つて……そんな法つてないんだ。唯それからは僕が三時に歸つても四時に歸つても、何度起きてゐて、僕の脫ぎすてた着物をたゝんだりして、それから階下へおりて行く……そんなことだつてこれまでは一度だつてなかつたんだ」Sは斯んなことも云つた。

「場合に依つては、いつでも家庭を破壞してもいゝと思つてゐる。唯子供たちのことを思ふと、不憫だ。子供たちのことを思ふと、いつでも泣かされる……」

Sが眼がしらに淚を溜めてゐることが、よく自分にわかつた。自分には慰めよう言葉もなかつた。

「まあ〱、君のやうにさういつこくに考へるなよ。君の氣持はよくわかるけれど、しかしさう君のやうにいつこくに考へ過ぎてもいけないと思ふな。どうにかそのうちには解決の道が開けると思ふよ。雙方に誠實さへあれば、どんな場合に立ち到つても、救はれると思ふよ。僕とおせいとの場合のやうな、こんなのは駄目だが……」おせいは昨晩から、彼女に當がつてある階下の三疊に引込んでゐて、その場にはゐ合せなかつた。

「それで、僕はいろ〱と考へて見たんだが、

結局一番いゝ方法は、僕は今重い肺病になつて、南湖院にでも入院して、どんなに會ひたくとも會へない身體になる……まあそんな方法しか、考へられないんだ。でもないと、一晩でも會はずにゐられない……あゝ僕も肺病になりたい！　肺病の人が羨ましい」彼は斯う叫ぶやうに云つた。

　酒を飲んでゐたのだが、すぐには、彼の顔を見る勇氣がなかつた。思はず、窓外の隣り屋敷の庭園の暗い植込みに眼を遣つてゐた。そして二三度も眼をしばたゝいた。

「しかし肺病になつても、會はずに居られないとなつたら……？」自分はふと斯んなことも思つたが、口へ出すのが、傷々しい氣がされた。

　何と云ふ思ひつきだらう、この肺病嫌ひと云ふよりも寧ろ肺病恐怖患者だつたSが！　自分等の友人間では、大抵肺炎位は冒された經驗の無い人はないのだが、Sだけはその用心過ぎる位な几帳面な日常生活に依つて、それを免れて來てゐた。それだけにこの病氣に對しては、常識以上に過敏だつた。

「やつぱし彼等の間にも、人知れぬ苦勞があるのだらう。妻子がありそしてだん／＼と中年に入りかけて家庭と云ふものに興味を失ひかけた男の戀の姿と云ふものは、やつぱし傷ましいものだなあ……」

　これ以上に突き進めることも、退くことも出來ずに肺病にでも遁れたいと云ふ、Sの氣持は、自分にもわかる氣がされた。偶然だつたが、この日もKの細君から速達の手紙が來てゐた。自分の當座の小遣ひを幾らか封筒に入れて使ひを出すところだつた。

「どう、君も幾らか寄進に附いて與れない？」と、Sに云つた。

「さう、ぢやアほんの少しばかしだが……」

　Sは快く五圓出して與れた。そして九時頃そこ／＼に歸つて行つた。蒸暑い晩だつた。愛欲の業火に身を燒かれてゐるS、氷嚢を三つも四つも胸や頭に載せて、咳く度に血の混つた臭い啖汁を吐いてゐるT、そして自分とおせい――自分はしばらく盃の手を休めて、暗い庭の植込みに眼をやつてゐた。

「俺の此頃の生活は、一番いけないやうだ。誰のと較べても、一番鈍つてゐる。どうかして淨める方法がないか、燃やす方法がないだらうか？」自分は斯う思つて、深い吐息した。Sはその晩、自分にいゝ衝動を與へて行つて與れたのだ。……

　烈しい雷雨の晩で電燈つかず、古風な行燈と机の隅に立てた蠟燭の明りで、今日の午後についたKの細君からの葉書を、また讀んで見た。

「やつぱしさうかなあ……」と自分は又しても最初彼を見舞つた時の豫感が繰返されて、嘆息するほかなかつた。――最う、とても病人はだめでございます。こゝ五六日間は餘程注意して居らなければなりません。非常にうはこと、うめきをしますので、なんとも云はれぬ心細さを感じてゐます。まだ國からも參りませんので何かと心配してゐます。あなた樣もどうか早く歸つて來て下さいまし。病人も心さびしきことと思ひます……――斯う云つた走り書きの、絶望的な文句だつた。二十七日の日附だつた。

　四五日前東京から、若い友だちのA君が、下宿に溜つてゐた手紙類や、不自由してゐた剃刀や革砥、爪切り鋏、おせいからの傳言など持つてやつて來て與れて、二晩泊つて歸つて行つた。その中にも十一日の日附の細君の葉書が混つてゐたが、それには、此月中に床上げが出來

るかどうかわからないが、落付いては來たから安心してくれ――と云つた調子で、却つて自分の病氣のことを心配してくれて大事にするやうにと、書いてあつた。その時分はまだ山へ來てどこへもたよりをしてゐなかつたので、自分はやはり發熱で下宿で寢てゐるものと思つて、それで下宿へ出した葉書だつた。それを讀んで、自分は稍安心して、湖水の繪葉書に簡單な見舞の文句を書いてやつた。それが折返しの今日の絶望的な細君の葉書だつた。そして、自分としても此際直ぐにはどうしやうも無いのだと云ふ頼りない溜息のほかには、いゝ思案もないのだ。

「御病人が出來たんですか？　それではお歸りになるんでせう？」二三日前からあいちやんに代つてお酌に出てゐる、なかちやんが云つた。

「しかし歸れあしないでせう、これからひと仕事でもしないことには。……しかし困つたなあ、どうもあぶないらしいな」

「やつぱしお友だちの方なんですか？　それはその奥さんからの葉書？」

「さう。向うでも待つてるらしいんでね、早速歸らなければならないんだが、どうにもならないぢやないか。それに僕も非常に神經を傷めてゐるんでね、さうしたいろ／＼なことから離れたくて斯うして來てゐるんでね、仕事の出來ないのも、やつぱしひどい神經衰弱のせゐなんだよ」

「さうですか。そしてその御病人の方はまだ若いんですの？」

「さう若いと云ふ方ではないね、僕より二つ上だから四十か。奥さんの方はまだ二十七だから若い」

「さうですか。そして病氣は何病氣なんですの？」

「やつぱし肺病だね」斯う云つて、自分は口を噤んだ。

中禪寺行の朝の一番の馬車に間に合ふやう、蠟燭の明りで、おせいにすぐKを見舞ふやうにと、繪葉書を書いた。雷雨を衝いて、足尾から山越えして來たと云ふ五六十人程の在郷軍人の團體が、十時頃遲く着いて、夜中過ぎまで下の座敷で大騷ぎをやつてゐた。それに睡りを妨げられ、K夫妻のことが夢うつゝに斷れ／＼に思ひ出された。

A君の來た日も雨だつた。セルに夏羽織の彼は、夕方の馬車の中で寒さに慄へながら來たのだつた。もう二度厚い霜が下りて、山々は日一日と目だつて色づいて來た。東京の十一月の中頃の氣候を思はせた。彼が歸る日は珍らしく快晴だつたので、送つて行くことにし、いつしよに例の戰場ケ原の木挽小屋の跡を訪ね、原の中程の三本松の茶屋で、茶を飮んで別れて來た。一里十何町かの往復である。木挽小屋の跡は小笹やクゴ草の間にそれと分つたが、その時分の木挽の兄弟は、今は日光の町にゐないことだけは確かで、行方は分らないと云ふそこの茶屋の爺さんの話だつた。「やつぱしそれでは、あの人たちだつて、どうなつてゐることかなあ……」正午近い日を浴びて、銀色に輝く樹肌の、二抱へに餘る楢の巨木の林の美しさに見惚れたりしながらも、自分は何となく淡い幻滅感をそゝられて、淋しく口笛を吹きながら坂道を登つて來た。二三日前から禁漁となつた湖は、黄、紅白、濃淡の緑と、とり／＼に彩られた山の姿を逆さに、鮮かに映してゐた。が斯うしたこの湖の誇りも、やがてひと月の後には、氷と雪に封じられて、死の湖として永い冬を過さなければならないのだ。對岸の麓では、土工たちが、この湖を一周する道普請にかゝつてゐる。その樹を倒し、土砂を崩したり

してゐる音が、湖畔の靜かな空氣を一部分掻き濁してゐる。國立公園の豫定區域になつてゐるのだ。そして一二年の後には、自動車が通り、電車が通りして、永久にこの湖の憂鬱な感じが失はれることだらう。そしてまた、二度と自分等を快く受入れるやうな場所ではなくなることだらう。……

往復二里半餘りの、たつたそれだけのその日の散歩にも、自分は足を痛め、發熱するほど疲勞した。

「何と云ふ弱蟲！　鑄かけの利かない古鍋、地金としてだつて誰も引取り手はあるまいな……」

自分は、自嘲する。

溫泉の效能も、この冷めたい雨續きの天候には敵はないのだ。自分は幾日か喘息の發作と神經痛で終日寢床の中で呻いた。そして夕方近く起きて醉ふための酒を十一時過ぎまで飮み、三時頃、雨戸をしめない外の暗闇に脅かされでもしたかのやうに目をさます。そして自分のこと、Tのこと――さうだ、彼は、自分等「哀しき仲間」の中でも、特に慘めな方の一人であるかも知れない。

もう二三日で、一ケ月になるのだ。山も、湖も、溫泉も、娘たちも、周圍のすべてが、自分の感興から失せてしまつた。やはり彼等のすべてもまた、自分の肉親、妻子、おせい、哀しき仲間――それらと同じやうに、結局陰鬱と苦惱を吹込む存在にほかならないのだ。酒よりも強く自分を醉はしめて、妻よ！　などと呼びかけさせ、詩人らしくさへならしめたあの最初の魅力が、どこへ消えてしまつたのだ！　泡沫の如く感興は消え去る。が、酒の狂醉、苦痛の自己痲醉劑――自分はこの二つの、完全な中毒者だ。この夜と晝との交互の痲醉劑に依つて、辛うじて自分の一日々々が延ばされてゐるのに違ひない。が自分とても、自分の神經系統の傷害程度の意外に進んでゐるものだらうとは氣附いてゐない譯ではない。酒の力でやう／＼四時間足らずの睡眠。心氣朦朧、鈍頭痛、耳鳴り、そして後頭部半面の筋肉が硬直すると云ふのか浮腫むと云ふのか――顏の筋肉もさうだ――それが硬張るやうなむず痒いやうなヘンな不愉快な感じだ。それが少しでも物を考へたり書いたりした翌日には、覿面に現はれる徵候だ。自分にも無論その原因がはつきりは分らない。が兎に角このぐうたらな手記が、今や稿料に迫られ、そして一刻も早くTを見舞ひたい一心を以てしても、日に一枚半枚の平均にしか書けないとは、何と云ふ情けないことだらう。

「結局Tは肺病で命を取られるだらうが、俺は何か知ら？　この分で行つたんでは、どうしたつて狂死と云ふところかな。しかし發狂は厭だなあ。氣が狂つて、死ぬにも死ねず、何年か妻子たちに嘆きを見せる……氣ちがひだけは厭だ」寢床の中で悶掻き拔いた揚句にやつて來る、うつら／＼とした自己痲醉の狀態の中で、自分は斯う呟いた。それが逃れることの出來ない、自分の運命のやうに思はれた。

Tにしても、また同じ仲間の×にしても××にしても、自分としても、恐らくは四十と云ふ峠を越せずに、それ／＼に自分の身内に巣喰うた惡魔と無意識の中にも戰ひ續けて來て、結局は打敗かされるのだ。明るみ、奮闘、社交、圓滿な家庭――永年それらを希求しつゝ、そして誰もが同じやうに反對の方向に沈んで行き、その結果が肺病か狂氣かだ。さうした哀しき仲間を、自分は見過ぎた。それが避け難い自分等の運命なのだ。自己の意志も、他からの强制も、ある程度までしかの效力が無いのだ。自分は昨年の震災當時まで足かけ五年間、建長寺内の山の上の寺の暗い部屋で、蟄息的な生活を續けて來た。「東京へ出たまへ。明るい世界へ出たま

へ。こんなところに居ると、君の氣持は暗くなるばかしぢやないか」と、その時分ある友人が自分に忠告的に云つて呉れた。「駄目なんだよ。それが出來ないんだよ。自分の内のいろ〳〵なものが傷つき、弱つてしまつてゐるんだ。それで、さうした明るい激しい世界には迚も堪へられないんだよ。神經も身體も普通の人間に、こんなところに一ケ月も居れと云つたつて、辛抱出來ないと同じ譯さ」と、自分も答へたことがあつた。人間誰しも好んで暗い道を選びたくはないのだが、身内の魔物の不斷の脅威に、自分等はいつの間にか征服されてゐるのだ。……

さびしき妻より――東京から廻されて來た妻の手紙の文句の後に、斯う書いてあるのを讀むと、今更のやうに自分もさびしく、うら悲しい氣持になる。この手記は最初から妻にあてて、おせいとのいきさつの一切を謝罪的な氣持で書くつもりだつたのが、いつのか間に、最初の心持から反れたヘンな小說めいたものになつてゐたと云ふことも、いろ〳〵な意味から自分をさびしく思はせる。が兎に角自分は、一日も早くこれを金にして、山を下らなければならないのだ。七月以來妻と自分との間が一層疎遠になつてゐる。亡父の三周忌におせいを伴れて行つて會はせたのが、失敗だつたのだ。今度はこの手記で、妻の諒解を求めるつもりだつたのが、また失敗である。やはり、自然の時を待つほかないのだ。（さびしき夫より）……

「欺く」と云ふ題で、今月號のある婦人雜誌に發表した三十枚程の短篇が、たうとうKの絶筆となつた。十月三日は珍らしく快晴だつたので、自分は午後から湖一周の新道をひとまはりして疲れて歸つて來ると、机の上にKの細君からの電報が載つてゐた。（ゴゼン三ジニシス）萬事終れりである。午前六時五十分の電報だつた。臨終の時間から考へても、恐らく細君一人のほかに誰もゐなかつたに違ひない。

「それにしても、もう一欺き二欺きしても、生き延びれなかつたのかなあ……」唯一の飲み相棒でもあつた彼に、自分は心の中で盃をささげた。

（キムラサンシス、セトシバンジセワス、アスクニヨリヲチクルヨシ、ヘン）午後五時におせいが打つた電報は、翌日の十時頃配達になつた。（カヘレヌ　バンジハカラヘ）自分は斯う返電を打つほかなかつた。

「欺く」と云ふのは、二三年前Kが窮乏の餘り、萬事盡きて、郷里の他家へ嫁いでゐる唯一人の親身の姉へ、急病來て呉れと云ふ僞電を打ち、本家姉が丁度流産したばかしの時だつたので、本家に當る叔父が、遙々と備後忠海町から急行でやつて來たのを夫婦でのこ〳〵東京驛に出迎へた――その時のことを、正直に、素直に書いたものだつた。「わしはもう十中八九駄目と思うて、これ、この通りぢや」と叔父はカバンの中から黄平の紋附、羽織、袴なぞ取出して見せた――と云つたやうな文句もあつた。その叔父が今度もまた出て來る譯なのだが、今となつては、その「欺く」一篇は、叔父への謝罪文となつたやうなものだ。

「欺く」を自分は原稿の時に讀まされたが、それで見ても彼が如何に永年の間ひそかに病苦と戰ひ續けて來たかが、わかるのだ。そしてまた今更のやうに、永年の間彼の努力の足りないことを責めて來た自分の鈍感を、恥かしく思ふ。

編輯者の好意から「欺く」はすぐに金に替へられたが、婦人雜誌に載せるものとしては餘りにヂミ過ぎると云ふので、もつと華かなものと云ふ先方の註文から、それの代りを執筆中、

丁度一ヶ月前九月四日午後二時に喀血したのだつた。その一週間前の二十八日の日に、彼は下宿に訪ねて來て、二人で遲くまで飲み合つた。

「しつかりしろよ。細君が氣の毒ぢやないか。……先方の好意に對しても、欺く・・はまた他に處分できるから、その代りを早く書いてやれよ。締切が五日頃なんだらう。……」

「やるよ。大いにやるとも！　俺もな、此頃はほんとに一生懸命にやつてるんだよ。君の云ふやうなものでもないんだぜ。嘘だと思ふならワイフに訊いて見ろ！」彼はいつになく、昂然として、睨みつけるやうにして云つた。その晩が、彼との飲み納めだつたのだ。

新聞の廣告で、「欺く」が十月號で發表されることを知つた。そして彼の絶筆が、創作欄に入れられず、趣味欄と云ふところに入れられてあつたと云ふことは、不遇作家としてのKの一生を、何よりも有力に語つてゐるものだ。そしてこの、「欺く」の作者ほど、自をも他をも欺き得なかつた人を、自分はほとんど知らない。

（キムラサン　アスヨル八ジタツ）八日午後おせいが打つた電報である。自分はその時刻に、湖畔の暗い道を十二三町、湖水の落ち口、湯瀧の上に新道でかけられた巖丈な荒削りの橋の上に立つた。宿の階下では二百人近い學生の團體客が、食後の茶話會とかで大騷ぎをしてゐた。自分は獨りで酒を飲んでゐるに堪へない氣持だつた。高さ四十五丈、幅數丈と云ふ瀧の音は、橋の上に立つた自分の脚をわなゝかせた。後ろは暗い死のやうな湖面だつた。自分は手を合はして默禱した。「Kよ許せ！……」細君と叔父に護られ、二三の友人に車窓まで見送られて、一壺の骨となつて、今や永久に彼には辛かりし都會を去るのだ。そして彼は最早「悲鳴を揚ぐる」の人ではないのだ。悲鳴を揚げつゝ登つて來て、十五年來の親友の死すら見送りに行けない自分も、決して幸福ではないのだ。彼は有名無名――そんなことを死際まで氣にしてゐるやうな男ではなかつた。喀血後最初に見舞つた時に、自分には彼の覺悟がわかつた氣がした。無名にして陋巷に窮死する――それもこれも仕方がないのだ。是モ好シ山堂無月ノ夜、一天ノ星斗闌干ニ墮ツ――さうだ、Kよ！　自分は心から君の靈の光榮を信ずる。

（大正十三年十月）

バカスカシ

午後のまる半日を、自分等は金精峠道の密林の間や湯の湖畔を歩き廻つて、アテジに似た、雀位の大きさの小鳥を一羽、打ちとめたきりだつた。湖畔近くの熊笹の中の、一本聳え立つた樺の老木の下枝に止まつてゐたのを、爺さんが撃つたのだつた。頭を射抜かれて、ちぎれるやうになつて、血が流れてゐた。自分はポケットから鼻紙を出し、鳥をつゝんで、爺さんの背負つてる編んだ嚢のやうなものの中へ、入れてやつた。

十一月一日だつたが、三四日前に大吹雪があつて、路傍の熊笹の根方にまだ雪が殘つてゐたりして、底冷えの陽氣ながら、好く晴れた風の無い日だつた。自分は宿で早い晝飯をたべて、鐵砲を擔いでやつて來た爺さんと、自分も靴にゲートルを着けて、ポケットにキャラメルを入れたりして、出て來たのだつた。爺さんと云つてもまだ五十二三の、山で鍛へあげられた、小柄な引緊つた體格の、元氣な爺さんだつた。酒好きで、剽輕で、皮肉で、おもしろい爺さんだつた。自分は宿で獨りの晩話に退屈しては、よく爺さんの店に押しかけて行つて、大きな爐に當りながら、爺さんと飲み合つて、山の話、熊の話、樹や草のことを爺さんに聽いた。帝大の理科や藥學科の學生たちが植物採集に來ると、この爺さんがいつも案内役だつた。そしていつか學生たちから「山靴教授」と云ふ綽名を貰つてゐたほどの、中禪寺から湯本へかけての山や、草木の通人だつた。自分は金精峠へもこの爺さんの案内で登つた。「明日は檜にならうてんで、そこでアスナラウ……」斯う云つた調子で、翌檜の巨木を指しては、檜との見分けを教へて呉れたりした。

昔の火繩銃を新式の裝置に直したのだと云ふ重い鐵砲を擔いで、ゴムの深靴をはいて、爺さんは先きに立つてのそり〳〵歩いた。遠くの方でカケスの聲がしたり、藪の繁の木に鶸の姿が見えたりしたが、そこは脊丈けほどの一面の熊笹で近寄れなかつたりして、自分の撃つて見る機會がなか〳〵來なかつた。笹藪の中で何かしらガサ〳〵音する度に爺さんは仔細らしく首をかしげたりしたが、獸の飛び出して來る氣配も、つひぞ感じられなかつた。

タマをこめて貰つて、今度は自分で先きに立つて、白根山麓の湖畔の道を半里ほど歩いて、湯瀧の上にまで出たが、湖水の縁をもぐつたり翔けたりしてゐる川鳥のほかには、鳥らしい鳥も見られなかつた。

「隨分重い鐵砲ですね。反動も強さうだな。普通のにして、一體何番位に當るの？」自分は肩や腕が痛くなつて、くたぶれて、鐵砲を爺さんに渡した。

「まあ二十二番と云ふんですがね、そりや反動たらちつともありませんや。昔の火繩銃を直した奴ですからな、重いことは重いが、反動はそりや少ないでがすよ。子供にだつて大丈夫でさあ……」

「さうかしら？……」と云つたが、何しろ爺さんは日清戰爭にも出てゐるんださうだから、と、ケロリとした顏して云ふだけに、爺さんの話は疑はしい氣がされた。

よく鴨が下りる場所があると云ふので、自分はまた爺さんについて瀧壺にくだり、幅三間程の流れに沿うて熊笹の中をガサ〳〵歩いた。鴨は

はゐなかつたが、水の澱んだ熊笹の根株のあたりなどに、例の素早い川鳥がチヽと啼きながら水をもぐつたり翔けたりしてゐる。

「旦那々々……ゐますよ〱……そつと〱―」

爺さんは聲をひそめて、自分を手招ぎする。が鐵砲を渡されて、自分が照準を定めようと身構へしてその方を視ると、もう鳥の姿が見えないのだ。七八町の間を往つたり來たりして、幾度もそんなことを繰返したが、いつも同じだつた。

「今のは惜しかつたですな。あれはたしかに撃てたんだつたがなあ……」と、爺さんは如何にも殘念さうに呟く。

「ぢや今度見つかつたら、あなた撃つて下さいよ。僕はいゝから……。僕にはよく見えないんだもの……」

すつかり黄昏れかけたのに、爺さんはやはり歸らうと云はず、旦那そつと〱―を繰返しては、自分を引張り廻した。自分は十日程前に酒の飲み過ぎから血を吐いたりしてゐるので、内心運動の過激を惧れ、また夕方の冷氣も身に沁みて來てゐるのだが、何となく意固地な氣持から、默つてついて廻つた。「爺さん、やつてゐるな！」と、自分もだん〱氣づいて、腹の中で苦笑を感じてゐたのだつた。川鳥は禁獵の鳥なので、爺さんは撃つ氣がないのだが、自分の腕を馬鹿にして、どうせ撃てつこはないと安心し切つて、旦那々々を繰返してゐるのだつた。

「禁獵の鳥なんでせう？」

「さうですけど、構ひませんとも……」

「たべてうまいかしら？」

「うまいと云ふわけには行きませんがね……」

「兎に角歸らうぢやありませんか。こんなに暗くなつちや、ほかの小鳥だつてみんなゐなくなりますよ。僕は何でもいゝから、一發だけ撃つて見たいんだから……」

爺さんを促して、また湖畔の路を歸つて來る時分には、すつかり暗くなつてゐた。無論小鳥一羽途中でも見かけなかつた。

「僕湖水へ一發撃つて見たいな」と、湖水の中頃にさしかゝつた時に、自分は云ひ出した。

「撃つてごらんなさい」と、爺さんはタマをこめて、自分に渡した。

「大丈夫かな？　強く來ないかな？」

「大丈夫でがすとも。やつてごらんなされ…」

最初のタマが不發だつたので、自分は一層氣味わるくなつたが、思ひ切つて、湖水の上の闇に向つて、引金をひいた。スヽドーンと云ふ音と共に、眼の前がパッと赤く燃え立つた。それが、白根、金精の岩崖に反響して、グヮーンと強く長く音をひいた。何とも云へない痛快な感じだつた。

「成程、いゝもんですなあ！……」と、自分は半日の溜飲のさがつた氣持で、爺さんに云つた。

「どうです、反動なんかちつともないでがせうが？……」

「さうなんだらうね……」と自分は曖昧に云つたが、爺さん、十二番を二十二番と云ひくるめてゐるのだと、自分はまた腹の中で輕く苦笑された。

「たつたそれ一つかね？　まだ鶫だとよかつたなあ……」暗い湖畔の路を歸つて來て、爺さんの店に寄ると、嚢から出した小鳥を見て、婆さんも呆れたやうな顏をして云つた。

「その代り大きにヒマを取つて來やした」爺さんは斯う云つて、軒さきで器用に毛をむしり、腹を割いた。

「二つに切つて、獵祝ひに一切れづつでも食はう」と、自分は云つた。

串にさして、大きな爐で、附焼きにされた。店の罎詰めの酒を婆さんに燗をして貰つて、爺

さんと自分とは爐邊で飲み始めた。口に入れるのも何となく氣がさすやうなカラ〳〵に燒けたその小さな半分を、自分は思ひ切つて口に入れたが、一寸ほろ苦いやうな味だつた。「うまい、うまい！」と自分は顏を顰めて大袈裟に云つたが、婆さんの言葉ではないが、せめて鶫位の小鳥だつたらなあ！　とひどく呆氣ない氣持になつて、

「一體これは何と云ふ名の鳥？」と、ふと訊いて見ると、

「バカスカシ……」と、爺さんはニヤリと白い齒を見せて、言下に答へた。

「バカスカシか……ム……」と自分も繰返したが、またも一本參らされた氣がして、苦笑しながら首を振つた。

「それではまた忘れないうちに、ひとつ書き留めて置かうかな」自分はポケットから手帖を出して、テレた氣持を取繕ふ氣持も手傳つて、十一月一日、バカスカシ――と鉛筆で書きつけた。

「やつぱし、何と云つても爺さんの敎授振りは鮮かなものだ」と、自分はいゝ加減醉つて外に出て、兎に角半日の遊びに滿足して、宿に歸つた。

半日の手間賃二圓、それから酒代――一羽のバカスカシも、なか〳〵馬鹿に出來ないものになつてゐた。

がこれだけだと、別にバカスカシに文句のない譯なんだが、自分はその翌々日山をくだることになり、その朝、大した額ではないが、東京から日光局に振出された電報爲替券の紛失してゐることに氣がついて、ひどく狼狽したのだつた。いつも中禪寺局宛に來るのだが、日光局宛になつてゐたので、半月程もほつたらかしてあつたのだつた。湯瀧の下で川烏を追ひ廻した時、自分は蟇口に入れてるニッケルの時計を、ちよい〳〵出して見たのだが、その時に紛失したとしか、考へられないのだつた。拾はれたとしても電報爲替のことではあり、それに日が經つてゐないので、日光局で手續きをすれば大丈夫とは思つたが、何しろ發つ朝だつたので、狼狽もされ、氣持がわるくてならなかつた。駐在所は三四日前に引拂つてしまつたし、念のため番頭を爺さんのところへも訊きにやつたが、やはり見つからなかつた。そんなことで、自分は爺さんの店で買つたシラクチと云ふ蔦の土瓶敷きや、白樺の栞や、石楠花やシラクチのステッキ、丁度手さげ提灯ほどの大きさの木の葉蜂とか云ふ蜂の巣――そんなやうなものをしこたま抱へこんで、宿から馬車に乘り、爺さんの店の前をも通つたが、婆さんだけ店先きに出て來て、別れの挨拶を交はした。爺さんも恐らく、何となくバカスカされた、不快な氣持で、遠退く馬車の音を爐邊で聞いてゐることかと思ふと、氣の毒な氣もされた。宿の人たちにしても、隨分氣持のわるいことに違ひなかつた。

「ひどく祟られたものだなあ……」と、ガタリガタリ湖畔の路を搖られながら、早く斯うした氣持から遁れたく、顏馴染みの馬車屋に鞭を當てさせた。……

この冬こそはと、まる二月の溫泉入りの效能を賴りにして來た甲斐もなく、歸る早々、また持病の喘息や神經痛に惱まされた。例年のことと諦めてはゐるやうなものの、全神經が萎けて、仕事の氣分がちつとも動かないには、弱つて了ふ。氣分のいゝ日の午後、ひとりで本鄕通りを散歩して、思はず、苦笑を洩らしたりすることがある。枯淡とか、俳味とか――さう云つた程度を通り越した、萎縮した、貧弱な自分の生活力に、自分ながら幾らか呆れ氣味の微笑さへ催されるのだつた。友人たちの誰も彼もが、新年の雜誌原稿五十枚のもの幾つ書いたと

か「二百枚近いものを書きあげたとか云ふ噂が耳に入るにつけても、ヤケクソな業腹な氣持になり、晩酌が利き過ぎると、山から持ち歸つたゲートルを着け、貧しい蟇口を空にしては、そこら中を當もなくタクシーで乘り廻した。

「タクシーにゲートルはをかしいね……」と、ある若い友人がひやかした。

「俺の方はまだ震災氣分なんだよ」と、自分も敗けずに云ひ返した。

H社のY君が、夏前からの約束だからと云ふので、今度こそはと、毎日のやうに原稿の催促に來た。Y君とは今度は初めてだつたので、彼は自分のことを先生々々と云つた。十一月いつぱいが十二月五日になり、十日と延びても、自分には何一つ書くものが浮かんで來なかつた。ずつと藥を飲み續けて、大方萬年床にもぐり込んで日を送つてゐた。

「先生、今日こそはどうしても書き出していただきませんと……」と、Y君は根氣よくニコ〳〵した顏して毎日やつて來た。

十四日になつて、やうやく題だけ、バカスカシ――と、原稿紙に書きつけた。萬年床の中に机を入れて、蒲團につゝまれて、ぼんやりした頭腦でペンを執らうとして向つて見るのだが、それが、最初十枚位には書けるだらうと思はれたのが、向つて見ると、精々三四枚か、二枚か、しまひには一枚にもならないやうに思はれて來て、どうにも筆がつけられなかつた。山で口に入れた時のホロ苦いやうな味までが、苦笑といつしよに浮んで來て、自分の氣持をさびしくした。

「せめて鶫位だとなあ!……」と、自分は持ちかけたペンを措いて、机を押出しては、蒲團の中にもぐり込むのだつた。

この節季に、二枚三枚のものを稼いで見たところで、どうなるものでもない――自分は斯うそ々に諦め出したのだが、Y君は相變らず、

「先生にも是非二枚でも三枚でもはひつていただかないと……」斯う云つて、ニコ〳〵した顏して根氣よく續けて來た。そして、明日の夕方まで、明日の夕方までと、一日送りに送つて來たのだつたが、十八日の朝何氣なく新聞を見ると、Y君の方の雜誌の執筆者の豫告が出てゐるのだつた。前の日の夕方もY君が見えたのだが、やはり例の調子で、明日の夕方までと云ふ約束だつたのだつた。

「ではまた一杯、バカスカされたと云ふわけかな……」と、蒲團の中で、またもホロ苦いやうな失望感から、斯う呟いた。

(大正十三年十二月)

海岸にて

「これアお珍らしいお客さんがお見えになつたと、旦那やお祖母さんがたいへん喜んでゐますよ。……一體旦那さんのお出でになつたのは、いつ頃のことなんですか、もうだいぶ舊いことなんでせう？……」風呂場で、若い番頭が背中を流して呉れながら、ニコ〳〵した顔して斯う自分に話しかけた。

「さうかねえ？……よく僕だと云ふことがわかりましたねえ。何しろ十七八年も前のことなんだから。尤も四月から十月頃まで居るにはゐたんだけど、それにしてもよくわかつたもんですなあ……」自分も、多少きまりもわるかつたが、やはり、懐かしいホッとした溫かい氣持にさせられた。

「そりやもう商賣のことですから、……私が宿帳を下げて行きますとね、すぐ旦那さんのことをさう云ひましてね、それに内の旦那も×雜誌なんか取つて讀んでるもんですからね、ふだんから旦那さんのお噂が出て、私なんかも聞いてゐましたですよ。お祖母さんも明日御挨拶にあがりたいと云つてました」

「お祖母さんと云ふと？……」

「先の大旦那の……」

「大旦那は亡くなりました？」

「え、もう亡くなつて七八年になりますでせう」

番頭と、斯んなやうな話をしながら、ゆつくりと風呂を出て、久しぶりで荒い波の音に聽き入りながら、女中のお酌で膳に向つた。

自分は一週間程前に世田ケ谷奧の家を出て、數年前に行つたことのある信州の溫泉場を二三ケ所廻つて見たのだが、冬の信州の溫泉場の氣分は、自分の弱い神經には荒過ぎる氣がされ、迚も落着いて物なぞ書けさうにもないところから、久しぶりで雪らしい雪を見たことだけに滿足して、倉皇として引返したのだが、途中から、ふとこの大洗のK旅館のことを思ひ出して、反れて來たと云ふ譯だつた。財布は空になりかけてゐるし、ボロ外套のポケットに原稿紙の風呂敷包み一つ入れたきりの見すぼらしい自分の風體を顧みては、躊躇はされたのだが、しかし十七八年も前のことだから自分の顔を見たつてわかりはしないだらう——斯うも思はれたので、思ひ切つてやつて來る氣になつたのだつた。そして、水戸に七時頃着いて、暗い三里の路を、三四人の合客と驛前から乘合自動車に搖られて來たのだつた。他の客は途中の村や磯濱の町で降りてしまつて、大洗まで來たのは自分ひとりだつたが、K旅館は、多少の改築はされてゐるのだらうがほとんど昔のまゝの構へで、入口に植つた鶴木などにも見覺えのある前庭を通つて、玄關から二階の部屋へさつきの番頭に案内されたのだつたが、成程、彼が宿帳をさげてから風呂場に案内しに入つて來た時の彼の表情は、急に打解けた和らいだ色に變つてゐた。

「やつぱし來てよかつた。こゝだと自分にも落着いて仕事の出來るやうな氣持になれさうだ」

信州では別所溫泉行の寒い電車の中で震へあがつたり、歸りには、夜の九時に上田を出る汽車が四時間も遲着して、ひどく弱らされた擧句だけに、一層自分にはホッとした氣持がされたのだつた。御幣擔ぎの自分は、途中ガタ揺れに揺れる自動車の中で「海、海！……今の自分の氣

持を救つて吳れるものは、やつぱし海だつたか――そんなことがふと浮んで、そしてこの海を東へどこまでも／＼行つてしまひたいと云ふ空想を起したりして、一寸子供らしい勇み立つた氣持になつたやうなことまでも、酒を飲みながら、幸先きが好かつたかのやうに考へ出されたりした。

　自分はいつものやうに泥醉せず、早目に床に就いたが、ぐつすり睡つて、九時過ぎ波の音に目をさまされた。二月下旬の風のない晴れた朝の空、凪いだ蒼い海、沖を通る發動汽船の音、それから時々チリ／＼と鈴でも振るやうな啼き音を立てて、その度に渚の小砂利の上に、さながら風に吹かれた木の葉のやうに舞ひ下りたり舞ひあがつたりしてゐる千鳥の群れ――自分は日の射し入る障子を明け放して、蒲團の上に腹這ひになつて煙草を吹かしながら、幾ケ月にも、恐らく幾年にもなかつた好い朝の氣持を、ゆつくりと味つた。朝飯の濟んだところへお婆さんが遊びに來て、小一時間も昔の思ひ出話をし合つた。七十近い小柄な上品な婆さんで、髮を染めて、如何にも健かさうな澤々しい顏色をしてゐた。「Ｋさんはほんとにお若いですよ。内の倅なんか、それはもう白髮で眞白なんですよ。年は二つか三つ位しか旦那とは違はないんでせうに……」婆さんは斯う、柔和な瞳を自分の顏に向けながら、云つたりした。

「そんなことあるものですか。この通り髭なんかも半分は白毛ですよ。何しろもう四十ですからなあ！　早いもんですなあ！……」

「さうですか。Ｋさんは丁度におなりでしたか。それでは宅の倅より三つ少ない……」

　お婆さんの連れ合ひだつた人は、太つた大きな體格の人だつたが、今の主人は母親肖の、痩せた小さな人だつた。彼はこの日、犬をつれて磯傳ひに鴨打ちに出かけたが、晩にその獲物の御馳走と銚子を運ばせて、自分の部屋に遊びに來て吳れたが、成程お婆さんの話のやうに、多分の白毛混りの髮を綺麗に分け、こまかい縞物に角帶姿の樣子が、如何にも古い旅館の主人らしい人柄を見せてゐた。その時分に彼はもう一人の娘の父だつたが、ひどく寡默な、精悍らしい、宿屋の若主人と云つた樣子のちつともしなかつた人で、自分は酒の上だつたが、女中頭をしてゐたおきんと云ふ自分より年上の女の顏を、眼の縁が紫色に腫れあがるほど激しく拳固で打つた時に、彼は自分の部屋に飛び込んで來て、取組合ひの喧嘩をしたことがあるが、今ではそんな風な氣配の少しも見えない、穩かな――同業者中での顏利きだと云ふが――すつかり落着いた柔かい感じだつた。話をしてゐるうちに、さう云つた記憶までが、幾らか恥かしいやうな懷かしい氣持で喚び起された。その年に自分も、二十三で、父になつたのだつた。五月下旬の暗い波の音の荒い夜、自分は今と同じ部屋で、男の子の產まれたと云ふ鄕里からの電報を受取つたのだつた。それからの二十年近い惡生活の連續――

「先月でしたか雜誌へお出しになつた、お子さんのことを書いた小說も拜見しましたですが、お子さんはご丈夫ですか。やはり世田ケ谷の方に？……」

「え、どうも仕樣がないもんですからね、いつしよに居ることは居るんですけど、何しろ弱つたですなあ。自分も小說なんかに書くからいけないんですけど、どこへ云つてもそんなことを云はれるんで、實際きまりがわるくて仕樣がないですよ。信州の方でも云はれましてね、實は少しヘコ垂れてこちらへやつて來たやうな譯ですよ」

「そんなことはありやせんとも！　有勝ちのことぢやありやせんか……」ありやせんとも！

……酒の醉ひのいけよい彼は、斯う茨城訛りを強くひゞかせて、窘めるやうに云つたりした。そして、夜中の、丑滿時分の巖を洗ふ波の音を聴きながら、自分は床に就いたのだつた。

毎日のやうに自分は、すぐ前の大洗神社の境内に登つたり、小一里程、渚傳ひに那珂川の河口近くまで歩いたり、日光を浴びながら紅い小石や貝など拾ひ集めたりして、ホーッとした氣持で四五日を過した。日に幾度となく獵の舟が、渚近くでポン／＼鐵砲の音をさせたり、傷ついて水煙を立てながら水面をのたうち廻つてゐる獲物を、追かけ廻してゐるのなど見られた。宿の主人公もまた毎日のやうに、早曉から犬をつれて御料林の松山の方に出かけて行つたり、渚傳ひに、群がり續いてゐる巖と巖の間に餌ひに來てゐる鴨を、覘ひに行つた。夏場だけの土地柄で、滯在客と云つては母屋の方の二階に、呼吸器でもわるくしてゐるらしい商家の内儀さん風の年增女一人きりで、女中は二人ゐても、泊り客は大抵二人か三人だつたので、自分の居る離れの二階の四つの部屋は、自分のほかに、客は入れられなかつた。

自分は久しぶりで幾らか落着いた素直な氣持になれて、午後の二三時間を机に向つて、四年前に死んだ父の想ひ出の小品を、二枚三枚と書き始めた。そして、今更のやうに、父の死後、頓に崩れ出した、汚辱そのもののやうな自分の生活のことが省みられた。生活の希望を失ふと云ふことの怖ろしさ、そしてまた、藝術に活きる？……それが如何に自分のやうに身體も意志も弱い人間に取つて困難なことであるかと云ふことが、今更のやうに痛嘆された。世田ケ谷奥の六疊四疊半二室きりの裏長屋に殘して來た同棲してゐる女、それに出來た娘、一月程前に郷里から出て來た病弱な不幸な姪――その息詰まるやうな薄暗い部屋で、自分は四ケ月程も持病の神經痛で寢通したのだつた。二三日でもいゝ、旅にでも出るほか、まつたく救はれない憂鬱な自分の氣分だつた。……

「おきんさんとこへ遊びに行きやせう。あなたが來てると云ふことを話したら、是非つれて來て呉んなんせうと、云つてゐやしたから……」

今では宿の抱への俥屋の方は息子に讓つて、近所に夏場は貸間も出來るほどの家も造つて、店に貝細工など土產物を並べて、すつかり樂隱居を極め込んでゐる彌吉爺さんは、ちよい／＼自分の部屋に遊びに來ては、斯う云つて誘ひかけたが、自分はいつも煮え切らない返辭をした。「それよりも按摩でも招んで、一杯やらう――」折紙附きの佳人だと云ふ按摩を招んで、爺さんと酒を飲みながら聴いたりした。おきんはその後磯町の大工か何かに緣付いたのだが、今では獨り身で、漁師相手の居酒屋をやつてゐると云ふことだつた。

日のキラ／＼と晴れた朝、思ひがけなく大きな雪片が、さあと一しきり、吹き下ろされたりした。さうした中を、何處の千鳥の群れか、鈴のやうな啼き音をして、野分に吹かれた落葉のやうに舞ひ下りたり舞ひあがつたりしてゐる――そこの渚で、やがて一ケ月で誕生を迎へることになる自分の哀れな娘の土產にと、紅い小石や、いろ／＼違つた形した貝類を拾ひ集めたりしては、小品執筆の日課で疲れた頭を、休ませることにした。

(大正十五年三月)

酔狂者の獨白

自分は、今日も、と言つても、何ケ年も出して見たことはないのだが、押入れから新聞紙包みの釣竿を出して見た。つぐと二間半ぐらゐになるんだが、先のはうを引き出したり、繼いだりするに、面倒臭くはあつたが、繼ぎ足したところで、部屋の中から、振つて見る氣持は、惡いものではなかつた。もとより安ものではあるが、克く撓ふものだ。震災前からの殘つてゐたものとしては、この釣竿ぐらゐのものかもしれない。

自分は、この釣竿では、も早六年前かしら、自分の長男と建長寺内の池で鮒を釣つたことがある。その後、長男とも別れて暮らすやうなことになり、一昨年は、夏の暮れから初冬へかけて日光の湯本で暮らしたが、何んと云ふことなしに持つて行つた竿で、ユノコの鱒をだいぶ釣りあげたのである。

自分は、今、ほんとに一刻の間でも、斯うして今の、現在の煩はしさを忘れられるものとしたら、これ程の仕合せはないと思ふのだが、それも出來ないのである。自分は樅の木蔭で、半日船頭の吉サンと絲を垂れて居たことを、思ひ出す。土用明け後、あるひはもつと秋の氣候も經つてゐた時分だらうが、よく雨が降つて、さういふ日には、自分も吉サンと、湯瀧——の下、湯川をお伴して釣つて歩いた。さう云つたやうな思ひ出も哀しく、自分は六疊で、二坪と足りない庭へ、絲を垂れて見たりした。絲、ハリ、泛子、さういつたやうなものを入れてある腰へ下げる煙草入れのやうなものを持つて居るが、久し振りで出して見ると、ハリは錆びてをるし、絲はフケてをるし、漠然とした感じのものである。僕は遁れるとか、遁れないとか、も早、そんな感じのものではないらしい。もうちつと本氣な氣持から、こんな釣の話みたよなことまではじめたのであるが、自分としては、何んとか纏めなければならない。

わたしが、今更らしく、自分のことを、自分から惡黨だなぞと言つたとしたら、可笑しなもんでせう。それ程の惡黨とは自分では思つてゐないとしたところが、他人はさうは思やしない。だが、他人がさう思ふ、思はない、それは、それだけのことぢやないか。俺は何故そんなことまでが氣になり出したか、そのことのはうが餘つ程をかしい。俺の健康が、弱りはじめて來たことに氣がついてからも、六七年にはなるんだが、しかし、この頃は、すこし不可ないのかもしれない。さうではない。そんなことはない。自分に力づけて呉れる勵ましの聲を、自分はいまだに時々聽くことが出來る。自分は、恐らく傷つき、弱り、たゞ狂氣——この狂氣の運命をさへ、免れて呉れるならば、自分の生存に對して、これ程のありがたいことはないと、こんな風にまでも思ひ詰めさせられて、來たやうなものだ。他から見れば、誇張とも、錯亂とも言ひやうのない程輕蔑に價ひするものでせう。

大抵の人の場合がさうであるやうに、榮えて居るだけの人は、すべてにそれだけが備はつてをる。榮えることの出來ないやうな人間は、やはり、それだけの榮えることの出來ない因緣とか、條件とかを持つてゐると思ふ。誰しも榮えたく、明るく健全な生涯をもちたいといふことは、自然な感情であつて、その本能とでも言

ふ可きか、その自然の感情のまゝに、いろ／＼な不利な境遇、不可抗的な事情に向つて、喘ぎつ、跪きつ、少青年時代のよき力を消耗して來たのではないかしら。僕なんかは、今、現前に、さういつた感じを持たされるものだ。語るべく、過去は暗過ぎ、現在は苦し過ぎ、そして、明日のことを考へることが出來得ようか。自分は、をかしな言ひ方をするやうだが、また出鱈目ばかし言つて居るのだから、ことわりめいたやうなことを言ふ必要はないのだが、實際、自分は、自分の才能、健康、――さういつたものでは、決して惠まれない人間だと思つたことはない。むしろ、自信をもつて居るはうだ。だもんだから、さういふ後天的といつては何んだけれども、青年後の好いとか惡いとかいふことについては、自分としても當然責任を持てる。だが、僕にも分らない、分つてゐても、支配することの出來ない亡靈と、そして、現實の前では、僕は僕相當に才能の自信がある筈なのが、やはり、不可ない。僕の自信も、あるひは少數の親切な人も、皆な手を引かないわけに行かない。それは、何んといふ奴かは知らないけれども、僕にもおぼろには解るけれども、名前を言ふことは出來ない。この不明な、そして煩はしい現實のお化！……さうとでも言ふ外、仕方がないぢやないか。日々のことは、この通り平明であつて、何んにも間違つてゐやしないし、だが、その營みを平明にやつて行けない過去のことがあつたり、未來のことに心を迷はしたりして、さうした間に、藝術的な氣分とか何んとかいふものを求めるといふのも、昔流に言へば、憂てきことの限りならざらめや。……

S屋の爺さんと知り合ひになつた――知り合ひといふのも可笑しなやうな知り合ひになつて、あの爺さんも、ちつたあ困りやしないかしら。俺は先刻、偶然に――といつてもちつとも偶然ではないのだが、俺が酒ばかし飲んでゐて、仕事はしないし、小千圓近くになつてゐるんださうで、心配にもなつて遣つて來たのだらうが、ひどく顏色も良くない。一年前に見た時と比べて、顏の皺がどんなに澤山になつたか。顏が萎びたか、力ない感じを與へるか――自分は、非常に氣の毒な感じに打たれた。まさか、僕だけが掛けた苦勞のために、こんなにまで弱りはしないのだとは思ふものの、氣の毒さ、淋しさの感じに打たれた。

「お爺さん、そんなに心配しなさるなよ。お爺さんに嘘を言つてたわけぢやないけれども、心配をかけても何んだと思ふもんだから、つい言へなかつたもんですから、言へませんでしたけれども、今まで書いたものを賣つちまいました。どうしても出來なかつたものだから。……それ、どうしても、今回は、お爺さんの顏が立たないといふことでしたから、僕は、自分の……」自分は、涙が出てしまつた。

「まあ、いゝでさあ。まあ、いゝでさあ。わしの方は、どうにでもなりますから。あなたが爲事をしてくれれば、それでいゝでさあ」と、老人は、平生かはりない調子で言つた。

自分は、やはり何時ものやうに酒も飲んでゐたことでもあり、でなくとも、何うかすると非常に不遠慮に他人の顏を視詰めたりする癖があるんだが、その時も、さういつたやうな眼で、老人の顏を見たのだつた。女は、老人の眼に僕に對しての侮蔑的な嘲笑の感じを受けたらしいが、僕には、そんな感じはされなかつた。僕は、まだ／＼澤山の老人らしい親切と、克制と、老人の立場としての幾分臆病らしくさへ思はれる程の心使ひを見せられたやうに感じた。

不思議な老人だ――自分もさう思つたし、自分の友達なんかもさう言つた。「今時、あんな爺さんなんか、あるもんぢやない。實際、今のや

うな世の中では、極く稀にしか出會はないやうな人なんだらうから、君も氣をつけたまへ。大事に思はなくちや不可ないよ。」と、ある友達も言つて呉れた。實際奇蹟だよ、と言つた。また、別の友達も「君もわるい人間ぢやないんだから、人から信用されることが、それは分るけれど、しかし、君も普通の程度でやつてるといゝのだが、君のは、度外れなのだからな。はじめは君を信用してやつてくれるにしても、大抵の人は、終ひには背負ひきれなくなる。あんないゝ爺さんを虐めるのは止したまへ。罪だよ」斯うマジメに忠告して呉れた。だが、さうかしら？……だが、しかし、さういふのは、本當らしい。

　昨年の夏、二ケ月を郷里で暮らした。暮らしたといふと、ひどく體裁がいゝやうだが、實は逃げたも同様なものであつた。幾度も〳〵こんなバカなことばかし書くんで、實に〳〵氣がひける譯なんだけれども、やつぱし例のおせいと三月に産れた赤ん坊との三人で、下宿を追ひ出されて――それも、今の三宿へなど來るつもりではなかつたのだ。が偶然に幾らかお鳥目を貰ふことになつてゐた或る雜誌社を訪ねたところ、そこの若い記者の人が三宿の方面だつたので、その人と一しよに家を捜して歩き、どうやら三間程の家を借りることが出來た。

　が、それからの自分等の生活といふものは、淺間しいといふ外言ひやうのない狀態だつた。七月下旬に、郷里の妻に相談がてら、また、いろ〳〵自分の生活に就いて考へて見たり、自分の仕事のことについても考へて見た、さういつたいろ〳〵の氣持から、一時でも、その時分の生活から離れたいやうな氣持で郷里へ逃げ込んだのであるが、おせいは赤ん坊を負つて、たうとう自分の郷里の隱れ家へまで遣つて來たのだつた。自分としては、どうする力もない自分であつたといふより外、言ひやうがないのだ。城下町の師團もあり、高等學校もあり、自分の郷里では一等の町で、その中でも良い旅館に、友達の好意から泊めて貰つた。丁度二ケ月居つたんだつた。その時分から、それも郷里の人達が、自分を氣違ひ扱ひにしなかつたら、恐らく自分には氣がつかないであつたらうが、自分は、その時とても、自分が氣違ひ？……大馬鹿野郎ども、氣違ひだとは巧く考へたものだ、腹では憤りを感じてはゐたのだが、自分は只、人生に對しての自信を持ち得る氣持だつた。人を疑ふといふことは、宜しくない。それが、郷里近親の場合に、疑はれるといふことは哀しい。だが、今、考へて見ると、僕の神經衰弱といふものは、かなりすゝんだ兆候を見せてゐたのかも知れない。自分は、その旅館に二ケ月滯在中、床を出ては酒を飲み、醉つて床に藻繰り込んでは、うつら〳〵と新聞をよんでゐたやうなものである。十月下旬頃になつて、おせいと赤ん坊を連れて、また、三宿の家へ歸つて來た。家といつても、壁一重の、それが大屋で大工だつた。話がちよつと以前に戻るやうだが、僕等が、前後して家出同様に出たもんだし、尤もそんなことがなくつても、遮二無二追ひ出したく思つてゐたのだらうから、無理はないと思つたが、歸り早々、追ひ出しを喰つたには、ずゐぶんと面喰つた。郷里でもそんなわけだつたしするもんだから、自分の家へ歸つて來たら仕事もするつもりで、朝も六時頃には起きて、自分は、廊下の雜巾がけまでした。そして、新聞の雜文だつたが、一日三四枚づつかで十五枚も書いたんだつた。さういつた氣持の矢先だつただけに、遮二無二の追ひ立てには、閉口以上に口惜しかつた。勿論、何も彼も自分の方が惡いのである。自分の方ぢや又、何處へ旅行するかと言つて、一々大屋へ斷る必要はない――といふのも理窟で、惡いには決つてゐるのだが、郷里の宿

屋に宛つた時、後で何處からかそれが分つたと見えて、二三本手紙を寄越した。その手紙の中にS酒屋で門構のある家を借すさうだから――斯うも書いてあつた。勿論家主の出鱈目な手紙なんだらう――さうは思はれたので、相手になつて返事も出さなかつたが、たゞ、その卷紙に書いた文字の優れて居るのには感心した。大屋の大工野郎は、文など書けやしない。字は知つてゐるのだが、それにしても、あの近所の交番の巡査にでも書いて貰つたのかしら。が、それにして、あそこの交番の巡査は若いから、これだけの立派な字は書けまい。あの公事好きの親爺のことだから、どこかの代書人にでも書いて貰つたのだらう――斯う自分は、郷里の宿屋で思つたりしたのだつた。が、それが、その時分には、僕には未見の、S屋の老人の手蹟だつた。

先刻、S老人を不思議な老人のやうに言つたが、この又大屋の親爺といふ男も、何んといふ不思議な男だつたらう。たゞ〳〵遮二無二、僕が極惡の前科者であるか、人間外のゲヂゲヂとか、あるひは特別な主義者でもあるかのやうに、假りに僕が氣違ひであつたとしても、人間同志として、多少の同情がある可き筈なのに、あのタヽキ大工上りの家主君なるものが遮二無二に追ひ出しにかゝつたもんだから、僕は氣違ひであるとすれば、彼は、立派な狂人である。不思議なといふ意味では、恐らくS老人以上の不思議な人間だと思ふ。僕は、今でも、一町と離れてゐないところに彼と暮らしてゐるが、彼の家を追ひ出されてから一年になるが、その間に、俺は、三四度しか近處のお湯に行かないで、ただ一度しかお湯で彼と落合ふことはなかつた。この二日ばかし隣りのお屋敷の風呂場の直し仕事に來てゐるやうだつたが、聲はよく聞えたやうだつたが、勿論、顏は見やしない。

一體、年はイクツくらゐなんだらう？　僕は四十なんだけれども。僕と同じ位の年かしら。二つ三つ上なのかしら。十七八の男の子があつて、小僧さんにやつて居つて、女房と二人きりで暮らして居つて、秋冬の間は女房に荒物のやうなことを商はせ、夏は夏で氷などを賣らせ、自分は自分だけの稼ぎをする。そんなことで、家作の一つも出來たものらしい。その家作も、壁一重で、壁一重といふと、ちよつとでも離れてゐるやうに思はれるが、本當に壁一重だ。ご自分等の住んでゐる方は、路次といつてもいいやうな通ながらに、今も言つたやうに、店屋を開いたり、そして二階には、なか〳〵立派な部屋があつて、法律にでも凝つてゐるのか、それだけの飾りがしてあつて、それこそ大袈裟に言へば、富士山でも見えようといふやうな恰好なのだつた。

その親爺が、遮二無二僕等を追ひ出さうといふのである。そこへS屋の老人が仲に入つて、いろ〳〵と調停して呉れたが、S老人とはじめて會つた譯で、S酒屋といふと、これも亦、大屋と壁一重だつたと同じやうに、裏口三尺とも離れてゐないトタン塀一重だつた。で、僕は、その時分に、棄てる神、助ける神、鬼と佛が裏表に住んでゐるやうなものだつた。幾度か苦笑されたのだつた。

自分の歸京前も――つまり自分等は、三月の下旬か四月の上旬かに――自分等といつても、おせいと赤ん坊と、二十五歳の青年!!――彼は、忠實な青年だつた。が、その時分には、まだ、今のS老人がゐない時分、まだ若い陰鬱な顏の不愛想の主人だつた。勿論、あの忠實な青年が、掛け合ひに行つたりしても、なか〳〵快く酒など借して呉れなかつた。でも、どうやら拂つたり、借りたりしてゐるうちに、五六十圓の滯りになつたやうだつた。後で聽いたんだが、その主人公といふのは、その時分さん

ざん澁谷界隈で、遊びをやつて問屋——といつても、つまり、支店本店の關係だつたらしいので、その本店をしくじつたやうな形になつたものらしい。自分等が——その時分にはHは、もう居なかつたが、女と赤ん坊との三人で歸つて來た時分には、その若い主人夫婦は見えなくなつてゐて、鎌公といふ二十七八の番頭と、今の老人との二人の男世帶だつた。

老人とは言つても、六十にはまだ三つ四つも間のある年らしく、頭は禿げてゐるが、そして、全體としては、年よりは老けたやうな印象ではあるが、白い綺麗な齒列、整つた淺黑く引き緊つた顏立の、まだ自分なんかが、お爺さん、お爺さん呼ばはりをするほどの衰へは見られない。年齡から言つても、をぢさんといふのがほんたうなのだが、つい親しみの氣持から、お爺さん、お爺さんで通して來てゐるんだが、脊の高い、がつしりした體格をしてゐた。が、腰だけは、幾らかこゞみ加減で、チョコ〳〵と驅けるやうな歩き振りだつた。——これは後になつて、S屋のコップ酒の常連の有本老人から聞いたのだが、自分はS屋の老人のことについては何んにも知らないのだが、有本爺さんの話によると、S老人は、S州の山國で、三十年から警官生活を送つて來た人だといふことだつた。さう思つて見ると、S老人の小腰をかゞめた小走りの歩調ぶりを——それも、自分の可厭な用事で、ある時は日に何度となく、呼び立てるやうに來て貰ふんだが、さうした場合の、老人の歩き振り、兩腕の恰好といひ、全體の姿勢から、自分は、よく老人が三十年といふ永い歲月、あのS州の山國で、そして、ちやうど今頃時分の夏だつたら、月に一回とか二回とかいふ字村なんかの巡廻の歸りに、西陽を背に浴びて、桑畠の中の細い道をサーベルの柄を握りながら、コト〳〵と、彼の村の分署か駐在所かに歸つて來る姿を聯想されるのだつた。七八年前、自分は、その老人の村から二三里離れた溫泉場でひと夏を過したことがあつて、それでその邊の土地のことを知つてゐるだけに、さうした老人の聯想も、しみ〴〵した感じで味はれるのであるが、が、このことに就いては、自分は、一度も老人と話し合つて見たことはないのである。A噴火山の白い煙、斷崖のやうな岩山を背負つた百戶そこ〳〵の村、桑畑、鐵道線路、——さういつた風景が、老人の半生と、いふよりか、全生涯といつてもいゝだらう生活と結びつけられて、七八年前の記憶が懷しい氣持で思ひ出されたりするのだつた。自分は、其處の溫泉場では、土地の藝者にハマつたりして、馬鹿遊びがすぎて、藝者の色男だといふ村の青年を何うかしたといふことで、その地方の新聞に書き囃されたことがある。そんなやうなことも、商賣柄老人は知つてゐやしないかと、どうかしてその邊の土地の話が出る度に、幾らか氣のさすやうな氣持から、老人の顏色を、見たりするやうなこともあつたが、そんな氣振りは見せなかつた。が、どうかすると、彼れ老人は、自分のその時分のことを書いた短い小說のことなども、知つてゐるやうな口吻を洩らすことがあつた。「おや〳〵、爺さん、いろんなことも知つてゐるのかな」斯う自分は腹の中で苦笑したこともある。「わしが筆記してあげやせうか？　わしも速記の方は出來ないが、筆記だつたら、ちつたあ役所でやらされたこともありやすで、面倒なところを敎へて貰つたら、わしに出來んこともないかもしれませんから、わしんところだつたら、鎌公と二人きりだし、今、二階も空いてますから、あんたがどんな大きな聲でやつても、大丈夫でがさあ。近所からだつて抗議の來る氣遣ひもありませんからね」

その後、次の家へ引つ越してからも、何ケ月

しても、自分が仕事にかゝりさうもないので、老人は心配して、自分の顏を見ると、ちよい〳〵言つた。それで、自分は、やはり腹の中に苦笑を感じながら、その筆記の見本として『弱者』といふ五十枚程の小說と、『醉狸洲七題』といつた六七十枚の隨筆風のものを老人に渡してやつたのだつた。『弱者』といふのは、丁度、一年前の夏、鄕里への遁走前、例の大工の貸家で半月ほどもかゝつて、酒を飲んでは、夜も晝もなく、全く自分ながら半狂亂の態でHといふ青年に筆記して貰つたのだつた。自分は、日光で山登りや鱒釣りに用ひた靴やゲートルをつけて、二時三時の夜明けの時刻迄も短い廊下を跫音荒く踏み鳴らして往つたり來たりしては、勿論、酒の勢ひも手傳つてはゐたが、苦し紛れから、文字通りに叫び、唸り、吠え、――さういつた調子で、辛うじて五十枚といふところまで漕ぎつけることが出來たので、出來上つた時には、自分もH青年も、ほんとにへト〳〵に疲れてゐた。そんなことをしてまでも、自分は、その時分も、やはりあれだけの纏めたものを作らなければならない事情に迫られてゐたのだが、が、何しろ近所こそいゝ迷惑だつた。大工とか、勞働者とか、さういつた稼業の人達だけに、それも一晩とか二晩とかいふのではないので、自分は家主の大工のことをひどく惡者のやうに、鬼だとか、奇人だとか言つたりしては見たやうなものの、事實は、家主が近所との中に入つて、可成り閉口したことに違ひないのだ。根が一刻な職人氣質から、遮二無二追ひ出さうとして、三百や壯士の手にまでかけて、相當に金もかゝつたのであらうが、S老人も骨を折つて調停もして呉れたのだが、何處までも彼は頑張つて諾き入れないのだつた。自分は、その時の三百に「家賃だつて、幾らも滯つてゐるといふのではなし、それもこの十五日には、滯りの分も入れるといつてゐるのに、どうしてその前の日の十四日に、突然、あんな裁判所からの呼出狀を寄越すやうなことをするなんて、ひどい遣方ぢやないか。あなたも商賣で中に入つて居るんだから、別に、僕に恨みもあるわけでもないんだし、要するに僕が出さへすれば、あなたとしては、文句はないわけなんですから、僕は、あなたに訊きたいですが、一體、あの親爺さんは、どんな理由で遮二無二追ひ出したいのか、それを言つて見て呉れませんか。僕にはたゞ僕がこの家を借りる前に、親戚か何かが入ることになつてゐたのを、うつかりして僕等に貸してしまつた――そんな理由にもならないことを言つて、こちらが、今、非常に困つてゐる場合に、それに酒屋の爺さんだつて中に入つて呉れたんだし、一體、ほんたうのところ、どうしてそんなに僕たちを追ひ出したいのか。理由によつては、僕だつてそれ程壯士なんか怖かないですからな」斯う、いつも乘馬靴を穿いて、髭を生やした恰幅のいゝ、ほんたうの年は三十二三だといふが、四十ぐらゐにも見える三百に訊いて見たところ、「いや、それは、何しろ相手はあの通りの頑固な親爺さんですし、家賃とかさういふやうなことは別としても、……まア、つまり、あなた方のやうな、それもご職業柄でせうが、氣分にムラのある――まア、あまりさういつた變化のある方に居て欲しくないといふのは、どうも本當のところらしいですな。こんなことは、わたしとしては、いふのも何うかと思ふのですけれど……」彼も笑ひながら言つたのだが、つまり、「弱者」談話時分の、自分の氣狂ひ染みた行動を指して言つてゐるのには、自分としても一言もない譯だつた。

つまり、そんなやうな事情で出來た『弱者』だつたので、S老人も、その時分のことを知つてゐるところから、H青年の代理をしてやらう

といふつもりなんだ。もう一つの随筆のはうに就いては、S老人は、「これは何んですかな。三月も禪の方をおやりになりましたかね？」と言はれて、自分もつい苦笑させられたのだつた。……

兎に角、そんな譯で、その家を立ち退かされたのだが、例の三百や、何々團といつた方の壯士、町内の仕事師に車を持つて来させたりして、朝から物々しいやうな光景だつた。何しろ壁一重の隣りのことで、親爺や三百や、ゲートルを着けた壯士などが酒を飲んで氣勢を擧げてゐるのが、ガン〲と響くやうに聞えて来るのであつた。自分も、ゲートルを巻き、チャケツを着たりして、獨りで茶飲茶碗で、酒を飲んでゐた。S老人は、心配して呉れて、店をカラにしては、幾度もやつて来て、「Kさん、ほんとに、こんなことをしとつてもつまらないぢやありませんか。どうせ、もう、出なくちやならないんだから、つまらない意地を張つて見たところで仕方がないですよ。とんでもない危害を受けても……」老人は、斯う危害といふ言葉を言つたので、「今時そんな危害なんてバカなことが？」と自分は言ふと、「だつて、そんなことが雑誌新聞に出てるぢやありませんか。わしは悪いことは言はないから、わしに任して明るいうちに出なさつたはうがいゝ。用聞きから帰つたら、直ぐ鎌公を寄越しやすから。何しろ、わしは、店を空けて来てるもんで……」例の丁寧な物腰で、淺黄地に山盛と白く酒の名を染抜いた前掛けだけは掛けてゐるが、如何にも新米の商人らしい様子をして、幾度もやつて来て呉れた。「引つ越しや何んかの費用ぐらゐでしたら、ちつともご遠慮なさらんで……」かうも、急き立てるやうに言つて呉れたのだつたが、日が暮れても、荷物に手をつけようともしないので、壯士のはうで焦れ出して、勝手に車に積み込ましした。荷物といつても、車に二臺あるかなしの荷物なのだが、その中に佛壇、――佛壇といつても、三尺四方ぐらゐの煤ぼけたたゞの木の箱に過ぎないのだが、その中には、佛像や位牌などゴチャ〲と積み込まれてあるやうに入れられてあるので、神様も何もゴッチャだつた。それを壯士が亂暴に新聞紙に包んでは、箱の中に押し込んで、車の上に乗せた。この佛壇といふよりか、たゞの木の箱を見ることは、自分には、不断からも、心の傷みを覺えさせるのであつたが、かうした場合だけは、自分は、ちよつと見てゐるに堪へられないやうな感じだつた。少年時の家の没落以来、佛様も、先祖の位牌も、かうした箱の中に押し込められてある。荒い海の上も渡り、馬の背にも乗り、そして、たうとうこの三宿の細民窟まで落ち込んで来て、壯士の手で縛からめになり、この箱の佛壇を見る度に、自分は、父とそして自分との失敗と屈辱の生涯を見せつけられる氣持で、心が傷んで来るから、つい、佛を拜むといつたやうなことにも氣がすゝまないのであつた。

まア、それにしても、どうして佛壇なんていふ荷物が、自分のところにあつたのかといふと、自分が七月郷里に帰る一ケ月ほど前、多量の喀血に驚いて、郷里の弟を電報で呼び寄せたところ、彼は、自分の容體をどんな風に考へたものか、恐らく彼等自身が郷里を出て来なければならないやうな事情にでも迫られてでもゐたものか、自分の病氣のことを機會のやうに、女房と二つの男の兒を連れ、何ひとつ遺産といつても佛壇の箱ひとつ切りの、それを持つて恐らく半月か一ケ月後には、佛になるであらう兄の場合に用意して来たのであつたらしいが、さうして出て来た時の自分は、やはり、相變らずの酒飲みで、それも極度に神経の異常状態にあつた。彼等は、ほんの三四日もゐたきりで、

自分の酒亂を口實に、佛壇の端を押しつけて、姿を消してしまつたのだ。親の遺産といつても何ひとつないのだし、先祖の位牌を、兄である自分に渡してさへしまへば、戸籍上のことは別として、兄と弟、と言つても、久離切つての、アカの他人なのだ。それにおせいと赤ん坊といふ厄介な問題があるんだが、假りに自分が弟の場合にしたところが、この酒亂の神經病の、肺病の兄の傍に一ケ月とゐたくないと思ふのはほんたうであるかもしれない。自分の酒亂が、何を爲出かすか。自分の肺病が、彼等のひと粒兒に感染しやしないか、――彼等は、半月か一ケ月で死ぬ自分であれば看病もしようと思つて、それとなく肉身とも相談の上で出て來たのであつたらしいが、さうして荷佛壇まで用意して出て來た時は、自分の樣子は變つてゐたのだ。「何をこの洟垂れ野郎奴！　如何に耄碌しても、手前なんかの腹の底が分らないやうな、それほどの耄碌した兄ではないのだ。先祖の位牌の前に對しても、おれの目玉の黑いうちは、家に置くことが出來ない。出て行け！　自分等の場合のことだつて、考へて見たがいゝ、だが、そんなことを言つたつて仕方がないから、お前等はお前等だけのもの、自分は自分だけの人間だから、お互ひに構ひつこないのだ。あんな馬鹿親爺ではあつたが、杉の一本も殘して逝つて呉れたが、それも震災後で有耶無耶なことになつて、今更お前に分けてやるといふやうなものは何もない。そして、俺は、病氣で、貧乏で、これから先何年經つたところで、お前等に飯櫃ひとつ持たして分家させるといふわけにも行かないのだから、戸籍のはうのことは勝手に村の役場の方へ手紙でも出して、分けちまつたらいゝだらう。お互ひに仕方のないことだ……」斯う自分も言つたりしたので、それで、彼等は佛壇を置いて出て行つたのだつた。

それからである、自分が、H青年を相手に「弱者」の談話にかゝつたのは。それが五十枚ほどになつて、その金で自分は郷里に歸り、HはHで、瀬戸内海に沿うた郷里に歸ることになつたのだ。……

S老人が、兎に角にと自分を宥めて、その場に迫つて、直き半町とも隔つてゐない埋立地の細民窟の中の長屋の一つを借りて來て呉れたのだつた。トタン葺きの二間長屋の、二疊に四疊半に六疊といふのだが、壁が落ち、唐紙や疊が破けてゐて、文字通りのあばら屋だつた。S屋からは、鎌公が手傳ひに來て呉れたが、隣の間借りかけた壯士は、靴のまゝ部屋に入り込んで、挑むやうな態度を見せては、わざとのやうに亂暴に佛壇の箱を床の間へ抛り投げるやうにしたりした。そして、出がけに、玄關上の名刺を剝ぎ取つて見て、「何んだ、××がゐたのか……そのあとへKさんが入るなんて、やつぱし、因緣だなあ！」斯う言つた捨臺辭のやうなことをして、その名刺を千切り棄てて歸つて行つたが、勿論、自分には、それがどんな人間であるか想像も出來ないことなんだが、やはり、自分と同樣、どちらにしても鼻つまみものに違ひないといふ氣がされた、壯士の捨臺辭が何時までも自分の耳に殘つたのだつた。

が、實は、その日の午過ぎ時分、目黑に居る友人の原宮に應援と無心を言つて遣つたのだつたが、彼が來る前に、もう荷物が運び出されてゐたので、それでないと、あるひは、自分は、三百に入れた證書通り、萬一期日までに立ち退かない場合には家主のはうで荷物を保管していゝといふ、さうした文句通りに荷物はそのままにして置いて、手鞄一つ持つて、おせいと赤ん坊との三人で何處か信州の方面の山の中に逃げ込んでもいゝ――さういつたつもりもあつ

て、頑張つても見たのであつたが、それが間に合はなかつたのだ。おせいと鎌公が荷物を片付けてゐる間、原宮と自分とは、近處の蕎麥屋で酒を飲んでゐた。

半町近くとは言つたが、それも通りを歩いてのことで、裏は同じ地内も同樣の近所合壁のことで、自分等の引つ越しの事情を克く知つてゐるところから、長屋の女房連中が、何か今に自分と壯士との間に一騷ぎあるだらうといつた好奇的な眼を露骨に見せて、路次に出ては囁き合つて居たが、そんなことで壯士が穩かに歸つたので、多少張り合ひぬけもしたであらうに、それでもまだ「あの氣違ひ、今に屹度何かやるよ。もうちつと待つてごらんな。今夜は、まだ、そんなに醉つちやゐないのかね。それにしても、飛んでもない野郎を、あの酒屋の爺い奴、引つ張つて來やがつたものだ……」たしかに、斯う言つてゐるやうに思はれるのだつた。

で、まさか、自分も、さういつた女房連の暗示にかゝつたわけでもなかつたらしいが、自分は原宮と酒を飲みながら、ひどく昂奮して、自分の不幸と不遇を愬へ、住んで行くといふことだけでも、自分のやうな人間には、どんなに困難なことであるか、そして、自分の仕事のことなんか、ちつとも信じられはしないのだ——斯う自分は蕎麥屋で泣いて、ほんとに大きな聲を擧げて泣いて、そして、彼に送られて歸つて來たのだつたが、さうした近所の物々しいやうな光景が、自分の頭をカッとさしたもんだし、原宮が醉つて自分を押し込むやうに、「K！　おいK！　こゝは君の家なんだよ。こゝは君の家だから、何も怖がることはないんだから、入つて寢たまへ。……分るよ。分るよ。僕は分つてゐる。兎に角溫和しく入つて寢て呉れ。……俺だつて哀しくなつちまふぢやないか！」彼は聲を顫はしながら言つて、玄關の硝子戸を閉めた。自分はしばらく其處の狹い三和土の上に抛り付けられでもしたやうに坐つてゐた。鎌公とおせいは、まだゴテ〳〵やつてゐるやうだつた。女房連のガヤ〳〵言つてゐるのが、ウツラ〳〵した頭に聞えて來た。發作的な一時の激情の爆發めいたものだつた。「原宮ア……！　おーい原宮！」立ち上ると同時に、戸が閉つてゐるなんかといふことに氣がつかず、いきなり額をぶつつけたのだつた。額と兩手と一緒だつた。何枚かの硝子が毀れ落ち、自分の鼻がしらが傷つき、額から、頰から、掌から、噴き出すやうに血が流れた。眼鏡が飛んでゐた。自分は、兩手で鼻がしらや眼を掩ひながら「痛いよう……痛いよう……！」毀れ落ちた硝子の中に蹲踞つて、斯う泣くやうに叫んだ。「おせい、痛いよう……おせい、痛いよう、鼻が切れちまつたよう」斯う叫びつゞけたので、赤ん坊を負つたおせいと鎌公が飛んで來た——と言つても、ほんの三四間の間のことなんだけれども、何しろ、ほんの一瞬間同樣といつていゝやうな咄嗟の出來事だつたので、彼女としても何う防ぎやうも出來ないことだつたのだ。鎌公が藥屋へ走つて行つて、ヨードホルムだとかガーゼだとか買つて來て呉れて、兎に角洗面器で額や手を洗つてゐると、ガチャ〳〵と劍の音をさせて、近所の女房連がわい〳〵言ひながら、家の前まで遣つて來たが、おせいが出て、すこし醉ひ過ぎたため轉げてケガをしただけですから、と言ふと、巡査も、はあさうでしたか、と言つて、女房連中の好奇心を氣にも留めぬ風で、さつさと歸つて行つたのだつた。

それからの日々は、酒を飲み、そして、蒲團の中に藻繰り込み——一升平均ぐらゐ飲むのらしい。實は、自分も、郷里から歸つて來て、今度こそは、氣を入れて仕事でもしたいつもり

だつたのだが、追ひ立てを喰つたり、額に疵をしたりしたので、すつかりまた氣を腐らしてしまつた。それにまた、丁度、持病の神經痛の季節にかゝつてゐた。眼が醒めると痛む。それを紛らすために酒を飲む――それの繰返しだつた。自分は、一日のうちで、酒を飲んでゐる七八時間の外は、ことごとく寢床の中で過ごさねばならなかつた。

が、神經痛神經痛と、自分は、この病氣を呪ふやうに言ふのであるが、若し、この病氣でも自分に出て呉れなかつたとしたら、自分の壽命は恐らく三四年前には終つてゐたのかもしれない。自分が、五六年前に、全く偶然に、ある皮膚科の博士に左肺部に痼障のあることを言はれて、執筆の休止を忠告されたのだつた。が、まだ、その時分には、自分の肉身やなんかの事情からしても、×博士の忠告を諾くわけにゆかなかつた。自分は、その時分、湘南地方のある山寺みたやうなところの一室を借りて、自炊同樣の生活をしてゐた時分ではあつたが、自分は、×博士の吩咐通りの規則正しい生活をして、何らにか病氣を抑へることが出來たのだつた。その後大地震で東京へ出て來て、下宿生活をしたり、またこの三宿へ來たり、さうした轉々とした間に、自分のその病氣を護り劬つて呉れたものは、この苦しい神經痛の外ないのであつた。絶對の安靜――横臥――醫者が幾ら忠告して呉れても、僕にペンを持つことを禁じようとした醫者でも、決して出來つこのない命令を僕の神經痛が爲てゐて呉れたのだつた。こんな馬鹿なことを言ふと、僕としては馬鹿のつもりでないのであるが、馬鹿なことを言ふ奴だと思ふだらうが、自分としては、決して譃ではない。喀血も絶え、血痰も絶えて、この何年間の壽命を繋ぐことの出來たのも、あるひは、この神經痛のお蔭であるかもしれない。血を喀くことは痛くも痒くもないんだが、神經痛のはうは、さうは行かない。左背部全體の痛みである。自分は、ウン〱呻き、ほとんど泣きながら、十月末時分から三月一ぱい、それから入梅時、それだけの永い月日を酒を飲む七八時間以外には寢て通すのである。どんな病人だつて――つまり肺のはうの惡い病人だつて、靜臥療法では、僕にはかなはないと思ふ。――僕が、幾度か血を喀いたりしながらも、その病氣を抑へて呉れたものは、やつぱし、今が今、こんなにも呪つてゐる神經痛といふ病氣であるらしい。さう思ふと、この頃は、この痛い、最後に僕を倒すであらう神經痛といふものも、幾分なつかしさすら感じられるのである。

それにしても、それからの一年で、どれだけ酒を飲んだものでせう。日に一升として年に三石六斗餘り、一升五合平均とすればざつと五石、毎月四斗樽一本づつ飲んで來たわけである。

前に、S老人のことを佛だといひ、また、自分のやうな人間は、斯うして酒を飲んで、半年一年とも分らない時に、飲めるだけ酒を飲んで死ぬ――これもみな二十年餘り酒の神樣に忠實であつた自分を、酒の神樣が憐れんで飲まして呉れるだらうとは思つたが、また、酒で生命を取られる慘めな運命のことを思ふと、すべてが、自分の一生といふことが、皮肉なことになつて來て居るといふやうな感じに打たれることもあつた。

酒のために、自分が氣違ひになつたといふやうな噂は、何時頃から立つたものか、このことばかしは、自分もよく分らないのであるが、しかし、鄕里ですら親しい妻などでさへさう思ひ込んだのかもしれないのだから、鄕里の友達などが、さう思ふのにも無理はない。ある鄕里の友人は、精巧な拳銃を僕に呉れた。といふよりも、僕に預けた。恐らく氣違ひに刃物――さ

ういつた氣持からであるかもしれないのだ。だが、僕は、そのピストルを使用しなければならないやうな、さういつたやうな立場には、全然置かれてゐないのだ。僕は、鄕里の宿屋の部屋で、日に幾度となく、その裝塡された拳銃を眺めては、松と石ばかしの庭に向つて、居たやうなこともあつた。

つまり、その時分から、自分の狂氣といふことが、鄕里や東京でも噂されはじめたものらしい。自分は、東京へ歸る時、そのブローニング銃とか何んとかいふものを、窃と友人に返すやうに言ひ置いて來たのだつたが、東京へ來て、自分の書いたものを極端に惡口言ふ人間に、あの一發を見舞つてやりたいといふやうな衝動を幾度も幾度も感じたのである。あの山猫とも、鼠鼬とも言ひやうのないやうな、あゝいふ人間に對して、何うすることも出來ないのだ。文章とか、筆とか、決してそんな感じのものではない。己は己の藝術を作り、他人は他人で藝術を作り、大きい小さいは別として、つまりは、同じ畑の仕事をして行かねばならぬのだ。だから、他人のことを輕蔑するといふことは、法にないのだ。さういふ場合の用意としても、あのブローニングとか何んとかいふやつがあつたならば。‥‥

年の暮れのこと、門松のことまで、S老人は心配して呉れて、そして、玄關の二疊には「山盛」といふ酒の四斗樽をつけて呉れた。自分の永い放浪生活の間にも、珍しいことだつた。やはり、S屋で持つて來て呉れた一升桝にドクンドクンと呑口から入れて、それを燗德利に移して飮むのが、樂しみだつた。外に何うといつた樂しみ、望みがあるといつたわけではなし、この冬を越したくない――越したいと思つても越すことの出來ないやうになつてゐるのだから――だから、自分は、S爺さんの酒ばかし飮んでゐたのだ。この冬を越せるか越せないか、もう一度血を喀いたら死ぬか死なないか、また、血を喀くものか喀かないものか、そんなことは誰だつて分りはしないと思ふ。俺は、何よりも、自分の氣違ひになることを恐れてゐる。それは、抵抗しがたいものである。例へば、監獄所があるやうに氣狂病院がある。同じやうに精神的な缺陷から來てゐるものと看ていゝと思ふ。だが、それにしても、自分の頭腦のだん〳〵錯亂しかけて行くのを看てゐるのは、寂しい氣のものだ。

一月早々だつたが、自分の二十何年來の先生の奧さんが亡くなられた。その消息を新聞で見た時に、自分は涙が出て來て、何時も蒲團の中で新聞を讀む習慣なんだが、何時間も涙が出て仕方がなかつた。自分は、泣くだけ泣いて、涙を絞つてしまつたら、先生の前に出ても、涙なんか出さずに濟むだらう――斯ういつた氣持などからも、涙を押へようとは思はなかつたが、それにしても、こんなに泣けるといふことは、自分の神經の病んでゐる證據だといふ氣もされて、不安も感じられたんだが、自分は、夜九時近くまでも飮み、泣き、背中の痛みも忘らるゝ程に醉つたところで、S屋の爺さんから金を借りて、三宿の電車通りから本鄕駒込まで自動車に乘つたのだつた。お通夜をして、翌日のお葬式にも列なつたのであつたが、その朝早く同じ區內に住んでゐる友達に禮服を借りに行つたところ、友達の年詞に出かける都合から、古いフロックコートや山高帽子を貸して呉れた。新年のことで、そこでも家族達から酒を出されたので、お通夜にも飮み通した酒と一緒になつて、可也醉つて、フロックに山高帽子の姿で、先生のお宅へ歸つて來たのである。

「先生、これでは何うでせう？ 不可ませんでせうか‥‥」一棺を置いた次の間の、多勢の間に

坐つて居られた先生の顏を見て、自分は、山高帽子を手に持ちながら、斯う言ふと、―ハ、ハア、……フロックコートか、いゝぢやないか、それで結構ですとも。……ちよつとチエホフ見たいかな、いや、チエホフの作に、屢くそんなフロックを着てゐる人があるぢやないか。チエホフ作中の人みたいだな。それでもいゝよ。……斯う先生は、緊張した顏に笑ひを浮べて、言つた。

お寺で、燒香式の場合に、自分も弔辭めいたものを述べに立つたが、全然シドロモドロのものだつたらしい。お子さん達、友人總代や小說家協會代表者の慇懃切實な弔辭の朗讀燒香、その後に急き立てられてフラ〳〵と立ち上つたのであつたが、香華に飾られた式壇の前にすゝみ出る勇氣もなく、遺族近親の人々の席と導師の間に立ち竦んでしまつて、足が前に出なくなつた。何瞬間の間、自分は、突つ立つて、洞ろな激しい、眩暈的な氣持で四邊を視廻したのだが、そのまゝ導師の脇に立つたなりで、ブッブッと何かしら言ひ出したのである。自分としては、奧さんといふ人のえらかつたといふこと、自分とは五つばかししか年上でないとすると、自分が二十歲の時は、奧さんは二十五歲であつたであらうに、その時分からして、立派な先生の奧さんであり得た――それも、先生の人格の然らしむるところであるとは言へ、なか〳〵誰にも望み難いことである。先生をして、今日の地位にならしめ、六人のお子さんを育てて來て居られる。自分などは、二十年お世話になつて來て居つても、四十未だ家をすらなすことが出來ない。奧さんなんかの一代に比べて、何んといふ腑甲斐なきものであるか――それにつけても、わたくしは、昨年の十一月だつたと思ふ、久しぶりで先生をお訪ねして、奧さんにお酒をご馳走になりましたりして、歸りの郊外の電車の中で、へんな悲しいやうな氣持になりまして、自分のやうなこんな孤獨な人間が、若し先生のやうな人にでも亡くなられたならば、どれほど悲しいだらう……さういつたやうな氣持が、ひどくされたのでありましたが、まさか、奧さんとこんな風に速くお別れするやうにならうとは思ひもかけないのでした。迷信的なことをいふやうですが……こんなやうなことをまで言つて、それが偶然だつたが、すぐ右の傍に坐つてゐられた先生の顏と向き合つたが、先生の眼は、もう止せと叱るやうに、自分には視えた。自分は、燒香にすゝみ出る勇氣もなかつた。フラ〳〵と導師の坊さんに倒れかゝりさうな足を踏み堪へて、自分の席に歸つた。――あとで聞いたことだが、一般の弔問客の中から自分がブツ〳〵言つてゐるので、演說ではないぞと聲を掛けた人があつたさうである。さういふ意味では、お通夜の晚にも、自分は、さん〴〵の失態だつたらしい。二十年餘り尊敬して來た奧さんへの、自分の態度としては、ひどく不謹愼な誹りを免れることは出來ない。清松院奧さんよ、ヤクザな、愚かしい、わたしのやうな人間のことを赦して下さい。……

二年前だつたかしら、自分は、先生にお會ひして、いろ〳〵な愚痴を言つた。その時ばかしでなく、自分は、非常に弱つた場合は、先生のところに、愚痴を言ひに行く外、何處にも自分を慰め勵まして呉れる人はないのである。友人の場合となると、そのまゝに自分を投げ出して、自分の心持のまゝを、見せ曝したくない感じもあるんだが、先生の場合では、そんなことがないので、自分は心から愚痴を言ふことが出來るのだつた。「そんなことを言つたつて仕方がないよ。まア修業と思つて、諦めるんだな。仕方がないぢやないか。こんなやうなこと

を、自分は永い間に、幾度も言はれて、自分は、泣きたいやうな氣持で訪ねて行つたやうな場合でも、突つ返されたが、何時も、力づけられて、歸つて來たものである。

で、一二年前のことであるが、さういつた何時もの氣持からお訪ねしたところが、「それや、君、お互ひだよ。君ばかしの苦しみぢやないぢやないか　僕なんかだつて、こんなに毎月々々、厭なものを書かなければならないし、何時までこんな生活をしとつたつて仕方がないと思ふし、作家として働いて行くんだつたら、こんな目下のやうな生活を止めなければならない。生活のはうから第一改革して、それには、僕なんかも、自分だけでも、何處かに隱遁したやうな生活でもして、もうちつと眞面目の仕事をして行きたいと思ふ。兎に角、今のまゝぢや仕方がないよ。こんな好い加減の仕事をして行くぐらゐなら、全然新聞小説家になるか、まさか、そんなことも出來ませんからね。それを考へて見ますよ。……」斯う言はれたやうなことも、永く、強く、未だに自分の心に殘つてゐる。これから先生が、先生らしい生活に入り、仕事を爲されて行くといふ場合に、突然の奥さんの死であつた。先生の心が、五十を越えて、更らに新しく動きかけて行かうとする矢先に、何十年糟糠の奥さんに亡くなられたことは、兎に角、たいへんの打撃であらねばならない、鍛練といふか、試練といふか――さういふことでは、可也嚴しく受けて來た人のやうに、自分なんかとしても考へられるんであるが、奥さんの死は、稍々大き過ぎた試練ではないかとさへ思はれるのである。

奥さんの葬式の場合に、僕が、フロックを着たんで、非常に滑稽な感じを、先生にも與へたらしく、だが、それにつけても、奥さんのことを思はれるのであるが、恐らく十五六年前、僕の總領は現在十八になるが、あの子が二つぐらゐの時分だつたから、多分そんなものでせう。女房の親爺が、娘と孫を送つて來て呉れて、東大久保の高千穗學校の附近に家を持たして呉れた。それから田舍へ歸る時に、先生のところへ、ご挨拶だけして行かうといふのだ、特にフロックコートに山高帽を冠つて行つたのである。田舍の親爺さんとしては、禮服のつもりだつたのだらう、外に着物も用意して來てゐたやうだつたが。

先生も、まだ、その時分は、四十一二の時だつたのかもしれない。藝術上の惱みの大變多い時代だつたのかもしれない。自分なんかまだ、二十四五の青二才で、家なんかでも持たして貰へば嬉しい、女房子と一緒に暮らしてゐられれば嬉しい、さういつた時代だつたので、その當時の自然主義とか何んとかいつた時代の、そして、先生のことなぞは解らない時分だつた。先生の苦しんでゐられるやうなことは分るけれども、自分等にや分らなかつた。酒を飲み、ひどいことには、女のことさへ持ち出しては、のろけたりしたやうな感じのものだつたかもしれない。

先生が、僕のつまり――舅さんのフロックコートが、餘程滑稽なものに見えたのもほんとかもしれない。何しろ三四十年前の、彼が改進黨の演説とか何んとかいつて、そして、結局田舍に落着くことになつて――彼が昔の明治法律學校か何かへ、函館から汽船で横濱へ來て、さういつたやうな學生だつた――それ以來のフロックコートらしい。それと、また、をかしなことには、冠つてゐる山高も、普通では小さいもんで、やつぱし、昔のまゝの大きい古い山高でなければ駄目らしい。

さういつた可笑しげな風體で先生をお訪ねしたのである。外へ出て本郷通りの赤門前の通りに出て、僕は、舅君に訊いた。

「どうでせう。だいぶ弱つて居るやうで、これからもどん〳〵出來る人でせうか？」

「どうしてこれから出來る人でせう。實に立派な人ですよ」舅君は、さう言つた。

「Kのことは頼む——舅は、僕のために頭を下げて、先生に頼んで呉れた。さういふことは、永久に消えるもんではない。言葉は永久とか何んとかいふから惡いけれども、心持としては、そんなものではない。僕の小さな本の出た時に、先生は、第一に舅さんに送つたか？　斯う訊いて呉れた。

だが、フロックの話をして居つたのだから、フロックの話に返すのだが、兎に角に古いものだつたらしい。後で奧さんと大笑ひされたさうである。さういふことどもまでも思ひ出されるのである。可笑しくつてしやうがなかつたでせう。先生も、餘程滑稽のやうに思はれたのか、教育のはうにでも、と先生は言はれた。さうぢやありません、と僕は取り做した。いや、地面の方でせう、と自分は取り做すやうに言つたのであるが、そんなやうなことどもにしても、思へば古いなつかしい思ひ出である。

或る雜誌記者と、その日も、その幾日も幾日ももと同じやうな狀態で、その狭い四疊半に、坐り合つて居たのだ。彼は、恐らく、雜誌記者として、この弱い、孤獨な作家に同情して呉れて、ずゐぶん職業的な——迚もそんなやうな言葉では言へないやうな好意から、僕には盡してゐて呉れたのである。いろ〳〵の關係の人達、あるひは肉身の人達でさへ、最早僕の正しく働いてゆく力が殘つてをるといふことを信じて呉れないといふやうな狀態になつてをるのに、彼は、まだそこに殘つてをるものがある、あなたが酒さへ止めると何か出來る人である。また、あなたから酒を除るといふと、實際、あなたの生活は、ずゐぶん氣の毒のやうである。とは言つたものの、何うかして生きられる人かもしれない。後の先——わたしは柔道のことも詳しく知らないが、子供の時分にそんなことも聽いたこともある。さういふ手で、あなたも遣つて見ては何うですか。あなたが書けないとか、いや、身體が惡いとか、さういふやうなことにはずゐぶん好意的な感じをもつて、斯うして日參的に來てゐたのですが、それも出來ないことになりますか——

まア、斯ういつたやうな狀態で、ある日も、自分は机に向ひ、彼は默然として壁を背にして坐つてゐたのである。

おせいが、お皿へ罐詰のパインアップルを持つて來た。

「今、S屋へ行きましたら、有本爺さんが、どうしても持つて行けといふものですから、いゝいゝと言つたんですけれど、罐を切つちまひなすつたものですから。……S屋の爺さんも、持つて行きなさつたらいゝでせう、と言ひなさいますので……」おせいは、そんなものを皿へ入れて持つて來たのである。

それが、ちやうど、その雜誌記者との氣持が緊張狀態——さういつた場合だけに、お互ひに苦笑したい氣持だつた。

「パインアップルとはハイカラですね」彼は言つた。

「さういふ譯ぢやないんだけれど、ちよつと困るんだけれども……これでこの罐詰は高いものについてるな。十五圓ぐらゐについてるのかな。……

「ぢや、ひと切れ三圓ぐらゐについてるですな。ぢやなか〳〵ご馳走になられませんですよ」

その記者の人は、ひと切れ楊枝で食べて見て、さう言つた。自分もひと切れ口へ入れて見たが、疚しく思はないわけに行かなかつたのであ

る。S老人に對して、これ程極り惡く、恥しく思はされたことはない。有本老人といつても、それも、自分が、老人と懇意になつて、S屋の晩のコップ酒の仲間なのである。自分は、酔ふと何處へ行くところもないから、晩には、ちよいちよいS屋の爺さんとこへコップ酒を飲みに行つた。さういつた緣故からの有本老人であるらしい。彼は、僕に、お米がないとか、何んとかいふやうなことで、借金を申し込んで來てゐる。どうしてわたしに他人に貸すだけのお金があるか。わたしは、實際に、弱く困る人間であるもんだから、さういふ申し出の場合にすら、S老人を煩はしたものだ。有本老人が、お米がないとか何んとかいふ場合に、そして、それが、決して誠實でない場合であつても、わたしとしては弱いものだから、氣持として可厭なものだから、つまりは、S老人から小遣を借りて、やつてゐたことである。その結果といはうか、お禮心で持つて來られたのでせうけれども、だけれども、パインアップルの罐詰そのものが、すでにS老人の方から出てることとなると、つまりがへんなものである。

　だから、先刻も言つた、その一二ケ月前にも、僕のとこへ來て、僕が仕事が出來ないで、閉口してゐる場合に、何かしら僕のところへご馳走を持つて來たさうで、威張つて居つたやうだが、さういふことも、偶然に、その記者が知つて居るので、その記者曰く、

「あの人は、どんな人ですか？」斯う訊かれて、「人相だけのものさ」斯う自分は言つたこともあつたのである。

　八月下旬から、九月の末日近く、一ケ月餘り、每日四十度近い熱を、酒の醉で誤魔化しては、一日に二枚三枚――その間には、二日も、三日も、ペンを持つどころか、起き上ることさへ出來ない日がつゞくのである。自分が、どれ程大儀な身體で、アスピリンなどで、一時の熱を下げはしても、そのための疲勞から、どんなに無理をして机に向つて見ても、自分のやうな中毒者でさへ、苦しく思はれるやうな、さういつた場合でさへ、おせいは、たゞ自分が、何時も怠け癖から、この仕事をすゝめないのだと言つて、自分に突つかゝつて來るのであつた。自分は、彼女を打ち、それに耐へられないやうな場合には、S老人のところへ驅け込むのだが、老人の店には店で、有本老人のやうな仲間が居合せるので、結果のいゝ筈がないのだつた。

が、何よりも驚かれることは、おせいが、去年の夏に、自分があれだけの血を吐いたことを、自分が單純に胃潰瘍の前期の出血だといつたことを、信じ切つてゐるかのやうな、恐らく信じ切つて居るに違ひないやうな、さうした心理である。五年も、六年も、足掛け七八年前から、自分の病氣のことを知つてゐて――尤も、今のやうな男女關係はなかつたとしても、あれほど神經過敏だつた自分に接觸してゐたのであるから、昨年、一昨年の日光の山の湯本時分からの健康狀態については、勿論、分つてゐなければならない筈なのだ。昨年の三月――三宿へ來る前、ユミ子が產れた、と同時かのやうに自分の病氣に對して、無關心になつたのかしら。自分も亦、そのユミ子が產れた時分から、恐らくは、肺のはうの二期を通り越したであらう病症を、神經的な疾患のやうに、誤魔化したい――勿論、さういつたはつきりした氣持からではなかつたとしても、何時となしに、さういつたやうな本能的な氣持に動かされて行つたものらしい。自分は、自分の、やがて、といつても、永い間ではないらしい、この呪ふべき痼疾的な病から來る、病氣としての自然の兆候や感情、この狂醉といふ、それで蔽ひ隱さうとする――さ

ういふ感情は何處から出て來るのか、僕は、決してユミ子のためだとは言はない。勿論、言へるものではない。だが、僕が、どんな恥を忍んでも、言ひたいと思つても、言ひ得ないやうな、さういつたやうなものがあつて、さうさしたとすれば、おせいが、あの一年前に現前に多量の喀血を見てゐながら、自分の發熱なんかが、ただ天氣の加減で、そして、今時に季節的に起る喘息のせゐだとして、自分の仕事の出來ないことを、ちよつとの同情もないのである。

病氣に飽きる――どんな苦しい、例へば勞働にしても、病氣にしても、永くその苦痛をつゞけて居るうちには、飽きて來る。人生のどんな好い刺戟にも飽きて來る。自分なんかの狹い經驗では、病氣なんといふものは、割合に――殊に呼吸器疾患の場合では、飽きるなんて言つてゐられないほどに、神經的な刺戟の強いものである。この病氣で、倦怠、神經の弛緩、放心的な狀態が見えはじめた時分は、相當に重い兆候であると見てい丶のらしい。自分も幾人かのさういふ病人を見たのだが、大抵似たやうな狀態だつた。トモ子の父――これは後で書くつもりであるが、自分の「埋葬そのほか」の主人公なのであるが、彼の場合なぞを考へても、幾年かの激しい病苦との鬪ひつゞけた後の放心的の狀態は、一二年はつゞくものらしい。そして、彼自身も、今や、息を引き取る間際までも、自分が結核患者であるといふことを、隱す――彼は、最後の醫者の診斷に來た場合でさへ、四十幾度を越えた發熱の場合に、「今日は、少し熱が高いやうです」と言つた切りだつた。そして、遙々と田舍から呼び寄せた娘のトモ子を立ち合はせて、「やつぱし、肺病ぢやないんださうだよ」斯う言つたやうなことを言つて、悲慘とも淒慘とも言へないやうな感じで死んで行つた人を、自分は、幾人か見てゐる。自分はその人達と同じやうに、死ぬであらう。――死ぬであらうといふやうな氣持から、一二年前からは、たゞ〳〵、遺言――何んといふ滑稽なことだ。俺が、遺言といつたところで、何の意味があるか。俺は、稍々、絶望的な言葉で書いてゐるといつたことが、そんな意味に傳はつたのだらう。言葉は同じやうであるが、意味は違ふ。

そんなことは、兎も角として、トモ子は、自分の從兄の長女なんだが、從兄は、七年前、ちやうど今の自分の年の四十で、さうした慘めな放浪の後で、東京で死んだのである。その時分は、まだ、トモ子も十七歲の少女だつた。それが、二十三歲の、それからの七年間に、いろいろな生活に、虐げられて來た。そして、やはり、父と同じやうな病氣に惱まされかけて、郷里を出て來たのである。彼女の父の遺骨を、彼女といつしよに東京に自分も送つたのであるが、純眞そのもののやうな彼女の、そして、明日の運命を思ふと、暗い氣持にならずには居られなかつたのだ。父に死なれて、病身な母と幾人かの幼い弟妹を背負つて、破產狀態の家政を支へて來てゐた。一度養子も迎へたらしい。兎に角、父の生前までは、村では、一番といつてもい丶ほどに、大事に育てられて來たのが、さうした父の失敗と同時に、可なり極端な生活にまで落ち込んだらしかつた。いろ〳〵の詳しい事情は知らないが、兎に角、柳行李一つ持つて、自分のところに來た時は、彼女の身體も、ほんたうではないのだつた。壁が落ち、障子が破れた六疊の部屋に、一つ寢床の中に、自分等四人は寢ることになつたのであるが、彼女は、やはり、自分と同じやうに、晝も發熱の爲に、床を出ることが出來ないのであつた。そして、また、その時分は、自分の神經痛の尤も激しい季節でもあつたので、おせいとユミ子の起き出た後も、終日、互ひに苦しい身體を持て餘

しては、殊に自分にとつては、さうした彼女を見て居ることは、神經的に耐へ難い負擔であつた。だが、自分は、彼女の來て吳れたことを非常に喜んだ。彼女の父の死の前後に、自分は、多少の人情を盡したつもりである。それが、七年後の今日、彼女が、恐らく自分の死の看病に來て吳れたのである。おせいは、最早、徹底的に、自分の味方ではない。おせいは、自分が、今に息を引き取る最後の時までも、自分に優しくして吳れたり、慰めたりして吳れる女ではないのである。それに——ユミ子のことを思ふと、自分は、どうしていゝか解らないのだ。自分の生活は、自分の心柄からとしても當然であるが、ユミ子のことは、不憫である。人間の生活としては、すこしく度を外したやうな、さうした慘めな間に產れ、育ち、笑ひ、しやべり、怒り、甘えさへ出來るやうになつて來てゐた。誰か、あの無智頑固な母親——おせいの外に、よき保姆であり、優しき友、姉、さういつた人を、どんなにも欲しく思つてゐた場合であるだけに、トモ子の來て來れたことが、非常に嬉しいことだつた。それに、また、實際に、トモ子は、非常な子供好きだつた。自分は、彼女の、いろ／＼の病氣についての不安を感じながらも、ユミ子の保姆としての彼女には、信賴と感謝を持たない譯にゆかなかつた。

その二月時分には、まだ、X雜誌社の記者が來て吳れて、非常な好意から、自分に小說の原稿を書かせようとして、日々鞭韃して吳れてゐたのである。自分は、發熱、疼痛、倦怠——さういつた狀態で、そのX雜誌記者の好意から、十二三枚の小品を二つ書いた。X雜誌記者の鞭韃にも拘らず、實際に、自分には、書けなくなつて來てゐるのである。おせいなんかが、騷げば騷ぐ程、自分の神經は、萎縮してしまふ。自分が、たゞ、酒を飲むために、それで出來ないのだとおせいは思ひ込んで、自分に喰つてかかるのである。トモ子までが、そんな氣持からか、X雜誌記者の歸つたあとで、發作的のやうに狂ひ出す自分を、おせいと一しよになつては、掛蒲團で自分を抑へるやうなことをした。每晩のやうに、そんなことがつゞくやうになつた。明け方近く眼を醒し、ユミ子の背負帶や、自分のヘコ帶で、掛蒲團でグル／＼卷きにされた自分を見出し、口惜しいとも、なさけないとも、さうした賑りした氣持からではなく——恐らくは、また、昨夜も一枚も出來なかつたのかな？……そんな氣持なども手傳つて、理由もなく淚が流れて來るのであつた。どうしてこんなに、俺は、泣蟲なんだらう？ こんな泣蟲ではなかつた筈なんだが、して見ると、やつぱし、俺は、この女達の言ふやうに、ほんたうに神經がどうかしてゐるのかしら。肺病でもないんで、單純に、アルコール中毒から來る神經病なのかしら。さうだとすると、一層、俺の生活といふものは、絕望的なことになる。自分はこれまでにも、いろ／＼の場合にも、肺病も、胃潰瘍も、腦溢血でさへも、恐ろしく思つてはゐない。たゞ、神經病だけは——氣狂ひだけは困る。氣狂ひだけはなりたくないと、幾度も、書いて來た。肺病の場合の親しい幾人の人の死よりも、氣狂ひで斃れた一人の叔父の死は、どれ程強い自分への脅迫であるか分らない。自分は、この過度な飲酒から、もう一度血を吐いて、死ぬことが出來たら、自分としては不足はないのであるが、それが、そのアルコールが、自分の神經病をすゝめるためにのみ役立つてゐるのだとすると、どういつていいか分らなくなるのである。「死ねたら、君、そりや何んでもないことだけど、死ぬにも死なれず、仕事なんか出來なくなつて、何年も生きてゐなければならない……さういつた場合のこと

も考へて置かなくつちや、例のないことでもないんだからねえ。……何時か先生に言はれたこともあつたのである。基子たちのことにしても、自分としては、いろ／＼諦めるところは、諦めなければならないのだ。自分は、むしろ、第二の咯血に襲はれて、頓死的な死に方が出來たとしたら、自分だけとしては、幸福だと思ふのであるが、氣狂ひとして、それも、正當に氣狂ひとして理解されない幾年かの生活、病勢がすゝんで、全然の氣狂ひとしての醜骸を、世の中に晒す――それも考へやうによつては、孰らでもいゝとさへ思はれることがある、どちらにしたところで、大したことではないぢやないか。完全に自分を失ふことと、緩慢に、徐々に、自己を失つて行くといふだけの異ひに過ぎないではないか。お前の場合では、そこの差別なんか、それ程重大なものぢやないよ――斯う自分は、自分に言つても見るんだつたが、それにしても、兎に角に、自分は氣狂ひは怖いんだ。まだしも、肺病の毒素が、自分の神經を刺戟して、發作的の行動をさせるんだと、自分から思つてゐたはうが、まだしも氣安い感じなのである。女達が、自分の發熱の狀態、それだけからしても、立派に、その病氣であることを知つてゐて、それでも、女の狡い本能から、自分に仕事をさせようと思つて、何處までも、自分を單純な神經衰弱者扱ひにしてゐるのだとすると、彼女等は、二重に自分を冒瀆してゐるのだ。彼女等は、殊に、トモ子の場合では、此女の父の病氣の場合と同じやうに、自分を劬つて吳れて、氣狂ひ扱ひなどにはしないがいゝのだ。彼女までも一緒になつて、自分を神經痛から來る發作的な言動のやうに思ひ込んだか――或は彼女の父の場合と同じやうには、考へるに耐へないやうな女の神經から、故意にでも、さう考へずにはゐられなかつたのだ。彼女の父も、ちやうど四十だつたし、自分も、その同じ年になつてゐる。ちやうど七周忌の來てゐる父のことを思ひ、さういつたいろ／＼複雜な女らしさの感情からも、自分の病氣を、彼女の父の場合とは同じやうに考へたくなかつたのかもしれない。彼女は、ひと頃看護婦の見習ひのやうなことをやつたらしいこともあるが、それも、身體が弱いために、看護婦にはなり切れなかつたらしいが、さういふやうなこともあるので、病氣のことなどについては、可也詳しい知識を持つてゐるんだつた。彼女の父が、理想家であつたやうに、彼女も亦、一種の理想家といつていゝのかもしれない。幼稚園の保姆になることが、彼女の一等の理想らしい。その準備にもと、看護婦志願もしたものらしいが、何しろ體質が羸弱いのである。それで、その方も、どうしても、深入りして行くことが出來なかつたらしい。それやこれやで鄕里を出て來たのであらうが、それだけに、病氣のことなどに就いては、實に詳しいものである。

「ホヽウ？　あなたが、お父さんの病氣を、知らなかつたとは、へゝんですな。診斷書通り、腹膜炎と思つてゐたんですか。あれも、あのAさんだから、さういふ診斷書を書いて吳れたんぢやありませんか。あなたの祖父さんの場合だつてさうですよ。立派にその方の病氣なんぢやないですか。あなたが知らなかつたとはひどいなあ。……」

「ほんとに知りませんでした。父の場合もさうです、祖父さんの場合なんか、わたしなんか極く小さかつたもんですから、そして非常に可愛がつて吳れて……わたしが初めての孫だつたので、迚も可愛がつて……どんなに、おぢいさんには可愛がつて貰ひましたか、そんなもんですから、ちつともさういふ病氣のことなんか、知りませんでした。だから、小父さんにそんなこ

とを言はれると、ほんとに分らなくなつてしまひますわ。……」

「分らなくなるといつたところで、それは、ほんとにさうだつたんですよ。だから、僕のことだつて、あなたが言ふやうなものぢやないんだ。立派な結核患者なんぢやありませんか。それを、あなたまでがおせいと一緒になつて、アル中のやうなことを言ふのは、ひどいです。氣狂ひなんか、そんなにざらに出てたまるものですか。やつぱし、單純な肺病さ。あなただつて、やつぱし、同じやうなわけなんだらう。まさか神經病は傳染しやしないだらうが、肺病の方はさうはいきませんからね。ユミ子のことも考へてやつてくれなくちや。……」

どうかすると、斯ういつたやうな言合ひをはじめることもあつたが、だん／＼自分の方が、自分の目下の醜いとも淺間しいとも言ひやうのない生活を見てゐられるに耐へないやうな氣持になり出した。確かに肺病だと思つてゐるのに、アル中からの神經病だと誤魔化さうと努めてゐるらしい彼女の心使ひは、一應は首肯けもされるのだつたが、自分は、どうかすると、憎惡的の感じを唆られた。「あなたのお父さんの場合だつてさうだつたし、こんなやうな生活をしつゞけて來て、肺病にならないなんか、むしろ、不自然ですよ。なるのが當然なんだ。空想とか、狂熱とか、いつたやうなものは、順潮にはけ口のある場合はいゝが、はけ口が止まつて、それが內訌する場合は、大抵肺病ですよ。要するに、あなたのお父さんも、戰士だつたと同じやうに、僕だつて戰士なんだ。いやに氣狂ひ扱ひされては困る。……」斯うも自分は、叱るやうに言つたりすることもあるのだつたのだが、が、何處までも、彼女は、肺病血統だとおせいに思はれたくないのか、彼女自身の病症に就いても、鼻のせゐだとか、咽喉の惡いせゐだとか言つて、おせいには話してゐた。だが、自分も醫者ではないのだし、また、自分の身體を醫者に診せて、養生をして、健康になりたいと思ふやうな氣持もないので、全然、醫者にかかつてもゐないくらゐだから、自分の身體のことも解らないが、勿論、トモ子の身體のことなんか解りはしないのだが、それにしても、彼女が、どんな風に自分の病氣のことを判斷してゐたのか、自分にも解りかねる氣がし出した。酒亂的な發作が、相變らずつゞき、三日にあげず例の、蒲團卷きの刑を自分は受けて來てゐたのだが、さうしたある日の午後だつたのだが、新聞の社會面に大きく出てゐた、ヒステリイ性變質症患者が診療に來てゐた醫者をピストルで擊つた――さういつた記事を、トモ子がおせいに讀んで聽かせて、無智なおせいが「さうですわね。ほんとに、よく似てるわ。やつぱし、さういふ病氣なんでせうね」などと、エヘラ笑ひをしながら、相槌を打つてゐるのを、隣りの部屋の蒲團の中で聽いて、自分は、やゝ悚然とした氣持に打たれたのだつた。自分は、何んの理由といふこともなしに、トモ子に、出て行つて貰ふことにした。强ひて辯護的に言へば、明日にも家を解散するかも知れないから……これだけのことで、不憫にも思はれたが、彼女の只管な辯明も受けつけないやうな頑な感情を制し切れない、漠然とした憤ろしさの感じだつたのだつた。自分は、全體として、受ける可きでない侮辱を受けたやうな氣がされて、腹の底から冷めたい氣持がされて來るのだつた。斯うして、彼女とも、かれこれ四ヶ月ほどで別れることになつたのであつた。

（昭和二年一月）

小傳・著作年表

小傳

明治二十年一月青森縣弘前市に生る。同縣碇ヶ關村小學校に學び、十八歳の時上京、東洋大學に入學せしも卒業せず。夙に徳田秋聲氏に師事し、其の後同氏の紹介にて相馬御風氏の門に出入し、光用穆、舟木重雄、相馬泰三、廣津和郎、谷崎精二等の早大文科出身者と交る機會を得、大正元年九月、前記數人と共に雜誌「奇蹟」の同人となる。翌年「奇蹟」廢刊、大正七年三月、『子をつれて』を「早稻田文學」に發表してより漸次文名高まり、其の特異なる作風文壇に重んぜらるゝところとなりしも、寡作の爲め貧困に脅かさるゝ事屢々なり。大正八年冬、神奈川縣鎌倉建長寺寶珠院に入り、創作に專心す。此の頃より胸部の疾患一進一退して、執筆一層意の如くならず。大正十二年九月、關東震災後上京して、本郷弓町に下宿す。十三年秋、日光湯本に遊び、二ケ月後歸京。十四年四月、市外世田ケ谷三宿に居を移す。昭和二年、病勢漸く進み、傳染病研究所、及び七里ヶ濱鈴木療養所に入りて治療に務めしも恢復せず、昭和三年七月二十三日夜半、三宿の寓居に於て逝く。享年四十二歳。

著作年表

小說

題名	年月	發表誌
哀しき父	大正元年九月	奇蹟
惡魔	大正元年十二月	奇蹟
池の女	大正二年二月	奇蹟
贋物	大正六年二月	早稻田文學
奇病患者	大正六年四月	國民評論
姉	大正六年五月	早稻田文學
雪をんな	大正六年七月	處女文壇
子をつれて	大正七年三月	早稻田文學
兄と弟	大正七年五月	大學及び大學生
呪はれた手	大正七年九月	秀才文壇
遁走	大正七年九月	新小說
泥沼	大正八年一月	新小說
急行券	大正八年	讀賣新聞月曜附錄
火傷	大正八年四月	文章世界
青い顏	大正八年五月	新潮
馬糞石	大正八年七月	新小說
不能者	大正八年八月	改造
風聞	大正八年十月	解放
遊動圓木	大正八年十月	雄辯
無心に	大正八年十月	文章世界
愚作者と喇叭	大正八年十二月	新小說
千人風呂	大正九年四月	解放
家鴨のやうに	大正九年四月	雄辯
春	大正九年五月	文章倶樂部
小さな犧牲者	大正九年六月	婦人公論
惡夢	大正九年六月	改造
M氏の失策	大正九年九月	新潮
暗い部屋にて	大正九年十月	解放
仲裁人	大正九年十二月	新小說
村長の手記	大正十年一月	解放
浮浪	大正十年五月	國本
冷笑	大正十年五月	野依雜誌
埋葬そのほか	大正十年七月	改造
姉を訪ねて	大正十年七月	人間
仲間	大正十年十月	野依雜誌
雨	大正十年十二月	中央公論

題名	年月	掲載
本來の面目	大正十一年一月	太陽
父の出鄕	大正十一年二月	中央公論
朝詣り	大正十一年二月	改造
疵	大正十一年七月	新潮
不良兒	大正十一年八月	改造
歳晩	大正十二年一月	新潮
おせい	大正十二年一月	改造
父の葬式	大正十二年二月	中央公論
日なた	大正十二年三月	新潮
病友	大正十二年六月	局外
ある夜	大正十二年四月	改造
M君との話	大正十二年九月	改造
迷信	大正十二年十一月	隨筆
遺產	大正十三年二月	改造
蠢く者	大正十三年四月	中央公論
妻の手紙	大正十三年五月	隨筆
落葉のやうに	大正十三年六月	婦人公論
椎の若葉	大正十三年七月	改造
從弟	大正十三年九月	女性改造
湖畔手記	大正十三年十一月	改造
血を吐く	大正十四年一月	中央公論
バカスカシ	大正十四年二月	改造
霜枯れ作家の話	大正十四年三月	世紀
死兒を產む	大正十四年四月	中央公論

題名	年月	掲載
弱者	大正十四年八月	新潮
われと遊ぶ子	大正十五年一月	中央公論
もぐる	大正十五年二月	中央公論
海岸にて	大正十五年四月	中央公論
W老伯	大正十五年四月	新潮
醉狂者の獨白	昭和二年一月	新潮
忌明	昭和二年四月	文藝春秋
感想		
醉狸州七席七題	大正十三年六月十五日	中央公論
不愉快な程度	大正十五年五月	新潮
敢て陳辯	大正十二年十月二十七日	時事新報
小感十一篇	自十五年一月至二年三月	不同調
冗語二篇	昭和二年三、四月	不同調
醉狸州閑話	大正十五年九月	不同調
お詫び	昭和三年六月	文藝王國
隨筆		
北の原野を夜汽車で過ぎる時など	大正十三年三月	中央公論
近所の床屋の話	大正十四年三月	改造
僕のポンチ	大正十二年十一月	文藝春秋
歳暮酒話	大正十四年一月	文藝春秋
愚癡とクダと嫌味	大正十四年二月	新潮
この頃	大正十三年三月	隨筆
故鄕に歸り行く心	大正十二年十二月	中央公論
一種の寂莫として感じ	大正十二年十二月	中央公論

題名	年月	掲載
三宿にて	昭和二年二月十五、六、七日	時事新報
日錄		
三月の日記	大正八年四月	新潮
ボケ日記	大正十四年三月	文章俱樂部
作品批評		
讀んだものから	大正十三年七月	隨筆
讀んだものから	大正十三年八月	隨筆
星湖氏の月評脫線 〃	十二年一月廿七、廿八日	時事新報
菊池君に	大正十四年一月十六日	報知新聞
「戀愛行」の作者に	昭和三年六月	「戀愛行」跋
人物記		
相馬泰三氏の印象	大正八年七月	新潮
廣津和郞氏の印象(一)	大正八年二月	新潮
廣津和郞氏の印象(二)	大正十三年七月	新潮
宮地嘉六氏の印象	大正九年十月	新潮
谷崎精二氏の印象	大正　年九月	新潮
宇野浩二氏の印象(一)	大正九年二月	新潮
宇野浩二氏の印象(二)	大正十三年八月	新潮
牧野信一氏の印象(一)	大正十三年九月	新潮
牧野信一氏の印象(二)	大正十五年五月	新潮
酒中印象二三	大正十四年三月	中央公論
花袋先生の溫容	大正十三年六月	隨筆

宇野浩二集

僕はいつでも小説を樂んで書く。又しばしば詩人の心持のやうになつて、歌ふやうな喜びで書く。これ迄もこれからも。

宇野浩二

苦の世界（前篇）

一　私といふ人間

ヒステリイの女子に惱まさるゝこと
町の樂隊に向つて心に叫ぶこと

その頃、かれこれ一年近くの間、私たち、私の母と私のをんな（妻と呼ぶよりも、少なくとも私にだけは、斯う言ふ方がよく感じが出るのだ、）とそして私とは、東京府下澁谷町の、或竹屋の奥の六疊の座敷を、間借して住んでゐたのであつた。私たち三人は、冬は一箇の炬燵に三人の足をそろへて、夏は一張の蚊帳の中に三つの枕をならべて、そして寝たことであつた。――諸君、しかし、斯う言つたとて、これは何にも私たちの平和を意味するのではない、反對に、これは私たちの不如意な間借生活の慘さを語るものである、平和どころか、これから私は私たちの難儀な生活に就いて話さうとするのである。――私たちはその家主の竹屋に・間代として一人前幾らといふ、炊いてもらふ米の代を拂つてゐたので、毎朝私やをんなの起きる時分には私たちの部屋の隅には、もういつも私たちとの境の襖を開けて、竹屋の女房が運んでくれる、それは私たちの一日分の食料であるところの、湯氣の立つ御飯の櫃が置かれてあるのであつた。が、私の母はさうではなかつた、彼女は私たちのお茶をこしらへてくれるために、私やをんなよりは、ずつと早く起きるのが常なのであつた。

それなのに私のをんなは、女子のくせに、私と一緒か、或ひは屢私よりも遲くでなければ、たとひ目を醒ましてゐても、なか〳〵床から離れないのが常なのであつた。だから、大抵の日毎に、母と私とは既に起きて、顔を洗つて、無言で食卓に向ひ合ひながら、彼女の起きて來るのを待たねばならなかつた。私は、それは私たちより早く起きてゐるのであるから、十分お腹を空かしてゐるに違ひない母に、只管、をんなの機嫌を損ねる事を恐るゝの餘り、お先へどうぞ、とさへも言へないのであつた。それなのに私のをんなは、漸く起き出てからも、彼女が早く食卓に着いてくれるのを、待ちかねてゐる私たちには何の遠慮もなく、ゆつくりと顔を洗つて、幾度も形を直し直し髪を結ひ上げて、丹念に化粧を凝らして、母と私とを待遠がらせたり、そればかりか、更に惡い時は、食卓にはやつと着くには着いても、急に、昨日まで喜んで食べてゐたものでも、實はそのお菜は嫌ひだつたのだとか、毎日つゞくからなぞとか言つては、それを少し耳の遠い母には聞えぬやうに私に傍白して、突然今日は御飯を食べないと言ひ出したり……それほど、彼女は至極な我儘者なのであつた。彼女は何でもない事にでも、一寸氣分がこじれると、氣狂めいたヒステリイの發作の狀態になつて、さうなると、無論彼女自身にもどうにも出來ないのであらう、果は母の手前をも、襖一重隔てて住んでゐる竹屋の家族の手前をも忘れて、いろ〳〵な仕方で暴れ出すのが屢なのであつた。泥々になつた往來に足袋はだしで飛出したり、縁側の下の地べたに着物のまゝで寝轉んだり、往來の人々が耳を立てて立止る程の大きな叫聲を上げて泣いたり、そして母のゐない時は夫たる私を打つたり、時としては蹴つたり……

それと言ふのも、元を正せば、みんな私が

惡かつたからだと言ふことになるのかも知れない。が、さう言ひ切つてしまへば、話はそれ迄である。讀者諸君、そこを辛抱して、詳しい話を聞いてほしいのだ。――と言ふのはもと〳〵私たちは世の普通の仕方で、夫婦の縁を結んだ者なのではなかつた。――諸君よ、大正八年の今日、こんな事を言ふと、殊更異を立てるやうに聞えるかも知れないが、さうではない、この私を見せしめに、「親のゆるさぬ不義いたづら」はゆめ〳〵なされるな、と私は眞面目に言ひたいのだ。

さて――元來私のをんなといふ者は東京の生れなのであるが、故あつてその前の年の秋二ケ月ばかりの間、東京から三十里ほど離れた、近縣の或町で藝者に出てゐたのであつた。私たちは彼女が藝者になつた以前からの戀仲であつた。が、それも逢ひ初めてから漸く僅の間のことであつた。だから、彼女が藝者になつて、別れると共に、私たちの感情は激しく燃え上つたのであつた。

丁度その時分のことであつたが、國の方にゐる母の唯一人の兄の病氣が、危篤だと言ふ報が傳へられたので、母はその看病のために國へ歸つてしまふし、私は僅四間ほどもない小さな借家住居ではあつたが、そこに唯一人取殘されて、無上に寂しい日を送つてゐたのであつた。そこへ、離れてゐた彼女からの手紙を受取つたので、私は待ちうけてゐた者のやうに、そこそこにその家の留守を或友人夫婦に賴んで、その彼女の勤めをしてゐる町に出かけて行つたのであつた。

ところが、いよ〳〵東京に歸ると定めた日のことであつた。その日は午前に來た時から、ともすると彼女の會話が穩かでない方へと行つたのであつたが、それが到頭ヒステリイ的な發作に破裂したのであつた。發作といつても、或種のヒステリイ病者の樣に氣絶なぞするのではなく、（その後それが起る度に私はどんなに寧ろその方を望んだことであらう！）彼女は一途に我儘につて、大きな聲を上げて、人前などを憚らなくなつて、暴力を出して、無理を言つて、例へば此間借した金を今すぐ返せといふ、今持つてゐないから明日都合して返さうといふ、持つてゐるものなら返せとは言はぬ、持つてゐないと思ふから今すぐ返せといふのだ、と言つた風なことを言つて、そして最後に泣くのであつた。後でその時のことを思ひ合はすと、丁度その翌日からだつたか、彼女は女子の毎月の病氣になつたのであつた。あゝ、どんなに私はその後彼女と同棲してから、この『毎月の病氣』の時分を恐れるやうになつたことか！そして私は、當人の彼女でさへ氣にしないでゐる、その一日前に、ちやんと彼女のために脫脂綿の用意をして置いてやることさへ出來る程になつたものであつた。

「あなたは一體何しに來たの？」とその時彼女は吐出すやうに斯う叫んだ。

「……」

「默つてちや分らないぢやないの？　お金を持つて私を受出しに來てくれたんぢやないの？」

「そんな位なら、何も初からこんな處にぐづぐづしてる筈がないぢやないか！」と私は言つた。

すると、彼女はちよつと言葉に窮したやうに見えたが、いきなり「意氣地なし！」と叫びさま、何か手近にあつたものを叩きつけたのであつた。

そして次第に彼女の無理と、腕力と、大聲とが激しくなつて來たので、私は堪りかねて、同じく併し成るべく音を立てないやうに、暴力で應じたのであつた。さすがに男と女との力は違ふもので、私は一も二もなく彼女を組伏せて、

散々暴らしたが、その結果は餘よくなかつたのであつた。その後私は幾十回となく遭遇したこのやうな場合に、如何に彼女が暴力を以て攻めて來ようとも、決して抵抗しないことに定めた、それは抵抗さへしなければ一時間で濟むところを、抵抗すれば唯の一瞬だけ此方の暴力が相手を制するに過ぎなくて、而もその間の相手の可解がひどいのと、結局彼女のヒステリイ發作の時間を、二時間にも三時間にも延長する事を知つたので……。更に意氣地のない話だが、その無抵抗も餘り平氣らしい顔をして受流してゐると、やつぱし彼女の發作を助長するし、と言つて餘り苦々しさうな顔をしてゐると、又相手の慘忍性を刺戟することにもなるので、その中間をとると言ふ私は苦しい態度をとらねばならなかつた。兎に角この不思議な爭闘が可なり長時間に渉つてつゞいた後、やがて彼女は泣き出したのであつた、初は大聲を上げて、終にはさめ／＼と。そしてこれが發作の終を告げるものであつて、發作が起ると共に、私はその度如何にこの「泣き」を待ちまうけつゝ、苦しい責苦に堪へたことであらう！

もうこんなに時間が遲くなつては……家に歸つて行けない、」とやがて彼女はしを／＼と泣きながら言つた、「一緒に東京へ連れて歸つて……」

私はぎよつとした。が、私は言下に承諾の旨を答へねばならなかつた。

すると、彼女はちよつと一走り家に歸つて來て持つて來られるだけのものは持つて來るから、その間に私に出發の用意をしておいてくれと言つて、出て行つたのであつた。私はそれにも承諾の旨を答へねばならなかつた。今の先「こんなに時間が遲くなつては、家に歸つて行けない、」と言つた彼女が、それから十分と經たないうちに、持つて來られるだけのものは持つて來る、と言つて歸つて行つたことには、私はもう驚いてゐる暇がなかつた、それよりも彼女を連れて逃げるといふことに、激しく胸を動悸させながら、そは／＼と急な出發の用意をしなければならなかつた。──

その日から私たちは暗い影を持つた生活をせねばならなかつた。彼女を抱へてゐた藝者家では無論私たちの關係を知つてゐた。だから彼女の行方を探す爲には、當然私の所在を探すに違ひなかつた。そこで私はもう私と母とが住んでゐたそれ迄の家に歸ることが出來なかつた、のみならず、警察の帳簿なぞから探し出されないために、他人の名前を名乗つてこの郊外の竹屋の座敷に侘住居をするやうになつたのであつた。言ふ迄もなく、友人夫婦に頼んでおいた留守宅へは、その後藝者家の方からいろ／＼な人間が、いろ／＼な方法で探りに來たさうである。私たちは疑はれないために、ずつと後になつてから、行方不明になつたといふ理由で、友人夫婦にこれ迄の家を疊んで貰つて、僅な道具は分けて一二の知人の家に預かつて貰ひ、極くその一部分だけの必要な品を、一方ならぬ苦心をして、この郊外の隠れ家に運ぶことが出來たものであつた。

しかし、苦勞は外よりも内に多かつた、と言ふのは、彼女は始終例のヒステリイの發作を起した、小遣がないと言つては起した、結つて來た髪の恰好が氣に入らないと言つては起した、その髪を破すのに、髪を結んである元結を私に鋏で切つてくれと言つて、その鋏の目付けやうが遲いと言つては、その元結がうまく、手早く切れなかつたと言つては起した。もつとも一々その理由を舉げて起す譯ではない、事實又本當の、根本の理由は彼女自身にもよく分らないに違ひない。

見たところは、彼女は大變大人しい女子なの

であつた。實際、彼女は極端なはにかみやで、或ひは人と挨拶をするのを、或ひは初めての人と會ふのを、言ひ換へると、少しでも人が、殊に年若い娘なぞが、きまりが悪いといふ種類の事を、それは私の様なよくその呼吸を呑み込んでゐる者さへが、なる程こんな事もやつぱしはにかむの對稱になるのか、と時々意外な發見に驚かされた程、さういふ風な一切の事を、病的にはにかむ質なのであつた。だから、そんなに我儘者でありながら、彼女が思つた十分の一も着物をこしらへてくれるどころか、彼女自身の小さい慾望を充たすために、往々却つて彼女自身の着物を質に入れて失くなすやうなことになつたり、小遣が十分に供給されなかつたり、一口に言ふと、彼女の夫たる私が餘りに不甲斐なく貧乏であるといふことや、そして彼女の夫たる私が大人しいといふだけで、てきはきした、要領を得た男でないといふことや、さういふいろ／＼な不滿を、彼女はさういふ性質から、平素は口に出さずに含んでゐるために、それが時々彼女のヒステリイ性に助けられて、前に言つたやうな、又後でいろ／＼と述べるであらうやうな、病的な發作を彼女に起させるらしいのであつた。

私はそれを悉く知つてゐる。けれども、實に心では彼女を愛する私だが、それに依つて稍々救はれると思はれる、私たちの平和を得べき唯一の方法であるところの、少し十分な金さへも、私には得るだけの腕がなかつたのであつた。

「何故あなたは、」と彼女は屢々言つた、「私が初にあなたと一緒にならうと言つた時に、逃げようと言つた時に、いゝ加減な返事をしないで、いけない、俺は甲斐性なしの意氣地なしなんだから、と白狀してきつぱりと斷らなかつたんです？……」そして最後には屹度吐出すやうに、「意氣地なし！」と斯う叫ぶのが常なのであつた。

或時は又彼女は、自分と自分の髪の毛を三寸ばかりも切つて、それを突然私のふところに捻ぢ込んだ。そして後になつて、又の發作の時にはその髪は私が切つたことになるのであつた。髪を結ひに行つて、うまく結へなかつた時も、やつぱしそれが私のせゐになるのであつた。着物を破る、――元より餘分に手元に置いてない物のことであるから、すぐ差支へて來る、買へない、若しくは質に入つてゐるのが出せない、そこで又發作が起るのであつた。更に私が困つたことは、何分間借のことであつたから、襖一重彼方には他所の人たちがゐることであつた。

意氣地なし！　そして全くその通りで私はあつたのだ。けれども、彼女も亦言ひやうなく悪いのであつた、何故と言ふのに、彼女のヒステリイは妙にこじれて來ると、彼女自身でさへ屹度後になると不快でたまらないだらうと思はれるやうなことを、往々口にするのであつた。あるべき事か、彼女はわざと人に聞えるやうな大きな聲で、「言ふぞ、言ふぞ！」と叫ぶのであつた。そしてその嚇し文句は、無論、初はそこまで言ふつもりではないのだらうが、さう言つてゐるうちに、つい止むを得なくなつて、彼女の口から出てしまふのだとは、私も察するに難くはないけれど……即ち、彼女は、聞いてゐる私たちが十分はら／＼する程、私たちが僞名をしてゐるといふことを半分口走つたり、かと思ふと、これから直警察に行つて、私が彼女を藝者家から誘拐したのだと白狀してやると叫んだりするのであつた。――

そのうちに、國の母の兄が死んで、その葬式を終へると共に、母は歸つて來ることになつた。多少のことは前以て手紙で知らしてはあつ

たが、母にまで僅々、說明がその當時の生活に就いてせられなければならなかつた。そして兎に角、停車場には私が母を迎へに行つて、そしてその六疊の部屋に案內して來たものであつた。彼女は初のうちは幾分母に遠慮をしてゐたが、直に馴れてしまつた。彼女の外に、母を加へると共に、そこで又私の苦勞は二倍にも三倍にもならねばならなかつた。

例へば、初はそつと私にだけ分るやうに、目や顏つきで今ヒステリイの發作が起りつゝあるぞと言ふことを、彼女が私に知らせる、そこで私は母に悟られないやうに微妙な表情を以て、何の理由だか分らない時でも、無條件にどうぞ詫るから氣分を直してくれと乞ふ、しかし三度に二度までそれが成功しない、やがて私と共に、母も感づいておど／＼し出し、と、もうみんなに知られたからには、とでもいふやうに、發作が益々增長して行くのであつた。

例の「毎月の病氣」の起る頃になると、私はそつとその事を母に注意した。母はそれを聞くとほつと溜息をついて、實に困つたといふ顏をする。この母の困つた顏が、死んだ彼女の兄の娘――私の從妹が幼い頃に、例へば玩具なぞをねだつて、買つて貰へなかつたやうな時にする顏とそつくりなのだつた。母とその娘の子とは叔母と姪との間柄だから、似てゐるのに何の不思議もない譯なのだが、不斷はさう似てゐるといふ程でもないのに、悲しい顏をする時に、老いた母の顏と、從妹の悲しむ幼顏が似てゐるといふことは、何でもないやうなことでありながら私の心を一層悲しませた。……

ふと、私が外出先から歸つて來て、私たちの借りてゐた部屋は、竹屋の裏口の太い竹材が藪の樣に立てかけてある間を拔けると、庭からすぐ緣を上つて入れるやうになつてゐたので、そつと忍び足に部屋の前に現れて、母と彼女とが仲よく一緒に何か用事でもしてゐたり、話でもしてゐたりするのを見出した時は、その時の喜びを私は言ひ現すことが出來ない！力一ぱいの聲で「萬歲！」と叫びながら部屋の中に上つて行つて、母と彼女との頰に、交る交る百遍も接吻したいやうな氣にさへなるのであつた。

私はまだ私の職業に就いて何にも語らなかつた。私は無名な畫師なのである。從つて、前にも述べた通り、貧しさは言ふ迄もないのだ。一年前、私がまだ母と二人きりでさゝやかに暮してゐた頃は、私はなるべく多くの勞力を強ひられる仕事を避けるやうにして、辛うじて私たち、母と子二人の口を糊するに足るだけの程度の働きをして、その殘りの時間を、少し大袈裟に言ふと、私の藝術の爲に、なるべく家に閉籠つて、十分享樂し得られるやうに、生活してゐたのであつた。けれども、私はさうして私たちの人數にをんな一人を加へると共に、定收入を得なければならない必要に迫られたので、前の年の暮から或無名な小雜誌を出してゐる、或小さな本屋の畫の仕事をするために、但し、それだけでは十分自宅ででも出來る仕事なので、お門違の雜誌の編輯まで、丁度それをしてゐた人が止めたのを機會に、自分で受持つことにして、私から出勤することを志願して、毎日、日曜日でもなるべく、その本屋に通勤してゐたのであつた。それは今も言つた通り、生活のための必要からとは言ひながら、今一つの理由としては、大抵の場合、私なしには決してヒステリイを起さないところの彼女と、たとひ半日でも、日のある間だけでも、外に出て、時と席とを同じくすることを避けるといふことが、どんなにか私の心の荷を輕くするからであつた。

朝、私はその六疊のわが家を、彼女の許す限

りなるべく早く出て、市内の方へと走つてゐる電車に乘る。電車が一停留場、一停留場と自分の家のある郊外を遠ざかつて行くといふことは夜が明けて行くやうな爽快な感じを私に與へた。それに反して、夕方、なるべく遲く、と言つても豫め彼女に歸るべき時刻を指定されてあるので、さうして自分の家のある郊外に向ふ電車に乘る時、その電車が一つ一つと下りるべき停留場に近づく時、その停留場には彼女が母と共に迎へに來てゐるのだ、私は神樣に、そのくせ、神樣なぞといふものは平生は殆ど考へたこともないのだが、「どうぞ、今夜も何事も起りませぬやうに！」と心の底から祈るのであつた。

朝起きてから朝飯を食べるまでの僅な間でさへ、前にも一寸述べたやうに、それが私には人知れぬ、並々ならぬ心遣ひなのであつた。まして、いつの程よりか、食事の時に一分間でも彼女より先に私が箸を下ろすと、彼女はもう食事をしないなぞと言つて困らせるやうになつた。無論、こんな馬鹿げたことは母に知らせられない、だから、何も知らない母は私に箸を取ることをすゝめる。（私たちよりもずつと早くから起きてゐる母は、無理もない、子供のやうにお腹を空かしてゐるのだ！）私としても母に體裁が惡いので、何とか言ひ繕つて彼女の箸を下ろすのを待つ。ところが彼女は、更に氣分の惡い時は、何にも知らない母が、ちよつと先に食べかけたといふだけで、私だけに例の合圖で、もう食事をしないと言ひ出すのだ。母はそんな事とは知らないから、何か外に氣に入らないことがあるのだらうと察して、どうしたのだと聞く。それでもどうしても彼女が食べさうにない時は、私は「少しお腹の工合が惡いんださうです、」なぞと言つて取りなした。「お腹の工合なんか一寸も惡くないんですよ！」といきなり彼女がその場で箸を投出すやうな時は、それはまあ特別の場合としても、兎に角さういふ時には屹度少しばかりの發作があつた末、それでは罰として今日一日社を休めとか、或ひは夕方特別に早く歸つて來て、活動寫眞に連れて行け、とか言ふことに折合が付くのであつた。そんな時、活動寫眞に行くだけの金の用意に、又貧乏な私は忙殺されねばならなかつた。だから、食事一つが、難なく進行した時の嬉しさ！―私はまつたくその日は特にその六疊の部屋に、神樣の榮光がさすやうな氣がした。さうして朝飯を濟まして、夕方の歸る時間を約束して、八月といへばもう午前八時でさへ既に町はかん〳〵と暑いのだ、燒くやうに照りつけてゐる日の中を、私は解放された、晴れやかな氣持で務め先に向ふのだ。だが電車の停留場までの僅な道程だが、その間を私は後から追駈けて來る者を逃げるやうに、すた〳〵と急ぐのであつた。

朝から町を何かの廣告の樂隊が行く、喇叭吹が一人、笛吹が一人、太鼓打が一人、それから旗持が二三人。

「喇叭吹君！」と私はそれを見て心の中で叫ぶのだ。「僕も君のやうに喇叭が吹きたいよ。胸を張つて、反り身になつて、君はこの暑いのに威勢がよささうだね。それがいゝのだ、青年は威勢のいゝのが何よりだよ。だが……よく見ると、君の顏色は青黑くて、誠に失敬な言分だが、如何にも營養不良らしいね、それにしても、なか〳〵君の喇叭は爽快な音を出すね。盛ん、盛ん！ 君はさういふ立派な武器があるんだから、それを思ひ切り鳴らし給へ、鳴らし給へ。僕もさういふ奴で、一つ大いに不平のありつたけを吹いて見たいよ。

「よおッ！」と又私は笛吹を見て心で叫ぶのだ。「笛吹君、君はまだ少年のやうだね。やれクラリオネットのメロディだとか、チャルメラ

のすゝり泣きだとか、昔の詩人なぞといふ一人よがりの人間共は、悲しくもないくせに悲しいやうなことを言はなければ詩が作れなかつたと見えて、君たちの神聖な器に勝手な氣焔を吹きかけてゐるが、さういふ僕もやつぱし同じやうな罪を犯してゐる譯かも知れないが、許してくれ、許してくれ、由來人間といふ奴は勝手なものさね。だが、その方がまだ〳〵罪が淺い方なんだよ。それから思ふと、今の詩人や小說家の方がよつ程質が惡いよ。やれ人道主義の、やれデモクラシイの、やれ勞働者の味方の、と實は流行かぶれでそんな事を叫んでゐるのだが、彼等は君たちが喇叭を吹き、笛を吹いてゐる程にも、本氣でやつてゐるんぢやあないんだよ。中には本氣のつもりの奴もあるが、そんな奴等は尙のこと阿呆の中のその又大阿呆で所謂度し難いといふ連中だよ。詩が厭になつたら、そんなものを止めて、田を作つたらいゝので、兩天秤の馬鹿野郎、元々詩作と田作は別々で、あんな奴等のいふことに迷はされてはいけないよ。……閑話休題、さぞ、笛吹君、この暑いのに辛いだらう。前を行く喇叭吹君に習つて、君も胸を反らして步いてゐるが、御苦勞、御苦勞！　一つ吹くのは父のためか、二つ吹くのは母のためか……

見れば君はなか〳〵紅顏の美少年だね。女を用心し給へ、女を用心し給へ！——おや〳〵、太鼓叩君！　君はもう餘程の老年らしいね。前の二人と打つて變つて、腹から上が大分屈んでゐるのは、滿更大きな太鼓の紐を、兩肩から掛けてゐる重みの爲ばかりではあるまい、どうも君の額は、流行言葉でいふと、人間苦そのものだね。妻は病床に伏し、子は饑に泣くか、それとも妻も子も振り捨てて、太鼓を叩いて儲けた金をすつかり飮んでしまふのか？　どちらでもよい、どちらでも同情するよ、どちらにしても君の値打に上り下りはない筈だ。……おや、時々調子外れな太鼓の入れ方をするね。そら、喇叭君も、笛君も、等しく君を振り向いたぢやあないか？　困つてるんだよ。……おや、おや、今度はやけに叩くね。さうだ、さうだ、叩け叩け、やけに、やけに！」

二　浮世風呂

流し場に晝寢する二人の男のこと
首縊りを加勢した酒飮男のこと

私は日曜日でも何彼と口實をこしらへて、勤め先に出かけるやうにしてゐたが、でも三度に二度まではさうもならなかつた、それに、うつかり外へ行かうなぞといへば、彼女はすかさず一緒に行くといふに定つてゐたから。といつて、暑い夏の日を、更でも竹村に取圍まれた、苦しい一間に籠つて、彼女の御機嫌を取りつゞける事の辛さ！　彼女は自分が起きてゐる時には、決して私に晝寢することをさへ許さなかつた。駄洒れて言ふと、日曜日は私にとつて Holi-day ではなくて、Hell-day であつた。

ふと、或時のこの Hell-day の午後のこと、私は錢湯に出かけて行つたのであつた。客は外に一人もゐなかつた。もう可成りの時間中客がなかつたものと見えて、流し場の板の間は殆ど乾き切つてゐた。それでゐて、そこは始終水氣のある所だけに、どこか底の方には濕り氣があつて、冷々としてゐるので氣持がよかつた。ふと私はこゝで誰に邪魔もされずに晝寢をしたら、どんなに愉快だらうと思つた。そこで、私は早速枕の代りに桶を持出して、手拭を腰のまはりに當てがつて、裸のからだを板の間に横たへたのであつた。

「ほお！　これは妙だ、」斯う思はず會心の叫びを發する程、私は心の晴々するのを感じた。「この天井のこと、この天井のこと！　我々日本人は平生あんな低い天井の家に住んで

ゐるといふことだけでも、何かにつけて非常によくないことに違ひない。」

私は、一旦死んだ者が息を吹返す樣な、それが若し喜ばしいものであるならばダ、心地よさを感じて、第二の青空とも見做し得べき、その湯屋の高い天井を仰向きに寢ながら眺めた。少しばかり工合の惡いのは、堅い桶の枕だが、それには桶と頭との間に手を入れて、さうしてゐるうちに私はいつも寢る時のやうに身體を横にして、いつの間にか眠つてしまつたのであつた。

どの位の間眠つたか覺えてゐないが、ふと目を醒ました瞬間、私ははツとした、それはいゝほんの一瞬間だつたが、自分の姿が、すぐ前に鏡があつて、映つてゐるのではないかと私が疑つたのも無理ではなかつた、そこに私と並行して、私を眞似て、私と向き合つて、晝寢をしてゐる人間を見出したからである。

深い夢の奥からそろ／＼と現に復ると共に、すうつと目を開いた私は、偶然に相手の男も丁度そのやうに目を開きかゝつてゐるのを發見した。何だか少しきまりが惡いので、私の方からわざと微笑んで見せて、

「いゝ氣持ですね、」と聲をかけた。

「えゝ、」と彼は別に笑顏もしないで無愛想に答へた。

私は物足りない氣がした。それと共に、こんな場合大抵の人なら、眞似をした方がきまりが惡くて、口數を多くきゝ、愛想を多く言ふ筈なのに、彼には少しもそんな樣子がないのに私は驚かされた、そして反對に私の方がきまりの惡い思をしなければならなかつた。が、少し落着いて來ると、私はこの變人らしい相手に興味を起すと共に、同病相憐む、許してくれ、彼は私なぞとは同病ではないかも知れないのだが、そんな氣がして、懷しさを感じ出した。

「わが友よ！」斯う私は西洋流に呼びかけて、「君も亦こゝに天國を見出したのか？　語り給へ、君はどういふ苦勞を懷いてゐるのか？」といふやうなことを言つて見たかつた。だけど、一向相手が無頓着な風で、且無口らしいので、私は更に話しかけることを斷念して、起上つて、湯槽の中に浸つてゐるところへ、突然大きな音がして入口が開いたので、何氣なしにはい、ツとしてその方を見ると、そこに彼女の顏が現れたのであつた。

「すぐ……すぐ、今歸らうと思つてた所なんだ、すぐ歸るよ！」と私は彼女が言ひ出さないうちに、狼狽てて斯う湯槽の中から叫んだ。私は歸り際に「お先に！」と彼に挨拶した。彼はまだ板の間に横になつたまゝだつたが、しかし今度は稍々口輕に「いや、さよなら！」とやつぱし寢たまゝで應じた。

その日から、つまり私にとつて編輯所の外に又一つの安息所が目付かつた譯であつたから、日曜日は無論のこと、或ひは社から早く歸つた時とか、又は社に遲く出かけて行つてもいゝ時とかには、何とか彼女の前はごまかして、彼女は實にわけもなくごまかされた！　その錢湯の晝寢に出かけたものであつた。三度目の時からは腰に卷くのと、顏の上に乘せるのと、（前者は普通の手拭でよいが、後者の方は顏の上に被せて、その餘で、桶の枕の頭觸りをよくするだけの、なるべく大きなタオルを要した、）都合二枚の手拭を彼女に内所で買つて、それを湯屋に預けておいた。私が行くと、その度毎にいつかの男とは必ず遭つた。聞いて見ると、彼は毎日來てゐるのだと言つてゐた。だから、この新發明の晝寢場所の晝寢方法は、最早や彼の方が私よりも元祖らしく見えた。けれども位置は初めての日の通り、私が壁際の方で、彼は私より先に來てゐても、必ず私のための場所を

開けておいてくれたものであつた。

さて、私と彼との話といふのはこんな風に始まつたのであつた。第一日の經驗だけで、私が彼を無口だと言つたのは、誤ではない迄も、少なくとも彼は一旦口を開くと、一種の立派な雄辯家であつた。

「あなたはお酒を飲みますか？」

二人とも天井を眺めながら、例の如く流し場の板の間で横になつてゐた時、彼は突然、だが目の位置は變へずに斯う言つた。

「いえ、少しも……」と私は答へた。「だけど、飲めたらどんなにいゝだらうと思ひます、どうかしてだん〳〵に飲むやうにならうと思つてゐます。」

「いえ、いえ。お止しなさい。決して酒なぞを飲むものぢやありませんよ。酒よりも……」

斯う言つて、彼は酒と比敵する惡いものを考へてゐる風であつたが、やがてつゞけた、「酒よりも、まだしも女の方が災が少ないです。」

「さうでせうか。」と私は言つた。そして暫く間をおいてから、思ひ切つて、「失敬ですが、それはあなたが女の難を御存知ないから、そんな事を仰しやるんですよ。」

「さうかも知れませんね。」と言つて、彼はちよつと微笑を浮べたやうに思へた、先にも言つたやうに、私たちは相並んで天井を見ながら話し合つたのだから、お互に顏を見合はしてはゐなかつた。

「隨分お飲りになるんでせうね？」と私は聞いた。

「いや、さうでもありませんが。」と彼は幾分恐縮さうな顏付をしてゐるらしく、無論、この時も私は彼の顏は見なかつたが、斯う言つて、「だが、あなたは、お察しする所、女の方の難が大分おありになるやうですね。ハヽヽヽヽ、結構ですね。」

「いや、決して……」と私は大いに恐縮して答へた。「それにしてもあなたの、その酒の災に就いての具體的なお話を伺ひたいものですね。女の難の方の話はどうかすると非常に厭味になつたり、要するに聞手には餘り興味のないものですが、酒の方は愉快で、壯快で、男らしくていゝやうに思ひますが……」

「ぢやあ一つお話しませうか？」と彼は案外氣輕に斯う受けた。「だが、斷つておきますが、これは決してそのよくある壯快とか、男らしいとかいふ類のものぢやありませんよ。もつとも酒の上では私もいろんな失敗もしましたし、就いては面白い笑ひ話も隨分あるにはありますが、今度といふ今度は、これは笑ひ話ぢやあないのです。もう私は酒には懲り懲りです、私はもうすつぱりと酒は止すつもりになつたのです。だから斯うして、毎日こんな所へ來て、あなたの眞似をして晝寝をしてるのです。……この話ばかりはまだ誰にも話したことはありません、又一寸話しかねるやうな譯のものですが、……えゝ、一つ懺悔のつもりであなたにお話しませうか……。」と彼は語り始めた。

「一週間ほど前のことですがね、私は本當に一滴も酒はやらないんですよ……一週間ほど前のことです、いや、避暑なぞといふ譯ぢやないんですが、三日ばかし行つてた時のことなんです。――實は、その二三日前に、譯があつて嚊と夫婦別れをしまつて、ね、いや、何でもないんです、いや、その話は御免蒙りませう、いや……」（「いや」といふのは彼の言葉癖であつた。「何でもないんです。」なあに、女の難には違ひありませんが、お話する程のこつちやないんです、いや、その方はあなたに讓りませう。私は酒の災の話をするんぢやありませんか？ それで、その銚子に行つ

て三日目の晩のことなんです、宿でもう彼此れ二升近く飲りましてね、尤も毎晩その位はやつてたんですが、どうしたのですか、それからふら〳〵と外に出て見る氣になつたのです、それが、いや大變なことになつたのです。

「まだ十時頃でしたらう。宿の女中なぞが止めるのも聞かずに、外へ出て、それから一寸した洋食屋のやうな所に入つて、そこで又麥酒を四五本も平らげたのです。それで止して、そのまゝ宿に歸つたら何の事もなかつたんでせうが、何といふんですかね、その意地の惡い惡魔にでも憑かれて、あやつられてでもゐたんでせう。それに、さすがに洋酒と日本酒とをちやんぽんに飲つたものですから、大分度外れに醉酊したものと見えますね。止せばいゝのにそれから何でも變な薄つ汚い家でした、その曖昧屋の樣な家へ上つたものです。女ですか、いや、眞白に壁のやうに白粉を塗りたくつたのが二三人もゐましたつけ、いや、さうなつたら女をどうのかうのといふやうな考よりも、唯もうやけに飲みたい一方ですね、所謂梯子酒といふ奴です、もつとも隨分惡ふざけはしたやうでしたがね。……

一そこで何でも女が、一體あなたはもうどの位上つたのですと言ふやうなことを聞きましたので、此方も此方で、酒が二升に麥酒がたつた半打だい、と言つたやうなことを言ひ返したやうに思ひます。そしたら女が、そんな猩々さんは燒酎の方が柄に合つてるとか何とか、勿論からかふつもりで言つたんでせうが、さあ、それから私は燒酎を出せ、燒酎を出せ、で食臺の上に錢を掴み出したりして、何となだめられても聞かずに、到頭燒酎を持つて來させたものです。そいつもがぶ〳〵と又一升近くも飲みましたかね、そして、それでも殊勝ぢやありませんか？ 歸るんだと言つて、白首共の止めるのも聞かないで、その家を出たんです。いや、その殊勝なのが惡かつたんです、今思へば、その家に泊つてしまつた方がよかつたんですね。

「それからです、御存知でせうが、あの松原のある海岸の方へ、ふら〳〵と千鳥足で出て行きました。何分いくら「のみすけ」だと言つても、少し「のみすぎ」だつたものですから、目はちらちらと霞んで來る、足元は危いといふよりも、もう一足も、身體ばかり前にのめつて、歩けなくなつて來たものですから、よく海に陷ちなかつたものですよ、波打際の可成り大きな岩でした、そこに倒れるやうに寄つ掛つてしまつたんです。いや、今だからこんな風にちやんと言へますが、その時は唯夢中で、どこをどう歩いて、その岩までやつて來たのか分りませんでした。

「そして、岩に寄つ掛つて、ぢつと目を閉つて、暫くの間死んだやうになつてゐたんですが、さあ、どの位さうしてぢつとしてゐたものですか、靜かな晩でしたから、醉つた耳にも波の音なぞがばかに氣持よく聞えたのを、今でもはつきり覺えてゐます。そのうちに閉ぢてゐた目を開いて見ますと、もう少しも霞まないで、あたりの物がばかにはつきり見え出しましたつけ、しかし、立たうたつて、とても足の方は、人形の足のやうで、ふら〳〵で、立てつこはありません、いや、もつとも立たうともしませんでしたがね。……ぢつと岩に寄り掛つたまゝ、空を見てゐると、私は生れてもう三十年からになりますが、そんなことは今まで夢にも思つたことはありませんけど、その晩ばかりは實に斯うお星樣といふものは、何とも言へぬ綺麗な淸らかなものだ、とつく〴〵さう思ひましたね、それにさつきも言つた氣持のいゝ浪の音でせう、そこへもつて來て、海邊には珍しく風のない晩で、夏

の夜なかといふものは、町にゐたつて實に氣持のいゝもんですからね、いや、それや何とも言へない氣持でしたよ。……一體、私は酒飲みのくせにあまり陽氣にならない方でしてね、從つていくら飲んでも決して亂暴なぞはしない方なのです。ところが、いや、その晩ばかりは、その波の音を聞いたり、お星樣なぞを眺めてゐる中に、却つて女どもに圍まれて騷がれると沈み込んでしまふ私が、生れて初てです、變な風に氣が浮々して來ました、そして亂暴も亂暴、實に質の惡い亂暴を働いた譯なんです。……

「ふと松林の方を見ると、一本だけ群の中から飛離れて、而もそれが一ばん目に立つて大きな木です、妙に章魚でも躍つてゐるやうな恰好をした、いやにによき〳〵枝の八方に出てゐる松の木があるのです、いや、それが又私のゐる岩に一番近いのです、と言つて勿論、十間ももつともありましたかな。……どうです、その松の木の下に、どうやら人間らしい恰好の者が動いてゐるのです。しかし、私はそれを見ても、別にちつとも驚きませんでしたね、今も言つたやうに、何を見てもお星樣と同じで、唯綺麗さつぱりで、沒交涉で、そして無暗に氣持がいゝばかりなんですからね。

―見ると、それは確に人間なんです、一人の男なんです、若いか年寄か分りませんがね、その男が暫くちよつと姿が見えなかつたかと思ふと、やがて何だか變な、重さうな物を松の木の下に運んで來ましたつけ。星明りで影畫のやうにではありますが、それが可成りはつきり、手に取るやうに見えるのです。今考へて見ると、それは石だつたんですね。何でもその石を二つばかり、可成り大きな奴ですが、二度に運んで來て、積んでゐるんです。それから……どうしたと思ひます？　男はその石の上に乘つて、下から上に出てゐる一本の枝を目がけて、帶のやうなものを二三度も三四度も、放り上げてやつと思ふ通りに引つ掛けた樣子でした。

「もう、私にはその男が何をするかと言ふことが、それ程醉つ拂つてはゐましたが、分りました　あなただつてお分りでせう？　首縊りです。……」

　いつとなく話手も私も、初は仰向けに寢てゐたのが、やがて横になつて寢たまゝ向ひ合ひ、そして遂には二人とも裸の身體を起して、足を投出したまゝ向ひ合つて坐つてゐた。

「……首縊りだと知つても、やつぱし私は少しも驚かなかつたですね、」と話手はつゞける。

―いや、本當です、譃ぢやありません、やつぱしそのお星樣を見たり、波の音を聞いたりするのと同じやうに、私の心は陽氣で、氣持がいいのです。そしてお星樣や、又波の音に對するやうに、何の意見も持ち得ないのです、たゞ無暗に氣持がいゝのです。

「いや、しかし、それはやがて變りました。さあ、何といふ氣持ですかね？　兎に角、頻りに何か言つて見たくなつたんです。そして意見も意見も、大變な意見を發表した譯なんです。それがお星樣や波の音と來るとね、いくらいゝ氣持になつたところで、こちらがいくら醉つ拂ひでも、餘りその身分が違ふやうな氣がしたんですがねえ？……

「『やあ、首縊り君！』と私はこんな風に始めたもんです。『よお、よお。君は實にいゝことを思付いたね、實に、實に！　いや、實に全く羨ましいよ、』斯う言つて、私は何でも一寸立たうとしたやうに思ひますが、足がとても言ふことを聞かなかつたので、すぐ思止まつて、やつぱりそのまゝ續けたやうでした。―何をくよくよ川端やなぎ……ぢやあない、さうだ、海邊の松にカ、結構、結構。人生首縊りなる哉、首縊りなる哉！　首縊り君、實に僕は君の精神を

見上げたものだと思ふよ、いや、君は實に：：おツとツとツとゝゝゝ』：：

「その時、例の首縊り先生はうまく枝から下げた紐に、首を乘せた迄はよかつたんですが、踏臺の石を蹴つて、ぶらんこにならうとする途端に、紐が切れたのか、それとも外れたのか、ばつたり地上に轉がつたのです。そこで私は、勿論醉つ拂ひのことですから、この通りとは言へませんが、いや、兎に角、大體こんなことを言つたと覺えてゐます。：：

「『それや拙いね、そんなこつちやあ駄目だよ。そんな拙いことをする奴があるもんか？：：』と言つてるうちに、彼は狼狽して、全く可笑しいほど狼狽して、まるで私の言葉が向うに聞えて、そのために彼は憤然としたといふ形で、大急ぎでやり直しに掛つたのですよ。『おッ！　感心、感心、又やり直しか。それ、それ、その心掛が肝心だ。』：：

「首縊り先生は今度は一度で手際よく紐を枝に引つ掛けました。先生は一生懸命ですし、それに大分距離もありましたから、勿論、私がそんな風に怒鳴つてゐるのも知る筈がないのです。私は幾度かその方へ歩き出さうとした樣子でしたが、結局岩に寄り掛つたまゝ、立上りもしませんでした。たゞ喋りながら、無暗と手を振つたり、足をばた／＼やつたものらしいです、その證據に隨分手や足に傷をしてゐました。

「『今度はうまくやつてくれ！　僕も及ばずながら君のために祈るよ。愼重に、愼重に！：：星月夜カ、銚子の濱にカ、松の木にカ、首を縊りてカ：：おゝ、おゝ、やつた、やつた。素的、素的、萬ざあい！』

「それから又どの位の時間が經つたか覺えてゐませんが、兎に角、そのまゝ眠つてしまつたんですね。目を醒まして宿に歸つた時はもう夜が明けてゐたか、或ひはまだ夜中だつたか、それもよく覺えてゐません。何にしても首縊りのことなぞはまるで忘れて、：中で宿に歸つて、そして夢中で寢てしまひました。：：

「あなた、それがどうだと思ひます？　その翌々日の新聞に出てゐたのですが、五十四歲で、無職で、つい先達てまで三十幾つとかになる女房があつたのですが、その女房に間男されて、逃げられたのださうです。だが、それはもう二週間も前のことださうで、自殺は結局貧のためだらう、と新聞に出てゐました。自殺は結局貧のためカ、自殺は結局貧のためカ：：ハヽ、ハヽ、ヽ：：」

話手はさうくり返し言つて、變な聲で笑ひながら、突然立上つて、「話はそれで終ひです。一つ湯に入りませうか？」と言ひ終らぬうちに、忽ちざぶんと湯槽の中に飛込んだ、そこで私もつゞいて飛込んだ。

彼もそして私も、長い間だまりつゞけてゐた。二人は無言で湯槽を出て、無言で身體を拭いて、まだつゞいて無言のまゝで着物を着始めた。

「まだ三十分や、一時間やそこいらはいゝでせう？」と帶を結び終つた時、（二人とも言ひ合はしたやうに同時に着物を着て、同時に帶を結んだので、）彼は斯う云つた。私が一寸その言葉の意味を解きかねて、返事をしないでゐるうちに、彼は又言つた。「日も蔭つたやうですから、どうです、そこいらを一寸散歩しませんか？」

「えゝ、えゝ、」と私はまだ半ば無意識に答へた。

湯屋から一町ほど歩いた所の、とあるレストオランの前に來た時、やつぱし二人はまだ無言で歩いてゐたが、彼が又突然、「お腹が空きましたね、ちよつと入りませんか？」

斯う言つて、私が躊躇して居る間もないうちに、彼はさつさと先に立つて、レストオランの

中に入つて行つた。
「隨分お見限りですね、」彼の顏を見ると、いきなりそこに居合せた女給仕が斯う聲をかけた、「もう死んでお了ひなすつたのかと思つてゐましたわ。」
彼がそれには答へないで、ゆつくりと卓子を隔てて私と向ひ合つた時、私は見るともなしに見ると、彼の顏はもういつもの通りの無口らしい、憂鬱な表情に變つてゐた。
「どうかなすつたの、さ?」と先の女給仕は更に彼の傍に近寄つて言つた、「ばかに元氣がなくなつたのね、暫く見ないうちに……」
「嚊と別れたからだよ、」と彼は稍々はしやいだ調子で答へた。
「まあ、譃ばつかり!」と女給仕は言つた。
「酒をつけてくれ。やつぱし酒、酒!……へささでしのがんせ苦の世界つてね……彼は斯う思はず口から出たのを、出してから、ふと私に氣がついて、ぐつと唾を吞み込んだ形で、一寸きまりの悪さうな顏をしながら、「さあ、今度は一つあなたの女の難の話を伺はうぢやありませんか!」とはしやいだ調子で言つた。が、その顏には少しもそんな話など聞きたさうな表情は見られなかつた。
「……」
その時、私は何とか言はうとして、ふと何氣なく、と言ふよりも、實は何か自分を追つて來る者があるやうな氣がして、入口に目をやつた途端! 忽ち自分で自分の顏色の變るのが感じられた、——どうして私のこゝに來てゐることを知つたのか、ひよいと私のをんなの顏が暖簾の切目に現れたことであつた。
私はぴよこんとゴム仕掛の人形のやうに椅子から立上つたのであつた。

三 難儀な生活

夜の町を的もなく歩く四十男のこと
二人の大人が花屋敷に出かけること

さて、私の勤めて居る本屋といふのは小さな家で、主人と、彼の母と、小僧との三人きりの家族であつた。
或日私は途上で、或女友達に出遭つて、住所を尋ねられたので、極端な嫉妬家であるところの私のをんなの思惑と、そして私たちが偽名をしてゐたことの都合上から、その本屋の内にゐると告げて別れたことがあつた。すると、それから二三日後のこと、その女友達から貰つた手紙を、私はうつかりして袂に入れたままで家に歸つて、それををんなに發見されたのであつた。何でもない女友達からの手紙でも、それがわざ/\自宅にではなく、出先に送られたといふことは、言ふ迄もなく、激しいヒステリイの發作を彼女に起させるに十分であつた。のみならず、それは次のやうな結果を引起したのであつた、といふのは、彼女はその場で無論激しいヒステリイを起して、例に依つて私たちを困らしただけではなく、その翌日彼女自ら本屋に出かけて來て、そこで再びヒステリイを起した末、本屋の主人の母に、以後私宛に女名前で手紙が來たら、みんな沒收しておいてくれと頼んだのであつた。
ところが、私の驚いたことは、頼まれたその老母が亦ヒステリイ患者なのであつた。彼女は救世軍の兵士だけあつて、謂はば正義派のヒステリイ患者だつたので、それを聞くと非常に私に怒つて、そんな不所存なことをする人は、今日限りこの家に出入して貰つては困ります、と大人の私を子供のやうに叱り付けた。で、主人の山本が見かねて、それに一言二言抗辯すると、彼女の息子も亦不正に組したといふので、遂に突然目の色を變へたかと思ふと、狂氣のやうに暴れ出して、そこらのものを手當り

次第、本を投げつけたり、インキ瓶を打つつけたりした。

私のをんなに會ふ迄は、私はこの世にヒステリイといふものの存在を、耳にしてはゐたが、目に見たことはなかつた、が、彼女を知つてから、（この本屋の老母はほんのその一例に過ぎないのだ、）何と私は幾人のヒステリイを見、又何と世にヒステリイ患者の多いのに驚き且恐れたことであらう！

山本は、その時初めて私に、今迄は隱せるものならばと思つて隱してゐたのであつたが、彼も亦實は長年の間、彼の母のヒステリイのために、苦勞をしてゐるのだといふことを打明けた。（彼は既に四十一歳であつたが、いまだに獨身であつたのだ。）そして彼は私のために、彼の母に内所で、その日から雜誌の編輯所、卽ち私の仕事をする所を、同じ神田區のA――といふ下宿屋の一間を借りて、そこに移してくれたのであつた。

私は毎日、保養に行くつもりで、なるべく彼女の許す限り早くから、彼女の許す限り遲くまで、そこに通つて行つたのであつた。山本も亦、暇さへあると、その下宿屋の編輯所に顏を見せた、彼も亦ここを唯一の保養所にして居るのに違ひなかつた。そこで私たちは、二人の女友達のやうに、いろ／＼なことを打明けて、話しふ合やうになつたのであつた。

元來、私は性分として、外に出て人に接してゐる時は、出來るだけ愛想よく、機嫌よく振舞ふことを心がけた代りに、家に歸ると、忽ち我儘になつて、氣むづかしくなるといふ風であつた。けれども、その頃の私の家は、今も言つた通り、それが又決して私の安息所ではなかつた。そこで、家に歸つて、一日の疲れのために悒鬱な氣が私を襲つて來ても、私は自由に溜息一つすることさへ許されなかつた。そればかりか、外よりも家に、人に對してよりも内のいゝをんなに對して、私の心勞は甚しかつたのであつた。だから、私はこれ迄とは反對に、どうかすると憂鬱な顏を内から外に、持運んで行かなければならなかつた。

さうして私が日の午前から、暗い險しい顏をして、下宿屋の編輯室の一間の机に、何もしないで頰杖をしてもたれてゐると、やがて間もなく、玄關の方から廊下を辿つて近附いて來る、聞きなれた咳の聲が聞えて來るのが常であつた、そしてその咳の主なる山本の顏が、障子を開けて現れるのであつた。彼は慢性の氣管支加答兒患者で、二分乃至三分間毎に一度づつ位、ひどく大きな、變挺な音を發する、咳嗽をするのが癖で、そしてそれが日に依つて、ひどい時と稍々輕い時とがあつた。

「今日は、」と大抵の場合それ以外の言葉を發するさへ物憂さうな彼は、私の顏を見ると、一寸笑顏だけを作つて、言つて、そして適當な位置に坐るのであつた。彼の顏も亦、いつ見ても少しの明るさをも持つてゐたことがなかつた。

さて、その日は、もつとも例のないことではないが、彼が私よりも先に來て、いつもよりも一段と憂鬱な顏をして、腕組をして机の前に坐つてゐたのであつた。

「今日は、」と私は言つた。「今日は大變早いぢやありませんか？」そして私も亦强ひて笑顏を作つた、が、ふと彼の顏色に氣が付くと、私は斯う聞かないではゐられなかつた、「おや！今日はどうかしたんですか、大變顏の色がわるいぢやありませんか？」

だが、私はすぐ聞かなくてもいゝことを聞いたと後悔したのであつた、何故と言つて、彼と私との間では、下らぬことを聞かなくても、何にも彼も十分の察しがつくのであつたから。

一昨夜、實は寢なかつたものですから……」と、しかし、その時山本は咳きながら答へた。そして、お互に默り合つてゐるよりも、何か話題さへあれば話し合つてゐる方が樂なのと、又一つには、その日彼に私が或用事をして貰ふことを約束してあつたので、それをするのが厭で、そんな憂鬱な顏をしてゐると私に思はれたくないといふ彼の遠慮から、多少の辯解の意味もあつたのだらう、そこで私が聞くともなく、彼が話し出すともなく、次のやうな話を彼は始めたのであつた。

——昨日彼の留守中に、彼の懇意にしてゐる或年增藝者が、（彼と彼女とが、どの位の程度の懇意さであるか、その日に限らず、いつその話が出た時でも、私も別に聞き正さうとはしなかつたし、彼も亦詳しい說明をしようとしたことはなかつた。）一つの小包を彼に宛てて送つて來た。それが事の始まりなんです、と彼は言つた。手紙であらうか、小包であらうが、少し怪しいと思ふと、何でも無斷で開封する癖の、彼のヒステリイの老母が、例によつてその中を開けて見たところが、中には差出人なる女が思ひ思つて贈つて來たところの、彼の老母には下駄、彼には八反織の彼女自身の手製だと言ふ財布——の二品が入つてゐた。

「留守中のそんな出來事は何にも知らないものですから……」と山本は言つた。——昨晩、例に依つてなるべく遲く、卽ち歸つてからなるべく老母と少なく顏を合はす時刻に、言ひ換へると、歸つたらもう老母が寢てゐて、彼も亦すぐ寢床にはひれる時刻を計つて歸つて行くと、意外にも彼女がまだ寢ないで、玄關の間にちよこなんと〻つてゐたといふのであつた。はツと思つて見張つた彼の目と、彼を睥みつけた彼女の目とが、一瞬間出遇つたと思ふ間もなく、いきなり一足の下駄と、無造作にくるめられた小包の紙とが、彼の前に投げつけられた、それと同時に、

「こんな汚らはしい……」と老母は普段から少しヒステリックな恐い目を、尙一層凄く光らせながら、癇走つた聲で叫んだ、「こんな汚らはしいもの、すぐ返してお出でなさい！」

さういふ場合には、如何なる辯解も無用であるばかりか、却つて下手な辯解をすると、相手を益々苛つかせることを十分知つて居る彼は、忽ちのうちに一切のいきさつをその場で了解すると共に、默つて彼女の言ふ通りにしようと言ふ風をしたのであつた。すると彼女は、もう一つの小包の中の品物なる、既にびり〳〵に引裂かれた八反織の手縫の財布を又彼の方に叩きつけて、

「これも！」と叫んだ。「これは何です？ こんなもの、内には置いとけません！」と言ふかと思ふと、それを拾ひ上げて、マッチで火をつけて疊の上に投出したり、そして引續いてそこらにある物を、片つ端からぶち撒き始めたのであつた。

そしてそれが二時間程もつゞくと、自然に彼女も疲れて來たものと見えて、ぐつたりと倒れるやうに、疊の上に俯伏せになつてしまつたのであつた。

「これはいつでもさうなんです。年をとつてゐますから、夢中で暴れてゐる間は兎に角、やがて疲れてしまふんですね、」と山本は言つた。「しかし、この時だ、と私は思つたものですから、その間に私はそつと戸外に出て、それから的もなしに町を歩きました。斯ういふ時には、暫くでも離れてゐるのが一番です、こちらも樂ですし、相手も氣が鎭まるでせうからね。……」

彼はそれから夜の町に、例の老母に贈られた、女からの贈物なる下駄を無意識に抱へたまゝ、ふら〳〵と出るには出たが、もう時は明方の三

時を過ぎてゐた。二三町行くと辻車が目付かつたので、出鱈目の行先を言つて、それに飛び乘つたのであつた。「なるべく、ゆつくり行つてくれ、なるべく、ゆつくり行つてくれ！」と彼は車の上から車夫に言つた。それでも、やがて出鱈目に命じた所に着いてしまつたので、それから迂散臭い顏をしてゐる車夫にはかまはず、また元の所へ歸してくれと命じた、急にまた老母のことが心配になり出したのであつたのだ。

さうして自分の家の半町ほど前で車を下りた時、彼はふと手に持つてゐた下駄に氣がついた。けれども、捨てる譯にも行かないので、思ひ〻いてそれを車夫にやらうとすると、その時初めて顏に氣がついたのであるが、二十一二の苦學生らしいその車夫は、變な顏をして、無暗に頭ばかり下げて、賃錢だけで結構だと言ふのだ。いくら、その上、强ひてやらうと言つても、車夫はぴよこ〳〵と頭ばかり下げて、あやまるやうに斷るので、彼はそのまゝ車夫と別れて、又うつかり下駄を持つたまゝ家に歸つて來た。老母はまだ起きてゐて、やつぱし玄關の間に坐つてゐたが、彼の手の下駄を見ると、

「まだそんなものを持つてゐる！」と叫ぶなり、素早く彼の手からそれを引奪つて、往來にはふり投げてしまつた。彼はそのまゝにしておいた。（「今朝出かけに見ると、まだ下駄が投出されたまゝの形で、轉つてゐましたよ」と彼は苦笑しながら附足した。）すると、老母は彼にお上りなさい、と稍々落着いた聲で言つて、今度はもう亂暴をしなかつた代りに、いつものお說教を始めたのであつた。彼女のお說教といふのは、即ち神樣を信仰して、救世軍に入れといふのである。

「私はもう本當に」と彼は言つた、「本當にいつそのこと、商賣も止めてしまつて、救世軍に入つて、太鼓を叩いて步かうか、と時々眞面目にさう思ふことがありますよ。」

「全くですね、」と私も言つた。「僕もよくそんなことを考へることがありますよ、威勢よく太鼓を叩いて、歌をうたつてね……」

そして二人は暫く思入のある表情をして、沈默してゐたが、稍々あつて山本は顏を上げて、「それはさうとして、一つ例の方へ行つて來ませうか？　あなたも道まで一緒に行つて、私が向うに行つて話をしてゐる間、どこかで待つてて下すつたらどうでせう。……それから一つ今日は淺草へでも行きませうか？」

先にも言つた、その用事といふのは斯うなのだ。――それは私のをんなに關することなのだ。初めにも話したやうに、彼女は東京の生れなのである、のみならず、同じ東京の町の中に、彼女の實の父も、又生みの母も、そして實の姉も弟も妹も、みんな息災に、相當な生活をして住んでゐるのである。彼女の父は醫者を業としてゐる者であつた。彼女の言葉に依れば、彼女は或日その父の家を出たきり、もう三年もその家に歸らないと言ふのであつた。けれども、彼女の家と彼女とに就いての彼女の言ふことは、無論そのまゝに受取る事が出來なかつた。初め彼女は、父は眞の父だが、母は繼母で、兄妹たちも、妹の外は皆腹違ひのそれである、と言つてゐた。又或時は彼女は、その繼母との折合が惡いために家を出たのだとも言ひ、又或時はどうしても自分の好まぬ所へ嫁にやられたので、その嫁入先から家出をしたのだとも言つた。そして結局彼女はさうして家を出て、何處かに女中奉公でもしようと思つて、漸くの思で或周旋屋に飛込んだところが、そこから誘惑されて、藝者になつたのだとも言つてゐた。――用事といふのは、その日私が山本に、無論彼女には内所にだが、その實家に彼女に就いて話をして貰ひに行かうといふのであつた。

言ふ迄もなく、彼女の父母は又私の父母と呼ばれる者に違ひなかつた。けれども私の場合では、彼女の父母は同じ市内に住んでゐるその娘の連合ひの名をさへ知らないのであつた。その家は下谷の谷中にあつたので、私は山本がそこに話に行つてくれてゐる間を、淺草の十二階の見える上野の公園の廣場で待つてゐた。幸ひ私のをんなの姉が、私たちとは餘り緣の遠くない職業に携はつてゐる、即ち時々子供の雜誌にお伽話などを書く、女流文士であつたので、出版業である彼の名札を以て山本は先づその姉に會ふ手筈にしたのであつた。

今言つた彼女の姉は、毎月辛うじて一種の雜誌に、彼女のお伽話とその名前とが見出される程の、まだほんの無名の女流文士なのであつた。けれども私のをんなは血を分けた姉妹に對する懷しさからであらう、必ずその雜誌を買つて來て、讀んでゐたものであつた。彼女は又その姉に就いての思出を、始終私に、何の惡意もなく、如何にも懷しさうに話した。終には、彼女がまだ年の行かなかつた頃、姉に一人の色男があつて、姉がその男と密會するのに、兩親の目を忍ぶために、妹なる彼女を利用して、一緒に連れて行つて、その代りには、歸りに彼女の口を止めるために人形などを買つてくれた、と言ふやうな話もした。私は彼女がそれ程懷しみを持つてゐる彼女の姉のことを考へて、姉も亦、私のをんなが昔如何なる不始末をして家出をしたのかも知らないが、それはそれ、これはこれとして、屹度女らしい情を以て、その妹のために父母に斡旋してくれるに違ひない、と斯う考へてゐたのであつた。

けれども、事實はまつたくその反對に現れたのであつた。彼女は山本の名札に依つて心よく面會して、一言二言初對面の挨拶をした後、さて山本が「突然ですが、實はよし子さんのお話で……」と、私のをんなの名前を出すのを聞くと共に、忽ち顏色を變へて、「あんな者のことであなたはお出でになつたのですか？　私は知りません、あんな者のことなぞ……」斯ういつたかと思ふと、そのまゝ山本に何の挨拶もしないで、突然疊を蹴立てて部屋を出て行つた。（「やつぱり多少ヒステリイの氣があるんですね！」と山本は註釋するやうに、あとで私に話した。）彼は話の相手に一言の斷りもなく、突然出て行かれて、稍々暫くの間なすところなくぼんやりしてゐると、そこへ彼女等の母らしい人が入つて來た。彼が先づ驚いたことには、その人に私のをんなが、多分彼女が自分の口から繼母であると言つてゐたところの彼女の母に、彼女の姉妹たちの誰よりも、ほんとに瓜二つと言ふ諺通りによく似てゐたことであつた。そして、果して彼はその人が彼女の實の母であることを確めたのであつた。が、その人も亦、彼女の、即ち自分の生んだ自分の娘の名を聞くと共に、忽ち不快な顏色に變つたといふことであつた。

三年の間消息を絶えて後、尚自分の腹から生れた娘の名を聞いただけで、母をして不快な顏色に變じさせるといふ私のをんなは、一體過去に於いてどのやうな事をし出かした者なのであらう？（私は今だにその譯を知らない。）それは兎に角、彼女に關する山本の言葉に對して、彼女の母が山本に答へたところを約言すると、自分の方から改めて今更嫁に上げるといふ譯には行きませんが、戸籍の方はいつ何時でもさし上げませう、と言ふのであつた、つまり、遣りはするが、今後とも出入は一切かなはないと言ふのであつた。

だけども、「それでは、」と山本は言つた、「ああ言ふ性質の方ですから、連合ひの方と一時の喧嘩なぞをされたやうな時にでも、氣分を晴ら

しに、或ひは安息に、歸つて行く家がないといふやうな譯だと、ふと又前後の考もなく夫の家を飛出して、後でどんなに後悔をしても、歸るに歸れないやうなことになつて、果はどこでどんな恥を曝すやうな、新聞種になるやうなことをし出かされないとも限りませんし……」そして山本は附加へて、「それに、承りますれば、伯父樣方にはお立派な、名譽ある方々もおありになるやうですが、……」（實際、彼女の父方の伯父たちには、二人迄も勅選の貴族院議員などがあるのだつた。）「もしそんな間違ひでもあつては……」と言ひ續ける彼の言葉を、又いつの間に來てゐたのか、突然、傍にゐた彼女の姉が遮つて、「そんなことは一日のことです、一日きりでしまふことですわ！　かまふもんですか！　あんな者は本當に、本當に、一日も早く死んでしまつた方がいゝ……」と山本に突掛るやうに叫んださうである。（なる程、姉も亦妹と同じくヒステリイ患者なのであらう。さういへば姉は二十九歳で、而もまだ獨身だといふことだ。）

山本は歸りがけに、彼女の母にも念のために自分の名札を出して、「私のやうな一面識もない者が、突然何の紹介もなしに上りまして、そして斯ういふ面白くもない話をお聞かせしましたので、ひどく御氣分を惡くした事と恐れ入ります。けれども、もし私が歸りましてから、ああ、あの時に斯う言つてやればよかつたとか、あゝしてやればよかつたとか、お思ひ返しになるやうなことがございましたなら、どうぞいつでも私の所をお訪ね下さいまし、又お訪ね下さいますのが何でしたら、お葉書でも下さいましたら、私から改めて伺ひましても宜しうございますし、又お指圖に依りましたら、或ひは御親類の方とお目にかゝつてお話するといふやうな方法でも、結構でございますから……」と極めて行屆いた話をして歸つて來たのであつた。

山本の話に依れば、その始終の間、姉なる人はどうかすると發作的に呶鳴り付けるやうなことを言つてゐたが、母なる人はさすがに時々目をうるましてゐたさうである。更に彼の心を引いたのは、私のをんなのすぐ下に當る妹らしいのが、家出してから三年も會はない彼女の哀れな姉の名前が、この突然の客と母等との間に交されてゐるのを、ふと壁越しにでも耳に挾んだのであらう、時々襖の間から彼等の談話中に、氣遣はしさうな顏を覗かせたことださうである。最後に、頑固な彼女の父とは、そのことでわざ／＼會つて話したところが、唯にべもなく呶鳴りかへされるばかりだから、との彼女の母の注意に依つて、山本は到頭彼には會はなかつたとのことであつた。

結局、その日私たちが得たところのものは、彼女の家では彼女を憐むどころか、このまゝ出來るものなら、この世から彼女の存在を抹殺したがつてゐると言ふことだけであつた。私たちはその夏の夕方、公園の木蔭のロハ臺に腰をかけて、すぐ足の下のごた／＼した上野停車場の構内や、淺草の十二階や、澤山の煙を吐いてゐる煙突や、重なつて見える家々の屋根を目の前にして、たとひ盜坊をしたにもせよ、たとひ姦淫を犯したにもせよ、その外私たちがこの世に於いて考へ得られるどんな惡い事をしたにもせよ、現在自分たち二人なしにはこの世に生れて來なかつたところの一人の娘に對して、私たちは――山本も私も、まだ親となつた經驗こそないが、――そんなに苛酷である親心といふものを、解することが出來ないと話し合つた。

「さあ、」とやがて山本はロハ臺から立上つて、「これから一つ淺草へでも行きませうか？」と言つた。

「えゝ、行きませう、淺草へ！」と私も勇んだ

聲で應じて、立上つた。

「淺草へ……」と彼は歩きながら、一寸考へてる風であつたが、「花屋敷へ行きませうか？」と言つた。

「えゝ、それが宜しい、花屋敷へ！」と私は更に勇んだ聲で應じたことであつた。

四　無爲の人々

遠くから母と妻とに萬歳をおくること
唄と踊とに浮身を窶す法學生のこと

そして私たちに夏が過ぎ秋が來たのであつた。月日といふものは不思議なものだ、毎日毎日と迹つて行く一日、一時間の、何と長くて、難儀で、そして退屈なのに比べて、かへり見た時の、それ等の過ぎ去ることの、何といふ早さだらう！　そして又秋の初となつたのであつた。

十月。私達のうちの誰が言ひ始めるともなく、どうかして家を一軒借りよう、斯うして安くない間代を拂つて、たゞ炊いてあるかないかの違ひだけで、本當の米代の三倍も、もつともの金を拂ふよりは、いつそ家を一軒借りた方が餘程經濟でいゝ、と言ふやうな相談が持上つたのであつた。

そしてこれには三人とも無論意見が一致したのであつた。たゞ私だけは、それを一口に肯定してしまふには、一つの障碍として、前拂ひをしなければならない三ケ月分の敷金を準備しなければならぬといふことを、覺悟する必要があつたのであつた。が、萬難を排してでも、それさへ用意が出來るならば、無論私にしても、一軒の家を借りてゐれば、たとひいゝんなかヒステリイを起して、少しぐらゐ亂暴な言葉を吐いたとて、又大きな泣聲を出したとて、間借の場合よりははら／＼する思をさせられるだけでも、大變助かるに違ひない、それはその當時の私にとつては何よりの救ひなのであつたから、それに越したことはないのであつた。母は又母として、一軒の家であるならば、二間や三間はあらうから、彼女は私たちと幾分か離れて暮して行けるだらう、そしたら、この彼女が五十の年になる迄豫想だにしなかつたところの、現在のやうな難儀から幾分免れられるだらう、といふ希望を持つたのに違ひなかつた。最後に、それ等から思ふと、いゝ、をんなの引越したいといふ考は、最も含む所のないものであつたに違ひない、即ち彼女は間借生活を止めて、唯一軒の家を借りるといふ、體裁のよいといふ點だけで、或ひはその移り氣からだけで、それに十分贊成したのに違ひないのであつた。

或日、彼女は私たちが間借してゐた所から程遠くない、代々木の練兵場の傍の、とある高臺の、生垣ばかりに埋められた屋敷町に、玄關が三疊で、廊下を隔てて六疊、唐紙を隔てて四疊半、そこから鍵の手になつて、緣側を挾んで湯殿と臺所とがあり、更に六疊の二階を持つてゐる、それで而も可成り割安な家賃の、一軒の借家を目付けて來た。と言つて、さう早速探し出して來られても、それが又とない恰好な家であつたとて、その三倍の前拂ひの敷金が、前にも言つた通り、私には容易な金ではなかつたのであつたが、一旦言出したことを決して撤回しない彼女が、而も自分で見出して來た、のみならず可成り十分に彼女の氣に入つたところの家を、私の都合でぐづ／＼してゐるうちにふさがつてしまつたと言ふやうなことになると、それが將來の幾度の彼女のヒステリイ發作の材料になるのであらうと思ふと、私は、出來るかも知れない、出來ないかも知れないと言ふやうな、普通な金策のやり方では、到底追付かないと思つたので、或ひは本屋の山本に賴み、或ひは友達を拜み倒し、或ひは質屋で今迄の質草の無理な値上をして貰つてその差引の剩餘金を受取り、

それ〲もう乾度二度とこんな無理な願は言はないからと泣くやうに頼んで、漸くのことで金をこしらへて、そして私たちは引越したのであつた。
　私は何事も彼女の言ふが儘に、例へば電燈屋でさへが、一小人數の御家内なら、二つか三つの常夜燈をお點けになつた方が德用です、―と言ふのを、彼女の意見に從つて、心ならずもメートルにして八箇の電燈をつけたり、その外萬端のこと、出來るだけその新居を彼女のために居心地のよいものにすることを心がけたのであつた。しかし私たちが彼女のヒステリイに惱まされる度合は依然として、寧ろ間借の時よりはひどくこそはなつたが、少しも輕くはならなかつたのであつた。
　考へて見ると、それにはいろ〲な原因を數へることが出來よう。その第一は、元々働きのない私のことだから、過去小一年の間に彼女のヒステリイを幾分でも和らげるためにと、借りられるだけのところから金を借りて、今ではもう殆ど何の融通の途も絕えてゐたことであつた。その第二は、何と言つても彼女が多少遠慮してゐた母と、私たちは同じ部屋にゐることが少なくなつたので、即ち母が大抵階下の奥の間にゐて、私が、從つて彼女が、私の書齋に當てられた二階にゐるのが常だつたので、彼女のヒステリイの發作が、私の傍に於いて、それを遠慮する何ものをも持たなかつたことであつた。（彼女のヒステリイのために、哀れな私の母を卷添にしないことは、どれ程私の苦められる度數が多くなつても、寧ろ私の望むところであつたのだから、その事は一寸よささうに思へたのであるが、しかし實は二重に惡かつたのであつた、何故なら、そのために彼女のヒステリイの度數が多くなつて、そしてそれが必ず結局母にもやつぱし影響を及ぼすことは、以前のやうに同じ部屋にゐたのと、少しも變らない結果になつたからであつた。）そして第三は、私たち、母も私も、過去小一年の間に殆ど毎日と言つてもよい程の、彼女のヒステリイの發作に餘りに虐げられた結果、丁度長い病氣のために身體が衰弱して、だん〲と病氣に對する抵抗力がなくなると言つた風に、私たちが最早や少しの彼女のヒステリイの發作に對する恐怖をも、餘りに過大に感じるやうになつてゐたことであつた。
　ところが、斯ういふ日が來たのであつた、それは私たちが間借生活から借家住居に移つてから、半月足らずの後のことであつた、突然、私の勤め先なる編輯所が閉鎖されることになつたのである。私にとつては、それは突然のことであつたが、山本には無論さうではなく、商人である彼は私たちに自分の內情を明さなかつただけのことに相違なかつた。けれども、遂に彼は破產を暴露しなければならなかつたのであつた。この事が、私にとつての何よりの打擊は、一定の收入を得る道を失つたといふことよりも、それを孤獨な母とヒステリイのをんなとに報告する結果の豫想の苦痛と、更にそれと共に、毎日內にゐて彼女から開放されることのない身の上とならなければならぬ苦勞とであつた。私は、そこで、そのことを母にも彼女にも話さないで、そして今迄通り、何食はぬ顏して、毎日家を出たのであつた。
　外にさへ出れば何かよいことがあるやうに、いや、これは適切ではない、家の中に爆烈彈でもあるやうに、いや、これも亦適切ではない、――兎に角、私は毎朝家を出るには出て、電車の停留場に向つたが、殊に彼女のヒステリイが最も激しく起る彼女の毎月の病氣の時などは、（彼女には、それがきつかり二十八日目に、そしてその一週間正確につゞいた！　ついでだから、その

頃私はそんなことを尋ねられる女の知人といふ知人に、一失敬ですが、あなたは二十八日目毎に正確にありますか？ 丁度間に一日休があつてそして一週間つゞきますか？」と聞いて廻つたものだ。ところが、十人が九人まで、大抵もつと不順であつたり、二日か三日で上るといふ人が多かつた。あゝ、何が一體健全なのやら、不健全なのやら？ 神樣、阿呆とヒステリイに飲ます藥はないものですか！）最早や編輯所もない編輯所の用事がひどく忙しいなどと言ひ拔けて、電車の停留場に立つのであつたが、大抵の場合、屹度停留場の赤い電柱の具付けの柱時計がまだ朝の八時をしか指してゐないのを見ると、私は舌鼓を打つて引返して、自分の家の近くの表通には出ないで、ずつと大廻りをして、何時間かをそこで費すために、代々木の練兵場に行くのが常であつた。

私の友達はみな朝寢坊であつた。それに私が彼女と共に住むやうになつて、（世間では、多くの人は妻を迎へると共に、更に公の人となるらしいのに、私はそれと共に日蔭者となつたのであつた。）僞名をして、戸籍調べの巡査を恐れるやうになつてからは、私は多くの會ひたい友達をも避けてゐたので、或時私の編輯所のすぐ近くの宿屋にゐた、鶴丸といふ或私立大學の法學生の友達と偶然途で遇つたのが緣で、從つて當時私の出入する友達は彼の外にはなかつたのであつた。鶴丸は、私にとつては幸にも、殆ど學校には出ないで、毎日家にゐたが、その代り彼も亦私の外の多くの友達と同じく、夜は十分遲く寢る代りに、（往々彼は夜の明け方に寢て、）朝は十時を過ぎなければ起きなかつた。

けれども、世の中はさうではなかつた。私がいつも朝の早いのに當惑しながら、私の家（そこでは哀れな私の母と、そしてこれも亦哀れに違ひない私のヒステリイのをんなとが、今頃は何をしてゐるだらう？）のある高臺の下の道を通ると、往來から裏手の納屋や鳥小屋までも見すかされる、その邊の小さな家々では、もう五時間も前に起きて、三時間も前に朝飯を濟ましたやうな顏をして、男も女も、彼等が各々それぞれ午前もし、午後もする勞働にいそしんでゐるのだつた。殊にそこを通る毎に私の目を引いたのは、一軒の味噌屋であつた。そこの店の土間には、必ず一人の、顏つきは割合に若かつたが、頭のつる〳〵に禿げた男が、その土間の片隅に据ゑられた、大きな桶の横側についてゐる、變挺な、車の輪に柄をつけたやうなものを、その柄を上下に動かすことに從つて、まはしてゐた。見ると、その大桶の右下の方に、稍々小形の桶があつて、彼がその車の輪を廻すに從つて、大桶の横にある穴から、赤い味噌が小桶に向つて絞り出すやうに流れて行くのだ。私がいつその前を通る時でも、彼の姿がそこに見えなかつたことはなく、そして彼はかならず默々として、唄一つうたふことなく、その輪を廻してゐるのだつた。

「味噌屋の丁稚、味噌すれ、くそすれ……」斯う、私は自分が子供の時分に歌つたのか、それとも他所の子供が歌つてゐたのを聞き覺えたのか、或ひは又ふと偶然に自分の口から即興的に出たのか、口の中でうたひながら、その前を通るのだ。朝から晩まで、そして明けても暮れても、味噌をすつてゐる人の退屈さは、人をして戰慄させるものがあるに違ひなかつた。けれども彼には、彼を苦めるヒステリイの女がゐまい！ 私はいつ何時でも、この味噌屋の男と自分を轉倒してもよいと思ふのだつた。

「味噌屋の男、味噌すれ、くそすれ……」

斯うたひながら、又そこを過ぎて、東の端から代々木の練兵場の坂道を上つて行くと、おお、既に一しきりの訓練を濟ましたらしく、歸

つて行く兵隊の一行列にさへ遭ふのであつた。朝の影を踏んで、最早や足の下にばさ〳〵と生氣なく鳴る草の上に、ぼんやりと立つてゐる私の目の前に、何と世の中は、私だけを除け者にして、規則正しく、尋常に、少しの狂ひもなしに進んでゐるのであらう？と感嘆されるのであつた。一人の隊長の一言の號令の下に、「何とか右へ！」と叫ぶ一聲の下に、百の人も、百の動物の馬さへも、そして百の生なき大砲さへも、少しの間違ひもなしに粛々と方向を變へて、右へと進むのであつた。

私は又、廣い、次第に枯れに近づいて行く草原と、木と、林と、それ等を蔽うてゐる晴れた空を見てゐると、ふと私が彼女と一緒になつてから、この小一年間手にしなかつたところの、ばさ〳〵の汚れた筆の外、もう一つの繪具も殘つてゐないだらう、空の、ひどく埃の積つてゐるに違ひない繪具箱を思出した。私は涙の出る程悲しくなつた。私は、このまゝ今のやうな生活をつゞけて行くならば、私の藝術の友なる彼等とも別れてしまはねばならぬと思つたのであつた。私は又目を練兵する兵隊に轉じた。私はこれ迄あれ程嫌つてゐた兵隊に、今はなつてもよいとさへ思つた。私は亦彼等のやうに、何の思ふこともなく、喊の聲を上げて、あんな風に縱横に駈け廻りたいとも思つたのであつた。

私は屢々私の立つてゐる所から、四五町も、或ひはもつとも離れてゐる、練兵場の南の入口（そこは私たちの家から一町と隔つてゐなかつた。）の近くに、同じく練兵を見に來てゐるらしい人々の群集から少し離れて、一人の老いたる女が立つてゐるのを認めた。それは私の母であつた。私はそつと彼女の傍に駈けて行つて、私の平素の不孝を詫び、そして今にどうかしますから、どうぞもう少し辛抱して下さいと頼まうと思つた。（しかし、もう少し辛抱して貰ふと言つて、さてどうしようと言ふはつきりした考を、私はまだ私自身にさへ言ひ得なかつたのであつた。）けれども、もし私がさうして母とそんな所で立話でもしてゐる所へ、妻が來て發見されたら？と思ふと、私は忽ち思ひ止まつて、心で母の方に向つてお辭儀をしながら、こそ〳〵と元來た道を電車の停留場に引返すのであつた。

又私は屢同じ所に私のをんなが一人で立つてゐるのを見かけることもあつた。彼女は一人しよんぼり立つてゐることもあるし、又どこかの一疋の犬と共に、男の子のやうに戯れながら散歩してゐることもあつた。私は、どれだけ距離が離れてゐても、彼女の姿を見ると、忽ち、中學生の頃、學校に行かずに野原で遊んでゐた時に、突然學校の先生の姿を見て驚いたやうに早々逃げ出すのが常であつた。

稀に又私は、同じ位置に私の母とをんなとが並んで立つて、兵隊の練兵を見てゐるのを遠くから見たことがあつた。その時の私の嬉しさは誰が知らう？あそこに仲よく並んで立つて練兵を見てゐる二人は、あれは私の母と妻です。斯う私は言つて、彼等を指さしながら、そこらの人々に觸れ廻りたい氣がする程であつた。……

さて、鶴丸は私がいつ行つても、大抵まだ寢てゐるか、でなければ目は醒ましてゐても、蝸のやうに寢床の中で腹這ひになつて、その色の白い角刈の頭をもち上げながら、トランプのペイセンスをやつてゐるのが常であつた。私が行くと、いつも彼はきまつて、

「ちよつと、ちよつと待つて下さいね」と、小柄で、美しい顔をしてゐるので、二十八歳といふ年よりも五つも若く見える顔を、一寸上げただけで、「今すぐこれを一回終りますからね」

と顏にふさはしい細い聲で言ふのであつた。そして彼は、昨夜はそれを一人で夜明け近くまでやつてゐたが、一度もうまく出來なかつたと附足した。

彼は前に言つたやうに、學校にも出て行かない代りに、これだけは正確に隔日に踊を習ひに出る外は、散歩などにも外出することは殆ど稀であつた。彼は日課のやうに毎日遲く目を醒ますと、一しきり床の中でペイセンスをやつて、それが終ると漸く起きて出て、机の前に坐つて小說本などを讀み耽つた。彼は時々國元から用事で上京して來た次手に、息子の動靜を見に來る父親に見現されないために、法律の本だけは賣らずに一通り書棚に飾り付けてあるのだつたが、殆どそれ等を買つてから開いたことさへないのであつた。さうして小說本にも讀み飽きると、彼は知つてゐるだけの唄をさらへた。唄は嘗て一度も、踊のやうに、習ひに行つたことはないが、器用な性と見えて、藝者買の折や、蓄音機で聞いた時の聞覺えで、覺えたものらしかつた。しかしその唄もうたひ終ると、彼は踊をさらへるのであつた。

或晩のこと、私がいゝをんなと二人で彼を訪問しようとして、彼の下宿に行つて、いつも行くので、案内も乞はずに、廊下傳ひに彼の部屋の前まで來ると、二三人の女中と二三人の下宿人たちが、廊下越しに庭に面した方の廊下にもたれて、鶴丸の部屋の方を見ながら、ひそ〳〵と指さしながら笑ひ合つてゐるのを見出した。どうしたのだらうと思つて、私たちも部屋に入る前にその方を見ると、彼等がひそ〳〵と笑ひ合つてゐるのも無理はなかつた、それは彼の部屋の障子に、扇を持つて、小聲で唄ひながら頻りに踊のさらへをしてゐる彼の姿が、はつきり影法師になつて障子に映つてゐるのであつた。「退屈で、退屈で……　斯う彼は口癖のやうに言つた、「それには踊が一等ですね。」

「しかし君は色男だから、」と私はからかふやうに言つた、「色女のことを考へるだけでも、退屈はまぎれるでせう。」

「なアにを仰しやるんです……」斯う彼一流の言葉で言つて、彼は大きな聲で笑ふのが癖であつた。

言ひ忘れたが、彼の坐つてゐる頭の上には、新聞紙半頁大ほどの、大きな女の半身像の寫眞の額が掛つてゐた。それは彼のその頃の戀人の寫眞で彼女は彼の郷里の町の藝者なのであつた。その女といふのは東京の者で、初め新橋に出てゐたのだが、事情があつて彼の郷里で藝者をしてゐるうちに、丁度或時歸省した彼と知合ひになつて、馴染を重ねるやうになつたといふのであつた。その新聞紙半頁大の寫眞に依つて想像するのに、彼女はなか〳〵の美人であつた。彼女が藝名を「朝顏」と言つたので、彼は座蒲團から、茶碗から、襦袢の袖から、何から何まで（それ等の半分は彼女から贈られたものらしいが、又後の半分は彼が好んで買ひ集めたものらしい。）朝顏の模樣を附けてゐた。よく見ると、その寫眞に於いて、彼女も亦朝顏の友禪模樣の、縮緬の浴衣を着てゐた。

その頃の彼と彼女との關係は、何分遠く離れ合つてゐるので、殆ど手紙の上だけのことらしかつたから、何日何時になつたら夫婦にならうと言ふやうな約束でもしてあるのか、それとも過ぎ去つた戀人としての、惰性のやうな關係をつゞけてゐるのか、私などの窺ひ知るところではなかつた。それでも手紙の上だけで、ひどく仲がよくなつたり、又彼がひどく怒つて遣つたり、それで彼女の代りに彼女の妹藝者が仲に入つて、彼女を許してやつてくれと言ふやうな手紙を寄越して、そして彼がなだめられたり、かと思ふと半月も、もつとも彼女から便が絶え

たり……その位のことは始終往來してゐるだけに、私にも知ることが出來た。

　が、もつとはつきりと、そして面白く彼等の間の關係を示すものは、その寫眞の額であつた。と言ふのは、その寫眞の額が、取り外して裏返しにして、床の間の隅にもたせかけてあつたり、或ひは又押入の中にでも收ひ込むのか、全然姿が見えなかつたり、かと思ふと額緣だけが掛つてゐても、その中の寫眞が拔き取られてゐて、額の裏の板切が露出されてゐたりすることであつた。これを要するに、彼は彼女に對して腹の立つ時、もう緣を切らうなぞと思ひ詰める時、——さう言ふいろ〳〵な感情を、その額に持つて行くのであると見えた。

　女の話をし飽きると、鶴丸はいつも、まるで口直しのやうに、「僕の家は今ひどく貧乏してるんですよ、」とやつぱし微笑を浮べたまゝの顏で言ふ、そしてこんな風につゞけるのであつた。

「僕の親父は可哀さうなんです。しかし、それは親父が惡いんです。親父は僕と違つて所謂活動家で、そのために色んな事業に手を出して、それで失敗したんです。僕の子供の時分には、まだ僕の家は地方での指折りの豪家だつたんですがね。……それに長男の僕がこんな風ですし、しかし、僕の國の友達に聞いて御覽になつたら分りますが、僕は小學校時代には神童と言はれ、中學時代も秀才で鳴らしたもんですよ。僕の次の弟は錢の勘定さへ碌に出來ないやうな白癡ですし、それから末の弟はまだ中學生ですが、これは又落第ばかりしてゐて、もう七年も中學にゐますが、やつと今四年生なんです、……全く、僕の親父は可哀さうですよ。……」

　かと思ふと、すぐ氣を變へて、彼は小聲で端唄などを口ずさむのであつた。彼がそんな風な男であつたから、私が初めて彼の下宿に行つた頃は、引越して來たばかりの、獨りぼつちの彼であつたが、（私が途で彼に遭つたといふ時、彼は丁度今の下宿に引越して來たばかりの時だつたのだ。）いつの間にか、下宿中の少し怠け傾向のある書生たちと、彼はすつかり知合ひになつてしまつてゐた。

　或日、私が彼を訪ねた時、ふと氣がつくと、彼方此方の部屋で琵琶歌をどなる聲や、役者の聲色をつかふ聲や、さては小唄をうたふ聲やらが隨所に聞えるので、何氣なく、

「方々で大變賑かですね、」と私が言ふと、

「あれは皆僕が敎へてやつたんですよ、」と彼はおどけるやうに首を縮めて、その色の白い、可愛らしい顏に微笑を浮べながら言つた。そして、ふと何事かを思ひついたらしく、「面白いことをして見ませうか？」と私に言つた。

「えゝ、」と私が答へる暇もなく、彼は突然大きな聲を張り上げて、

　〽峰のしら雪麓のこほり、今ぢやあ互に
　　距ててゐれど……

と歌つた。すると、方々の部屋々々で、今迄思ひ思ひの唄をうたつてゐた者たちが、申合した樣に、忽ちそれ〴〵自分たちの唄を撤回して、そして彼のそれに從いてうたふのであつた。私は吹き出して笑はないわけには行かなかつた。が、鶴丸は案外眞面目につゞけて、

　〽會ひたさ見たさに來たわいな。

とうたひ終つてから、初めて笑顏をくづして、

「どうです？　先生の僕がうたふと、さすがでせう、屹度みんなが素直についてうたひますからね。中には讀んでゐた敎科書を傍に置いて、やつてるのもあるでせうよ。無邪氣な連中ですね、」と言つた。

　私はそれ以來、よくその彼の部屋で、同宿の彼のそれ等の友だちと、時間を消すためにトラ

ンプをして暮して、そして何食はぬ顏をして、母とをんなの家に歸つて行つたことであつた。

五　をんなの始末

をんなから逃げようと心をくだくことと
俠客を氣取る鶴八等の佳庵のこと

遂に又斯ういふ日が來たのであつた。――それは毎年の其頃の癖ででもあるやうに、毎日細かい雨が私が朝々床を離れると共に戸を開ける北窓から、廣い練兵場が或南畫のやうに烟つて見える一日であつた。母が何を思つたのか、半年もつとも出かけて行つたことのない、これ迄は用事があつても、あそこの家は窮屈だからと言つて、行くことを避けるやうにしてゐた、市内のK――といふ親戚に出かけて行つたことであつた。そしてそのまゝ彼女は到頭歸つて來なかつたのであつた。

夕方、私はいつものやうに外から歸つて來て、母がまだK――から歸つて來ないといふことを聞くと、ひどく氣になり出した。をんなもそれに對して一種の不安を覺えてゐるらしく、母さんは私が氣に入らないので、出て行つたんだらう、そんならさうと言つて呉れたら、私の方で出て行くのに、と言つていつものヒステリイを起しかけたり、かと思ふと、もう歸つて來ない方がいゝ、もし歸つて來たら今度は自分が出て行くと言つて泣いたりした。そして少しでも私が心配さうな顏をし出すと、彼女は「えゝ、いゝわ。いゝわ。私より母さんの方があなたには大事なんでせう！　私は出て行きます。（誰が好んでこんな貧乏な、陰氣な家にゐたいもんか！）その代りあなたは私を連れ出したんだから、私の身の始末をちゃんと付けて下さいね！」

彼女は私にその翌日はどうしてもいつものやうに出勤（前にも言つたやうに、もう私の出勤先はなかつたのだが、）することを許さなかつた。そこで私は彼女の言葉に從ふことにして、なるべく彼女の氣を安めておいて、漸く晝飯の支度のために彼女がそのお菜を買ひに行つてゐる留守の間をうかゞつて、私は大急ぎで最寄の自動電話のボックスに、糠雨の中を（私たちの二本の傘のうち、母が昨日一本と、をんなが今一本とを使つてゐるので、）羽織を裏返して頭から引被つて飛んで行つて、K――に電話をかけたところが、電話口にK――の主婦が出て來て、

「お母さんは確にこちらに來て居られますが、そちらにお歸りにならない理由は言はなくてもお分りでせう。私の方でお歸ししないで、止めてゐるのです、と言つた。

何よりも、母が兎に角無事にK――の家にゐるといふことを聞いて、私は一先づ安心した。で、私はいづれ私が伺ひますと言つて、電話を切つた。そして「あゝ、到頭私たちの狀態がこゝ迄來たな！」と思つたのであつた。

けれども私はK――に母を訪ねて行く代りに、その翌日鶴丸の下宿で母に宛てて手紙を書いた。私は、私の外の唯一人の家族であるところの、そして女性であるところの、母とをんなとを離れて考へる時、彼等が各それぞれ不幸な十字架を背負つてゐることを思つて、何とも言へぬ感傷的な氣持を以て、彼等を憐む心に襲はれるのが常であつた。私は母に、今迄の私の意氣地なさのために重なる不孝の罪と、この後とも私の性格としてはどうしても彼女を頭ごなしに抑へることは出來ないし、又斯うなつて見れば、抑へられたとしたところが、今更母として最早や彼女と同じ屋根の下に住むことに堪へられないだらうから、なるべく近い將來に於いて、然し、必ず誓つて彼女と別れて、元のやうに母と私との、二人の平和な生活に

かへるつもりだから、それ迄はどうぞお待ち下さい、といふ意味の手紙を認めた。
　さうして私が午後の四時頃、市内電車で歸つて來ると、をんなは必ずその停留場まで、勤め先から歸つて來るものと信じてゐる私を迎へに來てゐて、ヒステリイ性婦人獨特な親愛の表情を以て待ちかねてゐることだつた。
　しかし、私は電車の停留場から、彼女と並んで、唯二人きりになつて寂しい家に歸つて行く途々、この宿命的な病氣と性癖とを以て、一方ならず人を苦しめ、又言ふ迄もなく彼女自身をも苦しめてゐるのに違ひない女は、これ迄彼女に接した他人には言ふに及ばず、その血を分けて貰つた生みの母にさへ捨てられてゐるのだと思ふと、いつの間にか私たちの前の景色が霑んで見える迄に、目に涙のにじむのを感じない譯には行かなかつた。さうだ、やがて彼女はこの私にも捨てられるとしたならば、どこで私ほど彼女を受入れる男を見出し得るであらう？私と暮した間、彼女は私の意氣地なさのために、幾度ヒステリイを起したか知れない、けれども彼女がその時その時に足らずして求めるやうな、所謂意氣地ある男は、男の方で屹度彼女と一週間以上同棲するに堪へないに違ひない。けれども、その私でさへも、彼女を憐んで身を犧牲にすることを、今はもう思止まらねばならないのであつた。そして私が、今やどうしてうまく彼女と別れようかといふ心に、多く支配されてゐるとも知らずに、彼女は何事も知らず又疑はず、私に寄り添つて、子供のやうに嬉しさうに、私の袂などを掴んで、足並に合して振りながら、いそ〳〵と私たちの家に歸るべく向ふのであつた。
　とは言ふものの、私には彼女とさし向ひになつて、面と向つて別れ話を持出すといふやうな勇氣は到底なかつた。又よしそれが出來たところが、さういふことをした結果に於いて、彼女のやうなさういふ性質の女に起るに違ひないと想像し得る事實は、とてもその成立を約束するどころか、どういふ惡い結果を持來すか思ひも及ばない。と言つて、その間に他人を頼んで口をきいて貰つたところが、相手が普通の性質の女でない彼女のことだから、その結果はいたづらにその仲介者を當惑させるばかりであるに違ひない。そこで私が考へた一つの方法としては幸ひ、母が私たちと一緒にゐないのを天の助と考へて、をんなを置いてきぼりにして、私の方で逃出して、途上から委細を認めた手紙を、何も知らずに歸つて來ない私を待つてゐるところの、彼女に送るといふのはどうであらう？斯う考へたのであつた。
　けれども又弱い私にとつて、流石に雨の日風の日の一年間を、よかれ惡しかれ連添うて來たをんなに對する親愛の心は、或點に於いて此上なく正直な心持で、午後の四時から私の降りる電車の停留場で私を待つてゐる彼女の姿、そして又四時から五時から六時までも、歸らない私を知らずに停留場で待ち侘びるであらう彼女の姿を思ひ浮べて、それは餘りに殘酷である、と思ひ止まらねばならなかつた。よし又、私が敢てその方法をとつたとしても、すると彼女がかならず半狂亂の姿で、その頃の私たちの唯一人の友達なる鶴丸のところに暴れ込んで、彼にどんな迷惑をかけるかも知れないことに思ひ及ぶと、私はまだまだもつとよい方法を考へなければならないと思つたのであつた。
　そして私はいろ〳〵と思案を廻らした結果、先づ彼女に鶴丸が急に國に歸つたと欺いておくこと、そして第二に私たちは出來るだけ早く私たちの現在の家を引拂つて下宿すること、そして豫め彼女にどうしても別れなければなら

れ承諾を斷つた手紙を用意しておいて、或日私は下宿を出ると共に途でそれを投函して、そしてそのまゝ彼女と別れてしまふこと、（同じ彼女を置き去りにするにも、下宿屋に於いてならば、彼女の困り方が幾分減じるだらうと思つたので。）——大體さういふ方法を考へ出したのであつた。

それに、何よりも、私はこの際出來るだけ早く、なるべく不自然でないやうに、本屋の山本が破産したこと、それと共に山本も行方をくらましたこと、（實際は、無論、山本は私に行方を隱してはゐなかつたが、）そして私が無收入になつたことを彼女に告げなければならぬと思つた。と言ふのは、彼女になるべく私を遙に意氣地なく、遙に無力で、遙に頼みない者と思はせて、私とこの後連添ふことに絶望させようといふ考と、今一つはもう私が突然彼女に姿を隱しても、累を山本に及ぼさないやうにとの考とからであつた。けれども、それを發表すると共に、私は今迄のやうに、彼女から開放される時間を持ち得なくなることを、同時に覺悟しなければならなかつた。

そして、遂に、私たちがその生垣の家に引越してから一ヶ月目の、月末の三日前に、私はその事ををんなに話して、來月から市内の何處かに下宿しようといふことに、相談を定めたのであつた。

誰も皆、同じ思があるであらう、自分のものとなると、たとひ一枚の座蒲團でも、又一枚の寢間着でも、一つの鐵瓶でも、一つの火鉢でも、そこに一種の利害の觀念を越えた愛着を覺えて、なかなか捨て難いものである。しかし、私はその翌日屑屋を呼んで、恰も何かに自棄になつた人のやうに、それ等のものを悉く賣拂つたのであつた。長い間、殆ど十年も二十年も前から、國から東京の下宿へ、下宿屋から下宿屋へ、何よりも捨てかねて持ち歩いてゐた、一つの柳行李一ぱいの手紙類の反古をも、（その中には、今のをんなとの以前の、いろいろな女といろいろな時に取交した、戀の手紙類などもあつた。）思ひ切つて皆賣拂つてしまつた。私はをんなを逃げると共にこの世に自分のものと名の付く如何なるものをも、持たない身分になりたいと思つたのであつた。

私たちの、一ヶ月前には相當の希望を持つて引越して來たところの、生垣に埋められたその高臺の屋敷町の、湯殿までついた家を、（來年の夏になつたら、毎日そこで湯を立てようなどと機嫌のよい時はいゝなと聞とお話してゐたこともあつた、）僅一ヶ月の後に斯くの如き状態に落ちて斯くの如く慌しく、引越さねばならぬことになつたらうとは、誰が考へ得たらう。それはまつたく、破れた障子を、前の借家人の代からのまゝで、張り替へる暇もなかつた間の早さであつた。私たちは、初に敷金として三ヶ月分を收めておいた中から、一ヶ月分の家賃を引いて貰つて、その殘りの金を持つて、遠町の或町のとある下宿屋に、夫婦で（誰が若い、見たところ睦まじさうな私たちを見て、その夫が近いうちにその妻を置去りにする計畫で、越して來たと思つたであらう？）引越して行つたのであつた。

ところが、下宿に越してから、二三日目の或晩のことであつたが、彼女は突然獨言のやうに、

「わたしもう一遍藝者に出ようか知ら？」と言つた。即ち彼女は毎日わざと額に現して屈託ありさうにしてゐる私を、正直にそのまゝに解して、次第に生活上の不安に襲はれ始めたらしいのであつた。

けれども又私が餘り調子に乘つて、それに乘じて度々溜息をついたり、心配らしい顏をした

りし過ぎると、彼女はもうその不安らしい樣子を了解する負擔に堪へられなくなると見えて、忽ち持前のヒステリイを起すのであつた。そして又私は竹屋の間借時代の樣に、世間の狹さにはら／＼しなければならなくなるのであつた。私たちは、無論、まだ假名をつゞけてゐたのであつた。そしてこゝでは竹屋の家族の代りに、下宿屋の主人や、女中や、數多の客たちに對する外聞に氣をおかねばならないのであつた。

彼女のヒステリイと言へば、下宿屋に移つてからは、それが一層ひどくなつたやうに見えた。思ふに、これは男の神經衰弱などと同じく患者の周圍の生活狀態が不快に、險惡になればなる程、病氣もそれに比例するらしいのであつた。例へば、夜、鴨なんばを註文して、それが下宿の女中の間違ひから、饂飩と言つたのが蕎麥であつたといふので、（實は、本當の理由は饂飩や蕎麥にあるのではないのだが、本當の理由は、それは極めて簡單で、要するに饂飩が蕎麥に變つたといふ不如意ではなく、私たちが貧乏で錢がないために、色んなことに當つて起る不如意からなのである。）彼女はいゝどんぶりの蓋を開けるなり、それを疊の上にぶち開けたことがあつた、そして疊の上にぶち開けられた鴨なんばの光景は彼女を更に不快な氣分に誘つて、その不快な氣分が更に彼女のヒステリイ性を煽つて、彼女にその上に火鉢の灰をまき散らさした。加速度の法則は更にそれだけに止まらないで、彼女は一枚しかない自分の前掛を以て、（それがなくなると、又早速明日の日にも、私がなけなしの金を工面して買はなければならないのだ、この節は一枚のお召の前掛だつて、なか／＼僅な金で買へないのを彼女も知つてゐる筈なのである。）それ等の蕎麥と鳥の身と葱とお汁と灰とを、ぐちや／＼にこね返すのであつた。それを私は、下宿屋からバケッと雜巾とを借りて、掃除をすることは大した苦痛ではなかつたけれど、妻のさういふ亂行を、病氣とはいへ、夫の私が叱りもしないで、馬鹿のやうに後始末するのを、下宿の女中たちに見られることが、私に恥かしくて堪らないのであつた。

「藝者になると言つても、」と彼女は獨言をつづけた。「私は言はば前科者だから、前の家の借金を拔かないうちは、何處へ行かうたつて行かれやしないし……」

「もう藝者になつてくれちやあ困るよ、」と私は表面は實際困るやうな、卽ち彼女と別れともなさうな顏をして、斯う言つたものの、言ふ迄もなく、私は心のうちでは、そんな風に、私の方からではなく、彼女の方から到頭私の希望通り、私から離れて行つてくれる傾向を見せ始めたのを竊に喜んだのは事實であつた。何故なら、彼女が過去に於いて幾人の男を持つたかも知らないが、一年も彼女と連れ添うた男は私の外にはない筈で、それ程この世に於いて外の誰よりも彼女を愛し且憐む私でさへも、どうせ彼女には藝者稼業より外に彼女の身を置く何もこの世にはないと考へる外なかつたからであつた。

「困ると言つたつて、」と彼女はさういふ私の心の底も知らないで、私を睥むやうな目をして言つた。「こんな風では、私たちはどうにも仕樣がないのぢやあないの？　何もあなたに甲斐性がないからのことだわ。」

「その通り、全く、その通り！」と私は心に思つた。が、それと共に、斯う正直な彼女が、私の言葉を本當に眞にうけて、如何にも私が彼女と別れともながつてゐるのを、一廉たしなめるつもりかのやうに言ふその心根を思つて、私は自分の不正直を神と彼女とに心の中で詫びねばならなかつた。

「わたし、」と彼女は又言つた。「いつそのこと、カフェーの女給にならうか知ら？　あなた何處

か知つてるでせう、そこで私を世話してくれない?」

「女給ならいゝね、」と私は益々白々しく言つた。「女給なら一週間に一度くらゐは會へるからね。だけど、さてカフェーと言つたつて、僕も知らないね。もつとも、それなら新聞の廣告を見さへすれば、毎日一つや二つは屹度新しい募集廣告が出てゐるよ。」

すると、彼女は又急に模樣を變へて、といふよりも、彼女は初からこれといふ意見があつて言ふのではなく、その言葉も亦ヒステリイが言ふ言葉なので、

「だけど、これでは、」と彼女は自分の着てゐる着物を一寸指先でつまんで見せて、「これでは仕樣がないわ。近頃はカフェーの女でも銘仙の着物など着てゐるものは滅多にないことよ、お召の一枚位なければ行けないわ!」と言つた。

そこで又私は沈默しなければならなかつた。それに、この彼女の無茶な話を反駁して、彼女を言葉の上で說き伏せたところが、負けると必ずヒステリイを起して、無理無理に勝たうとするのが常であるところの彼女の平常を知つてゐる私は、こゝで唯沈默しただけでは何全く安全ではないと思つたので、「それはさうだね、」と合槌をさへ打つ必要があつたのであつた。

その時ふと私は、暫く會はない山本を思ひ出した。——遲れ走せながら、こゝで彼の略歷を述べると、彼は十三歳の時に本屋の小僧にやられて、十七八歳で番頭になつたが、二十二三歳の時或失策のために主家を出て、そして三十五六歳の時又元の本屋に歸つた迄の、その十二三年の間を、彼のきりツとした所謂江戸前の、苦味走つた顏の中に、稍々物凄く光つてゐる目を見ても分る通り、或時は相場師になつたり、或時は賭博師の群に交つたり、又或時は藝妓檢番の書記になつたり、殆ど私たちの想像の外の樣々なことをして來たとのことであつた。しかし彼は己の苦勞の經驗を以て、人を鞭打つことはしないで、それから割出して、人を思ひやるといふ質であつた。

その故に今私は彼を思出したのであつた。私は彼女に内所で、彼が破產後始末の付かない債主から逃れて、侘住居をしてゐる彼の郊外の家に、鶴丸に使に行つて貰つて、（山本の老母にはいつかのこと以來、私はいまだに出入を禁じられてゐたので、）彼を呼出して貰つた。その日の夕方、私は或カフェーの片隅で、山本と向ひ合つたのであつた。

「略々お察し下すつてるでせうが……」と私は切り出した。友達から離れてゐた私は、その頃いつも自分の問題の持つて行きどころを彼に求めてゐたのであつた、「私はどうしても、私の力ではこの上彼女と共同の生活をして行けないのです、」と言ひながら、そして私は山本の目の色を窺つた。彼は例のその持前の[illegible]で、時々私の話を遮つた。私はつゞけた。「ところで、彼女が又近頃藝者に出たいと言ひ出してるんですが、あゝ言ふ、つまり逃亡した者の名は、無論もう全國の藝者業組合に廻されてゐませうから、出ると言つても一寸むづかしいでせうね、どうでせう?」

「いや、さうは定つてゐません、」と山本は答へた。「藝者家の方にしても、兎に角自分の家に屬してゐる女に、さう無暗にきずを付けたくはないでせうから。それに、たとひ全國の組合に名前が廻つてゐてもゐなくても、どの道出るとなると前の借金の片を付けないわけには行きませんし、又それさへ付けば何でもありません。そこへ、行くと、周旋屋などと言ふものは職業ですから、そんなことには馴れたものですよ。」

で、結局、山本の薄い親戚に當る、赤阪の或

藝者家に出入する周旋屋といふのに、もしさういふことになれば、賴んで貰ふことに私は約束して、彼と別れたのであつた。

そして、その晩下宿に歸つて、私は彼女にこんな風に話したのであつた。

「今日、途で偶然に山本に出遇つてね、」と私は言つた。「山本の奴、僕に未拂の月給の催促でもされることかと思つて、妙におど〳〵して、例の咳ばかり續けさまにこん〳〵してゐたよ、」と先づ彼女を笑はせて、私はその機嫌を買つた。實際は、未拂の月給どころか、私は山本に幾度となく理由のない借金をしてゐて、それ等がその時々に彼女の洋傘や、半襟や、前掛などになつてゐたのであつた。

「そして」と私はつゞけた。「そして山本とその近くの、丁度赤阪の藝者町の近くだつたがね、カフェーに入つて珈琲を飮んでゐると、——山本といふ奴は妙な男だね、色んな人間を知つてゐる男だね、——そこへ入つて來た、變な男と、やあ、やあと言つて挨拶したかと思ふと、その男を僕に紹介してくれたんだがね、どうだ、その男を何だと思ふ？　周旋屋なんだよ。」

私は彼女の顏色を窺ひ、窺ひ、口から出任せに、彼女を罠にかけるために、話の節を運んだ。

「しかし非常に參考になつたよ、」と私はつゞけた。「その男の話に依ると、『私は初めて藝者になるんですが、』といふやうな客は滅多にないさうだね。大抵は住替へか、でなければずらかつてゐたのが出て來て、——逃げる事をずらかると言つたよ、彼等の術語なんだね、（これは實は私は山本から聞いた言葉なのだ、）——そして片を付けるか、大抵その二つに一つださうだよ。で、僕も冗談に、『僕も事によつたらお賴みするかも知れませんよ、』と言つてやると、彼本當にしやがつて、それからと言ふものは急にぺこ〳〵と頭を下げて、僕の機嫌を取出して、僕に飮まないといふのにヰスキイなどをとつて勸め出したよ。」斯う言つて、私は更に彼女の顏色を深く窺ひ窺ひ、「しかし、お前はもう藝者になるなよ、ね、」と反對の言葉で彼女を唆つたのであつた。

けれども單純な彼女は、益々私の計略に乘つて、「だけど、二年位なら、私もう一遍出て見たいわ、」と頻りに言ふので、私は餘りに正直な、斯くの如く易々と私の手に乘る女から、いくら病氣のためとは言ひながら、斯くの如き方法で逃げようとする、自分の卑劣な、惡心を少なからず心で恥ぢねばならなかつた。

けれども遂に、私は彼女の心の變らぬうちにと思つて、一日山本をたづねて、此間彼に相談したことを、愈々實行して貰ふことにした。そこで、私は彼の薄い親戚に當るといふ赤阪の藝者家に彼と二人で出かけた、そしてそこから又案内されて、そこの出入の里見といふ、公周旋業者の家に出かけて行つた。

公周旋業者の里見は、五尺七寸以上の、お伽話の『猿蟹合戰』の中の、挽臼のやうな四角な顏をした、色の黑い、目の大きな、そして熊のやうな荒い口髭を生やした男であつた。彼は嘗て要塞砲兵であつたとかで、彼の家の入口の『公周旋業、勳八等、里見政之助』といふ看板が變挺なやうに、彼の兵隊上りの頑固な身體に、商人ともそれしやとも付かない、羽二重の長襦袢に、結城紬の上下の着附が、何とも言へない變挺な外觀を示してゐた。

彼は無論その職業柄、ずらかつた女を扱ふ位のことは始終馴れてゐるから、少しも心配には及ばぬとか、先の借金はなるべく安く拔くやうに先の藝者家に掛合はうとか、その外、外ならぬ家からの紹介だから、自分として出來るだけの便宜を計らうとか言つた。が、唯一つ、こゝに問題がある、といふのは、彼女のやうに、

二十五歳未滿で兩親のある者は、規則として一應警察から兩親の家に紹介をする、その時に彼等が『私たちはそんなことは知りません、』と言へば、無論彼女の家ではさういふに定つてゐる、すると藝者の鑑札が下らないと言ふ故障があるといふことであつた。そして日本國中で、その警察の紹介がない場所としては、唯一つ神奈川縣があるばかりで、從つて彼女が藝者に出る場所は、その外にないといふ話なのであつた。（實際、彼女はこの前にも、その神奈川縣下の或町で藝者に出てゐたのであつた、そしてそこから彼女は所謂ずらかつたのであつた。）

「……と言つて、神奈川縣下では御本人が、前のこともありますから、何となく厭な氣がするでせうし……ハヽヽヽ」と彼は、飛んでもない所へ、その身體相當な豪傑笑を混ぜるのが癖らしかつた、それが何とも言へず、初のうちは私に氣味惡く思へたが、笑ふと忽ちその黑い、逞しい髭を持つた、撥面形の顏の形がくづれて、大きな目も、熊の樣な髭も、悉く鯨の顏のやうな愛嬌のある恰好になるのを發見した。

すると、彼は暫くしてから、言ひにくさうに言葉をつゞけて、「どうです、一つ思切つて遠方に出かけては？」そして又「ハヽヽヽ」と大きく笑ひながら、私の方ではなく、彼女の方を見た。その時は二度目に彼を訪問した時で、私と彼女と二人きりで行つたのであつた。

「遠方つて何處？」と彼女が聞いた。

「なあに、丁度今私のところへ、青島から三四人連れて行きたいつて、藝者家、と言つても、彼地では料理屋も待合もみんな同じ家ですがね、の主人が見えてるものですから、ハヽヽヽ」と笑ひながら、彼はその大きな身體を動かして、傍の小簞笥の引出から一枚の繪葉書を出して、「どうです、帝國ホテルより立派ですね、」とその青島の藝者家の寫眞を見せたりした。

それから彼は周旋屋一流の、譃とは思ひながらも、聞いてゐる者が心を動かさないではゐられないやうな口調で、青島のよい所であることを、勸誘的に見えない調子で、その實最も勸誘的な調子で話し立てたので、それに、無論、單純な彼女は乘せられたのであつた。

「わたし行くわ、」と彼女は言つた。

「一晩くらゐ考へてから返事をした方がよかない？」と私が口を出した。

「考へなくつたつて分つてるわ、」と彼女はもう幾分かヒステリイ氣分になつて言ふのであつた。「私の身體を私が處分するんですもの、後悔するたつて、私、後悔するだけですもの、誰に相談することもないわ！」

「それやさうだけども……」と私は引退つた。

歸る途々、彼女は神奈川縣のことを思ふと、二倍以上も貸してくれるといふ、青島へ行くことになれば出してくれるといふ前借の金で、あれを買ひ、これを買ひ、とそんなことばかりくり返し胸算用しながら、變にヒステリイ的にはしやいで、うるさい程彼方の時計屋、此方の呉服屋、小間物屋と私を促してショウヰンドウをのぞいて歩いた。……

その日から四日目に、彼女は里見の家で、青島の藝者家の主人と會ふ約束になつてゐた。すると、或時は彼女はばかにはしやぐかと思ふと、次の時には彼女は少女のやうにさめ〳〵と泣いた。

「わたし青島へ行くのいや、」と彼女はヒステリイ婦人獨特の、子供のやうな甘つたれた口調で言つた。「わたし青島も、何處もいや、あなたの傍を離れるのいや。もう乾度我儘を言はないから、あなたの傍にゐるの。」そして彼女はさめざめと泣いて止まないこともあつた。

「僕もお前に別れたくはないが……」と私は言つた。幾度も言つた通り、別れようとする私の

心は最早や翻すことは出來ないが、私としても別れた私のをんなが、私と別れると共に、青島に行つたとあつては、如何に彼女の心から、彼女の自分の意志で行つたものとは言ひながら、人の思惑もあり、何よりも私自身の寢醒が惡い、つまり、私は青島行はどうしても彼女に止めさせて、それと共にどうしても最初の計畫は止まないで、彼女が神奈川縣に行くことを望んだのであつた。そこで私は言つた「山本はあんな風に破産してしまふし、僕もこゝ暫く友達の家にでも轉がり込む外仕様がない。が、お前は青島なぞへ行かないで、神奈川縣あたりにゐて、二年の辛抱だ、僕もその間には何とかなるだらう、屹度何とかする！ 待つてくれよ。」……

そして、私はその晩、彼女に内所で、里見の家に出かけて行つた。

「大體のことは山本君から聞いて下すつたでせうが、」と私は熱心に里見に話した。私は、私が決して彼等の所謂「惡足」とか、「紐」とか言ふやうな、彼女を利用して、藝者になつてからの彼女につき纏つて、その營業の妨害なぞをする者でないこと、それどころか、どうかしてこれを機會に彼女から逃げようとしてゐる者であること、が、さういふ僕の考を彼女に言つて貰つては困る、何故なら表面上は飽く迄彼女と別れ難さうにしてゐるのだからといふ樣なことを詳しく打明けた。

里見が彼女に青島行を勸めたのは、無論その方が話が成立してからの金額の幾割といふ手數料を取る彼にとつて、利益が多いといふ理由もあらうが、今一つは彼等の所謂「玉」なる彼女とその「惡足」なる私との聯絡を斷つて、それ等の關係から往々起るところの、後日の間違ひを避けたいといふ點も重要なのであつた。だから、私は極力私がさういふ者でないことを述べて、然し私として彼女の青島三界に行くのを默つて見てゐることが情に於いて出來ないから、どうか彼女には青島の方に口がなくなつたとでも言つて、神奈川縣の何處かに、それも先にゐた××は彼女にも行きにくいだらうから、横濱にでも世話してくれるやうにと賴んだのであつた。全く、私は恥も何も忘れて、總てのことを馴染の淺い、而も桂庵の里見に打明けて、そして賴んだのであつた。

「よろしい、私が引受けました、」と里見は初めて、會話の中に例の豪傑笑を入れるのを止めて、太つた身體の、坐りにくさうな膝の上に置いてゐた手を、組みにくさうに胸の上で組んで、俠客らしい調子で言つた、「私が引受けました。御安心なさい！」

それから彼は、如何に彼の性格が斯ういふ職業に向かないものであるか、何故なら最も薄情といふ性質が必要なこの職業にあつて、彼の性質が、如何に俠客的であるために、少しも金が儲からないか、といふ樣なことを、二時間以上も例を擧げて話し始めたのであつた。

私は、恰も長者に對するやうに、畏まつた風をして、一々もつともらしく點頭いて、彼の言葉に傾聽する風を裝はねばならなかつた。

それから二三日すると、愈々彼女は横濱の或町の藝者家に、四分六の契約で抱へられることに話が定つたのであつた。――それから、彼女が出發するまでの二三日の間、如何に私が彼女の小使のやうに質物を出しに走つたり、又如何に新しい着物を買ひに行つたりするのに、私が一々彼女の下僕のやうに引張り廻されたか、といふ話はこゝでは省かう。

私は彼女を、十月末の晴れた日のことであつた、赤阪の里見の家に送つて行つた。そして里見に送られて彼女が横濱に行くのを、私は山王下の電車の停留場まで見送つて行つた。それも彼女が是非横濱の藝者家まで送つてくれと言

ふのを、すつともう言ひたかつた後なのであつた。新橋行といふ看板を出した電車が來た時、斯ういふ場合に慣れてゐる、大男の様な彼は、「ぢやあ、行つて來ます、」と如何にも何氣なさうに、簡單に言ひ放つて、ひらりと電車に飛乗つた。で、彼女もそれにつられて、一寸私に目で挨拶した切りで、つゞいて電車に乗つた。だから、前借の金で買つたところの、出來合の紫紺の金紗お召のコートを羽織つてゐる彼女が、動きますよ、と車掌に促されて、あわてて乗つた後姿を、乗ると共に彼女をすくふやうにして走り出した電車を、私は見送つた譯であつた。ひよい、ひよい、と昇降口の二段の踏段を上る時、これも同じく前借の金で買つたところの、友禪の小濱縮緬の長襦袢の裾が、新しく穿いた白い足袋にからむのが、（私は彼女の外觀に就いて何にも言はなかつた、が、彼女は足の恰好の大變いゝ女であつた、）ちらと私の目に止まつて、ちらと電車の中に隠れるが早いか、電車は動き出したのであつた。

　そして私はその反對の方向に走るやうに歩き出したのであつた。だけど、私はどこに行かうと目的して、そのやうに急いで歩き出した譯ではなかつた。前にも言つたやうに十月末の、それは日當りのやうに晴れた日のことであつたから、ぞろ／＼と雑踏してゐる人ごみの中を、私は縫ふやうに無暗に歩きながら、過ぐる一年の間、消息を絶えてゐた友達を、これからぼつぼつ歴訪しなければならぬと考へたり、或ひは又過ぐる一年は自分の生涯の頁に於いて、括弧の中に入るべきもので、さてこれから新しい生活に入らねばならぬと考へたり、そして又ともすると今し方別れた彼女の思出が女々しく湧いて來るのを、打消すやうに打消すやうにと努めながら無暗に的もなく急ぎ足に歩いたことであつた。

　遂に私は電車に乗つた。先づさし當り、暫く會はない鶴丸を訪ねて見ようと思立つたのであつた。

　鶴丸は机の前に坐つて、その机の上には鏡と、何か透明な液の入つた瓶と、それから白い粉のはひつた小さな紙箱とが並んでゐて、彼はその鏡に向つて瓶の液と箱の粉とを交る交る掌に着けては、それで兩頬をこすつてゐた。

　二言三言挨拶の言葉を交した後、私が早速、漸くのことでをんなと別れる手筈を終つたことを話すと、

「それはいゝ按配でしたね、」と彼は言つて、それから暫く間をおいてから、「私も、實はこの一週間ほどの間に、大分思はぬ苦勞をしたんですよ、……といふのはね、あの寫眞の女が突然やつて來たんですよ。」

　言はれて、私は何氣なく、例の寫眞の額の掛つてゐる方に目をやると、額はそのまゝ掛つてゐるのだが、肝腎の寫眞はなくなつてゐて、挟んであつた新聞紙がガラスの下に露出されてゐた。

「どうしたんです、又？」と私が聞くと、

「もう今度こそはすつぱりと縁を切りました……」と彼は吐出すやうに答へた。

　その日は鶴丸は、女がどうして來て、どうして歸つて行つたのか、そして彼等が一週間どんな風にして暮したかに就いては多く話さなかつた。

「あなたが始終言つた通り、五黄の中の女、」と彼は言つた。「五黄の中の女、あの年の女はいけませんね。僕の女も、いつかも言つた通り、あなたの奥さんと同い年なんですよ。あの年の女は服從心……服從心がなくつていけません、いけませんね。」

　そして彼はやつぱし机に向つたまゝで、「一寸失禮しますよ、」と言つて、又鏡の傍の瓶には

ひつてゐる液を掌につけては、それを雨の頬にすり込み、次に紙箱に入つてゐる白い粉を又掌につけては、それを雨の頬にこすりつけて、それを幾度も幾度もくり返してゐた。

「何をしてゐるんです、一體？」と私が尋ねると、

「これですか？」と彼はにや〳〵しながら、でも問はれたのできまりが惡さうに、答へて言ふには、「これはその、頬ぺたをふくらませる藥なんですが……」そして稍々暫くして、「ねえ、あなた！」と彼は眞面目な顏をして言つた。「女は男を確に瘠せさせますね。」

そして又彼は少しも休まずに、その白い頬が眞赤になる程、液と粉とを交る交る頬にこすりつけてゐたのであつた。

「あなたも隨分頬がこけましたね、」と彼は又言つた、「どうです、これをつけて見ませんか？」

そして相變らず頬をこすりながら、彼は獨言のやうに「本當にすつかり瘠せてしまつた！」と言つてるかと思ふと、「あなた！」と私の方を向いて、「後でお湯に一緒に行きませんか？一つお湯屋のかんかんで目方を量つて見ませうか？」

そこへ、聞覺えのある咳の聲がしたかと思ふと、廊下で「鶴丸さん！」と呼んで、山本が入つて來た。

「多分あなたも入らつしやるだらうと思つて……」と山本は私に言ひながら坐つた。

「お蔭でやつと今片がついたばかしです、」と言つて、私はふと何氣なしに山本の頭を見ると、いつの間にさうなつたのか、彼の前頭の部分に可成り大きな、地圖のやうな恰好の禿が出來てゐるので、それを尋ねようと思つて口を開く間もなく、山本が、鶴丸の机の上の例の瓶と箱とを目付けて、

「鶴丸さん、それや何の藥です、毛生え藥ぢやありませんか？」と言つた。

「なあに、あれは頬ぺたの凹けたのをふくらます藥ださうですよ、」と私は引取つて、「あなた、その禿はどうしたんです？」と聞いた。

「これは、あなた變な禿でね、」と山本の言ふところに依ると、二週間前に、頭のまん中にぽつりと一つ、小指で抑へた程の禿が出來て、それが直つたかと思ふと、又横の方に今度は少し大きいのが出來て、それが又直つて今はこんな所に出來たと言ふのであつた。

「今から七八年前に、やつぱしこんなのが出來たことがありましたがね、」と山本はつゞけた、「その時もやつぱしひどく運の下向きの時でしたが、不思議なことがあるもんですねえ、私の親父も以前、やつぱし運が惡い時にこんな禿が出來たさうです。」

「醫者に罹つても、藥をつけても、駄目なんですかねえ？」と鶴丸が聞いた。

「駄目ですね、」と山本は答へた。「醫者に藥だけは貰つてつけてゐるんですが、ちつともきゝません。」

「やつぱしこの」と私は言つた。「この鶴丸君の、頬ぺたをふくらませる藥ぐらゐのところですかね。」

そして山本と二人で笑ふと、鶴丸は眞顏で、

「いや、これは確にきくのです、」と打消した。

やがて、暫くしてから、山本が、「今日はばかにいゝお天氣ぢやありませんか！」と言つて、私の顏から鶴丸の顏を見て、

「どうです、又花屋敷にでも行つて見ませんか？」

そこで三人は出かけたのであつた。

苦の世界（後篇）

一　哀れな老人等

女子を殺す　戰爭に出征を望む男のこと
メリイ・ゴオ・ラウンドで結ぶ二人の男のこと

私の友達の鶴丸が彼の情人の、彼の郷國の藝者『あさ顔』に忽ち會つて忽ち別れた譯は、次のやうな次第からであつた。

「……をんなも送つてほしい樣な口振でしたし、僕も送つて行きたくもあつたものですから、そこで僕は沼津まで送つて行くことにしたのです。……」と鶴丸は話し始めたのであつた。「あゝ、さうでしたね。それよりも、どうして突然彼女が東京に來たのか、その譯をまだお話しませんでしたつけね。……彼女は今度、突然ある人に引かされたのです。

「實は、前から僕との間に言ひ交したことがあるんですが、と言ふのは、僕にはなか〳〵彼女を引かすやうな力は當分の間はないのだから、それより前に彼女が誰かに引かされるやうなことになつたら、どうせ藝者を引かすやうな奴にはあり餘る金に違ひなからうから、その男に體よく引かして貰つて、そして僕のところへ逃げて來る、と斯ういふ都合のいゝことになつてゐたんです。

―そこで彼女が或人に引かされたと言つて、突然僕の下宿にやつて來ました時には、僕はこれから後の生活に就いてなぞ考へるどころですか、僕の喜びやうツたら、本當にありませんでしたね。……ところが、それがさうではなかつたんです。彼女は先にも言つたやうに東京の者で、引かされた男には親たちのところへ一寸行つて來ると言つて、實は僕に斷りに來たのです。

「……あなたも御存知でせう、現在僕にどの女が一番好きだと聞かれたら、僕は勿論言下に、『あさ顔』と答へます。けれども、御承知のやうな僕は浮き者ですから、いくら『あさ顔』が一番好きだと言つても、郷國と東京と、三百里も離れてゐては、『遠い親類より近い他人』、『去る者は日々に疎し』と言ふやつで、近頃では手近の見ず轉藝者などに却つて深く馴染んでゐたやうな譯でしたが、さてさうして本尊が目の前に現れて見ますと、やつぱし俺のをんなはこの女の外にはない、外の奴は皆代理だ、と斯う思ふのも無理はないでせう。ところが、この女ならでは、と思ふその女に、見受けはされたが、そこに少し譯があつて、とか、もう少し待つて下さい、とか――さうなると、男の身になつて御覽なさい、堪らないではありませんか？　さては今度お前を見受けした男は、俺よりずつと氣に入つたんだな、それは誰だ？　まさか、あの古着問屋の隱居ぢやあるまい、あの印度の猿見たいな鑛山師でもあるまい、それともあんな肥つた赤面の、四十男は見てゐるだけでもぞつとするなんてよく言ひ言ひしてゐたが、やつぱし、到頭あの脂肪ぶとりの油屋の執固いところにお前の方から惚れてしまつたのか？――斯ういろ〳〵と、僕がまだ郷國にゐて、『あさ顔』のところへ通つた時分に鉢合せした客をそれ〳〵擧げて、あれかこれかと聞いて見たんですが、彼女はことごとく頭を振つて、さうぢやない、突然の、思ひがけない人だといふばかりなんです。この『思ひがけない人』といふのは、彼女にとつて思ひがけない人だとばかり思つてゐたら、今

に分ります、それが僕にとつて實に『思ひがけない人』だつたんです。……

「明日歸るといふ、前の日でしたが、彼女は手提の中からダイヤの入つた蒲鉾型の指輪と、小さな女持の金側の腕時計とを出して、僕にくれようと言ひました。勿論、僕は貰ひましたよ。(今では、もうそれ等を質に入れた金さへすつかり使つてしまひましたがね。)その時、ふと見ると、その僕にくれようと言つて出した指輪と時計との外に、そして彼女の手の指には四つの指輪が篏められてあるんですよ、その外にですよ、手提の中にはまだ三つの指輪と二つの時計が入つてゐました。(ねえあなた、專門の掏摸でもこんなには持つてゐますまい!)そればかりではありません、下宿の女關なぞに置いておくと、失くなるかも知れないといふ僕の注意で、持つて上らせて床の間の隅に立てかけてあつた彼女の洋傘にしてもさうです。なか〳〵上等らしいので、あんなのはこの頃では隨分とるんだらうね、と僕が何氣なく聞きますと、そんなでもないわ、五十五圓よ、と實に洒々としたものです。その外、(髷に結つてたんですがね、)黑鼈甲に金銀と螺鈿細工とを施した櫛一枚、翡翠の根掛一かけ、足袋の甲馳一つ、……この女は、あなた、足袋の甲馳迄金にしてゐました、)――それが私たち五尺何寸の男の何ケ月分の下宿料になるかと思ふと、それを持つて生れた肉體一つで、男といふ者は何といふ慘めな者でせう! いゝ、なさけなき者よ、汝の名は男ですよ、女は厭な法律の勉强をしないでも、賣れない(失禮ですが!)書の稽古をしないでも、持つて生れた肉體一つで、生れた時に附いてゐた目を開いたり閉ぢたり、生れた時から附いてゐる髮を結んだり解いたり、生れたまゝの口で物を言つたり笑つたり、――たゞそれだけで、易々と世界が渡つて行けるのです。さもしい事に目を付けて、さもしい事を嘆くやうですが、實は僕はこの二三ケ月、毎月程たつた四十圓の金を貰ふのに、そしてたつた十圓や二十圓の追加を貰ふのに、その度毎にどんなに母の泣言を聞かせられましたか?……

「僕の父は、いつかもお話しました通り、選擧違反で二ケ月ほど牢に入つてゐました。それが一ケ月ほど前に出たのですが、今度やつぱし政黨の方の關係筋からか、或ひは全然別の方からか知りませんが、一萬圓ほどの金を取つたとか、取るとか言ふことで、そしたら幾分樂になるだらうと母は書いて來ました。あゝ、たつた一萬圓です。僕のをんなはその身體の上裝にだけでも一萬圓以上のものを附けてゐます、そしてそれは僕とこの前郷國で別れてから、半年と經たないうちに彼女がこしらへたものです。ところが、僕の父はどうでせう、先祖からの財産をことごとく失ひ、五十の坂を越して牢にまで入り、頭に霜を戴いた今、たつた一萬圓の金が入る入らぬで大騷ぎしてゐるのです。……

「僕はこの世界に女を殺す戰爭が始まつたら、僕は眞先に出征しますね、僕は眞先に出征しますね!」

斯う言つて、法科學生は話に一段の息をついたのであつた。私は笑つた。が、彼は私の笑ひに應じる程度で、その可愛らしい口元に少しばかり白い歯を見せただけであつた。

「それで、沼津まで送つて行つて、別れて、そのまゝなんですか?」と私は聞いた。

「そのまゝなんです!……」と鶴丸は言つて、生唾を一息呑み込んで、さて又つゞけた。「だがその間の話が大變なんです。――他人のをんなを送つて行く必要はない、とか、ぢやあ、送つて貰はなくつてもいゝわ、とか、いろ〳〵と揉つた揉んだがあつて、僕は到頭沼津まで送つて行くことになつたのですが、それが靜岡まで、む

やあ最後に濱松まで、とその度毎に車掌に乘り越しの切符を二度までも請求して、その濱松に來てからもまだ一思に別れかねて、男と女なんて變なものですね、仲よく話してゐればゐるで別れられず、口説してゐればゐるで又別れられず、そして到頭名古屋まで行つてしまつたのです。――あゝ、どうせ濱松から名古屋まで延ばしたとて同じ事なんですから、思ひ切つて濱松で別れてしまへば、どんなにかよかつたのです。それが、名古屋まで行つたばかりに……

「名古屋まで行つたばかりに……」

そして鶴丸は溜息をついたまゝ、暫く後をつづけなかつたのであつた。私は今迄さういふ調子の彼を瞭り見たことはなかつた。無論、彼の顏は普段から、美しくはあつたけれども、決して晴々した、明るいものではなかつたが、そこには辛いとか、面白くないとか、そんなことを言ひながらも、どこか三味線の唄のやうな、投げやりな、生々しくないところがあるので、人をして暗い憂鬱を感じさせないものであつたのだつた。ところが、その日に限つては、どう見てもさうではなかつたのだ。――讀者諸君、そのことの原因が今に分るであらう。……

「名古屋まで行つたばかりに……」と言つて、暫く後をつゞけなかつた彼は、二三度ため息をついてから、やつと決心したやうに、「……あゝ彼女が、何故あそこで僕を怒らしてでも、下ろしてくれなかつたのでせう？　せめて豐橋の前ででも、或は岡崎の前ででも、彼女は僕を下ろしてくれたらよかつたのです。それがどうです？名古屋の近くになつて、初めて彼女は、多分今度自分を引かしてくれた人が、名古屋まで迎ひに來てくれてることになつてゐる、と斯う打ち明けたのです。でも僕は多少はッとしないではありませんでしたが、又多少妬け氣味もありますし、一つどんな男か、知らん顏して見てやらうか、なぞとも思ひましたしするので、なアに、お前たちの邪魔はしないよ、そんな野暮ぢやあないよ、なぞとわざと落着いてゐたもんです。

「ところが、汽車の中で、車掌に聞いたのですが、名古屋のステーションで、丁度上りと下りが行違ひになるのださうです、をんなに別れて、といふよりも捨てられた形ですからね、知らぬ町のステーションで、ぼんやり上りの汽車を待合はすといふ樣なことは、考へても堪りませんからね、それは丁度都合がいゝ、お前にしたつて都合がいゝだらう、可愛い男の顏を俺に見られないで濟むし、なぞとその時はまだ僕はそんな冗談を言つてゐました、といふのは、下りの汽車は五分間とか停車するのですが、上りは下りのそれが着くと直に出ると聞きましたので、僕たちの汽車が名古屋に着くなり、僕はすぐ汽車を下りて、改めて、改札口を出て切符を買はないでも、ブリッヂを渡つて、車掌に斷つて、そのまゝ上りの汽車に乘らうと、斯う決心したのです。

「そして僕はさうしたのです。汽車がまだ止まり切らないうちに、『ぢやあ、さやうなら！』と僕は思ひ切つて、彼女の顏を見ないで言つて、汽車を下りました。汽車を下りて、僕はどちらも振り向かないで、まつ直にブリッヂへ行けば何のことはなかつたのです。ところが、僕はその方へ急ぎながら何氣なしに、いや、何氣なしにぢやなかつたかも知れません、無意識に、知らないその女敵を見ようとしたのに違ひありません、ふと改札口の方を見たのです。そして僕は遲れ走せに、下り列車に乘り込まうとして、そこを通つてゐる人々の中に、あなた、誰を見たと思ひます？　誰を見たと思ひます？

「誰を見たと思ひます？」と鶴丸はいつになく可成り我を忘れた力強い聲で、私の方に膝を詰めるやうに乘り出して、さてがつかりと聲を

落して、「僕の親父なんです。……」と言つて、又默つてしまつた。

私も呆氣にとられて、やつぱり默つてゐたのであつた。すると、又暫くしてから、いつもの樂な話し振に返つて、言葉をつゞけた。「よく小說に棒立になるとか、足が釘付になるとかいふことが書いてありますが、あれは本當ですよ。しかし身體や足だけぢやありませんね、僕はその時、突然棒か何かを呑み込んだやうに、身體の心まで一時に固くなつたやうな氣がしました。走り出さうとしても、走り出せないのです。本當に、自分の手で自分の足を持つて、自分の身體を外から動かすやうにして、兎に角、人込の、向うから目に付かないところまで遁れて行きました。……それや、何にも知らない者が見れば、偶然僕の父が名古屋のステーションの改札口を、『あさ顏』の乘つてゐる汽車に乘り込まうといふのに、何の不思議も驚くこともない譯ですが、却つてそんなおほ勢の人の中で、僕の父と僕のをんなとを並べて考へる方が異しい位なものですが、……そんな理窟はみな拔きです、僕には直覺的にはつと胸に來たのです。直覺的ばかりではありません、考へて見ると、その時一度にはつと氣がついたのですが、この間からの彼女の口振に、いろ〳〵變な所があつたのでした。もつとも、その時々に、多少氣にかゝりはしたのですが、さう根掘り葉掘り人が祕密にしてゐることを聞くのも野暮だとも思ひ、そんなことをするのを僕は大體好かない性なものですから、いゝ加減に聞き流し見流してゐたのです。だが、まさかその相手が親父だとはどうして氣がつきませう？ その時厭な思をして、彼女を身受けしたその相手が、僕の親父だと聞いてさへおけば、こんな所まで送りにも來ず、又五十の坂を越して、若づくりに髯なぞ剃り込んだ、哀れな、止せばいゝのにてか〳〵と磨き上げた、現在自分の親父の馬鹿面を見ることだけは免れたのですのに……。

「なんの、なんの、僕は、だからと言つて、親父を憎む氣になぞなるものですか？ 子供の頃その界隈の村の、百年この方の神童だとか、秀才だとか言はれた長男の僕がこの有樣ですし、前にも言つたやうに、次男の弟は白癡、三男の弟は落第坊主、そして自身は、親父自身はといふと、一年々々と年はとつて行く——その親父の心根を、僕とて思はないではゐられません。親父はやつと儲けた一萬圓の金を哀れな妻を喜ばすためにも、長男の學資にも、借金の穴埋めにも使はずに、それを田舍藝者に、それが「あさ顏」でさへなかつたら僕には何の申分もなかつたのですが、だが、それも誰が惡いのでもありません、兎に角親父はそれを一田舍藝者に使つたのです——その心持は十分僕に分ります、分るではありませんか？ 屹度僕が親父の立場に立つても、さうしたかも知れませんもの。……

「……それは兎に角、僕が、さやうなら」と言ひ捨てて、汽車を下りた暫くの間は、いくら非情の彼女だつて、僕の後姿くらゐ見送つてゐたに違ひありません。だが、僕が親父の出現に氣がついて、ちらと彼女の方を振り向いた時には、彼女はもう僕がブリッヂを渡つてしまつたと思つたのか、或ひはわざとさうしたのか、何氣ない顏をして、何事もなかつたやうな顏をして、親父の方を見て、手を上げてゐました。そして又ちらりと僕が親父の方を見た瞬間、彼は丁度汽車の窓の彼女を認めて、答禮の印に、にツと五十何歲の、てか〳〵光らした顏に笑を浮べてゐました。その笑顏の、わが親父ながら、何といふ醜さ！……あゝ、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛！……」

鶴丸はこゝで初めて、自分から少し微笑んで見せた。だが、無論、その笑ひ方は、聞手の私

を愉快にしないで、笑ふと共に彼の顔の表情が歪んだやうに、それが傳染して、私の顔までその筋肉が一本々々サボタージュしてしまつて、歪んだやうな表情にさせたに過ぎなかつたのであつた。

「だが、僕は決して彼女をも憎いとは思ひません、」と彼は言葉をつゞけた、「僕の親父は僕と彼女とのことを勿論知らないのです。その間にある彼女が、僕に親父のことを、又親父に僕のことを言はなかつたのを、と言つて、誰が責めることが出來ませう？　彼女が又僕に、身受けされてからも、尚親父の名を言はなかつたと言つて、どうして責めることが出來ませう？……だが、だが、僕はいつそのこと、いつそのこと、自分が何等かの明確な意見の上に立つて、例へば人道主義といふやうな土臺の上に立つて、はつきりと彼は惡い奴だ、彼女のやり方が惡いのだと憎めたら、憎めない迄も、はつきりとさういふ立場から判斷することが出來たら、どんなに僕は却つて樂だらうと思ふのです。

「僕自身にしてからがさうです。その日僕は名古屋から上りの汽車で東京へ歸つて來ると、すぐに下宿には歸らないで、富士見町の馴染の見ず轉藝者に會ひに行きました。丁度、三四日前、まだ『あさ顔』の來てゐる時分に、この女が芝居の切符を賣りつけかた〴〵僕の下宿にやつて來て、そこで女同志が鉢合せをしたことがあります。その時、泡喰つて歸つて行つた女はまだしも仕合せでしたが、後に殘つた僕と『あさ顔』とは約二時間に渡つた喧嘩をしなければなりませんでした。あれは友達のをんなで、自分とは何の關係もないのだ、と僕は言ひ拔けようとしましたが、彼女はどうしてもそれを本當にしませんでした。さて名古屋から歸るなり、僕は新橋から富士見町のいつも行く待合に行つて、今度は又『あさ顔』のことを、あれは友達の細君だと言ひ張りました。これは一時間ばかりでどうにか妥協しましたが、さうしてその晩そこで泊つて、翌日も金のあるだけ流連しました。その金は『あさ顔』から貰つた金です、彼女の金は、或ひは親父の金かも知れません。それから、僕は『あさ顔』に貰つた腕時計を、指輪はその後質に入れたんですがね、腕時計をその見ず轉藝者に名古屋で買つて來てやつたと言つて、くれてやりました。あゝ、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛！……

「その僕にしても、親父は勿論、『あさ顔は』勿論、僕には誰が惡いとは思へないのです。惡いのは何かです、さうでなければ、何も彼もです。惡いのは何かです。神樣か、世界か、空氣か？……あゝ、淺間しい、淺間しい！……

「うわあッ！」と突然鶴丸は、その小柄な身體からは想像も出來ないやうな、大きな叫聲を上げたかと思ふと、彼は自分と自分の頭を、兩手を上げて、左右から毆り始めた。そして毆りながら机の上に俯伏して、泣き出したのであつた。

私たちは、私と本屋の山本とが、その場にゐたのだが、慰める言葉もなく、ぢつと疊の上を眺めてゐた。

「まあ、鶴丸さん、」とやがて山本が言つた、「あなたにも似合はない、さう一途に思ひ詰めても仕樣がないぢやあありませんか？　それよりも、さあ、遲くなりますから、早く花屋敷へ出かけませう。……」

「さう〳〵、」と私も山本に合はして、「花屋敷へ行くんだつたつけな。鶴丸君、行きませうよ、」と口を添へた。

鶴丸はその時すでに頭を毆る手を止めて、その手を額に當てて机の上に俯伏しになつてゐたが、私たちが慰ますやうに斯う言つても、急には答へなかつた。が、二三分の後、彼は突然顔を上げて、だが私たちの方を振向かない

で、「行きませう、」と聲だけは元氣に言つた。そして「一寸失禮、」と言つて、手拭をとつて立つたが、やがて小唄なぞを口ずさみながら部屋に戻つて來た彼の顏は、もういつもの通りの、愉快さうな樣子に變つてゐた。

そして私たちは三人で花屋敷に出かけたのであつた。その頃、花屋敷には、その入口の間近くの所に、メリイ・ゴオ・ラウンドがあつた。私たちが花屋敷の門をくゞつて、その前に行つた時、そこの客引らしい、小倉の服を着て、赤地にメリイ・ゴオ・ラウンドと白く染め拔いた腕章をつけた、白髮白髯の、上品な老人が片手に眞鍮の喇叭を持つて、それを一吹吹いては、「さあ五錢です、五錢です。今すぐ動きます、」斯う皺枯れた聲で叫んでゐた。鶴丸はその老人を見た時、

「あッ、あの老人は僕の親父によく似てゐます。僕の親父がもう少し年をとつたら、屹度あんな老人になるに違ひありません、」と言つた。

「なる程、」と山本は應じた、「さういへば、鶴丸さんにも何處か似てゐますね。」

本當に、さういへば、鶴丸にも何處か似てゐるのを、私も認めない譯には行かなかつた。だが、私はわざと輕く、「えゝ、さうですね、」と答へておいた。

そんな噂をされてゐるとは知らない白髯の老人は、相變らず變な、物悲しい音を立てる喇叭を一吹吹いては、叫んでゐるのであつた。「もう三人です、」と彼は喇叭を持たない方の片手を上げて、その手の指を三本突つ立てて叫んでゐた。「もう三人お乘り下すつたら、動かします、もう三人お乘り下すつたら！」

けれども、そこに可なりおほ勢集まつてゐる見物人たちは、老人の言葉には誰も殆ど耳傾けない風で、唯自分たちはそのメリイ・ゴオ・ラウンドの動くのを見たいのだといふ樣子の者ばかりであつた。見ると、メリイ・ゴオ・ラウンドの臺の上では男の子も女の子も、大抵は木馬の上に、稀に乳母らしい人が附いてゐる女の子が椅子の方に掛けてゐたが、いづれも各々その馬の首を叩いたり、自分の身體を乘せたまゝの椅子を搖すつたりして、一刻も早くそれの廻るのを待ちかねてゐる樣子に變りはなかつた。その間を、二三人の、二十歳前後の、變な洋服を着て、これも赤地にメリイ・ゴオ・ラウンドと白く染め拔いた腕章をつけた、看守の女たちが彼方此方してゐた、それ等の女たちは、そろひもそろつて、皆不別嬪であつた。

「もう少しあの看守の女に別嬪がゐるとねえ、」と私はその前を歩きながら、ふと一寸それに乘つて見たい氣がしたものと見えて、こんなことを言つた。すると、

「これや、實に馬鹿らしいけれど、面白さうなもんですね、」と山本も持前の甲高い聲で言つて、ふと歩みを止めたので、鶴丸も私も期せずして立止まつた。その私たちの立ち止まつたのが、丁度白髯の老人の足下のところだつたので、私たちの樣子を眺めて老人は、多分冗談のつもりだつたのだらうが、私たちの方を見下ろして、

「どうです！ 大人の方でも、なか／＼愉快なものですよ。お三人で、どうです？ すぐ動かしますから‥‥」と叫んだ。

すると、彼も亦、心の中で一つ乘つて見ようかな、と思つてゐたものと見えて、その老人の聲の響に應ずるやうに、鶴丸が突然私たちを振り返つて、「乘つて見ませうか？」と言つた。

「乘つて見ませう、」と山本が大きな聲で應じた。そして私も無論贊成したのであつた。

私たち、三人の大人がメリイ・ゴオ・ラウンドの臺の上に上つたので、今迄見物してゐた人々の中から、どつと（私の耳には可成りどつと）笑

ひ聲が起つた。山本と私とは少し赤くなつた。鶴丸だけはいつもと同じ青い顔をして、案内する係の女看守の命じた所には着かないで、空いてゐる木馬を、これがいゝか、あれがいゝか、とそれ等の首や胴を平手で叩き廻つてゐた。その後から赤くなつて從いて行つた山本と私とは、「どれでもいゝでせう。……それにしませう、」と丁度三つ四つかたまつて空いてゐたところを目付けて、それに各々跨つた。その瞬間、忽ち臺の中央からドンガラガッカ、ブウブ、ドンガラガッカ、ブウブ、とはツと私たちを吃驚させたところの、樂隊がはやし出した。そして樂隊の囃子と共にごーろ、どろ〳〵と、メリイ・ゴオ・ラウンドは木馬の上の私たちを乘せて、廻り始めたのであつた。

木馬は二列に並んでゐたので、山本と私とで並んだ馬に跨がり、鶴丸は私達の前の馬に跨がつた。木馬にはそれ〳〵革の手綱がついてゐて、その手綱を引つ張つたり緩めたりすることに依つて、馬の首が前後に少しづつ動くやうな仕掛になつてゐた。小柄な鶴丸はその手綱を取つて、子供のやうに身體を反らして、「愉快、愉快！」と叫びながら、手綱に依つて木馬の首を動かしたり、或ひは自分の尻をわざと上下に動かして、威勢よく足を踏鳴つたりして、時々、私たちの方を振り向いては、手を帽子の前に上げて、兵隊のする敬禮の眞似をした。一廻り二廻り、彼のさういふ樣子を、後の私たちは、見てゐるうちに、私達もだん〳〵恥かしい氣なぞなくなつて、見物の笑ふのが却つて愉快にさへなり出した。すると、四十歳の山本までが鶴丸の眞似をし出したのであつた。彼は前にも言つた通り商人で、殊に相場師になつたり、檢番の書記なぞをしたことがあるだけに、一寸した外出なぞには決して帽子を被らないのが癖であつた。不思議な禿を頭にこしらへてゐたその當時ですら、彼はやつぱり帽子を被つてゐなかつた。で、見物の中の子供の聲で、彼のその禿を認めたと見えて「やあ、禿、しつかり！」といふ聲が聞えたりした。だが、それは樂隊と臺の廻る音とで、彼の耳には入らないらしかつた。その位だから、私たち同志でも、話をするのに可成り大きな聲をしなければならなかつたが、そんな時、山本の甲高い聲が最もよく成功したのであつた。

鶴丸はもう私たちの方を振り返ることを止めて、今度は見物の群集の方に向つて、兩手を上げては頻りに「萬歳！」と叫んでゐた。見物の中の子供や、或ひは大人までも鶴丸の萬歳に對して、「萬歳！」と應じてゐる者もあつた、また或一團の見物の前を通る時には、定つて「萬歳、青瓢簞！」と叫ぶ聲が聞かれた、それは恐らく鶴丸の顔色の青いのから來たものであらう。ふと見ると、いつの間にか先の客引の白髯の老人が、鶴丸の隣の空いた木馬に横乘りに乘つてゐた。それが、後から見ると、何といふことなしに、親子が並んで乘つてゐるやうな氣が私に一寸した。その時、突然、例の甲高い聲で、「川下さん！」と並んでゐる山本が私に、私の僞名を呼びかけた。「このメリイ・ゴオ・ラウンドといふのは、英語なんですか？　一體、何といふ意味なんです？」

先にも言つたやうに、山本の聲は非常に大きくて且つ甲高いので、樂隊と臺の軋む音を通しても、少なくとも二間四方位にまでは聞きとれた。で、私は少し面喰つて、

「さうですね、」と言つたが、その聲は隣の山本にさへ聞えなかつたに違ひなかつた。

すると、前の鶴丸が振り返つて、

「メリイといふのは『樂しく』です、」と大きな聲で答へた。

「はあ、樂しく、」と山本はくり返した。

「ゴオは『行く』……」と鶴丸は言つた。「ラウンドは、さあ、ラウンドは、（ランドぢやない、ラウンドですよ、）さあ、ラウンドは『廻る』ですな。……『樂しく、行く、廻る』です。」

「ははあ、」と山本は、私の赤くなるのもかまはず、突拍子な聲でくり返した。「メリイは樂しく、ゴオは……ゴオは何でしたつけな？　あゝ、行くですか、そしてランド、いや、ラウンドは廻るですか？　はあ、メリイ・ゴオ・ランド、ぢやない、ラウンド――樂しく、行く、廻るですか。なアる程ね、樂しく、行く……と言つてゐる時に、どうしたはずみだつたのか、山本はゴトン「あツ！　といふ叫びと共に、木馬から落ちたのであつた。

「わあツ！」とはやす聲が見物から起つた。すると、さすがに、鶴丸の隣の木馬に横乘りに乘つてゐた例の白髯の老人は、職掌柄ひらりと輕く木馬から下りて、轉がつた山本の傍に歩いて行つた。そして老人は半分起き上りかけてゐた山本の肩に手を掛けて、「危いですよ、怪我はありませんか？」とか何とか言つてたのだらう、その途端に、或ひは急に廻轉の速力が緩くなつたので、身體の中心をとり損つたのでもあらうか、ごろりと彼も亦轉んだのであつた。それと共に、半分起き上りかけてゐた山本が又轉んだのであつた。それを見てゐた見物たちが大喜びをしてはやし立てたのは無論であつた。しかし、丁度それが止まる時間だつたと見えて、その時樂隊の囃子が止んで、メリイ・ゴオ・ラウンドは次第に速力を緩めて來た。私もそこで木馬を下りて、轉んでゐる二人の傍に近寄ると、山本が先に起き上つた。老人は起き上らうとしながら、洋服こそ着てゐるが、流石に老人だけに、佛樣の信者と見えて、「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛！」と稱へてゐるのだつた。私が起き上る彼に手を貸してやると、「有難うございます、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛！」と更にくり返して言ふ彼の聲は、先に喇叭を吹き吹き客を呼んでゐた人とは、殆ど別人のやうな氣がした程老いぼれてゐた。すると、

「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛！」とつい無意識に、それに應ずるやうに、私も亦口の中で呟いたことであつた。

二　花屋敷にて

寢る外に家に一人で居られぬ男たちのこと
四人の大人が子供の歌に一齊に泣き出すこと

檻の中に一疋の、膃肭獸に似て膃肭獸ではない、犬に似て犬でも無論ない、狸でも、狐でも、狼でもない、即ち獺は外の何物でもない獺なのだ、（何をいふのだ？）その獺の坐つてゐる前に、私たち三人は立止まつたのであつた。三人とも皆、これは初めて見ました、と言つて、珍しさうに立止まつた。だが、立止まつた本當の心根は、獺も珍しいが、さう早く見て廻つて、花屋敷を出てしまつても、仕方がない、各々それから夜寢るまでの時間に困る、といふことに外ならなかつたのだ。

鶴丸はどうだ？　彼は歸つて、二三日前にはそこ愛するをんなの坐つてゐた、乾度まだ彼女の白粉の匂も殘つてゐるに違ひない、長い間朝に夕に眺めたその女の寫眞も破り捨てたので、今は味氣なく新聞紙が硝子の下に斜になつてゐる額の掛つてゐる、侘しい下宿の部屋に歸つて、一人ぽつんと居ることは堪へられないであらう。彼は愛する女に背かれた恨みと寂しさとさへあるに、その女をたとひ知らずにとは言ひながら、彼から寢取つた男を恨み、憎み、愛し……どうしたらいゝのだ？――それは彼の實の父親なのだ。あゝ、淺間しい、淺間しい！……それを思ひ、これを思つて、一人ぽつねんと自分の部屋にゐられるものか！

山本も亦、事情こそ違ふが、同じ狀態に違ひはなかつた。彼は商業上の失敗に失敗を重ねて、目下債權者を逃れるために郊外に小さな家を借りてゐるのだが、それにしても無論すべての債權者を逃れてゐる譯ではないのだから、少なくとも日に三人や四人の彼等と、家にゐれば會はなければならない。だが、彼は目下のところ、商人の彼は一文の收入の道さへ持たないのであつた。彼は外出の小遣にさへ窮して、嘗て出版をやつてゐた頃の殘りの品で、差押へから免れてゐた本を三部五部と懷中にして出ては、それ等を古本屋をしてゐる彼の弟の所に賣りに行つてゐるやうな狀態であつた。けれども、それだけならば、彼はまだ十分に堪へることが出來たであらう。彼にはそれよりももつと堪へられないものがあつた。卽ち救世軍の兵士であるところの、彼のヒステリイの母であつた。彼女は機嫌の惡い日は、朝飯も何もこしらへなかつたので、さういふ日は彼はそれを食はずにゐなければならなかつた。けれども、そんなことは彼の殆ど苦にするところではなかつた。彼は始終子供のやうに叱られて、その騷ぎで往來の人が足を止める程、打たれたり、引掻かれたり、物を投げつけられたりした。彼には父親も、先に言つた古本屋をしてゐる一人の弟もあるのだつた。が、彼の父親は、自分の妻であるところの、彼の母親と同棲することを好まなかつた。又彼の母親は、自分の連れ合ひであるところの、彼の父親と同棲することを好まなかつた。彼の弟は、自分の母であるところの、彼の母と同棲することを、彼の母は、自分の子であるところの、彼の弟と同棲することを好まなかつた。されば、山本はその父と兄との負擔を一人で背負つて、惱まねばならぬ境遇にあつたのだつた。彼は今し方、メリイ・ゴオ・ラウンドで轉んだ時、彼を助けに來て自分も亦轉んだところの、客引の白鬚の老人の手に、手の甲から手首にかけて、一面に縞模樣に見える程、爪で引掻かれた傷の赤黑い痕があつたのを見たと言つて、「屹度、あのお爺さんのお上さんがヒステリイなんでせうね、」と言つて笑つてゐた。それは無論彼自身の經驗から出た言葉に外ならなかつた。實際、彼の手にも始終爪の傷痕の絕えたことがないのだ。——

そして私も亦、早く下宿の、現に昨日まで言ふに言はれぬ難儀をしつゝ、一年半の間、(だが私にはそれが百年ものやうな氣がするのだ、)共に寢、共に起きた、私の困りものの佛し憐れに違ひない、いゝをんなの同棲してゐた、いつ「私、もう歸つて來たの。もう何處へも行くのいや、」と言つて歸つて來るかも知れない氣のする私の部屋に歸つて、寢る迄の時間を一人ぽつゝねんとゐることは、やがて二三週間もその間に日が經てば兎も角も、私の堪へられないところであつた。

だから……私達三人は、期せずして、獺の前に足を止めて、獺には濟まないが、(獺君よ、だが君も亦孤獨に違ない、)實際の感情以上に、「はあ、これは變なもんですね。これや面白い。はあ、この水の中へはいるのですね、これや面白いな！」なぞと叫んだのであつた。

一餌をやると水の中を泳ぎます、と書いてありますよ、と山本は檻の前の廣告板を讀んで、その下に並べてある、ブリキの罐をのぞき込んで言つた。「おや〳〵、鰌がゐますよ。こいつは、鰌を食べるんですね。一つやつて見せうか、みんなで、やつて見ようぢやありませんか？」

「やりませう！」

「やりませう！」

と三人は卽座に一致して三罐分の代六錢を、傍の箱の中に抛り込んで、罐に入つてゐる二疋

の鰌を、そこから樋に依つて檻の中のセメントの池に落ちて行く仕掛になつてゐる、漏斗形の入口に、交る交る打ちあけた。獺は耳早く、その餌の鑵の音と共に、立上つた。そして樋を傳つてぴち〳〵と跳ねながら、確に鰌が水の中に入れられたと見定めると、忽ちさつと水の中にもぐり込んだ。その水の中を泳いで行く獺の恰好が、私たち三人をひどく愉快にしたのであつた。といふのは、彼は水の中を行くのに、蛙や、或ひはそれを眞似た人間なぞの様に、手足を始終ばた〳〵と前後に動かすことをしないで、そのすらりとした細い身體を更に細く、一直線の棒の様にして、丁度魚形水雷でも走つて行くやうな、實に恰好のいゝ、器用な游泳振りを示したからである。

「こいつは愉快ですな。ほオッ！ あの鰌の捕り方のうまいことはどうです？ 一たまりもありませんね、」と山本は嬉しさうに叫んだ。「もつとやりませうね。」

「やりませう、」と私も應じた。「だが、こいつの泳ぐところが面白いんだから、御苦勞でも、一度づつ向うの陸の上に歸らして、改めてこちらから餌を入れてやるやうにしませうよ。」

「それが宜しい、それが宜しい！」と鶴丸も言つた。

が、忽ちのうちに、獺の檻の前に並べられてあつた餌がなくなつてしまつた。それに、私たち三人の持ち合せの銅貨もなくなつてしまつた。

「なアに、かまふもんですか！ 一ぺんに十錢とか二十錢とか入れて、外の方の奴からその數だけ此方へ持つて來ればいゝんです。どうせこの邊のやつ等はみんな鰌を食ふんでせう、」と鶴丸の言ふ言葉に、

「それが宜しい、それが宜しい！」と言つて、三人はそれ〴〵、ペリカン鳥の前の分も鶴の前にあるのも、その邊にあつた鰌の餌といふ餌の鑵をすつかり獺の前に並べたのであつた。無論、一度に並べた譯ではないが、いつの間にか、初からその前にあつたのと合して、百に近い空鑵が並んだ時分には、獺の檻の周りには黒山のやうに見物人が集まつてゐた。ところが、

獺自身も既に十二分に滿腹したと見えて、先程から臺の上に上つたまゝ、それでも初のうちは義務のやうな顏をして、時々ばちやんと水の中に飛込んで、もう餘り輕快でない泳ぎ方で辛うじて一疋ぐらゐの鰌を銜へては、又すぐ臺の上に歸つてしまふのだ、が、終にはそれもしなくなつて、私たちがいくら入口の漏斗を叩いても、その度に一寸その方に物倦さうな目をやるだけで、もう水の中に入らなくなつてしまつた、そこで、獺の滿腹してゐる間だけ、命の期間を延ばされた鰌どもは、三々五々として、セメントの池の底を、這ふやうに泳いでゐた。

「あの鰌はばかに大きいですね、」と山本は今度は頻りに鰌の運動に興味を持ち出した。「あそこの所に黒くなつて、隨分澤山、二十錢分位かたまつてゐるぢやありませんか？」

「あれや、あの黒く見えるんでせう？」と鶴丸が言つた。「あれや、鰌ぢやありませんよ、泥が固まつてるんですよ。」

「わはゝゝゝ、」

「わはゝゝゝ、」

とそんなことにも、山本も笑ひ、鶴丸も笑ひ、私も笑ひ、そして大勢集まつてゐる見物人たちも大笑ひするのであつた。

「わはゝゝゝ、」

「わはゝゝゝ。」

と、その時、突然群集の中から、彼等を押し分けて、五十近くの、小倉の洋服を着て、海軍帽を被つた、一文字をした眉毛の濃い、同じく黒い逞しい髭を生やした、書にかいた陸軍大將

のやうな顔の男が、
「もし、もし、」と呼びかけながら、私たちの前に近寄つて來た。見ると、無論陸軍大將ではなくて、彼の腕にも、彼の帽子にも、例の赤地に白で『花屋敷』と染め拔いた、羅紗の布切がついてゐた。大方、花屋敷園内の監督であらう。私は彼を見た瞬間、別に私たちが大した惡いことをしてゐた譯ではないが、兎に角はツとした。果して、
「無暗な、亂暴な事をして貰つては困るぢやありませんか？」と『花屋敷』は言ひかけた。そして彼がちらつと、私たちの足下に積み重ねられてあつた鑵の山を見た時、見物の中から、四五人の聲でくす〳〵笑ふのが聞えた。彼は益々躍起になつて、私たち三人の姿をじろ〳〵と見廻しながら、「君がたはみな相當の年輩ぢやありませんか！」と決めつけるやうに言つた。
「はゝあ、この男は巡査の古手かも知れないな、」と私はそんなことを考へた。
「だつて、」と鶴丸は、輕く笑ひながら、わざと冗談らしく答へた。「いくら以上やつちやあいけないとも書いてありませんし、又、猫だつて、滿腹すれや、あゝして食べないで大人しく寢てるぢやありませんか？」
「君は……」と『花屋敷』は少しも眞面目な調子を改めずに、だん〳〵演說口調になりながら言つた。「君は鮪を憐れとは思はないですか？ なる程、鮪は小さくて數が多い。けれども、一疋の鮪とても、やはり生あるものではないですか？」
相手の口調が面白いので、私たちは三人とも默つて、山本だけが時々「あゝ、あゝ、」と合槌の返事をしながら、相對して立つて謹聽してゐると、『花屋敷』老人は更に雄辯につゞけた。
「見受けたところ、君がたは相當の教育を修めて居られる方でせう。デモクラシイの何者かちふこと位は御存知でせう？ 或ひは又當今は人道主義の喧ましく論じられてゐる時ぢやあないですか？……それや、言ふ迄もなく、無論、勿論、鮪は食はれるために生きてゐるのでありますから……」
「はゝあ、鮪は食はれるために生きてゐるものですかなア、」と山本は例の調子で、眞面目に獨言のやうに鸚鵡返しにくり返した。
それが異しく聞えたので、群がつてゐる見物たちがどつと笑つた。すると、「花屋敷」は「諸君、諸君、見せ物はそこらにいろ〳〵あります。私たちが見せ物ぢやありませんぞ！」と叫んだ。
その言葉に、見物の中の大人が又どつと笑つた。そして皆々急に立ち去る模樣もなかつたが、さすがに子供連れが多いので、いつとなく人々は散つてしまつた。
「さうです！」と『花屋敷』は自信ある調子で答へた。「ですが、滿腹して、厭がつてゐる鳥に、いや、獸に、厭々食べさせるといふことは、これは確に人道に反した行爲ではないですか？ 又君がた……」と再び足元に山積されてある鮪の空鑵を眺めて、「これは莫大なお寳ぢや。こんな無益なものにお寳を費して、君がたはもつたいないとは思はないですか？……」
「いや、分りました、よく分りました、」と私は言つた。
「まつたく僕たちが惡かつたんですから、まあ、さう怒らずに堪忍して下さい、」と山本もいつもの調子に復つて、微笑しながら言つた。
すると、『花屋敷』も急に笑顔になつて、その笑顔は忽ちにして、彼の善良で單純らしい性質を丸彫りにしたものであつた。
「いや、怒つた譯ぢやありません。が、まつたくもつたいないです、」と忽ち演說口調を止めて、普通の調子でつゞけた。「これや、我々の月給の日當より高い金が掛つてゐるに違ひない、」と言

つて、彼は又恨めしさうに、恰も自分が損をしたかのやうに足下の鑵の山を眺めた。

「やあ、」とその時鶴丸が叫んだ。「獺君、又ぼつ／＼腹が空いて來たと見えて、水の中に入つて鰌を食つてますよ。」

「なる程、なる程、」と私も山本も、その方を眺めた。獺は別に大した空腹を感じてゐるのでもなささうに、逃げる鰌は敢て追はず、一疋食つては池の中を一周りし、又一周りしては一疋食つてゐる。『花屋敷』もそれを眺めて、

「まつたく、此奴はこゝで一番仕合せで、一番人氣者ですよ。實際なか／＼面白いですからなあ、」と言つた。

その時、五六間向うの方で、ドンガラ、ガッカ、ドンガラ、ガッカ、といふ樂隊の囃子が起つて來た。すると、

「皆さん、」と『花屋敷』が言つた。「あやつりが始まりました。御案内しませう、行つて見ようぢやありませんか？」

そこで、彼に連れられて、私たち三人は今正に始まらうとする、あやつり人形の見物席の方に歩いて行つた。

私たち『花屋敷』老人を合して四人が、粗末なベンチに腰をかけた時、殆どそれと同時に、正面の舞臺の幕がする／＼と上つたのであつた。

舞臺、背景は近くに川、遠見に山の書割をして、右手に岩のやうな山の麓がこしらへてあつた。幕が開くと、お婆さんが向うを向いて洗濯をしてゐるところへ、大きな桃が流れて來る。お婆さんがそれを拾ふ。そこへ右手の岩のやうな山を、柴刈姿のお爺さんが下りて來る、二人の會話は、無論舞臺で誰かが喋つて聞かすのであるが、キイ／＼した、まるで蓄音機のやうな聲で、その聲の調子が何とも言へず面白いのだ。私の右隣に腰かけてゐた『花屋敷』が私の方を向いて、

「どうです、面白いでせう、面白いでせう？」と感極まつたやうな、多少先の演説口調で始めた。「罪がなくつて、罪がなくつて、實に面白いではありませんか？」

「面白いですね、」と私は答へた。

「去年迄は、私はよく子供をこゝへ連れて來て、見せてやつたものですが、そいつが死んぢまひましてね、」と『花屋敷』は問はず語りに話した。

そこで、

「ぢやあ、今は一人もお子たちはないのですか？」と私はお愛想に聞いて見た。

「えゝ、其奴がたつた一人だつたんです。今年ゐたら十二になります。…あなたはお子たちが…？ ほお、まだおありにならない。えゝ？ 欲しくない？ それはいけません、いけません。それはまだお若いからです。人間はどんな豪い人でも、どんなやくざな者でも、金でも名譽でもないですよ。もう十年年をとつて御覧なさい、もう十年…。いや、どんな豪い人でも、どんな變人でも、酒の好きな人でも、菓子の好きな人でも、これだけは誰一人例外はありません。人間の最も他頼りになるものは、最も慰めになるものは、金でも名譽でもない、人間ですぞ。その人間も、他人では無論、勿論ないですぞ。親でも兄弟でも女房、偕老同穴といひますか、その女房でもないですぞ。それは自分の身體から分れた、自分の子供です、自分の子供です！」老人の聲は初は低かつたが、次第々々に、四邊をかまはなくなつて來た。「私は…私は…私は…」

「シーッ！」とその時、見物の中から、舌を鳴らしてたしなめる聲が起つたので私たちの話は、口械を嵌められたやうにそのまゝになつてしまつた。舞臺はいつの間にか變つてゐて、お爺さんと婆さんの家の場である。お爺さんが變な手附をして、庖丁で二人の間に置いた大き

な桃を切つてゐる。ぽかりと桃が二つに割れて、「おぎやあ、〳〵」といふ變な、金切聲と共に、桃太郎の赤ン坊が飛び出した。見物席に一度にどつと笑ひ聲が起つた。私の左隣が鶴丸で、山本は左の一番端にゐたが、彼の甲高い笑ひ聲が、大勢の見物の笑ひ聲の中で、際立つて響くので、笑つてゐた近所の見物の數人は一時に山本の顏を振り返つた。

――さうして桃太郎が大きくなつて、鬼ケ島を征伐して、最後に數人の鬼共を生捕にして、車に一ぱいの寶物を積んで、それを犬が引つ張り、桃太郎が先頭に立つて、次に旗持の雉子がつゞき、その後から今言つた犬と車、最後に捕虜の、縛り上げられた鬼共を連れた猿が從つて、舞臺をくる〳〵廻るのだ。その時背景の幕が變つて、見渡す限りの海原に、朝日の上つてゐる光景が現れる。その前を、彼等が目出度く凱旋行軍する處で、彼等の歩き廻るのに合はして、樂屋から樂隊が、「桃から生れた桃太郎」の譜を囃し出した。そしてその樂隊に連れて、今し方まで樂屋裏で人形たちの聲色を使つてゐた連中が、「桃から生れた桃太郎」と肉聲で合唱したのであつた。

すると、不思議にも見物席が靜かになつて、大人も子供も皆々片唾を呑んで、芝居でいふと、何か斯うクライマックスに達した時の場面でも見てゐる樣に、一心に、舞臺の上をぐる〳〵と廻りながら行動してゐるところの、桃太郎以下の人形に悉く見とれてしまつた。その又桃太郎以下の人形は樂屋の樂隊の囃子を、恰も耳あつて聞き、樂屋の聲色使ひの歌を、恰も自分たちの口で歌ひつゝ歩いてゐるかのやうに、カッチ〳〵と舞臺の板に各々の土の足を打ちつける音さへも整然と立てながら、行進しつゝあるのだ。見物の中には、自分たちも亦、その桃太郎と一緒に歩いてゐるかの如くに、首を振り、足拍子をとつてゐる者が隨分あつた。そして、そこら一體が、その鳴り渡る幼稚な音樂の外には、しんと靜まり返つてゐるのであつた。

そして、そして、そして……いくら書いても、書いても、私はその時の光景の十分の一、百分の一さへも傳へることが出來ない。讀者諸君、そこで敍述の筆が岐路に入つて、且少し感傷的になるのを許し給ふか？……私は今から六七年も前に、いやもう八九年も前になるが、毎日ほど、同じこの淺草の、同じこの六區の、この花屋敷の裏の方に、殆ど毎日夜になると出かけて行つたものであつた。その頃の、あの十二階下の細い路次は、知らない人々には想像もつかないであらうが、日本全國何處に行つても見られない、不思議な、恐いやうな、面白いやうな、逃げ出したいやうな、覗いて見たいやうな光景を呈してゐたものであつた。初め、私はどんなにこの細い路次に心を引かれながら、友達に連れられて、いざその傍まで行くと逃げ出したか、遂に漸くその町に足を踏み入れるだけは入れたか、どんなに胸を躍らせつゝ屢々友達の袖に隱れるやうにして歩いたか、どうして到頭その中の一軒の家に上るやうになつたか、それから又後には一人で行くやうにさへなつたか、それ等はこゝでは餘談になるから省くとして、兎に角馴れない者が當時この町を歩くことは可成りな冒險であつた。或日は、私はそこを歩いてゐた時、突然一人の女に帽子を取られたのでその女の家に仕方なく入つて行つて、そして泣くやうに賴んで五十錢の茶代を置いて帽子を返して貰つたやうなこともあつたが、次第に月日と共に馴れて來ると共に、遂には私が餘り毎晩そこを歩くものだから、どこの家の女でも、今まで道行く男を頻りに小窓を開けて呼んでゐたのが、私が前を通ると、家毎にぴしり〳〵とそれ等の窓を閉ざして、「あれ、地割りよ！」と

囁き交す程になつてしまつたものであつた。その頃のことである。――私がとある家の、つまり銘酒屋だ、女に通ひ詰めて、一ケ月のうちの二十七八日までその路次に出沒した時分のことだが、その私の相手の女といふのは、その家のお上の妹であつた。その頃は、それ等の家々では、私のみならず、客が上ると、部屋の隅に新聞紙を置いて、それに客の下駄をのせ、客の着物はくる／＼と帶で卷いて、同じく部屋の隅に置くのが例であつた。初めて上つた者には、女がさうしてから、さて押入を開けて、その下の板を一枚外して見せながら、「あなた、もしもの事があつたら、下駄と着物を持つて、ここへ入つて下さいね。そこから一間ほど這つて行つたら裏口の路次に出られますから……いえ板張りですけれど、毎日一度づつ雜巾掛けをするんですから、汚くなんかありませんよ」と言つて、初心の者を驚かしたものであつた。それが私くらゐになると、さうして自分の下駄と、帶で卷いた着物を部屋の隅に置いて、寢るといふことが、何とも言へぬ、泥棒になつたやうな興味が湧くのだつた。ところが、或日二階に三人連の客が上つて、近所から女を狩り集めたやうな騷ぎで、私は馴染客の誼を以て、下でお上なぞと一緒に雜魚寢をしたことがあつた。その晩、私は私の女の姉、卽ち、そこのお上の……

さすがにその翌朝の太陽に照らされた時、私の心は淺間しいとも、何とも言へぬ氣に責められたことであつた。私は氣がとがめて、いつものやうに長居も出來ないで、朝の八時頃にそこを出て、私はその時分谷中に下宿してゐたので、そして毎日女の所へ通ふために、外の小遣は言ふ迄もなく、女の所へ通ふ電車賃さへ儉約しなければならない狀態だつたので、いつも往復の道を歩いたのであつた。行く時と違つて、歸る時の私の心はいつでも何とも言へぬ、いやアな、味氣ないやうな、そのまゝ誰かが無斷で、痛い目をさせないで、殺してくれる者があるなら、殺してほしいなどと思ひながら歩くのに變りはなかつた、が、その日は殊にそれが甚しかつた。私は日頃讀んだ飜譯小說の主人公に眞似て、自分と自分の頭の毛を引拔いて見たり、自分と自分の身體を矢鱈に抓つたりしながら歩いたことであつた。その時、私はとある町角で子供の合唱を聞いたのであつた。それは私の通る町の、すぐ横町のとある小學校から起つたのである。

「もし／＼龜よ、龜さんよ、」と子供等の歌は聞えるのだ。

「あゝ、もし／＼龜よ、龜さんよ、カ、」と私は口の中で斯う言つて見た。

「世界のうちでお前ほど……」と子供等の唱歌に合はしてうたひながら、ふら／＼とその小學校の前に歩いて行つた。それは小學校の附屬幼稚園の運動場から起るのだつた。運動場の入口に鐵柵の門があつて、その門に四五人の人が立つてゐるので、私もその中に混つて、その中をのぞき込むと、一人の色の黑い、反つ齒の保姆に率ゐられて、一列になつて子供たちが、

「歩みの遲いものはない」とつゞけて歌ひながら、手を上げたり、足を上げたりして、歌に合はした簡單なふりをしてゐるのだ。みんな一齊に、世界中で一番眞面目な顏をして、一生懸命に「こゝらで一寸ひと休み」と鼾をかいて寢入る眞似をするのだ。

それを見てゐた私は、心も身體も、自分と自分でも毒だらけだと思ふ私のやうな者さへが、

「あゝ、この子供等の上に幸あれ！と本當に、心から祈つたことだ。

「この子供等の上に、幸あれ！」

私はぼおつと目が霑んで來たかと思ふと、頰

に熱さを感じたところの、涙をこぼし出したのだ。……

そして、今私はこゝで桃太郎のあやつり人形を見て、桃太郎の歌を聞いた時、私は泣き出したのであつた。

それが私だけではなかつたのであつた。私の右隣の『花屋敷』は既に大分前から、小倉の洋服の袖で幾度か目を拭つてゐた、彼は彼の失つた子供のことを思出して、引いては自分の孤獨な身の上に思をめぐらして、泣くのだらう、彼の泣くのに少しの不思議もない。が、私の隣の鶴丸も亦泣いてゐるのを私は見たのだ、彼は神童と言はれた彼の少年の頃の誇らかな思出を思出したのか、或ひは現在彼の女敵である彼の父が、彼自身桃太郎の歌をうたつた頃は、如何に父らしく、大人らしく、信頼され得るものに見えたか――さういふことでも考へ出したか、或ひは又私のやうに、汚濁に染んだ今の身の上を心に責められて泣き出したのか?

そして又、私は鶴丸の向う隣の山本も亦泣いてゐたのを見逃さなかつた。彼は又、四十歳の彼も亦、嘗ては桃太郎の少年であつたに違ひないのだ、その少年の頃、ヒステリイの彼の母に……

讀者諸君、柄にない感傷的な、斯ういふ物の言ひ方を許し給へ。――兎に角、四人の大人がベンチに並んで泣き出したのだ。私は、私のみならず、私の外の三人が泣いてゐることを觀察することに依つて、辛うじて聲を上げて泣き出す自分を免れることが出來た位だつたのだ。

三　私の伯父の一生

身を立てゝ却つて陰氣になつた伯父のこと
老いたる妹が三味線に病の兄がうたふこと

花屋敷に行つた日の翌朝、それは一年半ぶりで私が一人の寢床で目を醒ました朝だ、私は部屋の外の廊下を往來する客や女中たちの草履の音をうつゝに聞いて、目を閉ぢたまゝ伸をするために片手を延ばしたが、はつとして衝動的にその手を縮めた、だが、その瞬間、「なあんだ、今日から俺は一人なんだ。さうだ!」と思ふと、龜が伸をするやうに四本の手足と一つの首とを、各々その向ふ方向に、掛値なく大の字に延ばしたのであつた。そして、又私は忽ち、蒲團をはね退けて、輕業師のやうに、足の先を頭の上まで持つて來て、反動をつけて、米搗き蟲のやうにぴよこりと起き上つた。そして私はいきなり窓を開けたことであつた。

私の部屋は往來に面した二階にあつたが、その下宿屋の建物が坂の中腹に位置してゐたので、私の坐つてゐる疊と、往來の人の歩く土とが殆ど同じ高さだつた。だから、窓を開けて首を突き出した私は、家の二階の部屋にゐるにも拘らず、自分の顏と同じ高さに往來する人々の顏を見出して、それは何でもないことに違ひないのだが、その朝に限つて私には非常に親しみ深く感じられてならなかつた。坂を上る人も坂を下る人も・皆私の窓に挨拶をして行くやうな氣がしてならないのだ。印半纏を着た大工君も、蔦職君も、詰襟洋服の下級腰辨君も、(だが、女はいけない、女はいけない、朝から向う鉢卷をして子を負つて唄ひながら通る子守女だつて、袴を穿いて荷物の包をつゝましやかに抱へて行く女學生だつて、或ひは女事務員だつて、向うの八百屋の、始終根のゆるんだ、水色の手柄をかけた丸髷の、一寸樣子のいゝ細君だつて、何奴も此奴も油斷がなるもんか! 女はいけない、別れた私のをんなのやうなのは例外だらうが、今の世にヒステリイの氣のない女が一人でも半人でもあつたら、手を擧げい、手を擧げい、お目にかゝらう!)老いたるも若きも、道行く男は皆、「晴れたり、貴仕!(永井荷風譯)佛蘭

西流に言へば、斯う挨拶して行くやうに私の目には見えるのだ。

「諸君、兄弟よ！」と私は又斯ういふ風に彼等に言ひたいのだ。「兄弟諸君、喜んで下さい。僕は今日から獨り身になつたのです。萬歳、萬歳！」

だが、又私は窓を閉めて、久しい間それに對して沁々と坐つたことのない、私の机の前に坐つた時、私は昨日まで一年半の間、そのために多くの親しい友達とも往來の道を絶え、そのために一人の老いたる母を、見す見す不斷はあんな窮屈な家に行くのは厭だと言ひ言ひしてゐたところの、親類に食客の身とならせ、そして私自身をも三十にして既に頭の毛を五六年前の五分の一に失はせ、（心配のために、人を一夜のうちに白髪にさせたり、禿頭にさせたりするといふ話は、經驗しなければ斯う私が言つたとて、諸君は信じないかも知れないが、あれは決して古人や小說家の虛構ではない！）體量を二貫目方減じさせたところの、しかし私は斯うして獨り身になつてしまへば、又晴れた日に廻り合はさないものでもないが、彼女、それは生きてゐる限りは、實にその自身の身心に毒を持つてゐるのであるから、苦しみ通さねばならないところの私の別れたをんなの身の上を思はない譯には行かなかつた。私は生れて以來知り合つたどの人間よりも、私の、三十に充たないで寡婦になつた、不幸な母よりも、又數人の、いろ／＼な私の不仕合せな、哀れな友達や知人の誰よりも、或ひは又これも決して幸福ではない私自身よりも、誰よりも最も不幸で、最も哀れで、又最も私が愛すると言つてもいいだらう、その私の別れたをんなを、さう思ひながら、そして今机の前に坐つて思ひ出し且憐みながら、だけど、だけど、歸つて來られては、それは、それは困ると思ふのだ、だが私は、私の心のありたけで、私の許に歸つて來られては困るが、どうぞ幸福であれ、と祈つて止まないのだ。

私は朝飯を濟ますと間もなく、取敢ずＫ――にゐる母に電話をかけて、ヒステリイ（私と母との間では、私のをんなのことを、斯う呼び合つてゐた。）が又藝者に出ることになつて、他所に行つたことを、從つて漸く私が元の心安い獨り身になつたことを告げると、急に母の返事の聲が聞えなくなつたので、初め私は私の言葉が相手に通じなかつたのか知らと推察して、「聞えませんか？　あのね、」と又同じことを二度くり返して、「聞えましたか、分りましたか？」と駄目を押すと、「えゝ、」といふ母の聲ははつきり聞えるのだ。そして又、そのまゝ相手から何の言葉も通じて來ない。異しいな、變だな、と思つた瞬間、食ひ込むやうにしつかりと受話器を押し付けてゐた私の耳に、鼻汁をすゝる聲が聞えた。母は受話器を耳に當てて、Ｋ――の家の薄暗い電話室に突つ立つたまゝ、泣いてゐたのであつた。

「待つてゐますから、すぐ入らつしやいませんか？　すぐ：：」と言つて、私は思ひ切りよく電話を切つた。

無論、私の方からＫ――に母を尋ねて行くべき筈のものでもあり、又尋ねて行きたかつたのであつたが、いつ迄經つても物になりさうにない書をかいてゐるといふ事さへ氣に入らない上に、母一人を養ひかねてゐながら藝者などを家に入れて、（藝者などに碌な奴があるものか！）そして自分は自業自得とはいへ、長い間の寡婦生活を堪へて、一人の子が身を立てるのを唯一の老の樂みにして來た母にまで難儀をかけてゐる、――さういふ私をひどく憤つて、あんな者は自分の家に出入して貰ひたくないとまで蔭で言つてゐるといふ、Ｋ――の家に、私はおめお

めと行く譯には行かなかつたのであつた。
　間もなく訪れて來た母と、私はしばらく下宿の部屋で話してゐたが、私たちの間には口數多く話すこともなかつた、話せば又あまりに話すことが多くて盡きなからう、それに、私は、もう恐らくその部屋に昨日去つた私のをんなが、彼女は自分と自分の身を取も直さず賣つたのだから、姿を現すことはないと信じながらも、尙その部屋で母と長く膝を突き合はしてゐることに、何とも言へぬ不安と落着かなさとを感じたので、私は程近い九段の靖國神社の公園に、母と共に散步に出たのであつた。
　私の母は今から四五年前に、故鄕に於ける彼女の長い、孤獨な寡婦生活を引き上げて、彼女の子を他賴つて東京に來たものであつた。彼女にはたつた一人の兄があつた。(彼に就いては、この物語の初に一寸書いておいたが、彼はもうこの世にゐない人だ。) 彼等は唯二人の、そして二人きりない親身の兄妹であつた。從つてその兄の家は、その兄の妹たる私の母の實家に違なかつた。だが、唯二人の兄妹でありながら、非常に氣質の違ふ彼等は、餘り仲のよい兄妹であることが出來なかつた。まるで腹違ひか、義理ある仲ででもあるかのやうに、彼等は丁寧過ぎるやうな言葉附きでしか話をしなかつた。だから、私の母は彼女の夫に別れ、故鄕にあつてその後夫の僅な遺產を失つてからも、兄の家には行かずに、兄よりも遠い緣者の家や、或時は却つて全然他人の家に寄食して、その時その時に、幼い頃彼女の父の道樂氣から仕込まれた遊藝を、附近の娘たちに、或時は藝者町で藝者たちに敎へて、小やかな暮しを立ててゐたのであつた。
　だが、女のくせに餘りくよ〱と物事を苦にしない性質の彼女は、さういふ長い、孤獨な寡婦の生活を送つた人と見えない程、(子の私が言ふのも異なものだが、) 彼女は多少自分の美しい標致を自覺してゐたかも知れないので、隨分いつ迄も若々しく、身綺麗に裝つてゐた事は、或時しばらく彼女が住んでゐた或田舍に、私が學生時代の頃遊びに行つたことがあつたが、その時土地の者が、又私が少し老けて見える方なので、「彼女は旦那樣のない方かと思つてたら、あんな若い御主人があるのね、」と誤つた蔭口をきいた程であつた。その彼女は、漸くの思で一人前の大人になつた私をたよつて東京に來ると共に、私の餘りな貧乏のために、一度に五六年分も年をとつてしまつた上に、つゞいて私のヒステリイのをんなのために、又六七年分一度に年をとつてしまつたものだ。――
　それは秋の曇つた日のことで、一日々々と身に沁み出した秋の風を感じたから、靖國神社の境內を私と並んで離れて步いてゐる彼女を、私がちら〱と時々見た目に、一層そのことが感じられたのであつた。私はさうしたことに對して、何とか餘り感情的でない言葉があつたら、一言詫の言葉を言ひたいと思つたが、結局何にも言はずにしまつた。そして私たちは大村益次郎の銅像の下の、大砲を應用したベンチに並んで腰を下ろしたのであつた。
　私たちは、今し方私の下宿で私のをんなに就いての話をざつとし合つただけだが、又別の、いろ〱な積る話を、事實私のをんなが來てから、卽ち母が國の彼女の兄の病氣の看病に出發した日以來、斯うして親子で話をし合ふのは一年半ぶりのことだつたから、しかし途切れ途切れに話し合つた。その時、私と並んで、黑い鐵の大砲のベンチに腰かけて、母は彼女の兄の病氣と臨終に就いての詳しい話を私に聞かせたのであつた。
　「伯父さんは始終お前のことを心配して、お前の話をしていらしつたよ、」と母は話し始めたの

であつた。この物語の初に言つたやうに、丁度私のをんなは、母が私の伯父の看病に國に歸つてゐる間に、藝者家を私と共に拔け出して、そしてその時から私たちは僞名して、府下中澁谷に間借りして住むやうになつたのであつた。だから、「伯父さんはお前が僞名までして、名前を變へたことなども、大變心配していらしつたよ」と母は言つたのであつた。

その伯父は、先にも言つたやうに、母とは餘り仲のよい兄妹ではなかつた。けれども彼は、死ぬかも知れないと思ふ病氣の床に着いた時、頻りに心細い手紙などを私たちに寄遣して、長年仲の惡かつた彼の妹に、はつきりとは言はないながら、看病に來てほしいらしい口吻をその度毎に洩らしたのであつた。そして彼の妹も亦、その兄の看病に行きたがつた。兄妹などといふものは、何といふ不思議なものだ、そして又年齡なぞといふものも?…と私は思つたことであつた。だが、實を言へばその伯父は生前に於いて、彼の妹なる私の母よりも、彼の甥なる私と却つて深い間柄であつたのだ。だから、彼が臨終の床に於いて、私のことを心配してゐたといふ母の言葉は、私の胸に響かねばならなかつた。

私が初めて伯父を見たのは、まだ私の家に僅な亡父の遺産があつて、それで私の母と、母の母と、私との三人の小さな家があつた頃のこと、私が七歲か八歲かの時であつた。或日玄關に人の訪ねる氣配がしたので、何氣なく小さな私が駈けだして行つて見ると、兩手に重さうな鞄を下げた三十餘の一人の男が立つてゐた。それが私の初めて見る、私の唯一人の、私には父方にも母方にもこの伯父以外に何もないので、その伯父だつたのだ。その時見た伯父の顏は、後に母なども彼は不思議に年をとらない人だと言つてゐた通り、それから二十年以上、殆ど常に一緒に暮した私が、見つゞけた顏と少しも變らなかつた。彼は二十歲代の頃、故鄕の大阪で道樂のありつたけをして、飄然と東京に姿を隱したまゝ、何年もの間歸つて來なかつたものであつた。彼は東京で或藥屋の養子になつて、二人の子供さへ儲けたといふ話であつた。それが飄然と三十三四の年頃に歸つて來て、私の家の玄關に立つた時、その時私は初めて彼を見たのであつた。彼はそれから三年ばかりの間、私たちの家に居候をしてゐた。

夏の夕方になると、彼は魚を取る叉手網と、長い竹竿とを擔いで、空の小鳥籠を持つた私を從へて、城の横手の原つ場に行つた。原つ場の草の上で、彼は持つて來た叉手網を竹竿の端に縛りつけて、空を飛んでゐる蜻蛉の、なるべく群をなして塊つてゐる所を目がけて、いきなり上から下に抄ふやうにして伏せるのだつた。私は小鳥籠を持つてそれを見てゐる。彼は身の近くに蜻蛉の群れてゐない時には、大人の彼が、子供のやうに、しかし子供などには到底持ち得ない、その大きな竹竿の網を兩手にさゝへて、駈け出して行くのだ。だん〲夕方の薄暗くなつて行く、空に蜻蛉の飛び交ふ、その下の原つ場に影畫のやうに見える彼を追ひながら、小鳥籠を提げて小さい私も走るのだ。彼が空の蜻蛉を草原の上に抄ひ下ろすと、私は默つて彼の傍に小鳥籠を突き出しながら、伏せられた網の目と草との間に幾つもの蜻蛉がサラ〲サラ〲と羽を鳴らしてゐるのを、そのうちにも次第々々に薄暗くなつて行く空氣を通して、私は覗き込む。彼は蜻蛉を網の下から摑み出しては、「どつさり取れたら、どつさり!」とその頃私には珍しかつた東京辯で言ひながら、私のさし出す籠の中に入れてくれるのだ。そしていつも日がすつかり暮れ切つてから、彼は叉手網と竹竿とを別々に離してそれ等を持ち、私は往きの時とは違つ

て、その中で蜻蛉が重なり合つてサラ／＼と鳴る籠を手に下げて、もうすつかり夜になつて灯のついてゐる町を歸つて行くのだつた。

その伯父は、よく茶の間の長火鉢を挾んで、茶棚を背負ふ方に私の母が、三味線を持つて坐り、その反對の側に彼が坐つて母の彈く三味線に合はして、唄をうたつてゐた。ランプの下で長火鉢を挾んで、道樂者の夫婦の樣に、母と伯父とが三味線と唄を合してゐた光景は、薄暗くなつて、だん／＼外の人との見分けが附かなくなる草原で、そんなに長い竹竿に附けた叉手網を持つてゐると云ふ事で、伯父の姿を見出し見出して追駈けた時の光景と共に、二十年からも經つた今も私は繪の樣にはつきり覺えてゐるのだ。後で聞くと、伯父がまだ逃げて行かなかつた前、盛に道樂をした頃、淸元に凝つて、彼の道樂はそれが元ださうであるが、おちやや通ひをした頃、大阪中のどの藝者や落語家よりも、彼の唄がうまかつたと鳴らしたものださうである。

そのうちに、どういふ相談があつたのか、彼は、後に聞いたところに依ると、私の母と、母の母とから僅な資金の調達を得て、古着屋か何かを始めて、それが當り出した。無論、當るか何とかいふ派手な性質の商賣ではなかつたらうが、恐らく彼は彼の性質の他の半分であるところの、實直と、拔目なさと、忍耐心とを以てそれは成功したのであらう。その後、更に商賣の發展を期するために、彼は多少の資金を持ち合ふ二人の從兄弟と共同して、小さな合資會社組織にしたところが、それが、益々成功したのであつた。ところが彼が當り出した時分に、丁度私の家の僅な亡父の遺産が、不意の災難のために悉くなくなつてしまつたのであつた。そして私の母は大和の國の或親類の家に寄食することになり、私と私の祖母とが伯父に引き取られることになつたのだ。そこで伯父は或町(それが偶然に色町であつた。)に小さな借家をして、そこに彼の母と彼の甥なる私とを住ませ、自分も隔日位にそこに寢起きして、不斷は商賣の店の方に出ることにした。彼はだんだん成功して、その後、妻(東京で彼が養子に行つたのを彼の初婚とすれば、それは第二の妻である。)を娶つた。彼はその妻との間に終に三人の子までなした。

私はその伯父の保護の下に、自分の家がなくなつてからは、高等小學校に通ひ、中學校に通つたのであつた、(中學校以後は、私は東京に出て、他の親戚の保護のもとに繪畫の研究をするやうになつたのである。)だが、實を言ふと、私が伯父に養はれてゐる間の彼に對する私の記憶は少しも親みのないものであつた。第一、彼は私に、商人になることを勸めて、私がそれに耳を傾けなかつたので、その點で彼と私とは始終反目してゐた。又もつと少年の頃を言ふと、商賣に成功し出した彼は、私の家の居候時代に比して、無口な、氣むづかしい顏をした男になつてしまつた。彼はなか／＼の美男であつた。私の家に居候をしてゐた頃は、子供心に覺えてゐるが、彼は毎日二度以上鏡に向ふので、母によくひやかされてゐたものだつた。がその後の彼は肉親の、而も目下の私として見れば、到底自分の伯父が美男であるといふことなどを、他人が私にそんなことを言つても、少年の私には想像さへも出來なかつた程で、全然身だしなみなどしなくなつてゐた。が、その後彼に生れた子供等が、皆標致のいゝ子なので、そして彼に似てゐたので、私は又彼が美男であることを想像し出した位であつた。まして彼が若年の頃放蕩をしたとか、唄がうまかつたとかいふことは、今となつては幼年の頃の思出と共に私には想像も出來、知つてもゐるが、その頃

は殆どそんなことと彼とを一緒にして考へられなかつた。

だが、唯一度、私が十二三の頃であつたが、祖母の言付けで、伯父の店に私は使にやられた事があつた。夕方のことで伯父の店に行くと、そこに伯父が居なくて、小僧に案内されて、伯父が得意客と一緒に行つてゐるといふ料理屋に私は行つた。すると、奥座敷にいらつしやいますから、とその料理屋の玄關で言ふのを、私を案內した小僧は聞いて、彼は度々來て勝手を知つてゐるものと見えて、心得顏に「さうですか、ぢやあ、」と言つて、私を連れて裏口の方から庭に廻つて行つた。私たちは町中にしては珍しく樹木の生え茂つてゐる庭を通つて行くと、ふと向うの座敷から唄をうたふ聲が聞えて來た。私がはツと氣がつくと同時に、小僧は私に向つて、「ぼんち、あれは伯父さんが唄つて居られるんですよ、」と注意したので、尙一層私は耳を澄まして聞き入つたことがある。何の唄であつたか、どんなに巧かつたか、少年の私には分らなかつたが、分らないながらに、その錆のある聲や、巧みな抑揚のついた節廻しは、私の耳をして、それが確に伯父の聲が唄になつてゐるものだとは十分認めさせながら、あの伯父がさういふ聲でさういふ唄をうたふとは、どうしても想像出來なかつた程、伯父といふ人間の實際を離れて、譯分らずに感心させられたものであつた。私は後にも先にも伯父の唄といへば、その外に聞いた事がなかつた。私は中學を卒業する迄、伯父の後妻、私の義理の伯母に當る人と六七年一緒に暮した。もう私もだん〱と二十歲に近くなつて來た。或日その伯母が話に、「伯父さんには、東京にあなた位の息子さんと娘さんとがあるといふことですが、あなたはそのことに就いて何か聞いたことがありますか？」と言つたことがある。固より、私は何にも聞いてゐなかつたから、「知らない、」と答へた。その後、私がそのことを私の母に聞くと、彼女は、男の子は小さい時分に死んださうだが、女の子はゐるんだらうが、どうしてるか知ら？　と言つて、彼女も何も知らないらしかつた。恐らく、或ひは伯父その人も知らなかつたかも知れない。だが、伯父がすつかり彼の昔の妻の子等のことを忘れ勝であつたのか、それとも時々は思出して何か考へたものであるか、それは誰にも分らない。

さうして伯父は年を取ると共に、彼の第二の妻との間の子は、卽ち、彼の四十歲後に生れた者たちであるから、不斷から餘り身體の強くない自分なり、同じく餘り達者でない彼の妻のことを倂せ考へて、若い私に保護を賴みたい心が起つたに違ない。だから、彼は私が東京に出て、もう一生國に歸りさうになく、從つて彼とは餘り仲はよくなかつた、（と言つて無論喧嘩などもしなかつたが、）彼の妹であるところの私の母も、私と共に東京の人となり、やがてそこを墳墓の地とする心掛であるらしいので、外に私たち程の濃い親類を持たないことを思つて、子供のために彼等の行末を案じたのに違なかつた。

で、もう死ぬかも知れないと思つた病の床に就いた時、そして私の母が彼の看病に歸つた時、彼がどんなに喜んだかといふ事を、靖國神社の大砲のベンチに腰かけて、私の母が話す聲は霑んでゐた。いゝけちで通した爲に、死後に、それでもたつた三萬圓足らずの金だつたが、金を殘す程の彼だつたから、一文の金でも貧乏な私たちにさへ殆ど惠んでくれたことのない彼が、看病してゐるうち、彼は屢々彼の妻に內所で、私の母に小遣錢をくれたさうである。「やつぱり、兄妹だわね、」と母は大砲のベンチの上で、

涙の聲で言つた。

そして、或時のことであつた。それは彼の死ぬ十日程前のことださうである。彼は枕元にゐた私の母に三味線を弾いてくれないかと言つた。それが餘り突然の事なので、年老つて、これは死んだ彼等の母親に似て、長生する徴に違ひないと病人に思はせたところの、耳の少し遠くなつた彼の妹は、彼が二三度それをくり返したにも拘らず、聞きとれなかつた。そこで「あゝお良さんは長生すると見えて、大分耳が遠くなつたねえ、」と彼は寂しさうに微笑んで斯う呟いたさうである。そして彼が三味線を要求する言葉を、次の間にゐた彼の十二歳になる娘の子が聞き知つて、彼女の叔母にそれを持つて來たので、そこで私の母は初めて病人の言葉を了解して、そして三味線をとつたのであつた。

伯父は瘦せた身體を寢床の上に起き上らせて、彼の妹にいろ〳〵と註文しながら、一時間に近く、可成り大きな聲を出してうたつたさうであつた。……

その頃、私はこの物語の初にある通り、澁谷の竹屋の座敷に、僞名をして、ヒステリイのをんなに苛められつゝ、病んで死に瀕してゐる伯父のことをも、哀れな母のことをも、殆ど考へる暇なく暮してゐたのであつた。そして或日、私のをんながその時は發作を起してゐなかつたが、金のことか何かで少し機嫌を惡くしてゐて、今にも發作を起しはしないか、とびく〳〵してゐた時、その時私は私の僞名を宛てられた一通の電報を受取つたのであつた。それは取も直さず私の小さい從妹からの電報で、「チ、シスカヘラズトモヨシ」と書かれてあつた。

さすがに私ははツと胸を打たれて、傍のをんなの存在をも忘れて、二三分の間、その電報を見つめてゐると、いきなり横合から彼女がその電報を引奪つて、「えゝ、えゝ。お歸りなさい、お歸りなさい！……」と叫んだ。

そして始まつたのだ、始まつたのだ。

……そのことを私は今は笑ひながら、大砲のベンチに腰をかけて、母に話したのであつた。

やがて、私は歸りませうと言つて立ち上つた。母はまだ何か私に話したいらしかつたが、素直に立ち上つた。私はわざとそれから私たちの足を下宿の方へ向けずに、九段の上の電車の停留場の方へ歩いて行つて、母が何にも言つてゐないのに、

「こゝからお乗りになつたらいゝでせう。赤阪見附で乗換が一度です。」と言つた。

「さう、……？」と母は言つた。そして何か言ひたさうなのを、彼女はそれを歯で噛み殺したやうな顔をした。その顔が、今年十三歳になる、死んだ伯父の長女が（このことは私は前にも度々書いた筈だ、）幼い頃、例へば玩具などをねだつて、いけませんと斷られた時に、大人しい子なので、觀念してあきらめる時にする、悄なさうな幼顔にそつくりなのであつた。

私は母が電車に乗るのも見極めずに、「ぢやあ、さやうなら、又！」と言つて、反對の方に急いで歩き出した。私は目に涙がたまつて來て落ちさうになつたのだ。母の言はうとすることは分つてゐる、漸くをんなの難は免れたのだから！ さあ、これからは一日も早く、兎に角、親子二人の生計だけ立てられるやうに、たとひ間借りでも何でもいゝから……斯う言はうとしたのであらう。

四 浮世の二人男

をんなの後を不思議な尾行すること
女衒が彼の女房を賣られて嘆くこと

私は母に別れて下宿に歸つて、長い間机の前に坐つてゐた。そして晝飯を食つて、さあ一つ鶴丸のところへでも出かけようかなぞと考へ

ながら、又半時間近くもぼんやり坐つてゐた。
私はもう何の考へることも、何の企てることも、こゝ暫くの間、母も一時も早く、たとひ間借りでもして、彼女を引取るやうにしてくれと言ふけれども、山本は破産し、畫と言つても辛うじて畫く道は知つてゐるが、賣る道を知らない私にも、考へようにも、企てようにも何の仕樣もないのだ。或ひは又最早や何の防禦することは、をんながゐなくなつた今、私にはないのであつた。人間といふものは妙なもので、苦勞があつて苦勞、苦勞がなくて又苦勞（これは確に神樣の惡戲に違ひない！）なものだ。……

〳〵アーーア、いたこどこオろオか、
寢どこオにーーイこまアる……

私は唄ひ出した。何のことだ？ それは昨日、鶴丸と山本と私と、三人が花屋敷の閉館と共に追出されたので、詮方なく電車で上野の山下まで來て、そこで寄席に入つた時聞いた、潮來藝者の潮來節の一節なのだ。

〳〵寢どこオにーーイ、こまアる……

とうたふ唄のもとに、怪しげな藝者が六人ばかりずら〳〵と舞臺に走り出して、怪しげな手附で右や左に行違ひながら踊り出した事であつた。彼女等はそれ〴〵狆かおかめかの樣な顏をしながら、それに白粉をつけて、金歯を入れて赤い着物を着飾つて、渡る浮世を晝は泣き、夜は踊つて暮してゐるのであらう、それもよし、それもよし！ 泣くな、泣くな、踊れ、踊れ！

〳〵人のお世話にーーイなりながらア……

さてこそ、今も今、聞き覺えたまゝに、私は何氣なくそれをうたひ出したものか？

〳〵アーーア、いたこどこオろオか……

その時、表の方、今日の今朝私が窓を開いて、通が丁度坂になつてゐるので、私の踏む疊と往來の土の高さとが殆ど同じだとか、窓から突き出す私の顏と、往來を行く人の顏とが殆ど同じ高さにあるとか言つて喜んだところの、その同じ往來から私の窓に向つて、

「お兄ちゃん、お兄ちゃん！」といふ聲が起つたのであつた。

私はこの話の初の方で、物語の進行上、私のをんなが私を世間並に「あなた」と呼ぶことにしておいたが、實は彼女は或種の藝者が或種の客を呼ぶ時に使ふ「兄さん」といふ言葉を、彼女流に『お兄ちゃん』と呼んで、そして私と一年半の同棲の間、それで通したものであつた。あゝ、思つても、私の背中がむづ〳〵する。今突然私の一人の下宿の窓にこの聲がするのだ。私ははツとして立上りながら、忽ち自分の身體の幅が一二寸縮まつて、丈が三四寸も延び上つたやうな氣がした、そしてをんながいそ〳〵と私の部屋に入つて來たのであつた。

彼女は明日がお披露目だが、初めての知らない土地の髪結が氣に入らないから、許しを得てそれを結ひに歸つたのだと上機嫌で言つた。あゝ、又髪だと私は心の顏を顰めて思つたが、無論表面はよろしく取りなしておいた。が、つい何や彼やと話し込んでしまつて、なか〳〵行きさうにない彼女をしかし怒らさないやうに十分氣をつけて、四五度も忠告した後、やつとのことで髪を結ひに出した。その髪結といふのは、私たちがまだ澁谷にゐた頃結ひつけたものなので、そこへ彼女は出かけて行つたのだが、一時間ばかりして歸つて來て、言ふには、生憎もうその髪結がどこかへ引越したとのことなのだ。どうか、氣に入つた髪が結へてくれるやうに、と祈つてゐた私は、彼女が亂れた髪のまゝで不機嫌さうに歸つて來たのを見て、又胸を打たれながら、おや〳〵をんなの攻苦は　神樣、まだ私に續くのですか？ と心で泣いた。けれども、私は仕樣がないからこの邊で何處かいゝ髪結を聞いて、そこに行つたらいゝだらうと言ふと、

彼女はもうぼつ／＼ヒステリイを起しかけて、いくら上手な髮結でも、氣に入つてゐなければ駄目だと言ふのだ。「あゝ、さうだらうなア、」なぞと私は忽ち閉口して、調子を合はさねばならなかつた。彼女は無論それだけで納らなかつたのみならず、先の髮結さんがどこに引越したか聞いて來るのを忘れた、それを私に聞いて來て欲しい、と言ひ出したのであつた。私は、よく／＼ある性分だが、人に道を聞くのが嫌ひなばかりでなく、借家や或ひは下宿の貸間なぞを探しに行つても、いつも町をぐる／＼歩いて來るばかりで、聞かずに歸つて來て、困つては又翌日探しに出かけて、やつぱし聞かずに歸つて來て、結局人に知らして貰つた家とか、又下宿なら、友人の下宿なぞに引越すといふのが例なのだ、それ程物を聞くのが厭な性分なのだが、今はどうかすると殺されるよりも厭なそれをも、甘んじて引受けなければならなかつた。で、私が立上ると、彼女も一緒に行くと言ひ出した。そこで、私たちは又澁谷まで行つて、その近所で尋ねると、小石川指ケ谷町の何番地と教へられたので、又引返して指ケ谷町のその番地を探したが、どうしたのかそれらしい家がない、そのうちに日が暮れて來た。けれども、到頭それが目付からないで歸つたら、歸つてからのヒステリイの發作が豫期されて、私はどうしても歸る氣にならないので、やつぱり同じ町をぐる／＼と歩いてゐると、彼女は遂に甲走つた聲で、

「いくら探したつて仕樣がないぢやないの？」

と叫んだ、その鋭い聲に、夕方の町の往來の二三人の人たちが、私たちを振り返つた位だつた。仕樣がないのは、彼女より私の方がどんなによく分つてゐるか知れないのだが、仕樣がないのが仕樣がなくて、そのないのがないので、ないのがないので……なぞと心で思つてゐると、いつの間にか電車通に出てゐて、丁度停留場に私たちの下宿のある方角へ行く電車が止まつてゐた。

「早く電車に……」と言つて、彼女はその止まつた電車を六七間此方から指さして、「あれに乘りませう！」と叫んだ。

「乘りませう、」と、私も應じて、その方に急ぐと、チン／＼と鳴つて電車はもう、つ――うと走り出した。それが動機で、今まで出口を求めてゐた、ヒステリイの發作が、彼女に起つたのであつた。

「愚圖！」と彼女は私を睥みつけながら叫んで、とつ／＼と早足に歩き出した。これは別に珍しい現象ではないのだ。もう私はこれ迄に幾度、斯うして彼女の後から探偵のやうに夜の町を歩いたか知れないのだ。この尾行が頗る不思議なものなのだ、「今」となつてはこんなことも言へるが、その時はなか／＼それどころではなかつたのだ、といふのは、尾行して行く私がわざわざゆつくり歩くと、尾行されてゐる彼女の方で、時々私を振り返つてゆつくり歩き、宥める言葉を言はうとして、私が傍に近づく爲に歩を早めると、彼女の方でも歩を早めるのだ、何のことはない、普通の尾行狀態を逆にしたやうなものなのだ。そんなことをしてゐるうちに、日はもうとつぷり暮れて、私たちは砲兵工廠の前を折れて、小石川橋を渡つて、又左に折れる橋を渡つて、河岸ぷちに沿つてすた／＼と歩いて行くのだつた。その邊は人通りが少ないので、私も稍々落着いたものの、私は幾度先に歩いて行く彼女に突然背を向けて、反對の方向に走り出さうと思つたか知れない、事實、ずつと以前のことだが、上野公園の中で、やつぱり同じやうなことがあつた時、私はさうしたことがあつたのだ、すると、先にさうして歩いて行きながらも、絶えず後から來る私を意識してゐ

る彼女は、私の突然のその行動を見ると、
「わあ――ッ！」とあらん限りの、泣聲を混ぜた叫び聲を上げて、私を追つかけて來た。それでも私がまだそのまゝに走つてゐると、「わあ――ッ！　人ごろ…」とわざと「し」を拔いて、だが、叫びかけられたので、私は到頭負けて、又くるりと廻れ右すると共に、彼女の方に向つて走り出したことであつた。すると彼女は卽座に往來のまん中に俯伏せになつて、殆ど大の字形に寢そべつて、そして大聲で泣き出した。もつとも、それは人通りのない夜の公園の中だつたからよかつたやうなものの、當時僞名をしてゐた私には、全く何か大罪を犯してゐる者が、共犯者に裏切られた時に感ずるやうな恐怖を感じたものであつた。

　そんなことを思ひ出しながら、私は河岸ぶちを二三間離れて彼女の後をつけてゐたが、又心配になり出したのは、彼女は髮を結つて、遲くとも今夜中に歸る、と藝者家に約束して來たに違ないことだ、それがこのまゝで又二三時間も經つたらどうなるだらう？　と私は頻りに氣になり出したのであつた。私は實際、私がもう少し癇癪持で、もう少しイゴイストでなかつたら、私は過去一年半の間にこの女を打つたり撲ち伏せたりするだけでは駄目なのだ、幾度殺してゐたか知れない。……

　するうちに、道がとある橋の袂に出たので、私は思切つて、彼女の傍に走り寄つて、
「ぐづ／＼してるうちに、歸れなくなつたら大變ぢやないか？」と言つて見た。
「もう歸らないのよ！」と彼女は嚙みつくやうに叫んだ。
「ぢやあ、歸らないのなら歸らないやうにしなければならないから、さあ、兎に角、仲よく家に歸らう！」と言つた。そのうちに二人は橋の上に立止まつて欄干にもたれ合つた。そして暫く二人とも默り合つてゐたが、
「あんたがあんまりぐづ／＼してゐるから惡いんぢやないの？　歸るもんか、歸るもんか！」と突然又彼女が言つた。
「まあ、さう言はずに兎に角下宿まで歸らう。さあ、歩き出さう、」と私は言つた。
「こんなに夜になつてしまつて、」と彼女は言ひながら、ふと自分の手に持つてゐる洋傘に目をつけて、「こんなに夜になつてしまつて、晝の傘なぞ見つともなくつて、持つて歩けないぢやないの？」と言つた。
「ぢやあ、僕が持たう、」と私はこの時だと思つて、彼女の機嫌を直すつもりで、稍々冗談らしく笑顏をつくつて言つたところが、この冗談を持ち出す機會が少し早過ぎたのであつた。
「こんな傘！」と叫んだかと思ふと、彼女は持つてゐた傘を、いきなり川の流に投げ込んだ。
「あッ！」と言つて、私が川の中を覗き込むと、垂直になつて落ちて行つた洋傘は、ザブン！　とそれでも割合に大きな音を立てて、垂直のまゝに、すツくと水中に沒したかと思ふと、次の瞬間にはポックリ又垂直のまゝ、その先の三分の一ほどを水面に突き出したが、そのまゝ流と共に橋の下の方に隱れてしまつた。私は無意識のうちに、橋の上を右から左に走つて、洋傘の行方を追つたが、舟一艘通らない、明り一つ射さない川の面に、遂に洋傘の姿を見ることが出來なかつた。そこで、無言で彼女の傍に歸つて來ると、彼女は子供が「イイ」と齒をむく、あの時のやうな顏をして、
「あんなくさつた洋傘が惜しいの？」と言つたが、言つてるうちに、自分の方が惜しくなり出したと見えて、しく／＼と泣き出した。

　だが、前にも言つたやうに、發作の後に、この「泣き」が始まると、卽ちそれが鎭まる前觸なのだから、私は又どうして代りの洋傘を買ふ金

を調達しようか、と心に案じながらも、一先づ二人の間が靜かになつて來たことを喜んだのであつた。

やがて、彼女と共に下宿に歸つたが、彼女はもう髮は結はない、そして今夜は歸らない、明日の朝歸るから、その時は私に横濱まで送つて行つてくれ、といふのだ。さうしてその晩の彼女の又機嫌のよさ！ 夕食後、私の懷中には二十錢足らずの金しかなかつたが、彼女の散財で、私たちは近所の活動寫眞を見に行つた。彼女はずつと前からそこで『呪ひの手』とか言ふ、續き物の寫眞を見てゐるので、そのつゞきを是非見たいと言ふのであつた。その荒唐無稽な筋の寫眞を見て、彼女がキャツ／＼と言つて笑ふのが、私をして、嫌ひな活動寫眞を見てゐる以上の、苦痛を感じさせたのみならず、寫眞が映つてゐて薄暗くなつてゐる間、彼女は三度まで私の手を、手がしびれる程、強く握りしめたことであつた。これこそ誠に『呪ひの手』だ！

さて、翌朝、彼女が私に横濱まで送つてくれといふのに、私が、藝者家まで私のやうな若い男がついて行くと、却つて惡いからと逃げを張ると、藝者家までではない、里見の家まで送つてくれたら、それから先は里見の家の番頭に送つてもらふと言ふのであつた。私は驚いて、赤阪の里見の家が横濱にもあるのか、と聞くと、横濱の方へは昨日から引越したのだ、昨日そこで初めて里見のお上さんといふ人に會つたが、以前藝者をした人とかで、三十二三の、それはそれは綺麗な、感じのいゝ人だ、と聞きもしないのに、そんな話までした。兎に角、私はその里見に當てて「アスアサヨシコツレテユク」と電報を打つておいた。

私はその翌朝六時頃に起きて、そつと鶴丸のところに行つて、寢てゐるのを起して惡いなとは思ひながらも、叩もしないでずつと彼の部屋にはひると、彼は前夜からのつゞきだと言つて、床に入つたまゝの例の恰好で、トランプのペイセンスをしてゐた。そこで私は譯を言つて、彼から紡績の普段羽織を借り受け、自分の銘仙の羽織をいつもの質屋に、質屋を叩き起して、特別に高くとつて貰つて、幾分かの金をこしらへて下宿に歸つて見ると、彼女は何の苦もなささうに、まだすや／＼と寢入つてゐた。

やがて朝飯を食つて、彼女を送つて、新橋に向ふ途中で、私がその金で洋傘を買はうといふと、彼女はもう洋傘は要らないから、丸髷の中插と手絡とを買つてくれと言ふのだ。藝者にたるのに、中插と手絡が何で要るものかとは思つたが、私は例の是々否々主義で、その通りにして、さて彼女の案内で横濱の里見の家に向つた。彼女は私に、その家の前まで行くと、「お兄ちゃん、先に入つてね、私十分程して行くから。その間に里見の叱らないやうに、旨く話しといてくれない？」と言つた。それにも、私は是々否々で、さうして私が里見の家の入口をはひると、丁度玄關の四疊半の、客間を兼ねた部屋で、主人の里見と二十歳餘の番頭らしい男とが何か話し合つてゐる樣子だつたが、彼は私が入つて行つて、私一人で彼女が一緒でないのを目早く認めると、「よし子さんは？」と稍々鋭く聞いた。

「いや、今、すぐ來ます、十分程遲れて……」と私は手を上げて、物を抑へるやうな恰好をしながら、言つて、さて座についてから、或ひは門口で彼女が立つて聞いてゐるかも知れないと思つたので、思切り聲をひそめて、昨日からの出來事を簡單に話した。そして、兎に角そんな次第だから、今彼女が入つて來ても、叱らないでやつてくれ、と賴んだ。すると大男の、勳八等の桂庵が「うむ、うむ、」と點頭いてゐるところへ、門口に音がして彼女が入つて來た。

「今からずべつちやあ、いけないね、」と里見は彼女を見ると、冗談に叱る聲で言つた。

　すると、彼女は、恐らく彼女はきまりの悪さを蔽ふために、笑はうとして笑ひ損つたものに違ない、いきなり玄關のタヽキの上に蹲んで泣き出した。里見は吃驚して、その髷の顏に、善人らしい、迷惑さうな笑を浮べながら、

「なあに、冗談だよ。大事な子を何を叱るもんか? さあ、さあ、」と頤をしやくりながら言つたが、彼女は蹲んで、袂で顏を蔽うて、泣いてゐるばかりだ。

　私は仕樣がないので立つて行つて、彼女に「なにも里見さんは怒つて居られるんぢやあないよ。冗談に言はれたんぢやあないか。」とそれからそれといろ〳〵になだめてゐると、番頭も下りて來て、私と一緒に、肩を叩いたりして、泣いてゐる彼女を宥めてくれたが、彼女はなかなか泣き止まないのだ。恐らく彼女も、里見の先の言葉は、ほんの冗談に言つたのだ、とは直に氣がついたのだらうが、一旦泣いてしまふと、何といふ困つた氣性の彼女だらう、神樣、彼女に憐みを垂れ給へ! 彼女は自分で自分の氣分がどうにもならないのだ。そこへ、奥の間から、昨夜彼女が私に話したところの里見の女房と見える瘠せぎすの、色の青白い、三十二三の、凄いほど綺麗な、なる程以前どころか、昨日まで藝者をしてゐたらしい女が出て來て、私たちと一緒に彼女をなだめてくれた。それに彼此れ二十分ぐらゐもかゝつたのであつた。

　それから、やつと、この近所にいゝ髪結があると言ふので、彼女が里見の番頭に連れられて髪を結ひに出てしまふと、里見は急に改まつて、

「梅野さん!」と本名に依つて私を呼びかけた。(その頃、一年半ぶりで、ぼつ〳〵本名に依つて呼ばれ出した私は、名前なぞといふものは何でもないもののやうだが、變なもので、久しぶりで本名を呼ばれると、その度毎に夜の明けるやうな、明るい氣がしたものだつた。)「梅野さん! 實は大變なんですよ。今朝も早く先方の藝者家のお上さんが來ましてね、昨夜のうちに髪を結つて歸つて來る、と言ふもんだから出してやつたのに、それが歸つて來ないと言つて、その又主人といふのが名代の癇癪持でね、披露目の御祝儀の色んなものを、みんな滅茶滅茶に叩き破したり引裂いてしまつたんださうだよ。それで、今朝お上さんと一緒に安藤(番頭の名)を附けて、昨夜これ〳〵の電報が來たから、今朝本人が歸つて來次第連れて行くから、とあやまりに遣つたんだが、何しろ主人の權幕が大變ださうでね、困つたもんですよ。それに、あそこの家が檢番を持つてやがるもんだから、安藤が一寸のぞいて見ると、檢番の黒板に「梅野才三」とあんたの名前と住所とが大きく書き付けてあつたさうだ。……兎に角、これから私と一緒にあやまりに行つて見ませう、まあ、心配しなさらんでもいゝよ、なるやうにしかならないんだから、なアに、又どうにでもその時はその時で相談しませうよ。」

　そして私たち二人は市内電車に乘つて行く途々、里見は「なる程、あの女は大分ひどいなア、ヒステリイが。内の奴(彼の女房のこと)もヒステリイに違ひないが、内の奴は泣いてゐて腐れる方だが、私はあんたと違つて毆つて毆つて毆りまくるんだ。ですけど、あんたのやうに大人しく、言ふことを聞いてやつてゐても、又私のやうに頭ごなしに毆りつけて見ても、どつちにしても女にはかなはんわい。叱れや曲ね、叩きや泣き、殺しや夜中アに化けてェ來るーーイ」と、そして彼は終りを浪花節にしてしまつた。

　そのうちに電車が目的地に着いたものと見え

て、「こゝです、さあ下りませう」と里見は私を促して電車を下りた。そこから三四町行くと、急に道が細くなつて、町の樣子が色つぽくなつたな、と思つてゐると、突然「こゝが檢番です、」と里見はとある家を指さして、そこを一寸のぞいて見て、「親父は檢番にゐないな、」と獨言のやうに言ひながら、私を從へてその横の路次を入つて行つて、とある・軒の家の格子戸の入口を開けた。

入つたところの八疊の間に、二三人の藝者らしい女たちがゐたが、私たちの姿を見ると、皆逃げるやうに二階に上つて行つてしまつて、その中の一人が上り際に、「かあちやん、里見さんがいらつしやいましたよ、」と奥の方に聲をかけた。そこへ奥からお上が出て來たが、私たちが上つて坐ると早々、簡單な挨拶の後、彼女に向つて里見は改まつた口調で、私のをんなが決して惡い氣で斯ういふ迷惑をかけるに至つたのではないこと、又私が夢にも「惡足」なぞではないこと、しかし主人の腹の立つのはもつともではあるが、そこは主人の氣の濟むやうに、里見自身も彼の職業を無視して、彼女の藝者の勤めの契約證書に捺印するから、等々といろいろと詫言をしてゐる間、私は里見の言葉の切れ目毎に、たゞ頭をぴよこ／＼と下げたことであつた。まつたく、この藝者家のお上にとつては、まるで人間社會の違ふと思はれる、私のやうな眼鏡をかけた、口髭なぞを生やした、それでゐて、決して三百代言や何かではないところの、大人しさうな男が、彼女に向つて如何にも神妙に畏まつて、ぴよこ／＼と恐れ入つたやうに頭を下げたことは、十分驚きと且感激とに價したに相違なかつた。そこで彼女は幾度も「一寸待つて下さい、」と言ひ殘して、主人の出先へ驅けて行つたらしかつた。それから、お上にその話を聞いて來たのか、一人の檢番附の箱屋なぞも私たちの所に來て、彼も亦里見の註釋を聞いてひどく私たちに同情して、「いやよく分りました、何とか骨を折りませう、」と・見博奕などに身を持ちくづしたらしい、どこか目付の凄い、その角刈の頭を前後に分別らしく振つて、斯う言ひ殘して、又出かけて行つた。

思ふに、博奕打の箱屋にしても、梓庵の里見にしても、藝者家のお上にしても、又恐らくはその癇癪を起したと言ふそこの主人にしても、みんな私よりは單純で、そして私よりも愛すべき、正直な人たちに違なかつた。恐らく、私にしても、乾度私よりももう少し單純でない人の目から見たら、亦單純な、愛すべき、人間に違ないのだ、だが、それ等の單純な愛すべき、正直な人たちの寄り集まりであるところの世界はどうだ？……なぞと言つて見ても駄目だ、駄目だ！

やがて、表からお上と先の箱屋とが歸つて來て、兎に角、主人はひどく怒つてゐて、どうしてもいけないと言つてゐますけれど、あなたの方でさういふ氣なら、私たちがどうでもして治めますから、これから歸つて彼女をすぐ寄越して下さい、と言ふことだつた。無論、主人の怒りは解けたのであらうが、そんな風にもつたいを附けたのであらう。

兎に角、そこで里見と私とは、厚く彼等に禮を言つて外に出た。外に出ると、里見は何と思つたのか、「あんたは横濱をよく知らないつて言ひましたね？」と言つた、「これからぶら／＼と南・町でも歩いて歸りませうか？……又よし子さんがあんたの顏を見て、ぐづ／＼言つて歸らないなぞと言ひ出したらいけませんから……」

無論、私もそれに同意見であつた。出來れば私はそこから里見の家に寄らないで、直に歸りたかつたのだが、さつき彼の家を出る時に藝者家に行くのに、私の下駄が餘り汚いからと言つ

て、里見の下駄を借りて來てゐるのと、それに又そんなの藝者勤めの契約證書を書き替へて、今度はそれに里見と私とが連署の上、連判しなければならぬ義務があつたのとで、どうせ櫻木町までの往復の電車切符を持つてゐるのだから、私は驛の前であるところの、里見の家の前を當然通らねばならぬのであつた。で、私は彼の意見に從つて、又私自身からも無理に乞うて、なるべく長くその邊を散步して、彼の家で再び、彼女と會はないやうにしてくれと言つた。彼は念のために、自動電話のボックスに入つて、呼出しで自分の番頭を呼んで、そのことを言ひ含めた。

それから、私たちはぶら〳〵と、最早や薄ら寒くなつた十一月の午前の町を、步き出したのであつたが、途々、あれは何といふところ、こちらに見えるのは何といふところ、と里見が一々指さして說明してくれるのに、私は別に興味もないので簡單な返事ばかりしてゐたが、終には彼も默つてしまつた。すると、

「あんたは女を逃げようとして苦勞してるが私は又女房に逃げられるので困つてるんですよ、」と私たちが南京町を步いてゐた時、突然、彼がこんなことを言ひ出した。

「それは今のことですか？」と私は驚いて聞いた、「だつて、家にあゝして、ちゃんと綺麗な方がいらつしやるぢやありませんか？」

「それが、あんた、」と言つて、里見は暫く又言葉なく步いた。ふと彼の顏を見ると、熊のやうな逞しい口髭を生やした、挽臼のやうな偉大なこの顏にも、やつぱり斯ういふ悲しい表情があるのかな、と私に思はした樣な、さういふ顏をしてゐるのだつた。やがて彼は言葉をついだ、「それが、あんた、あの女の親といふのが惡い奴でね、靜岡のもんですが、あの女を私の知らぬうちに藝者に賣つてしまつたんです。東京です、烏森です、前にも烏森に出てたんです。」私は默つて、返事だけして、步いた。

「突然こちらへ引越したのも、それを防ぐつもりだつたんだが、それが、引越してから分つたんだが、もう一週間も前に目見得まで濟ましてしまやがつたんです、ハヽヽヽ。明日靜岡の方へ一晩泊りで歸つて、それから直に出ることになつてるんですよ、」と彼は言つて又暫く無言で步きつゞけた。「畜生、チャンチャン奴、呑氣に煙草をすつてやがらあ！」

この里見の言葉に、ふと彼の目の方向を私も見ると、なる程、畫にかいてあるやうな、七十近い、白髮白髯の、品のいゝ支那老人が、とある汚い家の入口の日向の敷居に腰をかけて、ぷかり〳〵と如何にも大國人らしい落着いた、だが衰亡の國民らしい呑氣な恰好で、煙草をすつてゐるのだつた。

「よく、しかし、女の方が承知なさいましたね？」と私が聞くと、

「なあに、それが、あの女が餘り氣が弱過ぎるからなんですよ、」と里見は苦々しさうに言ひ放つた。

「あゝ、さうかなア、」と私は心の中で思つた、「こんな强さうな人も、やつぱり女は養ひ難いのかなあ。女衒が女房を賣られるとはふるつた話だ！」

「女衒が女房を賣られるなんて、變なことが世の中にはあるもんですね、」と里見は、私が心の中で考へた通りを、溜息をつきながら言つたので、私は少なからず驚きもし、且つ可笑しくも感じた。

「むかし愚な男あり。
初め屋根屋になりたるが、
屋根に上るが恐しとて、
次に左官になりたるが、
汚き土を捏ねるわざ、

卑しき者のなりはひと、
又も桶屋に變りしが、
…………。」

その時、日本語の勉强のためか、それとも日本人の雇人が、遲れ走せに文字を習ふのでもあるか、私たちの歩いてゐた南京町のとある家の中から、子供らしくない聲で、古い、今はもう使はなくなつた、小學校の讀方教科書をさらへる聲が聞えて來たものだ。

「むかし愚な男ありカ……」と私は里見と並んで歩きながら、何といふことなく、口の中でその句をくり返した。

五　流轉世界

銅像の下のベンチで感慨に耽ること
三百代言に陳情の詫手紙を認めること

それから、もう一度途中から里見に自動電話をかけてもらつて、いゝ、をんなと行違ひに會はないやうにして、私たちは彼の家に歸つて行つた。番頭の安藤は彼女を藝者家に送り屆けてから、その足で東京へ用足しに行つたと言ふので、家には里見の女房が一人で留守番をしてゐた。

そこで私たち三人は中の間の長火鉢を圍んで、坐つたのであつた。

「いろ／＼どうも今度は御面倒をかけました、」と私は座に着くと、里見と彼の女房とに改めて斯う挨拶をした。

「あなたも大抵ぢやありませんのね、」と彼女は習慣的に上半身をねぢらせて、色氣のある目付をして言つた。

「お前も斯う言ふ優しい御亭主が欲しいだらう？」と里見は彼女に向つて言つて、「ハッハッハッハッ……」と例の豪傑笑をした。

彼女は口元につと微笑を見せた切りで、何とも答へなかつた。

「なる程、私もいろんな婦人に出遭はしたが、一寸まああの位變つた人は知らないな、アッハッハッハッ……」里見は今度は私に向つて斯う言つた。

「まつたく、珍しいでせうね、」と私は言つた。「ですけど又、ヒステリイ氣のちつともない女、といふものは、この世に半人もないでせうね？」

「こゝにもゐますよ、」と彼は女房を顎でしやくつて見せた。

「うちのはあなたが亂暴で、そんな風にさせるんだわ！」彼女は言ひ返した。

「失禮ですけど、」と私は彼女の方を向いて言つた。「やつぱり、その、あれのある時分がいけませんかねえ？」

「それやねえ、多少……」と彼女は、これも習慣らしい、首を少し傾げて、幾分上目を使ふ目付に、言ひ知れぬ色氣を見せて言つた。「これで、まあ女の病氣ですからね。」

「まつたく、女の病氣ですな、」と私は言つた、「それでやつぱり間に中休があつて、一週間ちやんとありますかねえ？」

「いゝえ、私のはほんの二三日ですの、」と彼女は答へた。「いけないんださうですね。私のはひどいんですもの……二ヶ月ぐらゐないことがあるんですよ。」

「それや結構ですね。」

「何が結構なもんですか？」と彼女はホヽと小さく笑つて、「だつて、あつてもなくつても氣分の惡くなるのはおんなじですもの……」と首を傾げて言つた。

「なる程ね、」と私は言つた。「さう言へば、男だつて、今はそんなものは無論ありませんが、大昔は女と同じやうなものがあつたかも知れないとも思はれますよ。現に、僕などよく考へて見ますと、やつぱり月に一度、一週間ぐらゐ氣分の惡い、いやあな日がありますからね。

そこで大笑になつた。

「里見さん！　電話ですよ。」とその時隣の家から、塀越しに呼ぶ聲が聞えたので、

「やあ　毎度ありがたう。」と答へて、彼はそゝくさと出かけて行つた。

彼が電話に出かけて行つてゐる間、私は彼の女房と火鉢を直角に挾んで坐り合つたまゝ、火鉢の灰などを搔き廻したりして、俯向き加減に默り込んでゐた。私は、變に固くなつて、まるで二十歳の青年のやうに、妙に胸のうづ〳〵するのを覺えた。彼女はと言ふと、澁い市松お召の片膝を立てて、細い煙管で靜かに烟を吐いてゐる、その煙管を持つ手が、青白くて、その細いしな〳〵した指には、一本の指輪も差してゐないのだ。

「綺麗な手ですねえ、」と私は思はず感嘆して言つた。

「綺麗ぢやあないんですよ、」と彼女は殊更にその指を折つたり延ばしたりしながら、「すつかり貧乏してしまつて……」と言つて、それをぐつと反らしながら見入つてゐた。

「僕は綺麗な指に、指輪を嵌めてゐないのが何よりも好きですよ。」と半分は心から、半分はお世辭から私はこんなことを言つた。

「駄目ですねえ、世帶など持つと、すつかり何も彼もなくしてしまつて……」と彼女は、言ひ忘れたが、薄い唇と白い細かい齒とが彼女の妙に男を引きつける特長であつた、輕く笑ひながら、それを見せて、言つた。

「變なものですね、」と私も合槌を打つた。「これで、男でも女でも、一人身だとそんなことはありませんが、二人一緒になるとお互に、どちらも物を失くなすものですね。……誰がとつて行くんですか？」

ホヽヽヽ、ハヽヽヽヽと笑つてゐるところへ、大きな足音を立てて、里見が歸つて來た。

「私、一寸急に用が出來ましたので、一時間もしたら歸つて來ますから、待つてて下さいませんか？」と彼は突つ立つたまゝ、私に言つて、それから彼女の方に向いて、「一寸何々家まで行つて來るからね……」と言つた。

そして、傍の帽子掛から帽子をとると、そのまゝ又大きな足音を立てて出て行つた。そこで又私たちは、彼女と私との二人きりになつたのであつた。

「困つたな、早く歸りたいんだがなあ、」と私が獨言のやうに言つた時には、もう里見は自分の家を出て、五六間も歩き出した時分に違なかつた。

「まあ、遊んでらつしやいな、」と里見の女房は言つた。「あたしもどうせ夕方には東京に行かうと思つてますの、その時一緒に行きませうよ。」

「東京に？」と私は何氣なく聞きかへして何氣なく言つてしまつた、「烏森へですか？」

「おや！」と彼女は例の薄い唇の間から、白い細かい齒を見せて、『もう御存知なの？』と色氣たつぷりな目付で睥むやうに言つた。

「えゝ、」と私は仕樣がないので答へた。「ですけど、どうもまだお互にお爺さんお婆さんぢやあないんですから、ひよつと里見さんに叱られるといけませんからね。」

「まあ！」と彼女は大仰に睥みつけて、「……こんなお婆さんと一緒ぢやあ　いけないんですか？」と言つた。

「いや、もう非常に結構ですけど……」と私は思ひ切つて言つて、そして少し赤くなつた。

それから又、私たちは、私が如何にヒステリイのをんなに苛められたかといふことを、一々その例などを擧げて、さうなると私はなか〳〵話上手になつた、すると、彼女は彼女で、如何にこの二年の間、正直者だが、亂暴な男に

苦しめられたか、もう自分は一生定つた男は持たないつもりだといふことなどを、彼女は又三十歳の、色の世界で苦勞をし盡した、話上手さで、話し合つたことであつた。

「だつて、あなたの親御さんが、無理にあなたを藝者になすつたんだと言ふぢやありませんか？」と私が聞くと、

「そんなこと謔よ。」とわざと私の耳の傍に口を寄せて、彼女は言つた。「誰が三十にもなつて、親に身を賣られるなんて、十七や八なら知らぬこと、馬鹿なことがあるもんですか？　私がさうしたんですよ。……里見といふ男は、こんな商賣はしてゐますけれど、顏に書いてあるでせう？　案外正直者なんですよ。」

「おや、おや！　と私は心で思つた。だが、ヒステリイの女といふものは何といふ魅力を持つてゐるものだらう！　と別の心で思つた。私はさうしてゐるうちに、次第に彼女を好きなやうな、恐ろしいやうな、何とも知れない氣になつて來た。それと共に私の別れた、今頃はあの私が今の先行つて來た、路次の藝者家の八疊の間で、あの時二階に逃げて上つた藝者達に圍まれて、ヒステリイだけに、知らぬ人中に出ると極端に內氣になる彼女は、どんなにおづ〳〵して晴の披露目の用意に忙殺されてゐることだらうと思つた。すると又、それならいゝが、又何か主人にでも言はれて、泣き出して、大變々々、再びこゝへ私に會ひに走り歸つて來るやうなことはないか知らとも思つた。私は急に歸りたくなつた。それに惡い話だが、私さへゐなければ、私が彼女の證文に連判をしなくつても、別に話が破れることもなからう、捺した方が都合がよからうが、捺さなくてもどうにか濟むといふのなら、私一人身なら何でもしようが、私のことをあんなにも心配してゐる母親のある身だし、それを免れるためにも、私は今里見に會はずに歸つた方がいゝと思つたのだ。それに又この色氣たつぷりな、少なくとも私には並々ならぬ魅力を持つてゐるところの三十歳の美人と、斯うして彼女の主人、その人とは彼女はもう別れたのだとは言つてゐるものの、彼の留守中に、別に彼に隱れてではないが、しかしこんな親身な身の上の打明話などをしてゐるところへ、年こそ取つてゐるが、單純で、正直らしい、あの兵隊上りの桂庵に歸つて來られて、飛んでもない！　疑はれたりして、變な騷動を起しても、と恐れられたので、三十六計、逃ぐるに如かず、如かずと思ひ定めたのであつた。そこで、

「僕、急に用事を思ひつきましたので、實はすつかり忘れてゐて、もう二時間も前にしなければならなかつた用事なんですが、兎に角すぐ歸りたいと思ひますから、もし用事があつたら電報でも、速達でも出して下されば又來ることにして、里見さんに叱られるかも知れませんが、直に歸らして貰ひます。」と廻りくどい言葉で私は彼女に言つた。

「さう？」と彼女は例の上目使ひで私を見流しながら言つた。「まさか、私が恐しくなつたんぢやあないんでせう、まさかねえ？　だけど、それぢや、もう、屹度こゝではお目にかゝれないかも知れませんが、東京にゐるんですから、遊びにいらつしやいな、ね、屹度よ。私のゐる所は烏森のね、吉の家といふ家で、電話もありますわ、名前までもう定つてゐますの、たけ葉といふんです。忘れちやあいけませんよ、吉の家たけ葉よ。では……」

「ぢやあ、失敬します……」と言つて、私は早々に里見の家を出たが、電車の停車場に着いてからも、どうした譯か、まだ胸がどき〳〵するのを感じた。私の癖で、人の家を辭して歸る時、どうかすると、「さやうなら」と挨拶して、入

口を出てから、必ず一二間小股に駈け出すのである、これは爭はれぬもので、少年の頃二十年近く色町に育つて、その當時見馴れ見覺えた癖が口髭さへ生やしてゐる今になるまで、どうかすると出るのだが、その時は又何の故とも知れずそれが一二間だけには止まらないで、それから半町ばかりの電車の乘場までの道を、さうして駈けつゞけたので、それで、そんなに動悸がしたのに違ひなかつた。

さて、私は電車に乘つたが、無論どこへ行くといふ的もなかつたし、かと言つて下宿へはひよつとして又彼女が藝者家から里見の家に逃げ出して來て、そこから私を追つて下宿へやつて來てるかも知れない、今日一日濟んでしまへば先づ安心だが、今日のうちはなか〳〵油斷がならないと思つたので、そこへ歸る氣にもならず、と言つて、それは自分だけの都合のいゝ考で、どんな急用で里見などから電報や速達が來ないとも限らない、といろ〳〵と思ひ惑つてゐるうちに、電車はいつか新橋に着いてしまつた。仕樣がないので下りて、仕樣がないので又ふら〳〵と市内電車に乘つて、車掌に行先を聞かれると、人間といふ奴は大根は正直なものだ! 何氣なく麹町の自分の下宿へ行く停留場の名を言つてしまつた。そこで又、間もなくふら〳〵とその停留場で電車を下りたが、それからはいくら思ひ返しても、直に下宿に歸る氣にはなれないし、と言つてぢつと町のまん中に立止まつてゐる譯にも行かないので、ぶら〳〵と的もなく歩いてゐるうちに、いつか靖國神社の境内の、つい昨日の朝、母と並んで腰をかけたところの、銅像の足下のベンチの前まで來てゐたのであつた。

銅像の周圍に捨てられてゐる幾つかの大砲のベンチには、どうしたのかその日は餘り休んでゐる人がなくて、現に私が腰を下ろした一つには、そしてその隣のにも、私の外に誰も人がゐなかつた。そこで、私はふと思ひついて、その大砲の上に馬乘りになつて、兩足でそれを挾むやうにして、やつとこせと仰向けになつて、頭の下に兩手を當てがつたものだ。元より餘り寢心地はよくはないが、その時の私としては、少し位の肉體的な工合の惡さなどは、譃ではない、本當に何程の苦痛にも値しなかつたことだつた。それよりも天上天下我獨り、何處に私を苦しめに來る者があるか? 頭を三寸旋らすなら、私の傍を一間と離れないところに、ぞろぞろと遊山や見物らしい人々が三々五々と通つては行くけれども、幸なる哉! 彼等は皆私には行路の人である、あゝ天上天下我獨り! と斯う思はせるところの、悠々と白雲の流れる青空を見てゐることは、鐵の大砲の上に寢そべつてゐるといふことを、私に忘れさせて餘りあるものだつた。白雲の飛ぶ青空と、そして大砲のベンチの上で仰向けに寢てゐる私の目に入るのは、いゝ、兩眼鏡を片手に持つて、きゆつと身體をしやちこばらして、高い石の臺の上に立つてゐる大村益次郎の銅像であつた。仰向けになつて寢ながら考へるともなく私は考へるのだ、單なる無名の畫かきである、だから本當に無學である私は、この銅像の主に就いて、殆ど何の確な知識も持たない者だが、ぼんやりと誰に聞いたともなく、間違つてゐるかも知れないが、薄々知つてゐる事は、何でもこの男は明治の初年の戰爭に、薩長の軍と幕府の軍と、言ひ換へると官軍と賊軍との戰爭に、その官軍方のなかなか豪い大將だつたといふことである。官軍方にも大將は何人かゐたらうが、もつともその時この男は戰死したから多少贔屓があるのかも知れないが、兎に角この男だけが特別に斯うして銅像になる位だからなか〳〵の傑物に違ひない。無論、軍人ばかりが豪いのではない、こ

の男より偉い人で、銅像にもならず、格別人に名も知られない者は隨分あらうが、そんなことは言はぬこと、言はぬこと！　ところで、彼のこの銅像は、片手に兩眼鏡を握つて、ぐつと足を踏みしめて、上野の方を睥んでゐるのださうである。斯うして、その足下の大砲のベンチに寢そべつて下から見上げてゐるのでは十分に分らないが、それは普段見つけてゐる想像で足して見れば見る程、なか〳〵勇ましい姿である。

　そこで私は思ふのだ、一たび男子と生れたからには、軍人には限らない、役者にならうと、相場師にならうと、何にならうと兎に角、この男のやうにうんと足を踏ん張つて、ぐつと見得を切つて見たら、どんなに百日の溜飲が下ることであらう。

「これ、なあに？」と現に私の傍を通る遊山客の一人だらう、子供の聲が斯う聞いてゐるのだ。「これ？」とその子を連れてゐる、女親らしいのが答へるのだ、「これ、これはえらい人、えらい人！」

　だが、いつの間にか、その銅像も、その銅像の頭の上を飛ぶ白雲も、ふら〳〵と私の目にぐらついて見え出した、私はつい眠りさうになつて來たのだつた、だが、それは無理がないのであつた、昨日の晩も、一昨日の晩だつて、その前も、その又前も、考へて見ると、私は私の哀れなをんなと同棲した一年半の間の、それは睡眠不足に違なかつた、それは少しの譃でもないのだ、鐵の大砲の上はおろか、私はたとひ針のむしろの上ででも、横にさへなれば、忽ちにして前後を忘れて眠る程の狀態にあつたのだつた。

　そして私は素晴らしい夢を見たのであつた、實に、素晴らしいそれは夢に違なかつた、だが私は目が醒めると共に、すつかりその筋を忘れてしまつたのであつた。だから、それが實に素晴らしい夢だつた、とだけで、いくら、詳しく話せ、と言つたところが、それはもう神樣でなければ御存知ないのである。あゝ、素晴らしい夢だ！　と思つて、私は目を醒ますと共に、忽ち我に歸つて、驚いた事には、もうあたりが殆ど夜になりかゝつてゐたことであつた、そしてぞく〳〵する寒さを感じながら、おや！　さつき眠る前に確に見たところの、あの青空の光景は夢の中だつたのか、と思つた位であつた、と言ふのは、次第に夜になりつゝあるものとは言ひながら、しやちこばつた大村益次郎の銅像が、その中に溶けてしまふと思はれる程、眞黑に空が掻き曇つてゐたからであつた、のみならず、尚一層の驚きに迄、私はぼつ〳〵と、俄雨らしい水の滴を顏に感じたことであつた。

　私はあわてて、雨と、それに何といふこともない、漠然とした心掛りとから、程遠くない私の下宿に向つて駈け出したものだ、といふのは、餘り長い時間の間、諸君も知る如く私は朝早く出た切りだつたのだ。自分の家を留守にしてゐたので、殊に當時のやうな事多い日には、留守中に別に變つた事が起らなかつたらうか、ああ、何事もないやうに、ないやうに、と心の中で祈りながら歸つて行つたのだが、どうしたと言ふのだらう？　譯もなく私は、駈けたための外に、變に胸のどき〳〵するのを覺えて、私の下宿に歸つて行くと、女中が私の顏を見るなり、「あゝ、川下さん」（下宿では、まだ前のつづきで僞名のまゝなのだ。）「先程からお部屋でお客樣が二人も待つていらつしやいますよ。」と言つた。私は暫くその場に立ちすくんでゐたが、いつ迄もさうしてゐられないので、自分の部屋に入つて行くと、里見ともう一人知らない男とが、鹿爪らしい顏をしながら、下宿の瀬戸の火鉢に差向ひになつて、默りこくつて煙草をすつてゐるのを見出した。

前にも幾度か言つたやうに、私は私のをんなと澁谷に間借をするやうになつた前に、藝者家を逃げ出して、言ひ換へると、借金を踏み倒して、その爲に探し出されないやうに、私たちが僞名をしてゐたのであつたが、今度彼女が藝者になるについて、里見から、前に彼女が世話になつた桂庵の吉岡といふ者に話をして、彼女の以前の不始末を、彼女や私が目付かつたとあつては、高い金を取られるからといふので、行方不明のまゝにしておいて、片を付けて貰ふことになつてゐたのであつた。それも、彼女が今度お披露目を濟ましてしまつて、それから餘り日が經つと、全國藝者業組合といふものから、彼女が出たことが前の家に知れるから、それが知れない先に、事を運ばねばならぬ事になつてゐたのだ。で、今度彼女が藝者になるに就いて、前借した金の中から、多分それだけで前の分の片が付くだらう、と思ふだけの額をさし引いて里見の手から吉岡の手に廻されてゐたのであつた。ところが、その方の話が付かないうちに、昨夜彼女が髮を結ひに出て歸らなかつたのを、今度の家の短氣な主人が怒つて、前の彼女が勤めてゐた家に電話をかけて、その同じ彼女を、へて、自分の方でも迷惑してゐるなぞと知らしたのであつた。そこで、前の主人の代理の、三百代言が吉岡のところへ今日の晝過ぎにやつて來て、吉岡を脅しつけて、幾何々々の金を出さなければ、それより一文も負からない、お前たちをも共に訴へるぞと言つたので、吉岡は青くなつて里見のところへ、丁度私が彼の家を辭したのと入れ違ひ位の時刻に、駈けつけたのであつた。そして今里見と共に私の下宿に、その善後策を講じるために來てゐたのであつた。

吉岡の言ふ所に依ると、彼女の在所が分らないとして前の家に辨償するために、彼女の前借から預かつてある金の上に、今度の先方の要求額は更に百圓要るといふのである。ところが、吉岡が嘗て彼女を前の家に周旋した頃は、彼がまだ公周旋業の鑑札を持つてゐなかつた頃のことなので、多分そんなことはないだらうけれど、今もし訴へられるとすると、彼は可成りの罰金を取られるといふので、一層恐れを抱いてゐるとの次第であつた。

「そんな譯ですから、」と里見と違つて、以前吳服屋の番頭をしてゐたといふ、小柄な、頭の低い吉岡は手をもみながら私に言つた。「私も罰金のつもりで五十圓こしらへますから、あなたの方で、どうでせう、五十圓御都合下さいませんでせうか？ 御願ひでございます。……」

私たちとは赤の他人の、無論彼は彼の利害關係からではあらうが、桂庵の吉岡に、罰金のつもりで金五十圓出すから、と言はれて、私は全く何の的もないのであるが、どうして五十圓の都合も出來ないと言へた義理だらう？……

「それや、」と、私は譃をつく者のためらひ氣味で、「それや、どうしても私がこしらへなければならない金なんですから、何とかして工面をするつもりです、」と言はねばならなかつた、だがさう言つたとて、私には何の、螢の火ほどの見當もなかつたのは言ふまでもない事であつた。

男に身を賣る術がないものか！ あるなら、私はその場合、たとひ何年間を年期と定められようとも、口髭を生やした男の私が、この二人の桂庵の前で感じた消えてしまひたい思に比べたら、自分の身を賣りたいと思つたのに無理はないのだつた。だが、一昨日の晩寄席で見た狆のやうな顏をした潮來藝者を買ふものはあつても、私を買つてくれるものは、この世の何處にもある筈がなかつた。

「で、失禮ですが、今日明日には、とても御都合はお出來になりませんでせうな？」と吉岡は、恐る恐る賴むやうに、手をもみながら言つた。

「どうも、……それは、……」私は思案に暮れたやうに、だが暮れる思案さへ何にもないのを、讀者諸君は既に察しられたらうが、しつかりと組んだ腕の中に頤を埋めて言つた。

「どうしたもんでせうなア、里見さん？」と吉岡は助を求めるやうに里見に言つた。

「困つたなあ、」と里見は何か吉岡に對して不滿を抱いてゐるらしく、事に依つたら私に對して何か惡い感情を持ち出したのではないか、あの女房のことででも　恐ろしくむつつりした顏をして、その時まで沈默してゐた里見は言つた。（この男の默つてゐる時の顏の恐しいこと！）「兎に角、梅野さんの方が二三日かゝるものとして、これから君等二人で、その三百代言のところへ行つて、何とかなだめて來るんだなあ。」

そこで、私たちは又下宿を出て、里見と別れて、私は吉岡と共に、淺草のS――町の三百代言を訪問したのであつた。

それは門構の、可成り立派な家であつた。だが、そこには、その邊はごた／＼と入り込んだ暗い町で、その中の一番大きなその家にさへ、一つの軒燈も點つてゐなかつたので、尋ね當てるのに、私たちは隨分困つたものであつた。そして、門のくゞり戸を入つて二間ばかりの石疊を通つて、私たちは玄關に立つて聲をかけたが、そこも亦眞暗で、二三度も、三四度も、次第に聲を高めて呼んで見たが、私たちの聲ばかりが暗に響き渡つて、空家の樣に返事する者がなかつたが、やつと暫くしてから、「ハア！」とずつと奧の方から、細い、子供のやうな男の聲が聞えて、やがてその暗がりの玄關に現れたのは、その聲とは別人らしい、六尺近い大男であつた。すると、その大男は手に筒形の懷中電燈を持つてゐて、暗がりの中を、それで私たちの顏を照らした。吉岡が、

「やあ、山川さん。私、吉岡です、梅野さんと一緒に伺ひました、」と言ふと、山川と呼ばれた、大男の三百代言は、

「上り給へ、暗いから用心し給へ。」と細い聲（先の細い子供のやうな聲が、この大きな身體の男から出たのに、私は何よりも驚かされた！）で言つて、形ばかり私たちの足もとを手にしてゐる懷中電燈で照らしてくれたが、元よりそれで何の效果もないので、私たちは足探りして、玄關を上つて彼の後について行つた。見た所七間か八間もありさうな、だゝつ廣い家なのだが、どの部屋も眞暗で廊下傳ひにそれ等の前を通つたり、或ひはそれ等の一つを横斷したりして、一番奧の、そこだけ一本の蠟燭のついてゐた、六疊の部屋に案内された。

「電燈をとり上げられてしまつてね、困つてるんだよ、ヒ、ヽ、ヽ、」と主人は聲に適はしい變な笑ひ聲をたてながら、「待ち給へ、もう少し明るくしよう、」と言つて、蠟燭を三本ばかり一度に點した。見ると、そこには床が敷きつ放しになつてゐて、その外には、今私たちの爲にその上に三本の蠟燭を、蠟を流して突つ立てたところの、汚い小形の机と、以前からその上にやつぱり蠟を流して、もう七分まで盡きかゝつてゐる蠟燭を突つ立ててあつたところの、小形の、簡式な、板の蓋の本箱がある切りで、殆ど何の裝飾どころか、必要らしいものをも缺いてゐる、がらんとした部屋であつた。

「家は廣いが、道具が何にもないんだ、」と三百代言は、それでも言ひ譯らしく言つて、「座蒲團もないんだよ、ヒ、ヽ、ヽ、」そして彼は掛蒲團を私たちの前にひろげて、その上に坐れと言つた。

座につくと、吉岡は簡單に挨拶して、形ばかり私をも紹介してから、さて例の話をもう三日の間猶豫してくれ、と言ふと、

「待てないなア」と相手は、その時私は初めて落着いて觀察する機會を得たのだが、口髭がなくて、三寸許りの逞しい頤鬚を生やしてゐる、その鬚を無暗に捻りながら、彼の持つてゐる何物と比べても、全然不調和な、その細い聲で言つた。

吉岡はそこで暫く閉口したやうに默つてゐたが、山川は又すつかり別な調子で、

「火もない、お茶もない、獨り者の世帶だから、堪忍してくれ給へ、」と言つた。

「山川さん！」とその時吉岡は、癖の、手をもみながら、これも亦けろりと快活な調子になつて言つた。「お獨りの世帶を荒らすのも恐縮ですから、どうでせう、何處か外でお茶でも飮みながらお話しませうか？……」

「まさか、おびき出して殺すといふやうな寸法でもあるまいね、ヒヽヽヽ……」と三百代言は言つて鬚をしごきながら笑つた。

そして、彼が眞先に立ち上つた。で、私たちも立ち上つて、又例の覺束ない光の懷中電燈の案内で、眞暗な廊下を通つて、私たちは下駄を探り探り穿いた。外に出ると、

「さあ、どちらへ參りませう？」と吉岡が言つた。

「僕の行きつけの家が直ぐそこにあるから、そこへ行かう！」と三百代言は言つた。

すぐ近所の、それは馬肉屋であつた。

「やあ、今晩は！ 今晩は現金だから安心しろ！」と山川はそこの汚い暖簾をくゞりながら言つた。そして、彼は恰も自分が振舞ふかの如くに、「今日は一番上等の酒を持つて來い、」とか「默つてても、なくなる時分にはお銚子を持つて來るんだぞ！」とか、と細い聲で叫んだ。

「あゝあ、久し振りで飮むと、腹綿に沁み透るわい。甘露、甘露！……」と言ひながら、彼は銚子なら二本も傾けたかと思ふと、案外酒は强い方でないと見えて、申し分なく酩酊の氣分に浸り始めた。初の元氣では、少なくとも十本ぐらゐはけろりと飮んでしまひさうに見えたので、吉岡は早速に話を進めることを控へてゐたらしいのだが、案外にも二本の銚子で相手が十二分に醉ひ出したので、少し狼狽氣味で、

「ねえ、山川さん」と彼は口を開いた。「先程のお話ですがね、實は私は二百圓だけなら今夜持參してゐるんでございますが、その……五十圓だけもう三日間待つていたゞきたいと思ひまして、斯うして梅野さんと二人でお願ひに上つたのですが……」と商人らしく、例の通り手をもみながら、恐る恐る申し出た。私は片唾を呑んで、どうか山川がその申し出を承知してくれるやうに、と言つて承知してくれたところが、實はまだ少しも私の責任であるところの、その三日間のうちに五十圓をこしらへるといふ見當は付いてゐないのであつたが、恐縮しながら山川の顏をうかゞつた。

「二百圓持つて來たのか？」と酩酊した三百代言は、左手に盃、右手に徳利を持ちつゞけてゐるので、その一枚看板の逞しい頤鬚に、酒の滴や吸物の露のついてゐるのもかまはず、それを振り立て振り立て叫んだ。よし〳〵、五十圓を三日待てといふんだな。待つよ、待つよ」とこゝで彼は、盃を持つたまゝの左手で自分の胸を叩く拍子に、少しばかりその底に殘つてゐた酒があたりに散亂したが、そんなことには一向かまはず喋りつゞけた。「なあに、俺だつて血もあり涙もある人間だよ。それに……なあに、俺だつて家賃をもう六ケ月も待たしてあるんだ。武士は相身たがひだ、なあに平氣だよ。平氣だよ、……」斯ういふ彼の聲は、昻奮すると共に、益々細く甲高くなつて、まるで泣聲としか聞えないのである。私はそれを聞きながら、幾度口の中の唾を呑み込んだか知れなかつた、

何とも言へぬ物悲しさに襲はれて、殆ど泣けて來さうになるので、その度に呑み込んで堪へようとしたのであつた。そして三百代言は更につゞけたのだ。「實はね、先方へは二百圓か、或ひは百八十圓も拂つたらいゝんだ、後は俺の手數料さ。待つてやるよ、待つてやるよ。」

すると、吉岡は紙と硯とを取り寄せて、それに二百圓添へて山川に渡しながら、

「では、ほんのお印で宜しうございますから、その、内金としてのお受取を……へえ、恐れ入りますが……」と片手を頭に乘せながら言つた。

その樣子を見てゐると、私は自分の味方とは言ひながら、吉岡の方がひどく惡い奴で、相手の三百代言の方がずつと同情すべき人物で、今前者が後者に飲ましてゐる酒にも、ひよつとすると、何かあんな風に醉はせる藥でも密に仕掛けてあるんぢやないか、といふやうな氣さへした。

「吉岡さん、」とそこで私が言葉を挾んだ。「それや今でなくつても、山川さんが三日待つて下さると言はれるんですから、後の五十圓が出來た時に、纏めてさし上げてからにしてもいゝぢやありませんか？」幾度も言つたやうに、私にはちつとも見當のない五十圓の金であるにも拘らず、それに、こんな事を言ひ出したら、折角都合よく行く話をめちや〳〵にする樣なものだとは知りながら、案外、大根が善人であるところの私は、斯う言はずにはゐられなかつたのだ。

「こいつ、食へない奴だな！」と、私の言葉の終らぬうちに、三百代言は酩酊した、凄い目で吉岡を睥みながら言つた。「俺を醉はしておいて、その暇に乘じて内金の受取を取らうと言ふんだな、ヒヽヽヽ。吉岡君、憚りながら、俺だつて三百代言の片破れだよ、内金をとつてしまへば、後の金は延ばされても仕樣がない位の事は百も心得てゐるよ。……」

「いえ、いえ。決してそんな譯ぢやあ……」と吉岡は片手を頭に乘せて、愛想笑ひをしようとしながら、さて顏の筋肉にサボタージュされてしまつて、うまく笑ひ顏にならないといふやうな表情で肩を縮めて言つた。

「もう三日が、明日の朝までも待てない！……」と三百代言は、俺も柄に似合はぬ凄い目付を光らして言つたが、どうしたのか、一寸沈默した後、忽ちけろりと顏の表情を柔らげて、私の方を見ながら、「……といふ所だが、俺は梅野君の言葉に感心した。君は正直だ、君はいゝ人間だ、よし、君に免じて書いてやらう、」と言つたかと思ふと、早速傍の硯箱から筆をとつて、左手で疊の上に延べた紙を抑へ旁た、酩酊のためにふら〳〵する身體を突つぱつて、極めて達者な字ですら〳〵と受取證を書いた。そして署名して、「判を持つてゐないから、拇印を捺しておくよ、」と斷つて、それを吉岡と私との名宛にしてくれた。それから彼は筆を擱いた手を疊の上に突つ張つて、左手で盃をとり上げて、又たて續けに三四杯酒を飲むと、

〽酒は、飲め飲め、茶釜で沸かせ……

とうたひ出した。かと思ふと、急に唄を中斷して、

「吉岡君、君の細君はなか〳〵美人ぢやな。やつぱりそれしや上りかな？……それにしては子供が二三人もあるやうだつたな。子寶、子寶……」と山川は次第に呂律の廻らぬ喋り方を始めた。

「これで三人の親父ですよ、」とすると吉岡は窮した言葉で調子は合はした。

「失禮ですけど、」と私は聞いた、「山川さんは奧さんはおありにならないんですか？」

「なあに、さう輕蔑し給ふな、世界中にあるよ、ヒヽヽヽ、」と三百代言は笑ひながら言つ

た、僕はこれで、もう四十の坂を越した、と言ふと體裁がいゝが、五十に近いんだが、未だに獨身なんだよ。……梅野君、君はさすがに、相當に學問があるだけに物が分りさうだ。話さうか、僕の經歴を……」と言つたが、大分苦しくなつて來たと見えて、急に兩手の盃も德利も投げるやうに食卓の上に置いて、その兩手でぐつと自分の頤鬚を摑んだまゝ、「あゝ、醉つた、醉つた、苦しい！……梅野君、僕は失、失、失戀者なんだよ。……」と言つたかと思ふと、そのまゝごろりと橫になつてしまつた。

その時、初めて、私は氣がついたのであるが、彼は肩幅や身長の割合に、胸から足にかけて、不調和な程、ぐつと細くなつた身體を持つてゐた。汚れた、油じみた雙子織の着物の上から、ぐる〳〵卷に締めた、白の、しかしもう汚れて灰色になつたメリンスの兵兒帶の邊が、大きく上下に息するやうに動いてゐた、彼は可成り酒に弱い男に違ひなかつた。

やがて吉岡は勘定を濟まして山川を送つて行く俥賃を女中に預けておきなぞして、そこで私たちは寢てゐて半分夢中になつてゐる山川に形ばかりの挨拶をして、その馬肉屋を出たのであつた。

「面白い人ですね、」と私は外に出てから、何も外に言ふことがないので、斯う吉岡に言ふと、

「えゝ、」と彼は言つた、そして、「兎に角、これでやつと安心です。もう後は拂つても拂はなくてもいゝんですが、まあせい〴〵こしらへて、爲替で宜しいから、殘りを二度にでも三度にでもいゝから、送つてやつて下さい。」

「えゝ、さうします、」と私は言つて、吉岡に別れて、夜の十一時頃に下宿屋に歸つて來たのであつた。

どうして、五十圓の金をこしらへよう？　と私は、その時の私には石を變じて金にするといふよりも、もつと的のない難かしい、漠然とした金策のことを考へた。まつたく、五十圓どころか、五圓の金をこしらへる思案もないのだ、五圓どころかこれから自分自身を養つて行く術を取敢へず考へなければならないのだ。

私はそれからそれと、眞面目に額を顰めて、だがそれは往々滑稽と同じものであるところの眞面目さで、だから少しも纏まらないことを、又纏めようともせずに、思案に耽つて、結局、取敢ず三百代言の山川に宛てて手紙を書いた。自分が決して惡い者ではないこと、だが、自分にはこれ〳〵斯ういふ事情で、と打ち明けたことをすつかり書いて、實はその五十圓をこしらへる見當さへつかない、あなたをだまし、引いては吉岡氏をも欺いた譯であるが、どうぞ、月に十圓づつ納める、それは間違なく納めるから、それで勘辨してくれ、實は自分は現在の下宿料さへも拂ふ的がないので、明朝、この手紙を出すと共に、無斷で下宿を出て、多分友達の家を一日二日づつ廻り歩いて、その後どこか田舍にでも行くか、それとも故鄕の大阪の方にでも引込むか、但しそのいづれにも、何處と言つて私を引き取つてくれる家も人も一つもないのは同じことだが、從つて自然私の居所をあなたにも隱すことになる、吉岡氏にもさうだ、だが、さうだと言つて、決してこの儘あなたへの義理を踏み倒すなぞといふつもりは毛頭ないから……と書いた。そして私はその事多かつた一日を終つて、寢床に入ると共に、忽ち、腐つたやうに寢てしまつたことであつた。

高天ケ原

かつらぎの峯の白雲かをるなり高天の山の花さかりかも――月清――

四月の或晩、私は呉服商人の中戸丈助と同伴で、東京驛から出發することになつた。私たちの買つた切符は、さすがの東京驛でも滅多に發行されないものと見えて、活字でなく、ペンの字で『高天ゆき（名古屋廻り）』と認められてあつた。高天といふのは奈良縣にある、或私設鐵道の沿線の小驛の名である。私は黑の背廣服に同じ外套、それに同じ色のソフトを被つて、中形のスート・ケースを一個持ち、丈助は茶縞の結城紬の着物に、出來合らしい綿ラクダのトンビを羽織つて、古風な鳥打帽を被り、信玄袋を一個提げて乘り込んだ。私は三十五歳で、丈助は六十八歳であつた。が、帽子をとると、年にも似合はず殆ど禿頭になつてゐる私が、どうかすると四十歳以上に見られる反對に、鬼のやうな剛い毛を角刈にした、五尺七寸豐かの頑丈な體格をした丈助は、五十歳以下にしか見えなかつた。彼が三等でいゝといふのを、私が無理に二等にすゝめたので、車室に入つて來ると、人々は不釣合に見える二人連の私たちの方を、じろ〳〵不思議な目で迎へた。

もつとも、私たち自身にしても全く不思議な氣がするのであつた。一ケ月前には私は夢にも丈助と同伴で旅をするなどといふことを思つただらうか？　そして、丈助にしても同じ思ひに違ひなかつた。何故といつて、同じ東京の下谷と淺草とに住んでゐながら、近頃私は彼を尋ねたことは殆どなかつたし、彼が私を尋ねて來たことも滅多になかつた。それでゐて、私と彼とは、もつと親しくしてゐる友達同士の間にも容易に見出されないやうな、珍しい因緣に結びつけられてゐるのだつた。といふのは、今日私が小說家として世に立つてゐるといふことが出來るとすれば、それは丈助のお蔭であつたし、丈助が今日數萬の資産を貯へた呉服商人になつた元はといふと、私の力添への爲だつたと、それは私がいはない迄も、さう丈助が機會ある毎に他人に吹聽し、又彼が直接私にもいつてゐる通りだからである。現に今、彼はその死後の遺言を私に託してゐることでも、彼がどんなに私を信用してゐるかが分るだらう。しかし、私たちは親類に當る譯でも、何でもないどころか、先にもいつたやうに、互に職業にしても、身分にしても、餘りかけ離れてゐるので、不斷は殆ど往來しないやうな間柄なのである。

時々――月に一二度、私の母が丈助の家へ出かけて行くことがあつた。それも用事がある譯ではなく、彼の家は淺草にあるので、彼女は月々十八日の觀音樣の命日に、淺草へ行つたついでに彼の家に寄る位のものであつた。資金の豐富な商人の家によく見るやうに、とある溝川に沿うた片側町の彼の店は、人目に立たないやうな、三間間口の小さな構へであつたが、間口一ぱいに四枚の硝子戸の嵌まつてゐる店の間には、坐り場所もない程商品の呉服類が積み重ねてあつて、次の間のそれ一つ切りしかない居間兼茶の間の六疊にも、どうしてそこに夜の寢床を敷くのかと思はれる程、商品が一ぱい充滿してゐた。私の母は彼の家で買ふと、普通に市場で買ふ半分の値よりも安いといふので、中元の

進物にする浴衣地などをよく分けてもらつて來た。又、年の割に達者で出ずきな彼女は、時々子供のやうに花屋敷へ出かけて行くことがあるので、その歸り途などによく彼の店を尋ねるらしかつた。が、彼の店はいつの時でも商賣の用事の客が來てゐないことはなし、それに、先にもいつたやうに家の中が商品の箱に狭められてゐるので、落著いてゆつくり坐つてゐられないと見えて、彼女は直ぐそこ／＼に辭して歸るのが常だつた。

「萬太郎はんにちつと來てもろてんか。萬太郎はんかて、一年に一ぺんや二へん淺草へ來やはることがおまつしやろ。」

丈助は絶對で眞劍になつてゐる時などに、私の母が顏を出すと、時々かういつて私のことを聞くのであつた。

「あんたの話は始終萬太郎もしてますけど、」と母もつい國言葉になつて、「しかしお伺ひしても、さてあんたと萬太郎では、片方はお酒が飲めませんし、話が合ひまへんやろ。」

「それもさうやな。アハヽヽ、」と丈助は氣まり惡さうに頭を掻いて笑ふのだつた。

手堅いもので、丈助の後妻がその家に來てから、最早やかれこれ十年近くになるのだつた。

ところで、丈助はこの後妻に遠慮してゐることがあつた。それは丈助でない外の人間であつたなら、そんな心配の入らないことであつたかも知れないのだが、彼の性質が許さないのだつた。何故といつて、彼女が丈助の家へ來た時には、既に彼の家の商賣の地盤が固まつてゐて、一應世間への附合さへ出來てゐたのである。三十歳を過ぎて後妻に來たゞけに、彼女はなかなか働き者で、彼女が來てから丈助の店が益々繁昌したことも事實だつた。が、それだといつて、彼が彼の近親の者に金をやることを氣兼ねする必要はないのだが、彼の性質として、彼はそれを後妻に來た彼女に内所でしなければならなかつた。彼がそんなに氣にかけてゐる近親といふのは、京都に嫁づいてゐる娘の雪江と、その雪江が其處に生んだ私生兒の秀夫と、その秀夫を預けてある彼の故郷の高天村にゐる甥の丈太郎とであつた。

「なア、小母はん、」と彼は彼の妻が傍にゐない時、私の母を姪で呼びかけて、「わしもなか／＼苦勞が絶えまへんわ。娘なんてない方が氣樂やな。娘が出來ると、皆かうかゝつてにしよるさかいな。しかし、あるものを遣つてやるのはわしはかまへんけど、それがうちの奴に氣兼ねでな。」

「そんなこと、あんたが儲けて、あんたのお金やおまへんか。遠慮せずにどん／＼遣つたげなはつたらえゝやおまへんか。」

「それがなア、」と丈助は嘆息していつた。「あいつはわしとは夫婦でも、外のもんとは他人やさかいな。わしの身内に錢や物を遣ると、えゝ顏しよれへん。しよがないから、ほつ／＼隱しといて、内所で遣つてやるやうにしてるねけど、よう箪笥の中へ入れて見つかつたりナ、額の後に隱しとつて見つかつたりナ。そんなことはえゝけど、これでわしが死んだら、後が心配や。」

そんな事、何もあんたが主人なんですから、今のうちにちやんと遺言にして書いときなはつたらえゝやおまへんか。その爲の遺言ですもの。」

「それやわしも考へてゐるんやがな、それに就いてわしは一ぺんあんたのところの萬太郎はんに會うて頼んでおきたいと思ふねん。お前のことも心配やけど、高天の丈太郎のお母んがまた慾張りやさかいな。」これは彼の甥の丈太郎の母といふのが、丈太郎とは名目だけで、血のつゞいた親子ではないのをいふのだつた。「それに又、丈太郎が身持は惡い、と來てよる。わしは、秀夫はまだあんな子供やさかい、この商賣を

丈太郎に讓つてやろと樂みにしてたんやが、丈太郎の身體があれではあかんし、錢なんか何ぼ儲かつてもしよあれへん。食うて食うて食ひ倒したろかと思ふけど、そないに食へるもんやあれへんしな。それに、此頃は酒かて、二本飲んだらこんなに醉うてしまふし……」

後妻のお政はお政で、私の母が丈助の留守の時などに行き合はすと、

「ねえ、小畑の小母さん、」と彼女は丈助と違つて、出來るだけ東京の言葉を使つて嘆いた。「聞いて下さい、考へて見ると、私のやうなたよりない者はありませんわ。何ぼかうしてせつせと働いても、自分の子といふものがありませんのですしな、うちの人も何ぼ達者やといひましても、年には勝てませんからね、いつぽきツと死なれるやら分りませんし、そしたら私があの小さい秀夫さんを見んなりません。まア、お蔭でかうして商賣は繁昌して居りますから、少しばかり金は殘りますけど、それが私の金であつて私の金といふ譯には行きませんものね。自由になりませんから何にもなりませんわ。」

「でも、ないのと違つてあるのですから、」と私の母も出來るだけ東京の言葉になつて、「ある手からは洩れるといふ譬もありますやおまへんか。それに中戸さんにしても、あんたに一文も殘して行かないでおきなさる筈はありませんし、又、さうしてあんたが會計を預かつてなはるんやから、夫婦の仲ですもの、今のうちにせいぜいしんがい（私もこの言葉の意味をはつきり知らぬが、へそくりの意であらう）しておきなすつてもかまはないぢやありませんか？」

「それや少し位しんがいはしますけど、私にしても國の方に時々送つてやらなければならん所がありましてな、なか／＼自分の手には殘りませんのですよ。」

が、さういふ話を私はいつも母や妻から間接に聞いてゐるだけで、丈助その者には隨分長い間會はなかつた。彼の後妻のお政などは、數へて見ると二三度會つたことはある筈だが、人の顏を見覺えない私の癖として、町で行逢つたら知らずに過ぎる程の記憶しか持たない。それにも拘らず、私は中戸丈助の噂を聞くことが好きだつた。私は家庭にゐると極端な氣むづかしやで、私が家にゐると忽ち天氣が曇つたやうに家の中が暗くなる、と家の者から蔭口をきかれてゐる位であるから、母にしても妻にしても、私からは、不斷用事の言葉の外には私に滅多に口をきかないやうにしてゐる位だつたが、この中戸の話だけは例外で、彼のことで何か話の種があると、彼等は好んで私にし向けるのが常だつた。それは彼の噂は必ず私を上機嫌にしたからである。

よくやる譬だが、人はこの世の中で接する人々を本に譬へることが出來る。朝から晩まで顏を見てゐる人でも氣に入らない人があるし、ふと顏を合したゞけで氣に入る人もあるし、又子供の頃には義務のやうに月に何度か會つて御機嫌を伺はなければならない長者などもある。つまり教科書のやうな人や、冒險譚のやうな人や、戀愛小説のやうな人や、いろ／＼な人がある。中戸丈助は私のそれ等の本箱にしまつてある本や、不斷机の上にひろげてある本やに譬へらるべき人々の中で、不思議な愛讀書の一つだつた。

その本の中にはかういふ一節もある。――

例の關東の大地震のあつた二日目の朝のことだつた。その前の晩には、下谷の私の住居の邊まで火事の及んで來さうな心配があつたので、私は念のために家族と一所に郊外の友人の家に避難して行つたのだつたが、明け方になつて火事が止んだので、私だけ樣子を見かてら自分の家へ歸つて來た。そして表から戶を外し

て、まだ地震の心配があつたので、後から歸つて來るものの用意に、七輪や釜を表に持出して、やつと手に入れた玄米の飯をたいてゐると、そこへひよつこり襯衣と股引の上に、腰に三尺帶をぐる／＼巻きにした中戸丈助が現れた。

「やあ！」

「やあ！」

こんな樣に雙方から勢よく聲をかけた。かういふ場合でなければ私は彼と滅多に口を利く機會がないのだつた。彼は不斷から木綿の着物に、尻からげをした行商人のやうな恰好をしてゐるので、かういふ大變の場合の風采でも不斷と餘り變りはなかつたが、一見して彼の心配さうな顔附を見る迄もなく、一瞬間、私は淺草の溝川の岸にあつた彼の家は、さうだ、あの地震の當日に燒けてしまつたのだなと氣がついたのだ。

「大變でしたな。お家は？」と聞いて見た。

「燒けたよ。」と丈助は當然のやうに答へた。

「で、皆さんは？」

「それが散り散りになつて分らんので、」と彼は持前の鼻のつまつたやうな聲でいつた。「それで、あんたのところへ尋ねて來てへんかと思うてな。」

「それや心配ですな。」と私は驚いていつた。「僕のとこは昨夜少し危なかつたので逃げ出したんですが、一日と二日とはずつとこゝにゐましたから、お出でになつたら分る筈ですがな。ところで御飯は？」

「いや、まだ……」

「まだだつて、それぢやア地震の時からですか？」

「うむ。火事で燒け出されて、そのまゝ家のものとばら／＼になつたさかい、探し歩いてるね。」と丈助はいつた。

「それぢやア、この人はまる二日何も食べてゐない譯だな。」と思つたので、私はたいてゐた玄米飯の蓋をとつて覗きながら、「ほ、もうたけてさうだ。すぐ熱れますから、兎に角お腹をこしらへなさい。」といつた。

「ちよつと一服さして貰はうかな。」と丈助はいつて、開け放しになつてゐる臺所口の敷居に腰をかけようとして、彼はふと板の間の隅に、傾いた笊の中から數箇の茄子が轉がり出てゐるのに目を止めると、「これやもつたいない、こんなことをしといたら。」と獨言ちながら、そこらを何か見廻してゐた。そんなごた／＼した中でも、遠慮家の彼は土足で臺所の板の間に上ることはしない男なのだ。やがて彼は膝で板の間を歩きながら、漬物桶を引きずつて來て、それの蓋と石とを取り除くと、そこに轉がつてゐた茄子を手早く桶の中に漬けるのであつた。

「荷物は出しましたか？」と私は臺所の敷居に彼と並んで掛けながら聞くと、

「それが、一ぺん火の手が止まつたもんやさかい、表へ出した荷をすつかり家の中へ運び込んだところで、今度は突然裏手から出た火で燒いてしまうた。すつかりこつきり何も彼にも。」

さすがに大地震は彼のやうな無口な男にも、割合に口數をきかせた。

「それぢやア困つたでせう。それで、どうしてお上さんと別々になつたんです？」

「あんまり火の手が早かつたもんやから。それに、やつぱり慾があつてな。丁度前の日に二萬圓ほどの品物を仕入れたとこや。それを惜しいもんやさかい、わしが後に殘つて、前の川に助かるだけと思うてほり込んで來たんや。そのうちに家内や皆とはぐれたんや。しかし、上野の山、上野の山というて別れたんやがな。」

その時分、やつと私のたいた玄米飯が熱れたので、それに鹽をつけて握つたのを皿に載せて彼に出すと、

「もらつてもえゝかな？」と丈助は持前の遠慮癖から、なか〳〵手を出さうとしないで、「もうみんな歸つて來るんやろ、この邊なら逃げえでも大丈夫やのに。みんなが食べるのに足りまつか？」

が、私が強ひてすゝめたので、やつと彼は握り飯を一つ二つ口に入れて、「あんまり腹が空いてると、却つて食べられんもんや。御馳走様、水を一杯御馳走になりますわ、」と握飯を二つ三つ食つた切りで水を飲んだ。

「でも、丸焼では困るでせう？」と私が同情して聞くと、

「いや、今んとこ困りますけど、銀行さへ開いたら、通帳は持つてるさかい、まだ三萬ぐらゐあるね。お政がそれに現金を少し持つとをると思ふね。」

この男は、自分の持つてゐる金高を、より多くもなく、より少なくもなく、時候の挨拶と同じやうに平氣でいふことが出來る程、商人には珍しい淡泊なところがあつた。

彼は水を飲むと直に立上つて、

「御馳走様。みなはんに宜しう、」といふので、

「どこへ行くんです？」と私が聞くと、

「まア、もう少し探して見ますわ。若し後でこつちへ尋ねて來ましたら、公園の中の美術館の南側のところで待合すやうにいうといとくなはれ。」

「そんなことをしないで、僕の家へ來たらどうなんです？」

「いえ、いえ、」と彼は向う向いてお辭儀しながら歩いて行つてしまつた。彼はその前の晩も、前の晩も、すぐ近くの私の家があるのに遠慮して來ないで、公園の美術館の南側で野宿したらしいのである。

その午後、彼の細君と、彼の家の番頭とが私の家へ尋ねて來たので、私はその二人と一所に彼の教へて行つた公園の美術館の南側といふのへ行つて見た。が、そこに彼の姿は見られなくて、ペンキ塗の美術館の壁一面に、「本所何町何某」「淺草何町何某一家」「淺草何町何々屋」等、等と、我勝に白墨や墨汁で人の目を引くやうに書かれてある無數の避難者たちの姓名番地の中に、それ等の極く隅の、極く下の方に、人の名前と名前の間に、小さな小さな字で、窮屈さうに遠慮して「中戸丈助」と名前だけが認められてあるのを見出した。おゝ、かういふ所でまで遠慮してゐる中戸丈助！

――私はこの私の最も愛讀する人物と、その時以來顏を合はさなかつたのだつた。地震の後、二三度彼は私の家の玄關先まで來たことはあつたが、一度は私の留守の時で、一度は私のゐた時だつたが、「まあ、どうぞ、どうぞ一寸でもお上り下さい、」と妻がいつてゐるうちに、二階にゐる私に知らしに來る暇さへ與へないで、いつでも用事だけいふとそこ〳〵に歸つてしまふのが常だつた。もつとひどいのは、彼の風采が風采なのと、態度が餘り謙遜過ぎるのとで、玄關に出た新米の女中が、押賣商人か無心者と勘違ひして、留守をつかつたことがあつて、それがずつと後になつてから分つたといふやうな話もあつた。それにしても、彼に地震の後で元の燒跡に家を建て、商賣を始めたといふことも、それが木綿物を主に扱つてゐるので地震前よりも一層繁昌したといふことも、それでこれ迄は小切ればかり扱つてゐたのを、その頃から呉服太物卸問屋といふ看板になつたといふことも、私は唯噂にだけ聞いてゐたのである。

すると、この三月中旬の或晩のことだつた。私は滅多にあの方面に足を向けたことはないのであるが、一人でふら〳〵と淺草の活動寫眞街へ出かけて、何か新聞の廣告で引き寄せられた活動寫眞を立見で見た後で、電車に乘らうと

思つて田原町の方角から雷門の方へ敷石道の上を歩いて行つた。日が暮れて間もなくのことで、私は疲勞の上に大分空腹を感じてゐたのだが、あの邊の賑かなカッフェへは一人で入る勇氣がなし、といつて、その外のどんな飲食店へも矢張り一人で入るのは氣が引けるので、いつもさういふ場合にするやうに、我慢して家へ歸つて何か食はうと決心した。寧ろさういふ時に、屋臺店のうまい鮨屋でも知つてゐたなら、その方が便利でもあり、氣輕でもあるので、ちよつと暖簾を頭で分けて腹をこしらへたいとも思つた。その時、ふと私の目を捕へたのは、とある店の硝子箱の中に見事な大阪鮨が並んでゐるのだつた。東京で大阪鮨を見ることは近頃では珍しいことではないが、長い間彼地で馴染んで來た私の目を引きつける程な出來榮えの大阪鮨といふものは、空腹である時とない時とに拘らず、滅多に見られなかつた。が、その時見たのは、確に餘程大阪的な、大阪鮨になり切つたものなので、私は食ひたいといふ氣持からでなしに、思はず足を止めた。ふと懷しくなつたのである。たしか「丸萬」といふ看板が出てゐた。不斷ならとても一人で入れないやうな店だつたが「あ、丸萬か」と思つて(「丸萬」は私の名に似てゐる爲ではない、私の故郷の名代の店の名なのだ。)私はふら／＼とその店の暖簾をくゞる氣になつた。そして二階に上れと下足番がいふのを氣にかけないで、入つたところの土間の腰掛の一つに腰を下ろした。あたりには大勢の人々がそれ／＼陣取つて飲んだり食つたりしてゐた。そんな時の私の癖で、それ等の人々の顏を一つも見ないやうにして、食臺の上に獻立書があつたので、それを目の前にひろげて、少しその中の空氣に馴れる迄しばらく無意味にその獻立書の表を見つめてゐた。その時、

「小畑はんやないか？」と突然私の直隣席から聲をかけたものがあつた。

「おゝ、これは大變なところで會ひましたな！」

と私も思はず聲を揚げていつた。

「わしはこゝへ此頃毎晩來るんだすけど、」と中戸丈助は酒飲みの癖で、無意識に私の方に盃をさしさうにして、「あゝ、あんたは相變らず飲みなはれへんか？」と恐縮さうにその手を引つこめながらいつた。地震のやうな時は別として、酒でも飲んでゐないと、彼はとてもこれだけの口數を私にきくことがないので、私は久しぶりで彼と話が出來る、都合のいゝ所で會つたと心で喜んだ。そこへ印半纏を着た十四五歳の小僧が註文を聞きに來たので、私は取敢ず鮨一人前と、ふと丈助の前にあるものを見て、私もそれと同じ茶碗蒸を命じた。すると、どういふ譯か、丈助が傍から嬉しさうに、

「あんたも茶碗蒸が好きだつか？」と聞いた。

そして彼はつゞけて、「わしはな、この茶碗蒸が好きで毎晩こゝへ來ますね。東京の茶碗蒸はどんなえゝ所のんでもあかん。こゝの家だけや、大阪の味のする茶碗蒸は。あんた、こゝの茶碗蒸を食べたことおますか？」

「いゝえ、初めて。表を通りかゝると、珍しくうまさうな大阪鮨が出てたもんだから、ふら／＼と何の氣なしに入つて來たんです。もつとも始終食べるには、矢張り東京の鮨の方が飽きませんがな。ところで、本當にしばらくでしたな。母が始終お邪魔に上つてゐるさうですが……」

「まあ、そんな固苦しい挨拶は拔きにしまよ、」と丈助はその眞赤になつた四角な瓦のやうな顏を嬉しさうに歪めながら、「わし一ぺんあんたに會ひたいと思うてたんや。お母はんにもさういうて賴んどいたんやが、わしこんな性分やでな、あんたに會ひたうても行くのが大儀でな。行くのはわしのことやから、歩いてでも何でも大儀やないけど、かうして酒を飲んでると

別やが、わし口がきけんもんやさかいな。」

「いや、さういはれると、僕の方からも何はねばならないんですが、御無沙汰してます、」と私がいふと、

「まあ〳〵、そないいふと直向苦しなる、」といつて、丈助はその百姓のやうな大きな片手を上げながら、「わし、つい四五日前に大和から歸つて來ましてん。お前はんもまだ知りはれへんやろ。」

「始終高天の方へいらつしやるらしいですな、」と私は前からよく彼が鄕里の高天へ行くといふ話を聞いてゐるので、さういふと、

「いや、始終でもない、二ケ月に一ぺん位や、」と何故か彼は恥かしさうにいつた。

「丈太郎さんは如何です、此頃しばらく便りがないが、身體の方は？」と私が聞くと、

「まあ、ぶら〳〵しとをる、」と丈助は答へた。

丈太郎といふのは先にもいつたやうに、丈助の兄の竹藏の後取り息子の名だつた。が、實は丈助にも竹藏にも丈太郎は甥に當るもので、彼は彼等の死んだ長兄の子だつたのを、竹藏が養子に貰つたものである。その竹藏はつい二年ばかり前に死んで、三十歳になる丈太郎が今は後を立ててゐるのだつた。丈助の心配は彼が身體が弱い上に、死んだ竹藏の妻、即ちその丈太郎の母になるものが、丈太郎には血のかゝらぬ他人に當ることと、その母親が慾張りで、どうかすると亡夫の僅ばかりの財產を、自分の身內の者に與へたり、彼女自身に着服したりする傾向があることだつた。それに、彼がそんなに屢々故鄕の高天へ歸るのは、その本家の丈太郎の家に彼の孫に當る秀夫が預けてあることも最も主な原因に違ひなかつた。秀夫は彼の先妻の娘の私生兒であつたから、今の妻の政江とは矢張り肉緣の關係はなかつた譯である。もう一つ、彼の國に歸るのは、大和にひろがつてゐる天理敎の信心の爲であることを私は今度の旅で知つたのであつた。

「僕もそのうち一度久しぶりで高天へ行つて見たいと思つてるんですが……」と私はいつた。

その時丈助の自慢の茶碗蒸が私の前に配達された。

「さう〳〵、」と丈助は思ひ出したやうに、「あんたの祖母さんのお墓の下の臺石がくづれて來て、大分傾いとるさうなが、今のうちなら一寸手を入れたらあのまゝでもようなるが、それとも石をすつかり積み變へたはつたらどうやいうて、此間歸つた時、丈太郎にことづけされたのを忘れてゐた。」

この話に見るやうに、私の母方の祖母の墓が妙な因緣で、大和の高天村にあるのである。といふのは、今から十五六年前、丁度その時この高天村に寄寓してゐた私と母のところへ、大阪から遊び旁々やつて來た私の祖母が、着いてから三日目に墓になつたことがあつた。

私は思はぬところで、思はぬ人の口から、十九歳の時に別れた祖母のことをいはれて、ふとセンチメンタルな氣持になつた。が、考へて見ると、その時高天地方の習慣で、死者の棺を近親の者が墓まで擔いで行くことになつた時、死者の孫である私と、子である伯父とだけでは擔ぎかねたので、私の方の棒を手傳つて擔いでくれたのがこの丈助だつたことを思ひ出した。葛城下ろしの吹く日で、高天山の麓の墓地に向つて、この丈助と後先になつて棺を入れた輿の先棒を擔いだ時の光景を、私は思ひ出した。

おゝ、高天村よ、汝の自然よ、汝の住民よ！

その時、私は突然から詩人のやうに叫びたい衝動に驅られた。高天村といふのは、奈良縣南葛城郡に屬する村で、先にいつた高天山から三十町或は五十町ばかり離れたところにある二ま

つの部落から成立つてゐた。二つの部落に分れてゐるのは、まん中に周圍二十町ばかりの高天山といふ丘のやうな山があつて、その南側と北側とに分れて存在してゐるのである。北側のを上高天、南側のを下高天と呼ばれてゐた。丁度葛城山の東の麓に當つてゐた。兩方とも役場や郵便局の呼び方では村になつてゐるが、その邊の人たちは上高天の方は町と呼び馴らしてゐた。又戸數からいつても、上高天はいつでも町制の布けるだけの資格があつたのだ。停車場からも上高天の方が近く、下高天へはその倍ほど行かねばならなかつた。

私が初めてこの村の名前を知つたのは、私の十歳頃のことだつた。その村に私の母方の遠い親戚があつたのである。それは若し私の母が若く後家になつて、その家に居候するやうなことにならなかつたなら、私なぞは名を聞く位で、一生交際せずに終つたかも知れないと思はれる程の遠い親戚なのだ。母がそこへ行つたのが今いふ私の十歳頃のことで、私が彼女を尋ねてその家へ行つたのは、それから又二三年後のことだつた。それが下高天村だつたのである。もつとも、一度行き始めてからは、毎年夏休毎に出かける習慣になつたのであるが、大阪のやうな都會から行つた少年の目には、たゞの寂しい、不便な田舎の村で、そこに母がゐるとはいふものの、周圍が大阪の伯父の家などと違つて馴染のない人たちばかりだつたので、少年の私はいつも豫定の日數より少なくゐて、切り上げて來るのが常だつた。

ところが、私が二十歳の時だつた。私はもはや中學校を卒業したのだが、前途の方針に迷ふことになつた。といふのは、それ迄世話になつてゐた伯父の家も、伯父に遲く生れた子供たちがそれ〴〵學校に行く頃になつて、彼の經濟として手一ぱいの暮しになつてゐたので、厄介者の私はそれ以上彼の家に居辛くなつてゐた。それまで父方の親類で私の中學時代の授業料とか、教科書とか、さういふ食費以外の學資を出してくれてゐたものがあつたが、それが又私の希望する學問が氣に入らないといふやうな關係から、はか〴〵しく相談に乘つてくれなかつたりして、いつの間にか東京の學校の入學期日が過ぎてしまつた。そのうちに私は脚氣を病んだりしたものだから、愈々大阪のやうな不健康地にゐてはよくないといふのと、今いつた伯父の家にいつ迄もだらしなく世話になつてゐることの心苦しさから、その下高天村の母がゐる家へ、病氣の養生を兼ねて行つたのが因緣だつた。

その下高天村の親戚といふのは紺屋を商賣にしてゐる家であつた。母はその家の裏の、六疊一棟の離家に住んでゐたので、私はその離家に彼女と同居することになつた。私が行つたのは秋の初めだつたが、中頃には健康をすつかり回復した。それと共に青春の惱みに悶え始めた。何故といつて、私はもつと學問をしたいと思ふのだが、その途をふさがれた形になつたからだ。ぐづ〳〵してゐると、退屈だらうから小學校の教員になつたらどうかと勸めるものがあつたり、早く嫁をもらつて母を安心させたらと勸めに來るものがあつたりするのだ。私は脚氣がなほつて、足が達者になると共に、ぢつと落着いてゐられなくなつて、無暗にそこらを歩き廻つた。大和の國の葛城郡は割合に景色のいい所だ。郡山や法隆寺の邊のやうな退屈な平野でもなく、又吉野寄りの土地のやうに山中でもなく、丁度その中間にある程度の景色の變化に富んでゐた。少し高いところに上つて見渡すと、海の中に島が浮かんでゐるやうに、手頃な高さの山や丘が鉢山の景色を見るやうに並んでゐる。それが天の香久山だとか、耳成山だとか、

畝傍山だとか、高天山だとか、大坂山脈附きの、大和繪に見るやうな可愛らしい山々である。それ等の可愛らしい山を保護するやうに、葛城山とか、金剛山とか、吉野山脈とか、多武の峰とか、大きな山々が國境を限つて聳えてゐる。それに林が多かつた。林は大方櫟の木だつたから、私が散歩を始めた頃は、見る限りの木々は紅葉してゐた。私は私の村から一番近い高天山へ最も多く上つた。高天山の上は外のどの山にも見られない大きな草原の廣場があつて、廣場の中央に池があり、池の周圍には櫻の木が植わつてゐた。櫻の木もみな紅葉してゐた。附近の人々はそこを高天ケ原と呼んで、それが昔の、あの神々が住んでゐた高天ケ原だといひ傳へてゐた。

初のうち私はこの高天ケ原を愛して、家を出ると竹の杖を振りながら、用ありげにこの山へ上つた。麓から頂の原まで四五町位あつたが、私は息を切らしながら何かなしに急いで上つた。高天ケ原の上には、時々小學生の一群に會ふ位で、滅多に人がゐなかつたので、私はそこで、誰に遠慮もなしに出鱈目の詩を吟じたり、身體を跳躍さしたりした。それから目の前に聳えてゐる葛城山に向つて大聲で呼びかけたり、遠くの青空の下に横たはつてゐる奈良の山に向つて體操したりした。

が、間もなく私は高天ケ原の散歩にも飽き、次第に出無精になつて、一日紺屋の離家に引込んでゐるやうなことが多くなつた。その部屋の東向きに一間の窓があつて、窓を開くと大和富士といふ山が眞正面に見えた。大和富士は多武の峰につゞいてゐる山で、秀麗な形をしてゐた。が、それも私の神經をいら立たせる種だつた。上り口の縁側は西向になつてゐて、それが中庭に面してゐた。中庭の向うは隣家の壁と屋根とで區切られてゐて、その上に蒲團を被せたやうに葛城山が迫つてゐた。庭には方々に紺を溜める壺が埋めてあつて、その上に染物の木綿がいつも運動會の旗のやうに張り廻してあつた。左手には納屋を直した機織小屋があつて、そこからは朝から晩まで筬の音が聞えて來た。その紺の匂も筬の音も何かなしに私の神經をいら立たせる種だつた。終には、私の不機嫌を恐れて、母が始終家を空けるやうになつた。彼女は始終のことで行き場所がなくなつたと見えて、或日私と高天ケ原の上でばつたり出會つて、雙方で驚いたことがあつた。私たちは互に心の中で高天ケ原の池を恐れた。そこで、互に機嫌を取り合ひながら、山を下りたことがあつた。

この紺屋の新しい親類が中戸竹藏の家なのである。私の家の母方と紺屋とが既に先にいつたやうな舊い、薄くなつた親戚であつたから、私の母も亦この紺屋の新しい親戚である中戸竹藏の家の存在は知らなかつた譯だ。この中戸の家は當時は下高天村で唯一の料理屋を商賣にしてゐた。若い頃、その主人の竹藏は放蕩に身を持ちくづして、博奕打の仲間にまで入つてゐたといふことで、弟の丈助と違つて身體の小さいのが特徴だつた。小柄で博奕にかけると鋭い巧さがあつたといふので、ちんこ竹」といふ綽名があつたさうだ。惡く評判する人の説に依ると、今の料理屋の元も「ちんこ竹」が博奕で儲けた金でこしらへたのだといふことであつた。もつとも、私が初にこの家と親しくなつたのは、竹藏の一人息子の丈太郎といふのが、私より四五歳下の少年だつたが、以前中學時分の夏休に來た頃から、時々附合つてゐたのが始まりだつた。彼は彼の家の商賣の關係から、周圍の者たちが無智なのに愛想を盡かして中學生である私に物珍しさと親しみを感じたのであらう。だから、以前、私がまだ

大阪の伯父の家にゐた頃にも、一二度大阪へ出たついでに、彼は訪ねて來たことがある位である。

今度私が高天村に暫く住むやうになつて、一層丈太郎と親しくなつたのは、先にいつたやうな關係の外に、その一年程前から私の母が彼の家に雇はれてゐる大勢の女中たちに賴まれて、彼女の習ひ覺えた三味線唄を彼女等に敎へに行つてゐたといふこともあつた。さういふ田舍の料理屋のことであるから、藝者ともつかず酌婦ともつかない、關西地方特有の『仲居』と呼ばれる女中たちが、竹藏の家には十人近くゐたやうであつた。當時十五六歳であつた丈太郎は、さういふ自分の家の料理屋の空氣を厭がつて、特に私に親しみを感じたのであらう。私の方からいふと、私は又彼と交際することをだいにして、大勢の若い女たちのゐる彼の家へ出かけて行く機會を得たことを喜んだといへるだらう。『ちんこ竹』の竹藏にして見ると、彼は又彼の見界から、彼の息子が私のやうな友達を持つことを德とするらしく、私が訪ねて行くと、彼はその昔を思ひ出させる凄味のある目を鬼の愛嬌のやうににこ〳〵させて、私の爲に彼の陣取つてゐる帳場の大きな長火鉢の傍に座を設けてくれた。彼は又一面は話好きな性質らしく、殊に私のやうな、彼のこれ迄の經歷には見たことのない種類の若者の話を聞くことが好きらしかつた。やつと假名文字が書けるか書けないかの敎養しかない男らしかつたが、六十歳近くなつて知識を愛する慾を覺えたといふやうなところがあつた。大きな長火鉢の中の銅壺には、いつもぐら〳〵沸いてゐる湯の中に、燗德利が二本づつ並んで浸つてゐた。それを奧の座敷の方から長い廊下を踏んで、受持々々の女中たちが間斷なしに取りに來た。餘り忙しくて、新しく浸けた德利の燗が間に合はないと、

「御免やす。ちよつと當らしとくなはれ、」といつて、髪油の匂をにほはせながら、女中たちは私と丈太郎とが、東京の話や、戰争の話や、外國の話や、歷史の話などをしてゐる間に割り込んで來て、安物の指輪を光らした、眞赤な太い手を火鉢の火にかざしに來た。彼女等の目には十五歳のぼんちの丈太郎も、二十歳の中學卒業生の私も同じに映つたに違ひない。すると、

「おい〳〵! お前つちはそつちの火鉢へあたれよ!」と主人の竹藏は、その平べつたい、それでゐて先の方の鋭くとがつた鼻を突き出しながら、何か汚ならしいものが近づいて來たやうに、彼女たちをたしなめた。

「そつちへ行つてえ、邪魔になる!」と少年の丈太郎も同じやうにいつた。

しかし、何といつても、料理屋の帳場部屋のことだつたから、そこへは色んな種類の人々が邪魔に現れた。表から入つて來て、上り框に腰かけたまゝで何か用談をして行くものや、上つて來て、私たちと同じ長火鉢の一方に坐つて、しばらく主人の竹藏と話し込んで行くものや、かと思ふと、奥の間の方からも、時々私の見知れぬ顏が出て來て、その長火鉢の傍に坐るものなどがあつた。さういふのは、いふ迄もなくその家の身内のものとか、親しい客とか、或は居候とかに違ひなかつた。紺屋の家などから思ふと、餘程人の出入りの激しい家だつた。私はそれ等の奥の間から出て來る人たちの中で、その家とどんな關係の人だか知らないうちに、顏を覺えてしまつたり、一寸した言葉を交したりするやうになつた人が少なくなかつた。その中で覺えてゐる一人は、五十近くに見える、妙に青ぶくれした顏の、太つた、無恰好な、ひどくむつつりした女だつた。丈太郎は彼女のことを土地の言葉で『をばはん』と呼んでゐた。後

で知つたのであるが、これが竹藏の弟の文助の先妻のお染といふ人だつた。

この文太郎の「をばはん」とどこか似た、矢張り色の生白い、むくんだ、生氣のない顏附をした二十歳位の娘がゐた。どこといつて票致も惡くないのだが、それでゐて娘らしい魅力の少しもない、むつつりした女だつた。どういふ譯か、私はこの娘が例の「をばはん」と母子だといふことをずつと後まで氣がつかなかつた。一つには注意を向けなかつたからでもあるだらう。即ち、文助の娘で、雪江といふ名だつた。

こんな風に擧げてゐると、この長火鉢の前で會つた人たちには限りがないから止めるが、その頃の或晩のことであつた。丁度その時は私の母も來合せてゐて、例の長火鉢を圍んでゐると、一人の見馴れない大きな體格の男が奥の間から出て來て、

「や、皆さん今晩は。」と不器用な挨拶をしながら、長火鉢の仲間に加はつた。すると、珍しくその男を傍から母が私に紹介した。珍しくといふのは、母に限らず、そんな田舍のことであるから、人々はいつの間にか物をいひ合ふやうになつても、改めて紹介されるなどといふことは滅多にないことだつた。

「こゝのをぢさん（竹藏のこと）の弟さんです。」と母は紹介していつた。「文助さん。」

これが私と文助との初對面の場面だつたが、この初對面の印象では、私は忽ち彼を輕蔑してしまつた。といふのは、兄の竹藏も「ちんこ竹」と綽名される位であるから、決して上品な顏立ではなく、といつて料理屋の亭主らしいいきな風もなく、まるで田舍の百姓親父のやうな風采だつたが、私は見馴れて居たのと、それでどこか鷹のやうな輕敏な感じがあつたので、相當の敬意を拂つてゐたが、文助の方は、彼と違つて岩のやうな頑丈な大男である切りで、現に居候であるといふ彼の境遇も私に一種の先入觀念を持たしたのだらうが、たゞ愚直な、お人好しらしい印象しか與へなかつた。頰骨と顋の骨とが尖つてゐるので、眞四角に見える大きな顏が、笑ふと善良らしい大きな齒の見えるのが唯一の愛嬌だつたが、目といひ、鼻の恰好といひ、口附といひ、どこか阿弗利加邊の土人の顏を思はせるものがあつた。それに輕く吃る癖がある爲か、無口であつた。

「はア。わしは竹藏の弟だす、どうぞ宜しく。」と彼はいつてお辭儀をした。さういつた切りで、後は人の話の聞手になつてゐるばかりで、熊のやうな武骨な手を火鉢の一端に遠慮ぶかさうに掛けてゐた。

後で、料理屋の私たちの離家に歸つてから、私は母にその晩初めて見た竹藏の弟の印象を述べると、

「まア田舍の人といふものはな、なり振にかまはないものだから。」と母は彼の爲に辯解するやうにいつた。「しかし、人は實にえゝ人やで、まア一寸あんなえゝ人といふのも珍しい。」と賞めてから、彼がこれ迄ずつと朝鮮の方へ行つてたこと、朝鮮では何度も何度も萬の金を儲けたことがあつたのだが、餘り人間が正直な爲に儲けた金をその度毎に失つてしまつて、今ではすつかり失敗して歸つて來たのだといふやうなことを傳へられた。が、それは話だけのことであるから、彼の風采だけを見た私には、とても彼がそんな成功をしたことがある人間とは信じられなかつた。私ばかりでなく、長火鉢に集まつて來る他の人たちも彼を餘り尊敬してゐないらしかつた。が、その時の母の話に、

「あの人もひよつとしたら東京へ行くというてはる。」といふのを聞いて、私は彼を急に見直すやうになつた。で、その次に、彼に會つた時、

「あなたも東京へお出でになるさうですが、い

つ頃…?」と私は丈助に尋ねた。
「うむ。いつ頃ちうても、あてはないんだすがな。」と彼はひどく恐縮したやうな體で、例の輕く吃る癖のある言葉で答へた。
「やつぱり何か商賣で?」と私が聞くと、
「うむ。商賣も商賣やが、元も子もなうしてしまうたさかいに、」と彼は元氣のない調子で、「しかし、わしはもう西の方は飽いたから、今度は東へ行きたいと思うてますね。」
「いつ頃行くつもりです?」と私は又同じことを聞いて見た。
「さあ、いつ行けるやら、まだ當がつきまへんね。それにわし見たいにかうする事なす事失敗すると、もう商賣の見當が皆目つかんわ。何ぞえ〻商賣おまへんやろか?」
私自身先の當が附かなくて迷つてゐた時なのに、他人の商賣など考へる餘裕はなかつたので、私は答へる術を知らなかつた、それにしても「こ〻にも東京へ行かうといふ人がある」といふ發見だけで、私は氣をよくした。さうなると、私には年下の丈太郎などより、この丈助の方が賴もしくもあり、味方でもあるやうな氣がして來た。考へて見ると、當時彼は既に五十歲を越してゐた筈なのだが、四十歲位にしか見えなかつた。或時、例の長火鉢の傍で、丈太郎と戰はしてゐた議論を、私は傍にゐた丈助に向けて、
「ねえ、さうですね?」と彼の意見を求めて見た。何でも楠正成は金剛山には關係が深いが、その隣の葛城山とは關係がないとか、高天ヶ原は昔神々が住んでゐた高天ヶ原とは違ふとか、さういふ議論だつたと思ふ。
すると、今迄私たちの議論をにこ〱笑ひながら聞いてゐた丈助は、急に歪んだ、當惑したやうな顏になつて、
「わしは、わしは知らん、わしには…」とひどくどぎまぎした體で、吃り吃りいつた。その眞に困つたらしい、恥かしさうな表情を見た時、私は初めて、うつかりしてゐたが、この人も竹藏同樣殆ど無學らしいことに氣がついた。氣がつくと、何といふうつかりしたことを話しかけたらうと、私の方で却つて極りの惡い思ひをした。それと共に、これはこんな無學な男はとても話にならない、と氣まづい思ひになりながら、私は一層彼を輕蔑した。それから思ふと、兄の竹藏の方は同じ無學は無學でも、さういふ彼等の所謂高尙な話に興味を持つてゐたので、書生の私などの話すことに、何事でも卽座に傾聽もし、又分らぬことは質問するといふ風があつた。が、高天ヶ原の話になると、彼は丈太郎同樣頑固だつた。「そんなこというても、お前はん、（君といふ程の意味）ちやんと高天ヶ原といふ名があるやおまへんか?」と彼は主張した。「すぐ傍に神武さんの御陵かてあるのやし、何せよ、大和は日本の國の始まりやといふことを聞いてるがな。…」大和が國の始まりだといふのは彼の口癖で、この信念はどうしても顚覆されなかつた、大和が國の始まりであることと、關西が上國で、關東は下國だといふことと。——下國といふと、時候が惡く、人間の氣性が荒く、土地が瘦せてゐて、その他あらゆる點で劣つた國を意味するのだつた。
が、その他の事は、彼は大抵私のいふことに同感した。例へば明らかに彼の腑に落ちぬやうな、社會主義の話などを丈太郎に聞かれて、私がそれを説明してゐると、
「そや、そや、」と丈太郎がまだ合點しかねてゐるうちに、橫合から彼が言葉を挾んで、「ふうむ。つまり何やな、よう考へるとそれもやつぱり國の爲やでな。國の爲なら、ちつと位警察にねらまれてもやり通さうちふんやな。ふうむ。」といつた風なのである。

その年、私はこの高天村で年を越して、數へ年二十歳の春を迎へたのである。私の健康はすつかり回復したが、將來の方針に就いてはまだ少しも見當がついてゐなかつた。しかし、私は何よりももう高天村に飽き飽きしてゐたが、私の母はさうでなかつた。彼女は初のうちこそ私と一所にそんな田舍に埋もれることを望んでゐなかつたらしかつたが、その頃には彼女も亦私がそこで小學校の敎員にでもなり、彼女は今のまゝに『ちんと竹』の家の仲居たちに三味線唄を敎へる仕事をして行つたなら、親子が人の厄介にならず細々と暮して行けるだらうと考へたらしかつた。彼女ははつきり口に出して私にさうはいはなかつたが、私は彼女のさういふ氣持を察しると、一層いら〳〵して來た。その時分の或日、大阪の伯父の家にゐる祖母が私たちの高天村へやつて來たいといひ出したことがあつた。それは私が高天村を嫌つて、用事にかこつけては大阪へ行き行きしてゐるうちに、或時私が大阪から高天村へ歸る時に、祖母が連れて行つてほしいといひ出したことから起つたのである。彼女にして見ると、大阪の家は自分の長男の家に外ならなかつたが、よくある姑と嫁の關係で、息子の嫁と一所に暮すよりは、娘と孫と一所に暮したいといふのが望みだつた。殊に彼女の孫である私は、私が生れた時から中學を出る迄、彼女が育てて來たものである。つまり早く後家になつた不幸な娘と、早く父を失つた不幸な孫とが、どんな田舍でも、どんな細々した烟でも上げること、そこで彼女が死水をとつて貰ひたいといふことが、七十幾歳になる彼女の最後の希望だつたのである。それで、私が一月の初に大阪へ出た機會に、彼女は今度私が高天へ歸る時、是非一所に連れて行つてくれといひ出したのだつた。私が不承々々に承諾すると、彼女は喜んで、早速引越しのやうな騷ぎを始めた。私のつもりでは、到底まだ母と二人で高天村に永久の居を定める考はなかつたのだから、祖母が遊びに來るにしても、せい〳〵一週間か二週間位の豫定であつてほしかつたのだつた。ところが、彼女が高天行の支度をしてゐるのを見ると、一箇の柳行李に一ぱいと、二箇の信玄袋に一ぱいと、その中に何を詰め込んだかといふと、冬の着物はいふ迄もなく夏の着物から、茶碗から、その他急須とか、扇子とか、その他彼女自身の愛する持物と、彼女が娘や孫にやりたいと思ふ一切のものを荷造りしたので、私は驚いたといふよりも不機嫌になつてしまつた。

おまけに丁度出發の日の間際になつて、私の中學時代の友人が遊びに來たものだから、豫定の汽車の時間より二時間ばかり遲れてしまつたので、今度は祖母が不機嫌になり、漸く友人が歸つてしまふと、私が不機嫌になり、今日は止めよう、いや、何が何でも出かけようと爭つた末に、私たちはやつと出發することになつた。港町から高天までは汽車の時間が三時間ほどかゝるので、正月の短い日のことだつたから、高天の驛に着いた時はもう日が暮れかゝつてゐた。それが一月二月によくある、意地惡く底冷えのする寒い日で、停車場の出口を一足踏み出すと葛城下ろしの風が霙を孕んで、氷のやうな冷たさで吹きつけて來るので、一分間と立つてゐられない有樣だつた。迎へに來てゐた母と、車をやつとのことで三臺揃へて、五十町の道を下高天に向つて走るのだが、時々車屋が林の蔭や、軒の下に避難して、少しの風の絶え間を見計つて進む位にしなければならなかつたので、いつもの三倍もの時間がかゝつた。だから、初に村の入口に近い『ちんと竹』の家で一服するつもりで、そこで車を下りると、僅それから二三町のところだが、私たちの住

居である紺屋の家まで行くことが出來なくなつてしまつた。が、深切な竹藏は私たちの到着を歡迎してくれて、元より商賣柄空いてゐる部屋に不自由がなかつたので、早速離れの座敷に案内してくれて、祖母のために置炬燵をし、手のもの酒肴を見る見るうちに御馳走してくれた。祖母は晝間孫の私が辛く當つたことも、荒天の旅に惱んだことなども忘れて、何よりも日頃憧れてゐた高天村に着いたことを喜んでゐる風で、今更のやうに『ちんこ竹』の家の離れの一間で、一つの炬燵を圍んでゐる孫の私と娘の母を見廻しながら、彼女のたしなみである晩酌を樂んでゐる風だつた。が、これが私たちの最後の晩餐となつたのだつた。私は後で考へて、その時の祖母の嬉しさうな顏に、どこか不斷の壯健と氣丈さに似ず、底に力のない、影の薄さがあるやうに思はれた。だから、別れる時、何か後髮を引かれるやうな思ひをしながら、その晩だけそこに母と祖母とを泊めて貰ふことにして、私だけ紺屋の離れに歸ることにした。母もその意見で、祖母もそれに同意したのだつた。ところが、愈々私が一人歸るとなると、祖母は急に盃を置いて、「私も一所に行きたい、」といひ出した。が、夜も更けてゐたし、雪も風も少しも衰へてゐなかつたので、しかし明日はこの分なら乾度天氣になるだらうから、改めて迎へに來ようと約束して私たちは別れた。それでも祖母は一二度言葉を返すので、私は彼女の聞分けのないことをたしなめて、後を母に任して獨り紺屋の離れに歸つたのである。子供のやうになつた祖母の心持では、一刻も早く私と母の住んでゐる部屋を見たいと思つたのだらう、それとも今夜見ておかなければ、永久に……と彼女の靈感が感じたのだらうか？ そして、彼女は到頭その思ひを遂げなかつたのだつた。その晩――といふよりは、翌朝の二時頃急に身體が惡くなつて、それから二日目の明け方、假りの宿であつたその『ちんこ竹』の家の離家から墓へ行くことになつたのである。七十七歳だつた。『ちんこ竹』の家は先にいつたやうに料理屋だつたから、そこの離れた座敷であるとはいふものの、始終三味線や唄の聲が祖母の病床に聞えて來た。それは大方私の母が敎へた唄に違ひなかつた。佛になつた祖母の枕許では、佛とは　く他人である竹藏や、丈助や、丈太郎や、竹藏の妻や、丈助の妻などがお通夜をしてくれた。そして、翌々日、大阪から伯父の來るのを待つて、私と伯父と、手傳ひに丈助と車屋の熊之丞（車屋ではあるが、士族だといふので、立派な八字髭を生やしてゐる男だつた。と四人で、高天山の東の麓にある村の墓地へと祖母の柩を運んで行つた。

墓地は街道から一町ばかり引込んだところにあるのだが、最早や高天山の一部に屬してゐるので、少し高みになつてゐた。無論、こゝは代々の高天村の人々の墓地であるから、他國者である祖母の墓には友達がなかつた。墓地の一番東の隅に僅の土地を得て、彼女は燒かずに埋められた。墓石は伯父の計ひで、直に村の石屋に賴んで、半月ほど後に建てられた。それは儉約家の彼の工夫で、臺石に大きな石を使ふ代りに、小石をセメントで石垣の山に造つて、その上に石の墓標を立てたものだつた。だから、金のかゝつてゐない割合に風變りで、脊が高く、而も墓地の一番はづれにあつたので、街道を通りながらも直目立つた。街道から見ると、祖母の墓は後に高天山を背負ひ、その上に葛城山を背負つて見えた。

だが、青春の希望の前にはどんな悲みも力を失ふもので、祖母が死んでから一月程後、例の中學時代の學資を出してくれてゐた父方の親類との相談が、一寸したことからばた／＼と纏

つたものだから、私はいよ〳〵四月、希望の緑の衣服を飾つて、東京へ遊學することに定まつたのである。さうすると、高天村はまた私に愉快な景色を展開した。木々は去年の紅葉の代りに緑の新芽で裝はれ出した。山の頂の高天ヶ原の池の水も陽氣に綾んで、ぷく〳〵と泡立ち始め、池のまはりの櫻の木が紅い芽を含み出した。遠く奈良の山が紫色に霞んで見える日があつた。紺屋の紺の匂も篠の音も悉く私の胸に希望をそゝつた。

或晩、私が近頃俄に上機嫌になつた氣で、竹藏の長火鉢の傍に、誰も傍にゐなくても、獨り火箸で口吟む歌の拍子をとるやうな氣持で、頭をうつとりさせて坐つてゐると、

「東京へお出でになるさうですな？」と突然いつの間にか傍に來てゐた男から話しかけられた。一二度同じ長火鉢の傍で見かけたやうな氣もするし、全く初めて見る男のやうな氣もしたが、餘り馴れ馴れしい口調なのと、その邊では珍しい自信のある東京辯だつたのと、色の白い、髪の毛を醫者の代診のやうに分けた、田舍には珍しい風采の青年だつたので、多少敬意を感じながら、

「はア、」と私は改まつた言葉で答へた。心の中で、一體この男は何者だらうと考へながら、しかし兎に角相手に私が東京へ行くことを知られてゐるといふ得意な氣持もあつて、「まだはつきり日は定つてゐませんが、一度大阪へ行つて、そして大阪から立つつもりです。」

すると、相手の男は先輩らしい口調で、東京はどこか親類にでも行くつもりかとか、下宿するつもりかとか、下宿ならどこがいゝとか、それも學校に依つてだが、學校はどこへ入るつもりかとか、そんなことをいろ〳〵自問自答しながら、彼自身どの位東京に住んでゐたとか、どの邊が住みいゝとか、どの邊が賑かだとか、頻りに東京の通を振り廻し出した。今でいふと、活辯の下廻りのやうな風采の、一口にいつて餘り感じのいゝ男ではなかつたが、當時の私にとつては、彼も亦東京の片破れに違ひなかつたから、努めて彼の話に調子を合はして、彼の東京通を十分に發揮させた。

何故そんな男の話を持出したかといふと、この男が丈助の一人娘の雪江に私生兒を生ました男だといふことを、後で誰かから聞いたからである。一時は籍を入れない迄も、夫婦暮しをしてゐたのか、單に一寸した關係があつただけなのか、詳しいことは聞かなかつたが、それにしても、丈助があんなに心をかけてゐる孫の秀夫が生れたのは、年をくつて見ると、私がこの男と東京の話をした時分のことに違ひない。何を職業にしてゐた男か、今だに知らないが、兎に角、その時私はその男に東京の略圖を書いてもらつたことを覺えてゐる。

そして、四月、私は高天村を出發する時、母と一所に紺屋の離家を立つて、ちんこ竹の家に寄つた。竹藏は長火鉢の前から立つて、入口まで見送つてくれ、丈助は丈太郎と一所に村はづれまで見送つてくれた。別れる時、丈助は「わしも、何とかして、今年はあかんかも知れんけど、乾度東京へ行くつもりやさかい、頼みまつせ、無事に行つといなはれ、」といつた。

「東京で待つてます、」と私は元氣よく答へた。

それから母と二人になると、停車場へは廻り道になつたが、私たちは祖母の墓に參つた。私が祖母の墓に參つたのはそれが二度目で、そしてそれ以來私は參つたことがないのである。晴れた日で、途に櫻があちこち咲いてゐた。墓地にも二三本の花があつた。私はもう祖母の死を悲んでゐる餘裕がなかつた。墓の前で小學生のやうな恰好でお辭儀をした切りで、すぐ四邊を眺めながら、

「いゝ天氣ですな、」と母にいつた。
「さうやな。もう山の上も花盛りやといふことや、」と母が悲しさうな目をしていつた。
　そして、私は高天驛まで母に送られて、大阪に向つたのであるが、それは今から十六年前のことである。長い間私は祖母の墓のことを忘れてゐた。今、丈助からその墓のことをいひ出されると、出來たばかりの頃は立派に見えたが、成程、あの思ひつきの石とセメントで積み上げた臺が、よくも十年以上保つたものだと思はれた。丈助の傳言に、どこといふことなくその積石が減つて來たと見えて、上の墓石が傾いて來たといはれた時、私は急に不幸な祖母の一生を思ひ出した。その墓を建てた伯父も、それから四五年後に墓に行つた。今は私があの墓を建て直すか、修繕すべき時だ、と私は淺草の『丸萬』で、丈助の所謂大阪の茶碗蒸を食べながら考へた。すると、不覺にも茶碗蒸の中が潤んで見えて來た。私はふと高天村へ行つて見たくなつたので、
「中戸さん、あなたが來月あちらへお出でになる時、私もお供したいと思ひます、」といふと、
「あんた、一所に行つてくれなはるか？」と丈助は丈助で、感激した調子で叫んだ。「ほんまか、ほんまにあんたも行きなはるか？」——
「えゝ、行きます、何とか都合して行きます、」と私は答へたのだつた。——
　丈助が高天村から出て來たのは、後れ後れて、私が東京に來てから三年程後のことだつた。母から手紙が來て、「丈助さんがそちらに行かれたから、お前の下宿に訪ねて行かれるだらう、丈助さんにお前のところへ屆けるものを、お賴みしておいた。丈助さんのそちらの所はまだ定らないやうだが、定つたらお前の方からも一度訪ねてお上げ。あの人はいゝ人だから、」といふ手紙を私が讀んでゐる時に、階下から小僧が上つて來て、
「中戸さんといふ方がお見えになつてます、」と知らして來たのである。
　小僧といふのは私が當時間借りしてゐた子供部屋の小僧で、私はそこの二階を借りて、自炊して暮してゐたのだつた。當時私の生活は多くの初年期を通過した文科の學生がさうであるやうに、大分亂れてぐらついてゐた。その證據に、私の學校は牛込にあつたのに、その間借りしてゐる家は淺草であつた。淺草であらうが、深川であらうが、春秋の試驗さへ受けて通ればいゝといふ考で、私は每日學校の門に背中を向けて、戀と文學に思ひを凝らしてゐたのだ。
　そこへ、中戸丈助が母からのことづかり物だといふ、羊羹とネルの着物の入つた風呂敷包を持つて訪ねて來たのである。
「到頭來ましたね。で、お一人？　お住居は？」と私はもうすつかり東京に馴れ切つた書生の態度で聞いた。
「いゝや、足手まとひをみんな連れて來ましてん、」と丈助は昔から同じ一枚の着物を着てゐるかと思はれるやうな、變らない恰好で、鼻をくん〳〵鳴らしながら、「何しよ、さういつ迄も兄貴のとこで居候してる譯に行かんさかいな。家内と、娘と、孫と、わしと四人や。今はちよつと知り合ひの家に泊めてもらうてるんやが、わしもあんたみたいなこんな二階でも借りたいな。」
「それで商賣はどういふことを始めるつもりなんです？」と私は生意氣に机に片肱を突きながら聞いて見た。「一體、あなたはこれ迄どういふ商賣の經驗があるんです？」
「さうやな、」中戸は愚鈍らしい顏を傾けて、「商賣といふ商賣は大抵したやうな氣がしますわ。わしは日露戰爭の後を追ひ驅けて朝鮮へ行つたのやさかいな。日本人の入るものなら何

でも賣つて見たよ。油でも、米でも、着物の切でも、道具でも、何ちふことはないな、こゝにある、」といつて、私が前の晩に買つて來て食べ殘した甘栗が前に出してあつたのを指さして、「この支那栗もうんと仕入れたことがおますわ。その時は景氣のえゝ時でな、あんまりたんと仕入れたもんやから、入れ場に困つて、軍隊の倉を借りて入れといたところがな、二ケ月ほどして取りに行つたら、袋がそのまゝで、中がみな空つぽの皮だけになつとをるんや。兵隊がみんな食ひよつてん。えらい目に遭うたな、あの時は……」

「それにしても、何か商賣の見當がないんですか？」

「それが皆目ないのんや。東京ちふとこが初めてやからな、見當がつかんのや、」と丈助は困つた顏をして、「わし、今度兄貴から二百五十圓もろて來たんや、今は二百十圓餘りがあるがな、ぐづ／＼してるとこんな金直なうなつてしまひよる。……」先にもいつたやうに、この男は二百五十圓持つてゐる時も、五萬圓持つてゐる時も、平氣でありのまゝにいふ男だつた。その時階下から、がら／＼いふミシンの音が聞えて來たのを、彼はふと耳を止めて、「こゝの階下の商賣は何してはんね、何商賣だんね？」と尋ねた。

「子供靴ですよ、」と私はいつた。心の中で、成程、かういふ商賣をする者があるのかと、初めて引越して來た時妙に考へたことがあつたが、成程、中戸丈助などが眞似をするこれは商賣に違ひない、これなら二百圓の元でも出來ないことはないだらうと思つたので、「さうだ、かういふ商賣がいゝかも知れませんな、」と即座にいつて見た。そして、市内の洋服屋から羅紗の裁ち屑の切を買ひ集めて來て、それを子供靴の型に切つて、ミシンでこしらへてゐる階下の商賣を、自分の知つてゐる限りの知識で、出來るだけ易しさうに、そして如何にも儲かりさうに話したところが、それが思ひがけずとん／＼拍子に進んで、

「いや、それは何でもないんです。現に僕の學校は牛込なんです、ちよつと譯があつて、こんな學校から離れたところに下宿してるんですが、もうぼつ／＼學校の試驗も始まりますし、それに自炊には懲り懲りしてるんですから。それで近頃は每日近所の飯屋へ飯を食ひに行つてるんですが、それぢや不經濟だから、學校の近くに下宿しようと思つてたところなんです、」と私はその場で頭に浮ぶまゝのことをいつて、彼に自分の現在借りてゐる部屋を[illegible]ずに提供する氣になつた。

「いや、それでも、それではあんまり氣の毒や、それではわしが濟まん、又あんたのおばはんにも濟まん、」と遠慮家の丈助は殆ど後ずさりせんばかりに辭退するのだつた。彼は本當に後ずさりして、いつの間にか梯子段の下り口の近くまで下つて行つて、逃げて歸りさうになつた。

しかし、私は熱心に彼を說いて、それが私自身に何よりも都合がいゝことと、現に牛込にゐる友達から、その友達のゐる下宿に適當な間が空いてゐるといふ知らせを今先受取つたばかりだとか、突然こゝを空けると借り手が見つかる迄の間代を拂はねばならぬ約束だとか、口から出任せの譃と本當をまぜこぜにして、どんな遠慮家の彼をものつぴきならぬやうに口說き落した。もつとも、それは丈助にしても內心は望んでゐる所に違ひなかつた。彼は後になつてその時のことを回想して、「わしはあんたのあの時の恩を忘れへん、」と彼獨得の偽りのない言葉でいつた位である。私は無論深切心もないではなかつたが、半分は氣まぐれでしたことを、そんなに正直な氣持で感謝されて恐縮したもの

だつた。「あんたがあの時藥を摑ましてくれたやうなもんや。」から彼は眞心をこめていふのだつた。

兎に角、そんな風にして私は私の部屋を丈助の一家に讓つて、自分は牛込の友人のゐる下宿に越したのであるが、無論、それで學校の近くに行つたとは云ふものの、學校の門に背を向けてゐたことは、淺草時代と少しも變りはなかつた。その間に、丈助は一二度私を下宿に訪ねて來てくれたが、私の方からは一度も彼を見舞つたことはなかつた。私にして見ると、彼のやうな風采の男に訪ねて來られることは、友達や下宿の女中の手前迷惑であつたが、都合のいゝことには遠慮家の彼は訪ねて來ても、いつでも玄關まで來るだけで、決して部屋まで上らなかつたので、私は友達に尋ねられた時、彼のことを鄕里の自分の家の小作人か家來かのやうに吹聽しておいた。彼はいつの時でも、大きな風呂敷包を背負つてゐた。彼の妻と娘が階下の家の子供靴の職人になり、彼はその家の材料の買出し掛りと製品の賣廣め掛りになつてゐるらしかつた。彼は或時娘の雪江がこしらへたのだといつて、羅紗の切でこしらへたスリッパを私に持つて來てくれたこともあつた。が、終には彼がいつ來ても、私が留守だつたり、又留守を使つたりしたので、それに彼の仕事の上にもいろ／＼忙しいことが起つたりしたので、そのうち私たちは暫く往來が絶えた形になつた。

ところが、その間に又私が高天村と接近するやうな事件が起つたのである。それは例の『ちんこ竹』の家が商賣換へをしたことから始まつたといふことが出來る。元來、竹藏はその平べつたいくせに、先の方が剃刀のやうにとがつてゐる鼻に特長があるやうに、目先のきく、思ひ切りのいゝ性質と見えて、その證據に私などがまだ知らなかつた頃博奕打として可成り活躍してゐたらしい彼が、料理屋になつてからは一切博奕を止めてしまつたのでも察しられるが、料理屋であつた彼が今度は自分の後取りの丈太郎に、全く堅氣な商賣をさせたいと決心したのである。で、弟の丈助の一家が東京に行つたのを機會に、彼は料理屋を止めて、金物と瀨戸物を主にした、田舍によくある萬屋に商賣換をしたのであつた。もつとも、そのことが私に直接の關係がある譯ではないのだが、その『ちんこ竹』の家が商賣換をして半年程後に、私の母が高天から上高天へ引越した事が私に一つの事件を持つて來たのである。それは『ちんこ竹』の商賣換と共に、そこにゐた仲居の大半が上高天の或料理屋に住みかへたので、彼等はこれ迄習つてゐた三味線のつゞきを習ふために、一週間に一二度私の母を車で上高天へ迎へに寄越してゐたところが、そこで三味線唄の弟子が次第に增えたものだから、それ等の弟子たちが勸めるまゝに、元々呑氣な氣性の私の母は、どちらで住むのも同じ、東京の大學へ行つてゐる私の卒業も最早や一年餘り先に見えてゐることだから、それ迄退屈しのぎに上高天で住んで見るのもよからうと考へて、住み馴れた下高天の紺屋の離れから越して行つたのである。

上高天は下高天の五倍もある大きな村、といふよりは不思議な繁華な町で、高天驛から廣い道に依つて通じてゐた。私たちが下高天へ行くには、この道を通つて、上高天の北と東の端を通り拔けると、その町外れから五六町行つた所で、急に、やつと車が通れる程の細い道に曲つて、その細い道が高天山の麓に沿うたり、又麓から離れたりして、三十町ばかり行つたところで、漸く下高天村の入口に着くのである。そこからは最早や振り返つても、高天山に遮られ

て、上高天の町は見えない。だから、私はそんなにしば／＼下高天には行つたが、上高天は停車場からの途で、それも大抵車の上から、その町の、西洋流にいふと、いはゞ城郭の近くをいつでも素通りしただけだつた。先にもいつたやうに、上高天は表向きは村と呼ばれてゐたが、その設備からいつても、人口からいつても可成り大きな町に匹敵してゐた。

或日私は牛込の下宿屋で、母からこの上高天に引越したといふ知らせの手紙を讀んだ。母も私に似てずぼらな性質で、その手紙の樣子に依ると、既に二三ヶ月前に越してゐたらしいのだ。そして手紙の中に、突然、今ゐる家にきさ子さんといふ娘さんがゐて、その人が大變お前に親みを持ち、且つ深切にしてくれる、その人がお前の話を聞いて大變お前に會ひたがつてゐる、そして又その人は小說が好きだから、若しそちらに入らない小說の本があつたら送つて上げてほしい。――かういふ文句があつた。といふよりは、それが母の手紙の殆ど全部といつてい丶程で、引越しのことはその次手に知らして來たやうなものだつた。だから、母がそのきさ子とそんなに親しくなる迄の月日を勘定して見て、手紙の文句を讀み返して見ると、彼女はそれより二三ヶ月前に上高天に行つたらしいと私に判斷された譯である。

それは私が二十三歲の年だつた。私は若かつたが、母のこの手紙には妙に動かされなかつた。といふのは私はそんな正體の知れた高天村の娘よりも、正體の知れない都會と都會の女を憧憬してゐた。現に高天村の娘といへば、下高天の紺屋の家にも一人の娘があつた、そしてその娘の多くの友達の娘たちをも私は見た。彼女等は私のゐた離れの前の庭を隔てた機織小屋で朝から晩まで機を織つてゐたが、晝飯の休とか、夜業の前の休には、その紺壺を所々に埋めた庭を飛び飛びに廻つて私の緣側へ遊びに來たり、又私が緣側に蹲んで葛城山と睨めつこをしてゐると、たまに着物を着更へた祭の日など、如何にも見てくれがしに庭の紺壺と紺壺の間で鬼ごつこなどして見せてくれたものである。私は頭からきさ子もさういふ娘の一人に違ひないと思つた。だから、私は母の手紙には返事さへ出すのを忘れてしまつた。それが多分十一月時分だつたと思ふ。間もなく學校の冬休が來るので、母からまた手紙が來て、この休がお前の學生の最後の休であるから、――と彼女がそんなことをいつて來たのは初めてだつた、無頓着な人で、これ迄なら休になつても別に來いとも來るなともいつて來たことがないのに、その時に限つてそんな手紙をよこしたのは、後で考へて見るときさ子の入れ智慧だつたらしい、――是非今度は大阪へ歸る前に一週間位の豫定でこちらへ寄つてくれ、きさ子さんも待つてゐる、就いては、歸る前に此間賴んだきさ子さんの讀むやうな小說を二三冊送つて上げてくれ、きさ子さんは大變私によくしてくれるから、どうか本を忘れずに送つてほしい、と母にしては珍しく長文の手紙なのである。彼女はきさ子を餘程馴染み深い人物のやうに書いてゐるが、私には先にもいつたやうに全く未知の人物なのだ。きさ子とは誰の子か、幾つになるか、何をしてゐる女なのか、そんなことは母は少しも書いてゐないのである。

その手紙にも返事が後れて、愈々十二月の末に、私は急に大阪の方へ行く用事が出來たので、その次手に母のところへ寄つて見ようと思つて、あわてて町の古本屋で二三冊の新しさうな小說本を買つて、それを新しい住所の母に宛てて郵便で送ると共に、その翌日の晩、久しぶりで、名古屋で乘り換へて大和へ通じてゐる鐵道に乘つた。母が停車場迄迎へに來てくれてゐ

た。そこで私は、彼女の用意してくれてあつた車に乘つたのであるが、これ迄下高天に行く時にしば〱通つた道が、上高天の町に入つたところで、車が急に右に曲つて、私が初めて見る上高天の中心に向つた時は、私は物珍しい氣と共に、何か變つたものが私を待つてゐるやうな氣がした。それにこの町は『ちんこ竹』などのいふところに依ると、日本で最も古い町だといふだけあつて、外觀だけからいつても、なる程奇妙な構造の町だつた。先づ、町の中心に小さな山があつて、その上が公園になつてゐることだつた。そして、その名を高天公園と呼ぶ通り、その恰好が本物の高天山に似てゐるばかりでなく、山の上の臺に池があることまで、高天山をそつくり寫したやうな體裁なのである。違つてゐるのは、その池の岸に、寺とも社ともつかない立派な新築の、天理教の會堂が立つてゐることだ。この高天公園から四方を眺めると、殆ど同じ程の距離の東西南北の隅に、塔のやうな恰好をした、鐘樓を持つた四つの寺が目につくことだ。そして、この四つの寺はそれ〱佛教の寺らしいのである。それから、公園のすぐ目の下には、嘗て盛んだつたが、今は廢止になつて、何かの倉になつてゐるといふ取引所の建物と、町の東端に、この方のは日に增し盛んになつて行くといふ、紡績會社の赤煉瓦の建物とが妙に異彩を放つて眺められた。

が、それ等の景色については無論私は後で知つたのであるが、その時私が母に連れられて着いたのは、大阪あたりで見るやうな、表に門の附いてゐる新築の長屋建の路次の入口だつた。路次の中は片側はどこかの家の塀になつてゐて、反對の側に、新しい、まだ木の香のするやうな格子造りの二階建の五軒長屋が並んでゐた。車がその路次の入口に止まると、先に下りた母は、「ちよつと待つて、」と私にいつて、路次の左隣の、これも新築の、大きな料理屋兼旅館『天の家』といふ看板の出てゐる家へ入つて行つた。すると、間もなく中から二三人の仲居らしい女が出て來て、私の車の傍に寄つて來ると、「さあ、こちらへ、」といつて、私の手荷物などを下げながら、路次の中へ案內して行つた。そして、とつつきの家の中へ荷物を運び入れながら、「直お母はんお見えになります、どうぞ入つとくれやす、」といつた。中に「しばらく」といつて挨拶するものがあるので、見ると、うろ覺えだが、たしか『ちんこ竹』の家にゐた女中らしかつた。

この路次の中のとつつきの家が、私の母が下高天の紺屋の離れから越して行つた家らしかつた。上つて見ると、見覺えのある母の持物が二間切りしかない部屋に落着いた顏して飾られてあつた。私が紺屋の離れで每日癇癪を起して、その緣を煙管で叩いた長火鉢も置いてあつた。死んだ祖母が大阪から持つて來た古い鐵瓶がそれに掛つてゐるのなども私の目を引いた。

やがて、表の方から後れて母が入つて來て、說明していふのには、この二階建の家の、階下の間を彼女が借りてゐて、二階にはきさ子が住んでゐるとのことであつた。が、その時きさ子が留守だつた爲か、手紙の中であんなに繰返した名でありながら、彼女はさういつた切りで、きさ子に就いてはそれ以上何にもいはないで、「こつちへ來て、一寸こちらの家の御主人たちに挨拶しておくれ、」といひながら、彼女はまた表に出て、先の路次を出たところの『天の家』といふ家へ私を案內して行つた。私は彼女の後について行つて、玄關先で一寸挨拶位すればいゝのだらうと思つてゐると、彼女は「こつちへお上り、」といつて、玄關の次の茶の間らしい所へ入つた。それは丁度『ちんこ竹』の家の帳場の間に當るやうなところらしかつた。

矢張り大きな銅壺の埋まつてゐる長火鉢があつて、その傍に竹藪のやうな男の代りに、三十歳と二十歳位の、美しい女が二人坐つてゐたので、私は忽ち氣後れを感じた。すると、向うから、

「まア、ようお出でやした。なる程え丶息子はんやな、」と年上の、丸髷に結つた女が私を迎へていつた。

「こちらの御主人、」と母はその女を私に紹介してから、もう一人の女をさして、「こちらがきさ子はん。」

その言葉の終らないうちに、

「あら、あて（私の意味）極りが惡いわ、」といふなり、きさ子は大仰な身振りで袂を上げて顏を隱した。隱す前にちらとその顏を見た印象に依ると、私はきさ子が思ひがけなかつた美人で、而もたゞの田舍娘でもなく、といつて料理屋女中のやうな種類の女でもなく、私の出現と共にびつくりして袂で顏を隱した樣子など、僞りなく内氣な、おぼこ娘らしいのを知ると、その瞬間、私はてれながらも急に彼女に興味を感じ出した。髮の毛の濃くてたつぷりした質らしく、それを鬘のやうにきちんとした、一本の後れ毛もないやうな形に結つてゐるのは、最早や東京あたりでは好まれない形だつたが、それも私には、彼女の端然として人形めいた容貌に適はしく思はれた。顏立は、後になつて考へると、大和の國の典型的な形の一つで、どちらかといふと稍々角張つてゐたが、兎に角高天あたりの田舍では珍しい美人に違ひなかつた。

その時、私がどぎまぎした氣持を辛うじて抑へながら挨拶をすると、

「まア、あて恥かしいわ、」ときさ子はも一度同じやうなことをいつて、あわたゞしく立上つたかと思ふと、奥の間の方へばた〳〵と逃げて行つてしまつた。

「まあ、をかしい子やな、」と丸髷の女が取りなすやうに、しかしよくあることらしく、別に驚いた調子でなくいつた。

この髷の女がこの家の主人で、おつるといつて、きさ子の長姉に當るものだといふことを後で知つた。顏立はきさ子と違つて形はくづれてゐるが、意氣なところのある、氣性も傳法肌であるらしい女と見えた。顏の美しい割にしやがれた、九官鳥のやうな聲が瑾だつた。私はその翌日、矢張り隣の路次の一軒に住んでゐるといふ、きさ子の中の姉に當る姉妹にも母から紹介された。この中の姉が若しかすると、姉妹中で最も缺點のない美人だといへたかも知れない。彼女は請負師の妻とかで、私が初めて會つた時三歳ばかりの子を抱いてゐた。兎に角、この家の三姉妹は恐らく高天で評判の美人たちに違ひなかつた。

私は間もなく母と一人の女中の案内で、その家の二階の一番奥の間らしい、床の間も何もない、がらんとした八疊の部屋に通された。

「この部屋をお前に借りておいたの。あんまり綺麗やないけど、こんな家だから、こゝが一番靜かでえゝと思つて……」と母がいつた。

「あなたの借りて居る部屋は？」と私は不思議でもあるし、いくら靜かでもそんな料理屋の一間などに居るよりは、母の借りてゐる部屋に居たいと思つたので、かう聞くと、

「あそこでもえゝのやけど、二階へ出入りする人が通るし、來る時間がまち〳〵やさかい、三味線の稽古で始終喧ましいし。それに食べ物を運ぶのにもこゝの方が都合がえゝと思つたものだから、」と彼女は辯解するやうにいつた。「もつとも、こゝもね、」と彼女は前の障子を開けて見せて、「この前の物干から隣へ行け行けにはなつてるの。つまりこの隣がきさ子はんの家で、

その階下が私の借りてゐるところや。」
　さういはれても、何か、しかし、私には強ひて問ひたゞさうとは思はなかつたが、何か、解し難いやうなものが感じられて、その當てがはれた部屋が不滿だつたが、長く居るつもりはなかつたので、默つてゐた。私は母がこの家の女中たちに三味線を敎へる位のことはいゝが、それ以上餘りこんな家に接近してくれない方がいゝといふ氣がしたのだ。それにしても、きさ子！　きさ子のことを考へると、母の心配など私の念頭からなくなつてしまふのであつた。
　その晩、きさ子は私の母の袖を引張りながら、それで私の部屋に入ると母の蔭に隠れるやうに坐つて、私のところへ遊びに來た。彼女は少しづつ馴れて來ると、ぼつり〳〵と國言葉で、自分はかういふ商賣が嫌ひなので、かういふ商賣のものと見られることを好かないとか、だからあなたのお母さんのやうな品のいゝ方にお友達になつて貰つて嬉しいとか、大阪とか京都とかへ遊びに行く時はいつもお母さんに一所に行つてもらつてゐるとか、今度はお母さんとあなたと三人でどこかへ一所に旅行したいとか、いふやうなことを、或時はひどく初々しいところがあるかと思ふと、そんな旅行の相談などをいきなり臆面もなく持出すといふやうな大膽さで話した。かと思ふと、その翌日から三日間とか、『天の家』の直横町にある劇場に芝居が掛るといふ噂が出た時、彼女は私の母に目くばせするやうな言ひ方で、
「な、明日の晩、かまへしめへんやろ。あんた厭やつたら、あて等二人で行きたいわ、」とそこで例の袂で半分顔を隠す恥かしさうな表情を私の方に向けながら、「あて見たいなもんと一所に歩くのん厭だつしやろな。そやかて、こんな田舍やつたらかまへしまへんやろ？」といつた。
「そんなこと……」と私も初心な青年のやうに答へた。「僕、喜んでお供します。」
　が、その翌晩、私は彼女が今に誘ひに來るか來るかと、例の押入のないがらんとした八疊の部屋でもだ〳〵しながら待つてゐたのに、彼女は夕飯の時に顔を見せた切り、その時は外に人がゐたのでわざと芝居の話をしなかつたのだらうが、到頭宵の口が過ぎても姿を見せなかつた。母が時々私の部屋に入つて來て、退屈なら町を散歩して見たらどうかと勸めるのだが、彼女も昨日の芝居行の話を聞いてゐる筈なのに、そのことについては何にもいはなかつた。私は又、きさ子さんは？　と幾度も口に出かゝつたのだが、到頭聞くことが出來なかつた。で、十時近くになつてから私は一人で町に出て、芝居の前を通つて見た。その翌日、きさ子と會つた時、私が芝居のことをいふと、彼女は誘はうと思つたのだが、何としても極りが惡かつたので、家の者を連れて見に行つたといひながら、私の顔色を讀むやうにして、しばらく何かいひにくさうに口ごもつてゐた後で、「あんたはんが本當に行つてくれはるのやつたら、今晩……」と考へて、「今晩はちよつと差支へおますけど、明後日の晩あたり御一所に行きたうおますわ、」といつた。が、私はその翌々日の午前中に高天を立つて、大阪に行かなければならなかつた。こんな女がゐたのなら、もう少し長くゐる豫定にして來るんだがと思つたが、私はその日の午後大阪で友人と會ふ約束がしてあつたのだつた。といふのは、東京で知り合つた女優が大阪に來てゐて、友人と二人でその女優を訪問する約束があつたので、母やきさ子が止めるのにも割合に未練を殘さないで、私はその時高天町を立つたのである。
　ところが、それが緣で、その後私ときさ子と

の間に急に戀愛が發展したのである。それは會はない前から八分通り私を戀してゐた彼女は、私が彼女の目の前に現れると、考へやうに依つては思はせぶりに見える程、淡白にさつさと歸つてしまつたことや、又私に會はない前から、彼女が私の母を好いてゐたといふことや、それから彼女が育つた雰圍氣から私たちの方を見ると、非常に上品で憧憬すべきものに見えたことなどが重なつて、私といふものが一層戀しく見えたのに違ひなかつた。彼女はその後東京の私に宛てて頻りに手紙を書いて來たり、心づくしの贈物を送つてよこしたりした。考へて見ると、その時の交際振りは私の方が不良で不純だつたといへる。例へば彼女の手紙に返事を出すのが面倒くさい言譯に、或時、東京の學生生活では、風呂錢や切手の代にまで困ることが珍しくないので、返事を出したくても出せないことがある、などと思ひつきを書いてやると、次の時には彼女から三錢切手を百枚手紙の中に封入して來たりした。しかし、彼女のさういふ初心らしい仕打は私を次第に引き込んだ。だからいつとなく私の方からもきさ子を純粹な心持で慕ふやうになつて來た。それに、後半年もしたら學校を卒業する時だつた。しかし、考へて見ると、それが世間普通の學科なら、學校を卒業さへしたら、たとひ僅な月給取からでも、直に世に出る門が開かれる譯だが、私が進まうとする文學の世界は、月日が經つ程先が混沌として見當がつかないのだつた。私はそんな役にも立たない學校の免狀よりも、急にきさ子が欲しくなつて來た。そこで、間もなく卒業試驗が始まりさうになつた時になつて、私は突然發作に襲はれたやうに學校に背を向けて、高天村に向つて出發することにした。春の終の頃で、豫め母に宛てて、もう試驗も終り、後は免狀を貰ふばかりだから、そんなものは友人に頼んでおいて、來る何日に歸るといふ手紙を出しておいたのである。私は汽車の中で、高天の停車場に母ときさ子とが迎へに來てくれてゐる圖などを想像して樂みながら着いた。ところがそこには母一人しか來てゐなかつた。が、私は、きさ子は？ と半分迄口から出かゝつたが、胸を抑へて聞かずにゐると、母も心の分らぬ女で、矢張りきさ子に就いて何にもいはなかつた。この時は、停車場から母のところ迄歩いて行つた。すると、途で、「さうさう、きさ子はん二三日前から風邪を引いて寢てはるのや、」と彼女は何氣ない調子でいつた。

「さうですか、」と私も強ひて平氣らしく裝つていつた。

實際、きさ子は風邪で寢てゐたのだつた。そして私は着いた日の夕方、初めて見る母の部屋の二階のきさ子の部屋に母に連れられて彼女を訪ねた。すると、きさ子はいつかの時と同じ調子で、「おゝ極りが惡い、」と娘らしくいつて蒲團の中に顏を埋めてしまつた。その仕草がまた私の心を堪能させた。が、暫くすると、彼女は熱で上氣した顏を蒲團の中から半分覗かしながら、「いゝあて今日までに乾度なほつておきたいと思うて、藥を二度ぶり一ぺんに飲みましたら、こない急に熱が出て來ましてん。昨夜はな、お母はんと一所に停車場まで迎ひに行くつもりだしたのに、」といつた。「まあ！ きさ子はん、そんな無茶なことをしなはつたの！」と母も知らなかつたと見えて、傍から驚いたやうにいつた。「えゝ、お醫者はんに聞いたら、外の藥と違うて、熱さましの藥を二度ぶりも飲んだら、もつとえらい目に會ふ、その位で濟んだら仕合せな方やいうて叱られました、」ときさ子はいつた。それは本當らしかつた。

その翌日になると、きさ子は床を離れた。そして、持前の大仰な恥かしさうな振をしては、

私の部屋へそつと入つて來て、二言か三言か話すと、落着かなさうに出て行き、かと思ふと、又何か彼かいひに入つて來た。しかし、この前の時から思ふと、彼女はずつと大膽になつて、日が暮れるとよく私の母を一所に誘ひ出しては、目的は私と一所に町を散歩することであつた。或は又、私の爲にといつて町で一等の菓子屋から菓子を、一等の八百屋から果物をふんだんに取寄せては、それ等のものをまるで稻荷樣の供物のやうに、私の机の上に積み上げてくれた。が、その頃になつて私に初めて彼女の身分が分つたのだつた。それには、先づ彼女の長姉のつるといふ女の經歷であるが、彼女は以前娼妓をしてゐたもので、大阪から下の關へと流れて行つてゐるうちに、ふと金持の男に引かされて自由の身になると共に、間もなくその男と死に別れるかどうかして、今から何年か前に單身少なからぬ金を持つてこの故鄕の町に歸つて來て、今の料理屋を始めたといふことだつた。が、元々彼女は身持が放埒だつたので、だんだん持金をなくしてしまつて、商賣の料理屋の經營さへ次第に困難になつた時代が來た。すると彼女は次の妹を町の顏役（先にいつた受負師のこと）の後妻にやつて、一時危なかつた『天の家』の經濟をその妹婿の後援で持ち直した。それには何でもその男と彼女とが以前に關係があつたといふ噂もある位で、何にしても所謂凄腕の女に違ひなかつた。即ちきさ子も亦その姉の凄腕の犧牲になつたといふのだつた。それはきさ子が二十歲の時だつた。姉妹中で彼女だけが高等小學校も終つてゐるし、普通の素人娘らしく育つてゐるといふのを賣物にして、長姉のつるは或片輪の男に――無論餘程の金持に違ひないが、誰もその男の身分を知つてゐる者はなかつた。――妹のきさ子を妾として周旋したといふのである。その周旋料として、彼女はその男から今見るやうな立派な『天の家』を新築させた上にその隣の五軒の長屋（その一軒に私の母や、きさ子や、きさ子の中の姉やが住んでゐる）を建てさしたといふのである。そして、きさ子には當時の金で月々百圓づつ、それから田舍のことであるから、年二度の節季に千圓づつの手當をもらふといふ約束なのださうである。きさ子はつまりさういふ境遇の女だつたのだ。彼女が無邪氣で、恥かしがりであるのは、そんな境遇でありながら、そんな境遇の女が經て來るやうな世間の苦勞を知らないで來たからなのだらうか。恥かしがりながら、一面に思ひの外男に對して大膽なところがあるのは、姉たちと同じ血を持つてゐるからなのだらうか。もつとも、あゝ見えて、姉妹三人のうちで誰が一番きけ者だか、甲乙はつけられないといふやうな噂をも、私は耳にしたことがある。何にしても私は初めてきさ子の身分を母から聞いた時、幻滅すら感じる暇がなかつた。唯ひどく呆れてしまつた。すると、その晩、私はそこへ來た時に病床にゐた彼女を訪ねた時から二度目で、彼女の部屋に招待されて、どういふ譯だか、彼女の旦那といふ男に思ひがけなく紹介されたものである。前に聞いてゐた通り、その旦那といふ男は全く二目と見られない醜男である上に、片手が義手だつた。その手は日露戰爭の時になくしたのだとその時私はその男の口から聞いた。といふのは、私が文學をやつてゐるといふ話から、その男は日露戰爭中に森鷗外の從卒だつたといふ話をした次手に、その手のことを辯解したのである。なる程、その男の樣子を見ただけでは、現在の職業は何をしてゐるのか、どういふ身分のものであるか、少しも見當がつかなかつた。

　その翌日も亦その男はきさ子の所に來てゐたらしかつた。きさ子の身分が分つて見ると、私

はがつかりしてしまつたことは事實だ。夕方、私は例の當てがはれた部屋で欠伸しながら讀書してゐる時、突然物干に足音がして、がらりと前の障子が開いたと思ふと、昨夜の男が片手に手拭を持つて現れた。はツと思つて私が挨拶したのに、彼は昨夜の時とはまるで別人のやうに、私の存在など眼中に入れないで、物干の上でふと後の方を振り返つて、「おきさ、おきさ、石鹼を持つて來んか？」と叫ぶと、そのままツと物干の上から私の部屋の疊の上へ飛んで下りて、私の部屋の眞下にある湯殿の方へ階段を下りて行つた。私はつゞいてきさ子が來るかと待つてゐたが、彼女はさすがに私の部屋を通りかねたと見えて、表から廻つて行つたらしく、それで石鹼を持つて行くのが遲くなつたと見えて、下の方からしばらく「おきさ、おきさ！」とかの男の腹立たしく呼ぶ聲がつゞいてゐた。

その翌々日、私はつまらなくなつたので、母に大阪へ行くといひ出すと、きさ子がそれを聞いて、一週間位なら是非一所に行きたいといひ出した。ところがその相談が私の知らないうちに割合容易に運んで、思ひがけなくその次の日、私たちは三人で大阪へ行くことになつた。

汽車の中で、「これが本當の親子夫婦三人の旅行やつたらどんなに嬉しおまつしやろ。しかし、兎に角これから一週間の間だけそのつもりで方々旅行しませうね、」ときさ子は心から嬉しさうにいつた。私も亦落したものが思ひがけなく返つて來たやうな嬉しさで、その嬉しさの前途の短さなど忘れてしまつた程、有頂天な氣持になつた。が、それは又餘り思ひがけなく短かつた。といふのは、この旅行がその翌日おじやんになつてしまつたのである。行きに、汽車が王寺驛で十分ばかり停車してゐた時、私たちの窓の外を通りかゝつた男が、母ときさ子とに挨拶して行つた後で、彼女たちが何か急にひそひそと話を始めた。

「まさかね。」

「まあ、そんなこと大丈夫やろと思ひますけど、」などといふ彼女等の會話が私の耳に殘つた。

果して、彼女等が心配した通り、私たちがその晩大阪へ行つて、私の伯父の家で泊つた翌朝、きさ子に宛てた電報がとゞいた。直に歸つて來いといふのだつた。いふ迄もなく、きさ子と私が旅行したことがあの片輪の旦那に知れたのである。そこで母もきさ子を送つて一所に後戻りすることになつて、私は彼女たちを港町の停車場まで送つて行くと、別れる時、きさ子は「これ」といつて、私が何か受取りかねてゐると、彼女は無理押しつけに私の袂の中へ入れて行つたものがあつた。別れて歸る途で、私は袂の中を探つて見ると、私の手に指輪が觸つた。

それから二三日して、母からときさ子からと別々に私に宛てて手紙が來た。母からのには、この間は思ひがけないことになつた、さてもうお前も愈々學校を卒業するのだから、早く東京へ歸つて、どんな小さな家でもいゝから一戸を構へて、私が一緒に暮せるやうに獨立しておくれ、私は一刻も早くこんな田舍を離れたい、お前のお蔭で、きさ子さんのあの人にこの間のことを詰問されて、何か私がそゝのかしでもしたやうに云はれ、向うも腹立の餘りだらうが、扇子で膝を打たれた、私はこの年になつて人に打たれたことは初めてだが、悔やしくてならない、私は何もあのえたいの知れない人の世話になつてゐる譯ではないが、あの人の世話になつてゐるきさ子さんや、きさ子さんの家にこの上世話になるのはどうしてもいやだから、どうか一日も早く私の爲に東京に家をこしらへて下

さいと書いてあつた。きさ子からのには、あんなことになつて悲しくてなりません、しかしこれもこれ迄の緣とあきらめて下され、私もあきらめます、それからあの時の指輪は持つてゐて下すつても宜しいし、失禮ですが、賣つてお好きな本でもお買ひ下すつても宜しい、唯お返し下さると迷惑します、お母さんにも迷惑が掛ります、と書いてあつた。

一ケ月程後、私はその指輪を六十圓で質に入れた。その朝私は東京の友人から私が學年試驗に落第してゐることを通知した手紙を受取つたのであつた。それは元より覺悟してゐたことであつたが、私はきさ子の爲にたつた一週間うつゝを拔かしただけで、失戀と落第とを一度に受けたと思ふと、さすがに落膽を感じない譯には行かなかつた。これからは私に月々學資を貢いでくれてゐた親類も、私が學校を卒業したものとして、最早やそれ以上月々の仕送りはしてくれないだらうし、さて東京に歸つたところが、直には職業を見つけることは出來ないだらうし、といつて、中學時代のやうに伯父の家に居候してる譯には行かないし、私はいろいろ考へた末、きさ子から貰つた指輪を金に代へて、それを當分のしのぎとして、せめてその間に何かまとまつた小說本の飜譯でもしてから、それを持つて東京に行かうと決心したのだつた。そのつもりで大阪の伯父の家でしばらくごろごろしてゐたが、仕事が進まないうちに金が殘り少なくなつたので、私は思ひついて、或日下高天の中戸竹藏に手紙を書いた。東京へ歸るまで一つ纏まつた仕事を落付いてしたいと思ふので、二三週間居候をさしてほしいといつてやつたのである。しかし、どんな理由であれ、高天と目指したのは、まだ幾分きさ子の亡靈が私の心中に殘つてゐたのかも知れない。丈太郞の代筆で、いつでもお越しなされと折返し返事があつた。そこで、私は早速支度をして、高天驛に夜着く汽車で着いて、下高天へ行く途上高天を通る時、車の上で私は帽子を深めにして顏を隱しながら、きさ子の家の誰かに見られないやうに用心したり、が又見られて下高天に行くことをきさ子に知られたいなどとロマンチックに考へたりするうちに、無事に萬屋に商賣換へして、店の樣など全く變つた、懷しい『ちんこ竹』の家に着いた。

私はその時竹藏の家に一ケ月近くゐた。母のところへは、『天の家』への遠慮があるので、或日丈太郞に賴んで彼が商賣の用事で上高天へ行つた次手に、そッと私が彼の家に來てゐることを知らす手紙を渡してもらつた。すると、二三日後に、母は下高天へ私に會ひに來た。彼女はこの前の手紙の文句をくり返すやうに、秋まで辛抱してゐるから、是非一日も早く東京へ行かれるやうに、私に勉強してくれといつた。ところが、彼女が來た翌々日だつたかに、思ひがけなくきさ子から竹藏の家方私宛に手紙が來た。又しても母は妙なことをする、多分彼女がそッときさ子に私のことを知らしたのに違ひないと私は思つた。が、心の中では嬉しくもあつた。彼女の手紙には、私に東京へ歸る迄にどうかして一度お目にかゝりたいと書いてあつた。そして、若し返事をくれるならかういふ家によこしてくれと、同じ上高天村の知らない所と名前とが認められてあつた。私は久しぶりのきさ子からの手紙に接しると、再び彼女を思ふ思ひが燃え上るのを感じた。その時の彼女の手紙にはまだその外に、私にロマンチックな戀心をそゝるやうなことが書かれてあるのだつた。いふのには、晝間はとても上高天の町へあなたは來ることが出來ない、それは上高天には三つの入口しかない、而もそれ〴〵三つの入口にはあなたの顏を知つてゐる見張りの番人がゐる

る、それは高山（きさ子の直上の姨の亭主で、例の受負師で、町の雜役をしてゐる男の名この子分の車屋がそれ〴〵の入口の車宿にゐるからなどと書いてあるのだ。無論そんな事は譃か本當か分らないやうな話だが、失戀した男にとつて、その失戀の物語を飾るこの上ない道具立に役立つた。私もどうかしても一度會ひたいと返事を書いて送つた。そして私はその頃飜譯の仕事に疲れると、當時もう二十歳かであつた丈太郎を誘つては、高天ヶ原まで散歩に出かけるのが常だつた。高天ヶ原の北西の端に出ると、日の下に山の公園と、その公園のまん中に聳えてゐる天理教の會堂と、町の四方にある四つの寺の鐘樓と、取引所の跡の倉庫と、郊外にある紡績會社とで飾られてゐる、變に田舍びてゐながら、變にごた〳〵した賑しさを持つた、上高天の町が見下ろされた。最早や氷水とボートの季節で、その山の公園の池のほとりの、天理教會堂のある反對の側の臺には、氷水の旗を立てた店や、岸につながれたボートなどをも指摘することが出來るのである。私はそれ等の景色を飽かず眺め入りながら、丈太郎とぽつりぽつりと會話をした。丈太郎は先にもいつたやうに父と呼んでゐる竹藏とは伯父甥の血つゞきであつたが、母親の方は全く他人であるので、子供の頃は兎に角、年頃になつて來ると共に、家の中に氣まづい空氣が生じることがあるらしかつた。それに、丈太郎もどちらかといふと都會好きだつた。東京に行つてゐる彼の伯父の丈助が、その商賣にもう少し目鼻がついたら、來いといつてくれてゐるから、自分も是非伯父の家へ行つて働いて見たいなどと洩らした。が、私は多く彼の言葉を上の空に聞き流しながら、日の下に見える不思議な感じのする上高天の町を、それ等の屋根のどれか一つの下にきさ子がゐると思へる町を、ぼかんとして眺め入つた。

「近いうちに一度夜分にでもあそこへ行つて見ませうか?」と私はいつた。

「どこへ?」

「上高天へ、」といつて私は赤くなつた。

が、それから間もなくその上高天へ行く日が來たのである。或日上高天からといつて、よぼよぼした婆さんが竹藏方の私に手紙をとゞけて來た。それは母の手紙で、今夜きさ子さんと町の活動寫眞に行くから、丈太郎さんを誘つて活動寫眞を見に來たらどうかといふのだつた。私は承知の返事をして、その日の暮を待つて、丈太郎と一所に下高天を出かけた。が、道が案外早くはかどつて、上高天の町が目の下に見える、高天山の端の曲り道へ來た時にも、まだ日が暮れ切らないので、道の傍の草原に蹲んで、日の落ちるのを待つた。そして、やつとあたりが暗くなつた頃に、私たちは泥棒のやうに町の中にまぎれ込んで、勝手を知つた丈太郎の案内で、とある小屋掛の活動寫眞館の前に出た。私は丈太郎の後から人に顏を見られぬやうに腰を屈めて場内に入つて、母の手紙に示してあつた通り、東側の桟敷の間に座を取つて、西側の桟敷の方を見ると、直に母ときさ子の姿を見出すことが出來た。そこで、私は丈太郎に賴んで、そつと私の來てゐることを母に知らしてもらつた。間もなく母が私たちのゐる方へ忍んで來た。と、彼女の後から久し振で見るきさ子の派手な姿がちよこ〳〵と現れた。私ははつとしながらわざと改まつた恰好で挨拶すると、「い、あて極りが惡いわ、」と彼女は初めて會つた時と同じやうに袖で顏を隱した。そして、二言三言話をしてゐると、話しながらも、始終不安さうに彼方此方と暗い活動小屋の中の群集に眼を配つてゐたらしいきさ子は、突然私の母の袖を引いて、「あゝ、あそこへ板場はんが來

ましたから、ちよつと場へ歸つてましよ。」と氣がかりらしい聲でいつた。「あ、さう。」と母もあわてゝかういふと、「ぢやあ、又歸りにでも。」といつて、二人はそこ／＼に群集の中にまぎれて行つた。しばらくして元の席についた母ときさ子の方をこちらから盜み見ると、私も見覺えのある「天の家」の青白い顏をした若い板場が、見たことのない金緣の眼鏡をかけて、きさ子の直傍に坐つてゐた。私は何となくつまらなくなつたので、短い寫眞を一切り見ると、もう一度丈太郎に母を呼んでもらつて、彼女にだけ別れを告げて、そこ／＼に活動寫眞館を出た。まだ時間が早かつたので、丈太郎と二人であちこち町を散歩してから、行きとはまるで反對のつまらない心持で三十町の夜道を歸つて行つた。その時切り私はきさ子に會はないのである。後で母に聞いたのであるが、もつともその時は母も知らなかつたのださうだが、その後あの青白い板場はきさ子の情夫と分つて、間もなく追放されたといふことであつた。

その秋、到頭母は高天を引上げて、私が手紙でもう少しもう少しと彼女の上京を延ばすやうに懇願してやつたにも拘らず、或日突然牛込の私の下宿に現れた。私は親類からの仕送りなしに、自活し出してからまだ二ケ月にもなつてゐなかつた。自活するといつても、定つた收入のある勤め口はなかつたので、僅に人の賣文業の下仕事などして暮してゐたのだ。折角、下高天の竹藏の家で居候しながら仕上げて來た飜譯の原稿も到頭賣れなかつたのである。自然、そんな譯で下宿屋の拂など滯らしてゐた。が、母子でいつまでも下宿住居もしてゐられないので、やつと無理して本鄉の或町に小さな借家を見つけて、取敢ずそこに移つたが、早速その月末から困り出して、少しづつ母の持つて來た着物などを金にかへたりし始めた。

或日、母が私が以前間借してゐた所にそのまゝ住んでゐる中戶丈助を訪ねて行つた。すると、義理固い丈助はそれから二日程して私の家へ訪ねて來た。彼はその青ぶくれした顏の妻のお樂と、同じやうに青ぶくれした顏の娘の雪江と、雪江は背中に四歲になる秀夫を負ぶつて、一家そろつてやつて來た。丈助は私の家の取片附いた外觀を見て、

「あんたたちは結構やが、わし達はこれからや。」と輕く嘆息しながらいつた。彼の遠慮勝は相變らずで、彼の妻や娘が無作法に飛足などして座蒲團の上に遠慮なく坐つてゐるのに、彼だけは幾らすゝめても、「いや、いや。」と後ずさりして、歸る迄それを敷かなかつた。彼の妻のお樂も、娘の雪江も、丈助に似て口下手だつたが、同じに下手でも丈助のには巧まない、自然の朴訥な愛嬌のやうなものがあつたが、彼女たちのにはそんなものもなかつた。唯、雪江の子供だけが變つてゐた。彼は母親の背中から下ろされると、初のうち暫くの間ははにかんで見えたが、少し馴れると妙にはら／＼するやうな腕白を發揮し出した。それを丈助が一番氣にして、始終「これ、これ、秀夫！」とたしなめてゐるのだが、變な子で、彼は手足の運動は世間の同じ年頃の子供並に活潑であるのに、言葉らしい言葉が一言も發音出來ないらしいのだ。

「あの子は何でも少しをかしいんだよ。」と彼等が歸つてから、母が私にいつた。

「さういふと、雪江といふ人も少し變ぢやないですかね？」と私もいつた。「いや、雪江さんのお母さん――あの丈助さんのお上さんといふ人だつて、何だか變だな。」

「お樂さんはどうして、あれでなか／＼しつかり者なんだよ。雪江さんは少し何だけどね。娘

はんと孫の秀夫はんは丈助さんの苦の種やろな。」と母はいつた。

　ところで、その時丈助が私にいふのに、「わし達はまだこれからが一苦勞だすが、あんたは大學まで出たんやから、お母はんももう安心や。これからは出世するばかしやから樂みだすわ。そこへ行くと、何しろわしは東京は初めてのところやし、もう西の方では散々懲りたさかい、まアかうして東へ向うて出て來たもんの、商賣ちふもんは、馴染のないとこやとなか〱むつかしいわ。まア、しかしあんた達がゐてくれはるよつてに心強う思うてる。何分よろしうお頼ん申しますわ。」

　私は心の家で赤面しながら、表面は兎に角自信ありげにうなづいて見せた。大學を卒業したなどとは、それも女のために卒業間際になつてしくじつたことなどとは、現在の母にも隠してゐたことだし、私にして見ると、安心どころの騷ぎではなかつた。まだしも「これからや」といふ奮發心を持つてゐる丈助の方を、私は内心、實に羨ましい氣がした位だつた。私には殆ど希望がなかつたのに反して、彼には、一足でも多く子供靴を作り、妻や娘が極く少しづつでもミシン機械を廻すことに熟達すれば、といふ心に張りがあるに違ひなかつた。それから思ふと、私が當時かじり付いてゐた賣文屋の下仕事など、いつも仕事が絶え勝だし、稀にあつても、それをミシンの機械を廻すやうに精出してやつたところが、約束の金を半分はおろか、全くくれないやうなことさへ珍しくない状態だつた。傍にゐる母も丈助の言葉を聞きながら後目たく感じてゐたことだらう。何故といふのに、彼女は長年その成人を待つてゐた息子の傍に來て見ると、何から何まで思ひの外のことばかりだつたに違ひない。といつて、一見人々から羨まれながら、（もつとも、羨んだのは下高天の連中で、上高天の方には、彼女はきさ子の家の階下の部屋に住んでゐた間代とか、その他近所の商賣人の家とかに少しばかりづつの拂ひを殘して出て來たらしかつたから、）出て來た高天村へ、もはや二度とは歸つて行けないだらうし、今に今にと辛抱してゐるものの、東京に來て私の様子を見ると、とても私の状態が出世の方に向いてゐるとは思へなかつたに違ひなかつた。

「いゝえ、私のとこもまだ〱ほんの書生ですから、思ふやうになりません、」と彼女にめつきり年とつた額の皺よつた目に涙を浮べながら、丈助に向つて訴へるやうに、いつた。「それでもかうしてあなたにも東京へお越しになりましたから、私の方もたよりにさしていたゞきます、お互様です。」

「あんた、急に老けなはつたなア、」とその時珍しく丈助の妻が口を挾んだ。

「えゝ、もう臺所の仕事から世帯の苦勞から……」と母はいつた。「高天の――下高天の方でお世話になつてゐます時分が一番氣樂でした。」

　が、彼等が歸つて行く後姿は甚だ觀みにならないものだつた。彼等から見ると、ずつと都會の空氣に染まつてゐる私たちの目には、彼等のやうな訪問客を近所の人たちに見られるのが恥かしく思はれる位で、眞先に立つて行く丈助の木綿縞の着物に紺の小倉の帶を締めた姿といひ、染絣のどてらで負はれて行く秀夫の、子供靴の材料でこしらへたらしい羅紗の帽子といひ、小さい髷を結つた怒り肩の、立つて見ると大柄な母親のお樂といひ、少し跛足かと思はれるやうな歩き方をする、若いのか年とつてゐるのか分らないやうな、子を負つてゐる[illegible]江といひ、彼等はそろひもそろつて故郷の高天村の街道を歩かしても、村の子供たちが指をさすやう

な風采の人たちだつた。
　しかし、私の母はその時から、時々淺草の丈助の家へ出かけて行くやうになつた。彼女にして見ると、東京の外の親戚の家に顏を出すことは、氣づまりでもあるし、後目たくもあつたのだらう。それから思ふと、淺草の子供靴屋は心安かつたに違ひない。果して、丈助の商賣は少しづつ發展して行くらしく、間もなくこれ迄の間借の家の直近くに、一軒の家を借りて引越した。私も一二度その家を訪ねたことがあつたが、とある路次の長屋の一軒で、玄關も茶の間も區別のない二間の家で、もつとも二階があつたが、それは職人に間貸しをしてあるらしかつた。つまり此間まで職人として間借をしてゐた丈助は、獨立して、今度は職人を二階におくやうになつたのだつた。羅紗でこしらへて、リボンで止めるやうになつてゐる無數の子供靴が、板の間にも、疊の上にも、どうかすると便所に通ふ廊下の邊に迄も散亂してゐた。その外どこもかしこも切屑だらけだつた。これはしかし商賣が繁昌してゐる徴ではなく、丈助の妻のお樂がだらしない上に、同じ氣性の娘の雪江がかまはない性分であつたし、それを馬鹿の秀夫が掻き廻すためらしかつた。薄暗い奥の間にミシンの機械が二臺据ゑてあつて、そこに青くむくんだ顏をしたお樂と、矢張り青くむくんだ顏をした娘の雪江とが、がら／＼と機械の音を立ててゐた。どちらか鼻が惡いと見えて、機械の音にまじつて、始終鼻をすゝる音が聞えた。それに、雪江のぎよろりとした生氣のない、大きな出目は近眼と見えて、彼女は顏を機械の傍にくつ附けるやうにして仕事をしてゐた。二階にゐる職人も同じ仕事をしてゐるらしく、そこからも絶えずミシンの音が聞えて來た。時々一束の子供靴が梯子段の上から、「ほーい！」といふやうな叫び聲と共に轉がり落ちて來ると、それを下の者が掻き集めて、ぼろ／＼の柳行李の中に入れたり、ミシンの手の空いてゐる時は、お樂か雪江かが、上り口に近い、稍々明るい場所にその柳行李を持ち出して、一つ一つの靴にリボンの飾りをつけたりしてゐることもあつた。
　が、氣の毒なことには、丈助が子供靴屋として獨立すると間もなく、とても競爭出來ない商賣敵が現れたのだつた。
「大分工合よう行つてたんやがな」と或時彼は鼻をすゝりながら私にいつた。さうだ、彼も鼻が惡いと見えて、絶えず鼻をすゝる癖があつた。「近頃ゴム靴といふやつがおますやろ。あの方が丈夫で安いもんやから、世間の人といふものはえらいもんや、こつちが何ぼ勉強してもだん／＼賣れんやうになりよるね。……」
　その頃のことであるが、丈助の妻のお樂が三日程の病氣で、突然死んでしまつた。私は彼女の死んだ顏を見たが、生前青くむくんでゐた顏が、牛の頬のやうにだぶ／＼になつてゐるのが目についただけで、生前の顏、死後の顏もそんなに變つてゐなかつた。母はお通夜に行つたが、私はお參りだけして歸つて來た。葬式などどんな風にされたか知らない。多分夜明けに棺だけ火葬場に送られたものに違ひない。兎に角、お樂のこの死に方は私の祖母の場合よりも可哀さうだと私は思つた。
　その時分に私の身にも變化があつた。私に起つたのはよくある女の間違ひで、それと貧乏が到頭行き詰まつたからでもあつた。私は母を彼女が行きにくがつてゐた市内にある父方の親類にやつた留守の間に、女と共に本郷の家を夜逃げするやうなことになつたのである。その頃、丈助の家でも、雪江を京都の方へ嫁にやつて、孫の秀夫を高天村の竹藏の家に預けたといふ話を聞いた。が、私は丈助と暫く

會はたくなつた最後の時、それは多分彼の女房が死んで悔みに行つた時のことだつたと思ふが、

「萬次郎さん、あんたはわしより東京に古うゐなはるんやが、何かわしに出來る商賣はおまへんやろか？　折角、あんたの世話でこの商賣をやつて、ちよつと工合よう行きかけたと思うたら、こんな事になつてしまひよるし、」といつになく丈助が愚癡めかしい口調でいふのを聞いた。「それになかうして家内は死によるし、秀夫はだん〳〵手が掛るさかい、雪江だけでは何ぼも働きが出來へんよつてに、これ迄通りの商賣をするとしても、なか〳〵困難やからな。」

私はその時、返事に困つて、「あなたはミシンの方は出來ないんですね？　これ迄からずつと買ひ出しにばかり廻つてゐた譯ですか……」と聞いて見た。

「そや、そや。洋服屋とかな、吳服屋とかな、その他切類の問屋のやうな家やな、さういふとこから、子供靴になる切屑を買うて來るんや、切屑というても、そんなんやさかい古い切は一つもあれへんで。」

「ぢやあ、子供靴にならない切屑は駄目なんですか？」と私は聞いて見た。無論、何の考があつたのでもなく、話をつゞける爲だけのつもりだつたのだ。

「ふむ、それや又それで、何にしよるんや、矢張り買ひに來る奴があるらしいな、」と丈助はいつた。彼も亦そんな會話をしながらも、殆ど無考に喋つてゐるらしかつた。長年連れ添うた妻の死骸が、線香の匂の充ちてゐる隣室にまだ横たはつてゐる時だつたから無理もない。が、私はその時、ふと思ひついたことがあつたので、

「ぢやあ、その子供靴は賣れなくても、その材料の切屑は色んな向きに賣れる譯ですね？」と聞いて見た。

「それや賣れるわ、」と丈助は矢張り上の空で返事をしてゐた。

「それなら、一つ先廻りをして、東京中のさういふ切屑をあなたが先に買つてしまつて、どんな種類の切屑でも、あなたの家へ行つたらあるといふやうな商賣はどんなもんです？」と私は私自身にもあやふやにしか考へてゐなかつたのだが、實際としては兎も角、理窟としては成立つだらう位のつもりで、かういふ意見を出して見た。

「なる程な、それはえゝ考やな！」と丈助は案外感動したらしく、「ふむ、ふむ、」と後は腕を組んで獨りで呻り出した。

が、その時外に用事が出來て、丈助が座を立つて行つたので、その話はそれ切りになつてしまつたが、その後彼は女房の死と共に、家をかたづけたり、孫を國に預けたりして、最後にもう一奮發するつもりで、改めて兄の貯蓄から少しばかりの資金を借り受けて、私のいつた小切屑切を專門に賣買する商賣を始めたのであるが、それが偶然彼に今のやうな成功を持つて來る段取となつたのである。が、それはずつと後の話で、先にいつたやうに、私はその時別れてから三年程も丈助と會はなかつたのである。

つまり、私は先にいつた女の始末をつけるのに、かれこれ三年程かゝつた譯だつた。女の始末はつけたが、相變らずまだ身の方針が定まらないので、母を親戚に預け放したまゝで、私はしばらく又書生時代の氣持で、下宿生活をしてゐた。が、相變らず定つた收入がないので、二ケ月以上同じ下宿屋に落着いてゐられない狀態だつた。が、その時私は心に多少希望を抱いてゐた。それは長い間朝から晩まで不貞腐れの女との生活に心をくだいてゐたのが、

その女とも別れたのであるから、幸、この際女のことで親類に避難してもらつてゐる母を、今少しそのまゝにしておいて、この間に長年の望みであつた小説を作ることに沒頭して見ようと思ひ立つたのだつた。何人かの友達は既に小説家として世に出でつゝあつた。自分も世に出る出ないは二の次として、小説で生活出來るやうになつたら、賣文屋の下仕事など鬼と共にあれ！　どんなに救はれるだらうと思つたのである。小説の思ひで私は胸がふくれるのを感じた。何とかそのふくれた胸の思ひに表現を與へたなら、自分にも人並の仕事は出來ないものではないだらう。それにしても、さし當り困るのは下宿屋の問題だつた。せめて寛大な下宿屋があつて、これから半年位の間金の催促をしないで置いてくれたなら、思ひ切つて一つ發憤して見るがなア、などと蟲のいゝことを私は眞面目に考へてゐたのである。

　その頃のある日、私はあてどなく町を歩いてゐると、ふと向うから黄色い、風の神のやうな大きな風呂敷包を背負つて來る中戸丈助に、何年ぶりかで出遭つたのであつた。私ははつとした。もう少し早く彼の來るのに氣がついたなら、私は横町に姿を隱してゐたかも知れなかつた。が、生憎彼の方が先に私を見つけて、

「おゝ！」と呼びかけた。

　呼びかけられた瞬間、私には彼の挽臼のやうに四角な醜い顏が、神、といふと誇張になるが、何ともいへぬ人間的な感じに溢れてゐるのを見た。以前と同じものではないかと思はれる、汚い木綿縞の着物に、紺の小倉の袴を締めて、尻からげをした足に板裏の草履を穿いてゐた。その時私はといふと、母のお古を仕立て直したお召の着物を着てゐたかも知れなかつた。爪尖の破れた足袋を隱す爲に、足の爪に墨を塗ることも忘れてゐなかつたに違ひない。

「どうしてなはる？」と丈助は私がぽかんとしてゐるのを、勇氣づけるやうに、も一度彼の方から聲をかけた。風采は昔と少しも變らなかつたが、彼は如何にもこの世に自信が出來たらしく、そして又昔と違つて彼の目に、階級の違つた私を誤る偏見はなくなつて、ありのまゝの私の姿が映つたらしく思はれた。

「いやア、相變らずです、」と私は頭を掻きながら、「ついそこに今は又下宿をしてるんです。」

「下宿？　それやいかんな。お母はんは達者ですか？」と丈助は私の境遇を一目で察したらしく、しばらく私の樣子を、頭の先から足の先まで見てゐたが、「さう〳〵、わしんとこは家をまた越しましたで。あんたこれからどこぞへ用事に行きなはるのか？」と聞いてから、「何ならこれからわしんとこへ來なはれへんか？　わしんとこもお蔭で此頃は一寸工合ようなつてんね。あんたのお蔭でな。今は小切專門でやつてるもんやさかい……兎に角、又いろ〳〵相談に乘れるかも知れへん。な、夕方の御飯でも一所に食ひまよ。あんたはわし見たいに歩くのはかなはんやろから、そこから電車で行きまよ。」

　その時私は初めて今の溝川に沿うた丈助の店を見たのである。今の店といつても地震前の借家時代のものをいふのだが、矢張り三間間口に四枚の硝子戸の嵌まつた家だつた。今と違つて小切を並べたり、吊り下げたりした、屑屋の姉さんのやうな店で、店頭に青白い顏をした、きやしやな體格の二十七八歳の番頭が坐つてゐた。丈助につゞいて私が入つて行くと、「お歸り、」とその男は丈助に挨拶して、「入らつしやい、」と私の方にいひながら、不思議さうな目で私を見てゐた。

「さあ、お上り、」と丈助は私にいつて、奥の

間の方へ通つて行くので、私もその後からついて行くと、そこには見覺えのあるミシンの機械が二臺並んでゐて、その一臺の方に二十歳足らずの青年が機械に足を掛けたまゝで、臺に兩手を突いて何か思案してゐる樣子だつた。彼は私たちの足音が彼の傍に近づく迄何かぼんやり考へてゐた樣子だつたが、私たちが入つて來たのに氣がつくと、

「お歸りなさい、」とあわてたやうにいつて、そのまゝがら／＼と足を踏み、手を廻しして機械を動かす仕事を始めた。そして仕事をしながら、何か唱歌のやうなものを口笛で吹きつゞけてゐた。髮の毛を當時はやり初めのオールバックにした、顏色の赤白い、合の子めいた風采の男だつた。

「ところで、あんたはどうしてたはんね？」と丈助は店の間の外に、そのミシン機械を据ゑてある六疊の部屋切りの、緣側に寄つた方に私を案内して、自分で茶を汲んで來たり座蒲團をすすめたりしてから、私と差向ひになると早速から切出した。

　この時でなかつたら、私は唯もぢ／＼して、「いゝえ、どうかからか、」とか、でなければ、どうせ文學方面のことなど全然知らない相手のことだから、ありもしない成功をしてゐるやうな法螺でも吹いたかも知れないが、（もつとも、以前に何かの時彼にさういふ法螺を吹きかけた所が、「そんなことをいはれてもわしらには分こん。あんたが文士でどの位のところや、相撲の番附見たいなもんがないのかいな。そんなものがあつたらわしらにもよう分るのやがなア、」といはれて閉口したことがあつた。）私は可成り眞劍な氣持になつてゐる時だつたから、丁度以前高天の「ちんこ竹」の帳場で、突然彼に楠正成や、葛城山の話をしかけた時のやうな調子で、「これ迄は隨分無駄ばかりして來ましたが、これからはそれを役に立てて、近頃になつてやつと仕事が出來さうな自信がついて來ました、」と勢こんでいつた。

　が、果して丈助は私の言葉の半分通りは分らなかつたと見えて、目をくる／＼させながら、

「あんたのその仕事ちふのは何や、小說たらいふのは止めたんか？」と聞いた。

「いや、その小說が仕事なんです、」と私はあわてて言葉を足した。「その小說も、これ迄は本當の小說でなしに子供の話とか、外國の本の飜譯――つまり寫し直しですな、そんなことをしてその日その日の食扶持だけを稼ぐやうなことばかりしてゐたんですが、それではいつ迄たつても頭が上りませんから、こゝで一つ決心して、本當の小說を書いて見ようと思ふんです。僕には乾度それが出來るつもりなんですが、」と出來るだけ相手に意味の通じるやうにいつた。

「その本當の小說ちふのをこしらへるのにどれくらゐかゝりますね？」とそこで丈助は膝を乘り出して聞くのだつた。「それで、それさへよう出來たら、後はもう何ぼでも賣れまんのか？」

　その答には困つたが、「それがやつて見たければ分りませんが、僕は自信――大丈夫だと自分では思つてるんです。さあ、二ヶ月もかゝるつもりなら、乾度書けるつもりでゐます。」

「そんなら、あんた、下宿を止めて、うちの二階へ來てやつて見なはれ。そないに思ひこんでるんやつたら、出來るやろ。うちの二階やつたら、誰も遠慮するもんあれへん。男ばつかりや、番頭と、職人と、わしと三人や。その代り御馳走はないで。それでもかまへへんかつたら、どうや、うちへ來たら？」

　そこで翌日から、私は躊躇なく丈助の家の二階に居候することになつたのである。丈

助の二階は下町の古風な借家建によくあるやうに、中心から端の方へ行くに從つて、天井が次第に疊に御辭儀するやうに頭を下げてゐる構造の最も極端なもので、その最も接近してゐる所は、三尺位しかなかつた。が、その三尺の幅のところに往來に面した窓があつた。

「あんたは少し脊が高過ぎるけど、あんたやなうてもこれは工合惡いけど、勉强するには辛抱出來ますやろ、」と丈助は鼻をくす〳〵鳴らしながらいつた。「それに机がないと困るやろな。」

「机は僕は入りません。」

「ないわけにいかんやろ、」といつたかと思ふと、彼は階下へ下りて行つた。そして三十分ほどすると、商品の荷箱板を寄せ集めて、速製の机をこしらへて來てくれた。が、その机はもたれるとぐら〳〵搖れて、今にもどちらかにばさりと折れてくだけさうだし、又そつともたれるにしても、窓の餘り傍に持つて行くと、うつかり机から頭を上げると天井で頭を打ちさうだし、後に寄り過ぎると、光線が机の下から射して來る不都合があつた。結局、私は腹這ひになつて物を書く癖が一番樂なので、机を入らないといつたのはお世辭ではなかつたのだが、丈助の心づくしの手前、誰もゐない時には腹這ひになり、人の來た時だけあわてて机でやつてゐる恰好をして見せることにした。が、一日のうち、時々商品の切類を上げたり下ろしたりする時の外に、誰も二階に來るものはなかつた。三度の飯の時は、階段の下から「御飯ですよ、」とミシンの職人が唱歌のやうな節で知らしてくれるので事が足りた。彼は行く行くはミシンを止めて、歌劇の俳優になる志望を持つてゐた。次手だが、店番の青白い顏の番頭は、子供からの俳優で、現にその時から三年ばかり前まで、樂天地で女形役者をしてゐたといふことだつた。丈助の家の外の雇人が二人とも俳優に關係があるのは滑稽なことだつた。

だが、私の仕事である小說も亦、丈助の仕事である小切呉服屋と同じやうにいふなら、私の仕事はその時から芽を出して、丈助より早くから志して、丈助より後れはしたが、兎に角その後丈助の小切屋と同じ位の一家を構へるやうになつた譯である。丈助は八萬七千圓の財產を造り、私は八萬七千圓程の名聲を得た。丈助に分るやうに番附でいふと、丈助が小切屋の幕內なら、私も小說家の幕內になつた。目出度も目出たしといふべきだらうか？……

ところで丈助の私に賴む遺言といふのは、その八萬七千圓の割當のことなのである。丈助はその財產目錄を半紙に丁寧に認めてあつた。それを見て驚いたのであるが、私は嘗て彼を楠正成と葛城山の歷史の話で困らしたことや、彼の兄の竹藏の無學なことなどから考へて、彼も亦片假名位しか書けない無筆者だらうと推測してゐたのだが、その財產目錄を見ると、なか〳〵しつかりした筆蹟であることだつた。もつとも、いつかの地震の時、竹の臺の美術館の南側の壁に、彼が大勢の人々の住所姓名の間に遠慮して小さい字で彼の姓名を記してゐた字を見た時も、おや、割合に上手に書くなと思つたことがあるのだが、今かうして纏つた彼の筆蹟を見ると、尙そのことが證明された。それにしても、どうしたつて彼が寺小屋以上敎育を受けてゐるとは思はれないから、生れつきの能筆なのだらう。それによると、田地が一萬圓と、二萬圓の山といふのと、後は三萬圓ばかりが株券とか債券とかで、殘りの二萬幾らかが銀行の預金といふ風に分れてゐて、それ等を孫の秀夫と、妻の政江と、甥の丈太郞と、嫁にやつてある娘の雪江と、それから天理敎へと、そ

れぞれ割當てられてあるのだつた。

丈助のいふところに依ると、彼はその割當てのことでいろ〳〵に迷ふらしく、それに一度定めても半年位經つと財産が增えて來るので、又それを變へなければならず、それに分けてやるものか、肝腎の唯一の後取りの孫がやつと十二三歳になつて、村の學校にも行つてゐるのだが、唖とも吃音ともつかず、言葉が半分位しかいへない子である上に、頭が少し惡いらしい(と丈助はいふのだが、私の聞いてゐるところでは一種の白癡らしい。)ので、折角財産を分けてやつたところが、それを管理するものがないのが彼の第一の心配らしかつた。といふのは、彼の妻は秀夫とはまるで他人であるし、秀夫の母であり、彼の娘である雪江といふのが、彼女も亦少し頭の惡い人間に屬する上に、これは他所の人になつてゐるから、これも頼みにならないのである。ところで、甥の丈太郎だが、彼は最早や三十歳の大人で、妻もあり子もありするのだが、妙に内氣で、それに早く死んだ彼の實の兩親の遺傳を受けたのか、近頃めつきり肺が惡いらしいのであるさうだ。丈太郎の家へ秀夫を預けておくと、丈太郎の病氣が秀夫にうつる心配があるから、もう東京へ引取つた方がいゝと、彼はこれ迄から度々政江にすゝめられてゐた位だつた。無論彼も自分の手に秀夫を置きたいのは望むところであつたから、これ迄にも一度ならず東京へ連れて歸つたことがあるのだが、どういふ譯か秀夫は政江になじまないで、すぐに大和へ歸りたいといひ出したり、それで無理に東京に置いておくと病氣をしたりするので、矢張り元の丈太郎の家へ預けてあつたのである。が、丈太郎の家も、三四年前に父の竹藏がなくなつてからは、丈太郎には他人である竹藏の後妻のお菊が頑張つてゐて、氣の弱い丈太郎はどうもその義理の母親に頭を抑へつけられてゐるらしかつた。それに、彼の叔父に當る丈助がさういふ風なお人好しだつたから、どうにもさばきのしやうがないのだつた。それに又、どういふ譯か、秀夫はその丈太郎の義母のお菊に一番なついてゐるので、尙始末におへなかつた。といふのは若しお菊が正直な人だつたら、丈助は安心して秀夫に殘しておく財産の管理を彼女に任せられるのだが、お菊は夫の竹藏の死んだどさくさまぎれに、丈太郎に讓られるものさへ大方ごまかして、彼女の身内(彼女には兄妹が澤山あつた。)の者にくれてやつたり、又彼女自身老先の短いことを忘れて、丈太郎に内所で財産を隱してゐるといふやうな評判のある女なのである。そこで、丈助にして見ると、若い丈太郎に秀夫の財産を管理させたいのだが、先にいつたやうな病弱な丈太郎のことだから、叔父の彼自身よりも、又義母のお菊よりも、一番先に彼が墓に行くかも知れない恐れがあるのだつた。無論、それを丈助は妻の政江に託することなど、彼女も亦お菊に負けず劣らずの慾張り屋だといふことを知つてゐたから、それは彼女に殘す分前を二倍にするのと同じことになると知らねばならなかつた。

さういふ譯で、彼が財産を持つて苦勞し、煩悶し、「もういそのこと、みんな西の海へほうたろかと思ひますわ、」と溜息するのに、いろ〳〵無理のないことがあるのだつた。

それから、彼が遺産の分前の一つに勘定してゐる程、天理敎に歸依してゐるといふことを私が知つたのは、この遺言狀を見てからだつた。元々彼が天理敎の信者だといふこと位は、私も母から聞いてはゐたが、それほど凝つてゐるとは思はなかつた。彼が今度歸鄕する用事の一つは、その財産目錄の一つである二萬圓の山といふのを、天理敎に寄附することであつた。山といふのは高天山なのである。

「高天山といふのはあの高天山のことですか？」と私は驚いて聞いた。それに私も多少村人の傳說に煩はされてゐたと見えて、「あれが買へたんですか？」と聞くと、
「あれは三人の持になつてゐまんね、」と丈助がいふには、「そやけど、あんな山仕樣あれへんね。死んだ兄貴が變りもんでな、どういふ譯やら、金が出來たらあそこの地面を一町でも買ひたい買ひたいといひ通しにいうてたんやがな。わしが買うたんは兄貴の死んだ年、死ぬ前から話があつたんやが、死んでから纏つてん。高天の家の筋向ひに、細川いふ酒屋があるのを覺えてなはるか？　あの家が持つてたのを買ひましてん。あのずつと上の原つ場——池も皆さうだす——あそこから東べらへかけて、墓場な、あんたの祖母はんの墓のある、あの邊までずつとだす。わし、買うて兄貴にやるつもりだしたんやけど、兄貴は先に死んでしまひよるし……」
「それで天理敎に寄附するといふと、天理敎であそこへ又、上高天の公園にあるやうな敎會堂でも建てる話があるんですか？」
「そや／＼。わし、この上生きててもつと金が出來たら、もう面倒くさいさかい、後の金はみんなその敎會堂の方へ寄附したろかと思うてんね。」
「隨分な信心ですね、」と私がいふと、
「いや、わし等信心も何もあれへん」と丈助はいつた。「丈太郎があんな若いのにあんなもんを信心しよつてな、いつの間にやらわしも誘ひ込まれてん。あんなもん信心出來るもんだすかい？　身代つぶした人何人あるか知れへん。その代り、ようしたもので、食へんやうになつたら引取つて養うてくれるのが取柄や。わし、いつそのこと、秀夫もあんな奴やよつてに、天理さんに入れてしもたろかと思てまんねが、どうだすやろ？」
「さあ……？」といつたまゝ、無論私は答へる言葉を知らなかつた。
汽車が伊賀から山城の一部を通つて、大和の國を走つてゐた時分だつたと思ふ。
「さう／＼、」と丈助は何か思ひ出して、一寸いひにくさうにしてから、「あんた、上高天の『天の家』な、あそこの娘のおきさを知つてなはつたな。（彼は多分私ときさ子の話を丈太郎からでも聞いてゐたに違ひない。）あいつが今度えらい出世しよつてん。あいつの旦那といふのがな、あんた聞きなはつたか、あれは天理敎のお二代さんやつてんが、えらいもんをつかまへよつたもんやおまへんか……」
「天理敎のお二代さんて、あの……」と私がいひかけると、
「見つともない顏の人や、なか／＼やり手やといふ話やがな……」
「あの、片手のない……？」
「そや／＼、あんた知つてなはるか、」と丈助は私が急に彼の話に身を入れ出したので、張合ひが出來たやうにつゞけた。「あのお二代さんの奧さんちふ人が、つい半年程前になくなりはつてん。元から、もう五年も十年も惡うて寢てはつたんやさうながな、何病氣や知らんけど。それで、今度その後へ、おきさが直りよつてん、これは内所やがな。」
「へえ……」
「女子ちふもんはどこまで出世しよるか分らんもんやな」と丈助は別に大した感慨もなささうにいつた。
「それで、」と私はしかし興奮しながら、「それであなたはそんな天理敎にやつぱり寄附したりなんかするんですか？」
「それやまア、おきさはおきさやし、天理さんは天理さんやからな。あれでなか／＼えゝこともしてよるさかいな。早い話が人の財産をつぶ

しても、後々はその家の人を引取つて養ひよるし、それで貧乏人を助けるのも助けよるし、何ちふのか、まアあれで社會主義ちふやうなものやねな。」

私は丈助の思ひがけない知識に驚きながら、「しかし……」といひかけると、

「まアえゝやないか、」と丈助は引取つて、そこで帶の間から大型の銀時計を出して見ながら、「もう後三時間したら着くな。明日は一つ花見でもしまよか。さう〳〵、あんたは酒が飲めんねな。しかし、あの高天ヶ原の櫻を知つてなはるか。なか〳〵えゝ景色だつせ。わしももう達者なやうでも年やさかいな、今度は墓をこしらへといたろと思ひまんね。あゝ、あんたも祖母はんの墓を直しなはんねな。今度行たら、墓の土地を少し上げよ。お母はんのもこしらへといたげなはれ。あんたかて、死ぬのはまだ早いけど、どうだす、次手にこしらへときなはつたら？」

「これや驚いた！」

「いや〳〵、」と丈助は眞面目で、「死ぬことと墓をこしらへとくこととは別だつせ。まアしかし、かうしてあんたとこんな道中をしようとは夢にも思ひまへなんだな。そいさうと、あんたと初めて會うてから、もう何年になるやろな。十二三年だすか？」

「いえ、もうかれこれ十五六年ですよ。死んだ中戸さんの、あそこの帳場の間でお目にかゝつた時から。」

「そや〳〵。わしが朝鮮から歸つた時やから……」と丈助は指折つて、「そや、もう十五六年になるさかいな。あんた、あの時は二十歳位やつたかな、まだ〳〵あんたは若いな。おゝ、咲いとをる、咲いとをる！」と丈助は汽車の窓から外を眺めながら、片手に正宗の瓶を持つたまゝの手で、南の方を指さして、「高天が見えるわ、高天が見えるわ！」といつた。

軍港行進曲

一

汽車がトンネルを出ると、突然目の下に、山ふところに抱かれた灣が現れた。淵のやうな色をした水の上には、灰色の砲艦とか水雷艇とかいつた風な、小型の軍艦が浮かんでゐる。山と海岸の間の僅な空地には、マチ箱のやうな、白い建物があちこちに並んでゐる。それから、水の上に一臺、遙かに目の眩むやうな光つた夏空に一臺、飛行機が浮かんでゐる。一臺は休息してゐるやうに水の上に浮かんでゐるのだが、一臺は空を飛んでゐるのだ。まだ飛行機の幼稚な時代で、つい先達ても何處かで墜落したとか、乗手が一人死に、一人は重傷したとかいふ新聞記事が出てゐた頃だつた。

「追濱です。」

私たちの向側の、わざと少し離れた座席に坐つてゐた、八字髭を生やした大男の桂庵がいつた。

「これが追・・・?」といひながら、私は連の女の、そして私自身の、氣を引立てる爲に、多少附け元氣も手傳つてではあるが、それ以上に、初めて見る異樣な、珍しい海と港の景色を見ようとして、腰を浮かす間もなく、汽車は又別のトンネルの暗に吸ひ込まれてしまつた。が、暗の中でも、しばらく今見た目の眩む油畫のやうな景色が目の中に殘つた。

この汽車の沿線は、彼女には無論、私にも初めての道中だつた。私はその二三年前、友人と逗子まで來たことがあつた。が、逗子から先と、逗子から此方とでは、窓の外の風景は著しく變つてゐる。景色が變つてゐる上に、未知の土地に踏み込まうとする不安と驚怖とを私たちの心臟はそれ〴〵違つた意味で期待してゐた。次のトンネルを出ると、汽車は小さな停車場に止まつた。私たちが腰かけたまゝで、首だけ延ばすやうにして、窓の外の立札を見ようとすると、

「この次です。」と向うの席から無口な桂庵がいつた。

二等車の中は殆どがら空きで、所々に黒い地味な洋服を着た人たちが、大抵腕組みをして、行儀よく腰かけてゐた。逗子から先は主にさういふ人たちばかりが殘り、さういふ人たちだけが乘込んで來た。彼等は顏を見合はすと、無言で擧手の敬禮をし合つた。目立たない短劍を腰に下げてゐる。

「明日からはこいつ等が一夜男か、」と私は咄嗟にかう思ふと、彼等に敵意が感じられた。

私は並んで腰かけてゐる女の方を、こはごはちらと見ると、不斷から青白い顏が一層青白く見え、昨日まであんなに事々にヒステリイを起して自分を困らした女だが、大人しくしてゐると、ひどくしよんぼりとつゝましやかに見えた。段になつた、形のよい高い鼻は、上品ではあつたが、また薄命な運命の象徴のやうにも見えた。私と暮してゐた間、一日に一度は涙を湛へた、切長の秀麗な目は、白目が透き通つてゐるので水のやうに青く見えたが、私はこの目をヒステリイの徴と見ただけで、或淸い心の徴と見ることが出來なかつた。

彼女は自分でいひ出したのではあるが、私と僅三ヶ月ばかり同棲してゐた後で、自分で自分を賣つて、横須賀へ藝者になりに行くのであ

る。肩が少し怒つてゐたが、痩せた、脊の高い女だつた。三ケ月ほど前、私はこの女を蠣殻町の所謂私娼の出入りする待合で初めて見たのであつた。私は當時學校を出たばかりで、勤め口もなく、これといふ仕事も見つからず、母と二人で眞に洗ふやうな貧しい生活をしてゐた。が、この女に會ふと、無理して、一ケ月の中に三四度彼女の許に通ひつゞけた。そして、あわたゞしく、彼女と同棲することになつたのである。

　彼女のいふところに依ると、彼女はその一年足らず前に兩親の家を脱け出して、桂庵にだまされてその町へ賣られたといふことだつた。また別の時彼女のいふところを聞くと、或夕方、何といふことなく世の中がつまらなくなつて、（或は姉と喧嘩したとか、父親に叱られたとか、）一人で町をさ迷ひ歩いてゐる中に、一人の男に呼びかけられて、結局蠣殻町のやうな町へ來ることになつたといふ話でもあつた。かと思ふと、親に定められた許婚者を嫌つて家出した末に、到頭そんな町の女になつたともいつた。が、その町に一年足らずゐる中に、彼女は若い女の欲しがる夏冬の着物やその他の物を（殊に冬のものは十分に）こしらへた。その間に、一ケ月ばかり或株式店員か何かと世帶のやうなものを持ち、又その間の一ケ月ほど彼女自身その男の勤めてゐる同じ店で事務員をしたことがあるなどともいつた。

　私は初めてその町で彼女に會つて、朝別れる時、改めて彼女の青白い、美しい顔を見直して、「又來るよ、」といふと、

「あたし近いうちにもうこゝにゐなくなるかも知れないのよ、」と彼女はその水のやうな光を湛へた青く澄んだ目で私を見詰めながらいつた。

「どうして？」と私は戀のために驚き易くなつた心臓を波打たしながら聞き返した。

「だつて、近いうちに、あたしたちはもうこゝで商賣が出來なくなるんですもの。……」

「しかし、そんな噂は時々聞くが、いつでもお流れになつてしまふぢやないの？　尤も今度は大分やかましいらしいが……」と私も内心甚だ不安を感じながら、氣安めのやうにいふと、

「いえ〳〵、」と彼女は眞劍な顔つきで、「今度は駄目らしいの。今度の瀧澤といふ警視總監は餘程頑固なをぢさんなんですから。」

　實際、その時の檢擧は思ひ切つて峻嚴で、徹底的だつたらしい。その證據に、それから二ケ月としないうちに、蠣殻町の私娼は全く跡を絶つてしまつた。だから、私が彼女と同棲するやうになつたのは、會ひ初めてから一ケ月以内のことだつた。彼女は先づ私の職業が文筆の仕事であることに興味を持つたらしかつた。後で知つたのであるが、彼女の姉も亦、その頃私が寄稿してゐた雜誌の寄稿家だつた。自然、姉の寄稿してゐる雜誌を讀んでゐた彼女は、私の名を知つてゐたのであらう。多分、六月の頃で、「もう少しゐたら、あたしは夏の物がすつかりそろふのに、」と彼女はいつてゐたが、それでも、三箇の柳行李に一ぱい着物ばかり詰まつた荷物を持つて私の家へやつて來た。この人の家へ行つて、ぼつ〳〵夏の物を買ひそろへよう、と彼女は思つて來たに違ひない。

　彼女はその町に居る頃春子と名乘つてゐた。藝妓と違つて、その町の女たちは普通に素人風の名を名乘つてゐたが、無論本名つものは殆どなかつたから、彼女の名も假り名に違ひなかつたが、私は同棲してからも敢てそれを聞き正さうとはしなかつた。或晩、彼女は私に自分の家を教へようといつて、本郷の私たちの家から、下谷竹町の方へ歩いて行つた。その時が初めてではなかつたが、彼女はよく彼女の家庭

や、兩親や、伯父たちや、從兄弟たちの話を、實に懷しさうにすることがあつた。私たちは先にいつたやうに、そんなに馴染を重ねないうちに急に同棲するやうになつた仲だから、同じ家に住むやうになつてからも、まだ〳〵互に自分たちの過去や思出やを語り盡きなかつたのだ。彼女の父は町醫者だつた。先にいつた閨秀作家の姉と、彼女の妹と、三人姉妹で、母は岐阜の人らしかつた。夏休には、だから三人の姉妹は母の里である岐阜へよくいつたといふ話をして、そこには今でも母の母に當る祖母さんが居ると彼女はいつた。三人とも女姉妹でありながら、男のやうに活潑で、蟬取りや魚釣りにいつたといふ話を、彼女は町を歩きながら夢中でしてゐる時に、何かの拍子に、「君ちやん」とうつかりいつて、急に言葉を呑んで、彼女の姉が彼女を呼びかけた時の本名をあわてて言ひ直したのを、私は聞きのがさなかつた。「はゝア、この女は君子といふのが本名なんだな、」と思つたが、私は聞かなかつた振をして、上野廣小路から、電車通を御徒町の方へ、彼女と並んで歩いて行つた。人通りの少ない、明りの暗い所を行く時は、彼女は私と手をつないで、幼稚園の子供たちがするやうに、つないだ手を大きく振りながら歩いた。御徒町の電車通から、裏道へ入つて行つた時分から、

「もう直そこよ、」と彼女は手を離して、わざとらしく拔足をするやうな恰好で歩き出したので、私は彼女から少し離れて、呼吸を呑みながらついて行つた。しかし、それも隱れん坊か何かする、子供のやうな好奇心が半分手傳つてであつた。やがて彼女は振り返りながら、手を上げて私を抑へるやうな恰好をして「……ほら、あそこ、明りのついてゐる、あの家よ。」

見ると、暗い、片側に溝の流れてゐる町筋に、一所、大きな、明りのついてゐる窓の家があつた。窓は荒い鐵格子で組まれて、中に磨硝子の障子が嵌められてあつた。思つた程立派な家ではなかつたが、その部屋は如何にも町醫者の患者の待合室らしく、あたりの家々が皆戶が閉まつてゐる中に、そこだけ大きな窓の明りを、前の溝川に映してゐるのが、幻燈の世界のやうに見えた。私たちは一層離れ離れになつて、呼吸を凝らし、足音を忍ばせながら、その家へ近づいて行つた。彼女の方が大膽で、尻込する私をしば〳〵手招きした。往來から溝川にかゝつた板の橋を渡つて出入りするやうになつてゐる門の柱に白い軒燈が出てゐて、「瀧澤醫院」とした看板の字が讀めた。更に、私に印象深く殘つたのは、例の明るい窓の內側には、窓のすぐ傍に長椅子がおいてあるらしく、そこに掛けてゐるらしい向う向きの二人の人影が映つてゐたことであつた。一人は髮を地味な束髮に結つた老婦人で、一人は髮をお下げにした娘だつた。そして、その二箇の影法師は話をしてゐるやうな風には見えないで、別々に何か瞑想してゐるやうな恰好をしてゐるのだ。それは丁度メエテルリンクの『內部』の舞臺面そつくりの畫だつた。

「母さんと雪ちやんよ、あれ、」と彼女は一間以上後にゐる私の方に振り返つて、首を縮めながら低い聲でいつた。

「もう歸らう、歸らう、」と私は口に手を喇叭型に當てて、一層低い聲で促した。そして、彼女が窓の直前の溝川の緣迄進んでゐるのを見捨てて、私は振り向き振り向き四五步引返した。聲が出せないで、彼女に向つて、『お出でお出で』の恰好に手を激しく振りながら。

そして又私たちは、竹町から上野廣小路、切通坂と、暗いところでは、好いた同士、といふよりは、先にいつたやうに、子供同士のやうに握り合つた手を大きく振りながら、私たちの

家の方へと歸つて行つた。

彼女の父は無名の町醫者であるが、父の三人兄弟である長兄は瀧澤牧治といふ、敕選議員で、前の音樂學校の校長で、當時頗有名な盲啞學校の經營者であつた。文學のことしか知らない私は、その人の名前は彼女に聞く迄知らなかつたが、その次の兄の瀧澤行男といふ名を聞いた時は驚いた。當時の警視總監の名だからである。

「ぢやア、君は——靈巖町から——間接に君の伯父さんに迫害された譯だね？」と私が驚いていふと、

「さうよ。行伯父さん憎らしいわ。行伯父さんはそれや癇癪持なのよ。牧治伯父さんも癇癪持だけど。……あたいの父さんも、さう〳〵、三人ともみんな癇癪持だわ。」と彼女は無邪氣な調子でいつた。

「さういふと、君も癇癪持だね、」と私はいつた。彼女を知つてから僅な日數にしかならないが、彼女はよく何でもない事に怒つて、ヒステリイを起した。

「あたしのお父さんの家は信州なの。あたい一度も行つたことはないけれど、」と彼女はいつた。

「岐阜はお母さんの家なんだね？」

「さうなの。」

その後、いろ〳〵な人たちからいろ〳〵の機會に、私は瀧澤牧治や瀧澤行男の逸話などを聞いたが、彼女の父の三人の兄弟が悉く有名な癇癖家であるといふ點は一致してゐるらしかつた。——最近の瀧澤行男氏の東京市長になり振りなどは、今になつて考へて見ると、彼の姪に當る私の女のした事と似てゐるやうにさへ思はれるのである。——

その頃の彼女の話に、

「行男伯父さんは、日本で一番年が若くて知事になつたのよ、三十幾つとかで、」といつたことをも私は思ひ出した。

彼女は私と同棲してから半月も經たないうちに、ぼつ〳〵その父親ゆづりの癇癖を爆發させ出したのだつた。彼女は夫である私が思ひの外貧乏であることに先づ不滿を感じ出した。私の書く一篇の物語が歌でもうたふやうに樂しく易々書けて、それが立ち所に私たちの活動見物の小遣になり、彼女の夏羽織の代になると思つてゐたのに、私の書く一篇の物語（而もそれは大人の小說ではなく、子供の讀むお伽話なのだ。）が容易に出來ない上に、やつと出來上つて雜誌社から金を貰つて來ると、それは右から左に米屋とか薪屋とかに剝ぎとられるやうにとられてしまふ、といふやうな私たちの世帶だつた。彼女は家を飛び出してから、まだ十分にそろへかねた夏着を買ふどころか、豐富に持つてゐた冬着を、一枚々々と失つて行かねばならなかつた。今書いてゐるのが出來たら、直に質屋から出すから、と私はしば〳〵いつて、彼女の着物を借りたが、約束はいつも果せなくて、書いたものが出來た時分には、それが直に米屋とか八百屋とかの借金取の餌食となる狀態だつた。

「お兄ちやん、」（彼女は最初私を呼んだ通り、いつもかういふ呼び方で呼んだ。）「あたし、藝者にならうかしら？　お兄ちやん知つてる人で、藝者家ない？」

或日、到頭彼女はこんな風にいつた。

「春子はお兄ちやんが厭になつたの？」

彼女はかぶりを振つた。が、彼女の大きな、切の長い水色に澄んだ白目の目の中に、見る見る涙がたまつて來た。それを見ると、私の目にも……。

「お兄ちやんがあんまり貧乏だから……？」

彼女はかぶりを振つた。

「母さんがゐるから？」
彼女はかぶりを振つて、袖で顔を蔽つた。が、しばらくして、
「あたしがあんまりわが儘だから……」といつて、激しく泣き出すこともあつた。
が、今になつて考へて見ると、結局彼女はどうしてあんなにしば／＼泣いたか？ 一口にいふと、この世の不如意を、或は彼女の癇癪の蟲が、あんなにしば／＼泣いたのではないかと思へるのだつた。
そして、昨日も今日もさういふ會話をくり返してゐるうちに、私の心に、さうだ、その方がいゝかも知れない、自分たちは少し早まり過ぎた、この際思ひ切つてこの女と別れて、私にして見ると、もう少し勉強する方が本當だらう、今の自分の力では、女どころか、母親をさへ、否々、自分自身をさへ養ふのがやつとの狀態ではないか？ といつて、たとひ半月でも一ケ月でも夫婦になつた女を、而も自分の爲に何枚かの着物をなくした女が、藝者になるといふのに、手を貸すといふことは……？
「ねえ、お兄ちやん、あたし矢張りもう一度藝者になるわ、」と彼女はいつた。「その間に、お兄ちやんももつと勉强するといゝわ。……だけど、あたし、藝者になれるかしら？ あたし、三味線きらひなんだもの。前の蠣殻町のやうなとこ外にもうないかしら？ さう思ふと、行伯父さんほんとに憎らしいわ。お兄ちやん、どこか藝者家を知らない、探して來てくれない？」
「さあ……」
そこで、或日私は、私が仕事をもらつて來る加藤といふ本屋にその話を打明けて相談して見たことがあつた。彼とは、私は學生の頃古本を賣買して知合ひになつたのだが、その頃彼は古本屋を止めて、出版屋の賣殘りの本を買ひ、それを夜店屋に卸す、ぞつき屋といふ商賣をしてゐた。傍ら、時々出版をするので、私は彼からその方の仕事をもらつてゐる關係だつたのだが、誰から聞くともなしに、彼は東京堂の小僧から番頭と仕上げて、やがて東京堂を出てから古本屋を始める迄の三四年の間、色んな事をして來た、所謂世故に通じた苦勞人だといふ話を聞いてゐた。しかし、そんな噂を聞いてゐなかつたとしても、彼と交際してゐるうちには、彼が並々ならぬ、色んな世渡りをして來た苦勞人だといふことはおのづから察せられるやうな人物だつた。
「加藤さん、突然ですが、藝者になるには色んな面倒な手續きが入るもんでせうか？」
「いや、コホン、私もよく知りませんが、」と加藤は慢性氣管支何とかいふ持病があつて、始終咽喉を鳴らして、痰を吐く癖があつた。「私もよく知りませんが、」といふのはこの男の癖の一つで、凡そこの男の知らないことは何一つないと思はれる位だつたが、いつでもかういふのが口癖だつた。「そりや譯はないでせう。私たちには出來ませんが、それ／＼道は道で、商賣人がありますから。」
「お察しでせうが、その藝者になりたいといふのは僕の家のヒステリイなんですが――」と私はいつた。
「いや、コホン、」と彼は私がいふ迄もなく承知してゐるといつた風で、「唯、しかし、春子さんはお幾つでしたかな？ たしか未定年でなくても、藝者といふと、親の承諾が入るかと思ひますがね……しかし、それも何とかならないこともないでせうが。……」
春子の親といふと、その半月程前に、この本屋の加藤に頼んで、例の下谷竹町の彼女の親の家へ、彼女のことで話しに行つてもらつたことがあつた。幸、彼女の姉の秀子は××といふ雜誌に毎號少女小說を書いてゐるのを利用し

て、出版社といふ肩書のある加藤の名刺を持つて、彼女を訪問した上で、實は妹御さんの君子さんのことで一寸お話に上つたのですが、といふやうな段取で、彼に行つてもらつたのであつた。彼が行つてゐる間、上野公園の西郷隆盛の銅像の下で、私は彼を待つてゐた。

彼は首尾よく彼女の姉の秀子に會ふことが出來たが、例の溝川に面した、磨硝子の障子の嵌まつた窓のある、醫院の待合所の一隅で、秀子に會つて、早速「突然ですが、妹御さんの君子さんのことで……」といひ出すと、姉の秀子は忽ち顏色を變へて、「あんな者のことでお出でになつたのでしたら、すぐお歸り下さい、あれは私の家を出た者ですが、今では全く縁がないのですから、」といつたといふのである。

しばらく爭つてゐたが、姉の秀子も亦癇癪持と見えて、話の最中にぷいと席を立つたまま、奥の方へ入つてしまつた。後に加藤は手持無沙汰の恰好で、二十分近く待つてゐると、奥の間から五十餘りの母親らしい人が出て來て、やはり不機嫌な態度で、

「あなたですか、加藤さんと仰しやるのは?」と尋ねてから、「どうぞ此方へ、」といつて、今度は藥局らしい部屋に案内された。

が、そこでも席に着くなり、「何か君子のことでお越し下すつたさうですが、あの娘は勘當しましたも同樣で、私の方では一切かまはないことにして居りますんですから、どういふ御用件か存じませんが、あれのことでしたら、どうぞそのまゝお引取り願ひたいのですが……」と母なる人がいつた。

「いえ、決してお宅樣に御迷惑になるやうな話を持つて參りました譯ではございませんから、どうぞ一應話だけでもお聞きを願ひたいと思ひまして……」と加藤は當時三十歳そこ〳〵だつたと思ふが、苦勞人らしい調子で話を進めた。

私は上野公園の山の上で、西郷の銅像を見ることにも飽きて、臺の端の下町を見下ろす欄干の傍に立つては、今加藤の訪問してゐる竹町の方角を眺めたり、氣をかへて、淺草の十二階や、觀音堂の方を眺めたりしながらも、加藤の話も氣にかゝり、一方家に待つてゐる女が、一寸加藤の本屋まで用事があるといつて私は出て來たのだが、滅多に一人で家にゐない彼女のことだから、今頃はヒステリイを起して、母を困らして居はしないかなどと案じられたりした。

かれこれ二時間近く待つたと思つた時分に、突然背後の方に、コホン〳〵といふ、例の加藤獨特の咳の聲が聞えたので、振り向くと、彼の方でも私を探したと見えて、思はない方角からやつて來た。

「私には分りません、私には分りません、」と彼はいつになく興奮した口調でいつた。「いや、もう散々でした。實にあの家の人たちは皆さん頑固です。お父さんといふ方には到頭會ひませんでした。うちは頑固ですから、お會ひになつても駄目でせう、とお母さんがいはれるのです。兎に角、君子さんも今ではだん〳〵大人しくなつて居られるやうですし、決して外に無理なことをお願ひする譯でなく、たとひ一ケ月に一度でも二度でも、お母さんや姉さんの所へ遊びに歸らしていたゞくといふやうなことが出來たら、乾度あゝいふ利口な方ですから、それに元々大人しい方のやうにお見受けしますから、だん〳〵よくおなりになるだらうと思ひます。——かういつても、いや、もうあんなものは家の娘だとは思つてゐません、どうかその話ならお止め下さい、の一點張りで、そこへいつの間にか姉さんの秀子さんも傍へ來て、あんなものは妹ぢやないと躍起になつて加勢する

といつた風なんです。とても齒が立たないんです。時々、妹さんでせう、お下げにした娘さんが心配さうにドアを細目に開けて、部屋の樣子をのぞきに來られたのが目につきました。妹さんには矢張り姉さんが懷しいらしいですな。——しかし、それだと、又今の連れ合ひの人と別れでもするやうなことがあつたら、あんな一徹な方のことですから、若しどんな間違ひでもありましたら……承りますのに、こちらの御親戚にはお歷々の名譽ある方々がおありになるさうですが、その方々のお名前にも……といひますと、いきなり姉さんの秀子さんが、そんなこと新聞に出たつて一日切りのことですわ、ほつといて下さい、と嚙みつくやうな勢なんでせう。結局、嫁にするなり何なり、御勝手ですが、私の方とは一切關係ないことにしてお願ひしますといふ御挨拶なんです。お話にも何にもなりやしないんです。だけど、歸りしなに、若しかと思つて、まア、しかし、突然私のやうな見ず知らずの者が參りまして、お宅の祕密をあばきに來たやうにびつくりなさいますのも御無理がないとも思ひますので、さぞお氣持をお惡くしたことと存じますが、もし私が歸りましてから、後で君子さんのことで何かお考へ下さいますやうなことがありましたら、いつでもこの名刺のところへお葉書を下さいますなり、どなたか代理の方でもお話にお出で下さいますなり、その時はいつでもお目にかゝりますし、又宜しい所まで私がおうかゞひしても宜しうございますから、といつて歸つて來ましたんですがね……」そこで話手は幾つか癖の咳をした後で、「だけど、どうも、どうですかね、餘程、お母さん迄が頑固な方のやうに見受けられますから。……」

私たちはそこで老人のやうに無言の溜息をつき合つて、それ以上多く話さなかつた。そして、暫くベンチに腰を落として、無心の目で目の下の都會の姿を眺めてゐたが、やがて私が腰を浮かして、

「いろ〳〵どうも有難う。ところで、加藤さん、御迷惑ついでに、家までこれから一所に行つて下すつて、あいつを連れて花屋敷へ行くのに附合つてくれませんか？」と私はたのんだ。

「お安い御用です。」

そして、私たちは池の端から、大學の横の道を通つて、本郷の私の家へ彼女を迎へに行つた。無論、加藤本屋に彼女の家へ行つてもらつたことなどは彼女には内所で、花屋敷と聞くと、大分機嫌を惡くしてゐた彼女は、忽ち子供のやうに勇んで、それから三人で淺草に向つた。が、花屋敷で、丁度二三ヶ月ばかり前に生れたとかいふ仔獅子が、親獅子の乳を吸つてゐる檻の前に來た時、

「まア、可愛いこと！ お兄ちやん、春子にも獅子の仔買つてよォ、」などと彼女が機嫌のよい、甘たれた調子でいつたのと同時に、

「本當に可愛いもんですね、コホン、コホン、」と加藤が、彼としてはいつになく感慨深さうに、獨言のやうにいつた。「こんな猛獸でも、こんなに子を嘗めるやうに可愛がつて居ますのにね。……」

私は忽ち感じて、彼女に聞えぬやうに、彼の耳の傍で、「その代り猛獸は警視總監にはなれませんよ、」とせい一ぱいの皮肉のつもりでいつた。——

さういふいろ〳〵ないきさつがあつた後で、或日、加藤の知つてゐる或待合からの紹介といふ名で、一人の桂庵が私の家へやつて來た。小柄な、如何にも桂庵らしい風采の男で、私の方(即ち、彼女)の要求を聞くと、

「いえ、もう、お話は大抵は加藤さん、——いえ、その大體伺つて參りました。唯その、親御

さんの御承諾のないといふことが、一寸何ですが、なアに、いや、それも別に御心配はありません。その、警察の方の餘り喧しくない所で、所もさう遠い所でなく……幸、明日その先方の主人が此方へ用事があつて見えますのがありますから、いや、もうこの方なら、此方さへ御辛抱なさいます氣なら、大丈夫です、兎に角、明日もう一度私がその主人と一所に參りますから……それで、その、お金の方は二百圓で宜しいんでございましたね？」といつて、彼はそこに持出された彼女の行李の中の着物を調べながら、「これだけあつたら、あり過ぎる位でございます、結構ですとも、出の着物は主人の方の持ですから。」

翌日、その男と、五十餘りの、角力取のやうな太つた男が連れ立つて、私の家へやつて來た。それが横須賀の藝者家の主人で、大田原富松といふ男だつた。彼女はその前の晩に、寢てからしく／＼と泣き出して、「お兄ちやん、向うへ行つても、早く迎ひに來てね。いつ頃來てくれる？」といつたり、「それ迄にも時々會ひに來てくれる？……だけど、向うへ行く前に、せめて一日でも、お兄ちやんと二人で旅行したいわ。ね、今度のお金の中で、一日だけ行きませうよ。」などといつて、彼女はいろ／＼と買物の品書と計算書を手帳に認めながら、「だけど二百圓ぢや足りないわ。二百五十圓借りられないかしら？　お兄ちやん、明日賴んで見てよ。」といつた。無論、その當時の金でいつても、二百五十圓は大金ではなかつたので、翌日桂庵と主人が來た時、その話をすると、直に成立つた。そして、手金として、二百圓受取り、來る何日に桂庵と一所に行くといふことに話が定つたのである。藝者家の主人は話の間中、じろじろと絕えず私の行動を注視してゐるやうに見えた。私たちは、それから二日の間、彼女の買物に、朝から晩まで町を步いた。買物する時の彼女は子供のやうに快活だつたが、夜寢る時には、屹度泣き出して、其間買つた物の名をいつては、「あたし、こんなものみんな入らないから、いつ迄もお兄ちやんと一所にゐる。」といつたりした。が、もうどうにもならなかつた。そこで、別れの記念の爲に、前の日に、二人で羽根田の海水浴場へ行つた。彼女は新しく買つた、夏のコートを嬉しさうに着、私は新しい夏の麥藁帽を被つて。――

そのたつた一日前の、羽根田行のことを思ひ出すと、私たちは並んで腰かけてゐる汽車の中で、一言も言葉を交さないうちから、目の中が熱くなつた。どういふ桂庵の計り事か知らないが、その日此間までの桂庵の家へ行くと、別の桂庵が待つてゐて、その男が送つて行つてくれることになつたのだ。その男が先にもいつたやうに大男で、鼻の下にカイゼル髭を生やした男なのだ。「見たところ恐かない人ですが、軍人さんで、淡白な人です。」と前の桂庵が紹介していつた。

「なアに、若い時はお互樣だ。苦勞が樂みで、樂みが苦勞だ。少し稼いだら、二百圓や三百圓の借金は一年もしたら拔けますよ。」とその男は汽車の時間を待つてゐた時にいつた。それ切り、汽車の中に乘り込んでからは、他人からは殆ど連れと見えない程、離れた所に彼は席を占めて、横濱驛で「お茶を飮みますか？」と一度聲をかけた切りだつた。そのくせ、私たちにとつては、向側の席に頑張つてゐるその大男は、鐵棒でも持つた番人のやうな恐ろしい人間に見えた。

汽車が横須賀驛に着くと、私は下りる前に、しばらくプラットフォームとは反對の側の、窓の傍に立つて行つて、外の景色を眺めた。目の下の細長い停車場の構內を越えて、その停車場

の構內の水溜でもあるかのやうに、直そこに青々とした海の水が、柵や、倉庫の間に輝いて見えた。柵や、倉庫の上に、無限にひろがつてゐるその海の上に、こゝにも灰色をした水雷艇が、つながれてある材木か、引上げられた魚かのやうに、無造作に並んでゐるのであつたが、よく見ると、それ〴〵何本かの低いどつしりした煙突を持ち、水雷發射管があり、小型の大砲を具へてゐるのが分る。それ等の間を、何の練習をしてゐるのか、水兵たちが猿のやうに走り廻つてゐる。

少し離れた所に、『海軍何々倉庫』とした建物と並んで、見覺えのある一艘の軍艦がその艦尾を見せて繋がれてゐた。一本帆柱、一本煙突の軍艦だ。日清戰爭の時に働いた、『松島』『橋立』『嚴島』の姉妹艦の中の一艘に違ひない。私がその建物の蔭になつて、艦尾に記されてある名前が半分隱されてゐるのを、身體を延ばして「はし……」と讀んでゐると、

「お兄ちやん、何見てんのよ。」と女の呼ぶ聲と、

「さァ、下りませう。」と桂庵の促す聲が聞えた。

「あなたも海軍ですか？」と私が聞くと、

「いや、私は陸軍です。」と髭の桂庵は答へた。

「あそこに着いてるのは『橋立』ですね。」

「『橋立』です。もう半年も前からあそこに繋いであるんです。廢艦ですよ。」

それから、長いプラットフォームを通り過ぎて、改札口を出る迄も、私は妙に子供のやうな好奇心で、見え隱れする橋立艦に目を引かれながら、いつの間にか停車場の前の廣場に出てゐた。見ると、左手に海が迫つてゐるやうに、右手には斷崖の山が聳えてゐて、その山の下を、海に沿うて、一本の廣い道が山の麓について、通じてゐるらしい。水兵の一隊が陸戰隊の風をして歩いて來る。今先、私たちと同じ汽車に乘つてゐた黑服の人たちが、三々五々と歩いて行く。行違ふ陸戰隊の隊長が、大きな聲で號令をかけて、それ等の黑服の人たちに敬禮をする。その中を、先頭に太つた桂庵を乘せた車、その次に痩せた肩つきをした彼女の車、最後に私の車が走るのである　左側の粗末な板塀が一所切れたところに、番兵の立つてゐる門があつて、門の內側の、五間と隔てないところに海の浪が打つてゐる。門の柱には、『海軍兵器廠』といふ看板が掛つてゐる。門の中から、青服の職工の一隊が兵隊のやうに規則正しく、列を組んで出て來る。青服は賣られて行く女を見馴れたらしい目で、目と目で話し合ひながら、私の女を流し目に見て、私たちと同じ方角に進んで行く。山と海岸に沿うた道が幾つか曲り曲りして行くと、突然行手の青空に、軍艦の何台かもある、鯨の骸骨の見本かと思はれるやうな、鐵骨の籠のやうな建物が聳えてゐる。その籠の中に、きりぎりすが入つてゐるやうな恰好で、半分出來かゝつた軍艦が吊り下げられてゐる。ガラ〳〵ガラ〳〵と、その下の方で何か巨大なものが壞れるやうな音がする。

これは大變な町だ。私は車の上で引返したい思ひがした。が、先を見ると、桂庵の車と、その後から彼女の車とが、無神經にどこ迄もどこ迄も走つて行くのである。時々曲り角に來ると、前の車の彼女が私の方を振り返る。私はわざと笑つて見せたり、驚くべき機械の方を指さして見せたりする。彼女が前の日、羽根田へ行きしなに、本鄉三丁目で喜んで買つた、黑と綠色の飾りのある、白地の洋傘の下で、彼女の青白い顏が如何にもいぢらしいもののやうに見えた。それ迄割合に平穩な日を送つて來た私は、何か底の知れない、未知の人生に乘り出した夢を見てゐるやうな氣がした。

二

その後、私はこの道を幾度往復したか知れない。

初めて行つた時、彼女の抱主である藝者家の主人の大田原富松は、並んで坐つてゐる、同じやうな太つた女房に目配せして、彼等の背後に据ゑられてある牢屋のやうな體裁の金庫の中から、一束の札を取出さして、その中からほんのその百分の一位、ぱら／＼と五枚の十圓札を抜き出したのを、女房が二度數へ、亭主が一度數へて、それを私と彼女との、どちらともつかない膝の前に置きながら、

「さあ、これで今日からわしの家の娘ぢや。」

そして傍の茶箪笥の横手に貼りつけてある汽車の時間表を調べて、「おい、吉田、」と店の間の方へ聲をかけた。吉田といふのは、例の私たちを連れて來た、八字髭の桂庵の名前だ。吉田は店の間に白いシュミーズを着て、だらしなく寢轉んだり、立膝をしたりしてゐる藝者たちの中に入つて、特長のある口の重い冗談をいひながら、彼女たちにきやツ／＼と猿のやうな笑ひ聲を上げさしてゐた。不意にぐわー／＼ぐわーぐわーといふ飛行機の爆音が、驚く程近くの頭の上に響いて來たので、吉田の返事は聞えなかつた。が、吉田と共に、二三人の藝者がばたばたと帳場と店の間の間の、三坪足らずの庭に面した廊下から、空を見上げる爲に走つて來た。そして口々に、「三橋さんだわ、」「嘘よ、三橋さんは昨日飛んだばかりぢやないか？」「大野大尉よ、昨夜そ言つてたわ、」「畜生、しよつてらア！」などと叫びながら、廊下の手摺に押し合つて、空を見上げてゐた。

「こら／＼靜かにせい！」といひながら、主人の富松も、大儀さうに大きな腹を持上げて、帳場の側の縁側から空を見上げに行つた。

「これだから、飛行機は落ちるんだ。こんな低いとこを飛ぶやつがあるもんか。藝者町だけが低空飛行と來やがるんだからな、」と吉田が亭主と並んで、同じやうに空を見上げながらいつた。「おゝ、見える、見える。顏まで見えるぞ。さア、よく色男の顏をしらべて見ろ！」

その間に、彼女は疊の上に置かれた五枚の札を拾ひ上げて、一枚だけ自分の帶の間に挾み、後の四枚を私の膝の上に載せた。私はあわててそれを手で受取つて、流し目で見てゐるお上の手前、「ぢやア、これ、あのはうに、」と彼女に向つて赤くなつて、半分口の中でいひながら、懷に入れてあつた雜誌の間に挾んだ。前の晩、彼女がいつものやうに私の胸で泣きながら、「お兄ちやん。あたし後の五十圓みんな入らないから、お兄ちやん今のお仕事を止めて、そのお仕事の原稿料だけあたいが上げるから、その中から母さんに半分上げて、後の半分がある間、お兄ちやんの好きな小說をお書きなさい。そして、君子に讀まして――」「今のお仕事」といふのは、當時私が本屋の加藤から當てがはれて、毎日厭だ厭だといひながらやつてゐた、小公子フォントルロイ」の飜譯だつた。

そこへ、亭主と吉田とが座に歸つて來て、

「ぢやア、歸りませうか？」と吉田が私にいつた。「今度の汽車は……」

「五時二十分だ、」と主人の富松が促すやうにいつた。

「ぢやア、まだかれこれ一時間あるな。」

「あんたは横須賀は初めてか？」と富松が私に聞いた。

「えゝ。變つた町ですね。」

「あゝ、穴のやうな町だからな、」と富松は富松で彼の考を述べていふのに、「何處から來るのにも一本道だし、どこへ行くのも一本道だからな。吉田、さすがに軍港だね、わし等の商賣に

も要害堅固だよ。どんなにすばしこくずらかつても、屹度大船へ行く迄には捕まるからな、」と吉田にいひながら、じろりと私の顏を睨んだ。一瞬間、私にはそれが何を意味するのか合點が行かなかつたが、

「この前に矢張り東京から來たのにひもがあつてね、」と彼はつゞけた。それはつまり私が女を連れ出しに來ても、無駄だといふことを諷してゐるのだと分つた。「そいつはまご〳〵してゐて、汽車に乘り後れやがつて、停車場で捕まつてしまつたがね。……」そして、その大きな布袋のやうな腹をかゝへて笑つた。

歸りの汽車の中で、私がどうかすると目と目の間がきゆつと差し込んで來るやうな感じを堪へながら、トンネルの中に入るのを待つては指の尖で涙を拭いてゐると、行きと違つて桂庵の吉田は重い口ながら雄辯になつて、いろいろ私に慰めるやうな言葉をいつてくれた。彼は先づ私に大型の名刺をくれた。それには、肩書に公周旋業として、『勳八等、吉田卯三郎』とあつた。住所に、横濱市神奈川とあるのを指して、

「京濱電車の神奈川の驛のすぐ傍です、」と說明してから、「あの大田原富松といふ男は以前車屋をしてた男で、今のお上は矢張り横須賀の藝者だつたんですよ。あれで富松といふのは極くお人よしですが、お上の奴がなか〳〵喰へない奴でね。なアに、一本道だつて何だつて、逃げるやうにして逃げたら譯はありませんよ。私もしばらく一寸手の離せない忙しいことがあつて、これから家へ歸つて、今夜の夜行で靜岡まで行かなければならないんですが、いづれ又何かの御相談には乘りますよ。里吉なんかは腰拔だから、たよりになりやしません、」といつた。里吉といふのは、最初に私の所へ來た、加藤の紹介した桂庵の名である。

「いや、何分宜しく、」と私はその勳八等の桂庵が何といふことなく賴もしい氣がしたので、譯分らずに「何分宜しく」などといつて、頭を下げたのであらう。

「私もかういふ商賣は向かないんですがな、」と彼はつゞけた。「私の女房がやつぱり藝者なもんで、……そんな關係からついこんな商賣にはまり込んでしまつたんですが、その、今夜靜岡へ行くのも、人の商賣でなしに、自分の女房のことで行くやうな譯なんです。」

それは何でも彼の女房が何かの事情で靜岡に出てゐるのを、手近の神奈川へ住み替へさせようと計畫してゐるらしいのだつた。汽車が横濱へ着いてからも、何かまだ話のつゞきをしてゐたので、私は神奈川といふのだから、この次ででも下りるのかと思つてゐると、彼は發車間際になつて、あわてた風もなく、網棚から帽子をとると、「ぢや、御免。いづれ又、」と挨拶して下りて行つた。却つて私の方があわてて、半分腰を上げて挨拶を返したが、汽車が出てからも、何が「いづれ又」だらう？　と氣になつた。

が、この勳八等の桂庵が別れ際にいつた「いづれ又」といふ言葉は、ずつと後になつて、私がこの桂庵の家を訪問する用事が起つた時、否、その時も思ひ出さなかつた、實際は今になつて思ひ當つたといつた方が本當かも知れない、それ程、私はその後次々と起つて來た事件の爲に、物を考へてゐるといふやうな暇を持たなかつた。何故といつて、彼女は行つた日から私に手紙をよこした。私も東京の停車場に着くと、本鄕の家に歸る迄、別れた女のことばかり考へてゐた。考へてゐたといふよりも、彼女の思ひで一ぱいだつたといつた方が適當だらう。第一高等學校の前で電車を下りて、電車通でない廣い通を自分の家までの一町ばかり行く間の

コンクリートの道が、どうかすると海の上を歩いてゐるかと間違つた程、足をつけてゐる土地がふは〱に感じられ、目の前の景色が船に乘つて見てゐるやうに感じられた。かと思ふと、忽ち深い霧でも下りて來たやうに、目の前が模糊と霞んで見えた。毎日見馴れてゐる近所の道具屋も、魚屋も、菓子屋も、表具屋も、何にも見えずに通つてしまつた。とある仕舞太家と、何某博士の邸との間の、路次の中にある自分の家へ、どうして着いたか、丁度酒飲みがぐでんぐでんに醉ひながら、我家を忘れずに着くやうに、私はその頃の私の唯一の愛物であつた飼犬の鳴聲で、初めて自分の家の前に來たことを知つた。その家には、急にその子を他人の女にとられ、貧しさはいつになつても改まらず、昨日も今日も隣の間で子とその連れて來た女とが、癡情からか、女のヒステリイかの爲に、喧嘩してゐるのを聞きながら、米屋や酒屋のいひわけばかりして、痩せて、一層年とつてしまつた母と、そして今いつた犬のルビとが私を待つてゐる譯だつた。彼女はトオイ。テリアの一種で、疊の上で飼つてあつた。かん〱と鐘を叩くやうな聲で鳴く犬だつた。そして彼女だけが、母とも、私とも、そして別れて行つた女とも、誰とも友達であつた。その少ない家族の中に、一ケ月餘り私たちの家族の一人であつた女はもう居ない譯だ。

「よし〱、」と私は戶の外から犬に向つて呼びかけながら、自分の家の格子戶を開けて入ると、内から玄關の障子が開けられて、犬が彈丸のやうに土間に飛び下り、母がその後に立つてゐた。この犬はそのやうに喜ぶと、必ず少しばかり尿をする癖があつた。彼女は粗相をしたことを知ると、喜びの中にも忽ちしよげて、尾と耳を下げるのが常だつたが、「よし〱」といふ人間の言葉を解することが出來たので、その許しの言葉を聞くと、直に元氣をとり戾して、再びプロペラのやうに激しく尾をふつた。私は私自身物が皆濡れて見える日に、迎へに出た母の目が濕んでゐることを見たか、或は感じた。で、私たちは顏を見合はずに、次のやうにいつた。

「無事に落着いたか?」

「えゝ、なか〱いゝ家らしいです。よしよし、」と私はルビを抱き上げながら、母の先に立つて、茶の間へ行つた。

が、その翌日、私は今日から志を改めて、自分の仕事もし、又母にも孝行しようと思つて、午後、加藤の家へ、前の日のことを報告かたがた彼から貰つた飜譯の仕事も、これからは誰にも邪魔されずに出來るから、近い中に仕上げるといふやうな話をしに家を出かける時、ふと入口の土間に一枚の角型の封筒の手紙が來てゐるのを見出した。母は知らなかつた。私は彼女からの手紙だと思つたので、そのまゝ懷に入れて、往來を歩きながら讀んだ。鉛筆の走り書きで、いろ〱とあつて、私は矢張り早くお兄ちやんの傍に歸りたいと書いてあつた。私は電車の停留所の傍にある自動電話のボックスに飛び込んで、横須賀の彼女のゐる家の番號を尋ね、二十五錢奮發して電話をかけて見た。

「もし〱、」となるべく自分の不斷の聲でない聲で呼んだ。尤も、不斷の私の聲を向うで知る筈はないから、そんなことは何にもならなかつた。

「もし〱、」と答へたのは、女の聲だつたので、少し安心して、「喜京さんに一寸電話口へ出てもらつてくれませんか」といつた。二十里も離れてゐるのに、市内の電話と聲が變らないのが私を喜ばした。が、喜んでゐる暇もなく、

「どなたですか?」と男の聲に變つた。聞覺え

のある聲なので、私ははツとした。主人の富松の布袋のやうな顔が一時に目の前に立ちはだかつたやうな氣がした。先に電話に出たのはお上だつたのだ。彼女は大きなからだに似ず、可愛らしい聲だつたといふ記憶があつた。ついでに、勳八等の桂庵の顔も浮かんで來た。

　私はあわてて、假り聲も何も忘れて、自分の本名を名乗ると、

「何用です？」と太つた聲が聞いた。

「ちよつと、その、忘れた用事があるものですから……」

「用事なら手紙でいゝぢやないか。電話賃だつてもつたいない。……本人は今風呂へ行つてるからことづけしませう。」

「ぢやア、手紙で書きます、」といつて、私はそこ〳〵に電話を切つて、その電話の受話機が大田原富松そのものであるかのやうに、あわただしくボックスを飛び出した。出たところが、一團の高等學校の生徒の來る中に突き當つて、あやまりながら、停留所の電信棒の傍まで走つた。それから、その次には、二三日後、彼女と手紙で諜し合はしておいて、電話で話をしたが、その時もうまく行かなかつた。しかし、それから二三日して、主人夫婦が箱根へ四五日がけで行つたといふ彼女からの手紙を受取ると、私はそこ〳〵に、今度は電話でなく、到頭橫須賀へ出かけて行つたのだつた。

　どういふ譯か、橫須賀といふ町には、宿屋らしい宿屋がないのだ。恐らく日本の中で、市と名のつく市で、橫須賀ほど宿屋のない町は少いだらうと思ふ。多分、橫須賀に泊つて、何處へ見物に行くといふ所がないのが一つだらう。汽車は大船から一本の道で、そこが行き止まりになつてゐるが、そこは唯軍港であるだけで、商業も工業もない。三浦半島の三崎に行く客は、停車場からすぐ乘合自動車で旅をつゞけるのが普通になつてゐるらしい。軍用商人などといふ連中は、大方藝者の泊る料理屋兼旅館といふ家に泊るらしい。これは成程、大田原富松がいつた通り、要害堅固の土地に違ひなかつた。私は一人停車場で下りて、相變らず昨日と同じ恰好で、陸地と並んで橫づけになつてゐる橋立艦を眺めながら、ぼかり〳〵と、南畫の景色に見るやうな、幅の狹い脊の高い山が、道の片側に艦隊のやうに並んでゐる下を、水兵や、士官や、職工やがその往來する人々の八分通りである道を、一人でとぼ〳〵と町に向つて歩いた。『海軍兵器廠』、それから例の空中にぶら下つてゐるやうに見える鐵の籠、(後で聞いたところに依ると、軍艦をこしらへる機械ださうだ。)どことも知れず、ぐわら〳〵ぐわら〳〵と、巨大な鐵の鎖を打合はし、はふり出すやうな音、喇叭の響、號令をかける聲、——この前車で通つた時から思ふと、十倍も長く思はれる道だ。二度ばかり途中で人に聞いて、やつとそこから市街の始まる、寫眞屋の前に出た。道はそこから市街になる代りに、これ迄の道の四分の一位の狹さになる、恐らく前のは軍用道路とでもいふのだらう、兩側の商店は靴屋でも、本屋でも、荒物屋でも、煎餅屋でも、洋服屋でも、看板とか、飾窓とか、どこかに必ず軍艦とか、水雷とか、飛行機とか、水兵とかの文句か繪が書いてある。この町に來ると、海軍の人でなければ、人でないといはれるのも尤もだ。

　しかし、その町を歩いてゐる時、私はふと遠い昔の、幾らかロマンティックな思出を思ひ出した。それは私自身のことで、私は子供の頃畫をかくことが好きで、暇さへあると畫をかいて居た。寫生もしたが、寫生の前か、その間にか、私が最も好んで描いたのは軍艦の畫だつた。菊判を横にした位の大きさで、横に青い絹のリボンで綴ぢた『帝國軍艦帖』といふものが

あつた。だん／＼贅澤になつて、普通の寫眞版では氣に入らなくなり、コロタイプ版のを好んだ。その時分としては、八十錢とか、一圓とかいふ可成り高價なものだつた。大抵一枚に一艘の軍艦の、或ものは浪を蹴り、黒い煙を吐いて走つてゐるもの、或は港に碇舶してゐるもの、滿艦飾をしてゐるもの。表紙は赤と金の日の丸の旗を圖案化したものとか、上等のは黒い革製のとかがあつた。一册で三十枚位のもの、五十枚位のもの、何でもそんなのを私は四五册持つてゐた。終には『帝國軍艦』ばかりでなく『列國東洋艦隊寫眞帖』などといふのも買つた。どの寫眞帖だか覺えてゐないが、表紙の端に1903としてあつたのを、それが一番新しい本だつたことと、千九百三年などといふ、西洋暦を知つたことを覺えてゐるから、私の十二三歳の頃だつたらう。私はその軍艦帖の軍艦を片端から、殆ど一日に一枚づつ位の割合で、畫用紙に、その頃はやつた擦筆畫といふ方法で模寫した。初めに鉛筆で主な輪郭をとつて、黒いところや、ぼかす所を、なめし革を筆の形にしたものの尖に、鉛筆の粉か、木炭の粉をつけて、濃淡を出すのである。『帝國軍艦帖』は必ず『三笠』が先頭に出てゐた。總噸數一萬五千何百噸、――どうしたつて『三笠』が一番噸數が多いのだ。それに『三笠』は黒い煙突に横に三本の白線が入つてゐる。私のその軍艦熱は千九百四年迄もつゞいてゐたと見えて、日露戰爭の初期に新にアルゼンチンから讓つてもらつた『日進』『春日』の二艦の入つてゐる軍艦帖を買つたことさへ覺えてゐる。『日進』『春日』は日露戰爭を始めた大日本海軍にとつて非常な喜びであつたが、私にとつても亦別の喜びだつた。といふのは、その頃まだ日本の海軍には、大抵二本帆柱一本煙突或は二本帆柱二本煙突、少し變つてゐるのが、『松島』『橋立』『嚴島』で各々一本帆柱一本煙突だつたが、それ等はもう日清戰爭時分の老朽艦だつた。ところが、私の『列國東洋艦隊寫眞帖』（これも大抵一度づつ皆擦筆畫でかいたのだが）には、四本煙突とか、三本煙突とか、又形からいつても強さうな、ハイカラな軍艦が、和蘭とか、西班牙とかいふやうな國でさへ持つてゐる。それに、日本は『三笠』でも、『富士』でも、『敷島』でも、『八島』でも、皆同じやうな平凡な形の軍艦ばかりだつた。外國のには軸の恰好なども、隨分奇抜なのがある。名前にしても、片假名で、軍艦帖の頁の右の端から左の端までつゞいてゐるやうな長い名がある。その中、愈々日露戰爭が始まつたのだが、私はだから露西亞の艦隊にゐる軍艦も、大抵その名も知つてゐた。浦鹽艦隊が暴れた時など、『ロシア』とか『リュウリック』とか、總て一度や二度擦筆畫で描いて知つてゐるので、それ等の軍艦が大海を走つてゐるのを幾度も夢に見た位だつた。――私はとある繪葉書屋の店頭に立止まつて、久しぶりで日本帝國軍艦の繪葉書を見た。私の畫をかいた頃は、繪葉書といふものがまだ存在しなかつた頃だ。『鹿島』、『香取』、『比叡』、『金剛』。――私が子供の頃にこれ等の軍艦を見たら、どんなに喜んだらう。恐らく二三枚づつ擦筆で畫いて、親しい友達の間に一枚づつ配つてその喜びを分つて歩いたかも知れない。新しい型、新しい樣式、煙突の形も、大砲の形も、その置き方も、悉く變つてゐる。私はしばらくそれ等の軍艦の寫眞を見て時を過ごした。『橋立』が停車場の隣の海につながれてゐるのは不思議でない。買はうと申し込んだら、賣つてくれるに違ひない。しかし、無論、軍艦どころか、私は横須賀まで來て、東京への歸りの汽車賃をやつと位の金しか持つてゐなかつた。おゝ、果敢なき橋立艦の夢よ！

（讀者よ、しかしこれは私の單なる果敢なき夢でないのだ。私の竹馬の友達で、大阪のことだ、西村といふ鐵屑屋の息子があつた。小學校は違つたが、中學校の時は一所だつた。何故といつて、彼は砲兵工廠の職工の子だつた。私は小學校はブルジョア子弟を專門に敎育する學校に行つてゐたのだが、家が近かつたので、町内の友達の紹介で彼を知つたのだが、その頃は彼の家は小さな鐵屑屋だつた。が、いつでも店では商賣などしてゐるやうに見えなかつた。さうだらう、親父は每朝早く靑い服を着て砲兵工廠に行くといふのだから、商賣など出來ないのだらうと私は思つてゐた。ところが、高等小學校の二年を出た頃、彼と同じ中學の試驗を受けたので、一層親しくなつた。誰かに聞いたのだが、彼の親父はその二三年前職工を止めて、大砲の破れたのとか、鐵砲の潰れたのなどを砲兵工廠から安く買つて、それで大變金持になつたといふのだ。それから又四五年後、日清戰爭の時、淸國から分捕した鎭遠艦をその家で買つたといふ話を聞いた時には、私たちは皆感嘆した。何故かといつて、その一二年前の秋、海軍大演習が終つて、聯合艦隊が大阪灣に來た時、私たちの見に行つたのは敷島艦だつた。小さな軍艦と違つて、大きな軍艦はそれ〴〵築港の棧橋から離れたところに碇船してゐたので、私たちは艀に乘つて、それ〴〵目指す軍艦に向つて行つた。私たちの一隊の案内役は、敎頭の殿村といふ退役海軍大尉だつた。「殿村先生、あそこにゐる化體な恰好の軍艦は何といふんです？」と艀の中の學生の一人が尋ねた。見ると、甲板の低い、成程一見して風變りの船だつた。が、私は例の軍艦帖を模寫した知識で知つてゐた。「あれはこの前の日淸戰爭の時に分捕した『鎭遠』といふ軍艦だよ」と私がいふと、舳にゐた殿村先生は、その日に限つて海軍軍人の制服を着てゐたが、彼方の軍艦に向つて望遠鏡を向けてゐたが、「さうだ、えらいぞ、誰だ？さうだ。『鎭遠』だ」といつたので、私は大いに面目を施したことがあつた。その鎭遠をあの鐵屑屋は買つて、どうするのだらう、と私たちは思つた。すると、或日學校で誰かが「西村の家の店に『鎭遠』の大砲が置いてあるぞ」といひふらしたので、私も早速その日の放課後に行つて見た。すると、果して『鎭遠』の主砲が西村の家の店から往來に向つて、象が鼻を上げたやうな恰好をして据ゑてあつた。その大砲の爲に、家の中へ出入りするのがやつとだつた。級友の西村はその大砲に片手をかけて、私たちが見に行くと、自慢さうにその大砲の腹を叩いてゐた。それで彼の家は忽ち數十萬圓の金持になつたといふ評判であつた。讀者よ、私が橋立艦を買ふ夢を見たのは、全くの夢でないといふ所以である。）

が、夢には違ひなかつた。道はやがて一つの大通に出て、見覺えのある郵便局の前を過ぎると、間もなく彼女のゐる町に出る筈である。それが横須賀の銀座通に當る所らしい。しかし、大通は何となく目につく氣がするので、私は左手に曲つて、大通と並行してゐると思はれる裏町に入つて行くと、思ひの外、目の前の町のはづれに、又近々と海が見えた。その海は停車場の邊の海と違つて、一面に靑々として平和な浪が輝いてゐて、遙かに綠の樹木に蔽はれた島が浮かんでゐる。私はなるべく日の暮頃に彼女のゐる町に入りたいと思つてゐたので、時間を消す爲に海岸まで行つて見た。すると石垣で固められた海岸に近づくに從つて、家と家との間に仕切られて見えた海が次第に擴大すると共に、左手の方に、忽ち軍港の海が案外間近に展開したのに驚かされた。灣をなして海に迫つてゐる山の下に、建物といへば兵營のやう

なのや、工場のやうなのや、煙突や、タンクや、例の軍艦を造る鐵籠や、ドックや、起重機や、その他、海の上には戰鬪艦、巡洋艦、砲艦、水雷艇、ランチ。——それ等のものが、斜めに夕日を受けて、或ものは白く、或ものは黄色に、赤に、青に、或は明るく、或は暗く、何か冒險小說の插畫に見るやうな風景を展開してゐた。そして、それ等のものから起る金屬を打合はすやうな、笛を吹くやうな、太鼓を叩くやうな、わめくやうな、吠えるやうな、種々樣々の雜音が、津波の寄せて來るやうな響を海の上に送つてゐる。が、その反對の、右手を見ると、港は全く別の景色を展開してゐた。夕日を背から浴びて、墨繪のやうに見える穩かな形をした山に圍まれて、何處かその昔の靜かな漁村の面影を想像させるやうな、穩かな風景だつた。海岸には煙突のある建物など殆ど見えず、海には軍艦や水雷艇の影もなく、ゆるやかな曲線で海を抱いてゐる灣に沿うて、町は可成りの長さに延びてはゐるが、灣の近くまで突き出てゐる家は飛び飛びにしかないので、そこだけ見てゐると、廣重の景色を彷彿とさせて居るといつても誇張ではなかつた。家の形を見るのに、渚に突き出てゐる家は、多分料理屋のやうな建物に見えた。一番遠く、町から少し離れて、最も長く海中に突き出てゐる位置にある家など、誰かの別莊のやうにも見えたが、家の形からいつて、矢張り料理屋らしかつた。丁度、傍へ小學生らしい少年が口笛を吹きながらやつて來たので、尋ねると、

「あれか、あれは多度の鼻だよ、」と少年は無造作に答へた。

「所の名前ぢやない、あの家は何だと聞くんだよ、」と私がいふと、

「宿屋だよ、」と少年はいつて「料理屋だよ、」といひ直した。

「何方さ？」

「知らないよ、」といつて、彼はすた〳〵町の方へ引返して行つた。

その時、多度の鼻よりもつと近くの鼻の家から、絃歌の聲が聞え出したので、私は思ひ立つて町の方へ引返した。町の中へ歸ると、案外あたりが暗くなつてゐるので、驚いて道を急いだ。この前に來た時は、車で來て車で歸つたばかりだから、初めての町に來たのと同じだつた。うつかり道を曲ると、又海の見える所へ出たり、反對の方へ少し歩いて行くと、先の郵便局のつゞきかと思へる銀座通のやうな町へ出たり、その中、とある狹い横町をうろ〳〵してゐると、突然、「眼鏡さん、眼鏡さん！」と呼びかけられてびつくりした。見ると、家並に玩具のやうな小さな格子戶の嵌まつた窓があつて、入口と覺しいところに短い暖簾が掛つてゐる。その前に申譯のやうに鉢植の木とか、二三本の竹の植込のやうなものがある。「眼鏡さん、眼鏡さん！」と呼ぶ聲は、その暖簾の下から聞えるのだ。見ると、その下の、入口の右手の障子が細目に開いてゐて、大きな束髮に結つた眞白な顏の女の顏が覗いてゐる。眞黒な束髮の頂に南のやうに並んだ髮插の石がきら〳〵光つて見える。口の中の金齒か又それと違つた色にきらきらと輝いてゐる。

「まア、樣子がいゝのね。一寸お入りよ。あんた、今度來た活辯さんぢやない？　一寸一寸……」

これはいけない、と思つて、私は足を早めて、曲り又曲りしてゐると、活動寫眞館の前に出た。この活動寫眞館はこの前來た時、大田原富松と、彼女と、私と三人で、公正役場とかへ出かけた時に、見たことがあつたのを思ひ出した。何れにしても、活動寫眞館や、飮酒屋のある所を見ると、花柳界もこの邊に違ひな

いと思つて、私は道を曲り又曲りして、その界隈を離れないやうに歩いた。と、ふと待合らしい、見覺えのあるやうな家を見出した。それは丁度町の角になつてゐた。門があつて、待合のやうな庭があつて、玄關へ通じてゐる敷石が見えた。軒燈を見ると、『富の家』としてある。はツとして私は足を早めて大急ぎで角を廻ると、同じ家の別の入口の格子戸を見て、一層驚いた。それは此間來た大田原富松の家である。富松の家は一方で藝者家をしてゐて、横町で、同じ棟つゞきの家で待合をしてゐるといふことを聞いたのを思ひ出した。私は一旦大通へ出て、それから一町ばかり行つたところで、再び角を曲つて、裏通へ戻つて見た。それから恐る恐る『富の家』の見える所まで、何といふ譯もなくその家の有無しを確かめに行つて、又後戻りして、愈々この邊でどこか料理屋を見つけて入らうと思つた。もう町は大方暗くなつてゐた。とある、待合らしい、門から可成り長い植込の間を通して玄關の見える家の中から、一人の脊の高い藝者が、座敷姿で俯向いたまゝ出て來て、私の反對の方へ歩いて行つた。ふとその女について行つて、私は樣子を聞いて見ようかと思つたが、すぐ思ひ止まつて、元の道を進みながら、私の女もあんな風になつて、かういふ待合に出沒してゐるのだらうと思ふと、興奮と勇氣が湧いて來たので、いきなり目についた、大きな門構への料理屋に飛び込んだ。

料理屋の中は湧くやうな騷ぎだつた。餘程大きな宴會が始まつてゐるらしかつた。その宴會の騷ぎは私にとつて却つて好都合だつた。といふのは、私がそこの玄關に立つた時、宴會の、醉つてうたふ客たちが、彼等の部屋から溢れ出して、一列になつて玄關へ通ずる廊下に來かゝつてゐるところで、迎へに出た女中は私を「どうぞ、お早く。」といつて、あわたゞしく、奧の部屋に案內してくれた。しかし、私は女中の後について行く途で、宴會の醉拂ひの一行と擦れ違つた。客は海軍士官で、士官と藝者と、士官と藝者と、一人おきに一列に並んで、歌つてゐる歌が愉快ではないか。

「烟も見えず雲もなく
風も起らず波立たず
かゞみの如き黃海は
曇りそめたり時の間に」

足踏み鳴らして、どら聲と、黃色い聲と、手を叩く音と、三味線を掻き鳴らす音との、無限の進行なのだ。私はそれ等の人々の顏は見なかつたが、女中の後について、顏を俯向けて歩く目に、不思議な行進曲を、目を上げて見るよりはつきりと見た。これが軍港行進曲といふのだ。

軍港行進曲のお蔭で、私は望み通り奧まつた部屋に通されて、酒が飲めないので、すぐに御飯を命じて、「あ、それから……」といつた。「あの、大宮といふ藝者家があつたね、あそこの喜京といふのを呼んでくれないか？」と頼んで、急いで煙草に火をつけた。「あ、一寸々々、姐さん……」と追つかけたが、もう聞えなかつた。彼女が若し出てゐなかつたら、彼女の手紙に書いて來た、彼女の一番仲よしだといふ勝栗といふ半玉を呼んでくれ、いや、ゐてもゐなくても、勝栗を呼んでやつてくれと彼女からの手紙にあつたのを思ひ出して、その半玉もかけておかうと思つたのだが、遲かつた。丁度私の部屋の外の廊下を、軍港行進曲の一行が通りかゝつた。廊下で聞くのも、部屋で襖を隔てて聞いてゐるのも、同じ鼓膜を破る程の大騷ぎだ。

「まだ沈まずや定遠は」と一頻り頓狂な、調子外れの女の金切聲が聞えるかと思ふと、

「まだ沈まずや何とか何とかは……」と太い男

の聲で、何とか何とかといふのは藝者の名らしかつた。

「きやーツ！」と女の叫ぶ聲が起る。……

しばらくして、先の女中が入つて來て、廊下の群集から見えないやうに、後を大急ぎで締めて、膝を突きながら、

「喜京さん、今出たばかりださうですが……」と氣の毒さうにいつた。

「何にしても、その次に、ぢやア屹度此方へ廻るやうにしてくれ給へ。」

「はツ。しかし少し暇がかゝるだらうと思ひますけど……？」

「暇がかゝつてもいゝ、是非。一寸でいゝんだから、會ひたいんだ。」

「はツ。」

「あ、一寸。それから、同じ家の半玉で勝栗といふのがゐたら……」

「勝ちやんはこちらの宴會に來て居りますんですが……」

「呼んでもらへないか？」

「まだ少し……」と女中は首を傾けながらいつた。

「ぢやア、食べる物を。」

そのうち廊下の外の軍港行進曲も少し下火になつたらしく、それにつれて私は今迄まぎれるとなくまぎれてゐた心細さがつのつて來た。若し幾ら待つても彼女に會へなかつたら、私は無錢飲食に近いことをする譯になるからだ。といつて、餘り急ぎ立てて、若し自分の風采などが向うの家に知れるやうなことがあつたら、それこそ絶對に彼女をよこさないだらう。いろいろと思ふと、立つてもゐてもゐられなくなつて來た。食事を濟ましてからは、一層氣が揉めて來た。私は手紙を書いて女中に、家へとゞけないで、箱屋にでも賴んで、それを本人にぢかに渡してくれさへしたら、來てくれなくてもいいから、と賴んだ。來られなければ金をとゞけてくれ、と書いたのだ。女中も私の困つてゐるらしいのに同情して、だん〳〵親身になつて骨を折つてくれ出した。

いつか軍港行進曲も止んでしまつた。私は四疊半の部屋の、長細い庭に面した緣側の窓にもたれて、腕を組んでゐた。どうなるか知らと思つた。その庭に面して、同じやうな部屋が無數にあるらしかつた。それに建物は三階建らしかつた。庭は木立で目隱しになつて、その向うに宴會用の廣間や、それに準じた廣間があると見えた。それも三階建で、何れも一二年前の新築らしく、東京の木挽町あたりの大抵の下宿屋よりも大きかつた。或は大抵の大きな料理屋よりも大きかつたかも知れない。大きいのはかまはないが、私の右隣の部屋にも、左隣の部屋にも、一人づつの客が來てゐて、一人づつ藝者が來てゐる氣配だつた。その氣配は、軍港行進曲と違つて、私を一層心細くした。が、逃げ出す譯にも行かなかつた。

ふと、その時どこかで人の聲がした。が、それは無論私に關係のない聲だと思つて耳に止めてゐなかつた。と、すつと靜かに唐紙の開く音がした。それも唐紙の開く音とは思はないで、何氣なく音の方へ目をやると、入口に立つてゐる女中の姿と、その下に坐つて此方に向つてお辭儀をしてゐる藝者の姿が見えた。顏を上げた時、彼女は聲を出さないで、

「あ！」といつたやうに見えた。別の人かと思ふ程、綺麗な藝者になつてゐた。彼女の顏の唯一の缺點である、上唇の厚いのを、白粉と紅とで化粧してあるのが、却つて美しく見えた。

「やア！」と私はいつた。

「お待遠さま、」と女中はいつたまゝ、すぐ引込んでしまつた。

しばらく向き合つて、默つてゐた後で、

「あたし、この手紙、今見たのよ。」と彼女は私の手紙を帯の間から出しながらいつた。「もう一足箱屋さんが遲かつたら、外へ廻るとこだつたのよ。あゝ、咽喉が渇いた。そのおサイダ頂戴！」

彼女は食臺の上へ手を延ばして、私がそれをとつてやらうとする前に、私の飲みさしのコツプのサイダを一息に飲んで、その上に私が新しく注いでやつたのを、次の一息で半分ほど飲むと、「あゝ、咽喉が渇いた。お兄ちやん、あたしの顏赤い？」と聞いた。

「青いよ。」

「さう。あたしお酒を飲まされたの。」いひながら、帯の間から見覺えのある蟇口を出して、中から小さく疊んだ十圓札と、銀貨を五六枚出して、「これだけあるわ。これで足りるでせう。こんな家高いから。今夜もう遲いから泊るでせう。どこか宿屋にお泊りなさいね。一所に出て探しませう。」

「ありがたう。」

私は唯それだけいつて、柱に備へつけてあるベルを押した。

表へ出た所で、暗い町を二人肩を並べて歩いた。彼女は割合に快活だつた。すつかり藝者の風になつた彼女と、久しぶりで夜の町を歩いてゐると、幸福がかへつて來たやうな氣がした。が、昔のやうに手をつないで、それを子供のやうに振つて歩くことはしなかつた。夕方通つた活動寫眞館が向うの町角に見えた。

「あの活動、昨日勝栗さんと見に行つたのよ。面白いわ」東京のよりも馬鹿々々しくて面白いといふ意味らしかつた。

「勝栗さん、さつき呼んだんだが、あの家の宴會に來てるといふから、後で呼んでくれといつたんだが……」と私はいつた。

「さう、あたし、今行つてたお座敷で、あたしが行つた時入れ違ひで出て行つたわ。可愛い子よ。あした連れて行くわ。あそこよ、あんな宿屋しかないの、横須賀には、」といひながら、大通へ出て二三軒行つた先の、『房州屋』といふ看板の出てゐる貧弱な一軒の宿屋を指さした。

「あゝ、いゝよ、いゝよ、なるべく安い宿屋でいゝよ。」

「ぢやあ、明日の朝、もう少しゲルド持つて行つて上げるわ、」と彼女はその宿屋の前で口早やにいつて、入口の所まで送つて來てくれた。

そして、そこで歸りかけて、「一寸上つて部屋だけ見て行かう、」といつて、番頭の後につゞいて、私と一所にとつつきの階段を上つて行つた。

靜かな部屋を望んだのだが、明日になつたら奥の離れが空きますからといつて、表の通の見える二方障子の六疊の部屋に通された。

「これは退屈しなくていゝよ、」といひながら、私が久しぶりに晴れた氣持で、障子を開け放しにして、手摺にもたれて表の通を見下ろしてゐると、

「お兄ちやん。そんな所開けたら駄目ぢやないの。直そこが家だから、」と彼女はたしなめた。

「大變々々、」と私はわざと大仰にいつて、ぴつしやり障子を締めて、初めてゆつくりと彼女と向き合つて坐つた。私は二十七歳で、彼女は二十二歳だつた。私たちは初めてしみ〴〵と顏を近寄せた。

彼女は一寸部屋を見るだけといつて、三十分程ゐてしまつた。そして、「後で、又ちよつと來るかも知れないわ、」といつて、あわてて歸つて行つた。

三

その晩の十二時過ぎ、私が寢床に入らうとし

てゐると、急に階段の方に彼女の聲と、そして二人らしい足音がして、がらりと障子が開くのと一所に彼女が現れ、その後に半玉らしい娘が覗くやうに現れた。

「勝ちやん、お入りなさい。」と彼女は促すやうにいつた。

私はこの時初めて噂に聞いてゐた勝栗を見たのである。勝栗とは、如何にも軍港の雛妓の名らしい。彼女はその時十五歳かであつた。無邪氣な可愛らしい娘だつた。

「あたし、この人だけがお友達よ。」と彼女は勝栗の肩を抱へるやうにして引寄せながら、「可愛いでせう？」といつた。

「あゝ。」私はそんな場合、直にお世辭の言葉が出ない質で、無理に笑顔をしながら、勝栗の派手な友禪の膝の邊に目を落した。

「あたしお兄ちやんの所へ歸る時は、あたしのお人形さんみんな勝ちやんに上げて行くの。」

「姉さん、あの持つて來たものは？」と勝栗にいはれて、

「さう〳〵、出してごらん。」と彼女がいふと、勝栗は袂の下から竹の皮の包を出した。私の好きな餅菓子を持つて來たのだ。

しばらく話してゐた後で、二人は「又あした」といつて歸つて行つた。

翌朝、私は少し遲く起きたが、それでも顏を洗つて、表通の見える廊下の、往來から此方の姿を見られない所をと思つて、隅つこの戸袋の蔭に椅子を持出した時は、最早や出勤する職工、兵曹、士官、學校へ行く學生たちが、三々五々と往來する頃で、私は町を見下ろしながら、時々彼女のゐる家への曲り角や、向うの屋根越しに見えるペンキ塗りの活動寫眞館の塔やに目を放つて、まだ〳〵大田原富松も、彼の女房も目を醒ますまい、もつと廊下の眞中へ出て、今のうちに横須賀の町を存分に見ておいてやらうと、戸袋の蔭から椅子を乘り出した。と、向うの横町の角の漬物屋のところに、不斷着を着てゐるのと、片手に風呂敷包を抱へてゐるのとで、昨夜と違つてひどくしよんぼりと見える勝栗が、ちらと栗鼠のやうな敏捷さで、後を振向いたかと思ふと、素早く斜めに町を突切つて、私の宿の方へ走つて來た。

「おーい。」と私が上から聲をかけようとする間もないうちに、彼女は宿の表でも一度ちらと後を振向いて、入口に驅込んだらしい氣配がした。私はわざと迎へに出ずに待つてゐると、ばたばたと子供らしい足音で階段を上つて來て、呼吸を切らしながら、

「お兄ちやん、これお姉さんから。」と彼女はいつて、抱へるやうにして持つて來た風呂敷包と手紙を渡した。「お姉さんもう一寸後から來ますつて。さよなら。」

「おい、待て待て。」と私が呼びかける聲に返事もしないで、彼女は極り惡さうにそこ〳〵に歸つてしまつた。風呂敷包の中は衣類らしかつた。手紙には、誰も起きない中にこれだけ持出しておいた、後で行つて相談すると書いてあつた。私はそれを見て彼女の無鐵砲よりも自分の無鐵砲だつたことを後悔し出した。

しかし、私はその時決心して、先を越して、私の、母のを借りてゐる時計を質に入れることにした。そこで宿屋のお上を呼んで、お上の手からそれを質入れさした。彼女は午後になつて、勝栗を連れてやつて來た。そして、私のしたことを聞くと、折角の自分の好意を無駄にするといつて怒つた。

「やつとの思ひで持出して來たもの、持つて歸れやしないぢやないの？」と彼女は持前のヒステリイを起しさうな恐い顏になつていつた。「ぢやア、あたしこれを質に持つて行つて、勝ちやんにお人形さんを買つて上げるわ！」

「お姉さん、あたし又明日の朝早く起きて取りに來ますから、お兄ちやんと喧嘩しないでよ、」と傍から勝栗がとりなすやうにいつた。

「さうしてくれ、そしたら今度僕が來る時、法界屋さん(勝栗が餘り痩せつぽつちなので、赤い着物を着てゐると、法界節の子供のやうに見えたので、私がそんな綽名をつけたのだ。)に東京からいゝお人形を買つて來てやるよ、」と私はいつた。――

それから、私は東京と横須賀の間を何度か往復した。ところが、三度目だか、四度目だかの時だつた。私はふと、さうだ、私の中學の級友に四五人も海軍兵學校に入つたものがあつたことを思ひ出した。私が今だに何にもになつてゐないのに、彼等はもう海軍中尉位になつてゐる筈だつた。すると、或時、例の宿屋へ彼女と勝栗が遊びに來た時、何かの話の次手に、

「あら、厭だ、お姉さん。あたし風はまさんきらひだわ、」と勝栗がいつてゐる言葉を私は聞きとがめて、

「何? 風はま?」と聞くと、

彼女は傍から、

「また、勝ちやん、風はまさんだつて、風はやさんよ、」と訂正した。

「かぜは、まさん、かぜは、まさん……」

「あら、舌が廻らないの?」

「おい〳〵、風早といふのは少ない名だが、矢張り海軍士官か、位は何だ?」と私が傍から聞くと、

「中尉よ。」

「どんな顏の男だ、色が黑い?」

「あら、いやアだ、海軍士官は皆色が黑いわ、」と勝栗が笑つた。

「さうか、ぢやア、脊が高いか?」

「えゝ、高いわ。それやのつぽよ。」

「大阪ぢやないか、その男は?」と私は膝を乘り出して聞いた。

「どう? お姉さん?」

「大阪だわ。」

「で、僕と同い年ぐらゐだね? ぢやア、矢張り風早だな、」と私は獨言つて、「その外にどんな海軍士官を知つてる、名前をいつて御覽。」

「それや無理だわ、」彼女は笑ひながら、「それよりお兄ちやんが知つてる人の名をいへばいゝぢやアないの。」

「それやさうだが、風早の外はみんな有り觸れた名だからね。」私はしかし思ひ出し思ひ出し、

「それぢやア、矢崎といふのは?」

「矢崎さん知つてるわ、矢崎さん知つてるわ、」と勝栗が鬼の首でもとつたやうに叫んだ。「矢崎、矢崎、何とかいつたわ。矢崎、三次郎、ね、お姉さん?……」

「さうだ、えらい、その矢崎三次郎だ!」と私は思はず膝を乘り出して叫んだ。「矢崎三次郎も中尉か?」

「えゝ、さうよ。矢崎さんもお兄ちやんのお友達?」と彼女がいつた。「勝ちやん岡惚れしてるのよ。」

「うそよオ、お姉さん!」

「だけど、あたしンちの小花さんのインチ(Intimate の略。海軍士官特有の隱語)なの。二人ともそれや大熱々よ。勝ちやん、あの二人の寫つてゐる寫眞を持つてない?」

「見せてくれよ、それ持つて來て、」と私はいつた。そして後は獨言で、「なアんだ、矢崎の奴も横須賀にゐたのか。何といふ軍艦に乘つてゐるんだ?」

「軍艦ぢやないわ、砲術學校だわ。」

「ぢやア、風早は?」

「風はまさんは……」

「また風はまさんだつて、風早さんよ。」
「風はやさんは飛行機なのね、お姉さん？」
「へえ、風早は飛行機か、」と私は叫んだ。風早は中學時代から機械體操が巧くて、『大和魂』といふ、鐵の棒の上から地上に飛び下りる瞬間に、空中で一度くるりと身體を轉廻させる術の出來るものは、學校中で彼一人だつた。鐵棒の上に兩手を突張つて、今や一飛びで『大和魂』をやる前に、風早の顏は文字通り朱をそゝいだやうに紅くなつた。そして、機械體操の場の周圍に黒くなつて取卷いてゐる人集の目を集中しながら、はつと思ふ瞬間には、風早の身體は鐵の棒をくるりと半分廻つて、一度高く空に飛んだかと思ふと、兎のやうにくるりと轉廻して、二間ばかり向うの砂の上に立つてゐるのだつた。
「飛行機か、危い商賣だな、」と私が思はず嘆息していふと、
「さうよ、此間も喜樂さんといふ藝者衆のインチが落ちたのよ。」と彼女がいつた。
「それで死んだ？」
「えゝ、それも『新花屋』さんといふ藝者家の屋根の上に落つこちたの。」
「その喜樂といふ藝者のゐる家か？」
「さうぢやないけど……。喜樂さんは一週間程病氣になつて休んだわ。」
その翌日だつたか、私は砲術學校に矢崎を訪ねたが、生憎辻堂の方へ演習に行つた留守だつたので、それから田浦まで汽車に乗つて、停車場から車で追濱の航空學校に向つた。私は初めて横須賀に來た時、汽車の中から見下ろした追濱の灣に、その五六年も會はない舊友を訪ねて行つた。受附で風早中尉に面會したいと名刺を通じると、十分もかゝつて小使の老人は何處かへ行つて歸つて來た。そして「唯今演習中ですが、三十分もお待ちになつたらお歸りになるでせう、お待ちになりますか、」といふので、私が待つてゐるといふと「それでは此方へ、」といつて、小使は私の先に立つて歩き出した。前には青い海が眩しい程きら〳〵輝いてゐて、いつか見た時よりは水雷艇の數は、どこへ行つたかずつと少なくなつてゐた。その代り遙か左手の沖に、今まで見たこともない不思議な恰好の船が浮いてゐた。
「あれは何です？」と私が歩きながら聞くと、
「ボカンです、」と前を草履のほこりを立てながら歩いて行く小使の老人は答へた。
「え？」と聞き返すと、
「飛行機の母艦です、」といふのだ。
その時、急にその飛行機母艦が舷の邊に水泡を立て出したかと思ふと、ゆる〳〵と牛のやうに動き出した。私たちはとある白塗の粗末なバラック建の建物の前に着いた。硝子戸が嵌まつてゐて、『控所』と記した札がかゝつてゐる。ふと遙かの空からプロペラの響が傳はつて來た。私は響の方を見上げたが、空の色が眩しくて、とても見つゞけて居られなかつた。小使の老人は空にも地にも何事も起つてゐないやうな冷靜さで、
「こゝでお待ち下さい、」とその硝子戸を一枚開けながらいつた。
「有難う、」と答へて、私がそのまゝ額に手をかざして、プロペラの音の方をうかゞつてゐると、
「百九十一號機かも知れませんな、」と老人はいつた。
「風早はあれに乗つてゐるんですか？」と聞くと、
「はい、さうです、」と彼は答へて、そのまゝ元の道へ引返して行つた。
いつ迄立つてゐても仕様がないし、炎天が暑くもあるので、私は控室の中に入つて休息し

てゐた。時々硝子戸の外を十人位一組の隊伍を組んだ水兵が通つた。兵曹位の水兵がその隊を指揮してゐた。それから、大勢の靴の音が起つた。硝子戸を開けて首を出すと、今度は二三十人の一隊で、若い士官(少尉か中尉か分らない、がその先頭に立つてゐた。一言もいはないで、靴の音だけさして通り過ぎて行つた。私は無意識に、「烟も見えず雲もなく」と口の中で歌つてゐた。この間見た盛んな、馬鹿々々しい宴會の行列の中にも、今見たやうな士官が無數にゐた。が、一人の士官があの時と今の時と、何といふ違ひだらう、といふやうな平凡なことがひどく感心して考へられた。

いつの間にか私はそこのベンチに腰かけて居眠りでもしてゐたと見えて、突然大砲の音を聞いた程驚いた。砂を蹴つて、人の走つて來る音と共に、がた／＼と硝子戸を勢よく開ける人の姿は、私には咄嗟に潛水服を着た人を思ひ出させた。が、次の瞬間、それが飛行服だと分り、久し振りだな、風早勘吾！

私は笑顏をして立つて行つた。彼は見上げるやうな立派な男になつてゐた。中學時代の如く瘠せて脊の高いのが、今の服裝によく似合つた。鼻下に小さな髭をたくはへて、笑ふと口のまはりに出來る皺が子供のやうな顏に見せた。

「やア、よく來たな、しばらくだね、」といつて彼は手を出した。優しい顏に似ず、固い手だつた。

「今の飛行機で歸つて來たのか？」

「うむ。まあ、此方へ來い、」といつて、彼は控所から、又海岸を通つて、一町ばかり離れたところにある、その邊に並んでゐる、一番の大きな建物の中へ案內して行つた。途々、

「どうしたんぢや、突然？」と彼はいつた。

「うむ。横須賀に此頃時々來るもんだから、ふと君たちを思ひ出して、初に矢崎のところへ行つたんだ。」

「矢崎はゐなかつたらう？ 演習に行つてる筈だ。しかし今夜あたりは歸つて來るだらう。」

「うむ。君はまだ忙しいんぢやないか？」

「もういゝんだ。どうだ、少し休んで、横須賀へ飯でも食ひに行かうか？」

「さう出來るといゝな。」私は願つたりかなつたりだつた。

「貴樣、横須賀に何かあるんぢやないか？」と例の子供のやうな顏に見える笑顏をしていつた。

「馬鹿いへ。まあ、用事がないなら横須賀へ行かう。今日は海の上を飛んでたのか？」

「東京灣の半周だ。いつ死ぬか分らんよ。」

私はふと啞のやうに、受渡しの言葉に困つた。その時、丁度大きな白塗の建物の前に來たので、

「まあはひれよ、」と風早はいつて、石段を上つて行つた。そこの二階の『士官室第何號』といふのに入つて、向ひ合つて腰を下ろした。

「横須賀にはあの時分の連中は君と矢崎と二人か？」

「栗田が水雷學校にゐるよ。」

「なる程、色んな學校があるんだな。さういふのは朝から晩まで水雷でも發射してるやうな譯か？」

「さうでもないが、まあ實習といふやうなものがあつて、その時は毎日々々その場所へ出かけて行つて、目標を目がけてはうつんだ。一發うつては又出直して、船を走らせながら射つんだ。馬鹿々々しいやうなもんだが、やつとかないと、いざといふ時役に立たんからな。さあ、それぢやアこんなとこにゐても仕樣がないから、出かけようか？」

「うむ」といつて私も立ち上つた。「三村も海軍だつたらう？」と私は今まで考へることも、

好奇心を持つこともなかつた海軍軍人といふものに、ひどく興味をそゝられた。
「三村か。あいつは呉で潛水艦に乘つてるよ。」風早はちやぶ〳〵と雀のやうに簡單に顏を洗ひながら、窓の傍の洗面鉢の前へ行つて、顏を洗つた。それが本當に二掬ひか三掬ひの水しか使はないので、
「隨分水を儉約するんだね、此邊は水が少ないのか？」と聞くと、
「いや、さうでもないがね、我々軍艦に乘るものは、いつの間にか水を大事にする癖がつくんだね。」
「ふうん。」私は感嘆した。餘程感嘆したと見えて、その時はそれ程と思はなかつたが、私はその後顏を洗ふ時だけ、――顏を洗ふ時だけが、――私は極く少しの水で洗ふ癖が、その時以來ついてしまつた。
五分間もかゝらないで、風早は黑の背廣に着更へて、「お待遠」といつた。そして、二人でその建物を出て、元の道を門の方へ歩く途でも、私は例の私の女のことや、法界屋の勝栗のことを後廻しにして、
「そしたら、君、潛水艇に乘つてゐるものは、一日水の中へ入つてゐる譯かい？」
「どうしたんだい、探偵見たいに聞くぢやないか。それより貴樣は何をしてるんだ？」
「俺か……」お伽話とも、少女小説ともいへなかつた。「小說を書くつもりなんだが、こいつはいつ卒業して、月給をもらふといふ譯に行かないもんでね。……」
「本屋から出版させて、うんと當てたらいゝぢやないか？」
「その小說といふものがなか〳〵むづかしいんでね。それやア飛行機も生命がけのもんだらうが、兎に角一通り術を習へばいゝんだらう、小說といふやつはさうは行かないんだ。」
「それやそんなものだが、これで每日飛ぶ時は、無事に元の所へ歸つて來るかどうか分らんと思つて、機に乘るんだからな。」
「なる程、そいつも矢張り生命がけに違ひないな。しかし、お前の方は目に見えて生命がけといふだけで、俺の仕事の方は目に見えない、それで生命がけなんだよ。」
田浦の驛に着いて、汽車に乘り、橫須賀に着いて、風早の案內で水交社に寄つて茶を飲んだ。氣がつくと、軍服でない、風早のやうな背廣を着た男たちは、皆申し合はしたやうに黑の背廣に、黑の中折を被つてゐた。
「軍服でなくても、その服裝が皆同じだから、軍人といふことは分るね、」といふと、
「これか、これは我々仲間では商人顔といふんだ、」と風早は持前の、自然に具はつた子供のやうな笑顏を浮かべながらいつた。そして、思ひ出したやうに、「矢崎の奴、歸つてるか聞いて見よう。おい、ボイ、飛行學校に電話をかけて、矢崎中尉の隊はもう歸つて來たか、いつ頃歸るのか聞いてくれ、」と命じた。
すると、都合よく矢崎は歸つてゐて、電話口に出たので、風早は自分で電話に出て、歸つて來ると、「矢崎が今すぐこゝへ來るさうだから、少し待つててやらう、」といつた。
やがて、矢崎が來てからは、話が方向をすつかり變へて、
「どうだい、その後、小花は？」と風早は海軍士官獨特の、隱語にもならない直譯英語で尋ねた。
一瞬間、私はその直譯英語の意味が分らなかつたが、彼女や勝栗と交際してゐるうちに、大分海軍士官の遊蕩振りを會得してゐたので、
「いや、女子と小人は度し難いよ、」と矢崎が極り悪さうに答へるのを、

「風早、」と私は傍から口を出して、「君の勝栗はどうなんだい？」といふと、
風早は一寸目を丸くして、私の顏を見てゐたが、矢崎の方が早く分つたと見えて、
「此奴、隅におけないぞ、風早、勝栗、ヴィクトリ。ナットのことをいふんだよ、」と註解する迄もなく、
「おい〳〵、貴樣、隅におけないぞ、」と風早が卓子を叩いて叫んだ。
「しかし、俺たちはそんな面倒なことはいはないんだ、」と矢崎は私の方を向いて、「ヴィクトリアス・チェスナットなんていはないで、ヴィクトリ・ナットで通用するんだ。それにしても、貴樣、どうしてチェスナットを知つてをるんだ？早く白狀してしまへ！」
「まア待てよ、」と私はわざと落着いて、「俺のことも聞いてもらひたいんだ。」
「こいつ、愈々隅におけないぞ！」と風早は例の童顔笑ひを浮かべて卓子を叩きながらいつた。
そして、腕時計を見ながら、矢崎の方に向つて、「おい、ぶら〳〵歩いて行つたらいゝ加減の時間だらう、行かうか？」といつた。
私は二人の『商人服』を着た海軍士官と共に、（彼等は「商人服」を着てゐても、一見して海軍士官と分るので、この町ではさきにも云つたやうに海軍士官でなければ人ではないといふやうな持て方だつたから、）この恐るべき町を、こんなに氣安く、威張つて歩かうとは夢にも思はなかつた。全く『大船に乘つたやうな』氣持だつた。もう陸戰隊の風をした水兵の一隊も、空中に跋扈してゐる軍艦製造機械も、宿屋の帳場に坐つてゐる人相の惡い亭主も、（何でも水兵上りださうだ、）ことに依つたら大田原富松だつても、恐ろしくなかつた。私の二人の友達は、朝起きたら、今日は命あつて飛行機と共に歸つて來られるか、今日は潛水艦と共に海から無事に浮かび上れるか？――眞に水火を恐れぬ人たちだ。二揃ひの水で顏を洗ひ、立つたまゝで熟睡の出來る人たちだ。いつも生き死の上に立つてゐるだけに、どこか私のやうな懦夫を起たせる、何といふか、朗らかさのやうなものがあつた。途々、私はどうして自分が橫須賀に來、どうして勝栗を知つてゐるかといふ譯を彼等に話した。單純な性質の彼等は直に私に同情してくれたが、しかし、そんなに愛する女を、どうしてこんな荒い土地で藝者になどしたのか、と尋ねた。
「ヒステリイといつたつて、貴樣がヒステリイにしたんだらう？」と風早はいつた。
「いや、そんな單純なものぢやないんだよ。一口にいへないがね。しかし、俺がもつと彼女に氣儘な生活をさしてやることが出來たら、幾分かなほるかも知れないがね。」といつて、「何しろ俺はまだ謂はば砲術學校、水雷學校の初等科といふやうなもんで、小說學校の學生なんだ。自信はあるつもりだが、まだ二年はかゝると思ふんだ。しかし、二年辛抱したら、屹度ものになるつもりなんだ。まあ、やり上げて見るまで、今からそんなことをいつても仕樣がないがね、そんな譯で、喜京といふその女に、公然と會へないもんだから、そんな宿屋にこそ〳〵泊つて、勝栗などを手先にして會つてゐるといふやうな譯さ。」
「貴樣は中學時代から軟派だつたからな、」と風早がいつた。「まアいゝ。まアいゝ、今日は俺たちがちやんと會はしてやるよ。」
「あの富松といふおやぢは因業な奴だからな、」と矢崎はいつた。
「貴樣も經驗があるだらう？」と風早がからかふと、
「貴樣だつて、ヴィクトリは富松の家ぢやないか。近いうちに賀浦のドック會社の何とかい

ふ奴に××式をやられるといふ噂だぞ。」
「なアに、俺が先にやるよ。」
「多度にするか？」と矢崎がいつた。
「よからう。」
「多度といふと、大分遠いんだらう？」と私はいつかの少年に聞いた「多度の鼻」を思ひ出して聞くと、
「貴様、なか〳〵横須賀に通じとるね。さつき大分哀れつぽいことをいつとつたが、内所でもう荒らしとるんぢやないか？」
「馬鹿いへ、それ位ならこんな苦勞をするかい。もつとも、たつた一度『やくも』とかいふ家へ行つたことがあるがね。」
「『やくも』か、新しい家だらう、宴會座敷が眞中にあつて、ぐるつとその廻りが庭になつてゐて、軍艦見たいな家だらう？」と矢崎がいつた。
「そこ迄詳しいことは知らないが、何しろ大きな家だね、僕は何でも小さな、意氣な部屋に通されたが。」
「あの家はね、我々の宴會料理屋になつてゐるんだが、その宴會座敷のまはりが堀見たいに細い庭で取り卷いてあるんだ。その堀の向側に貴様の入つたやうな部屋が一列に、而も三階建で並んでゐるんだ。あのお蔭で、大抵宴會の歸りに沈沒してしまふんぢや、海軍士官の落し穴だよ。少尉の時に通る門だ。」
　そんな話をしてゐるうちに、多度の『松島』といふ家に着いた。もうその邊は人家がまばらで、その大きな料理屋だけが往來から引込んだ海岸に、城のやうに立つてゐた。あたりが暗くて、その家だけが少なくとも十以上の窓に灯がついてゐて、そこから絃歌の聲が洩れて來るのだが、あたりが餘りがらんとしてゐる上に、左手は黑い海だし、後には遠く星空に黑い山の形が刻まれてゐるといふやうな場所なので、軍港らしくない、變に憂鬱な景色だつた。が、近づくと、絃歌の聲といつても、軍歌とか、磯がとかいふ唄が荒い手拍子と共にどら聲で歌はれてゐる中に、女たちの金切聲が響いて來るやうな有樣なので、結局、いつかの『やくも』と變つた感じはなかつた。唯、『やくも』のやうな奇拔な建物でないだけで、待合としても、料理屋としても、矢張り軍艦のやうに、馬鹿げて大きいことは共通してゐた。
　早速、私の女の喜京が呼ばれた。小花と、外に風早の馴染らしい藝者と、勝栗なども呼ばれた、
「おい、喜京君、君がこの俺たちの若い女達のインチとは知らなかつたね、」と矢崎がいふと、
「さう、矢崎さんのお友達なの、驚いたわ、」と小花がいつた。
「おい、勝栗、貴樣は始終甘いとこを見せられてるんだらう、」と風早は例の笑顔を彼女の前ににゆつと突出しながらいつた。
　私の女は私がゐたせゐか、人見知りしたやうに、餘り口數をきかなかつた。そのうち彼女の姿が座敷から見えなくなつたのを私は氣がついてゐたが、どこか外の座敷に挨拶にでも行つたのだらうと思ひ、それにさういふ座敷では彼女がゐない方が氣樂だつたので、私は別に氣にかけないでゐると、
「あなた、一寸、」と女中が誰を呼ぶのかと疑ふ迄もなく、たしかに私を招くらしい。私が躊躇してゐると、
「行つてやれよ、」と風早が背中を突くので、思ひ切つて立つて行つた。そして先に立つて行く女中の後について、階下に下り、長い廊下を幾つか廻つて、いつの間にか餘りあたりが靜かなので、氣味が惡くなつた時分に、とある部屋の前で女中が立ち止まつたので、私も立ち止まつた。

「あなた、」と彼女は私の方を向いたと思ふと、次の瞬間入口の襖を[illegible]けて、輕く私のからだをその中に突き入れ、ぴしやりと後を閉めてしまつた。目の前に屛風が向う向きに立ててあつて、屛風の向うに、夜のものの上に、盛裝したまゝの私の女が坐つてゐるのが見えた。

「びつくりしたらう？」といひながら、私は彼女の傍へ行つて倒れるやうに坐つて、「隨分すすめられて飮んでたやうだが、苦しいんぢやない？」と顏を寄せていふと、彼女はかぶりを振つた。

が、しばらく默つてゐた彼女は青白い額を上げて、

「お兄ちやん、その窓を開けてごらん、」といつた。

障子を開けて、雨戸を開けると、目の下に眞黑な海が迫つてゐた。が、目を上げると、港の方は、何かあるやうに、彼方にも此方にも點々とあかりがついてゐた。陸にも、海にも。次第に暗に馴れた目で見ると、建物も、煙突も、山も、軍艦も、ランチも、それ〴〵黑い形で夜の暗の中に刻まれて見えた。いつの間にか、彼女が私の傍に立つてゐて、

「恐い港でせう、」といつた。

その景色を、私たちは翌朝、早く、明け方の光の中に再び眺めた。夜の時と違つて、建物も、煙突も、山も、軍艦も、それ〴〵指摘することが出來た。

「あれが停車場ね。ほら、あそこに見える白い軍艦がお兄ちやんの好きな『橋立』よ、」などと彼女はいつた。

間もなく女中の起きてゐる氣配がしたので、呼んで、矢崎と風早のことを聞くと、

「風早さんは學校が遠いから、一番の汽車でお歸りになりました。矢崎さんももう起きていらつしやいます、」といふ答だつた。

「なる程、軍人は早起だな、」と私は感嘆していつた。

「小花さんは？」と彼女が聞くと、

「小花さんは昨夜のうちにお歸りになりました。」

「ぢやア、矢崎一人？」と私は聞いた。

二人で彼の部屋へ行つて見ると、矢崎は蒲團の上に寢間着のまゝで、昨日は氣がつかなかつたが、小型の四角な鞄を、胡坐の上に載せて、その上に延べた紙に頻りに地圖のやうなものを書いてゐた。

「何だ、何してるんだ？」と私が聞くと、

「いや、戰術といふ奴なんだよ。此間うち演習に行つてたらう、あの時の奴だ。俺の方の軍が少し成績が惡かつたんだ、」と彼はいひながら、笑談もいはないで、鉛筆でその地圖の上にしるしのやうなものをつけたり、紙の端に代數のやうな計算をすることをつゞけてゐた。

風早は飛行機に乘りに追濱に歸り、こいつは待合で、負けた戰術の考察をしてゐる。俺は何をしてゐるのだ！　と私は思はない譯には行かなかつた。

續軍港行進曲

一

或晩、私が机に向つてぼんやり坐つてゐると、私の膝の上に眠つてゐた飼犬のルビが、突然耳を立てて、庭に向つてゐる障子の隅を嗅ぎ始めた。

「ルビ！」と私が隣の間に寢てゐる母の目を醒まさぬやうに、抑へた聲でたしなめると、彼は振向いて、何か訴へるやうに頭を下げながら、私の方へゐざり寄つて來た。

その時、私はふと氣がついたのであるが、それと共に、「おにい……」と聞き馴れた聲が、微かに私の耳に聞えたやうに思つた。私は立上つて、そッと前の障子を開けて、縁側の外の暗に聞耳を立てた。その聲が横須賀から聞えて來る筈がなかつた。私は呼吸を凝らして、庭に飛び下りさうな犬を抱き上げながら、暗に向つて、

「だれ？」と小さい、しかし詰るやうな聲をかけて見た。

もう疑ひなかつた。

「お兄イちやん、あ、た、し、あたし、きみ子よ。」彼女の聲だつた。

「ちよつとお待ち、」と私は低い聲でいつて、部屋の中に引返し・靜かに後の障子を閉めて、犬を自分の坐つてゐた座蒲團の上に下ろした。そして、「ルビ、待つてるんだよ、」と頭を叩きながら、その私の言葉を聞き分ける犬にいつて、そッと玄關に出て行つた。戸に附けられてあるベルを鳴らないやうに抑へて、一尺足らず開けた戸の間から路次の裏口へ行つて見た。すると、彼女はその中迄入つて來てゐた。夜目にも藝者らしい厚化粧した顔が、心配さうに呼吸を切つてゐた。

「どうしたんだ、今頃？」と私は分り切つたことを聞いて見た。

「どうしたつて、逃げて來たのよ。」

「……兎に角家へ入らう。」

「駄目！」と彼女は吐き出すやうにいつた。「横須賀の追手が來やしなかつた？」

「追手」と聞いて、私はぎよッとしたが、「それにしても……」といひかけるのを、

「駄目、駄目よ、」と彼女は遮つて、「まだ來ないなら、夜中にも來るかも知れないし、それに、あたし、もう母さんに會ふの厭だわ。お兄ちやん、直何處かへ連れてつてよ。」

さういはれると、私も一刻もぢつとしてゐられないやうな危險を感じたので、あわてた聲で、「ぢやあ、お前そこの角で待つてて。僕ちよつと母さんに斷つて來るから、」といひ捨てて、私はそつと家の中へ入つた。足音を[illegible]んで玄關を上つて行くと、いつの間にか母が起きて來てゐて、不安さうな顔をしながら、

「誰か來たか？」と聞いた。

「いえ、その、一寸困つたことが出來たんですが、大したこともないんです。一寸これから加藤のとこへ行つて來ます。」

母はすぐ感づいたらしく、「歸つて來たの……？」と聞いた。

「えゝ、さうなんですが、何でもないんです。加藤の所へ行つて、加藤に賴んで來ますから、母さんは安心して寢てて下さい。」私はいひながら、用もないのに、机の上の物を手に取つたり置いたりしながら、「ぢやア、このまゝ、兎

に角一寸行つて來ますから、大丈夫です、安心してて下さい、」と母になるべく口を開かせる間を與へないやうにして、不安さうな顏附をしてゐる彼女を見捨てて、そこ／＼に家を出た。

その翌日、加藤の指令で、私の家から一町ばかり離れた或路次の奧に貸間を見つけて、そこに彼女が住むことになり、食事は三度々々母がこしらへてくれる小さなお櫃に一ぱいの飯と、三重の鉢にお菜と香の物を入れたのを、私が家から運んだ。が、それが十日とつゞかなかつた。或日、私がその侘しい貸間の二階で、丁度彼女と晝飯を終つたところへ、家主のお上が變な顏をして、「こんな方が入らつしやいました」と名刺を見せた。が、私はそれを手に取つて見る前に、身構をするやうな恰好で立上りながら、震へる手でお上の手から二枚の名刺を受取つた。刑事と何とか組合員といふ肩書があつた。後で聞くと、私の家の近所の商店の御用聞の口から調べて來たといふことだつた。

「兎に角、私たちは何にも苦情をいはねえから、だまつて君子さんさへ返してくれたら、清く手を打つて歸ります、」と一人の方の男が荒い言葉を優しい調子でいつた。

刑事の名刺を後で加藤が見て、こんなのは僞刑事ですよ、と笑ひながらいつた。

彼女は徹頭徹尾だまつてゐた。默つてゐる時と、ヒステリイを起した後で泣き止んだ時との、彼女の青白い、高い鼻の横顏は、何ともいへぬ淨い表情を現した。

私は意氣地なく彼女を階下の入口まで送つて行つた。彼女は相變らず無言のまゝで、二人の男に守られながら、横須賀へ行く前に買つて行つた氣に入りのパラソルを肩に擔ふやうにして、私の目から消えて行つた。

かういふ別れ方は私たちの情熱を煽ることに役立つたばかりだつた。私はその後無理な工面をしては、一層繁々と横須賀へ通ふやうになつた。無論、行つても、彼女を正式に料理屋や待合に呼ぶ譯には行かなかつたから、いつも例の初めて行つた時に泊つた房州屋に宿をとつて、彼女とあひびきする習慣だつた。房州屋では私たちに好意を持つて、初めの時の表二階でなく、奧の離れの中二階を空けてくれた。そこで、彼女は別れる時、いつも目をうるまして、

「お兄ちやん、いつ迎へに來てくれるの？」といつた。

「出來るだけ早く、」と私はいつた。

「出來るだけ早くつて何日？」

「お兄ちやん、早くお姉ちやんを迎へに來て上げて下さい、」とよく彼女と一所に來た半玉の勝栗までが、芝居の子役のやうに言葉を添へていつた。

「出來るだけ早くぢやア、分らないわ、」と勝栗の加勢の言葉が彼女を感傷的にしたらしく、彼女は涙聲になつていつた。

「だつて、今度はちやんと借金を返して、おほつぴらに迎へに來たいと思ふから、」と私は別に豫算もないことを、口ごもりながらいつた。

「そんなお金、お兄ちやんに出來るの？」と、ヒステリイ獨得のずばりとしたいひ方で、彼女は決めつけるやうにいつた。

「兎に角ね、……まア、この月の末まで待つて見てくれないか。」

「そしたら、お金が出來るの？」と彼女は疑はしさうにいつた。

無論、その時私は心の中に何の準備もなかつた。唯、彼女のヒステリイが爆發することを恐れて、お座なりをいつたのに過ぎなかつた。

ところが、その月の末の或日、私は例に依つて房州屋の奧の中二階の客になつて、彼女と會つてゐた、午後のことだつた、彼女は昨日の通り

勝栗と一所にやつて來て、勝栗が一足先に歸つた後で、一寸した言葉の行違ひからヒステリイを起し出した。一體お兄ちやんはいつから小說を書き出すのとか、こんな風に無理をして會つてゐても、何日になつたらいゝ日が來るのとか、あたしもうつく〴〵世の中が厭になつたから、お兄ちやん一所に死んでくれないとか、それに對して私の答が少しでも曖昧だと、彼女はそのどうにもならないこの世に對する不滿を私に向つて爆發さした。

それは實際どうにもならないものらしかつた。それは彼女の最も愛する者に對する憤りでも、或は又因業な大田原富松に對する憤りでもなかつた。それは大砲を持つて行かうが、軍艦をさし向けようが、どうにもならないものらしかつた。それは、後年、彼女の伯父が東京市長の椅子を拒んだのを、市會の何々派か納得させるといふ程度のものではなかつた。何故といつて、瀟澤行男には市長の椅子を拒みたい理由があつた。が、彼女には憤ることの何の理由もなかつた。しかし、彼女は始終何かえたいの知れないものに憤りを感じてゐたのだ。このえたいの知れないものを感じた人間にとつては、神と共に、世界の隅々にそれが遍在するものに違ひなかつた。

「お兄ちやん、お兄ちやん死ねる？　死ぬことなど譯はなくつてよ。この扱帶一本で澤山。さあ、あたしをこれで締めて頂戴、さあ、締めて頂戴、さあ、締めてつたら！」

「だつて、死ぬ理由がないぢやないか？」

「どうして、どうして、さ？　あたしがこんなに苦んでゐるのに……。お兄ちやんは死ぬ勇氣がないのでせう。自分の死ぬのが厭なら、あたしだけを殺して、お歸りなさい。さあ、さあ」といつてる中に、突然私がその一方の端を持つてゐた扱帶を引つたくつたかと思ふと、彼女は自分で自分の首にくる〳〵と二廻り程素早く巻いてしまつた。私は必死になつて、彼女と爭つた。

房州屋のその中二階は、開け放つた障子の外はトタン屋根とトタン屋根がつゞいて、三方に貸間をしてゐる他所の二階の部屋が覗んでゐる位置にあつた。丁度秋の演習が終つた艦隊が歸つてゐた頃だつたので、それ等の貸間の借主の水兵が友達を呼んで酒盛をしてゐた。幸ひ私たちの部屋の眞向ひの二階だけが留守らしく戸が閉まつてゐたが、左手と右手の二階では今にも屋根の上まで躍り出しさうな騒ぎをしてゐた。それでも、私は若し人に見られてはと思つて、彼女の首に巻いた扱帶の間に右手の指を三本入れたまゝで、左手で窓の障子を閉めながら、

「待て！　待て！」と低い聲に出來るだけの力をこめて叫んだ。彼女は本氣で締めてゐるので、顏色が變りかゝつてゐた。私は全力で彼女の身體ごと抱いて、彼女の片手を疵のつく程強く掴みながら、首に巻かれた扱帶を解きにかゝつた。もう少しで醫者の厄介にならねばならぬところだつた。がさういふ峠を越えると、彼女はふとした機會から、さめ〴〵と泣き出すのが常だつた。涙が彼女のえたいの知れない憤りを洗ひ清めるやうに思はれた。彼女は私の膝に寄りかゝつて、長い間泣いてから、

「お兄ちやん、君子のわが儘を堪忍してね。」といつた。

その時、勝栗が歸つて來て、部屋の外から、

「お姉ちやん……」と呼んだが、そこに思ひがけない、しかし見馴れてもゐる不穩な光景を見ると、何かいひかけてゐたのを口を噤んだやうに見えた。

「何？」と彼女はきツと顏を上げて、「家で何かいつてた？」

「いえ、箱屋さんの常さんがまり子姉さん（彼女は二度目に橫須賀から藝者に出る時、マリイといふ洋風の名を慕つて、まり子と名乘つてゐた。）どこへ行つたんだろ、と獨言のやうにいつてましたから……」

「お帳場で何かいつてなかつた？」

「いえ、とうさんが一人で居睡りしてましたわ。」

「さう、ぢやア、あたし直後から歸るから、勝ちやん先へ歸つて、何かあつたら知らしてね。」

それから又一時間程彼女がぐづ〳〵してゐる中に、歸りそこねたのが元で、又口喧嘩が始まつた。

「だつて、歸れといつたつて、もうこんなに遲くなつて歸れやしないわ！」

「ぢやア、歸らなくてもいゝぢやないか！」

「歸らなければどうするの？」

「逃げるさ！――」

いきほひで、私はいつてしまつた。「だが……」

すると、彼女は一寸の間ぎくツとした表情をしたが、直決心したやうに、

「ぢやア、待つててね。あたし勝ちやんにお人形さんをやつて來るから。でないと、外の千代龍さんや萬作さんたちが取つてしまふから。そして次手にあたしのもの持出せるだけ持出して來るわ。……」

私はその時はもう先に自分のいつた言葉を後悔してゐた時だつたので忠兵衞が封印を切つた時のやうな思ひをした。そして、私たちは心中をしなかつた代りに、大田原富松の所謂逃げるには危險極まる一本道を、駈落したのであつた。

秋の最後の輝いた午後だつた。私たちは雨降りの裝ひをした幌の車で、わざと別々に房州屋を出て、停車場に向つた。私の車が後で、振り向くと、勝栗が町角の漬物屋の前に、氣にかゝる程いつ迄も立つてゐた。私たちが停車場へ着いた時、丁度汽車が出たばかりだつた。しかし一刻も猶豫して居られないので、驛前にゐた自動車の運轉手に、逗子までの賃銀を聞くと、十圓といふので、私が談判を進めようとすると、彼女が後から甲高い聲で、「行きませう、步いて行きませう、」と促した。行手を見ると、道は驛前の廣場から直に羊腸たる山徑になつてゐるのに驚かされながらも、乘りかゝつた船とあきらめ、それに好奇心と冒險心に刺戟されて、「ぢやア、步かう、」と彼女の前に立つて、私の方が稍々ヒステリックになつて步き出した。山徑は最初から呼吸苦しい程嶮しく急だつたので、前途が心配されたが、それでも四五町ばかり一息に上ると、少し下りになつて、やがて山の脊骨のやうな平坦な道にさしかゝつた。

「大丈夫、」といつて、私が振り返ると、

「一服しませう、」と彼女は切れ切れの聲でいつて、パラソルの尖の方を私に差し出した。左手は黃色くなつた木や草の嶮しい崖になつてゐて、右手は赤土の斷崖の下に今逃げ出して來た嚴めしい軍港の全景がパノラマのやうに展開した。

長い間、二人は枯草の上に腰を下ろしたまゝ、呼吸切れのする聲で話し合つた。靑々とした空と海と陸、空には眞綿のやうに光つて見える白雲――中世紀の畫家たちが、聖母の頭の上に描いた雲だ。誰かその雲を軍港の頭の上に想像したらう！――陸には兵器廠、軍艦製造機、ドック、起重機、煙突、道、停車場、無數の音と響、海には秋の演習を終つて歸つて來た艦隊、そして、見よ、停車場の出店の如くに、孤影悄然と見える一本煙突一本帆柱の軍艦も指摘される。

「お兄ちやんの好きな橋立艦があそこにゐる

わ。」
「うん。」
　横須賀から田浦まで一里半——私たちが選んだのが偶然人里を避けた間道だつたと見えて私たちは田浦の驛へ出る迄の間に殆ど人に會はなかつた。田浦の驛を足下に見下ろす崖上に出た時、山徑はそこで盡きたと思はれた程だつた。やつと一本の松の枝を片手に握つて、崖の下を見下ろすことに依つて、目の下に玩具のやうに見える停車場が見出された。だから、そこへ下りて行くのに、私たちは大廻りをしながらも、何度木の根や草の根を足場にして、滑るのを防ぎながら道を辿らねばならなかつたか知れなんだ。が、丁度私たちが山の麓に下りた時、東京行の、私たちが先に横須賀で逃がした汽車の次のが通る時間に近かつたと見えて、待合室の外まで人々が溢れてゐた。私たちはわざと停車場から少し離れたところに避けて、發車の時間を待つた。見上げるやうな崖の下に葦の繁つた水溜があつたので、その縁に蹲んで水溜に顔を映してゐると、中に蟹の群が遊んでゐた。
「お兄ちやん、東京へこの蟹を捕つて持つて行きませうよ。」と彼女はいつか晴々した顔になつていつた。

　それから一年間私は彼女と二人で、東京市外澁谷町の或竹屋の座敷を借りて、加藤の注意で、横須賀の大田原の手の者に見出されないやうに、僞名をして暮した。母は丁度私が最後に横須賀へ行く前の晩、鄕里の彼女の兄の重病を見舞旁々、私の身のをさまるのを待つ爲に、大阪へ行つたのだつた。三ケ月餘りして、彼女は兄の野邊送りを濟まして歸つて來た時私はまだ身がをさまらず、その竹屋に間借りしてゐたのだつた。
　私は横須賀に行く時、私たちの以前に住んでゐた本鄕の家をその頃知合になつた近所の夫婦者が近い中に國へ歸るといふので、彼等に留守を頼んで行つたのであるが、横須賀の不首尾の爲に元の家へ歸つて行けなかつた。その間に彼等は、私の僅ばかり殘してあつた家財道具を賣拂つて、夜逃同樣に國に歸つてしまつた。家財道具に未練はなかつたが、私があんなに愛し、又私をあんなに慕つた飼犬のルビは何處へ行つたらう？　それも加藤にいろ／＼手を盡して探してもらつたが、到頭行方が分らなかつた。
　母が大阪から澁谷の私たちの隱れ住居に歸つて來た時、最先に「ルビは？」と聞いた。
「横濱の西洋人が、非常に欲しがつたものだから、やりました。その西洋人は、根に別莊があつて、そこへ連れて行つて大事に育てるといつて居ました。」と私たちは用意してあつた言葉で答へた。が、その後、母が時々思ひ出して、「ルビは今頃どうして居るだらう？」といつた。が、彼女は直思ひ直すやうに、「しかし、西洋人の家なら始終好きな牛肉を食べさしてもらつてゐるだらう。」といつて寂しく笑ふのが常だつた。
　その一年間の私たちの生活の艱難は、普通の人が十年間に賦せられる量を、一度に背負はされた重さだつた。彼女は毎日程泣き且つ怒つた。一口にいふと、私が相變らず貧乏な爲に、私たちの日常生活がいつ迄も不如意であることを憤つた。二十歳を越えたばかりの彼女にとつて、よい着物が着られぬことも、よい家に住まれぬことも、面白い遊山の出來ないことも、悉く憤りの種に違ひなかつた。私は或日加藤に頼んで、彼の家へ勤めに出かけることにした。彼女は座敷の窓といはず、僅一方の開いてゐる縁側に面した三尺程隔つた塀といはず、林のやうに立てならべてある竹材の爲に、晝も夜も同じ暗さの部屋の中で、青春の日

を暮すのに堪へかねて、僅に南向きの窓が、その前にならべてある竹材が三尺程空けて置かれてあつたので、そこから日光が射して來た。その下に家主から借物の机を置いて、私や彼女の[illegible]やが感傷的な空想の物語を書いてゐる少女雜誌の口繪や插畫を手本に、水彩繪具で模寫したり、それを鋏で切り拔いたり、又いつかの晩激しいヒステリイを起して、齒で切々に引裂いた長襦袢の切で人形の着物をこしらへたりして、私の留守の間を潰してゐた。が、ふと彼女が向つてゐる窓に射す竹と竹との間からの光線が、浮々した話聲と足音に連れて、近くの道玄坂に巣喰つてゐる藝者や半玉が通りがかりに、ぽつとして桃色の影を映して行くことなど珍しくなかつた。すると、彼女の少女雜誌の口繪を模寫してゐる靜かな空想は一瞬の中に破られて、忽ち現實の陰氣な、希望のない生活を反省させられると共に、彼女の癇癖がむらむらと起るのだつた。彼女は繪を描いた紙も、半分着物を着せかけた人形も、その場に放り出して、三十圓の月給をとる爲に、——といふよりは、一緒にゐると、彼女にヒステリイを起されることを恐れて、家にゐても出來る仕事を、わざわざ毎日出來るだけ早く出て、神田にある加藤の店に出勤し、出來るだけ遲く歸つて來る私を思ひ出した。そして、緣側から飛び下りて近くの自動電話をかけに行くのだつた。

　彼女はよく怒る代りに、欺され易い性質でもあつた。それは彼女が世に稀な正直者である證據に違ひなかつた。彼女は私が加藤の家に出入りが出來ないと信じてゐた。それは彼女の二度目の橫須賀出奔後は、大田原の家から時々いつかの刑事や何とか組合員が見張りに來るものだと信じてゐた、それは同時に彼女を神田方面へ來させない私の用心でもあつた。加藤は獨身者でこれもヒステリイのひどい母親と、外に小僧をおいて暮してゐた。彼はよく私にこんなことをいつた。

「あの毎晩表を太鼓を叩いて通る救世軍といふものは馬鹿になりませんよ。しかし、私もどうかすると、いつそのこと、あの太鼓を叩いて、あの歌をうたつて歩いて見たいと思ふことがあります。救はれても、救はれなくても、救はれてると思つたらいゝのですからな。うちの母などあれで確かに救はれてゐます。無學な人ですが、救世軍に入つてから、聖書の文句を寫すやうになつて、あんな難かしい漢字を歪みなりに書くやうになりました。うちの私の机の前に、時々聖書の文句が紙に書いて貼つてあるでせう。しかし、キリスト教は佛教より確かに進んでますね。お經を寫したつて、無教育なものには何にも分りませんが、聖書なら分りますもの。」

　私は又いつた。「僕もこゝから歸りに宮益坂下で電車を下りると、あの踏切のところでよく救世軍の歌を立止まつて聞くことがあります。僕等には說教は少し馬鹿々々しくて聞いてゐられませんが、太鼓と軍歌とには時々變な感激のやうなものを受けます。家で女にひどいヒステリイを起されて、打たれたり蹴られたりすると、時々あの太鼓の音を思ひ出して、いつそのこと救世軍へ入つてやらうかなと思ふことがあります。しかし、『唯信ぜよ、信ずる者は救はれん』といひますが、それは信じられないから困ります。僕んとこの奴なども、あれで何かに憧れてゐながら、つまり信じられないから、ヒステリイを起すんぢやないかと思ふんです。此頃は、時々橫須賀へ歸るといひ出したり、藝名をしてゐることを大聲で觸れるぞといつて脅したりして困らせられます。」

　加藤は持前のこほん〳〵といふ咳で答へた。その時、彼女から電話が掛つて來た。

「お兄ちゃん、」といふ聲が邪慳に聞えた。

「なアに、どうしたの？」と私は出來るだけ彼女の機嫌を損じないやうに聞いた。

「あのね、あたし寂しいの。今日早く歸つてくれない？」

「あゝ、早く歸るよ。」

「早くツて、何時頃？　早くだけぢや分らないぢやないの？」と彼女の聲が急に劍を帶びて來る。

「さうだね、」と私はわざと優しい聲で、「ぢやア、四時にしよう。」

「さう、」と彼女の聲も忽ち優しくなつて、「ぢやア、宮益坂の下まで迎へに行つてるから、屹度、ね。」

そして、私は電話を切つて、加藤の傍に戻つて行つた。『誰にも分る株式相場』といふ本の校正刷が彼の前の、彼の母親が書いた聖書の文句の紙切の貼つてある下の机の上に載つてゐるのを、加藤は頻りに讀んでゐた。

「これは私の一か八かの仕事です、」と彼はいつた。その頃彼の商賣は可成り左前になつてゐたらしかつた。「その代りこれは電車の中まで廣告をしようと思ひます。」

「いゝでせうな、」と私は合槌を打つていつた。

それから、私はやつと思ひ切つて今の電話の話を彼にして、彼の乏しい財布の中から若干の金をもらつた。『誰にも分る株式相場』は景氣がよささうに思へたが、電車の中まで廣告したいといふ廣告費が彼に出來るかと心配になつた。彼の興廢は私の興廢でもあつたからだ。いろいろ金策などの爲だらう、三時過ぎに彼が家を出るのと一緒に、私は金策と五十歩百歩の難しさの、女の機嫌を取らねばならぬことを考へて、『誰にも分る株式相場』の校正刷を風呂敷に包んで、彼と外へ出た。電車が青山三丁目、四丁目と進むに連れて、私は何か消化しないい、い、かたまりが胸の中でだん／＼大きくなつて來るやうな思ひをしながら、私の思ひに容赦なく、電車は宮益坂を下りて行つた。しかし、何より約束の時間が氣になつたので、停留所の電信柱に掛つてゐる時計を見ようとすると、その下に蹲んでゐた彼女が、嬉しさうに手を上げて立上つたのが目に止まつた。

しかし、彼女のヒステリイがだん／＼激しくなるにつけて、他人の家の間借りをしてゐたのではいろ／＼極りの悪いことが起るので、私たちは思ひ切つて、代々木の練兵場に近い閑靜な屋敷町に一軒の手頃な貸家を見つけて引越した。その家には二階が二間あつたので、私たちの居間をそこに定め、母は薄暗い階下の部屋に、別れて暮すことが出來たが、それも肉親の目に見えぬ思ひやりが、二階と階下から互に呼吸を計りながら暮さねばならぬやうな日の連續に終つた。

そこは全く閑靜な屋敷町で、前は一戸大將の邸で、右隣は海軍少佐、左隣は何でも下町に店を出してゐる人の別宅とかで、家々に大小はあつたが何れも同じ、可成り丈の高い立派な枳殻の生垣に廻らされてゐた。その間を規則正しい砂利を敷いた道が通じてゐて、朝も晝も人通りは數へる程しかなかつた。音といふのは時々人がその砂利道を歩く足音と、下の町の方の遠い物音と、稀に練兵場の方から傳はつて來る練兵の號令や喇叭の響位のものだつた。私たちがその家に入る時、大屋の主人が「この家は實に家相のいゝ家ださうで、實際又不思議にこの家にお入りになつた方は屹度よくなつてお出になります。これで八代目になりますが、前の七代の方々はみんなよくなられました、」といつた。この家相のいゝ、靜かな目出度い家に來てから、二ケ月と經たない或晴つゞきの秋の日の朝、「そんなら、私はしばらく、[illegible]

阪の本庄へでも行つて來ます、」といつて、母は蛇の目の傘をさしかけながら、まだ涙の跡のある顔で、枳殻の生垣の間の道を出て行つた。無言で、目だけに物を言はせながら、玄關まで追駈けるやうに送つて出た私は、二階の居間で髪の毛を搔きむしりながらヒステリイを起してゐる彼女の思惑を兼ねながらも、やつと玄關まで母を送つて出たのだつた。木が腐つて、建てつけの悪くなつてゐる門を、二三度がた／＼と搖すり開けて、又がた／＼と搖すりながら閉めた後に、門の鈴がしばらく鳴つてゐる中を、ざくざくと砂利の道を踏んで遠ざかる母の足音を、私は聞えなくなる迄聞いてゐた。赤阪の本庄といふのは私の又從兄弟の家だつた。私はその日の午後、彼女の隙を見計つて、自動電話で本庄にかけた。「今にどうかしますから、もう暫くの間……」と私は顔の見えない母にいつた。「わたしはどんな辛いことでも辛抱するけれど、今のやうではお前が……お前が……」と母の聲がかすれて、そのまゝ沈默した。「もう暫くです、もう……。僕は決心して居りますから……」

實際、その頃から私は次のやうに決心してゐたのだつた。私が彼女に改まつて別れ話を持ち出したところが、到底彼女が承諾する筈はなかつた。唯一の方法は彼女を置き去りにして、私が逃げ出すより外にない。しかし、幾ら心を鬼にしたところが、この家相のいゝといはれはするが、米櫃の中に一日分の米の餘裕もない家に、正直に二日でも三日でも私を信じて待つてゐる女を想像すると、折角の決心も忽ち鈍るのだつた。いろ／＼考へた末、私は一先づその家をたゝんで、下宿住居をし、彼女にカフェエの女給の職でも與へてから、逃げ出さうといふ方法を思ひついた。この計畫は稍々安心して考へられ、進行させる氣になつた。すると、妙なもので、そんな話を私の方から切出す前に、彼女の方から、

「お兄ちやん、」と或晩いひ出した。「あたしカフェエの女給にならうか知ら。お兄ちやんの何處か知つてるカフェエない？」

「それはいゝ、」と私はいつた。「そしたら、さうしてこれから二年、否、今となつたらもう一年でいゝ、一年辛抱してくれたら、お兄ちやんは乾度一人前の小説家になつて見せるから。」

すると又別の晩には、

「あたし、もう一度藝者に出ようか知らと思ふの、元の土地は厭だけど……」と彼女はいつた。「そしたら、お兄ちやんに月々お金を送つたげるわ。その代り今度はお兄ちやんも辛抱して會はないでね、月に二度位にして。そしていゝ小説を書いてね。カフェエの女給もいゝけど、君子はもう着物がなくなつたもの、それに收入も少ないし。……」

「だけど、藝者はもういけないよ」と私は本當にさう考へて、口に出したが、考へて見ると、矢張りそれが當時の私たちを最もよく救ふ方法に違ひなかつた。彼女はどういふつもりでいふのか、今度はなるべく會はない方がいゝといふ、さうだ、さうして、今度こそ私は一人になつて、一生懸命に勉強しようと思つた。長い間、心にかゝりながら、離れてゐた文學を思ふ心が、戀人以上の魅力をもつて私の心に沸き返つて來た。

私はいつもかういふ場合の唯一の相談相手である加藤を思ひ出した。彼はその頃例の「誰にも分る株式相場」の出版で一敗地にまみれて、債權者の目を逃れる爲に牛込の或裏町に逼塞してゐた。彼は私が彼女が又藝者になりたいといひ出してゐるが、前の横須賀遁走のことがあるし、どうしたらいゝだらうと相談すると、

「それは隱れるよりは樂ですよ、」といつて、こ

ほんとほんと咳をしながら、「その爲の桂庵ですから。桂庵ですから。桂庵に頼んだら、ちやんと前の話をつけて、又それ〳〵恰好な所へ向けてくれますよ。」

「でも、大田原が怒るでせう、」と私がいふと、

「なアに、どうせ藝者家の主人ですから、金さへ返したら文句はありません。」

そして、私たちは彼女が初めに世話になつた下谷の桂庵へ行つた。下谷の桂庵がいふには、「君子さんは、前の時神奈川の吉田が半分關係しましたから、矢張り吉田に内所にしておく譯には行きません。幸ひ丁度明日吉田が外の用事で來ることになつて居りますから、早速相談しておきませう。」

吉田といふと、私は久しぶりで、あの八字髭を生やした、善良らしい勳八等の桂庵を思ひ出して、一年の廻り燈籠が一廻り元の所へ廻つて來たやうな氣がした。私は途で加藤と別れ、下宿へ歸つて、彼女にその日のことを、偶然町で桂庵に會つたことにして話すとその時まで陰氣な顏をしてゐた彼女は忽ち空が晴れるやうに上機嫌になつた。私は彼女のその人一倍の喜びの顏が人一倍の憂ひの顏になることを思つて、はら〳〵しながら、

「だけど、君子、」といつた。「その代りお兄ちやんは屹度今から一年以内に『中央公論』か『太陽』の増刊に、お兄ちやんの小説が出るやうに勉强するからね。それ迄辛抱して待つてるんだよ。」

彼女はうなづいて、「屹度ね。指切りしませう、」と機嫌のいゝ時の證據に子供のやうな無邪氣さでいつた。「それで、お兄ちやんは當分この下宿にゐる？」

「いや、もう少し靜かな、安い下宿へ變らう。どの邊がいゝだらうな。君子の行くのが定つたら、半日だけ一緒に探してね？」と彼女の機嫌をとるつもりでいつた。

そして、數日の後、彼女は横濱の或町の藝者家に行くことに定つて、その日が明日となつた晩、私たちは殆ど夜通し泣きながら話し合つた。明け方になつてやつと少し眠つた切りだつた。そして、午前のうちに、二人で下宿を探しに行つて、九段の中坂の途中に適當な部屋を見つけた。彼女が前借した金の中からその約束の手附金を拂つてくれた。それは玄關の直左手の部屋だつた。部屋は直前を坂道の往來に面してゐるので、そこに坐つてゐると、往來の人々の足音が聞えた。私は彼女を下谷の桂庵の家へ送つて行つて、何故か大急ぎでその侘しい玄關脇の部屋に歸つて來て、自分一人になつたことを感じて見ると、久しぶりで人間世界に戻つて來たやうな氣がした。窓の外の往來の足音が頻りに私に何かを催促するやうな氣がした。

二

八年經つた。

八年前、彼女は横濱へ行つてから、半年ばかりの間に、行く前彼女が私と一緒に探してくれた私の下宿の部屋の前に三度現れた。

「お兄ちやん、」と忍び聲で呼ぶのを初めて聞いた時、私はこの前本郷の家で聞いた時より遙かに驚いた。私はこは〴〵前の窓を開けて見た。すると、彼女は中腰になつて、格子につかまりながら、にこ〳〵した顏を見せた。

「どうしたの？」と私は強く咎めるやうな口調で尋ねた。

「入つてもいゝ？」と彼女は苦のなささうな調子で、甘えるやうに首を傾げた。

「お入り、」と私は澁々いつて、立上つた。直ぐ入口の戸を開ける音がして、元氣よく彼女が入つて來た。

「どうしたの、今頃？」

「心配しないでもいゝの、」といひながら、私の机の傍にべつたり坐つた。机の上には、まだ彼女との約束を果さうとする迄には行かず、相變らず引換へに金になる童話原稿の書きかけが載つてゐたので、私はその上に彼女に見えないやうに肘を突いて、

「また逃げて來たんぢやないの？」と聞いた。

「今度の家が富松の家よりもつとけちで厭なの。」と彼女はいつた。「それで吉田に頼んで、今度同じ横濱で外の土地の家へ變ることになつたの。それで、明日が御披露目なので、髪を結ひに出た次手に來たの。」

「髪を結ひに出てこゝ迄來たのは大膽だね、」と私は驚いていつた。

「お兄ちやん、」と彼女は私の言葉には注意しないで、「あたし今日は少しお金を持つてるから、その邊を散歩しない？」

「そんな事をして又歸りそびれたり何かするといけないから．ねえ、少しこゝで遊んで行つて、そして大人しくお歸り、」と私はすかすやうにいつた。

結局、それから二人で神田邊を散歩し銀座へ出て可成り遅い電車で彼女は神奈川へ歸つて行つた。

その次は、半年程して、或晩また彼女の聲が私の窓の外に聞えた。その時は意外にも吉田と一緒だつた。吉田がいふには、「どうもこの人は我儘で、これ迄の家が厭だといふので、仕様がないから、今度は神奈川へ住み換へることになつたんです。それで一寸暇が出來たものですから、又一人で東京へ飛んで來られては困ると思つて、私が一緒について來たんです。」そして彼女の方に向つて、「ぢやア、君子さんを明日の午頃までお預けして行きますよ。まさかあんたの家から逃げ出すことはないだらうから、頼みますよ、」といつて、彼は歸つて行つた。私は嬉しくなかつたこともないが、こんな事が今後もしば／＼あられては困ると思ひながら、約束のその翌日の午頃まで彼女のいひなりに二人で遊んだ。

「お兄ちやん、どうしてんのよう？」と彼女は思ひ出したやうにいつた。「小説書いてるの？ 本當に君子を迎ひに來てくれる？」

「迎ひに行くさ。しかしまだ初からの勘定で二年が經たないぢやないか。やるよ。乾度やるよ。だから、君子も大人しく辛抱して、さう方々へ變らないやうにしなければ、吉田もいつてたが借金が増えるばかりぢやないか？」

その時から又三ケ月程後の或晩、彼女が三度目で私の窓の前に立つて、

「お兄ちやん、」と例の甘えた口調でいつた。その頃は私ももう彼女に對する愛着が餘程薄くなり、小説が書けるといふ自信が可成りついてゐた時分なので、彼女をこれ迄よりは幾らか邪險に扱つた。彼女はもう神奈川にもゐなくて、八王子へ變つたといつた。

「どうしてそんなに一つ所にゐられないの？」と私が少し嚴しい口調でいふと、彼女は目の中に涙を一ぱい溜めながら、

「だつて、今度は吉田がいつの間にかそんな風にしてしまつたんだもの、」といふ中にも、彼女獨得の大粒の涙を疊の上にぽた／＼と落した。

「吉田がどうしたの？」と私は久しぶりで彼女に愛着を感じながら、彼女を傍に引寄せて肩を叩きながらいつた。

「お兄ちやん、小説まだ？」と彼女は泣きながらいつた。この問ひは私に苦手だつた。が、その時私はその二三日前、町で遠い親戚に當る商人に會つて、彼から若し二三ケ月下宿の心配をしないで勉強したら、「お前はんのその望みの小説とかいふものが書けるのか。そしたら、そ

れからはずん／＼それを書いて出世出來るのか？」と聞かれて、私は自信あるやうに「さうです。」とはつきり返事した。すると、相手は、そんなら譯はない、いつでも私の所へお出でなされ、まづいもんで辛抱するんなら、三月や四月、二階へ置いたげよう、」といふので、「お願ひするかも知れません、その節はよろしく、」といつて別れたことを思ひ出した。私は小說の思ひで燃えてゐた。すると、彼女の肩を抱きながら、ふと彼女との過ぎ去つた生活を考へただけで、それだけでも立派な小說が出來ると氣がついた。

「ね、」と私は彼女の肩を叩きながら、「兎に角、變つたら仕樣がないから、もう暫く八王子で辛抱おし。ね、いつか二年と約束したことがあるだらう、それが後もう一年になつた。今度お兄ちやんは或人の保護で、これから三四ケ月の間たゞで食はしてもらふことになつたので、その間に屹度書くから、待つて、ね、ね……？」

「本當？」

「そら、あの中川といふ人だよ。いつかお前と一緒にお金を借りに行つた吳服屋さんだよ。あの人に二三日前町で會つて、そんな約束をしたんだよ。そして、書いたら、高木がいつでも一流の雜誌に紹介するといつてくれてるんだから、ね、幾ら遲く見つもつてもう半年の辛抱だ。」

そして私はふとある事を思ひついて、「ぢやア、君子は今夜こゝで泊つてお出で。僕は今夜ッ切りこの下宿を明け渡すつもりでゐたんだが……無論、拂はないさ、今夜は金をこしらへに行くといつてこゝを出て、そして、明日はその淺草の家へ行くつもりなんだ。」

「ぢやア、あたしどうしようか知ら？」と彼女は心細さうな顏をしていつた。私は實はその下宿を出るつもりはしてゐたのだが、彼女にその豫定の期日を一日早くいつたのは、その晚一晚でも彼女と一緒に泊つて、若し翌日になつて彼女に氣が變られ、もう八王子へ行かないなどといはれることを恐れてだつた。そこで、

「今夜は君子は泊つた方がいゝんだらう？」と優しい言葉で、「しかし困つたなア、お兄ちやんは今いつたやうに、今夜金をこしらへに行くと、さつきお上に約束しといたんだから、今度歸つて來た時は金を持つて歸らねばならんし……」

とわざと困つたやうに腕を組んで、「さうだ、しかし、君子は別にそんなことに關係ないんだから、こゝへ一人でお泊り、女中にちやんと賴んでおくから。そして、これから二人でそこら、散步に出ようぢやないか、お兄ちやんの寢床を敷いといて、そして、後でお兄ちやんがこの近く迄送つて來てやるから、君子は一人でこゝへ歸つて寢て、明日早くお歸り、ね、女中に早く朝の御飯をこしらへるやうに賴んで行くから、」といふと、彼女は一寸顏色を曇らしたが、これから一所に散步に出るといふことに慰められて、

「ぢやア、さうするわ、」といつた。彼女の高い鼻の橫顏がその青白い顏色の爲に效果を添へて、私の心を痛ました。

その晚、二人で散步して、私は彼女がそのヒステリイ獨得の直覺で急に私の噓を察して怒り出しはしないかとびく／＼しながら、彼女を下宿の方へ送つて行つた。「ねえ、もう半年辛抱おし。そしたら、屹度お兄ちやんは小說家になるから。ぢやア、こゝでね、」と坂の下の、下宿屋の見えるところで立止まつていつた。彼女も立止まつた。角の水菓子屋の方を見てゐる彼女の切の長い目が、うるほつて來さうな色に見えたので、私は彼女の肩を叩いて、一層優しく、「ぢやア、あそこで泊つて、明日の朝、女中に賴んどいたけど、御飯を食べてお歸りね、あそこの下宿の御飯は久しぶりだらう、」といつ

た。彼女は橫濱に立つ前の日、その下宿で私と別れの飯を食つたことがあるのだ。

「ぢやア、さよならね、今度のところは半年屹度辛抱するんだよ。」と私はいつた。

彼女はだまつて點頭いた。

「ぢやアね、誰か出て來たらいけないから、さよならね。行きなさい。」と私は胸の痛くなるのを感じながらいつた。

彼女は默つて、お辭儀をして、坂道を上つて行つた。私は一瞬間よく記憶するやうにその後姿を見詰めて、そして踵を返した。それが最後だつた。その翌朝、可成り早く、彼女にもう一度會ひたくなつて、私は下宿へ歸つて行くと、寢床は空になつてゐた。女中に聞くと、「今朝早くお歸りになりました。御飯をいつたんですけど、食べたくないといつて。」とのことだつた。私はぐツと來るのを、唾に呑み込んで、八王子なら飯田町だ、追駈けて見ようと思つて、「もうどの位前？」と聞くと、「二時間以上前です。」と女中はいつた。彼女は昨夜眠らなかつたのだ。さう思つて、私は部屋の戸を閉めて、机の前に俯伏せになつた。

實際、私はその日の午後、無斷で手廻りの物を持つて、その下宿屋を遁走したのだつた。そして、半月後には生れて初めての小說を二篇まで書き上げ、その二篇とも、それを紹介してくれた友達並の、相當の原稿料も貰ひ、そして生れて初めて雜誌社から小說の原稿を賴まれたのだつた。私は世話になつた淺草の商人の家を引上げて、無斷で遁走した前の下宿の負債を拂ひ、別に牛込の下宿に移つて、赤阪の親類に居候してゐた母を、同じ下宿に別に一間借りて迎へたのであつた。今になつてその頃のことを考へると、澁谷の家相のよい家の八代目の幸運を得つゝあつたのに違ひなかつた。私はそこで、初めて雜誌社から賴まれた原稿を書く爲に、原稿紙を持つて潮來へと出かけた。私の創作熱は綱を放たれた駒のやうだつた。三日の間、風が吹くと地震のやうに搖れる粗末な宿屋の三階の部屋で、所謂水鄕の眞菰の中を通る川蒸汽の風景にも目を止めず、夜になると遙かの遊廓から流れるやうに聞えて來る潮來節の三味や太鼓にも耳をかさないで、一氣に百何十枚の小說を仕上げて歸つて來た。彼女との二年間の艱難な生活を書いたもので、書いても書いても書き切れないで、それだけを前篇「苦の世界」と題した。下宿住居ではあつたが、私は好みで二階の日の射さぬ暗い部屋を自分のに借り、明るい南向の三階の部屋を、誰に邪魔されることなく、近頃急に年とりはしたが、爭はれない明るい顏になつて來た母の部屋へ、私は元氣よく歸つて行つた。

「どう、早かつたね。」と彼女は縫物をしてゐた眼鏡を外して、南向の窓を背にしながら私に座蒲團をすゝめながらいつた。

「えゝ、一切りの所まで出來たので歸つて來ました。」と私は潮來土產を彼女の前に並べながらいつた。

しばらくして、母が、

「あの、さう〳〵、昨日君子が突然入つて來てね。」といつた。

「えツ？ どうしてこゝの所を知つたんでせう？」

「新聞で見たとかいつてたわ。」と母はいつた。

「お前がゐると思つて入つて來たら、私がゐたもんだから、びつくりした顏をしてたわ。だけど暫く話をしてゐて、丁度御飯時分だつたから、あの子の好きな玉子燒で御飯を出してやつたら、食べて歸つて行つたが、私がもうお前も大分年をとつたんだから、これからは大人しくして、時々遊びにお出で。二三日前に旅行に出たけれど、……そして今どこにゐるのと聞くと、

横濱にゐるんだといつてゐた。大變大人しくなつてゐたやうだつた。私のいふことを、無口な子だから、默つてうなづきながら聞いてゐた。何だか、しかし、しを〳〵して歸つて行つたから可哀さうだつた。」

それが八月のことだつた。その後、一度横濱から手紙をよこしたかと思ふ。

すると、十二月の或朝、私がまだ眠つて居た時分だつた。その頃同宿してゐた友達の高木の聲で、

「おい〳〵、大變なことがあるよ」といふ聲の中は、私はまだ眠さの中でぼんやり聞いてゐた。が、高木の聲がつゞいて、「起き給へ、君、君のヒステリイさんが死んださうだよ」といふのだ。

私は寢床の中からむつくり起き上つた。高木のいふところに依ると、彼の中學時代の友人で、彼女が横須賀に出てゐる時分に知つて、彼女に戀慕して、その後始終彼女の後を追つてゐた者があつて、その人の話に、彼女が横濱の或西洋人の家に小間使に行つてゐたのが、鼠の團子を食つて自殺したといふ新聞記事を讀んだといふのである。原因は主人に叱られたのを苦にしてとある、名前は滝澤まり子とあつたが、確に彼女に違ひないといふのだ。

「君のあの人は矢張りいゝ人だつたんだね、」と高木は默つてぼんやりしてゐた私に向つていつた。「『苦の世界』はやつぱり苦の世界で幕を閉ぢたね。」

「あゝ。しかし、彼女のやうに生れた者は、少しでも早く死んだ方が幸福かも知れない、」と私はいつた。

私の心は限りない悲しみの淵に沈んだ。

「後で散歩にでも行かう、起き給へ、」と元氣をつけるやうにいひ殘して、友達が出て行つた後も、私は長い間考へる力を失つたやうにぼんやりしてゐた。

「しかし、彼女のやうに生きた者は、少しでも早く死んだ方が幸福であるかも知れない」と私はさつき友達にいつたことを反復して考へてゐた。そして友達が「あの人は矢張りいゝ人だつたんだね、」といつた言葉に就いては餘り考へないでしまつた。彼女は私と一所にゐる時、ヒステリイを起した後で、いつもの癖のやうに、「あたしは長い間生きてはゐないつもりだ、やがて無縁墓になるだらう、」といひ〳〵した。私はその頃、彼女の發音がいつも泣聲だつたので、「むえんばか」といふ言葉が、「むゑんばア」といふやうに聞えて、それにヒステリイのいふことだから餘り氣に止めてゐなかつた。が、その頃から既に彼女は無意識の中に自分の最期を豫言してゐた譯だつた。いつか私が頼んで彼女の家へ加藤が行つてくれた時、彼女の母が死んでも私の家へは引取らないつもりですといつたといふことも思ひ出した。そして、私も亦彼女は死んだ方が幸福だと考へたのであつた。恐らく彼女の生みの父母も、勅選議員の伯父も、市長になつた伯父も、兄弟も、皆彼女の死を希つてゐたのかも知れない。そして、唯一の夫だつた私も。

私はその後、彼女の所謂「行伯父さん」が東京市長になる時ごた〳〵して、毎日新聞の記事になつた時、久しぶりで無縁墓の彼女を思ひ出した。

「行伯父さん」が何度も何度も市長を斷るといふ話を新聞で讀みながら、

市長さん、市長さん、三度ロンドンの市長さん、三度ロンドンの市長さん――

といふ文句を私は口の中でうたつてゐた。

それは私がロンドンのホイッチントン市長の物語を童話に書いた時、彼國の詩をその中で飜譯した時の文句なのだ。誰もさうかも知れない

が、私はよくさういふ文句を、口の中でうたつてゐる。私はそれをうたひながら、「行伯父さん、行伯父さん、三度ロンドンの市長になつたホイッチントンは、一疋の猫の命を惜んで出世したが、三度市長を辭退した日本の東京市長の行伯父さんは、一人の姪の命を惜まないで出世した。」と考へた。――

だが、それから八年經つて、私は軍港のことも、別れた女のことも殆ど忘れて暮した。その間、私は私自身の營みに沒頭してゐたのだ。八年後の或晩、私は久しぶりで横須賀へ行くやうなことが起つた。それは一年に二三度催される中學校の同窓會が、東京から離れたそんな軍港の町で開かれたのである。といふのは、その年の夏、私たちの中學校のクラスメイトで、海軍の軍人になつてゐるものが、先にいつた矢崎や風早の外に五人もあつて、それが偶然五人そろつて、その夏珍しく歐羅巴へ廻航する練習艦隊に參加するといふので、不斷滅多に同窓會などに出られない彼等の送別會といふ名を兼ねて、四谷の三河屋で催されたことがあつた。その時私は差支へがあつて出られなかつたのだつた。

それが十二月、遠洋航海を終へて、彼等が凱旋軍人のやうに歸つて來たのを機會に、今度在京の同窓生たちが横須賀見物を兼ねて、そこで會が催されることになつた。會の案内狀に、「尙十二月の末日、英國へ留學を命じられて出發する矢崎勇太郎君の送別會をも兼ねたれば、萬障繰合せ御出席を希望す、」といふ外に、「有志の人々は當夜一泊して、翌朝三笠艦を見物さるゝ便あり、」としてあつた。會場は例の『あづま』だつた。風早はその數年前飛行機の研究に佛蘭西へ行つて留守だつた。可成りな盛會だつた。彼の噂から飛行機の話が出て、

「飛行機といふと墮ちるものにきまつてゐるやうなものだね。」と帽子會社の重役をしてゐる男がいつた。

「馬鹿いへ、」と海軍士官の一人が受けて、「十年前と今ぢや丸切り違ふぞ。今ぢや交通機關としても、飛行機が一番安全といふことになつてゐるんだぞ、」と軍人流の言葉で答へた。

「さうかね。どうだか、危いもんだな、」と外の男が他の席から疑はしさうにいつた。

「いや、それは貴樣たちが知らないからだ、」と別の海軍士官が傍から眞面目に訂正するやうに、「貴樣たちは新聞で稀に飛行機の墜落する記事を見て、飛行機は始終墮ちるものと思ひ込んでゐるんだが、新聞には毎日飛行機が日本中で何臺飛んでゐるか出てゐはすまい。一遍追濱あたりへ見に來るんだな。」

「なる程ね、」と帽子會社は感心したやうにいつた。「さういへばさうだな。ところで、どの位の率で墮ちるものなんだ？」

「さア、素人にはどういつたらいゝか、」と士官は一寸首をひねりながら、「さうだ、まア一年中朝から晩まで飛んでゐるとして、一度位完全に墮ちる程度かな。機械の故障なんか、今は平氣なんだよ。」

「本當かね？」と離れた席で婦人科醫師が直隣の機關少佐に聞いてゐた。

「そんなものだらう、」と士官は尋常茶飯事らしい調子で、「率といへば、一番安全なのは飛行機で、次が船、それから汽車、自動車といふ順だらう。潛航艇が今のところぢや一番危ないかな。……」

私はその時矢崎の隣の席の主が立つたので、その跡へ行つて、「しばらく、御無沙汰、」と挨拶した。「いつか君たちに世話になつてから、もう八年になるよ。」

「さう、丁度滿八年だな。あれからまだ一二年ごた〳〵してたらしいぢやないか、」と矢崎は

いつた。そして、ふと思ひ出したやうに、「さうさう、貴様に一度知らしてやらうと思つてつい忘れてゐたんだが、あの時分勝栗といふ半玉がゐたらう、あいつがもう立派な姐さんになつて、幅をきかしとるぞ。今年二十三とか四とかいひよつた。あの時分はたしか十四五だつたからな。あいつが會ふと、貴様の話をして、是非一遍會はしてくれといつて聞かないんだ。今日は丁度いゝ機會だ。まだ來てゐないやうだが、今日土曜日だから宴會デイで忙しいんだらう。もう來るよ。あの時分よく貴様たちの用事に使はれとつたね。」

「横須賀にはその後すつかり御無沙汰してしまつたよ。まだ橋立は停車場のところに繋がれてゐるかい？　着いた時は日が暮れてゐたので、氣をつけて見たが分らなかつた」と私が稍々感傷的な氣持になつていふと、

「馬鹿いへ、」と矢崎は飲めぬ質らしく、それにもう長らく陸上勤務をしてゐるので、外の士官と比べるとずつと白い顔色をしてゐた。それが役者のやうな顔立なので、先から『武雄さん』と綽名をされてゐた。「あんなぼろ艦はとつくの昔に鍋や釜か、釘かになつてしまつただらう。」

「さうかな、些か無情を感じるな。拂下げたといふ譯だね？」

「何でも大阪の古鐵屋だ。あれで、買つても運送に金がかゝるんだよ、軍艦となると。」

「さういふと、俺たちの中學時代に西村といふ男がゐたぢやないか、矢張り古鐵屋で。支那の分捕軍艦の鎮遠を買つて儲けたといふので、みんなで冷かしたことがあつたぢやないか？」

「さう／＼、俺もあいつの家の前へ見に行つたことがあつた。貴様よく覺えとるな、流石文士だ、だが、この軍艦といふやつは決して東京の商人は買ひに來ないね。大阪の商人に限るんだ。」

「そんなものかな。しかし、俺だつて金があつて、海岸に別莊でも持つてゐたら、橋立位の手頃の艦なら、買つて繋いでおきたいな。困つたらホテルにでもするさ。」

その頃は、宴會はもう大分亂れ出して、離れた所から盃を投げ合ふものや、はやり唄などをどなり出すものや、藝者を相手に拳を打つものや、次第に騒がしくなり始めた。その時、ふと部屋の眞中に一かたまりになつて飲んでゐた連中の一人が、突然「黄海の歌」をやらうといふ聲の終らない中に、盃を投げ合つてゐたものも、拳を打つてゐたものも、はやり唄をうたつてゐたものも、一度に一擲も見えずこの合唱に落ちた。恐らくこの幼稚な軍歌はそこに集まつてゐた人たちの少年の頃の最も馴染な歌に違ひない。それは海軍士官にも、帽子會社の重役にも、婦人科醫師にも、土木技師にも、辯護士にも、等しく少年時代の回想を促したに違ひない。彼等は宴會に特有な感傷的な氣分になつて、立上つたり、足踏をしたり、拍手したりしながら、合唱をつゞけた。それに海軍軍人を迎へ送る宴會にはそれが最も適當な歌とも思はれた。しかし、歌の記憶が時々切れると、海軍士官の音頭でつゞけられた。

　副艦長の過ぎ行くを、
　痛む眼にみとめけん、
　苦しき聲を張り上げて、
　彼は叫びぬ、「副長よ！……

軍歌の進行と共に、或者は立上り、或者は肩を組み合せ、足を踏み鳴らし、手を打ち叩きながら、部屋の中を數回ぐる／＼廻つた後で、廊下の方まで練り出した。これは私が十年前に別れた女に會ひに來た時、同じ家で士官と藝者のを見たことを思ひ出さした。私の頭は暫く茫然とした。その時、

「まア、お珍しい！」と聲をかけて、矢崎の傍にゐざり寄つて來た藝者があつた。彼女は急いで來たらしく、呼吸をせはしなく切らしながら、彼の傍に藝者の坐り方でぺつたりと坐つて、「ここでも、矢張り大騒ぎね。」といつた。

私は咄嗟にこの女が勝栗だなと感じながら、どうしても八年前の半玉だつた彼女が思ひ出せなかつた。

「おい、禮をいへ、到頭連れて來てやつたよ。」と矢崎がいふのを待たないで、先から私の方をじろ／＼見てゐた彼女は、その時やつと發言權を得たやうに、

「まア、しばらく。……あたし覺えていらしつて？」

「覺えてないなア。」と私は彼女を正面からまじまじと見詰めながら、「君と何處で會つたとか、君にどんな使をしてもらつたとか、どんな所を見せたとか、いふことを一々はつきり思ひ出せるが、幾ら君を見詰めてゐても、顏も姿もちつとも思ひ出せないな」といふと、

「あら、ひどいわ、姿なんて、こんなに太つてしまつて、あの時分とはすつかり變りましたわ。あの時分はこほろぎ見たいでしたもの、ちつとも覺えてて下さらない。」

さういはれても、私はどうしても思ひ出すことが出來なかつた。髮を艷々した島田に結つて、小柄ではあるが、十五貫近くもあるといふ、くり／＼した丸顏の中年増藝者は、幾ら見ても私に初めての印象だつた。强ひて考へると、十年前にお煙草盆に結つて居た髮の毛にくせのあつた記憶と、目の前に見る彼女の島田の髮のくせとが符合する位のものだつた。

が、女の方では私よりずつと鮮明に私の記憶と、そして私の女の記憶とが蘇返つて來るらしく、「あたし嬉しいわ。まり子姉さん（私の女は一度私と横須賀から東京に駈落して、捉へられて二度目に出るやうになつてからはまり子と名乘つてゐた。）あたし今でも忘れないわ。まり子姉さんに貰つたお人形さん、今でも大事に持つてるわ。ねえ、先生、」と彼女はいつた。十年前には お兄ちやん」とも呼べなかつた彼女だが、はつきり「先生、」と呼びかけて、「あたし一生の中に、もう二度とあんないゝ人に會はうとは思へないわ。それは、それは、先生の小説を讀みますと、先生は隨分[illegible]さんの爲に苦勞なすつたやうですけど、しかし、考へてごらんなさい。……」

そんな風に話しつゞける彼女の目を見てゐると、美人ではないが、丸顏に適はしい目が、二十四歳といふ年を忘れさせる程、無邪氣に見えて來るにつけて、私は次第に十年前の十五歳だつた小さな半玉の面影を思ひ出した。

「君、だん／＼君が思ひ出せて來たよ、君の目が思ひ出せて來たよ。」と私はいつた。

いつの間にか、彼女は私と矢崎の並んで坐つてゐる眞前まで進んで來て、斜めにその丸まつちい膝を私の膝に寄せて來た。

「こら／＼、岡惚の俺を打つちやつて、どうしたんだ？」と矢崎はからかつていつた。それにはかまはず、

「ねえ、先生、まり子姉さんは、あの時先生にでも無理をいはなければ誰にいふんです？ あたし、本當にあんた綺麗な心の人を見たことがないわ。あたし、よくあの姉さんに連れられて、海岸を散歩したものだわ。するとね、或時、まり子姉さんが馬鹿に沈んでゐるんぢやないの、ね、」と矢崎の方を一寸見て、「あの桔梗屋のとこの海岸の岩の上に蹲んで海を見てゐたの。いつもあそこの海岸へ行くの。あそこの海はごたごたした軍港の方が見えなくて、景色がいゝでせう。するとね、姉さんが突然、勝ちやん、あたしが若しゐなくなるやうなことがあつても、

勝ちゃんいつ迄もあたしのことを覺えてゐてくれる、といふの。あたしがどうして今日に限つてそんな厭なことをいふの、と聞くと、姉さんは何でもいゝから、あたしが突然ゐなくなつて、勝ちゃんの簞笥の引出にあたしのお人形さんがみんな入つてゐたら、もうあたしは歸つて來ないものと思つててね、とそんなことをいふの。あたし悲しくなつて、どうして姉さんそんなことをいふの？　姉さん何か考へてゐることがあるの？　と聞くと、いえ、そんなことはないけど、人間といふものは、いつどんな事が起るかも分らない、だつて、勝ちゃん、今からしてあたしと勝ちゃんと二人で仲よくしてても、突然浪が來て、あたしか勝ちゃんかが海の中にさらはれるかも知れないぢやないの、と姉さんはいふの。あたし、まだ子供だつたでせう、だから、さういはれると、なる程、さうかなと思つたわ。」

「よくそんなことをいつたよ、あの女は、」と私は何氣なささうにいつたが、もう長らく忘れてゐた女のことが、この勝栗の話を聞いてゐるうちに、昨日のことのやうに思ひ出されて來た。

「いゝえ、外の人だつていふけど、あの姉さんは別だつたわ、」と勝栗は益々眞面目な調子でつづけた。が、私の急に悲しげになつた顏つきを見てとつて、彼女は急に話をかへて、「ね、あたし、よくお使をしたわね。いつかも姉さんが紙屋へ行つて『げんこ』を買つて先生の所へ持つて行つてくれといふんでせう。あたし、びつくりしたわ、『げんこ』といふから、この『げんこ』のことしか知らないでせう。大笑ひよ。あたし、原稿紙といふもの、その時初めて知つたのよ、」と彼女はその丸い顏に笑くぼを浮べて笑ひながら話した。

「だけどね、」と彼女は急に眞面目な表情になつて、「今では、うちではまり子さんといふ名は止めになつたのよ。まり子姉さんがゐなくなつてから、まり子といふ人が二人あつたんですが、二人とも、而も急病でなくなつたの。變でせう。そしていつでも死ぬ時にまり子さん、まり子さんつて自分の名をいふの。しかし、自分の名を呼ぶ譯はないでせう。一等初めの、あのいゝまり子姉さんの名を呼ぶんですつて。みんなさういつてるわ。」

「だつて、一等初めのまり子は後のやつは知らない譯ぢやないか？」と矢崎が笑ひながらいふと、

「そんなこと、あたし知らないわ。だけど、それはあのまり子姉さんの靈が呼ぶんでせう、」と勝栗は眞面目な顏をしていつた。

「それぢやア、どつちが呼ぶんだい？」と矢崎は大笑ひしながらいつた。

「どつちもよ、」と勝栗は相變らず眞面目な顏でいひ返した。

「こら／＼、そんな隅つこで女をつかまへて何をしとるんぢや？」と例の歌をうたつて輪に歩いてゐる連中の中の士官が言つた。「來れ、來れ！」

　そこで、私たちは立上つて、彼等の行進に加はりながら、廊下に出て、勝栗の案内で、この家獨得の廊下の外側にある建物の方へと逃れた。

　そこは私が以前この家に來た時に女中に案内された、船室のやうに幾つにも仕切られた小部屋の並んでゐる一劃だつた。驚いたことには、いづれも宴會から拔けて來た客らしく、それ等の部屋が一階も二階もすべて滿員で、私たちは三階の一番端の四疊半に案内された。唯、そこには位置の關係で、窓の外の眺めがよかつた。東側の窓を開けると、夜の軍港が一目に見渡せた。港は軍艦でいつぱいだつた。私の同窓の軍人たちが乘つて來た練習艦隊ばかりでな

く、矢崎のいふ所に依ると、十二月は軍人の編成變への時で、所屬の艦隊が悉く港に入つてゐるからだといふことだつた。そして、矢崎は私と並んで窓の傍に立つてゐる勝栗を顋で指して、

「こいつ等の書入れ月なんだよ。」といつた。

私は冷たい夜風に額を吹かれながら、飽かず港の景色に眺め入つた。暗いので、一層物凄く見える港を、稻光のやうに、どこからか探海燈の光が絕えずその直線の光を走らしてゐた。

「矢崎さん、あそこにゐるのが三笠ね。」とその時勝栗がいつた。

「どこに？」と私が彼女の指さす方を見ようとすると、探海燈の光の棒がくるりと幻燈のやうに位置を變へたので、

「あゝ、見えなくなつた。」と勝栗が可笑しさうにいつた。

私は又長い間探海燈の光が三笠を再び照らすのを待つてゐたが、到頭寒くなつて窓を閉めた。

そして、部屋のまん中の火鉢の傍に戻つて來ながら、「矢崎、俺はどうせ明日から熱海の方へ仕事に行くつもりだから、今夜はこゝで泊る。君も泊つていゝんだらう、明日朝出がけに三笠を案內してくれないか？」といふと、「うむ、明日は日曜だから、俺はかまはない。」と矢崎はいつた。

「先生、三笠を見に行くの？　ぢやア、あたしも連れて行つてくれない？」と勝栗が傍からいつた。

「あゝ、行かう。」

「それなら、泊るなら、今から賴んどかないと、部屋がなくなるぞ。」と矢崎がいつて、勝栗がそのことを女中に賴みに行つた。

その晚、私と矢崎とが床を並べて一時頃まで無駄話をしてゐる枕許で、勝栗も一所に話に加はつた。

「こいつ變つた藝者だぞ。」と矢崎がいふには、「ねえ、勝栗、貴樣二年程藝者を止めて、東京へ行つたぢやないか。學校へ行つてるといつてるが、さうぢやないといふ噂だぞ。」

「まア、矢崎さんひどい。あたし、本當に學校へ行つてたのよ。あたし、藝者に見られないかと思つてびく〳〵したわ。初め校長さんが入れないといふのを、隨分いろ〳〵賴んでやつと入つたの。もう一年ゐたかつたんだけど、到頭呼び戾されちやつたの。」

「へん、藝者の中途で學校へ行くのは變つてるね。」

勝栗が歸つて、一時頃、電燈を消すと、十分もしないで、矢崎は眠つてしまつた。私は勝栗から聞いた、私の死んだ女のことを思ひ出さない譯に行かなかつた。「一生の中に、二度とあんないゝ人に會はうとは思はない。」といひ、「まり子姐さんは先生にでも無理をいはなければ誰にいふ。」といつた勝栗の言葉が私の記憶に殘つた。それは私に初めて彼女が死んだことを知らしてくれた友達の高木が、「君、あの人は矢張りいゝ人だつたんだね。」といつた言葉を思ひ出さした。

考へて見ると、彼女は伯父の警視總監に、私が最初に知つた頃、彼女の町を追はれたといふものの、その後私と一所になつてからも、私と別れてからも、始終居所が變り、境遇が變つてゐた。普通の彼女のやうな女なら、私の考へるところでは、最初の場合と、私と駈落した場所を除いては、一つも彼女が別の境遇を求める必要が考へられなかつた。別の境遇に變つたら、それだけ彼女のやうな境遇のものには借金が增え、自由から遠ざかる譯だつた。それを知らない彼女ではなかつたと思へる。私が

彼女と、私にはその約束に誠實がなかつたとはいへ、二年の間別れようとした、その二年が來る少し前まで、彼女は生きてゐたのだ。それればかりでなく、私はもうその時彼女と約束した小說家になりつゝあつたのだ。しかし、若し彼女は二年待つて、私と元の夫婦になつたところが、落着いてゐたらうか？ 矢張りそこで以前より充たされた生活に滿足しないで、何かを求めて何處かへ泣きながら行きはしなかつたか？ 何處へ？ ――考へて見ると、彼女にも分らなかつた、その求めるものは地上にはないものではなかつたか、とも私は考へるのである。

が、私も十分としない中に眠り入つてしまつた。その割に、私の癖で、翌朝早く目が醒めた。尤も遲い夜明けの冬の朝だつたから、六時近くだつたに違ひない。矢崎の目を醒まさぬやうにそつと床を出て、廊下の突當りにある便所に入ると、小便しながら目の前の硝子窓を透かして、昨夜とは違つた方角から、軍艦で埋まつてゐる軍港が薄い朝霧の中に眺められた。その最も左手に、陸と並んで、滿艦飾を施された三笠艦がその底をコンクリートで固められたといふが、如何にもそれらしく、海に浮いてゐる軍艦と違つて、如何にも軍港の飾りらしく眺められた。私はしばらく眺めてゐた。

部屋に歸つて來ると、眠つてゐたと思つた矢崎が、目をつぶつたまゝで、

「早いね、」といつた。

「もう起きてゐたのか、」と私がいふと、

「軍人には寢坊はないよ、」と矢崎はいつた。

「三笠が見えるね、滿艦飾をして。皇國の興廢此一擧にありといふ信號旗もあの中に混つてゐるのか？」と聞くと、

「うむ、」といつて、矢崎は手の出た達磨のやうに兩手を小さな蒲團の左右に突張り出して、機械體操でもするやうな恰好で、くるりと起上つた。氣がつくと、いつかも見たやうに思ふポートフォリオが彼の枕許にきちんと置いてあつた。そして、私の方にも。矢張り八年前の時のやうに、彼の鞄の中には戰術の地圖が入つてゐるのだらうか、聞いて見ようかと思つたが、私だつて今は彼に負けぬ程忙しかつた。私の鞄には勝栗の所謂「げんこ」が入つてゐる譯だ。

矢崎が起きた勢ひで、窓の雨戸を一枚繰ると、障子に薄い朝日がさした。

年譜

明治二十四年　七月二十六日筑前福岡湊町に生る。六三郎次男。本名格次郎。これは僕の生れた年の一月に死んだ祖父の名前「善四郎、格」の格をとつて、次男だから、格次郎と付けたと母からきいた。

明治二十七年　父歿し、一家を引き揚げ、父の從兄弟のゐる神戸湊町に移る。神戸にて幼稚園に入る。

明治二十八年　大阪糸屋町に移り、大阪の幼稚園に通ふ。

明治三十年　七歳で小學校に入る。それは主に軍人の子弟を養成する陸軍偕行社高等尋常小學校といふ一種のブルジョア學校だつた。この學校に高等一年迄行つた。

明治三十一年　家が宗右衛門町へ引越した爲に、育英小學校といふ學校に變つた。その學校で後年大錦と呼ばれる力士となつた細川といふ少年と知合になつた。

明治三十五年　育英高等小學校三年から、天王寺中學に入る。すると矢張り同じ學校へ入つて來た細川少年と一緒になつた。

明治四十四年　上京して早稲田の文科に入る。當時同級生に、三上於菟吉、日夏耿之介、森口多里、澤田正二郎等がゐた。三上も僕も半途で退學。

大正四年　牛込の下宿にゐたとき、大阪より母來り、その爲本郷西片町に家を借り、母と暮す。この年の六月、初めて『搖籃の唄の思ひ出』と云ふ童話を書き、高須梅溪氏の紹介で、翌月の「少女の友」に載せてもらふ。これが原稿料の貰ひ初め、一枚五十錢だつた。この童話はその後方々の教科書とか、課外讀本とかの編纂者から所望された。それが縁で、同じ雜誌に童話或は少女小説等いふものを書いて、生活の資にした。

大正五年　夏、『苦の世界』の女主人公と知り、家族が三人になつて、暮してゐたが、十月伯父（母の兄）の病氣の爲に、母はその看病に大阪へ歸つた。その間に、本郷の家を急に疊まなければならない事情が起り、急に中澁谷へ貸間を探してそこへ二人で下宿した。だから、伯父が死んで、母が歸つて來たときは、その澁谷の貸間の家であつた。

大正六年　友人の本屋に雜誌の編輯の手傳をして、澁谷から神田へ通つた。九月頃に間借をやめて、上澁谷の閑靜な家へ引越した。しかし、生活としては、この時分が一番苦勞が多くて、やり切れなくなつた。それで一應家を解散することを思ひつき、十月母を赤阪にある親戚にあづけ、自分は獨り身になつて、神田の錦町の下宿へ引越した。

大正七年　春、九段の中坂の下宿へ引越し、廣津君やその他の友達と往來し出した。それとともに友達等に勸められて小説を書く氣になり、『苦の世界』の一番初めの二節を「二人の話」といふ題で、「大學及大學生」といふ雜誌にその編輯をしてゐた秋庭俊彦君に載せて貰つた。秋、江口渙君の紹介で、「中學世界」に『屋根裏の法學士』といふ小説を書いた。年の暮に迫つて、『藏の中』を書いて、廣津君の紹介で「文章世界」にのせて貰ふことになつた。

大正八年　一月早々「文章世界」の原稿料で三保の松原へ行き、三月の末に歸京、直ぐ牛込神樂坂の下宿に腰を下ろし、母を呼び寄せた。

『藏の中』は四月の「文章世界」に出た。九月、前の年書いた『二人の話』を少し直して、それに八十枚位足して、『苦の世界』と改題して「解放」に出した。同じ九月に『耕右衞門の改名』を「改造」に、十月に『長い戀仲』を「雄辯」に發表。單行本『藏の中』を聚英閣より出版。

大正九年　一月、『人心』を「中央公論」に發表。「解放」の一月號と二月號とに續けて『苦の世界』の第二編を、『筋のない小說』といふ題で發表。「改造」の一月號と二月號とに『續戀愛合戰』を發表した。これは半學生時分——二十三四歲の頃に、周圍に起つた事件を材料にして、その當時五十枚位に書いてあつたものを探し出して、大部分それを生かして、更に新しい材料を書き添へたものである。「改造」に續けて、四月號に書く約束だつたが、續きが出來なくて、『兄弟』といふ作を出した。四月、下宿住居を引上げて、今の上野櫻木町の家に越して來た。四月、「中央公論」に『津田沼行』、五月「中央公論」に『因緣事』「改造」に『美女』、七月、「中央公論」に『化物』『改題 熊と虎』、「文章世界」に『若者』、八月、「中央公論」に『甘き世の話』、九月『或る年の瀨』(所載雜誌不明)、十月、『桃色の封筒』(所載雜誌不明)を發表。八月より十一月迄、「大阪毎日」「東京日日」兩夕刊に、『高い山から』を連載した。單行本『苦の世界』を聚英閣より、『男心女心』を新潮社より、『美女』をアルスより出版。

大正十年　一月「新潮」に『八木彌次郎の死』、四月「文章世界」に『空しい春』、「中央公論」に『一踊り』、五月『夏の夜の夢』を「新潮」、九月『心中』を「改造」に發表。十月より十二月にかけて、「大阪毎日」夕刊に『戀愛三昧』を連載。單行本『迷へる魂』及び『空しい春』を金星堂より出版。

大正十一年　三月「新小說」に『結婚指環』、四月「中央公論」に『夢見る部屋』、六月「新小說」に『青春の果』、七月「中央公論」に『山戀ひ』、八月「中央公論」に『續山戀ひ』を發表。單行本『青春の果』を天佑社より、『戀愛合戰』を新潮社より感想集『文藝夜話』を金星堂より出版。

大正十二年　一月「改造」に『昔語り』、一月號二月號の「太陽」に『子を貸し屋』、二月、「女性改造」に『じやんぼん廻り』、四月「中央公論」に『四人ぐらし』、五月『俳優』(所載雜誌不明)、六月「中央公論」に『心づくし』、『從兄弟の孝吉』(所載雜誌不明)、八月「新小說」に『東館』、「改造」に『鯛燒屋騷動』、十一月「新潮」に『弟とその友達』、「改造」に『お蘭の話』、十二月『古風な人情家』(所載雜誌不明)を發表。

大正十三年　四月「新潮」に『晴れたり君よ』、九月「中央公論」に『さ迷へる魂』、その他數篇發表。

大正十四年　三月「文藝春秋」に『貸と借』、四月「中央公論」に『人癲癇』、「新潮」に『千萬老人』、五月「サンデー毎日」に『如露』、九月「中央公論」に『十軒路地』、十二月「中央公論」に『足りない人』を發表。單行本『心づくし』をプラトン社より、『子を貸し屋』を文興社より、感想集『文學的散步』を新潮社より出版。

大正十五年　二月、「新潮」に『怪人』、三月「新潮」に『戀仇』、四月「中央公論」に『母の祕密』、「改造」に『高天ケ原』を發表。四月より十一月迄、「報知新聞」に『魔都』を連載。

昭和二年　二月「中央公論」に『軍港行進曲』、四月「中央公論」に『續軍港行進曲』、三月「新潮」に『日曜日』、四月「改造」に『戀の軀』、七月「文藝俱樂部」に『東海道中』、十月「サンデー毎日」に『女心の朝夕』、その他數篇發表。單行本長篇『魔都』及び『高天ケ原』を春秋社より、『わが日わが夢』を新潮社より出版。

昭和四年十一月七日印刷
昭和四年十一月十日發行

現代日本文學全集　第四十八篇

著者代表　廣津和郎

編纂兼發行者　山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市ケ谷加賀町一ノ一二

發兌
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
改造社
振替東京八四〇二番
電話芝(43)一一二一番・一一二二番・一一二三番・一一二四番

株式會社秀英舍印刷